

---

# 遠enrai雷

アオキチヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠enrai雷

### 【Nコード】

N0407A

### 【作者名】

アオキチヒロ

### 【あらすじ】

便利屋・伝言屋・都合屋・情報屋・始末屋・代理屋……この世界には表には無い、裏町業と呼ばれる職業がある。イギリスから少し離れた場所にあるレスティナ国。その城下町の外れに住む便利屋カノン・ソリティアと、彼女の弟と、かつて居た師匠。世界と離れ過ぎた都合屋、全てを知り得る情報屋、魔女の代わりと崇められる代理屋、忘れられない始末屋。そしてどんな依頼内容でも請ける彼等を頼ってくる人達の話。

序章曲     そうやって生きていくのは誰の為なのですか

私のことを、少し話そうと思う。

私は小さいときに母親に捨てられて、  
その時は、国がすごい戦争をしていて、  
路地裏で何とか生きていて、

生きていて生きていて生きていて生きていて生きていて生きていて  
たくって、

でも死にそうで、  
死にたいと思う自分と、死にたくないと思う自分がいて、  
必死になって生きていた。

そんなとき、師匠に拾われた。

師匠は軍人で、  
私を拾ったときはもうぼろぼろで、  
周りは雨で、  
師匠の顔も涙でぼろぼろで、  
でもそんなことはどうでも良くなって。

それから幸せだった。

一番最初に、名前をつけてもらった。  
とっても良い響きで私には勿体ないくらいの名前をつけてもらっ  
た。

すぐに私は師匠から色々な事を学んだ。  
それこそ文字の読み書きや、計算の仕方。

家事全般、生きるためにしなきゃいけないこと。

そして、銃の使い方、戦い方。

私は師匠の役に立ちたくて、  
いっばいいいっばい学んだ。

私は自分のことを『おれ』と呼ぶようになって  
女なんだけど、男っぽくして見せた。

それが、強くなるための近道だと思った。

それから何年もたって、やっぱり国は大きな戦争をした。

師匠はもう軍人をやめていたようなものだったけど、  
招集がかかって、戦争をしにいった。

そして、それっきり帰ってこなかった。

おれは、また、家族を、失った。

おれは師匠のしていた店を継いだ。

師匠が軍を辞めたときのためにやっていた、街外れの小さな店。  
どんな内容でも引き受ける、『便利屋』。

便利屋のカノン・ソリティア。

店主は、ジン・ソリティア。

それが、  
今のおれ。

序章曲    そっちゃんて生きていくのは誰の為なのですか    (後書き)

あなたはもう帰ってこない。

BGM : cage / 鬼束ちひろ

## 1・金髪、蒼い眼

レスティナ国。イギリスから少し離れた位置にある、大きくも小さくもない普通の国。軍隊はあるし、戦争もするし、天災の被害にあつたり、新しい統率者が現れたりする、ごくごく普通の国。今のところは、平和だ。

そんなレスティナ国は五つの地域に別れてある。

中央のメトロポリス。北のセレナーデ地方。西のメヌエット地方。南のアンプロンプチュ地方。

そして、あの「便利屋」が住まう東のソナチネ地方。

その城下町の外れに、便利屋は住んでいるらしい。誰も詳しいことは知らない。分かっているのは、金髪に蒼い目。そして、ものすごく若いと言うことだけ。

そう、おれのことをよく知っている奴なんて居ないんだ。

\*\*\*\*\*

城下町から遠く離れた場所に小さな丘があつた。その丘の上に一軒の小さな家があつた。周りに他の家は無い。そこだけにぽつんと

家が建つていた。

その家から、けたたましく鳴り響く電話のベルの音。はいはい、と住人が軽快に返事をしながら駈けていく足音が聞こえる。そして止まった。

「はい、こちら犬の散歩から、気になるあの人の尾行までどんな内容でもこなす、街外れの便利屋です」

その家には、街外れの便利屋が住んでいた。便利屋は透き通ったアルトの声で電話に対応する。

「はい？ ええ、おれの事ですけど。軍がなんの様ですか？ ……：だーから、その件に関しては、おれは知りませんってば！ ……つていうかユーリさん、ちゃんと仕事してんのか？ ……：うわ、怒らないでくださいよー…：…：つたく、マーサル將軍って暇人なわけ？ ……：いえ、おれは別に何も言ってますよ」

どうやら、軍からの電話だったらしい。しばらく相手の話を聞いているのか、沈黙が続く。しかし、その表情はどんどんと険しくなっていく。もしも電話の相手が目の前にいたら、即刻話をすることを止めただろうに。

「…：はあ！？ なんだとこら！ 軍の手柄を横取りしてどうなるんだよ！ ……：あーもー、分かりましたよ、行けば良いんでしょ、行けば？ ……：はい明日ね、はいはい分かりました。じゃ。あ、ユーリさんに仕事しろよって言っておいてくださいね」

がちやんと半ば無理矢理に電話を切って、便利屋は乱暴に応接室に置いてあるソファアに座った。ずっと掃除をしていないのか、埃が宙に舞う。

「はあ。お客さん来ないなあ…：…」

ソファアの背もたれ部分に頭を寄せ、反対向きに窓の外を眺めて呟いた。

「今日もお空は青いよ…：…。暇だしチラシでも配りに行くか」

便利屋が空を眺めながらおもむろに言葉を放つ。便利屋の言うとおり、雲一つ無い、快晴と呼んでも差し支えの無い空が広がって



た。

窓に寄りかかりながら欠伸をすると同時に、この家に向かってくる人影に気づく。

「……暇だな、と思ったけど案外そうでもないらしい」  
にやりと笑った顔はどこか楽しそうだった。

\*\*\*\*\*

カラカラと良い音を立てて、ドアに取り付けてある鐘が鳴る。

「ごめんくださーい。あのー、何でもしてくれる便利屋さんがあるって聞いたんですけどー……」

声の持ち主と思われる女が、そっと開けたドアの向こうから恐る恐る顔をだしていた。その目は大きく見開かれている。

それもそのはず。

ドアの側には本。足下にも本。

ついでに靴箱と思われる棚の上にも山積みになされた本。

もひとつおまけに本。

本、本、ときどき絵本、本、ときどき雑誌、本、本、本、晴れのち植物図鑑、所により分厚い辞典に見舞われ、誰が読むのか、百科事典数冊。

最早、人の住む家ではない。虫だ。本の虫が住む家、もとい巣だ。文字通りそっとドアを開けていなければ、一溜まりも無かったこと

だろう。運が良かった。いや、きっと彼女の日頃の行いが良かった。しかも何故だか大きな鍋が落ちてあつて、その鍋の中にはボロボロになった他国の辞典が入っているのだ、事務用であろう机にはケーキの食べかけだの、色々と悲惨な状態の巣だった。恐るべし本の虫。

おまけに目の前にいるのが、

「はいはい。溜まってしまった洗い物の片づけから、ちょこつと法に引っかかる位のことまでどんな内容でもこなす街はずれの便利屋です、こんにちは」

まだ十代中頃くらいにっこり笑った少年だったからだ。いや、少女かもしれない。頭の上の方でちょこんと一つに結われていて、半端丈のパンツにエンジニアブーツ。見た目でも声でも雰囲気でも判断しづらい。

「ほ、法に引っかかる!？」

彼女はちよつと引きつった笑顔で少年（とりあえずそう決めた）を見た。

少年はにっこりと音が付きそうな位笑顔だ。

「まあ、事と次第と報酬によっては、それくらいのことはいしますよつて意味です。特に深い意味はありませんよ。そのままの意味です。ええ本当に。ノープロブレム。明日は明日の風が吹く」

「はあ……?」

そのままの意味でも十分凄すぎるだろうが。それでも彼女は頷いておいた。彼女は少なくとも目の前の少年よりは世間というものを知っているつもりだったので、波風立てない会話の仕方も充分知っていた。

「まあまあ取りあえず座ってください。頼みたいことがあつてきたんでしょう?」

少年は相変わらずにっこりした笑顔で自分を見る。作り笑顔なのか、本当なのか分からない。

「はあ……」

「だけど、彼女はまたしても思わず頷いてしまった。笑顔とは、時に有無を言わせない武器にもなるのだ。」

「自己紹介がまだでしたね。おれの名前はカノン・ソリティアです。カノンって呼び捨てで構いませんよ。明らかにおれの方が年下です。面倒だったら覚えなくても良いですよ。『おい、そのキミ!』みたいな。あ、こちらにお座り下さい」

「ご丁寧にどうも」

埃まみれのソファアへと腰掛ける。少し戸惑ってしまったが、店主に勧められたのだから座るしかない。何よりそこしか座るところが無かった。

「私はエリザ・マツキンリー。エリーって呼ばれてるわ、よろしくねカノン君」

「エリーさんですね」

エリーは、答えるカノンを見ずに周りをきよるきよる見渡していた。奥へと通されたが、相変わらず本の虫の住居であることに変わりはない。

「あ、えーっと……汚くてすみません。今日は特別汚いというか、いや、でも大していつもと変わらないと言っか……」

カノンがおろおろと謝る。謝って済むような汚さではないが。

「あ、そういう意味じゃないのよ。なんていうか、すごい本の量ね……それより君が本当にあの有名な『便利屋』なの？ どう見ても、」

「どう見ても若すぎるのでは、と言いかけて、やっぱり言わなかった。こういう職業に年齢は関係ないと、昔父が言っていたのだ。たとえどんな仕事であろうと、実力勝負の世界であることに変わりはない。」

「有名かどうかは知りませんが、おれは正真正銘便利屋ですよ」「そうよね。金髪で蒼い目をしてるし……」

うん、そうね。そう頷くエリーを見て、果たしてそれが証拠になるのか？ とカノンはちょっと笑いそうになった。

どうやらエリーは話を鵜呑みにするタイプらしい。金髪で青い眼なんて、この国にはごろごろといる。自分の一言だけで納得してしまっエリーは、まるで世間知らずなお金持ちのお嬢様のような反応だ。

「で、エリーさん。頼みたいことは何ですか？」

エリーはしっかりとカノンの目を見た。今度はきよるきよるなんてしない。

「カノン君、お金なら幾らでも出すわ」

そう言っつて、鞆から一枚の写真を取り出す。ずっと持ち歩いているのだろうか。周りが少し汚れていた。

「いくらでも？」

カノンもしっかりとエリーの目を見た。カノンの目はきらりと光っている様に見える。いや、光っている。

「久しぶりに甘いものが食えるチャンス……モンブラン、イチゴタルト……それにチーズケーキ、チョコレートブラウニーも捨てがたい……！ いやここは思い切っつてワンホール丸ごと……パフェも良いな……」

と、呟いているのは聞こえなかったことにする。思わずエリーは苦笑いをする。

「つと、失礼しました。金に目が眩みました」

オブラートに包んで隠さない、本音のカノンだった。

「あんまり期待しないでね？ いくらなんでも、大金は出せないわよ」

「いやいや。大丈夫です、大丈夫。で、この写真に写ってるのは？」

エリーの表情が暗くなる。か細い声、聞き取れるギリギリの音量で話を続ける。

「この人、ね。いなくなっつちやつたのよ」

カノンは渡された写真を見つめる。

写真に写っているのは、笑っているエリーと、隣に男の人。誠実そうな男の人だ。爽やかに笑っている。なかなか好感のもてる笑顔

だった。

エリーが先ほどとは打ってかわって、震えた声で続けた。

「ケインを……探して、お願い」

そこでカノンは気が付く。エリーの左手の薬指。装飾は一切無い、控えめに光る、銀の輪。

「あの……もしかしてもしかすると、恋人、だったりしちやったり、ですか？」

「ええ、そうよ。でも」

「でも？」

「もう三ヶ月も会っていないの。ううん、会っていないだけじゃないわ。家に訪ねてもずっと留守なの。もしかしたら何かあったのかも知れない……事故とか、事件とか……何かに巻き込まれてるかも……。お願い！ カノン君、彼を見つけて欲しいの！ もう頼るところがないの！ お父様は諦めるって言っし……」

「……えーと、実に現実的な話ですみませんが、いまのところ報酬はいかほどで？」

「これだけじゃ駄目かしら？」

エリーが紙に数字を書いた。カノンは目を丸くする。どのくらいの数字だったかと言うと、

「おおぅ……なんじゃこら、数え方が分からないゼロの数！」

と、カノンが硬直するくらいだった。どうやら本当に世間知らずなお金持ちのお嬢様だったらしい。

恋人が失踪してしまった可哀想なお嬢様は、カノンの目の前でも泣き出しそうな目をしている。

答えはもちろん。

「その依頼、喜んでお引き受けします！ っていうか引き受けさせてください！」

ちなみに、「ここ、こんだけあればワンホールどころかウエディングケーキ……いやいやいや、なんでウエディングケーキだよ！？ あまりの数字に、おれとしたことが動揺してしまった……でも

これだけのお金なら、洋菓子老舗ブランド『ドルチェ・デ・ノエル』のケーキが、食える！ ショートケーキも、ああプリンアラモードもいいな……………いや、迷わずに欲しいモノ全部……………365日がケーキ……………ケーキケーキケーキいやっほーう！ 神様ありがとー！」と、呟いているのをエリーは聞こえなかったことにした。幻聴だ。幻聴以外の何者でもない。

1・金髪、蒼い眼（後書き）

姿が見えないだけで、辛い。

## 2・もう会えない

とある哀れな嘔吐きの話をしよう。

僕の名前はケイン。ケイン・ティーバー。

なんの取り柄もないただの人間だ。普通に生まれて、普通に育った、見栄っ張りなただの人間。

そんななんの変哲も無い僕に、最近大切な人が出来た。

その人の名前はエリー。

あの有名なマッキンリー家の愛娘で、僕の家とは比べものにもならないほどのお金持ち。生粋のお嬢様だ。

とても可愛らしくて、とても優しくて、芯があって、強い人だ。

正直、なんで僕なんかと付き合っているのか分からないくらい完璧な人だった。

だから、僕は彼女の前から姿を消したんだ。

「あ！ いたいた！ こんな所に住んでたんですね？」

たぶん、自分に向けられたであろう声が聞こえた。『こんな所』  
というのは、ここが貧民街だからだろう。今、僕は路地を寢床にして生きている。

「……僕に、何か用でも？」

「はい、大有りですね」

につこりと擬音が付きそうなくらいの笑顔でその少女は言った。  
そういえば、彼女も笑っている顔が一番可愛かったな。

未練がましくそんなことを考える自分が情けなくて、それと同時に懐かしい、愛しい彼女のことを思いだしたせいで、熱い水が頬を伝った。

少女は何も言わず、何も聞かずにハンカチを差し出してくれた。

「えっと、いきなり泣いたりしてごめんよ。少し情緒不安定気味と



「いつか……そういえば、僕に用って何かな？」

「あのですねー。便利屋ってご存じです？」

「あー、あれかな？ 『一人暮らしで溜まってしまった洗濯物から、気の合わなかった祖父の遺言偽造まで、どんな内容でもこなす町はずれの便利屋』って宣伝してるあれのことかな？ 何度か城下町でチラシを見かけたよ」

「はい、もう完璧です！ 感動です！ あの宣伝文句、考えるの苦労してるのに誰も覚えてくれないから……ケインさんが初めてですよ！」

「食われるんじゃないかと思うくらい、とてつもないスピードで腕を掴まれた。」

あのチラシは宣伝文句が物騒で面白かったから覚えていたんだけど、まさかこの目の前の少女がそれを書いた本人だとは思ってもしなかった。

「それはどうも……というか、なんで僕の名前を知っているんだい？」

「あ、自己紹介が遅れましたね。おれはカノン・ソリティア、便利屋です。カノンって呼んでくれて構いません」

「カノン……か。良い名前だね」

「はい、自慢の名前です。ところでケインさん。いきなり本題に入らせて頂きますが、今回はお仕事で貴方を捜していたんです。エリザ・マッキンリーさんからのご依頼ですね」

「な……エリーが僕を……？」

「はい」

カノンがずい、と身を乗り出してくる。腕は掴まれたままで、逃げようとすることも出来ない。

もしかして、最初から逃がすつもりなんて無かったんじゃないだろうか。

「詳しい話、お聞かせしましょうか？」

どうしよう。迷う心とは裏腹に、口だけが勝手に動いていた。

「お願いします」

ああ、なんて僕は未練がましいんだか。

「まあ、嫌ですって言われても無理矢理お聞かせしたんですけどね」  
にやりと音が付きそうなくらいの笑顔でカノンは言った。

\*\*\*\*\*

「そうか……彼女が僕を……」

聞くところによると、彼女は僕を捜すために必死らしい。

僕の目の前にいるカノンも法外な値段の報酬を受け取って、僕を捜していたらしい。さすが、マツキンリー家というべきか。僕なんかを捜すために、大金を容易く払ってしまえるなんて。

「ケインさん。何があったかは知りませんが、恋人に心配かけるのは良くないですよ？ そろそろ帰ったら、」

「駄目だ！」

カノンは目を丸くして僕を凝視した。彼女の綺麗な青色の目に、情けない自分の姿が写っている。

「それだけは……もう、駄目なんだ。もう……」

「……では、何故もう会えないんですか？」

少し間が空いて、カノンは訊いた。

僕はぼつり、ぼつりと彼女との出会いを話し始めた。

「彼女とは、友達の友達……そう、顔も知らない人の誕生日パーティーで出会った。とても落ち着いた、可愛らしい人で、何とかして彼女と親しくなりたいと思っていた。けれど、彼女はマッキンリー家の一人娘。僕なんか到底釣り合わない。」

どうしても彼女と話してみたかった僕は、最初の嘘をついた。

僕はとある財閥の跡取り息子で、身分を隠して学校に通っている。何故身分を隠しているのかというと、僕は普通の生活がしたいからだ。

本当はそんなんじゃないなくて、すっごく貧乏で。学校なんか通えるほどお金もないから、途中で辞めてしまっていて、人並みの生活すらままならなかった。だけど、そのお陰で彼女と親しくなれた。

でも嘘を付くと言うことは、その嘘がばれないようにまた、嘘を付かなければいけない……」

僕は嘘にまみれていった。

呟きみたいな僕の声を確実に聞き取って、カノンは最低ですね、と率直な感想を述べた。はっきりとしたその答えは、妙にすんと心の内に収まった。

「……二度目の嘘は、こうだった。」

僕はたくさん家族が居て、この前の誕生日に祖父から大きな家をもらったと。祖母にはいつかの僕の妻のために、最高級のドレスをくれたと。母は君が妻になることを望んでいると。

本当は僕には家族なんか居なくて、家もおんぼろアパートで、もうすぐ追い出されそう。

彼女に着てもらったドレスの布一切れさえ買う余裕なんてなかった。見栄を張ることで、僕はどんどん自分の首をしめていった」

「相当締めましたねー」

「三度目の嘘は、プロポーズをしたときに言った言葉。」

君が僕の妻になってくれたら、僕は君を世界一幸せにすると。君を幸せに出来るのは世界中のどこを探しても僕だけだと。そんなわけがないのにな」

その時に渡した指輪は、何の装飾も施せていないシンプルな安い指輪で、それでも彼女は嬉しそうに微笑んで薬指にはめてくれた。

そのとき、彼女の笑顔を直視出来ない自分に気付いた。

「最近嘘を付くのに疲れてきた。僕は彼女に相応しくない。それはとうの昔に分かっていたことだった。

でも、彼女に嫌われたくもなかった。

彼女に好きだと言ったのは紛れもない僕の本心だったし、彼女を幸せにしたいと思ったのも本心だったから。

なら、どうすればいい？ 彼女に嫌われずに、彼女に嘘がばれずに、僕がもう嘘を吐かなくて良い方法。

簡単なことだ。僕が居なくなってしまうえばいい。居なくなつて、彼女の中から僕という存在が消えて、それと同時に僕の嘘も消える。僕は、彼女と会わないことで、嘘を吐くことを止められる。

だから、僕は彼女の前から姿を消した。プロポーズの返事を、もらってしまう前に「

2・もう会えない(後書き)

とある嘔吐きの話。

### 3・幸せはラジオから

ケインが話し終わって、しばらく二人は何も言わずに立っていた。いつの間にか陽は傾いて、二人の影が先程よりすこしだけ伸びている。

「そんなにエリーさんを幸せにしてあげたいんですか？」

先に沈黙を破ったのはカノンだった。ごそごそとポシエットの中にある何かを手探りで探している。

「当たり前じゃないか！」

「ははあ。つまり、お金さえあればいいんですね」

「は？ ま、まあ。今まで通り、お金持ちのふりが出来れば彼女を幸せにすることも……」

「そうすれば、彼女に嘘を付いていたこともばれないし、彼女を幸せにしてあげられるんですね？」

「そうだけど……」

それはあくまで、嘘を突き通すと決めたなら、だ。根本的解決にはなっていない。なんでもお金で解決するのはよくないことだということはケインもよく分かっていた。

だけどカノンは、両手を差し出す。

エリーを幸せにしてあげられるのなら、嘘くらい良いじゃないか。そう言いたげに。

「じゃ、これ。どーぞ」

「は？」

そういつてカノンが渡したのは、

「『は？』って何呆けてるんですか。お金ですよ、お・か・ね！

みんな大好きイッツマナー」

ゼロが数え切れないほど書いてある小切手。

ポシエットの中に入っていた所為で端が折れているが、紛れもな

く、エリーがカノンに渡したあの小切手だった。

「ま、後は貴方のしたいようにしてください。煮るなり焼くなり、腹の足しになるのなら食うなり。そんなに美味しくないと思いますけど。なんか味薄そう」

「えっ、これ、ちよつと、まつ!? この小切手! え?」

「はいはいケインさん落ち着いて!。はい、息を吸って!、吸って!、はいまた吸う!」

「いやいや、吸ってばかりだから! 吐かないと! 吐かないと死ぬよ!」

「心を平常に戻して。深呼吸。深呼吸。ひっひっふ!」

「落ち着かない! 平常心が遠のいていく!」

ケイン、カノンと怒涛の会話応酬編だった。

そんな彼をけらけた笑って、カノンは目の端に流れた涙を指で掬う。

「と、悪ふざけはここらへんにしておいて。それ、おれがエリーさんから前払いで貰った報酬です。金額は『ドルチェ・デ・ノエル』のケーキを毎日何十個も食べられるくらいあります」

「でも、これは君の報酬だろう! 君だって、」

「いいんですよ。だって貴方が帰ってこなかったら、そのお金結局エリーさんに返すことになってましたし」

「いやでもいくらなんでも!」

「ええいもう黙らんかい! この根性無し!」

ごっつん、とカノンがケインの額を小突いた。小突くなんて可愛いモノじゃ無かったが。

「いつ……!?!?」

「いいですか? 耳の穴をかつぽじってよく聞きなさい、この根性無し野郎。これを受け取った後は、貴方がどうするかにかかっているんです。嘘を吐くのに疲れて、一生ここで過ごすのか。それとも嘘を吐き続けると決めて、その道を進むのか。まだまだ選択肢はあります。そのお金を使って何処かの国に移住するもよし、一儲けす

るのもよし、慈善事業に募金するもよし、街外れの便利屋にケーキを奢るもよし。

いいですか、根性無し。これはあくまで、一步踏み出すための後押しとして貴方あげるんです。この状態から、何か変える為の後押しとして」

「……変える？」

「まあ、異国へ移住するときは街外れの便利屋までどうぞ。これでも色んな場所に友達はいますから。極東の島国や広大な北の国はもちろん、空の上から地の果てまでね」

ケインは黙ったままだった。もう一度カノンはケインを小突いておいた。彼女なりに励ましたつもりのかもしれない。

「それじゃあ、おれはこれで！」

さよならー、と手を振りながら爽やかに、かつ笑顔でカノンは去っていった。

一人小切手を握りしめた、ホームレスのお金持ちを残して。

\*\*\*\*\*

数日後。

城下町の外れにある小さな家の台所では、古いラジオがノイズを交えながら音を鳴らしていた。

その家の住人は丁度朝ご飯をこしらえているところで、綺麗に才



ムレツを焼いていた。

「うん、今回のオムレツはなかなかの力作だ。さすがおれ、さすが天才」

住人が自分の料理の上手さを大袈裟に誉めていると、ラジオが天気予報を終えた。次はお決まりのニュースだ。

『……の天気予報でした。続いて今朝のニュースです……マツキンリー財閥の長女エリザさん二十六歳が昨夜婚約されたとのこと……お相手はケイン・ティーバーさん二十六歳、ということしかまだ分かっておりません……エリザさんが仰るには、ごく普通の男性のようで、財閥界では珍しい一般人との婚約に、街は騒然となっております。続きます……続いている……』

「ふーん。あの人、本当の事言っただ」

フライパンの中ではオムレツがいい具合に焼けている。

「あつと、いけないいけない」

そのオムレツは住人の手によって綺麗にひっくり返された。じゅ、という音を立てて卵のいい匂いが辺りに広がる。

「よし、うまそう！」

その住人の名前はカノン・ソリティア。

金髪で蒼い目。少年のような出で立ちで、性別は女。今は町はずれの便利屋で働いている。

年齢は、

「それにしても。エリーさんって、おれより十歳も年上だったんだ

……見えないな」

十六歳頃。

「……あれ？ そういや、おれ、なんか忘れてる？」

現在は一人暮らし。

「あああああ！ 軍に行く約束してたんだっけ！？ うおおお、どうしよう。やばいやばい、やばい……やばい、か……？ なんか、考えてみたらそんなにやばくもない？ ……ま、いつか。どうせあつちも忘れてるって」

「あー。ごめんくださいーい？」

「はいはい、いらっしやいませー！ 詰まっちゃった下水道の処  
理から、初めて出来た子供の名付け親まで」

その住人の元にまた、便利屋を訪ねて今日も客が来る。

3 ・幸せはラジオから（後書き）

便利屋へようこそ！

#### 4・門は全てを遮断する

私とその人と出会ったのは、私がまだ聞き分けのない子供だった頃。幼い私に大切なことを教えてくれたのが、その人だった。

その人はとても若い女の人で、町はずれの小さな丘の家に、たった一人で暮らしていた。

当時の私にとって、その人は憧れだった。いまも、きつと。

その人がなんと言う名前だったかは忘れてしまったけど、お店の名前は今でもしっかりと覚えている。

街外れの、便利屋さん。

\*\*\*\*\*

「なんで、おれが」

カノンは大きな豪邸の前でそれに負けなくらい大きなため息を付いた。

「しょうがないじゃない、自分で言ったことですよ！」

小さな女の子がやけに大人びた声で言う。

「まあそうなんだけども……でも……なあ」

「さあ！ 便利屋さん行くわよ！」

「あいあいさー……」

少女が歩いていく先を見つめながら、カノンは独り言に近い音量でぶつぶつと呟き始めた。

「……本当になんでこんなことになっちゃったんだよ、こんなお金にもならない依頼引き受けてどうするってんだよ、大体今月は依頼が少ない所為でまともに食事もしてないっていうのに……いや、食事はしてたけどもさ。そこまで悲劇の主人公ではないけどさ……」

カノンは少女に見られないようにこっそりとため息を付いた。いくらかこっそりしたところで、その周りの空気が彼女の感情をしっかりと表わしていた。

「ほら、便利屋さん！ こっちこっち！」

右手を大きく振り、カノンが傍までやって来たのをしっかりと確認してから、少女は眼前に聳える大きな門へと手を掛けた。

流石は豪邸ということだろうか。大きな門は、少女の手によつてとつともなく耳に悪そうな音を鳴らしながら、屋敷への道をあけはなった。

カノンにはその門がまるで地獄の大王の部屋へ続く扉のように、見えたとか見えたとか見えたとか。つまり、そう見えたのだった。

ことの始まりはほんの数時間前の出来事。

「パパを、説得して欲しいの。お金さえ払えば何でもしてくれるんでしょ？」

まだ初等部ごろだろうか。小さな女の子がカノンに貯金箱を差し出しながら、高飛車に言い放った。

「そりゃそれが便利屋の謳い文句だけどよ……この中に何万ミリア入っているんだよ？」

「千六百三十ミリア」

「少なっ！」

案の定、少なかった。予想は出来ることだったが、余りにも予想通りでカノンも声をあげずにはいられなかった。

「おーねーがーい！ わんちゃんを飼いたいのに！」

少女がカノンの腕を掴み、

「それこそパパに頼めよ！ なんでわざわざおれに頼むわけ？」

それを振り払うようにカノンが腕を振る。それはもう、遠慮無くぶんぶんと。

「パパは動物の毛が駄目なの！ くしゃみとまんなくなっちゃうから！」

「なら諦めてやれよ、パパ可哀想！」

「いーやーよ！ どうしても欲ーしーいーのー！」

両足をバタバタと動かして駄々をこねる少女に、カノンは母親のように叱りつけた。

「わがままいうんじゃありません！ お前、アレルギーの怖さを知らないからそんなこと言えるんだよ！ あれはな、すんげーストレスにもなるんだよ。いや、おれもよく知らないけどな。そのストレスが原因でパパの頭が薄くなったら嫌だろ？ もうパパと並んで歩けなくなっちゃうんだぞ？」

「そうなら犬と並んで歩く！」

「禿げさせないようにしてあげなさい！」

カノン、もつともな意見だった。

父親よりも犬を選ぶ気まんまんなこの少女に、カノンは頭を掻きながら盛大な溜息を吐いた。

「やだやだやだ！」

「んつとに聞き分けの無い……取りあえずこのブタさんはお返しします！」

カノンは貯金箱を女の子に返す。ずいと押しつけるように。

「いーやー！ お仕事依頼してるんだから、ちゃんとしてよー！」

少女がもう一度貯金箱を押し返す。

「無ー理ーです！ こんな少ない儲けでお仕事なんかできません！ 今月うちも厳しいんだよ！」

カノンも負けじと貯金箱を押し返す。それはもう初等部の少女と同等レベルで争う。

「厳しいのはあなただけじゃないわ！ 私だってなけなしのお小遣いを払ってるの」

少女がまたまた貯金箱を押し返す。

「じゃあ自分でパパに頼めよ！ それなら金もかからなくていいだろ！」

カノンは大声を上げつつ貯金箱を押す。

波のように繰返し行われるその行動に飽きないのか、貯金箱はカノンの手にも少女の手にも収まらない。

「だって怖いんだもん！ 『パパは昔はすごかったの。その強引さに惹かれたのよ』ってママが言ってるけど、いまもなんか凄いなだもん！ 黒い服来た男の人達をいっぱい引き連れてるんだもん」

「そっち系の人でしたか！」

「だから、依頼してるのー！」

少女も負けていない。貯金箱は二人の間を行ったり来たりしている。なんとなく貯金箱の豚が冷や汗をかいているように見えた。

「わがまま言う子にはサンタさんが来ませんよー……あっ?!」

カノンが貯金箱を押し返したとたん、バランスを失って机の上からブタがダイブをする。飛んで飛んで飛んで、落ちて、割れた。

見事にブタが割れた。

「あー！ 私の貯金箱が！」

「や、やっちゃったー！」

「うわーん！」

とつとつ泣き出してしまった少女に、目に見えて慌てるカノンが、今日の失言とも言えるべき発言をする。

「ごめ、ごめん！ まじごめん！ 何でもするから泣きやんで！ なっ？」

その一言さえ言わなければ良かったのに、と彼女はのちのち後悔することになる。

自分の失言に気付いたのは、ぴたり、とでも音が付くように少女の泣き声が止んだときだった。

「本当になんでもしてくれるの？ やったー！」

「嘘泣きかよ！」

なんとなく貯金箱のブタが泣いているように見えたのは、気のせいなんかじゃ無いと思えた。

と、いうわけでカノンは無償でこの小さな悪魔、もとい少女の依頼を受けることに、半ば強制的になってしまったわけだった。

ぎい、と開いたときと同じ音を立てながら大きな大きな門がしまつてゆく。

「おれ、生きて帰れるかなあ？」

「なにか言った？ 便利屋さん」

「なんでもないデース」

大きな怪物のように見えた門が一人を飲み込んだ。



4・門は全てを遮断する(後書き)

死にはしない、はず。

## 5. げに恐ろしきはその場の流れ

門の中へはいってからの出来事は、時間が早く過ぎてしまったように感じられた。

ろくにカノンの心の準備も出来ないまま、門よりも豪華な扉を開け、赤い絨毯の敷かれた通路を怯えるように歩く。

どうしてこんなことになったんだろう、と自問自答を繰り返すカノンの隣を、少女は堂々と歩いていく。その手は、カノンが逃げ出さないようにしっかりと彼女の腕を掴んでいる。

「お帰りなさいませ、ミシエルお嬢様」

深々と頭を下げる初老の男性。どうやら執事のようだ。少女

ミシエルは慣れているのか、すたすたと執事の顔も見ずに、歩きながら答える。

「ただいま、ピーター。パパはどこ？」

「はい。旦那様ならいつもの書齋に……」

「ありがとう」

ひらひらと手をふるミシエルに、ピーターは失礼と思いながらも引き留める。

「あの……お嬢様？」

「何かしら？」

「そちらの方は？」

そちらの方。ミシエルが逃がさないように引きずっている、金髪蒼目のそちらの方のことだ。

「あ、どーもー。カノン・ソリティアです。街外れの便利屋やってるんで、何かお困りのことがあったらいつでも来てくださーい。お安くしときますよー」

「さあさあさあ、行くわよ便利屋さん！」

「まじですか？ 心の準備は無いですか？」

嵐の様に去っていくミシエルとやる気のない金髪少女を、執事長

のピーターは見送ることしか出来なかった。

「うえ！ おれ一人で行くの？」

例の書斎の扉の前で立ち止まるカノン。

ピーターと別れてから数分と立たないうちに着いてしまったそこで立ち竦んでいた。どうやらミシエルによると、カノン一人でペットを飼う許しを得て欲しいそうだ。

「便利屋でしょ！ ファイト！ なせばなる！」

「棒読みで応援されたって、やる気萎えちゃうよ！」

「四の五の言わずにさあノック！ きつと新しい世界が待ってるわ！」

「そこはきつと地獄だな……間違いないな」

ここまで来たら、もう逃げられない。カノンは意を決してその地獄への扉をノックした。

「どうぞ」

中から、とても威厳の感じられる声が聞こえた。威厳と言うよりも、威圧感と言った方が正解のような気もする。

とにかく、入りづらい「どうぞ」が聞こえた。

「し、失礼します」

頑張つてねー、という悪魔の声が聞こえたが、今のカノンには届かなかつた。

扉の向こうの世界へと、カノンは踏み込んだ。

それから数分後。

ペットの交渉が終わったのか、部屋の中からカノンが現れた。ドアの前ですつと待っていたミシエルが、ぱつと立ち上がる。期待と

不安の入り交じった目で、カノンの傍へと駆け寄って。

「便利屋さん！ パパはどうだった？」

「うん……まあ。その、ちょっと……」

「どうだったのよ?!」

「ご、ごめんなさい」

一言目が、謝罪のことば。詳しい内容は聞かなくても良さそうだが、申し訳なさそうに両手を合わせるカノンの姿だけで、部屋の中のこととは容易に想像がつけた。

「無理、だったんだ……」

「あははははー……ごめん」

二人の周りの空気が重くなる。

「おや？ お二人とも、どうなされました？」

エプロン姿のピーターの姿が見えて、少しだけ、空気が軽くなっ  
た。

\*\*\*\*\*

「そのまま帰るのもなんですし、私の作ったケーキでもどうですか？」と、ピーターに誘われ、カノンは庭園でミシエルとちょっとしたお茶会をした。

出された紅茶と、ケーキは最高に美味でカノンの気分は上々だった。が。やはり、ミシエルの周りの空気は重い。

「あの、さ。交渉が失敗してから言うのもなんだけど、『生き物を飼う』って言うのはその時の気分で決めたりしちゃいけないんだよ。そいつらだって……まあ生きている訳なんだし。どうしても犬を飼わなきゃいけないって思える時がくるまでさ」

慰めるつもりでカノンが言う。

タダ同然の依頼とは言え、成功しなかったのだから責任はカノンにある。たとえそれがどんな依頼であれ、きちんとこなしてこそ便利屋だ、と師匠に教えられたからというのもある。

「だって……欲しいんだもん。犬、飼いたいんだもん」

「ミシエル、もしも犬を飼えたとするな？　そこでお前はその犬の全てに責任を負えると誓えるか？」

「ちゃんと、世話ぐらいするわ！　馬鹿にしないで！」

カノンが声を荒げるミシエルの頭をそつと撫でた。馬鹿にしたわけではない。それはミシエルだって分かってることだった。

「世話だけじゃない。例えばその犬が病気になってしまったら、その犬が息を引き取るその直前まで、看取れるか？」

「それは、死んじゃうってこと……？」

「ああ。病気じゃなくなつて、犬の寿命はヒトよりも短い。必ずその犬はお前より早く死ぬんだ。そんな他の生き物の一生の責任をお前は負えるのか？　全部、見届けてやれるのか？」

俯くミシエルを見てカノンは席を立つた。ごちそうさま、とピーターに礼を言う。

「また、遊びにこいよな。失敗したお詫びに、次は無料で依頼受けるからさ」

「うん」

二人、いつになるか分からない約束を指切りした。

「はあ……悪いことしたかなー。うん、したよな。確実におれ、悪

い奴……」

屋敷を出ていくカノン後ろのポケットには、数の記された紙。そう、小切手が収まっていた。

「でもおれ、真面目に今月やばいんだよ……言い訳だけどさ」

カノンがあこの部屋の中で、ミシエルの父親に『娘に犬は飼えないと説得してくれ』と依頼されたのは火を見るより明らかだった。依頼の順番よりも、依頼料の多さで優先順位を決める。まあ、基本といえれば基本だ。

「本つ当にごめんな、ミシエル」

大きな門に向かって、そう呟くカノンは複雑な表情をしていた。至極、複雑な。

\*\*\*\*\*

控えめなノックの音が響く。その後、静かな声が聞こえる。

「ミシエルお嬢様、失礼します」

あの時よりも少しだけ年をとったピーターが部屋に入ってきた。

「何かしら？」

「お茶をお持ちしました」

ピーターが綺麗な女性にカップを渡す。ありがと、と微笑みながら答えるその人は、とても綺麗な笑顔を浮かべていた。

「何か良いことでもありましたか？」

「あら、どうして？」

もうすっかり大人になったミシエルが訊く。

「いえ……とても楽しそうなお顔をしていたものですから」

「そうね。昔の事を思い出していたのよ。犬がもの凄く欲しかった時のことよ。貴方は覚えていて？」

ピーターが懐かしそうに目を細めた。古いアルバムを取り出して眺めるように、微笑みを浮かべながら。

「お嬢様が、あの便利屋の方とお友達になられた時のことですね」

「ええ、そうよ。あの人のお陰で生き物たちの尊さを学ぶことが出来たわ。軽はずみで犬を飼わなくて良かった。心からそう思うのよ」  
「それはそれは……ところである方のお名前はなんと言いましたかな？」

ミシエルが苦笑いをする。

「ふふ、ピーターも忘れちゃったの？ 私も思い出せずにいたのよ」

「確か何かの曲名だった気がするのですが……おや？ お嬢様、こちらのご本は？」

ミシエルの手によって開かれている本をピーターが見る。

その本は、子犬の写真が表紙になっていた。

「ああ、これね？ 私、今度犬を飼おうと思うの。今なら、その生き物の一生を共に過ごしてゆける気がするの」

## 5 げに恐ろしきはその場の流れ（後書き）

あの便利屋さんに最後に会ったのは何時だったかしら？



## 間奏曲 壹曲目「選んだ道の先」

ある分かれ道の真ん中に、一人の便利屋の少女が立っていました。彼女が何故その場所にいたのか、何のためにそこへ来たのか、どうやってきたのか等は、とてもとても深い事情と長い説明が必要だったので、敢えてここではいいません。

その少女は綺麗に梳かされた金髪と蒼い目をしていました。彼女は分かれ道の真ん中に置いてある看板を見ました。

『誰の為に生きていきますか？』

右、他人

左、自分 』

どうやらここでは質問の回答によって進む道が決まっているようです。

少女は特に行くあても無いので（行く当てもないのにその場所に来たのには、きっと深い訳があったのでしょう）看板の指示に従うことに決めました。

少女は迷うこと無く左の道に進みます。

彼女にとってその選択は至極当たり前の事だったので。

しばらく歩いて行くと、また分かれ道に出てきました。そしてまた看板が道の真ん中にたっていました。

この場所ではその形式を崩すことは出来ないようです。

『あなたの髪は金色で、瞳は蒼色ですか？

右、YES

左、NO 』

少女は髪を撫でて、右へと足を進めました。

まあ見れば分かることでした。

黙って歩いて行くと、段々と道が細くなってきました。そしてやっぱり分かれ道に出してきました。

看板の向こうにある道は二本とも太くなっていました。

彼女は分かれ道の決め手となっている看板を見ました。

『大切な人に会えない理由は？

右、とても遠い場所にいるから

左、もう何処にもいないから 』

少女は少し迷って、左の道に進みました。

表情は先程よりも少しだけ暗くなりました。

彼女にとってそれは認めたくない事実でした。

太い道は草木が生い茂っていました。先ほどの道よりも暗いので不安が募ります。

一体この道はどこまで続くのか。終わりはあるのか。不安は、不安しか生みません。

ふと前を見ると、視界の先に光の筋が見えたので少女は早歩きになりました。不思議と疲れは吹っ飛んでいました。

道を抜けるとやっぱり分かれ道がありました。

お馴染みの、あの看板もありました。

少女の無表情だった顔が少し引きつったように見えます。

こつも同じ展開が続くと、幾ら人間が出来ていたとしても（だからといって彼女が出来た人間かと問われればそうでもないとしたか答えられません）飽きてくるというものです。

『幸せはどこからやってくる？』

右、電話

左、ラジオ

少女は左の道を選びました。

看板の質問はきつと読んでいなかったでしょう。だってあまりにも抽象的すぎる質問だったというのに、少女はすぐに歩き始めたのですから。

少し歩くと、今度はすぐに分かれ道がありました。

少女は溜め息を付くとやれやれといった感じで看板を見ました。

ここへきて約十二回目のため息だったので、十二個分の幸せが彼女の元を離れたということです。

『門は何の為に在る？』

右、遮断する為

左、開く為

少女はまた溜め息を付くと、右へと足を進めました。さっきは左を選んだから、次は右だな。そんな心情が読めてくるようです。

道は、途切れることなく奥へ奥へと続きます。最初の方よりも大分奥へと進んできているようでした。

道は、まだまだ続いていました。

もう何時間歩いたでしょうか。

なかなか次の分かれ道が見えてきません。

というより、さっきから同じ場所をグルグル回っているような錯覚にも陥ります。

少女が疲れて座り込むと、目の前に見慣れた看板が見つかりました。

看板の向こうに分かれ道はもうありませんでした。

少女は急いで駆け寄ると、逃げるはずが無いのに看板をしっかりと握り締めました。

看板にはこう書いてありました。

『最後の質問です。

この世で本当に恐ろしいのは何？』

看板にはそれだけしか書いてませんでした。

右も左も何も書いてませんでした。答えは、選択肢によって決められていません。自由に答える、ということでしょう。

少女の顔が困ったように、そして悲しそうに歪みました。

少女はここへ来て初めて感情を表情に表しました。

彼女にはこの質問の答えが分かったのです。

「……それは、きつと、人間だよ」

少女が声出すと辺りが真っ白な霧に包まれて行きました。いままで歩いてきた道も得体の知れない何かによって瓶の中に詰め込まれていくように、映像が凝縮されていきました。

懐かしい声が、聞こえる。

くらくらするカノンの頭の中で、誰かが話しているのが聞こえました。

『カノン。またお話ししてやるよ』

『えー、もういいよ。師匠のお話ってよく分かんないから。』

もつと私にも分かるようなお話ししてよ』

『まあ良いから聞きなつて。今度のは、とつても為になるからよ。』

ヒトつてのは、大抵が分かれ道の真ん中に立っているものなんだ。そして常に右か左かのどちらかを選ばなければいけない。

真ん中？ あはは、そんなのは無いよ。

右か、左か。二分の一の確率だからヒトは迷うんだよ。

どっちかが地獄でどっちかがエデンだと思いきこんでいるからさ。そんなこと誰も言っていないのにな。おかしいだろ？

どっちも地獄だつてことも有り得るのにな。

……おい。カノン、起「きろ」。こっからが本題なんだぞ。前置きが長いつて？……うるさい。

カノン、いつかはお前も気づくだろうけど、俺たちの周りはいつも分かれ道で溢れかえっているんだよ。お前にはお前の、俺には俺の道がある。きつと二人の道が分かれる事なんて、いくらでもあると思う。右か、左か。

そのなかに正解なんて無い。もちろん間違いもないさ。だから恐れずに、自分の進んだ道を最後まで歩け。

いいか？ カノン』

そこで、意識が、ぶつりと、途切れた。

\*\*\*\*\*

カノンが目を開けると、ベッドの上で横になってにいました。どうやら、今までののは夢だったようです。

寝起きだからなのか焦点の定まらない目は虚ろで、何も写してはいません。

カノンは閉じかけた口を少しだけ開くと、ぽつりと呟きました。

「間違った道を進んでるって分かった後も、その道を歩き続けなきゃいけないのかな？」

カノンの小さな眩きは朝靄の中へと消え失せてゆきました。  
誰にも聞かれることはありませんでした。誰にも、誰にも。

間奏曲 吉曲目「選んだ道の先」(後書き)

<br>師匠。貴方の選んだ道は、正しかったの？



雨が、静かに降っている。

何処か遠くで雷が響いた。それは遠雷と呼ぶんだよと、誰かに教えてもらったことをカノンは思い出した。

彼女は、傘も差さずに静かな墓地の中を歩いていた。  
右手には、質素な花束。

綺麗に整列して並んでいる十字架、それらは余りにも規則的に並びすぎていて、死者や亡霊、魂などといった奇妙で不可解な印象を微塵として与えなかった。

ここはそういったモノに対して最も相応しい場所である筈なのに、カノンは靴が泥で汚れるのもお構いなしに足を進めた。

そもそも幽霊なんて信じていないのに、死者の念相応しい場所が何処だとかそんなことを考えている自分が馬鹿らしい。

そんなことを考えていると、目的の十字架に辿り着いた。

ここの墓地は結構な広さがあるので、着いた時にはもうカノンの靴はドロドロになっていた。

今日、カノンは自分を拾い育ててくれた親代わり、ジン・ソリティアの墓参りに来ていた。

「あーあ、やっぱり傘と長靴は持つべきだったかなあ」

そう文句を垂れると、カノンは墓石に彫られた文字を指先で壊れ物を扱うように撫でた。

そこには冷たい温度しか無かった。

「ジン・ソリティア、か」

それは確かめるように呟かれた一言だった。

カノンは持ってきた花束をふわりと墓石に添えるようにして置く。花束には彼が生前好きだった、質素な花たちが取り揃えられていた。

「どう？　綺麗でしょ、マーガレット。おれが選んだんだよ、師匠」  
まるでそこに彼がいるかのように、カノンが墓に向かって話す。  
「ちよつとは女らしくなつたっしょ？　今日は何にもすることないし、またお話ししようよ」

雨に濡れていく身体を気にもせずに、カノンは墓の前にしゃがんだ。

カノンとその墓の周りだけ、雨音がしなかった。まるで別の世界のようにだった。

彼女が先程触れたジンの名前の下を、同じようにそつと指でなぞる。

長い、長い文字の羅列だった。

” You were my master it , an e l d  
e r b r o t h e r , a n d f a t h e r .  
I t w a s a n i r r e p l a c e a b l e f a m i l  
y f o r m e .  
E v e n i f p e o p l e a l l o v e r t h e w  
o r l d a d m i t y o u r d e a t h , y o u k e e  
p l i v i n g i n m y m i n d .  
T h e r e f o r e , I d o n o t f o r g e t y o  
u t h r o u g h l i f e . ”

「なあ師匠。今年であんたとおれが出会って九年も経つたよ。あんに拾われた日も確か、こんな雨の日だったよね」

カノンのその小さな小さな呟きは、雨音の中に溶け込むようにして消え失せた。



6 · With a solitary girl and the reverse

< br < こんなの日は、思い出すんだ。 > br < > br < > br < > br <

土砂降りの雨が、母と小さな私を濡らした。

「いい？ x x x。お母さんが戻ってくるまで絶対にここから離れちゃ駄目よ。絶対に。お母さん、すぐ戻ってくるからね。だから良い子にして待つてるのよ？ x x xは良い子だから出来るわよね？  
じゃあまた後でね、x x x」

その時、母が私のことを何と呼んでいたかは忘れた。

私の本当の名前だけが記憶から抹消されて、母の言葉だけは忘れることが出来なかった。たぶん、忘れられないのだろう。

母が迎えに来ることは、二度と無かった。

小さな私には、置いてけぼりにさえたその狭く薄暗い貧民街がとても広く感じて、怖くなって、泣き出したくて、それでもただただ母が迎えに来てくれるのを待っていた。

傘を持たない私は、屋根を探そうと立ち上がり、そしてやめた。

母が言ったのだ。ここを離れるな、と。

迎えに来てくれることを願う私にとって、その言葉は絶対だった。良い子にしていなければならぬ。

ここを離れては、母が迎えに来たときに困るかも知れない。私が居なくなつたと、心配するかも知れない。

迎えに来てくれるかは、分からないけど。

私は、何日も何日もそこから離れなかった。

母が迎えに来ないと完全に悟つたのは、その日から一週間経つての事だった。

「お前、そんなだと死ぬぞ」

焦げ茶色の毛の、私より年上の少年が話しかけてきた。着ている

物はぼろぼろで、とても服とは呼べそうになかった。布に近いものだった。

「なんで？」

私は訳が分からず、首を傾げた。本当は少し、分かっていたのだけだ。

それでもそれを認めてしまつたら、自分が自分でなくなるような気がしてどうしても理解できなかった。

「……早く屋根を探せよ！ 濡れっぱなしだと風邪引くぞ！ こんなところで風邪なんて引いたら一発だぞ！」

「でも、ここから離れたら、お母さんが」

「迎えになんかくるもんか！ お前は捨てられたんだよ！ いらなかつたんだよ！」

捨てられた。

捨てられた。

いらなかつた。

そんなことは言われなくても知っている。

ちゃんと、分かっていた。

「そんなの知ってるよ！」

私の剣幕に少し驚いて、その子は泣きそうになつて言った。

「それじゃあ……」

「知ってるよ！ 知ってたよ！ でも、もしかしたら迎えに来てくれるかもしれないじゃん……！ 良い子にしてたらさあ……」

「……とりあえず、おれんちに来いよ。本当に死んじまうぞ」

その子の言うとおり、私は知らない内にかなり衰弱していた。

一週間ずっと濡れっぱなしだった私は、身体はおろか、心も冷え切っていた。

「ここがおれの家……といっても元は知らない誰かさんのなんだけどな」

「……？」

目の前にあるのは窓ガラスが割れ、荒れ果てた小さな小屋だった。貧民街でよく見かける、元は知らない誰かさんの家。何人もがここに住み、そして何人もがいなくなっていた。

「おれの名前はユーリ。えっと……一応名字もあつたんだけど、それは言わねーでよくな」

言わない訳は分かっている。

この子も捨てられたんだ。

「私は」

自分も名前を言おうとして、気づいた。

「名前、忘れちゃった……」

「あ、そう？　じゃ勝手に呼んで良い？」

ユーリはそんな私を気にもせずと言った。少しだけ、嬉しかった。

「じゃあお前『ちび』決定な」

「……それはちよつと」

その時、確かに土砂降りの雨が少し弱まった。

7 · i n t h e s l u m s a s o l i t a r y g i r l a n d

狭く薄暗いそこに、2人はいた。



私の父は軍人で、今はもうどこにも居ません。

私の母はとても弱い人で、私を迎えになんて来ません。

私の名を、今では誰も覚えていません。

私の隣で微笑むこの人は、私を一人にしないでしよう。

\*

ユーリと出会って、二週間が経った。

「何見てるんだよ、ちび」

私の視線に気づいたユーリが、ぶっきらぼうに言った。

「うん別にー……ていうか、ちびじゃないから！」

むっとして、私が拗ねると、ユーリは少し考えてにんまり笑った。

「じゃあ、金髪とか？」

すかさずユーリが言い返してきた。この数週間で分かったこと。

ユーリは私より年上の癖して、私より子供っぽいところがある。

「それ名前じゃないし……」

俯いて答えると、ユーリが私の顔をのぞき込んできた。

「でもちびは嫌なんだろ。よし金髪ちび決定な！」

「異議あり！」

「いいじゃん別に。お前の金髪、綺麗なんだからさ」

綺麗なんかじゃない。そんなきらきらした言葉と自分は、とてもかけ離れていた。

薄汚くって汚れていて、埃だらけ。服もボロボロで。

綺麗じゃないって分かり切っている。なのに、ユーリが言うままで本当に綺麗になったんじゃないかって思ってしまう。それほどまでに、ユーリの存在は大きかった。

「でもま、良い名前が見付かるまではちびのままな」

「そのうちでかくなるよ」

顔が自然と笑顔になる。これもユーリのお陰だろうか。彼に会えて良かった。彼のお陰で私は救われた。

ユーリだけは私を見捨てないと思った。

「さてと、朝ご飯でも探しに行くか」

私はすつと差し出された手を取るのに戸惑った。一緒に出掛けるのは、初めてだった。貧民街は危ないから、何も知らない奴が出て行っちゃ駄目だとユーリが言っていた。

だから、ユーリに手を差し出されるのも、初めて。

なかなか手を取るうとしない私を見て、ユーリは無理矢理私の手を取って歩き出した。

「ついていても、いいの？」

小さな声で訊いた。

ユーリは私の方を見ずに、ぐんぐん進んだ。私の手を握ったまま聞こえなかったのかも知れない。本当はついていたら迷惑かも知れない。足手纏いになるかもしれない。

「私、ついていてもいいの？」

ユーリの足が止まった。

私がユーリの返事を待っていると、ユーリはまた歩き出した。歩きながら、言った。

「俺とお前はこれからもずっと一緒なの！ まだお前のこと少ししか知らないけど、俺たち二人はもう家族なの！ もう決定事項だから。異議は？」

かぞく、家族。もう一人じゃない。一人じゃなくても、いいんだ。二人でいても、いいんだ。

相変わらずこつちを見ないユーリの耳が、赤くなっていることに気づいて、笑った。

「ない、よ」

笑いながら、そう二人で笑いながら、この薄暗く狭い路地を抜けた。

道は、確かに明るかった。

ユーリだけは、私を見捨てないと思った。

「うおー！ 今日ほめちゃくちやあるな！」

ごみ箱の中を覗いて大声をあげる。

「ユーリ声でかい！」

それを私がたしなめる。

町のごみ箱を漁る幼い私たちは、きっと誰よりも惨めで、可哀想な存在だったことだろう。

私たちのことを、通り道を抜ける町の人は哀れみの目を向けながら見て見ぬ振りをする。それでも私たちは幸せだった。

「朝ご飯確保！」

「ついでにお昼ご飯も確保！」

二人で顔を見合わせて、笑って手を繋いで、今日もあの「元は知らない誰かさん」の家に戻る。窓ガラスは相変わらずはずれたまま。私たちは一日一日を必死で生きていた。明日はご飯が無いかも知れない。今日は飢え死にしないでくださいね。明日は死ぬかも知れない。私たちとそう変わらない子が両親に甘えて笑顔で家族と並んで歩いているのに、私たちは。

だけどそれが私達の常識で。それが私達の世界で。一人が、二人になれただけで、幸せで。

誰にも頼らず、守ってくれるはずの親にも見捨てられて、それでも二人でいればなんとでもなる。そう思った。そう思いたかった。思っていたかった。

ユーリだけは、私を見捨てないと思った。

ユーリと出会って三ヶ月目のことだった。

その日はまた雨が降り出していた。梅雨明けは未だらしい。そのせいか昼だというのに、暗くて不気味だった。

「ユーリ、遅いなあ」

私はボロ小屋のなかでユーリの帰りを待っていた。

時々、乱雑に置かれた缶やバケツに雨が入って、ぽちよんと間抜けな音が響く。

今朝は雨が降っていたので小屋の当番と食料探索の当番にわかれていた。

見ている通り小屋はボロボロなので、雨が入り込んでくる。なので今日は二手にわかれていた。

「それにしても、遅い。遅すぎる」

朝早くに出ていったのにも関わらず、ユーリはまだ帰ってこない。食料が見つからないのか、それともこの暗さで時間感覚が狂っているのか。

「行っても良いよね。ちょっとくらい小屋を離れても浸水したりしないよね、うん。きっと大丈夫。よし」

一人で納得して、私はいつも食料を漁る町へと駆けた。

傘なんて便利なものは持っていないから、濡れるのは仕方ない。いつもの道の走っていると、貧民街で顔なじみのおじさんに止められた。

「おい、お嬢ちゃん！」

「あ、おじさん！ こんにちは」

「もしかしてユーリを探してるのか？」

私が言い終わるその前に、おじさんが尋ねた。どうして分かったのだろう。きつと、それくらいいつも一緒に居たからだ。

「うん。よく分かったね」

「なら、もうあいつに関わるな！ いいな!？」

普段は優しいおじさんが、途轍もなく怖い形相で叫ぶように言った。

「……なんで？」

次に放たれる言葉が、私達の世界を崩壊させる。

「あいつ、軍の機密情報を盗んでやがった！」

突然のことで何がなんだか分からない。理解できない。

「な、なに言ってるの？ ちよつとおじさん、いくらユーリが悪ガキだからってそんな……」

「嘘じゃない！ あいつ指名手配だったんだ！ こんな貧民街にやそんな噂ちつとも回ってこないから知らなかったが、この話は確実だ！」

「うそ！」

叫んだ声は、掠れていた。

「嘘じゃない、本当のことなんだ！ 嘘だと思っなら大通りに行ってみる！ さつき軍のヤツらが大通りにやってきて、ユーリのこと探し回ってた。きつと連行する気なんだよ！」

「大通り……」

「ああそうだ。そのかわりユーリの知り合いだなんて言うんじゃねえぞ。お前まで捕まっちゃまう。極悪犯を匿っていた、なんて言いがかり付けてな！ 幾ら子供でも貧民街出身だ。軍は容赦しない……  
つておい！ お嬢ちゃん！」

ユーリが軍の機密情報を盗んでた？ ユーリが指名手配されてた？  
ユーリが連行される？ ユーリはどうなるの？

雨はまだ止まない。

寒さと冷たさで身体感覚が鈍くなる。

「ユーリだけは、私を見捨てないと思ってたのに」  
その呟きは、誰にも聞こえなかった。

8 · i f e l l i n t h e h e l l o f d e s p a i r · T h e

たとえ君が悪魔だったとしても。

A T T I O N  
B G M : R e : R e : / A S I A N K U N G - F U G E N E R

雨は、幸せな人にも不幸せな人にも、平等に降る。

だから、傘を持っている人の上にも、持っていない人の上にも、容赦なく降るんだ。

傘が欲しい訳じゃない。ユーリが傍にいてくれるだけで良かった。

「ユーリ！ ユーリ……！」

私は必死でユーリを探していた。

「どこ！？ ねえったら！ 返事してよ、ユーリ！」

服が濡れることなんて、構っていられなかった。裸足の足が、泥塗れになっていることなんて、気付きもしなかった。

私はユーリしか見たくなかった。それ以外の何も、見たくはなかった。

「ちび……？」

あの声が聞こえた。ずっと待っていた声が聞こえた。

私はその声が聞こえた方へと駆けだした。

「ユーリ?! どこにいるの？」

雨が視界を狭める。邪魔しないで、邪魔しないでよ。

必死になって走っていると、霧の中、彼の茶色の頭が目に入った。

「あ……」

「ちび……なんで……」

音が、消えた。

一番最初に目に飛び込んできたのは、軍の車。

そしてユーリの両腕を掴んだ軍人二人。

抵抗をしたのだろうか。ユーリの足は傷を負っていた。

痛くないだろうか。傷は深くないだろうか。

右足に流れる赤い液体は、私に嫌なモノを思い出させようとして



いた。

なんだっけ。

なんだっけ、あの、赤いの。

「ユーリ、良かった……探したんだよ」

「なんでここに居るんだよ！」

「ふらふらとユーリに近付く。今更になって、疲れが出てきていた。なかなか帰ってこないからさ、心配したよ。小屋はたぶん大丈夫だと思っけど……」

「おい、ちび！」

「早く家に帰ろう？ 濡れたら風邪ひくじゃん」

「聞けよ！」

ユーリの方へ近づこうとしたら、軍人が私の前を塞いだ。

どいてよ。邪魔なんだよ。

「君は、彼のお友達かな？」

私はその軍人を思いきり睨んだ。せいっぱい睨んだのに、相手は怯むことすらしなかった。無力さを思い知らされた気がした。

「違う！ 違うんだ！ そいつは俺とは関係ない！ そんなやつ知らない、」

「君は黙って」

もう一人の軍人がユーリを押さえる。ユーリに、そんな乱暴しないでよ。

「もう一度きくよ。君はあの子のなんだい？」

私は睨みつつ、しっかりと答えた。

「家族です」

私の前に居る軍人がきよとんとした。そして後ろの軍人と「妹がいるという報告はあったか？」と訊いた。すぐに「その様な報告はありません」と別の軍人が答えた。ユーリが「あんなヤツ知らない！」と大声でわめいていた。私はそんなやりとりを、酷く冷静に見ていた。

「血は繋がっていないけど、家族です」

もう一度言う私の言葉に軍人は納得したようだった。口元に手を当て『捨て子同士の馴れ合いか』と、意味の分からない言葉を発した。黙れよ。あんたらに私たちの何が分かるんだよ。

軍人は私の気持ちをよそに質問を続ける。

「君はあの子が、そうだな……分厚い資料や、紙等を持っているのを見たことがあるかい？」

「いいえ」

迷わずに答えられたのは、自分でも不思議なくらい、それは嘘だった。本当は、何枚かの紙を戸棚に隠していたのを知っていたから。私がそれは何かと訊いても、ユーリは全然教えてくれなかった。きつと、軍の機密情報が書いてある紙だったんだ。冷や汗は未だ降り続ける霧雨が流し去ってくれた。

「そうか……君にも詳しくお話したいんだけど、彼と一緒にいつてきてくれないかな」

有無を言わせない物言いだった。一瞬後ろへ下がった私の腕を掴んで、「大丈夫悪いようにはしないよ。ただ話を聞くだけだからと軍人は言った。掴まれた腕は、力の加減を知らないのかとても痛かった。早く離して欲しかった。

私はどうすることも出来なくてユーリの方を見る。

その瞬間、見なければ良かった、とひどい後悔をした。

「ユーリ？ なにを」

私が言い終わらない内に、ユーリは軍人から奪った銃を、その銃の持ち主だったであろう軍人に向けて撃った。

一発、二発。

その銃を構えるユーリは酷く愚かに見えた。

「このガキ！」

私の腕を掴んでいた軍人が、慌てて仲間の元へと走った。  
ああ、そつか。幾ら冷酷だと言っても所詮人間だもんね。仲間が  
心配だよ。すぐ横でユーリが逃げ出してるって言うのに。馬鹿み  
たい、馬鹿みたい、馬鹿みたい。

あの人達も、私達も、みんな、馬鹿だよ。

「ちび、走れ！」

言われるがままに走った。何も考えてなんかいなかった。ただ、  
その声に従った。

「ユーリ、あ、あの人！ 撃つたの？ 死んじゃったの？」

「足を狙った！ 致命傷にはならねーよ……とにかくあの小屋へ行  
くぞー！」

雨は、いよいよ本降りになってきた。

\*\*\*\*\*

小屋について、やっとユーリが発した言葉。

「ごめん」

その一言で私は理解した。

ユーリは、やっぱり軍に追われていた。悪いことをしていた。お  
じさんの、言うとおり。

「……説明、してほしい」

やっとでた私の言葉に、ユーリは強く頷いた。代わりに、私の身体から力が抜けたようだった。

「俺の父ちゃん、ちっちゃな工場の工場長してさ」

彼の泣きそうな声を私は一字一句漏らさずに聞いた。記憶しろ、全て。忘れてはいけない、この言葉を。脳がそう命令していた。

「リトル・ファクトリーって知ってる？」

「うん」

「だと思っ。名前の通りすっげーちっちゃい工場だったから。従業員なんて誰も居なくてさ、母ちゃん愛想尽かして実家に帰って。それでも父ちゃんよく分からないものばかり発明してさ」

「うん」

「でもいつも楽しそうで、ホントいつ見ても楽しそうで……」

ユーリは泣いていた。

私も泣いていた。

きっとこれが最後の話になるから。

私達は分かっていた。二人の世界が、もうすぐで終わるかもしれないことを。

さよならの鐘は、もう鳴り始めていたことを。

「ある日、父ちゃんの才能を認めてくれる機関が家に来て、給料も払うし、待遇もいいからその技術をうちで使わせてくれって言った」

「そう……その機関って？」

「レスティナ国軍直属兵器開発部」

「国軍……？」

ユーリは俯いて続けた。

「父ちゃん、やっと自分の才能が認められたって言うてさ、もの凄く嬉しそうだった。だから俺も、なんにも思わなかった。例えその発明品が戦争に使われてもいいやつて思えた。自分たちがそれで良ければいいやつて。最低だよな」

私はユーリの話を黙って訊いた。

そんなこと無いって言いたかった。

「それで、しばらくはなんにも無かった。実験と、組み立ての繰り返し。そこにはちゃんと父ちゃんの部下も居て、あの子の工場じや考えられなかった位に、立派な機械を使つて。でも一ヶ月くらい経つて、父ちゃんの兵器が実践で使われて、俺たちはやつと後悔した。お前も噂くらい聞いてるだろ……？ 西の大量殺戮」

「西の…セデナス王国で使われた、セディナ人虐殺の兵器……」

「そう、それ。それが父ちゃんの持てる技術を駆使して作られた『最高傑作』の兵器だよ」

ユーリは自嘲ともとれる笑みをこぼした。

「あとは大体予想つくと思うけど。父ちゃんはショックで自殺。作りかけの兵器を残して死んだ父ちゃんのせいで、父ちゃんの血を引いた俺が無理矢理作られる羽目になった。で、俺は逃げた」

私はまた泣きそうになった。本当に泣きたいのは、彼だということに。

彼が今まで隠してきたファイルの中身は、その兵器の設計図だった。

「ユーリは、人殺しにはならなかったんだね」

「うん」

「偉いよ。ユーリがこの設計図を持ち出したお陰で、何人もの人命が救われたんだ」

「……俺、間違つてなかったかなあ……？」

「ユーリは偉いよ。間違つてなんかないよ」

二人で、泣いた。

このまま二人でどこかへ逃げてしまえばいいのに。

「俺は、この設計図をお前に託すよ。俺が死んだらそれを燃やして欲しいんだ」

「なんで、死ぬの？」

「ちゃんと罪償いはしなきゃ。俺も、父ちゃんの手伝いをして、セディナ人を死なせてしまったから。止めないで欲しい」

私はまだ子供で。

ユーリもまだ子供で。

同じ年頃の子供で、戦争というものを知らずに生きている子もいるのに。

私たちは無力なほど子供で。

「わかった」

それでも私は、しっかりと頷いた。そうすることが、一番良いことだと思っただから。

「でも、きつと燃やさないよ。ユーリは紙切れを持ち出したただけだもん。死刑になんかならない」

「……そうだな」

「何年経つてもいいから、罪を償ったら、ここに帰ってきてね。ユーリが『ただいま』って言って、私が『おかえり』って言うんだ」

「約束？」

「約束」

私たちは静かに誓いを交わした。それが、私たちを繋ぐただ一つのものだと信じた。

後からやってきた軍人に連れていかれる間に、ユーリは叫んだ。「俺の本当の名前教えてやるよっ！ ユリウス・シユトラス！ 帰ってきたらそう呼んでくれよな！」

約束だから そういつて彼は小屋を去っていった。

狭いはずの小屋が、酷く、広く感じた。

そして、井で母に捨てられたあの頃の、倉田街の路地のように。

9 · The demon said · &quot; · Nothing is

それが私たちに出来る、最後の足掻きでした。



ジン・ソリティアの墓の前で、カノンはまだ濡れていた。

雨は段々と酷くなってくる。その中でただ一人、しゃがみこんだまま。

「雨、酷いなあ」

ぼつりと呟いた。

「なんでかなあ。ユーリをちゃんと思い出せないんだよ」

またぼつりと。

「おれって最低だね。ユーリと過ごした日々がとても大切だったことは分かるのに、どうしても思い出せないところが増えていくんだ。忘れるつもりなんて、全然無かったのにね」

雨が、地面を叩く。

「あなたには結局言わなかったけど、ユーリからの手紙、まだ持ってるんだ」

カノンの声が小さく震える。

「ユーリからの、最初で最後の手紙。捨てられないんだ」  
墓地は、静かだった。

ユーリが貧民街を去った次の日から、国軍の建物の門前で一日を過ごすのが私の日課となった。

すぐに帰ってこないのは分かり切っていた。

それでも、少しでも彼の近くにいたかった。たとえ分厚い壁が二人の間にあるとしても。

ユーリは絶対帰ってくる。疑うことすらしなかった。

「ユーリが……死刑判決になった……？」

もう何ヶ月もユーリが出てこないの、いつも門前で顔を合わせている憲兵にユーリの安否を聞いたら、そんな有り得ない答えが返ってきた。

「えっと、どういうこと？ 死刑、され、ちゃうってこと？ ユーリが？」

憲兵は何も言わなかった。

「ちよつと待つてよ、ユーリは書類盗んだだけだろ？ 私には、それがどんだけ大事か分かんないけど、死刑つて、そんな……なんで」  
憲兵は周りを注意深く見てから、私の目線にあわせるように腰を屈めた。

「ユリウス・シュトラスの罪はさして重いものでは無かった。本人も反省はしていたし、何より相手は子供だ。それも、身よりのない子供だ。冷徹とはいえ、それくらいの慈悲をかけてやることくらい軍にだって出来る。だが……」

声のトーンを落として、さらに小さい声で続けた。

「中には、権力を振りかざして事を大げさにする奴らもいる。例えば、軍人の銃を致命傷を避けて撃ったこと……」

まさか。

「撃たれたヤツつて、偉い人だったの……？」

憲兵は苦い顔をした。

「ああ。名家の御曹司だ。本当に、ユリウス少年は不幸としか言いようがない」

話し終わると、憲兵はすぐに立ち上がり元の体制に戻った。何事も無かったかのように。ずっとそこで、立っていたかのように。

ユーリが、汚い大人の所為で死ぬ。そんな馬鹿な話、あつてたまるか。

私は限界まで大きく息を吸った。そして、吐き出す。

「ユーリッ！ 居るんでしょ!？」

「な!」

街の人が歩みを止める。さっきの憲兵が私を押さえる。

「やめなさい!」

「五月蠅い五月蠅い！ ユーリ！ なんで!？ ねえ早く帰ってきてよ!」

「やめなさいと言っているだろう!」

憲兵が注意したその声よりも、もっとずっと大きな声で、私は思っていること全てを吐きだした。

「じゃあユーリを返してよ！ 返して！ お願いだから!」

「何あの子……」「何の騒ぎだ?」「ユーリ……どこかできいたよ  
うな」「あああれだ、今度死刑になる……」「そんなヤツがどうし  
たって?」「汚い子供だなあ」「貧民街出身じゃねえの?」「死刑  
囚の知り合いか……」「最近はあるのが多くて軍も大変だな」「ま  
ったく子供に悪影響だ」「あの子供も裁けば良いのになあ」「本当  
貧民街なんてどうせまともな人間いないんだから」「人間って言う  
より動物だな」「……ユーリって誰だ?」「ほら、昔軍にいたガキ」  
「兵器の設計図盗んだヤツよ」「自業自得だな」「憲兵さん、あんな  
汚い子撃ってしまえばいいのにねえ」「おいおいそれは不味いだ  
ろう」「どうして?」「どうせ貧民街からきたんだろうし……」「  
あんなの一人や二人ねえ」「本当、汚い子供ね」

五月蠅い、五月蠅いよ。思わず耳を塞いでしまいたくなるような、汚い言葉ばかり。

ユーリは悪くない。何も悪くない。

悪いのは、何も知らないお前等だ。汚いのは、お前等だ。

「軍は……！ 弱いヤツを、助けるんじゃないの！？ なあ！ なんとか言えよ！」

「……すまない」

謝って欲しくなんかなかった。ただ、ユーリを返して欲しかった。

それからもう、街には行かなかった。

ユーリはまだ死刑になってないらしく、毎日拾う新聞にはユーリのことを悪く書いたものしか無かった。

どの記事を見ても、ユーリが優しいことや、必死で生きてきたこと、辛いのを我慢してたことなんて書いていなかった。誰も、何も知らない癖に、知った風な顔をする。世界は汚い。

結局あれから、ユーリの死を知るのが怖くて、私は街に行けなくなつた。

「ユーリは、まだ元気かなあ……」

大切な人が死んでしまいかも知れないのに、街に出ていけない自分が殺したいほど憎かった。

大切な人の死を知るよりも、自分が独りだということを知ってしまった方が、途轍もなく恐ろしかった。

ユーリのように、私は他人のことまで考えてあげられない。自分が傷付くのが、一番怖い。

「ごめんなさい」

このボロボロな小屋は、一人では広すぎるんです。

「ごめんなさい、ごめんなさい。弱くて、ごめんなさい」

私がつと強かったなら、貴方の無実をあつ汚い街で叫び続けられたらどうか？

もう祈るしかなかった。祈ることしか出来なかった。どうか心優しい方が、彼を救ってくれますように、と。

風も、雲も、なんにも邪魔しない真っ青な青空。  
そんな綺麗な日に、ユーリは死んだ。

私にユーリの死を知らせにきたのは、門前に居た憲兵だった。

「彼から、ユリウスから手紙を預かってきた」

私は開けるのを戸惑った。見ない方がいい。

見てしまえば、ユーリの死を認めることになる。

「辛いと思うが、読んであげてくれないか？ 彼は、それを望んでいたんだ」

「うん……」

見なければ。読まなければ。もう逃げはいけないから。もう一度と、逃げてはいけないから。

彼の死と向き合わなければいけない。

白い封筒を開けると、小さな紙が一枚。

便せんには、お世辞にも綺麗とは言えない字で。

『ありがとう。』

俺の家族で居てくれて。

お前と一緒にいたことは絶対に忘れない。

ありがとう。』

ユーリの遺書は短いものだった。短すぎて、短すぎる所為で、最後に「また明日」って書いていても不思議じゃないくらいで。

なのに、どこかの奥が熱くて、何かがこみ上げてきて。ああこれが悲しいってことなんだって分かった。寂しいって事なんだ。

思い出した。これが、独りになるってことなんだ。

「君の声が聞こえたと、言っていた。自分はなんて幸せなんだ、と私に笑って言った」

憲兵はそれだけ言うтусぐに去っていった。

小屋には私と、手紙だけになった。

隣には、ユーリが居た気がする。

ありがとう。

私を家族だと言ってくれて。

ありがとう。

こんな弱くて、貴方の死から逃げようとした私を家族と呼んでくれて。

ありがとう。

貴方と過ごした日々は忘れない。

どうか、安らかに。

遠くから見るこの世界が、せめて貴方の眼にうつくしく映りますよ。

\*\*\*\*\*

墓石を打つ雨音が、徐々に少なくなっていく、そして消えた。

「これでおれの話は終わり」

カノンが十字架に向かって言った。

「雨、すっかりやんだね」

墓石が、反射してきらきら光った。

「あんたが止ませてくれたりして？」

ドロドロになった靴と服を見てカノンが笑った。びしょ濡れなのに、どこか心は晴れやかだった。

「ありがとう」

カノンはジンの墓にもたれ掛かって、上を向いた。

さっきの雨が嘘のように、綺麗に晴れている。あの日と、同じ様な蒼。

「ありがとう」

言葉が空に吸い込まれていく感覚。

「なんか、言い響きだなあ」

もう一度口を開く。出てくるのは感謝の言葉。

「ありがとう」

墓地にはおれだけ。  
隣には、師匠がいる気がした。



10・All people are solitary・Is it r

その空の向こうで、貴方が聞いてくれているきがした。

間奏曲 式曲目「不思議な兎の少年は」(前書き)

## 間奏曲 式曲目「不思議な兎の少年は」

ここは不思議の国。

ある一人の便利屋の少女カノンが木の下で昼寝をしていると、

目の前を兎の耳を生やした少年が、懐中時計を持って、それはそれは忙しそうに走って行きました。

ある、昼下がりの出来事でした。

「あー忙しい忙しい！ ってか本気で忙しい！ あーあ、ほんっと忙しいなあ、もう！」

文句をぼやきながら走ってくる兎耳の少年を、便利屋の少女はじっと見つめていました。

少女の名前はカノン・ソリティア。

肩につくつかつかないかの金髪で蒼い目、見掛けは十代中頃です。

今、もしも青い可愛らしいワンピースを着ていなかったら、少年に間違われるんじゃないかと言うくらい言葉遣いが悪い、男勝りな少女です。

そんなカノンの目の前を、兎耳の少年はさも忙しそうに走っていきます。

「いつそがしい、いつそがしい！」

昼寝の途中でしたが、好奇心に負けてカノンは立ち上がり、いまさっき忙しそうに走って行った兎少年（勝手にカノン命名。見た目通りです）の後を追う。

……と思いきや伸びをしました。

「ふあー。いい天気だなあ」

「って違うだろ！」

思わず戻ってきた兎少年。

「やあやあ、兎少年。おれになんか用？」

「いやいやいや何か用って！ っていうか兎少年って！ ネーミン

グセンス悪っ！ 俺にはちゃんとした名前があるの。ユリウスって  
いうんだけど、ユーリで良いよ！」

「へえ、お前ユーリって言うんだ。おれはカノン、カノン・ソリテ  
イア。ユーリはおれに依頼があつて戻ってきたんだろ？」

「依頼つて何？ ていうかさ、便利屋つて何？ 俺さつきから、お  
前の耳に入るようわざとらしく連呼してるとおり凄い忙しいんだけ  
ど」

やはり、あの「忙しい」という台詞はわざとだったようです。自  
分で早速ばらしました。

そんなことも気にせず、カノンの顔がパアツと輝きました。

「え、便利屋を知らない？ よし、じゃあ宣伝するから目の穴かっ  
ぽじつてよく聞けよ！」

「いや耳だから！ その前に兎だから、耳をかつぽじらなくたって  
十二分に聞こえるから！」

カノンは息を思いつきり吸うと、一気に

「……お出かけ最中に気になった火の元の確認から！

最近女の子にモテ始めたキザなライバルの！ 人には言えない弱  
み入手まで！

どんな内容でもこなす街はずれの便利屋！ です！」

それはもう、一息ではき出しました。

そんな怪しげな宣伝文句に、やはり突っ込まざるを得ないユーリ。  
「え、最後の方ちよつとおかしくないか？ 弱み入手って……」

「なんでもするのが便利屋の専売特許ですから。で、なんか頼みた  
いことある？」

ユーリは大きな耳をピンとのばして怒りました。

「いやいやいや俺は依頼とかをしにきたんじゃないやなくて、この忙し  
い中、お前をつっこみにわざわざ戻ってきたんだよ！」

「おれの行動のどこにつっこむ隙があるんだよ」

カノンはその身長差を利用して、上から睨みました。態度のでか  
さと、身長だけは一品のようです。

「どこつて、あそこは伸びをする所じゃなくつて俺を追いかける所だろ！ 兎の耳がある子供だぜ、気になるじゃん！」

「いや、人の趣味まで気になりませんし」

「趣味じゃねーよ！ 取りあえず、追いかけてこいよ！」

カノン是不満そうにユーリに反論しました。

「追いかけるより、追いかけられる恋の方が燃える……」

「えー、そうか？ 俺はやっぱ好きな子に気持ち伝えるためには追いかける恋のほうが……って違う！ その『追いかける』じゃない！」

素敵なノリツッコミでした。

「うーん……やっぱ『幸せ』って言うのは、追いかければ追いかけるほど遠のいてゆくもんだよ。そこで、ふと立ち止まってみれば『幸せ』なんて案外近くにあるもんだよ」

「そうそう。何気ない日常こそが掛け替えのない宝物……ってお前の幸福論なんか誰も聞いてない！」

素晴らしいのりとつつこみでした。しかしこれでは埒があきません。

このままでは永遠にくだらない会話が続いてしまう！

そう思ったユーリは、強引に話を進めて行くことにしました。

「もう追いかけるどうのこうのは良いよ。俺は忙しくて走っていく。

お前は気になって追いかけてくる。これもう決定事項だかな！」

「異議あり！」

「はい、どござ」

「面倒くさいので追いかけたくありません！」

「はい却下！ お前が動かない限りこのお話は進まないの！ 決まってるの！」

「えー、なんでー？ 誰がそんなこと決めただよ。何月何日地球

が何回まわった日？」

「屁理屈と駄々を一緒にこねるな！ もうこれは運命ってやつなの！」

ユーリがそういつた瞬間、頬に強い衝撃が走りました。

「この大馬鹿野郎！」

ビンタです。どんなに自分よりも小さくても、容赦なくビンタです。大人げないです。

「はあ！？ なにがだよ！ 俺のどこが馬鹿なんだよ！」

カノンに殴られた頬をさすって、ユーリが言い返しました。

「運命って言うのは、自分たちの手で切り開いていくもんじゃないのかよ……！」

熱弁です。白々しすぎる、熱弁です。

「……！ 自分たちの……手で……?!」

引っかかっています。思いつきり引っかかっています。

「そうさ……そうやって、新しい物語を完成させていくんじゃないか！」

「カ、カノン！」

がしっ。そんな音が付くくらいに抱き合う二人。どうやら、これが運命が変わる瞬間のようです。

と、いうわけで。

すっかり騙された兔少年ユーリはカノンと一緒に日が暮れるまでたくさん遊んで、お話しして、この便利屋のカノンというちょっと不思議な少女と友達になることが出来ましたとき。

まあそこそこめでたしめでたし。

「いや何がどうめでたし!？」

がばつ、と毛布ごと飛び上がったカノンはそのまま床に転げ落ち、小指を本棚の角にぶつけてしまいました。

声になりきれなかった声を出して、すぐに目を開けます。

そこには積み重ねた本があります。そういえば昨日、イギリスの有名な作家の本を古書店で大量に購入したのでした。

「……夢か。どうりで変だと思った」

そう呟いて二度寝をしようとベッドに戻ると、ルイス・キャロルの有名な本が枕元に置かれていました。

間奏曲 式曲目「不思議な兎の少年は」(後書き)

おやすみなさい。



## 11. ある日の記録

【八月二十日 晴れ】

昨日の雨がすっかり止んで、今日はすごく良い天気でした。

軍から電話があつて、軍に行くのをすっかり忘れていたことに気が付きました。

ユーリさんにももの凄く怒られました。最悪でした。  
でも天気が良かったからどうでもいいです。

\*\*\*\*\*

賑わう城下町から離れた、小さな丘の上に小さな家。そこから鳴り響く、電話のベルの音。

カノンは洗濯物を干している最中だった。

「はいはい……っと」

慌てて家の中へ入り、電話の音が切れる一歩手前で受話器を上げた。間一髪だ。

「もっしもし。金さえ積みめば何でもする便利屋ですけど、何かご用ですか？」

「……………」

一度受話器から耳を離して、カノンの頭の上に疑問符が飛ぶ。

「あのー、もしもし？」

『……にが……』

僅かに男と思われる声がした。さらにカノンの周りには疑問符。  
「にがい？」

『なーにが、便利屋ですけど、だ！』

大きな声を聞いて、カノンが両手をポンと鳴らした。

「ユーリさんじゃん！ おっはよー」

『おっはよー……じゃなくて！』

バーガンディとカノンに呼ばれた青年の声が大きすぎるのか、カノンは耳から受話器を少し離れた。それでも耳が痛かったらしく、しかめっ面をした。

「もう朝っぱらからなんなんだよ？ どうせそれ、軍の回線使ってるんだろ。さぼんなよコラ、この給料泥棒が」

『さぼ……！ 仕事だ仕事！ お前があれから一週間経っても来ないから！』

「あれから？」

カノンは一週間前、エリザ・マッキンリーから依頼を受ける前に話した電話の内容を思い出していた。一字一句間違わず。

\*

「はい、こちら犬の散歩から、気になるあの人の尾行までどんな内容でもこなす、街外れの便利屋です」

『こちらはソナチネ地区警察軍のマースだ。街外れのカノン・ソリティアか？』

「はい？ ええ、おれの事ですけど。軍がなんの様ですか？」

『お前、またなんかしでかしただろう。エルト財閥の遺産相続の…』

……』

「だーから、その件に関しては、おれは知りませんってば！　っていうかユーリさん、ちゃんと仕事してんのか？」

『ユーリ・バーガンディ少尉はいま先日溜め込んでいた書類を……って、あいつは今関係無いだろう！』

「うわ、怒らないでくださいよ……　　つたく、マーサル將軍って暇人なわけ？」

『何か言ったか？』

「いーえ、おれは別に何も言ってますんよ」

『……まあいい、話を戻すぞ。エルト家は軍の上層部とも深く関わっている家だ。裏町業者が関係者を誑かしているかもしれない、と上が五月蠅い。関わっていようが無かるうが、とにかく話が先だ。』

『明日軍に來い』

「はあ！？　なんでそうなんだよ！　軍の手柄を横取りしてどうなるんだよ！」

『別に横取りしたとは言っていない。話が聞きたいだけだ。いらん疑いを掛けられるのも嫌だろう』

「……あーもう分かりましたよ、行けば良いんですよ、行けば？」

『最初からそう言えば良いんだ。では明日な』

「はい明日ね、はいはい分かりました。じゃ。あ、ユーリさんに仕事しろよって言っておいてくださいね」

\*

両手を合わせて、ぼんと音を鳴らすと同時にすっきりした声を発する。

「ああ、あの時の！」

『思い出すの遅くない！？』

カノンは受話器を持ち直して笑った。

「ごめんごめん、すっかり忘れてた！」

『ああもう！ 思い出したんならさっさとこっちに来い！ また俺が怒られるだろう！』

「そう怒りすぎると禿げるよー？」

カノンはバーガンディ家の家長を思い出した。この人の祖父は確か、髪の毛が無かった筈だ。

『……俺は絶対に禿げないからな！』

きつと相手も同じ人物を思い出していたのだろう。カノンは苦笑した。

「で。おれはいつ、そっちに行けば良いわけ？」

『今すぐに来い』

「明日じゃなくて？」

受話器の向こうでぷっちんと切れた音がした。気がする。

『明日なんかにしたら、お前また忘れるだろうがー！』

「やだなあ。おれの記憶力の素晴らしさと凄さはあんたが一番知ってるじゃん。ね、ユーリ・バーガンディ少尉」

『素晴らしさと凄さだけじゃなくて都合の良さも知ってる！ お前思い出そうとしたことなら完璧に思い出せるけど、思い出そうと思わなかったらそれはもう完璧に忘れてるだろう！ 昔からよくお前に痛い目に遭わされたからな！ 確かあれは神経衰弱が得意だって言ったおれに「じゃあ今月のお互いの給料を賭けて神経衰弱ね。あ、ハンデとしておれからカードをめくらせてくれない？」って言ったときだ！ お前は一回目の、』

「……ぐー……」

『って、寝るなあ！』

これだけ長電話をしておいて、ユーリ・バーガンディはまだ元気なようだった。流石軍人。鍛えられている。

「違いますよー、寝てませんよー、ちよっと目を瞑っていただけですよー」

『語尾を上げ調子で伸ばすな、語尾を。とにかくだ。絶対に今すぐ

来い！この電話を切ったら直ぐだ！』

「えー」

『えー、じゃない！ そうじゃないと、俺また怒られるだろう！』

「ユーリ・バーガンディ、お前はろくに雑用も出来ないのか？

たった一人の一般市民をここへ連れてこれば良いだけだろう。違うか？

それともあれか？ お前はあの嘘くさくてどうにも信用ならないあの便利屋と何か裏で通じていたりするの？ まあ私には関係の無いことだがな。しかしだな、極力裏町との接点は作らない方が身のためだぞ。偉大なバーガンディ家の名に汚名を被せることになるかもしれないからな」ってな！』

「うわー、ものごつつそっくり！ 物真似殿堂入り決定！ それってマーサル將軍の真似だよな？」

『それは企業秘密。俺は偉大なるマーサル將軍にお仕えしている身でありますから……とまあ冗談はおいといて。ってな訳だから、忘れんなよ』

カノンが外の方に目をやると、さっきよりずっと晴れていた。この様子だと、億が一にも雨が降ることは無いだろう。

「ちゃんと行くって。師匠にも『嘘は吐いてもいいけど、約束だけはちゃんと守れよ』って言われたしな。嘘は吐いていいのかよって子供心に思ったことの方が覚えてんだけど」

『あはははっ！ ジンさんらしいなあ。あの人、生きてる内に約束を破ったことなんか無かつたんだらうなあ』

「さもありがん」

『じゃ、またな』

「じゃーね、ユーリさん」

同時に電話が切れる。虚しい音が耳元で鳴り響くので、すぐに受話器を元の位置へと戻した。電話は、話した後には襲ってくる言いよのない孤独感が嫌いだっただ。

カノンは首を左右に動かして、溜息にも似た深呼吸をする。それ

は溜息だったのかもしれない。

「はあ……面倒くさいなあー」

カノンは干しかけの洗濯物を一気に物干しへと移して、出かける支度をした。

「名前が似てるから、なんか名前で呼ぶのが嫌なんだよなー、ユーリさん」

街の方へ走っていくカノンの頭の中では、かつての家族が思い出されていた。

ユリウス・シュトラス。顔はもう覚えていないけど。

\*\*\*\*\*

### 【八月二十日 晴れ 追記】

軍へ行ったらマーサル將軍に会いました。

なんか舌打ちされたから、取りあえず笑顔で挨拶しておきました。社交辞令、社交辞令。

あの人が裏町を嫌っているのは師匠が生きていた頃から重々承知の上なのでへっちらです。

帰りに、ユーリさんにケーキを奢らせました。満足です。

今度、師匠の墓参りに行くそうです。

明日はまた雨かもしれません。



11・ある日の記録（後書き）

同じ名前なのに、違う人。  
神様、これって酷くない？



## 12・独りになった日の祈り言

父親は強盗犯。

母親は娼婦。

僕は貧民街にゴミのように捨てられた。

父親は殺人を犯して死刑。

母親は他の男に刺されて死んだ。

僕は盗みを覚えて、ただ生きていた。

便利屋のあなたに会うまで、僕はずっと空っぽだった。

生きる理由が無くて、存在する意味も無くて、

答えのない世界にいた。

あなたに会えたら、今までのことは全部忘れようと思った。

父親のこと、母親のこと。

ゼロからやり直そう、そう思った。

そんなのただの言い訳。

ごめんなさい。すべてから目を逸らして。

\*

父さんが死刑になったとき、母さんは違う男の隣にいた。

僕はまだ小さかったけど、なんとなく両親が悪いことをしていた

のは知っていたし、きつと望まれて生まれてきたんじゃないだって、そんな風に思っていた。

だから僕を繋ぐ人　父さんが捕まったときから、いつ捨てられるのか、と指を折って数えた。

僕を捨てるとき、母さんは僕に一言いった。

「あんたはあたしとは全く関係ないんだからね。勝手に生きなさい」泣きたかったけど、泣かなかった。

あんな奴を母親だと思った自分が悔しかった。分かったよ、生きてやるよ。生き延びてやる。

狭く感じた貧民街は、僕には広すぎた。

あれから何ヶ月経ったのか分からない。

相変わらず貧民街は薄汚くて、怖かった。

もう生きるのがしんどくなって、でも子供の僕には生きるのをやめるなんて、そんな選択肢を持っていなかった。

ある日、僕を孫の様に可愛がってくれているおじいさんが倒れたと聞いて、盗んだパンを持っていった。

パンはちょうど二つ。晩ご飯にしようと思っていたけど、そんなのどうでも良かった。

おじいさんはいい人だったから、この街のまとめ役みたいな人だった。

「おじいさん、倒れたって聞いたけど大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。ちょっと疲れたただだよ……×××は優しいね」

おじいさんの家は窓ガラスが割れて、荒れ果てた小さな小屋だけど、どこか暖かみのある家だった。

「パンしかないんだけど、食べれる？」

「ありがとう。最近は何も口にしていなくてなあ」

「だめだよ。身体に悪い」

「だけど盗みも悪いだろう?」

「それは時と場合によるんだって言ったた」

「パルコがか?」

「パルコさんがだよ」

僕がそういうと、おじいさんは大きな溜息を吐いた。やっぱりかと苦笑いをした。僕はそうやってくしゃくしゃになるおじいさんの笑顔が好きだった。

「あいつの話を鵜呑みにしちゃいかん。あいつの真似なんかしちゃいかんぞ」

「うん、わかってるよ」

パンを半分くらい食べたころ、おじいさんがポツリと言った。

おじいさんのパンは一つも手を付けられていなかった。

「この貧民街にいた娘が、軍人に拾われていったんだ。×××と同じくらいの年だったなあ。その娘も母親に捨てられたんだ」

おじいさんは、ずっと昔からここにいた。だから、よく貧民街にいた人達の話をしてくれた。

「その子はどうなったの?」

僕はおじいさんの方へ近づいて尋ねる。

「噂じゃあ、拾ってくれた軍人と一緒に『便利屋』の店を営んでいるらしい」

おじいさんは僕の方を見ずに、どこか遠くを見つめて言った。おじいさんが見つめる方向に、その子がいるのかもしれない。

「『べんりや』? それってどんなお店なの?」

目を合わせてくれないのは知っていたけど、おじいさんの顔をじつと見た。

「なんでもしてくれるのさ、なんでもな」

「なんでも?」

「そうさ」

なんでも。その響きに魅力を感じた。

「ただしお金次第らしい」

「やっぱり、タダじゃないか。」

おじいさんはやっと僕と目を合わせた。僕はポケットに手を突っ込んで言った。

「じゃあ無理だよ。お金なんて持ってないもん」

「僕もさ。一文無しだ」

「お揃いだね」

「なかなか素敵なお揃いだな」

おじいさんは上手にウィンクをする。素敵なおじいさんだった。

「その娘と同じくらいの年で、ユリウスという子がいてな」

「うん」

今日のおじいさんは、昔の話ばかりしたがる。パンには手を付けていない。

「その子の父親は軍で働いていて、至上最悪の兵器を造った、今となつては犯罪者だった」

「最悪の兵器つて、シュトラス博士の？」

「よく知ってるな。偉い偉い。じゃあユリウスが捕まったのも知っているか？」

僕は出来る限り思い出す。

街ですごく噂になったことがあったと、両親から聞いた気がする。僕はまだ生まれていなかったから。

「うん、知ってる。共犯者の息子が設計図を持ち出して売ろうとしていたつて。それが見つかつて、逃走中に銃で軍人に致命傷を負わせたつて聞いたよ」

それを聞いておじいさんは悲しそうに顔を歪ませた。

「本当はな、もう関係のない人が殺されないように設計図を隠して、一緒にいた娘を逃がそうとして銃で致命傷を避けて撃つたんだ」

「全然、違うね……」

くしゃくしゃと僕の頭を撫でて言う。

「権力を持つ人間は自分の都合のいいように事実を曲げていくんだ。」

だから人の話をそっくりそのまま信じ込んではいかん。自分の思っていることだけが頼りなんだからな。もしこの街から出ていくことがあったら、自分だけは信じて歩きなさい」

「うん」

「そしていつか、いつでもいい。必ず幸せになりなさい。お前にはその権利がある」

「……おじいさん？」

「約束だよ」

「うん……？」

お爺さんの手から、力が抜けていくのが分かった。

そこからは、世界がゆっくりと動いて、無音だった。

おじいさんが床へ倒れて、僕が叫んだ。何を叫んだかなんて分からないくらい、とにかく叫んだ。

おじいさんは笑っていた。

静かに、静かに、時間が流れる。

気づいたら真っ暗で、夜になっていた。

おじいさんが手を付けなかったパンは、食べてみるとしょっぱくて、暖かみがあったはずのこの小屋が、冷たく感じた。

お葬式は、パルコさんと僕の二人だけで、ひっそりとした。

いまこの世界のどこかに居る便利屋さん。

お金なら幾らでも払います。

この内蔵を売り、眼を売り、心臓も売ります。

だから、この人を生き返らせてください。

幾らでも払います、だから。



12・独りになった日の祈り言（後書き）

悲しみを無くしてください。

悲しみの記憶を取り除いてください。

悲しみの感情を外してください。

### 13・あの日と同じことを繰り返す

何故かは分からない。

でも、誰かがおれを呼んでいた。

誰だかは分からない。

でも、確かにおれを呼んでいた。

嫌な思い出しかないけど、

行かなきゃいけない気がした。

別に特別な用もないけど、

行かなきゃいけない気がした。

雨が降っていたから、あの日を思い出した。

『傘持っていないのか？』

そんな風に声を掛けられた日のことを。

師匠も、こんな気持ちだったのかな。

『そうだな。お前の名前はカノン、カノン・ソリティアだ』

お前も、あんな気持ちだったの？シオン。

あの子があまりにも昔のおれとそっくりだったから、教えてあげたかった。

お前は一人じゃないんだよ、と。

\*\*\*\*\*



その日は、予想通り雨だった。最悪だ。洗濯物は昨日にまとめてしたから良いけども。お客さんは来ないし、今月のお金やばいし。今日のお昼、ベーコンエッグにしようと思つて張り切つたのに、ベーコンエッグの卵すら無いし。

今週の牡牛座は最悪らしい。お昼ご飯、ユーリさんにでもたかるか？

いやいやいや、昨日にケーキ奢らせたばかりだしなあ。

こんな雨の日は、家でじっとしていると気が滅入るから、取りあえず午後は散歩しようと思いつつ、ベーコンだけを焦がした。

『もっしもし。こちらソナチネ地方軍部直屬城下町警察軍東工リア担当のユーリ・バーガンディでございますよ。そちらは便利屋店主代理カノン・ソリティアで間違いありませんかー？』

「いえ全然全くこれ以上ないって程思いつきり違いますよ。カノン？ 誰ですかそれ。食べれるんですか？」

『え、新手のギャグ？ ちょっと面白かった』

「全然面白くないっつーの、この馬鹿野郎」

またこの人は仕事をサボっているのか、と本気で情けなくなつたその日の午後。

散歩に行く寸前に、ユーリさんから電話がかかってきた。決して何かの約束を忘れていたわけじゃない。ちょっと焦つたが。どうやらユーリさんの暇つぶしの為だけに電話は掛けられてきたらしい。

「あんたは真面目に仕事しようって気になんないの？」

『なるときはなる！ ならないときはならない！ ただそれだけだ』

「それだけだ、じゃねええええ！ 明らかに格好悪いことなのに何故に自信満々!？」

『あ、でも心配すんなって。今日は見回りついでに、外からかけてるんだよ。だから今からこっちにきて一緒に暇潰すの手伝ってくれてもいいんだぞ!』

「そんなこと言ってるじゃねええええええ!」

給料泥棒は、そんなことお構いなしに一方的に喋ってきた。

おれはそれに対して相槌を打つぐらいだった。

『そついやあさ、話変わるけど今度あそこの貧民街の半分を取り壊して、城下町歴史博物館を造るんだとよ』

雨が降っていると、誰でも気分が落ち込むのか、心なしかユーリさんの機嫌と声は低めだった。

「へー。あんな狭い土地に博物館をね……」

『いやいや博物館つて言ってもお前、ちっさい建物らしいぜ？ セピア爺さんの店みたいな』

「あー、あれだろ？ 要は貧民街の住人を追い出すための口実つてヤツ?」

『まあそついうことだわな。あーあ、それこそ税金の無駄遣いっつかない。そんな無意味な物造るくらいなら、俺の給料上げて欲しいよ』

「全くだよ。おれのなけなしのお金で払ってる税金を……」

『いやいやいやお前、巧いこと言って税金払ってないじゃん。納めてないじゃん。国に納めるモノの全てから逃げてるじゃん』

「師匠も払ってなかった。巧いこと言って」

『だろうな。ていうか良いのか、ジンさん。その当時軍人だろう』

「バレなきゃいいって言ってたような。で、どの辺に建てる予定なの？ そのちっさい博物館」

『おお。ちよつと待てよ、地図見るから』

「うっわ暇人、この給料泥棒」

「きーこーえーなーいー。えーっと、確か街から入って直ぐの所から……んー。ここまで行つてー、向こうが……あ、そうそう……三本目の銀杏の木までだな。うん」

「三本目の木……三本目？」

「え、何？　なんかあんの、そこ？」

「いや別に……いつから街の取り壊しが始まんのか？」

「いつつても大分先の話だぜ。大体七、八月ぐらいだろ」

「七、八月？　もしかして来年の話かよ。大分先だなー」

「かなりの最新情報だからなー。常に時代の最先端を走る男ユリリン」の異名も伊達じゃないぜ！」

「あの……ごめん、それ自分で言つてて恥ずかしくない？　とかどうなんだその異名のネーミングセンス。おれなら死にたくなるな」

「文句ならメルニカさんに言つてくれ！　俺も恥ずかしさで結構死ぬる。そいじゃ、仕事もあるし。またな」

「そいじゃ」

ちん、と受話器を置いて溜息を吐く。

三本目の銀杏の木。忘れるはずもないあの場所。

取り壊し予定には、おれとユリウスが住んでいたあの小屋も入っていた。

\*\*\*\*\*

「ここへ来るのも久し振りだな……」  
予定通り、おれは散歩に来ていた。

雨に濡れない様に傘を気をつけて差しながら、ゆっくり、ゆっくり歩く。

ユーリさんが言っていた、取り壊しの件が気になっているのもあった。

でもそれ以上に、誰かが。何かが。よく分からないけど、おれを待っているような気がしたから、この街に来た。

相変わらずその街は陰気臭くて、狭くて、暗かった。

雨が降っているせいも、昔、自分がここに居た時よりもずっと闇に包まれている気がする。

無音で、無色。何も、無い。

「はあ……なんでわざわざこんな所に散歩に来たんだろう」  
周りを見渡す。

しばらく歩いて、銀杏が見えて来た。

ユーリさんが言っていた三本目の銀杏の木の前立って、また見渡す。

そして、

見つけた。

小さくてボロボロで壊れそうで窓は割れていて。元は知らない誰かさんの家。おれが住んでいて。いつも一緒に居た。誰が？ ユーリが。ユリウスが居た。

それから？ 死んだ。死んだ死んだ死んだ。もういない。どこにもいない。どこを探しても見つからない。無くした？ 失くした。無くしてしまった。

小さくてボロボロで壊れそうで窓は割れていて。元は知らない誰かさんの家。おれが住んでいて。いつも一緒に居た。誰が？ ユーリが。ユリウスが居た。居たんだ。

まだ幼くて、幸せは必ず見つかると思っていたあの頃に。  
独りきりの怖さを知らなかったあの頃に。  
孤独を埋めるかのように、あの時、二人が居たんだ。  
今はもう誰も、住んでいない。

いるはずがないのに。

敢えて言うのなら既視感。

ユリウスが居なくなつて、独りのおね。

そっくりのあの子は誰だ？

あの小屋の前で雨に濡れて、両足を抱え込んで、眼は何も映して  
いない。師匠に拾われる前のおね。

そしておねはあの人同じことを繰り返す。

「お前、傘持つてないの？」

ねえ、お前も独りなの？

13・あの日と同じことを繰り返す（後書き）

その子の眼に、おれが映った。

## 14 世界が染まった日

僕は独りになった。

怖くて、淋しくて、辛かった。

おじいさんが死んでから一日しかたっていないのに、もう苦しかった。母さんに捨てられた時くらいの哀しみだった。

それでも降り頻る雨は無慈悲に僕を打つ。

おじいさんが住んでいた小さくてぼろぼろの小屋は、僕一人では広すぎて不安に駆られるから、あれからずっと外にいた。

ただただ両足を抱え込み、何も見ずに何も聞かずに、小屋の前に一人。そこで僕は誰かを待っていて。誰かが助けてくれるのを待っていて。

そして、あなたに出会った。

「お前、傘持って無いの？」

空を見上げると、金色の髪に空よりも蒼い眼のあなたが居た。

「だ……れ、です、か？」

途切れ途切れにそう言うと、その人は笑って、よく見ると少し哀しそうで。

「おれはカノン・ソリティア」

「……カノン？」

「そ。変わった名前だろ？ お前の名前は？」

「……無い、です」

嘘。本当は、あったよ。

ちゃんとあったけど、もうその名前を呼んでくれる人はどこにも居ない。

「無いの？」

「無い」

「……そっか」

「あなたが」

僕と視線を合わせるように、その人は屈む。僕はその眼をじっと見て。

「ん？」

「あなたが、便利屋の、カノン・ソリティア？」

カノンは、笑いながら頷いた。

死ぬ前におじいさんが言っていた人だ。一緒にいた子が死んで、軍人に拾われた、今は便利屋を営んでいる小さな少女。

僕はずっと言おうと思っていたことを言う。

「何でもしてくれるんですか？」

「まあな」

「じゃあ、」

この眼球でも内蔵でも何でも売り払ってくれていい。

「おじいさんを、生き返らせて下さい」

カノンは、すごく複雑に笑って

「それは、出来ないよ。無理なんだ」

僕を諭す。

もう出し尽くして枯れ果てたと思つてた涙を僕は思いつきり流して、なんでこんなにも悲しいのか分からなくて、なんで、なんでなんでなんで？

そうだ、僕は助けて欲しくてだからあなたを待っていて、それが最後の希望で。

心のどこかでそれは無理だと知っていた癖に、未練がましく祈つてて、もしかしたら、もしかしたら奇跡が起きるかもだなんて、甘い夢を僕は。

「ごめんな」

あなたが悪い訳じゃ無いのに、静かにそう言った。

「お前は独りなの？」



涙を拭きながら頷いた。

「おじいさんが、家族だったんだ……血は繋がっていなかったけど、家族だったんだ」

涙腺がまた緩んだのか、じわりと涙が滲む。折角会えたのに、あなたの表情がぼやけて見えない。

カノンさんが僕に傘を差してくれているお陰で、身体だけは濡れなかった。

しとしと。ぽたぽた。

僕に傘を差しているせいで、雨に濡れているあなたは僕の涙を拭いながら言っつ。

「おれの家に来る？」

「……え？」

「つて言っても、おれを拾ってくれた人の家なんだけど。部屋はあるし、ちよつと小さいけど、二人で住むなら丁度いい感じだし」

「な、何を言っつて……」

そして、あなたは笑う。笑って僕に言った。

僕が一番欲しくて堪らなかつた言葉を。

「お前は独りなんかじゃないよ。今日からおれがお前の家族だ」

雨が止んだ。僕の雨が止んだ。ずっと降り続けていて、止むことなくてもう無いのだと思っつていた僕の雨が、ぴたりと。

暗くて狭くて薄汚くて心細くて怖くて哀しかった世界が、あなたに染まつた。

14・世界が染まった日（後書き）

白黒の世界が、色付いた。  
その言葉で。

## 15・独りが二人になる日

父親は強盗犯。

母親は娼婦。

僕は貧民街にごみのように捨てられた。

父親は殺人を犯して死刑。

母親は他の男に刺されて死んだ。

僕は盗みを覚えて、ただ生きていた。

便利屋のあなたに会うまで、僕はずっと空っぽだった。

生きる理由が無くて、存在する意味も無くて、

答えのない世界にいた。

あなたに会えたら、今までのことは全部忘れようと思った。

父親のこと、母親のこと。

ゼロからやり直そう、そう思った。

そんなのただの言い訳。

ごめんなさい。絶望から目を逸らして。

ごめんなさい。希望を探そうとしないで。

ごめんなさい。名前は無いと、嘘を吐いて。

これからはあなたと

笑って、

泣いて、

怒って、

悲しんで、

喜んで、

楽しんで、

何かを見て、

何かを聞いて、  
何かを話して、  
色んなことをする。たくさんする。  
そして。  
何をしても、  
最後には笑いたい。  
そんな当たり前のことがしたいのです。

\*\*\*\*\*

「名前が無いのは不便だなー。どうしようか」  
カノンさんは僕と並んで、手を繋いだ。手を繋ぐのはなんだか気が引けた。

汚いとか、さわるなって言われるかもって、凄く怖かった。いままでがそうだったから。

なのにカノンさんは何も言わずに、何も戸惑わずに。それがごく普通のことのように、当たり前のことのように、僕の手をとった。

「ちょっと話聞いている？ 何て呼べばいい？」

「えっと……カノンさんが、呼びやすいので良いです」

「そっか。うーむ……名前ねえ。師匠もかなり悩んでたなあ」

「しししょっ？」

「そ。おれをあの街から拾ってくれて、連れ出してくれて、名前付

けてくれて、育ててくれて、家事やらされて、軍へのパシリに使われて、金儲けに使われて、夜遊びで仕事サボっちゃった口実に使われて、本気勝負の賭けやらされて、挙げ句の果てになけなしのお金少しずつ貯めて頑張ってた貯金を一夜にして使っちゃって、もう本当なんでこんな人に拾われちゃったんだよ畜生って一ヶ月の間に思わせてくれた素敵な人だよ」

怒っているのに、少し楽しそうに言うその顔は、とてもきれいで。「でも、ま。いい人だったよ。幸せだった」

そう言ったカノンさんの笑顔を、僕はなんとなく好きだなあと思っただ。なんとなく。

「もうすぐで、貧民街を出るよ。ここともさよならだ」

カノンさんがスカートを翻して反対方向を向いた。

目に飛び込んできた町の暗闇。孤独を抱えた小道。絶望しかかった場所。

二人で歩いた道は、案外長い。

「さよなら？」

「そう、お別れ。たぶんもう二度と来ないと思うから、どっか寄っておきたい場所とかある？」

一瞬、本当に一瞬だけ、母さんに捨てられたあの通り道を思い出した。

なんで思い出したのか全然分からなかった。僕には未練なんて、無い。

もういい。いいんだ。

僕はこの人に付いていく。この人の家族なんだ。ゼロからやり直すんだ。

もうこんな街とは、過去とはさよならするんだ。

「無いです。カノンさんの行くところに付いていくだけです」  
きっぱり言い切ると、カノンさんは笑顔で頷いた。

「ん、そっか。じゃあおれの家直行な」

カノンさんに付いて歩いていくと、明るい場所へと出た。城下町だ。

なんて、明るくて賑やかで華やかな、街。

あそこは大違いだ。あそこは、全然。

「ちよつと待った!」

「わつ、な……なんですか?」

繋いでいた手のせいで、いきなり止まったカノンさんに引つ張られ、僕は危うく転けそうになった。というかもう半分転けていた。だけど、ちゃんとカノンさんが受け止めてくれた。

「お前さあ」

「ずい、と顔を近づけられる。正直、怖い。」

「おれのこと、何て呼んだ?」

「え? あ、カノンさんって、呼んでました……」

「さん付けはいいよ。あ、敬語もいいから。おれとお前は家族なんだろ?」

「でも……」

敬語をやめるのは簡単だ。おじいさんの時も、すぐに馴染んだ。でもいきなり呼び捨ては恥ずかしい。

なんで恥ずかしいんだって言われたら、上手く説明できないけど。

「ほら、カノンって呼んでみ?」

「でも……カノンさんは年上だし……」

いつまで経っても呼ばない僕に怒ることも無く、カノンさんは悩み出した。

「うーん。いきなりは無理かあ。おれも最初は戸惑ったしな。いや、案外すんなりいったか? でも『さん』付けて他人行儀な感じだしなあ……あつ、そーだ!」

「はい?」

カノンさんはにんまりと笑った。

「お前の名前思いついた。ってか思い出したって言うのかな?」

「思い出した?」

それはちょっとおかしい。だって僕とカノンさんは、一度も会ったことが無いんだから。

「そう。小さい頃、弟がすごい欲しかったんだよ、おれ。んで師匠に何回も欲しいってねだった。それで師匠が、もし弟が出来たらなんて名前付けるんだって聞かれたんだよ」

「どんな名前？」

聞きたい。貴女が欲しかった、弟の名前。

「シオン」

「だから、今日からお前はシオン・ソリティア。おれの家族で、おれの弟」

素敵だと思った。名前だけじゃない。この人の弟になれることとか。

「あ、ありがとうございます……」

「違うよ」

カノンさんに言われて、僕は笑った。そうだ。僕も呼び方が分かった。

「ありがとうございます……姉さん」

カノン・ソリティア。今日からあなたは僕の家族で、僕の姉さん。それから、歩く。二人で、手を繋いで。

ドラマチックな物語のように、雨は止まなかったし、虹も出なかったけど、

僕の、新しい物語がはじまるんだ。

「帰ろっか、シオン」

「うん」

ゼロから。

\*\*\*\*\*

生きる理由を与えてくれた。

僕が存在する意味を教えてください。

名前を付けて貰った。

僕に幸せになる希望を教えてください。

答えの無い世界から連れ出してください。

あなたに会えて本当に良かった。

今までのことは忘れよう。

父親のこと、母親のこと。

僕はゼロからやり直すんだ。

全部あなたのお陰。

ありがとう。希望を差し伸べてくれて。

これからは貴女と

笑って、

泣いて、

怒って、

悲しんで、

喜んで、



楽しんで、  
何かを見て、  
何かを聞いて、  
何かを話して、  
何をして、  
最後には笑う。  
そんな当たり前のことをするんだ。

15・独りが二人になる日（後書き）

ありきたりの幸せがいい。  
ゼロから始まる、僕の歌。

間奏曲 参曲目「君の名を呼べば」

なあカノン。

お前はいま、幸せか？

カノン。

お前を拾ったのが九年前だから、今年でお前は十六歳か。

俺がお前の傍から居なくなってもう二年も経つんだな。

おれはあの時からずっとそのままだから、まだ二十代なんだぜ。

羨ましいだろ？ 永遠の二十代だなんて、夢のようじゃないか。

そつえば、もう夜中に泣きながら墓地に来ることも無くなったな。

お前はちゃんと成長してるんだな。良かった。

この前は、花を有り難う。

マーガレット、コスモス、アネモネ。

彩りなんかよりも優先して、俺の好きな花を詰め込んだお前らしい花束で安心したよ。

髪の毛も伸びてたし、女らしくなったじゃん。言葉遣いももう少し女らしければ良いんだけど。

だけど、これからは傘を忘れるなよ。風邪引くから。傘を持たないところは、昔っから変わらないな。

そつえばユリウスのこと、まだ忘れてなかったんだな。

もうとっくに忘れたものだと思ってたよ。

時々で良いから、また昔話でも聞かせてくれよ。ずーっと暇だから。

便利屋はどうだ？ 儲かっているか？

お前の噂はどこに行っても流れてるから、元気でやっってるっていうのは分かる。

友達も多いしな。師匠として誇りに思うよ。

でもお前はとんでもない無茶をしでかすから心配だよ。

頼むから、俺の名前を使っての悪事はやめてくれよ。本気で。

そつだ。お前に家族が出来たんだってな。

貧民街から拾ってきたらしいけど、今度俺の所にも見せに来てくれよ。

小さい弟らしいじゃん？

お前、昔っから弟欲しいって言ってたもんな。

名前はやっぱり『シオン』か？

『カノン』と呼び方が似てて、俺は良いと思うよ。

カノン。

俺の姿はもうお前には見えないかも知れないけど、

俺は未練ばかりでこの世界をウロウロしているよ。

だからお前が墓地に来てくれてるのも知ってるし、ユーリに怒られたのも知ってるし、お前が立派に便利屋を継いでるのも知ってる。

なんでまだこの世界にまだ居るのか分からないけど、しばらくはこのままこの世界に留まっておきたいんだ。

お前がもう少し大人になるまでは。

お前がもう少し幸せになるまでは。

もう少し見守らせてもらってもいいかな。たぶんこれは、傲慢な

幽霊の戯言。

届くはずが無いと分かっているのに、こうしてお前に話しかけて

しまつよ。

この手はものを掴めず空を切り、この身体は誰の目にも映らないけど、お前ならもしかするとって思ってる。俺は馬鹿だから。

この声が届くはず無いけれど、もし届いているのなら、答えて欲しいよ。

なあカノン。

お前はいま、幸せか？

間奏曲 参曲目「君の名を呼べば」(後書き)

お前が幸せなら、俺も幸せだよ

16・それを殺意と呼ぶんじゃないかなかったですか、この世界では。

カノン・ソリティアの店に依頼人が来た、九月のある日。

残暑はまだ厳しいのか、便利屋の店は蒸し風呂のように暑い。

シオンが来てから、十日が経っていた。

「実は腕が立つと有名な貴女に、ヤエお嬢様の護衛をお願いしたいのです」

「……あ……はい。すみませんがお名前は？」

カノンはいかにも品が良さそうな依頼人二人に、疑いの眼差しを遠慮無しに向けて質問をした。

二人の内、一人は白髪混じりの年配の男性。カノンに依頼を切り出した男だ。

ソファに浅く腰掛け、黒いスーツの様な服に身を包み、それはもう優しそうな笑顔をしている。

もう一人はまだ二十代頃と見られる、こちらも男性。

ソファには座らずに横で立っている。もしかしたら、最近掃除をしていなかったからホコリが溜まっているのを見抜かれたのかも知れない。

きりりとした表情ではあるものの、やはり何処かおっとりとした雰囲気伺える。そしてさっきの男性とお揃いの黒い服。

「これはこれとはんだご無礼を」

「ええもう全く」

「ちよつと姉さん！」

不躰な言葉もさらさらと吐くカノンにシオンがストップをかける。だが向かい側にいる男は相変わらず気味悪いほどにこにこ笑うだけだった。

「私達はアルヴェルト家に仕える執事でございます。私の名前はカリベ、こっちがウエンと申します」

突っ立っていた方 ウエンと呼ばれた男性が軽くお辞儀をした。それを見て、カノンもお辞儀をした。何事も礼儀が大事だ。いくら口が悪くとも。

詰まるところ、この暑そうな黒い服は仕事着、執事服なのだろう。「アルヴェルト家、ですか……これはまた凄いところからのご依頼ですね。でもアルヴェルト家にはちゃんとした護衛人を雇ってあるんじゃないかったですか？」

「はい。ご存じのように、アルヴェルト家は由緒ある伝統を持つ家系です。護衛人はちゃんとアルヴェルト家御用達の者達を任せさせておりますが、なにぶん、事情が事情でして……このことについては、依頼をご承諾されました後にきちんとご説明させて頂きますので」

重々しい空気の中、仕事の話をするカノンの隣でそわそわしながら立っていたシオンは

「姉さん姉さん、アルヴェルト家って何？」

カリベとカノンにお茶を出しながら（ウエンには自分は結構です、と言われた）カノンに出来るだけ小声で聞いた。

「お前……世間知らずなのがバレるぞ。しかもかなりの割合で」

「えー！」

「ご家族の方でいらっしやいますか？」

「はい、世間知らずな弟です」

「だって聞かないと分からないもん！」

「もー、お客様の前では私語を慎めよー。すみません、世間知らずで」

「いえいえ、とんでもない」

「何回も言わないでよー！」

カリベは「仲がよろしいのですね」と微笑む。カノンも微笑みながら、受け答える。

「すみません、ちょっと弟に説明をしますね」



カノンはシオンを部屋の隅まで連れて行って、それはもうかなり小声で話す。そこへ行くまでに何冊か積んであった本を全てなぎ倒して行ったが、そんなことは気にしない。しかもその本が崩れる音に慣れていないカリベとウエンが吃驚していたが、それでさえも気にしない。

カリベとウエンは二人に気を遣ってか、そちらも何かの打ち合わせをしていた。

「あんな、アルヴェルト家って言ったら、レスティナ国有数のお金持ちで、さつきもあの白髪混じりのおっさんが『由緒ある伝統』がどーだのこーだの言ってたとおり、すっごい家系なんだよ。どれくらいスゴイかって言うと、ある日いきなりおれが『ケーキ・アイス・お菓子・その他スウィーツ系もろもろ断食宣言!』するくらいの凄さなんだよ。まあしないけどな、そんな無意味な断食。なぜならばおれは甘い物に誓いを立てているからな!」

「誓いまで立てちゃったの!? ……じゃなくて。凄すぎて後半部分のインパクトが強かったけど、要約すると、ここいらで依頼を受けておくとお金がガツポリ稼げてお得ってこと?」

「そう言うことなんだけど……取りあえずあの白髪のおっさんには気を付けとけ。万が一のことがあったら、な」

「ウエンって人の方じゃなくって?」

「あいつは良い。どうにでもなる」

「ふうん……?」

カノンが二人に気付かれないようにこっそりと盗み見をした。カリベがしっかりとこちらにむかって微笑んでいた。

「お待たせしました」

「いえいえ、こちらも色々打ち合わせすることがありましたから」  
ウエンは相変わらずだんまりだが、カリベが笑顔で言った。

「失礼ですが、この依頼を受けると、報酬は幾らくらいに?」

カノンは訊きたいことだけはつきりと伝えた。はつきり伝えすぎで、カリベはちよつとびつくりしていた。

「え、ええ。もちろん貴女が満足出来るだけの金額をお支払いします……そうですね、五十万ミリア、で手を打って頂きたいのですが」

シオンとカノンはお互い眼を合わせあって、笑った。

「お受けいたします。依頼内容を詳しく教えてください」

「助かります。依頼内容と言ってもごく普通の護衛です。お嬢様の護衛をお願いしたいのです」

カリベはウエンと目配せをしながら伝える。

「じゃあなんで護衛の必要があるんですか？」

カノンは、挑戦的に言った。まずは知りたいことから突っ込まないといけない。何事もそこからだ。

「……先日、旦那様宛に手紙が届いたので。白い封筒に白い便せんでした。中には『九月三日深夜、ヤエ・アルヴェルトを屋敷から連れ出す』と」

「えーと、よくある誘拐宣言みたいなものですかね？」

「分かりません。なんと申せばよいのやら……警察軍には一応言いました。タダの悪戯だろうと真面目に取り合ってくれず……」

「んで、おれの所に来た、と」

ズズツと音を立ててカノンがお茶を飲む。カリベは手を付けていない。シオンが出したお茶はすっかり冷めていた。

「はい。どんな内容でもこなすという便利屋。例え、それが……多少法に引つかかることでも」

しばらくの間沈黙が続いて、シオンが怯えた声を出す。

「……法に引つかかる？」

「こらシオン、お客様の前では私語は慎みなさい」

「で、でも……」

「いやはや驚かせてしまって済まない」

カリベは依然笑顔のままだが、カノンは警戒を強めて言う。

「つまり、護衛人をたくさん雇っているにも関わらず、おれに護衛の依頼をしにきたという理由がそこにあるんですね。普通の護衛ではないと？」

「その通り……噂に違わぬ聡い御方で安心いたしました」「で？」

浅く腰掛けて、もう一度聞く。

「おれに、本当は『何を』して欲しいんですか？」

「その手紙を出してきた、犯人を捕まえて、始末して欲しいのですよ。無論、他言無用で。もしもこの時点でお断りになるというのなら、それなりの処置を」

カリベとウエンとカノンはお互い、作り笑いを浮かべ、シオンだけが青い顔をしていた。

「あはは、殺意丸出しじゃないですか。アルヴェルト家に仕える執事さんが」

「いえいえとんでもない。これは殺意なんかでは御座いませんよ。ただアルヴェルト家唯一の娘であるヤエお嬢様に危害を加えるような輩はこの世に存在してはいけないのです」

「どーだか」

カノンの横頬を、汗が伝った。冷や汗ではない。カノンはにやりと笑っていた。

16・それを殺意と呼ぶんじゃないかなかったですか、この世界では。(後書き)

二人が笑った。

17. そつやって嘘に嘘を重ねていらっしやいますが、始まりも嘘じゃないです

「では明日、九月三日に屋敷でお待ちしております。屋敷への道は御存じですか？」

カリベが立ち上がりながら聞く。

「ええ、よく知ってますよ」

「そうですか。では失礼致しました」

カランコロンと軽やかな音を立てて扉が開いて、そしてゆっくり閉じられる。

店はしばらく静かになった。

「ふー、ひっさびさに緊張したな。シオン、お茶のおかわり持って来て」

「……うん」

「どうしたんだよ？ 元気が無いぞ。もっと元気に返事しないと学校に行ったら陰険で陰湿ないじめの対象だぞ？ 学校とか行ったこと無いけどさ」

「どこからつつこめばいいか分からないから放っておくね。そんなことより姉さん、やっぱりやめた方がいいよ、この依頼。なんだか内容が危険っぽいし……お金持ちの言ってることは信用出来ないよ、僕」

カノンはやれやれといった感じでシオンに向かって息を吐き出した。

「かと言ってあそこで依頼を断っていたら、二人共どうなってたか」

「どうして？」

「根拠は三つ」

カノンの話を聞きながら、シオンは立ち上がりお茶を入れる準備をする。どうやらあまり重要な話ではないと判断したらしい。

「証拠じゃなくて根拠でしょう？」

「証拠じゃなくても根拠は根拠。ちよつとでも変だと思つたら全部疑うのが最善策。はい、まず一つ目」

指を一本、シオンのいる台所の方向に立てて言った。シオンは律儀に一度振り返つてその指を見た。

「あの二人はただの執事じゃない。恐らく、あの二人こそがアルヴェルト家の護衛人だな」

「えー？ どうして？ どうみても執事って感じだし、ぶつちやけ弱そうだったよ」

カノンは傍にあつた一番薄い雑誌『これで貴方も収納美人』見せる収納を使いこなせ特集』を適当に丸めて、近くにあつたどこぞの民族が奉つていそうな不気味な人形に向かつて投げた。

「ぶつぶー。はいシオン君死んだー」

「死んだの！？ っていうかその人形が僕の代理なの！？」

紅茶の缶を取り出しながらシオンが言う。雑誌を放り投げたことについては何も言わない。慣れているらしい。慣れて恐ろしい。「作り笑いが自然すぎる。あれはいつもあの顔をしているな。あーというのは見慣れてるから分かる。その上、こつちが質問したことだけにしか答えていない。 unnecessary ことは一切喋っていない。お陰で情報が少なすぎるよ」

「そつえば、名前すらこつちが質問してからだったね」

「んでもってシオンの出したお茶に手を付けていない。向こうはこつちを全くと言って良いほど信用していない」

「別に変なモノなんて入れていなかったから、ただ単に飲まなかっただけじゃないの？」

「……実はこつそり入れた。恐らく、二人は気付いていたな」

「いつ！？ 何を！？」

折角見つけた紅茶の缶を、床に落としてしまった。蓋が閉まつていたのが幸いだ。

「最初に。厳密に言うと、お前が入れたんだ」

「僕が？」

「おれ、お前にお客さんだけには左上の棚にいられてある茶葉を使え  
つて言つてたよな？ あの茶葉には元々唐辛子の粉末を混ぜてある。  
知り合いから貰つた、特製の匂いが気にならないヤツ。ちなみに激  
辛。まじやばいくらいの刺激」

「なんで唐辛子！」

「毒なんか入れちゃつたら大変だろ？ 唐辛子だつたら、ちよつと  
したお茶目ですうごめんなさーい、で済むし」

「すまないよ」

的確につつこんでみたが、カノンはそうか？ と首を傾げただけ  
であつた。

そんなお茶目が巷にあつていいものかとシオンは軽く悩んだ。

「おれ、変だなつて思つたやつには何時も入れてるよ。それでいろ  
いろ見極められるじゃん？」

「……なんか地道だね。それ、引つかつた人いるの？」

「いるよ。おれの親友が見事に引つかつた」

「親友なのにトラップ仕掛けたの！？」

気を取り直して、ポットを火に掛ける。手慣れたところを見ると、  
この手の雑用はシオンの当番のようだ。

「しーかも、カリベつて男の方。座り方が不自然。ほとんど座つ  
てないに近いぞ、あれ」

「それは家のソファの座り心地が悪かつたんじゃないの？ 掃除し  
てなかつたし」

「う……」

ちよつと間が空いて、カノンは話を続けた。掃除をしていないこ  
とは痛い盲点だつた。

「手はどうだつた？」

「手？」

うーん、と唸るフリをするが、シオンはお湯を沸かしているポッ  
トしか見ていない。

「カリベは不自然に広げて、膝の上に置いていた。いつ何があつて

も対処できるように、浅く腰掛けて体制を作り、たぶん手首にはかなり小さい銃を隠し持っていた。そうじゃないとあんな不自然な手の開き方はしない」

「銃?! 物騒だなあ」

「ウエンの方は立っていたな?」

「突っ立っていたよ。カリベさんよりも下っ端だからじゃない?」

「……そういう見方もあるんデスネー」

「姉さんが疑いすぎなんだよ」

「でも、あいつの袖口から不自然な感じはした。あいつの場合、ナイフだったと思うけど」

「それもカリベさんと同じ理由?」

「もちろん」

「だから、ウエンさんよりカリベさんに注意しろって言ったの?」

「そう言うこと」

「物騒な世の中だね」

「全くだな。シオン、お茶まだ?」

そこで丁度、お湯が沸き、シオンは用意していた別のポットへとお湯を注ぐ。

「もうすぐだよ。じゃあ二つ目は何?」

「……シオン君はこれから洞察力を磨くように」

「はい」

「二つ目は、あいつらが言った言葉に嘘がある」

「はい、お茶」

「さんきう」

カノンはレモンティーを、シオンはミルクティーをそれぞれ飲む。向かい合って座るソファは、さっきシオンから指摘を受けたように少しだけ埃が目立っていた。

「嘘って何?」

「んー? えっと、白い封筒に白い便せんで誘拐予告が来た。軍は悪戯だろうと相手にしなかった」



お茶が熱かったのか、カノンは息を吹いて冷ます。

「そんなこと言ってたね」

「可笑しいと思わないか？ レステイナ国有数のお金持ちで、軍とも多少なりとも繋がりはある。権力も持っているし、町くらの土地なら一つ買い取るくらい普通に出来る。そんな大層な家に犯行予告。いわゆる賄賂とかを貰っている軍にとつても痛いことだろう。」

『ヤエ・アルヴェルトを連れ出す』っていう表現は微妙に変だけど、それでも大事な跡取り様だ。軍だって悪戯と思っても、無下に扱いはしないよ」

「うーん……でも、もしかしたら、本当に悪戯と思つたのかもよ？ だって僕らはまだその手紙を見ていないからそんなこと言えるけど、子供っぽい字で書いてあつたのかも知れないし」

もう一度、お茶をすすりながらシオンが意見する。

カノンはそんなシオンを見てニヤリと笑つた。

「そうだな。おれたちはまだその手紙を見ていないし、本当に悪戯かも知れない。でも、あいつらは嘘を吐いている。確信があるね」

「何さ？」

「あいつらは軍に連絡はしていない。協力も求めていなかった。何故なら今朝かかってきたユーリさんからの電話では、そんな話は無かつた。一つも」

シオンは得意げに笑うカノンを格好いいと思つたが、堂々と朝からサボって電話を掛けてきて、そのうえ軍の内部情報を容易く姉に渡していくユーリを相変わらずながら格好悪いと心の奥底で思つた。

「ユーリさん、公私を分ける人だから、黙つてたのかも」

「それはないな。おれは確かに、『何か変わったことでもあつたんですか？』と聞いた。それで『別にねえよ。いつものさぼりつてヤツ』って言い切りやがつたあの給料泥棒。ほんとムカツクなあの人。まあそれは置いて。」

つまり、何にも無かつた。ユーリさんは公私を分けるけど、聞かれたことに嘘は吐けない」

ズズーと紅茶を飲みきって、また不敵に笑う。

「そして最後の根拠。もう一つ、嘘がある」

「もう一つ？」

にやりと笑った顔は、溢れるほどの自信に満ちていた。

「ヤエお嬢様は、アルヴェルト家唯一の跡取りなんかじゃない。知り合いに聞いた話だけど、先週夫人が赤ちゃんを産んだ。これはまだ正式に発表されてないけどな。その赤ちゃんの名前は、ノエル・アルヴェルト。アルヴェルト家の跡取りに相応しい『男の子』だぞうだ」

17. そろそろって腰に腰を重ねていらっしやいますが、始まりも腰じゃないです

当店自慢の、ネタ晴らしで御座います。

18・申し訳ございませんが、応援が必要です。

「と、言うわけで。おれだけじゃどうも不安があるんで応援を要請したいと思います！」

敬礼！ と手を付けて、カノンは電話をかけた。飛び降りた所為で、ソファから埃が舞い上がった。それを見て、明日は絶対に掃除しようとシオンは心に固く誓う。

「応援？ 何それ？」

「さっき言つてた知り合い」

何番だったけなあと、迷いながらカノンがダイヤルを回す。ジリジリと何度も回しては「あ、違った」と声を出すその姿に不安が過ぎるが、ここはもうカノンに任せた方がよいだろうとシオンはお茶に合うクッキーを探しに、また台所へと消えた。

「知り合いって、唐辛子がアルヴェルトの情報か、どっちの知り合いー？」

この前カノンと一緒に街へ出たときに買い溜めしておいたお菓子の木箱をゴソゴソと探る。

最初に掴んだのはブランドーの入ったミニサイズのチョコだった。「唐辛子じゃない方ー。うわ、やっぱり番号間違ったかも。全然出ねー」

「情報くれた人の方？」

あつた、とシオンが出したのはチョコレートがコーティングされた胚芽入りビスケットだった。箱を丁寧に開け、大事そうに抱えてソファに戻る。

向かいの席の、その向こうにあるミニテーブルに置かれた電話を使うカノンに「どう？」と口パクで伝える。

カノンが受話器を持っていない方の手でオーケーサインを作った。「……あ、もしもー伝言屋ですか？ レステイナの便利屋、そう街外れの……あ、違う違う、今日はレオラリアナじゃないの。世外

れの、そう都合屋で。そう……本当か？ うん……じゃあこつちに  
来てくれって……うん。お願いします……あ、何時間くらいかかり  
そう？ わかった。ありがとう」

「がちゃん、と受話器を下ろして満面の笑みを浮かべるカノン。

シオンがビスケットを頬張ってカノンを見る。口の周りにはチヨ  
コレートがいつぱいで、拾われた頃なんかよりも、ずいぶん年相応  
に見える。

「姉さん、『都合屋』さんが手伝いに来てくれるの？」

『レオラリアナ』という摩訶不思議な呪文が出てきて、一瞬何を呪  
つたんだと焦ったが、それは今度聞くとする。

シオンとカノンがいくら家族になつたとはいえ、まだ十日しか経  
っていない。

知らないことが多すぎるのが少し辛いが分からないことは聞いて、  
ゆっくり家族になればいいんだ、とシオンは前向きに考えて胚芽入  
りチヨコレートビスケットをまた頬張った。お気に入りのようだ。

「うん、いい奴だよ。おれの一つ下だから、今年で十五歳になつた  
んじゃないかな？ 伝言屋にはなるべく早く来てくれって頼んだ  
から、夜中までには来るんじゃないか」

シオンがこのビスケット気に入っているのを見て、今度あれを買  
い溜めしておこう、と嬉しくなりながらカノンが言う。

「……夜！？ 今、朝だよ？ それなのに？」

「だってあいつ、今違う国にいるし。汽車使つてもなー」

「どこの国にいたの？」

「イギリス」

淡々と答えられたかの国は、海を越えた先にある島国だった。

「うわ、遠いね……都合屋さんもいきなり呼ばれて大変だろうね」

「そうだよな。悪いことしちゃったかな？ でもアルヴェルト家  
を知ってるのはあいつくらいだしなー。今度なんか奢って」

やろうかな、とカノンが言いかけて、ドアからノックの音が聞こ  
えた。

シオンがハイハイと走っていく。雑用係が板についてきている。

「今日はお客様がたくさんだね」

「だな」

ドアを開け、

「いらっしやいませ。街外れの便利屋へようこそ」

シオンが可愛らしくお辞儀する。

「どーもー」

お辞儀したシオンの向こうに依頼人が見えて、カノンの動きが数秒止まった。

顔を上げてシオンを見ると、客は黒い頭に碧眼。背はカノンより少し高いか同じくらい。

少し髪が長いのか、後ろでちょこんと一つに纏められていて、他の髪の毛はあちこちに跳ねている。はねつけのある髪質のようだ。

その人物は、まだ九月だというのにマフラーをして、コートを羽織っていて見ているこっちは暑くるしくてたまらない。だが、当の本人は涼しい顔をしている。

にっこりと笑って、客はもう一度同じセリフを。

「どーも。お久しぶりです、カノンさん」

数秒後、動き出すカノンの脳。瞬きを再開して、そして次に口。

「おま……どうやって、ちょっ……はあ!？」

「あー、走ってきました」

「え？ 姉さん、もしかして」

扉の向こうに立っていた少年は、大人しそうな表情でにっこり笑う。

「お久しぶりです、カノンさん。それから初めまして、弟のシオン君。君のことは情報屋からよく聞いています。僕はクウヤ・アンダーグラウンド。世外れの都合屋です」

クウヤと名乗った少年はにっこり笑う。便利屋の弟は姉を見る。

その姉は「走って来れるような距離と時間かよ」と、少年と同じように笑った。

ただし、苦笑に近い方で。

18・申し訳ございませんが、応援が必要です。(後書き)

海も空も陸も、全部走ってきたよ。  
貴方のために。



19・綺麗な花を咲かせてみせましょう。

クウヤが店に入ってきて、カノンの前に立った。シオンがその後  
に続く。

「あれ、カノンさん髪伸びました？」

「まあ縮んではないな」

腕を組んでカノンが答える。とにかく座ったら？ とシオンに言  
い、お客用じゃない方の紅茶出してくれる？ とシオンに言った。

「……っていうかさ、お前嘔吐くなよ。走って来ただあ？ いくら  
お前の身体能力が優れていても、汽車を使って半日の距離を走って  
ものの数分で来れるわけないだろ」

それを聞いて、ふくれながらクウヤが答える。

「ちえー。びつくりさせようとしたのになあ。カノンさんなら騙さ  
れるかもって思ったのに」

「伝言屋にわざわざ伝えて貰うくらいびっくりかよ。お前の嘘っ  
てスケールがでかいんだよ。昔から」

カノンが鼻で笑った。内心では危うく騙されるところだった、と  
焦っていた。伝言屋もクウヤと一緒にあって嘘を吐いていたとは、  
侮れない。

「でもね、昨日まではちゃんとイギリスに居たんですよ。今日はも  
うレスティナに着いてましたけど……あ、ありがとう」

シオンが紅茶を渡す。クウヤはシオンのことを遠慮無しに見つめ  
た。

「な、何か？」

ミルクティーは駄目だったのかな、と不安になるシオン。

「シオンっていう名前はカノンさんが付けたのかな？」

「うん。姉さんが、拾ったときに付けてくれた」

サクツとシオンが机の上に出しっぱなしにしていた胚芽入りビス  
ケットを頼張るカノン。

「ほれがほーはしはの？」

彼はそんなカノンを一瞥見て、少し呆れた表情をした。が、直ぐに手を口元に置いて、思案する。

「シオン、しおん……ああ、もしかして紫苑の花のことですか？」

「おお、当たり前」

カノンがカップの中身を見つめて、どうでも良さそうに答えた。

シオンがキョトンとしたのを見て、クウヤが紙とペンを貸してくださいます、と言おう。

カノンは奥の引き出しからメモ用紙（「コヒナタ探偵事務所・アルバイト募集中」「セール！！【ドルチェ・デ・ノエル】ケーキ全品半額！」「代理屋・依頼何でも受け付けます」と書かれたチラシの裏などが束ねてある）とペンをクウヤに渡した。クウヤはシオンによく見えるように大きめの字で書いた。

「紫苑っていうのは、こう書くんだよ」

さらさらと書かれたそれは、こちらではあまり馴染みのない文字だった。

「これって漢字っていうやつ？」

「そう、漢字」

メモを渡しながらクウヤが笑う。カリベやウェンとは違い、心からの笑顔だった。

「こんな名前の花があるんだ」

「淡い紫色の綺麗な花なんだよ。秋頃に咲くはずだ」

シオンがメモ用紙をじつと見つめる。この家にある大量の本の中で漢字は見たことあるが、漢字を書ける人を見たのは初めてだった。

「クウヤって漢字が書けるんだ。こんな変な文字なのに凄い」

カノンが紅茶のスプーンをかき混ぜ、代わりに答える。砂糖の入れ過ぎか、スプーンを回す度にざくざく音が鳴っている。

「クウヤは半分だけ極東の国の血が流れているんだよ。ハーフなんだ」

えへへ、と照れながらクウヤが笑う。

「だから髪が黒いんだー。珍しいと思った」

「半分だけなんだけどね。カノンさん、なんで紫苑なんですか？  
やっぱり貴女の名前にちなんで、花の名前に？」

「姉さんの名前にちなんで？」

シオンがまたキョトンとした顔をする。確か姉から聞いた話では、姉の名前は『師匠』の好きな曲の名前だと言っていた。花の名前だとは聞いていない。

「おれの、昔の名前が花の名前なんだよ」

もーいいじゃん、花の名前ってこと以外忘れちゃった名前なんだし、とカノンが言っつてカッパを机に置く。

「で、なんでレスティナにきたんだよ？ お前、昨日までイギリスに居たんだろ？」

痛いところをつかれたらしい。クウヤは少しだけ自嘲気味に笑う。  
「今、殺し屋から逃げ回ってるんです。レスティナで受けた依頼なんで、イギリスまで逃げたんですけど灯台もと暗しってことで、いったんこっちに戻ってきたんです。それが丁度、カノンさんからの伝言を伝言屋から聞いたときです」

「ヘーイギリスにねー」

声を揃えて相槌を打った数秒後、便利屋姉弟の動きが止まる。  
違和感に気づいて二人、顔を見合わせる。

そしてギギギと音を鳴らして首をクウヤに向ける。

「殺し屋あああああ！？」

「はい。屋敷に忍び込めたのは良いけど、なんか依頼通りにこなせなくつて。というか、いろいろごたごたがありました。失敗したんで、申し訳ないから報酬もちゃんと返したのに、相手の方が怒っちゃって」

「それどこに忍び込んだんだよ！」

的確なつつこみにクウヤがにんまり笑う。カノンのそれとよく似た笑い顔だった。

「アルヴェルト家。レスティナ国で有数のお金持ち。賄賂で軍との

繋がりのある、あのやばいところですよ」

「いやいやいや、笑い事じゃないよ」

そう言いつつ、カノンがニヤリと笑う。

「クウヤ、手を組まないか。報酬は八二で」

「七三で手を打ちましょう。その代わり、新鮮な情報をお付けします」

「いや八二で。今月まじやばいんだって」

「僕も国という国を逃げ……旅して大変なんです」

「自分でまいた種だろ」

「いつかそれも花開くんです」

「破滅の花か？」

「自滅の花ですよ」

「中途半端なお前が悪いんだよ。男ならやり遂げる」

「カノンさんこそ女なら寛大な包容力をもって六四で」

「おいまて増えてるぞ」

「いやいや、最初からこんな感じでしたよ。あ、シオン君への漢字講習代つてことで」

「無理無理、ほんと食費とかやばいんだって。おれ一人の稼ぎで二人分だよ？」

「僕なんてペット三匹の生活費込みですよ？」

「お前ペットなんか飼ってたの？」

「犬二匹猫一匹です。だから六四をお願いします」

「駄目。ほんと駄目」

「カノンさん年上でしょう？譲ってください」

「おれ、正確な年齢分かんないし。あ、もしかしたら十六歳じゃないかも。捨て子って不便だわー」

「時に便利ですよ、この年齢詐称め！」

そんなやりとりを見ながらシオンは残り一枚の胚芽入りビスケットをかじり、

「もうお昼かー……」

一人、窓の外を見た。  
カリベとの約束の時間まで、後二十二時間。

19・綺麗な花を咲かせてみせましょう。(後書き)

紫苑、花言葉は『追憶』

20 .それは余りにも綺麗に造られた人形のようにでした。

城下町の外れにある小さな家から、美味しそうな匂いがしていた。九月二日、午後十二時半、天気は快晴。街外れの便利屋、今日のお昼はオムライスである。

クウヤはカノンの好意に甘え、ちゃっかりご馳走になっていた。

「アルヴェルト家へ侵入するだなんて、一体どんな依頼だったんだよ？ あ、シオン水取って」

「残念。姉さんの方が近い」

「ちえー」

シオンの即答にカノンが素直に水を取る。

なんだかんだ言っただけでシオンもこの家に馴染んでいるらしい。

「なんか逆恨み的なものを感じましたよ。『俺が今こんなに苦しいのは全部あいつらのせいなんだ！だから復讐をしなければ！』って言っていましたからねー。このチキンライス美味しいです」

「取りあえず食べ終わってから話そうか。なんか長くなりそうだしカノンがそう言っただけで、アルヴェルト家依頼の話は一時中断となった。」

ふわふわの卵にいちいち感動しながら、クウヤはいままで居たいギリスでの料理がいかにまずかったかをとくとくと語り、この国しか知らないシオンはその話に興味津々といった様子で次々に質問攻めをした。

そんな風にして賑やかに三人がお昼を食べ終わると、時計の針は丁度1時を指していた。

「そうだ。カノンさんがアルヴェルト家から受けた依頼って何なんですか？ 僕、仕事を手伝うのは良いけれど、まだ肝心な部分聞いてませんよ」

昼ご飯の後かたづけをしながらクウヤが本題に入る。

「ヤエ・アルヴェルトの護衛だよ。誘拐宣言が送られてきたらしい」  
皿洗いをしながらクウヤの質問に今までのことを話し始めるカノン。まずは怪しい執事達のこと、銃とナイフを持ち慣れていたこと。九月三日深夜にヤエ・アルヴェルトを連れ出すと書かれた白い手紙。護衛ではなく、手紙を出してきた犯人を始末して欲しいという本当の依頼。

そして、カノンが見付けた嘘。

全てを話し終わって、クウヤがしばらく黙り込んだ。その様子を見てカノンも黙る。

隣ではシオンが洗い上がった食器達を丁寧に拭いている。

同い年の子らより一回り大人びているシオンは、二人の話の邪魔をしないように静かに後かたづけを手伝っていた。

「姉さん、後は僕が片づけておくから、そっちで話してきたら？」

「あ、悪い。じゃあ後頼めるか？」

「うん。任せて！」

その言葉に二人がソファのある客室の方へ行つたのを見届けて、シオンはため息を付く。

「……僕が、もう少し大きかったらなあ」

自分を助けてくれた姉に恩返しが出来ない苦さを、一人呟いた。

\*

シオンが皿洗いを終わると同時に、カノンが食後のお茶をカップにいれに台所へ来た。

そしてシオンと並んでソファの元の位置に座る。向かいには、黙



ったままのクウヤ。

二人がお気に入りの胚芽入りクッキーを食べ始めようとしたとき、クウヤがポツリと喋った。

「実は……僕、アルヴェルト家の……かなり凄い秘密を知ってるんですよねえ」

「「秘密？」」

「はい。話せば長くなるんですが……いや、やっぱりそんなに凄くないかも。微妙。……うん、でも……今回の犯人は大体分かったかもしれないません」

「まじで！？ ちょ、凄くなくていいから話してよ」

「分かりました。そうですね、まず僕が受けた依頼から話しますね。……僕、アルヴェルト家に恨みを持つ輩に、ヤエ・アルヴェルトの『暗殺』を頼まれちゃったんですよ」

「……暗殺？」

「まったく、殺すだの殺されるだの、人間やんなっちゃいますよね」  
そう言ったクウヤの顔には、シオンに向けた優しい笑顔など微塵も無く、ただ無感情で、余りにも冷たかった。何も、誰も信じていない、この世の全てを遠目に見たような、

そんな、丁寧に造られた人形のように、無機質な表情だった。



20・それは余りにも綺麗に造られた人形のようにでした。(後書き)

初めて会ったあの頃も、こいつはこんな顔をしていた。

## 間奏曲 肆曲目「前奏」

九月、早朝。

レスティナ国城下町行き列車のチケットは思っていたよりも高く、先月の依頼で貰った報酬はもう硬貨数枚でしか残っていないかった。

クウヤは苦笑いで駅員からお釣を受け取る。

「……六百七十ミリアか……。そろそろあの殺し屋さん、諦めてくれないかなあ」

街と言う街を逃げ惑い、とうとう事の発端となったレスティナ城下町まで戻ってきた。

灯台もと暗し、生まれ故郷での言葉を実行してみる。

イギリスでは間一髪のところまで逃げ切ったが、流石に三週間も家を留守にしていると、仕事仲間に残ってきたペットの三匹が心配だ。もうこうなったらなりふり構ってられない。カノンになんとかしてもらおうか、と弱気になっていた。

「まあしっかりした人に預けてあるし、ノロマもハカセもヒデオシも大丈夫でしょー。むしろ大丈夫じゃないのは僕の方だな」

一人呟いて、向かい合わせの席に座る。四人掛けだが今はクウヤしかない。万が一の為に護身用にナイフを一本手元に隠して、窓の外を宥める。

まだ夜が明けた所で眠かったのか、列車の中で眠気が襲ってきた。城下町まで時間はあるし、本能に逆らわずに眠っておこうと目を閉じた。

そして、懐かしい夢を見た。都合屋になる前のことを。

剣道の竹刀を握った昔のクウヤが居る。クウヤの兄が、こちらに向かつて微笑んでいる。後ろには、大きくて古い家があった。

これはまだ桐生空夜と呼ばれていた頃。二年前の世界だ。クウヤ

は懐かしい思い出の中へとずぶずぶと浸かってゆく。  
そんな九月の始めの日。

\*\*\*\*\*

「兄さんはさ、仕事を止めたいって思う？」

竹刀を投げ出して、縁側に寝ころぶ。兄は僕の質問に答えようと、隣に行儀良く座った。

「仕事を？ うーん。別に思わないけど……空夜は仕事がいやなの？」

「別にどうでもいいよ」

「いつつもそれだよ……」

はあ、と溜息を吐いて兄は立ち上がる。

どこへ行くの、という僕の問いに対して「お茶取ってくる」と問の抜けた答えが返ってきた。

先程まで兄が座っていた場所にごろんと足を投げ出して、眼を瞑る。

祖父と父は仕事で、家には兄と自分しか居なかった。

僕の家系が代々就いている職は、今で言う都合屋や便利屋に似た様なモノで、お金さえ貰えばなんでもしていた。

ただ都合屋等と違うところは、あまり表だったことをしない、と

言う他人の影に潜むような事だった。

その頃の僕は一つ上の兄と違って、仕事をたくさん貰えるほど役には立っていなかったから、学校に通いながら修行を重ねていた。ただ、その学校すらも満足に通ってはいなかった。

誰に対しても何に対しても執着心が湧かなくて、毎日ただ生きるということに煩わしさを覚えることもあった。それは昔からの僕の性格だった。

どうでも良かった。

何がどうなるかと誰がどうなるかと、本当にどうでも良かった。

無関心に、無関係に。

僕はそうやって生きていた。いつからとか、どうしてだとかは分からない。元々そういう性分だったのだろう。

兄もそんな僕のおかしさに薄々気付いているようだった。

ミシツと廊下が響く。古いこの家は、至る所が軋んでいる。

兄がコップを目の前に置く。

「はいお茶……空夜、靴下はきなよ。もう冬なんだから裸足のまじじゃ寒いだろ」

「別に寒くない」

「見てるこつちが寒い。それに風邪を引くよ？」

「引かない。っていうか、もう冬になってたんだけだ」

「……前にも同じこと言ったと思うけど」

兄が俯いた。それと同時に栗色の髪がパサパサと乱れ落ちた。

その母譲りの栗色の髪と、父譲りの漆黒の眼が羨ましかったのを覚えてる。

逆に兄は、母よりも濃い僕の緑に色付いた眼と、父と同じ真っ黒な髪の毛が羨ましいと言っていた。

「あつっ」

「あ、気を付けて飲みなよ？」

「……遅いよ」

兄がいれてくれたお茶は、いつも熱くて苦かった。それだけはいまもはつきりと覚えている。

間奏曲 肆曲目「前奏」(後書き)

もじらずいよ、この苦さを知らない。



間奏曲 肆曲目「独奏」

弟は、何に対しても無気力で、無関心だった。

いつだったか「死にたい」と誰に言うでもなく呟いていた。

僕の視線に気づき、なんにも無かったかのように部屋を出ていった。

弟は、誰に対しても無関係で、無関心だった。

いつからか、弟は学校に行く回数も少なくなっていた。

\*\*\*\*\*

数日ぶりに学校へ行ったと思えば、すぐに帰ってきて空夜は何も言わずに二階へ上がっていった。竹刀を振る僕の横を通り過ぎていったというのに。

また眼のことを何か言われたのかも知れない。

その緑色の眼は、クラスメイトの中では異質と認識されているようで、時々ふらっと家に帰ってきていた。

竹刀を置き様子を見に階段を上がる。

「空夜、もう帰ってきたの？」

ノックをしたが返事が無い。

いいや、と思いきや勝手に部屋にはいると隅っこに弟が居た。

「どしたの？」

「どうもしてないです」

どうもしてない人間が、あんな顔をするわけない。僕は呆れて弟を見下ろした。

「嘔吐け」

「嘔吐きで悪い？」

「言いなよ」

よいしょ、とベッドに腰掛けると空夜がこっちをちらりと見た。

「今日、」

「ん？」

足の抱え込むような、俗に言う体育座りで俯きながら話し出す。

「今日学校に行くとき、猫が」

「うん」

「車に轢かれて死んでた」

空夜はそこで言葉を切った。

想像する。全てに関心を持たなかった弟が、猫の死体に鉢合わせしてしまったことを。

「いつも通る道で、毎朝会う猫でさ」

「うん」

「触ったら、冷たくて気持ち悪かった。前に撫でたときは、すっごく暖かかったけど」

「血は、付かなかった？」

首を振る。

「乾いてたよ。もう、死んでから大分時間が経ってたんだと思う」

「そう……」

部屋は静かだった。

誰も喋らなかった。

「それだけだよ」

「ん、分かった。今日はもう休んだら？」

そういつて部屋を出ようとすると、空夜と眼があった。

口を、開く。

「それでさ、そのまま学校へ行こうと思ったんだ」  
空夜にしては早口だった。

「いつもの道を歩いていたら、そこで会うはずの猫が、当たり前だ  
けど居なくて」

もの凄く、急いでいた。

「やっぱり気になって、元の道に戻ったんだ。猫を、あの猫を埋め  
てあげようと思った。名前とか、全然知らなかったんだけど」

「うん」

「それで、それで……走ったけど！ 結局、間に合わなくて」

「うん」

「猫は、元の形なんか無くなってて」

叫びに近かった。

「誰も、あの猫のこと、どうにかしようって思わなかったんだ！」

「……そっか」

「誰も！」

泣いていた。

「誰も猫がなんで死ななきゃならなかったのか、知らないんだ」  
ドアを閉める。一人にしてあげたかった。

空夜を部屋に残し、下へ降りる。

空夜は、その日から学校はおろか、滅多に部屋から出ないように  
なった。

間奏曲 肆曲目「独奏」(後書き)

猫は、そして。

間奏曲 肆曲目「主題」

世界は僕にとって遠い存在だった。

\*\*\*\*\*

猫のことがあってから、毎日をただ何をするでもなく生きていた。死のうかと思う日もあった。何故そう思ったのかは分からない。だけど、死んでしまいたいと思うようになっていた。あんな小さな猫一匹が、僕をここまで変えてしまっただなんて思いもしなかった。あんな風に誰かのせいで死ぬくらいなら、いつそ自分から死んでしまった方が楽なのだろうか。

だけど、自分で自分を終わらす事なんて出来ないから、ただ生きていた。

そんな風に毎日を過ごしていると、僕の知らない内にまた季節は過ぎていった。

気が付けば、ここしばらくずっと部屋から出ていない。身体を動かすことすら億劫だった。

それではいけないと一度外に出ようと思いい、だるい身体を起こし階段を下りる。もう学校へはずっと行っていない。

世界はどんどん僕から離れていく。

階段を下りきったところで、兄と擦れ違った。

兄の表情は険しくて、唇はきつく噛み締められていた。

なんだかよく分からないまま、ふと和室を覗くと、祖父が立派な箱の中で眠っていた。その立派な箱は、見覚えがある箱で。

死んだ人間を入れる、棺桶という箱だった。

「……なんで？」

慌てて箱の隣にいた父に尋ねると、任務に失敗して、殉職したらしかった。

一体どんな任務だったのだろう。

祖父の首筋には傷口が見え、片腕は途中で無くなり、眠っている表情は決して安らかではなかった。

僕は全てがどうでもよくて、季節が変わったことに気が付かないような奴で。

祖父が今まで何をしていたとか、あの厳格な父がひっそりと泣いていることとか本当にどうでも良くて。

そう、どうでも良かったのに。

死んでしまいたいと思っていたのに。

祖父は、仕事の所為で死んだ。誰かの所為で死んだ。いなくなっ  
てしまった。

あの猫も。あの猫もそうだった。誰かの所為で。

なら僕は？

僕は、こんな風に他人のために死にたくない。死にたくない。そんな風に死ぬくらいなら、僕は。

気が付けば、僕は父に頬を叩かれていた。

「桐生家のしてきたことを否定するつもりか！」

そうだ、仕事のことを言ったんだ。

「父さん、空夜！ 何してんの！？」

兄さんが間に入ってきて、父は部屋を出ていった。

「お前とは縁を切る。二度と俺の前に顔を見せるな」

「ちよつと、父さん！」

叩かれた頬は熱を持っていた。別に痛いとは思わなかった。

そんな痛みは僕とは無関係だったから。どんなものも、どんなひととも、僕とは無関係に出来ている。だからなんとも思わない。

ただ、兄だけが泣きそうになっていた。

「空夜、父さんに謝ってきた？ 縁切るだなんて嘘に決まってるから、な？」

泣きたかった。

何故かは分からないけど泣きたかった。

祖父がいない。父が怒った。兄が、泣いている。

「泣くなよ……ほら、空夜？」

訳が分からなかった。涙を流すのは、久しぶりだった。

二人和室で立ちつくす。

「いいよ。もういい……」

「空夜っ！」

兄から離れ、部屋に戻る。

季節はもういつの間にか夏になっていた。

あの猫が死んだのは何時のことだった？

間奏曲 肆曲目「主題」(後書き)

季節は僕を取り残して。



間奏曲 肆曲目「終曲」

僕は世界を、きつと世界は僕を拒んでいた。

\*\*\*\*\*

「何処へ行くつもり？」

兄が言った。多分他にも何か言っていたと思う。

兄の顔を見れば、僕のこの色付いた眼とは違う漆黒のその眼は不安そうに揺れていて。

僕はさよなら、と一言だけ言っつて背を向けた。

「空夜！」

泣きそつな声で名前を呼ぶ。本当は泣いていたかも知れない。

それ以上何も聞きたくなくて、僕はそのまま足を進める。

「……いつ、帰ってくるの？」

ああ、この人は。この人はどうして僕などを気にするのだろう。

もう帰る気などどこにも無いこんな僕を。

何も言えないから、黙った。沈黙がその辺りを支配した。

兄さん、僕には分からないんだ。

この世界に生きる意味が、理由が、意義が。

僕は持ち合わせていなかった。

この世界に生きる権利も、証拠も、何も。

なんとも思っていないかった猫が死んだとき、やっと分かった。

僕は死にたかったんだ。

いつの間にか祖父が死んだとき、思った。

他人の為になんて死にたくない。

僕は、僕だけのために死ぬ。そうすることが、僕にとって一番いい方法だと思うから。

だって、生きていく意味が分からない。死ぬために生きていくだけなんて、そんな馬鹿げた行為。

「空夜、また会えるよな？」

掴まれたその手を振り切った。

「ごめんね。さよならだよ」

僕は泣けないから、かわりにあなたが泣いていた。

ああもしもその声が涙が、別れの言葉と再会を願う言葉、横目で見た貴方の泣きそうな顔、僕の腕を掴むその右手を、無関係だと言わずに繋ぎ止められたなら。

けれど逃げるように振り切り、後ろを振り返ったときには、もう。貴方の小さな背中があっただけで。

もしもそれがただの夢だったならばどんなに。

どんなに良かったか。

\*\*\*\*\*

そこで目が覚めた。

カタンコトンと規則正しくゆるやかに揺れる列車。

慌てて左手で頬を撫でる。大丈夫、泣いてない。ふと横を見ると、駅長が切符を切りに来た。

ポケットから出して、窓の外を見ると二年前と変わらない道が見える。

そう、確かあの時も、こうやって駅長が切符を切りに来た。まるで男のように話す、勝ち気なあの人に会いに来たあの時も。

駅長から切符を返して貰い、ふと向かいの席を見ると女の人がいっつの間にか座っていた。

しばらくお互いに黙っていると、女の人が口を開いた。

「お早う御座います。世外れの都合屋、クウヤ・アンダーグラウンドさんですね？」

見知らぬ人に名前を当てられ、答えるかどうか迷ったが、女の人の左胸に見慣れたバッジを見つけて安心する。

「はい、僕がクウヤです。誰からの伝言ですか？」

「私は伝言屋レスティナ支部員NO・24です。便利屋『街外れ』カノン・ソリティアさんより伝言をお伝えに来ました」

「カノンさんから？」

「今度は何をしでかしたんだろう。」

「『今何処にいる？　すぐ来い』だそうですね。返事はどうなさいますか？」

「『今イギリスで列車に乗ったところです。走っていきます』って言っついてください」

そういうとNO・24さんは目を丸くして、そして微笑んだ。これくらい嘘なら、カノンさんも引つかかるかも知れない。

「承りました。そのようにお伝えします。では失礼いたしました」  
「ご苦労様でした」

僕の挨拶を聞き終わると同時に立ち上がり、通路に出る。

NO.24さんは天井に向かって両手を伸ばし両足を曲げ……飛び出した。

「……うわぁ……無賃乗車……」

今度からはあれを真似しようかと心に誓い、荷物をまとめる。

列車は徐々にスピードを落とし、駅が近づいたことを知らせる。

万が一殺し屋さんが見つかる心配を考え、マフラーを深めに巻く。

九月にマフラーを巻く人なんていないと思うが、これが一番安全だ。

夢を見たせいか、兄に注意されたことを想い出した。

列車を降りる。

八月も終わったというのに日差しはきつい。

誰かに名前を呼ばれた気がして、振り返ったけれどそこには誰も居なかった。

ただ閉じられた扉があっただけ。

そんな九月の初めの日。

間奏曲 肆曲目「終曲」(後書き)

「空夜」

## 21・始

【09/02 15:56】

カノンはクウヤとの話を終え、一人アルヴェルト家の門の前にいた。

真黒なブレザーに、同じ色のプリーツスカート。白いカッターの襟が黒色に映え、ネクタイは小豆色。

彼女なりの仕事着だ。

肩ぐらいまで伸びていた髪の毛は無造作に下ろされている。

人差し指でビー、と門に備え付けられていたブザーを鳴らし返事を待つ。

すると、すぐに重々しい門のカギが開き、向こうに見える重厚な扉からは執事のウエンが礼をしていた。

「こんにちはウエンさん」

「ようこそいらっしやいました。しかし約束は明日の朝だったはず……」

カノンはシオンにも見せたことがないような、完璧な笑顔で受け答える。

「お忙しいところ済みません。でも、明日いきなり下見無しに来てモヤエお嬢様を御守りする自信があるとは言えませんので、失礼ですがこちらに來させて頂きました」

「なるほど。それはこちらの不注意でした。今、旦那様より許可を頂いてきますので」

慌てて走り去るウエンを見ながら、今日のお昼のことを思い出していた。

\*\*\*\*\*

「暗殺、ねえ」

「可笑しいでしょう？ 僕じゃなくて、殺し屋の得意分野なのに」  
クウヤはさも心外だと言わんばかりに頬を膨らましていた。さっきのように冷たい表情は何処かへ消えていた。

「でもお前だつて裏町業なんだから暗殺は管轄内だろ」

カノンはそう言うのとシオンに向かって、『裏町業』って言うのはおれがやつてるような便利屋とかクウヤの都合屋とか伝言屋とか何でもする職のことなんだよ、と丁寧に教えた。

「そうですね……僕はまだ都合屋を始めて一年目なんですよ？  
まだまだ未熟者です。そんな半熟に暗殺を頼む依頼人がいるとは思いませんでしたよ」

「ほー。世外れの都合屋さんが半熟卵。じゃ、おれは生卵か？」

「姉さん意味が分からないよ」

「シオン、よく覚えておけ。こいつ、もう身体の三分の二が嘘で出てくるから」

「ちょっと適当なこと言わないでくださいよ」

クウヤがカノンに食いつくが、ヒラリと交わされる。

「クウヤはな、『都合が悪いこと』を無くするのが得意なんだよ。その逆もまた然り。だから都合屋。その仕事ぶりはかーなーり有名だ。去年、西の国で武器が大量に無くなったことがあってさ。現在も武器の行方の謎は迷宮入り。あれも、隣国が『武器があったら都合が

悪いから』ってクウヤが受けた依頼なんだよ、な？」

話を振られたクウヤは、遠い目を思い出すように「そういえばそんなこともありましたねー」と心底つまらなさそうに言った。

「でも」

カノンがソファーに深く座り直す。

「ヤエは生きている。どういうことだ？ お前はヤエの暗殺を頼まれたんだろ？」

問われたクウヤが息を吐く。溜息に近かった。

「ちゃんと、そりゃあもう完璧に殺しましたよ。一秒も苦しまなくて済むように、こっ……」

手で銃の形を作り、カノンの額に向ける。

「ぱーん！……ってね」

「じゃあどういうこと？ クウヤは失敗したの？」

シオンは訳が分からず続きを尋ねる。

カノンも何も言わないが、クウヤの顔を見る。

「殺す前にね、少し話をしたんです。本当はすぐ殺すつもりだったんですけど」

「よく捕まらなかったな」

「ええ。その時ヤエが言ったんです。『貴方は私を殺してくれるの？』って。僕、訳が分からなくて、取りあえず『そのつもりです』

って返事しました。そしたら笑うんですよ、その子。嬉しそうに」

カノンとシオンが怪訝そうな顔をした。

訳が分からない。二人とも同じ感想を抱いた。

「『なんで嬉しいんですか？』そう聞くと、ヤエは答えました。『

やっと解放されるからよ。こんな生活から。もうヤエのお芝居なんてうんざり。あいつらは使い物にならなくなったらすぐに新しい子を連れてくるの。前の子も、ここから逃げたそうとして殺されたわ。それで私が来たのよ。どうせいつかは殺されるのなら、あいつらなんかよりも自分の意志で貴方に殺された方がマシだね。私の言うことが分かる？ 殺人犯さん』ってね」



時計の秒針の音がいやに耳に付く。

カノンが口を開きかけて、また閉じた。

代わりにシオンが答える。

「つまり、『ヤエ』の身代わりの人をクウヤは殺したの？」

クウヤがこの場に相応しくなくらい完璧な笑顔で頷く。

「正確に言えばヤエは、ヤエ・アルヴェルトはこの世に存在しないんです。後で分かったんですが、アルヴェルト家にはその当時跡継ぎが居なくて、当主の命が狙われることが多々あったそうです。それで、仮の娘を造った、と。だから今のヤエ・アルヴェルトも」

「じゃあ」

カノンがやつと話す。

「じゃあ、ヤエはいくら殺しても存在し続けるって訳だな。それでお前は依頼に失敗したことになるって、殺し屋に追われていると」

「ちゃんと、説明したんですよ？でも、こんな依頼をしたと口外されては敵わないって言って追っかけてくるんです。本当最悪ですよ」  
そう言って、苦笑いのクウヤ。

すっかり冷たくなった紅茶を飲んで、天井を見上げるカノン。

「となると……今回の誘拐の犯人はヤエの自作自演か？」

「でしようね。恐らくノエルが生まれたことによって自分が殺されると勘づいたんでしょう」

シオンはそんな物騒な話を続ける二人を見つめ、今の話を整理しようと思つた。

\*\*\*\*\*

「お待たせいたしました。旦那様より許可を頂いてきました」  
「どうも」

走って戻ってきたのか、ウェンは少しだけ息を切らしていた。

「ご案内させていただけます。まずどちらへ行かれますか？」

「そうですね……………ヤエお嬢様と、明日のことについて話をしたいのですが、よろしいでしょうか」

「もちろんです。では、こちらになります」

ドアが閉まる。

【09/02 16:02】

21・始(後書き)

始まりの夕暮れ。

【09/02 16:20】

扉に向かって軽く叩くと、部屋の中から可愛らしい声が聞こえる。  
「失礼いたします。先日申しました便利屋のカノン・ソリティア様  
がお嬢様と話がしたいと」

「どうぞ。カギは開いています」

丁寧にウエンがドアを開けると、そこは白とピンクを基調とした  
実に女の子らしい部屋だった。

カノンがぼーっと部屋を見ていると、茶色の髪の毛に碧眼の女の  
子が立っていた。

「初めまして、便利屋さん。ヤエ・アルヴェルトです」

「どうも。街外れの便利屋、カノン・ソリティアです」

ウエンがヤエに深々とお辞儀して、部屋を出ていく。

「では、私は仕事に戻りますので、何か御座いましたら先程ご案内  
いたしましたシーツ室まで……」

「はい。わかりました」

カノンがそれを目で追って、ドアが完全に閉まりきったところで  
息を吐く。

そして耳を澄まし、ウエンが遠ざかったのを確認して話す。

「あんたも大変だな、こんな重苦しい空気の中にいて。何人目かの  
ヤエ・アルヴェルトさん？」

一瞬驚いたヤエだったが、すぐに答える。

「もう随分とヤエにも慣れたわ」

二人は昔からの友達のように笑いあった。

「どうぞ座って」

部屋を見渡しながら椅子に座る。カノンはティディベアがたくさん  
置かれた、いかにも女の子なベッドを見て素直に驚いていた。ぬい

ぐるみの代わりに本が枕元に散らばる自分の部屋とは大違いである。「便利屋さんは私のこと、何処まで知ってるの？」

「うーん……元の名前はサラー。ワルツ孤児院出身。元の髪の色はブロンド。血液型はOで誕生日は四月三日。身長はおれより少し高いから百六十三センチってところかな？」

「お見事ね。『お父様』でもそんなには知らないと思っわ。私のことは無関心だから」

「弟が出来たしな」

そういうと、ヤエモといサラーはまた笑った。

「こんなに本音で話す人は久しぶりだわ。もつとお喋りしない？」

「そうだなー」

「何でも聞いて。なんなら金目のモノの在処も教えるわ」

冗談めかして言ったが、サラーは半分本気だった。

カノンは、先程ウエンに執事室へ案内されて行ったとき、執事長であるカリベから、犯人の手がかりになるからと無理を言っ貸して貰った、例の白い封筒に白い便せんで書かれた誘拐宣言をサラーに見せた。

「これを書いて『旦那様』に送りつけたのはお前か？ サラー」

何かを試すような物言いだった。

「いいえ、違っわ」

思っていた答えとは違うことをサラーははっきりと答えた。

カノンはちよつと驚いたようだったが、次は言い方を変えて聞いた。

「じゃあ、これを書いて『旦那様』に送りつけた人を知っているな？」

確信のある聞き方だった。

につこり笑って、サラーは答える。

「もちろん知っているわ」

\*\*\*\*\*

【09/02 13:35】

「でも、なんか変じゃない？」

シオンが瞑っていた目を開けてカノンに向けた。

クウヤがビスケットを食べながらシオンの方を見る。

「どうして？」

「だって、アルヴェルト家には男の子が生まれたんでしょ？ 名

前は……なんだっけクウヤ」

「ノエルだよ」

「そう、ノエル。ヤエが当主を守るために造られた偽物の人間なん  
だったら、アルヴェルト家を継ぐのは必然的にノエルになる。そう  
ならいくら誘拐宣言が送られてきても、わざわざ姉さんに犯人逮捕  
なんか頼まないよ。跡継ぎはノエルで、ヤエはもういらないんだし  
どこにでも連れてつてもらえばいいじゃん。いままでも殺したりし  
てたんでしょ？ じゃあ誘拐されても困らないし、そもそもこれ  
がヤエの自作自演だしたらアルヴェルト家に見れば万々歳じ  
ゃない？ だって自分から出ていってくれるんだから」

「お前、さらっと凄いな」

「カノンの性格が感染したんじゃないですか」

カノンがクウヤに頭突きをかまして、シオンに尋ねる。

「じゃあお前はどうか考えるんだ？」

シオンはうーん、と声を出して続ける。

「えっと、つまり、誘拐宣言を送りつけたのはヤエじゃないよ。誰か別の人なんだ。きつとアルヴェルト家にとつて心当たりのある人なんだよ。だから犯人の始末を姉さんに頼んだんだ。だって誘拐宣言は『9月3日深夜、ヤエ・アルヴェルトを連れ出す』でしょ？」

その人はヤエを逃がそうとしてるんだよ」

カノン は納得したようにシオンを見る。

クウヤはそんな二人を見つめて、さっきまでのわざとらしい笑みではない別の笑顔になる。

「その方がしつくり来ますね。もしかすると、その犯人はアルヴェルト家に深く関わってた人なのかもしれないよ、カノンさん」

「ヤエを連れ出すとともに、アルヴェルト家の裏事情まで持ち出されるかもしれない。それを恐れて、おれに始末するように頼んだ……つてとこか」

そのあとの行動は早かった。いまのヤエとなっている少女の情報を情報屋から聞き出し、そこでサラーと言う子の存在を知った。

そしてもう一つ、意外なことを情報屋から教えて貰った。

ワルツ孤児院出身の青年がアルヴェルト家で下働きしているらしい。

その人の名前は、

\*\*\*\*\*

「この誘拐宣言を送ったのはウエン・クロスフット、お前の知り合  
いだな」

夕暮れはサラーとカノンの髪を朱色に染めた。

「そうよ。この家にいる必要が無くなったから」

「ノエル・アルヴェルトか」

「ええ。ここにいてもどうせ殺されるだけだわ。だからウエンに頼  
んだの。でも『お父様』は何か感づいたようで、貴女に依頼をした  
みたいけどね」

カノンはやれやれと言った感じで肩を落とす。

「やっぱりシオンの言った通りか。」

「軍に連絡していないのもそういうことか」

「そうね。身内間で終わらせたいみたいよ」

「そう言ったサラーに、カノンは言いきった。

「良いよ。手伝ってやる。お前の脱走劇を」

【09/02 17:30】



22・名(後書き)

会合は夕暮れと共に終わる

【09/02 17:50】

「お忙しいところ失礼しました」

カノンがシーツ室でウエンに挨拶する。

「もうお嬢様とはいいいんですか？」

ウエンはカノンを伺うように訊く。シーツ室は、シーツしかしまつていないと言うのに無駄に大きくて、カノンの家の応接間よりも大きいくらいだった。

「はい。あ、それで屋敷の人全員に伝えて欲しいんですが、今日から明日の朝、おれが来るまでなるべくヤエお嬢様を部屋から出さないように、と」

「は、はあ」

「その方が、犯人にとっては都合が悪いと思うので」  
「分かりました」

畳みかけていたシーツを置いてウエンが答える。心なしか俯いている。

サラーと話していて分かったことだが、サラーを連れ出すのはウエンの役目だったらしい。

サラーとウエンは、ワルツ孤児院時代からの仲で、兄妹のように仲が良かったらしい。

きっとウエンは、妹のように可愛がっていたサラーが殺されるのを、黙ってみていられなかったのだろう。

「あと」

「はい？」

「これは屋敷の人に伝えなくて良いんですが……貴方はもう何もしないで下さい。おれが全部やります。きっと上手くいきますよ」

上手にウインクをする彼女を見て、ウエンは目を丸くする。そし

て彼女の顔を凝視する。

「あ、」

「じゃあ、また今度」

何かを言い掛けたウェンを無視して、カノンはくるりと方向転換する。

無駄に長い廊下を足早に、屋敷を出た後は家までの道のりを走った。

一度振り返ったが、大きな門が閉じられていくのが見えただけだった。

「あははっ」

なんだかおかしくなって、カノンは少し声に出して笑う。

家に着くと、シオンがドアの側に座り込んでいた。

\*\*\*\*\*

【09/03 10:00】

今度はブザーをならさなくともカリベが門のところで出迎えていた。

「お早う御座います」

「どうも。で、おれはどうすれば良いんですか？」

「先日申しましたように、主にお嬢様の護衛をお願いします。もし

も犯人を見つけましたら、その時は……」

「始末すればいいんですね」

「その様に」

カリベの後ろを付いて歩く。

カノンは昨日二人で喋ったヤエの部屋を見つめた。

「誘拐宣言では今日の深夜でしたね。おれが来るまでちゃんと部屋から出さないようにしましたか？」

「もちろんです。昨日からお嬢様にはなるべく部屋を出ないように言っておりますし、警戒態勢も最大です。お嬢様の部屋の前には腕の立つ護衛人を2人立たせております」

「流石ですね」

カノンはまた作ったような完璧な笑顔で笑った。

小声で後でサラアを殺そうと思ってる癖に、と誰にも気づかれなように呟いた。

屋敷へ入ってすぐに、カノンはヤエの護衛につくことを命じられた。

カリベからはこの屋敷の地図と（地図には護衛人達の配置図などが記されていた）、何かあればこれで連絡を、と無線を渡された。

何か宝の地図でも見るかのようにくるくると見る方向を変えてカノンは笑う。その様子は新しい玩具を与えられた少年のようだった。

そんなカノンを無視して、カリベは扉を軽く叩く。

「お嬢様、便利屋をお連れしました」

ノックするカリベの両側にはドアを囲むように二人の体格のいい男が並んでいる。おそらく、この二人も護衛人なのだろう。

「どうぞ」

中から声が聞こえ、ドアを開けるとヤエが立っている。

「おはようございます、ヤエお嬢様」

お互い丁寧に礼をして、けれど他人からは見えないところでくすりど笑いあった。

まるで古くからの友人同士のように。

「あ、カリベさん」

部屋へ入りきる寸前にカノンがカリベに声を掛ける。

「何でございましょうか？」

「後でウエンさんをこの部屋に呼んでくれませんか」

「ウエンを……それは何故？」

「あの人、とっても頼りになるんで」

笑顔で返すカノンに、こちらも笑顔で答えるカリベ。

「……かしこまりました」

ドアが完全に閉まりきり、昨日の様にカリベの足音が遠ざかったのを聞き届けてヤエが不機嫌な顔でカノンに言う。

「下手くそ」

「演技が？」

「両方」

カノンが困ったように笑った。

ウエンが部屋に来たのは、それから数分も経たない内だった。

三人は頷きあい、机を囲む。

机に広げられた地図にはペンで色々な場所にマークが付いている。

「さあ、脱走劇の始まりだ」

23・劇(後書き)

必ず、逃がしてあげる

「旦那様、やはり便利屋はウエンに寝返った様です。先程、お嬢様の部屋にウエンが入りました。部屋には便利屋とお嬢様とウエンしかおりません」

「そうか」

重厚な作りになっている部屋には様々な装飾品が飾られており、壁には珍しい剥製や絵画が掛けられていた。

その部屋に、カリベと旦那様と呼ばれたヤエとノエルの父であるバン・アルヴェルトが話をしている。

「カリベ。ウエンと便利屋にはあの無線を渡したか？」

「もちろんです。これで部屋の会話は全て聞き取る事が出来ます」  
そう言つてカリベが取り出したのは盗聴機だった。

ウエンとカノンに渡した無線には、万が一のために盗聴機が付けられていた。それに気付かず、カノンは話し出す。

『……さあ、脱走劇の始まりだ』

ノイズ混じりで少し聞こえにくいのが、会話をお聞き取るには十分だ。

カノンの犯行声明ともとれるそれを聞いて、バンはニヤリと卑しく笑った。作戦は常に筒抜けだった。

『まずは逃げ道の確保だ。ウエン、ペンを貸してくれ……………この屋敷は随分と入り組んでいるから、死角が多い。これを利用する』  
そしてペンを走らせる音が聞こえる。

「ふははは、この作戦が敵に漏れているとも知らずに……………便利屋も大したことないな」

「全くです」

同意するカリベもまたいやらしい笑みを浮かべている。

『そしてこの道を使う』

『なるほど、中庭を横断ですか』

『……ウエンには、この辺に人が来ない様に上手くやってもらいたい』

『わかりました』

『……だけどコレだけじゃ、まだ完璧とは言えない。』

『……まだ？』

『これくらいのはきつと向こうも予想していると考えてもおかしくない』

カノンとウエンの声が交互に聞こえるその会話の中で、カノンの声が一呼吸置く。それと同時に二人は笑うのを止める。

「ただの馬鹿ではないようだ」

二人して、盗聴機に耳を近付ける。カノンはドアの向こうにいる護衛人二人に聞こえないように小声をさらに小さくして話す。

『そこで、敵を攪乱させる為におれとヤエが入れ替わる』

『私と便利屋さんが？ どういうことですか？』

「……入れ替わる？」

奇妙な提案に部屋の二人が顔を見合わせる。バンはさらに耳を近づけた。

『おれがヤエの変装をして、中庭とは反対方向に逃げる。その間にウエンが予め人を追い払っておいた道を、おれの姿をしたお前、ヤエが逃げる』

『……なるほど！ 敵が便利屋さんに集中している間に逃げるんですね！』

「そう言う事か。悪くない作戦だが」

バンに合図され、カリベが頷く。作戦さえ分かれば対処のしようがあるというものだ。

「屋敷の者全員にこのことを伝えて来ます」

「頼んだぞ……ん？ ちょっと待て」

盗聴機からカノンの声が聞こえる。まだ話は続いていた様だ。

『誘拐宣言には深夜に連れ去ると書いていたな？ 確か護衛人が一』



度だけ作戦を立てる為にこの部屋に集まる時間があったな、ウエン』  
『……はい、午後三時に一度。ヤエお嬢様の部屋に集合とこのことで  
す』

カノンが地図を片付けているのか、盗聴機に雑音が混じる。

『よし。その少し前に、おれの姿をして逃げるヤエ』

『わかったわ』

『……そうだな、あまりここに居ると怪しまれるからウエンは戻って……アルヴェルト家を出し抜いてやろう』

バンが堪え切れずに笑い出す。部屋が響く。

「カリベ、屋敷の者全員にこう伝える。決戦は午後三時に変更だ、  
と」

「かしこまりました」

「もちろんウエンを除いてな……」

カリベが部屋を出て、バンの卑しい高笑いだけが響き渡った。

24・漏(後書き)

逃げるんだ、この世界から

【09/03 14:45】

「あと少し……」

時計を見て呟く。

今、ヤエの部屋にはカノンとサラアの二人しかいない。

「じゃあ、そろそろ」

カノンが立ち上がる。作戦決行。カノンと見せ掛けて、入れ替わったサラア、『偽のカノン』がドアノブに手をかける。

「気をつけて」

サラアの茶髪に似たカツラを付けたカノン、つまり『偽のヤエ』が言った。

入れ替わった二人は緊張した面持ちで笑いあい、これからのことを想像する。

うまくいくだろうか。二人の考えていることはまったく同じだった。

そんな思考を邪魔するかのように、扉が開け放たれる。

「どちらへ行かれるのです？ 便利屋殿」

そこにはアルヴェルト家当主、バン・アルヴェルトが立っていた。横にはカリベがいる。

いや、カリベだけでは無い。屋敷中の腕のたつ人間が揃っていた。

あくまで冷静に答えるヤエ。

「ちよっとトイレに」

「少し待ってもらえますかな？ 今から今晚のことについて話し合わないといかんです」

偽ヤエが慌てて口を挟む。

「ですがお父様、まだ三時にはなっておりませんわ。少しくらい」

「ヤエ、お前は黙ってなさい」

有無を言わさぬその言葉に、偽カノンは渋々部屋へ戻るしかない。部屋にはざっと十五人余りが入った。

逃げ道は、一つしかない。カノンとヤエが、目配せをする。

そんな二人を見て、バンは余裕の笑みを浮かべながら二人を追い詰める。

その距離を保とうと、カノンとヤエは一步、また一步と後ろへ下がる。

出口は一つ。しかし今はたくさんの人で塞がれている。となるとあとはベランダの窓。ここは二階。ベランダの下は作戦の中庭。

出口は、それしかない。

「走れヤエ！」

カノンの声が響く。それと同時にバンも叫ぶ。

「便利屋の方を追い掛ける！ こっちは偽者だ！」

半分以上が、カノンに扮したヤエを追うために窓の外へと出ていく。部屋が少し広くなる。

バンが嬉しそうに笑う。カリベも笑った。

「便利屋、私から逃げられるとも思ったのか？ 愚かな奴め。私  
が一体何人のヤエを葬ってきたと思ってる？ 今更あいつを殺す事  
など大して気にもならん」

「いつかはきつと軍にもバレるさ！ そうすればお前は終わりだ！  
カノンが叫ぶ。それを聞いてバンが鼻で笑う。

「はっ！ 軍？ 金に目が眩んだ馬鹿な奴等の集まりのことか？  
あいつらには私が金を渡している。どうにでもなるわ」

ヤエの姿をしたカノンは下唇を噛み締めた。作戦は筒抜けだった。  
「くははは！ 少々詰めが甘かったな」

満足そうに笑うバンを見つめ、カノンはカツラを脱ぎ捨てる。ヤ  
エと同じ髪色をしたカツラを片手に、こちらも満足そうな笑みだっ  
た。

「……それは、どうでしょう？」

\*\*\*\*\*

「居たぞ!」「こつちだ!」

「回り込めっ!」

中庭を抜けきり、門まだあと少しのところまで八人のアルヴェルト家の者に囲まれた。

「そんな……!」

カノンに扮したヤエが叫ぶ。

護衛人の一人が息を切らしながら言う。

「残念だったなあ、お前らの作戦は筒抜けだったんだよ」

「さあヤエ様。良い子だから屋敷へ帰りましょうね」

ふざけた台詞に護衛人らが一斉に笑う。それを見て偽カノンが肩を震わす。

「おやおや、泣いても駄目ですよ?それとも悔しいんですか?」

「……………ふふふつ、あは、あはははは!」

真黒なブレザーを脱ぎ捨てながら笑う。小豆色が白いカッターの上で揺れる。

「とうとう可笑しくなったか? なあ、おい。とつとと屋敷へ連れか、えっ……………え?」

そう言っ彼が振り替えると、そこに仲間の姿は無かった。ただ倒れた人間が七人。

そして、

「あははっ！ まだ気が付かないのか？ ほんつと馬鹿な奴等だな  
ー」

「な！？」

カノンが言った。

ヤエが扮したカノンでもない。

偽者なんかじゃない、本物のカノンが言った。

「生憎、おれは変装が下手な便利屋なんでね」

「なっ……ほ、本物はあつちか！！」

急いで無線を入れる。

「そちらが本物のヤエです、旦那様！ 旦那様！？ 返事を！ 旦那様！」

返事はなかった。

「特別あんたに、良いことを教えてやるよ」  
カノンはいつもの様に不敵に笑った。

\*\*\*\*\*

「そちらが本物のヤエです、旦那様！ 旦那様！？ 返事を！ 旦那様！」

無線が静まり返ったヤエの部屋に響く。

カリベが、無線を両手から落とす。

しかし誰もそれを拾わなかった。いや、拾えなかった。

部屋にいた全員が固まっていた。

沈黙を破るかのようにバンが声を出す。

「これは、どういう、ことだ？ あつちが偽者？ なら私は、何を  
見ているんだ？」

「やー……。どうもすみません、イレギュラーの登場で」

カツラの下から現れたのは、皆が予想していた金髪じゃなく、漆  
黒の闇色だった。

「初めまして、世外れの都合屋です。以後お見知り置きを」

クウヤがその濃い緑の目を細め、笑った。

【09/03 15:00】

25・笑(後書き)

嘘塗れの脱走劇。



中庭を抜けた門の手前で背の高い男と、金髪の少女が向かい合っていた。その二人を囲む様に人間が倒れこんでいる。

「便利屋をなめてもらっちゃー困るなあ」

少女の方、カノンがポケットから無線を出して地面へ落とした。

ガシャンと嫌な音を立てて、無線はその役目を失った。

「こんなバレバレの盗聴機を付けられて、気付かない裏町業者がいるかってーの」

「そ、れじゃあ……」

「そうさ。おれたちはあんた達にわざと情報を流した。偽の情報をな。もちろん本当の会話は筆談さ」

あのペンを走らせる音は、逃げ道をなぞるモノではなかったのだ。男は力を失ったように膝を折り、座り込んだ。

そこで気が付く。

こちらのヤエが偽者ならば、本物は向こうだ。

「しくじったな、向こうにはまだ半分の護衛人が待機している！  
今頃本物のヤエは、捕まって……ひっ、く、来るな！」

カノンはにやりとした笑みを隠さずに、じりじりと確実に男へと歩み寄る。

「お前、まだ気が付かないの？」

男との距離が数センチと言うところで、カノンは男の目線に合わせる様にしゃがんだ。

「思い出して見ろよ。ヤエの……いや、サラの目はあんなにも深い碧色だったか？ 少し青色に近い碧眼だったろ」

男が首を降る。

「そんなの、覚えているわけ、ガッ」

すると辺りにいる人間と同じ様に男も倒れ込んだ。

カノンが男の首に手刀をかましたのだった。  
「だろうね。悪いけど、あんたに構ってる暇無いんだ」  
カノンは倒れた男の手に握られた無線を見つけ、らっきい、と笑った。

\*\*\*\*\*

「そんな！ アルヴェルト家の護衛人達が……一瞬で!？」  
予想もしていなかった異常事態に、カリベの顔がうつすらと青褪める。

「大丈夫、殺してませんよ。こんなにたくさんの人に囲まれると都合が悪いんで、ちょっと気絶して頂いただけです」

クウヤの周りには先程のカノン同様、倒れた人間が数名居ただけだった。

「都合屋だと！ これは一体どういうことだ!？」

部屋はバンが怒りをあらわにして叫ぶ声で反響した。

「ご希望でしたら一から説明しますよ」

その向かいで、カツラを被る為に下ろしていた髪の毛を縛りながらクウヤが言う。けろりとした態度にバンはさらに怒り狂った。

「貴様ア！ 私を馬鹿にしているのか！」

「えー？ 親切で言ったのに酷いですね」

「五月蠅い!！」

「わあ怖い怖い」

クウヤが可笑しそうに言う。

しかし、からかいすぎてしまったらしい。バンは今にも掴みかかっ  
てきそうな勢いだ。

どうしたものとクウヤが頭を掻くと、そこで誰にも拾われるこ  
とのなかった無線に音が入った。

「……クウヤー、聞こえるかー？」

名前を呼ばれたクウヤがぱあつと顔を綻ばせて嬉しそうに笑う。

正直、同じことしか言わないバンが鬱陶しくて仕方なかった。軽  
やかにと無線へと近寄って話す。

残されたバンとカリベはそれを見守ることしか出来なかった。

「聞こえてますよー、カノンさん。こっちは作戦通りです」

「よっしゃ。それで種明かしは？」

「したいけど、なんか怒ってばっかりで怖いんですよー」

泣き真似をしながらクウヤはさも向こうが悪いといわんばかりに  
カノンへ告げ口をする。怒らせたのはどのどいつだというつつこ  
みはどこからも聞こえない。

無線の向こうでカノンの溜息が聞こえた。

「お前なー……もう十五だろ？ 男なら自分でなんとかしろ」

「残念。まだ誕生日が来てないので十四歳でしたー。そんなことよ  
りカノンさん、早く来てくださいよー」

「はあ、後ろ」

「え？」

クウヤが振り返るとカノンがドアに寄りかかって、そこにいた。  
バンが怒りで肩をふるわせる。

「べ、便利屋！ よくも騙したな！」

「嘘つきは裏町業の始まりってね」

カノンがすたすたとカリベの横を通ってクウヤの隣に立つ。

「さて、アルヴェルトさん。まず何から訊きたいですか？」

場は完全にカノンに支配されていた。

答えない主人の替わりにカリベが問う。

「ヤエは、どこなんだ」

クウヤが驚いた顔をする。

「あつれー、まだ気付いてなかったんですかー？ ヤエならもうこの国にいませんよ？」

「何だとお！？」

バンが叫ぶ。顔は血が上り、真っ赤になっていた。

「そうだなあ。まずはおれたちの作戦から教えてやるよ」

カノンが部屋に散らかった椅子をたてかけ、優雅に座る。

口から紡がれるのは「完璧な脱走劇の物語さ」

## 26・語(後書き)

昔々、ある便利屋と、囚われのお姫様がいました。  
お姫様は、その時から偽物だったのです。

「九月二日、午後四時頃におれは護衛の下見と称してここへ来た。ヤエを逃がす為にな」

バンとカリベはただただ手の内を明かす2人を凝視している。

便利屋と呼ばれる十代半ばにしか見えない少女と、そんな彼女よりもさらに幼い、まだ十四だと言った都合屋の少年を。

「おれはウエンに案内してもらい、ヤエに会った。部屋には二人きり。そこでまずおれがしたことは、ヤエとおれの交換だった」

クウヤがカノンの後を次ぐ。

「つまり、あの日貴方達が門から見送った便利屋は、既に入れ替わったヤエだったんです。僕たちは店でカノンさんの変装をしたヤエを迎え、この街から逃がしました」

カリベがそれを聞いて口を挟む。

「なら昨日、便利屋……いや、ヤエが屋敷の者全員に部屋から出ないように言ったのは……」

「ヤエに化けたおれが屋敷の人間と会う事でボ口を出さない様にするために、おれが言わせたんだ。おれは成り代わりが苦手だからね」  
クウヤが拾った無線を机の上に置きながら言う。

「そしてサラアを逃がした後、僕はカノンさんの振りをして午前十時丁度、貴方との約束通り来ました。そうですね？ カリベさん」

あの時、門で便利屋を出迎え屋敷へと入れたのはカリベだった。

「そん、な。あの時、便利屋に何も違和感なんて」

「あるわけ無いだろ。クウヤは成り代わりが得意分野の都合屋なんだから」

「し、しかし幾ら見た目を変えても」

バンが言い切る前にクウヤが答える。

「声までは変えられない、そう言いたいんですね？」

クウヤが答えたはずだった。しかし誰もが今の発言を疑った。何故ならその台詞を言った声がヤエの声だったからだ。

「だから言ったろ？ 得意分野だって」

カノンが満足そうに答える。これ程まで見事に引っ掛かってくれるとは騙し甲斐がある。

「そして九月三日、つまり今日に盗聴機の付いた無線に向かい、おれとヤエが入れ替わるという嘘の情報を流して脱走劇の完成……あ、でも半分は本当のことを言ったな。クウヤとヤエが入れ替わってた」

いひひつと笑いカノンが椅子から立ち上がる。

バンとカリベは納得のいかない表情を浮かべている。

「この攪乱作戦には三つ意味があつてね」

カノンの隣りでクウヤがワンピースを脱ぎ捨てる。

下には既に服が重なっていて、カノンとは少し違った濃紺のブレザーとズボン、白いカッターにネクタイはなかった。

どうやらそれが仕事着らしい。

「一つ目はあんた達の戦力をバラバラにすること。二つ目は……おい、クウヤ」

着替え終わったクウヤが先程まで着ていたワンピースのポケットからテープレコーダーを取り出し、再生ボタンを押す。

酷いノイズの後、お目当ての声は響いた。

『……便利屋、私から逃げられるとも思ったのか？ 愚かな奴め。』

私が一体何人のヤエを葬ってきたと思ってる？ 今更あいつを殺す事など大して気にもならん。……いつかはきつと軍にもバレるさ！

そうすればお前は終わりだ！ ……はっ！ 軍？ 金に目が眩んだ馬鹿な奴等の集まりのことか？ あいつらには私が金を渡している。どうにでもなるわ』

テープを聞き終わってバン・アルヴェルトの顔が青ざめた。

カリベが目を丸くしてクウヤを見つめる。

確かにあの時、自分はヤエに化けた便利屋を追い詰めたつもりだ

った。

現にさっきのテープに録音されている声も便利屋の声だ。

しかし、あの後脱ぎ捨てられたカツラの下には、目の前で笑う少年がいたのだ。まんまとこいつらの手の上でおどらされていたのだ、我々は。

カノンの代わりにクウヤが後の言葉を次ぐ。

「二つ目は、貴方の自白を録音するためですよ、バン・アルヴェルトさん」

「流石の軍もこのテープを聞きゃあ黙って無いよな？ そうじゃなくても、おれがこのテープをばらまくことで、国軍が賄賂を受け取っていたことを一般市民の皆さんに晒すしね。そして三つ目は、ウエン・クロスフットを此処から逃がすための時間稼ぎ」

「なんだと？」

慌ててカリベが倒れた護衛人達を見る。

この部屋に入った時には捕まえやすいよう、ウエンも一緒だった。しかし。

「いません！ 何処にもウエンが！」

「い、急いであいつを」

「捜しても無駄です」

クウヤが釘を刺すように言う。

「今頃サラーと同じ様に違う街へ向かっているでしょうね。シオン君が上手くやってくれたはずですよ」

「はは、ははは……」

力無く笑うカリベに、うなだれるバン。

楽しそうなカノンと、飽きてきたのか、つまらなさそうに欠伸をするクウヤ。

「さて、おれから提案があるんですけど、大人しく聞いて下さいね。心配しなくとも皆が幸せになれる万々歳な提案ですよ」

クウヤが少し呆れ顔で彼女を見る。

「おれはこのことを一切誰にも口外しないし、このテープを誰にも



渡しません。しかも報酬金五十万もいりません」

商売文句のように滑らかに、素晴らしい笑顔で言い切る。

「あ、当たり前だっ……！ 誰がお前なんか金をはら」

「うっせえな。おれが喋ってんだから黙って聞けよ。頭に穴開けて風通し良くさせてやるーか？」

静かな怒りを感じさせる言葉が響き渡ったところでその場の空気が固まった。息をする音すらも聞こえない。

そんな中、カノンだけが呆れたように声を発する。

「……クーウーヤーくん。おれの声真似して物騒なこと言うのやめてくれない？ これじゃあどっちが悪役か分からないんだけど」

「だってこいつらが五月蠅いのが悪いんですよー」

「おれらは脅したいわけじゃねーの。ちゃんと話し合いたい」

「ちえー」

二人が話している隙に、気を取り戻した護衛人の一人が二人の背後に静かに回り込み、クウヤに銃を向けた。

「あ？」

しかし狙いを定めたはずの先にはクウヤの姿は無く隣りにいたカノンだけが見えた。それどころか、握り締めて居たはずの銃すら手元に無い。それが分かったその瞬間

ぱん

「ひい！」

「わっ！ 動かないで下さいよ、もー。折角人が苦しまずに殺してあげようと思ったのに」

クウヤの撃った弾が護衛人の頬を掠った。回り込んだつもりが逆に後ろを取られていた。

クウヤの銃をよくみると、ソレが自身の持っていた銃だと気付きたただ怯える。

「それともじっくりゆっくりちよつとずつ壊されたいんですか？」

「や、やめてくれ！」

「……そうですね、まずは手始めに五感から潰しときます？ 例えは目とか！」

「!？」

恐怖で固まった彼に対してクウヤは楽しそうに笑いながら目から一直線上に銃口を向ける。

心底楽しそうに。

「あ、あ……悪魔……！」

「えー目は嫌ですか。じゃあどこにしようかなー」  
今度は口の中に銃口を移動させる。

「あ……いやだ、……死……しにた、く、ない！」

そこでクウヤの、無機質な笑顔が消えた。  
代わりに、吹き出す。

「ぷっ、あははははっ！ ごめんなさい嘘です。これに懲りて変な真似しないで下さいね」

命乞いをする護衛人を放っておいて、カノンの横に戻る。

その前にもう一度、忠告をする。

「あ！ 次こんなことしたら」

「は、はいっ！」

手元のナイフを取り出し、クウヤが綺麗な笑みを浮かべて言う。

「わかってますよね？」

恐ろしい台詞は笑顔で言われるほど怖い。

その台詞に実力が伴っていれば尚更だ。

護衛人はまるで石像の様に固まったまま、そこから動かなかった。  
動けなかった。

カノンはそんな憐れな彼を横目に、

「お前って悪役似合ってるよな。心底味方で良かったと思う」

ポツリと言った。

装飾が施されたナイフをしまいながらクウヤは驚いた表情を作る。

「そんな酷い……！ 僕はカノンさんの為に頑張ったのに……」

「あんなに楽しそうにしておいてどの口が言うか」

「えーんえーん。威嚇の為に仕方なくやったんですよ、あれは」

泣き真似をするクウヤを横目に、カノンはもう一度バンに向き合  
う。

バンは先程のクウヤの異常さにあてられ、縮み上がって居た。

「お、お前ら！ ななな、なにが望みだっ！？」

「だからー取引ですよ。取引。おれたちは貴方がたのことを未来永劫、口外しないと約束する代わりに、貴方がたはサラーとウエンには手を出さないと約束をして欲しいわけですね。アフターケアまでやってこそ真のプロってやつでしょ？」

言っときますけど、おれやクウヤに手を出したら返り討ちに遭いますからね……ってコレは身を持って知ったか」

「僕はか弱いただの都合屋ですよ？」

カノンに目を向けられたクウヤはまるつきり訳が分からないという表情を作る。

「……さてバンさん。お互いに大変な爆弾を抱えられていると思いませんか。こちらはテープのお陰で命の保証がある。貴方達はテープのせいでおれ達を殺せない」

ねっ？ と笑うクウヤとカノンを、うなだれて見つめることしか出来ない。

「……くそ……！」

バンの発した声は部屋で反響した。それだけだった。

## 27・悪（後書き）

ご来場有難う御座いました。  
本日にて『嘘塗れの脱走劇』の公演を終了致します。  
またの機会をお待ち下さい。

【09/03 17:50】

小さな家の前ではシオンが体を丸めて座り込んでいた。夕焼けが彼の背中を包むように白いシャツを朱に染める。一人きりでカノンとクウヤの帰りを待つのが心細いのか、シオンは何度か目を擦る。

その様は年相応で、こうしてみると普通の子供みただった。

「あ」

小さな丘の坂道を歩いて来る二つの影を見つけた。

その内の一人がシオンに気付き、大きな声を出す。

「シオン！ たーだいまー」

「姉さん！ おかえり！」

シオンは手を振るカノンに向かって走り出した。

\*

「で、どうだ？ そっちは上手くいったか？」

家に入りながらカノンが聞く。

「もちろんだよ！ ちゃんと言われてたメモも渡しておいたよ」

シオンは、午後三時を過ぎた頃に店を訪ねて来たウェン・クロスフットに、カノンに渡すように言われていた『頼りになる裏町業の友達』の電話番号を書いたメモを渡し、困ったことがあればそこへ

連絡するように言っておいた。

「シオンえらいー!」

「えへへ」

カノンに頭を撫でられ満面の笑みで喜ぶシオンを見て、クウヤは自分の飼っている白い子犬を思い出した。

姉弟っていうよりも親子みたいだ。口には出さずに微笑ましそうにその様子を見守る。

「クウヤー! 今晚泊まっていくだろ?」

いきなり奥から名前を呼ばれ、反応が遅れる。

「えっと、良いんですか?」

「泊まっていつてよクウヤ!」

シオンが嬉しそうに走り寄る。

「シオンの遊び相手になってくれるなら、ごはんもつける」

「泊まります」

「よっし、シオン。布団の用意! 一昨日に干したヤツ」

「はい」

ぱたぱたと階段を上がっていくシオン。あっちへ行ったりこっちへ行ったり忙しい。

その音を聞いて苦笑するクウヤ。

「昨日も思ってたんですけど、二年前とは大違いですね。随分賑やかで」

「だろ?」

カノンも釣られて笑う。

「あの日、お前にさ……あの日ってお前を雇った日のことなんだけど、この家が広過ぎるって言ったろ?」

「言いましたね」

クウヤが思い出して答える。

「あれ、前言撤回。やっぱりこの家狭かったよ」

それもかなり、と付け加えて笑うカノン。

こんなにも笑う日は久しぶりだとクウヤも笑った。

＊

「これは、一体、何事ですか？」

二階から降りて来たシオンが机の上に置かれた宝石だの指輪だの金品宝飾を指差して聞いた。

カノンは口笛を吹きつつシオンから目を逸らす。

クウヤが代わりに答えた。

「たぶん……これは火事場泥棒、というヤツです」

二人してカノンを見る。

「姉さん？」「カノンさん？」

「だってさー、報酬無しの依頼とかあ嫌だし？」

「語尾を伸ばすな語尾を！ ってかどういことですか！」

クウヤにしては珍しく大声で怒鳴る。

「駄目じゃないですか、勝手に人様の物を！」

「そつだよ姉さん！」

怒られるカノンが机に置かれたモノを二つに分け、若干少なめの方をクウヤに渡す。

「はい、お前の分。六四にしておいてやる」

それをいそいそと鞆にしまっくウヤ。

「まあアルヴェルト家と言えば、レスティナ有数のお金持ちですし、これくらい痛くも痒くも無いですよ。さすがカノンさん！」

「まあな！」

買取されたクウヤに呆れ顔のシオンだった。

裏町業者は侮れない。彼の記憶にはそう刻み込まれた。

その後は賑やかで楽しい夜を過ごした。

夕飯も食べ終わり、シオンとクウヤとカノンで一つしかないチーズケーキを賭けてトランプをした。シオンに負けず劣らず子供っぷりを発揮した二人が最終的に一番盛り上がった。いた。

結局負けてばかりのカノンが何度も「あと一回だけ」と再戦を申し込み、決着の付かないまま、三人とも疲れて知らぬ間に眠った。

翌朝、九月四日午前六時三十二分。

誰もいない居間には仕度の整ったクウヤがいた。



28・終(後書き)

誰にも知られずにじっとそりよ。

「よし。忘れ物無し」

クウヤが鞆のチェックを終わる。

それと同時に声が聞こえた。

「早いな。もう行くのか」

欠伸をしながらカノンが二階から降りて来た。まだ寝間着姿で髪の毛はひどい寝癖だった。

「はい。あんまり長い間留守にしているとペット達が心配なんで」

「しっかりした人に預けてるんだろ？」

「そうですね、カノンさんに言いましたっけ？」

「んー？ いや、言ってないなあ」

言いながらカノンが仕事机をガサゴソと探る。

「あ、あったあった」

「？」

どうやら手紙の様だ。

「おれ、人探しの依頼を受けてるんだけど、全然情報無くてさ。お前知ってたら教えてくれない？」

困っている人をそのまま放置するほど非道ではない。あっさりと了承するが、誰を捜しているのか分からないので力になりようがない。

「僕で分かる事なら……一体誰を探してるんですか？」

封筒を開け、手紙をみながらカノンが答える。

「名前はクウヤ・キリュウ……和国出身らしいから呼び方はキリュウ・クウヤか。」

二年程前から行方不明。当時通っていた学校もほぼ不登校って書いてある。漢字で書くと、桐に生きる空の夜で『桐生空夜』

そいつの居場所を知らないか？」

「……それは、新手の嫌がらせか何かですか？ それとも新しい冗談か何かで？ 結構面白かったですよ」

笑顔で答えるクウヤ。多少ひきつっている。

「いや、尋問と云うのだ。これは」

ふわあ、と二度目の欠伸をするカノン。

「えーと……僕、カノンさんに言ってみましたっけ？ その名前」

「言っていないな。おれはお前の過去を一切聞かされてないからな。

そんな怪しい奴なのに、アルバイトとしてお前を雇ってあげた二年前のおれってやつさしー」

「はあ……僕の名前、何処から聞き出したんですか？ あの情報屋にさえ制限かけてるのに……」

そうだよ、とカノンが怒った。タイミングが掴めない怒りだった。半分寝ているのかもしれない。

「お前、誰にも過去の素姓を知られない為に、情報屋に莫大な金注ぎ込んだらしいな。あれじゃあ蟻一匹すら入り込めない」

「一体誰に聞いたんです？」

ふふん、と三本の指を突き出して言う。

「さて誰でしょう。三択問題です。」

その1、おれの親友に聞いた

その2、おれの唐辛子トラップにまんまと引っ掛かった奴に聞いた

その3、道外れの始末屋に聞いた

さあ答えは？」

クウヤの顔が引きつる。そして肩を落とす。

「全部じゃないですか……。貴女の親友で、唐辛子トラップに引っ掛かった道外れの始末屋の馬鹿、レオラリアナに聞いたんですね？」

「大正解」

「あああああ、もー！レオラめ……あんなに口外すなって言ったのに！」

クウヤがあー、だの、うー、だのと唸る。

そんな彼を見てカノンはケタケタ笑った。

「レオラを責めないでやってよ。おれが脅したから」

「そんな！ 可哀想なレオラ」

「一気に同情か」

まあいいや、とクウヤに向かい合うようにソファアに座る。

「で。それは誰からの依頼ですか？」

「心当たり無いのか」

「有り過ぎます。でも一番恨み買ってるのは処理屋かなあ……いや、スプリングフィールド家？……もしかして、メイ・シヨウ？」

「あはははっ！ お前最初の二つってヤバいとこばっかじゃん」

カノンが手紙を封筒にしまい、クウヤに投げる。

落としそうになって、慌てて手を伸ばす。

裏表確かめるが、封筒に差出人の名前は無い。

中身を出し、読み始めるクウヤにカノンが答えを言う。

「依頼人の名前は、桐生朝飛。大切にされてるな、弟君」

驚いて、固まる。

久しぶりに聞く名だった。クウヤが丁寧に手紙を鞆にしまう。

「で、お前。言うことは？」

「……シンフォニア島のヴィヴァーチェ通りにある、二階建ての小さなアパートです。103号室。小さな島だからすぐに見つかります」

鞆を肩にかける。

心無しか、表情が明るい。

「依頼人に伝えていいか？ その情報。情報屋にも制限かけてたんだろ？」

「ええ。シオン君を見てたら、なんだか会いたくなっただんで」

「わかった」

カノンが立ち上がる。

ドアを開ければ、青い色が広がっていた。

「カノンさん、たまには遊びに来て下さいね。当分引越しの予定」

は無いんで」

「シンフォニア島って確か年中が春気候だったな。冬にシオンを連れて遊びに行くよ」

「はい、待ってます」

ドアから出ようとするカノンに、見送りはここまでで良いですよ、と言っ。

朝起きて独りぼっちだと、あの少年は泣いてしまっだろう。

「じゃあ、お元気で」

手を振るクウヤに、カノンも同じことをする。

「またな、クウヤ」

姿が見えなくなっ、やっと手を下ろした。

家に入ると、時計は七時を過ぎていた。

「シオン！ もうそろそろ起きな！」

「んー……あれ……クウヤはっ!？」

二階から返事では無い台詞が聞こえた。

その必死さに思わず苦笑する。

カノンはその質問には答えず、台所へと消えていった。

29・兄(後書き)

また、会えるを

その手紙が届いたのは、アルヴェルト家の騒動に巻き込まれる前。八月の最後の日だった。

「うわ、広告ばかり……あ、手紙だ。…姉さん！ 姉さん宛に手紙が届いてるよ」

ドアを閉めながらシオンがおれを呼んだ。玄関から戻ってくる足音は、少し小走りだ。

暑さに参っていたおれは、ソファアの上から動こうともせず、声だけを張り上げた。

「誰から？」

ぱたぱたと居間に現れたシオンは、手紙を確認してるのか、しばらく黙る。

「うーん、書いてない。中身に書いてるんじゃないの？」

「そうだな。シオン、ハサミ貸して」

「はい」

「さんきう」

封筒を丁寧に切り取り、中身を出す。

「……差出人は、つと。おおー、漢字か」

中身はびっしり異国の言葉だった。あの複雑で難解な文字が組合わさって、紙の上を埋め尽くしていた。

「本当だ。姉さん読めるの？」

シオンが不安そうにおれの顔を覗いて来る。

まあ、その心配は杞憂に終わる。

「あ、馬鹿にすんなよ。おれは和語に英語にレスティナ古語、フランス語にゲン語にロマンシュ語、それから」

「わーすごいすごい。で？ これ、なんて書いてるの？」

「そんなに凄いやと思ってるだろ……。まあいいや。えーっと？  
」初めまして。

貴女が日本語、そちらの国では和語と呼ばれていますが、それを見聞き出来ると聞いたのでこちらの国の言葉でこの手紙を書かせていただくことをお許し下さい。

僕の名前は桐生朝飛と言います。

実は、貴女に頼みがあつてこの手紙を書きました。

二年前に失踪した僕の弟の行方をご存じ無いでしょうか？

弟の名前は空夜。もうすぐで十五歳になります。二年前から一度も姿を見ていません。

とある友人からレスティナ国で見かけたという情報を頂き、その時に「裏町業者に会いに行く」と言っていたと聞いたので、レスティナで便利屋を営んでいる貴女に手紙を送ることにしました。何か心当たりがありましたら情報をお願いします」

……はい終わり。後は住所うんぬんだな」

「この人、弟さんが行方不明で大変だね」

「本当になあ」

「で、依頼は受けるの？」

「考え中」

シオンが手紙への興味を失い、二階へ上がってから、さつき声に出さずに読み飛ばした部分を見る。長々と続くので、途中を省いて読んだのだ。

「外見は、普通の和国人なのですが、英国人とのハーフなので眼は深い緑色をしています。

弟は、家の職を継ぐのが嫌だった様です。

祖父が死んですぐに、勘当同然で家を出ていきました。

弟は家に帰ることを望んでいないでしょう。それは分かっています



す。何度も探すのをやめようと思いました。  
「ただ、」

そこで手紙を閉じた。

年齢も外見もぴったりだ。ぴったりあてはまり過ぎて、そうしか思えない。

「あいつ、忍だからあんなに裏町の素質があつたのか」

おれは二年前に店を訪れ「死にたいから殺してほしい」と依頼してきたあの眼を思い出した。

「クウヤ、くうや、空夜ねえ……」

電話に手を掛け、情報屋の番号を回す。

いつの間に降りてきたのか、シオンが「あれ、依頼受けるの」と不思議そうに言った。その言葉に頷きながら、耳を澄ませる。

電話の呼び出し音が耳の奥まで響いた。

その手紙が届いたのは、アルヴェルト家の騒動に巻き込まれる前。手紙には手掛かりになればと写真が同封されていた。

その写真には幸せそうに笑う茶髪と黒髪の幼い兄弟が写っている。

二人とも、誰にも壊す事のできない、幸せそうな笑顔だった。

「あいつのこんな笑顔、見たこと無いなあ」

呼び出し音の中、一人呟いた、八月の最後の日。

30・後（後書き）

空を飛ぶ。

夜と朝。

対になる兄弟。

間奏曲 伍曲目「太陽の人」

太陽の人。

貴女は僕の眼には眩し過ぎるから、直視できないのです。ただ貴女は絶対の存在。

貴女無くしては、僕の世界は動くことをしないのです。まるで神の様に。

ねえ、僕は思うんだ。

神様なんて何処にもいないんだって。いたとしても神が平等であらせられるだなんて嘘に違いない。

だって神様がいたなら（もしくは平等な神であれば）、僕が捨てられることなどなかったでしょう？

神様がいたら、僕は普通の子供で（普通なんて定義の曖昧なモノを引き合いに出すのは卑屈かもしれないけれど）いられたでしょう？家族に見捨てられると言うのは、最大の不幸なのです。

人が生まれながらにして持っているのは無償の愛をくれる家族、そうじゃない？

ねえ太陽の人。僕は特別なことなど何一つ求めていなかった。

僕はただ普通の、それ以上でも無くそれ以下でも無い、普通でありたかった。

何処にでも在るような、『その他大勢』の内の一人で良かったのです。

貴女もそう思ったことは無いですか？（きっと貴女はこの質問には答えないだろうけど）

僕らは血の繋がった家族では無いけれど、酷く似通った部分がある。神様を信じていないこと、人に知らず知らずのうちに距離を置いてしまうこと、そのくせ独りが怖いこと。

もし神様が平等でいて、僕ら二人に血の繋がった（血の繋がりが最大の絆だとは言わないけれど、喩えとして）家族があつたなら、それはそれで幸せに生きていけたと思う。

でも、もしもあの日あの時にあの場所に（暗い暗い、底無しと呼んでもおかしくないあの狭く汚い街）捨てられなかつたなら貴女と会うことは無かつた。

それを想像すると、心の奥底、父と母の記憶を封じ込めたソコがきりりと痛むのです。

神様がいたならば、僕は平々凡々な普通で在ることを許されていたでしょう。

けれど現実（いま針が刻むこの瞬間）には神様などの存在は欠片ほども見当たらないのです（僕が不敬だからですか？ならばこれほどまでに不平等な神はいない）。

そう、そのお陰で貴女と出会えた。これは誰に感謝するべきだと言うのでしょうかね、太陽の人。

祈ると言う行為は、こんな僕でも無駄では無いと言える。

祈りは神様に捧げるだけでは無いのを知っているからです。

「神に祈るのでは無いなら、それは祈りとは呼ばない」

そんなことを言う人は、祈りを知らないのです。

祈ると言うことと、想うと言うことはきつと同じでしょうか？

だから、僕は。

貴女の幸せを、僕に幸せを。

僕の世界に神様はいないから。

姉さん。

貴女は僕の眼には眩し過ぎるから、直視できないのです。

まるで太陽の様に。

血は繋がらないけど貴女は絶対の存在。

貴女が笑えば僕も笑う。

貴女が泣けば僕も泣く。

貴女の喜ぶ顔が見たいから、貴女に普通の子供みたいに褒められた  
いから、一生懸命に生きている。

僕を照らすことが出来るのは神でもなく、光でもない。貴女だけな  
んだ。

ねえ太陽の人。

間奏曲 伍曲目「太陽の人」(後書き)

シオンの独り言

### 31・ありがとう

「よっ。お帰りー」

そう言っつて僕のアパートのドアを開けたのは、カノンさんよりも明るい金色だった。

「……………おいレオラ、出てけ」

僕がかなり低めの声で言っつと、金色もとい道外れの始末屋・レオラリアナは目を逸らした。

なるほど、心当たりがある癖にシラをきる気らしい。

「レオラ、この声の持ち主に何か言っつたでしょう？　僕のこととか僕のこととか僕のこと」

カノンさんの声で話しかけると、目の前の人物が素早く土下座した。

「ごめん本当にごめん！　悪気は無かつたけど握られるような弱味だけはあつたんだ！　そして売つてくれと言わんばかりに情報が目の前にあつたんだ！　売らないと色んな意味でオレが危なかつたんだ！」

一体この人はカノンさんに何の弱味を握られているのかと思う。本気で。

「はあ……………良いよもう。結局兄さんにこの場所教えるのを決めたのは僕だから。別に逃げてた訳じゃないしね」

「でも、隠れてたろ？」

「まあね」

でも、もうそろそろ連絡をしなければと思つていた。

二年も音沙汰なしじゃ、死んだと思われそうだから。別にそう思われてもいいのだけだ。

レオラはちらりと僕の顔色を盗み見て、小声で訊いてきた。

「で、オレの報酬は？　約一ヶ月に渡るペット預かり代、それからこの家の留守番代」

全く持って金に目ざといヤツだと思つ。カノンさん以上だ。

僕は無言で鞆から、一番安そうな宝飾品数品を渡した。アルヴェルト家のモノだとは言わない。説明するのは面倒くさい。

「これだけ？」

「何か？」

「すみません」

そう言つてレオラはポケットにしまい込み、普通に僕の家へ上がつてきた。もう怒るのも馬鹿らしい。

ヴィヴァーチェ通りにあるこのアパートは珍しいのかどうか分からないが、ペットを飼うことが許されている。

二つしかない部屋の内、ドアを入れてすぐの方に白く大きな影を見た。

「ハカセ、ただいま」

『わうん！』

名前を呼ぶとすぐにこつちへ走つてきた。

オールド・イングリッシュ・シープドッグのハカセ。元は羊追いの犬だ。知り合いから預かったというか貰ったというか買ったというか……押しつけられたというか。

白い身体に灰色の模様。毛が長くて表情はいつも隠れている。その様がまるで実験に悩む博士みたいだったのでハカセ。

こいつは親ばかになるつもりは無いけれど、かなり賢い。

「ハカセ、お手」

『わつ』

「お座り」

『わん』

「伏せ」

『わつ』

「レオラに体当たり」

『わつ』

「うおっ！ 何させるんだクウヤ！」



物の見事に体当たられた彼が倒れる。

「素晴らしい……さすがはハカセ！」

「わん」

レオラをさらりと無視して、他の二匹を探す。

「なあ、ノロマとヒデヨシは？」

「ヒデヨシなら向こうの部屋に居ると思うけど、ノロマはまた散歩じゃねえの？ あいつもホント気まぐれな猫だな」

「猫が気まぐれなのは昔からだよ……っ」と

ドアを開けると、僕のスリッパを寢床にして転がっているホワイト・テリア。眠ってるのか耳がピクピクと動いている。

レオラがハカセと馴れ合いながら訊いてきた。

「あいつの名前の由来って、ヒデヨシ・トヨトミ？」

「そうだよ。いつもあぁやって僕のスリッパを温めてくれてるからね」

「寢床にしてるだけじゃん」

「気持ちの持ち良さ。忠犬だよ、ヒデヨシは」

そういつてドアをそっと閉める。あのデブ猫は主人の帰りなどに関係なく、またどこぞの塀の上を渡り歩いているのだろう。それがデブ三毛猫ノロマの良さだ。

\*\*\*\*\*

キッチン（と言っても小さなモノだが）でコーヒーを入れる。僕はカノンさんやシオン君みたいに器用じゃないのでインスタントコーヒーを愛用している。

レオラとテーブルに向かい合って座る。

「カノンはどうだった？」

「どうっていつも通りだよ。唯我独尊我が道を行く。今回も良いように使われた」

「お前の変装は便利そうだな」

「都合がいいだけさ」

この狭いアパートに動物三匹人間二人は少し無理がある。

久しぶりの我が家だからか、家が窮屈に思えた。

「あ、そういえば。カノンさんに弟が出来たよ」

「……弟？」

「拾ったんでしょ、多分」

「ああなるべそ」

「まるで本当の姉弟みたいだったよ。性格とか、どことなく似てた。血の繋がりって案外関係のないモノなのかもね」

そう言った僕に、レオラが答える。

「血の繋がりも大切だよ。お前を探してくれる人も、実の兄じゃん」

「まあね」

そこでレオラは黙った。

この人に、家族は居ない。

居ないと言うよりも、無い、と言った方が正しいのだろうか。

初めてあったときに聞いたが、その名前も本当の名前じゃ無いらしい。

レオラリアナ。住んでいた村の名前らしい。だから彼に名字はない。

小さい頃の記憶があやふやで物心付いたときから、始末屋の元で修行をしていたそうだ。

どうして、こう裏町業をやる人たちは、何か影を持っているのだろうか。

時々、不思議になる。自分も含めて。

しばらくコーヒーの味を2人堪能していると、レオラが口を開いた。

「オレ、そろそろ行くわ」

「どこへ？」

「仕事。店ほつぽつてきたから」

ああ、そうだった。僕の依頼のせいでこの人は一ヶ月も店を開けていたんだ。

「あー………ありがとう」

「何が？」

「留守番とペットの世話」

「ああ、それね。依頼だから別に良さ」

レオラが席を立つ。

コーヒーは空っぽだった。

「次はどんな仕事なんだ？」

「処理屋とペアを組むんだよ。ボロ儲け」

「処理屋と始末屋か………不吉だね」

物事が全て終わってしまう組み合わせじゃんか。

処理屋のことはいまいち知らないけれど、大体のことは想像付く。

「小さな国の王様くらいなら消えそうだね」

笑っていったが、明らかにレオラの顔が冷や汗でいっぱいになった。

どうやら似たようなことをする気らしい。深くはつつこまない。

これは僕の管轄外だ。

「んじゃ、元気でな」

「レオラも」

椅子に座ったまま挨拶をする。

ドアを開ける音がして、すぐにガチャンとしまった。

部屋は丁度良い狭さに戻る。

コーヒーマグのマグカップを洗おうと、向かいの席を見るとメモが置いてあった。

『お前を狙ってた殺し屋、実はオレのターゲットだったんだ。』

お陰で上手いこと始末できたよ。さんきゅ。その代わりノロマ達の散歩代はサービスするから許せ。

道外れの始末屋 レオリアナ』

なるほど。

僕はここでも良いように使われていたようだ。もっと鍛錬せねばなるまい。

そんな決心をぐらぐらと揺らすように間の抜けた呼び出し音がなる。

格好良く出ていった癖に忘れ物か。

「つたく、何忘れたんだレオ、ラ……」

「久しぶり、空夜」

ああ懐かしい声。

「……来るのが早いよ兄さん」

31・ありがとう（後書き）

「ありがとう」

### 32・嘆くことが多すぎる世界だから

時々嘆きたいのは、この世界の傍観者になってしまったこと。

世界はこんなにも冷たく整然としたものだったのかと哀しくなる。

舞台役者がいきなり客席に座ってみたらこんな気分なのだろうか。

舞台なんて華やかなモノ、一度しか見たことがないけれど。

綺麗に整列された十字架達に囲まれて、今日も問いかける。

『神様、あの子は今日も笑顔でしょうか』

毎日するこの行為も祈りなんかじゃない。ただの問いかけだ。

神に祈ることをしない俺に答えてくれる神はいない。信心深い奴

しか救われない法則だ。全く持って分かりやすい。

\*\*\*\*\*

「すみません」

高い声が聞こえて思わず振り返る。

そこには小さな少年が居た。焦げ茶の髪が光に反射して眩しい。

まだ小学校の低学年ぐらいだろうか？

カノンを拾ったときも、あれくらいの年だった気がする。

しかし考える。この墓地には今、俺とこの少年しかいない。なら

さっきのは空耳だ。

俺は誰の目にも映らないから。映ることが出来ないのだ。

登場人物役をはぎ取られてしまった役者が、二度とスポットライトを当てられないのと同じ。

そして失態を恥じる。自分を呼ぶ人がまだこの世界にいると思っ  
ていたのか？ 馬鹿らしい。

四十五度傾けていた首を元の位置に戻し、いつものように物思い  
にふける。

すると、有り得ないことが起こった。

「無視しないでよ」

その声は明らかに俺に向けられていた。そう、少年は俺に話しか  
けていた。

「……俺に話しかけてる？」

「うん」

ああ、良いお返事ですね。

いやいやそうじゃない。

この子は俺が見えている。

「あなたはここで何してるの？」

「え…… あー、住んでる。いや違う！ 住みたくて住んでるんじゃないよ、なんて言うか、義務？」

「お家が無いの？」

「あるけど…… 帰れないって言うか」

「鍵を無くしたの？」

「いやあのさ、俺一応大人だよ？」

「ああ、奥さんに追い出されたんだ。よくあるよね」

「いやいや、俺未婚だし」

「もういい年なの？」

「お前、見かけに寄らず毒舌だね」

この会話のテンポはカノンに似ている。なんだか懐かしい気分にな  
って、自然と顔がほころんだ。さしずめ、この靈感の強い子は神

様からの贈り物とかいうやつだろうか。

「そういえば俺に話しかけたんだろ？ どうしたの」

少年はあ、と思いだして困ったような表情に変わった。

「ちょっと聞きたいことがあって」

「何？ 何でも聞きな。俺、この墓地に詳しいから」

「住んでるんだもんね」

「けらけら笑って言う」。

くるくる変わる表情は見ていて飽きない。

「あのね、ジン・ソリティアさんのお墓の場所って知ってる？」

俺ですが何か、とは言わない。だが直感した。この子はカノンの新しい家族だと。

確か先週ユーリが墓参りに来たときに言っていたはずだ。まだ幼い子供で、けどどこか聡い子だと。

「あーはいはい。あの可愛い花束があつたお墓ね。知ってるよ」

「本当？ 良かったー」

「あのさ、もしかしてお前、シオン・ソリティアって名前？」

「うん、そうだよ。よく分かったね！ おじさんの名前は？」

「んー……」

答えて良いものか。シオンは未だ俺が幽霊だと言うことに気が付いていないようだし、ここで名乗れば驚かせてしまつかも知れない。

「内緒」

「えー！ ずるい！」

シオンが年相応なふくれっ面を見せる。

「というか、俺はまだ二十代だ。断じておじさんなどではない」

「だろうと思った。見た感じ二十代後半って感じだよな」

その通りだった。死んだときから年を取っていないとすれば。

シオンは俺が名乗らなかつたことに対してぶつぶつと文句を言いながら、やっぱり歩き出した俺の後ろを付いてきた。

「ごめんな。代わりに俺の墓に案内するからさ。」



「なあ、お前はなんでここに来たの？」

俺の後ろを付いてくるシオンに聞く。シオンは墓地に来る人にしては珍しく手ぶらだった。大抵の人は死んだ人が生前に好きだった花を持ってくる。あの子みたいに。

「なんとなく」

「ふーん。学校は？ 今日平日だよな」

「行ったこと無い。ほとんど姉さんが教えてくれるし、行く必要ないよ」

「なるほど」

カノンも学校には行かなかったな。手続きが色々面倒って言うって必要なのは全部俺が教えた。カノンは俺と同じようなことをしてるらしい。子供は親の背中を見て育つって言うのは案外当たっている。

「なんとなく、」

「ん？」

「会いたかったんだ。姉さんの師匠に」

俺が目の前にある十字架を指して言う。

「これにか？」

「これにだよ」

しゃがんだシオンは手を合わせて、黙り込んだ。

俺はその姿を斜め後ろから立ち竦んで見る。いつも思っけど、自分の墓に参ってくる人を眺めるのは変な気分だ。

どうして人は祈るんだろう。祈れば叶うという訳でも無いのに、ここへ来る人達はそれぞれの十字架に向かって必ず祈る。それが義

務だとも言うように。

シオンも他の人と同じ。長い長い沈黙の中、何かを祈っていた。

「なあ、何祈ってるんだよ？」

「内緒。名無しで未婚のお兄さんには言えないようなことだよ」

こいつ、いい性格をしている。カノンに似たな。

「案内してやったんだからさあ、ちよつとは教えてくれても……」

俺の言葉を遮るようにして、シオンはポケットからゴソゴソと何かを取り出してそれを十字架の前に供えた。

「何？ それ」

「てがみ」

「死んだ人が読める訳無いじゃん」

シオンが帰った後に、俺は読めるけどね。まあそれは言わないでおく。

そんなこと言ったって、俺がジン・ソリティアだなんて信じてくれそうにも無いから。

「読めるよ。きっと僕が帰った後に読んでくれるよ」

一瞬心を読まれたのかと思った。

鋭い。そして聡い。少しだけ大人びて見えるその表情は、やっぱりどこかカノンに似ていた。

俺が見守る中、シオンがすくつと立ち上がる。身長は俺の胸にも届かないくらい小さい。

「案内してくれてありがとう。ここの墓地、やたらとお墓が多くて迷っちゃうんだ」

「そうだな。一応ここには国中の戦死した人たちの十字架が集まっているからな」

「そうなんだ？ ……なんでここに集めたんだろう」

シオンが不思議そうに聞く。後ろには綺麗な夕日がちらりと見え、逆光でシオンの表情は見えない。

「ここはこの国で一番、夕日の景色が綺麗だからだよ」

少し高いこの丘からは城下町が全て見下ろせて、とても大きな夕

日が見える。

死人には勿体ない場所だ。もっと生きている人が見ればいいのにとつくづく思う。

「こんな場所にお墓だなんて勿体ないよな」

俺が言つとシオンが首を傾げる。

「なんで？　ここが墓地だから、夕日が綺麗に見えるんだよ」

悲しいとか、寂しいとか、そういう気持ちが消えちゃいそうなくらいに綺麗だもん、とシオンが言った。

「そうか？」

と、言いつつも納得している自分が居た。

その言葉に救われたのかも知れない。

\*

帰り道、俺は墓地の入り口までの近道を教えるためにまたシオンと歩いていた。

相手に肩が触れないように気を付ける。隣にいる人物が幽霊なんてたまったものじゃ無いだろう。

「あのさ、さっきのお祈り教えようか？」

「いいよ別に」

「拗ねないでよ」

そう言いつつシオンが拗ねる。どっちもどっちだと思わず苦笑せずには居られない。

「ごめんごめん。教えてよ、お祈りのこと」

「……あのね、僕も姉さんも幸せだから、心配しないでくださいって。いつも笑ってるから、あなたも笑ってくださいって」

笑ってください、か。

死人にまで気を遣うなんて、出来た子供だよなあと誰に言うてもなく思う。

「俺はさ、祈ることはしないんだ」

「どうして？」

シオンが俺の顔を見ようとして後ろを向きながら歩く。危なっかしいその歩き方を咎めるような視線で見れば、大丈夫だよ、と目で答えられる。実際、シオンは器用に歩いてきた。

「……祈ったって空しいだけだよ。神様は俺達のことなんか見てくれない。本当に信心深い奴しか救ってくれないんだ」

シオンの顔が俯く。表情は分からない。

「僕は……祈ることは神様の為の行為じゃ無いと思うよ。だって神様なんていないから」

「え？」

まだ、表情は見えない。

「神様はいないよ。どこにも。だから祈るのは僕たちのためだよ。祈ることで救われるんだ」

そう言って笑っていた。笑っていた、はずだった。けれど差し込んだ夕日で垣間見えたその表情は、あの子が墓参りに来るときと同じ顔をしていた。

シオン。お前は どうして作り笑いなんかするんだ。

「ここまで来ればもう道分かるよ。今日は本当にありがとう！」  
入り口まであと少しだった。

俺は、このまま俺のことを黙っていていいのか。

こんな風に寂しそうに笑う子供に、何もしなくていいのか。

「あのさー！」

シオンがこつちを向く。

まだ何も決心できていない俺のことを笑うかのように、シオンは得意顔で言う。

「アナタの名前、当ててあげるよ」

「え？」

「ジン・ソリティア。そうでしょう？」

ああ参ったな。なんでこの子はこんなにも鋭くて、聴くて。それでいて、カノンに似てるんだろう。

「……知ってたのか」

「ううん。なんとなくだよ。まさか当たるとは思わなかったけど」  
いひひ、と笑ってシオンは走り出した。

背中が見える。

「シオン！ また来いよな！」

手を振る姿がかるうじで見えた。

今度はきつと、ちゃんと話そう。今日話せなかったことを、たくさん。

「神様なんていない、か……」

夕日はもう半分になっていた。

「それもそうかもな」

\*\*\*\*\*

時々嘆きたいのは、この世界の傍観者になってしまったこと。

世界はこんなにも冷たく整然としたものだったのかと哀しくなる。けどそんな世界にもまだ見落としていることがあるんだ。

役を降ろされた舞台役者にも当ててくれるスポットライトはある

ものだ。

綺麗に整列された十字架達に囲まれて、今日から祈る。

『あの子たちが明日も笑顔でありますように』

これからこの行為は祈りになる。神様へ当てたものではなく、自分を救うための。

32・嘆くことが多すぎる世界だから（後書き）

ばいばい、ジーン。

またね。

### 33 街まで歩いて

「シオン、今日の夕飯何が食べたい？」

姉さんが雑誌を捲りながら聞いてきた。最近料理にはまっているのか、『お手軽に出来るシェフの味！主婦が選んだベストレシピ決定版』を読んでいる。

僕は姉さんに借りた和国の本を読みながら、受け流すように適当に答える。

「えー別になんでも……って、もう危ないなあ！」

「なんでもいいは却下！」

側にあつた紙くずが真横を飛んでいった。別に僕を狙った訳じゃなく、僕の隣にあつたごみばこにいられたかつたみたいだけど、このタイミングで投げる辺り少しだけ作為を感じる。

とは言っても別にこれと言って食べたいものがあるわけじゃないし、嫌いな食べ物があるわけじゃない。僕は基本的になんでも食べれる。本当になんでもいいのにな。

「あのな、なんでもいいつてのは毎晩のメニューを考える主婦にとって喧嘩を売ってるのも同じなんだよ」

「主婦って……」

姉さんみたいな人が主婦だったら旦那さんはどんだけ苦労するんだろう。そんな恐ろしいこと口に出してなんか言わないけれど。

「じゃあ聞くけど姉さんは一体何が作れるの？」

「おれ？ レシピさえあればなんでも作れるよ。地方の郷土料理からお洒落なフレンチまで」

自信満々の笑みでさあ何を食べたい、と聞いて来るこの人のすごいところは、どんなことでも見本さえあれば適当にこなせちゃうところだ。



でも、本当に「なんでもいい」としか思っていない僕にとってその質問は少し難しい。

「……じゃあ、クリームシチュー、とか？」

「おっけ。クリームシチューね」

メモメモ、と言いながら引き出しを探す。メモ用紙は隣の棚の上なのに、姉さんは見当違いの 書ばかり探す。

「メモ無いし。まあいいや、これで」

よく探してもしないで、姉さんは近くにあった薄い雑誌の余白部分を破いてそれに書き留める。

なかなかどうしてこの人の雑なところは治らない。

「シチューだったらー……ニンジンに、じゃがいも」

ぶつぶつ言いながらメモをします姉さんに、かつて優しくった母と呼べる人の面影がだぶった。

その映像を掻き消すように頭を振る。

「蒔草も入れるか、色が綺麗だし。キノコは……んー安かったらでいいや。よし。シオン、市場に行くけどどうする？」

「行く」

「んじゃ、ちよつと冷蔵庫に牛乳あったか見て来て」

「はい」

どうしてあんな人と姉さんの姿が似てるだなんて思えるんだろう。この人はこんなにも優しくてあたたかい人なのに。

\*\*\*\*\*

三十分ほど歩くと、城下町の中心から少し過ぎた所にある市場街に着いた。

ここは城下町の中で一番人通りが多く賑わっている。

ニンジンとじゃがいもを買い終えたあたりで、僕と姉さんの横を数人の男の子が走り抜けていった。

「ホントだって！ ホントにトランプが消えたんだって」

「嘘くせー」

「まじまじ！ オレも見たもん！ ウイルの選んだヤツだけが消えたんだよ」

「しかも手からバラが出て来たんだぜ！」

「すげー」

「あ！ ウイル、あれじゃねーの？」

「早く行こうぜっ！」

姉さんが後ろを振り返ってその子たちの行く先を目を細めて見る。

「……手品師でも来てんのか？ あそこだけ子供がいっぱいじゃん」

気になって少し背伸びする。本当だ。通りの向こうにある噴水広場にいっぱい子供が円になっている。時々、おー、などのありふれた歓声が聞こえる。

さっきの会話からして、姉さんの言うとおり手品師が来て居るんだろう。やっぱりハトが飛び出したりするのだろうか。それよりもトランプが消えたって本当なんだろうか。

「シオン」

呼ばれて慌てて振り返る。

「あ、ごめん。えっと次は牛乳だっけ？」

「うん。おれ、あっちまで買いに行つて来るし、手品見てていいから」

「いいの？」

思わず大きな声を出しちゃって恥ずかしくなる。姉さんが笑って

僕から荷物を受け取る。

「いいよ。買い終わったら噴水広場に行くから、絶対に一人でうるうるするなよ？」

「うん！」

急いで噴水まで走った。

その間にも、すごい、とか声が聞こえる。

たくさんの人だかりの隙間を抜けて、上手いこと最前列に紛れ込むと目の前にバラの花がいっぱい広がった。

「うわぁ！ 何これ？」

「おう。ちよつとそのバラを持っておけよ？ それを今からお兄さんが一発で消……………」

途中で言葉が途切れて不思議になって花から視線を上にとすると、僕の思いつきり知ってる人が噴水の淵に腰掛けて居た。

短い薄めの茶髪に青い目。

「ユーリさん……………またさぼってるの？」

「はははー。なんつうの？ アレだ、市内見回りだ」

絶対嘘だ。

33 街まで歩いて(後書き)

ユーリ・バーガンディ

職業・軍人

趣味・サボリ

### 34・夕暮れの

「……なぜおれはこんなにも大量のにんじんを持っている……教え  
てくれリッキー」

顔なじみのパン屋の看板犬に問いかけてみるが、リッキーは困つたように鼻を鳴らす。答えはいつもの半値で売っていたにんじんを見て思わず買い込んでしまったという実にシンプルなもののだが、そんな事情はリッキーにはまったく分からないことだし、そもそも彼は犬だった。

「今日はにんじんメインの具沢山シチューで決まりだな、リッキー」  
問いかけたくせに勝手に解答を導き出して、カノンは元来た道を戻る。ただ単にリッキーと喋りたかっただけらしい。

全ての買い物を終えたカノンは、約束していたとおりシオンを迎えに噴水広場まで戻る。

そこではまだ手品をしているらしく、子供達やその保護者でいっぱいだった。噴水を始点とした半円の中心からは声が聞こえる。

「そうだな。お前の引いたカードは……ハート……いや、スピードの9だ！」

「すっげー！」

「まじかよ、当たってるぜこれ」

「なんでなんでー？」

「ねーねーお父さん、なんでなの？」

目を凝らして見たが、人だかりの外側にシオンの姿は見えない。どうやら上手い具合に最前列へ回ったらしい。カノンも一度その手品を見てみようと隙間を縫って入り込む。

「あ、姉さん！ こっちこっち」

姉の姿を見つけたシオンが手招きして呼ぶ。

「ただいまー。どう？ 面白い？」

「うん！ すごいんだよ、ユーリさん。僕の引いたトランプの柄と

数字を当てたんだ！」

「へえ。すごいなー」

手品を間近で見られたおかげか、シオンは顔を満面の笑みでいっぱいにしてかなり喜んでゐる。良かった良かったと一緒に喜んでやりたいところだが、一つ引掛かる単語が耳に入っていた。

「はい、お嬢さんもトランプ引いてみてよ」

聞き慣れた声が出て、カノンが振り向く。手品師がトランプを差し出しながら左手でひらひらと手を振った。

「やつほう。買いだしは終わった？」

「ユーリさん……あんた何やってんだよ」

「むしろこの場合、何もやってないと答えたほうが適切だな」

つまるところさぼっているらしかった。

実に簡潔な答えを出されて、カノンは呆れたように肩を竦めた。

「早く選びたまえ。子供達が待つて居るではないか！」

さぼっているのだからもう少し見付かりにくいところで、見付かりにくいように過ごせばいいものを、何故こんなにも人目に付くような所で楽しそうにしているのか、カノンには甚だ疑問である。気取った話し方に少しだけ苛ついて、しかしすぐににやりと笑う。

言われたとおり、差し出されたトランプの束からど真ん中の一枚をゆっくりと取り出して、柄を確認することなく両手で挟む。それからもう一度笑った。その表情はユーリには見えていなかったらしい。

「じゃあそのカードをみんなに見せて。俺がずばりと答えて、」

「いや、いいよ手品師さん。そろそろお疲れだろ？ このままおれが当ててやるよ」

「え？」

周りの子供達がざわついた。

「出来る訳ないじゃん！ 手品師でもないのに」

「当ててみてよ」

「やってやってー！」

ユーリが笑う。やってみろよ、とでも言わんばかりに得意げな表情を見せて。

「そうだな。これはきつと………ダイヤのキングだ」

そして裏向けのまま挟んでいたトランプをゆっくりとみんなに見える様に表向ける。

「うっそだあ………」

「………すげえー」

「当たってる！」

予想通りダイヤのキングだった。

と言うよりも、見たとおりといった方が正しい。カノンはトランプを引いたときに、自分とユーリの間にあった水溜まりでしっかりと絵柄を確認していたのだから。

朝方に降った雨の名残を利用して、ユーリも手品をしていたのだらう。

「お見事」

ユーリは苦い顔をして笑う。

種を見破られた手品師はぱんぱんと手を叩いて周りの人集りの注目をあつめた。

「というわけで、これで俺の手品ショーはお開き！ このお嬢さんに拍手ー！」

\*\*\*\*\*

噴水広場にいた人がまばらになり、ユーリが座っていたようにカノンとシオンも一緒に縁に座ってパン屋で売ってたドーナツを食べる。

「まさか、あそこで当てちゃうとはなー」

「いひひ。おれに出来ないことはないんだよ！」

「姉さん姉さん、あれどうやって当てたの？」

シオンがチョコを口の周りにデコレーションしながら、身体を乗り出して聞いて来る。

「ん？ あれはな……………透視するんだ」

「……………透視するの？」

「そつだよ。便利屋ともなれば透視くらい出来て当たり前なんだ」

「ね、僕にも出来る？ それ」

「ああ。まずは心の目を鍛えるんだな」

「が、がんばるよ」

隣ではユーリが声を出さずに笑っていた。かなり苦しそうだ。

カノンとしてはさぼり魔手品師の種を教えずにいたことを感謝してほしくらいだった。

「で。ユーリさんはまたさぼり？ 真面目に仕事しろよなー」

「失礼な。ちよつと休憩してただけだよ」

「休憩するだけなのにわざわざ広場までくるか、普通。なあシオン」  
シオンに同意を求めるが、手品で楽しませてもらった身としてはなんと答えづらい。シオンは曖昧に笑ってその質問を流した。

「まあサボりつつうかなー……………」

問題になっているユーリは頭をがりがり掻きながら答える。

「軍が慌ただしくてさ。お偉いさん方が中心でやってくれちゃって、俺ら若い奴等は用無しなんだよ、いま」

「なんで？ また戦争でも始める気か？」

「いやいや。カノンお前オラトリオ王国知ってるか？ ちっさい国  
なんだけど」



「知らない」

「僕知ってるよ」

シオンが口の周りをチヨコを拭き終えて答える。

「北の方の寒い国だよな？ 本で見たことあるよ、それ。たしか今の国王はデイヴェル王だよな」

「よく知ってるな、シオン」

「で？ そこがどうしたんだよ」

「それがさあ、デイヴェル王が今の地位に就いてから治安が悪化してな。今オラトリオには反国王軍があるんだ」

「ふうん。よくある話だな」

「それで、だ。この前妙な噂が流れたんだ。反国王軍が国王暗殺を裏町業の奴に依頼したって……確か処理屋と始末屋だったかな？」

「そりやまたよくある話だな」

「物騒だねー」

暗い話題になってきたことで興味を失ったシオンがそれほど大変でも無さそうに相槌をうつ。

「でも、それと軍って関係無くない？」

「あるんだなこれが。結構レスティナ国軍と関係が深くてさ。向こうは軍事に力を入れてないから、こつちから軍隊が派遣されてたりするんだよ」

「またまたよくある話で。でもさ、ユーリさんの所属は警察軍の方だよ？ あんま国軍とは関係無いじゃん」

「まあ、軍部っていう一括りにした元が同じだから結局は一緒さ。お偉いさん方は大忙しってわけ。国のごたごたに首つつこんじゃったんだからな。というわけで若い奴等は用無しなんだよ。つまりだカノン、シオン。俺はさぼりたくてさぼってる訳じゃない」

自分の正当性を話す為だけにここまで話を持ってくるユーリにカノンは呆れ顔だった。もちろんシオンも。

辺りを見回せば、昼時などもうすっかり過ぎていて、晩ご飯の買い出しの家族連れで賑わっていた。

しばらくの間広場で話をしていた三人だったが、そろそろ話題も尽きてきた頃だった。

「んじゃ、おれ達は帰ろうか。すっかり夕方になっちゃったし」

「そうだね。帰ってシチユーを作らないと」

「いいなー。シチユー食いてえ」

二人は一緒に立ち上がって、まださぼるつもりなのか、座ったままのユーリに別れを告げる。

「じゃあな。シオン、また手品見せてやるよ！ 今度はハトをいっぱい出してやる」

「うん、今度遊びに行くね！ 絶対だよ！」

一生懸命に両手を振るシオンを後ろに、カノンはずいぶんと昔のことを思い出す。

貧民街に居た頃、ユリウスがよく手品を見せてくれたことを。けれどすぐに頭を振って忘れることにした。

ユリウスは、ユーリのように上手じゃなかった。

34・夕暮れの(後書き)

あなたを思い出すと、心が苦しくなるよ。

### 35. かなしくなんかないのに

家に帰って、すっかり乾ききった洗濯物をたたむ。姉さんは自分の記憶と雑誌のレシピと格闘しながらシチューを作っていた。途中、何度か台所からガチャガチャと物同士がぶつかる音が聞こえたけど、いつものことだった。

シーツを畳んでいると、隣からいい匂いが漂って来た。懐かしい匂いだった。

あの街に捨てられる前に、よく母さんが作ってくれたシチューと同じ。

あの頃は、父さんが警察軍に捕まって母さんが肩身の狭い思いをしていた。まだ小さかったけれど、それがどれだけ大変で辛いことかは分かっていたつもりだった。

だけど、本当は何も分かっていなかったのかもしれない。

女手一つで僕を育てるのは、どれほど難しいことだったのだろう。今となっては答えを聞けることは無いけど。

ただ、はつきり覚えているのは、母さんの泣き顔。父さんが捕まったとき、母さんはいつもどおり振る舞っていたけど、夜中に人知れずに泣いていたのを知っている。

娼婦で男癖が悪くて、まともに家にいたことなんてほとんど無かったけど、僕の唯一の肉親だった。貧民街に捨てたことを許したわけじゃない。

だけど、今はそんなに憎くはない。

きつと殺人犯の血を持つ僕は荷物でしかなかったんだ。

それは仕方の無いことだったと、今なら思える。そんなに物分かりのいい方ではないけれど。

「シオン、ご飯できたぞー！」

「今行くー」

二人分のシーツを仕舞い終えて、台所へ駆ける。

黄色の鍋からはゆらゆらと湯気が上がっていて、それと一緒にいい匂いも漂っていた。姉さんの運ぶクリームシチューにはきのこやたくさんの野菜がごろりと入っていて、かさの深いお皿に綺麗に盛り付けられていた。

「おいしそう！」

「だろ？ やっぱりきのこ入れて正解だったな」

足が床に付かないイスだから、ぶらつかせて座る。

白いシチューを見ると、綺麗な朱色のにんじんが見えた。そういえばこのシチュー、やたらとにんじん率が高い樹がする。

けれど、今日のにんじんはどこか違う。

「これ……」

姉さんが凄いだろ、と言ったのと同時にそれをスプーンで掬う。スプーンの中には星型に切られたにんじんがあった。

「お前、にんじんだけは食べないからな。それなら食べるだろ？」

「……………」

\*

『ロビン、今日はにんじんもちゃんと食べれたわね』

『うんー！』

『いつもは残すくせに、今日はどうしたんだ？』

『今回は星型に切ってみたのよ。星型ならロビンも食べられると思っ  
つて』

『そうか。ロビン、母さんが頑張って作ってくれたんだ。残さずに食べるよ?』

『うん。いつものシチューより、お星様のにんじんの方がおいしかったよ! また作ってね、おかあさん』

『また今度ね』

\*

今日、姉さんにクリームシチューを作る提案をしたことをほんの少し後悔した。

楽しかった頃を思い出してしまったから。

なんでだろう。

あんなに嫌いで、どうしようもない人達だったのにね。いまじゃ、きれいな思い出しかなかったみたいだ。

「シオン、どした? やっぱ食べられないか?」

「……ううん。また、作ってね。これ」

「もちろん」

朱色の星をシチューと一緒に食べた。

かなしくなんかないのに、喉の奥がチリチリと酷く熱かった。

どうしてだろう。

どうして、しあわせだったなんて、思うんだろう。

分からないから、すこしだけ泣いた。



35・かなしくなんかないのに(後書き)

忘れようと、何度誓ったか。



## 間奏曲 陸曲目「始末屋の店」

いらっしやい。用件は？

ああ、暇だから入ってみただ。いいよ別に。うちは冷やかしはお断りだけど、見物は断つてないから。

そうだ、自己紹介がまだだったな。オレの名前はレオラリアナ。苗字は無い。

時々苗字が必要なときは勝手に贋物を作ったりする。この前の依頼では『レオラリアナ・スプリングフィールド』だった。変な名前だろ？ この長ったらしい感じが気に入ってるんだ。

もつとも、世界で一番お金が大好きな処理屋にはかなり不評な苗字だったけどさ。

『レオラリアナ』も十分変だった？ そりゃそうだろ。この名前は自分で勝手に付けたんだから。

そう。本当の名前なんてとっくの昔に捨てたよ。

オレ、小さい頃の記憶があんまり無いんだよな。本当の家族とか友達とか全然覚えてない。

……え？ うーんそうだな……一番古い記憶で覚えているのは始末屋の師範代のこと。

その人に育ててもらったんだ。だからオレは自然と始末屋になった。当然の流れだろ？

あの人の元を離れた今でも、オレの誕生日には必ず大量のスィートピーが送られてくる。去年は花じゃなくて種の方だったよ。自分で育ててみる、修行になるって。……はは、そう。面白い人だろ？別に不便じゃないよ。人よりちょっと思い出が少ないだけ、そう考えればほら、なんだか普通のことみたいだろ？

あー……今日は依頼も仕事も無いんで暇なんだ。他の話？ んー……そうだ、オレの友達の話をしてやるよ。全員裏町業やってて、オレよりずつと変だけど、みんないいやつだよ。

「あー、はいはい。アレだろ、あのセレナーデ地方の小さな村。スイートピーが多いところじゃないっけ？ おれセレナーデ地方に一回だけ行ったことある。まあ都市部のノースタウンだけど」

こんな風に俺の名前の由来を初めて当てた奴、それが街外れの便利屋カノンだった。

ソナチネに住んでるなら結構有名だと思うけどな。……そうそう、その奇抜なちらしを配ってるのがカノン・ソリティア。今度店に行つて見るよ、本だらけでなかなか面白いところだぜ。

村の名前？ ああ、セレナーデ地方のことあんまり知らない？

冬にはいれば最低でも三十センチの雪が積もるんだ。そんな北方のさらに北に行ったところにあるのがレオリアナ村。あの村で若い人と言えば、俺と始末屋の師範代くらいだよ。……うん、そうだな。夏に行くことをおすすめするよ、オレは。

……他のやつ？ そうだなあ……世外れの都合屋は知ってるか？

こいつもその筋じゃあ有名な奴なんだけど。

そう、あいつもオレの友達。

都合屋のクウヤと出会ったのは昨年春。いや、夏だったかも。

……冬だったかな？ まあいいや。

あいつは当時十三歳だったはずだ。裏町業は大体年齢なんて気にしないもんなんだけど、それにしても随分と若いなって思ったよ。まあその割には妙に大人びていたけどな。

最初の会話は実にそっけなかった。

「あなたが道外れの始末屋さんですか」「そういうお前は？」「秘

密です」……こんな感じだ。

ひたすら無表情で問いかけるクウヤに戸惑ったのを覚えている。確かクウヤは、カノンの店のアルバイトを終わって、自分の店を持つとうとしている時だった。

……そう、さっき話したろ？ あのカノンだよ。元は便利屋で働いていたやつなんだ。

そっからどうなったって？ 「お前が秘密ならオレも秘密だよ」って言ったんだ。そしたら「僕の名前はクウヤ・アンダーグラウンド。苗字はでたらめですけど」って。

まあオレも勝手につけた名前だったから、おあいこかな。

向こうがわざわざ偽名だって言ってくれたからオレも教えてやったんだ。そしたらあいつはやっと無表情をやめて笑った。「裏町業の人たちって、どうしてこう、何か変なところがあるんでしょうね」って。失礼なやつだろ？

その時のクウヤは、オレに挨拶に来たみたいだった。カノンの親友だったから何かと都合が良かったんだろう。俺はあいつに便利に使われたようだったけど。

「これからは都合屋になります。シンフォニア島に店を構えるから、何かあったらどうぞ」なんてちゃっかり宣伝されたよ。

だから俺は、クウヤ・アンダーグラウンドの初めてのお客ってわけ。

\*

これで話は終わり。

他にもまだ友達は居るんだけど、そいつらはまた今度な。代理屋に処理屋に伝言屋に情報屋。良かったらあんたも他の店に行ってみなよ。色んな話が聞けて面白いかもよ。

……そうだ。久しぶりにカノンに会いに行こう。あいつとは最近会っていなかった。

あいつとは親友なんだけど、なかなか仕事の休みがつかなくて手紙で済ましてたんだ。

あー……ついでに借りてた金も返しておこう。これ以上弱味を握られたままじゃ敵わないからな……いや、こっちの話。

悪いけど、準備をしなくちゃいけないから今日は店仕舞い。また来てくれよ。あんたなら、また昔話してやるから。

そうそう。あんたの友達に宣伝しといてくれよ。『道外れの始末屋、レオリアナ。頼まれた仕事は何でもこなす』ってさ。

それじゃあ。

間奏曲 陸曲目「始末屋の店」(後書き)

そして、店の扉が静かに閉まった。

### 36・サイケデリック

どうか。

どうか、神様。

\*

この貧民街は冷たい。

冷たくて暗い。暗くて汚い。汚くて狭い。狭くて怖い。怖くて惨め。惨めで独り。独りぼっち。独りぼっち。

独りぼっち。

ユリウス・シュトラスが表向き、機密事項間諜未遂及び傷害罪及び、国家重要機密窃盗罪で死刑になってもうすぐで一年。私はユリウスのいないこの街で独り、あの嫌な梅雨を迎えた。

この街は子供に優しくない。

弱い者に優しくない。

もうユーリのように私に風邪ひくぞ、と注意してくれる人はいない。

だから私は生きているのが不思議なくらいで、もう七歳になっていた。

おかあさん。あなたが必ず迎えに来ると私に約束をして、もう一年と五日が経ちました。

ユリウスがいてくれたからあなたのことは忘れていられた。独りではなかったから。

だけど、ユリウスがいなくなってからはあなたとの約束だけが私

を支えてくれていたのです。もう一年も経ったから、迎えに来る気が無いんでしょうけど。

今日で雨が降り始めて、三日目。

レスティナが休戦協定を結んで二日目経っていた。今日の夕方ごろに、兵士達が帰国するそうだ。そんな街の噂。

「今回はほとんどレスティナの敗戦に近いものだそうだ」

貧民街で一番年をとったおじいさんが私に言った。ユリウス・シユトラスの本当のことを知っている数少ない理解者。

「戦争終わったんだ？」

雨から逃れるように入った場所は空き家の屋根。おじいさんと肩を寄せ合いながら雨宿りをした。

「元々負け戦になるのは見えていた。向こうが休戦を持ちかけなければどうなっていたことか……一体軍部は何を考えているのやら」

「何も考えてないんだよ。軍は戦争が好きなんだ」

おじいさんは何も言わなかった。代わりにそろりと腰をあげ、私の頭を撫でた。

「お嬢ちゃんも、パンを盗む時は気をつけてやるんだよ。みんな、殺気立っている」

「……うん、おじいさんもね」

それは心底どうでもいい忠告だった。

何故なら、もうずいぶん前から何も盗んでいなかったから。パンも水もミルクも。

おじいさんが見えなくなったのを確認して、また屋根の下からでる。雨は小降りだが肌に当たると冷たい。

私はまた、何も見ずにすむように俯き座り込んだ。

おかあさんと約束した、あの路地で。

私は食べることをやめた。生き続ける為の行動すべてをやめた。

おかあさんが一年経っても迎えに来てくれなかったら、こうする

つもりだった。

わざわざナイフを心臓に立てることはない。食べることをやめ、雨から逃れることをやめる。

それだけで死は、じわじわと音を立てて近付いて来た。なんて楽なつくりをしているんだろう、私達の身体は。

水分を含んで張り付いた、布の切りっぱしみたいな服を絞る。ゆっくりと雫が落ちてゆく。それと同時に私もゆっくりと落ちた。

地面に身体を打ち付けて痛い筈なのに、感覚が麻痺している所為で夢の中みたいにふわふわとしていた。

夏の雨は恵みの雨と言うのだそうだ。いつだったか、おじいさんに聞いた。

雨は私に死を恵んでくれたようで、私は路地の隅っこで倒れて動かなくなった。

手も足も固まったみたいだ。違う、おもりを付けられたように動かない。

街を歩く人達は振り返らない。私を見ない。気にしない。道端で人が倒れている。

それはこの街では背景のように馴染んだ光景。当たり前のこと。日常茶飯事。

その時、泣いていたかもしれない。笑っていたかもしれない。もしかすると無表情だったかもしれない。

うつぶせにも仰向けにもなれない体制で、倒れたまま雨が涙かも分からない水が流れるのをただじっと見る。

戒めだろうか。

私の体制から丁度見えるのはこの街の出口。

会いたい。けれど、一体誰に？ 勝手に零れた言葉に問う。

おかあさんに？ ユーリに？ 馬鹿な軍がはじめた戦争で死んだおとうさんに？

違う。



「……あいたかった……」

私を救ってくれる誰かに。

ゆらゆらと視界が悪くなる中、ふ、と雨が止んだ。

「お前、傘持っていないの？」

「……え？」

突然掛けられた声の方へ、目だけで追う。焦点があって、私の前に人が立っているのが分かった。黒いブーツ、それから黒い服。顔は見えない。

唯一色を持っていた真つ青な傘で遮られた雨が、ぱちぱちと音を立てて五月蠅いはずなのに、不思議と無音だった。

「傘、無い？」

次はしゃがみこんで聞いてくる。

男の人の右斜めに分けられた焦げ茶の前髪から、悲しそうな目が見えた。

「……ない」

「そうか」

自分が濡れてしまうというのに、その人は傘を私に差して話す。

「名前は？」

異国の、花の名前だった。おかあさんとおとうさんが大好きな、きれいな花の名前。私はその花を見たことは一度もなかったのだけ  
れど。

「……忘れた」

私の名前を呼んでくれる人がいなかったから。

「俺の名前はジンだよ。ジン・ソリティア」

「ジン？」

「そう」

私は頭の中で何度もその言葉を繰り返した。

「お前、いくつ？」

「……七歳」

そう答えると、悲しそうだった表情が一段と悲哀の色に満ちた。

そして黙り込んだ。

無音の世界になるのが怖くて、かわりに私が話す。

「むかえに、来てくれなかった」

「お母さん達が？」

「うん」

聞かれてもないことを、急いで喋った。

「おとうさんは戦争で死んだの。おかあさんは毎日泣いてた。死んじゃうかもって思うくらい泣いていた。それから私に辛いつて。おとうさんのこと思い出すから、私を見るのが辛いつて。だから、お母さん、私を捨てたんだ」

「……そうか」

「ユリウスはこの街で家族だったの……大好きだった。なのに。もう死んだ。軍が殺した。あんなに優しい子だったのに、」

「軍が殺した……」

「わ、私の、好きな人は、みんな……私をひとりにするから、わたしはもう誰も……好きじゃない……！」

答えは無かった。

「……軍、なんて……だ、大嫌い」

泣いていた。私も、ジンも。

「ごめんな」

雨と涙でぼろぼろの顔でジンが謝る。

ああ、よく見ればこの人の服。黒っぽい緑に、黒いブーツ。

街の噂、敗戦、兵士達、帰国。

「俺の家、城下町の外れにあるんだ。歩いてすぐ」

ジンは私の答えを待たずに続ける。

「小さい家なんだけど二人丁度いいくらいです。俺、いま一人暮らしなんだ」

雨はいよいよ本降りだった。

「今日、俺、軍を辞めたんだ。裏町業でも始めようかと思ってさ。でも手伝ってくれる人も家族もいなくてさ」

ジンは私の目を見つめる。  
深い深い緑色の目だった。

「お前、うちに来る？」

一瞬で無音の世界から引き戻された。土砂降りの雨音が耳をつんざく。

ジンが私の折れそうな身体を起こす。足はまだ動いてくれるようだ。

私は急いで口を開く。

返事をしなくちゃ。

あなたについていく、と。

傘をありがとう、と。

助けてくれてありがとう、と。

でも言葉は出なかった。代わりに涙だけ。

地面を叩き付ける雨音と混じって、遠くで雷が響き渡った。

二人で一つの傘から、空を覗く。

「遠雷……」

この音を一生忘れない。

\*

神様。

神様、どうか。

36・サイケデリック（後書き）

幻覚なら覚めてよ

欲しいものがあつた。

\*

「カーノーンー！」

城下町の一番賑わうところで、ジンの声が響いた。

だが返事は無い。ジンはもう一度大きな声で、少女の名を呼ぶ。

「カーノーンー……カノンカノンカノーン！」

街をゆく人々だけがジンの方を振り返る。

しかし目当ての少女の声だけは聞こえない。

ジンはふう、と溜息をつきしゃがみこみ、がりがりと頭をかく。

困ったときにする癖だ。

「……………迷子かよ……………」

ぼつりと呟いた言葉だけが、空しく響いた。

「しーしょーおー！」

ジンとは全く違う道の筋でカノンが叫んでいた。

拾われた頃よりも一回り大きくなって、もう十二歳になるうとうとところだった。

「しーしょー……ったく、いい年こいて迷子かよ。全く」

ベンチの上であぐらをかき、横の荷物を見る。卵、ミンチ、タマネギ、その他。

今夜はどうやらハンバーグを作るつもりらしい。

「あたしの誕生日って覚えてるのかなー……やばい、心配だ。絶対覚えてないよあの人」

カノンが両手を上にあげ、思い切り伸びをして後ろに反り返る。

反対になった視界の先に見えたのは、世界中に点在する有名洋菓子老舗ブランド『ドルチェ・デ・ノエル』のガラス張りのお店だった。

「ケーキ、食べたいー」

「馬鹿、あそこ的是一个が高いんだよ。パン屋のマフィンで我慢しろ」

「あ、師匠」

反対になった映るジンの顔には疲労の色が見て取れた。

「お前なあ、材料買ったら噴水前で待ち合わせって言ったろ？ なんでここに居るんだよー……おもつくそ大声出したっつーの」

「ああ！ 噴水前だったっけ。忘れてた」

悪びれもなく答えるカノンに、さらに疲れが溜まったジン。

「それより、ケーキが食べたい。あそこのシヨコラムース」

「高い。却下。お前、ケーキ一個で六百ミリアなんて贅沢が許されると思ってるのか？」

「へいへい」

そろそろ頭に血が上ってきたのか、姿勢を戻す。

ジンもベンチに座る。両手にはたくさんのお買い物袋があった。

「ケーキなら今日俺が作ってやつから。それで我慢しろ。どうしても食べたいんなら早く便利屋になって店を手伝うことだな」

「……師匠が作んの？」

「今月はちーっとお金がいらないから。今回は誕生日プレゼントはこれで勘弁な」

片手でごめんの形を作って、ジンが笑う。カノンも一緒になって笑う。

「生クリームたっぷりだ！」

「了解。んじゃ帰るぞ」

\*\*\*\*\*

街から歩く二十分間。歩く道はでこぼことしていて、まだ首都のメトロポリスの様に完璧な煉瓦調ではなく砂利道になっている。

この城下町はレスティナ国東部ソナチネ地方でも一二を争う田舎街だ。

小高い丘へと続く道を、二人はゆっくり歩いていた。

「そついえばさー」

「何？」

「この前、俺に新しい部下が出来たよ」

ジンは、カノンを拾ったあの日に軍に辞表を出した。しかし軍の方は戦後間もない中、優秀な人材も戦争で失い、人手が足りないことからその辞表を受け取らなかった。

その代わり軍が安定すると思われる向こう七年間を軍で勤務を続けることを条件に、裏町業との掛け持ちを許した。

後二年でジンは軍を辞められる。カノンは毎日その日を指折り数えていた。

「その部下がどうかしたの？」

「これまた凄いなだわ。バーガンディ家の御子息さまでさ、血統書付き。しかもまだ十六歳の癖に階級が准尉なんだよ」

「へー……。でも軍隊に入る為の試験は十五歳から受けられるんですよ？ 普通じゃねーの？」

「まあ、受けられるの確かだよ。国が認めている。でも士官学校を卒業するのは十八歳だ」

「えーと、ごめん、どういうこと？」

カノンが右隣で歩くジンを見て問う。家まではもうすぐだ。

「所謂飛び級ってやつだな。あの士官学校をだ。さすがバーガンディ家だよ。毎回名軍師を出すだけのことはある」

「言っとくけど、あたしだってバーガンディ家の噂ぐらい知ってるよ。もうずっと昔からレスティナ軍に居座り続ける家だって」

「あそこは根っからの軍人家系だよ」

「その人の名前はなんて言うの？」

ジンが思い出そうと、視線を上に移す。

「えー、たしか……。ユーリ。ユーリ・バーガンディ」

一瞬だけ、カノンの表情が固まった。だが一瞬のことで、ジンには何も分からなかった。

「へえ。ユーリって言うんだ。それってあだ名？」

「いや、違うけど。本名だよ」

「……そっか。なら良いんだ」

そう言って、家まで後少しの所をカノンは走り出した。ジンは追いつけるつもりは無いらしく、笑って行き先を見つめた。

「師匠、走って！ 早くキーキ作る！」

「わかったわかった！ ほらあんまり走るな。卵が入ってるだろうが」

ゆっくりとカノンに近付いて、ドアを開ける。

カノンは真っ先に台所へ行き、材料をしまい始める。

鼻歌混じりで戸棚を開ける彼女を横目に、ジンは誰に言うでも無く呟いた。

「ユリウス……か」



\*

奪われたくないものがあつた。

37・ヨーク（後書き）

頸城の束縛、そして逃亡。

どうしたの？  
どうするの？

\*

レスティナ国のソナチネ地方、イーストエンドシティ。

その城下町の外れにある小さな丘から声が聞こえる。

「師匠！手伝えー！ おれ一人でこんな量の洗濯物干すとか無理にもほどがあんぞー！」

「俺も無理なの。仕事で疲れた、しーんーどーいー」

カノンが次々と溜め込んでいた洗濯物を干していく様子を長めながら、ジンは丘の上に寝そべった。大の字になって目を瞑る。その様子を見てこれ以上言っても無駄だと判断したカノンは口を尖らせながら一番大きなシーツを干す。

「……っていうかお前さあ、仮にも女の子なんだから『おれ』とか言うな」

「いいじゃん別に。便利屋になるなら男の方が何かと都合がいいじゃん？」

「そうなんだけど……女であることも時には武器になるんだぜ」  
「へいへい」

すべてを干し終わって、空になった籠を持つ。丘にはいくつもの洗濯物がはためき、中でも大きなシーツがぱたぱたと風に揺られるのを見ると気分が良い。

そんな、昔よりも大きくなったカノンの後ろ姿を見ながらジンが話しかけた。

「カノン。あと一ヶ月だな」

「……そうだっけ？」

知っている癖にわざと覚えていないふりをする。

そんな弟子の姿に少しだけ苦笑して、言葉が続ける。

「俺の退職祝い、盛大にしてくれよな！」

「豪華な料理で祝ってやるよ。寿退社じゃなくて残念だったけどー」

「うっさい！」

笑い声とともにドアが閉まる音がした。

ジンは寝転がったまま、四月の空を見上げた。あと、一ヶ月だった。ジンは軍を抜ける約束の七年まで。

「あいつ、もう十四歳になったのか……」

風が出て来たのか、丘に干された真っ白な洗濯物が今にも飛んでいきそうな勢いでばさばさはたためく。その様子をぼーっと横目で見ていると、家の窓が開いた。カノンだ。

「師匠、電話！」

手には黒い電話が握られている。

「誰からー？」

横になっていた身体を起こし、ジンが尋ねる。

「ユーリさん」

「またさぼりか……」

『さぼってません！』

そんなに大きな声で話した訳じゃないのに、聞こえたのか受話器の向こうからユーリが叫ぶ。

「いっつもさぼってばかりだから疑われるんだよ」

ジンの代わりにカノンが答える。

『あーもうっ！ いいから早くジンさんに代わってくれ！』

「何急いでるんだ？ 今日は俺、非番なんだけど」

窓の外から受話器を受けとる。カノンが本体を両手に持ち替える。

ついでに聞き耳も立てる。

『今すぐ！ 今すぐに軍へ来てください！』

「いま？ 何でまた、」

『いいから！』

ユーリの剣幕に押され、返事をするしかない。

「わ、わかった。すぐに行く。走って行く」

『じゃ！ オレはこれで！』

勝手に切れた電話を見て、二人は顔を見合わせる。一体どうしたんだ、という空気が流れている。

「ユーリさん、何急いでたんだろ」

「さあ？ また反乱軍が事件でも起こしたんじゃないかねえの？」

よっ、と窓から家に入るジン。かけてある軍服の上着だけを羽織って、苦しくないように一番上のボタンは開けておく。

「はあ。俺今日非番なのに……」

「別にいいじゃん。どうせお客さんなんて滅多にこないんだし」

「うわ、酷いカノンちゃん！」

「本当のことじゃん」

また窓に手を掛け、外へ出るジン。

「ま、来ないとは思っけど。店番のほう頼むわ」

「おっけ」

「出来そうな依頼だったらやっついて。無理っばかったら、」

カノンがジンの背中をどんと押す。

「わかったわかった。わかりました！。おれだって立派な便利屋見習いです。だから心配せずについてらっしゃい」

そんなカノンにジンは手を振りながら走る。

「はいはい。いつてきまーす」

小さな丘から、その大きな背中が見えなくなるまでカノンは窓を閉めなかった。

\*\*\*\*\*

レスティナ国ソナチネ地方軍部。

門の前に付くと、憲兵がすぐに開けてくれた。ユーリが言っておいてくれたらしい。

走って通路に行く。するとドアからユーリが呼んだ。

「ジンさ、……じゃなくて、ソリティア大尉！」

慌てていたのか、ついいつものような呼び方で呼んでしまうユーリ。

彼がここまで慌てるのも珍しかった。一体何があったというのだろうか。

「よつ。どうしたんだ？ また犯行声明でも届いたか？」

「違いますよ！ 本当大変なんです！ ちょっと、大変で、本当どうしたら！」

「落ち着けよ、それ何語？ ちゃんと喋れ。お前もう十八歳だろ」

「とにかく中で話します！」

言われるがままに部屋の中に入るジン。中には数人の部下と、レスティナ国の東西南北中央に分かれている地方軍が数名。誰も彼もジンの顔見知りだった。あわせてざっと十数人。

首都のメトロポリス中央軍を始めとし、北のセレナーデ地方軍、南のアンプロンプチュ地方軍、西のメヌエット地方軍、そしてジンがいる東のソナチネ地方軍。

それはかつての戦友達だった。みんな七年前の戦争以来ばらばら

になっていた。それぞれがあの戦争の後、昇進、降格になり各々の住む地方に別れていた。顔を合わせれば思い出してしまう、そう言うかのように。

「……なんか懐かしい顔ぶれだな。これはどういうことだ？」

「ジン。状況は把握できたか」

かつての同僚が問いかける。後ろではユーリが何かの紙をぐしゃぐしゃにして持っていた。

「はっ。さっぱりだよ。理解したくもないね！」

「あの……ソリティア大尉。これが、今朝、総司令部から……」

おずおずと差し出す、ユーリ。何度も読み返したのだろう。紙はポロポロだった。

「なあどういう事だよ？ 誰か教えてくれよ。俺達はまた、あんな場所へ行くのか？」

部屋が静まりかえる。誰も、何も言わない。

「何とか言ってくれよ！ なあ！」

その内の一人が、がくりと膝を折った。力無さげに、ジンのかつての階級で呟く。

「ソリティア中尉、俺は嫌です。でも、」

みんなが彼の言葉の続きを理解した。彼の言葉が、ここにいる全員の想いを表していた。

「でも……もう……諦めるしかないじゃないですか。俺達は軍部の人間なんですよ？」

言葉を終える前にジンが紙を床に投げつけた。

「くそ！ 畜生！ なんてなんだよ……！ あと、あと少しだったのに……」

投げつけられた紙は上等な紙で、模様が綺麗になっている。

「全軍部、レスティナ国軍及び警察軍に次ぐ。」

我が国レスティナは四月六日午前十時を以て、ゲン国との戦争開始を表明する。

明朝、全軍の司令官はメトロポリスにて作戦会議を行う。  
レスティナ国メトロポリス中央軍総司令部最高責任長スケル・ワ  
ルツハイネ』

\*

どつにかならないの？  
どつにもならないよ。



38 ウォーズ(後書き)

神様、神様。

貴方は随分と残酷なことがお好きなようです。

### 39 ナチュラル

その無邪気な笑顔が壊れませんか。  
その無邪気な笑顔が。

\*

「俺……ちょっと電話してくるわ」

「ソリティア大尉！」

取りあえず、カノンに電話をしておこう。そうでもしないと自分が何かもつと酷いことを言ってしまうようで怖かった。

ジンはユーリが呼び止めるのも聞かずにドアを閉じる。

一歩一歩踏みしめるように歩くその通路はぐにやぐにやと歪んでいるように見えて、ああ自分がふらついていていいのか、と気づくのにその時間は要らなかった。しっかりしなくては。でも、全てが挫折たままだった。

「ソリティア大尉！」

後ろからユーリが追いかけてくるのがわかった。

ドアを開けて、倒れ込むようにして入った。

「ジンさん！　しっかりして下さい！」

部屋に入って、ジンは溜まらず床にしゃがみ込む。思いっきり息を吐く。電話は目の前だった。

「どうして、こうなっちゃうんだろうな……。あともう少しで終わりだったのに……。本当、なんでこんな」

「そんな諦めたような事を言わないで下さい！　ジンさんらしくな

い……生きて帰れば良いことじゃないですか！」

その瞬間に、色んなものが、溜め込んでいたことが全部雪崩れ込むのが分かった。

部屋のだ真ん中で、ジンは思いつきり声を張り上げた。

ユーリのことや、自分の言ったことなど気にする余裕なんてなかった。

「俺らしくない？　じゃあ何だよ！　俺って何なんだよ！　七年前に何人も何人も殺して、戦争だからしょうがないって逃げた、俺はなんなんだ！？　また同じことをするつもりなのか！　一体何人殺せば許してくれるんだよ……訳分かんねえよ……！　あと一ヶ月だったのに。あと、少しで……普通の、普通の家族になれたのに！」

「ジン、さん」

「そうだよ、生きて帰れば済むよ！　でも、帰ったからどうなる？　俺の手はまた血で染まって……そんな手であの子の頭なんて撫でてやれない！　戦争は、戦争はもう終わったんじゃないのか！？　あの時、七年前にもう全部終わったんだろ！？　なんで、なんで……こうなんだよ」

崩れるようにして床に這い蹲り、あの日を思い出す。

カノンは貧民街の、道のだ真ん中で横たわっていた。ジンは休戦の決まった帰り道で、そんな彼女を見つけた。

最初は死んでいるのかと思った。戦争中は、そんな子供を何人も見てきた。敵国の子供だから、気にしている余裕もなかったけれど、なんとも無しにその姿見つめてみると、その子が何かを呟いているのが聞こえた。

「あいたかった」

一体誰にだろうか。ジンにはそれが分からない。

道を行く人々は誰もその子と眼を合わせずに、避けるようにして歩いてゆく。

どうして、誰も助けないのだろうか。分からない。雨に濡れ続け

る彼女にジンは自分の持つている真つ青な傘を差してあげようと思つて歩み寄る。すると隣から声を掛けられた。

「やめときなよ。どうせそいつ、死んじゃうから」

その女はぼろぼろの布を纏っていた。

「でも、あの子濡れてるじゃないか」

「あの子が望んでやったことさ」

「望んで？ そんな馬鹿な」

「馬鹿な話だよ。母親が迎えに来てくれなかったから、死ぬきなんだよ。あの子」

「……だからって」

「可哀想だからって助けるのは、良くないよ。あんたは一体何人救えるの？」

皮肉そうに言って、女はすぐに消えた。

ジンは構わずに、その子に、カノンに傘を差しだした。

カノンの眼にジンの姿が映ったとき、両目からは雨以外の水がぼたぼたと落ちていった。

泣いていることにも気付かず、ただただ泣いていた。

あの子は俺が死んだら、また泣くのだろうか。声を出さずに、自分が泣いていることに気づかないまま、ただひたすら涙を流すのだろうか。また、あんな顔をさせてしまうのだろうか。

ジンは拳を握りしめて、そして床を叩いた。

「俺は！ もう、泣かせちゃいけないんだ！ あの子を拾ったときから、絶対に死ねないんだ！ これ以上人を殺してしまったら、きつとあの子は笑ってくれない。俺は、」

「ジンさん、オレだって死ぬのは嫌です！ だから、生き残れるように戦うんです……！」

「お前は……」

この部屋にはジンとユーリの二人しかいない。

廊下にも誰も居ないのか、不気味なほどひっそりとしている。

「お前はそれでいいのか……ユリウス」

呟かれたジンの言葉は、部屋に反響して、そして空気に溶けた。ユーリ・バーガンディ。いや、ユリウスは黙って頷いた。

「生きなければならぬんです。どんなことをしても。また、カノンに会うために」

意志の揺らぎは無かった。ジンも頷く。カノンの家族として、生きるために。

折角二人で便利屋を始めて、普通の家族みたいになれるところだった。こんなところで諦められない。

それでも、とジンはもう一度心の中で尋ねる。

ユリウス。お前は、それで良いのか？

カノンはもう、ユーリに振り向いたとしても、ユリウスには呼びかけないというのに。

39 ナチュラル (後書き)

生きて。

## 40・ラピュロス

出会ったときのこと、覚えている？  
別れるときが来ると、想像できる？

\*

「いつから、俺がユリウス・シュトラスだって気が付いてたんですか？」

部屋の壁に背中を預けながら、ユリウスがジンに言った。

「……なんとなくだよ。それでお前が俺の部下になったとき、カノンがその名前を聞いて動揺した。きつと名前が似てるだけだ、そう思ってたよ。お前がやたらとカノンについて聞きたがるまではな」  
「名前を変えて生きてきて八年経ちますけど、俺のことに気が付いたのはジンさんが初めてですよ」

そう言っただけユリウスは苦笑に近い笑みを漏らす。

「でもひとつ分からないことがある。お前はあの時死刑判決が出たんじゃないかったのか？ 確か持ち逃げした設計図が何処にも見当たらずに、軍が他国に機密を漏らしたって騒いでたけど」

「……ジンはあの時ソナチネにはいなかったんですか？」

「俺は元々北の生まれなんだ。セレナーデからこっちに移ったのは丁度その事件のほとぼりが冷めた頃だ」

ジンがこの街に来たのは冬の頃だった。それはシュトラス博士の息子ユリウスが死刑になった後だったはずだ。

目の前に居る人間がユリウスだというなら、あの死刑判決は一体

なんだったというのか。

「たしかにあの時、オレは死刑判決を出されました。本当、軍つて子供にも容赦しないですね。丁度その頃だったでしょうか。バーガンデイ家の跡取りが病死したのは」

「死んだ……？　ちよつと待て、どうということだ」

「まだ十歳だったそうです。名前はユーリ。その子が死んですぐ、あの暗い牢にバーガンデイ家の家長フェルマ・バーガンデイが直々にやって来ました」

ジンの中で、これまでの疑問や疑念がすべてが一つに繋がった。

死んだ跡取り。いま目の前にいるバーガンデイ家の跡取り。ユーリとユーリス。

死刑判決が出たのに、生きている子供。

「お前はバーガンデイ家に引き取られた。だけど俺はバーガンデイ家の御息が病死したなんて聞いたことがない。つまり、ユーリス・シウトラスを表向き死刑にして、ユーリとして生きること条件に牢から出た、つてとこか？」

ユーリスは頷いた。焦げ茶の髪が揺れる。

「大体その通りです。でも、少し違うのは俺に選択肢があったことです」

「選択肢？」

「俺は別にユーリ・バーガンデイになることを条件としてあそこを出たんじゃありません。」

フェルマ・バーガンデイが孫の死を世間に公表になかったのは、ただ普通の子供として天国に送ってやりたかったから。バーガンデイ家は古くから軍部との繋がりが深い家です。世間に死んだことを公表すれば、家の体面を考えて軍人を見送るような葬式をおこなわなければならぬ。それがたとえ十歳の子供であっても。けれどフェルマさんはそんなことしたくなかった。だから誰もユーリ・バーガンデイが死んだことは知らないんです」

「なら、なんでお前は……」



「同じ年頃の子が、近々死刑になると聞いて居ても立ってもいられなかったと言っていました。フェルマさんは俺が設計図を持ち出したことを罪ではないと上層部にも掛け合ってくれました。バーガンデイ家の意見は軍部にとって軽く見られるようなものではないですからね。そして俺の死刑は取りやめになりました」

ユリウスは一旦言葉を切って、それからまたふわりと笑った。まるで自嘲するかのように。

「けれど、幾らなんでも一度死刑判決の出た売国奴を軍が無罪にしたなんて言ったら世間は何を言い出すか分かりません。だから表面向きには『ユリウス・シュトラス』は死んだと言うことになったんです。このことを知っているのは当時の上層部と、古くから付き合っていた家以外他にはいません。そして俺はバーガンデイ家へ養子縁組されました。『ユーリ』と言う名前に変えると言ったのは、他でも無いこの俺です」

ジンには分からなかった。自分の目の前で静かに話す青年が、一体いま何を考え何を思っているのかが。

「なんでわざわざ名前を変えたんだ。ユリウスのままでいれば、今頃カノンだってお前に気づいていたかもしれないのに……」

「ユリウスとしてカノンに会うのは止めようと思ったからです……俺は、酷い人間なんです」

まだどこにも人の気配は無い。部屋に誰も入ってこないのが幸いだった。

ユリウスの続きの言葉を待つて、ジンは彼の顔を見た。

「俺は酷い人間なんです……。養子になってから、俺はずっとカノンのことを探していました。名前も知らない女の子のことを。たった数ヶ月だけど、俺の家族だったあの子のことを。そんな俺を見かねて、フェルマさんは貧民街に行こうか、と言いました。でも俺は断ったんです。」

「どうして……探していたんだらう？」

「急に怖くなりました。行きたくなかった。恐ろしかった。忘れら

れてるんじゃないかとか、もう死んでしまったかもしれないとか色々思いました。でもそれ以上に、あの街へ行くことが怖かった。嫌な思い出しかない、あの場所へ戻ることが、すごく」

表情が、見えない。

窓の外はもう暗くて、光のない中、お互いの表情も読みとれずに「すごく、恐ろしかったんだ」

同じだった。カノンと。

もしもユリウスが生きていたら、会いたいかとジンは彼女に尋ねたことがあった。

その時、カノンはユリウスと同じことを言っていた。

怖い、と。

「何年か経って、あの子が……カノンがあなたに拾われて幸せに生きていると聞きました。その時に俺は、カノンを裏切ったユリウスとしては会わない、そう決めました。約束を破ったユリウスはもう居ない。だから、ユーリになったんです」

「お前は、それで良いのか？ そんな自分の気持ちを押し殺してまで……」

「ジンさん」

真っ直ぐな目だった。

「俺はユーリ・バーガンディです。今までも、これからも。だから、貴方もこのことは忘れてください」

ジンには、頷くことしか出来なかった。

自分なんかよりも死にそうになって、死にたくないのに生きるのも辛くて、死にそうなくらい苦しいのに死ねなくて、自分達の、この国のせいでそんな思いをしたのに誰のことも恨んでなくて、必死で必死で生きてきた。

そんな子供に、自分達は何が出来る？ 何を償える？

だから、ジンは頷くしかなかった。

「お前がそれで良いなら」

\*

カノン。

俺とお前が出会ったときのことを覚えている？

お前は会いたいと呟いていた。

カノン。

俺がユリウスに会いたいかと聞いたら、お前は会いたくないと言った。

お前は誰に会いたかったんだ。誰を待っていたんだ。

それでも俺は、お前達の言うことを聞くことしかできない。

お前達がそれぞれどんな思いで生きてきたかは知らないけれど、俺には頷くことしか出来ないんだ。

40 ラピュリントス(後書き)

どうぞが。

## 41・アウトライン

踏み外したことに気が付かないまま。

\*

「あ。お帰りー」

ドアを開けると、客室のソファで寝転がっているカノンに声を掛けられた。

「……ただいま」

「結構遅かったね。何？ また反乱軍関係の事件だったの？」

「まーな」

あの後、ジンは粗方の書類に目を通して軍部を後にした。どれを見たって結論は同じ。戦争はどうしたってはじまる。部屋で誰かが呟いたように、もう諦めるしかないと打ちのめされただけ。

もしも自分が戦争に行くって聞いたなら、カノンはどうするのだろうか。

いつもみたいにな、笑って、行ってらっしゃいって言って、帰ってきたときには変わらずに、この家に出迎えてくれるのだろうか。

「師匠」

「ん、なんだ？ 晩飯なら直ぐに作るから、ちょっと待って……」

「おれが作るよ」

「は？」

そう言ってカノンはすたすたと台所へと消えた。

どういふ風の吹き回しだろうか。いままで料理など手伝うこともしなかったカノンが、はじめて自分から台所へと立っている。

「……お前、大丈夫か？」

「なんでそこで心配のセリフなんだよ！」

「だってお前料理とかしたことないじゃん。今更俺に媚売ったって『ドルチエ・デ・ノエル』のケーキは買わねえからな」

「違っつて」

「じゃあなんだよ」

台所に立つ背中に向けて問いかける。

テーブルの上に無造作に置かれた新聞を見る。今日はまだ星占いを見てないな、そんなことを思いながらジンが新聞を手に取るうとして、そこで止まった。

「これからはさ、おれが一人で料理作れるように練習しないと。師匠、しばらく帰ってこないだろ？」

「……知ってたのか……なんでこんな時に限って新聞なんか読むんだよ」

一面には、レスティナ国軍が開戦表明を出したことが載っていた。その話ばかりが載っている。

自分達は何て間の悪い人間なんだろうか。こんな時に限ってカノンが新聞を手にするとは思わなかった。親子は嫌なところばかり似るとはよく言うけど、全くその通りだとジンは溜息を吐いた。

「あんたに似て間の悪いやつなんだよ、おれ。やっぱり滅多にしないことはするもんじゃないね」

そうだな。そう言おうとしたが、返事が声に出せなかった。

あと一ヶ月だったのに。今日一日で何度思ったことだろうか。もう少し後に戦争が始まってくれれば。そんなことしか思えない自分がひどく情けなかった。

「言っとくけど、あんたのこと、心配なんかしてやんないからな」

「……うん」

「っつていうか、本当全然心配とかしてないし」

「知ってる」

「師匠つて、殺されても死にそうにないもんね」

「そうだな」

「だから、おれ待ってるだけだし」

「うん」

「普段通り、ここで座ってるだけだし」

「うん」

「あんたが帰ってきてても、そんな盛大に祝ってやったりしないから」

「うん」

「普通に、おかえりしか言わないから」

涙声になってくるカノンを見るのが辛くて、ジンはその後ろ姿から目を逸らした。

「……カノン」

「なんだよ」

「鍋が吹きこぼれてる」

「うおっ!」

そこでやっと、いつも通りの自分達に戻れた気がした。

そうだ。自分はこれから家を留守にするけれど、それはいつもと同じことだ。

そうそれは例えば依頼とかで違う国へいくことと同じ事だ。だから。

いつもと同じように、おかえりを言ってくれるとあの子は言う。

その約束を守るために、自分はこの家に帰ろう。絶対に帰ってこよう。

だから、いま思っていることはそのときに言う。

家族で居てくれてありがとう、と。

きっと、踏み外したことに気が付かないままに走っていく。



41. アウトライン(後書き)

あの時に、言っておけば良かった。

## 42・リピート

手紙が、届きました。

\*

その日が曇りだったことを、昨日のように覚えています。

おれが『それ』に気づいたのは、朝のことでした。

いつものように、ポストを覗き、ああ今日も広告が多いなあ一枚一枚見ていくと、一通だけとても上等な紙が混じっていることに気が付いたので。

真っ白な、とても綺麗な封筒でした。

こんなに綺麗なんだから、何かの招待状だと思って差出人を見るとメトロポリス軍部からの手紙だと言うことが分かりました。

それは戦争への招待状でした。

その時、驚いたことにおれは余りびっくりしませんでした。きつとびつくりを通り越して、感覚が麻痺してしまっただと思えます。だってそうじゃないと、こんなにも淡々と語れる訳がありません。

そのあと、まず、おれがしたことは、師匠とおれの朝ご飯を作ることでした。嫌な現実から逃げるにはこのようにして普段と同じ事をするのが効果的なのだと思いが書いた本で読んだからです。

今朝は何にしよう。ああ卵があったな、でもベーコンが一枚しか無いしスクランブルエッグにしておこう。急がないと、もうすぐ七時が過ぎるなあ。師匠は今日も寝坊かなあ。そうだ昨日牛乳も飲みきってなくなっただ。どうしよう、まあオレンジジュースでいい

か。新聞はちゃんと机に置いたかな。うん、置いた。でもあの白いは何だっけ。あ、手紙だ手紙。ああそうそう手紙を渡さないと手紙。

そこでさっき見たことを思い出して、自己嫌悪に浸りました。逃げてはいけないのです。

じつと手紙を見つめていると、階段が軋む音が聞こえました。師匠が起きたようでした。

おはよう、と言いなから朝食の用意できていない机に付き、相変わらず寝癖の酷い髪を手櫛で直しながら。

ああ、とうとう来たか。

うん来たよ。

なんだコレ、上等な封筒に入れてくれちゃって。

あ、それ裏が白いから後で八つ切りにするね。

メモ用紙にする気が……。

丁度無くなりかけてたんだよ。らっきー。

コレ、結構上等な紙だぞ……。

でもどうせ捨てるんなら、もったいないじゃん。

まあそうなんだけど。

師匠、今日は牛乳無いからジュース。自分で出して。

はいはい。あれ、今日はトースト？ 確か昨日も一昨日もトースト……。

文句言うなら早起しろよ。

わかりましたよ。……はあ、とうとう来たか。

うん、来たよ。

来ちゃったかー。

だから来たんだって。

それからいつものように他愛もない話をしました。二人とも現実から眼を逸らしたかったのでしょうか。裏町業の友達の弟子が店を開

いたとか、和国にいるという噂の忍は本当にいるのかとか、そんな取り留めの無い話をしました。

そして、いつてらっしゃい、と。

手紙を見ると、師匠の出兵は三日後。

後何回一緒に話ができるんだろつと言つと、師匠は帰ってきたら嫌つて言つくらい話せるじゃん、ととても召集令のかかった軍人とは思えない緊張感の無い声でいうものですから、そうだよなと返事しました。

ここから三日間はいつもと同じ調子で普段通りの生活だったので特に言うこともありません。

言つつもりもありません。

師匠は開戦、そして中央軍の出兵から二十日後に異国へと行きました。

ソナチネ地方軍は最も戦力の薄い軍だったと聞いています。なのに師匠が行くことになったのは戦況が悪化した、それ以外にありませんか？

師匠はおれに、約束をしていきました。

お前の誕生日、五月二日までには絶対に帰つてくつからぞ。

それはおれが師匠に拾われた日でした。

そして二度と叶うことの無い約束でした。

いまになつて思うのですが、どうもおれには手紙が来ると何か悪いことが起きるといふジンクスがあるようです。

だから今では、手紙が来ると思わず身構えてしまつのです。

だってそうは思いませんか。

あの時、ユリウスが死んだと知つたのも、

手紙が来たときでした。



42・リピート(後書き)

またあの不幸を繰り返すつもり

### 43 ガブリエル

一人でも大丈夫だよ。

\*

「いらっしやいませー」

「あの……私の飼ってる猫のチイちゃんがいなくなっちゃったんですけど……探して欲しいんです！」

「はい、ペット探しの依頼ですね！」

レスティナ開戦より一ヶ月。

何だかんだ言っておれは師匠のいない生活にも慣れ、一人で家事をこなし、一人で便利屋の仕事を継いでいた。

今日の依頼で、四件目。

師匠が店をやっているときよりもかなり繁盛している。それだけは密かな自慢。

「お願いできますか？」

心配そうに聞いてくる依頼人は、今までもずっと町中を探し回っていたのかワンピースの裾が泥まみれだった。

「もちろんです。猫の特徴とか教えてもらえますか？」

「はい。チイちゃんは白と黒の斑模様で、しっぽだけが真っ黒なんです。まだ子供なんで他の猫なんかよりも小さいと思うんですけど

……」

「白黒まだら……っつと」

依頼人のセリフを繰り返して、メモにきっちりおさめる。

師匠が居ない間に来た依頼はどれもおれに出来るような依頼ばかりでかなり助かる。猫探しなら大得意だ。

「鳴き声とかに特徴はありますか？」

「えっと……人が近寄るとぶみゃあつて唸ります」

「どうも。では報酬のほうなんですがー」

ペンを置こうとメモから視線を下に移すと、どこから入ったのか白に黒の斑点が入った猫がおれを見上げていた。白い毛の部分が薄汚れている。

まさかと思つたが、一応念のために頭を撫でようと手をかざす。

『ぶみゃあ』

「あら？」

依頼人も、その鳴き声でやっと子猫に気づいたらしく、テーブルから身乗り出しておれの足下を覗いてくる。

「えーと。見つかりましたね」

「チイちゃん！ どこ行つてたの？」

「良かったですね」

「ええ！ ありがとう」

「いえおれは何もしてないんで……」

報酬が無しになるのはちょっと惜しかったけど、すぐに見つかつて良かった。

嬉しそうに子猫を抱きかかえる依頼人を丘まで見送って、手を振る。

見えなくなったのを確認して、営業スマイルを崩した。

「……あー……暇だ！」

「ならアタシを手伝って欲しいわ、カンカン」

びっくりして慌てて後ろを振り返ると、郵便屋のおねーさんが心底詰まらなさそうにこっちを見ていた。

「カンノンです」



「やつほーカンカン」

「無視ですか。前から言っているようにおれの名前は、」

「今日も太陽がむかつくくらい照りつけてくれるね！」

「総無視ですか！」

このおねーさんは城下町周辺の郵便全てを配達して回っている。

田舎だから量は少ないのだそうだが、それでもあちこちを走り回っているこの人には感服する。ちなみに、徒歩で配達しているらしい。

「おねーさん、今日のラブレター収穫率はどうでしたか？」

「反吐が出るくらい絶好調だよ。今日一日だけでも十二通。平和ねーこの田舎は」

誰が言い出したのかは知らないが、この郵便屋のおねーさんにラブレターを配達してもらうと恋が叶うという噂があるらしい。だからおねーさんに直々に配達を頼む乙女がこの田舎には多い。師匠宛のラブレターも、この人がよく届けていた。あの人は実は案外もてる。

「平和ですよ。別の国には戦争を仕掛けてるって言うのに」

「まあこの街が平和じゃなくなったら、アタシの商売も上がったりなんだけどね。カンカンは誰かにラブレターは出さないの？」

出すようなヤツに見えますか。と言おうとしてやめた。冗談だったのかもしれない。おねーさんは本気で聞いてくるのでちょっと怖い。

「出しませんねー。大体、おれが最近真面目に書いたものって、便利屋の広告くらいですし」

「なるほど。色気もクソもでねーってか」

「クソって言わないでください、クソって。黙ってればおねーさん、格好良いんですよ！」

「言葉遣いが悪くても、色気は出るモノよ」

そう言いながらおねーさんは赤い郵便屋の帽子を脱いで一枚の手紙を出した。なんでそこから出てくるのか。

「ほい」

しかもおれ宛の手紙だった。

「……あ、どうも」

そして、自然とまた帽子を被る。被り方とかも一々格好良い人だ。しばらくおねーさんの行動を見守っていたおれの視線に気づいて、説明してくれた。

「ああ、コレ？アタシ速達便はこの中で大事にしまつて配達するポ  
リシーなの」

「……そうなんですか……」

「何？人の生き様に文句たれないでくれる？」

この目の前で睨みをきかすおねーさんが、何で恋のキューピッドになるのか全く分らない。

噂は嘘ばかりだ。

「落としませんか？帽子の中に入れて、被つて」

「落とすわけじゃないでしょうが。アタシもそこらへんはプロだから」

「プロなら、そんな場所に入れませんか」

「いいから早く読みなさいよ。アタシ忙しいのよ」

「じゃあ仕事に戻れば良いじゃないですか」

「嫌よ。気になるじゃない」

それ、と言わんばかりにおれの持つ手紙を顎で指す。ああ、黙つてれば格好良いのに。

言われるがままに手紙の封を切る。

中には懐かしい文字が広がっていた。

「あ、師匠からだ」

「あらそう。のんきな男だわねー、戦地でよくもまあ手紙が書けるわ」

「カノン、久しぶり。便利屋は繁盛してますか？」

俺は結構元気でやってます。戦況はまあまあです。良くも悪くもないといった状況。

でも五月二日にはかならず帰るから、心配しないでください。

帰ったら、いつかの誕生日みたいにケーキを焼いてたくさんお祝いしましょう。』

「どうせ、あなたの誕生日までには帰るー、みたいなことが書いてあるんでしょ？」

「うわ……よく分かりましたね。さては覗き見しましたか？」

「覗いてないっつもの。あいつはああ見えて親ばかりだからね」

「ああ見えてっつて、見たまんまですよ。馬鹿丸出しじゃないですか  
おねーさんは一瞬きよんとして、すぐに笑いだした。ツボには  
まったらしい。

「あはははは！ 弟子に言われちゃお終いよね。でも、あんたもあ  
いつのことになると、結構馬鹿になるでしょ？」

「それは無いですよ」

まあいいわ、と言い残しておねーさんは丘をてくてく降りていっ  
た。

あの速さで歩いて街中を配りきれぬのか心配だ。

手元の手紙を見て、家に入る。今日は市場に買い物に行って誕生  
日ケーキの材料を買い置きしておく。

それと、料理の勉強もしておく。おれの誕生日にはたくさん  
ご馳走を作って、師匠を驚かしてやるんだ。そして褒めて貰おう。  
女らしくなったと。今日から忙しくなるな。

だって、あと一週間も無いから。

\*

一人でも大丈夫だよ。



### 43 ガブリエル（後書き）

だって、帰ってくるんでしょ？

## 44・トレモロ

心が震える。

\*

建物が壊れる景色、銃弾が放たれる音、泣き叫ぶ断末魔の声。硝煙と血が混ざり合った匂いだけがこの一帯を支配していた。

半壊した民家が建ち並ぶ通り、その内にある家の中からジンは銃を握り締めて息を潜めていた。

「……最悪だ」

そう呟いて、手元の銃を確認する。弾はもう四発、あとはナイフが数本しか残っていなかった。数えてる暇も無い。何本持っていたよすが、この状況が一変するようには到底思えなかった。

さっき窓から確認した限りでは、敵の数は四人。

少しでも弾を外せば絶対絶命の数だ。

「……思ったよりやばいな」

悔しそうに呟いたジンの言葉に相槌をうつ仲間姿は無かった。味方はもう、誰一人としていなかった。

「くそっ……援軍はまだか？ 俺一人でどんだけやらせる気だっつうの」

無線を見て、思わず愚痴を漏らす。どこかで足音がする度にジンは身体を石のように固めた。

昨日、ジン達の突撃部隊は敵の所在に予測を立てた。

一つは、政府のある都市部。そしてもう一つは、ジンが今身を潜めているこの住宅街。

隊は二手に別れ、一番可能性の高かった都市部に武器と人数を詰め込んで動くことになったのが今朝の話。

極端に振り分けるのは危険だとジンが忠告したにも拘わらず無理矢理隊をいかせた結果がこれだった。

軍師の予想は大幅に外れ、敵は民家を盾に潜んでいた。

武力も人数もままならないジンの隊は、彼を残しほぼ全滅だった。僅かな救いは、ユーリが政府突撃部隊だったこと。それでも、この状況では数ミリの救いにしかならなかった。

「どうしよう……逃げ切るか……」

そう口にした途端、ジンの潜む家のドアが開く音がした。

ととと嗅ぎ付けられたようだ。

敵は先程から抗戦しているジンを探しているらしく、注意深く辺りを見回しては威嚇のように銃を家具に向ける。

それを何度か繰り返し、ジンの隠れている家具の方を見つめ、動きが止まった。

銃を慎重に構え、そして、一瞬の間のうちに乾いた発砲音が部屋に響いた。

「かつ……!!」

「残り三発。あと三人か」

撃ったのはジンだった。

敵よりも速く、正確に撃った弾によってことは一瞬の内に終わった。

そう見えた。

「見つけたぞっ!」

「くっそ……」

今の音を聞き付け、もう一人がやってきた。片方に気を取られて

いたジンは、防ぐ暇もなく胸に二発の弾丸を食らった。

「ん、のやるうつ！」

一発目の弾で右目を撃ち、ナイフで心臓を一突き。見事としか言  
い様の無い動きを手負いのままやりきる。

「あと……二人……！」

窓の隙間から、走って来る小さな影。敵の服。それを見たジンは  
時間を稼ぐためにドアに家具を積み重ねバリケードをはり、傷口を  
押さえながら二階へと駈け登った。

階下に比べてその階はまだそれほど荒らされていなくて、いま  
までに忍び込んだ民家に比べると幾らかましだった。

ジンは廊下の奥で壁に背中を預け敵を待ち構える。彼の通った後  
には、道の様に紅い血がポタポタと印をつけていた。

がたがたと物を揺さぶって壊そうとする音が聞こえるが、ジンは  
気にしない。

あのバリケードはそう簡単には動かないだろう。撃たれた胸を庇  
いながら座り、目を瞑った。

カノン。なあ聞こえる？

お前に会えて、良かった。この7年間、毎日が笑顔と笑い声で溢  
れていた。

初めての誕生日を覚えてるか。俺は何をあげれば良いのか全然わ  
からなくって、子供のいる仕事仲間に聞きまくった。お前に欲しい  
ものを聞いても、答えはいつも『なんでもいい』だったからすっげ  
え困った。結局、無難なティンベアに落ち着いたけどお前はものす  
ごく嬉しそうに笑ってくれた。まだ、机に飾ってくれてるよな。あ  
りがとう。

二回目の誕生日はお前に部屋を作ってあげた。もともと部屋は余  
っていたから、掃除をしただけなんだけど。

元は物置みたいに本がたくさん置いてあったけど、片付けてキレイ  
にして、机とベッドを置いた。お前は初めての一人部屋に喜んで、



ほこりがたつって言っているのに何度もベッドの上で跳ねた。

三回目は、仕事が忙しくて俺、すっかり忘れてたんだよな。それでお前が怒って家出した。あの時は本当にびっくりした。どこを探しても見つからなくて落ち込んだまま家に帰ると、お前が部屋の隅っこで拗ねていた。きつとあの時、お前の存在の大きさを知ったんだ。

ああ……やばいな。目の前がぼやけて見える。動悸も激しい。

ごめん、もう時間が無いみたいだ

もうドアとは呼べそうにない板が開き、敵が二人入ってきた音を確認した。この二人でちょうど敵は全員だ。

ジンは今までよりもさらに息を殺し、相手が二階へ上がってくるのを待った。二人は下の階を蟻一匹でも逃さまいというように、風潰しにジンを探し始めた。

それから四回目、十一歳の誕生日。お前が初めて旅行に行った日だったな。あの年は五月の癖にもものすごい湿気と暑さに参って俺の生まれ故郷セレナーデへ涼みに行った。着いた時にはさすがに北地方だ、つてはしゃいだよな。

五回目は俺が誕生日ケーキを作った。苺を馬鹿みたいに買い過ぎて、真っ赤な山みたいにデコレーションしたよな。やり過ぎだって分かっているのに、二人とも飾ることが楽しくてやめられなかったな。

六回目。俺が祝ってやれた最後の誕生日。確か、お前は時計が欲しいって言っていた。けれどやっぱりというか、うちにはそんな余裕はなくて、俺のお古の腕時計をあげた。あれ、まだ大切に持っているか？ あれは俺が入隊時に自分へご褒美として買った、結構値が張るものなんだぞ。

そして、今年が七回目。この分だと祝ってやれそうにないなあ。実はさ、前から色んなことを計画してたんだ。

まずひとつめ。バースデーケーキお前の好きなチョコレートケーキにする計画。

イチゴとみかんとメロンをキレイに並べてさ、お店で売ってるやつみたいにするんだ。お前が食べたがってた『ドルチェ・デ・ノエル』のケーキみたいな。

それからふたつめ。便利屋の仕事に使える服を買ってやるつもりだった。お前は物覚えが早かったから、そろそろ一緒に働いてもらおうかなって考えてたんだ。嘘じゃないよ。今更言っちゃって、どれも言い訳みただけだよ。

今年、お前は十四歳か。

長く感じたけど、たった七年間しか一緒にいられなかったな。せめて、お前が大人になるまで一緒にいたかったよ。

なあ、俺はちゃんと、お前の家族でいられたかな？

ばたばたと騒がしい足音がする。

敵が一人だけ、二階に上がってきたようだった。

階段からやってくる敵の胴体上がり切る前に、ジンは銃口を頭に向けて撃った。

ぱん、とまた乾いた音が部屋の空気を割る。こんなにも軽い音なのに、それが奪うものはとてつもなく重い。

「がっ！」

硝煙が立ち込める。辺りは火薬と、鉄が擦れ合ったような匂いでいっぱいになった。

もうこの匂いに嫌悪感を抱かないくらいになっていた。

「上か!？」

もう一人の声が聞こえ、ジンはうずくまった。

「……………う、ぐ……………！」

押さえ込んだ胸から鉄臭い匂いがする。軍服の色が分からないくらいに血で染まっていた。

その傷がもう治ること無いのは、誰の目にも明らかだった。

「見つけたぞ！」

蹲るジンの姿を見付け敵は容赦無くその身体に向かって発砲した。撃たれる度に、身体はバネの様に跳ねていく。

四発目が命中した当たりで、敵は撃つのをやめた。

廊下に倒れこみ、ジンは壊れた人形のように動かなくなった。ある一定の方向を見つめたまま。

恐怖か、高揚か。肩で息をしながら、男はジンの視線の先にある右隣りのドアを見た。

「誰がいるのか!？」

当然、返事はない。だがまだ人が潜んでいるかもしれない。それが敵か味方もわからない。

彼は、銃を構えたまま左手でドアノブに手をかけた。

床に這い蹲ったジンは、その行動をただ静かに見つめていた。

カノン。お前はいつだったか言っていたよな。

自分はいらない子だったって。いらなくなったから捨てられたって。

それは違うよ。

俺にはお前が必要だった。お前がいたから、頑張れたんだよ。

俺はもう駄目みたいだけど、絶対にお前を独りぼっちにしないから。

ユーリは、ユリウスだけは絶対に生かすから

男がドアを勢いよく開けた。

その瞬間、腰に吊るほど大きなナイフが刹那のうちに男の首元に刺さった。

ドアの向こうには、ボーガンと似た形状のモノが設置されている。それは、ドアが開くと同時にナイフが飛ぶ仕組みになっていた。

他の民家に比べて荒廃がすくなかった家には、罨を作り上げるだけの材料が有り余っていた。

「ん、な……?!」  
「ははっ……チェックメイト、だ」

突き刺さったナイフが落ちると、一瞬にして紅い飛沫が飛び跳ねた。

それは男が倒れるのとはほぼ同時だった。

カノン、聞こえる？

これから俺が言うことをよく聞いて。きっと、もう言えなくなるから。

おはよう

ありがとう

いつてらっしやい

おかえり

いつてきます

ただいま

おやすみなさい

また明日

好きだよ

だいすき

だいすき

愛している

あいしてるよ、カノン。

なあ、ちゃんと、聞こえた？

「……ごめんな」

伸ばしたジンの腕が、虚しく空を掴む。

そして、静かに落ちた。



44・トレモロ(後書き)

もう一度、やり直せるなら、出会った日に戻りたい。

## 45. ウォーマー

温かいこの世界は。

5月2日。

雲一つない清々しい五月晴れ。

街外れの小さな家のドアの前で軍服姿のユーリが立っていた。

ドアには『CLOSE』と看板が掛けられている。

一度ノックをしたが返事は無かった。ドアノブに手を掛けると意外にも鍵はかかっていたいなかった。

ユーリは少し戸惑ったが、やがてそのドアを開けて家の中へ入っていった。

慣れた足並みで家の中をゆく。

台所、客室、洗面所。

しかしどこにもカノンの姿は無かった。

ものがあちこちに投げ付けられ荒れた部屋を見て、ユーリは複雑に顔を歪めた。

「2階か……」

何度も上ったことがある階段を上り切り、ユーリはカノンの部屋の方へと歩いた。

そしてノックをしようと手を伸ばし、やめた。

代わりに何か思い付いたのか、向かいにあるジンの部屋のドアを開けた。

「……カノン？」

予想通り部屋の隅にはアルバムを広げ、ジンがよく使っていたクッションを抱き締めたカノンが小さくうずくまっていた。

「いけない」

「行かないって……」

視線はアルバムに向いたままで答える。

「師匠の葬式なんかいかない」

「カノン」

右手がアルバムのページをめくる。

「絶対いやだ」

「カノン！」

ユーリがカノンの肩を掴んで目を合わせようとする。カノンの目は飽和量がもう限界に達していて、肩を掴んだ衝撃でその水面がゆらゆらと零れそうになった。

「……ジンさんの家族はお前しかいないんだ。お前が行かないでどう……」

言い終わらない内に、カノンがユーリの手を振り払った。

「……いく。でも、泣いてなんかやらないから。みんながどんだけ泣いてても、絶対に泣かないからな」

「……わかった。じゃあ、行こう」

カノンはだるそうに身体を起こし、クッションを丁寧に元の位置に戻した。

横目で見た写真の中では、もう見ることの出来ないジンの笑顔があった。

\*\*\*\*\*

ユーリさんに付いて行った城下町を見下ろせる丘には、たくさんの



人がいた。

おれの顔見知りもいたし、よく知らない人達もたくさんいた。広いその丘には新しく綺麗な十字架が、何十本も並べられていて、それらを取り囲む様にして幾つかのグループに分かれていた。

今日は、戦死した兵士達の葬式が一斉に行われているらしい。何処の十字架の前にも人のかたまりが出来てあつて、それは師匠の墓の前も同じだった。

「バーガンデイ少尉、そちらの方は…？」

参列者の中の1人がおれの姿に気付いて尋ねた。

軍服はユーリさんと同じ、行事用の黒を基調としたものだった。

「ああ、ジンさんの娘のカノンだ」

「貴女がそうでしたか…ソリティア大尉、いえ少佐からよく話を聞いていました」

「どうも…」

師匠の階級は殉職の際に昇進していた。ユーリさんに聞いて知っていたが、それは師匠が死んでしまったという事実を強調しているだけにしか聞こえなかった。

「…おれ、離れて見てるから」

「カノン？」

一言だけ言つて、おれはその場から離れた。一本だけ申し訳程度に植えられたポプラの木の下へと移動する。

こうやって見ると、師匠の墓の前ではすべての人がうなだれ、ある人は静かに花束を供え、ある人は声をあげて泣いていた。慕われていたんだ、とつくづく思い知る。

おれはその光景をまるで違う世界のこの様にぼんやりと眺めていた。

「あなた、来てたんだね……」

不意に声をかけられ、顔をあげると郵便屋のおねーさんがいた。

「あ…来てくれてたんですね。ありがとうございます。きっと師匠も喜んでいると思います」

「もちろん来るさ…あなた、今日はもう来ないかと思ったよ」

おねーさんはおれから目線を外して、わざとしか思えない明るい声で続ける。

「あなたが心配しなくても、絶対に天国へいけたと思うよ。だからさ、笑って見送ってあげなよ。」

アタシ、さっきあいつに花を供えるときに言ってやったんだ。配るラブレターの数が減って残念だった」

それだけを言っ、おねーさんは丘を下って行った。これから戦死を伝える手紙を配りに行くそうだ。貰う方も辛いけど、配る方も辛いよ、と零す様に言っていた。

足が疲れたおれはポプラの陰に隠れる様に足を抱え座り込んだ。

遠くとも近くとも言えない師匠の墓の方を見ると、さっきより随分人が減っていた。

\*\*\*\*\*

「お前と俺は親子って言うには年が近いし、兄妹って言うには年が離れてるから、家族で師弟ってことな」

「『していい？』」

「そう。だから俺のことは師匠って呼ぶこと！」

「わかった！」

「……そっぴやお前は名前を忘れたんだっけか」

「うん」

「いつまでも『お前』じゃあ新密度が増さないから、名前を考えな

くちなな……お前はどんなのが良い？」

「私は『ジン』が良い」

「えー俺と同じ名前にすんのかよ。それじゃあややこしいだろ？第一、『ジン』って男の名前じゃねーか」

「じゃあ師匠が好きなのが良い」

「俺が好きな名前？んー、と……そうだな。『カノン』はどうだ？ギリシャ語で規則を表す、俺の好きな追復曲だよ」

「『カノン』？それが良い！」

「よし、じゃあ決まりな」

\*\*\*\*\*

「俺、この後一度軍に戻らないといけないんだけど、お前はどつする？」

ユーリさんが声をかけてきて目が覚めた。

おれはいつの間にか眠ってしまったのか、辺りにはたくさんいた参列者の姿はなく、疎らに人が散らばるくらいだった。

「おれ、もうちよっところにいるよ」

「ん。じゃあ暗くならないうちに帰れよ？用事が終わったら、また見に来るから」

「わかった」

ユーリさんが歩いていくのを見届けて、おれは十字架へと近付いた。その前にはもう誰もいなかった。誰も。

参列がおれだけなら迷惑はかからないだろうから、十字架と向き合う形でしゃがんだ。

この人にはいつぱい言いたいことがある。

一言目はやっぱり恨みの言葉。

「帰って来るって、言ったじゃん。出来もしない約束なんかするんじゃないよ」

涙は出なかった。

出そうになつたとしても、絶対に堪えてやろうと思った。

絶対に泣いてなんかやらない。

泣いて済むような簡単なものじゃないから。

「誕生日には帰って来るって言ったじゃん。それで、昔みたいにケーキを焼いてくれるんでしょ？」

卵とかバターとか、材料は揃ってるんだよ？だからねえ作ってよ。

ねえ、本当は死んでないんでしょ？だって約束したもんね。あの日、絶対におれを独りぼっちにしないって。

ほら、さっさと帰って来てよ」

言って、虚しかった。

師匠の死を一番信じられなかったのはおれだった。

「まだ何も終わってないのに。これから一緒に便利屋やるんじゃないのかよ。全部中途半端なまんまで、そんなの無しだよ。卑怯じゃんか」

そこで、息をついた。深呼吸をする。

目の表面張力は立派なもので、一粒も零さずにすんだ。

話したって無駄なのは分かってる。それでも喋らずにはいられなかった。

まるで壊れたおもちゃのように次から次へと言葉が溢れた。

「ユーリさんが言ってたよ。あんた死ぬ時に笑ってたんだって？」

駆け付けた時にはもう血塗れで、胸には銃弾2発。肺がやられていて苦しいはずなのに穏やかな笑顔だったって。

寝てるのかと思うくらい穏やかだったって」

どうして笑いながら死ねたの？

どうして穏やかに死を迎え入れたの？

「あんたは最期に何を思ったの？」

白に近い石色が夕焼けに反射して朱色に染まった。不謹慎だけど、とてもうつくしかった。

「ねえ、あんたはちゃんと天国にいけたのかな。きつといけたよね。だってあんたはいい人だったから。だから、もうここにはいないんだよね？」

あれだけ泣かないって言っちゃったけど、少しだけなら泣いてもいいよね……？」

目の前の十字架がぐにやりと歪んだ。見るものすべてがゆらゆらと動く。

袖で何度も目を擦った。

なのに、世界は歪んだままだった。

ねえおれの表面張力、もう少しだけ頑張ってよ。声がでなくなっちゃうから。

「……師匠、言いたいことがあるんだ。

言わなきゃいけないんだ。だから、これが乾く頃に聞いてね」

あの日、冷たかったおれの世界を貴方が温めてくれた。

そして薄暗く汚いあの場所から連れ出してくれた。

醜い世界しか知らなかったおれに、貴方はうつくしい世界を教えてください。

貴方が温めてくれたこの世界はどんな宝石よりも綺麗だった。

「さようなら、ありがとう」

You were my master, and  
I was an irreplaceable family  
for me.

Even if people all over the world admit your death, you keep living in my mind.

Therefore, I do not forget you through life. ♪

貴方はおれの師匠であり、兄であり、父でした。

掛け替えの無い存在でした。

世界中の人々が貴方の死を認めたとしても、貴方はおれの心の中で生き続ける。

45 ウォーマー（後書き）

あなたはもう、帰って来ない。  
だけど、あなたのこと、忘れないから。

さようなら、ありがとう。

BGM：永遠 / Do As Infinity

間奏曲 漆曲目「答えなんて見つからない」

ある所に、とても頭の賢い人と、とても腕っぷしの強い人がいました。

2人は毎日のように

「どちらがこの国で1番なのか？」

と争っていました。

ある日、2人がちょうど言い争っているところへ普通の人を通り掛かりました。

「一体何を言い争っているのですか？」

普通の人が見ると2人はこれまでのことを話して、

「キミはどう思う？」

と答えを求めました。

「そんなくだらないことで言い争ってはいけませんよ」

そう言うと、くだらないと言われた2人は怒ってその人を殺しました。

そして2人は何事も無かったかのように、また言い争いを始めました。

ある所に、とても頭の賢い人と、とても腕っぷしの強い人がいました。

2人は毎日のように

「どちらがこの国で1番なのか？」

と争っていました。

ある日、2人がちょうど言い争っているところへ便利屋のカノンが



通り掛かりました。

「なにをやってるんだ？」

カノンが尋ねると2人はこれまでのことを話して、

「キミはどう思う？」

と答えを求めました。

「そりゃあ1番って言ったからおれしかいないだろ」

そう言うと、答えの出なかった2人は怒ってカノンを殺そうと銃を向けました。

しかし、カノンはいとも簡単に2人から銃を奪いとってスタスタと去って行きました。

取り残された2人は、今の出来事を見て見ぬフリをしてまた言い争いを始めました。

ある所に、とても頭の賢い人と、とても腕っぷしの強い人がいました。

2人は毎日のように

「どちらがこの国で1番なのか？」

と争っていました。

ある日、2人がちょうど言い争っているところへ弟のシオンが通り掛かりました。

「どうしたんですか？」

シオンが尋ねると2人はこれまでのことを話して、

「キミはどう思う？」

と答えを求めました。

「そうですね…。僕はまだ子供だから、よく分かりません」

シオンは2人に丁寧に辞儀をして去って行きました。

子供に聞いたことを後悔して、2人はまた言い争いを始めました。

ある所に、とても頭の賢い人と、とても腕っぷしの強い人がいました。

2人は毎日のように

「どちらがこの国で1番なのか？」

と争っていました。

ある日、2人がちょうど言い争っているところへ始末屋のレオラリアナが通り掛かりました。

「何言い争ってるんだよ？」

レオラリアナが尋ねると2人はこれまでのことを話して、

「キミはどう思う？」

と答えを求めました。

「どうって、それはお互いに勉強と喧嘩の仕方を教え合ってからもう一度決めたら良いんじゃないかねえの？」

そう言つてレオラリアナは2人に手を振りながら去つて行きました。取り残された2人は、ただ納得するしかありませんでした。

ある所に、とても頭の賢い人と、とても腕っぷしの強い人がいました。

2人は毎日のように

「どちらがこの国で1番なのか？」

と争っていました。

ある日、2人がちょうど言い争っているところへ都合屋のクウヤが通り掛かりました。

2人はとても大きな声で言い争っていたので、どうしたんだ、と声をかける人がほとんどでしたが、クウヤは2人の近くにある4人掛の白いベンチに座つて本を読み始めました。文庫本のようにです。

読書をするクウヤの目の前では、あの2人がますます激しい言い争いをしていました。

どんどん激しくなっていくのに全く気にせず本のページを進める

クウヤに向かつて、ついに2人は尋ねました。

「どうしてキミは何も言つて来ないんだ？」

尋ねられたクウヤは、さも当たり前のように答えました。

「どうしてって……僕には関係ないからですよ」

また本を読み始めたクウヤを前に、2人はただポカンとするしかありませんでした。

ある所に、とても頭の賢い人と、とても腕っぷしの強い人がいました。

2人は毎日のように

「どちらがこの国で1番なのか？」  
と争っていました。

ある日2人が言い争う前から、4人掛の白いベンチの上で軍人のユーリが寝そべっていました。どうやらサボリのようです。

2人がいつものように争っている中、ユーリはびくりとも動かずに寝ていました。

どんどん激しい言い争いになって、声のポリウムが大きくなって騒音になってもユーリは寝たままでした。

夕方、2人がいつものように暴言を吐き、捨て台詞を言いながら帰路に着いた頃、ユーリはやっと起きました。

ここでどんな争いがあったか何も知らないまま、ユーリも帰路に着きました。

2人は次の日もその次の日も言い争いを続けました。

しかし、いつまでたっても答えは出ませんでした。



間奏曲 漆曲目「答えなんて見つからない」(後書き)

だって出るわけないでしょう。

## 46・裏町カプリッチオ #00「招待状」

とても広い、見たただけでお金持ちの人が使うと分かる部屋があった。部屋の天井には美しく光るシャンデリア、壁には整然と何枚も飾られた高価な雰囲気絵画、そして部屋のだ真ん中に重厚な黒革ソファがあった。

ソファの上には白髪で眼鏡をかけた老人の男が品良く座り、そのソファを取り囲むようにして恭しく立つ数名の様々な男女。その老人が、この部屋の中で一番立場の高い者だと分かる。

「パーティーの招待状はもう出しましたか？」  
老人が誰に問うでもなく優しく聞いた。

取り囲む人々のうちの、一番若い女性が素早く答える。

「すべての裏町業者の手元へ、今朝届くよう手配しました。所長」  
所長と呼ばれたあの老人が、満足そうに頷く。

「そうですか。裏町業の皆さんは来てくれるでしょうか？」

所長がまた誰に問うでもなく聞く。眼鏡がずれたのか、優雅に左手で位置を整えながら。

「恐らく、全員出席されるかと思われませう」

さっきの女性とは違う、体格の良い男性がよく透る声で答えた。

「そうですね。やはり祝い事はみんなでしなければ…。皆さん、我が裏町幹旋所創立百周年の記念パーティーを必ずや成功させませましよう」

所長の一言でその場にいた全員の男女が返事をした。

彼らの胸には幹旋所所員である証の、二つの掌が互いに握手をしているデザインのピンバッチがシャンデリアに照らされ、輝いていた。  
「もちろん、私の暇潰しの為にもね」

所長は上手にウィンクをした。

\*\*\*\*\*

「うおっ……」

「ん？どうしたの、姉さん？」

読んでいた本から顔を上げ、奇声をあげた姉に向かいシオンが尋ねた。

姉はその利き手で背中を搔いていた。

「いや……なんか今、悪寒が……ってか、嫌な感じが」

「誰かに恨まれてるんじゃない？」

「いや！そんな訳は……無い、とも……言い切れない自分が悲しい」  
「ほらね」

シオンはまた本の世界へと戻っていく。今読んでいるのは『シンデレラ・カノンバージョン』だった。

そんな薄情な弟をジト目で睨んで、いきなり走ってドアを開ける。

キョロキョロ首を動かして何も無いことを確認してドアを閉める。

端から見れば拳動不審丸出しのちよつと頭の可笑しい子だった。

「……何してんの？」

「いや、誰か来る気がしてさ」

「………姉さん、こんなこと言うのもなんだけど、ちよつと頭おか」

「言うな！あーあー、何も言うな！……でも、なんかある気がするんだよな。言葉に出来ないけど、第六感がさ、何かとてつもない不吉なものを」

カノンが喋りながらドアから離れた瞬間に、あ、これ壊れたな。と思うほどソレは勢いよく開かれた。

そして、その勢いに乗って現れた明るい金色。

バスケの選手が試合で着るような赤い袖無しを、白い半袖の上から赤に『11』という白い数字がよく映える。

次に見えた綺麗な赤い目。

その表情は、半泣き。

「カノンッ！オレ、まだ死にたくねえよーっ！」

「うわあっ！だ、誰?!」

驚いて大声を出すシオン。

固まった脳が動きだしたカノン。

「レオラ？」

道外れの始末屋レオラリアナが半泣きで、ドアを蹴り破ってきた。

「カノン!……あ、弟のシオンだっけ?よろしく!オレはレオラリアナ」

「あ、どうも」

「レオラ、一体何が…?」

「そうだ!本当にやばいって!オレはまだ青春を満喫していないから死ねないんだー!」

「だから何があっただんだよ!?!」

そこで、レオラの動きがぴたりと止まる。よく見ると、手には手紙らしきモノが見える。

おそろおそろ差し出す。

「こ、これ…お前の所にはもう届いたか…?」

差し出された場所には、カノンも見覚えのある二つの掌が互いに握手をしているデザインのマーク。カノンの右頬が引きつった。

宛先『道外れ・始末屋レオラリアナ殿』

差出人『裏町幹旋所』

「いや、まだだ」

そのセリフと同時に開け放たれたドアの外から、馴染みの声。

「ちよいとカンカン?速達です。何?お取り込み中なわけ?」



「お、おねーちゃん…」

不吉の予感。

46・裏町カプリッチオ #00「招待状」(後書き)

レオラがあらわれた!どうする?

話す

戦う

取りあえず蹴る

弱味を握る

カノンはレオラの目を睨んだ!効果はテキメンだ!

47・裏町カプリッチオ #01「香葉月朝葉香」

「“超”速達？」

開け放たれたドアの前でカノンと郵便屋が話をしていた。

2人の後ろの内向こうではレオラが

「つ、ついにカノンの所にもアレが！あー！あれは悪戯じゃなかったんだー…はあ、僅かな希望が途絶えた…オレの人生終わった！確実にいま終わりを告げた！」

と、その鮮やかな金色の頭を抱え叫び、その隣で

「ねえねえレオラリアナって名前長いからさ、レオラって呼んでもいい？」

「死んでたまるか！オレはまだ花咲く10代なんだー！」

「ねえ、僕のはなし聞いている？聞いてないよね？」

「幹旋所がなんだ！オレには拒否権がある！」

「ちよつとは話を聞こうって思わないの？」

「ああああ、でもなー…、いまお金無いしなー」

「聞いてよー！」

と、可愛らしくつつんとレオラの服を引っ張るシオンがいた。

そんな2人の噛み合わない会話を目にした郵便屋がカノンの肩をつつく。

「……ちよいとちよいとカンカン、あの金髪赤目バスケ少年誰よ？」

「裏町業の友達ですよ。良く言えば、純粹で素直で良い奴。悪く言えば、ちよつと馬鹿でお人好しな19歳」

「ふーん。好みだわ、あの顔…特に右目下の泣きぼくろがいいわね」

「まじですか！ま、とにかくそれは置いといて。おれに“超”速達って本当ですか？」

「そうみたいだね。」

だからアタシ、今日はこれを優先に届けなきゃーって思ったんだけど、敢えて一番最後に配達するのも、まあそれはそれで楽しいいつつか、アタシ的に面白いかなくて思って、朝に配達予定がお昼になったわけ。大事なお手紙だったらごめんね。アタシに免じて許せ。

“超”速達を言われたとおりに運ぶのは本能が許さなかつたってわけ。で、それ何？ラブレターか？ついにカンカンも彼氏いない歴イコール年齢からの脱出か？」

気まぐれな郵便屋から（もちろん帽子の中から）渡された手紙には、きつちりと封がされており、封筒に貼られた切符は二つの掌が互いに握手をしている、見覚えのあるマークだった。

このマーク…！

カノンは露骨に嫌そうな表情を顔に出す。

「げっ…！」

「何よ？」

「ああああ幹旋所からだ…レオラと同じ…！」

「あっそう。ラブレターじゃないんだ。ちっ」

見事な舌打ちを響かせ郵便屋はいつもどおりてくてくと丘を下りていく。

あの速さでは絶対に間に合わない筈なのに、この街で郵便には困ったことがない。不思議だ。

カノンは深い溜め息を吐き、肩を落としつつ家へと入っていった。

手元に握られた手紙の宛先には『街外れ・便利屋カノン・ソリテイア殿』

そしてやはり差出人はレオラと同じ『裏町幹旋所』だった。

「あっせんじょ？」

ソファーの上でシオンが両目をぱちくりさせて首を傾げる。聞いたことのない店だ。

隣のソファでレオラが

「幹旋所…いま一番聞きたくない言葉だよ…」

と呟いて居るのをすっかり無視して、さつき渡された手紙を右手でひらひらさせながらカノンが深く頷いた。

「そう、幹旋所。裏町業専門の紹介所だよ。この幹旋所のお陰でお客様が訪ねて来るってわけ。つまり仲介みたいな役割だな」

「へえー。そこから姉さんに手紙が…依頼かなあ？」

「いや。これはパーティーの招待状」

「パーティー？」

疑問符を飛ばすシオンに、レオラが補足する。

「ああ。なんでも今年で裏町幹旋所が創立百周年なんだと。その記念パーティーだよ。カノン、シオンに見せてやれよ」  
言われて手紙を見せようとした瞬間だった。

「パーティー？何がパーティーなものですか。きつとまた所長の暇つぶしに決まってるわ、全く」

出窓から声が聞こえた。

シオンとカノンとレオリアナの3人が一斉に出窓を向く。

そこには赤い生地に蝶の模様が入った布を巻き付け、黄色の細長い布で止めたような服（『着物』と呼ばれる和国の民族衣装。クウヤが言うには、今はよつぼどのことや行事が無い限り和国人は着用しないらしい）を身に纏ったカノンよりも年上らしい少女が腰掛けていた。

クウヤと同じ黒髪は腰の辺りまで伸ばされ、艶やかで驚くほど真っ直ぐだった。

「わたくしは、そんな和やかで華やかな雰囲気のものとは思いませんけど。大体、ここから来る話には良いことがあった試しがありませんもの」

「うわあっ！だ、だれ?!」

シオンがソファからずり落ちそうになるくらいに驚いているその向かいの席では、カノンが左腕を大きく振って

「やつほうアサハカ。元気だった？」

フレンドリーに挨拶を交わした。どうやら顔馴染みらしい。

「ご無沙汰ですわね、カノン。わたくしはもちろん元気ですわよ。貴女の方こそお変わりなくて？」

「うんにゃ、変わったよ。この前、弟が出来たのです！」

そう言いながらずっとシオンを、アサハカと呼んだ黒髪の少女の前に差し出して紹介する。かなり誇らしげだ。

アサハカは両手を口元にあて、びっくりした笑いになる。

「あらあら！初めまして。わたくし和国で店を構えております、島外れの代理屋、香葉月朝葉香と申します。カノンとは古い仲のお友達ですわ」

「コウヨウツキ・アサハカ？」

今日は首を傾げることの多いシオン。アサハカは丁寧に教える。

「ええ。この国での呼び方に従うとアサハカ・コウヨウツキですわね。アサハカ、とお気軽にお呼び下さいな」

「ほら、お前も自己紹介」

「あ、僕はシオン・ソリティア。よろしく、アサハカ」

カノンを仲立ちにしてお互い握手をするシオンとアサハカ。

その向かい側のソファーでは隠そうともせず嫌そうに顔を引きつらせるレオラがいた。

それに気付いたアサハカがわざと驚いた表情を作って芝居する。

「あらあら…。こちらも久しぶりですわね？」

「なんでコウヨウツキがくるんだよ…！」

「別にわたくしがどこに居ようと勝手ですわ、始末屋ラリルレロ」

「違っつ！なんだそのへんてこりんな呼びにくい名前！レオラリアナだってば」

「今でも十分ちんちくりんで呼びにくいって」

「カノンまで…！」

さらりと間に入ったカノンに、脱力せざるを得ないレオラ。全く謝る気の無いカノン。

ふふん、と勝ち誇ったように鼻で笑うアサハカ。

そんな力関係の分かりきってしまった3人のやりとりをきよるきよると首を回して見ていたシオンが、空気を読んでやっど話しかけた。ある意味この4人の中で、彼が一番大人だった。

「姉さん、さつき届いた手紙を見せてよ」

「あつ、アサハカの登場で途中になつてたんだっけ！」

すっかり忘れていたことはさて置き、裏町幹旋所から来た恐怖の招待状（レオラ談）を読み上げるカノン。

レオラもアサハカも自分宛の手紙を取り出してもう一度読む。

「よし、読むぞ……」

『謹啓

夜毎に澄みわたる空の月の彩も冴えて、深まりゆく秋が目に見えて参りました。裏町業の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さてこのたび、弊社の創立百周年を記念しましてささやかではありますが記念パーティーを催す所存です。

お忙しい中恐縮ですが、拒否すること無く必ずご出席いただきたくお願い致します。

裏町幹旋所所長アレグロ・コンポート

日時 11月11日

場所 南の島（個人所有島ゆえ地図を同封しております。ご確認ください）

問い合わせは弊社までご連絡下さいませ。

追伸

残念ながら不参加となられる裏町業の方にはそれなりの対応を取らせていただきます。また、行き方が分からないから・急病で・母が危篤、などと言う陳腐な言い訳をなさる様でしたらこちらにも考え

「がございますので、予めご了承下さい。」

……だつてよ」

カノンが読み終わって、レオラが自分宛の手紙を机に投げ付ける。アサハカも似た様なことをする。

シオンはシオンで、幹旋所とはこういう場所なのだやっとなら理解した。

無言の中レオラが口火を切った。

「なんだこれ？脅迫状じゃねえか！あれか、地獄への招待状ってか？」

「全くですわ！拒否権なんて無視じゃないのですの？」

取り乱す19歳達を2人よりも年下の16歳カノンが押さえる。

「落ち着け2人とも！お前らおれよりも年上だろ？ちよつとは大人な態度を見せる。つてか大体なんでレオラもアサハカも、おれんちに来てるんだよ」

「カノンなら何か解決策があるかなって」

「帰れ！お前ら今すぐ国へ帰れ！！」

「カノンひどーい……」

「ひどくない！ハモるな！とにかく、もう二度とおれを頼るな！情けないと思わないのか！？」

小さな家に3人の声が響き渡る。そんな大人げない姉と仲間を見上げて、8歳のシオンは何かを諦めたように溜め息を着いた。そして思い出す。

「あ」

「……なに？」

「姉さん達に手紙が来たつてことは、クウヤにも届いてるはずだよね？でも、もし届いていなかったら……」

シオンがそこで言葉を切る。続きは3人へ。

「質の悪い悪戯つてことだな」

「そうですね。和国でも最近は『オレオレ詐欺』と言う卑劣なものが流行っていますし、それと似た類のものかもしれないわ」



「お前ら…すつげーポジティブだな…」

「カノン、取りあえず電話！クウヤんちの番号教えるから」

「善は急げですわカノン」

はいはい、と呆れながら電話へ手を掛ける。結局は言う通りにしてしまふのだ。

「クウヤ、出るかなー？」

そんな弱音を吐くカノンにレオラとアサハカは肩を寄せあい、電話に耳を近付けた。

シオンはひとつの小さな受話器に群がる3人の人間という奇妙な光景をまるで違う世界のことのよいに、遠い目で見ている。

呼び出し音が4回なつてすぐにがちゃ、と受話器をあげる音が聞こえた。

クウヤの声だ。

『はいもしもしー。こちら世外れの都合屋です』

「よっ。クウヤ、元気？」

『カノンさん！元気ですよー！珍しいですね、カノンさんが電話をかけて来るなんて……アレ？僕、カノンさんに番号教えてましたっけ？』

「ちよつと聞きたいことがあつてさ。番号はレオラに聞いた」

レオラがカノンとクウヤの間（詳しくは受話器の間）に割り込む。

「クウヤ！お前の所になんか変な手紙来なかつたか!？」

『レオラだ。変な手紙……?』

しばらく無言が続く。こちら側ではレオラとアサハカが念仏を唱える様に

「来てません様に来てません様に」

「どうか夢であります様に」

念じていた。

諦めの悪さはこの中では断トツだ。

『…ああ！手紙なら、確か幹旋所から創立百周年記念パーティーの招待状が届いてますよ』

クウヤの声が聞こえた瞬間。2人はほぼ同時に叫んだ。

「神はついにオレを見放した！」

「最悪ですわ…最悪すぎますわよコノヤロー！」

『……あの、カノンさん？香葉月さんとレオラの叫びが聞こえたんですけど、どうかしたんですか？』

「いや、なんでもない。あいつらは大抵あなんだよ……それより、お前も災難だったな」

『はい？……でも楽しみですよ！記念パーティーかぁ。一体何をするんでしょうねー？』

「……楽しみつて……」

『じゃあ僕、仕事があるんで！カノンさん、香葉月さん、レオラ。また今度』

別れの挨拶のあとすぐに、がちやんと切れる音が聞こえ、すぐに虚しいつーつー音が3人の耳にこだました。

「切れた」

「そうか…クウヤは最近斡旋所に登録したから知らないんだな……」

肩を落とすレオラとアサハカ。結果として、裏町斡旋所からの招待状はデタラメではなく真実だ。

「はぁ11月11日か……」

「予定の仕事も全部キャンセルですわ」

「でも、招待状に書いてあることは強烈だったけど、不参加くらい良いんじゃないの？」

尋ねるシオンに説明を試みるアサハカ。腰を屈め、目線をきつちり合わせる。

「シオンくん。裏町斡旋所は怖い所ですの。何か断ってしまえば、今度から客足がだいぶ減りますの。大人の世界は汚いんですのよ」  
乾いた笑顔は怖かった。

\*\*\*\*\*

「明日が楽しみですね。みなさんが参加して頂ければ良いのに」

カノンの家にあるものとは全然違うソファーに座って、斡旋所所長は不安げに言った。

すかさず隣りに立って居た秘書が相槌を打つ。

「大丈夫ですよ。所長の招待を断った人なんて今までに一人もいないじゃありませんか」

「それもそうですね」

便利屋の店中とは正反対の楽しげな雰囲気を取り巻く斡旋所だった。

47・裏町カプリッチオ #01「香葉月朝葉香」(後書き)

裏町幹旋所所長が現れた!どうする?

従う

言うことを聞く

言われた通りにする

逃げる

カノンは逃げた!

しかし逃げられない!

## 48・裏町カプリッチオ #02「変人所長」

11月11日早朝 天候は絶好の洗濯日和。

ただラジオが言うには、夕方からにわか雨が降るらしいから、と出掛けにシオンから傘（アサハカが昔、カノンの誕生日にプレゼントしてくれた、和国式のワンタツチの赤い傘）を持つことを強要された。もちろん荷物になるので、カノンはその意見を撥ね除けたが。今日は出来るだけ軽装にしたいカノン。なぜなら今日は裏町幹旋所創立百周年記念パーティー（随分と長い名称だが、要するにパーティー）の行われる日だからだ。

裏町業は何か集まりをするときは、季節・天候・日にち・場所がどうであれ、時間を正午に設定するという暗黙のルールがあるため、会場まで3時間も船に乗るカノンは朝早くに起きたと言う訳だ。

そんな朝早い時間帯、いまカノンが居るここは、ソナチネ地方の南にある港。カノンはユーリとシオンに見送りに来てもらっていた。なぜユーリがこの場に居るのかと言うと、歩いてここへ来るには時間がかかり過ぎるので、半ば無理矢理ユーリに車（もちろん軍の）で送ってもらったからだ。

「姉さん、招待状は持った？ハンカチは？忘れ物無い？」

「招待状はポシェットの中、ハンカチは左ポケット、忘れ物無し！」

「まあ楽しんでこいよ。留守の間のこととは心配すんな。なっ？シオン」

「うん！」

「シオン、バーガンディ家にお世話になる間はお行儀良くな？ユーリさん、シオンをお願いしまーす」

「へいへい」

「分かってるって！姉さんこそパーティーだからってはいしゃぎ過ぎないようにね。何があったかクウヤに聞くからね」

「お、おう」

会話が途切れ、待ち構えたように船の呼ぶ声が響いた。お腹の底にまで響いてくる、低く柔らかい声だ。

「じゃ、そろそろ行くわ」

船へと続く階段に足を踏み入れる。

「うん。行ってらっしゃーい！」

「気をつけてな」

2人に手を降りながら船の中へ入りきる。カノンの姿が見えなくなつたところで、ユーリが回れ右をする。

「うっし。んじゃ帰るかー」

「うん！ところでユーリさん、仕事はどうしたの？」

「……………便利屋の弟君の子守に全身全霊をかけて遂行することが今回の仕事であります！」

「あー、サボりね……………」

姉の不在を、少し心細く感じたシオンだった。

\*\*\*\*\*

船での移動は特に変わったことも無く、知り合いもおらず、カノンはやはりと言うか暇を持て余し、うつらうつら睡魔と戦った。

そんな特に代わり映えのしない船旅の中、

カノンが無事に3時間の睡魔との激闘を終えようとしたときだった。  
『みなさま、長旅お疲れ様です。ただいま当船は、アレグロ・コン

ポート氏の個人所有島へと到着致しました」

「と、とうとう着いてしまった…！」

船内のアナウンスが言い終わると同時にカノンが一人叫ぶ。

閉じられていた出口が開き、船内が3時間ぶりの外の空気を吸い込んだ。

「外をご覧下さい。人間の手が全く加えられていない、大自然のア일랜드です！」

「うわぁー！すっげえー…！」

甲板へと出るカノンは、声だけは元気だが、久しぶりの外だからかその表情は相当疲れていた。

そんなカノンに続いて船の甲板へと繰り出す人々もまた、同じ様に疲れているようだった。しかしどの人も、どこかお互いを警戒しているような感じだった。

「ぶわっ。国外れの便利屋に、町外れの始末屋…げっ、最後屋も…？なんだ、みんな結構来てんじゃん」

辺りを見渡してカノンが呟く。身動きの取れない船内に居たさつきまでは気付かなかったが、案外顔見知りも乗り合わせていたようだ。ならば解けない警戒心にも納得だ。言葉の通り、ここにいる人はみな裏町業。お互いに緊張を解けないのも仕方無い。

他に知っている人はいないかな、とカノンがキョロキョロしていると、叫びが聞こえた。

「な、なんだありゃ！？」

「なんだなんだ？」

声の持ち主が指差す方向に目を凝らす。

「……！？」

すぐさま目を丸くする。

「ぼ、ポマードポマード……！」

思わず、昔ジンに教えてもらった魔法の呪文を唱えてしまった。

カノンは信じられないモノを見た。

それは、陸地で招待客一人一人に挨拶をしている老人。

ただの老人なら、こんなにも驚きはしなかった。老人は斡旋所所長だったのだ。

さらに言うのなら、ただの所長なら、カノンもこんなにも驚きはしなかった。

カノンがそれを目にしたのとはほぼ同時に、前後左右の裏町業者達が息をのむのがわかった。同じモノを見たのだ。

カノンは、この状況の中、思った。

変人とはやはりどこの国にも1人は必ずいるもので、和国なんかじゃ知っている限りで3人も裏町業者がいるのだから、あなたの隣にいるあいつも変人なのかも知れない、気をつけて。変人と出会ってしまった時は、目を合わせてはいけない。餌を与えないでください。すぐさま死んだふり。唱えよう、魔法の呪文ポマードポマード。

……話を戻して。

ダメだ、どうしても現実逃避してしまう。

まあおれが何を言いたいのかと言うと、変人とは文字通り変な人という訳で、なるべく関わりたくないと言うのが本音な訳で、裏町業と言えばそりゃもう変人の集まりと言っても過言ではない訳で、と言うことは自分もその中に入っている訳で。つまりは、常識とは途轍もなくかけ離れた理解しようがない人物のことを指す。

「うわぁー…すっげえー……」

思わず漏れた感想は、その場にいた全員の感想に違いなかった。続けてカノンは思う。

しかしその変人をも超越する人物がいたら、おれたちはその人のことを何と称せばよいのだろうか。

変人の中の変人。その人の前では、変人すらも只の凡人と化す。そんな人はこの世に居ないというかもしれないが、この状況を見れ



ば、考えも変わるかも知れない。

つまり何が言いたいのかというと、裏町幹旋所所長、アレグロ・コンポートは度を越した変人だということ。

カノンは、この状況の中、そう思った。

「ようこそ、裏町業のみなさん。今日は私共のわがままに付き合ってください、まことに有り難う御座います。受付はあちらの広場になります」

所長自ら船を下りてくる招待客一人一人に挨拶とは全く以てよろしいことであるに違いない。昨今はお偉いさん方は見ているだけといった形式が増える中、これは感心できることだ。

ユーリさんも、自分の上司が命令するだけなことに、かなりの不満があるようで常に愚痴を言っていた。

だから、所長のやっていることは正しいに違いない。そのはずだ。そのはずなのだが……あの格好はどうだろう……？良いのか？良いのか……？うん、裏町幹旋所所長なんだし、良いんだ。そうだそうだ。

一通りの自問自答を終えると、船を下りるのに使う長細い簡易橋の行列へと並ぶ。

混雑する為2列に並んで待っていると、隣にいた、いかにも武闘派な感じの裏町業者がカノンに比較的小声で話しかけてきた。

「お嬢ちゃん、あれが、かの有名な裏町幹旋所所長なのか……？」

「はあ。残念ながら、そうなんです」

「俺達は、あんな……何て言うか……：：：そう、言うなれば、どこその秘境に住んでいる先住民が雨乞いの儀式にでも着ていそくなやたら原色使いで露出度の高い服と、これまた服に負けず劣らずどぎつい色の羽根を頭に着飾って、俺達に爽やかかつにこやかに挨拶をしている変なジジイもとい、所長のわがままに付き合わされてんのか……？」

「そう言うことですね。まあ、おれは、ああいうのにも見慣れましてけどね……通算5回目ですよ。ははあ……今回は先住民族の衣装ときましたか……」

カノンは昔を思い返す様に遠い眼をして言った。

その視線の先には、どこその秘境に住んで（以下略）な斡旋所所長、このパーティーの主催者がいた。

所長は、人を見る目が素晴らしいと有名だが、それと同じくらい変人で有名なのだ。

隣の武闘派が話す。見た目よりも気が弱いらしかった。

「今回は」？……なら、前回は何だったんだ？」

「聞きたいんですか？あれを見て、まだこの先を？」

「いや！いい！」

「賢明な判断です」

「そうか……お嬢ちゃんは今もう慣れたのか……俺はまだまだ修行が足りねえな。俺は始末屋を始めて5年目なんだが、実は斡旋所に登録をしたのがつい2ヶ月前でな。だから斡旋所主催のこういいう行事に参加するのは初めてなんだ。なのに、もう不安だらけでさ……」

「そりゃ不安にもなりますよ。てか、あれを見て不安にならない人がいますか？おれも初めはびっくりと言うより、カルチャーショックを受けましたから。」

……あ、そんなに不安で落ち着かないなら、いいおまじない教えてあげますよ。おデコに『肉』って書けばいいんです」

「危うくのせられそうだったがな、お嬢ちゃん。落ち着くおまじないは手に『人』って書くんだ」

2人が話していると、受付会場になっている広場から小さな影がこちらへ向かって近付いて来るのが見えた。

「カノンさん！！！」

自分に向かって嬉しそうに走って来るのは、世外れの都合屋、クウヤ・アンダーグラウンドだった。



48・裏町カプリッチオ #02「変人所長」(後書き)

前回の衣装は、紫色の麒麟のきぐるみでした。

49・裏町カプリッチオ #03「闇鬼VS魔女代理」

「カノンさんー!!」

ぱたぱたと子犬のように駆けて来るクウヤに、片手をあげる。

「おーなんだ、もう着いてたのか」

「はい！ 念には念をと思い朝一の船に乗って来たんです。でも…

！ 知ってる人が全然居なくて、しかも周りは怖い人ばかりで…

…すごい心細かったんですよ！」

びえー、と泣くクウヤによしよし頭を撫でるカノン。カノンの隣にいた始末屋はその光景をただ呆然と見ていた。

自分よりも一回りも小さいこの2人が裏町業者とは……世の中は広いことで。

「カノンさん、今日は髪型が違いますね。ツインテールもお似合いですよ！」

「心機一転、みたいなの？」

「ははあ。カノンさんなりのおめかしですね。僕がカノンさんに初めて会ったときは、ポニーテールでしたよね」

「あー、そうだったな。あの髪型だと男に間違われやすいから得なんだよ」

言葉にするなら、ほやー、とした和やかな雰囲気の中、始末屋だけが難しい顔をする。

黒い髪に、緑の目。何処にでもいるような少年だ。……しかし、この容貌はあの“不吉”の噂を思い出させる。

男が思い悩むそばで、カノンが決定打を打つ。

「そっうえば、レオラはまだなのか？クウヤ」

尋ねた瞬間、始末屋の顔が真っ青になった。その表情は、純粹な怯え。

「『クウヤ』!?... やっぱりその髪色、眼...!」

「あ、はじめまして。都合屋のクウヤ・アングラウンドです」  
どうも、と丁寧にお辞儀するクウヤを余所に始末屋は素早く後退し、派手に転び、悲鳴をあげた。

「ひい!! で、でたあつ! “闇鬼”<sup>ヤミオニ</sup>だーっ!」

始末屋が叫ぶと、周りの人間も一瞬のうちにしてクウヤの周りから遠ざかった。

代わりに、小声で話す声だけがひそひそと増える。2人に痛いほどの視線が突き刺さった。

「闇鬼...?!」 「まさかこんなところで闇鬼と会うとは」 「じゃあ隣りに居るのはレスティナの便利屋か」 「漆黒の髪に碧眼の」「噂どおりだな」「まだ子供じゃないか」「油断をしていると殺られるぞ」「あの闇鬼なんだから」

小さな話し声が聞こえる中、クウヤの表情を出来るだけそつと伺う。カノンの心配を余所に、頬を膨らませ、かなりご立腹のようだった。

「もー、失礼な人達ですね! 人を化け物みたいに」

化け物... その表現もあながち間違いでは無いと思う。“闇鬼”とはクウヤの異名だ。

昔、クウヤはある依頼を受けたことがあった。確か、クウヤ・アングラウンドの名が裏世界で有名になる切っ掛けとなった事件だ。

その時クウヤは、百人以上はいたであろう人間を全てなぎ倒し、月夜を背景に一人立って不気味に笑っていたそうだ。人から聞いた話だが。

闇の中で笑う、人鬼。

それが闇鬼の由来だ。

しかしそれが本当の話かどうかは分からない。情報屋に制限がかけられた為、本人に真偽の程を問うたこともあるが、クウヤ曰く、「そんなこともありましたねえー…あれ？でも月なんて出ていましたっけ？昔のことなんて忘れちゃいましたよ。それより、香葉月さんの異名の方が不気味ですよ」だったので、噂が噂を呼んだだけかもしれない。

確かなことは、その光景を見た数少ない証人の「誰も、動けなかった」と漏らした一言だけ。この前も言ったように、自分はクウヤについてあまり詳しく知らない。

昔のことを思い出していると人間は無防備になりやすいらしい。知らぬ間にクウヤの顔が、かなり近い所まで来ていて、カノンは目を点にする。

「そう思いませんか？ カノンさん」

「…あ、何が？」

「人の話はちゃんと聞いて下さいね」

「ごめんごめん。そういやレオラはまだ着いていないのか？」

「そうみたいです。まだ見てませ「カッノン！！ もう着いてたのかー？」

クウヤがカノンの質問に答え切る前に、聞き覚えのある声が見事に被る。丁度、カノンの後方でレオラリアナが手を振りながら走って来たところだ。

「やつほ、レオラ」

「三日ぶりー…ってあれ？なんだ、クウヤも居たのか。カノンに隠れて全然見えなかった」

「……チビで悪かったな、チビで」

本気で怒っているのか、声も表情もクウヤの中で素晴らしく極上

の微笑みだ。クウヤはその中性的な笑顔のまま、レオラに一歩ずつ近づく。もちろん、手元にはどこから出したのか、クナイを用意して。

「いえチビなんかじゃないですごめんなさい調子のもつてすみませんでした」

滝のような冷や汗に、即答で謝るレオラ。

「僕はこれから成長期が来るんだよ。これから！ 成長期がつ！身長がつつ！」

「わかった！ わかったから刃物を向けるな！ うんうん、そうだよな！！ これからぐぐつと伸びるんだよな！？ クウヤくんはチビじゃないですよー！」

「その言い方が気に入らない！」

「ちよ、待て！ 落ち着こう！ 武力行使は駄目だかな！？ カノン、助けてくれ！」

2人の物騒なやり取りの真横でカノンが辺りを見回す。さっきの騒ぎのお陰で、今カノン達の周りに近寄ってくる人は居ないので視界が広い。もちろんレオラの悲痛な叫びは無視の方向だ。

あと1人足りない。

「いない」

「あ？ 何が」

クナイを間一髪のところ、両手で挟むようにして受け止めているレオラが尋ねる。そのクナイの持ち主であるクウヤも同じく疑問符を飛ばす。

「……？ ああ、そういえば香葉月さん、遅いですね」

カノンはこくこくと首を上下に振った。そう、まだ揃っていないのだ。

「なんだ、コウヨウツキはまだ来てないのか」

「うん。もうすぐで12時なんだけど来てないみたいだ」



「用事が出来て、不参加になったんじゃないですか？」

クウヤがクナイを仕舞いながら結論を出す。が、

「いや、それは無いだろ!!」

カノンとレオラの息のあったつっこみを受けた。しかし、クウヤには何故自分の意見が否定されたのか分からない。全く。

「……でも、ほら……急に用事が入ったとか……」

「クウヤもあの招待状を読んだら？」

レオラが叫びに近い声を発する。ズボンのポケットを探り、招待状を出して読み上げた。

「追伸のところ! 『残念ながら不参加となられる裏町業の方にはそれなりの対応を取らせていただきます。また、行き方が分からないから・急病で・母が危篤、などと言う陳腐な言い訳をなされる様でしたらこちらにも考えがございますので、予めご了承下さい』って書いてるだろ!? 『それなりの対応』って書いてるだろ!?」

「それくらい、このパーティーに参加して欲しいってことだろ? ねえカノンさん」

「あははは、クウヤは面白いことを言うなあ。あれがただの冗談だと思ってるのか」

「カノンさん、目が怖いです」

「本当、面白いことを言ってますわね。お陰で横っ腹からよじれてしまいそうですわ」

いつの間に現れたのか、レオラの隣で朝葉香が言った。同時に3人が驚いた声を上げる。

「アサハカ!!!」「香葉月さん!?!」「コ、コウヨウツキ?! 来てたのか」

隣に居たのに気付かなかったレオラに対し、駄目だしを食らわせる。「まだまだ鍛錬が足りませんわね、始末屋。だから未だに『道外れ』

のままなんですのよ。それから、」

朝葉香が何か言いかけて、その長い黒髪を翻しながらクウヤの前まで颯爽と歩く。ずんずん歩く。カノンとレオラが口を半開きにさせて見送る中、朝葉香は他に目もくれずにクウヤの目前に立ちはだかった。

「……な、なんですか？」

目と鼻の先、と言うより視線がずらせない程の距離まで朝葉香が近づいてきて、クウヤがやっと怯えたように質問する。

両足は先程の位置から少し後方へずれており、腰は引けている。

「それから。裏町幹旋所所長を甘く見ないことですね。貴方はまだ、これが只の記念パーティーだと思ってるみたいですけど、それでは痛い目にあいますわよ。新入りさん」

「は、はあ」

「まったく……何故こんなにも無知で思慮の浅い子が裏町一の集客率をあげていますの？ おまけにわたくしと同じ日本人だなんて」

「ご、ごめんなさい……」

「まあ、『世外れ』の都合屋さんにとっては、『島外れ』からの忠告なんて要らないのでしょうけど」

ふん、とそこで言葉を切って、朝葉香はクウヤから離れた。クウヤは緊張の糸が切れたのか、肩をほっと下ろしていた。

刺々しい空気の中、和国人の特徴である黒髪2つを見つめながらカノンとレオラが寄り添って小声で話す。

「なあ、なんでコウヨウツキはあんなにピリピリしてんだ？ なんか、オレにはコウヨウツキがクウヤに当たってるようにしか見えな  
いんだけど」

「そりゃピリピリもするだろ。クウヤがこっち側に来るまでは、アサハカの業績が裏町一だったけど、クウヤがこっち側に足を入れたとたんN0.2になっちまったんだから」

「そんなことか？」

「おれたちにとつては『そんなこと』でもアサハカにしてみれば『重大なこと』なんだよ。香葉月家はずっと裏町一の代理屋だったんだ」

「プライドってやつ？」

「だな。つてかそれしかないだろ？」

「プライドねえ…逆恨みもいいところだな」

「何言つてんだよ。今も昔も、裏町業つて言えば怨みつらみの定番所だろ。お前の言う『みんな仲良くお友達』なんて無理なんだよ」  
クウヤとアサハカが仲良くなる日なんて、この先来ないだろう、とカノンは思った。

香葉月家は古くから代理屋を営んでいる裏町業の古株だ。だからこそ、血統も伝統も無く突然現れたクウヤは、香葉月家にとって不愉快な存在なのだろう。

ましてや、今まで裏町の首位から外れたことは無かったのに、No. 2に落とされてしまった朝葉香は一番快く思つてないはずだ。そこまで話し終えて、2人の方へと視線を戻す。

朝葉香の突き刺さるような視線（睨み）から逃げる様に怯えながら（クウヤのことだから演技かも知れないが）後退するクウヤを見兼ねて、カノンが助け舟を出す。

「アサハカ。そろそろ受付に行かないと不参加になっちゃうからさ、広場に行こうぜ」

周りを見渡すと、さっきまではあれだけ居た参加者が、ほとんど見当たらなかった。

「……分かりましたわ。では、皆様ご機嫌よう」

クウヤにもう一睨み効かせ、スタスタと受付会場の方へと消えた。どうやら一緒に行動するのは御免らしい。

「あーあ。行つちまつたぜ、カノン」

両手を頭の後ろに置いて、レオラが問い掛ける。広場の方を見ても、もう朝葉香の姿は見えなかった。

「折角4人で行くこうと思つてたのにな。まさかあんなにも目の敵にしているとはねー」

「僕…あの人苦手です」

解放されたクウヤがぼつりと言つた。

「……でも、敵に回しちゃ、厄介だ」

小さく呟いたカノンの言葉は、誰にも届かなかつた。

香葉月朝葉香。

人間には到底成し得ない事を、いとも簡単にやつてのける和国の代理屋。彼女に頼めば、全てが無かつたことのように解決するとまで言われている。

その異常な業績から、人は畏敬の念を込めて、こう呼ぶ。

“魔女代理”と。

ふう、と誰かが溜め息を付いた。レオラだ。

「魔女と鬼の喧嘩か……。オレの周りは危険で恐ろしい奴ばかりだな」

広場へ足を運びながら、誰に言うでもなくレオラが言つた。しかし、聞き逃さなかつたカノンに反論を受ける。

「ちよつと待て。待て待て！ おれをアイツらと一緒にするなよ！

おれ目茶苦茶普通じゃんか」

「おまえ、」

レオラが何か言いきる前に、前を歩いていたクウヤの、慌てた声が響いた。

「レオラ、カノンさん！ 受付終了まで後1分らしいですよ！ 早く早く！」

「マジで!？」

すごい勢いで走つて行く2人の背中を見つめ、レオラが溜め息に似た息を吐く。

それは、呆れに近かつた。

「『普通』ねえ……ったく“鳴神”<sup>ナルカミ</sup>の癖によく言っよ」  
便利屋の少女の異名を零して、2人の後をレオラが追った。  
パーティーの、始まりだ。

49・裏町カプリッチオ #03「闇鬼VS魔女代理」(後書き)

人と世から掛け離れた異常、闇鬼。

全てを代わり得る、魔女代理。

落雷の如く俊敏な金色、鳴神。

そして。

無自覚の、殺人鬼。

50・裏町カプリッチオ #04「開催」

「つまり、裏町業の皆さんには、裏町らしく『奪い合い』をしていただきたいのです」

所長の声が響くと、周りが一気に息を飲む音が聞こえた。

時刻は12時35分。このパーティーの裏を知った、ことの始まりは、30分前。

\*\*\*\*\*

「皆さん！ 今日是我が裏町幹旋所創立百周年パーティーにご出席賜り、誠に有り難うございます。これからあなた方に素敵な2日間をプレゼントしましょう！」

受付会場ではたくさんの裏町業者が集まっており、所長が挨拶をする広場の真ん中には、所長の右隣に秘書らしき女性と護衛人らしき男性がにこやかな笑顔を浮かべつつ警戒しまくっていた。さすがは幹旋所と言うべきか。鍛えられているのが分かる。

所長と言えば、先ほどの奇抜なファッションはとつくの昔に飽きたらしく、ごくごく普通の幹旋所制服に着替えていた。その姿を見

てホツとした人が一体何人居たのか統計を取りたいくらいである。

所長の挨拶が始まると同時に、皆一斉に緊張を走らせたのが分かった。続きの言葉を発しようと、所長の喉が動く。

「ですが！」

それは、前の言葉に続きがあることを示す言葉。

「ほらやつぱりなんかきたー……」

レオラが小声で早口に言った。すぐにカノンが律する。

「しっ……あの人に殺されたいのか？」

カノンが目で合図した、所長の隣の秘書を見て、レオラはすぐに黙った。誰だつて、十代で三途の川は渡りたいとは思わない。クウヤだけがのほほんと話を聞いていた。

「こんなにもたくさんの方が出席してくださいとは思いませんでしたので、部屋も料理も人数分用意できておりません。というか、最初からそのつもりでしたけど。ですから、パーティーに出席できる人を選別させていただきます！」

とても嬉しそうにうきうきと宣言した所長とは反対に、裏町業者たちのテンションが見る見るうちに下がっていくのが伺える。カノンとレオラもその中にやはり入っている。

「絶対なにかやると思った……」

「おれも」

「え？ 僕は普通のパーティーだと思ってましたよ？」

「お前はな……！！」

所長に代わり、視線だけで人を射殺せそうな秘書らしき女性が話し出す。

「選別方法は至ってシンプルです。みなさま、二時の方向をご覧ください」

数十人の人間の目が一斉に手の指すほうに向けられる。

「パーティーはあちらの城で行われます。あの城へ『入れた』者がパーティーの参加権を手に入れることができます」

レオラが怪訝そうな顔をする。



「それって簡単じゃねえの？」

「しかーしー!!」

「おうあっ！　びびったー」

護衛人の男の方が声を張り上げる。周りの空気の振動数が半端無いくらいに響いた。

「城の扉には鍵がかかっております故、皆様を選別する方法は、誰が城の鍵を探し当てたか、ということになります」

「つまり、裏町業の皆さんには、裏町らしく、鍵の『奪い合い』をさせていただきたいのです」

「まるでゲーム感覚だな」

カノンが不満を漏らした。結局のところ、所長の暇つぶしに付き合わされてしまったことと、それに反抗することが出来なかったことが悔しい。

秘書の方が、また話し始めた。

「城の鍵は島中のあらゆる場所へばらまいておきました。全部で50個となります。城への入城期限は明日の午後6時まで。鍵一つにつき、5人の入場を許可します。つまり、上限250名が参加することができません」

護衛人の男が大きく息を吸う。カノンとクウヤが素早く両手で耳を押さえた。レオラだけが間に合わなかったことは言うまでもない。

「なお！　鍵の入手場所には罠はもちろんのこと、鍵の偽物もありますのでご注意のほどを。ついでに監視カメラなどもあちこちに取っ付けておりますので！　次は所長のありがたいお言葉です！」  
「うおっほん、とわざとらしい咳の後に、所長が話し始める。」

「皆さん。正々堂々では無くても結構なので思う存分暴れてください。裏切るもよし、助け合うもよし、騙し合い奪い合い、どうぞ私を楽しませてくださいな。私どもはモニターでじっくり見物させていただきます。はつきり言ってこんなのが一度してみただけです。ついでにぶっちゃんけますと、今回の鍵争奪戦で好成績を残された方は幹旋で顧客の優遇を致します。ほらほら、真面目にしない

と死活問題ですよー」

「あんの、超サディスティックめ！」

「パーティー料理食うためだけに、そんな命がけのゲームしたくねえつつうの！」

秘書がすかさず応答する。

「と、思いましたので、賞金を用意しました。先着10名様に賞金一千万円を差し上げます。百周年のプレゼントです」

「やるぞー！！」

「こころ変わりすぎだ！」

一気にやる気を見せたレオラにアッパーカットを食らわせるカノン。クリーンヒットだ。

「はー、一千万円ですか。そんな大金なんて、現実味が無くて分かりませんね」

クウヤの質問に当たり前のように答えるカノン。

「そうか？ たかが知れてるぞ。『ドルチェ・デ・ノエル』のモンブラン2万個分だし」

「だから分かんねーって」「った！」

さっきの仕返しだと言わんばかりにカノンにチョップを食らわす。痛いだろ！ と怒るカノンを見ながら、本気であんなことが出来るのはレオラだけだな、とクウヤは口に出さずに思った。

「うおっほん！」

少し五月蠅くなったため、まるで集会の時、生徒に話を聞いて貰えない校長のような状況の所長。両隣でにらみを利かせる二人をのぞいては、の話だが。

「この時点でパーティーの不参加を申し出る人は後で私の両側にいる二人に報告お願いします」

「なんだ…イヤなら止められるんですね」

ほっと一安心するクウヤに、斡旋所を知り尽くした先輩便利屋と始末屋が希望をうち砕く。

「甘いなクウヤ……」

「あの爺さんはすっぱーサドで有名なんだぜ」

「サドって……」

会話の間に割り込むように、所長の声が聞こえる。

わざとらしい、いま思い出したような声だ。

「ああ、そうそう。言い忘れていましたが、個人所有船でこの島に  
来られた方の船は全部波止場にて完膚無きまでに粉砕させていただきました  
きました。やったのは幹旋所の精鋭たちですから、弁償してほしい  
方はそちらの方に請求してください。まあ、腕の一本や二本はご愛  
敬ということ……。もちろん、私の手配いたしました船で来られた  
方は、二日後に来るお迎え船でのお帰りをお願い申し上げます。ど  
うしてもこのパーティーに参加したくない方は、どうぞ泳いで帰っ  
てください。一番近い島までは10キロあるか無いかですよ。頑張  
れば何時かは着くでしょう」

「ちょー……ちょー、サドですね」

うんざりするクウヤの声。彼は、この島へ来て、あと何回うんざり  
するのだろうか。

裏町業者の皆さんと言えば、壊された船や有無を言わさないその  
態度に腹を立ててはいるものの、誰も口には出さなかった。理由は  
想像できそうなので敢えては言わないが。

「では、全員参加ということで宜しいで「ちょっと良いか?」

不愛想だが、品のある女の声が、この島の絶対である所長の台詞を  
遮った。若い(と言っても、カノンたちからしてみれば大分年上にな  
る)女が、所長の前に名乗り出た。瞬間、レオラの赤い目がまる  
くなくなった。

「すまないが、私はこのパーティーを辞退させて貰う。だから帰る」

「……レスティナの始末屋、セリ・オーシュ。不参加ですか。残念  
です」

「誘っていただいたところ、誠に申し訳ないのだが、私にはパーテ  
ィーよりも仕事の方が大切だと思うのでな。悪い」

女はそう言つと、広場から出ようと歩き出した。

突然の台詞に戸惑う他の人たちと違い、レオラが女の前に飛び出した。

「しっ、師範代!!! 何言ってるんですか!」

「しはんだいー!?」

驚いて声を上げたのはカノンとクウヤだが、その場にいた誰もが心の底で叫んだ言葉だ。

「む……: 久しいな、レオラ。私がお前の誕生日にあげたスイートピ、ちゃんと育てているか?」

「あ、時々水をあげるのを忘れてたりするけど、なかなかちゃんと育てますよ、ってそうじゃないのに思わずノリつつこみな自分が激しく嫌だ!!!」

「相変わらず忙しいな、レオラ。お前、来年には杯を交わせる年になるのだろう。少しは落ち着きを持って行動したらどうなんだ」

「落ち着きたいけどアンタが滅多なことするからそうそう落ち着けられないですよ!」

「師範代に向かって『アンタ』とはなんだ。親しき仲にも礼儀ありと言っだろう」

「そんなことどうでも良いんですって! パーティーに不参加って、師範代、どうやって帰るつもりですか!?!」

「む……お前は人の話も聞いていないのか。さつき所長が言っていただろう。帰りたい人は泳いで帰れと」

「泳いで帰るつもりか! 何馬鹿なこと言ってるんですか!

師範代も昔のように無茶しないでください! 年を考えて!」

「私はまだまだ現役だぞ。それに年って言ってもまだ30代だ」

「30過ぎてんの!?!」

思わず出た台詞。それほどまでに、レオラの師範代もとい、セリは若く見えるのだ。

「ああ。今年でたぶん36歳くらいになる。数えるのが面倒で、途中でやめた。君たちはレオラの友人か?」

「はい、たぶん」

「そういうことになりますかねー」

「もつと胸張って言ってくれよ…」

2人の微妙な返事に脱力せざるを得ないレオラ。不憫なやつだ。

「すぐ調子に乗るやつだが、これからも弟子のことを頼む」

「いえいえ、こちらこそ…」

それだけを言うと、もう思い起こすことが無いとでも言うように、セリは歩き出した。海に向かって。本当に泳いで帰るつもりらしい。

「行っちゃったよあの人…：…なんでこう破天荒かなあ…：」

「お前、苦勞するタイプだな」

「僕もそう思う。ってか、放つといて良いの？」

「もういいよ…：多分あの人なら帰ると思うし」

レオラが話し終えてすぐに、3人の背後で、素早い音が鳴った。

パンツッ！！

すっかり静まりかえった広場に銃声が響き渡る。

音のした方向を見ると、所長が小学校の運動会なんかで使う、あのお馴染みの、音がやたらに威勢のいいピストルを手にしていた。

「さあ、鍵争奪戦、スタートですよー！」

「唐突だな、おい！！」

「か、カノンさん見てください！」

クウヤの指さす方向にはすでに数十人が走り去った後。もちろん朝葉香の姿もない。

裏町の基本は先手必勝。

「まじですか?! レオラ、クウヤ、おれらも行くぞ！」

11月11日、午後12時40分。裏町幹旋所百周年パーティー開始。  
招待客525名中、523名参加。不参加者名、始末屋セリ・オー

シュ（仕事のため）と、処理屋アイナ・ルーズヴェルト（妊娠中のため）計2名。

パーティー終了まであと29時間20分。  
裏町にとって長い日が始まる。

50・裏町カプリッチオ #04「開催」(後書き)

セリ・オーシュ

性別：女

職業：始末屋

趣味：子育て

特技：腕立て伏せ

座右の銘：働かざる者食うべからず

51・裏町カプリッチオ #05「火之基忍」

完全に出遅れてしまったカノンとクウヤとレオラの3人だったが、取りあえず全速力で走って広場から遠ざかる。既に城へと移動した所長組の居ないあそこは、居るだけで目立つのだ。

「ここは森だし、早々見つかることは無いだろ。とにかくもう少し離れた場所で鍵争奪の作戦会議だ」

「そうですね。バラバラよりもチームで動いた方が効率良さそうです」

「それは良いんだけどさ、なんでわざわざ離れるんだよ？ 別に広場にはオレ達だけだったから動かなくてもよかつたんじゃないの？」

「……お前ほんつとに馬鹿だな」

心底馬鹿にしたようにカノンが呆れた。正面切つて『馬鹿』と言われシヨックを受けたレオラに、クウヤがさらなる追い打ちを掛ける。「レオラ、これは鍵の奪い合いなんだよ？ 騙し合い、裏切り合い、暴れて良いパーティーだって所長が言ってたじゃんか。ってことは、『招待客数よりも鍵の方が少ないんなら、最初に何人が参加できなくしちゃえばいいんだ！』って思う奴も居るってことだよ。あんな敵の目に付く、馬鹿でも見えやすいところに留まっていたら、それこそ馬鹿みたいにやられちゃうだろうが馬鹿」

「……なんかさ、2人ともオレに対して風当たり強くない？ 仲間なんだからもうちょっと仲良くしようぜー」

「それなんだよ問題は！」

クウヤが大きな声を出した。

その声に思わずカノンもびっくりしたようで、目をまんまるにして2人はクウヤを見つめた。

「仲間ってことはつまり連帯責任なんだよ。一人がへマをすればみんなのへマになる」

「つまり…?」



「足引つ張るなよレオラ……ってことだな」

正解を答えたカノンに、クウヤが何度も頷く。

「やっぱりオレね」

これだけ喋っているから普通の会話には違いないが、結構な速さで走っていることを忘れないでほしい。

太陽が一番高い場所から少し西にずれた頃、人の手によらない大自然の森をしばらく走って、そろそろ中間地点か、というところで3人は足を止めた。

「うっし。ここいらで作戦会議にするか」

「そうだな」

うねって枝同士が絡み合った木ばかりの場所に、レオラ、クウヤ、カノンの順で腰掛ける。その形はちょうど正三角形になる。周りには誰もいないようで、時々鳥がバサバサと頭上を飛び交う位しか音がしない。他の裏町業者はどこか別の場所に行ったらしい。

遠慮がちにクウヤが最初に意見を出した。

「ただ、闇雲に探すだけじゃ……見つからないと思うんですけど」

「そりゃそうだな。島の端から端までよく探さないと。鍵って言うても大きさが大きすぎだしな。血眼になつて、」

レオラの言葉の途中でカノンが割り込んだ。

「じゃ、あれはなんだ？」

指の指された先を2人の視線が追う。レオラが背もたれにしている木の、上の方の枝。5メートルほど上に、よくテレビゲームなんかで、役に立つ剣や地図などのアイテムが入っているような箱が上手い具合に置かれていた。明らかに人工的だ。

「うっわ、まじかよ」

「案外あっさりでしたね」

「でも高いな……」

3人が立ち上がったって、まだ見上げるほどの高さである。木に登れるかどうか見たが、一番初めの枝が既に足の届かない場所にある。

登ることは無理そうだな。ついでに言っと、頑丈そうなので、揺らしても箱は到底落ちてきそうにない。カノンが左手を額に置き、感嘆の声を上げる。

「おー……。これって何メートルくらいあるんだろな」

「オレに聞くなよ」

「5メートルです」

クウヤが木の横に立ってかけられていた札を見て言った。

“この先5メートル上に宝箱あり。みんなファイト！！ 所長より”

「5メートルか……。レオラ、お前一生懸命ジャンプしたらどのくらい、」

「飛べないからな！ 言っとくけど、5メートルも飛べないからな！」

「クウヤは……」

「飛べません。カノンさん、真面目に考えてください」

2人にきつくつつこまれ、少し遊びすぎたことを反省し、箱を見上げる。鍵は目の前なのだ。

「分かったよ、考えるよ……。ん、そうだな。クウヤとレオラの身長教えてよ」

「身長？ オレは175センチ」

「僕は162センチです」

「おれは161ちよいってとこかな……。っと」  
指で土に数字を書く。

「全部を足したら？」「498センチ」

即答だった。ほぼ質問が終わるか終わらないか位の速さだった。

答えたのは、馬鹿。

クウヤが両手を指折り計算する横で、レオラが即答した。かなり

驚くクウヤ。どうやら彼の中では、レオラは算数の出来ない奴と認識されていたらしい。彼の中と言うか、みんなが驚いたと思う。

答えを聞いて、カノンが格好良く指を鳴らす。

「よし！ 3人足せば5メートルなんて腕を伸ばせば届く距離だ！

いいか？ おれ達3人で力を合わせて肩車だ！」

「なるほどな。仲間がいなけりゃ出来ない仕掛けか！」

あんなに遠くに思えた鍵は、3人の前ではかなり近い場所にあった。

「じゃあ順番はどうします？」

「んー…まあ体格的に見てもオレが一番下なのは決定だな。カノンとクウヤはどうするんだ？」

「……ちよつとクウヤ来い」

「はい？」

すくつと立ち上がって、右手で手招く。秘密の会話だ。といっても単なる体重情報の交換だが。

こそこそ話からレオラがのけ者にされて約30秒後。

「決まり。下からレオラ、クウヤ、おれの順番な！」

「あ、そうなの？」

「深くつつこんじゃ駄目だよ」

どうやらクウヤの方が軽かったらしい。

「ちよ、おーもーいー！！」

3人肩車は裏町業といえどさすがにキツイ。レオラがふらふらとだが倒れないようにしっかりと踏み張った上で、カノンを支えたクウヤが上に問う。

「どうですかー、カノンさん」

「全然駄目。全く手が届かないー！！」

トータムポールのように高くなった身長なのに、めいっばい伸ば

した腕は、箱に当たりそうに無い。カノンはこれ以上伸びない位に腕を空へと突き上げる。

「なんでだよ。計算ミスは無いはずだぜ？ 498センチになってるんだから、5メートル上の箱にはちゃんと手が届くはずだ」

レオラの不満そうな声を下に聞きながら、カノンはしばらく腕を伸ばし続ける。

「フーか、本当に無理。届かないものは届かないだもん！」

「『だもん』じゃねーよ！ 今更ブリつ子すんなって……あ、ごめ！ ごめんなさい！ 謝るから揺らすな、コラ！ カノン！！ お前がてっぺんなんだから我が儘言つな！ うわ、ちよ、バランス崩れるっておい！」

チームワークを失ったトーテムポールは、いとも簡単に崩壊した。ぐらりとバランスを失った瞬間に、どしん！ と音が響く。画期的だと思われた作戦は、箱奪還もままならないままに終了した。

「なんで僕まで……カノンさん、僕、すごい被害者なんですけど？」

「ごめん！」

「おいこらカノン。まずオレに謝れよ！」

上に乗っていた2人の下敷きになってしまったレオラが怒る。当たり前前だ。カノンがレオラの方へ向き直る。

「……………ごめん……？」

「何だよ、その微妙に開いた間は！ しかも何で疑問系なんだよ」

「いちいちうつせえな。お前、3枚におろすぞ」

「こわっ！ お前こそいちいち表現が生々しいんだよ！ 本気かとおもっちまうだろ」

「なんだよ、おれが嘘つきだっけって言いたいのか？ お前こそ嘘つきじゃんか。何が498センチだよ！ 全然足りて無いっつーの。おれの腕があと5本は必要な距離だったね」

「お前の腕が極端に短いんだよきつと！ オレは計算間違いないなんてしてねー！」

2人がギャーギャー騒いでいる横で、クウヤが箱の置かれた木を、ぼーっと見上げた。ずっと見上げた。ひたすら見上げた。見上げて見上げて見上げて、そして、喧嘩腰になってきたカノンとレオラを振り返って、己の足を見て、ちよっと目を瞑った後、苦虫を噛みつぶしたような表情に変わった。

「だからお前は男と間違われるんだよ！ 少しは女らしくしろ！」

「あー！ そんなこと言ったらなお前、いつもいつも金が無いつて言ってるから親切にも貸してやってるのに、一度も返したことが無いじゃねえか！ あの金はやく返せ！」

「返した！ オレは返したからな！」

「利子だよ、利子！」

「あの……カノンさん、レオラ。ちよっと」

「あ！？」

今にも噛みつきそうな勢いで、気まずそうに声を掛けてきたクウヤの方を向く。2人ともかなり殺気立っている。

「ちよっと思ってたんですけど……全員の身長を足して498センチなんですよね？」

「ああ。手の長さの分を足せば5メートル強になるぜ」

「お前の計算が間違ってたならな」

「フン、とそっぽを向いてカノンが言い放った。

「カノンさん。レオラの計算に間違いは無いですよ」

レオラの肩を持つクウヤを少し睨みながらカノンが訊く。

「じゃあどうして手が届かなかったんだよ？」

「僕たち、肩車をしてましたよね？ じゃあ……僕とカノンさんの身長から……足の分を引かないと」

話し終わった後は、沈黙だった。  
5秒。

10秒。

カノンの顔が見る見る内に赤く紅潮していくのが、目に見えて分かった。

「ほんとか……」

頭をポリポリ掻きながら、レオラがため息と一緒に寝転がった。

「あーあ……なんだよ、5メートルなんて無理じゃん」

「そういうことになるね」

ばたつ、とクウヤも後ろに倒れる。目線の先には、枝に置かれた宝箱。あんな高さ、到底無理だ。

「おれ、恥ずかしい奴……」

3人は綺麗な正三角形を作って、木を見上げる。

登ることは出来ない、揺らしても駄目、仲間がいても届かない。

「どうしようか」「どうしましょう」「どうすっか」

はあ、と息を吐いた時だった。

3人が見上げていた箱に、熊手の先の様なモノが引っかかって、箱を取り去った。金具には紐が繋がっており、茂みの向こうへと箱が消えた。刹那の出来事だった。

そして、可愛い声が届いた。少女の声だ。

「やった！ シゲ君、鍵ゲットなんだよ！ マリナ達の勝ちなんだよ！」

少女の台詞に答える、若い少年の音がする。

「賞金はいただきましたっ」

「そうなんだよ。あれだけのお金があれば、何でも出来るんだよ」

「そうはいかないぜ。その箱はおれ達が貰ったもん」

茂みまでやってきたカノン達によって、突然の来訪者達の喜びは遮られた。

「だから『だもん』はもう良いって」

「だってこいつ、口癖キャラっぽいから対抗しようとおも」しなく  
ていいですから、話をずらさないでください」  
クウヤの的確なつつこみに素直に黙る。

2人組は、三つ編みの少女と、紺色のバンドナを巻いた少年だっ  
た。どちらも、こちらの最年少であるクウヤよりも下の年齢に見え  
る。

「君たちが、僕たちの後を付けてきていた犯人？」

「よく気付いたんだよ。マリナ達、これでもその道のプロなんだけ  
ど」

「そうかな？ 結構分かりやすかったけど。ね？ カノンさん、レ  
オラ」

「「うんうん、ばればれだって！」」

慌てて答える2人。どうやらクウヤだけが、付けられていること  
に気がついていたらしい。

「さて、それはともかくだ。その箱を渡して貰おうか」

すっかり悪役が板についたカノン。しかしきっぱりと断りの返事を  
する。

「……それは駄目なんだよ、おばさん。鍵はシゲ君とマリナのもの  
なんだよ」

「だから諦めなつ。つていうか、おばさん誰？」

その女性に禁断の4文字は、明らかにカノンに向けられた質問だ  
った。冷や汗をだら流しにするレオラとクウヤ。につこり、と音が  
つきそうなくらいに笑いながら、カノンが丁寧に答える。

「……んー、おばさんの名前はカノン・ソリティアだよ。レスティ  
ナ国出身の街外れの便利屋。お前らの名前も教えてくれないかな？」

「マリナは日本…おばさんの国で言う和国出身なんだよ。草津真理  
奈。マリナって気軽に呼べば良いんだよ」

「俺もマリナと同じ和国人、重松鉄太。だから、シゲ。俺達は2人  
とも火之基流の忍だつ」

火之基忍。つまり先ほどの熊手の先が付いたようなモノは忍具と  
いう訳か。

「ふーん、そうか。マリナとシゲね。ふんふん。おっけい。なあレ  
オラ、こいつらに毒盛って良い？」

「直球！？ もっとオブラートに包んで話せ！」

レオラは怒り狂ったカノンを、人の道にとどめるのに忙しいため、  
代わりにクウヤが火之基忍2人に訊く。

「火之基流、か。僕も似たようなことをしてるよ」

「そんなのとづくに知ってるんだよ。桐生流の忍が別の裏町業を開  
業したのは噂になってたからね」

「お前は何て名前なんだ？ 俺達は答えたんだからお前も言えよっ」  
まだ、クウヤの名は、この2人にばれていない。なら、答えてし  
まえば、桐生の直系だとばれてしまう。それに、アンダーグラウン  
ドの方で答えてしまえば、また闇鬼だと気味悪がられる。こんな小  
さな子供にまで、あんな目で見られるのはちょっとキツイものがあ  
る。

答えようかどうか迷っていると、レオラがすつと右腕をクウヤの  
前に出した。

「悪い悪い。オレの自己紹介がまだだったな。オレはレオリアナ。  
レスティナ国の道外れの始末屋だ。……てなわけで、カノン。もう  
良いだろ？ こいつらに用はない」

「ああ。箱は取ったしな」

満足そうに笑うカノンの右手には、あの宝箱が握られていた。

「あつ！ 何時の間に！！」

「お前らがぐだぐだ喋ってる間にー！ さて、鍵はつと」  
カノンが箱を開けた瞬間だった。

みよーん



「……あの、変人変態所長がーっ！っ！」  
びっくり箱だった。間違いなくびっくり箱だった。

よくある、パンチする気満々の手が、開けた人に向かって殴りかかる、あのびっくり箱だった。

そして、まんまとパンチされてしまったカノンが思いつきり叫んで、レオラが納得の声をあげた。

「そういえば、あの立て札にも『鍵』じゃなくて『この先5メートル上に宝箱あり』としか書いてなかったもんな。なるほど、よく考えてる」

「納得してる場合じゃないだろ」

今日はクウヤのつつこみが冴え渡る日らしかった。

\*\*\*\*\*

パーティー会場、城内にて。監視カメラの映像が確認できるように何百コと並べられた映像画面の前で、老人と、護衛人と、秘書がいた。

「ふむ。『変態』とは失敬な」

「『変人』については否定しないんですね。しかしミス・ソリティアは見事にパンチを受けてくれましたね」

「そうですね。あの位置は本当にベストポジションでした故」  
カノンの映像を見ながら、感想を言い合う。

「この映像はダビングしておきましょう。いつかの脅しに効くでしょうし」

所長は相変わらずサディスティックだった。

「そうですね。所長、アンダーグラウンド君の悩んでいるシーンもダビングしても宜しいでしょうか？ 私の世外れコレクションに追加したいのですけれど」

「良いですよ。好きなだけダビングしなさい」

秘書はクウヤマニアだった。

会話内容は決して和やかではないが、ほんわかした雰囲気の中、ドアのノックが遠慮がちに響いた。

「おや？ 誰でしょう。食事の時間でしょうか」

「私が見てきます故、所長はお待ちになってください」

護衛人がドアを慎重に開けると、そこには綺麗な茶色の髪、そして漆黒の眼をもった少年がちょっと護衛人に驚いて立っていた。

「……貴方は？」

「あ、すみません。城に入ったのは良かったですけど、迷子になっちゃって。パーティー会場はどこでしょうか？」

こつこつと靴音を鳴らしながら、所長が深々と頭を下げ、上品に言った。

「これはこれは。桐生流忍者、桐生朝飛殿きりゅうあさひ。ようこそいらっしやいました」

頭を上げ、にっこりと優しくそうに微笑む。

「貴方が、パーティーに一番乗りですよ」

参加者523名中、1名クリア。  
残り522名。



51・裏町カプリッチオ #05「火之基忍」(後書き)

「あれ、空夜はまだなんですか？」

「弟さんは……そうですね。もう少し後になりそうです」「  
「そうなんですかー。暇だな……」

52・裏町カプリッチオ #06「無自覚殺人鬼」

思えば、レオラはいつもこんな風だったと思う。

賢いくせに、へらへら馬鹿をやっていて、昨日今日会ったばかりのヤツにも、まるで十年來の親友だと言わんばかりに馴れ馴れしい……かと思えばある種の人間には嫌悪感を隠そうともせず、露骨に嫌な顔をする。お人好しかと思っていたら、案外容赦無く、馬鹿だと思っていたら、結構考えている。

つまり、よく分からないヤツだった。分からない。変なヤツ。掴めない。一体どれが彼の本当の姿なのか、一番の親友のつもりであるおれですら、レオラのことからなかつた。

それはクウヤとはまた別の分からなさ。クウヤについては、名前や出身地こそ、うそぶかれています、内面についてはよく知っているつもりだ。たった数ヶ月とはいえ、あいつをバイトとして雇っていて、それはよく理解した。

けどレオラは違う。何年も前から彼のことは知っているが、彼の内側のこと未だに掴めない。言葉で無理に彼を表そうとするなら、そう。レオラは、深い落とし穴のようだった。

「なんで……こうなるんですか」

クウヤが、それこそ全く以て理解できないっていうか理解したくないっていうかだからあいつと仲間になるのはごめんだっただ、といった表情でカノンに問うた。

「なんでって、まあ……うん。レオラだから」

「でしょうね。ただ前に付いて歩けば良いっていう簡単な作業を出来ないのは、レオラだからなんでしょうけど……これは、そう。なんでいうか、」

「『早速足を引つ張ってくれちゃってこの野郎』って感じ？」

「はい、その通りですね」

2人の今現在の状況を簡単に、それこそ簡略に説明すると、まだ森の中に居た。過去進行形でいうのならば、3人でこの森を抜けようとしていたのだ。今はそのうちの1人が抜けているが。

あの妙なびつくり箱を開けてすぐに、火之基忍の2人はどこかへと消えていた。また別の場所へと鍵を探しに行ったのだろう。もしくは、まだカノン達の尾行を続けているかのどちらかだ。まあどっちにしろあれくらいのレベルが相手ならわざわざ追い払う必要も無いだろう、と言うカノンの発言によって、敢えて引つ捕らえようとはしていないが。

その後すぐに、レオラが森を出ようと提案した。彼曰く、森は敵から姿を隠すのに有効な手口ではあるが、それは誰よりも先に入った場合であつて、自分たちのように一番後から入るのは良くないらしい。敵がこちらを見つけれられないのと同時に、こちらも敵を見つけれられないのだ。

それに肝心の鍵。あんな小さなモノ、森で粘つても早々見つけれないだろうということ、森の外へと向かうことにした。

そしてレオラは、水の音を聞いた、とも言った。散々走り回ったし、ここいらで川に出て休憩しようと言うのも彼の意見だった。

と言うわけで、カノン・クウヤ・レオラの順で森を抜けようと歩いている最中であつた。

運良く、森の中に道らしきモノ（木があまり生い茂っていない）を見つけ、そこを歩いていった。途中にある立て札にも『真つ直ぐ進めば森を抜けられます。トラップに注意！ 所長より（お見せできないのが残念だが、紫のキリンの着ぐるみを着た所長の、デフォルメされたそれはそれは可愛らしいイラスト付きがある）』と書いていた。果たしてそれを信じて良いのかは迷うところだが。

クウヤが「なんとかにすがる思いってこういうコトを言うんですね」と半ば何かを諦めたように言って、カノンは彼に同情したりした。結局3人はまっすぐと森を抜ける道を歩き出した。走るのは止めたらしい。

そしてついさっき。びっくり箱を開けた場所から100メートルもない距離だった。クウヤが何気なしに後ろを振り向くと、そこにレオラの姿が無かったのだ。それに気付いて、慌ててカノンを呼び止めたのが、ついさっきの話。

「はあ……。あいつが森を抜けようって言ったのに、提案者が迷子になっただろうすんだよ……」

「どうしましょうか。ここでレオラが追いつくのを待ちますか？」

「……………川があると云ったのもあいつだ。あいつなら一人でもこのくらいの森は抜けれるだろう。レオラは待たずに、おれたちはこのまま2人でここを出よう。川で待っていればレオラとも会えるだろうし」

「もし、レオラと会えなかったら？」

「最悪の場合、放っていく。迷子になったのが悪い」

「でも、19歳にもなって迷子って……どうなんでしょうね……」

「そうだな。一つ言えるのは、あんな大人になりたくはないってことだな」

「カノンさんカノンさん、レオラは大人って言えるんですか……？」  
「はあ、と2人ため息を吐いて、まっすぐ前へと進んだ。立て札の言うとおり、真っ直ぐと。」

森の中腹地点。びっくり箱の場所からそう遠くない場所。そこにレオラは居た。

「ご都合主義よろしくな木々のあまり生い茂って無い場所で、彼はあぐらをかいて座っていた。その赤い眼は今も伏せられている。しかし眠っているわけではなさそうだ。眼を伏せたまま、彼は誰もいないはずの場所で静かに呟いた。

「……あのさ、先に訊いておくけど、“ストレイン一族”絡みだったりするわけ？」

返事は無い。しかしレオラの台詞からして、確かに誰かがそこに存在しているようだった。

「……おい、聞こえてる？ 答えてくんないや、オレが一人でぶつぶつ言ってる怪しいヤツみたいじゃなか。ってかお前がこそそ付いてくるから、オレがわざわざカノン達から離れてやったんじゃない。そろそろ姿を現したらどうなんだよ」

言いたいことだけ言うと、伏せられていたレオラの双眸がすっと開かれた。一本の木から、影が動く。

「……案外、聞き分けが良いんだ……」

彼の眼が捕らえたのは、10代後半程の眼鏡をかけた少年だった。少年の表情は、まるで親の仇に出会ったかのように険しい。レオラが何かを言おうとする前に、固く、への字に結ばれていた口がわずかに弛んだ。

「金色の髪に、血のように朱いその眼。ストレイン家の特徴……お前が、アゲハ・ストレイン」

「オレはそんな名前じゃない。レオリアナだ」

「今は、でしょう。昔はそんな小さな村の名前では無かったはず」



「……あー… オレもクウヤみたいに情報屋に制限掛ければ良かったな…」

臨戦態勢を取る少年に対し、全くの無防備な姿で対応するレオラ。そんなレオラが勘に障ったのか、少年が低い声でぶつぶつ呟く。怨霊のように。

「不愉快です…そして腹立たしい…なおかつ、理解不能です」

「オレが、か？ それとも、“ストレイン”が？」

「両方です。家族を殺したストレイン家が憎いし、何故そんなことをしたのか理解できない。そして、貴様も」

「……オレは」

「貴様は何故、敵の存在に気付いて居ながら、身動きの取りにくい“座る”ことをし、周りが見えなくなる“眼を瞑る”という行動を取るのですか。見もしない敵に対して余りにも余裕を見せすぎる。

不愉快極まりない。そして腹立たしい。悪が罪を償わずに笑って生きていることが。悪は滅さなければならぬはずなのに。そして理解できない。何故あの便利屋と都合屋は、

風が、2人の間を木の葉と共に去る。」

「何故、貴様に戦慄を憶えないのか」

暫く睨み合う形でレオラと少年はいた。お互いに、瞬き一つせず  
に、じっと。下手に動けばどうなるか分からない、というように。

少し、風が強くなってきたところで、レオラが口を開いた。

「何故って、友達だから」

あっけらかんと、そう答えた。ただ、そうなのだと。そういう風なのだと。それが当たり前の答えだと言わんばかりに。対して少年は、険しかった顔つきをさらに歪めた。

「…悪に、友など居るはずがないでしょう。理解できません。貴様

は一体“何”ですか」

「お前の探しているストレイン一族の血を引く、

殺人鬼達の血を引く、たった一人の生き残りだよ。

そして、一つだけ言っておくがオレはストレイン一族惨殺事件の後、まあ小さい頃なんだが、強く頭を打ったことがあってね。それが事故だったのか何だったのかは今イチ憶えていないんだけど、オレは小さい頃の記憶が無い。記憶喪失なんだ。だからオレとストレイン一族は無関係だ。復讐なら余所でやってくれ」

そんな一言で、少年の怒りが収まるわけがなかった。むしろ、その飄々とした態度がさらに怒りを膨張させてしまった。

「『余所でやってくれ』？ はっ！ 何を言ってるんですか。貴様がさっき自分で言ったじゃないですか。ストレイン家のたった一人の生き残りだと。ストレイン家はもう幾年か前に腕のいい始末屋に始末された。ストレイン一家の惨殺にどれだけの人が喜んだか、貴様に分かりますか？ ただ、ボクは違う。ボクは知ってしまったんです。事件のことを調べていく内に、ある事実が浮かび上がってきた……。ストレイン家は皆殺しにされたのではない。当時5歳だったと言われている末の子供が、アゲハ・ストレインが生き残っている！

たった一人だけ生き残った者がいると知ってしまった！ 始末屋が始末し損ねた！ 一体何故!？」

取り乱して叫ぶ少年を、まるで遠い世界の物語のようにレオラは虚ろな視線で見つめる。いつもの天真爛漫な姿は欠片も見受けられない。冷たい、絶対零度の視線を少年に向ける。

その赤い紅い、朱い眼が連想させるのは、暖かな炎の色ではなく、冷たい血の色。レオラはうっすらと口端をあげて、冷笑ともとれる

微笑みを少年に向ける。そして、馬鹿にしたように訊く。

「……で？ お前はオレと殺し合いたいのかよ」

先ほどよりは落ち着いているものの、荒い息を押さえながら少年が答えにならない答えを言う。

「……ストレイン家は悪です。悪は滅ぶべきです。貴様がどれ程までにストレイン家と無関係であったとしても、その血は無関係ではない。ストレイン家の血は、一滴残らずこの世界から消えてもらわなければなりません。そうでなければ、ボクの怒りは収まらない。ボクは殺し合いなどという無益なものをしにきたのではありません。これはボクの一方的な殺人です」

少年は、長い針の様なモノを両手の指1本1本の間から計8本を覗かせ、レオラに対していつでも攻撃できるように構えた。

「もう一度言う。オレはストレイン一族だった頃のことを憶えていない。何一つ、だ」

「五月蠅い五月蠅い五月蠅い！ 黙れ！ 悪が滅びずにして何が滅びるんだ！ ボクは貴様を殺すまでは死ねない！ 死なない！！」

風が、強い風が少年の咆哮をかき消した。

「アゲハ・ストレイン！！ 貴様を殺す！！」 「そんなに弱いくせに？」

風に混じって、レオラが少年のすぐ傍まで来ていた。朱いその色を、遅れて少年の目が捕らえる。

「ばか、なっ！？」

レオラはにつこりと笑った。笑った。笑った。

笑ったはずなのに、少年は怯えなければならなかった。戦慄いた。恐い。こんなにも冷たい笑顔を出来る人間がこの世にいるのか？

しかしすぐに思い直す。

ストレインの血を引く者は人間ではない。化け物だ。獣だ。悪だ。

「ほら、オレを、殺してみるよ？」

また笑った。

「くっ……！ 化け物があっ……！！」

長針を、レオラの左腕にぶっ刺した。血が飛沫をあげる。  
はずだった。

「オレはカノンみたいに優しくない。クウヤみたいに同情しない。  
コウヨウツキみたいに許容しない。師範代みたいに殺し損ねたりし  
ない。オレは」

笑うな。笑うな。そんな、恐ろしい笑みを、見せないでくれ。

「オレは殺人鬼なんだぜ？」

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い。

「うわあああああああああああああああつ！！！」

恐怖を、叫んだ。

\*\*\*\*\*

「何か聞こえませんでした？」

隣でベートーベンの『運命』を口笛で吹いていたカノンに、クウ  
ヤが訊いた。

「……全つ然。何？ レオラの声でも聞こえた？」

「いえ…空耳かもしれません。誰かの、叫び声みたいだった……」

「ふうん？ ま、これだけトラップが仕掛けてあれば、誰かは引  
つかかるんじゃない？」

そう言つて、カノンとクウヤが振り返った先には数々の罠を破壊  
し尽くした後があった。

「……一刻も早くこの森を抜きたいですね」

「だな。どこに誰が潜んでるかわかんねーしな」  
森の出口まで、後少しだった。

52・裏町カプリッチオ #06「無自覚殺人鬼」(後書き)

自覚する、殺人鬼。

53・裏町カプリッチオ #07「記憶喪失殺人鬼」

憶えていることは、そんなに無い。

凄く印象に残っているのが、真っ赤な雨のこと。それから綺麗な女の人。真っ暗な部屋。

多分その記憶が、オレの原点だ。

どこかに行ってしまったっていた意識を取り戻して、ふと横を見ると、いっぱい人形が壊れていた。

頭が無いのが2つと、腕が無いのが2つと、なんかもう原型留めていないのがあった。全部動かずに止まっていたから、あれは人形なんだと思う。

覚えている限り、天気は雨だった。それも、特別な雨。赤い雨が降っていた。オレはそれを身体いっぱい浴びて、それから、ちょっとだけ綺麗だなって思った。

女の人が居た。綺麗な人だった。女の方は右手に銃を握っていた。そんなものを持っているから、きつと、傘が持てなかったんだ。だって、女の人も真っ赤だった。

「アゲハ・ストレイン……まだ、小さな子供ではないか……」

その人が呟いた言葉は、哀しそうだった。「あげは」って言うのがオレの名前なんだなって思った。だってオレしか居なかったから。「済まないな……仕事なんだ。彼らは悪い人達だった。すぐにお母さん達のいる所へ逝かせてあげよう。それが、私にできる唯一の慈悲だ」

随分、堅苦しい人だと思った。なんだか、形式じみっていて、オレには何が何だか訳が分からなかった。それから、ちよつとびっくりした。オレの“お母さん”はこの壊れた人形だったんだ。

「お母さんって、どれ？」

その人はもの凄くびっくりしていた。きつといきなりお母さんはどれかつて尋ねたからだ。でもしょうがないじゃん。忘れちゃったんだから。

「アゲハ・ストレイン…だな？ お前の名は……」

「えっと、多分そうだと思う。分かんないけど」

「『分かんない』？ 何故分かんないんだ？」

「なんだよー、怒らないですよ。忘れちゃったから分かんないよ」

女の人は口をきいてくれなかった。代わりに独り言を言っていた。さっきのショックで、とか、家族を失ったから、とか。

他にすることもなかったから、オレは周りに落ちていたちよつと格好良いデザインのナイフを持ってみた。手で持つところに宝石が付いていて、ぴかぴかしていた。投げたら格好良いだろうなって思った。

だから、女の人に向かって投げてみたんだ。

「……っ!？」

すぐくびっくりしたみたいだけど、ちゃんと避けてくれた。良かった。あれ？ 良かったのか？ まあ別にいいや。

「何をするっ!？」

怒られた。

「投げたら、格好良いと思って……ごめんなさい」

「…? 私を殺そうとしたのではないのか？」

「……分かんない」

正直、分からなかった。ただ投げてみたかっただけだし、殺そうなんて思ってたけど、何も考えずに女の人に向かって投げちゃったから、そう思われても仕方ないと思う。

「危ないだろう。子供がナイフを投げては……。一つ訊いて良いか？」

「良いよ。一つだけね」

「ストレイン家を知っているか？」

「ごめんなさい。分かんない」



「そうか。謝る必要は無い。私が君から記憶を奪ってしまったようなものだしな。ではお母さんに会いたいか？」

「一つだけって言ったのに。っていうかお母さんってこの人形？」  
オレは首が無いヤツを指さして訊いた。今度はびっくりされなかった。

「ああ。これだ」

「ん……。別に会いたくないよ。お母さんがどんな人か知らないし。っていうか、オレの名前は“あげは”で合ってるの？」

「……いや、君はもうストレイン家の者ではないからな。アゲハは今日死んだことにする。君の名前は後々決めよう」

「後々って？」

「家に帰ってからと言うことだよ」

結局、オレはその人に付いて行って（後で分かったことだけど、その人はとても腕の言いい始末屋と評判のセリ・オーシュだった）、それからアゲハじゃなくてレオリアナになった。それで、紆余曲折あって、結局師範代の思い通り始末屋になってしまった。これはこれで楽しいから別に良いんだけど。

なんで今更、こんなことを思い出したのは分かんないけど。

「アゲハ・ストレイン……！！　くそお……笑うな、笑うな！　化け物おっ……！！」

あ。そうだ。久しぶりにそんな名前を呼ばれたからだ。

「ははっ、だから違うって。オレはレオリアナだって」

「くそっ！　くそおっ……！！」

少年の攻撃を軽々と避けて、レオラは笑った。タンタンツ、と針が地面に空しく刺さる。少年の不気味がる通り、さっきからレオラは笑いつばなしだった。

「貴様ア、何故避けることしかしない！？　馬鹿にしているのか！

「え、だってオレを一方的に殺人するんだろ？ ならオレは攻撃しちゃ駄目だろ。しても良いのならするけどさ」

少年の使うその長い針は、ちょうど手のひらの始まる部分から中指の爪の先までという長さで、太さは小指を縦に4等分したぐらいの太さだった。それを使いこなし、確実に首の頸動脈を狙ってくる。殺気がびりびりと伝わってくるのが分かる。

それをレオラはいとも簡単に避けた。レオラの後ろにある木に、ダーツの様に突き刺さる。こいつがダーツを投げたら百点ばかりなんだろうな、と全く関係のないことを考えられるほどに、レオラは余裕をかましていた。

「オレはさ、全然小さい頃のことを憶えていなくて、っと」

「かはっ…！」

「そうだなー。ストレイン一族については一応の知識はある」

「くあ、がっ！」

次々と攻撃を入れながら、まるで世間話を始めたように話し始める。相手は武器を持っているというのに、レオラは素手で対応する。ふらりと倒れそうになる少年から半歩下がって、レオラは立ち止まった。

「オレの“お母さん”の名前はメイディ・ストレイン。首を切られて死んだ。

“お父さん”の名前はカラ・ストレイン。この人も首を切られて死んだ。

一番上のお兄さん、真ん中のお兄さん、三番目のお兄さん、一番上のお姉さん。

この四人は原型留めず跡形もなくズタズタにされた。

二番目と三番目のお姉さんは両腕を根本からごっそり持っていた。それだ。

そして末っ子のアゲハ……つまりオレ。こいつは全身に家族の返

り血を浴びたショックで記憶喪失。そしてストレイン一族惨殺事件唯一の生存者。でも、とてもとても大切に育てられた為、裏町といえど、末っ子の存在を知るものは少ない。

“お母さん”だけは違うけど、まあ嫁入りだし仕方ないのかな。その他全員は蝶々の名前なんだぜ。趣味が良いよな”

「な、んの、話を……？」

「お父さん”の名前の元になつてる唐蝶カチョウはある蝶の別称でな。そのある蝶って言うのが揚羽蝶。つまりアゲハね。っつーことはオレだ”

「何が言いたいんですか！」

「分からないのか？ オレは殺人鬼としての才能に恵まれていた。ははっ、笑えるだろ？ それって才能かよ？ ってさ。数えうる限りで三桁を越す人数を殺した“お父さん”と同じ蝶の名前を持つてるって、どう思う？」

少年は、レオラに向けて全て投げ尽くしてしまった針を、また針を継ぎ足した。一体どこに隠し持っているというのだろう。あれくらの細さならどこにでも装備できるらしい。

レオラの長い話の間に、少年は僅かだが回復したようだった。落ち着いた声で言う。

「史上最悪の殺人鬼と同じ……凄いですね」

少年はその表情を崩さずに、答えた。

言っている台詞と表情は正反対で、褒め称えるような眼ではなく、鋭い、視線で射殺せそうな表情だった。

「全然……」

レオラは不気味なほど低い声で、少年の答えに続くように言う。  
「全然すごくなにかねえしなあっ！」

怒り、だった。憤りに近い感情。初めて見せた“笑う”以外のレオラに、少年は訝しげに見つめる。何に怒りを感じたと言うのか。

「オレはレオラリアナだ！ アゲハじゃない！ オレのことをその名前で呼ぶなっ！ 苛々するっ！！」

「その名がどうしたというのです。そんなことに意味があるとしても  
？ 否、無意味です……ボクこそ貴様と話していると苛々して……」  
前に居るレオラはまた口端を上げて、冷たく笑っていた。  
訳が分からない。さっきまでの怒りはどうした？ どこに行った  
？ 気味が悪い。落ち着かない。なんだこの感じは？ 寒気がする。  
背に悪寒が走る。ああくそ、その笑みはなんなんだ？

「お前、むかつく」

ただ、速かつただけだと思う。自分よりも、ただ速かった。  
前に居たはずのアゲハ・ストレイン……レオリアナは、自分の  
もっていた八本全ての長針の前半部分を折っていた。折っていたの  
だ。その、手で。

「……………な、あ…、うあああっ！」

「俺の名前を呼んだのがいけないんだ」  
レオラの双眸が、細く、歪んだ。

53・裏町カプリッチオ #07「記憶喪失殺人鬼」(後書き)

残酷に舞う揚羽蝶。

独りになっても舞い続ける。

54・裏町カプリッチオ #08「階銘所有者」

「レオラは、」

まっすぐ進んできた道が、段々と歩きづらいほどに茂ってきている。獣道に近いここに生えた雑草を薙ぎ倒しながら、クウヤが言う。

「レオラは大丈夫でしょうか」

「またその話かよ。答えるの、8回目なんだけど」

迷わないために、果物ナイフを通った道でそびえる木に印を付けながら、カノンが溜息を吐いた。

「大丈夫だつて。あいつだつて裏町業を何年もしてるんだ。こんな森くらいすぐに抜けられるさ」

「……………はい」

まだ不安を残しているのか、カノンの適当な答えに不満があるのか、クウヤは納得のいかない顔でまた草を薙ぎ倒す。が、すでに一発では払えきれない程に生い茂ってきた。

もうここは道とは呼べない。本当にこの道であっているのだろうか。後ろから溜息が漏れた。

「はあ……。お前は何を心配してるんだよ？ 何か気がかりなことでもあるのか？」

「気がかりっていうか……………そりゃ階銘が『街外れ』のカノンさんなら、これくらいの森で足を取られることは無いんでしょうけど、レオラは『道外れ』じゃないですか」

後ろを歩くカノンに、クウヤが身体を向き直して無防備に話していると、背後から今がチャンスと、突然影が襲いかかってきた。

「鍵を渡せ！ さもないとおま「持ってませんって」

へぶつ、と情けない声を出して男が倒れた。見事な気絶、見事な手刀だった。闇鬼に奇襲をかけるとは良い度胸だ。それとも、何も知らなかったただけか。

クウヤがごそごそと意識の無い男の胸から、当たり前前のことのように使えそうな武器や金目のモノを漁る。もちろん財布からは数万ミリアほど抜いて、元の位置に戻した。こいつも変わったな、とカノンはその光景を見ていた。数ヶ月前までのクウヤは、今よりもまだ純粹だった。こういうことを教えたのは自分なのだが。

男に触れた手をパンパンツとはたいて、クウヤは何事も無かったかのように話を続ける。

「『道』って、結構小さい『階銘』じゃないですか」

「んー……。お前は裏町の『階銘』についてはちゃんと理解しているか？ ちょっと言ってみ」

立ち止まり、まるで教科書を音読するかのように記憶していることを声に出し始める。少し記憶が朧気なのか、空を見つめながら一つ一つ確認しながら言う。

「えつと、裏町幹旋所が幹旋所登録を済ませた裏町業者達に『階銘』の命銘をする」

「正解」

「『階銘』は、力量・頭脳・その他に基づいて優れた業者順になっている」

「それも正解」

「最も多い『階銘』は『街外れ』。これを標準値として、下は『外れなし』、上は『国外れ』『島外れ』など様々な『階銘』所有者がいる。表現方法は、一体何から外れ者にされるくらいの凄さなのかたとえば『街』外れなら、街から外れてしまうくらい、といった意味……。ですよ？ それで、どれくらい『外れる』のかで優秀かどうか分かる」

「当たり前。じゃあ質問だけど、『道』から外れたレオラはどうだ？」

突然質問され戸惑うものの、すでに答えのてている内容であった。「……どうって……良くないんじゃないですか？ さっきも言いましたけど『道』は小さいじゃないですか。そんな小さなモノから外れることくらい、誰でもあるんじゃないですか？」

「そうかな。おれはレオラは凄いヤツだと思っけど」

「……？ 何故ですか？」

「『道』ほどありふれたモノはないだろ？ 人が歩けば、そこはもう道と呼ぶ。今歩いてる、草が生えまくったこの『道』もだ。町から街へ行くのにも、別の国へ行くのにも『道』がある。歩くだけじゃない。人が人たる行いを『人道』って言うんだ。『道』は幅が広い」

「人道……ですか」

「所長がどういうつもりでレオラに『道外れ』って付けたのかは知らないけど、おれは『道』から外れてしまうことは、結構凄いことだと思うよ。『街外れ』なんて、ありきたりなおれよりもね」  
言い切ったカノンから視線を動かさず、足下をじっと見つめる。

考えることが多い。多すぎる。いや、違う。僕は考えが浅い。物事を知らなすぎる。どこにでもある、ありふれた道。そして、人道。それらから外れてしまうほどに、レオラは驚異だと言うのか？  
ありふれたモノにさえ外されるくらいに……？ レオラはそんなヤツだっただろうか。思い出す限り、彼はそんな『種類』の人間では無かったはずだ。

クウヤはカノンの言葉を理解することを止めた。分からないものは、分からないのだ。それに、あまり関わりたくない。そんな相手の深い所まで知る必要は無い。関わらない、知りすぎない。無関係に、無関係に。それがクウヤの信条だった。

「心配しなくてもレオラは大丈夫だよ。あいつは案外すごいんだ」  
勝手に結論を出して、カノンは止めていた歩みを動かし始める。  
陽はもう斜めになってきている。

早く……一刻も早くこの森から抜け出したい。暗くなればそれだけ



視界が狭くなるし、何より嫌な感じがする。クウヤはまだ気付いてないかもしれないが、少し、血の匂いが風に運ばれてくる。ここは危ないかもしれない。自身の思案に飲み込まれぬよう、カノンは大きく息を吸った。

少し、鉄の錆びた匂いがした。

54・裏町カプリッチオ #08「階銘所有者」(後書き)

おれは、クウヤのことをよく知りません。レオラのことをよく知りません。アサハカのことをよく知りません。それでも、友達と呼ぶのは可笑しいですか。

55・裏町カプリッチオ #09「歌」

カノン達から見て後方に当たる深い森の奥に、2人の人間がいた。1人は焦げ茶がかつた黒髪に、それと同じ色の目をしていて。縁なしの眼鏡は片方のレンズに小さなヒビが入っていた。

彼は地面に這うように倒れ、左肩からは多量の鮮血が流れ出ていた。もう随分前から暴れるのを止めたらしく、ぐったりと息をすることしかしていない。

いや、息すらも頼りないほどに、か細く呼吸を続けているだけだ。これを人は『虫の息』と言うのだろうか。ならばこれほどまでに言い当てた言葉はないだろう。彼は虫のように死にかけていた。

肩に受けた傷は、何か鋭利なものでえぐられたのか惨たらしく、酷い有様だった。そんな彼を取り囲むように、無数の長針が散らばっていた。おかしなことに、それらは全て真っ二つにされていた。

彼に向かい合うように立つ人間がいた。それは明るい金色の髪に、鮮やかな赤い目をしていた。

赤目の彼はそこから少し離れた場所で何をしてもなく、ただ瀕死の復讐者が呻くのを見つめていた。やる気なさげに下ろされた両腕のうち右の手には、持ち手に宝石などで綺麗に装飾されているバタフライナイフが握られている。その刃には赤い液体がべったりと付着しており、彼の利き腕も同じように赤かった。血だ。自身の血ではないもので真っ赤に染められていた。

石のように動かなかつた少年の唇が、僅かに動いた。

「……セリ・オーシユは、何故…貴様を生かしたのでしょうかね…」  
少年がまだ話せるほどに『生きて』いたことにレオラは驚いていた。

こんな傷を負ってもまだ意識があるなんて。一思いに殺ってしまった。

たほうが良かったかもしれない。

「……さあな。師範代は突拍子もないことをするのが得意だったから」

「そして、貴様をまた……『こちら』の世界に戻した……始末屋として。皮肉ですか？ 生かすくらいなら、向こう側だけで済ましておけばいいものを……。こっち側に来なければ、ボクも、貴様のことを知らずにすんだんです」

もう息をするだけで苦しいのか、反対側の腕で型がつくくらいに左肩を押さえる。その止血の意味は皆無だった。血はもう出きっている。

少年の死にそんな様子を見て、レオラが座り込んだ。座り込んで、項垂れた。右手に握られたバタフライナイフをかちゃかちゃと何度も出し入れする。

2人の人間が互いに黙り合った。行われるのは先ほどのような決闘ではなく、沈黙。風の吹く音さえ聞こえない、静かな森。殺人鬼と復讐者は向かい合ったままだった。

誰も、何も言わなかった。黙っているだけ。そこに存在しているだけ。なのに、レオラの耳にはしっかりと歌が聴こえた。懐かしい歌だった。

\*\*\*\*\*

「夕焼けこやけの……」

整備されていない歩きにくい砂利道を2人で歩いてきた。師範代の左手は、オレの右手と繋がっていて、お互い外側の腕には大きな鞆を持っていた。

足がすごく痛かったんだけど、それを師範代に言えなかったのを覚えている。汽車から降りた駅は、小さな影すらも見えない。もうずっと歩いてきた。2時間はゆうに超していた。それくらい田舎な場所へ、オレ達は行くこうとしていた。

師範代はオレが退屈しないように、ずっと歌を歌ってくれていた。

「しはんだい、それ、なんの歌？」

「名はなんと言ったかな……？ 異国の歌だよ。和国の歌だ」

「さつきも和国の歌を歌ってたよね」

「『ふるさと』か？ あれも好きだな」

「オレもさ、しはんだいみたいに色んな国の歌を歌えるようになりたいな」

「ふむ……イギリスで教えた歌は歌えるだろう」

「『ハンプティ・ダンプティ』？ あれ、めちやくちや変な歌だよ」

「そうか？ 私は好きだけどな。面白いじゃないか。そうだ、これから行く村にも歌がたくさんあったな。レオラリアナ村の歌は少し知っているぞ」

前を向いて、すうっと息を吸い込む。

「花よ 君が咲けば 春の息

冷たい村も 溶け出して

守りし神の 獅子たちも

見よ 立ち上がり 祝いだす

「ライオンが立つの？」

「ああ。スイートピーが咲いたことをお祝いするんだ。『レオラリアナ』というのは、元は『レオ・ラ・リアニア』と言ってな。レスティナ語……ああ、今では英語以外誰も使わないのか……つまりこの

国の古語だな。古語では『立ち上がる獅子』という意味なんだ。それが歌詞にも使われている」

「『守りし神』って？」

「レオラリアナ村の守護神はライオンなんだそうだ」

「『レオラリアナ』……」

「どうした、アゲハ？ 歩き疲れたか？」

「ううん。平気だよ」

嘘だった。本当は死ぬほど疲れていた。

「そうか？ ん…と、私は疲れたから休みたいんだが、すこし休憩しないか？」

師範代も嘘を吐いた。全然歩き疲れているようには見えなかった。

「うん。休憩しよう。あとどれくらい歩くの？」

「地図ではあと少しなんだが…この辺の地図はデタラメだからなあ」

師範代とオレは最初、イギリスに居た。師範代の住んでいた家がイギリスにあったからだ。そのときもまだ、名前は『アゲハ』だったと思う。オレが、それで良いって言ったからだ。師範代も別に何も言わなかった。情報屋にさえ知られていなかったオレの名前が、他の一般人に分かる訳が無いと思っただろう。

だけど、オレが犯罪者の子だとばれるのは案外早かった。さすがにストレーン一族の子とはばれなかったけど。

結局オレがイギリスに居たのは1ヶ月も無かった。イギリスでは噂になってしまって、すぐにオレ達は、師範代の友達に住んでいるレスティナに引越した。

レスティナへ来て最初に住んだのは、メトロポリス中央街だった。メトロポリスは大きな都市で、地方の田舎とは全く違っていた。汽車は毎日忙しそうに走っていたし、馬車と同じくらいの数で、蒸気で動く車も走っていた。師範代の仕事も出だしから順調で、ここなら大丈夫。そう思っていた。

同じ理由で2回目の引越。西部メヌエット地方の、ウエスト

エンドタウン。メトロポリスに比べれば少し田舎だったけど、住みやすいところだった。市場と炭坑が多くて、学校に行っていないかったオレは、少し手伝ったりもした。ここでならきつと大丈夫。希望が見えた。

結局、同じ理由で3回目の引っ越し。南にあるアンプロンプチュ地方、サウステールシティ。ここはレスティナの観光地だったから毎日賑やかだった。ここでは小さなアパートに暮らした。度重なる引っ越しの所為で、師範代の報酬だけじゃ賄えなくなってきていた。オレは土産物屋で手伝いをした。もしかすると、ここは大丈夫かもしれない。想いは強かった。

やっぱり、今までのと同じ理由で引っ越しは4回目となった。レスティナの中で一番人口の少ない北部、セレナーデ地方。ノースタウンやノースヘッドシティに行くのは、最初から止めた。田舎でも、まだそこに汽車はあった。

住むなら静かな場所が良い。  
誰も、オレや師範代のことを知らない場所が良い。  
出来るだけ、小さな村が良い。

誰も、オレや師範代のことを一生知ることのない場所があるなら。全部の願いを叶える村があった。レオリアアナ村。年寄りしか居ない、過疎化している村。都市部と繋がりが無い、駅が無い、街とは閉鎖的。唯一の自慢はスイートピー畑。もう今にも地図から消されてしまいそうな村だった。

結果、オレ達を受け入れてくれたその村の名前は、オレの名前となった。なんでそれにしたかは忘れた。なんとなく、アゲハのままでは生きていけないな、と幼心に感じたからだろう。

それは教訓だった。ストレインのことなんか知らない。お前はゼリ・オーシユの弟子だ。自分に言い聞かせた。いくら記憶喪失でも、自分がどれ程までに忌み嫌われていた存在かくらい分かる。何度も復讐を誓う人に襲われれば、嫌でも理解する。彼らはいつだって、

怒りと恐怖の入り交じった表情で自分を見ていた。最悪を見たような、嫌悪の視線。そして、よく分からない視線。

今の、こいつのように。

昔の、あいつのように。

ああそうか。そういうことか。だから無性にむかついたんだ。

こいつは、クウヤに似ている。この目。昔のクウヤに

\*\*\*\*\*

「……………うっ……………」

少年の呻き声がして、レオラは意識を戻した。危ない。過去に浸る人間は無防備になってしまう。無意識に弄んでいたバタフライナイフを、かちゃん、としまった。

もう、夕暮れか。

俯いていた顔をあげ空を仰いだ。空は、好きだ。することも無いから、師範代に教えて貰った歌を歌った。歌詞は覚えていない。デタラメな言葉を、旋律に乗せて歌った。

目の前で死にそうな人間がいるというのに、かなり非常識な行動だ。もしかすると、鎮魂歌のつもりだったかもしれない。

『ふるさと』は、師範代の好きな歌だった。だから、オレも好きだった。知らないことを教えて貰うのは嬉しかった。異国の歌は覚えるのが楽しかった。

「その、歌……………」

少年が呟いた。血は、カラカラに乾いていた。



「母さんが…歌ってくれた…ふるさと」

「……………」

「ごめん…か、あさん。ボクには無理、だった…」

声は掠れていた。もう聞き取れるかどうかも怪しい。よく見ると泣いていた。陽の光に反射して、きらきらと銀色の筋が、少年の頬に道を作っていた。

レオラは目を逸らした。もう一度、空を見上げる。何を見ればいいのか分からない。

戸惑うレオラに、少年が問いかけた。

「貴様は…なぜ、アゲ八と、呼ばれる…ことを…嫌うのですか？」

嫌い、というわけじゃない。もっと深いものだ。『アゲ八』が憎かった。

「……………」 オレはアゲ八であることが嫌だった。苦痛だった。最初のころはなんとも思っていなかったんだ。だけど、何度も殺されかけて、自分の存在を否定されて、オレはアゲ八のことを恨んだ。記憶喪失だって言っただろう…オレにとっちゃ、アゲ八は他人なんだ。だけど、その『他人』の所為でオレは死ななければならなかった。だから、アゲ八を捨てた」

落ちていく夕日が、木々の間から漏れてきた。レオラの明るい金髪がオレンジに変わる。少年は、黙ってレオラの話聞いていた。

レオラは、きつと少年に話しているつもりはない。誰に言っているわけでもない。それは独白に近いもの。淡々と話すレオラの目は、夕日より赤かった。

「『アゲ八』を襲ってくるヤツは、みんな返り討ちにした。力加減が出来なくて、殺してしまったことも何度かあった。正当防衛だ。でも、きつとそんなことが出来たのも、オレにストレインの血が通っていたからなんだ。オレが記憶を無くしても、手が、腕が覚えてる。オレは人殺しになるために生まれたようなもんなんだ。だから、アゲ八を捨てた。アゲ八を、いなかったことにしたかった」

「……貴様は、何を悔いているんです？」

「……後悔？ オレは後悔してるのかな……。でもオレのことなんかどうでも良い。オレがどれだけ忌み嫌われようと、そんなこと、いま『生きて』いられることにしてみれば小さなことだよ……。だけど、師範代に優しくされるのは、何故かどうしようもなく辛かった。だから、はねのけてしまった。その時の師範代の顔が忘れられないよ。何度過ちを犯してしまっても、抱きしめてくれた。

人殺しの血を持つ自分を、受け入れてくれた。

その無償の優しさが、痛かった。

傷が染みるようだった。

「オレは何をすればいいんだろうな……。適当に笑って誤魔化して、弱いフリをしていれば、普通になれるのかな」

「……貴様は、誰なんです？ どっちが、本当なんですか……」

「オレは、レオリアナだ……。だけど、アゲハでもある。アゲハの存在を知るヤツがいる限り、オレは、レオラになりきれない」

しまっていたバタフライナイフを、取り出す。

「だから、お前には、死んでもらう」

「裝飾された宝石達が、煌めいた。少年は最後の力を振り絞って、声を発した。」

「」

少年の死は、呆気なかった。

元々死にゆく命だったのを少し早めただけだ。死因はきつと出血多量に違いなかった。少年の周りを取り囲む様に、壊れた針と、血の痕が散らばっている。

レオラは少し目を閉じて、黙禱を捧げた。目を開けたとき、小さな雫がつう、と頬を辿って落ちていく。

「ごめんなさい」

少年の最後の言葉を思い出して、一言呟いた。

\*\*\*\*\*

「出ちやいましたね」

「出られたな」

カノンとクウヤが呆けて言った。あの立て札の言うとおり、馬鹿みたいに真っ直ぐに歩いていたら、本当に森を抜けることが出来てしまった。途中で何度引き返そうと思ったことか。さすがに倒れて腐った樹を見たときは、本気で駄目だと思った。なのに、今2人がいる『ここ』は森の出口なのだ。

奇跡みたいだ。

本来立て札とはそういう役割を持つモノのはずなのだが、ここではそう思うのも仕方ない。

2人が出口で突っ立っていると、前方から声が聞こえた。何時間ぶりに聞く声だろう。

「遅い！ 2人とも何してんだよ？」

「レオラ!!!」

道外れの始末屋が、小さな岩に腰掛けていた。

安心してうつかり笑顔になってしまったが、すぐに怒りの感情が沸き上がる。

「…遅いつて…はあ!? お前が迷子になったお陰でクウヤが心配しまくつたんだぞ!？」

「え、そうなの?」「するわけないだろ。なんで僕がお前の心配しなきゃいけないんだよ」

即答するクウヤに苦笑いで肯定する。

「だよな」

「つーか、お前いい年こいて迷子になるなよ!」

カノンの怒りはまだ収まらないようだった。仲間が無事ならそれでいいという台詞は、この口からは出てきそうにない。

「いやー、わりいな。オレって案外方向音痴だったみたいだわ。こりゃびつくり新発見! アレだよアレ。これで一つ賢くなったー、みたいなの」

へらへらと答えるレオラに、今度はクウヤの怒りが当てられた。

「何がだよ! お前が居ない間、僕は暇をもてあましたカノンさんに『いきなり敵が襲ってきたときの攻撃の練習ー!』って言って、思いつきり追いかけて回されたんだぞ!

『これは演習ではない! 実戦だ!』って明らかにそれを言いたいだけのセリフを言いながら、本気で追いかけてくるんだよ?!

カノンさんの持つてる銃にうつかり弾が残ってて、僕は危うく死ぬところだったんだぞ!!!」

「うわ…オレ、迷子で良かったー…」

その地獄の光景は、その場にいなくとも安易に想像できた。昔、似たようなことをされたことがある。

「うつかりつーか、まあワザとなんだけどな」「確信犯!？」

「だってそうじゃないと、練習にならないだろ? ま、それはおいといて。おいこらレオラ。結構ヒヤヒヤしたんだから、もう迷子に

ならないようにしてくれよな」

「へいへい」

「そうだよ！ もう前を歩け！ 絶対に後ろを歩くなよ！」

クウヤに言われた通り前に行く。耳を澄ませてみると、水の音が聞こえる。川は近い。

早く全て水で洗い流したい。

先ほどの2人の様子を見る限り、何もばれていない。あたりまえか、と納得する。血は少年の服で丁寧に拭き取ったし、ナイフも綺麗なままの姿だ。誰も気付く筈がない。

ふう、と安堵の息を吐いたところに、後ろから声を掛けられた。

「おいレオラ」

「ん？」

クウヤがカノンの隣を離れて、自分の耳元に小声で話す。金髪の便利屋に聞かれぬように。

「お前、血の匂いがするよ。動物じゃない。ヒトの血の匂い」

「……そうか。さすが天才だな」

「殺したのか？」

「どう思う？」

「……………」

黙ったクウヤを見る。昔とは違う。あんな目はもうしていない。

こいつは変わった。変わったんだ。なら、本当のことを言う必要は無い。

「…殺してないよ。結構なケガを負わせたけどな」

「そう、なんだ」

「あー！ 2人がおれをのけ者にするー」

後ろでカノンが騒いだ。慌ててクウヤが後ろに戻る。

「のけ者になんかしてませんよ。ただ、さっき追いかけられた仕返しを練ってたんです」

「うっわ、もしかしてクウヤ君って、根に持つタイプ？」

「ええ。蛇のように執念深いですよ」

「おっしや、ばっちこーい！ おれは今超絶にノリが良いからな！」

「……カノンさん、酔ってます？」

「ちげーよ。なんか夜が近づくに連れてテンションが高くなってきたんだよ。何だっけ。修学旅行の夜な気分」

「学校なんか行ったこと無いくせに……」

「なんだよ、お前は行ったことあるのか？ 行ってない奴は騒いじ

や駄目なのか？ ああ？」

「……カノンさん、やっぱり酔ってます？」

騒がしい後ろから離れて、レオラは歩く。音は聞こえない。耳には、少年の最後の言葉が反響していた。

『やっと、母さんのところに逝ける』

少年も今までの復讐者と同じだった。オレのことを殺しに来るくせに、どこかで死にたがっていた。みんなそうなのだ。憎しみの目と、もう何もかもがどうでもいい目。死にたがるその目がオレに向けられるたびに腹が立った。無性にむかついた。

誰だったか、何番目に死なせてしまった人かは忘れたが、自分にこう言った。

『愛しい人のいない世界にはいたくない』

なら、その忌々しい目を潰せばいい。何も見えなくなってしまうえば、そんな世界を見なくて済む。なのに、あいつらは死にたがる。死ぬのは最後で良いのに。

オレは、どうしようも出来ない。ただ、自分が殺されないようにするだけ。

アゲハなら、どうしたんだろうか？

不毛な問いかけは、一番奥底にしまっておいた。忘れよう。何も無かった。忘れてしまおう。

オレにはそれしか出来ない。

55・裏町カプリッチオ #09「歌」(後書き)

立ち上がれ、記憶を閉じこめる獅子よ。

BGM:【Bath Room】Song By ガゼット



56・裏町カプリッチオ #10「いい加減にしてください」

「普段大人しい奴ほど、キレると怖いらしい」

いつだったか師匠が言っていた。なるほど、普段から言いたいことを自分の中に溜め込んでいるから、空気を入れすぎた風船が破裂するみたいにキレてしまうのか、と納得したのを覚えている。けどそれは認識不足だった。風船が破裂？ そんな生やさしいもんか。とりあえず教訓。「クウヤだけは何かあっても絶対に怒らすな」

\*\*\*\*\*

陽もすっかり落ち、月明かりだけがぼおつと照らしてくれる夜の道を、カノン達3人が歩いていった。その後ろをこそそとつけてくる火之基忍の2人組も、もちろん健在だ。

レオラが言う水の音がする方へ、自身らの耳を頼りに歩いていくと、期待通り川があった。水は綺麗に澄んでおり、まんまるな月が綺麗に反射している。

「川だな」

「川ですね」

「な？ オレの言うとおりだっただろ？」

川はあった。まごうことなき川だ。

「鍵もあるな」

「ありますね」

「ラッキーじゃんか」

しかも、鍵もあつた。まごうことなき鍵だ。カノン達が探しに探していたあの鍵があつた。

しばらく同じ感想を3周ほど繰り返して、大分状況が飲み込めてきた辺りでカノンが言う。

「だがな、レオラ。おれはもっと春の小川の激しいモノを想像していたんだ。誰がこんな流れの急な、いや、むしろ激流といつても過言でない程の川があると思うんだよ馬鹿野郎」

「鍵があるけどな、一体誰があんな所まで取りに行くんだよ？」

「……オレを見るな。そんな責めるように見るな。オレは嘘なんか吐いていない」

レオラは嘘を吐いた訳では無かつた。彼の耳には確かに水の流れる音が聞こえてたし、もちろん川はあつた。ただし、カノン達がいる場所より少し下に。川幅は結構広く、しかもとんでもない速さで流れている。

3人のお目当ての鍵は今居るこの場所から、向こう岸へと繋いでくれている、かなりボロい吊り橋のど真ん中にポツンと置いてあつた。

「プチ崖つぶち状態だな。見てみるよクウヤ。あの吊り橋、今にも落ちそうなのに何で鍵なんか置いておくんだらうな。全くサド所長には参っちゃうよな」

はっはっは、と笑うレオラを見事に蹴飛ばして、クウヤがカノンに聞いた。

「……っと、馬鹿は放って置いて。どうします？ あの吊り橋を渡るには、例え半分の距離とはいえかなり勇気がいりますよ。でも、やっぱり鍵は欲しいですし……」

「そうなんだよな！ 鍵が見つからないことには、このサバイバルゲームを抜けられないし……ここはいつちよ、公平にジャンケンで決めますか！」

「ですか」

「うわ……やだなー。オレ、ジャンケン弱いんだよ」  
ジャンケンに弱いもくそもあるか！ とカノンに一蹴され、ジャンケン案は可決された。

「取りあえず。一番最初に負けた奴が鍵を取る係な。他の2人はその間休憩。ぱつと見、結構ボロそうだけど1人渡るくらいじゃ落ちないし、大丈夫！」

大丈夫…とは言っても、やはり鍵を取る係だけにはなりたくない。クウヤもレオラも思い思いのおまじないで、ジャンケンに勝てるように祈っていた。

「……………いいか？……………出さなきゃ負けよー！ 最初はグー！  
じゃん、けん、ぼん！」

パー・グー・グー

「うわお、うつそー！？ オレ勝っちゃった？」

レオラ、考えに考え抜いたパーで勝利。セリフからも読みとれると思うが、他の2人はグー。

「なんかオレ、今ので一生分の運を使った気がする……………」  
それはちよつと不憫だ。

感激するレオラの両隣で敗者2名がわなわなと震える。

「おいおいおい……………おれとクウヤが負けかよ……………」

「ということはもう一度ジャンケンですね」

クウヤの言うとおり、今度は第2ラウンド。カノン対クウヤだ。

勝負に出る前に、カノンが心理戦に臨んだ。

「クウヤ。先に言うっておくけど、おれはパーを出す」

「パーを出す？ そんなこと言って、何処に嘘を吐かないと言う保証があるんですか。その手には乗りませんよ？」

「そんな…！ 私が嘘つきだって言いたいの？」

女らしい口調に、うるうると川よりも澄んだ目でカノンが訴えかける。両手は胸元で祈るように組んでいる。初対面の人ならば、こ

の表情にころつと騙されそうだがクウヤは彼女の元でバイトをしたことがある。残念ながら初対面ではない。

「笑わせてくれますね。僕が今まで貴女に何度騙されたと思ってるんですか」

「ちつ……じゃあお前がパーを出せ。おれがチヨキを出す」

「嫌です。絶対に嫌です。貴女がチヨキをだすなら僕はグーを出します」

「お前、仮にも元上司だぞ？ ちよつとは折れるよ」

「所詮『元』です。それを言うなら、カノンさんは大人じゃないですか。少しはまだ義務教育中である子供の僕に譲ってくれても良いんじゃないですか？」

「へっへーん、残念でしたー。おれはサンタさんを信じてるからまだ子供なんですー」

「僕だつて信じてますよ。サンタさんは絶対にいます」

「嘘だ。絶対に嘘だ。お前が全身真っ赤なセンス悪すぎ煙突ジジイの話を信じてる訳無いだろ」

「貴女その発言こそなんですか。サンタさんを侮辱するとはいい度胸ですね」

「あのさ、さつさとジャンケンしてくんねーか？」

段々と話がサンタクローズの方向にずれてくる2人にレオラがストップを出す。どうやら彼はこのチーム内でのツッコミ役の様だ。

「そうだな。レオラの言うとおり、ここで言い合っても仕様がこないよクウヤ。ここらで一発でケリを付けてやる」「いや、ジャンケンだから」

「負けて泣き寝入りすることになってても知りませんよ」「いやだからジャンケンだって」

いちいち突っ込むのにも疲れるが、几帳面なA型らしく、きちんと突っ込むレオラには感服する。

「最初はグー！ じゃん、けん、ぱん！」

パー  
グー

「な……」

クウヤの握り拳が震える。握り拳、つまり『グー』だ。

「な、なんで宣言通りにパーを出すんですか!」

「だって本当のことを言っただけなんだもーん。なのにい、クウヤが信じなかったのが悪いんだしい?」

唇を尖らせて、勘に障る口調で話す。語尾はもちろん上げ気味だ。

「この人最悪! 最悪だ! うあーなんかめちゃくちゃ腹が立つ!」

頭をぶんぶん振って怒りを抑えきれないクウヤに、レオラが肩を叩く。かなりご満悦な表情だ。周りにキラキラしたモノが飛んでいる。クウヤが負けたことがそんなに嬉しいのか。

「ほら、クウヤくん。さつさと取って来いよー?」「そーだそーだ!」

「くっ…2人だと二倍に腹が立つ!」

と言うわけで、吊り橋を渡ることになったクウヤ。かなりの抜き足差し足で渡り歩く。

「こら、そんなにちんたらしてたら制限時間内に間に合わないぞー!」

「ならカノンさんが取ってきてください!」

「お前そんな橋、ぴゅっと走ってきて、ぴゅっと鍵取って、ぴゅっと戻ってこれば良いじゃねえか」

「じゃあお前がやって見せろよ!」

安全な場所から飛ばされる野次に、クウヤの怒りのパロメーターがぐんぐんと急上昇する。彼の沸点はわりと高い方だが、この危険な状況の中では上昇する速さが高くなったようだ。

こんな橋の上を走れるわけないだろ! あーレオラむかつく。

カノンさんなんか嫌いだ。

「クウヤー！ もし橋が落ちてもお前のこと忘れないからなー」  
「勝手に殺さないでください！」

カノンさんなんか嫌いだ！ 大嫌いだ！ あの人絶対にこの状況を楽しんでる。人の不幸は密の味って感じた。うわ、よく見たらかなり笑顔だ、あの人。なんだよソレ。元部下に大して酷くないか？

「オレもお前のこと忘れないからなー」  
「だから殺すなって言ってるだろ！」

レオラの奴…絶対に今までの腹いせだ！ 何が『忘れないからなー』だよ！ 記憶喪失の前科があるくせに。

あーもう、2人なんか嫌いだ！ ていうか吊り橋が嫌いだ。かなり揺れてるし……吹くな、風！ 出来るだけそっと歩いて……うわ、今絶対に『ミシッ』て言った。ていうかこの吊り橋今にも落ちそう……これ以上人間が乗ったらきつと落ちる。いや絶対落ちる。早く鍵を取りたい……

ていうかなんで僕はこんなことをしているんだろ……同年代でこんなに苦労してる奴っているのか？ あ、なんか段々むかついてきた。そうだよ、絶対に可笑しいよ。なんで僕はこんな危ない目に遭ってるんだよ。なんでこういうことを何回も遭遇してるんだよ。カノンさんと居るといつもそうだ。バイトしてたときも似たようなことがあったぞ。

ていうかなんでレオラがジャンケンに勝っちゃうんだよ。こういうのはレオラの役だろ。お前ってそういう立ち位置じゃなかったのかよ。

ていうかなんでこんな危険なことをジャンケンで決めるんだよ。もっと話し合って決めればいいじゃんか。あ、賛成したのは僕か。

「……カノン、あいつ黙って止まっちゃまったぜ？」

「だな。なんか考え事でもしてんだろ。どうやってレオラを呪い殺そうとか」

「オレ限定!？」

悶々と怒りを溜め込むクウヤに、カノンが一声掛ける。

「クウヤ! 鍵は目の前だぞー!」

ふと我に返って前を向くと、キラキラと月明かりを浴びて光る金色の鍵があった。鍵が逃げる訳無いのだが、急いで両手に掴む。

「やった! 鍵が! その鍵はマリナとシゲ君が頂いちゃうんだよ!」  
すっかり存在を忘れていた火之基忍が、クウヤの帰り道に立ちふさがる。

「あいつら、まだ居たのか!」

「暇人だなあ」

「つつこむべきはそこじゃなくて!」

吊り橋の前でクウヤを見ていたのにも関わらず、マリナとシゲが橋を渡ったことに気が付かなかった。さすがは影の者、忍。

にんまりと笑うマリナとシゲがじりじりとクウヤに近付いていく。

「名無しの桐生忍! さつさとその鍵を俺達に渡せつ」

「そうなんだよ!」

クウヤは近づく2人よりも遙か後方を見て、真っ青になる。

「……なんだよ、このお決まりの展開……」

「はあ? 何を言ってるんだお前」

紺色のバンダナを巻いた頭を斜めにして訝しげに問う。そんなシゲに慌ててマリナが叫ぶ。

「しっシゲ君! 橋が落ち……って……うにゃあああああ!」「うわわわわわ死ぬ死ぬ死ぬー!」

ぼかんと口を開けたカノンとレオラが見守る中、ボロい吊り橋は派手な音を立てて川へと落ちた。

「クウヤツ!?」

次に2人が声を発したのは、橋が落ちてから3秒後だった。

さっきまで橋が架かっていた場所から、覗き込むように下を見る。ちょうどマリナとシゲが命からがら岸へと上がっているところだった。

「けほっ…し、死ぬかと思ったんだよ…」

「俺も…げほっ…鼻に水が入った…」

「ええ加減にしいや……」

ざばあー、と川からマリナたちの居る岸へと這い上がるクウヤ。びしょびしょに濡れた髪が頬に張り付いている。

「なあ、お前らのせいで鍵がどっかに行ってもうたやんか…。この川、流れが速いから、もう見つけられへんやん…」

「ひいっ!」

「良かった、クウヤも岸にいる」

クウヤが無事そうではっとするカノンだが、レオラが問う。

「…なあカノン……クウヤは何語を喋ってるんだ…?」

レオラに聞き取れない訳。それはクウヤが発しているのが和語…



日本語だったからだ。

「和語だよ。たぶん」

「たぶん？ 自信無いかよ」

「ちよつと違うんだよ、おれの知ってる和語と。あれはきつと地方の訛りだ」

「訛り？ 悪いけど、クウヤの言ってること翻訳してくれよ。オレにはさっぱりだ」

「お前、裏町業やっててそれは無いだろう」

「英語しか出来ないんだわオレ」

「があつと来てしまったが、取りあえず聞き取れる分だけ訳す。

「えつと…鍵がどこかに行ったらしいな」

「まじかよ」

「取りあえず怒ってる」

「見て分かるわ、そんなこと」

「あ…」

「なに？」

カノンが指さす方向では、2人の忍と1人の都合屋が対立する形になっていた。

「お、お前、いきなり日本語でしゃべるなっ！ びっくりするだろっ！」

「しかも関西弁だと怖さ倍増なんだよ！」

怯える2人を余所に、まだぶつぶつ言い続ける。相変わらず関西弁だ。

「あー…もう、なんでこんなことになるねん。ほんま最悪…折角頑張ったのに鍵は無くすし……大体お前らが悪いねんで！！」

「う、五月蠅いんだよ！ お前がすっかり握ってないのが悪いんだよー！」

「そつだそつだつ。俺達は何にも悪いことはしてないもんね！」

無茶苦茶な言い分にクウヤも反論する。

「めっちゃしたやんか。あんなボロボロの吊り橋に3人も乗ったら落ちるに決まってるやる！　なんで渡ってくんねん！　責任取ってみい！」

「ごちゃごちゃ言うんなら、お前にはここで消えて貰うんだよ。どうせ鍵を持ってないなら、人数だけでも減らさなきゃ」

「覚悟しなっ、名無しの桐生忍！」

手裏剣を両手に持つ2人に向かい合ってクウヤも、今朝レオラを刺そうとしたクナイを向ける。

「良いこと教えといたるわ。僕は名無しじゃなくてなあ」  
一呼吸置く。

「桐生空夜って言うねんで」

火之基忍の表情がさっと青くなる。桐生忍の空夜。桐生一族の直系。天才の忍。

敵に回してはいけない者を敵にしてみました。

「ちょ！　ちよつとストップ！」

「ごめんなさい！　謝るから！　お頭に直系には手を出さなって言われてるんだよ」

「もう今更謝っても遅いわ！　鍵は戻ってこえへんねん！　絶対にお前らしばいたるさかいな！」

そこより少し上。

「で、クウヤは何だって？　カノン」

「うーん……絶対にボコボコにするってよ」

「あ。ホントだ」

「ごめんなさいごめんなさい！ 痛い痛い痛い！」

「あわばばば！ 腕折れるって、腕」

全ての手裏剣をクナイで弾き返した後、軽やかに柔道技を掛ける。当たり前やる。謝ってもすまんことがあるって教えたるわ」

「もう十分に反省しました許してください！」

「いややー」

「本当にすいませんでした！ 怒りをお鎮め下さい桐生様！！」「情けないほどの降伏っぷりだった。しかしそれでもクウヤの怒りは収まらない。

「お前らの骨をコーンフレークみたいにはらばらにするまで止めたれへん！」

「コーンフレークは止めてください！！」「

下の地獄絵図を見て、冷や汗をかきながらレオラが隣に呟く。

「……………おいカノン。止めなくて良いのか？」

同じく冷や汗を流すカノンが答える。

「おれに止めさせるってか？ 嫌だよ、お前がいけよ」

「命を粗末にするなって師範代に教わったんだよ、オレは」

「だったらおれだって、師匠から言われたっつーの」

「大体、ああいう風に育てたのはお前なんだろう？ 便利屋でバイトしてたらしいじゃねえか」

しばらく下を見つめてから、真剣な顔をしてカノンがレオラに言う。

「……………おれは『やられたらやり返せ』とは言った。だけど、『やられたら5倍返しにしる』とは言っていない」

「……………可哀想にな。あのガキ達」

「全くだ」

「うにゃああああ」「ぎゃーっ！」「ごめんなさいもつじません！」「ごめんで済んだら、裏町業は赤字や！」

\*\*\*\*\*

「ほう。和語の関西弁は久しぶりに聞きましたね。彼は関西地方出身なんですか？」

所長の問いに、すかさずクウヤのファンの秘書が答える。

「ええ。彼は幼少のころは大阪に住んでいたそうで、小学校に上がると同時に埼玉へと引越したようですね」

「なるほど。彼のように大人しい子がキレると怖いとはよく言いますが、本当でしたね」

「そんなアンダーグラウンド君も素敵です」

秘書のクウヤに対する陶酔っぷりは凄かった。

裏町幹旋所。変人の集まる場所。

56・裏町カプリッチオ #10「いい加減にしてください」(後書き)

「ちなみに、桐生朝飛くんもキレたら関西弁になるそうです」

「そうですか。ところで、どこからそういう情報を手に入れるんですか」

「それは所長と言えど教えられません」

57・裏町カプリッチオ #11「閉会宣言…あれ、朝葉香は何処？」

「ふう。あー、スッキリした！」

「なんだかトイレを済ませた人のようなセリフだが、この場合では全く違う。」

「それはもう素敵なおもてなしに微笑むクウヤの後ろには、あらゆる意味で再起不能になった火之基忍たちが目を古典的にも渦巻きにしてダウンしていた。容赦なく色々とやられたようだ。」

「鬼がいるんだよ……！」

「ぐす…桐生忍、怖いっ……」

「全くその通りだ。」

カノンたちのいる上へと、軽々と飛び越えていくクウヤに向かって、マリナとシゲは呟いた。シゲに至っては、目に涙が溜まっている。彼らの、一流の忍への道は果てしなく遠い。

「シゲ君……もっと修行をしなきゃなんだよ」

「そうだな…鍛錬が足りなかったよな……これからどうする？」

「取りあえず、鍵の入手は諦めて、」

「諦めて？」

「お家に帰るんだよ……！」

「そうだなっ！」

この後、島から脱出しようと2人でせつせと脱出用イカダを作っている最中に「試合放棄は感心しませんね。あなた方には思う存分所長の暇つぶしになっていただかないと」と素敵なおもてなしと共に現れた裏町幹旋所の精鋭達から制裁を受けてしまったのは、また別の話

「すみません、鍵は手に入りませんでした」よっこらしよ、とカノン達の元へ登ってきたクウヤが謝る。もちろんクウヤの所為では決

して無いのだが、一応謝っておくあたり彼らしいと言えば彼らしい。「…あのさ、ちょっと聞きたいんだけどお前、二重人格？ もしくは水に浸かると人格が変わっちゃう人だったりすんのか？」

「は？」

真剣な顔をして聞いてくるレオラに、間抜けな返事を返してしまふ。帰って早々そんな質問は無いだらう。それに、二重人格というよりもさっきの姿が本性と言った方が納得できそうな気もする。

「何言ってるんのさ。そんなことよりもうビショビショだよ。服なんて絞ったら水が、」

クウヤが両手で絞ると、ジャー、という音を立てて川の水が垂れ落ちる。かなり大量の水を吸っていたらしい。

「ほらね？」

溜息をつきながらあらゆる箇所を絞っていく。ほんの気休めにしかならないが、やらないよりはマシというものだらう。クウヤが服を両手に握るたびにポタポタと雫がこぼれた。同時に愚痴もこぼれる。

「もう二度と会いたくないよ。あんな忍」「あっちもきつと同じこと思ってるよ」

再び、全くその通りだった。レオラが引きつった表情で正論を言う。しかしそれ以上は何もいわない。幾らレオラでも、さっきの地獄絵図を見せつけられた後では本領発揮は出来ない。

「でも近々会うんじゃないの？ ああいうキャラの濃い奴らは再登場するのが常識なんだぜ」「カノンさん、それはどこの常識ですか」

「おれの常識……ふああー…なんか今日は疲れたな…」

大きく欠伸をして、眠たげに目を擦る。今日ほど長い一日は無いだらう。

「そだな。結局は振り出しに戻ったし。オレも疲れたしさ、今日の所はぐっすり休んで、明日の朝に賭けるか」「そうしよう！ おれ滅茶苦茶頑張ったし！」

「貴方達は見ただけでしょう……」

はつきり言つて、苦労したのはクウヤだけだ。そして言うなら、もつと苦労したのは、5時間もカノン達の後をつけてきたのにも関わらず、何も手に入れることなく再起不能になった火之基忍たちだ。時刻は午後6時過ぎ。カノンはちらりと自分の腕時計を見て、思案する。

終了時間は明日の6時だから、あと12時間。半日はある。そろそろ鍵の数が少なくなってきただろうし。たしかあの秘書が言うには、島中にはらまかれた鍵は全部で50個。1個につき5人までの入城が可能。その内、先着10名が賞金を手にすることが出来る。……だったな。まだゲームが始まって5時間ちよいだし、先着の欄に空席はあるはずだ。

こんな馬鹿げたゲームをやる以上は、賞金を狙っていかなければ。よし！ と決心を固めるカノンの隣で、ジャー、と間の抜けた音がまた鳴った。まだまだ彼の服からは水がこぼれ出る。犬みたいに頭を振つて、水を振り払う。

クウヤから飛ばされてくる水に反撃して、カノンは無言でげんこつをかました。「……痛いです……」

「お前は溝にはまった犬か。頭を振るな、頭を。つつーか、結ぶぐらいなら、その髪を切れ」

「髪は個人の自由です」

「見てるこつちはうざいんですう」

「語尾を上げないでくださいー」

「お前こそ伸ばさないでくださいー」

「語尾をですか？ 髪をですか？」

「両方ですう」

仲がいいのか悪いのか皆目検討つかない2人の少し前方に生えた



木の上から、感嘆の声が聞こえる。レオラの間の抜けた声だ。

「おおつ……やべえ。オレ、今日確実に一生分の運を使ったわ」

敵に見つかりにくく、かつ身体を休める場所を探していたレオラが呟いた。休むことについては、彼が一番積極的のような気もしないではない。

クウヤとカノンが同時に木に駆け寄って、上を見上げた。太い枝に腰掛けていたレオラがこつちを手招きする。

「どうしたの？」

「ほら。見てみるよ」

そういって、小さな鳥の巣へとレオラが腕を差し入れる。巣が静かなままの所を見ると、宿主は居ないようだ。

次に取り出したときレオラの右手が握っていたのは、キラリと光る、金色。

「……………まじし？」

「まじまじ」

よっ、と飛び降りてレオラがカノンに手渡す。「賞金、貰えるかもよ？」

3人ともしばらくソレを見つめていたが、すぐに互いの顔を見合わす。

そして。

「……ゲームクリアー!!」「……」

探し求めていた鍵があった。3人でハイタッチをして喜びを分かちあつ。

「つと、ごうしちやいられませんよ!」

「そうだ、城に着かないとクリアじゃねえしな!」

走り出すカノンの持つ鍵は、まんまるな月に照らされ、綺麗に光り輝いていた。

磨きに磨き上げられた床と、全てダイヤモンドで出来ているのではないかと思ってしまうほど輝くシャンデリアが吊り下げられた大きなパーティー会場では、まだ数えるほどしか人が集まっていなかった。

料理の形式はバイキング形式で、気取らずに食べられる立食となっている。様々な国からの出身が多い裏町業者達のことを考慮してどの国の人でも食べられるように様々な料理が出来たての状態で陳列されている。

幾つもある長方形型のテーブルの一つを例に取って言うと、右端から、和国・フランス・中華大陸・オラトリオ王国などの郷土料理が各種取りそろえられていた。

招待客よりも料理の方が多いい会場のドアのすぐそばに、人影が見えた。このパーティーの主催者、アレグロ・コンポート所長だ。ちなみに服装は気取りすぎないイブニングスーツ。普段の行動からは決して予測できないが、結構センスは良い方らしい。

「あ、所長さん」

数少ない城への入城者の中の1人。茶色の頭をした少年、桐生朝飛が小走りに所長の元へと駆け寄ってきた。その左手には大きな皿を持ち、遠慮なしに入れられた料理（鴨肉のオレンジソース添え、マルガリータ、大トロの寿司ワサビ抜き、おだまき蒸し、仔羊の香草焼き、グリーンピース・ピューレとフォアグラ、そして何故かクリムブリュレ、タピオカミルク、サーターアンドギーなどのデザート類もある）で埋め尽くされていた。大して大きいとは言えないその身体はどこに詰め込む場所があるというのだろうか。謎だ。

声を掛けられた方へ、アレグロ・コンポートは足を進める。

「おや、アサヒ殿。料理の味はお口に合いましたか」

「はい。すつごく美味しいです。後エスニック料理を食べれば、全種類食べたことになるんです」

ギネスに挑戦中かと思われそうなセリフだ。所長との話の途中だが、鴨肉をフォークに刺して一口で食べる。弟のクウヤの方が礼儀作法は良さそうだ。

「それは良かった。ここには各国から集めた選りすぐりのシェフ達が、このパーティーの為に腕をふるってくれていますからね。ずっとモニターを見ても良かったのですが、折角ですからそろそろ食べ始めようかなと思っていたところですよ」

「ほうなんれふか」

モノを口に入れたまま喋っているが、所長はにっこり笑って続ける。変人は寛大だ。

「ええ。そうですね、何から食べましょうか……アサヒ殿は和国出身でしたね。和国では何の料理がおすすですか？」

「……ですすね……お寿司とか天ぷらとか有名どころも良いんですけど、たこ焼きも美味しいですよ」

「タコ・マキ？ タコ料理ですか。挑戦してみますね」

「そついえば……」

所長の後ろを見て朝飛が尋ねる。

「いつも付いている、あのお2人はいらっしやらないんですね。秘書みたいな女性の方と、筋肉隆々な男性の方……」

「ああ、あの2人は今入城門へと向かっています」

「門へ？」

「はい。ちよつとしたトラブルが起きそうなので」

にっこり笑いながら、タコ・マキでも食べましょう、と所長は行つてしまった。この大皿最後の料理であるブリュレをスプーンで掬いながら、朝飛は首を傾げるだけだった。

\*\*\*\*\*

パーティー会場である城へ入る門の前に、カノンとクウヤとレオラの3人が息を弾ませていた。代表して、カノンが門の鍵を開けようと手を伸ばしたと同時に、かちやり、と内側から鍵が開く音がした。「あり？」

重々しい音を立てながら、大きな門が開く。少しだけ開いたその隙間から出てきたのは、開催の時、所長のすぐ隣にいたあの2人組だった。

「おめでとうございます。鍵を入手したあなた方にはパーティーへの参加が認められました。心より歓迎いたします」

「あ、ども」

返事をするカノンの前へ、大柄な男がずっと進み出る。

「この門前では、招待客でない方の紛れ込みを防ぐ為、私共によるパーティー参加者名のご確認をさせていただいております。時々所長の首を狙う不届き者の侵入がございます故……疑う訳では無いのですが、ご無礼お許し下さい。ご自分のお名前の時に返事をお願いいたします」

「では。街外れの便利屋、カノン・ソリティア様」

「はい」

「世外れの都合屋、クウヤ・アンダーグラウンド様」

「はい」

「道外れの始末屋、レオラリアナ様」

「うい」

「島外れの代理屋、香葉月朝葉様」

「はい」

「……はい？」

何時の間にもいたのだろうか。カノン達の背後に、クウヤに負けないくらい素敵な笑顔で微笑む朝葉香がいた。

「以上、計4名の方のご参加で宜しいですね？」

「ええ。間違いありませんわ」

「いやいやいやちょっと待って！　なんでコウヨウツキがここに当たり前の様に居るんだよ！」

「そうだよ！　アサハカはおれ達と一緒に行動してないじゃん！」  
うふふ、と心底おかしそうに朝葉香が笑う。

「嫌ですわ、カノンったら。わたくしはずっとずーっとずーっと貴方達の後ろにいましたの……ねえ、都合屋？」

話を振られたクウヤは汗をだらだら流していた。暑いからではない。怖いからだ。

「え、ええ。香葉月さんは僕たちの後ろをずっとずーっとずーっと付いてきてましたよ……」

「知ってたのかよ！」

むしろ、そう言い切るカノンに、知らなかったのかよ！　と言いたいところだ。

と、ここでレオラお得意の空気の読めないセリフが出る。

「でもさあコウヨウツキはクウヤのことが嫌いだから一緒に行動しなかつたんだろ？　なのにずっとオレ等のこと付けてきて、鍵を見つけたから……ってそれはかなり便乗してねえ？」

「あら、わたくしがいつ・どこで・どんな状況でそんなことを言いました？　わたくしと都合屋はそれはそれは超が付くほど仲良しさんですわ……ねえ、都合屋？」

てめえここで下手なことを言ったら後で緑色の汁がでるくらいに絞り出してやるからな、的な笑顔を向けられて、クウヤの完璧な笑顔が凍り付く。氷点下、アイス・エイジ。

きつとクウヤはその内、脱水症状を起こすに違いないというくら

い冷や汗をかきつつも、にっこり返事を返す。できるだけ、にっこりと。

「そ、そうですね！ 僕と香葉月さんは大の仲良しですよ。やだなあれオラ。勘違いしないでよ」

「お取り込み中、申し訳ありません。この4名様で宜しいのでしょうか？」

大分申し訳なさそうに秘書が問う。

「んー。ま、いっか。おれは元々4人で行動したかったしさ」

「さすがカノンですわ！ 話が早いです」

ぱんと両手を会わせて喜ぶ。その姿はまるで可憐な少女のようだ。姿だけは。

再度、男が申し訳なさそうに話を続ける。

「ここで先着10名様に差し上げる賞金のお話なのですが…大変申し上げにくいことに……」

「もしかしてもう無いのっ!？」

必死の形相でカノンが男の胸ぐらを掴む。そしてぶんぶん揺らす。カノンの横に居た朝葉香が、「まあまあカノンったら、はしたないですわよ」と言いつつクウヤから奪ったクナイを構える。実にかめついヒロイン達だ。もはやヒロインと呼ぶのも躊躇してしまう。

「い、いえ！ あるにはあるのです…あ、揺らさないでください酔ってきました！ あるけど、残り1名様なのですだから揺らさないでください！」

思っ存分男の頭を揺らし終えて、ぱつと手を離す。この上なく残酷だ。

「じゃあ賞金はどうするんだよ！ おれの賞金！」

「あー！ 何自分が貰う気まんまんなんだよ!? オレだって欲しい！」

「うふふ…都合屋、貴方はわたくしの為に、遠慮してくださいませわよね？」

「なんでそうなるんですか!? 僕が一体何をしたっていうんです

か!？」

「存在自体が不愉快ですわ」

「全否定ですか!」

欲深い人間の心理が見え隠れしてきたところで、秘書が無線をと  
りだした。

「所長、予想通りなかなか決まりそうにありません。指示を下さい」

「ああ やはりそうになりましたか…皆さんに無線機を向けてくれま  
すか?」

「かしこまりました。みなさん、所長からのお言葉です。お聞き下  
さい」

『……みなさん。お疲れさまです。きつと賞金について、女同士の  
いがみ合いよりも醜く争っていることでしょう。その人間くさい場  
面を私も生で見たかったです。諸事情により、その夢は叶いま  
せんでした。あ、諸事情というのはパーティー料理を頂くためです。  
ああ、話がずれてしまいましたね、もちろん計算通りですが。あな  
た方がジャンケンやクジ引きで賞金を奪い合うとなると、とても時  
間がかかってしまいそうなので、私が勝手に決めようと思います…  
…』

8 この目が一斉に無線機に集中する。

『ええと…どうしましょうか……そうですね。やはりここは、出席  
番号の1番早い人で』

なんとも適当な決め方だが、意義が出るより早くにカノンが歓喜の  
叫びをあげる。

「いよつしゃー! おれ、スペルが“C”だからいつちばーん!」

「オレ、“L”だ…」 「僕は“K”」

「ちよつとお待ちになって」

かなり不満そうにカノンが答える。

「なんだよアサハカ。お前もクウヤと同じ“K”だろ」

「いいえ、違いますわカノン。わたくしの名前はこの国での呼び方  
に従うと『アサハカ・コウヨウツキ』スペルは、」

にやりと不敵に笑って続ける。こっちの表情の方が、朝葉香には似合っている。

「なんと驚き、誰よりも早い“A”ですわよ？」

『では賞金授与者はミス・コウヨウツキで決定ですね』

11月11日。一家団欒の夕飯時に、名もない島では、カノンの嗚咽混じりの叫び声が聞こえたとか聞こえなかったとか。



57 裏町カプリッチオ #11 「閉会宣言…あれ、朝葉香は何処？」 (後書き)

終劇!!

パーティー会場だった城よりも劣るが、普通に比べればかなり大きな門の前に金髪碧眼の少女が、なんとも間抜けな音のブザーを鳴らした。大概の家のブザーがこの音なのだが、どうにかしてほしいものだ。一体どんな音なのかと言うと、まるで首を絞められた人間の発する『ぐえっ』という奇声と、夏の夜に田圃で静かに鳴き続けるカエルの声を足して2で割ったような音だ。

少女が自身の人差し指をボタンから離すと、代わってガチャリと通信の繋がる音がした。

『はい、こちらバーガンディ家応答事務の者です。ご用件は？』

『こんばんわ。こちらで弟を預かっていただいていた、カノン・ソリティアです。シオン・ソリティアなんですが…迎えに来たとユーリ・バーガンディさんにお伝えして頂けますか？』

『ああ！ カノン様ですね。少々お待ち下さい』

本当に少しだけ待たされて、すぐに装飾された門と扉が開いた。大きな扉からちよこつと覗かせる久々の顔に、カノンは今までに見たこともないくらい満ち足りた笑顔を、最愛の弟に向けた。

『シオン、ただいまー』

『姉さん！』

がばつと抱きついてきた弟の後ろには、片手をひらひらと振るユーリがいた。

『結構遅かったな。所長はどうだった？』

『相も変わらず変だった。ってかユーリさん、あんた仕事は？』

『言っとくけど、サボってないからな。うーん、そっかそっか……やっぱり変だったか。あの人はそうじゃないとな。で？ 衣装は何だった？ やっぱり俺の予想通りだったろ』

『えっと、ユーリさんの予想はなんだっけ？』

『ピンクの土台に黄緑の斑点模様のパンダ、着ぐるみバージョン。』

それが猫耳に付けシツポ、イリオモテヤマネコバージョン」

「残念。今回は先住民がテーマだったよ」

「くっそー！ 俺かなりの自信あったのに……！」

「……………姉さん、ユーリさん。さっきからなんの話をしてるのさ？」

「子供は知らなくて良いことだよ」

シオンはそのことについてそれ以上大して興味が沸かなかつたらしく、カノンにこの2日間にユーリに教えてもらった簡単な手品の数々をお披露目した。ほとんどの人が忘れてしまっていると思うが、ユーリはシオンに手品を教えると約束していたのだ。

それから少しだけ立ち話をして、そろそろ夕飯時になると言うところでカノンとシオンはユーリと別れた。姉弟で帰る久々の道だ。

冬はもうそこまで近付いているらしく、どの街路樹を見ても疲れ果てた色しか見えなかった。もう後は丸裸になるだけなのだ。それが過ぎればレスティナの冬は本格的になってくる。まだ北のセレナーデ地方よりは幾分かマシらしいが、カノンは冬が一番嫌いだ。

「もうすぐで雪の季節だなー。真冬になったらクウヤの家に遊びに行こうな」

「うん！」

「あそこは……ああ、クウヤはシンフォニア島に住んで居るんだけど、いつも春みたいにポカポカしてるんだよ。多少の気温の変化はあるみたいだけど、ここよりはマシだよ」

「そうだね。でも僕冬も好きだよ」

「えー、そうなの？ おれは嫌いだよ」

「なんで？」

「んー…そりゃ寒いからだよ。でも夏も嫌いだ」

「暑いから？」

「当たり前じゃん」

「極端に寒がりですわり。どこにでも必ずこういう人はいる。」

「じゃあ聞くけどよ、シオンはなんで冬が好きなんだ？」

「そりゃクリスマスがあるからに決まってるよ！」

プレゼントが貰えるだけで無条件に冬が好き。こっぴつ子も、どこにでも必ずいる。

2人は繋いだ手を大げさにぶんぶん振り回しながら帰り道を歩く。

シオンは早足で、カノンは少しゆっくりめに。

「あ、そうだ。姉さんに聞きたいことがあるんだけど」

「ん？ なんだよ」

シオンは躊躇いつつも、しっかりと姉の目を見つめながら問うた。

「ユリーさんとは、いつ、何処で会ったの？」

「……おれが12歳くらいの時に、師匠が新しい部下だって連れてきたんだよ」

今度は、微塵の躊躇いなど無く、しっかりとした口調で聞いてくる。

「本当に？」

「本当に」

「もっと前：たとえば、姉さんが話してくれた、昔のころとか……」

「シオン」

いつもよりも、すこし低い声がシオンの名を呼ぶ。まるで続きを制止するかのよう。

「シオン。前にも言ったと思うけど、ユリウスとユリーさんは違う。全然別の人なんだ。たまたま名前とあだ名が似ていただけだよ」

「姉さんは本気でそう言ってるの？」

「ああ本気さ。だってそれが真実なんだから。お前はユリーさん……ユリー・バーガンデイが、ユリウス・シュトラスかもしれないって思ってるんだろ？ それは絶対に違うよ」

「どうしてそう言い切れるの？」

カノンがいつものカノンでないように、シオンも、いつもと違って引き下がらなかった。これは意地だった。

「この前も言った。だけど何度でも言ってるよ。ユリウスは、お

れの家族だった人はもう居ない。あの日：真つ青な空だけのあの日に、あの子は死んだんだ」

シオンはそれ以上何も言わなかった。カノンも。

家に着けば、きつとまたさつきまでのように普通に戻れる。けどいまだけは、どうも気まずかった。シオンは隣をちらりと見て、胸が痛んだ。

彼は、初めて見たのだ。強く気高く、そして誰よりも優しい、たったひとりの自分の家族である姉の、

姉の涙を、初めて目の当たりにしてしまったから。

58・裏町カプリッチオ #12「後日談」(後書き)

こんなはずじゃ無かったのに。

間奏曲 捌曲目「偽ることの優しさ」

誰がこの子供に、偽りを見破る方法を教えたのですか？  
或いは、真実を見つける方法を。

誰もこの子供に、偽りの意味を教えなかったのですか？  
或いは、真実が残酷だということ。

誰もこの子供に、答えの出し方を教えなかったのです。

11月も終わりに近付いた今日、奴の弟が尋ねてきた。

「よう。久しぶりだなシオン。あいつは元気か？」

『あいつ』が誰だか一瞬分からなかったようだが、すぐに思いついたようで、答えてくれた。俺が『あいつ』だなんて親しく呼ぶ相手はそういないし、何よりこの子の頭の中は常にその人物がいるのだから。

「姉さんのこと？ ああ、うん。いつも通りだよ。今日も依頼が来て外に出てるよ」

シオンは何時になく大人しく、よく見ると疲れているような表情にさえ見えた。まあ墓地で生き生きした表情をされても微妙なんだけど。幽霊である俺の方がまだ元気にも見えてしまう。

「それよりジンは元気そうだね。幽霊のくせに」

「幽霊だから元気なんだよ。何やっても疲れないし、寝なくても食べなくても良いし」

「……なんかいいね」

「だからって、なるうと思ってなれるもんじゃないしな。つつか、シオン何かあったのか？ いきなり俺の墓まで来ちゃって」

「ジンなら、何か知ってるかなって思って」

「なんだ？ 悩み事か？」

ん？ と顔を近づけると、シオンの両眼は伏し目がちになった。言おうかどうか迷っているらしい。最後に言葉を発してからしばらくは何も言おうとしなかったが、俺の好奇心が薄れ始めた頃にシオンの口元が僅かに動いた。

「…ジンは」

「俺？」

そしてまた口を紡ぐ。そんなにも言いにくいことなのだろうか。それとも、以前にその話をして失敗でもしたのか。

「ジンは、さ……ユーリさんの、上司だったんだよね」

「おー。そうだけど」

なんとなく続きは分かったけど、分からないフリをした。多分、自分でもその質問に答えるのが嫌だったからだ。続きはきくと、真実。

「ユーリさんは、昔、姉さんの家族だったよね？」

疑問形の形式を取ってはいるが、それは明らかに確信じみたものだった。答えを聞いているのではない。自分の答えを肯定して欲しい。確固たる確信が欲しいのだ、この聡い子供は。

「……シオン、それは一体どういう意味だ？」

「そのまんまだよ。ジンも本当は分かっているんでしょう？ たった2日間だけどなんとなく分かる。絶対にそうなんだ。でも姉さんもユーリさんも、僕に嘘を吐く。ジン、あの人はユリウスだよね？ そんなんでしょ？」

「ユリウス、なあ……」

「ねえ、教えてよ。僕は、何も知らない。知らないんだ」

その表情は俺に『何故嘘をついているの？』と詰問していた。俺はその視線から逃れるように一つ後ろの臺へ腰掛けた。

ああ、本当にな。何故みんな嘘を吐くんだらうな。俺が一番知りたいよ。でもそれはあの子達が決めたことなんだ。ユーリがそう言



うのなら、彼はユリウスではないのだし、カノンが違つというのなら、やっぱり彼はユリウスじゃないのだ。これは俺が決めて良いことじゃない。

選択肢は二択。この聡い子供に真実を言うか、彼女達のように嘘を突き通すか。

答えるべきか？

真実をこの子に教えるべきか？

答えて良いのか？

真実をこの子は知るべきか？

答えるのか？

どれが嘘でどれが真実かをこの子は知りたがっている。なら俺は答えるべきか。

いや。それは駄目だ。

傾いていた俺の思考に、制止がかかった。あの真つ直ぐな声を出したからだ。

『オレはユーリ・バーガンディです。今までも、これからも。』

だから、貴方もこのことは忘れてください』

それは、もう随分昔にした約束。そうだ。俺は何も知らない。この子の答えになるようなことは何も知らないんだ。だから答えなくて言い。今は、まだ。

「さあな。俺はお前の答えになるようなものは知らない」

「……みんな、嘘を吐くんだね……」

シオンは哀しそうに顔を伏せた。

「大人になるとな、みんな本当のことは言わないんだ。いつか分かるよ」

「分かりたくないよ。それが大人なら、僕は大人にはならない」

「ずっと子供か？」

「ずっと。それが、本当のことをいう大人になる」

「なれるといいな。でも、覚えておけよ。ほとんどの人は、嘘を吐くんだ」

言い切ってしまうと、シオンはその表情をさらに哀しそうにさせた。

「なんで、嘘をつくのかなあ。姉さんは、ユリウスのことが本当に大切だったんでしょう？　なら、今すぐにも本当のことを言うべきだよ」

「本当のことが……真実が全てにおいて良いことであるとは限らないんだよ」

納得いかないらしい。子供は純粹だが、それゆえに頑固だ。

「どうして？　嘘を吐くのは良くないよ。それに2人ともきつと会いたがっているんだ。なら本当のことを言った方がいいよ！」

「もしかしたら、シオンの言うとおりかも知れないな。でも、その2人が会うことを怖がっていたらどうする？　お互いに、何年も違う環境に居て、あのころとはもう全然違っても知らない。それが恐ろしくて嘘を吐いているのならどうするんだ。嘘は、悪いことだけど、真実よりは優しいんだよ」

「……僕は、姉さんの泣くところなんか見たくないよ。だけど、姉さんには幸せになって欲しいんだ。僕の大好きな人だから」

「じゃあ、それでいいじゃないか。別に最高の幸せを用意してあげなくってもいい。お前が少しずつカノンを幸せにしてやってくれ」

「僕？」

「そう。お前しかいないんだ。全部を知って、あのこを傍で見守ってやれるのは」

「僕……」

なかなか合わなかった視線がかち合った。シオンは、もう迷っていないようだ。誰かに似た、真っ直ぐな目をしているから。

「僕がジンの代わりに頑張るよ」

それだけを言うと、シオンは元来た道を帰っていった。来たときよりは、足取りは軽かった。一応の結論はでたのだ。彼が本当にしたいことは、真実を知ることではなく、彼の姉を幸せにすること。俺はここから何も出来ないし、話せないし、会うことも出来ないから相変わらず見守るだけ。それで満足だし、これからもきつとそう。何かあればシオンが教えてくれる。

俺は、本当のことを言うとシオンの意見に賛成だった。カノンは薄々勘づいているようだし、ユーリだっていつまでも隠しきれるとは言い切れないんだ。だからお互いに真実を見ればいいのと思う。だけどそれは本人達の問題なんだ。俺は、特に俺なんかは関わっちゃいけない。

それが辛くて、暫く笑顔になれそうにない。

少年は純粹が故に真実を欲していました。  
或いは確固たる確信を。

少年は嘘を吐くことを嫌悪していました。  
或いは嘘を吐く人を。

少年は真実よりも大切なことに気付きました。  
だけど、いつか、きつと。

間奏曲 捌曲目「偽ることの優しさ」（後書き）

う そばっかり。

それは真実じゃないでしょう。

つき会えたなら、

き つと真実を教えて。

+++++

最近読者の方が「ちっ…この話どこまで続くんだよ」って思ってた  
っしやる気がしてドキドキしています。

そろそろ後編なのでどうぞ付いてきてやってください。

というか、あともう一つくらい長編（アルヴェルト家編とか裏町カ  
ブツリチオ編みたいな）を書こうと思ってるのですが、それは読ん  
でくださる側にとってどうなんでしょう？ 悩みます。

シヨウ・メイ。中華大陸出身者なので、英国ではメイ・シヨウと呼ばれている。裏町をやっている者ならば誰でも一度は聞いたことがあるだろう。

この名前を聞いて、思い浮かぶのはある小さな少女のこと。裏町業者なら誰でも知っている有名な調達屋の名前だ。余談だが、クウヤがこの少女の話を一度だけしている。と言っても名前が出ただけだが。

その少女は今、レスティナに居た。居たというか、迷子だった。

メイは非常に疲れた声で呟いた。

「あいやー…また迷ったネ。この国は道が多すぎるヨ……」

少し片言な英語を話す異国の少女に、街行く人々はすれ違いざまに好奇の目線で見える。が、メイはそんなもの一切合切気にしない。

「ワタシの街は、縦横もつと分かりやすかったのに…これだから異国は好きになれないネ」

メイは、苦虫を噛みつぶしたような顔をして、その頭に可愛らしく編み込まれた2本の三つ編みをぶんぶん振った。レスティナ国東部、ソナチネ地方にあるレソタニア古城がある城下町で、かの有名な調達屋は道に迷っていた。

「もー！ 街外れの便利屋は何処にある力！？ ……諦めて帰る

力…いや、駄目ネ。ここで帰っちゃ負けになるヨ」

一体何に負けると言うのか。メイは噴水広場にある白いベンチによっこいしょ、と腰掛けて一息ついた。

ぐしゃり

「…？ 何か踏みつぶしてしまった力…？」

慌てて腰を上げると、何かのチラシの様なモノがくしゃくしゃに

なっていた。メイは慣れた様子で、英語でかかれたチラシを読み上げた。

「『ちよつとした留守番代行から、感情に任せて思わず殺つちやつた事件の証拠隠滅まで 貴方のご依頼お受けします。街外れの便利屋、カノン・ソリティア。料金はその都度変更有り 』……ふん。やっぱり日頃の行いが良いと神様は見てくれてるネ。ご丁寧に地図まで付いてるヨ」

にんまり笑ってメイは走り出した。

例の城下町の外れ、小さな丘の小さな家ではソリティア姉弟が少し遅めの朝ご飯を取っているところだった。日曜日恒例の寝坊だ。

飽きてくるくせに結局は食べてしまう毎度お馴染みのコーンフレークを頬張りながら、シオンが一生懸命喋っていた。

「でね、ルカは春から3年生だから、学年章の色が赤色になるんだって」

「へえー。確か、そいつって国立アロディナ学院の初等部だったよな。お前と同じ歳か」

「そうだよ。でね、ルカがね、お前は学校に行かないのかって聞いてきたから、行かないって言ったら、ケンカになったんだ」

「なんで？」

「ルカは今度からもっと勉強するから、もう一緒に遊べないんだって。だから僕と一緒に学校に行きたかったんだって」

「うーん……。行かせてやりたいけど、さすがにアロディナはちよつと……あそこは金持ちが行くところだしなあ」

「だよー」

「……………？」

「どしたのさ、姉さん」

「おい、シオン……しゃがみ込めっ……！」

「え?!」

シオンが言うとおりにしゃがみ込んだと同時に、ソレは飛び込んできた。

「うおるあああああああつ!! 覚悟おおおお!!」

「……はっ、甘いな!」

「!」

跳び蹴りのポーズのまま、メイはカノンの一歩手前で一切の動きを止められた。

カノンはと言うと、口にスプーンを銜えたまま自分のコーンフレイクを右手に、牛乳瓶を左手に持って椅子の上に片足で立っていた。もう片方の足だけで、メイの蹴りをしっかり止めていたのだ。

「……卑怯ヨ。丸腰相手にそんな強力な武器は無いネ」

「どっちがだよ。不意打ちは十分卑怯だぜ?」

スプーンを銜えたままなので喋りにくそうだ。もちろんカノンは武器なんか持っていない。左手に持った牛乳瓶をもう少しで零れるか零れないかの境目を保って、メイの頭上に手を伸ばしているだけだ。

「動くなよ? 牛乳は後で臭いんだぜー」

「……参ったヨ。相変わらずネ、カノンちゃん」

「お前もな」

そう言っつて膠着状態が解けて、2人はお互いに笑いあつた。なるほど、2人の挨拶は毎回こんな感じらしい。いきなりの襲撃にシオンだけがびびって泣きそうになっていた。

\*\*\*\*\*

「はあー。生き返るネ。やっぱりお茶が一番ヨ」

「ずずー、と遠慮無く紅茶をすするメイを前に、シオンは姉に問いかけた。

「姉さん。この奇襲犯は誰なの？」

「おれの友達のシヨウ・メイ。こっちの国と違って名字が前で名前が後ろだよ。中華大陸に店を構えている調達屋」

「どうも。ワタシのことはメイって呼んでネ。カノンちゃん、この子は誰ヨ？」

「マイブラザー」

ぶっ！ と小気味よい音を立ててメイは紅茶を吐き出した。なんとも分かりやすい驚き方だ。

「弟が出来たカ！？ 驚き桃の木びっくりヨ。名前は何て言うカ？」  
「シオンだよ。姉さんに付けてもらったんだ。もうすぐで9歳になるんだ」

「そうカ。よろしくネ、シオンくん」

「うん、よろしく！ メイ」

数分足らずだったが、お互いに打ち解けてきた辺りで、カノンが切り出した。

「で？ なんでメイはこんな所に居るんだよ」

「別に用は無いヨ。最近忙しくて全然会ってなかったからネ、どないしてまんねんあの子はー思って、仕事のついでに寄ってみただけヨ。カノンちゃんが元気そうで何よりネ」

「どーも」

「メイのやってる『調達屋』ってどんな仕事なの？」

シオンの素朴な疑問に、メイはすくつと立ち上がって（その時の目はもの凄くキラキラに輝いていた）ずずいと身を乗り出した。



「聞きたいカ!? ワタシたち調達屋の素晴らしき仕事ぶり!」「別にいいよ」

素っ気ないカノンの対応にもメイのテンションは落ちることなく、そのノリに付いていけないシオンは戸惑いながらも、

「え? あ、はい。聞きたいです」

腰は引け気味に、思わず敬語だった。

「そーかそーか! 鼻の穴かっばじってよく聞くがよろし!」「耳の穴だろ」

冴え渡るツツコミもこの中華娘の前では只の音だ。メイは胸を張って早口でまくし立てた。

「調達屋ってというのは、依頼主に代わって足りないモノを取りそろえたり、欲しいモノを手に入れたりする仕事のことヨ! ワタシに調達出来ないモノは無いから、何かあったらいつでも言ってネ。お友達割引で優待するヨ!」

「あ、うん」

ちよっと…というかかなり引いているシオンに代わってカノンが話しかける。メイは仕事に人一倍の誇りを持っているので、仕事について語らせると厄介だ。

「そっぴやさ、なんの仕事のついでに寄ったんだよ?」

「ああ、定期調達の日だったからからヨ。明日で12月に入るでしょ」

「定期調達?」

「そうネ。月の初めには毎月情報屋の食料1ヶ月分をお届けするのヨ。あの子は引きこもりだからネ」

「あー…フィンのね…。あいつも相変わらず不健康だな」

「仕方ないよ。毎日毎日情報を扱って、唯一の話相手がカラスだけじゃ、誰だって病んでくるヨ。ワタシみたいにお外を駆け回るお仕事にすれば良かったのにネ」

どうやら情報屋フィンは不健康な奴らしい。2人の会話からシオンはぼさぼさ頭のもっさい男を想像した。そんな人に自分の情報を

掴まれるのは少し嫌だった。

「じゃ、ワタシそろそろ行くヨ」

「もう？ もっとゆっくりしていけよ」

「いんや。カノンちゃんの顔と弟の話を聞いて満足ヨ。それに情報屋が待つてるからネ」

「そっか……」

2人の話の途中で電話の呼び出し鈴が鳴り響いた。

「……つとごめん。ちよつと待ってて」

「はいな」

慌てて電話の方へ走っていくカノンを見て、メイはシオンに話しかけた。

「カノンは良いお姉さんカ？」

「すつとかわいい人だよ」

「良かったネ。本当のこと言うと、キミのことは情報屋から聞いていたヨ」

「やっぱり。驚き方がわざとらしかったもんね」

「バレてたカ……聞くつもりは無かったけど、キミの“本当の名前”も知ってるヨ。ロビン・オーラリーだよネ」

「そっだよ。でもその名前は捨てたんだ」

「それで良かったんじゃない？ キミは『シオン』の方が似合ってるヨ。一つアドバイスしておくけどネ、もう少し子供らしくしたらどうか？ なんだか見ていて息が詰まるヨ。人生は楽しんでなんぼヨ？」

「ありがとう。頑張ってみるよ」

2人とも、視線を合わせずに会話した。秘密の会話こそ、相手の目を見てはいけない。相手のペースに飲み込まれないようにしなければ、いけないことまで喋ってしまいそうになる。

丁度会話が終わった時点で、カノンが戻ってきた。心なしか慌てている。

「悪い、メイ。ちょっと付き合ってくれない？」

「どうしたか？」「何かあったの？」

「今ユーリさんから電話があつてさ。どでかい銃を持ってとある小学校に立てこもったイカレ野郎がいるらしい。目的は金」

「付き合つヨ」

合点だ、と両手をぐーにするメイの隣で、シオンが肝心な部分を探ねた。

「その、とある小学校って？」

「……お金持ち学校。国立アロディナ学院初等部だったり……」

59. I will procure it. Any dangerous

I will procure it. Any dangerous  
us articles and any troubles  
some people.

サブタイトル直訳：ワタシが調達してみせるヨ。どんな危険物も、  
どんな厄介者もネ。

\*\*\*\*\*

いろいろと励ましのメッセージを送って下さってありがとうございます。  
ます。長い回でも良いよ！ と言ってくくださる方がいて本当に嬉し  
かったです。

でも、早く結末を知りたいという方もいらっしゃるので、主人公  
以外のサブキャラ達（レオラはもうほとんど書いたかな…後はクウ  
ヤのバイト時代と朝葉香のこととか…）の過去話の更新はもう少し  
考えてみようかと思えます。何かご意見がありましたらどうぞ遠慮  
無く送って下さい。

国立アロディナ学院初等部門前では事件見たさの野次馬と、その騒動を押さえる憲兵と、対策を考える警察軍と、人質にされた子供達の親が蟻の群のようにわらわらと居た。

その中で、悪態を付く青年が一人。茶色の髪を右手でガシガシ動かしながら顔を顰めていた。

「あーくそ。カノンは何やってんだよ。さつさと来てくれないと……」レスティナ国警察軍、現時点での指揮官であるユーリ・バーガンデイが、誰に制された訳でも無いのに、途中で己の言葉を切った。彼の視線の向こうにはチャイナ服を見に纏った少女と、自分のよく見知った姉弟がわらわら群れていた人達を今にも轢き殺しそうな（3人は徒歩だったが、その威力を例えるのなら車とほぼ同等だったの）具合で立っていた。

これはこちらから迎えに行かねばなるまい。被害は最小限に、が警察軍のモットーだ。ユーリは人混みを縫うようにしてカノン達の方へと走っていった。

「こりやまた犯人さん達は派手に暴れたネ。これだから異国は怖いヨ」

「やっぱり母国が一番ネー、と他人事のように話すメイの隣でシオンが声を張り上げた。

「あ、ユーリさんだー。姉さん、あっちあっち！」

「ホントだ。あはは走ってる走ってる。ユーリさん！来てやったよー！」

ざわつく周りの音に負けじと声を張り上げると、今までよりかなり慌ててユーリがやってきた。

「ちょ、騒ぐなつて！　こんだけ騒ぎが大きくなつて、只でさえ犯人の気が立つてるんだから」

「はいはい、分かりましたー。で？　どいつをブチ抜いたら良いの？」

「あくまで人命優先！！　銃とかナイフとかその他諸々は使用禁止だからな！」

「ええー？」

それは困った。カノンは犯人の脳天をブチ抜く為にここへ来たので、武器しか用意していない。そんな安全重視の作戦なんてこれっぽっちも考えてきていない。

「この学校には、超金持ちと超成金と超お偉いさんのご息がいっぱい通つてるんだよ。だから上からの命令で武器の使用は一切禁止なんだ」

「プロが使つても？」

「プロでも。掠っただけで大問題だ」

「大丈夫だいじょーぶ。おれは上手いから」

「だーめーです。頼むから話し合いとか交渉とか、そういう方向に持つていってくれないか？　身代金ならどれだけ要求されても困ることはないだろう」

「じゃあユーリさん達でやれば良いじゃん。おれ、必要無いじゃん」

「それがな、犯人グループからの要求で、女を一人交渉役にしろつていうんだ。万が一にでも暴れられちゃあ困るからだろうな。で、お前を呼んだわけだ」

なるほど、と一応相づちを打つが、実は全く納得していない。暴れられないのはゴメンだ。悪いのは向こうなのに、こっちが下手に出なければならぬのが嫌なのだ。

不服そうなカノンに、ユーリが尋ねる。

「……できるか？」

「あつはつは。ユーリさん、おれを誰だと思つてんの？　そんなこ

と出来るわけねーだろこの野郎」

「頼むからやつてくれよー！」

必死で頼んでくるユーリにくるりと背を向け、シオンに一言放つ。  
「うっし。シオン帰るぞ」

「帰るの?! ちょ、駄目だよ! だってここにはルカも通ってるんだよ!? 僕も手伝うから何とかしてよ姉さん!」

「そうヨ。困ってる人見捨てるのは良くない。この軍人さんかなり困ってるネ。カノンちゃん、ワタシも手伝うヨ」

メイもありったけの正義感をフル稼働して言う。困っている人を見かけたら見捨てられないのだろう。もしくは、報酬を狙っているかのどちらかだ。

「なっ! カノン、この通り! 今度ドルチェ・デ・ノエルのモンブランとベリータルトとカスタードエクレアとポテトアップルパイと季節の一品おごるから!」

歩き出していたカノンの動きがぴたりと止まる。そしてそのまま回れ右をして、案の定戻ってきた。凄く笑顔だ。

「……まあ、人の命が掛かってるしな! 決してケーキに釣られた訳じゃないからな!」

まんまと釣られている。

「軍人さん、ワタシも手伝うから何か欲しいヨ!」

「分かった分かった。何が食いたい?」

あくまでも報酬は食べ物だ。

「海老焼売と海老餃子が食べたいヨ! もし良かったら肉まんもして欲しいネ!」

そしてまんまと釣られる裏町業者がここにいる。

「ユーリさん。こんな人達に任せて大丈夫なの?」

「大丈夫。こいつらがやるってことは俺の責任にならないし!」

シオンは心の中で、ちよつとだけ友達にお別れを呟いた。この調子では無事に済みそうにない。

「よーっし！ いっちょやるか！」

「そうネ。今日は張り切っちゃうヨ」

とは言いつつも、普段思いつきり好き勝手に暴れて依頼をこなしているカノンに、大人しく犯人の要求を飲む、なんて防衛的な依頼はやりにくいのも事実だ。

「んー、どうすっかなあ…」

「どうもしないヨ。この軍人さんにバレないように犯人さん達を殺つちゃって、その後で人質解放すれば良いだけの話ネ。至って簡単ヨ」

その意見は心惹かれるが、しばらく別の方法を考える。流石におぼっちゃま・お嬢様の目の前でそんなグロテスクなことをすればヤバイだろう。

しばらくして、カノンは両手をぽんと鳴らした。

「そーだ、メイ。お前におれから依頼だ。報酬は桃まん5つ…いや、7つ」

「合点承知。何が足りない力？ 銃、それとも刃物力？ なんなら爆弾だつて用意するヨ」

「お願いだから、人命優先で！！」

シオンが割ってはいる。この2人は暴走しかねない。

それを止めるはずのユーリも、もう自棄になつている。というか、さぼりだ。

しかし、予想とは裏腹にカノンは否定の言葉を発した。

「いや。足りないモノはそんなモノじゃないんだ。人間100人前後。この建物から無事傷一つ付けることなく調達…できるか？」

「出来るヨ。出来なくともやってみせるネ。誰かが何かを欲しがる。それを必ず取りそろえる。雨が降ろうと風が吹こうと、ワタシ達を止められるモノなんて無いヨ。これがワタシ達、調達屋の生き様ネ。



心配無用。必ず無傷で運び届けるヨ」

ふふん、と満足げに笑う。ここまで言うのだ。必ずやってくれるだろう。

「じゃあその間姉さんはどうするの？」

シオンの的確な質問に、にんまり笑って答えるカノン。

「その間におれが……まあ、ちょっと犯人共に制裁を加えるってことで」

あくまでも、犯人は捕まえる。

そして人間の調達。つまりは、人質を解放しろということ。

「はいな。了解したヨ」

右手を大きく挙げて、メイは嬉しそうに笑った。調達屋の腕の見せ所だ。

\*\*\*\*\*

4階の教室……この立てこもり事件の本拠地にされているこの部屋から、窓の外を眺めていた男が口を開いた。

「……軍は何て言ってきた？」

アロディナ学院の内部では、犯人グループの一人がリーダーに報告をしていた。

「いまから交渉役の女を一人送る、だそうです。こちらの言うとおりに出てきましたね」

「やはり、要人の跡継ぎがわんさか通っているからな。どうやら予想以上に強請れそうだ」

そしてもう一度窓の外を眺める。下は無数の人間が無計画に蠢いて

いる。勝利は目前だ。

厭らしく口端を上げて笑う男達の後ろ側に、その女は居た。気配に気付いた班員の男がリーダーに合図する。

「ん？ どうした」

「交渉役が着いたようですよ」

後ろを振り向けば、愛らしい異国の少女が、両手を上げ、降伏のポーズで立っていた。

「ニーハオ。話し合いに来たヨ」

片言の英語がいささか頼りないが、金の数を伝えるだけなら不安は無い。これで我々は巨万の富を得ると共に、姿を眩まして終わるだ。

こつこつと靴音を鳴らして、男達2人は少女に近付いた。

「そうか。では、我々の要求を軍に伝えてもら、がはっ！」

「リーダー?! 一体だれ…」

一瞬の出来事だった。2人とも、次に起きたときに一体何があったのか理解できないだろう。

交渉役の少女は、そこから一步も動いていない。動けるはずがない。犯人達が見ている手前で妙な動きが出来るはずもない。だから確実に言えるのは少女は何もしていないということ。だが、犯人グループの中樞達は地に伏した。眠るような気絶だった。

2人の人間が居て、2人共が同じ方向を向く。となると、後ろはガラ空きという訳だ。

3人しか居なかったはずの教室に、3人以外の声がする。ソプラノと言うには少し低い、アルトと言うには高い感じの、不敵な声が。「んじゃ、おれは他の奴らをとっちめてくるからよ。後は予定通りに頼むぜ」

「あいやー。了解したヨ」

パタパタと駆けていく調達屋を見送りながら、大きな窓からの侵入者は両手をポキポキ鳴らす。

「さーて。やりますか!」

カノンは楽しそうに笑った。

「あそこ、4階だぞ…」

「姉さんも無茶するなあ」

取り残された軍人と弟だけが、この学院の内部で起こっている騒ぎを知っている。

\*\*\*\*\*

その後のことは話す必要も無いだろう。『鳴神』の異名を持つ便利屋の、眼にも止まらぬ俊敏の攻撃に付いていける者など居るはずもなく、犯人達は余すところ無く捕まった。

もちろん人質はみな無事だった。調達屋が全て運び出したのだ。結果、この2人の手柄と言うことで事件は幕を閉じた。後でユーリが裏町のことを良く思っていない上司に嫌味とか嫌味とか、はたまた嫌味とか言われてうんざりしたり、約束のケーキと中華まんを奢って当分の間金穴だったりしたが、それは大したことではない。いつものことだ。

ただ、一つだけ。大きな事件があった。アロディナ学院の理事長がカノン達にお礼をしたいと申し出てきたのだ。

メイは別に良いと言うし、カノンもケーキさえ食べられればそれ

で良かったのだが、向こうはどうしてもお礼がしたいという。  
だから、今度の春からシオンをこの学院の生徒にもらった。ル  
カと同じ、3年生に。

今回の収穫は、それくらいだろう。

60・You are very confident, are not

You are very confident, are not  
t you? Then, please procure me  
happiness.

意識：お前はよっぽど自信があるみたいだな？ なら、おれに幸せ  
を調達してくれよ。

今日は天気が良いから、愛する弟に少し昔話を聞かせてあげようと思う。

おれとユーリさんが初めて出会った時の話。カノン・ソリティアと、ユーリ・バーガンディが出会った日の話を。

その時、おれは12歳。あの人は16歳で、今日みたいに冬なのにそれほど寒くもない日だった。

\*\*\*\*\*

「ええー！？」

『うるせっ！ 破れた、絶対に鼓膜破れた！』

「そんなの聞いてない」

古い黒電話の受話器を、器用に肩で密着させながら幼き日のカノンは言った。電話の相手は仕事中の師匠だ。

『いやいやいや、昨日言ったじゃん。俺、確実に言ったじゃん』

「どっちかって言うと、聞き流してた」

ジュツとフライパンの中で音がする。電話をしながら、夕飯の支度をしているのだ。

今日は主に野菜を使ったメニューの様で、まな板の上には色とりどりの野菜……の、成れの果てがゴロゴロしていた。無慈悲かつ無惨な残虐行為、もとい切り口に、イギリスを震撼させた切り裂きジャックですら震え上がるだろう。

『おい、ちょっと待て。今、何かを焼いている音がしたけど聞き間違いだよな？ 俺の幻聴だよな？ まさか、夕飯の支度…』

「してるよ」

『止める！ 今すぐにだ！ 材料が手遅れになる前に…！』

「手遅れって言うのは、原型留めなくらいに切り刻むこと？ それとも原型留めなくらいに焦がすこと？」

『無論、両方だ』

「ご愁傷様でした」

受話器の向こうでカ一杯溜息を付くのが聞こえた。

『…今度、一緒に料理の修業もしような…ああ、なんの話だった？ そうそう。今日はいつものメンバーと新しく部下になったユーリを連れて帰るからなって話だったな』

「何で見知らぬ他人と夕飯食べなきゃならないんだよ」

『だから昨日も言ったけど、今日はメトロポリス中央街でお偉いさんの集まりがあつて、家の人が出払うから、なんならみんなで一緒に夕飯食おうぜってことになったんだよ』

「嫌だ。バーガンディみたいな血統書付きとなんて飯食えないね」

『なんで反抗するんだよ！。あれか？ 反抗期か？ まっ、今日は俺早く帰るし、みんなが来るのは6時前だし、夕飯の問題は無いだろっ』

「えー、やっぱり来るのかよ。あたしの意見は無視かよ」

『ユーリは良い奴だぜ？ 名家つてことをこれっぽっちも鼻に掛けないし、気取らないし。お前と歳が近いから案外仲良くなるんじゃないの？』

「そうかあ？」

『そうだって。じゃ、4時過ぎには帰るから！ またな』

半強制的に電話は切られ、カノンは溜息を吐いてフライパンを流し台に置いた。また失敗だ。

まな板の上の可哀想な野菜達はポウルの中に入れておいた。師匠ならここから一品作るくらいじゃないだろう。カノンは草臥れたソ

ファーにボスツと倒れ込み、眼を瞑った。

「ユーリ…バーガンディ…何か」

別に嫌な訳じゃない。というか、それ以前に会ったことも無い人だ。時々、師匠から話を聞くくらいの人で。聞く限りでは良い人みたいだし、その年で軍に所属するのだから腕は立つのだろう。

だけど。

「ユリウス……」

だけど、会いたくないのは一応理由があるわけで。なんとなく、師匠の話聞いていて思ったただけなのだけど。

彼はユリウスではないのだろうか？

根拠があるわけでは無い。むしろ、確実にこうだ、と言える自信が無い。顔はうっすらとしか覚えていないし、声だってもう随分と変わってしまっただろう。

第一、あの子は死んだのだ。死刑になったのだ。色々な奇跡が偶然に重なって、万が一、億が一のことが起こらない限り、彼は死んだことになっているのだ。

まだ、その事実を認めていない自分が、ここに居るのだけど。

もしも。もしも色々な偶然や奇跡や運が重なって、今日師匠の連れてくる人が、もしもユリウスだったならば、あたしは一体どんな顔をすればいいのだろうか。何事も無かったかのように、只笑えばいいのか、それとも。

「……もしもの話だけどね」

意味の無い独り言を呟いて、起きあがった。

そんな偶然が起こるわけないだろ。馬鹿馬鹿しい。どうやって死刑から逃れられると言うんだ。都合の良い想像は止めましょう。

ふう、と息を吐こうとして、止まった。あたし以外の人間が目の前に居た。

「何が『もしも』なの？」

思考が停止する。見慣れた人物が、そこに居た。というか目の前



に居た。

「しっ、師匠!?!」

「師匠ですけど? 取りあえず、ただいま」

心臓がばくばく鳴っていた。かなり吃驚した。時計を見ると4時を回っている。一体どれだけ自分の世界に居たんだろう? 少し危ない人じゃないか。

師匠は、くいつと親指を後ろの台所に向けてあたしに言い放った。

「あのさ。あそこに放置プレイさせてある可哀想な野菜は、俺が使っても良いわけ?」

「あ、うん。むしろアレから一品作って欲しいんだけど……」

「……明日、俺非番だからさ、ちよっと一緒に料理をしよう。つつか、しろ。このままじゃお前嫁に行けないぞ」

最近の師匠はまるで父親みたいだ。

「大丈夫、その辺は問題ない。婿を貰うから」

「そういう問題か?」

別に何かを期待していた訳じゃない。なんとなく、の話だ。なんとなくあの子は死んでいない気がするのだ。

「よし。なんとかみんなが来るまでに間に合ったな」

師匠がどうやってあの野菜達を甦らせたのか、全く見事な夕飯を目の前にして一息吐いた。あたしがぐちゃぐちゃにしまった野菜は、色鮮やかで見事な料理に生まれ変わっていた。

「今日は、ユーリ・バーガンディさんの他に誰が来るの? いつもメンバーってことはアルマさんと、メルニカさんと、ワーブさんと」

「あとタイトも来るよ」

「ああ、あのおっさんか」「本人の前で言うなよ。老け顔なの気にしてるんだから」

あたしはなるべく平静を装って師匠と話をした。

もうすぐであたしは納得する。納得できる。今日ユーリ・バーガンディに会って、ああなんだ全然違う人じゃんって理解して、やっぱりあの子はあの時に死んじゃったんだなーって。それであたしはやっと納得できる。

ただそれだけのこと。

呼び出し鈴がなった。

「っと、来たか。はいはい、今開けるー！」

ドアの向こうでは師匠の部下達が、お喋りして早くドアが開くことを待っている。その中に、新しい部下の人もいる。あたしは師匠と一緒に玄関の方へ走っていた。

師匠が、鍵を、開ける。

「こんばんわー！」「あれ、カノンちゃん？ また背が伸びたんじやない？」「ソリティア大尉、お邪魔しまーす」「カノンちゃんだー！ 久しぶりー！」

見慣れた顔の中に、見慣れない顔が混じっていた。あたしの視線に気付いて、メルニカさんが紹介してくれた。

「あつ、カノンちゃんは初めて会うよね。こいつ新しく入ってきた新入りさーん。ユーリ・バーガンディって言うのよ。バーガンディくん、この子はカノンちゃん。ジンスさんの娘っていうか、妹っていうか、弟子っていうか……タイトさん、なんて説明すれば良いと思う？」

メルニカさんの言葉が、途中から小さくなっていった。あたしは大きく目を見開いたまま、目の前の人から視線を外せなかった。

ユリウスだ。

昔とは随分と違ってしまっただけね、この人はユリウスだ。根拠とか証拠とかそんなものは無い。だけど、間違っていない。この世界の一体誰が、家族を間違うというの？ 一番大切だった家族を。何がどうなってるか、生きているのかは知らない。何故ここにいるのかも知らない。名前が変わっている訳も、バーガンディ家にいる訳も何も知らない。

だけど、ユリウスだ。

生きていた。

「あ……えつと……」

なんて言えば良いのか分からなかった。元気だった？ ごめんね？ あたしが何も言えずに固まっていると、メルニカさんがユリウスを小突いた。

「こら、何か言いなさいよ。カノンちゃんも困ってるじゃない」  
最初に言う言葉はやっぱり、『久しぶり』だろう。あたしがやつと口を動かそうとしたら、ユリウスの方から声を掛けてきた。

残酷な、挨拶を。

「初めまして。ユーリ・バーガンディです」

ソレを聞いたとき、泣きそうだった。

『初めまして』

じゃあ、そう言うことで良いんだね。貴方はユリウスじゃない。ユーリなんだね。あたしと貴方は今日が初対面で、昔とか、貧民街とか、そんなこと全然関係なくって。

ユリウスは、もうお終いにするんだね。ユリウスを捨てて、生きていくって決めたんだ。きっとそのほうが良いよ。その方が、幸せ

になれるよ。貴方には、幸せになる権利がある。  
だから、あたしも答える。

「初めまして。カノン・ソリティアです。カノンって呼んでください」

だからユリウスは、もう居ないんだ。

\*\*\*\*\*

それが、4年前の話。おれとユーリさんが初めて会ったときのこと。

話し終えると、シオンは何も言わなかった。何も言わずに、立ち上がって、自分の部屋に戻った。おれは一人ソファアの上で胡座をかいた。

「……話さなきゃ良かったかなー……」

嘘を吐くのは、それなりの覚悟があるからだ。だから、ユーリさ

んもユーリさんなりに考え抜いて結論だったに違いない。

おれは今のままで十分だし、これ以上欲張るつもりもない。時々電話があつて、時々話をして。それだけで十分じゃない。偽りの姿のままは、お互いどうしても苦しいけれど、それで良いじゃない。

2階が上がったはずのシオンが、階段の手すり越しにおれを見ていた。

「…え、と…なんでしよう?」

じつと見つめてくる。責める訳じゃない、ただ見てるだけの視線。

「姉さん」

「はい?」

「僕ね、貴女に一つだけ嘘を吐いているんだ。僕、本当は名前があつた。だけどその名前のままじゃ、僕は今までのことをやり直せないから、貴女に名前があることを黙っていた。僕の本当の名前は『ロビン・オーラリー』っていうんだ。だけど、今までみたいに『シオン』って呼んでね。そっちの名前の方が気に入っているから」

「シオン? なにが、」

「それから。僕は貴女に言っていないことがある。僕のお父さんは強盗犯で、お母さんは娼婦だった。だけど、僕にとってはいい人達だったんだ。結局捨てられちゃったけど。僕が貴女に言っていないのはこれだけ」

「シオン?」

「僕は、貴女にもう嘘を吐かないし、秘密も無い」

そう言つて、階段を下りてきた。

「だから、姉さんも嘘を吐くのに疲れたら僕に言つてね。僕たちは、姉弟なんでしょう?」

「……ありがとな」

おれは、お前さえ居てくれれば大丈夫だよ。家族がいるんだ。大丈夫。

ぎゅっと抱きしめた身体は、拾った頃よりも大きくなっていた。

61. Therefore, that time is a day who

Therefore, that time is a day  
when it met, He, for the first  
time.

直訳：だから、その日が『彼』に出会った最初の日なのです。

BGM：誰かの願いが叶うころ／宇多田ヒカル

唐突だが、裏町業について一度説明しよう。裏町には、ありとあらゆる職業がある。それらを大まかなカテゴリに無理矢理分類するならば、グループは3つ。

まず最初に、全ての裏町業者の過半数が登録を済ませている『裏町斡旋所』。ここは一般（あちら側）の人達と裏町（こちら側）を繋ぐ場所だ。彼らは依頼人に見合った裏町業者を紹介することで報酬を得ている。

次に、メイのように裏町業者を主な相手にして仕事をする『情報屋』『伝言屋』『調達屋』。彼らは裏町と裏町、もしくは裏町と一般を行き来する種だ。

細かく説明すれば、『情報屋』は裏町や一般人から依頼された情報を渡し、『伝言屋』は日々放浪していたり、居場所が掴めない裏町と裏町を繋ぐ電話のような存在で、『調達屋』は裏町または一般人に足りないモノを補充する役目を負っている。

この種であるメリットは、確実に依頼が受けられるということだ。カノン達と違って、一般からの依頼が無い日でも、あちこちに点在する裏町業者から依頼が入るので金に困らない。ただし、重要な役目だけに責任は重い。

そしてその他諸々。代表格は、裏町で最も多いとされる『便利屋』に、長い古い歴史を持つ『代理屋』『忍』といった所だろうか。彼らについては後々に語るとしよう。

さて、長い長い前置きにウンザリしてきた皆さんに朗報。ここからが今回の本題である。

調達屋メイ・シヨウや、伝言屋の大手グループ『ヴォイシーズ』の活躍は皆さんもご存じだろう。彼らの物語もまだほんの上辺だけしかしていないが、まだ“フィン”という名前だけしか出てきてい



ない『情報屋』。今日は彼についてお話ししよう。

レスティナの何処かにある情報屋の家。それが何処に居るのかは誰も知らない。知っているのは幹旋所と調達屋くらいだろう。彼は大抵の連絡をペットであるカラスに任せてある。

その家の、2番目に大きい部屋の隅で、人がうつぶせに倒れていた。ピクリとも動かない。見た感じではまだ十代の少年だ。クウヤと同じくらいの年齢だろうか。まだ義務教育を受けていそうな体躯だ。

倒れている少年の風貌は一言で表すのなら『真っ黒』だった。

少し大きめの黒いコートに、黒い半ズボン。黒いエンジニアブーツを履いている。そのコートに付いているフードを目深に被っていてよく見えないが、髪も眼も漆黒の闇だと聞く。前髪が少し長めでネコのように大きなツリ目が今は閉じられている。

このうつぶせに倒れている彼が、数ある情報屋の中でも最も速く正確で優秀かつ、最も根暗で性悪で謎だらけだと謳われている情報屋　またの呼び名を『全体観測』である。

その情報屋の彼、フィン・クロスフィンガーについて少し話そう。冬生まれの今年15歳、世外れの都合屋と同じ年。山羊座のAB型。身長は平均より低め、体重も平均より軽め。かなりのマイペース。故に、自分のペースを崩されるのが嫌い。

引きこもり気味、というか外に出たがらない。夏より冬が好き、というか暑いのが苦手。

苦手なタイプ、熱血人間。かと言って好きなタイプもない。話し相手は主に連絡・情報収集用に使っているカラス。

見た目、完璧に目つきの悪い大きなツリ目。前髪は常に臉上に掛かっていないと落ち着かない。夜更かしに偏った食生活に狂った生

活リズムの為、不健康。黒いモノを好んで着ている所為か普段から良くない顔色が更に悪く見える。が、本人は露ほど気にしていない。一日の大半を無表情で過ごす。感情の起伏が乏しい、というかあまり表情に出さないため、そう思われやすい。テンションは常に低めで、沸点も低め。最近のお気に入りは真っ黒なダツフルコート。

しかし。しかし、だ。これだけ言っても、彼について詳しくなったとは言えない。彼の情報は一般にも裏町にもごく少量の真実しか流れていない。当たり前だ。情報の流れは彼が操っているのだから。

情報屋、フィンを囲むように様々な資料や本やファイルが散らばっており、カノンの家も大概だが、それよりも酷い有様で、下手すれば少年は生き埋めになりそうな状態だった。それとも、今まさに生き埋めになってしまった場面なのだろうか。フィンは未だにうつぶせのままだった。

狭くはないその部屋中の壁を覆い尽くすように配置されてある本棚の上には、フィンに負けないくらい真っ黒な濡羽色のカラスが羽根を休めていた。カラスは首からシンプルなネームプレートを吊しており、左から『S a s u k e』と丁寧に掘られていた。

倒れていた彼の両眼がふ、となんの脈絡無く開かれた。どうやら眠っていただけらしい。むくりとだるそうに上半身を起こし、キョロキョロと周りを見回す。

「あれ……ボク、なんで第二倉庫にいるんだ……」  
どうやら知らぬ間に寝入ってしまったのか、寝起きで寝ぼけているのか、フィンは頭をふるふると振った。

『おはようございます』

次に喋ったのは、フィンではない。本棚の上にいるカラスだ。カラスが人の言語を話した。

そのことはここでは当たり前のことらしくフィンは、ああそこに

居たのか、と何事も無かったようにカラスに尋ねる。

「ああ、おはようサスケ。いま何時だ」

サスケと呼ばれたカラスが喋る。

『午後1時12分です。フィンには丸一日眠っておいりました』

丁寧な言葉でサスケが喋る。その答えを聞いて、フィンはしまった、という顔をした。

「そうか、もうお昼か……っていうか、ボクは何で寝てたんだ。サスケは知ってるか？」

『その……フィンは、不貞寝をしてました』

気まずそうにサスケは答え、この家で一番大きな部屋　重要書類倉庫へと羽根を飛ばたかせていった。まるで付いてこいと言わんばかりに。

「不貞寝……？　なんでだっけ」

まあいいや、とフィンは呟いて器用に起きあがる。一つも資料達を倒さずにドアまで歩いて、サスケの後を追う。丁度今日は重要書類倉庫（通称、第一倉庫）の情報整理をしようと思っていたのだ。朝の時間を無駄にしまったからには、倍速で動かなければ。

隣の部屋、第一倉庫のドアの前ではサスケが止まっていた。いくら人語を解する鳥でも、大きなドアは開けられない。フィンの邪魔にならぬようにドアから一步離れる。

フィンがゆっくりとドアを開け、部屋へと入る。サスケがその後を追った。

「よし。さっさと整理しよう、と………何これ」

『憶えておりませんか？』

フィンが目の当たりにしたのは、見事に荒らされた第一倉庫。荒らされた、と言うよりはさっきの部屋よりも派手に散らかった、と言った方が妥当かも知れない。

「……いや、思い出した」

思い出して、後悔した。ボクは昨日に溜まりすぎた情報を整理しようとして、いつものように柵の間を縫うように行き来していた。

完璧主義者の自分としては一から掃除がしたかったので、全ての情報を一旦まとめようだなんて無茶なことを考えたのだ。

その時、たまたま置いてあった書類に蹴躓いて、あるうことかこのボクが派手に倒れてしまったのだ。その際に周りの情報達も一緒に巻き込んでしまい、この事態。すっかりやる気を無くしたボクは不貞寝。回想終わり。

「凄い有様だ……」

『全く、何故少しずつつづけようとしなかったのですか。常々言っておりましたように、毎日掃除を怠らなければこんな事態になんて……先代がこの状況を見たら泣きますよ、完全に』

「五月蠅いなー。サスケ、『展開観測』の話はするな。胸くそ悪い」  
『ならば整理は毎日欠かさずして下さい。先代が集めた貴重な情報も混ざっているですよ、全体観測のフィン』

「するなって言ってるのに……はいはい分かりました、整理します」  
素っ気なく返事をして、手当たり次第に書類・ファイルを掴んでゆく。そうしないと歩ける道が出来ないのだ。

やっと本棚達の間を無理なく進める様になった所で、電話の呼び出し鈴が鳴り響いた。

音を聞いたサスケがささず廊下へ消える。電話は第二倉庫と第一倉庫の間にある。フィンは伸びきったコードに届く範囲まで移動して、サスケから電話ごとを受け取った。しかし受話器はまだあげない。

ジリリリリン……じりりりん……

『どうしました？』

なかなか受話器をあげそうにないフィンに向かって尋ねる。

「いや……面倒臭いだけ」

『受話器あげるだけじゃないですか！』

大真面目に面倒臭いと言われても困る。サスケはばさばさ羽根を動かして促す。

『早く電話に出て下さい！ 電話が切れてしまいますよー！』

「だって、人間と話すの面倒だよ……まあいいや」

何がどういいのか見当も付かないが、自己完結して受話器をやつとあげる。こんなに待たせてもまだ呼び出し続けるとは相当根性がある奴だ。

「はいもしもし。こちら情報屋、フィン・クロスフィンガーです」  
多分、最後の方の台詞は相手の怒声によって掻き消されていた。  
受話器の向こうから、これほどないまでに大きな声が聞こえた。

『フィン……ッ！』 一体全体これはどういうことだよ！ 説明！ 説明をしてっていうか、居るんならさっさと電話に出るこの引きこもり……！』

フィンの動きが止まる。

10秒、15秒、20秒。

「あ、なんだ。アンダーグラウンドか」

『気付くの遅っ！』

がくつ、と電話の向こうで呆れるクウヤ・アンダーグラウンドが居た。

「何かあった？ ボク、これから情報整理しなくちゃいけないから忙しいんだけど」

『何か、って大有りだよ！ 差出人は不明だったけれど、どうせ君が送ってきたんでしょ！？ この、』

「ああ、それか。イチゴ大福と“目で楽しむ和菓子冬仕様・職人の選んだ茶葉付き”届いたんだ？ 美味かっただろ、それ。なんでも今話題の、和菓子専門店の看板商品なんだって。雑誌とかにも取り上げられてたけど一日限定100箱。イチゴ大福に至っては限定50個。並んでも買えない人が続出らしいよ。まあボクは違うルートで手に入れたけどね」

『それってもしかして日本の“ドルチェ・デ・ノエル”と名高い“風鈴花山”のこと？ うわー、やった！ 僕、一度で良いからそのお店の和菓子食べてみたかったんだよね！』

「アンダーグラウンドは和菓子に目が無いね。喜んでもらえて何よ

りだよ」

『そうなんだよ、特にイチゴ大福と京菓子が大好きでさー…って違うー！』

どうやらノリつつこみだつたらしい。なんとという高等テク。否定されたフィンが不機嫌そうに聞く。

「じゃあ何？」

『君が送ってきた、もう一つの方！ この真つ白な子猫はどういうこと！？』

「どつって……手紙も入れただろ」

『手紙！？ このメモ用紙を引き千切つたヤツのことか。これのことを言ってるのか。これが手紙？ なら読んでやるよ！』

“ 我が同胞クウヤ・アンダーグラウンド。悪いが、後は頼む”

こんなんで分かるかあああああああ！ お前は修飾語をよう使わんのか！ 何をどう頼むねん！ 肝心な部分が全然説明出来てへんやん！』

「……元気だね。そんなに大声出して疲れない？ というか、僕は一応英語圏の住人なんだよ。和語の、しかも地方特有の方言を使わないでくれるか？ まあそれくらいは聞き取れるから、全然全くこれ以上ないって程問題無いんだけどね」

『…君と話していると…なんか疲れる』

「奇遇だね。僕も同じだ」

そこで、フィンは真つ白な子猫を送ることになった理由を話した。フィンが言うには、その猫は自宅の玄関先にぽいつと捨てられていたらしい。捨てられていたというか、謀つたように置いてあったというか。取りあえず、自分にこの子猫が託されていた。

初めは無視を決め込むつもりだったらしい。だが、一応フィンにも良心という物が存在していたので拾ってみた……は、いいがどうすれば良いか分からない。そこで思い出したのがクウヤ。ハカセと

ノロマとヒデヨシを飼っているから、子猫の扱い方ならお手の物だろうと思ひ、速達。

そこまで聞いて、クウヤが答えた。

『大体は分かった。だけど、僕はもう3匹で手一杯なんだ。悪いけど他を当たってくれる?』

「……何故、和菓子を送ったと思う?」

『え?』

「断れると思わないでね。言っただろ? それ、人気だって」

『ちよ、ちよっと待った! 返品する!』

「もう無理だよ。残念でした。だから手紙に謝っておいただろ?

悪いが後は頼むってね」

『そんなあ……なんで僕が……あーもう! 良いよ! わかったよ!』

くそー、ハカセの時と同じじゃないか』

どうやら、あの大きな白い犬もフィンからの贈り物だったらしい。

迷惑極まりない話だ。

話がまとまったところで、フィンが心を込めてお礼を言った。

「ありがとう、お人好し」

『さようなら、人でなし』

心からのお別れを言って、クウヤは電話を切った。

「つと、ごたごたも片づいたことだし。ちゃっちやと整理しよう」

『そうですね。手伝います』

サスケが細いその両足でファイルを掴んで棚へと積み上げる。こんなに便利な鳥はそうそう居ないだろう。1人と1羽がやっとな片付けに手を付け始めたとき、玄関の呼び出しブザーが鳴った。いきなり訪問客に訝しげに首を傾げる。

『誰でしょう?』

「さあ?」

すると、ドアの向こうから可愛らしい片言が聞こえてきた。

「情報屋ー！ 定期調達にきたヨー、食料山盛り沢山持ってきたヨ  
ー！ 留守カー？ さっさと出るよろしー！」



62.&quot;The dark demon&quot;; and &

”The dark demon” and ”Whole ob  
servation”

意識：『闇鬼』と『全体観測』

「情報屋ー！ 食料いらなカー？ さつさと来ないと、ワタシのか弱い細腕が大量の荷物によって折られてしまうヨ？ あ、今絶対にドアの向こうでぼそつと『どこがだよ、怪物』って言っただろ！ しつかり聞こえたヨ！ ワタシに向けて言ったの聞こえたからネ！ 『いちいち五月蠅いやツ』だと！？ なんだとテメエ！！ おいコラさつさと開ける、この引きこもり！ 開口一番にテメエのモヤシみたいにほっそい両腕折ってやるヨ！」

テンションが低いフィンに相反して、もの凄い大声で呼び続けるメイ。今日は12月1日、定期調達日だ。ちなみに、フィンが頼んだ調達物は1ヶ月間の食料と生活用品その他諸々。か弱い少女に運ばせるには相当な量だが、怪物に運ばせるには適当な量だ。

これ以上待たせても何の利益も無いので（むしろ危険なので）フィンがかつて無いほど速やかにドアを開けた。

「……久しぶり。聞くまでも無いだろうけど、元気だった？」

一応挨拶をする。メイが襲いかかってくるかと思われたが、ドアが開かれたことで機嫌が直ったのか、只の脅しだったのか、普通にフレンドリーな挨拶を返してきた。

「ニーハオ、情報屋。元気も元気！ ワタシは何時でも何処でも元気あつあつヨ！」

「それを言うなら、元気はつらつ……その格好、寒くない？」

「あ？ 何が力？」

その格好 綺麗な色と模様の入った半袖のサテン生地、同じく半端丈のズボン。いわゆるチャイナ服と言った部類のものだが、如何せんこの娘が着ているので色気は全く無い。それよりも問題は、今が冬だと言うこと。メイの着ている格好は明らかに夏用の服ではないか？ と疑ってしまう程に寒々しい格好だった。

「和国のコトワザで“子供は風の子”と言うネ。中華大陸でもレス

ティナでもイギリスでもオラトリオでもその言葉は万国共通ヨ。アナタこそ、その格好暑くない力？ 部屋にまでコート着るなんてその神経回路は理解不能ヨ」

「その言葉、そっくりそのままボクのジャブで跳ね返したいよ。ボクシングの知識はまだ上澄みだけしか仕入れていないから、お見せ出来ないのが残念だ」

「勝負する力？ 望むところヨ。ワタシ、そんなところらの裏町業者共とは鍛え方が違うからネ。なんなら、さつきからこつちを睨んでくるそのカラスの…なんだっけ？ あ、そうそうサスケ。サスケと一緒に攻撃してきても良いヨ…と、言いたいところだけどネ。ワタシは今調達中。仕事ほっぽって遊べるほど偉くないヨ。偉くても仕事ほっぽっちゃ駄目だけどネ。はい、今月の調達分」

「どうも」

「それだけか？ この家からは何かいい匂いがするけどネ」

何故匂いが分かったのだろうか。自慢ではないが、この家は結構な広さがあるというのに。

「……丁度、アンダーグラウンドにあげようと思ってたけど、余っちゃった和菓子があるんだ。食べてく？」

「もちろんヨ」

\*\*\*\*\*

「しっかしまあ、久しぶりにアナタを見て思ったけどネ。アナタ、最近引きこもりに拍車が掛かってない力？」

むぐむぐとハムスターの様に頬袋に和菓子を詰め込みながら、大体そのような意味の言葉をメイが言った。物を食べながらなので、

実際はもつと聞き取りにくい。

「別に。外に出なくともボクは生きていけるからね」

『それでも、最近のフィンには外に出なさすぎです。メイ殿からもなんとか言ってやって下さい』

「なんとカ」

『誰がそんな古いボケをかませと言いましたか！』

サスケがテーブルの上で喚いて、もういいです、と何処かへ飛んでいってしまった。大方第一倉庫の整理に戻ったのだろう。あの力は御主人想いの良い奴なのだ。

「最近のカラスはキレやすいみたいヨ」

「らしいね。サスケは冗談の通じないヤツだし」

「ふうん……情報屋」

「何？」

「これ、どこの和菓子カ？ めちゃくちゃ美味しいヨ」

「『風鈴花山』のお店のだよ。キミが今食べたのは冬の新作」

ずずー、と音を立てながら緑茶を啜る。濃いめに入れすぎた所為で、喉を通ると苦さがとても痛い。

「フリーリカザン？」

一応和菓子の有名ブランドなのだが、メイは知らなかったようだ。というか、フィンも最近まではその店のことを名前すら知らなかった。いわゆる口コミで広がった『隠れた名店』というやつだ。クウヤの好物が莓大福だという話でさえ、ごく最近に聞き入れた代物だ。誰に聞いたかはすぐに分かると思う。彼のマニアの所長秘書からだ。

「それにしても」

大きなお皿に入っていた結構な量をぺろりと平らげて、メイはフィンに話しかけた。

「何？」

「アナタ、最後にお外に出たのはいつカ？」

「確か……先月にキミを玄関でお迎えした時以来だね」

「あれを『外に出た』と言うカ。一步だけでしょ。ちよつとはお外に出ないとヒヨロヒヨロになってしまふヨ。サスケは御主人であるアナタを心配してるけど、ワタシから見てもソレは病的ヨ。第一、顔色が悪すぎるネ」

「生まれつきだよ。気にすることじゃない」

「目つきも悪い」

「それこそ生まれつきだよ。全くもって気にすることじゃない」

「……アナタがお外に出なくなつたの、『展開観測』が死んでからだよ。シヨックなのは分かるけど、もうちょ「五月蠅いな。何で皆あの人の話ばかりしたがるんだ」

低い声で、猫が威嚇するようにメイを睨み付ける。だが、メイには効果が無かつたらしく、話は続けられた。

「『展開観測』の死がアナタにどれくらいシヨックを与えたのかは知らないけどネ、そろそろ立ち直るべきヨ。流石にもういいでしょ？ 5年も経つたのヨ」

「それを言うのなら5年しか経ってない、だ。それにボクはしっかりと立ち直っている。『全体観測』として裏町に貢献しているじゃないか。外に出ないのは単にボクが引きこもりの性質を持っているからだよ」

「どうだカネ」

目の前に置かれていた湯飲みを横取るようにしてメイは茶を啜った。フィンには苦すぎたが、メイには丁度良かったらしい。

「引きこもるのはアナタの勝手だけドネ、一つ言っておいてあげるヨ。もうそろそろ外に出ておくべきヨ」

「どうして？」

「ワタシ、最近儲かっているからヨ」

奪い取られた湯飲みを、取り返してフィンがまじまじと調達屋の

顔を見る。こいつ、何自分の繁盛を人に自慢してやがるんだよ、とでも言いたげな表情だ。

「へえ…それは良かったね」

「良くないヨ。かなり良くない兆候ヨ」

メイが深刻そうに言葉を発した。

「調達屋が儲かる。つまり、足りないモノが増えてきていると言っていることヨ」

「……いつだっけ？ 調達屋がやたらに儲かった時期があった。確か、武器の調達依頼が多かった年だ」

「去年ネ。調達屋が儲かってすぐに、あの『閻鬼』の事件が起こったヨ」

「ガヴオット崩壊事件か」

ガヴオット崩壊事件。一夜にして国が滅んだ、犯人不明の事件……とは表の話で、裏では閻鬼の事件として有名だ。

フィンが考える間も無くメイが次の言葉を放つ。

「それだけじゃないヨ。最近の依頼は紛失物の調達が多いネ。あれが無くなっただの、それが見つからないだの言う人が多いヨ。おかしくないか？」

「何が言いたいのさ？」

「ワタシが言いたいののはネ、これから何かが起こるって言うことヨ。何か、途轍もない何か、が」

「不吉？」

「そんなところヨ。だから、そろそろ外に出る準備くらいはしておいたほうが良いヨ。何が起こるか分からないときこそ、前持って準備しておくのに越したことは無いネ。ワタシの勘、外れたこと無いのアナタ知ってるでしょ」

そして、喉渴いたヨお茶くれ、とメイは言った。脳天気というか、天然というか。フィンは言われたとおりに緑茶を注いだ。

「不吉なことね……頭の隅にでも置いておくよ」

「そうしてもらえると嬉しいネ」

\*\*\*\*\*

言いたいことだけ言って、食べるだけ食べて、調達屋メイ・シヨウは何処かへ行ってしまった。大方何かを調達しに行ったのだろう。彼等は一所に根を張らない。彼等は放浪に放浪を重ねていくのだ。

なら、その逆も然り。根を張りまくって、一所から動かない人種がいたっていいじゃないか。ボクは決してあの人が原因で引きこもっている訳じゃない。情報屋は動かずとも情報を手に入れる術を知っているのだ。

フィンメイを見送る為に開けたドアの向こうを見た。もう、雪空だ。

「……寒い……」

少しだけ。一歩だけ外に出て、空を見上げた。真っ白な空は、眩しい。黒ずくめの自分がどうも目立っている気がする。

「…不吉が、忍び寄ってる…ねえ」

閉じられた世界の向こう側に向かって、フィンは久しぶりに大声を出した。

「サスケ！ サースケー！」

「今参ります！」

バタバタと羽根を飛ばたかせてカラスが外へやってきた。

「どうしたのですか、フィン。メイ殿に説教でもされましたか」

「それもあるけどね。ほら、見てよ」

「？」

「初雪だ」

それは、触れる前にももう溶けてしまいそうな、小さな『白』だ

った。

『冬ですね』

「だね」

『フィンが外に出るから、とうとう雪が降ったのです』

五月蠅いなあ、とフィンは言葉を放ったが、表情は久しぶりに見る笑顔だった。

「ボクは」

しばらく沈黙の中、1人と1羽は雪見をしていたが、ポツリと話された言葉によって静けさが消えた。

「ボクは何も知らないんだね」

『何がです？ フィンの知らないことなど、数えるほどしか無いでしょう。世界の全てはここに揃っているじゃないですか』

「そうだけど、知らないことも有るんだよ。一生、知らずにいるであらうこと」

『何ですか？ それは』

「あの人が……『展開観測』が自分の命を引き替えにしてまで守りたかったモノ、とか」

カラスは、至極複雑そうな声を出した。言葉にするまでに、少し時間が掛かった。

『先代はフィンに最大の謎を残してゆきました』

それは、答えでも何でも無かった。ただ、状況を説明しただけだ。だけどフィンが言葉に出来なかったものが明確に成ったお陰で、少しだけ楽になったようだった。言葉にすることで、見えるモノもあるのだ。

「そうだね。最大にして、最強の謎だよ」

情報屋とカラスは上を見上げていた。ずっと、ずっと見上げていた。





63. &quot;Whole observation&quot; and

不吉の物語は、もう始まっている。  
誰にも知られずに。

” Whole observation  
opment observation  
” and  
” devel  
意識：『全体観測』と『展開観測』

12月も中旬に入ったある日。  
姉さんに試練がやってきた。

「こ、子守ですか」

いつもの仕事着に、寒いのでブレザーとカッターの間にアイボリー色のセーターを加えた姉さんが、それはもう目をまんまるにして目の前のお客さんを見た。

「ええ。何でもするってチラシに書いていたものですから。お願いできます?」

髪の毛の長い綺麗な女の人がすつとチラシを差し出した。チラシには案の定『今日の晩ご飯の献立代行から、邪魔なあいつにちよつとしたイタズラまで』といった危ない宣伝文句が書かれていた。

どうしてこの人はこんな危ない宣伝に釣られてやってきたんだろう。  
「はあ…あの、先に言っておきますけど、おれベビーシッターの経験皆無ですよ? ペットを預かったりするのにはよくありますけど…赤ん坊は初めてなんです」

「ええ。大丈夫です。この子は滅多に泣きませんし、それにお気に入りのぬいぐるみも持ってきましたから」

「はあ…。あの、」  
「もちろん、報酬の方もご用意します。午後7時までの子守で5万  
ミーリア」

「はあ…」

姉さんは最後まで煮え切らない様子だったけど、女の人は久々の外出が余程嬉しいらしく、赤ちゃんを姉さんに預けると軽い足取りで出ていった。

「大丈夫なの？ 姉さん」

「……がんばります」

姉さんの両腕には、可愛らしい赤ちゃんが眠っていた。

\*\*\*\*\*

「だう…あー」

「あ？ なんだって？ 頼むから人語を話してくれ、人語を」

「あう…だっ！」

「お前さー、人がこんなにも頼んでるんだからよ、もうちょっと誠意を見せて…っっておいおい、ちよつと髪の毛引っ張るな！ 痛い痛い痛いシーオーナー助けてー」

可愛らしい赤ちゃんは遠慮無しに姉さんの髪の毛を引っ張る。今日はツイテールにしているから尚更引っ張りやすいのだろう。僕は姉さんから赤ちゃんを預かって、抱っこした。ふにふにしている、暖かい。

「だあうー」

「えへへ、可愛いなー。ね？ 姉さん」

「全然全くこれ以上ないって程思いつきり可愛くねーよ。なんだこいつ、人の髪の毛引っ張っっておいて謝りもしねえ」

はつきり言っつて、ていうか見たまんまで、姉さんに子守は向いていないと思った。いきなり赤ちゃんに喧嘩腰で、謝罪を求める人なんて初めて見た。そこらの不良よりもタチが悪いんじゃないだろうか。

「姉さん、何赤ちゃんにつつかかってんの？」

「シオーン…こいつ意味分かんねーよ。っていうか、なんで立たないんだ？ ずっと寝たきりなんだけど」

「0歳児に立つことを求める方が間違ってるよ」

僕はそおつと赤ちゃんを絨毯の上に寝転ばせた。

「だあー。まんま！」

「うわ！ 動いた！ やべえ動いた！ 生きてるぞ、こいつ！」

姉さんに子守を任せて大丈夫なのか？ いきなりハイハイを始めた赤ちゃんを、姉さんはまじまじと…そう、興味津々に見つめていた。生きてるぞつて、あんだ、赤ちゃんを何だと思つてたんだ。

「見てみるよシオン、こいつ二足歩行じゃなくて四足歩行だ！ 本当にこいつヒト科か？」

勢いよく進んでいく赤ちゃんと、それを追うように腰を屈めて進む姉さんとを交互に見て、僕は今日の中で一番大きな溜息を吐いた。今回ばかりは姉さんに任せていられない。現に姉さんは、ああなるほど匍匐<sup>ほふく</sup>前進してるのかお前、なんて見当違いのことを言っている。一体何の必要性があつて、赤ちゃんが匍匐前進するんだよ！

「姉さんは本当にベビーシッターの経験が無いんだね……つていうか、赤ちゃんに対する知識が無いんだ」

「だつてそんな依頼受けたこと無いし。おっと！ そっち行くなそつちー！」

廊下に出た赤ちゃんを慌てて追いかける。僕も一緒になつて追いかけた。

「だあー？」

赤ちゃんは階段の前で止まっていた。当たり前だ。上れないんだから。

「よしよし、いい子だからさっきの部屋に戻ろうなー。シオン、抱っこしてやつて」

「僕？ なんで？」

「だつて、こいつふにゃふにゃしてて怖い。人間じゃねーよこいつ…姉さん……」

あんだこそ人間としての知識が足りてねーよていうか母性が足りてねーよ、と言いたかったけど、大人しく赤ちゃんを抱っこして応接間に戻った。腕の中の赤ちゃんは何も知らずにきゅきゅと笑つ

ていた。やっぱり可愛いな。

「あー…早く依頼主帰ってこないかな。っていつか、エサは何を与えれば良いんだろ」

「エサじゃないでしょ、食事でしょ！ ミルクに決まってるでしょ！」

今度、セピアじいちゃんのお店で育児の本を読ませてやろう。それから、ジンに言っただろう。あんたの育て方間違ってるよって言うてやろう。絶対に。

\*\*\*\*\*

### 結局。

7時に迎えが来るまで、僕と姉さんは大奮闘だった。というか、主に僕が大奮闘だった。好奇心旺盛な赤ちゃん、赤ちゃんに興味津々な姉さん。0歳児と5歳児を一気に面倒見てみたいだった。

依頼人の人は、この子は泣きませんから、って言っていた癖にやっぱりぐずつちゃって、赤ちゃんはぬいぐるみを与えても泣きやんでくれなかった。そしたら、なかなか泣きやまずに精一杯泣く赤ちゃんに、姉さんがびくりしちやって、なんで？ なんで泣いてんの？ ってこつちもぐずっていた。最後には、言葉にしねえと意味分かんねって言うてるだろー！ って言いながら、そこら辺の本を蹴飛ばしていたけれど。

結局、一番苦労したのは僕だった。報酬の半分はくれてもいいと思う。

「ありがとございました。今日は本当に助かりました」

「いえいえ、こつちも勉強になりましたよ……そこらの事件より疲

れましたけどね」

「はい？ あ、これお土産です。帰り道にちよつと寄ってきたんです。宜しかったら弟さんと一緒に食べてください」

「あ、わざわざどうも」

「では、失礼しますー」

ばいばーい、と赤ちゃんに向かって手を振ったけど、赤ちゃんはキョトンとしていた。きつと赤ちゃんには今日一日何が起こったかなんて分かってないんだろうな。それでも、僕は手を振った。

「うおー！」

「どしたのさ、姉さん」

真後ろで奇声が聞こえた。それから、おおー、という感嘆の声。

「あの人いい人だー！ 『ドルチェ・デ・ノエル』のフランボワーズムース！」

「良かったね」

姉さんの大好きなケーキ屋さんだったらしい。あそこのケーキは高くて有名なのに、太っ腹な依頼人さんだ。

「それにしてもさあ」

「んー？」

箱の中身をキラキラした眼で見つめながら、姉さんは相づちを打ってきた。本当に聞いているのかな。たぶん、聞いてないな。

「赤ちゃん可愛かったねー」

「なんだ？ 情が移ったのか？ おれは嫌だね。あんな虚弱生物。まるつきり戦えねえよ、あんなの」

「誰が赤ちゃんを戦わせるんだよ。姉さん、もうちよつと勉強した方が良いよ。常識の勉強」

「はいはい。おれに育児なんか無理ですよ。まあなんだ。結果としては、なんか今日はシオンがお兄さんになったようで、おれとしては楽しかったな」

「僕も。弟が出来たみたいで楽しかったな」

「ふーん。シオンは弟妹が欲しいのか」

「ちよつとだけね」

「よし、作るか」

「そうだね…ってええ！？ なに言ってるの姉さん！」

「フランボワーズフランボワーズ、ちゃらっちゃー」

「聞いているの！？ 姉さんてば！」

「たーりらーり、タリラ、ラーリラー」

「ちよつと姉さん！ 言っておくけどね、姉さんの子供だと、それは弟じゃなくて甥っ子になっちゃうんだよ！」

「フッフフフーン」

「僕は認めないからね！ 姉さんに子供だなんて認めないからね！」

「シオンは紅茶とコーヒードっちが良いー？」

「ねえさーん…！」

そんな、12月も中旬に入ったある日のこと。  
クリスマスまで、あと1週間だった。



64・Hello the baby・My elder sister

Hello the baby・My elder sister  
r and the first babysitter・  
直訳：こんにちわ、赤ちゃん。僕の姉さんと、初めての子守。

間奏曲 玖曲目「突撃！隣の変人さん」

【裏町幹旋所変人所長と愉快な仲間達の1日】

〔6:00〕

裏町幹旋所所長、日頃の習慣から自然と目が覚める。今日もセツトした目覚ましよりも5分早く起きた。もうこの人に目覚ましはいらないと思う。

毎日の日課である乾布摩擦をして、男を磨く（ただし、布は特別に作らせた名前刺繍入りシルク）。

〔6:50〕

思い切って朝のジョギングを試してみようかなと考えているところ、眠そうな秘書が呼びに来る。どうやら朝食の時間らしい。ちなみに護衛人はまだ寝ている。このあと秘書がたたき起こしに行くそうだ。

〔7:00〕

朝食を食べる。席に着いたのは秘書と護衛人の2人。今日はこの間のパーティーで気に入った和食にしてみる。朝からの納豆は和国の伝統らしいが、3人とも少し馴染めなかった。料理長に言って、明日からは今まで通りのメニューに戻してもらおう。

〔8:00〕

『目覚めるテレビ』の星占いランキングを見る。ちなみに所長の星座はモナリ座。今日もランキングにはのっていなかった。残念がる所長に、秘書が温かいミルクティーをいれてあげる。

所長はめげずに明日も見るともりらしい。

「9:00」

業務開始。どこからやってきたのか、たくさんの方々が幹旋所所員達が仕事場に集う。幹旋所には少し離れた棟に寮があるらしい。ときどき所長の変な思いつきによって壁の色がショッキングピンク色になったりもするが、住み心地は抜群らしい。

「10:00」

所長が業務に飽きて、仕事場から姿を消す。護衛人が慌てて探しに出かける。ちなみに、日常茶飯事である。

「10:30」

所長はまだ見つからない。トイレにも視聴覚室にも中庭にも、ましてや食堂にも居なかった。さすがの護衛人にも疲れが見え始める。

「11:00」

所長、図書室にて発見せり。どうやら新撰組の関連本を読んでいたらしい。あまりに熱心に読書をしていたので、そっとしておく護衛人。秘書に言って、いつでも新撰組のコスプレが出来るように誠印の羽織を用意させておく。

「11:45」

代理屋の香葉月朝葉香から宣伝用のチラシが届く。内容は世外れの都合屋の悪口が大半だった。所員、後で整理しようと棚の上に置いておく。

5分後、秘書が香葉月氏のチラシを燃えるゴミに分別している所を、所員がまた目撃。あまりにも真剣だったので、放って置く。

「12:00」

みんなで昼食。とくにこれと言って特筆するような点は無かったが、幹旋所においてそれは珍しいことだった。よく見ると、所長の

元気が無いからだったようだ。みんなが所長の体調を心配する。どうやら幕末ごっこがしたいと秘書に申し出たところ、却下されたらしい。

所員達、心の中で秘書に礼を言う。心が一つになった。

「13:00」

お昼の業務開始。開始早々、所長が消える。大方図書室でさっきの続きを読むのだろうと思い、護衛人は放っておく。一応秘書には報告しておこうと思い、仕事場内を見回すが、秘書も居なかった。

護衛人、本日二度目の人捜し決行。

「13:10」

秘書、自室にて見つかる。どうやらコレクションである桐生空夜の自作アルバムを見ていたらしい。何故そんなにも集められたのかは分からないが、桐生氏の0歳から現在に至るまでの写真がきつちりと納められていた。

護衛人、秘書に仕事に戻るよう声を掛けたところ、桐生氏の寝顔の写真を見せられ、しかも「これ、すぐくレアなんですよ。あ、丁度右端に店の帳簿が置いてあるのが見えるでしょう？ どうやら売り上げを記録しているところ、うとうととしてしまった様なんです。仕事熱心で可愛いですよ。そうそう、クウヤ・アンダーグラウンドの寝顔の写真は、私の持っている1452枚の内、3枚しか無いんですよ。これも手に入れるのにどれだけ掛かったか」と自慢させられる。

護衛人、本気で転職を考える。ちなみに、これも日常茶飯事である。

「14:00」

調達屋のメイ・ショウが遊びに来る。どうやら仕事のついでに寄ったらしい。所長と一緒に命がけの鬼ごっこをして遊ぶ。ルールは

2人しか知らないので、一体何をやっているのか、周りには分からない。勝敗は引き分けらしい。遊ぶだけ遊んで帰っていった。あれが天下の調達屋なのだろうか。裏町には変人が多い。

「15:40」

情報屋のフィン・クロスフィンガーから電話が掛かってくる。なんでも、秘書にお礼が言いたいそうなので、所員がすぐに取り次ぐ秘書としばらく談笑して（秘書があんなにも楽しそうに話すのは珍しいらしく、所員達は明日の天気は竜巻だ、などと言っていた）、電話が終わる。電話後の秘書は、いそいそと自室に戻っていった。護衛人は見て見ぬフリをした。

「16:00」

所長、再度幕末ごっこの提案に乗り出す。諦めの悪さは裏町一だ。渋い顔をする秘書に、とっておきの一言をかます。

「新撰組と言えば剣術。剣術と言えば道場。そういえば、クウヤ・アンダーグラウンド君の実家は道場だそうで……確かお祖父様が剣道をお教えになっていたそうですね。それに新撰組と言えば、欠かせないのが隠密。すなわち、忍」

「それくらい知っております。所長、何度も申し上げています様に、今は業務時間です。幕末ごっこのなんて子供の遊びは駄目です」

「そうですか：残念です。非常に残念です。アンダーグラウンド君の剣道着姿の写真と、兄弟で竹刀を持っている写真を手に入れたというのに……非常に残念です」

「やりましょう、所長。是が非でもやりましょう。幕末ごっこ、つまり戦いですね？ 精神と身体を鍛えるには丁度良いじゃないですか。さすが所長です。所員を鍛えるために、遊びと銘打ってまでやるうとするそのお姿、私は感動いたしました」

「分かって頂ければそれで良いんです」

「なんて心のお広い方なんでしょうか……所長の下で働ける私は幸

せ者です」

そのやりとりを見て、所員達、心の中で秘書を罵倒する。また、心が一つになつた瞬間だった。

「17:00」

調達屋のメイ・シヨウが再びやってくる。どうやら忘れ物をしていたらしい。所員が、何を忘れたのか尋ねたところ、晩ご飯をこちそうになるのを忘れていたと言う。どうやら、ちゃっかりごちそうになるつもりで帰ってきたようだったが、みんな何も言わなかった。所長が調達屋のことを孫のように溺愛しているからである。

「18:30」

幹旋所の所員達と調達屋とで晩ご飯を食べる。所長が料理長に頼んで、メイ・シヨウの好きな中華料理にしてもらっていた。まるで孫が遊びに来たときに張り切る、田舎のおじいちゃんのような。みんなが食べ終わった頃に、所長宛に手紙が届く。レスティナの始末屋から、この間のパーティーを辞退してしまったことのお詫びの手紙らしい……と言っても、詫びている部分は全体の約5分の1程度で、弟子の話が残りの約5分の4を占めていたそうだ。便利屋のジン・ソリティアに似て、案外セリ・オーシユも親ばかだ。

所長が返事を書く中、所員達は最後の業務に就いた。そういえば、いつの間にか調達屋は消えていた。本気で食べに帰ってきただけじゃなかった。

「21:00」

本日の業務、無事には言いづらいが、まあ比較的平穩に終了。所長、やはり目覚ましをセットして眠りにつく。でも、明日もきつとその5分前に起きるのだろう。

「23…50」

秘書、ここそとアルバムを取り出す。世外れコレクションの中でとっておきの一枚を、そと枕の下に置く。良い夢が見られますように。おやすみなさい。

間奏曲 玖曲目「突撃！隣の变人さん」（後書き）

〔24:00〕

護衛人、読書を終えて就寝。最近読んでいる本は、求人雑誌。



## 65・アリスの孤城 【壊れた人形は人形を壊す】

この世界は、狂っている。

\*

城のように聳えたつ、大きな屋敷があった。その屋敷の中に、途轍もなく大きな部屋があった。

そして、その部屋を埋め尽くすように、可愛らしい人形達が陳列されている。

ドレスを着た物、髪を巻いた物、蒼い眼をした物……中には人型ではない、動物のぬいぐるみも座っていた。この部屋は、人形達で支配されていた。

どれも手作りで、丁寧に作られた人形達だった。同じモノは一つとしてない。同じ形の人形でも、どれも違う色をしていたり、違う柄の模様だったり、ちぐはぐな感じが手作りであることを強調しているようだ。

大きなその部屋の床には、たくさんの人形達で敷き詰められていた。その所為か、ランプが付いて明るいはずの部屋は、とても薄暗く感じた。

そんな人形達に混じるように、可愛らしい少女が座っていた。銀

の色をしたフワフワの長い髪と、とても赤い、大きな真紅の目をした少女。

少女の名前はアリス・ブライティン。人形師を家業とするブライティン家の一人娘。

この大きな城に、彼女は一人ぼっちだった。

「フラン。パパとママ、遅いね」

アリスが『フラン』と呼ぶ人物に話しかけた。しかし、アリスの前にも隣にも、ましてや後ろにだって誰も居なかった。

彼女を取り囲むのは、生を持たない布の塊達だけだった。

「今日はアリスの誕生日なの。10歳になるのよ。知ってた？ フラン」

それでもアリスは続ける。誰も居ない空間で、一人喋り続ける。彼女に答えてあげられるような人間は、この部屋には居なかった。

『アリス、誕生日！ フラン、歌ヲ歌ウ。イツシヨニ 歌オウヨ』

しかし、返事はあった。アリスの両腕に抱きかかえられた、兎の人形が喋った。フランと呼ばれた兎の人形は、下手くそな誕生日の歌を、一生懸命に歌う。白い体に赤い目をいた兎人形は、腕の中で音痴に歌を歌った。

アリスは、そんな可愛らしい友達の姿を見て微笑んだ。

このフランという兎の人形は、アリスの両親が作った最高傑作だった。話せる人形、話し相手になる人形、言葉に反応する人形。人形師として忙しい毎日を送る両親が、アリスに与えた只一人の友達だった。

「くすくす…フランは歌が下手だね」

『ダケド、歌ウコトハ ダイスキダヨ！ アリスハ、何が スキ？』

「アリスはフランが大好きよ」

『ソウナノ？ ジャア、大切ナ物ハ？ フランハ ニンジンガ、トツテモ大切！』

「きゃははは！ いつもニンジンの話ばかりね？」

『違ウヨ、違ウヨ！ アリストノ話モ、チャントシテルヨ！』

「……そう、だね。アリスと話してるのはフランだけだもんね」

途端に、アリスの表情が暗くなった。今日は自分の誕生日なのだ。けれど、両親は帰ってきていない。仕事が忙しいのだ。人形師は、世界中の子供に必要とされているのだから。

『パパト ママハ、ドウシタノ？』

「パパもママもね、今はコンテストに行っているの。世界中のオモチャを集めて、誰が一番の玩具師なのかを競うコンテストよ。今回はね、フランのお友達を出品したの」

『オシャベリ人形？』

「そうよ。フランはね、パパとママの最高傑作なの」

『優勝シタラ、ドウナルノ？』

「どうなるんだろうね。パパとママのお人形が世界中に有名になるのよ、きっと」

『優勝シテルト、イイナ！』

「そうね」

両親が優勝した場面を想像して、その赤い目を輝かせながらアリスが頷いたのと同時だった。

アリスとフランだけだった空間に、生を持つ者が2人、何の前触れもなく入ってきた。

「アリス、ただいま！」

「パパ！ ママ！」

アリスの両親 ジャック・ブライティンとローズ・ブライティンが帰ってきた。

父、ジャックはアリスと同じ銀髪に赤目。そしてアリスと同じくらいフワフワの長い髪を一つに結んだ母のローズ。

アリスは今まで両腕に抱えていたフランを床に置いて、急いで2人に駆け寄った。2人とも、すごく嬉しそうな表情をしている。

「おかえり！ あのね、覚えてる？ 今日私の、」

「聞いてくれないか、アリス！ パパ達はやっただよ！ “キング・オブ・トイズファクトリー”を受賞したんだ！」

「……え……？」

「ママとパパの夢が叶ったのよ！ 今日はお祝いしましょう、アリス！」

2人は今日のコンテストについて話し出した。

ずっと夢だった玩具師の頂点、“キング・オブ・トイズファクトリー”に選ばれた瞬間のこと。

世界中から集まった玩具師達の素晴らしい作品の数々。

人形師の仲間も好敵手だったこと。

今までずっと試行錯誤を繰り返して作り上げてきた、話せる人形『フラン』が、世界に認められたこと。

2人の話が止むことは無かった。

「これも全部アリスのお陰よ！ アリスが喋る人形が欲しいと言ってくれなかったら、こんなにも素晴らしい賞は得られなかったわ！」

「そうだよ！ さすがは私達の娘だ。アリス、お前には人形師としての才能があるよ！」

娘の話も聞かずに喋り続ける両親達を、アリスはじっと、見つめていた。

「さあ、アリス。これからどんどん忙しくなるぞ！ 何て言っただ、玩具師の頂点に立った『フラン』だ。世界中からの注文が殺到するに違いない！ お前ももっと腕を磨いて、パパ達のお仕事を手伝ってくれよ？」

「そうよ、アリス。これからは世界中の子供達が『フラン』を持つよ。みんなが同じ人形と遊ぶの！ ママ達の人形で遊ぶのよ！」

「明日からは、もっと作るスピードを速めようか。そうでないと、世界中なんて無理だよ」

「そうしましょう。世界中の子供達を、私達の人形で幸せにしましょう……」

アリスの目は、さつきまでの様に輝いてなどいなかった。虚ろに、2人の話す姿を追っていた。

今日は私の誕生日だった。10歳の誕生日だった。

だけど、パパもママもそんなこと忘れているわ。2人とも、いつもいつもお仕事ばかり。人形の話しかしない。

だから、私は頑張ってお仕事を手伝った。パパとママと一緒に居たかったから、人形を作ることを選んだ。

ねえ、2人とも。私はもう、『フラン』ぐらいの人形なら、一人で作れちゃうのよ。それくらいに一生懸命覚えたのよ。

なのに。

「覚えて、ないんだ、ね」

私のことなんて。

「どうしたんだい、アリス？」

アリスの呟きを聞き取れなかったジャックが尋ねた。

「……ううん。良かったね、パパもママも」

2人とも、嬉しそうにアリスの頭を撫でた。2人は長年の夢が叶って有頂天だった。娘の様子がおかしいにも気付かぬくらいに。

「ありがとう。じゃあ、ママはご馳走を作ってくるわね！ ママとパパの夢が叶ったお祝いに！」

ローズがキッチンへと向かって、部屋はジャックとアリスだけに空になった。

床に置かれたたくさんの人形の内、一際古い人形を手に取って、ジャックはアリスに話しかけた。

「ああ、アリス。この『フラン』も随分古くなってしまったね」

「大丈夫よ。アリスはどんな古いフランでも大好きなもの」

「そうかい？ だけど、これはもうボロボロじゃないか。今日はアリスに新しい『フラン』をあげよう。この子は元々試作品だったしね」

「新しい？」

「そうだよ。アリスの大好きな桃色の兎だ。これは実物に忠実に作ってしまったからね。白い体に赤い目なんて怖いだろう？ なに、今度のは世界に売り出すモノと同じだから、こんな試作品なんか足下にも及ばないよ」

「あのね、パパ」

「なんだい？」

ジャックは娘に背を向けたまま、床を埋め尽くしている人形達を一体ずつ手に取った。次の作品に生かせないか思索している。

アリスは、かまわずに話を続けた。

もうどうでもいい。別に聞いてくれなくても良い。ただ、言いたいだけ。

「アリスね。ずっと考えてたことがあったの。パパもママも毎日人形を作っただけで、私はちっとも楽しくなかった。毎日毎日寂しかった」

ジャックは、背中ごしに娘の声を聴いていた。少し哀しげに目を伏せて。

「パパとママの夢は“キング・オブ・トイズファクトリー”を貰うことでしょ？ だから、今回のコンテストが終われば、パパもママも少しはアリスのことを見てくれるかなって思ってた。なのに、今度からはもっと忙しくなるんでしょう。それじゃあ、何時まで経っても、パパ達はアリスを見てくれない」

「それは違うよ、アリス」

「違うない！ ……だからね、パパ。アリスはやっと分かったの。

パパ達の夢は『世界中の子供達を幸せにすること』でしょう？ だけどアリスはちっとも幸せじゃない。簡単なことだったんだね。アリスは子供じゃない。

アリスは人形だったんだね。

「そうでしょう?」

答えは無かった。その代わりに、ジャックの持っていた古い『フラン』が床に落ちた。

落としたくて落としたのではない。持っていられなくて、落ちたのだ。その両手から。

「ばいばい、パパ」

「がっ……! ア、リ……ス!?! なん……で……」

倒れたジャックの背後には、製作用の大きなハサミを持ったアリスが居た。

冷たく微笑んで、地に伏した父親の姿を見つめている。ジャックはもう動かなかった。

「くすくす……… きやははは! あれえ? パパ、もう動かなくなっちゃったの?」

床に広がる液体と同じ色をしたアリスの目には、もう父親は映っていないかった。ただ、大きな人形がそこにあるだけだ。

「パパの中身は何かなあ? ……ふうん? パパの中身は綿じや無いんだ。だから動いていたのね?」

大きなハサミと、木彫り人形用に使っていた大きな刃を使って、アリスは『かつて父だったモノ』を分解していく。その顔には、薄気味悪い笑顔が張り付いていた。

「くすくす……… ねえフラン、見てよ。パパの中身を並べてみたの。フランみたいに綿と音声用機具が入っていなかったけど、どうやって喋ってたのかしら?」

『アリス、楽シイ?』

「うん。すつごく楽しいわ。パパを分解したから、次はママよ」

『アリスガ楽シイト、フランモ楽シイ!』

「フランも? くすくす、きゃはは! きゃははは!」

がしゃん

アリスの笑い声に混じって、陶器が落下して盛大に割れる音がした。

「あー、ママだあ! アリスね、ママの中身も見たら、もっと凄い人形を作れる気がするわ」

「あ…ああ、な…っ…いや…何? 何が…!」

「くすくす。安心してね、ママ。パパとママの中身を見終わったら、直ぐに作り直してあげるわ。アリスみたいな人形を、ちゃんと見てくれるパパとママに作り替えるの」

「にんぎょう? 何が…アリス…アリス、アリッ…」  
もう一つの人形が、大きなハサミに壊された。

アリスが、全てを分解し終えたときには、もう夜は深くなっていた。

『パパト ママハ、ドウシタノ?』

「パパもママもね、壊れちゃった。人形って壊すのは簡単だけど、直すのは難しいのよ」

アリスは、己の瞳と同じくらい真っ赤になった右手で『かつて両親だったモノ』に触れた。

「部品が足りないのかしら? とにかく、これを片付けなくちゃ」



その血に濡れた右手で、何かを拾い上げて、アリスはまじまじと見つめた。

「アリスの中もこんな感じなのかな？」

十分に観察をし終えて、ぱつと右手を離れた。そして、ぱしゃ、という音と共に『それ』は落ちた。『それ』はかつての両親の脳髓に近かった。

数秒、バラバラになった2体の『両親』を見つめた後、アリスは辺りを見回した。部屋を支配していた人形達は、皆どこかしらに赤い斑点を付けていた。皆、返り血を浴びているのだ。それを見て、アリスは慌ててフランを見た。ジャックに抱えられていたフランは、全身が真っ赤になっていて、もう半分は赤黒く変色していた。

それを見てアリスが、ああ洗ってあげなくちゃ、と思ったと同時に、突然フランが話し始めた。

『ボクハ、ウサギノ フラン！ 君ノ名前ハ？』

「……………」

『君ノ名前ヲ、教エテヨ！』

フランは、壊れていた。血が付着して、装置が壊れてしまったのだ。長年の友人は、自分のことを忘れてしまった。

アリスは、不思議と哀しくなかった。新しい友達が出来たと思えばいい。

「アリスって言うの。よろしくね、フラン」

『アリス？ ヨロシクネ、アリス』

「くすくす、昔のフランと同じことを言ってるわ」

『フランノ好きナ物ハ ニンジンデ、大切ナ物モ ニンジンダヨ！』

「きゃははは！ みーんなみーんな同じなのね。そう。フランはニンジンが大好きなのね？」

『ソウダヨ！ アリスノ大切ナ物ハ何？』

「アリスの大切なモノ……………」

笑い声は、一体どちらから出たものだったのか。

「さあ、なんだったっけ？」

真実は、行方知らず。

\*

狂気の、始まり。

65・アリスの孤城 【壊れた人形は人形を壊す】（後書き）

笑う、笑う、人形は笑う。  
狂ったように、笑うだけ。

BGM：小フーガ ト短調 / B a c h

66・アリスの孤城 【不吉は音もなく忍び寄る】

至って普通の日常と。

\*

12月23日。クリスマスイブの、イブ。天候は、いつもに比べて比較的温かいが、雪空。この調子だと、お昼には降り出すだろう。ここはレスティナ国中央街、メトロポリス。より少し東にある、比較的栄えた街。簡単に言うのなら、中央と東地方ソナチネの真ん中辺りにある街だ。

その街にある、小さなアパートのドア前に、世外れの都合屋クウヤ・アンダーグラウンドが居た。

彼は小さな子犬のヒデヨシを両腕に抱えて、素晴らしい笑顔と、素晴らしく他人行儀な言葉遣いで、同じくドア前に立っているこの部屋の持ち主、道外れの始末屋レオリアナに質問した。

「一つ、聞いてもいいでしょうか？ レオリアナさん」

「なんだい、とっても優しいクウヤ君」

こちらでも少し形式張った口調で答える。言わずもがな、笑顔が多少引きつっている。クウヤが非の打ち所もないほどに素敵な笑顔を

するときは、大抵が心の底から怒りを感じているときだ。

「聞いていた話と、状況が違うんですが？ 説明よろしいでしょうか？」

「何言ってるんだい、とつてもとつても優しいクウヤ君？ オレはちゃんと言ったじゃないか。掃除を手伝ってくれと」

「掃除？ これを掃除と呼ぶんですか？ 依頼を受けた身として差し出がましいようですが、一言言っても良いでしょうか、レオラリアナさん」

「ああ、いいともさ」

「死ね！」

「ひどっ」

クウヤが笑顔を崩して、それはもう凄い怒りの表情で低く怒鳴った。怒鳴り声にびっくりしたヒデヨシが、クウヤの腕の中で忙しく首を振る。

「背後から突然刃物をずぶりと刺されて死ね！」

「さらに追い打ち！？」

「夜道に気を付けて歩けよ、レオラ」

「しかも犯人お前！？ 何これ、犯行宣言！？ 死の予告！？」

一通りの掛け合いを終えて、クウヤは脱力した。

彼の目前には、散らかりに散らかった部屋があった。いや、もうそれを『部屋』と呼んでいいのかすら分らない。というか呼んじやいけない気がする。ここから先は別世界、次元の違う場所のように思えた。

がつくりきいているクウヤにこの部屋の住人、レオラが済まなさそうに謝る。

「いや、その、悪かったな？ なんていうか：最初はカノンに手伝って貰おうと思ったんだけどな。ホラ、あいつの家って結構散らかってるだろ？ 本とか本とか本ばかりで。それで、あいつに頼むよりは、お前に頼んだ方が早く片づくかなーって思ってた……ごめんな？」

「……いいよ、別に。報酬も払ってくれるんだろ？　ただ、予想を遙かに超えたゴミ屋敷でちよっとやる気が無くなったただだよ。……なんでこんなになるまで放っておくの？」

「こんなになるまで　つまり、足の踏み場が無くなるくらいに汚くなるまで。普通なら、そこまで行く前に、少しは片付けようと思っただろうに。クウヤの純粋な疑問に対して、レオラは心底不思議そうに答える。

「え？　でもそれなりに住めるぜ？　こう、ゴミ袋を隅っこに固めていってさ」

「……………はあ」

クウヤは隅に固められたゴミ袋のロッキー山脈を見て、こっそりと「この駄目人間」と呟いた。そして、溜息。どうして僕の周りもこうも駄目人間が集まっているのだろうか？　類は友を呼ぶってやつか。いや、なら自分も駄目人間だと認めることになる。

「そういや、今日はヒデヨシだけか？」

クウヤの腕の中で大人しくするヒデヨシを見て、レオラが尋ねた。いつもの大きな犬とデブ猫がない。とはいえ、こんな所に居ても困るだけなのだが。

「ああ。流石に3匹も連れてこれないしね。ノロマとハカセは今日はお留守番。仕事仲間の都合屋に貸してあげた」

「貸した？」

「そ。なんでも、最近の生活に癒しが足りないから、アニマルセラピーとかなんとか」

「へえん、アニマルセラピーねえ。癒されるのか、それ」

「効果抜群だよ。動物好きには堪らないね」

「そうなんだ」

「ちなみに、僕はそれほど動物が好きって訳じゃないから、そんなに癒されてないけど」

「なんじゃそら。どこからつつこめば良いのか皆目見当付かねーよ」  
「で。僕は何をすればいいのかな」

「取りあえず、部屋に人を呼べるくらいに綺麗にしたいです」

「ラジャリました」

ドア前に立つこと20分。ようやくクウヤとレオラは部屋へと入った。

クウヤがここに来たのは、今日の朝一番に掛かってきた電話の所為に他ならなかった。

『もしもしクウヤ?! クウヤだよな!? いやこの際クウヤじゃなくてもいい!』

「……おはよう、レオラ」

『良かったクウヤだー! 早速用件なんだけど、お前今日ひま?』

一方的な電話の相手はレオラだった。レオラがまるで何かのお誘いのように気軽に「ひま?」と聞いてきたので、何も考えずに「うん、ひまだよ」と答えたことに、彼は後々後悔する。

用件というのは、レオラからクウヤへの部屋掃除の依頼だった。

『世間はもうクリスマス一色なんだよ。つつーわけで、今日中に部屋を綺麗にしたいんだ。なに、ちよつと一人では片づかないかなーって程度だし』

「クリスマスね。もうそんな時期かあ。あれ、君にクリスマスを家で過ごすような恋人って居たっけ?」

「ちげーよ、もっと凄い人が遊びに来るんだよ」

「だれ?」

『師範代……』

「うっわ、ご愁傷様」

『だろ? 報酬はちゃんと払う。頼むから手伝ってくれー』

「了解。2時間ちよいでそっちに着くよ」

と、言うわけで。

約束通り2時間後にここに着いたのがついさっきの話。まさか気軽に引き受けた部屋掃除が、こんなにも酷い有様とは予想だにしていなかった。まだまだ精進せねばなるまい。

「さて、どこから掃除しようか」

「オレがいる物といらぬ物に分けていくから、お前は本棚と机周りの整理をよろしく」

「一番しんどい所じゃんか」

「気のせい気のせい」

ヒデオシが一声鳴いた。

\*\*\*\*\*

やはり、空はその重い雲を持ちこたえることが出来ずに、はらはらと雪を降らし始めた。そんな中、例のアパートの一室では2人と1匹がへとへとになっていた。

「見違えたね」

「だな」

人間、やろうとおもえば案外何でも出来るのだ。ただ、やろうと思わないから、出来ないだけで。

「お疲れさましたー」

先ほどの面影など微塵もないほど綺麗な部屋で、レオラが労いの言葉を言った。

「全くその通りだよ」



「いやー、ほんと助かったわ。正直、明日までには無理かと思ってたからさ。でも、やっぱりクリスマスは家族で過ごしたいからな」

「そういうもんなの？ 和国では、クリスマスは大概が恋人か友達と過ごすんだけど」

「国によって違うもんさ。こっちなんか新年は友達同士で祝うしな」  
レオラが冷蔵庫の中を覗きながら答える。中身はほとんど空だった。彼の後ろでは、クウヤが行儀悪く絨毯の上に寝そべっていた。その胸の上には、ヒデオシも寝そべっている。

「ああ、お正月っていう概念が無いのか。和国とは真逆だね」

「そうらしいな。なんならさ、来年は裏町のみんなで集まって、なんかパーティーしようぜ…って、お前は実家に帰るのか」

「んー？ いや、帰らないと思うけど」

「むしろ帰ってやれよ…」

戸棚を開けて、紅茶の缶を出す。蓋を開ければ見事に空っぽだった。コーヒー豆も同じく。

レオラは一度キッチンからリビングへ戻った。

「クウヤー。悪いけど、飲み物が何にも無いからその辺で買ってくる」

よっ、と掛け声と共に起き上がりながらクウヤが、お腹の上のヒデオシを渡す。抱え上げられたヒデオシはしっぽを左右に振っている。

「なら、ついでにヒデオシの散歩もよろしく。今日はまだ一回も行けてないから」

「おっけ。何が飲みたい？」

「任せる」

「へいへい」

コートだけを上に羽織って、レオラがヒデオシを貰い受ける。

「行ってきまーす」

無言で手だけを振って、クウヤは答えた。視線はレオラ達の方で

はなく、一定の方を見つめている。がちゃん、と扉の閉じられる音がしてから、クウヤは遠慮なしに視線の先の大きな本を取った。「うわ、ちいさー」

それはアルバムだった。小さい頃のレオラ　正確には、その当時はまだ『アゲハ』だったが　そして幹旋所主催のパーティーで会った、あのセリ・オーシュの若い頃が写っていた。

2人とも、同じ顔をして笑っている。

その中にクリスマスの光景を写した写真があった。プレゼントをもって満足そうに笑う昔のレオラ。クウヤは、それに昔の己を重ねた。父がいて、母がいて、兄がいたクリスマス。

「……お正月に、一回帰ってみようかな……」

ぱたんとアルバムを閉じて、クウヤは綺麗に元の位置に戻した。

とんとん

クウヤが座り直したと同時に、控えめなノックが響いた。レオラではないだろう。わざわざ自分の家のドアをノックする人はいない。しかし、客でもないだろう。ここは『家』であって『店』ではない。レオラは公私を分けて生活しているのだから。

なら、誰だろうか。

疑問を残しながらも、クウヤは扉を開けた。

「くすくす…:…こんにちわ」

『コンニチハ！　ボクハ　フラン！』

「……えっと、どうしたのかな？」

扉を開けた先には、薔薇とリボンとレースを巧みに使って可愛らしく作られた、ゴシック調の真っ黒なワンピースを着て、その長いふわふわの銀髪を服とお揃いのカチューシャで纏めた少女がいた。

「貴方は道外れの始末屋さん？　くすくす、くすくす……」

『ボクハ フラン！ 一緒ニ遊ボウヨ』  
少女の両腕に囲われた真っ黒な兎の人形が、不気味に喋った。

\*

至って異常の非日常。

66・アリスの孤城 【不吉は音もなく忍び寄る】（後書き）

みよつなひ日常。

こんにちには非日常。

67・アリスの孤城 【彼の謝罪と贖罪、彼への懺悔と後悔】

僕らはいつだって、手遅れになってから後悔をする。

僕らはいつだって、後になってから本当のことに気付く。

僕らは。

\*

ばさばさっ、といつになく豪快な音を立てて、たくさんの資料が手元から滑り落ちた。驚いたカラスが、慌てて主人に近寄る。

『どうかなされたのですか、フィン』

「…いや…別に」

フィンは自分でもよく分からないという表情で、落ちてしまった資料を拾い上げる。ふ、と頬に手を当てると、冷や汗をかいていた。なんだか嫌な気分だ。もやもやしたものが心の内にある。不安、とても言うのだろうか。

『具合でも悪いのですか？ 最近はただでさえ働き詰めだったというのに、仕事以外に情報収集をしていらしたようですし…』

「…大丈夫だよ、ちよっと手が滑っただけだ。それよりサスケ」

『はい？』

「お客様だ」

全てを拾い、立ち上がったフィンの視線の先には、長身の女が立っていた。女の左胸には、手紙をモチーフにしたバッヂが付いている。

「ご無沙汰しております。伝言屋レステイナ支部員NO・24です。調達屋メイ・シヨウさんより伝言をお伝えに来ました」

『メイ殿から?』

「ええ。早急にお伝えするよう言付かっています」

「メイは何て?」

フィンは資料を抱えたまま尋ねる。

「『不吉がやってくる。確信は無いが、必ず近い内に何かがあると思う。気を付ける』だそうです。返事はどうなさいますか?」

「『情報は手に入った』とだけお願いします」

「承りました。そのようにお伝えします。では失礼いたしました」

「あの」

NO・24が去る前に、フィンが引き留める。

「はい?」

「気を付けてください。伝言を運ぶ間」

「ええ。その点なら心配ありません。鍛えておりますから」

「でも、」

その大きな猫目を伏せがちにして、フィンは言葉を紡ぐ。

「本当に気を付けて。裏町はいま危ない」

「……情報屋がいうのなら、信じましょう」

そういつて、NO・24は今度こそ去っていった。後ろ姿など見えないくらいに、素早く。

『フィン、どういうことですか? 裏町が危ないって』

「メイと同じで確信はない。だけど、危ない。これが誤情報なら良いんだけど」

フィンは先ほど落としてしまった資料に目を落とした。

\*\*\*\*\*

「貴方は道外れの始末屋さん？ くすくす、くすくす……」

『ボクハ フラン！ 一緒ニ遊ボウヨ』

突然の来訪者に対し、クウヤは何か違和感を覚えた。何かが変だ。しかし『それ』が何なのかは分からない。腑に落ちないものが心に残る。クウヤは警戒を解かずに少女に話しかけた。

「……こんにちわ。残念だけど、始末さんはお買い物に行ってるんだ。ここには居ないよ」

「そうなの？ くすくす、お買い物って、どこまで行ったの？」

「飲み物を買に行っただけだから、すぐに帰ってこれる距離の所じゃないかな。キミは始末さんに用があるの？」

「アリスね、聞きたいことがあって、ここに来たの」  
「聞きたいこと？」

クウヤが聞き返すと、少女はにっこり笑った。細くなった双眸が、やけに不気味に見える。両腕に抱かれたフランと名乗った兎は、今はもう黙っていた。

「でも、あなたに答えてもらおうかな。アリス、あなたのこと知ってるよ。世外れの都合屋さんでしょう？」

「正解。よく分かったね」

「アリスは賢いの。きゃははは！ あのね、あなたに質問してもいい？」

「どうぞ」

「あなたの『大切なモノ』は、なあに？」

「大切なモノ……？」

そんなこと、答えられない。大切なモノなんて、一つもない。僕の、大切なモノ？

クウヤは何も言わなかった。言えなかった。その代わりに、アリスが口を開いた。

「無いの？ 大切なモノ」

「……分からないよ……」

「無いんでしょう？ きゃはは、あなたもアリスと同じね！」

「同じ……？」

「そうよ。だからあなたはもう要らないや」

それは本当に、疾風のようなだった。風のように、ふわ、と飛んでくる。無生物のような感覚。

「っ！？」

アリスは何の前触れも無く、その大きなナイフでクウヤに斬りかかってきた。あのクウヤが対応しきれないほどに、素早い行動だった。否、素早いだけでない。予測出来なかった。

『フラント アリスハ キミノ大切ナモノヲ奪イニ 来タヨ！』

「くすくす、きゃはははは！ 言っちゃ駄目じゃない、フラン。それにこの人には大切なモノが無いのよ。だから壊れてもらうの。アリスと同じだから、この人も人形なのよ？」

逃げるために家の中へと入ったクウヤを、アリスはじりじりと追いつめた。

クウヤは庇うように右腕を押さえつけていた。左手からは、指の隙間から漏れた血が垂れている。世外れであるクウヤが、少女の攻撃を避けきれなかった。

「キミは一体誰ですか？ 何ですか？ 他人の家へずかずかと入り込んで、その上攻撃まで」

「アリスはアリスよ。ねえフラン？」



『ソウダヨ！ アリスハアリスダヨ！』

人形と話す少女は、酷く滑稽に見えた。クウヤは辺りを見回して、武器なるようなものを探したが、つい先ほどに綺麗に整頓してしまったため、めぼしいものは見つからなかった。

落ち着け。こういう場合こそ、冷静になれ。散々修行をしてきたじゃないか。

しかしクウヤは焦っていた。自分が、少女の攻撃を避けきれなかった。その要因は、少女が『何の前触れも無く』攻撃をしてきたからだ。自分に気付かれることなく、その大きなナイフで斬りかかってきた。

それはどう説明すれば納得がいく？ 自分の感覚が鈍っていた？ そんな馬鹿な話。

「くすくす、納得いかないの？ アリスがなんで強いか教えてあげようか？ くすくす。アリスはね、パパとママを壊したことがあるの」

「そんな、」

「嘘じゃないわあ。バラバラに分解してね、中身を見てみたかったの。真っ赤で、てらてら光ってて、すごおきれいだっただわ」

「正気じゃない…！ 自分が何を言ってるのか分かってるのか?!」「当たり前じゃない。それにね、このナイフで色んな人を壊してきたの。あなたみたいにね」

「僕はまだ死んでない」

「すぐに死ぬわあ、きゃははははっ」

アリスの笑い声が頭に響く。

クウヤはそこで違和感の正体に気付いた。さつきから異様にしてくるこの匂い。死臭、に近い。

「その兎、まさか、」

「ふふふふっ、うふふふ！ 綺麗な黒でしょう？ 最初は真っ赤だ

つただけどね、段々と渴いてきたら、こんな色になったの。このフランは、本当は真っ白だったのよう」

「血か…！」

その人形自体が、死臭を纏っていたのだ。なら、先ほどの『両親を殺した』という話も嘘では無い。この少女は危険すぎる。だが、今の自分には為す術がない。丸腰だ。

この場をやり過ぎすんだ。なるべく話を引き延ばせ。レオラが帰ってくるまで。

「犯罪を犯してまで、何をしようとしてるんですか」

「だから言ったじゃない。大切なモノを奪いに来たって。あ、言ったのはフランだったっけ？ くすくす」

「そんなものを奪ってどうするんですか。罪を犯してしまえば、取り返しが付かない」

その言葉に、アリスは気分を害したようだった。フランをぎゅっと抱いて、クウヤを睨み付ける。

「犯罪者って言うけどね、裏町業だってアリス達と何も変わらないじゃない。裏町業だって、人殺ししてるわ。頼まれたか、頼まれてないかの違いじゃない。なのに、アリス達だけが悪い人になっちゃうの。これって可笑しくない？」

アリスの挑発的な笑みに、クウヤはかっとなって叫んだ。

「犯罪者と裏町業を一緒にするな！ みんな誇りを持って仕事をしているんだ！」

「ふうん……じゃあアリスも誇りを持って人を殺すわ。なら対等でしょ？」

「違う！」

「何が違うの？ ねえ、どこが違うの？」

「それは…！」

クウヤはまた答えることが出来なかった。続きの言葉が詰まって、何も言えなかった。だけど、黙ってしまえば、裏町業者を犯罪者と認めてしまうことになる。そんなことはあってはいけない。裏町は、

犯罪者じゃない。

クウヤの心境を余所に、アリスは言葉を続けた。

「殺した数で悪さの度合いが決まるのなら、アリスよりキミの方が悪い人なんじゃないの？　ねえ、世外れの都合屋さん。キミはあの

『ガヴオット崩壊事件』の時に、一体何人葬ったの？」

「そ……んな、こと……」

「忘れたの？　くすくす、忘れるのが上手なのね。アリスは今までに13人壊してきたわ。だけどキミが屠った数はアリスなんかよりも何倍も多いのよ。数えてないけどね。一国が滅びたんだもの、多いに決まってるわ。ああ、死者も多かつたけれど、負傷者も相当だったみたいだしね。

あの事件のお陰で、一体どれだけの人が喜んで、

どれだけの人が悲しんだんだろうねえ」

汗が、伝う。

クウヤは目眩がしそうだった。ガヴオット事件。自身が『閻鬼』と畏れられるようになった原因。あのことはもう思い出したくないの。

「隙だらけだよ？」

「っ……」

次は、避け切れた。だけど偶然に過ぎない。アリスが声を発しなければ、確実に殺られていた。

そんなクウヤを目にして、アリスは酷く嬉しそうに笑い声をあげた。

「きゃはは！　動揺してるの？　おもしろーい。裏町一の腕を持つ

って言うからどんなのかと思ってたけど、これなら連続通り魔の方が断然強いわ」

「……キミこそ、今の位置じゃ例えそんな大きなナイフでも、致命傷にすらならないよ」

「あれれ？ もう冷静になっちゃった？ つまんなーい。でも……くすくす……それで避けたつもり？ きゃはは！ 世外れも大したことないのね」

「……？」

「それだけ動いたんだもの。もうそろそろ効いてきたんじゃない？」  
途端に、熱さが襲ってきた。これは熱さと言うには生ぬるい、灼けそうな痛み。体が内側から焼かれるような、苦痛。

「うあつ……！」

「くすくす。ねえ熱い？ 熱いでしょ？ 凄く痛いんでしょ？」

「……な、にを、したつ……！？」

「ナイフでね、ちよっと掠っただけでも死んじやうことつてあるのよ？」

「毒、かつ……！」

「これは凄く効くんだけど、即効性じゃないのが玉にキズなの。時間掛かりすぎるわ」

笑いながら言うアリスを、クウヤは最後まで見ていられなかった。立つことすら出来ない程の痛みが全身を襲っていた。

がくりと両膝が地に伏す。立っていられない。熱い、痛い、苦しい、辛い。ただどうにかできる術がない。体が自分のモノではないようだった。

それは、もう死んでしまった方が楽になれるような気さえしてくる永遠の地獄。

「う……ぐつ……くあ……っ！」

「まだ意識があるの？ きゃははは、大人しく気を失った方が楽よ。二度と目が覚めないかもしれないけどね！」

ふわりと、全身が落ちた気がした。絨毯の上に身体が倒れたけど、

衝撃は無かった。もう感覚がおかしくなってきた。

右頬に床が当たっているのを感じて、自分を見下ろすアリスが目に入った。レオラとは違う、その赤い目。血のように冷たい色。

「あ……う、……かはっ……」

自分の吐いた血が、絨毯を染め上げる。どろり、と肺から迫り上がってくる吐き気。そしてもう一度血を吐いた。だけど不思議と鉄の味はしない。ただ焼け付く痛みが全身を廻る。

やっぱり、死んでしまうらしい。この吐血量はもう手遅れだ。あんなにも世界から離れることを望んでいたのに、今はただ後悔がぐるぐる回る。

世界から離れる恐怖を知らなかった。世界から離される苦痛を知らなかった。

ねえ、誰か、聞いて。誰でもいい。誰か、聞いて。

僕はまだ、この世界に居たかったです。この世界から、離れたくなかったんです。

認められなかったのは、僕の脆弱さが邪魔をしたから。

そんな後悔すら、もう、遅い。

「ばいばーい。哀れな都合屋さん」

しゅっ

瞬時に、アリスのすぐ横を缶が飛んだ。壁にぶち当たり、ころころと床を転げていくのを見たあと、反応が遅れてアリスが叫んだ。

「誰!?!」

「大丈夫か!?! クウヤ!」

レオラだった。道外れの始末屋が、ここにいた。

「キミは誰? アリスの邪魔しないでよう」

高い声と、もう一つ。聞き慣れた声でした。だけど、何を言

っているのかはもう分からない。耳はもうその機能を果たしていない。  
手放しそうになる意識の中で、明るい金色が目に入った。赤い、  
紅い目。その人の口が動く。けどもう何も聞こえない。

聞こえるか聞こえないか、それでもクウヤは音を声に乗せた。

「……………れ、お……ら……………？」

「おい、しっかりしろ！ クウヤ！」

「……………」

「クウヤ？ 今、なんて……………？」

聞こえただろうか。僕の言葉が。伝えなくてはならない言葉だったのだけれど。

さっきまでの痛みが、熱さが無くなったと思ったら、すぐに視界がフェードアウトした。なんだか心地よかった。あれだけ痛かった全身が、麻痺したように無感覚になっていた。

最後の最期で、安心したのか、力が尽きたのか。僕は意識を手放してしまった。

『ごめんなさい』

あの言葉が、伝わっていると、良いのだけれど。

「くすくす……………残念でしたあ。世外れの都合屋、安らかとは言えないけど、最期に仲間の姿が見れて良かったじゃない」

「……………おいこら。てめえは一体誰なんだよ？ クウヤに何をしたらゆらりと立ち上がるレオラに、一步も動じずアリスは答えた。

「何って、ちよっと遊んであげただけよ。ガヴォットの話したらね、すっごい動揺しちゃってさ。くすくす、あれじゃあ裏町失格なんじゃない？」

「てめえ……一体何なんだ？ 何が目的だ？」

「きやははは！ そんなに悠長にしても良いの？ その都合屋さん、もうすぐ死ぬよ」

「くそつ！ なんだ？ 毒か！？」

「当たりよ。くすくす。それねえ、ミス・マツドの新作だから、解毒剤なんて陳腐なものは無いのよう」

「『ミス・マツド』だと？」

「そう。無差別大量殺人犯の発狂者だよ。くすくす、怖いでしょう？ きやははは！ きやはははははは！」

高らかに響く笑い声と共に、アリスはベランダから姿を消した。

レオラは追うことをせずに、すぐさまクウヤの元へ駆け寄った。

もう意識は無いらしい。力を失ったように、ぐったりと倒れている。

「しつかりしろ、クウヤ！」

「……あ、さ……にい……」

虚ろに紡がれた言葉は、和語だった。その言葉が何を指しているのかなんて分からなかった。だけど、声を発した。クウヤは声を発した。声が出せる内はまだギリギリ大丈夫だ。

まだ、まだ間に合う。一刻も早く処置を。完全に意識を手放す前に。

レオラはいまの状況を走り書きしたメモをヒデオシの首輪に挟み込んだ。

「ヒデオシ！ 隣町の外れにカノンが住んでる。もし無理なら、カノンじゃなくても良い。裏町の誰か、クウヤの知り合いにこのメモを渡してくれ！」

白い子犬は主人を気にしながらも、その4本の足を走らせた。いつの間にか一面に積もった雪と同化して、子犬の姿は見えなくなつた。

「頼むぜ……」

レオラは、急いでクウヤをその背に背負った。予想以上に軽かつ

たその身体と、驚くほど冷たくなってきている手足。だけど、毒のせいかな身体だけが熱を持ったように熱い。息はもうしていない。

「お願いだから、間に合ってくれ」

レオラの歩いた後には、クウヤの血が転々とまるで足跡のように、積もった雪の上へ落ちていった。

白い地面に、ぼつりぼつりと赤が浮かんでゆく。気味が悪い。あのアリスの目のようだった。

レオラはすぐに走り出した。行くなら、中央病院しかない。

「死ぬなよ、クウヤ」

返事は、もう何も無かった。

\*

僕らはいつだって。



67・アリスの孤城 【彼の謝罪と贖罪、彼への懺悔と後悔】（後書き）

生きていたかった。

全てが、嘘のような夢だったらしいのに。

\*

城下町の外れ、小さな丘。

その小さな家の前で、一面の雪に同化した子犬が必死に吠えていた。子犬の首輪には、小さく折り畳まれたメモ用紙が挟まっている。子犬は、レオラに使いを頼まれたヒデヨシだった。

ヒデヨシの吠えている先、ソリティア家。ここに住んでいるカノンに、ヒデヨシは助けを求めに来ていた。

長い間吠え続け、やっと扉が勢いよく開かれた。

「お待たせしました……って、お前、ヒデヨシじゃん。どうした？」  
カノンが足下で忙しなく動くヒデヨシに向かって尋ねた。くるくるとカノンの足下をまわりつくように動く。身動きの取りづらくなったカノンの後ろから、シオンが顔を覗かせた。

「姉さん、どうしたの？ あ、クウヤのこのヒデヨシだっけ」

「おうシオン。なんか知らないけどさ、ドアを開けたらヒデヨシが居てさあ………そういや、クウヤは一緒じゃないのか？」

もう一度カノンが尋ねた。ヒデヨシは敬愛する主人の名前を聞いて、慌てたように大きく吠えだした。今にもカノンに飛びかかりそうな勢いだった。いや、飛びかかっていた。

「うおっ!？　ちょ、落ち着けヒデヨシ!」

「姉さん、ヒデヨシの首に何か挟まってるよ!」

「なんだ？　コレを読めばいいの?」

メモ用紙は慌てて折り畳んだのか、四辺がまちまちになっていた。血の付いた手で書いたのか、うっすらと茶色に変色した血が掠れて付着していた。

ただ事ではない。カノンは急いでメモを眼で追った。

“クウヤがやられた　中央病院　レオラリアナ”

「……どういうこと?」

メモを持って固まったままの姉に、シオンが聞いた。急いで書かれたことが分かる荒れた文字、単語が並ぶだけのメモ、うっすらと血の後が見られる紙。異常事態。

「分かんないけど、とにかくやばい。ヒデヨシはこのことを伝えに来たんだ」

足下の子犬を見て、カノンが続ける。

「やられて、病院へ行っただってことは、相当ケガをしてる……シオン、おれは今から病院に行っ、」

「僕も行く」

「駄目。絶対に駄目だ。あのクウヤがやられたんだ……危険過ぎる。それでもシオンは諦めない。カノンに詰め寄って言った。

「行く。絶対に行く。クウヤは僕の友達だもん」

「シオン!」

怒ったカノンが大声を出して、シオンはびくっ、と両肩を震わせ

た。小さくなる弟を見て、思わず大声を出したことを後悔したが、カノンは続けた。

「本当に危険なんだ。クウヤはあれでも裏町一の実力者だ。そんな世外れが『病院へ行かなければならない』ほどの怪我を負わされた。これがどれくらいなの『異常』かは分かるよな？」

「……分かった。僕、留守番してるよ」

「ありがとう、シオン」

カノンは急いでコートを着込み、ヒデヨシと共に丘を走り下った。あとに残る2種類の足跡がシオンを孤独にさせる。

一面を真っ白な世界に変えて、雪はもう止んでいた。

\*\*\*\*\*

白い天井に白い壁、白いシーツに白い床。白ばかりの世界の中で、クウヤは眠っていた。かすかで弱いが、息をしている。その隣で、レオラが椅子に座って付き添っていた。

レスティナ中央病院　アリスの襲撃から1時間も経っていないが、すごく長かったように感じる。

「生きるよ……絶対に」

静かにクウヤへ声を掛けた。個室だからか、やけに自分の声が響く。

自分には、どうすることも出来ない。何もしてやれない。そういえば、ヒデヨシはカノンに会えたのだろうか。伝言は伝わったのだろうか。色んな考えが、頭の中の思考を支配していた。色んな推測と、憶測と、後悔とが。

その中でも大半を占めているのが、あの言葉。クウヤがオレに言った、最後の言葉。

『ごめんなさい』の、声。

何に向けて言ったか分からない、謝罪の言葉。これはオレとクウヤの約束だった。

「お前、昔カノンに殺してくれって依頼したらしいな」

「したね。断られたけど」

「その死にたがりの性格、直さねえとこっち側じゃやってけないぜ」

「五月蠅いな。自殺じゃないだけマシだろ」

「そうか？ 自分で始末を付ける方が他人に迷惑かけてなくていいじゃん。お前は自分で自分を終わらせるのが怖いから、カノンに頼んだんだろ？」

「そうだよ。自殺は怖いからね。だけど、自分の為じゃない、他の誰かの為に死なないといけないのはもっと怖いよ」

「なんだ、ソレ」

「分かってくれなくていいよ。むしろ、分かってくれることなんて望んでないし」

「あ、そ。でもさ、こっやって食っていけるだけの場所と仕事があるんだから、当分はそういう考え捨てるよな」

「なんで？」

「オレにも昔色々あってさ。その所為か、死にたがる奴はどうも苦手なんだ。苦手っつーか、苛々するっつーか……この世界には生き

たくても生きていけない奴らがいるんだ。この日を生きられなかった奴らの分も生きることが、この日を生きられた奴の義務だと思っ  
んだよな」

「偽善だね」

「偽善で結構」

「理想だね」

「なんとでも」

「悪いけど、僕はそうは思わないよ。生きたいと思う人が居るのだから、その対極に死にたいと思う人が居るのは当然の話でしょう。

世界にはあちら側とこちら側の世界がある。白には黒があるように、表裏があるんだ」

「全てではないけどな」

「……じゃあこうしようよ。もしも僕が、この世界で『生きたい』  
と思える日が来たのなら、きみに謝るよ。僕の考えは間違っ  
てまじた、ごめんなさいって。あくまでも、もしもの話。仮定  
だけだね」

「捻くれてるな」。お前、絶対謝らないタイプだろ」

「一応約束だけしておいてあげるよ」

「そりゃどーも」

「ごめんなさい……か……」

クウヤは、謝った。あの時、意識を失う寸前に、このオレに。だから、あの言葉には続きがある。それを、オレは知っている。クウヤの言いたかったこと。

『ごめんなさい、生きていたい』と。

「クウヤ、お前はまだ死んじゃ駄目だ……」

レオラの呟きは、誰にも聞かれることは無かった。

全てが、夢のような嘘だったら良かったのに。

\*

68 アリスの孤城 【鬼と殺人鬼の約束、謝罪の理由】（後書き）

やっと、生きていたいと、思えたのに。



## 69・アリスの孤城 【鳴神の不安】

自分だけは、大丈夫だとしても、思っていたの？

\*

大きな屋敷の、人形が溢れかえる部屋にアリスは居た。フランを抱きかかえ、ひたすら笑い声をあげながら喋り続ける。

「くすくす。ねえフラン。最後に道外れの始末屋に会えたわねえ」

「ソウダネ！ アエタネ！」

「世外れは殺しちゃったし、次は誰にしようか？」

「アリスハ、イツマデ 殺スノ？」

「きやははは！ そうねえ…アリスの大切なモノが見つかるまでね。さあ、次は誰にするの？ クロツク」

アリスが後ろを振り向くと、大きな男が立っていた。クロツクと呼ばれたその男は、胸のポケットから懐中時計を取り出して、答える。

「ちくたくちくたく…今から6分48秒前にミス・マッドが出かけた。大方、何か面白いモノでも見つけたのだろう…ちくたく、しまった。もう7分前の話だ」

「そう。ミス・マッドが出たのね？　きっと大物を釣ってくるわあ。きやははは、きやはははははは！」

クロックは静かにアリスの頭を撫でた。

「アリス。コヒナタが暇そうにしてたぞ」

「あらそう？　そりやそうでしょうね。だってこの前に連れてきた“街外れの処理屋”はつまらなかったものね」

アリスはフランの両腕を交互に動かしながら喋る。フランのスイッチは切られたようで、何も音を発さなかった。

「あまりにもつまらなかったから、ミス・マッドのモルモットにしてあげたの」

「そうか」

そういつてクロックはまたアリスの頭を撫でた。アリスは心地よさそうに目を瞑った。

\*\*\*\*\*

「クウヤっ！」

大声をあげながら、カノンが病室へと駆け込んできた。傍にヒデオシは居ない。病院へ連れてこれないので、外に繋いできたらしい。カノンはベッドの上で静かに眠るクウヤと、その隣に座るレオラを交互に見て顔を歪めた。

「カノン……来てくれたんだな。悪い、突然あんなメモ」

「そんなことはいいんだ。クウヤはどうしたんだ？　何があった？　クウヤの容態は？」

「容態は…かなり良くない…解毒剤が無いんだ」

「解毒剤？ 毒か」

「ああ。医者も見なかったと言っていた。新手のモノだ」

そこでカノンはもう一度クウヤを見た。眠ってはいるが、顔色が悪かった。余っていた椅子に腰掛けて、シーツの上に置かれたクウヤの左手を握ってやる。掌は、驚くほど冷たかった。

「手が冷たい…」

「血を、吐いた。それも結構な量だ」

レオラは苦い顔をして、カノンに向き合った。

「医者も分からないような毒じゃ、対処のしようが無い。静かに眠ってるだろ？ 今はただ身体を薬で誤魔化して一時的に落ち着いているだけなんだ。その内、この鎮静剤の効果もきれる。そしたら、もう一度激しい痛みが襲うらしい。その時は、」

一度言葉を切って、レオラが俯いた。

「覚悟しなきゃいけない」

カノンの瞳孔が、微かに開いた。

「…誰だよ？ 誰がやったんだ？」

「アリス 自分のことをそう呼んでいた。銀髪にオレより薄い赤目だった。歳はお前んトコのシオンと同じくらい」

「アリス？ ……知らない。聞いたことがない」

クウヤをここまでにしてしまうほどの実力者だ。有名でない筈がない。だが、カノンも聞いたことの無い名前だった。

「オレもだ。あと、少なくとも協力者がいる。『ミス・マッド』って知ってるか？」

レオラは、アリスが話していた『毒の制作者』の名前を出した。自分は知らないが、情報通の便利屋とも成れば、話は変わってくるかも知れない。思った通り、カノンは首を縦に振った。

「それは聞いたことがある。確かどこかの街を一つ消滅させた『不可思議な気狂い』の別称だ」

「不可思議な気狂い？」

「聞くところに寄ると、毒使いだそうだ。消滅させた街の住人は、奇妙な死に方をしていたらしい。元は高名な医者だったそうだが、今は無差別殺人で指名手配されてるはずだ。正式名称は『ミステリアス・マッド』略して『ミス・マッド』」

「指名手配されてるにも関わらず、未だにあらゆる場所で犯罪を犯しているらしいと噂の、神出鬼没の犯罪者ですわ。わたくしも、一度だけお会いしたことがあります」

聞いたことのある、透き通った声が病室に響いて、ぱつ、とカノンとレオラが後ろを振り返った。音もなく開けられていた扉のすぐ近くに、赤い着物を着た朝葉香が立っていた。

「アサハカ！　なんで此処に？」

「オレが電話したんだ。魔女代理の異名を持つコウヨウツキなら、毒の知識があるかと思って」

しかし、朝葉香は首を左右に振る。暗い表情だった。

「残念ながら、わたくしには解毒剤に対する知識が備わっておりませんの……お力にはなることは出来ませんわ……」

言い終えて、朝葉香はカノン達の方へ近付いた。心なしか、顔色が悪いようだった。和国から無理をして此処まで来たのかも知れない。カノンが慌てて立ち上がって、朝葉香を椅子に座らせる。

「なあ、大丈夫かアサハカ。顔色悪いぞ」

「ええ……昨日から、調子が悪くて」

小さな声で、朝葉香が続ける。カノンの右腕を、ぎゅっと握っているその手は、僅かだが震えていた。朝葉香の様子のおかしさに気付いて、カノンが尋ねる。

「何か、あったのか？」

「わたくしの、」

「え？」

「わたくしの妹の形見が、昨日、盗られましたわ……」  
「今にも泣きそうな声だった。」

「わたくしの命と同じくらい大切にしていました。なのに、昨日、わたくしの部屋が荒らされていて……香葉月家の家宝である扇子と共に、失くなっていましたの……」

朝葉香はカノンの腕を握って放さなかった。カノンは、そつと背中を撫でてやる。

「『アリス』だ……」

「ああ」

レオラも同じことを考えていた。しかし、分からない。何故裏町ばかりを狙うのか。何故、モノを盗む必要があるのか。

黙り込んだ二人に、落ち着きを取り戻した朝葉香が話し始めた。

「わたくしの妹は、ミス・マッドに殺されました」

「なん、だと……？」

レオラが途切れ途切れに聞いた。声が出せないほどに驚いたカノンは、ただ朝葉香を見ているだけだった。

「妹の名前は、コウヨウツキ香葉月ハツキ。わたくしと二人で代理屋をしていました。5年前、ミス・マッドが和国の街を消したとき、妹も一緒に消されました。毒を受けて……熱さを訴えて気を失いました。多量の吐血をして。そして2日後に……死にました」

「それって……」

レオラが息を飲んだ。

「ええ、そうですね。貴方が先ほど電話で、わたくしに教えてくださいましたことと同じ。都合屋の症状と全く同じですわ」

「そんな……！」

カノンが思わず声をあげた。朝葉香は何も言わなかった。これからのことを、朝葉香は嫌と言うほど知っている。

沈黙に包まれる病室で、小さな声が聞こえた。クウヤだ。

慌ててカノンがクウヤの額に手を置くと、少しだけ熱くなっていた。僅かに顔を歪めて、未だ眠っている。

「ア、サ……に……」

「アサにい……？ 朝飛のことか？」

レオラがしつかりと頷いた。

「レオラ、朝飛に連絡はしたのか？」

「いや……まだだ。するべきかどうか、迷ってて……今から電話してくる。クウヤを頼む」

「分かった」

病室には2人だけになった。カノンがクウヤの額に何度か手を当てて、病室を出た。朝葉香にクウヤを頼んで、少しでも熱を下げようと、タオルを冷やしに行った。

クウヤと二人きりになった病室で、朝葉香が声を掛けた。聞こえるはずが無いが、それでも声を掛けた。聞こえ

「都合屋、しつかりなさい」

返事の代わりに、また兄の名を呼んだ。夢でも見ているのだろうか。クウヤはずっと魘されている。朝葉香はクウヤの様子を見て、嫌なことを思い出した。

妹も、うわごとのように自分の名を呼んでいた。何度も、何度も死ぬまで「アサ姉」と呼び続けていた。

最後の、表情が、目に焼き付いている。

「貴方が死んでしまったのは、張り合う相手が居なくなってしまうすわ……」

2人が戻ってきたのは、すぐ後のことだった。

\*\*\*\*\*

夕方も近付いた頃、朝葉香が切り出した。

「カノン。貴女はもうそろそろ帰った方が良いでしょう。シオンが家で待っているのでしょうか？」

その一言に、レオラも賛成した。

「そうだな……何か分かったら連絡するから、取りあえずソナチネに戻った方が良いでしょう」

二人と違って、まだ小さな家族のいるカノンは、何時までもここに居るわけにはいかなかった。

クウヤのことも心配だったが、半ば無理矢理に置いてきたシオンのことも心配だった。カノンは、明日にシオンも連れてもう一度ここへ来ることを約束し、家路へ付いた。クウヤの熱は下がらないままだった。

家に帰る道で、カノンはアリスについての情報を脳内で整理した。兎の人形、ナイフ、銀髪に赤目。しかしどれも知らないことだった。どれだけ記憶をたぐり寄せても、そんな犯罪者は見たことも聞いたこともなかった。

ましてや、シオンと同じくらいの年齢だなんて。

家の前まで来て、カノンは思考を一旦中断させた。あれだけ行きたがっていたのに、置いてきてしまつて、シオンは相当怒っているに違いない。

出来るだけそーっとドアを開けて、カノンは昼間、ヒデヨシが来るまで居た客間へ移動した。

「シオン、ただいまい」

しかし、やはりというか居なかった。何時までもここに居るわけないか、そう思い、カノンは二階へと階段を上っていった。

廊下で、機嫌を伺うように声を掛ける。

「シオン？」

だが、返事は無い。お腹を空かしているのではないかと思つたが、

もしかすると眠ってしまったのかも知れない。

「たーだーいーまー」

まずはシオンの部屋を開ける。だが、そこには読みかけの本が散らばるだけで、ベッドにも机にもシオンの姿は無かった。

カノンは変だと思いつつも、自室のドアを開けた。やっぱり、ここにも居ない。というか、ここへは勝手に入るなと常々言っているので、ここに居るわけ無いのだが。

二階にある最後の部屋　ジンの部屋を開けたが、弟の姿は何処にも無かった。

「シオン、シオン？」

二階には居ないと判断し、カノンはもう一度階下へ戻った。もう音を立てないようにするのは止めたらしく、どたどたと階段を下りた。

「シオン？　帰ってきたぞー？」

トイレ、バスルーム、書斎、キッチン。それらの何処にもシオンは居なかった。

何処にも居ないということは、やはり最初の部屋か。カノンはゆっくりと客間のドアを開けた。一番初めに見た此処へと戻ってから、カノンはやっと異変に気付いた。

斬りつけられた痕のあるソファ、倒された本達、僅かに位置の動いた形跡のある机、そしてシオンの大切にしていた絵本の表紙が、ズタズタにされて落ちていた。

しかし、全てのモノに、カノンは視線を動かさなかった。これらのどれにも気が向かなかった。

「……………シオン？」

彼女の綺麗な蒼色の眼に映ったのは、絨毯に残る、鮮やかな深紅の血の痕だけだった。



\*

自分だけは、大丈夫だと、思っていたかった。

69 アリスの孤城 【鳴神の不安】（後書き）

どろくへ 行って しまったの

70・アリスの孤城 【孤独の海に染まる世界】

溺れる溺れる、全て。  
助けて助けて、誰か。

\*

例えば、そう。それは自分の中にあつた筈の何かが、するすると抜け落ちていく感覚によく似ていた。しっかり持っていたはずなのに、いつの間にか知らない内に、このちっぽけな掌から落っこちている。そんな感覚。

カノンにとつてそれは、酷く恐ろしいことだった。

お前には、何も持つことなんて出来ないんだと、そう言われているような気がした。

カノンは動機が激しくなってきたのに、自分でも気が付かなかった。ただ、もう自分一人の力だけでは立っていられなかった。

いつのまにか、両膝は地面へと付いていた。膝をついた絨毯には、転々と跡の残る血痕が映っている。カノンはそれを、至極虚ろな目で見つめていた。もうその目は、何も映していなかった。

死にたい。いますぐ、死にたい。

カノンはまともな答えを出せない頭で、ただひたすら思った。ぐるぐると、同じ言葉ばかりが頭の中を回る。吐きそうなくらい、気持ち悪かった。いつそ、血とか内臓とか、自分を構成する全てのものを吐き出してしまいたかった。

耐えられない。もう、止めてしまおう。

カノンはふらふらと覚束ない両足を引きずるようにして、ようやく立った。その脚が進む方向は、自然と愛用の銃を探していた。あれなら、一発で楽に終われる。

客間の扉まで歩いていった時だった。カノンの右足に、何かが当たった。

下を見ると、表紙がナイフか何かでズタズタにされた絵本。シオンが気に入っていた絵本が置いてあった。分厚い本なら沢山あるのに、どうも子供向けの絵本が無いこの家の為に、カノンが手作りしたシンデレラの絵本だった。

それを見て、カノンは進むのを止めた。

シオンは、おれを独りなんかにしな。独りにしないと、思ってたのに。

カノンはいつの間にか電話の受話器を上げていた。死んでしまうのは、後にしよう。もう少し、独りに耐えよう。受話器の向こう側

からは、呼び出しの音が永遠のように鳴っていた。

\*\*\*\*\*

「都合屋は、今年で幾つになりますの？」

病室の窓際にある椅子に座って、朝葉香がレオラに問いかけた。

「もうすぐで15歳。カノンが、この前そう言った」

扉側の椅子の上で胡座を掻いていたレオラが答えた。2人は丁度、ベッドを挟むようにして座っている。真ん中にいるクウヤは先ほど薬を投与したお陰で、いまは落ち着いてるようだった。静かに眠っている。

夕日の朱色が窓から差し込んで、真っ白だった部屋は、少しだけ染まって見えた。

「15歳ですか。まだ、子供ですのに」

「そういうお前もオレも、まだまだ子供だろ」

「それでも、この子より幾分かは大人ですわ」

「……で、コウヨウツキは何が言いたいわけ？」

「こんな、わたくしたちよりも幼い子が、裏町で一番になるほどの実力をもっているなんて……驚異だとおもいませんか？ 表ならまだしも、この裏でなんて」

「クウヤは、生まれが特別だからな」

朝葉香がぼつりと「忍の、桐生 空夜」と呟いていたのを、レオ

ラは見ていた。やはり、和国ならそういう情報は自然と入ってくる。クウヤの生まれが何処なのかくらい、朝葉香は当然知っていたのだろう。

朝葉香は話を続けた。

「始末屋。わたくしは最近、よく思うことがありますの」

「なにを？」

「裏町業についてですわ」

そこで朝葉香は一旦言葉を切った。少しの間クウヤを見つめ、もう一度窓の外を見た。昼間積もった雪は、未だ溶けていない。朱色が反射してキラキラ眩しい外の景色を見下ろしながら、朝葉香は続けた。

「わたくしたちは、きつと愚かな存在ですわ。仕事の内で、見ず知らずの他人を陥れ、奪い去り、拳げ句の果てには殺すことだって有ります」

「殺しの依頼があれば、な」

「そして、依頼の内容次第で、国一つ消し去ることすらしてしまいますわ。そこに自分の意志があっても、無くても」

レオラは目を瞑って朝葉香の声を聴いていた。国一つを消す。それは始末屋だとか、処理屋だとか、最後屋の管轄だった。朝葉香の言うとおりだ。オレ達は、自分の意志に関係なく、いとも簡単に何かを壊せる。

「お前は、何が言いたいんだ？」

「……簡単なことですわ。わたくしたちは犯罪者とそう変わらないということですよ。あのミス・マッドがやったことも、貴方がやったことも、結局元を辿れば同じこと。前者は街を滅ぼし、後者は国王を暗殺して国を壊した。規模的に言うので有れば、最早どちらが犯罪者なのか分かりませんもの」

レオラは胡座を搔くのを止めて、行儀良く座った。そして、静かに答える。

「つまり、オレたちのやっтерることが必ずしも『正しい』訳じゃない

いと？」

「始末屋。わたくしたちは、犯罪者でしょうか？」

「オレは……」

じい、と睨むように見つめてくる朝葉香の視線を、軽々と受け止めてレオラは言った。

「そういつぐだぐだ考えたりするのは苦手なんだ。言葉遊びならカノンにやってやれよ。きつと、オレなんかよりも、ずっといい答えを出してくれるさ」

カノンはこういう言葉遊びが得意だった。他人を言いくるめるのが、なんだかやたらに上手かったのを覚えている。

レオラは壁にかかってある時計を見て、時刻を確かめた。5時10分前。

「そっいや、面会時間が過ぎたら、お前今日はどうすんの？ また和国に帰んのか？」

「その必要はありませんわ。香葉月家の力で、わたくしたちは面会時間など気にせず、に此处にいてもいいのですから」

「泊まり込みか」

「いつ何時また敵が襲ってくるか分かりませんもの」

レオラは不思議に思った。あれだけ毛嫌いしていたクウヤのことを、一番心配しているのは朝葉香ではないのか。朝葉香は、思っていたようなヤツじゃないかもしれない。

と、そこで病室のドアがノックされた。

「失礼します。レオリアナさんはこちらにいらつしゃいますか？ 入ってきたのは看護師だった。きよるきよると病室を見渡している。」

「あ、はい。オレですけど」

「お電話が掛かってきてます。ロビーの方へ来てください」

「電話…？ えつと、誰からですか？」

「ソリティア、と言ってましたよ」

「カノンが家に着いたのですわ」

朝葉香が割り込んで言った。

「だけど、変じゃないか？ 家に帰るだけなのに、少し時間が掛かりすぎてる」

「雪道で手こずったのでしょう」

「ああ、そうか」

レオラは取りあえずクウヤを朝葉香に任せてロビーのある1階へと看護師と一緒に降りていった。クウヤの病室は個室ばかり集めた一番高い位置にあるので、階段でおりていくには少し時間がかかった。

ロビーにあるたくさんの電話の中から、薄汚れた白い受話器を手渡される。どうして病院はこつも白色の要素が多いのだろうか。レオラはそおつと耳に当てて、電話の向こうに居るであろうカノンへと声を掛ける。

「もしもしカノン？ オレだけど」

「……な、い」

酷く、小さな声だった。今にも消えて無くなってしまいそうな声。上手く聞き取れなかったレオラが、受話器の向こうがわへと聞き返した。

「は？ ごめん。よく聞こえないんだけど、」

「いない、どこにも……居ないんだ。帰ったら、家は、空っぽで……床に血が……どうしようおれ、また、独りに……。シオンが、おれ、すぐに探したけど居ないんだ、シオンが……血が、紅いのが落ちてて……赤が、赤色が……嫌だ、やだ……やだよ。また、独りになる。もう嫌なのに、嫌なのに、絶対に嫌なのに、居ない………居ないんだ」

怯えた声で、呪文のように『居ない』を繰り返すカノン。尋常では無い様子に、レオラは少し焦る。

「大丈夫か、お前……？ カノン、絶対に電話を切るなよ。落ち着け、何かあったのか？ シオンが見つからないのか？」



「レオラ、どうしよう……あの時と一緒になんだ……」

「カノン？」

「あ、あの時も、大丈夫だって思ったた、のに……い、居なくなっちゃって、独りになっちゃって……あの子もきつと、そうなんだ。おれはまた独りになるんだ……！　いつもいつも、みんな帰ってこなくなるんだ……！　あたしが何も持ってないから……繋ぎ止めておけるモノが、一つも無いから！　だから、あたしは、すぐに失って。呼び止めたいのに、理由が無いから、どうしよう……」

カノンの語尾が消え入りそうになっていた。ここで見失ってしまった。カノンは無くなるんじゃないかと思うくらい、希薄だった。レオラが慌てて大声で話す。

「しつかりしろ、カノン！　お前は一人じゃない！」

「あ、あたし、もう駄目だよ……！　耐えられない……耐えられない……もう、いやだ……」

カノンの動揺は半端無かった。カノンの普段言い慣れている一人称すら変えてしまう程に、気が動転している。それはレオラの知っているカノンの姿ではなかった。『あたし』なんて言葉、レオラは一度としてカノンの口から聞いたことはなかった。それくらいに、動揺している。

「……どうしよう……見えない……」

「見えない？」

「色が、ない。全部白黒なんだ……全部、全部が……。あたしが独りだからだ、独りになるからだ……レオラあ……あ、あたし怖いよ……うっ……シ、オンがあ……居ないんだ、ひつく……う、だれ、も……いなくてえ！　あ、あたしには、何も、無いんだ……」

「カノン待ってる、すぐそっちに行くから。一人じゃないからな！　お前は一人じゃないから！」

電話を切つて急いで病室に戻る。階段を駆け上つていった。病室のドアを雑に開けた所為で、五月蠅い音が響き渡ったが、それすらも気にしている余裕は無かった。慌ただしいレオラの様子に何か異

変を感じたのか、すぐに朝葉香が立ち上がった。

「どうしましたの？」

「カノンがやばい、何かあったみたいだ。酷く動揺してる……ちょっとオレ、行つて来るわ」

「カノンにも？ 一体何が」

「さあな。取りあえず向こうに着いたら電話する。あとを頼むな」

「了解しましたわ……始末屋」

「あ？ なに？」

「何があつたのかは知りませんが、あの子を独りにしないでくださいね」

「ああ。一人なんかにしねえよ」

「違いますわ。あの子は『一人』には慣れてます。だけど『孤独』には異常な程に恐怖してますわ。貴方が驚愕するほど動揺しているのなら、きつとそうなのでしょう？ ……急いでいってあげてください、お願いします」

朝葉香はカノンと仲のいい友達だった。だから、カノンが何に恐れを感じているか知っている。その朝葉香が言うのだ。これは忠告ではなく、警告。それも、最終警告。

「……分かった」

そしてまた、ばたんと大きな音を立てて病室を出た。長く清潔で真っ白な廊下を、今まで以上に走ったがそれすらも遅すぎる気がした。階段なんか降りている暇は無い。

レオラは立ち止まり、廊下の窓を勢いよく開けて7階から飛び降りた。着地をして、休む間もなく病院を後にする。

隣町までが、怖ろしいくらいに遠く感じる。

ソナチネまでを全速力で走り抜けながら、忌々しそうにレオラが呟く。

「くそっ……一体何がどうなってるんだよ……！」

答えは、まだ出ない。

\*

見えない見えない、この世界。  
助けて助けて、お願い。

70・アリスの孤城 【孤独の海に染まる世界】（後書き）

お願いだから、もう、誰も、壊れないでくれ。

71・アリスの孤城 【彼女と彼の邂逅】

僕たちは、いつも何かを見失う。  
大切なモノほど、いとも容易く。

\*

『血の色みたいだ』

それが、シオンが眼を覚まして最初に思ったことだった。

ここは一体何処なんだろうとか、何でこんな薄暗い部屋に居るんだろうとか、僕は何で眠ってたんだろうとか、そういう疑問全てを振り切って最初に浮かんだ感想が、それだった。

血のように、冷たい赤色。こっちを見ているはずなのに、何も映していないような二つのガラス玉が自分の方を見ていた。

「あは、やあっと起きたのね？」

「きみは……」

赤い瞳を持つ、銀髪の少女が顔を近づけて、自分の事を凝視する。まるで、自分の中に何かを見つけようとしているかの如く、少女はシオンを見ていた。一体どういうことか、状況判断能力が追い付かなくて、シオンは逃げることも隠れることも出来なかった。

違う、逃げようと思ったけど、体が固まってしまって、動くこと

が出来なかった。その、赤い眼から逃れられなかった。

「きみは、誰なの？」

「くすくす、私はアリス・ブライティンよ。キミの名前は？」

「……シオン」

「シオン？ うふふ、良い名前ねえ。どういう意味？」

「…花の…名前なんだ」

「ふうん」

頷いて、アリスはやっとシオンから眼を離した。ほ、と息を付いたシオンは自分の動機が激しくなっていることに気付いた。

戦慄している？ こんな、自分と同じくらいの少女に。

そもそも、ここは何処なんだろう？ なんでこんな所で気を失っていたんだろう？

冷静に成るに連れて、次々と疑問が浮かび上がってきた。シオンは初めて部屋の風景を見回した。人形、人形、人形。床を埋め尽くさんばかりの布の塊達が、そこに居た。

「アリス、ここは何処？ 僕は、確か家で姉さんの帰りを待っていた……」

さつきよりも遠い場所から、アリスはシオンの方を見て、にたあ、と笑みを零した。邪悪な、だけど純粹に楽しそうな笑み。怖ろしいくらいに、綺麗な笑顔。背筋が、凍り付く。

シオンが顔を引きつらせるのを見て、アリスは笑い出した。

「くすくす…あは、きやはははっ！ このひ弱そうな子はなあに？」

ミス・マッド」

少女が振り返った方向をシオンは見た。部屋の照明が薄暗いせいで、顔はよく見えない。シオンは眼を凝らして少女の肩越しを見た。「んふふ、アリスちゃんへのお土産だったりするのよねー」

部屋の奥から、女の人の声が聞こえた。ミス・マッドと呼ばれた彼女は、ヒールの音をこつこつ響かせながらこちらへと歩み寄ってくる。アリスはまたクスクスと楽しそうに笑って答えた。

「あら、そうなの？ てつきり貴女の新しいモルモットかと思った

わ

「それでも良かったんだけどねー、美人薬使いとしてはもっと熟した成年体の方が、実験に使いやすいすかたりするわけー。ま、ぶつちやけ包容力のある年上が好みなの」

「わがままな科学者ね。どうせ壊す癖に。まあいいわ、貰ってあげる」

「アリガト。あとねー、面白いことが分かったわ」

ヒールの音が止まった。彼女　ミス・マッドはシオンの目の前まで来ていた。

黒縁の眼鏡に、眉毛の上で短く切りそろえられた前髪。高い位置に結われたお団子の根もとには、可愛らしくデフォルメされたドクロと真つ赤なりボンで飾られている。服は白衣を着て、両側のポケットに掌を突っ込んでいた。年は20代頃だろうか。シオンは威嚇するように、ミス・マッドを睨んだ。

思い出した。僕は、この人に連れてこられたんだ。

確か、姉さんが病院へ行ってすぐにこの人が家にやってきて、訳も分からずに攻撃を受けた。そういえば、姉さんのことを搜してるとか言っていたっけ。僕はテーブルの上の果物ナイフを持って、争ったんだ。この人の刃のお陰で、姉さんに作ってもらった絵本がズタズタになったんだ。

それから、僕が逃げようとして……そこからの記憶が無い。

さらに睨み付けてくるシオンに、彼女は話しかける。

「どうう？　私のこと、思い出してくれたかしら？」

「全然」

素っ気ないシオンにつこり微笑んで、ミス・マッドはくるりと方向転換した。後ろではアリスが不思議そうな顔で尋ねていた。

「なあに？　シオンの何が分かったの、ミス・マッド？」

「この子、街外れの便利屋の弟なんだってー。レスティナのほら、

あの古城のある町の」

「くすくす、クスクス……弟？ 確か街外れの便利屋は天涯孤独だつて情報を見た気がするけど？ 弟なんて居るわけないじゃない。何の誤情報かしら？」

「っ！ 僕は姉さんの弟だ！ カノン・ソリティアの、姉弟だ！ 姉さんの家族だ！」

シオンはいつの間にかアリスに飛びかかっていた。自分でも訳が分からないくらいに激怒していた。ミス・マッドも反応仕切れないくらいの速さで、シオンの腕はアリスの首もと目掛けて飛びかかっていった。

「きゃははは！ 危ないじゃない、シオン」

飛びかかったはずだった。

「ねー？ 結構凄いでしょー、この子」

いつの間にか隣に来ていたミス・マッドが、シオンの両腕を後ろで押さえた。少しも動かすことが出来ない。

「くそ！ 離せ！」

「だーめ。離しちゃったら、きみ、アリスちゃんを殺しちゃうでしよ」

押さえられたシオンの眼前にはアリスが楽しそうにこちらを見ている。

「へえ？ シオンはそんなに強いのか？ じゃあやっぱりそのキズは、シオンに付けられたのね、ミス・マッド」

ミス・マッドの首元に貼られた大きな絆創膏を見ながら、アリスは言った。

「そうなのー。てつきり只のがきんちよだと思って油断したらこのザマよ。的確に急所を狙ってくるんだもん、びっくりしたわー。



あ、でももう治ったのよ？ 私の薬を使えばこんなモノ半日で治るわー」

ぴりぴりと絆創膏を剥がしながら、そういやキミの家の絨毯を汚しちゃったんだよねー、とシオンに話しかけて、ミス・マッドはまたにっこりと笑った。

もちろん『咄嗟に急所を狙う』だなんて、そんな技シオンには無い。

急所を狙うどころか、そもそもどこを狙えば良いのかなんて、シオンはカノンから教えて貰わなかったのだ。あの時は、ただ必死になって、がむしゃらに腕を動かしていただけなのだから。

自分は普通の子供なのだから。

「あら、それはどうかしら？」

シオンは何も声に出していないのに、アリスがまるで心を読んだように答えた。

「シオンも、きっとアリスと同じなのよお。本能がそうさせるの。くすくす」

「意味が分からない。さつさと僕の腕を離せ」

冷たく言い放つシオンに、にこにこ笑うアリス。お互い、何も言わずに相手の顔を見ていた。まるで眼を逸らせば負けてしまうかのように。

そんな奇妙な子供達に、ミス・マッドは口火を切った。

「あのさ、アリスちゃん。私そろそろ研究に戻りたいんだけど、この子の腕を放しても良いかしらー？ それとも、二度と使えないように折っておくー？」

「離してあげて。シオンはアリスの物になったんだから」

「はいはい……っと、もう下手な真似はよしなよー？ そいじゃ、ワタシは西棟にいるからね。あと、さつき言い損ねた伝言。3時になったらコヒナタくんがこっちに来るって言ってたわ。大分暇を持って余してるみたいねー。んじゃね」

きい、とドアが閉まる音がして、ミス・マッドが部屋から出た。

自由になつた腕を2、3回動かして、シオンはもう一度アリスを睨んだ。こんなにもシオンが怒りを感じるのは珍しいことだった。それも、得体の知れない感情。怒りと言うには生易しい。

「僕は、物じゃない」

「クスクス…怒らないでよシオン。ねえ、何かして遊びましょう？」  
「嫌だ。僕は帰る」

「帰る？ 駄目よ。シオンはアリスの『大切な物』になるんだから」  
細く歪む赤い眼に、シオンは不覚ながらも魅せられた。本当に、血色のようだ。

「…きみの『大切な物』になる…？」

「そうよ。アリスは『大切な物』を失くしちゃったの。だから、色んな人から奪っているの。いつか見つかるかなって。でも、いままでも色んなモノを集めてきたけど、どれも駄目だったわ…クスクス…」  
「もうこれで何個目かしら？ 今度こそ『当たり』が出てくれないと、困るのよう。さあ、シオン。あなたはアリスの『大切な物』になれるかしら？」

「……………きみは、狂ってる……………」

「くす…クスクス、くす……………きゃははははは！ キヤハハハハッ！」  
高らかに、笑い声が響いた。孤城中に響き渡るかと思うくらい、透き通った声だった。

\*

僕たちは、いつも何かを失くしていく。  
掛け替えのないモノから、順番に。

71・アリスの孤城 【彼女と彼の邂逅】（後書き）

狂っている？ それはあなたもでしょう？

呼び止める声は、掠れていて。  
伸ばした手は、突き放された。

\*

カノンはズタズタにされた絵本を拾い上げて、空虚を見つめていた。頬には、もう今は渴いた雫の筋があった。

表紙をそつと撫でる。ナイフで切り刻まれたソコは、容易くカノンの指に傷を付けた。細く付けられた傷口からは、うっすらと血が滲み出てきたが、カノンはまるで他人事のようにただひたすら表紙を撫でていた。

「なんでだよ」

呟いた言葉に、返してくれる声は無い。

「なんで、おれは、誰も引き留められないんだよ……………」

両膝を抱え込むようにして、カノンは頂垂れた。部屋には、時計の針が進む音しか聞こえなかった。

初めは、お母さんだった。

飲み込まれそうなほどに暗いあの街に、置いてけぼりにされた。良い子にしていれば迎えに来てくれると信じて、ずっと待っていたのに、あの日から母の姿を見ることは無かった。今となっては、顔さえ覚えていない、本当の家族。

おれが、一番最初に無くしてしまったモノ。確かな繋がり、唯一の肉親。

次は、ユリウスだった。

ずっと一緒にいると言ってくれたユリウス。二人は家族だと言ってくれた。だけど、その約束は破られた。あの人は、ユリウスであることを止めた。ユーリさんは、ユリウスを捨てた。だから、ユリウスはもういない。

そして、師匠。

行かないでと、呼び止めたかった。戦争なんかに行つて欲しくなかった。だけど、おれと師匠は血の繋がらない家族。呼び止める権利なんて、無い。

帰りを幾ら待っていても、もう、この家には戻つてこない人。

「……シオン」

弟の名を呼ぶ声は、掠れていて自分の声ではないようだった。

抱え込んだ両腕の間から見える、絵本の表紙は、何かのお姫様の絵。お姫様は、綺麗なドレスを着ているはずなのに、おかしくなつてしまった自分の目には、ただのモノクロにしか見えない。

「見えないよ、なにも…」

さつきから、色という色が見えなかった。カノンの目に映るのは、白と黒の世界。いつもと同じモノを見ているはずなのに、色を失うだけで、こんなにも冷たく感じる。

家族が欲しかった。決して無くなることのない、家族が欲

しかった。

おれの家族は、いつも、おれを独りきりにした。一度でも温かさを知ったこの手は、その掌が離される度に、何も持てない冷たさを鋭く突いた。

お母さんも、ユリウスも、師匠も。

繋がりが欲しかった。確かな繋がりが欲しかった。

繋がりの糸を、ずっと昔に失ってしまったおれは、誰かを呼び止めることができなかった。誰も呼び止められなかった。呼び止める、理由が無かったから。

行かないで、置いていかないで、立ち止まって。

それは、確かな繋がりがあある者にしか許されない言葉。

約束が欲しかった。破られない約束が欲しかった。

おれとの約束は、いつも破られた。大切なことほど、守ってもらえなかった。守って欲しいことほど、破られ続けた。

迎えに来ると言ったお母さん。

ずっと一緒だと言ったユリウス。

絶対に帰ってくると言った師匠。

結局、誰も最後までおれの隣には居てくれなかった。おれの隣は、いつも空白だった。

シオンは、違うと思った。シオンだけは、今度こそは、違うと思っていた。もう独りにはならないと思っていた。

なのに、結局はまた独り。おれの隣がまた空いた。怖い。怖い怖い。独りは、怖い。おれは今、独りだ。

「……………な、んで……………おれ、ばっかり……………」

泣くな。泣くな。泣くな。そう自分に言い聞かすけれど、無意味

だった。シオンがいないだけで、カノンを支えていたモノが全部折れた。いままでのことが、脳裏をよぎる。悪い方向にしか考えられない。

シオンはもう、帰ってこない。カノンの元を離れてから、帰ってきてくれた人なんていなかった。

閉じられた空間に、誰かが飛び込んできた。

「カノン！ 大丈夫か！？」

部屋の扉を開けたのは、息を切らしたレオラだった。全速力で走ってきたのか、苦しそうに、何度も息を吐く。それでも、確かめるように、カノンの元へと来た。

「…レオラ……？」

突然のことで上手く反応出来なかったカノンが、やっとのことで声を出した。

「はぁー……良かったー……」

カノンの前まで来て、へなへなとしゃがみ込む。相当心配したのか、盛大に溜息をついて。

「お前、いつもと違うから、どっかに消えちまうかと思った」

ぼんぼんと頭を撫でるレオラを、カノンは泣きそうな目で見た。

本当は泣いていたかも知れない。

レオラが、いつもの金色の髪じゃなかった。いつもの赤色の目じゃなかった。ただの白黒。

モノクロの世界に人が入り込んできただけで、おれは相変わらずおかしのまま。冷たい世界に、閉じこもったまま。

「あー、もう何泣いてるんだよ？ ほら、早く拭け」

ごしごしと不器用に、袖口で水分を拭き取られる。暖かさが、カノンをほんの少し安心させた。



「何があつたんだよ？ シオンが見つからないって？」

「…血が、落ちてるんだ。もう半分乾いてた」

カノンがそう言うと、レオラは床を見回してソレを見つけた。絨毯の上に落ちている、血の雫。もう変色してきているソレは、レオラに嫌なことを思い出させる。血を流した、あの時のクウヤの姿。

「……争つたみたいだな……… だけど大した量じゃない。大丈夫。万が一コレがシオンの物だとしても掠つた程度だ」

「本当に？ 大丈夫？」

「ああ。安心しろ」

そのナイフに、クウヤと同じ毒が付いていなければの話だ。けどレオラは言わなかった。今は取りあえずカノンを落ち着かせなければ。

初めて見るカノンの動揺に、レオラ自身不安になってきていた。

「あの時、シオンを置いて行かなきゃ良かった。留守番なんて、させるんじゃないかった……おれの所為で、あの子は………もしおれが、ちゃんとあの子の言うとおりに、クウヤの所へ連れて行ってあげてたら、」

「『もしも』の話はするな。キリが無い。これから『どうするか』だけを考える」

「……あの子まで……おれの前から居なくなっちゃったら……おれ、もう、駄目だよ……駄目なんだよ……あの子しか居な……」

「ごっ、と響く音がした。何かを思いつきり殴つたような、鈍い音。レオラが握り拳で、カノンの頭のとっぺんを思いつきり殴つた。

グーで頭をやられたカノンは、両手で押さえながらレオラを睨んだ。

「…つたあ…なにすん…」

抗議の言葉をあげるカノンに、容赦なくレオラがもう一度同じ所を殴つた。

「何言つてんだ、お前は。お前はあの子の姉ちゃんなんだろ？ 姉ちゃんなら、弟を守つてやらないと駄目じゃねーか！ お前がそん

なんじゃ、シオンが可哀想だろ！ シオンは何時だつて問答無用でお前のこと信じてただろ？ ならお前も信じてやれよ！ 姉ちゃんの役目って、そういうことだろーが！ 弟を信じてやらないで、何が姉ちゃんだよ。大体、なんでシオンがお前の傍から離れなきゃいけないんだ！ シオンはお前のことを嫌いな筈が無いだろ。あんだけ慕ってたじゃんか。あんだけ好きなんだから、帰ってこないはず無いだろ！」

「だ、だつて、姉弟って言つても何も無いんだよ！ ただ勝手に言つてるだけなんだ！ 血の繋がりになんて無いし、」

「お前の欲しがつてた繋がりにってそれだけなのか？ 違うだろ。お前とお前の師匠だつて血より強いもんで繋がってたんだろ？ オレと師範代だつて、ずっとそうやってきた。そりゃ、クウヤと朝飛みたいに、血の繋がりにって大切だ。だけど、家族って言うのは血とかそういうもんだけじゃねーだろ。オレとかクウヤとかコウヨウツキとかだつて、言つちまえば家族みたいなもんだろ。ずっと、一緒にやってきたんだから、そう呼んでも良いじゃんか」

「うん……」

頷くカノンを見て、よし、とレオラが優しく頭を撫でる。

「いいか、こんなにオレが怒るのは滅多に無いんだからな。憶えとけよ、お前を独りにする奴なんてこの世に居ない。もし、みんながお前を独りにするようなことがあつても、例え何があつても、オレだけはお前を独りになんてしない。絶対に」

その瞬間、世界に色が戻ってきた。

カノンの目の前に居るレオラの髪は金色で、眼はいつも通り綺麗な赤色だった。

元の世界が戻ってきた。

「レオラ」

「あ？」

「……ありがとう。なんか、落ち着いた」

笑ったカノンを見て、レオラも笑顔になった。座り込むのを止め、

立ち上がって当たりを見回す。

「よっしゃ。んじゃ取りあえず、病院に電話だな。コウヨウツキに現状を報告しねえと」

テキパキと動くレオラの背中を見つめながら、カノンがもう一度声を掛けた。

「なあレオラ」

「どした？」

「迷惑掛けて、ごめんなさい」

「……………気にすんなって」

レオラの表情が曇った。それは一瞬のことで、彼はすぐに笑い返したから、カノンは気付かなかった。

彼の頭の中で、あの時の台詞が反響した。

\*

きつと、今度は、無くさない。

72・アリスの孤城 【家族、姉弟、繋がり】の糸 (後書き)

掌の温もりを。

### 73・アリスの孤城 【呪われた深紅色】

彼女と彼は、同じ。  
彼とあの子は、違う。

\*

12月24日、クリスマス・イブの日付へと変わった午前2時。  
あの悪夢のような2つの襲撃は、もう昨日の話となってしまった。  
レオラとカノンがレスティナ中央病院へと戻った頃、丁度、情報  
屋フィンも動き出していた。

「サスケ」

隣で羽を休めているサスケに、フィンは声を掛けた。少し、震えてたかもしれない。

『はい？ どうかありませんか？』

「ちよつと、行ってくるね」

『……………いま、なんと？』

「行ってくるね、って言ったんだけど」

『フィン、一体どこへ行くんです？ ……まさか、外に!？』

ばたばたと両翼をばたつかすサスケに、フィンはコートのフード

を目深に被りながら言った。これで全身は黒色に包まれた。

「ソリティアとレオリアナから、さつき依頼を受けたんだ。情報が必要らしい。きつと最近ボクが集めていた情報があるんだと思う。ボクも、彼等に言いたいことがあったし。そういうわけで、いつてきます」

無表情のまま、抑揚の無い声でフィンがぶつきらぼつに言って、ドアを閉じた。

ただ一羽取り残されたサスケは、呆けることしか出来なかった。あまりにも突然すぎる、フィンのお出。明日は槍でも降るんじゃないだろうか。

しばらくクチバシを開けていると、たった今閉じられたばかりの扉が開かれた。フィンだ。少しだけ空いている扉の隙間から、サスケを伺うように見ている。

「……………サスケも、行く？」

『い、行きます！ 行くから待つてください！』

\*\*\*\*\*

レスティナ中央病院、7階。一番端に位置するクウヤの病室で、レオラとカノン、朝葉香がいた。本来なら深夜2時など、面会時間はとつくに過ぎているのだが、それは朝葉香のお陰で免れていた。「遅い。遅くないか？ フィン」

カノンは落ち着き無く、病室をウロウロしていた。苛立っているのが分かる。

「カノン、落ち着きなさい。いくらわたくし達が焦ったところで、状況は何一つ変わりませんわ」

「うん、分かつてる」

「分かつてません。とにかく座りなさい」

「うん」

返事はしているものの、カノンは動きを止めない。きつと、話を聞いていない。

「……はあ…全然聞いてませんわね」

肩を落とす朝葉香に目もくれず、カノンはまだ行ったり来たりしていた。今度は、そんなカノンを見かねたレオラが声を掛ける。

「不安なのは分かるけどな、少しは大人しくしとけよ。一応、病室なんだし」

カノンは静かに眠っているクウヤを見て、不服そうにボスツと椅子に座った。

レオラがほっとしていると、朝葉香が椅子の脚を蹴ってきた。どうやらカノンが自分の言うことを聞かなかったのに、レオラの言うことは聞いたところが許せなかったらしい。

我慢だ。我慢しろ、オレ。

レオラは無言でその仕打ちを受けていた。

「でもカノン。情報屋のフィン・クロスフィンガーは滅多に外に出ないことで有名ですわよ？ 来るとすれば、彼の使いのクラスですよ」

「そっか。フィンは外に出たがらないもんな」

椅子の上に両足を置いて、体育座りをするカノンが納得して答えた。どうやらその座り方は癖らしい。朝葉香が行儀の無さを注意しようとしたとき、レオラが急にドアの方を振り返った。

「……？」

「どうかしましたの？ 始末屋」

レオラが答えるよりも先に、控えめなノックが病室に響いた。深夜に病室を尋ねてくるなんて、この場合見回りをしている看護士か、依頼を受けた情報屋の使いくらいだ。カノンが飛び上がってドアへと走った。

「待ってたぞ！ サス」

カノンが勢いよくドアを開ける。そして、しばらくの沈黙。何も声を発さないカノンを不審に思ったレオラと朝葉香が、ドアの傍までやってきた。

「んなつ！？」「なぜ！？」

重なる、驚きの声。

「久しぶり、ソリティア。こうやって会うのは半年振りだったっけ。香葉月とレオラリアナとはもう1年近く会ってなかったね」

扉の向こうに居た、予想外の客に、カノン達はただ首を縦に振ることしか出来なかった。

『ホラ、やつぱりみんな驚いてますよ。明日の天気は槍です』

「五月蠅いな」

病室の奥にいるクウヤを見て、フィンの表情が強張る。右手をぎゅっと握りしめ、未だに驚愕したままのカノンに話し掛けた。

「キミ達の欲しがっていた、情報を持ってきたよ」

サスケが行儀良く、頭を下げた。



「『持つてきた』って言つても、お前、手ぶらじゃんか」

流石に病室で騒ぐのは良くないと思い、1階のロビーへと移動した4人と1羽。明かりの付いていない待合室で、来る途中に婦長から無理言つて貸して貰つたランプを囲み、カノンが口火を切つた。

「心配無用だよ。ここにあるから、大丈夫」

そういつてフィンは自分の頭を指さした。どうやら全て記憶してきたらしい。裏町一の情報屋も伊達ではない。カノンに代わつて、今回のことをレオラが問うた。

「来たところ、いきなり質問で悪いけど。クウヤを襲つてきた『アリス』ってのは一体誰なんだ？」

「シオンもだ。まだ、その『アリス』の仕業かは分からないけど……」

2人の質問に、フィンは慎重に言葉を選んで答える。自分の知っている情報を、出来る限り多く、丁寧に。

「そのことについてだけど……まず、質問に答えるなら、ソリティアの弟を襲つたのはアリスじゃない」

「なに……？」

「ただし、アリスの仲間ではある。ミステリアス・マッドだ」

そこで朝葉香の表情が一瞬だけ引きつった。フィンだけがそのことに気付いたが、敢えて何かを言うこともせずそのまま話を続けた。

「ミステリアス・マッドが、城下町から一番近い裏町業者は何処にいるかと尋ねている。昨日の夕方、城下町に来ていた親子連れにね。時間的に、彼女がソリティア弟を襲い、誘拐したんだろう。そしてレオラリアナの質問。『アリス』とは一体誰か。彼女については、情報が皆無に近い」

その一言に、カノンが尋常ではないことを察した。あのフィンが掴めない情報。『アリス』とは一体なんなのか。

レオラがフィンの言葉を反復する。

「皆無に近い？　じゃあ、どんな情報ならあるんだ？」

「それは言えない」

フィンは首を横に振った。

「何故ですか？ お金なら払いますわ」

ずっと黙ったままだった朝葉香が、黙るフィンに詰め寄った。金  
のことで情報を渡さないと思われたのが嫌だったらしく、フィンは  
その無に近い表情を少しだけ歪めた。

「そういう話じゃないよ、香葉月。ボクは確かな情報しか渡さない  
主義だ。確固たる証拠が無い内には、こんな曖昧な情報、流したく  
ない」

「どういう証拠があればいいんだ？ オレはアリスを間近で見てる。  
容姿か？」

「そうだね。とりあえず、見た目の特徴を教えて欲しい」

レオラは出来るだけ詳しく、アリスの特長を話した。ウェーブの  
掛かった、長い銀髪。ゴシック調の黒いドレス。赤い瞳。

「それから、兎の人形を持っていたな。オレが知っているのはこれ  
くらいだ」

「兎…やっぱり……」

口元に手を当て、声色だけは驚いているフィン。そして言葉を続  
ける。

「ボクの知っている限りの『アリス』について、情報を渡すよ。キ  
ミ達を襲った『アリス』は、ある人形師の一家の一人娘だったんだ」  
「人形師の、一人娘『だった』？」

オウム返しに聞くカノンに、深く頷いてフィンは答えた。

「そう。彼女の名前はアリス・ブライティン。この夏に開催された  
『トイズ・ファクトリー・コンテスト』で最優秀賞を受賞した、ブ  
ライティン夫妻の一人娘。受賞作品は、喋る兎の人形フラン」

「兎…！ じゃあ、あのときの人形は…」

レオラの記憶に刻まれている、真っ黒な兎。喋っているところは  
見なかったが、きっとそれに違いない。

「たぶん、フランだよ。それは全世界に向けて発売される予定だっ

た」

「実際にはそうでない？」

「そう。夫妻は、何者かに殺されていた。バラバラに、切り刻まれて。ある裏町業者が、廃墟になった屋敷の内部で、隠されていた死体を発見したらしい。その屋敷はブライティン家の住んでいた家だった。突然の夫妻の失踪に、コンテストの関係者が捜索を依頼したんだ。その調査の中で見つかった、夫妻の死体。関係者は関わることを嫌がって、それ以上は何も言ってこなかったらしい。犯人は、最近まで分からなかった」

そこで、フィンが口を閉じた。主人の代わりに、サスケが話す。『つい最近のことです。その調査をしていた、街外れの処理屋が音信不通になりました。どうやら独自に犯人探しをしていたようで。』

「怪しい屋敷を見つけた」そう言って、出かけた直後です』  
フィンがコートのポケットから何かのメモを取り出した。

『不通から2週間後に見つかった処理屋は、原因不明の高熱を出して、町中を倒れていたそうです。彼はなんとか命を取り留めて、いま入院しています。これが彼の持っていた手帳の一部です』

フィンが丁寧に紙を開く。断片的なことをメモする性格なのか、荒れた字で、何か走り書きしてある。

“ フラン 通り魔？

血

アリス

屋敷

毒

”

「アリス……」

メモの中の単語を見つけて、レオラが呟いた。

サスケが喋るのを止めて、またフィンに交代した。

「夫妻は、娘に殺されたのかもしれない。それが、いまのところの見解。彼がそうなってから、裏町は急におかしくなった」

「おかしくなった？」

「それから、何人かが襲われるか、行方不明になった。そのことに気付く者は、誰も居なかったけど。元々そういう世界だったからね、こちら側は。ボクがこの事実を知ったのは、たまたま調達屋に忠告をうけたからだ。本当に、その忠告を受けていなかったら、ボクですら気付かなかったと思う。裏町は、狙われていたんだよ」

「淡々と言い切るフィンに、レオラが詰め寄って問うた。どこか、怒りが感じられる表情だった。

「『裏町が狙われていた？ なんで早く言わなかったんだよ！ それさえ聞いていれば、クウヤだって少しは……』」

「確かな情報しか流さない。それは、ボクのルールだ」

「譲れない主義。フィンは今にも殴ってきそうなレオラに対して引けを取らずに言い切った。苛立つレオラを、カノンが押さえ、聞いた。

「あとは？」

「アリスについてはそれだけだよ。後は、仲間の存在」

仲間。ミス・マッドのことを思い出した朝葉香が、他にもいるんですの？ と久しぶりに口を開いた。フィンは肯定するように頷いて、話を続ける。

「分かっているのはアリスを含む4人。まず、ミス・マッド。次に、コヒナタという通り名を持つ者。そして大きな男に、アリスの4人男はアリスといるところを確認されている。十中八九、仲間だ」

ランプの光がゆらりと揺れた。蝋燭が残り少なくなってきたのだ。炎が安定しない。

時計を見れば、もう夜中と呼ぶよりは、朝方といったほうがいい気がする、午前4時。

「ボクがキミ達に教えられるのはそこまで」

「ありがとうな、フィン」

「どういたしまして。ソリティア、これはアリスから裏町への宣戦布告だ。ボクも出来る限り協力するよ」

全てを話し終えて、4人と1羽は一旦クウヤの病室へ戻ることにした。後は、その屋敷へ行くだけだ。

立ち上がったレオラに、フィンが声をかけた。

「レオラリアナ。ランプを婦長さんに返しに行くから、付いてきて  
「んあ？ 別に良いけど」

レオラが前方を見ると、廊下を先に歩いていたカノンと朝葉香、そしてサスケが、なかなか来ない2人を心配して振り返っていた。  
「つつーわけで、先に行つててくれよ」

手を振つてカノンが答える。

「分かったー。行こうぜ、アサハカ、サスケ」

廊下の向こうへと消える3つの影を見送つて、レオラがロビーへと方向転換した。

フィンは、ランプを持ったまま、動かなかった。

「さっさと行こうぜ、フィン？」

「キミに、言っておかないといけないことがあるんだ」

声色は低かった。

「なにを？」

真剣な表情のフィンを見て、話が長くなると思ったのか、レオラがもう一度ロビーの椅子へと座った。フィンは相変わらず立ったままだった。その体制のまま、喋り始める。

「ボクは、12月の初めの日、不貞寝をしていた」

突拍子も無い言葉に、レオラは首を傾げながらも相づちを打った。

「おう。それで？」

「何故かと言うと、11月30日。情報整理しようとして、倉庫の掃除をしていたときに、うっかり足下にあつた情報資料に躓いて、部屋を滅茶苦茶にしてみましたからなんだ。ぐちゃぐちゃになった部屋を見て、一気にやる気が無くなった。それで、不貞寝」

「うん」

フィンが何を言おうとしているのか、レオラには全く分からなかった。それでも、人が良い彼は、ずっと黙って聞いている。

「その時は部屋の汚さにやられて気付かなかつたけど、後から考えると、おかしいんだ」

「何が？」

「ボクが、うっかり資料に躓くなんて、有り得ない」

フィンの表情は、フードに隠れていてレオラには見えなかった。だけど、声は少し震えていた。

「ボクは、情報に関しての記憶力だけは、誰にも負けない自信がある。例えば、いくらぐちゃぐちゃに汚くなった部屋の情報でも、自分が置いた情報の場所くらい、把握している筈なんだ。だから、ボクは幾ら寝起きでも、床においてある資料達を踏むことなく部屋から出ることが出来る」

つまり。つまりは、そういうこと。

「ボクが資料に躓いた。それは、ボクでない『誰か』が、そこに資料を置いたということ」

大人しく話を聞いていたレオラが、慌ててフィンに聞く。

「ちよつと待てよ。それって、情報が盗み見された、ってことを言ってるんだよな？」

フィンが力無く頷いた。よほど、ショックだったらしい。情報の管理は完璧だったはず。なのに、この失態。

「盗み読まれたのは、キミの資料なんだ」

「ああ、それでオレに話があつたんだな。気にするなよ、フィン。誰でも失敗は」

「キミの、裏についての、資料だ」

「……裏？」

「ストレインのことだよ」

一瞬にして、レオラの顔色が青ざめるのが分かった。まずい、そう言いたげな。

「お前、オレがなんなのか、知ってるのか？」

「知ってる。ボクの師は、キミのことを知らずにいたようだけど」  
フィンは、かつて裏町一だと言われていた情報屋でさえ知り得なかったことも、知っていた。レオラが平常心を取り戻すように言う。「なるほどな。結構重大な情報を見ていったみたいだな、敵は。でも、なんでオレが……オレがストレイン家の生き残りだってことを知りたかったんだろうな」

フィンが、声を小さくする。誰にも聞かれまいとするように。

「アリス・ブライティンは……ブライティン家は……」

「ストレイン家の、分家。つまり、ストレインの血を引いている」

「な、んだと……？」

狼狽するレオラに、フィンは決定的なことを言った。

「その、血のような赤い眼は、ストレイン家の血を引く者の証。ただの朱じゃない、血色。アリスは、おそらくキミと同じ眼をもっていたはずだよ」

そういえば、レオラはあの眼を見た時、何処かで見たと考えた。

遠い昔の話だったようにも感じたし、ごく最近のようにも思えた。当たり前だ。無意識のうちに、自分の目を重ねて見ていたのだから。

ずっと、嫌だった、この眼の色を。

「ストレインの、血……………」

レオラが椅子の上で虚ろに呟くのを聞きながら、フィンはランプの中身を見た。蠟燭はもう、無いに等しかった。もう数秒で消えるだろう。

「あ……………」

予想通りに消えたランプを見て、フィンは思った。レオラの眼は、血色というより、炎の色といったほうが近い色をしている。そんな冷たい色じゃなかった。

「レオラリアナ、そろそろ……………」

そこで、フィンは考えを改めた。項垂れるレオラの眼は、血という言葉に相応しい色をしていた。

\*\*\*\*\*

7階。階段を登る影が3つ。

クウヤの病室は、階段から少し離れた角にある。カノンは歩きながら朝葉香と今後のことを話していた。

「ミス・マッドが作った毒なら、きつと解毒剤もそいつが持っているはずだよな」



「ええ。そうでしょう」

「クウヤの解毒剤に、シオン奪還。難しいな……」  
ドアの前まで来ると、一足先に飛んでいたサスケが異変に気付いた。

『カノン殿、扉が少し開いています…！』

「なに？」

慌ててドアを開ける。アリスか、ミス・マッドか？ それとも、  
また別の …？

「誰だ！？」

カノンが思いっきりドアを開け放す。朝葉香が刃物を隠した扇子を構え、隣を援護していた。が、すぐに体制を解く。  
敵ではない。

「……ご無沙汰してます、ソリティアさん。それから香葉月さん」  
桐生朝飛が、眠る弟の隣で言った。

\*

彼女と彼は、同じ。

彼と、彼の中にいるあの子は、違う。

あの子と彼女は、同じ。  
違うのは彼等だけ。

73 アリスの孤城 【呪われた深紅色】（後書き）

オレは、アゲハじゃない。

## 74・アリスの孤城 【笑顔の小日向】

誰の所為でもないのなら、何も起こらなかつたでしょう。

\*

「……ご無沙汰してます、ソリティアさん。それから香葉月さん」  
静かな声が聞こえた。

「桐生、朝飛……来てたのですね」  
扇子を閉じながら、朝葉香が言った。相手は、ただ無言で頷いた。  
ドアの向こうにいた朝飛に、攻撃を解いたカノンが咄嗟に頭を下  
げた。

「あ、アサヒ……ごめんっ…！ おれ、クウヤを守ってあげられ  
なかつた」

突然の謝罪の言葉に、驚きながら朝飛は慌てて否定する。

「ソリティアさんの所為じゃありません。全て、僕の責です」  
その言葉に、否定の声があがった。

「誰の所為でも無いさ。悪いのは、仕掛けてきた張本人。アリス・  
ブライティンだ」

ドアにもたれかかるような形で、いつのまにか追い付いていたレ  
オラが言い放った。後ろにはフィンもいる。

「それでも、」

俯いたまま、朝飛は続ける。

「悪いのは僕です。弟を守るのは、先に生まれた兄の役目なのに…  
…僕は、レオラさんに連絡をもらうまで、何も知らなかった…」

弟を守れなかった。

それは、いまのカノンと同じだった。守ってやらねばならない存在を、守りきれなかった。

カノンは誰にも気付かれない程度に唇を噛み締めた。自分の非力さが悔しい。朝飛も、自分と同じ気持ちなのだろうか？

重くなる空気に、サスケが慌てて声をかけた。

『み、みなさん。立ち話もなんですし、そろそろ座ってはいかがですか？ ねえフィン？』

「ボクに聞かないでよ」

『フィン、少しはこの場を察してください…！』

サスケが言うとおり、病室には居心地の悪い沈黙が続いた。

カノンは相変わらず頭を下げたままだったし、レオラはどことなく機嫌が悪いような雰囲気があった。それに、朝飛はずっと黙ったままだった。

サスケが香葉月に助けを乞うように見つめたが、つんと視線を逸らされ、気付かないフリをされた。

そんな永遠とも思える数十秒の後、この場を壊すかのように、窓の外でこつこつと音が鳴った。

「なんだ？」

カノンがいち早く反応する。レオラは腕組みをしたまま、窓の向こうに目を細めた。茶色い何かが見える。

「ここ、7階ですわよね？」

『ええ。そのはずですが…』

人間ではない？ 朝葉香が窓の方へと歩き出し掛けて、フィンが呟いた。

「来た」

「何が来たんでしょうか？」

一番窓に近かった朝飛が、フィンに尋ねた。

「鷹だよ」

当たり前のように答えるフィンに、一同は少し固まった。たか、

タカ、鷹？ あの、鷹？

「た、たか、ですか？」

驚いて朝飛が窓へと手を掛ける。フィンの言うとおり、何か鳥らしき影が、何度も嘴で窓を小突いていた。

おそろおそろ開けると、通常よりも小型に見える鷹が、すつと窓のレールに両脚を乗せて止まった。調教されているのか、大人しい鷹だった。

『フィン、あれは…』

「ご苦労様。疲れただろ、カグヤ」

鷹の元へと近付きながらフィンが労りの声をかけた。カグヤと呼ばれた鷹が、お辞儀するように頭を下げた。

「なんだソレは。お前の鳥か？」

レオラが訝しげな声をあげる。フィンは首を振ってカグヤの説明をする。

「違うよ。これは別の情報屋の遣い鳥」

「別の情報屋？」

「そう。犯罪関係の情報を主に扱う、『見解観測』からのね」

カグヤの左脚にくくりつけられた小さな筒を取り外しながら、フィンが答えた。

サスケが静かにカグヤに近寄って、お互い挨拶でもするかのよう  
に嘴を鳴らして、鳴き声をあげた。どうやら会話をしているらしい。  
フィンはサスケ達の行動を静かに見守っている。

『フィン。カグヤが言うには、これはここ最近の事件に巻き込まれた被害者のリストだそうで、フィンに頼まれたとおり、加害者に銀髪・大男・白衣の特徴が見られるモノだけをリストアップしてある

そうです』

「さすが見解観測。いい仕事をしてるよ」

筒の中にトレットペーパーの要領で納められていた長い用紙を伸ばしながら、フィンが満足そうに言った。

紙の初めには、フィン宛に伝言が書かれていた。

“情報は確かに届けたわよ、全体観測。

一つ忠告しておくわ。大男に気を付けなさい。

あの現態観測がやられたそうよ。

それから、アナタが言っていたコヒナタについてだけど、

私の持つ情報網からは、あまり良いものは得られなかったわ。

私が関与できるのはここまで。

幸運を祈るわ。

他の裏町業者にもよろしく言っておいてね。

『見解観測』ハルナ・ウエストテール”

「あの現態観測がやられた…?」

『そんな馬鹿な! 情報屋の中でも、最も戦闘に強いとされるのに!?』

驚くフィン達に、目を瞑ったまま、レオラが静かに言う。

「それだけ、やばいってことだろ。大男が」

その通りだ。一体どのような方法で、情報屋一強い人間を倒したというのか。

フィンはお礼の手紙を書いて、代金と一緒に筒に戻し、カグヤの左脚にへと括り付けた。

「ありがとう。良ければ見解観測にも伝えておいて。お金もはいつであるから、気を付けてね」

カグヤは一礼すると、すぐに窓から飛び去った。フィンが少しだけひらひらと手を振った。

その鷹の後ろ姿に釘付けだった朝葉香が、思い出したようにフィンに言った。

「情報屋。わたくし達にもその情報を見せてくださいな」

その長い紙に一通り目を通したフィンが、無愛想に朝葉香に渡す。

「どうぞ。全部記憶したから、思う存分見てよ」

「それはどうも」

手渡された朝葉香が、レオラとカノンと朝飛に見えるように紙を広げてみせた。

“ チューリップ風子羊のハーブ焼き・トマトソース添え

材料（4人分）

フルーツトマト2個

オリーブオイル適量

カモミールの葉

メリッサの葉

子羊の肉”

そこまで読んで、朝葉香の中の何かが切れる音がした。朝葉香の手から投げつけられそうになった紙を、カノンが慌てて受け止める。大切な情報なのに、酷い扱い様だ。

朝葉香はつかつかと、椅子に座ってくつろいでいるフィンへと歩み寄って静かに低音で喋った。ドスの効いた声だった。

「ふざけるのも大概にしてくれませんか？ 情報屋。事と次第によつては、貴方のそのうざったい前髪をパツツン切りにして差し上げますわよ」

「ふざける？ ボクはいつだって大真面目のつもりだけどね。キミ



こそ、よく考えてご覧よ。情報屋の商売道具である情報紙を、暗号も使わずに書き記すわけが無いだろう」

シヤキ、と音が鳴った。朝葉香が扇子を開いてフィンの首に当てた。扇子の先は、鋭く研がれた刃になっている。フィンは顔色を変え、ることなく見解観測からの手紙を読み直していた。

視線は相変わらず合わさらないが、ぱちぱちと見えない火花の散る、全体観測と魔女代理の間に、サスケが割って入った。

『失礼しました、香葉月殿！ 私めがこの大馬鹿のフィンに代わって、暗号の通訳を致しますので、どうかその扇子をお終い下さい！』

サスケが慌ててフィンと朝葉香の間に割って入った。主人想いの良い奴だ。

さきほど紙を受け止めたカノンが、サスケに見えるよう良い位置に持つ。案外長い紙だったので、肩ほどまでに腕を上げなければならなかった。

『まず、銀髪にやられた被害者数、およそ10人弱。内、裏町業者8人。全てレスティナでの犯行。』

大男にやられた被害者数、およそ20人弱。内、裏町業者5人。主にイギリスでの犯行が多かったようです。

白衣にやられた被害者数、およそ100人強。内、裏町業者3人。他は主に街消滅事件の被害者数のようです。

そして、コヒナタの情報。和国出身。信州のとある街で“外れなしの殺し屋”を営んでいたらしいですが、確信は無いそうです』

サスケが全てを話し終えて、病室は静かになった。最後に聞いた、コヒナタの情報。

アリスの仲間にしては、『外れなし』とは階銘が小さすぎる。それだけが、一同が思ったことだった。『街外れ』の処理屋がやられたのだ。そんな小さな階銘な訳がない。

沈黙を破るように、朝飛が声を出した。

「外れなしの、殺し屋……？ まさか小日向 小雨「コヒナタ コサメ」のことですか？」

「こいなたこさえ？ 誰だよ、そいつ」

上手く聞き取れなかったカノンが、辿々しく声を発した。初めて聞く名だった。朝葉香が答える。

「こちらで呼ぶのなら、コサメ・コヒナタ、といったところですね。わたくしは聞いたことがありますけど、桐生は面識があるのですかね？」

「はい。昔に会ったことがあります。と言っても、会話をした程度ですが……」

あまり役に立たなかったことを恥じていると、フィンが口を挟んだ。

「その情報は関係無いよ、キリュウ」

サスケがフィンのポケットから写真を取り出して、みんなに見せる。そこには細身の青年……二十代前半程度の優男が写っていた。邪気のない、なんの裏もなさそうな笑顔だった。こういう表情をする奴に限って、まともな奴がいないのは裏町の常識だ。

「これはなんだよ？」

レオラが写真を凝視して聞く。不機嫌そうな声だった。

「リュック・コヒナタ。恐らくアリスの仲間で、コヒナタ探偵事務所を営む探偵だ。和国との混血だとしか情報は手に入らなかったけど、写真が手に入っただけでも良かった」

そしてフィン自らもう一枚の写真と、印字された紙を見せる。

写真にはものすごい満面の笑み、両手でピースをしている女が写っていた。天真爛漫とはこのことだろう。この笑顔は天下の調達屋にそっくりな、本当に笑っている笑顔だった。裏町にしては珍しい。朝飛はこの顔に見覚えがあったらしい。

「こ、小雨さんだ……！ この妙に自信満々な笑顔は小雨さん以外に居ない……！」

「そう。これがコサメ・コヒナタ。僕も、これだけ裏町を陥れるの

だから殺し屋か何かの類だろうと思っていたんだ。それで、外れなしの殺し屋を怪しいと踏んで調べていたんだけど、彼女の経歴を見てご覧」

ぺらりと見せられた紙に規則正しく並べられた文字が、8つの瞳に入った。

“小日向 小雨「Kohinata・Kosame」

17歳

女

ヤエ・アルヴェルト始末依頼：失敗（屋敷内で迷子になる）

ドウツク・マツキンリー暗殺依頼：失敗（警備員に見つかる）

五十嵐 洋子暗殺依頼：失敗（期限に間に合わず）

暗殺部隊合同依頼：失敗（自身のみ失敗。全体としては成功）

ハーツハイト歌劇団長事故死偽造：失敗（目的地に辿り着けなかった為）

他、23依頼中23依頼失敗

依頼成功確率、0パーセント”

「駄目駄目だな、この殺し屋」

レオラが呆れたように声を出した。馬鹿だ馬鹿だと罵られる自分でさえ、成功確率が0パーセントまで下がったことはない。朝葉香は哀れなモノでも見てしまったように目を伏せた。溜息のオマケもついている。

「フィン。ちなみに一番の標準値である『街外れ』のおれの、依頼成功確率は何パーセントだ？」

フィンが記憶の糸を手繰り寄せて答える。

「確かこの前更新して、78パーセントになってたよ」

「なるほど。0パーセントってのは、余程のドジを踏まないといけないみたいだな」

「探偵と殺し屋。同じコヒナタでも、全然違うんですね……それにしても小雨さん、相変わらずだなあ……」

二枚の写真を見比べて、朝葉香が小雨のほうをフィンに返した。不必要な情報は憶えるのも勿体ないらしい。

「だから言っただろ。コサメの方は関係ないって。まあリュックの方が仲間かと聞かれれば、少し確信が足りないけれど……なんと驚き。この間から、この人は行方不明なんだって。町の人によると」

フィンはサスケを肩に止まらせて喋る。カノンがリュックの写真をマジマジと見つめて、レオラに回した。無言の『よく見ておけよ』だった。

12月24日午前3時30分。

大方の情報交換が済んだところで、フィンが一枚の地図をサスケの足首に付けられた筒から取り出した。

アリスの拠点である、孤城への道を記した地図だった。

「ここへ行くのは、一体誰？」

フィンの簡潔な問いに、カノンがレオラと朝葉香を見て、互いに頷いた。

「おれと、レオラと、朝葉香の3人だ」

「あつそ。じゃ、この地図はキミに渡しておくよ、ソリティア。無くさないでね。これは一枚しか手に入らなかったから」

「さんきゅ」

「ま、待ってください！」

フィンの手から、カノンへと地図が渡される刹那、慌てた声が遮った。朝飛だ。

「僕も連れて行ってください！ 弟がこんな目に遭わされたんです、僕にも行く権利はあるでしょう？」

「……駄目だ」

必死の懇願に答えたのは、レオラだった。

「何故です!？」

「お前はフィンと一緒に、クウヤの傍に居てやれ。敵が襲ってこないという証拠も無いんだ。兄としての役目を果たすなら、ここに残りな」

「始末屋の言うとおりですわ、桐生。ここはわたく達にお任せなさい。必ず解毒剤は手に入れますわ」

朝葉香に言われても、なお反論しようとする朝飛に、フィンの腕がのびた。まるで朝飛を制止するかのようになり、朝飛の上半身手前に腕を伸ばした。

「……腕をどけてください、クロスフィンガーさん。僕は何が何でも、ソリティアさん達についていきますから」

怒りの所為か、静かに響く声に、フィンは畏れることなく言い返す。サスケは黙っていた。

「言われている意味が分からないの？ キリユウ。ボク達は、戦力外。足手纏いなんだよ。ボク達に出来ることは、せいぜいアンダーグラウンドを見てあげるくらい」

「そんなこと……!」

まだ喰らい付いてくる朝飛を、切り捨てるようにフィンが言った。無表情のまま、抑揚の無い声で。

「キミが桐生家の直系なのは知ってるよ。だけどね、キミは至って普通の依頼しかこなしていない。殺し屋や始末屋のような、そういう類のモノは一切していない。そう書いてあったよ」

フィンに突きつけられた言葉に、今度こそ朝飛は黙り込んだ。

地図を持ったカノンが、朝飛に向かって言い放つ。最後の、釘打ち。

「迷惑だ」

朝飛の肩がピクリと動いた。だけど、先ほどのように反論はしてこなかった。する気力も無いのか、言い返す言葉が無いのか。どちらにしろ、朝飛はもう付いてくる気が無いようだった。

暫く床を見つめていた朝飛だったが、ぱつと前を向いたときには、もういつもの笑顔だった。

「わがまま言ってしまったってすみませんでした、ソリティアさん。僕は、ここに残ります」

無理をしていることなんて、微塵も感じさせない笑顔だった。

代わりにカノンの心がちくりと痛む。

「……留守を頼むな、アサヒ」

「はい。あの、これを是非持ってってください。本当は僕が使おうと思っただけですが……」

朝飛から手渡されたのは、脇差しと呼ぶには少し小さな刀だった。刀と言うよりは、ナイフに近いモノ。懐に隠し持てそうなくらいの大きさだった。

綺麗な模様が、丁寧に彫られている。柄の先には、この小刀の名前なのか、『魁』と一文字の漢字が彫られていた。

魁 北斗七星の第一星の名前、魁星のことだろうか。

「これは？」

「護身用です。万が一、ソリティアさんの銃が使えなくなったときの為に」

「そっか。ありがとな、アサヒ」

「いいえ。僕に出来るのは、これくらいしかありませんから」

その言葉を言ったとき、朝飛の本音が出たように、少しだけ笑顔が途切れた。だが、すぐに戻った。本当に、少し垣間見えただけだった。

「じゃあ、行こう。朝になってしまつまえに」

レオラと朝葉香が先に出て、ドアを閉める直前に、カノンは病室

に残った2人に言った。

「アサヒ、フィン。行ってきます」

アサヒは最初のように頭を下げ、フィンは後ろを向いたまま無言で手を振り、

「サスケ。フィン達のこと、頼んだぞ」

『はい。気を付けて行ってらっしゃいませ』

サスケはその濡羽色の羽をばたつかせて答えた。

\*

誰かの所為で、何かが起るんでしょう。

74・アリスの孤城 【笑顔の小日向】（後書き）

非力さが、憎いほど悔しい。



75・アリスの孤城 【笑顔と毒と少年と】

さあ演じましょう。

この世で最も幼稚で劣悪な、私達の演劇を。

\*

「あつれえ？ おつかしいなあ。ぼく、3時になったらこっちに来るって言ったのになあ。もう4時になっちゃうよお。マッドさん、伝言を伝えてくれなかったのかなあ？ 悲しすぎるよう、そんなのお」

うーん、と困ったような声をあげながらも、表情は変わらず笑顔の少年がアリスの部屋の前にいた。歳は10代前半頃だろうか。アリスよりは年上のようだった。

早起きなのか、単に夜更かしの延長なのか、少年は午前3時からずっとアリスの部屋の前をウロウロしている。

「うーん。鍵が閉まつてるってことは、お出かけ中なのかなあ。困ったなあ、困った困ったあ。暇過ぎて死にそうなのになあ。あー、ぼく死んじゃうよお……」  
「死因、暇多量死！」なんて恥ずかしくて、ご先祖様になんて言い訳すればいいか、皆目見当つかないよお」  
「がちゃがちゃとドアを押してみるが、やはり動かない。少年は笑

顔のまま、困った困った、と繰り返していた。端から見れば、全然困った風には見えない。ただ、ずっと笑顔なのが気になるところだ。少年が何度目かのドア押しを終えて、ポンと両手をならした。結論が出たようだ。

「ま、いつかあ。壊しちゃえ」

過激的な結論に、後ろからストップがかかる。おだんこの髪型、ぱつつん前髪、黒縁眼鏡に白衣を着たミス・マッドだった。

「こら、何してんのコヒナタくん。壊しちゃ良くないでしょー？ あんたはすぐにそういう方向に話を進めるんだからー」

「あ。マッドさーん、ちゃんとぼくの伝言伝えてくれたあ？ アリスさん、部屋に居ないみたいだけども」

「バーカ。よく見てみなさいよー。鍵が閉まってるんじゃないかって、この扉は引いて開けるの。全部押せば良いってもんじゃないわけー。少しは頭を働かせなさい、この大馬鹿リュック」

コヒナタ、そしてリュック ミス・マッドは少年のことを確かにそう言った。となると、この少年はあの探偵のリュック・コヒナタというわけか。

フィンが見せた写真よりも、ずっと若い。写真には20代頃の青年が写っていた筈だが、いまドアの前で笑っているのは、どうみても10代頃の少年だった。

だが、顔は同じ。フィンが見せた写真のコヒナタを、少し幼くしたような顔立ちだった。

「あつれえ？ そうなんだあ、うつかりしてたよあ。画期的なドアだねえ、これ。引いて開けるだなんて、考えもつかなかったよあ」  
「うつかり……って…あんたさー、もしかしてそんな理由で1時間ずっとここでウロウロしてたわけ？」

「うん、そんなとこかなあ？ だって引いて開ける式だなんて、聞いてなかったからさあ。マッドさんは流石天才だねえ」

誉められているのか、馬鹿にされているのか分からなくなってきた

たマツドは、取りあえずアリスの部屋のドアを開けた。コヒナタとはまともな会話は出来そうにない。

「アリスちゃん？ 入るわよー。コヒナタくんが暇すぎて死ぬってさー」

「そうなんだよお。もしも暇死んだら、ご先祖様に何て言い訳すれば良いかなあ？」

「くだらないこと聞かないの、コヒナタくん。おーいアリスちゃん？ 居ないのー？」

騒がしい2人が入った部屋は、いつものように薄暗く、いつものように人形で埋め尽くされていたが、いつものようにフランを抱えるアリスは居なかった。

「あつれえ？ 留守かなあ？」

笑顔で悩むコヒナタのすぐ横で、マツドが声をあげた。

「あ！ 居た居たー」

彼女が指さす方向には、ソファアの上で何かを数えるように両手の指を折っていたアリスがいた。2人の視線が自分に向いたのを見て、アリスは高いソプラノの声を発した。

「あら、2人揃ってどうしたの？ くすくす……コヒナタ、やっとドアの開け方が分かったのね？ くす、くすくす……きゃはははっ！ いつになったら理解するのかなあって思ってたのよ？」

ソファアの上でお腹を抱えて笑うアリスに、呆れた表情のマツドが言う。

「アリスちゃん。もしかして、もしかしくとも、コヒナタで遊んでたのねー？」

「きゃははっ、だって全然開ける気配が無いんだもん！ 馬鹿みたいに押してばかりで！」

大声で笑う声が、部屋中に響き渡る。そんな楽しそうなアリスに、コヒナタがもつと楽しそうに笑う。ぱあっ、と音が付きそうなくらいの笑顔だった。

「えへへー、アリスさんが楽しそうなの、久しぶりに見るなあ」

「ちよつとちよつとー。あんたは遊ばれてたんだってば……」

「ええー？ そうなの？ それは知らなかったなあ。やっぱりアリスさんはすごいなあ」

「…流石の私も、馬鹿に付ける薬は作れないわよー…？」

「そんなことないよお！ マッドさんなら、きっと何でも作れるよお。天才なんだから！」

自信満々に両目をキラキラさせ、拳を作って力説するコヒナタに、少々引き気味になりながらマッドが助けを乞う。

「……アリスちゃん？ この子おかしんだけど。どうにかできないわけー？」

「きやははははは！ そんなの、ここに居る皆がでしょ？」

「それはそうなんだけどさー…」

コヒナタと同じにされたことに、いまいち納得のいかないマッドだったが、他に気になることを見つけたのでアリスに質問した。

「そういえば、シオンくんはー？」

「隠れてるわよう、くすくすっ」

隠れてる？ アリスの言葉を理解できなかった彼女は、首を傾げてもう一度尋ねる。

「なんで、隠れてるわけ？」

「隠れんぼをしているのよう。アリスとシオンで。いまはアリスが鬼なのよ」

状況が飲み込めない彼女の横で、コヒナタが、いいなあほくも混ぜて欲しいなあ、と呟いていた。

コヒナタに対する苛つきが募ったマッドが、彼に一回げんこつをかまして、部屋中を見渡した。

なるほど。だからさつき来たときよりもこの部屋が荒れているのか。納得する彼女の隣では、コヒナタが涙目なのに笑顔で悶絶していた。げんこつは相当痛かったらしい。

質疑応答の終わったアリスは、最初と同じように両手の指を折り、

数字を数えた。

「どこまで数えたかしら？ えっと……にじゅーいち、にじゅーに

…」

「ぼくもやりたい」

「ちよつと黙んなさい、コヒナタくん」

「はい」

シヨンボリ気味な声をあげつつも、ずっと変わらない笑顔のまま  
でコヒナタが返事をした。

マッドは聞き分けの良いコヒナタに、取りあえず頭を撫でておいた。さつき、思わず殴ってしまった償いのつもりだ。彼の頭のとっぺんにはタンコブが出来ていた。しまった、やりすぎた。

「……にじゅーきゅ、さーんじゅー！ シオン、もういいかい？」

アリスの掛け声に、マッドが黙る。勿論、シオンからの返事は無い。静まりかえった部屋に、もう一度アリスが声を掛ける。

「もういいかい？」

しかし部屋に響く声は無い。

コヒナタに至っては、マッドの左手によって口元を押さえられていた。息すら出来なくて、少し苦しそうな笑みだ。

「むぐ…ん、ん…むう…むぐ！」

マッドの左手をとんとん叩いて、声を発したい意思表示をする。それに気付いた彼女が、コヒナタの口元から手を離れた。

「はい、コヒナタくん。美人科学者なお姉さんに分かるように、もう一回言ってごらん」

「ぶはあ！ 美人な科学者のマッドさん。もしかしてシオンさんは逃げたんじゃないの？」

「ふむふむ。私もそれに清き一票入れるわ。良かったわねー、コヒナタくん。当選も夢じゃないわー」

なんの当選だ。

「わーい、当選確定う。ぼくの独裁政権だねえ」

どんな政権だ。

2人が勝手に会話する前で、人形達を掻き分けながらアリスが答える。

「きゃははっ、それは有り得ないわ。だって、ちゃあんと忠告しておいてあげたもの」

「忠告？」

声の揃った2人に、アリスがにんまり笑って、今度はクローゼットのドアを開ける。

「もしもこの城から逃げ出したら、アナタのお姉さんをズタズタに切り刻むからね、って……ねえ、シオン？」

「……だから逃げてないって……」

クローゼットの衣装に紛れて、アリスを睨むシオンが居た。

「あは。シオン、見つけた」

黙ったまま、シオンがクローゼットから出てきた。感情を見せないその表情は、冷たい双眸の所為でいつものシオンではないように見える。

「うふふふ。こんな簡単な所に隠れてたの？ 今度はアリスが隠れる番よ。シオンはちゃんと30数えてね」

「まだやるの？」

「そうよ。シオンは嫌なの？」

寂しそつに尋ねるアリスから目を逸らして、シオンはソファアへと座った。どうやらここが鬼の定位置らしい。

「……別にいいよ」

「くす、やった！ じゃあ30数えてね！」

嬉しそつに部屋を駆け回るアリスを見てマッドがコヒナタに言った。

「なんかさー…私が連れてきたときよりも、ちょっと違う風に見えるわねー、シオンくん」

「どづいっ感じい？」

「そうねー…冷たいっていうか、無感情っていうかー…」

今のシオンを単純な言葉に当てて、マッドが言った。コヒナタはソファアの上のシオンを見て、満足そうに笑った。

「えへへへ、きつとシオンさんも、アリスさんと同じなんだよお」

「……さっきアリスちゃんも同じことを言ってたけど、なんで2人が一緒なわけー？」

「マッドさんはムジカ・オーラリーって知ってるう？ 強盗殺人犯なんだけど、死刑囚だったんだあ。その人の子供がロビン・オーラリー。いまのシオン・ソリティアだよお」

人を指さしてはいけなさと習わなかったのか、堂々とシオンに人差し指を向けてコヒナタがマッドを見上げた。

「なるほど。血がそうさせるって言いたいのねー？」

「アリスさんはストレインの血を継ぐ者だからねえ。きつと同じ原理だよお」

「……それにしても。あなたの情報収集能力には、ほんとと感心するわ。さすが情報屋をも凌ぐ探偵ねー」

「違うよおマッドさん。ぼくは只の探偵じゃなくて、名探偵なんだよお。そこんとこ、間違えちゃ駄目だからねっ！」

名探偵の部分を強調して言うコヒナタに、やっぱりげんこつをかましてマッドは呟いた。そしてやっぱり笑顔のままコヒナタは頭を押さえた。今度は涙目なんかじゃなくて、少し泣いていた。

「……新しい就職先でも探そっかな」

「無理だよお。前科のある暴力的な科学者だなんて、ぼくが社長なら、ぜえーったいに雇いたくないもの」

「なによ。私だってこんなオトボケ探偵雇いたくないわよー」

「あー！ だから『名』探偵だってばあ……もう。マッドさん、最近物忘れが激しすぎるよお」

「ほほう。本日3回目のげんこつが欲しいわけー？」

マッドが拳に息を吹きかけているとき、後ろで規則正しいノックが聞こえた。

開け放たれているドアを、わざわざ叩いて、クロックがそこに居た。

「お取り込み中悪いが、アリスはどこだ？」

「クロックさーん、4時間ぶりい。アリスさんなら隠れん坊の真っ最中だよあ？」

名前を呼ばれたアリスが、人形達の山から顔をぼんと覗かせる。綺麗な銀髪が少し乱れている。

「どうしたの、クロック」

「……にじゅーく、さんじゅ。アリス見つけた」

ソファアーの上で数を数えていたシオンが、人形の中から頭だけ出ているアリスを指さして、鬼の役目を終えた。思いがけない展開に、アリスが慌てて否定する。

「あ、シオン、今はナシよ？ だって不可抗力なもの！ 駄目よ、駄目！」

これでは話が進まないと感じたマッドが、クロックに尋ねる。

「時計さん、何かあったわけ？」

「ああ。侵入者だ」

その言葉に、ぴくりとアリスが反応した。コヒナタは相変わらずここにこしながら相づちを打つ。

「侵入者あ？ うわあ、楽しみだなあ」

「クロック。それはだあれ？」

「金髪に蒼眼。街外れの便利屋に、和国人と赤目。恐らく島外れの代理屋に、道外れの始末屋だろう」

「姉さんが…!？」

シオンが慌ててクロックに近寄る。コヒナタがその様子をじっと見つめていた。

マッドが言っただような冷たさが無い。この子の大事なものは、姉か。



「ああ。お前の姉が来ている」

「くすくす、きゃはははは！ アゲハが来たのね？ アゲハ・スト  
レインが、ここに！ きゃははははっ！」

いきなり笑い出したアリスを、シオンが疑問の眼で見た。アゲハ  
？ 誰のことを言っているんだ？

「アリスちゃん。どうする？」

「俺も、指示を仰ぎに来た」

クロツクが懐中時計を取り出す。時刻は午前4時44分。なんて  
不吉な数字。

「どうしましょうか？ くす、くすくす、クス」

「ぼくは暇だよ。ひまひまひま。ご先祖様への言い訳すら思い  
つかないくらいだよ」

コヒナタの言葉を聞いて、にたあ、とアリスが笑った。その血色  
の双眸は、細く鋭くなっていた。

「じゃあ遊んであげましょう。アリスはシオンと遊んでおくわ。ち  
ょうど3人居るんだから、みんな仲良くわかるのよ」

シオンは、そのアリスの表情を見て、背筋が凍るのを感じた。

\*

演劇の最中は、残念ながら席を立つことは出来ません。  
予めご了承下さい。

惨劇の最中は、残念ながら責を絶つことは出来ません。  
予めご容赦下さい。

75・アリスの孤城 【笑顔と毒と少年と】（後書き）

哀れなこの3人の役者達に、  
盛大な拍手をお願いいたします。

\*\*\*\*\*

クウヤの兄、桐生朝飛が主人公の物語を連載開始しました。  
題名：桐生の忍 - 影送り組曲 -  
どろどろー読下さい。

76・アリスの孤城 【破壊劇場】

踊れ踊れ、思うがままに。

私は自由に飼われた、踊り人形。

\*

「だるあああああつ！」

局地的な台風が襲ってきた。そんな、破壊活動を行う音が聞こえてきた。活動源は、城の一階にいるカノン・ソリティア、まだ自称夢見る乙女な年頃である。

彼女が、そのダークブラウンのブーツで華麗にぶち壊したのは、一階に数え切れないほどある部屋のドア達。これで遂に5部屋めを使用不可能にした。

それに飽きたらず、次の標的に脚を掛ける。

「うおりやあああ……っと、何すんだよレオラ。勢いが削がれちまつたじゃねーか」

「待て、ストップ！ やめろ！ まじ止めて！ カノン様、本当心からお願ひします、止めてください！」

彼女の両腕を掴んで、6部屋めの崩壊を力一杯止めるレオラがいた。それはもう必死の形相だった。哀れになるくらい必死だった。

そんな彼に、心底疑問の眼を向けるカノン。少し離れたところに居る朝葉香は、相変わらず見ているだけだ。

「あ？　なんでだよ」

「敵に見つかるからに決まってるだろうが！」

「何言ってるんだ、レオラ。敵を見つけるんだよ」

自信満々、笑顔一杯で答えるカノンに朝葉香が聞く。

「敵を見つけて、一体全体どうなさいますの？」

「うちの子に手を出したんだ。そりゃもう、アレしか無いだろ？」

「アレって何！　恐っ！　オレはいままさにお前という存在が恐い！」

これまた素敵笑顔なカノンだった。語尾にはハートマークが付いていたかもしれない。レオラが彼女の頭を力一杯叩く。体当たりのツッコミだった。

「ってか喧嘩売りに来たんじゃないよ！　あくまでシオンと、解毒剤と、朝葉香の妹の形見を取り返しに来ただけで！　出来ることなら、見つからないように行きたいの。穏便に事を進めたいの、オレは！」

「じゃあ勝手にしろよ。おれはここを木っ端微塵にしないと気が済まない」

「オレの気が済まねーよ！」

レオラはもう半泣きだった。なんかもう、泣くしかなかった。カノンの破茶滅茶ぶりを甘く見ていた自分にビンタをしたい気持ちでいっぱいだった。

そんなレオラの気も知らず、カノンは両手を合わせてコキコキ鳴らす。喧嘩上等、そんな表情だった。

「よっし、次はこの部屋だな。おいコラ、出てこい誘拐犯！　又の名を強盗犯！」

「『よっし』じゃねえ！　止める、この破壊犯が！」

騒ぐ2人から少し離れた所で、朝葉香が動きを止めた。そして溜

息を吐きながら後ろを振り返る。カノンとレオラはまだ言い合いをしていた。

「見つからないように行きたいのなら、静かにするべきでしたわよ、始末屋」

「ああ！？ だつてコイツが」

「先をご覧なさい、2人共。早速、見つかってしまいましたわよ？」

朝葉香が指差すその先には、白衣のポケットに両手を入れたミス・マッドが呆れ顔で立っていた。

「あーからのらー。こんなに滅茶苦茶にしてくれちゃって。一体どういう歩き方をすれば、こんな風に廊下がぐちゃぐちゃになるわけー？ なに？ ここだけ台風でも通り過ぎたの？ アリスちゃんに怒られても知らないわよー」

カノン達の歩いてきた廊下を見て、マッドが言った。まさしく、その通りだった。台風でも通り過ぎたかのような廊下の惨劇に、レオラは少し納得した。

カノンは親指を立てて自分に向ける。

「おれという名の台風が去っていったんだよ。文句あつか！」

「大有りだろうが！」

またしてもカノンの頭を叩くレオラ。朝葉香はやっぱり見ているだけだった。

そんな3人を、マッドは何かファイルのようなモノを取り出して、交互に見比べていた。カルテを見る医者のような目だった。

そしてカノンに声を掛ける。

「えつとー……その金髪少女」

「あ？ なんだよ」

敵に名を呼ばれ、ぶっきらぼうに答えるカノン。マッドはそんなこと露ほども気にせず、ファイルを読み上げる。

「あんたは、街外れの便利屋、カノン・ソリティア。天涯孤独。十

数年前、軍人の父が戦争により死亡。そして母にレスティナの貧民街にて捨てられる。貧民街ではシュトラス博士の息子と共に過ごす。のちに彼が死刑されてから、自身も死ぬことを決意。しかしソナチネ地方軍のジン・ソリティアに拾われ、今に至る……で、オーケー？」

「なんで……そんなこと、」

眼を見開くカノンをマッドは無視して、今度は朝葉香に声を掛ける。

「んでもって、黒髪着物美人」

「……………」

朝葉香は返事をせずにマッドを睨み付けた。

「あなたは代理屋のアサハカ・コウヨウツキ。和国に代々続く代理屋一族、香葉月家の現当主。そして唯一の直系。任務は必ず遂行し、その仕事ぶりは人間業ではないとまで謳われる。

要人からの依頼も多く、裏町では最強と言われていた……あれ、過去形？

「んつと、なにになに？ 追記……ガヴオット事件のあった日以来、世外れという名の都合屋が出現し、その地位を降りることとなる……あー、なるほどねん。アリスちゃんと一緒に遊んだっていう、あの少年か」

「いまでは二番手に成り下がりましたわ」

朝葉香が答えて、マッドはにんまり笑った。

「残念ね」

「全くですわ」

そして次の資料を読み上げる。

「最後に、その頭軽そうな金髪野郎」

「それってオレのこと言ってるのか！？ 頭軽そうって、オレのことか！？」

レオラの叫びは無視して、続きを言う。

「あなたは始末屋のレオラリアナ、名字は無し……ん？」

マッドが言葉を止めた。彼女の視線の先には、他の資料と違って印刷された文字でなく、可愛らしい字とイラスト付きで、何かメモされてあるのが見えた。

“名探偵コヒナタくんの一口メモ〜！ ちゃらららっ ちゃらー！”

この人はアリスさんと同じストレインの血を継ぐ者だよ。

なんでも幼少の頃は、アゲハ・ストレインっていう名前だったとか！

聞いてびっくり、見てびっくりだねえ！

だって、馬鹿そうに見えるでしょお？

ほくも写真を見たときは

「まつさかあ〜。ストレインの生き残りい？ 無い無い！ だって

この人（以下略）」

って思ったもん。あ、以下略の部分はご想像にお任せだよ。

でも油断は禁物だからねえ。賢い鳥は爪を隠すって言うしねえ。

そうそう、それよりマッドさん。

この前話してたご先祖様への暇死んだ時の言い訳だけどお、ぼくスゴイの思いついちゃったあ！

知りたい？ 知りたいよねえ？

しようがないなあ。名探偵コヒナタくんが特別に教えてあげよあ

！

あのねえ、”

そこまで読んで、マッドは無言でメモを破った。なんか、そう、コヒナタを殴りたくなった。

「うん。レオラリアナくんは、ここまで」

「オレだけ適当だな、おい！」



「まあまあ、そういう時もあるわよー。でも、コヒナタくんの情報に間違いは無かったみたいね」

マッドがカノンの方を見て、またにんまり笑った。

「カノンちゃん、すっごい顔色悪そうだけど、大丈夫かしらー」

「うつせえ、喋んな」

カノンは精一杯の虚勢を張って、マッドに対抗した。しかし、マッドの言うとおり、決して顔色が良いとは言えなかった。握り拳が少し震えている。

それに気付いたレオラが、ぎゅっと手を握る。知らない奴に過去を言い当てられるのは、気分の良いものではない。それが、思い出したくないことなら尚更。

「……で？ これだけオレ達のことを知ってるアンタは何者だ？

さっきの口調からして、リュック・コヒナタで無いことは確かだ。

見た目からして大男では無さそうだし、アリスはもつと小さい餓鬼だった。するってーと、お前がミステリアス・マッドだな？」

「あいあい、その通りでござんすよーっと。おいでませ、私達のお城に。それで？ 誰が私と遊んでくれるわけ？ 便利屋に始末屋に代理屋。よりどりみどり、裏町遊び放題ねー」

嬉しそうにマッドが言った。レオラが一步前に出ようとして、閉じた扇子が上半身に当てられた。朝葉香がレオラをなんとか押さえ

た。  
「『誰が』ということ、あくまで一人ずつ潰していこうという考えですのね？ ミス・マッド」

質問にマッドが答える。

「まあねー。私達、アリスちゃんに侵入者を仲良く分けるように言われてるから。私的には、ここで三人まとめて殺っちゃっても良いんだけどー、そんなことしたらコヒナタくんが拗ねちゃいそうだしー？」

「なるほど。では、他の二人は何処に居ますの？」

「上の階よ。最上階にはもちろんアリスちゃんとシオンくんが居る

わー。上まで辿り着けるかどうかって言うゲームみたいなものよー」  
「では、」

扇子を廊下の先へと向けて、レオラとカノンの顔を見る。

「ここはわたくしに任せて、貴方がたは先へと進んで下さいな」

「アサハカ！」

「心配せずとも、必ず都合屋の解毒剤は手に入れますわ。さあカノン、貴女はシオンを取り戻しに行つてらっしゃい。始末屋、カノンのこと頼みますわよ」

「ああ、分かった。コウヨウツキ、お前もすぐに来いよ」

「当たり前ですわ」

走つていく二人の背中を見て、朝葉香は扇子を広げた。本当は最後まで見届けてやりたかったが、今は少しも気が抜けない状況だ。

マッドは白衣のポケットから両手を取り出して言った。

「じゃ、私の相手はアサハカちゃんつてわけねー。うんうん、申し分ないわ。かつて裏町最強と呼ばれた業者を相手になんて、そうそう出来ることじゃないものー」

「単刀直入に言いますわ。都合屋の解毒剤、シオン、そしてわたくしの大切なモノ二つを返しなさい」

「アサハカちゃんの大切なモノ？」

「香葉月家の家宝である扇子と、葉月の髪飾りですわ」

「あーあれ、私が盗んだわけじゃないのー。たぶんコヒナタくんが盗つてきたんだと思うけどー、返して欲しいなら私をやっつけてから、最上階を目指せばいいんじゃない？ アリスちゃんの部屋には、今まで盗んできた『大切なモノ』が置いてあるからー」

それを聞いて、朝葉香の扇子が動く。

「ならば、此処でくたばりなさい。ミス・マッド」

風が吹く、音がした。

「……んーと。私の目が狂つてないのなら、アサハカちゃんは今『扇子を扇いだ』だけよねー？」

不思議そうにマッドが聞く。

「その通りですわ」

朝葉香が頷く。

「じゃあさ、なんで私の白衣が、切れちゃってるわけ？」

そう言ったマッドの白衣は、裾がズタズタになっていた。

「『扇子で扇いだ』からですわ」

シャツ、と音をたてて、朝葉香が扇子を閉じた。

「ふむふむ。そういうわけね。アサハカちゃんの扇いだ扇子で、鎌かま鼬いたちが起こったって言いたいよねー？」

鎌鼬　ただ扇子を扇いただけで、服を切り刻んだというのか。

「どうして敵に手の内を明かさなければなりませんの？　そんなの秘密ですわ」

「感じ悪うー。でもそういう子、大好きよ」

\*

自由すぎることが、どれ程の苦痛か。

そんなこと、踊ることしか知らない人形には、一生分からない。



76・アリスの孤城 【破壊劇場】（後書き）

鳴神と獅子は、時計と名探偵を目指して走り出す。

77・アリスの孤城 【時を刻む者】

変わらぬ速さと、変わらぬ位置を。  
変わらぬ狭間と、変わらぬ道を。

\*

城内、二階。長い廊下を走る、2つの影があった。

「アサハカ、大丈夫かな？」

「心配ねーって。コウヨウツキは強いんだ。それより心配するべきはオレ達の方だけ。残るアリスの仲間、あの現態観測を倒したっていう大男に、変な笑顔のリユック・コヒナタだろ？ コヒナタは兎も角、大男は気を付けねーと」

「とは言え……」

少し気まずそうな顔をして、カノンがレオラに向き直って言う。  
ちよつと真面目な顔つきだった。

「おれ、実は『現態観測』さんがどんな人なのか知らないんだな、これが」

「……実は、オレもだったりして」

「……あはははははは……」

走りながら、お互いに引きつり笑いをした。なんとなく言いにく

かったが、2人とともに、大男に倒されたという情報屋のことを知らなかったのだ。

「だからさ、その人がやられたーって聞いても、大男がどれくらい強いのか、サツパリ見当付かないんだよ」

「オレも。あんまし分かんねえよな」

朝葉香を欠いた2人は、少し、いや大幅に不安だった。それでも引き返すことは出来ない。折角朝葉香が指し示してくれた道だ。なんとしたとしても、最上階を目指さなければ。

走り続ける2人の右側に、等間隔で見える部屋が3つ目になろうとしたとき、レオラがカノンの腕を引っ張って走るのを止めた。

「な、なに？」

「なんか、音がする」

「なんの？」

「しっ……なんだ、コレ……かちこち鳴ってて、色んな音が混ざってる……」

「かちこちって……お前、それって時限爆弾じゃねーの?!」

「え、まじで？」

そういえば、かちこち鳴っている音は、秒針を刻むような音に似ている。レオラはもう一度よく聞こうと耳を澄ませた。が、カノンの悲鳴にも似た叫びが邪魔をする。

「どこだよ!?! どこから鳴ってるんだよ、その音!」

「うるせえな、聞こえねーよ。ちよつと待てよ………あ、ここだ……」

呆けたようにレオラが指したのは、自分たちの少し前右にある部屋。そう、すぐその部屋だった。

「え?!」

カノンが真っ青になる。そして一目散に来た道に戻る。そして、レオラの手によって、それは叶わなかった。首根っこを掴まれたカノンが脚と腕をばたばたさせて抵抗する。

「はーなーせ、この馬鹿! おれまで道連れにする気か!」

「落ち着け。つてか、オレのことを見捨てたよな、お前！ それに別に時限爆弾じゃねーみたいだぜ。見て見るよ、あいつの持つてる懐中時計の音だ」

「あいつ？」

逃げる体制を止め、さっきの方向へと振り返るカノン。レオラが顎を向けたその先には、3つ目の部屋の扉から出てくる何かが見える。そして、その姿が全て視界に収まったとき、大きなその男は声を出した。

「ちくたくちくたく……幾年経とうとも変わらぬ速さを保ち続ける、この針音の素晴らしさを分かんとは、カノン・ソリティア。お前、不幸な奴だな」

そういつて溜息を吐く大男の左手には、アンティーク調の高そうな懐中時計が握られている。レオラの聞いた音の音源は、あれというわけか。

小馬鹿にされたカノンが、腹を立てて食いついた。

「誰だてめえ！ おれのこと知ってるみたいだけど、おれはお前みたいは大男なんて全然……あれ、大男……？ あ、知ってるわ、ごめん。フィンから聞いたことあったわ」

「訳が分からん」

再度溜息を吐く大男。またしても小馬鹿にされたカノンだった。

彼女が飛び出していかないように、レオラが必死でその首根っこを掴んでいた。

しかし、視線は大男から離れない。冷や汗が、レオラの頬を伝って床へと落ちた。

この男、気配が無かった……。

レオラが大男の登場に、焦りを感じた。針の刻む音は確かに聞こ



えたのだ。だけど、男がこの部屋にいることは、全く気付かなかつた。この扉が開くその瞬間まで、ここに人が居たことなど気づきもしなかった。察知できなかったのだ。

レオラの心情など知らないカノンが、相変わらず懐中時計を見つめている男に質問をする。

「お前、アリスの仲間の大男だな？ 名前は何て言うんだよ」

「名前など無い。そんなもの、とうの昔に捨て去った。そうだな、今は『クロック』と呼ばれている。俺の仮称だ」

クロック。時計を持っているからか？ カノンは取りあえずレオラに掴まれたまま話を続ける。話すべき事は、これからについて。

「おっけい、クロックね。早速お願いんだけどさ、おれたち、結構急いでるんだ。早く弟を連れ戻して、解毒剤を手に入れて、クウヤを助けないと駄目なんだよ。いまの鎮静剤がいつまで保つか分からない以上、なるべく急ぎたいんだ。だからここを通してくれよ」

カノンの頼みに、クロックは時計を見つめたまま返す。先ほどから、一度としてカノン達の方を見ていない。何かに取り憑かれたように、時計を見つめている。

「残念だが、それは無理な相談だ。アリスはあの少年のことをいたく気に入っているようだった。俺はアリスに仕える者である以上、あの少年をお前達に返す訳にはいかない。お前達こそ、怪我をしたくなければここで引き返せ。いまならミスティアス・マッドも、お前達の仲間を殺していないだろう。諦めて帰るんだ」

喋り終えても、クロックはカノン達の方を見なかった。無礼ともとれるその態度と、偉そうな口調に、カノンはわなわなと肩を震わせた。

黙れ、と言っても無理だろうと悟ったレオラは、とにかくカノンの首根っこを強く握った。下手に動き回ってしまえば、何をされるか分からない。未知の部分が多すぎるクロックに、レオラは恐怖に似た感情を覚えていた。

「ひーとーが、折角丁寧に頼んでやってるのにー……お前何様だ

！ 帰れ？ おれに命令すんな、このガリバー旅行記が！」

「普通に『巨人』って言えばいいじゃん…しかもお前こそ何様だよ、カノン…」

言葉を発したレオラに、やっとクロックが時計から目を離す。カノンと、レオラを見比べて、そしてレオラへと視線を落とした。

「その金髪頭。この無礼な少女を連れて、すぐに去れ」

「そう言われてもなあ…オレ達、はいそうですか、って帰る訳にはいかねーんだよ」

精一杯、言い返してみた。カノンも何か野次を飛ばしていたが、レオラにはそんな音、聞こえなかった。

ただ、脈打つ自分の心臓の音が、普段よりも大きく感じる。

「そうか。交渉決裂だ。ならばお前達を、」

その男の目には、感情なんてモノ、映っていないかった。まるでガラス玉のような目。何も感じていない、そんな目。人間らしさなんて、微塵も無い。ただ、何かを捕らえるだけの目。

どくん、どくん。心臓の音が、五月蠅い。それに、脈打つ音が速い。

なんだあれは。なんだあれは？ 一体、なんなんだ？ 昔、見たことがある。違う、最近にも見た。

懐かしい。悲しい。あの頃。悔しい。怖い。あの時。嬉しい。知っている。あの日。吐き気がする。似てる。あの子と。同じ。一緒。あいつと。誰と？ 自分と？

あれは目じゃない。ガラス玉だ。人間の目じゃない。人形の目だ。違う、あれは…

「殺すしかないな」

…殺人鬼の目だ。

レオラが咄嗟に後ろへ飛び退いた。もちろん、掴んだままのカノンも一緒に。

「おわっ！ ど、どうしたんだよレオラ？」

「……カノン、逃げる」

「はい？」

「いいから速く逃げろ！どこでもいい！速く！」

「う、うん」

「振り向くなっ！ さっさと行けっ！」

怒ったように叫ぶレオラに、驚きながらも素直にカノンは来た道に戻る。

しかし

「逃がさん」

クロツクが呟いたと同時に、たくさんの音がした。

誰かが、何かを押した音。

何かが、床へと転がる音。

誰かが、叫ぶ音。

鋭いモノが、何かに刺さる、鈍くて、嫌な音。

刹那の内に、沢山の音が鳴り終えて、最後にレオラが言葉を発した。

「…へへっ…バタフライ、ナイフかよ……嫌な共通点だな、クロツクさんよお……」

「ちっ…仕留め損ねたか。まあいい」

レオラの左手には、刃に臆することなく、古びたバタフライナイフがしっかりと握られていた。掌から流れ出た赤い液は、ツーンと腕を伝わり、肘のあたりで堪えきれなくなって、ポタリと落ちた。

床の絨毯に、赤い染みが2つ出来る。

「レ、オ……ラ……？」

床へと転んでいたカノンが、ビブラートの掛かった声で、自分を庇った人の名を呼んだ。

「よおカノン。怪我してないか？」

「お、おれなんかより、レオラがっ！」

「大丈夫だいじょーぶ。ちよつと切れたけど、ほら」

ぼとつ、と鈍い音がして、レオラの手を傷つけたナイフが絨毯の上に落ちる。銀色に光る刃は、赤色が少し混じっていた。

レオラはその左手をカノンに振って見せて、大したことでは無いと伝えた。

「紙で切った方が痛いって。これくらいの傷なら」

にへらと笑うレオラが、カノンの視界からは少しぼやけた。自分の所為で、傷付いた人がいる。

涙を堪えるカノンを見て、レオラが少し困った顔をした。安心させるつもりが、余計不安にさせてしまったようだ。

「見事な反射神経だな。あと一步……いや、半歩遅ければ、カノン・ソリティアはその喉元を掻きさられ、苦痛と共にこの世を去っていたはずなのだが。そして止める方法も見事だ。最小限の被害ですんでいる。予想以上だな、アゲハ・ストレイン」

黙ったままだったクロックが、レオラに話し掛けた。

「うるっせーな。お前、何か勘違いしてねーか？ オレは道外れの始末屋、レオラリアナだ。間違えんなよ」

強い意志を秘めた、赤い焰のような眼だった。

「……ふん、まあいい。小娘、お前だけ、この先へと通してやるう。コヒナタにも分けてやらないとな。俺は、レオラリアナとか言う奴と少しの間、遊んでおこうじゃないか」

「だってよ。良かったな、カノン。これで先へ進めるぜ」

嬉しそうに笑うレオラとは反して、カノンは頭を振った。何度も振った。

「で、でも……！」

「でも』じゃねーの。しっかりしろよ、お前は姉ちゃんなんだから？ オレとはここで別れだけど、すぐに追いかけるからさ。コウヨウツキと一緒に、すぐに行く。あんまり無茶すんなよ？」

転がったままだったカノンの身体が、ゆっくりだが、確実に起きあがる。ブレザーの袖口で、顔を擦る。

「レオラ。すぐに来いよな。おれ、そんなに気長に待ってられねーぞ。お前が来ないと、また廊下を破壊するかもしんねえし」

乱暴に擦った目蓋は、赤くなっていた。

「あはは、ほどほどにしとけよ。そいじゃ、行ってらっしゃい」

「いつてきます」

「あ、そうだ」

走り出そうとする彼女に、レオラが声を掛ける。いきなり呼び止められたカノンが、慌てて振り返る。

「なに？」

「あのさ、これが終わったらの話。クウヤとも話してたんだけど、裏町のみんなが集まってさ、新年パーティー開こうな。また、一緒に騒ごうぜ」

「あたりまえだろ！」

レオラがもう一度笑った。兄のような、優しい笑みだった。

「だな。じゃ、気を付けて」

「お前もな」

そう言っつて、暗い廊下の先へと消えていく背中を見届けて、レオラがクロツクへと尋ねた。

「なんで、襲おうとしなかったんだよ？　いまの会話中、ずっと隙

だらけじゃねーか、オレ」

「別れの挨拶くらい、ちゃんとさせてやろうと思ってな。泣かせるじゃないか。最期に約束を残して逝くだなんて」

「最期じゃねーよ。これからだ。お前を倒して、オレは上へ行く」

クロツクが可笑しそうに笑う。

「はっ。想像力が豊かなんだな、アゲハ・ストレイン。お前も分か

っているだろう？ 自分に勝ち目など、一欠片も無いと。だから、あの少女を行かせた。この場合、生かした、と言っべきか」「……どーだかね」

レオラの頬を、再び汗が伝い落ちた。

\*

秒針を刻む音が聞こえる。  
病心を刻む音が聞こえる。

77・アリスの孤城 【時を刻む者】（後書き）

お前だけは、どうか、無事に。

78・アリスの孤城 【獅子と時計の悪夢、魔女の茶会】

ねえ、貴女は知ってる？

知恵を得すぎた所為で、狂ってしまった医者のお話を。

時刻に固執するあまりに、狂ってしまった男のお話を。

可哀想な笑顔のまま、狂ってしまった少年のお話を。

\*

「廊下で殺り合うのも良いが、ここは定石に踏んで、俺の部屋へと案内しよう。ここじゃあ、俺もお前も戦いにくいだろう」

「ご親切にどうも。オレ、一応急いでるから、手早く頼むわ」

クロツクが、先ほど自分が出てきた部屋へと入っていった。ドアがぱたりと閉まる。

敵の領域に入ることにはあまりしたくは無かったが、この限られた空間では、確かに動き辛い。

相手は戦闘狂なのか、それともストレインと手合わせでもしてみたいのか、どうやら正々堂々と戦うつもりらしい。不意打ちの可能性が無いことだけが、唯一の救いだった。レオラは大人しく言うことを聞いて、その後が続く。

クロツクの入っていったドアノブに手を掛け、ゆっくりと開け、



「……………しつれーしました…」

眼をまんまるにしたまま、すぐさま閉めた。

だが、それに気付いたクロツクが、閉じられかけたドアを止める。

「どうした？ 急いでいるんだろう？」

「いや、なんかオレ、頭可笑しくなつたみたいだわ」

青い顔のまま、頭をぶんぶん振って自分より頭3つ分大きいクロツクに見上げて言った。クロツクは、少し不機嫌そうにレオラを見る。

「意味が分からん。さつさとしないで殺すぞ」

「だって幻覚が見えたんだぜ？ 部屋中の壁が時計に埋まつてた。

疲れてんのかな…オレ…」

「ああ。アレは俺の趣味だ。素晴らしいコレクションだろう？」

「幻覚じゃねーのかよ！」

クロツクが大きく開けはなつたドアの向こう側には、時計、時計、時計。それもただの時計ばかりではない。壁時計に鳩時計、振り子時計に懐中時計。さらには腕時計までが綺麗に壁を埋め尽くしていた。

クロツクに促されるまま、部屋へと入りながら、レオラが呆れを通り越して感嘆の声をあげる。

「……………すっげえ数だな……………時計、好きなのか？」

「ああ。好きだな。この世で恐らく一番大切な存在だと言える。1月にこの屋敷へ移り住んだが、この1ヶ月ほどでやっと形になってきた」

大真面目に答えるクロツクに、最早レオラは言葉を失った。四方八方から聞こえる、正確無比な秒針の音が、気持ち悪いくらいに響いている。

「チクタク、ちくたく……………今日も素晴らしいリズムだ……………そうは思わないか？ アゲハ・ストレイン」

「だからオレはレオラリアナだつての。いい加減しつこいぞ、お前」  
「元連続通り魔なんだ。しつこくて当たり前だろう。これくらい」

執念が無ければ、人殺しも時計集めも出来んな」

殺しと、時計収集を一緒にして言うクロックに、レオラは憤りを感じた。それと同時に、ある事件の記憶が脳裏を過ぎる。ついこの間までイギリスを震撼させていた、連続殺人事件。

「お前、この前新聞に取り上げられてたロンドンの切り裂き魔だな。確か、11月9日以降、切り裂き魔によると思われる犯罪がびたりと止んだって書いてあった。そりゃそうだ。レスティナにいるんだから、ロンドンで犯行は出来ないよな」

ふん、と鼻を鳴らしてクロックが言う。

「俺は別に切り裂きが趣味な訳ではない。時計が欲しかっただけだ」  
時計が欲しいから、殺す。クロックは、壁にかけられてある腕時計を指さして、自慢げに言った。

「これがその時の腕時計だ。5本とも、同じ職人が作っている。この職人は装飾が丁寧でな、俺が最も尊敬する職人だ」

「時計が欲しかったから、殺したのか」

「そうだ。犯罪者はみんなそういうモノだろう。アリスも『大切なモノ』が欲しいから殺す。ミステリアス・マッドも『自分の作った毒を試してみたい』から殺す。コヒナタに至っては単純な動機だ。『気に食わない』から、殺す。あいつの場合、『気に食わない』と言うよりは『裏町の間人』だから殺すと言っても過言ではないな。お前達もそうだろう」

「オレ達が、何だって？」

レオラがクロックを睨み付けるが、彼は一寸たりとも動じなかった。

「『頼まれた』から、殺す……………お喋りが過ぎたな。銃、ナイフ、どれがいい？好きなモノを選べ。そんな陳腐なバタフライナイフでは話にならんだろう」

「……………お前は何を使うんだよ」

「もちろん、素手だ。コヒナタに聞いた話だが、お前、ストレインだった頃の記憶が無いらしいな。殺人鬼でないお前など、素手で事

足りる」

「じゃあオレは陳腐な刃物でいかせてもらう。お前みたいな人間の風上にも置けねえ奴、これで十分だ」

持っていたナイフを取り出しながら、レオラが淡々と言った。手に握られているのは、綺麗に装飾が施されたあのナイフだった。

「はん。良いだろう。望み通り、手早く終わらせてやる」

部屋は、ただ規則正しく動く針の音しかしなかった。

\*\*\*\*\*

戦いが始まった部屋の、すぐ真下。

城内1階では、ミス・マッドと朝葉香のいる部屋があった。マッドがアリスに誘われ、コヒナタと共にこの城へ来てから、1週間も経たない内に、自らの研究室へと変えてしまった部屋だ。

その部屋にある、比較的綺麗な丸テーブルを前にして、朝葉香が静かに問うた。

「これは、どういっつもりですか？ ミス・マッド」

その声は、いたく不機嫌そうに聞こえる。試作品のビンで溢れかえる棚の向こうから顔を出したマッドが、朝葉香の質問に答えた。

「え、朝葉香ちゃんって紅茶駄目だった？ ごめーん。いまコーヒー豆切らしてるのよー」

呑気に答えるマッドに、朝葉香が廊下で披露したように、もう一度扇子を広げる。怒りが頂点だった。沸点に到達していた。

「わたくしの鎌鼬は、貴女の首を飛ばすことも可能ですわよ？ 質問に答えなさい。もしくは死になさい」

「二者選一なわけー？ こ、答えたのにー？ ちょっと武器を仕舞ってよー。私、丸腰じゃなーい」

「毒なんてもの、幾らでも隠し持つことが出来ますわ」

「疑いすぎでしょー？ ちょっとはコヒナタくんの純真ぶりを見習って欲しいわー」

そう言いながら、トレイにはパウンドケーキのようなものに乗せていた。茶会でも始めるつもりらしい。

「本当に毒なんかいれてないってー。ほら、」

ぱく、と一口食べてみて、にっこり笑う。

「ね？」

朝葉香は不服そうな顔をしながら、席に着いた。そして、先ほどマッドと廊下で交わした会話を思い出す。

『感じ悪うー』

『武器をお出しなさい。わたくしの鎌鼬かまいたちで刹那せつなに終わらせて差し上げますわ』

『んー、それも良いけど、私あんまり戦いたくないのよねー。でもアリスちゃんには遊ぶように言われてるし……どうせなら少しだけお喋りして、ほんのちよつと……そうね、小一時間ほど足止め喰らってくれれば、それが一番良いんだけどー』

『……は？』

『なんつーの？ 私、別に人殺しが好きってほどでもないわけ。でも、私はアリスちゃんに侵入者を仕留めるように言われてるし、朝葉香ちゃんは上に行きたい。じゃあ、折衷案ってことで、小一時間ほどお喋りしましょーって言ってるのー。駄目かしら？』

『……は？』

「まあまあ、立ち話も何だし、とりあえず部屋に入りましょう」  
「はあ？」

結局 上手いこと言いくるめられて、部屋へと案内された。そして、この茶会。マッドに紅茶を勧められ、ケーキを出され、挙げる句の果てには疑い深さを指摘されてしまったと言っわけだ。

「不覚……それ以上に、香葉月家最大の恥ですわ。敵にまんまと罠に嵌められるとは！」

「わ、罠ー？」

朝葉香の向かい側の席に着きながら、マッドが気の抜けた声を出した。

「ミス・マッド！ 観念なさい。貴女の企みなどお見通しですわ！ こうやって友好関係を結んで、わたくしが油断した隙を狙おうだなんて、そうは問屋が卸しませんことよ！」

びしい、と音が付きそうなくらいに人差し指をマッドに向け、朝葉香が断言した。が、マッドはちよつとびっくりして反論した。

「ええー?! 朝葉香ちゃん、疑い深いとは思ってたけど、本当は人間不信かなんかでしょー? ここまで信じてもらえないと、正直傷付くわよ。大体、いまさつき毒味もしたじゃないー」

「ええい、黙りなさい、悪党！」

「そりゃ悪党だけどー……あ、紅茶冷めちゃうわよ」

「あら、本当ですわ」

上品に、音を立てずに飲むマッドと朝葉香。

一口飲み終えて、かちゃ、と小皿の上に戻す。マッドはまだごくごく飲んでいた。一口で飲みきるつもりらしい。これほど香りの良い紅茶なら、その気持ちも分からないことはないと思つた。暫く紅茶の後味を堪能していた朝葉香だが、はっと気付いて頂垂れる。

「ま、まんまと飲んでしまいましたわ…！」

「美味しいでしょー？」

ようやく全部飲み干したマッドが、自慢げに言う。呆れた表情で、朝葉香が見ている。

「こ、今度はなにー？」

「貴女、先ほど言っていましたわね。人を殺すのは好きじゃないと。なら何故わたくしの妹を……いえ、あの町を消したんですの？」

マッドは、困ったように笑う。笑いながら、おかわりの紅茶をカップへと注いだ。

「すごく私事で申し訳ないんだけどねー。作った毒を試したかったから、ってとこかしら。本当、ただそれだけだったのよー。葉月ちゃんだっけ？ あれ、本当に悪いことしたなーって反省してる」

カップへと並々注いで、ポッド朝葉香のカップへと傾ける。少しだけ減った中身が、またいっぱいになった。

カップの中で揺れる、赤色とも茶色ともつかない紅茶を見つめながら、朝葉香が呟いた。

「……………話を变えましょう。1時間、貴女とのお喋りに付き合いますわ。ですから、貴女のお仲間についての話と、都合屋の解毒剤を渡しなさい。この条件がのめないようなら、貴女には、わたくしと戦わざるを得ない状況にしてさしあげます。そして、完膚無きまでに打ち砕いて差し上げますわ」

マッドは、さらに困ったように笑った。もう、ほとんど困っている表情だった。

「その話なんだけどねー……………その、のみたいけど、のめないっていうかー……………」

「はっきりなさい」

「ううー……………なんていうか……………あれ、私の新作の毒なの。だから、」

「解毒剤が無いのよねー…」  
入れ立ての紅茶の香りが、部屋には充満していた。

\*

貴女は何も知らないんだね。

78・アリスの孤城 【獅子と時計の悪夢、魔女の茶会】（後書き）

獅子と、時計と、魔女と、毒と。



79・アリスの孤城 【毒と笑顔の出会い】

全部全部、無かったことにしてあげる。  
天使のような微笑みで、悪魔は囁いた。

\*

「解毒剤が無いのよね……」

マツドの言葉に、朝葉香は息をすることさえ忘れてしまったかのように、全ての動きを止めた。氷の石像のように、固まってしまった。

「……解毒剤がない……？」

「そ。ま、それ以外の要求なら、のめるわよー。私達のことを知りたいんだっけ？ オーケーおーけー。誰から知りたい？ 私達のお姫様のアリスちゃん？ どでかい時計さん？ それともコヒナタクん？ 私のことを話しても良いんだけど、あんまり面白くなさそ

」

「ま、待ちなさいっ！」

両手をテーブルにはん、と叩き付け、朝葉香が立ち上がった。弾みで椅子が派手に倒れたが、マツドはそんなことよりもアサハカの剣幕に押されてただ驚くことしか出来なかった。

「解毒剤が無いと言うことは、都合屋はどうなりますの!？」

あの子みたいに……葉月みたいに、苦しんで魔されて泣いて恨んで怨んで……それで終わりですか？ またわたくしは、何もしてあげられないまま、ただ見てるだけで……看取るだけで!」

もう一度テーブルを叩いて、朝葉香は顔をあげた。マッドを視線で射殺すかのように、鋭く睨んだ。睨み付けた。

「解毒剤が無いのなら、貴女にはもう用はありません。さようなら」  
さつと長い黒髪を翻し、扉のドアノブにまで手を掛けた朝葉香を見る当のマッドは、相変わらず飄々とした態度で朝葉香に答える。

「だって新作なんだもん。無いモノは無いの!。っていうか、人の話は最後まで聞きなさいよね!。途中棄権禁止!」

それでも朝葉香は止めない。ノブをがちゃりと捻り、扉を開けた。少し慌ててマッドが引き留める。これでは、アリスに命令された、遊んで来い、という言葉に背くことになる。別にそんなことどうでも良いのだが、上の階にいる2人に笑いにされてしまっのが見えている。

クロツクは鼻で笑うだけだろうが、コヒナタは後々までそのネタを引きずってきそうに嫌だった。

「ごめんごめん! ちよつと聞いて! 私のお喋りに最後まで付き合ってくれたら、良いことを教えてあげるわ。その都合屋の……え! っと、なんだっけ? ファイルファイル……」

マッドが、床に放り投げて置いたコヒナタ特製ファイルをぺらぺらめくる。そしてクウヤのページを開けて、辿々しく字面を追いなから読んだ。

「く……うや……そうそう、クウヤくんにとって『良いこと』を覚えてあげるわ!。ね? だからまだここから出ていかない欲しいわけ!。アリスちゃんに怒られるの、私なんだからね。1時間、ここに居てくれるだけで良いって言ったじゃない!」

「……1時間、ここで貴女のお喋りなりお茶会なりに付き合えば、都合屋は助かりますのね?」

朝葉香は、まだこちらを向かない。廊下の方を見たまま、マッドに質問する。

「イエス！ 私、冗談は言っても嘘は吐かないわ。女と女の約束よ！」

それを聞いた朝葉香が、また元の位置に戻ってきた。倒された椅子を拾い上げ、その上に座り、マッドともう一度向かい合う。

「それしか方法が無いのなら、貴女の気の済むまでお喋りに付き合っ  
て差し上げましょう。もしもそれが嘘だったならば、その時は」  
「その時は？」

「貴女の大切なモノを、修復不可能なまでに破壊しますわ。これでおあいこです」

「了解。じゃ、質問しあいつことか？ 私ばかり喋るのもアレだしね」

楽しそうに再び紅茶を注ぐマッドに、溜息を吐きながら朝葉香が答える。何が悲しくて、妹の仇と仲良くお茶会なんかしなければならぬのだろう。

だがこれは逆に言えばチャンスでもある。敵の内側を探っておけば、カノン達と合流したときに有利だ。出来るだけ情報を手に入れなければならない。

2杯目の紅茶を受け取って、朝葉香が言った。

「では、まずわたくしから質問させていただきますわ」

「どーぞ」

「大男……貴女が時計さんと呼ぶ男は、一体誰のですの？」

んー、と少し迷ってから、マッドが答える。

「簡単に言っちゃえば、年齢不詳の男。みんなはクロックと呼ぶわー。口癖はちくたく。病的に時間に固執する、連続婦女殺害の犯罪者。常に時を把握しないと不安定になる……これくらいかしらね」

「ああ、だからクロック……」

呆れた顔で朝葉香が聞いた。もちろんとも言わんばかりにマッ

ドが満面の笑みを見せた。

「そー。アリスちゃんがそう名付けたんだって。ユーモアセンスに溢れてるでしょー？ 今度はこっちの質問ね。クウヤくんって、どんな子？」

「わたくしの、独断と偏見によりますわよ」

「うん。独断と偏見に任せるわ」

しばらく考えて、朝葉香が一つ一つ答えた。

「黒髪で、深い碧色の目をしていますわ。確か和国とイギリスのハーフでしたっけ。一つ上のお兄さんがいて、家族とは疎遠状態だとカノンが言っていましたわ。十二、三の時に勘当されたそうですの。わたくしが知る限り、誰に対してもどの様な時でも、取りあえずニコニコ笑っていますけど、あれを処世術だとも思ってるんでしょーか。見ていて凄く苛々しますわ。後は、もの凄く強くて、もの凄く弱い」

「よく分かったような、分からなかったような………最後のは一体なにかしらー？」

「言葉の通りですわ。身体能力や、武具の扱いなどは天才的なのですが、精神的に脆い部分があります。ああいうところが嫌いですが」

「朝葉香ちゃんは、なんでそんなにもクウヤくんのが嫌いなわけ？」

朝葉香は紅茶を飲み終えて、自分でお代わりを注いだ。注ぎながら、マッドに不敵に笑った。

「次はこちらの質問の番ですわ。わたくしが次に聞きたいのは、リユック・コヒナタについて。わたくし達の得た情報では、確か探偵をしているという青年でしたわ。彼は探偵という立場に居ながら、何故貴女方のような犯罪者と手を組むのですか？」

「青年？」

マッドが不思議そうな顔をして、しかしすぐに心当たりがあったようで、納得の声をあげた。

「ああ、はいはい。リュック・コヒナタね。青年の方ね」

「青年の方？」

今度は朝葉香が不思議そうに言葉を返した。青年の方、つまり、『違う方』もいるということ。

「たぶんね、朝葉香ちゃん達が言ってるリュック・コヒナタは、ここにいるコヒナタクンのことじゃ無いわー。ここにいるのは、まだ12歳の少年よ」

マッドの言っていることが、朝葉香には理解できなかった。あの全体観測が手に入れた情報に、間違いがあったと言うのか？

そんなはずはない。全体観測であるフィンが、情報を間違っことなど、世界がひっくり返ったとしてもあるはずの無いことだ。否、あつてはならないこと。

「納得出来ない？ まあ裏町業の人間からすれば、情報屋の情報ほど信頼出来るモノはないものね！。特に最も優秀と謳われる全体観測の情報。でもね、コヒナタクンはそんな情報屋をも凌ぐ名探偵なのよ」

まるで身内を自慢するかのようになり、とても誇らしげにマッドが言った。朝葉香は思考が上手く働かないのか、何かを言いかけては、黙り込むように口を噤んだ。言う言葉が見つからなかった。

そんな彼女に、マッドは懐かしそうに目を細めて言う。

「そうね、私とコヒナタクンが出会ったときの話をしてあげるわ。」

私はその日、たまたま散歩に出掛けていたの。いいお天気だね、久しぶりの外だったわ。普段は研究室に入り浸ってるから。町へ出掛けようと思つて、色んな道を歩いていたの。小さな町でね、私のことを知ってる人なんて居ないから、のんびり散歩出来た。

そしたらね、たまたま古い家の建ち並ぶ道を見つけたの。周りは明るいのに、そこだけ暗かった。私は元々そういうジメジメした場

所の方が好きだから、そっちの道を選んで歩いてみたの。

しばらく、その道を歩いていたの。両側に立ち並ぶほとんどの家には、もう誰も住んでいないみたいだった。みんな都会に行ったのか、その家達はまるでいらなくなって捨てられたみたいだった。たぶん、この国の最下層に属する人達が住んでた『村』だったと思う。剥げたペンキとか、そういうみつともない家ばかりだったから。

そこで、行き止まり。道は無くなっていった。そこに小さな子供が倒れてた。横向きに、うずくまった格好で。お腹が空いてたんでしようね。両手をお腹に当てて、倒れてた。

その子ね、倒れてるのに笑ってるの。ふにやって顔して、何がそんなに楽しいのか分からないんだけど、確かに笑ってた。心から笑ってた。

訳分かんなくって、私は『なんで笑ってるの？』って聞いたの。するとその子は答えた。『幸せになりたいから、笑ってる』って。笑顔は幸せを運ぶって、信じ切ってるの。

なんだか放っておけなくてさ。そのままだと、その子はきっと栄養失調で死ぬだろうし、きつと行く当ても無いんだらうって思っって、私はその子を拾うことにしたの。

それがコヒナタくん。リュック・コヒナタ。私の大切な家族よ」

そういったマッドは、とても嬉しそうに微笑んでいた。自分の、本当の子供のことに話していた。きつと、そうなのだろう。

喋り終えた彼女に、やっと朝葉香が尋ねた。

「そ、そんなの、おかしいじゃありませんの。大切な家族なのに、どうしてこんなことをさせるんですの？ こうやって、人の大切なモノを盗んだり、犯罪者達と一緒に行動をしたり。大切なんでしょっ？」

「質問は一回につき一個でしょー。ま、いいわ。答えてあげる。それはね、コヒナタくんが裏町業のこと、大嫌いだから。殺し尽くしてやりたいほどにね」

「裏町業が、嫌い？」

「そう。私達はね、その後しばらく2人でずっと行動してたの。一緒に住んで、一緒にご飯を食べて。それから2年くらい経った日、ある銀髪の女の子が私達をスカウトしにやってきた。まあ言っちゃえば、アリスちゃんのことだけだね。『裏町業だつて犯罪を犯してるのに、私達だけが罪を問われるのは不公平よ。裏町相手に大暴れしてみない？』ってね。

こうして私達4人は集まった。それぞれ目的は違うけど、標的は裏町業者に絞ったってわけ。

アリスちゃんは自分の『大切なモノ』を見つける為に、自分と似たようなことをしてる裏町業者達の『大切なモノ』を奪っていく。

時計さんは、私達と出会う前に、なんかアリスちゃんと約束をしたみたいで、主にアリスちゃんの家臣みたいなもので、特に目的なんか無かったんじゃないかしら。

私は自分の作った薬を試す為に。

コヒナタくんは、大嫌いな裏町業者を殺す為に、ね」

マッドは相変わらず飄々としていたが、朝葉香には少し悲しそうな目をしているように見えた。次の瞬間にはいつも通りの彼女だったので、それは朝葉香の思い過ごしだったのかもしれない。

「どうしてそのコヒナタという少年は、わたくし達のことをそんなにも嫌ってるんですの？」

「あら、次は私の質問よー。朝葉香ちゃんは、どうしてクウヤくんがそんなにも嫌いなもの？」

なんだか仕返されたような気分だったが、そういうルールの元で喋っているのだから仕方ない。朝葉香は少し溜息を吐いてから話した。

「弱い癖に強がっているところとか、作り笑いが下手なところとか、

そういう所が嫌になるくらい妹にそっくりなんです。重なって見えてしまう。そうやって妹の姿を思い出すと、自分の無力で非力だった頃を思い出すから、どうしても好きになれませんか。わたくしの勝手な八つ当たりです」

言葉にして言うと、尚更自分の浅はかさが露見したように感じる。そんな朝葉香に構わず、マツドは大きな声で笑った。

「あははっ！ 八つ当たりなんだ！ クウヤくん可哀想ねー」

「……次はわたくしの質問ですわ」

「はいはい。コヒナタくんが、なんで裏町業を憎んでいるか、ね。それは単純で少し複雑なの」

「勿体ぶらずに言いなさい」

「コヒナタくんはね、さっきも言ったように一人倒れていたの。まだ10歳になるかならないかの歳で。どうしてだと思っ？」

「親に捨てられたか、あるいは親が死んだか。そういった理由でしょう」

「そうね。きっとその二つのどちらかだったことになるわ。一体どちらなのかは、私はもちろん、コヒナタくんも知らないんだけどね。ある日突然、一人ぼっちになったみたいだから」

朝葉香の的を射た答えに、マツドは今度こそ悲しそうに言った。

「コヒナタくんのお母さんはね、裏町業者だったの」



笑ってごらんよ。周りが見えなくなるくらいに。  
だってほら、世界は醜い。目を開けていたって、仕方がないよ。

79 アリスの孤城 【毒と笑顔の出会い】（後書き）

だから、笑おうよ。

80・アリスの孤城 【悲しいほど、紅い世界で】

忘れてしまったんだよ、あの子は。  
世界を、世界を、世界を。

\*

「コヒナタくんのお母さんは、裏町業者だったの。  
コヒナタくんが小さかった時、ある日突然居なくなったらしいわ。  
仕事の最中に死んだか、子供を抱えての仕事が苦になって逃げ出したか、それは誰にも分からないけれど、ただ一つだけ言えるのは、  
コヒナタくんはお母さんが裏町業なんかしてたせいで独りぼっちになった」

独りになる。それがどれほど苦しいことかは、朝葉香には分からない。朝葉香には、香葉月の家にはまだちゃんと家族がいるのだ。だけど、独りになったからって、無関係の人を殺してやりたいと思うのは間違いではないか？

「だからって、他の裏町業者を殺してやりたいほど憎むなんて……」  
朝葉香の言葉の途中でマッドが割り込んだ。いつもの巫山戯た口調ではなく、静かな声色で。

「小さな子供が、たった一人で生きるのがどれほど辛いことか分か

る？ 私には想像も付かないわ」

「それなら、カノンやシオンだって……」

「あの二人は、貧民街でも独りでは無かったわ。カノンちゃんにはユリウスという少年が傍に居て、シオンくんにはおじいさんが居た」  
きつと、コヒナタが集めた情報だったのだから。マッドはファイ  
ルを捲り、指でなぞった。

「だけどコヒナタくんの傍には、誰も居なかった。まだ二桁の歳にもならない小さな子供が、人を信じられなくなる。そんな幼い頃から人間不信になるなんて、一体どんな風にして生きてきたんだろうね」

「……だけど」

「……。その次に言う言葉が、朝葉香には見つからなかった。コヒナタという少年が、一体どんな子かは知らないが、自分には彼を否定する言葉が見あたらなかった。

マッドは続ける。

「コヒナタくんはね、一種の対人恐怖症なのよ」

「対人恐怖症？ 人に会うことが出来なかったり、人前に出ることが出来ないという、あの」

「そうよ」

「……言っている意味が分かりませんわ。理解しかねます。そんな恐怖症ならば、こうやって仲間になったりすることも不可能じゃありませんか」

朝葉香の言うとおりだった。コヒナタが対人恐怖症だというならば、そもそも誰かの仲間になることも出来ないはずなのだ。

「一種の、って言ったでしょう？ 普通の恐怖症とは少し違うの。コヒナタくんは、本当の自分を人前に見せない。人間不信だから、本当の自分を知られるのが恐いのよ」

「本当の、自分？」

朝葉香が腑に落ちない顔をしたその眼前で、マッドはまた巫山戯た口調で言った。

「あら、次は私が質問する番よー？ 少し喋り過ぎちゃったわねー。何を質問しようかしら」

「……………貴女とお喋りしていると、ストレスが溜まりますわ……………」

「いやん、怒っちゃやーよ」

\*\*\*\*\*

二階、クロツクの部屋。かちこちと秒針の刻む音が、レオラには酷く耳障りだった。

「どうした。もう終わりか、レオラリアナ」

さも心外だと言わんばかりに、クロツクが言った。彼の前には致命傷は避けてるものの、至る所に傷を負い、倒れるレオラがいた。

「……………ま、だに決まってるだろーがあ！！」

起きあがり様にクロツクへ向かって飛びかかるが、軽く避けられた。そして、レオラの頬には切り傷だけが残った。

「……………っ！」

「馬鹿か、お前は。先ほども言っただろう。貴様の動きは見切ったと」

「……………やってみなきゃ、分かんねーだろ……………」

「やらんでも分かる。その証拠に、俺には一つも傷が付いていない。だが、攻撃をしかけてくる当の本人はどうだ？ 傷だらけの返り討ちではないか、レオラリアナ」

その通りだった。クロツクの部屋へと招き入れられてからもう30分以上経っているが、怪我を負うのはレオラのみで、クロツクは悉くレオラの攻撃を避けきっていた。

そして、クロツクは言ったのだ。お前の動きは見切った、と。

「…致命傷は、避けてるぞ」

「ふん。それは俺がそうしているだけのこと。すぐにくたばられては楽しくないのでな」

クロツクはそう言って自身の腕時計を見た。

「……………くそっ…」

またヨロヨロと起きあがるレオラに、クロツクは馬鹿にしたように言った。

「貴様の動きが、なぜ俺に見切られているか分かるか？ 分かっているのなら、こんなに傷だらけになっただけはしないだろうな。答えは、癪だ」

「クセ…?」

敵の言葉に耳を傾けるのは癪だが、このままでは犬死には見えていた。それにレオラはもう限界だった。クロツクに話をさせ、体力の回復をしなければならぬ。

そんなレオラの心を知ってか知らずか、クロツクは話し出した。

「誰にでも癪というモノはある。戦いの天才にも凡人にも、等しくだ。お前の場合、ナイフを構えてから攻撃に移るまでに、必ず0・8秒の間が出来る。どんなときも必ず、その時間が生まれている。それさえ分かれば、全ての攻撃など見切ったも同然だ」

「0・8秒だと…? そんなもん、一体どうやって計ってるんだよ」  
「俺の体内時計は0・01秒単位で完璧だ。狂いなど一切無い」

言い切ったクロツクは、また自分の腕時計を見る。そしてポケットから取り出した懐中時計と見比べる。常に時間を把握しないと不安になるのだろうか。

人間ではない。レオラはそう思った。いくらなんでも、そこまで精密な体内時計などあるものか。だが、実際に全ての攻撃を見切ら

れているのだ

嘘、ではない。

「…そんなに強いお前が、なんでアリスなんかの仲間なんだ？ お前なら、仲間なんか必要無いだろ？」

話を長引かせるために、レオラは問う。息はまだあがったままだ。「そうだ。俺に仲間など一切必要ない。俺には時計さえあればいい。だが、アリスは特別だ」

「特別？」

「アリスは、警察軍から逃れ傷だらけだった俺を助けてくれた、命の恩人だ。だから、恩返しをせねばなるまい。決してミス・マッドやコヒナタと仲間になった訳ではない。ただ一緒にいるだけだ」

それからしばらく、クロックは黙り込んだ。何かを思いだしているのか、目を瞑って、戦いの最中とは思えないほど隙だらけだった。不意打ちを狙えば、いけるかもしれない。だが、きつと避けられるだろう。それこそ犬死にだとレオラは思った。体内時計の話がどうであれ、今の自分では歯が立たないのは事実だ。

「お前は、一体何がしたいんだよ」

「……………何がしたい、か。そうだな、俺は精密機械になりたい」「はあ？」

「精密機械、つまり時計になるのが俺の夢だ。あれをしてみる」

そういつてクロックは壁に掛けられた無数の時計達を指さした。

「毎日毎日、同じ場所を同じ早さで同じことを繰り返す。なんと素晴らしいことか。ネジが切れれば止まることもあるが、巻き直せば元通りだ。それに比べ、人間はどうだ？ ふとしたことで不安定になり、やがて自滅する。全く以て不完全な生き物よ」

大分息の整ってきたレオラを見て、また腕時計を見る。そしてクロックが溜息を吐いた。

「少しお喋りが過ぎたようだな……………お前こそ、一体何がしたいんだ？」

「オレ…？」

「ああ。理解不能だ。アリスが襲った都合屋の少年も、ミス・マツドの攫ってきた便利屋の弟も、全てお前には無関係ではないか。便利屋がここへ来るのは道理が通っているが、お前がここに居るのはおかしいではないか。なぜ他人のことなのに、首を突っ込む？」  
本当に理解できないようだった。奇妙がるクロックに、レオラは反論した。

「他人じゃねえ。友達だ」

「友達？ レオラリアナ、貴様は自分の言っている意味が分かっているのか？ 記憶がないとはいええ、お前は所詮殺人鬼の血を受け継いだ者。そんな奴に友など居る訳がなかるう」

それは、つい最近にも言われた言葉。

ある復讐者に、突かれた一言。

「……オレは、殺人鬼なんかじゃねえ……セリ・オーシュの一番弟子、道外れの始末屋だ！」

ナイフを振り上げ、素早くクロックの後ろに回り込む。そして背中へと刺した。

「これで終わりだ……！」

「『見切った』と言ったであろう」

刺した、はずだった。

ざしゆ

「上手く避けられて良かったな。そうでなければ今頃、その右腕が飛んでいたぞ」

クロックの言葉など、聞いていられる余裕は無かった。

レオラの右腕からは大量の血が伝い落ちる。



腕の、丁度関節に近い部分は、クロツクの手によって抉られ酷い有様だった。クロツクは、素手で腕を抉った。

「もうこれで利き腕は使えまい。そうでなくとも、早く手当をしなければいずれ出血多量で死に至る。大人しく降参するか、俺に殺されるか、どちらか好きな方を選ぶと良い」

レオラは黙ったままだった。

黙って、自分の右腕を見る。クロツクの言うとおり、もう戦えない。利き腕が使い物にならなければ、ナイフを持ってない。

「……オレは」

オレは、負けられない。死ねない。カノンが待っているんだ。約束をしたんだ。

「どうする？ レオラリアナ」

血が、また落ちる。ぼたぼたと、絨毯を血色に染め上げていく。

小さな水溜まりが、レオラの足下に出来上がっていた。

クロツクの問いかけに、レオラは黙ったまま、その水溜まりを見ていた。

赤い……あかい。綺麗だ。すごく。

「聞いているのか、レオラリアナ」

「オレは……」

答えるために、レオラがクロツクの方角を見る。そして目が合った。

赤い紅い朱いあかい。世界が？ オレが？ 何が？

オレは知ってる。これを知ってる。前にも、こんなことがあった。あれ、あつたっけ？

いつ？ 失くした時。何を失くしたんだっけ？ あれ？ 何を失った？

「……オレは、逃げたんだ」

「……何を言っている？」

「逃げたんだ……恐かった。殺されそうだった」

レオラはクロツクに向かって喋り続ける。

「そうだ……最初に、タテ八兄が死んだんだ。それから、コノ八姉がオレをクローゼットのの中に隠した」

「質問に答える」

苛つくクロツクに構わず、レオラは勝手に話を続ける。

「それから、母さんが撃たれて、首を切られた。オレは、俺はクローゼットの中から、見ていて……ツマキ姉の腕が無くなった」

そうだ、みんなを失ったんだっけ。その日は赤い雨が降っていて、綺麗な女の人があった。女の方は、オレを殺さなかった。

あれ？ 女の人は、なんでそこに居たんだっけ？ なんで、そこから覚えていないんだっけ？

「そうだ……俺は、あの日、消えたんだ」

「さっきから何を言っている、レオリアナ」

そこで、レオラがクロツクに向かって笑った。その赤い目が、アリスそっくりだった。

「レオリアナ？ 誰だ、それ」

クロツクは、ぞっとした。目の前の人物は、致命傷を負っているとは思えないほど、楽しそうに笑うのだ。

そして、殺人鬼は言う。

「俺は、アゲハ・ストレインだ」

\*

思い出してしまったんだよ、その子は。  
自分を、自分を、自分を。

80・アリスの孤城 【悲しいほど、紅い世界で】（後書き）

始まる、狂気の劇。

81・アリスの孤城 【偽りだらけの劇】

思い出と、記憶は、違う。

\*

「俺は、アゲハ・ストレインだ」

その恐ろしいほどに奇麗な赤い目は、絨毯に染みこむ血に酷似していた。

似ている。アリスと、似ている。クロックは魅せられたようにその双眸を見ていた。

「レオラリアナ……思い出したのか？」

クロックの言葉に何一つ反応せずにレオラは、否、アゲハは部屋中を見渡した。不思議そうに、物珍しそうに、全ての壁を見渡す。そして壁の時計に手を掛けた。

「かちこち五月蠅いし、邪魔だなあ、この時計」

がしゃん

時計の枠にはめられたガラスが割れる音がした。アゲハが手に取った時計を乱暴に床へと落とした。飛び散ったガラスの破片が、ア



アゲハは、ただ、速かった。  
レオラよりも、ただ純粹に速かった。それだけだ。

次にクロツクが彼の姿を捉えた時、クロツクの足下には赤い滴があちこちに落ちていた。さっきまでは無かった、赤い染み。

「俺が、刺されたのか？」

クロツクの脇腹からは、血が流れていた。それも、相当の。

まだ完全に理解しきっていないクロツクを見て、アゲハは不思議そうな顔をした。その表情は、どこか楽しそうにも見えた。

「あれ？ 結構丈夫に出来てるのな、あんた。まだ生きてるんだ」

「何故だ……解せん！ そんな大怪我を負いながら、何故こんなにも速く動ける！？ それも、利き腕とは反対の腕で！ もう貧血で倒れてもおかしくはない……それほどの量だぞ！」

「あつははははは！ 面白いこと言うな、あんた。言っておくけど、俺の利き腕は左だぜ？ それに、今のは結構手加減してやったんだ。本当はもっと速いから」

人格が、変わったとしたか思えなかった。記憶を思い出しただけで、こつも変わるものなのか。クロツクは腹に受けた傷口を押さえ、これ以上血が流れることの無いように努めた。

レオラは、変わった。あれはさっきまで倒れていたレオラではない。全く別の人物。何かの拍子で目覚めた、違う者。そうでなければ、おかしいのだ。先程までとは違い過ぎる。

「お前は、アゲハ・ストレインだな？」

「そうだって。さっき言ったじゃん。人の話聞いてるか？」

「ならレオラリアナはどこだ。何故お前と人格が変わった？」

「……レオラリアナじゃねーつつつてんだろ。俺はアゲハ。俺がアゲハ。レオラリアナは、俺じゃない」

「意味が、分らん」

「じゃあもう死ねば？ 無理しなくてもいいじゃん。もうあんた、

死んじゃうんだから」

無邪気に、アゲハは笑う。純粹に楽しいのだろう。新しい玩具を与えられた子供のようだ。まるで、新しい人形を持ち出したアリスのよう。そこでクロックは、考えを改めた。

「お前が、アリスに似ているんじゃない」

「ん？」

「アリスが、お前に似ていたんだ。ストレイン家の血だ。ブライトイン家の血ではない……そうだ、お前等が元になっているんだ」

「ブライトイン家……あー、オレの親戚だっけ」

「分家だ」

「そうそう、分家。確か人形師の仕事をしてる、フツウの家」

普通なんかじゃない。アリスは、アゲハに似ている。無邪気に笑い、楽しそうに物を壊し、嬉しそうに潰す。それが、アリスであり、アゲハなのだ。

「レオラリアナは、どこへいった？」

クロックは、また同じことを聞いた。アゲハが呆れたように答える。

「だからさつきも言ったじゃん。俺はレオラリアナじゃない。もう戻ってこれねえんじゃないの、あいつ。大分深いところまで沈み込んで来たし。あいつのまま、俺の記憶を思い出すところだったしな」

「戻る、戻らないの問題か」

「んー……っていうか、あいつ、俺のこと嫌いだからさ。出来る限り思い出さないようにしてんだよ。たぶん、何かの拍子で思い出したんだろうけど。折角閉じこもってたのに、こっちに来なくちゃならなくなっただし」

「閉じこもっていた？」

「『オレが俺を思い出したら、オレが俺になって、俺がオレでなくなる』難しいけど、そんな感じだよ。こんなひ弱な奴助けるのも癪だけど、死なれちゃ元も子も無いからな。俺が出てきたってわけだ」



にやりと笑い、そしてアゲハは自分の血を舐める。

「ところで、あんたはオレを殺そうとして右腕をこんなにしてくれたみたいだけど……それはつまり、」

つまり。

「殺し合いをするってことでいいんだよね？」

アゲハの無邪気で邪悪な笑みは、レオラとは似ても似つかなかった。

\*\*\*\*\*

「クロスフィンガーさんは、どうして情報屋になったんですか」

白色に支配された病室の中、弟の隣に座る朝飛が向かいの窓側に立つフィンに問いかけた。

「フィンでいいよ。キミの方が年上だから。それに敬語もいらない。アンダーグラウンドと似た顔で敬語を使われるのは気持ち悪い」

「えーと……それじゃあ、フィン。どうして情報屋になったの？」

言われたとおり、敬語を止めて尋ねてくる朝飛を見て、フィンはきっぱり答える。

「言わない」

朝飛はその言葉に戸惑ったものの、最終的に笑ってしまった。フィンは、どこか空夜に似ている部分がある。こう会話していると、本当にそう思う。

仏頂面で答えるフィンに対して、慌ててサスケが謝る。

『申し訳ございません、朝飛殿！ フィンはとにかく無愛想が服を着ているようなものなんです』

「失礼な。サスケ、それでもボクの下僕なの？」

『下僕になつた覚えはありません！』

「酷いな…産んでやった恩を忘れたのか」

『産んでもらつてません！ それに産めないでしょう！ 本当に申し訳有りません、朝飛殿』

サスケは何度も羽をばたつかせて謝つた。本当に謝らなければいけないのはフィンの方だろうが、そんなことはサスケには気にならなかつたようだ。

「別に良いよ、サスケ。ちょっと聞いてみたかっただけだから」

「じゃあ聞かないですよ」

『フィン！ 私もそろそろ怒りますよ！』

「いつも怒つてる癖に」

フィンはサスケから逃れるようにして窓へと手を付いた。外はもう雪が溶け始めている。カノン達が出たときにはまだ少し残っていたが、もうほとんどが朝焼けと同時に溶けたようだ。

カノン達がここを出て、もう1時間と少し経つた。まだ、と言つた方がいいのかもしれない。

「……？」

ふ、と窓越しに空を見上げると、見覚えのある鳥がこちらへ向かつてきていた。

「あれ、さつきの鷹なんじゃ？」

朝飛も何か見えたのか、一緒になつて窓の外を見た。隣に向かつてフィンが答える。

「カグヤだ……桐生、窓の鍵を開けて」

「うん」

窓を開けると、冬の空気が病室に入り込んできた。吐く息が白くなるほど、外は寒い。普段外に出ない所為で、余計に寒く感じる。

その小さく開け放たれた窓の枠に、カグヤはすつと見事に降り立った。

「どうしたの、カグヤ。忘れ物？」

『フィン、カグヤの足に筒が括り付けられています』

サスケに言われたとおり、カグヤにはあの情報が詰まった筒が付けられていた。だが、フィンは見解観測に何も頼んでいない。頼んだものは、さつき全て受け取ったのだ。

「本当だ……どうしたんだろう？」

ここで考えてもどうしようも無いので、フィンは取りあえず筒を取り外した。それを見届けて、カグヤがサスケに鳴く。

「サスケ、カグヤは何を言った？」

『ハルナ・ウエストテールからの追加情報で、リュック・コヒナタについてだそうです。料金はいららないと』

「そう。何度もお疲れさま、カグヤ」

カグヤはまた冬空の中へと飛んでいった。それを最後まで見届けて、フィンはようやく筒を開けた。

「コヒナタについては、もう情報はいらぬのに……」

『もっと詳しいことが分かるかもしれませんが？』

筒の中から取り出した紙を広げ、目で文字を追う。サスケも朝飛も、フィンが何か喋るのを待った。

しかし、途中から明らかにフィンの様子がおかしくなった。驚愕したように目を開き、情報紙を握る手は力を失った。その所為で、紙が静かに床へと落ちた。

異変を感じた朝飛が、フィンに呼びかける。

「フィン？」

「そんな、まさか……嘘だ」

『どうなさったんですか、フィン』

朝飛は落ちた情報紙を拾い上げる。しかし、暗号化されていて読みとることは出来ない。

それに気付いたサスケが、フィンの代わりに訳した。

“全体観測、コヒナタについて分かったことがあるわ。

リュック・コヒナタをはじめ、

小日向小雨、

小日向ジュン、

アルマ・コヒナタは全て同一人物よ。

リュックに至っては、青年の姿と少年の姿があるそうよ。

どれが一体本当の『コヒナタ』かは分からないけれど、

どうやら成り代わりが得意みたいね。

本当に気を付けるべきはコヒナタかもしれないわ”

「全て、同一人物？」

「ボクの……情報が、間違っていた…間違った情報を、あの3人に渡してしまった……」

力無く呟くフィンを見て、朝飛は決心した。

「フィン。やっぱり僕たちも行くこつ。地図が無いのなら、君が教えてくればいい。早く行って、ソリティアさん達にこのことを教えてあげないと」

「嫌だ」

ふるふると首を振る。駄々をこねる子のように、フィンはひたすら首を振った。

「嫌だ。外へ、出たくない」

「フィン、僕たちが行かなきゃ」

「駄目なんだよ。恐い。ボクは、また間違った情報を流してしまつた……ボクの所為で、また人が死ぬ。そんな光景、もう見たくない……」

「フィン？」

「外は嫌なんだ……ボクはもう、嫌なんだ」

朝飛の言葉を聞かずに済むように、フィンはフードの上から耳を塞ぐ。

「もう、ナチ以外、失いたくない」

「ナチ……?」

怯えるように目を見開くフィンと、隣で静かに主人の様子をうかがうサスケを交互に見て、朝飛は困惑した。しざるを得なかった。

サスケが、ぽつりと言う。

『ナチ様は……ナチ・イズミ様は、展開観測の異名を持つ、フィンの育ての親でした』

\*

忘れることと、思い出さないことは、違う。

81・アリスの孤城【偽りだらけの劇】（後書き）

自分の所為で。

間奏曲 拾曲目「そして黒服の少年は世界を知る」

情報屋の中で、最も信頼されていた『展開観測』のナチ・イズミは、

ボクの命の恩人であり、師匠であり、家族であり、育ての親だった。

「もう、いいですよ」

そう言って、連れ出してもらったのは、困いの外の世界。牢の向こう側から、手を伸ばし、その人はボクの手を引いていった。初めての、外だった。

全然知らない人だったけれど、その当時、ボクに「知らない人に付いていってはいけない」なんて教えてくれる人は居なかったし、この牢にいつまで居ればいいのか分からなかったから、ボクはその手を取って歩いた。

「いい天気ですねー。洗濯日和ですねー」

ボクよりも綺麗な黒い髪が、さらさらと風に遊ばれる。隣にいるカラスは、気持ちよさげに飛んでいた。

「もう春ですねー。貴方はどの季節が好きですか？ 俺はやっぱり春ですかねー」

その人は、飽きずに何度もボクへと話し掛け、そして笑いかけた。ボクは何を言い、どんな表情をすればいいのか分からなくて。

「夏もいいですよ。海に、西瓜に、かき氷。秋には焼き芋も欠か

せませんし、冬は冬で良いところがあつて……どうしました？」

袖口を引つ張り、滅多に出さなかつた声を出す。人と話すのは、  
一体何年ぶりだっただろうか。

「キセツつて…なに？」

何とか話をしたいと思つて、その人の言っている意味を知りたく  
て、ボクは尋ねる。その人はすごく哀しそうな顔をして、そしてボ  
クの頭を撫でた。

「知らないことが、いっぱいあるんですね。心配しなくても、これ  
からは俺が世界を教えてあげますよ」

「世界…」

後ろを振り向けば、冷たい牢。あそこが、ボクの唯一の世界だつ  
た。

昔は、たくさんの子供が居た。ボクと同じくらいの子達が、たく  
さん居た。だけど、一人、また一人と減つていつて、最後にはボク  
だけが残つてしまった。

みんなは言つていた。選ばれた子が、ここから出ていけるんだと。  
この牢から出て、外の世界へ行けるんだと、みんなは言つていた。  
みんな、その日がいつか来るのを信じて、冷たい牢の中、必死で耐  
えていた。

ボクは、その時何を思つていただろう。

何故、あそこに居たのかは分からない。いつのまにか、理由を忘  
れてしまったのだ。外の世界を憶えていないから、もしかすると、  
生まれたときからそこに居たのかも知れない。

牢にいれられる位だ。何をしたのだろうか。

だけど、今は牢の外。良いのだろうか？

分からない、

分からない、

分からない。



だから、ボクはもう一度尋ねる。

「牢から出ても、良かったの？」

その人は、答えた。

「はい。怖い人達は、みーんな、俺が退治しましたから」

いつもいつも何かを喚き散らかしていた、怖い顔の大人達。そういえば、今日はまだ見ていない。そうか、この人が退治したんだ。今まで牢越しにしか見たことが無かった空を、ボクは何度も見上げた。大きな、大きなモノだった。

立ち止まったボクを見て、その人は笑いかけてきた。

「名前はフィン・クロスフィンガーでしたね」

「……………なんで、知ってるの」

「俺が、情報屋だからですよ」

自慢げに言うその人の顔は、年不相応に幼かった。まるで、何かを自慢する子供のような笑い顔。

「じょうほうや？ それが…名前？」

「ふふ、違いますよ。情報屋というのは、お仕事の名前です。そういえばまだ名前を教えていませんでしたね。俺の名前はナチ・イズミ。ナチと呼んで下さい」

「…変な、名前…」

『ナチ様に向かって変とはなんです！ 仮にも命の恩人ですよ！』

「……………カラスが、喋った？」

隣で気持ちよさそうに飛んでいたカラスが、ボクへと罵倒した。

ナチは、それをなんでも無いことだと言わんばかりに笑う。

「この子はサスケ。とっても賢いカラスですよ」

「サスケって言うんだ」

変な名前だと思った。妙な響き。サスケは、なんの前触れもなくボクの肩に止まった。油断していたから、案外重かった。

『ナチ様は和国の出身なのですから、こちらでは珍しい名前なんで

すよ、フィン』

「わこく？ なに、それ」

『知らないんですか？』

「無理もないですよ。何も教えてはくれなかったのでしょう。和国というのは、極東にある小さな島国ですよ。俺の名前は、その国ではこう書くんです」

足を止め、地面へと指を動かす。

“和泉 那智”

「読み方は、イズミ・ナチです。イズミが名字、ナチが名前ですよ。不思議な響きだと思った。和国で使われているという模様みたいな文字が、すごくおかしかった。

「ボクは、こう書くんだよ」

たぶん言わなくても分かったのだろうけど、どうしても教えなかった。

“ F i n ・ C r o s s f i n g e r ”

「クロスフィンガーって言うのは、幸運を祈る印のことだよ。人差し指に、中指を重ねるんだ」

ボクが唯一知っている、名前の意味。人に言うのは、これが初めてだった。

「いい名前ですね」

ナチに誉められることが、すごく嬉しかった。

牢に居たときは、誰もボクを誉めてくれたりはしなかった。話し

掛けてさえくれなかった。みんな、ただ小窓から外の世界を見ていただけで。大人達は、時々誰かを牢から出すだけで。

そういえば、ボクの他の子供達は、一体どうしたんだろう。

また歩き始めたナチに、ボクは隣まで歩いて聞いた。

「ボクの他にも、子供が居ただけけど…」

「ええ。知ってますよ」

ナチは、前だけを見る。ボクを見ない。

「その子供達は、何処へ行ったの？ いつの間にか、あそこにはボクだけになっていたんだけど…」

ナチは、ボクを見ない。

「貴方以外の子供達は、みんな死んでしまったんです」

ボクも、ナチを見ない。

「……そう…なんだ……」

だから、あの子供達は戻ってこなかった。外の世界へ行った訳じゃない。所詮、ただの噂話。夢を見ていた子供達の、夢の話。

そうだ、あの時ボクは思っていた。ボク達は一生外の世界なんか、見ることは出来ないんだと。

「貴方が居たあそこは、レスティナ国軍技術開発部の、実験場だったんです。様々な兵器を作っては、捕らえた戦争孤児で実験していました」

大きな戦争をしていたのは、ボクも知っていた。大人達がよく話しているのを耳にしていたから。

それよりも、やっとボクが誰なのか分かった。ボクは戦争孤児だったんだ。

きっと、生まれてすぐにあそこへ送られたのだろう。だから、外の世界を憶えていなかった。

「シユトラス博士が新しい兵器を作った時も、あそこで実験が開かれたと聞いています。もっと早くに気付いていれば、貴方の友達も

助けられたんですけど……すみません」

「友達なんて、いなかったよ。みんな、何も言わなかった」

牢はいつも、静かだった。そうしなければ、大人達が五月蠅いと喚くのだ。だから、みんな何も話さなかった。

「ボクが戦争孤児なら、ボクの家族は、もう死んでるんだね」

「いいえ。これからは、俺とサスケが貴方の家族ですよ。ほら、あそこが俺達の住む家です」

ナチが指さす方向に目も向けず、ボクは地面ばかり見ていた。外へ出て、ボクは初めて泣いた。

「フィン、どうしたんですか？」

その言葉がどれだけボクの心に響いたか、あの人はきっと知らない。知るはずもない。

間奏曲 拾曲目「そして黒服の少年は世界を知る」(後書き)

大きな空が、優しい声が、あの時は広がっていた。

間奏曲 拾曲目「開けた世界の真ん中で」

一年。ナチと出会った春が過ぎ、緑が生い茂るようになって、日差しが強くなり、いつの間にか吹く風が冷たくなって、葉が落ち、雪が積もり、そして溶けた。

たった、一年。一年だった。ボク達が、家族で居られた時間。他人と過ごすには長すぎる、家族と過ごすには短すぎる時間だった。

短すぎる、夢だった。

「なんですって？ 軍に見つかった？」

「うん」

まだ、肌寒い4月のことだった。ナチは、着物を着た人形を、箱から丁寧に出していった。

「そうなんだけど……ナチ、それ何？」

「あり？ フィンは知りませんか？ 雛人形ですよ」

自慢するように、たくさんの着物を身にまとった人形をボクに見せてきた。とても大人とは思えない。

『確か、階段のような場所に飾るんですよ』

サスケは寒いのか、羽を動かさずに歩いてボクに近寄ってきた。

鳥はボク達と違って体温を調節できないからだろうか。

そういえばナチがサスケにマフラーを作ってやるうとか、そんなことを言っていたのを思い出した。

そんなボクの心内も知らず、ナチは雛人形についての説明を続ける。

「ええ。桃の節句に飾る人形ですよ。和国の伝統行事です」

「…それくらい知ってるよ。それは和国では3月3日にするって聞いたよ？」

「…あり…？ そうでしたっけ？ 4月4日じゃなくって？」

ナチは忘れてしまった記憶を手繰り寄せて、しかし思い出せなかったのか、ずっと唸っていた。

「うーん…しばらく和国から離れてましたからね！。すっかり忘れてしまいましたよ。でも、フィンがそう言うのなら、そうなんですよ」

『今ではナチ様の次に優秀な情報屋ですからね』  
でも結構高かったんですよ、と言いながら、ナチは一体一体丁寧に仕舞っていった。

別に日にちにこだわらなくたって良いのに。

「そんなに飾りたいなら、飾ればいいのに」

「あー！ フィンは分かっていますね。駄目駄目ですよ、駄目駄目。こういうのは、決まった日にするから趣があるんです」

「その特別な日にちを忘れてしまった人に、趣がどうか言われたくない」

「あははー、言えますね」

全ての人形を綺麗に仕舞い終わって、ナチが笑った。ナチはどんなときも、優しそうに笑う。

「まあ、今年は断念するしましょう。フィン、来年は一緒に飾りましょうね」

「…っていうか、それって女の祭だよね…？」

ここに住んでいるのは、ボクとナチとサスケ。全員、男だ。ふと

サスケに目をやると、うとうとと睡魔に襲われていた。春眠、暁を憶えずという奴だ。

「あり？ そんな気がしないでもないですけど……あ、そういえば、フィン。さっきの話の続きをお願いします」

「ああ、そうだった。それを言いに来たんだった」

すっかり雛人形の所為で、話がそれてしまった。ボクは記憶してきた全ての情報をナチへと話した。

「レスティナ警察軍が、去年の『レスティナ国軍技術開発部実験研究所崩壊事件』の犯人を突き止めたらしいよ」

犯人。すなわち、それはボクの目の前でビクリしている人。ナチ・イズミ。

「ばれちゃったんですか。結構速かったですね」

一年前。突如連絡の途絶えた開発部の実験研究所。それまで定期的に本部との連絡をとっていたにも関わらず、突然のことだった。国軍は奇妙に思い、わざわざ最西端のウエストエンドシティまでやってきた。結果、見つけたのは廃墟となった建物と、数人の軍部の人間の死体。

警察軍は、他国の隠密の仕業と断定して、去年からずっと犯人を血眼になって捜していた。

それが、つい数時間前のこと。容疑者と思われる人物を、警察軍が見つけたという情報が手に入った。

「そろそろ、住処を変えなければなりませんね」。この国、気に入っていたんですけど」

残念そうに言うナチに、ボクはまだ伝えなければならぬことがあった。

「それが」

「？」

「そうでもないんだ。警察軍は、中華大陸で店を開いている調達屋達の仕業だと思っているらしいんだよ。裏町業が絡んで……ってと



こまでは、イイ線いつてたんだけど」

そう。ボクの手に入れた情報では、軍はとんでもない勘違いをしていた。まさか調達屋達も、自分たちが疑いの眼差しを向けられるなんて思っても見なかっただろう。

「そうなんですか。じゃあまだここに居ていいみたいですね」  
ナチは嬉しそうだった。この国のどこがそんなにも良いのかは、ボクには今になっても分からないけれど、とにかくナチは、この国が好きだった。

「そうだ。来週あたり、お花見に行きましょう。そろそろ春の花も咲き始めてくる頃でしょう」

唐突に、ナチが提案した。ナチはいつでも思い立ったら吉日だった。

「…おはなみ？」

「ええ。レスティナにはそんな習慣は無いんですけど、和国ではいわば春の風物詩。春の花を見て、お弁当を食べたりするんですよ」  
「えっと、ピクニックみたいな感じ？」

あの頃のボクは、まだ外に出ることに、こんなにも恐怖を感じたりはしなかった。普通に笑っていたし、泣いたりもした。今じゃ考えられないくらいに、普通の子供だった。

外が、好きだった。

「そうです。4月といえば、桜。桜ですよ！」

「サクラなの？」

「あー！ フィンは風情がありませんね。駄目駄目ですよ、駄目駄目。『サクラなんて、どれも同じじゃない』とか思ったでしょう」  
一字一句間違えず、その通りだった。その時はまだ、桜にも種類があるだなんて知らなかった。ボクはまだ、無知だった。

「桜にも色んな種類があるんですよ。春先に咲くのは、雛菊桜に、紅枝垂や江戸彼岸」

「…ヒナギクザクラ、ベニシダレやエドヒガン……」

両手で指折り数え、ボクの知らない桜の名前を挙げていく。ボクはその言葉を記憶するように、復唱した。

それを見てナチは、ボクにも分かるように、ゆっくりと声を出す。「今頃ですと、衣通姫や小松乙女、八重紅彼岸、雨情枝垂に市原虎の尾、御車返し」

「多いね……ソトオリヒメとコマツオトメ、ヤエベニヒガンに、ウジヨウシダレ……えっと……イチハラトラノオ、ミグルマガエシ……だっけ？」

「そう。そして忘れちゃいけないのが染井吉野。俺が知っている桜の中では、一番好きですねー」

「ソメイ、ヨシノ」

ボクが一生懸命記憶している横で、ナチは早速お花見の計画を立てていた。

「見解観測や、現態観測も誘いましょうか。お弁当はそれぞれ持ち寄ることにして……セリやジンも誘いましょう。やっぱりお花見といえは大勢で無くっちゃ」

楽しそうに計画を立てる姿が、ボクには眩しかった。

間奏曲 拾曲目「開けた世界の真ん中で」(後書き)

あの頃は、まだ扉は開いていた。

## 間奏曲 拾曲目「閉じゆく世界の狭間で」

出会いが突然だったならば、別れも突然だった。

ボクは、恐れている。あの日のことを、繰り返してしまわないかと。

ボクは、憶えている。あの日に、あの人が言った言葉を。

ボクは、凍えている。あの日から、ずっと。

それは、突然のことだった。ナチがお花見の提案をして、3日後のこと。ボクらの住む家のドアが、激しく叩かれた。

「ナチ・イズミ。大人しく出てこい！ もう全てお見通しだ！」

「これ以上我々に刃向かうのなら、こちらにも考えがある！」

ドアを叩くのは、かつて幼かったボクに喚き散らしていた大人達と、同じ服を着た人達。

「なんで……？」

言葉が出せないボクの頭を、ナチがそっと撫でた。

「見つかって、しまいましたね。さて、どうしたもんでしょう」

「なんで、軍が……？」

有り得ない。おかしい。ボクが手にいれた情報では、軍はボク達のことを、微塵も掴んでいなかった。

サスケが、ボクの肩に止まる。

『誤報を、掴まされたんですよ。軍も馬鹿ではありません』  
そんな馬鹿な。

ボクは、助けを乞うようにナチを見る。ナチはいつものナチだった。

「うーん。困りましたね。あちらも相当怒っているようですし、ここは言う通り、素直に出ていった方がいいかもしれませんね」

「出ていって、どうするの？」

「話し合いで解決しますよ。無益な争い事はお免ですからね」

ナチはそう言うと、ボクの手を引いて、一番大きな部屋 第  
二倉庫へと連れて行った。

隅々まで掃除がされていて、本棚には所狭しと資料が並べられている。そんな情報に溢れた奥に、ナチの私物をいれるクローゼットがあった。

「フィン。これから俺が言うことを、ちゃんと聞いてくださいね」  
「うん」

ぎい、と大きなクローゼットのドアを開ける。本棚よりも大きいそれは、小さな部屋と呼んでも過言ではないほど広かった。

「このクローゼットの中で、ゆっくりと100秒、数えて待っていてください」

「数え終わったら、出ても良いの？」

ナチは優しく微笑む。だけど、いつもとはすこし違う。無理して笑っているような、そんな表情だった。

「100、数え終わって、もしも俺が帰ってこなかったら、どうか貴方の好きな場所へ逃げてください」

逃げる。ボクにはそう聞こえた。

「俺のことは忘れて、逃げてください。俺とは、他人のふりをしてください。何も見ずに何も聞かずに、裏口から逃げてください。決して表へ出てきてはいけませんよ」

有無を言わさない声色だった。強張ったボクを見て、ナチはまたボクの頭を撫でる。

「そんな心配そんな顔をしなくても大丈夫ですよ。100数える間に、俺が帰ってくれば済むことです」

そして、ボクをクローゼットの中へと押し込んだ。

『ナチ様』

「サスケ。フィンのこと、頼みますね」

ドアの向こうで、ナチがサスケに話し掛けるのが聞こえる。そして、足音が遠ざかった。

ボクは出来るだけゆっくりと数を数えた。そうすれば、ナチが戻ってきてくれるような気がしたから。そんな気がして、たまらなかったから。

100数える間、ボクはいろんなことを思い出していた。

あの牢で過ごしていた頃。小さな小窓の外に広がる世界を、何度も想像した。

外には何があるんだろう？ 自分もいつか、外の世界を見る日があるのだろうか。牢から出されていく子供を見つめて、自分もいつか外へ出る日が来るかもしれないと、何かを待っていた。

ナチと会って、ボクは初めて外の世界へと出た。初めて、空が大きなものだと思った。ボクは、何も知らなかった。

ボクの知らないことを、ナチはいつでも教えてくれた。

ナチは、必ずボクの傍にいた。どんなときも、必ず。だから、絶対に帰ってくるんだ。そう、自分に言い聞かせた。そうじゃないと、この暗闇がすごく怖くて。

「サスケ」

ドアの向こうに居るサスケに向かって、ボクは声をかけた。しばらくして、返事が返ってくる。

『……なんでしょう?』

「もう、100、数え終わっちゃったよ……ナチ、帰ってこないよ……?」

夢なら、はやく覚めてほしかった。ドアを開けると、そこには静かに佇むサスケが居た。

『フィン。逃げましょう』

「いやだ……ナチの所へ行く」

サスケは首を振る。

『駄目です。私はナチ様に、貴方のことを頼まれたんです。逃げましょう』

逃げる? 一体どこへ逃げるといふの。

一年前、ボクはあの牢から逃げ出した。だけど、それは逃げ場所があったから。逃げ場所を、あの人が用意してくれていたから。だけど、いまはそんな場所なんて無い。

「ナチは言ったんだ。ボクの好きな場所へ逃げろって」

答えは、決まっているようなものだった。

「ボクは、ナチの傍に居たい。だから、ナチの所へ行くんだ」

サスケはもう何も反論してこなかった。肯定の返事の代わりなのか、ボクの肩に止まる。

「いこう」

走り出そうとした、その瞬間だった。

ぱん

嫌な音が、聞こえた。銃声だ。

ボクは無我夢中で階段を駆け下りた。裏口なんて、見向きもしなかった。

ボクの逃げる場所は、帰る場所は、行かなくやいけない場所は。ボクのいるべき場所は、ナチの隣だった。そこしか無かった。それ以外の場所なんて、ボクには無かったんだ。

「ナチ！」

最初に、倒れるナチが、目に入った。

「なんだ、この子供は……」

「イズミの共犯者か？」

「まさか……まだ年端もいかない子供だぞ。そこらへんで拾ってきた捨て子か何かだろ」

「裏町業者は何かと子供を拾いたがるからな」

次にボクの目に映ったのは、軍部の人間だった。あの時から何一つ変わらない、あの服。ボクが一番初めに記憶した、人間。

「……お前等が、ナチを……！」

沸き上がる怒りとともにボクが彼奴等に飛びかかろうとして、止められた。

乱暴に、元の場所へと引き戻される。

「貴方はまだ死んではいけません」

大好きな人の、声が聞こえる。

「まだ生きてやがった！ 撃て！」

ナチが、ボクに覆い被さるようにして。

サスケが、何か喚いて。

何度か血が降り掛かる感触がした。

ボクには、世界が無くなったように思えた。何も聞こえなかった



し、何も見えなかった。ただ、優しく微笑むナチが、目端に見えた気がした。

\*\*\*\*\*

永遠と間違っくらの、長い時間が過ぎた。

軍の人間は、もうずっと前に去っていった。動かなくなったナチを見て、去っていった。

「ナチ：ナチ？」

仰向けになるナチに話し掛ける。ボクの服は、ナチの血が滲んでいた。ナチは傷口を押さえもせずに、ボクへと手を伸ばした。離すもんかと、ボクはその手を握った。

それから、ナチが微笑む。微笑んで、話す。

「もう、いいんですよ」

何が。何が何が何が何が？

分からない。

分からない。

分からない。

だから、ボクはもう一度聞く。

「なにが、もいいの？」

聞かなくなつて、ナチが何を言おうとしていたかくらい、分かっ

ていた。分かっていたけど、認めたくなかった。

「俺に構わなくても、いいんですよ。お行きなさい。貴方の好きなところに行きなさい……長い間、付き合わせてしまいましたね。貴方といた一年、とても楽しかったですよ……とても」

分からない。なぜ、ナチがそんなことを言い出すのか。

まるで、これじゃあ。

「……なにを、言ってるの？」

「お別れの挨拶です……俺から、貴方への。貴方は、貴方の思うように……やりたいように生きなさい。貴方には、その権利があります」

ボクは、黙った。

ナチは、続ける。

「我が儘を言つと……そうですね。本当はもっと、ずっと、一緒に居たかったんですけど……」

分からない。分からないよ。もう何も分からない。

嘘。本当は分かっている。もう、ナチとは一緒にいられない。

だけど、ボクは懲りずに聞く。違う答えを、ナチに出して欲しかった。

「……ど、し……て？」

声が、うまく出ない。掠れた音しか出なかった。

「ねえ、どうして？ ナチはどうして、ボクを庇ったの？ ナチは、

もう……死ぬの？」

ナチの手を、僕は握りしめた。

「フィン……俺は、貴方の家族でいられましたか……？」

喉の奥が焼け付いたように熱かった。

「どうして？ ナチ、なんで？」

分からないよ。どうしてボクなんかを庇うの。

サスケが何か言っていた。何か、哀しそうに喚いている。なのにナチは、一言も答えなかった。

「……ナチ。どうして、何も言ってくれないの？」

『フィン：ナチ様は、もう』  
耳障りだった。ナチの声以外、全てが煩くて仕方なかった。

「五月蠅い！ どうしてだよ、どうしてなんだよ！ なんで！ ナチ、答えてよ！ 答えてくれないと、分からないよ！ いつもみたいに教えてよ！ ねえナチ！」

『フィン！』

「五月蠅い五月蠅い五月蠅い！ ボクはナチに聞いてるんだ！ なんでボクなんかを庇うの！？ なんで助けるの！？ 全然分からないよ！ 答えてよ。お願いだから、ねえ、答えてよ……」

ナチは、何も言わなかった。

ボクは落ちそうな手を、離さなかった。

「……ナチ？ ボク、まだ何も知らないよ……御車返しも、小松乙女も、まだ見てないよ……ナチの好きな染井吉野だって、見てない……」  
『もうやめてください……フィン』

「嫌だよ、置いていかないでよ……」

ナチは死んじやいけなかった。ボクが死ねば良かったんだ。ボクなんか、死んでしまえば良かったのに。

世界が本当に必要としている人だったのに。

ボクは、死んだ人を生き返らせるような方法を知らなくて。ボクは、非力なほど無知で。

あれから、ボクはナチになろうと必死だった。ボクの所為で、抜け落ちてしまった穴を埋めようと、必死になっていた。

だけど、過ぎた日々は戻らないし、空いた穴も塞がらない。ボクは臆病になり、あれだけ好きだった外の世界が、怖くてたまらなかった。

暗くて狭い場所にいると、安心した。広い場所は、ボクが独りになつてしまった気がして、怖かった。

黒い服は、血が染みこんでも分らないから好きだった。家の中は、ナチがいる気がした、落ち着いた。

あの日から、ボクは自分に決めた。

確実に、確定した情報しか渡さない。曖昧なモノは、一切誰にも渡さない。間違つた情報を渡したくなかった。

だけど、ボクは、また繰り返す。

間奏曲 拾曲目「閉じゆく世界の狭間で」(後書き)

何かを失うことが、たまらなく、怖い。

## 82・アリスの孤城 【不透明な彼、もしくは彼女】

泣くな、逃げるな、目を逸らすな。

結局何をしても、世界は君の足に付いてくる。

\*

「フィン……外が怖いのは分かった。だけど、いつまでもそうして  
いちゃ始まらないよ。同じことを繰り返そうとしてるなら、今度は  
それを食い止めないと……まだ間に合う」

朝飛が諭すように言っても、相変わらずフィンは耳を押さええてい  
た。

「地図は、ソリティアさんに渡したあれ1枚だけなんだよね？　じ  
ゃあ、あとは君しかいないんだ」

それでも尚、黙って首を降り続けるフィンに、朝飛はどうも出来  
なかった。これは、心の問題。自分で解決できるほど、フィンはま  
だ大人じゃない。

朝飛が諦めそうになったとき、黒い物体がフィンの目の前まで飛  
んだ。サスケだ。

『いつまで逃げる気ですか！』

突然の怒声に、びく、と肩を震わせて、フィンはサスケを凝視し

た。

『そんなことをしても、何も変わりません！　いくら部屋に閉じこもって、喪服に身を包んでも、先代が生き返るわけでもなければ、貴方が変われる訳でもありません！　逃げてどうするんですか！　後ろを見つめて何になるんですか！　立ち止まってどうするんですか！　先代が教えてくれた外の世界を、貴方はまだ何も知らないじゃないですか！　閉じこもって、殻にこもって、貴方は何をしたいんですか！』

サスケは怒りに震えていた。何度も怒鳴っては、フィンを叱咤した。

フィンは、何も言わなかった。朝飛も、サスケも、黙った。部屋では、嫌な沈黙が続く。

『フィン……』

サスケがもう一度何かを言おうとして、それよりも先にフィンが顔をあげた。

いままで、外すことのなかったフードを、戸惑うことなく取り去る。

世界が、広がる。あの時と、似ている。

「キリユウ」

「なに？」

「電話はどこにある？　現態観測に直接聞こう。彼は個人情報扱いに長けていたはずなんだ。サスケを飛ばす時間が惜しい。コヒナタの出生について調べてもらおう」

朝飛が安心したように微笑む。さっきまでのフィンじゃない。いや、会ってから1日も経ってないが、見たこともないくらい、しっかりとした足取りで歩くフィンの姿があった。

「ロビーにあったはずだよ。行こう」

朝飛が病室の扉を開ける。部屋をでるまえに、フィンがサスケへ声をかける。

「サスケ、やってほしいことがある」

『はい』

目の前に佇むサスケを呼ぶ。

「見解観測には何度も悪いけど、早急にもう一度、アリス達の犯罪歴を詳しく洗ってもらいたい。特に、ミス・マッドを重心的に。それから、調達屋のシヨウに伝言を頼むよ。『いますぐに、中央病院へ来てくれ』って。確か、今はレスティナに滞在中の筈だ」

『かしこまりました』

そして窓からサスケは飛び去った。朝飛とフィンも、それぞれ部屋を出る。

まずは、確かな情報を。

戦力外だと言われた彼らが、ようやく動き出した。

\*\*\*\*\*

たくさんの人形で、着せ替えを楽しんでいるアリスの後ろには、ただ何をするでもなく、ぼーっとするシオンが居た。

さつきから、2人はずっとこの調子だった。時々アリスがシオンへと声をかけるが、会話にならないため、いつしかアリスすら何も言わなくなった。

しばらくそうやって2人は、お互いに声を掛けなかったが、シオンの声によってその静かな時間は終わりを告げた。



「君は、どうしてこんなことをするの」

今まで、シオンから話し掛けられて事の無かったアリスが、嬉しそうに笑う。

「前にも言ったでしょう？ 大切なモノを探してるって。くすくす…シオンは忘れっぽいのね」

「僕が聞きたいのはそれじゃない。どうして、裏町業者ばかりから大切なモノを奪おうとするの？」

「それはね、アリスも裏町も、同じだからよ」

異国の女の子をモデルにした人形に、可愛らしいブラウスを着せてアリスが答える。

「同じ？ どこが？」

「だってアリスも裏町も、誰かから何かを奪ったり、壊したりしているもの。同じことをしている人種なら、きっと考え方も、思いの感じ方も、全て同じよ。だから、裏町業者の大切なモノは、きっとアリスの大切なモノ」

「君は、間違ってるよ…」

「あら、そうかしら？ それはね、シオンが裏町の人間じゃないから、そう『思う』のよ。同じ『人種』じゃないから。だってね、コヒナタもミス・マッドもクロックも、みーんなアリスに賛同してくれた。同じ『人種』だったから。きっとシオンには、分からないわ」アリスが笑う。シオンはアリスの笑い声が嫌いだった。いつも、同じ声。抑揚が感じられない。気味が悪い、人形みたいだった。

「僕は、君の気持ちなんて、分かりたくもない」  
そういうと、アリスはすこし顔を歪めた。哀しそうに、寂しそうに。

「僕は…」

シオンの言葉と被さるように、ドアがノックされた。

「アリスさーん、いるう？」

「あらコヒナタ。どうしたの？」

今度はドアの開け方を間違えなかったのか、ドアがちゃんと開いた。だけど、現れたのはコヒナタじゃなかった。

「侵入者さんが、まだぼくの階に来ないんだよあー」

部屋に入ってきたのは、コヒナタよりも年上の、少女。だけど、コヒナタのように、ずっと笑っている。

「仕方ないわよ。だってコヒナタは3階でしょう？ あなたの部屋に辿り着く前に、きつとクロックやマッド達に遊ばれてるのね。それに、1階から2階へはそれほどの距離が無いけれど、残念ながら2階から3階へは階段が長いもの。きつと手こずってるんだわ」

この城の構造を理解していなかったのか、少女が驚きの声をあげる。

「ええー？ じゃあぼくの所へは来ないのかなあ？ うー、暇潰しにならないよあ」

困った声をあげているのに、少女は相変わらず笑顔だった。

「でもこの最上階へ来ようとするなら、アナタの部屋の階段を使わないと駄目だから、きつと来るわよ」

アリスの言葉に、少女が満面の笑みになる。

「ほんとお？ 良かったあ！」

「クロックとマッドに、3人とも殺されていなかったらの話ね」

「ええー？ どうなんだろあ」

そこで少女は、シオンに気が付いた。

「あ、シオンさん。元気い？ ぼくは暇すぎて、」

「あなたはだれ？ 僕、あなたのことなんか知らない」

「あつれえ？ この姿で会うのは『初めまして』だったけえ？ ぼくは小日向小雨。あ、こっちで言うところサメ・コヒナタだねえ。きみの知っているリュック・コヒナタと同一人物だよ。びっくりしたあ？」

シオンは目の前に居る人物を理解できなかった。

コヒナタと、小雨が同一人物。確かに喋り方は同じだったが、姿が違う。

「驚いてる、驚いてるう！」

嬉しそうに、小雨が笑う。

「そんなシオンくんに、良いこと教えてあげるよお。ぼくね、他にも色んな姿があるんだよお」

「他にも…？ 本当のあなたは、一体誰なの…？」

シオンが尋ねて、コヒナタは笑う。笑って、笑って。

「どれでも無いさ。『俺』は誰にも本当の姿を見せない。いままでも、これからも」

少女の姿で、邪悪な笑みを漏らす。今までとは全然違う声だった。男にしては高く、女にしては低い。子供にしては大人びていて、大人にしては子供じみている。そんな、聞いたことも無いような声だった。

驚くシオンの前で、コヒナタはまた前の喋り方に戻した。

「なーんちゃってえ。一体どれなんだろうねえ。成り代わりは、ぼくの大得意な技だから。君の知っている『ぼく』は、本当は『私』なのかも知れないし『俺』なのかも知れない。『アタシ』かも知れないし『ボク』かも知れない。それだけじゃない」

言葉の意味を理解しようとするシオンに向かって、小雨は言う。

「シオン。『おれ』はお前の姉ちゃんにだって成り代わられるんだよ」

カノンの声で、小雨が言う。

「姉さんの、声？」

「ほらね？ ぼくは誰にでも成れる。一体どれが本当のぼくか、君は分かるかなあ？ そうだね、一つだけ言えるのは」

はっきりと言えるのは。

「どんな『ぼく』でも、必ず笑っているってことかなあ」  
「あなたは……」

シオンの声を制止するように、小雨が彼の口元に手を伸ばす。  
「ぼくは侵入者さんを待つのに忙しいから、今日はこれまでえ！  
じゃあね、シオンさん、アリスさん」

軽やかな足取りで、ドアの向こうへと消える。アリスは楽しそうに手を振っている。

「またね、コヒナタ」

「うん。ばいばーい……あ！」

ドアが閉まりそうになったギリギリの所で、小雨が声をあげ、ドアが再度開かれる。

「うっかり、うっかりい。言い忘れてたことがあったんだあ」

そこから顔を覗かせるのは、小雨じゃなく、シオンの知っているコヒナタ。彼が、彼の声で言葉を紡ぐ。

「な……なに？」

「もしもきみのお姉さんを殺しちゃったら、その時はごめんねえ？」  
笑顔の仮面を貼り付けたまま、今度こそドアが閉じられた。思考が止まりそうになる、シオンを残したまま。

\*

何も怖がることなど無い。

世界は、必ず君の足下にある。

82・アリスの孤城 【不透明な彼、もしくは彼女】 (後書き)

あててしまふよ、本当のぼくを。

### 83・アリスの孤城 【世界との別離】

さようなら、お前の世界。  
いつか、誰かがお前を思いだしてくれろぞ。

\*

「約束通り、1時間経ちましたわ」

透き通る声が聞こえた。答えるように、戯けた返事が返ってくる。  
「そうねー。じゃあ、これが最後の質問。私の質問に答えてくれな  
いー？」

もう何杯目になるか分からない紅茶を飲みながら、マッドは言っ  
た。朝葉香が、仕方ないといった様子で頷いた。

「いいでしょう。これが真正正銘、最後の質疑応答ですわ」

「ありがとうー。あのね……朝葉香ちゃんは、私のこと憎い？」

それは、余りにも今更過ぎる質問だった。今更過ぎて、なんとも  
言えない。

「……葉月のことを、言っていますの？」

「そう言うことになるわねー」

飄々と肯定したマッドに、朝葉香は間髪いれずに答えた。

「ならば、答えは『憎い』ですわね」

当たり前前の答えだった。血の繋がった妹を、毒殺されたのだ。憎くない訳が無い。マッドは、不思議そうな顔をした。心底、不思議そうなの。

「じゃあ、どうして私を殺さないの？ 妹の仇なんですよ？ 復讐とか、恨みとか、そういうのは無いの？ 殺したいと思わないの？ 目の前にいる、この私を」

朝葉香が、自分でポットから紅茶を注いで、暫く黙った。

カップの表面でゆらゆらと揺らめく赤茶色の液体は、少し光に反射していつも通りの自分の顔を映した。

長く伸びたこの黒髪は、確か妹が死んだときからこの長さに整えられている。

少し冷ましてから飲む紅茶は、さつきから喋りっぱなしで疲れている喉を潤した。

「わたくしは貴女を殺して楽にさせてあげるつもりなど、毛頭ありませんわ。牢獄に捕らえて、犯した罪と見つめ合わせて、そして全てを償ってもらいますの。死んで、全てを許して貰おうなどと思わないことですわね。葉月が苦しんだ苦痛以上の苦しみを味わってから、死ねばいいのです。そうじゃないと、わたくしの気が済みませんもの」

そう言って朝葉香がもう一度カップに口を付けたとき、紅茶はもう冷たくなっていた。口を開けたり閉じたりして、何かを言おうとしているのに何も言えずにいるマッドを前にして、朝葉香は言葉を続けた。

「貴女は、何故わたくしとこんな茶会をしたかったんですの？ 何か、話したいことがあったから、こんな時間の潰し方を選んだのでしょうか？」

「私は……」

朝葉香の真っ直ぐに見つめてくる目を、マッドは直視出来なかった。

「私は、責めて欲しかったのかな……。もしかすると、貴女に……」



あの事件の唯一の生存者の貴女に、謝りたかったのかもしれないわ。誰も、聞いてくれる人なんて生きてなかったから……」

「謝っても、許しませんわ」

「うん、分かっている。別に許してもらおうなんて思っていないの。ただ、思いつきり憎んで罵って欲しかったのかも……そうやって、お前は生きている資格の無い人間だって、責めて欲しかった。その方が、楽なのよー……いまのこの状態は、宙ぶらりん過ぎて、しんどい」

マツドは、そこまで言って、言葉を止めた。

「なーんちゃって。自分でもよく分からないわー。それより、1時間お喋りに付き合ってくれてありがとうー。お礼にクウヤ君にとって『良いこと』を教えてあげる」

そうだった。朝葉香は忘れかけていた約束を思い出した。

「都合屋は、一体どうなりますの？」

「あの毒はね、『解毒剤が無い』というより『解毒剤がいない』の」

「解毒剤が……いない……？」

意味が上手く掴めなかった朝葉香がオウム返しに聞く。その向かいで、マツドが楽しそうに答える。

「そう。あれは私の新作だって言ったでしょー？ 朝葉香ちゃんの知ってる『毒』を改良したやつなの。高熱が出て魔されたりするけど、3日も経てばすぐに元通りよー」

クウヤの毒は、死に至るモノではなかった。妹とは違うモノだった。

ほっと安堵の息を吐く朝葉香だったが、すぐに表情を元に戻す。

「何故、そんなことをしましたの？ 改良をするだなんて……」

「アリスちゃんの為よ」

「アリス？」

「アリスちゃんに、これ以上人殺しをして欲しくなかったのー。絶対に後悔するから。だから、毒だつて嘘を吐いて、アリスちゃんに渡したわけー。で？ 朝葉香ちゃんは、これからどうするの？」

不意に投げかけられた質問だったが、答えはもうずっと前から出ていた。

朝葉香は、迷うことなく言葉を口にする。

「決まっていますわ。カノン達の後を追います。そして、全てが終わった後に貴女を捕まえて、警察軍へと引き渡しますわ」

「さっすがー」

そして、席から立ち上がる。ドアの傍まで歩いていき、その閉じられていたドアに手を掛ける。

朝葉香も立ち上がった。これから、急いでカノン達を追わなければならぬ。大した情報は掴めなかったが、それでも何も無いよりマシだ。

コヒナタのこと、クロツクのこと。まだその2人と出会ってなければいいのだが。

「じゃ、元気でね」

マッドが廊下へと大きくドアを開けて、それから右手を朝葉香に向かって差し出した。

「………なんの真似ですの？」

「握手。お別れの」

にっこりと擬音がつきそうなくらい満足に笑うマッドを見て、少し脱力したが、朝葉香も右手を差し出す。

「だけど、これがお別れな訳ではない。」

「後ですぐに会いますわ。貴女を……つか、まえ……に……？」

どさつ、と朝葉香の身体が床へと落ちた。力が抜けたように動かない。朝葉香のその様子を見て、には、とマッドが笑った。

「ところがどっこい、捕まるわけにはいかないのよねー」

先ほど握手を交わしたマッドの右手には、指と指の間に小さな針が挟まれていた。

眠り薬が、塗り込まれた針だった。

「あと1時間、追加で眠っておいてねー」

ひらひらと手を振って、マットは扉を閉じる。そして自身だけが廊下へと出た。

「さてと。救護係は、もうそろそろ出番かしらー？」

ゆっくりと、散歩を楽しむかのような足取りで、マットの姿が廊下の先へと消えた。

\*\*\*\*\*

クロツクがアリスと初めて出会ったとき、彼は野良犬のように死にかけていた。場所は、確か路地裏だった。

彼は、警察に捕まった後すぐに脱獄を成し遂げたが、行くあても無いまま方々を彷徨っていた。何もすることが無かった彼は、これからのことを考え続けた。自分はどうすべきか、何をすべきか。そして、いつしか生きる意味が分からなくなった。

自分の好きな時計は、もう集めきっていた。することもしたいことも、もう彼には無かった。力尽きたその場所を、自分の死に場所にしようと思っていた。

そんなとき、彼と彼女は出会った。

「アナタが脱獄したって言う時計狂いの連続通り魔ね？」

彼女は、怯えることなくそう話し掛けてきた。

ぼろぼろの雑巾のようになった彼を見て、彼女は色んな話をした。自分が殺した両親のこと、友達のフランのこと、自分を分かってくれる仲間を探していること。

そして最後に、彼女は言った。

「アナタ、私の仲間にならない？ アナタは強いんでしょう？ なら、きつと誰にも負けないわ」

アリスは、自分に言った。クロックは初めて自分を認めてくれた彼女の言葉を信じだし、そう思った。

彼に、生きる意味が出来た。

クロックが仲間になることを了承したとき、アリスは自分の腕試しに作ってみたという腕時計を彼に贈った。彼女なりの、仲間の印だった。

そして、今。その腕時計を見て、クロックは思う。

これは、悪い夢だと。目の前で不気味に微笑む殺人鬼を見て、思う。

「あはははっ！ もう終わっとく？ それとも続ける？ どっちかが死ぬまでさ」

アリスが、強いと言ってくれた自分が、弱いと判断した小僧に、やられていた。

「あれ、もしかしてもう死んじゃった？」

自分が床に倒れたことを理解して、クロックはまた、夢を見ているのだと思った。

「死んでなど、いない」

「そうこなくつちや。さて、と。右足は折ったし、左腕も折った。肋骨も何本かいつてるだろ？ 次は何処を壊して欲しい？ なんな

らリクエスト聞いとくけど」

アゲ八は、異常だった。

骨の折れる音、血の匂い、肉が避ける音。人間をいたぶり、潰し、壊すこと全てを楽しんでいた。

「お前は、狂っている……」

「そりやどーも。最高の誉め言葉だね。そういつあんたも、『狂っている』からこんなことをしてるんだろ？ 血が見たくて、断末魔を聞きたくて、こんなことをしてたんだろ？」

クロツクは、答えられなかった。アゲ八の異常さは、自分の予想を遙かに超えていた。あれは人間などと呼んではいけない。化け物だった。

「化け物、か。こんなお前の姿を、さっきの金髪少女が見れば、さぞや驚くであろうな……」

せめてもの嫌味とばかりに言ったその言葉に、アゲ八がぴくりと肩を震わせた。

「さっきの金髪少女？ 誰だ、それ」

「憶えていないのか。お前の……いや違う、お前の中の『レオラリアナ』の友達だそうだ。そう、奴は言っていた」

起きあがりながら、クロツクが言う。折られた右足に激痛が走ると思ったが、もう痛みを感じることもすらも身体が拒否してしまったようだった。

しかし彼には、それよりもアゲ八が気になった。その血色の目の焦点が、自分に合っていない。

「ともだち？ ははっ！ あんた、自分で何を言ってるのか分かってんの？ 俺は殺人鬼なんだぜ？ 友達なんか知らない。居ない。

……知らない？」

アゲ八は、それ以上何も言わなかった。まるで違う世界を見ているかのように、焦点が定まらない。最早、クロツクのことなど眼中に入っていない。この世界ではない何処かへと、アゲ八は視線を向けているように思えた。

「俺にも友達が居た……違う、知ってる？ 何言ってたんだ、俺……いや、これは『オレ』なのか？」

アゲハは、クロックにも見て取れるほど不安定になっていた。

「アゲハ、お前は」

「……るさい……」

パリ、とガラスを踏み割る音がする。

さっきアゲハが粉々に壊したせいで床に散らばった時計の部品を、アゲハが踏んだ。

「うるさいつつつてんだよ！ 苛々するなあ、もう！ 俺には友達なんか居ないんだよ！ 友達がいるのはアイツの方だ！」

そして、蹴った。

砕かれたガラス同士がぶつかり合い、以前にもまして細くなる。まるでダイアのように煌びやかに反射するそれらを、クロックは不覚にも見とれてしまった。

「なんだよ……なんなんだよ！ 俺は俺だ！ 俺が『俺』なんだ！ なんてお前等はいつもいつもアイツの話ばかりで……アイツは違うんだよ！ アイツは別なんだ、俺じゃないんだ！ 俺はアゲハ・ストレインだ！」

それは、自分にそう言い聞かせているようにしか聞こえなかった。アゲハが、狂ったように叫ぶ。

「お前、もういいよ。もういらぬ。面白くない。楽しくない。死ぬ」

クロックが次に彼を目にしたとき、彼は、そのナイフを自分の喉元に持ってきていた。

いつのまにか、クロックの身体は床の上へと押し倒されていた。その上から、押さえつけるようにアゲハが乗っかかっていた。

「さすがだ……速いな」

目で追うことすら、アゲハはさせてくれない。刹那の猶予すら、無いのだ。

クロックは、もう迷わなかった。元々、思い残す事なんて無かつ

た。何も、持ってなかった。

「お前なんか……！」

アゲハがそのナイフを振り上げた時、一瞬だけアリスの笑顔が脳裏を過ぎった気がした。

アリス出会ったとき、腕時計を貰ったとき、仲間が増えたとき。

そして、シオンを連れてきてから増えた、本当の楽しそうな顔。自分は、あんな顔をさせてあげられたのだろうか。

一瞬の筈が、とても長く感じた。

がしゃん

装飾の宝石が反射しながら、そのバタフライナイフは細かなガラスの海へ落ちた。

「……………何をしている？」

飛び退いたアゲハはその左手で、クロツクによって負わされた右腕の傷口に爪を食い込ませていた。傷口を、抉っていた。

止まりかけていた血が、ぽたぽたと絨毯に染みを作る。

「意味が、分からん……お前の行動は……」

目の前の彼を見て、クロツクが独り言のように呟いた。それに、彼が応じる。

「オレだって分かんねーよ……あー、ちくしょう……血が足りねえ……」

「当たり前だ。折角塞がろうとしていた傷口を開けて、お前は何がしたいんだ、アゲハ」

クロツクが立ち上がって、先ほど落ちたナイフを取る。その彼の眼前に佇む人物から、次の言葉が紡がれる。

「何言ってるんだ、あんた。オレはレオラリアナだって何度も言っただろうが」

「……なるほどな。痛みで、目を醒ましたか」

「お陰様で」

笑う余裕なんて無かったが、レオラは笑顔を作って見せた。そして、聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「おやすみ、アゲハ」



83・アリスの孤城 【世界との別離】（後書き）

お前はオレで。  
オレはお前で。

#### 84・アリスの孤城 【君と僕はずっとずっと手を繋いでいようね】

手を握ってご覧よ。

繋がりなんて、容易く出来てしまつから。

\*

「形成逆転だ」

クロツクは折れた足を引きずつて言った。彼の怪我も相当だが、レオラに比べればまだマシな方だった。レオラは、何故立っているのか不思議なくらい、血が出ていた。

「それはどうか。お互い、相当手負いだぜ」

「理解できないか？ アゲハなら俺を殺せたかも知れないが、レオラ、貴様はこの俺に触れることすら出来ない。掠り傷一つすら付けられん。そう言っているんだ」

それもそうだった。今の彼に付いている傷は、全てアゲハが付けたモノ。レオラが手を下した訳じゃない。それに、レオラの攻撃は既に見切られている。どう見ても勝ち目は無い。

それでも、レオラは笑って見せた。

「『誰にでも癖というモノはある。戦いの天才にも凡人にも、等しく』この言葉を言ったのはあんただぜ」

「それがどうした？」

クロックの問いかけに、レオラが人差し指を立てて言う。

「ひとつ」

「なんだ？」

「ひとつだけ、あなたのクセを見つけた」

「ほう。この俺に癖だと？ 言ってみろ」

立てた人差し指を、ゆっくりと床へと向けて、レオラはクロックを見る。彼の指した先には、粉々になった時計の残骸が散らばっていた。

「時間だ。あなたの変えようのない癖、60秒に一度の間」

「……………」

「あなたは、その左腕に付けた腕時計を、60秒に一度確認している。どんな時でも。いくら体内時計が完璧とはいえ、所詮オレもあなたも人間だ。より完璧にするためには、時計を常に見なければならぬ。あなたは、病的に時間に固執している……そうだろ？」

クロックはその腕に巻いてある時計を見た。アリスからの贈り物。確かに、自分は1分に1度この時計を見ている。それは、変えようのない癖。病的なまでの正確な癖。だが。

「だからどうした？ それが分かったところで、お前は何も出来ん。血が止まった訳でも無いし、お前が強くなつたわけでもない。ただ、俺の癖が分かったただけだ。この力の差が逆転した訳じゃない」

言うとおりであった。2人の間の何かが変わつた訳じゃない。相変わらずレオラのほうが傷は酷いし、誰の目から見ても、先に倒れるのは確実にレオラの方だった。

「やってみなきゃ分からないこともあるんだよ」

「それにしても、やけにリスクが高すぎる。犬死にだ」

「それでも良いさ」

そう言い切つたレオラの眼に、迷いなど無かつた。一步、二歩と前へ進み、落ちたナイフを拾う。彼の歩いた後には、血の足跡が残つた。

しゅっ、と音を立てて、刃が向けられる。

クロツクは、訳が分からなかった。分からなさすぎて、変になりそうだった。

「何故だ……？」

「あん？　なんだよ」

「何故、お前はそこまでして戦う？　おかしいだろう」

「何がおかしいんだよ」

怪訝そうな表情をしてみせるレオラに、クロツクが目を見開いた。

「たかが他人の為に、何故そこまでする必要がある？」

レオラの動きが、止まった。

「他人、ねえ。まあそうだな。でもオレとカノンが友達だから……」

「それがおかしいと言っているんだ。それが何故分からない？　明らかにおかしいだろう？　『友達』とは、そこまで命を賭けなきゃならんものか？　違うだろう。お前の感覚は、おかしい」

レオラは、黙ってクロツクの言葉を聞いていた。ちゃんと、クロツクと眼を合わせて、一字一句聞き漏らさぬように聞いていた。

クロツクは、狂ったように続ける。

「お前は別に『大切なモノ』を盗られたわけじゃ無いだろう？　カノン・ソリティアが此処へ来るのは分かる。弟を取り返すためだ。アサハカ・コウヨウツキが此処へ来るのも分かる。妹の形見と家宝を取り戻すためだ。だが、お前はなんだ？　お前は、一体此処へ何をしに来た？」

クロツクが、一步下がった。まるで、レオラに畏れて離れようとしているように見えた。

そこでようやく、レオラが口を開いた。

「……オレもさ、おかしいとは思ってたんだよな。ちょっと前にさ、とある奴から『悪に友達などいない』って言われちゃって。それで、ちよっと考えたんだ。オレに友達なんているのか、って。よくよく

考えてみれば、どうもそんな感じじゃないんだよな。カノンもクウヤもコウヨウツキも『友達』って言う言葉が、しっくりこない」

ぼた、と彼の腕を伝って、血が落ちる。

「かといって『仕事仲間』っていう訳でも無いし、『親友』って呼ぶのも少し違う。最近まで、どうも答えが出せなかったんだよ。だけれどここへ来て、コウヨウツキに見送られて、カノンを先に行かせたとき、なんとなくぴったりな言葉が浮かんだ」

クロツクは、彼を見た。彼はその多量の出血をものともせず、満足そうに笑っていた。

「オレが何故『大切なモノ』を奪われた訳でも無いのに、ここへ来たか教えてやろうか？ 簡単さ。家族の為だ」

「家族……？」

「そうだな。年齢的に、クウヤが次男で、コウヨウツキは長女だ。

次男が毒を受け昏睡状態、長女は命と同じくらい大切にしていた形見を盗まれた。末っ子が誘拐されて、拉致監禁。それを知った次女が、半狂乱。人格が破綻しかけた。大切な家族をここまで傷つけられて、何も無いわけないだろ。家族を守るのは長男の役目だ。だからオレは、お前等全員をとつちめねーといけねえんだよ」

「それが、お前が此処へ来た理由か？」

「ああそうさ。家族の為にオレはあんたと戦う。戦ってやろうじゃないか」

そしてレオラは再度、ナイフをクロツクへと向ける。

向けられた相手は、呆れたように笑っていた。

「ふっ、ははは……なるほどな。家族の為か。とんだ腑抜け野郎だ。笑わせてくれる。何を言うかと思えば……興ざめだ」

クロツクが、ぼたりと床に倒れ込んだ。仰向けに、両手を広げて。

「全く以て理解不能。意味が分からん」

「あんだと？ コノヤロー、油断してっ……」

「もうやめだ」

クロックが、とても清々しそうに言った。

「は？」

「止めだ止めだ。話にならん。俺は殺人鬼のアゲハとなら一戦交えたいが、そんな普通の人間とは戦う気すら起こらん。そんなことをするくらいなら、次に備えて傷の手当てをしたい」

行き場を失ったレオラのナイフが、ぱちんと閉じられる。

戦いは、終わりだと時計男は言った。

「本当に終わりなんだな？」

「ああ。終わりだ。この廊下の突き当たりに階段がある。恐ろしいくらいに長いが、気を確かに持って登ることだな。その先には扉がある。それがコヒナタの部屋で、アリスの部屋へと続く唯一の通過点だ」

「いいのかよ」

「さつさと行け」

レオラは倒れたままのクロックを一度だけ見て、ドアまで歩いた。歩きたびに、パリンと音が鳴る。アゲハが粉々にした残骸達だ。

よく見れば、壁に飾られていた時計の半分が壊されている。自分がやったとはいえ、酷い有様だった。

ドアノブに手を掛けて、後ろを見たままレオラが言う。

「その……時計、悪かったな。壊しちまってよ」

「気にするな。全て盗品だ」

「じゃ、オレ行くわ」

古びた扉は、耳に悪い音を立てながら内側へと開く。廊下は、幾分か明るい。

レオラが再びドアを閉めようとしたとき、クロックが誰に言うでもなく呟いた。言葉の意味としてはレオラに言っていたのかも知れないが、独白に近かった。

「お前は、俺が時間を確認するために腕時計を見ていると言ったな……？ ああ、言ったけど……」

「それは間違いだ。逆だ。俺は、この腕時計の時間が間違っていないかを確認するために見ていた」

「……その腕時計は、壊れてるのか？」

クロツクは、相変わらず天井を見たまま続ける。

「俺の弱点になるこの腕時計は、アリスが俺にくれたモノだ。だが、所詮子供が作ったモノだ。何分かの誤差を起こす代物でな。俺はそれが気に喰わないから、何度も確認しては針を戻しているんだ」

「あんた……まじで体内時計が完璧なのか？」

「嘘などと下らないものは吐かん主義だ」

「じゃあなんで、」

何故弱点になるものを付けているのか。

クロツクは、寝そべったまま顔だけをレオラに向けた。

「大切なモノだからな。自分の弱点になると分かってはいても、外せないんだ。所詮俺はまだ精密機械になりきれしていない男。完璧では無いと言うことだ」

レオラは、今度こそドアを閉める。目の前のドアノブが、霞んで見えてきた。

閉める間際、クロツクの声が聞こえた。

「もう二度と会うことも無いだろう。家族を大切にな」

彼には見えないだろうけど、頷いて、レオラはがちゃりとドアを閉めた。

「よし、あとは進むだけだ……」

カノンの後を追わなければ。そう、追い付かなければならない。だけど、もうレオラの身体は限界を超えていた。

廊下を数歩歩いて、レオラの視界は急に低くなった。がくりと膝をつき、廊下へと落ちる。両腕を差し出して、辛うじて倒れ込むのは防げた。

「……くそ……！」

血が、やばい。さつきから止まらない。自分で抉ってしまった腕からは、ぼたぼたと貴重な血液が流れていた。

廊下に敷かれた絨毯の模様が、白い靄で覆われたように霞む。

「……はやく、いかねえと……」

レオラが腕に力を入れて立ち上がるうとしたとき、背後から影が差した。

暗くなる視界に、レオラが振り向く。

見たことのある顔だった。

「はいはい、無茶しないでねー、その金髪少年。じゃないと、死ぬわよ？」

「……ミス・マッド……？」

何故、彼女がここに？ 彼女は朝葉香と階下に居るはずだ。なら、考えられることは、ただ一つ。何処にそんな力が残っていたのか分からないくらいに素早く、レオラはマッドの白衣の胸ぐらを掴んだ。

「んのやるおっ……コウヨウツキはどうした!？」

「え、寝てるけど？」

「……寝てるんですか？」

思わず敬語だった。驚愕の新事実だった。

そんなレオラに向かって、ぼん、とマッドが片手で身体を押すと、面白いほど簡単にレオラは押し倒された。

当たり前だ。立っていることさえ奇跡なほどなのだから。

「怪我人は大人しくしなさいよー。はい、止血するわよ」

彼が呆けている間に、マッドはちゃっちゃと手際よく手当をしていく。

我に返ったレオラがさつきの質問をする。

「おい、どういうことだよ。コウヨウツキは負けたのか？」

「んーん。私の完敗よ。安心しなつて、朝葉香ちゃんはただ眠ってるだけ。そうね、『まんまとやられてしまいましたわ!』とか言い



ながら起きると思うわー。うふふ、楽しみ」

「……じゃあ、クロックはどうしたんだよ。あんたらの仲間だろ？」  
「時計さんならもう治療済みよん」

腕へと綺麗に巻かれていく包帯を見て、レオラはマッドの顔をまじまじと見る。

ドクロの髪飾りでお団子の髪型にした彼女は、ずれた眼鏡を直しながらレオラの肩をばしっと叩いた。

「……ってえー！」

「終了ー。あとは痛み止めの薬を飲んで終わり！ 単なる応急処置だから、帰ったらすぐに病院へ行きなさいねー！」

治療が終えてすっきりしたのか、輝かしいばかりの笑顔だった。

ここまで爽やかに微笑まれると流石に疑えない。怪しいのは変わらないのだが。

「……あんた、なんでオレの手当なんかするんだよ？ オレはあんたらの敵だろ？」

「そうだね。でも、医者は敵味方関係ないかね。治療は治療……ってことで、治療費500万ミーリア」

「取るのかよ！ しかもぼったくりかよ！」

「当たり前じゃない。資金集めよ、資金集めー。これからコヒナタくんと愛の逃避行をするんだから」

「逃避行？ 逃亡するの？」

マッドは白衣のポケットに両手をつっ込みながら、苦笑いした。  
八重歯が少し覗いた。

「そんなところー。ここに居たら、君達に捕まえられちゃいそうだかね。そうなる前に、逃亡ー」

そして、レオラの前に錠剤を3つ渡す。

「……なんだよ、コレ」

「いいから黙って飲みなさいー。はいコレ」

1つ目を渡す。一番小さい、白色の錠剤。

レオラは素直に飲み込む。水が無いから辛いけど、医者言う事だ。

それに、腕の怪我は応急処置とはいて、素人のレオラから見ても完壁だった。

「それはねー、痛み止め。んでもってコレ」

2つ目は少し桃色をした三角の錠剤だった。レオラが顔を顰めて飲み込む。

「それは血を出しすぎたから鉄分補給つてやつね。んで、最後にコレ。コレはめちやくちやく効くよー」

レオラが最後に飲んだのは、カプセルだった。

薬を飲んで、暫くするとレオラの目蓋が静かに下りた。

「それは、朝葉香ちゃんと同じ眠り薬ー。ゆっくり休んで、カノンちゃんとシオンくんを迎えにいつてあげてね」

それだけ言うと、マッドはゆっくりと歩き出した。

コヒナタのいる3階を目指して。

\*

きつと大丈夫。

繋いだ手は、もう離さない。

離すのは、もっと、ずっとあとでいいから。

\*\*\*\*\*

とうとう100部分まで来てしまいました。

ここまで読んで下さり有り難うございます。

これからも『遠enrai雷』を宜しくお願いいたします。

アオキチヒロから、読んで下さっている皆様へ。

## 85・アリスの孤城 【姿見】

これがぼくの世界。

\*

「……ま、だ……階段が……続くのかよ……」

長い長い階段の途中、カノンが息も切れ切れに呟いた。彼女の後ろに見える四角い螺旋状になった階段は、登り始めた段が見えなくなっていた。

どれほど登ったかなんて忘れた。同じような場所を何度も何度も歩いてきた気分だ。もう、カノンの足は限界だった。最初に調子を乗って飛ばしすぎたからかもしれない。

カノンは一度階段に腰掛け、二つに結っている髪を一度外して一つにくくり直す。いつものように高い位置ではなく、クウヤがよくする結び方をした。

「あと何段登れば気が済むんだよ……シオン……姉ちゃんが迎えに来たぞー」

叫ぶとさらに体力を消費するのは分かっていたが、今はこの階段という現実から目を逸らしたかった。それに、黙っていると、いろんな考えが頭の中をぐるぐる回る。

朝葉香は無事だろうか。レオラは大丈夫だろうか。そういえば、朝飛達はどうしてるだろうか？

どれも不安になってくるものばかりで、カノンは気が変になりそうだった。足だけじゃなく、精神的にも限界だった。

2階でレオラと別れてから、もう数十分は経つ。朝葉香に至っては、もう1時間経っていてもおかしくはない。なのに、2人とともに自分に追い付いてこないのだ。絶対に追い付くと約束はしたけれど、まだ果たされていない。

不安は、不安しか生まない。考えれば考えるほど、カノンの頭の中では最悪の事態しか思い浮かんでこなかった。

「あー！ もう千段は確実に登ったぞ、コレ！」  
自分の考えを振り払うように、カノンはわざと大声を出す。思考する時間を与えてはいけない。いまの自分は、驚くほど弱気になっている。

一人でいることが、段々とまた怖くなってきていた。

「そろそろ疲れてきたっつーの……あ……あ……」

溜息混じりにカノンが頭を上げ、それと同時にその双眸はゴールを捕らえた。

7つ先の階段の上、本来なら廊下が続くであろうそこには、扉があった。順番で言えば、コヒナタが居る部屋だろう。

疲れた身体に鞭打って、一気に駆け上がる階段の踊り場で、カノンは一度止まった。そして、深呼吸をする。

もう後戻りは出来ない。しようとも思わない。

「……よし。待ってるよ、シオン」

右手に銃を持ち、左手でそっとドアノブを回す。ゆっくりと慎重に扉を開けて、カノンは部屋の内部へと消えていった。

「えっと……ワルツ孤児院？」

薄暗い夜明けの街を抜ける、2つの影があった。一つは、かの有名な全体観測の情報屋。そしてもう一つは、この国では見かけない東洋系の顔立ちをした少年だった。

「そう、ワルツ孤児院。それは、裏町業者が作ったレスティナの孤児院」

フィンが、隣を走る少年 朝飛に話す。

「ずっと前の話だけど、ボクはソリティアとアンダーグラウンドに頼まれてその孤児院を調べたことがあるんだ」

「あ、アルヴェルト家の話だっけ？」

「うん。それでその時、少しだけ気になることを見つけたんだ」

段々と街から離れて行く所為で、道は細くなっていた。夜明けとはいえ、12月の早朝は寒い。朝飛は寒そうに両手を擦り合わせて聞いた。

「どんなこと？」

「そのワルツ孤児院には、過去にたった1人だけ脱走した子がいるらしい。現態観測によると、それがコヒナタらしい」

「脱走？ 孤児院がそんなにも嫌だったの？」

「少しややこしい話なんだけどね……順を追って説明するよ」

林のような場所に入って、さらにフィン達は走るスピードをあげる。結構な速さで走りながら、フィンはワルツ孤児院について話した。

「ある国で、子供に虐待を加える母親がいたそうなんだ。その国では、親が子供に与える体罰は、しつけの為と言われていて、警察も何も手を出さなかった。

それを知ったとある処理屋が、虐待を受ける子供達を保護することにした。その国だけじゃなく、出来るだけたくさんの子供達を保護しては、里親を見つけるといふ慈善事業じみたことをしていたらしい。その内、どんどん仲間は増えて、処理屋だけじゃなくなった。それはとうとう大きな組織になり、レスティナに門を構え、創立者の名にちなんでこう名乗ることにした。『ワルツ孤児院』と。

その組織はある日、瀕死の子供を保護した。

母親は彼等とは面識の無かった裏町業者。瀕死の息子は当時6歳。子供は、母親は悪くない事を言い続けたらしい。だけど、このままでは子供は虐待の末に死んでしまうと判断して、孤児院は子供を母親から保護した」

段々と深くなる林に足を取られながら、朝飛の表情が少し強張った。

「それは……母親と子供を、引き離したっていうこと?」

「だから、保護なんだよ」

保護。その言葉に反論するように、少しか機嫌悪そうに朝飛が言葉を返す。

「酷い話だね」

「どうだか。母親から引き離されるのと、母親に虐待されて死ぬのと。キミはどっちが酷いと思う? 人それぞれ価値観は違うけれどね」

フィンの正論に近い言葉に、朝飛は何も言えなかった。世界を知る全体観測の前では、矮小な自分の言葉は悉く返されてしまう気がした。

黙り込んでしまった朝飛を気遣うように、フィンが続ける。

「…とはいえ、結局保護されて3日目で、子供は孤児院から脱走したみたいだね」

「脱走するくらい、お母さんのことが好きだったんだね」

「……そうだね………キリュウ、前を見てご覧。着いたよ」

少し答えに間が空いたが、何事もなかったかのようにフィンが前方へ指を刺す。その方向を見て、朝飛は足の動きを止めた。

街から遠く離れた場所で、鬱蒼と生い茂る林を抜けたそこに、その城は聳えていた。

「やっと着いた………ここが、『アリス』のいる屋敷……」

朝飛よりも常に先を行くフィンが、朝飛の感想をを訂正する。

「屋敷というよりは、離れた城……孤城って雰囲気だね。よし、鍵は閉まつてないみたいだ」

壁のように立ちはだかる大きな扉の取っ手を持って、フィンが朝飛の方を向いた。

「キリュウ、キミはどうする？ 引き返す？」

「まさか」

ぎい、と木が軋む音を立てて扉がつつすらと開く。扉の向こうは、薄暗くてここからでは奥まで見えない。入って確かめるしかないということだ。

「そう。じゃあ戦力外だと言われた者同士、死なない程度に頑張ろう」

「同感」

2人の招かれざる客を飲み込んで、扉は再び閉じられた。開けたときと同じように、古い木が軋むような音がした。

扉が完全に閉じられると、中は一層暗く感じられる。

ここからは道案内をしてくれる人もいない。フィンと朝飛は周りを警戒しながら進む。しばらく屋敷内を歩いていくうちに、一本の



廊下が続いていることに気付いた。

「どうやら、先に進むにはこの廊下を通らなきゃいけない造りみたいだね」

あたりを見回しても、この廊下以外に先へと進めそうな道は無い。まるで、あらかじめ侵入者が来ることを予想して造られたようだ。

注意深く辺りを観察するフィンに代わって、朝飛が先をゆく。が、すぐにその足は止まった。

「フィン……すごいことになってるんだけど……？」

「何が？　ちよつとキリュウ、勝手に進んでいかないでくれるか？　いつ何が起こつても不思議ないんだ、か……」

朝飛の背中越しに廊下を見て、フィンも同じく動きを止める。が、心当たりでもあつたらしい。すぐに状況を理解して朝飛へと答える。

「あ……きつとソリティアだよ。ソリティアの蹴り技は酷いからね」

「け、蹴っただけで『ああいう風になる』って言うのか……!？」

朝飛が信じられないといった風に指を指すその先は、破壊に破壊を尽くした惨劇が広がっていた。

廊下の左右に取り付けられた扉はことごとく壊され、中の部屋も同様の光景。苛ついていたのか、周りの壁には拳を殴りつけたような痕が残り、廊下の床には、あらゆる破片で散らかっていた。否、台風でも通りすぎたかのような光景だった。

「そうなつちやうから、こうなってるんだよ。香葉月なら鎌鼬の痕が残るはずだし、レオリアアナなら刃の痕が残る。それが無いんだから、ソリティアだよ。こんなに乱暴なの、彼女くらいだし。ブーツを履いてるから力任せに蹴り散らかしていったんだろ」

「人間業じゃないよ……」

まだ納得し切れていない朝飛を後ろに、フィンが歩き出す。

「裏町に常識なんて無いね……つと、本当に酷い有様。一体何処まで壊していったんだろ」

その疑問は、すぐに解けた。彼等が進んで間もない内に、綺麗な廊下が見えてきた。カノン達と、ミス・マッドが出会った地点だ。「ここからは妙に大人しいね」

フィンが不思議がる横で、初めて無事な姿の扉を朝飛が見つける。「この部屋は潰されてないみたいだよ。それに、今まで見なかったルームプレートが吊してある」

“ M y s t e r i o u s ・ M a d ”

ミス・マッド。彼女の部屋らしい。扉には他にも「必ずノック」「覗くな危険」「被験者大歓迎」といった札がかけられていた。そして、一番シンプルな札には「ただいま外出中」の文字が。なるほど。一人目の敵の本拠地って訳だね」

「『外出中』って、今は居ないってこと？」

「どうだか。畏かも知れないし、ただの飾りかも知れない。とにかく中に入ってみなきゃ分からないだろうね」

平常を装って言うが、二人とも緊張した面もちだった。朝飛が扉に手を掛け、フィンがその反対側に向かう。

朝飛が、右手に力を込めて、扉を勢いよく開けた。

「……………あれ？」

何も、出てこなかった。

「『あれ？』じゃないと思うよ、キリユウ」

フィンが脱力したように答える。本当に力が抜けたのか、しゃがみ込んでいた。

「見てご覧よ。香葉月がいる」

「え？」

朝飛が周りを見ると、すぐ傍で朝葉香が倒れていた。

「香葉月さん！ どうしたんですか？！」

「キリユウ、静かにした方がいいと思うよ。彼女、寝てるみたいだし」

「大声も出るよ！　だって扉のすぐ横で香葉月さんが寝てて………  
え…寝てる…？」

騒ぐ朝飛の目の前で、朝葉香はぐっすり寝ていた。それはもうぐっすり。このまま起こしては可哀想だな、と思うくらい眠っていた。

どうすれば良いのかわからない朝飛が、助けを乞うようにフィンを見る。脱力気味のフィンは、もうすでに扉の外だった。

「ちょ、どうするんだよ？」

「放っておこう。ここがミス・マツドの部屋なら、それはきっと彼女の睡眠薬によるものだ。時間が来るまでは起きないだろうし。かといって香葉月を運びながら進むのは時間が掛かる。ボクたちにはシコヒナタについての真実を伝えなきゃならない。それが終わってから、迎えに来ればいい」

フィンはそれだけ言うと、もう歩みを進めていった。部屋に取り残された朝飛がしばらく扉の外と、朝葉香を見て迷っていたが、やはりフィンの後を追った。

\*\*\*\*\*

階段の一番頂点にあった扉を開いて入った部屋は、カノンの想像を超えた部屋だった。いや、想像なんて出来るものじゃなかった。とにかく、カノンは入ってからずっと立ちつくしたままの状態だっ

た。

「……なんで……」

辛うじて、声が出せた。が、カノンは自分を落ち着かせるためにもう一度深呼吸をした。さっきからこの繰り返しだ。

深呼吸をしておえて、カノンは思っている全てをその部屋に向かつてぶちまけた。

「……なんで、全部鏡で出来てるんだよ！ 歩きにくい、動きづらい、進めない！ 方向感覚がおかしくなる！」

カノンの台詞の通り、その部屋は全てが鏡張りだった。娯楽施設によくある、鏡の迷路のような部屋。

鏡には何人ものカノンが映っていた。

「目が疲れる。卑怯者！ コヒナタ、出てこい！」

逃げ出したいのはやまやまだが、登り切った階段にはこの部屋しかなかった。ということは、此処を抜けなければ先へは進めない。逃げ出せない状況下にある。

カノンはおそろおそろ足を出す。鏡に手を当て、しっかりと踏みしめながら歩みを進めた。

「情けない……」

手を当てている鏡の向こうでは、不安そうな自分の顔が見える。これでは、自分をここまで進ませてくれたレオラ達に申し訳ない。

カノンは一度両手で自分の頬を叩いて、喝を入れた。

「よし！ 鏡がどうした！ 要は迷わなきゃいい話だ。しっかりしろ、おれ！」

仕切り直して、もう一度前を見る。目の前の鏡には、いつもの自分がいた。

「もう大丈夫だ！」

歩みを再開して、カノンはもう一度前を見る。やはり、そこにはいつもの自分。だが、何かがおかしい。何かが違う。

「……どうということだよ」

カノンが、目の前の鏡に向かって問うた。

いつもの自分。それは、おかしくないか？  
自分は今、一つに結っている。階段を登るのに、邪魔だったから  
だ。

なのに、目の前の鏡にいる『自分』は、

「お前、なんで髪を結ってないんだよ？」

その問いかけに『自分』が笑った。初めて見る、笑い顔だった。

\*

不思議の世界へようこそ、  
哀れな便利屋さん。

85・アリスの孤城 【姿見】（後書き）

楽園すらも、迷い込めば、そこは地獄。

86・アリスの孤城 【とてもとても楽しいことをしよう】

同じだよ。

だけど、やっぱり違うんだろっね。

\*

「なんで髪を結っていないのかってえ？　だあってぼくが調べたとき、あなたは結っていなかったんだもん」

自分が、自分に向かって歩いてくる。カノンの目の前に、鏡なんて無かった。自分と同じ「人」が、そこにいたのだ。

「お前が、コヒナタか」

「そうかもねえ。でも今この姿はカノン。貴女だよお？」

得意げに服のの袖を掴みながら、コヒナタはカノンを見る。『自分』の目が自分を捕らえた。

「ようこそお、ぼくの部屋へ。待ちくたびれちゃったよお」

全く同じ自分の声が、部屋で響いた。コヒナタが近付くたびに、カノンは後ずさりした。言いようの無い恐怖がそこにあつた。

右手に力が入る。そこには、固い金属質の感触があつた。大丈夫、こっちには銃がある。

確かめるように一瞬だけカノンが銃を見て、次に視線を戻したと

きには、コヒナタは居なかった。

「……………」

冷たい感触が、喉元にかかる。ただ冷たいだけじゃない。自分に向けられたその視線の温度さえ、冷たく感じた。

そして、声がした。

「油断してちゃ駄目だよ、姉さん？」

今度はシオンの姿をしたコヒナタが、カノンの首に両手をかけていた。

「はっ…………趣味悪いのな、お前」

「酷いよ、姉さん。弟になんてこと言うの？」

けらけらと笑って、コヒナタは両手に力を込める。少しずつ、真綿で首を締め付けるように、カノンの首を押さええていく。息が、しにくくなってくる。

じわじわと来る苦しさに耐えながら、カノンは思いっきりコヒナタの胸ぐらを蹴り上げた。

「シオンはもつと、可愛く笑うつっ……………のっ！」

蹴り上げた感触は無かった。あと数ミリというところでコヒナタは後ろへ飛び退いた。歪んだ笑顔が、カノンに向けられる。

「あーあ。この姿なら、姉さんも攻撃できないと思っただけだな。失敗か」

肩で息をするカノンを見て、コヒナタは何処かへ走っていった。

鏡の世界の中、よろけそうになりながらカノンも後を追う。

カノンは上手く回らない頭を整理して、鏡伝いに走った。

何がどうなっているのかは分からないが、とにかくコヒナタは『誰か』に成りすますのが得意なようだ。それに今までの行動からして、自分の身辺についてはもう詳しく調べ上げられているのだろう。ミス・マッドが自分についてよく知っていたのが良い証拠だ。

「コヒナタ、どこだ！」



鏡に向かって叫ぶ。

そこには、余裕の見えない自分しか映っていない。もういちど息を吸って、今度は少し進みながら叫んだ。

「コヒナタ！ 出てこい！」

「うるさいなあ、もう。そんなに大声出さなくても聞こえてるよお」  
「……………子供……………？」

どこかで見たような子供だった。その子が、耳を押さえて向こう側の鏡の影から出てくる。

「今度は誰の真似だよ」

「真似じゃないよお。これは、ぼく。これがぼくなの」

「……………コヒナタが、子供……………？」

フィンが教えてくれたコヒナタは、確か朝葉香やレオラと同じ年くらいの姿だった。そういえば、フィンが見せてくれた写真のコヒナタと顔立ちがよく似ている。少し幼くしたような、そんな顔だった。

「あつれえ、もしかして知らなかったあ？ えっへへ、じゃあ大成功だあ！ びつくりしたあ？ ねえねえ、驚いたあ？」

楽しそうに跳ねて喜ぶコヒナタを見て、カノンは後ずさりした。子供の姿で、子供らしい笑顔を見せて、子供のように飛び跳ねる。何故だか、気味が悪かった。

「折角だから、何かをして遊ぼうよお。何して遊ぶう？」

「……………おれにはそんな暇ねえよ。この部屋を抜ける方法を教えてくれ」

カノンが断ると、不服そうにコヒナタが言う。

「やだ。そうだ、隠れん坊しよう？ アリスさんとシオンさんがしてたんだあ」

「シオンが？ アリスと？」

「とつても楽しそうだったから、ぼくもしてみたかったんだよねえ！ じゃあぼくが鬼で、あなたは隠れる方。もしもぼくが飽きるまで隠れ切れたら、この部屋の出方を教えてあげるう」

そして、服の袖に隠れて見えなかった右手をすつと伸ばす。  
その手には、小さな銃が握られていた。

「もしもぼくが先にあなたを見つけたらあ、ずどん、だよあ？」

右を見ても左を見ても前を見ても後ろを見ても何処を見ても鏡。

鏡、鏡、鏡。

カノンはもう何も考えずに走った。ただ死なないためだけに走った。

「えっへへへー…隠れんぼ、よーいどん」

この部屋の支配者は、ただその微笑みを絶やさぬように彼女の背中を見つめていた。

\*\*\*\*\*

一方、フィンと朝飛の2人は2階へと上がる階段を登っている最中だった。

「この城は無駄に広いね」

「…ゼエツ…っそう、だね…ハアツ…」

「ほら、キリユウ。速度が落ちてるよ。あと10段とちよつと、頑張るよ」

朝飛に背負われて楽なフィンが、まるで他人事のように言った。

ただでさえ登るのが辛い程段数のある階段なのに、さらにもう一人分の体重が加わって辛そうな朝飛。

「キミはそれでも忍なの？ 全てを統べる桐生忍の頭なんですよ」

「……じ、まんじじゃないけど、僕は……空夜よりも劣るんだよ……ハアツ

……」

「それは自慢にならないね」

「君は楽で良いね……」

朝飛が最後の一段を登り切ったのを確認して、フィンがひよい、と飛び降りた。

「む、無賃乗車……」

「失礼な。さあ、早く行こう」

廊下はまた、長い長い直線だった。走り始めて、フィンがこの廊下につんざりしていると、隣を同じ速度で走る朝飛が先程の話の続きを促した。

「コヒナタが、脱走したって言ったよね？」

「ああ、言ったね」

「それからコヒナタはどうなったの？ お母さんとは会えたの？」

フィンが、少しだけ走るスピードを遅めた。

「……結果から言うと、会えた」

「良かった、会えたんだ」

「ただし……母親は既に生きてなかった」

「……え？」

朝飛が立ち止まった。フィンもその数歩先で立ち止まった。

「現態観測からの資料によると、その可哀想な子供の名前は『ヒナタ』」

まるで資料を読み上げるかのように、すらすらと言葉を紡ぐ。

「ヒナタが孤児院へ連れられて直ぐ、母親が首を吊って自殺したらしい。ヒナタが脱走して2日目の日、母親の死体を孤児院の人間が確認している。ならばヒナタはきっと、これを見ている。子供が逃げ帰るとすれば、それは母親の元だからね。それから孤児院はヒナ

タの行方を捜したみただけで、結局ヒナタは見つからなかったらしい。もしもまだ生きているなら、今年で12歳」

二枚の写真を、ポケットから取り出して朝飛へと渡す。そこには、さつきみんなど見たリュック・コヒナタと、楽しそうに笑うあどけない少年の姿があった。

「少年の姿のリュック・コヒナタと、同じぐらいの年頃だよ」

「これが、本当のコヒナタ？」

「そうだね。青年の方は、最大のカモフラージュだったんだろっね。このボクが騙されたんだから」

朝飛から写真を返してもらい、フィンはまだ走り出した。それを追うようにして、朝飛も足を動かした。

走りながら、フィンは朝飛と目を合わせないようにして言う。

「母親をこんなめに合わせた処理屋達を怨むにしろ、自分を虐待していた裏町業の母親を憎んでいたにしろ、どのみち、ヒナタは裏町業を憎んでいる。アリスの考えに賛同したとしても、不思議じゃないよ」

朝飛も前しか見なかった。

「悲しいね」

フィンは何も言わなかった。

「すぐく…悲しいよ……」

廊下は、まだまだ続いていった。

影があるから、日向がでてる。  
じゃあぼくは？

86・アリスの孤城 【とてもとても楽しいことをしよう】 (後書き)

小さな日向は、影と混じる。

懐かしいことを、思い出させてあげる。

\*

ああ、楽しいな。コヒナタは自分に一番近い鏡を見て笑った。楽しくて楽しくて、笑いが堪えきれなかった。

「ふふっ。もうそろそろ探し始めてもいいかなあ？」

自分は今、憎くて仕方なかった裏町の人間を追い詰めている。その事実がとても嬉しくて、可笑しかった。カノン・ソリティアは逃げた。自分を畏れて逃げた。いまもまだ逃げているだろう。今度はどんな姿をして、あの人を追い込んでやるうか。

「あれ？」

そこで、ふと疑問が浮かんだ。コヒナタ自身、今の今まで気付かなかった疑問だった。

「なんでぼく、裏町が憎いんだっけえ？」

すっかり忘れてしまっているのか、全然思い出せなかった。とても大事なことだったようにも感じるし、下らないことだったようにも思える。しばらく考えて、コヒナタはすぐに笑った。

「まあいっかあ！ 忘れるってくらいだから、大したことじゃない

よね。これが終わったら、マッドさんに聞いてみよつとお」

あの人は、自分のことを何でも知ってるから。出会った頃から一つも変わらないマッドのことを少しだけ思い出して、コヒナタはカノンが走り去った鏡の道を、ゆっくりと歩き出した。

隠れん坊って、一体どうやるんだっけ？ そんな事を思って、カノンは握った銃を手放さないようにしっかりと握りしめながら、左右へ視線を動かした。そこにはただ鏡しかなかった。

「……よし……」

安堵の息を漏らしてカノンは座り込んだ。さっきは気が動転して気付かなかったが、どうやらこの部屋は迷路状になっているらしい。カノンが今座った場所も、侵入者を惑わす為の行き止まりだった。後ろも右も左もただの鏡。少し前に出れば、たくさんの枝分かれした鏡の道が見える。

隠れん坊というよりは、鬼ごっこに近いこのゲームは、何よりも相手に気付かれずに逃げるのが一番大事だ。カノンは後ろに壁があるということに安心した。これで突然背後からコヒナタが現れるという心配もない。

「……はあ……… どういうことだよ、フィン」

姿の見えない全体観測への不満を零して、カノンは溜息を吐いた。「子供じゃねーか。リュック・コヒナタ」

あの時見せてもらった青年は、多分仮の姿だ。あのフィンが誤情報を掴まされるくらいだ、相当の人物に違いない。が、あれはどう見てもシオンより少し上くらいの子供だった。

子供だったからこそ、余計に怖いのだ。何故あんなにも上手に、『笑っ』ことが出来るのか。まるで全てを悟ったかのような笑み。

「怖いな……」

次に会ったとき、コヒナタは一体どんな姿をしてくるだろうか。



またシオンかも知れないし、あの様子だと誰にでも成り代われるよ  
うだった。レオラか、朝葉香か、クウヤか？

とにかく自分と親しい人物になって、自分の動揺を誘うつもりな  
のだろう。カノンは目を瞑り、深く息を吸った。もしも友人達に成  
り代わられてしまえば、攻撃はしにくいだろう。だが、自分なら撃  
てる。例え師匠の姿をされても。

弟を取り戻すためなら、なんでも出来る。

次に開いたカノンの眼は、真っ直ぐに前を向いていた。

「見つかる前に出口を捜して、とつとつここを出なくちゃな」

カノンは意を決して立ち上がり、行き止まりだった場所から動い  
た。枝分かれした道は3つ。3分の1の確率だった。

「……迷っても仕方ない、か」

カノンが渋々と真ん中の道を取る。行き止まりに当たったなら、  
もう一度戻ればいい。そうすれば最後には出口が見つかるだろう。

少し怖いのが、進むしかない。カノンが躊躇しながらも、一歩前に  
踏み出そうとしたとき、その声は聞こえた。

「待てよ、ちび！」

懐かしい。とても懐かしい声だった。もう思い出すこともないだ  
ろうと思っていた、声。

「な……んで……」

振り返らなければ良かった。そうカノンは思う。目の前にいる人  
物を見て、カノンはそれ以上何も言えなかった。さっきの決心さえ、  
いとも容易く揺らいでしまう。

「どうしたんだよ？ 呆けた顔して。そんな所で突っ立ってないで  
さ、早く遊ぼうぜ！」

シオンでもレオラでもクウヤでも朝葉香でもフィンでもジンでも  
無い。だけど。

「もしかして、意味が分からないのか？ ちび」

それでも知っている。自分が大好きな。好きだった、あの子。自分が弱くて、その所為で消えてしまった子。

ユリウスが、そこに居た。

「……なんでお前が、ユリウスを知ってるんだよ……」

「愚問だね。ぼくはかの有名な全体観測さえも凌ぐ名探偵だよ？  
なんでも知ってて当たり前だよ」

コヒナタは先程とは打ってかわって、自分の声をカノンへと発した。ユリウスの姿から出る楽しそうなその声は、本当のユリウスを知っているカノンからしてみれば奇妙なモノだった。

「ユリウスの……格好で、喋んな……！」

「お前、なんでそんなこと言えんの？ お前が俺を殺したようなもんだろ？」

次の時には、もうユリウスの声へと戻っていた。その言葉が意味することを、カノンは否定する。

「違う。ユリウスは……」

生きてる。生きていたんだ。死んでなんかいない。ユーリさんが、ユリウスだから。

「もちろん今も生きてるよ。死刑囚の息子ユリウス・シュトラスじやなく、良家の御曹司、ユーリ・バーガンディとしてな」

「……お前、は……」

カノンの唇が震える。声が掠れて、上手く出なかった。そんなカノンの後に続くように、ユリウスに扮したコヒナタが言葉を続けた。ユリウスと一寸も違わぬ声で。

「なあ、ちび。これでもまだ、意味が分からないか？」

コヒナタの持つその銃口が、カノンへと狙いを定める。

「見つかったら、ずどん、だったよな？」

「意味が分からないネ」

『も、申し訳ございませんメイ殿！』

病室では突然呼び出されたメイ・シヨウが忌々しく呟いた。白い部屋の中に、その鮮やかな民族衣装が際だっていた。

「いきなり『中央病院へ来い』って言ったかと思えば、当の本人はもう出ていった後？ その上『ボク達の代わりに留守番をしてほしい』？ そういうのは調達屋の管轄外ヨ。代理屋に頼むのが適切ネ」  
『報酬は必ずお出しいたします！』

当たり前だと言わんばかりに、メイが鼻を鳴らした。相当怒っているようだった。サスケは何度も何度も謝罪を述べ、当然主人の非礼も詫びた。

「大体ネ、サスケがいるなら別に留守番役はいらないヨ。お前はあのネガティブ真っ黒星人と違ってしっかりしてるネ」

『いえ、ですが……ヒデヨシへの餌をあげることが出来ないの……』

サスケが窓の外を右翼で指す。メイがそこから覗けば、病院に入ることに出来ないヒデヨシが、外で繋がれていた。

「じゃあどうしてお前はこの病室に入ってるネ？」

『それは、医師達が来る度に隠れてますので』

「……ワタシは犬の世話役力？」

『とつ、とつと、とんでも御座いません！ はっ、そういえばフィソンの伝言を承っていたんです。このメモをメイ殿に渡してくれ、』

慌てて嘴からメイへとメモを渡す。

“とりあえず、後は任せた”

「おーまえはあ、王様カー！」

『落ち着いて下さい！　ここは病室ですメイ殿！』

取り乱しかけたメイを、なんとかサスケが押さえる。先が思いやられる留守番役だった。

ぶすつとした顔でメイが椅子へ座り直す。かなり乱暴な座り方で椅子が本来の位置から少しずれてしまったが、メイは何も気にしない。それよりも、なんとも不機嫌さの滲み出る顔色だった。

「それにワタシ、こいつのこと嫌いヨ。世外れだかなんだか知らないけど、いつもへらへらしやがって、気に食わないネ。アサハカちゃんが好き理由、よく分かるヨ。なのになんでワタシがこんな奴の面倒を見ないといけないカ」

メイがサスケに向かってくどくどと文句を言う。文句を言いながらも、ちらちらとクウヤの様子を伺う辺り、メイはお人好しだとサスケは思った。お人好しだからこそ、フィンはこちらやってメイに頼み事をするのだろうけど。愚痴の根元である当のクウヤは、すうすうと寝息を立てて静かに眠っていた。

それを見て、メイがぼつりと呟く。

「…………折角、定期調達以外でワタシのこと頼ってくれたと思ったのに。酷いネ」

寂しそうな、いつもとは違う調子でそう言ったメイを見て、サスケは何かを言わなければと思った。

『メイ殿。フィンは…………』

だけど、次に浮かぶ言葉が見つからなかった。しかし途中まで言いかけたからには何かを言わなくてはならない。現に今、メイは期

待の視線をきらきらとサスケに向けている。もう逃げられない。

「何力？ 情報屋がどうした力？」

『ふい、フィンは……………は……………は……………ハバネ  
口が好きです』

ばん！ とメイが立ち上がった。

「そんなの聞いてないネ！ どうでもいいヨ！」

『いやっ、これは単にハバネ口だけが好きという訳ではなくてです  
ね、フィンは辛党なんですよ、という意味で……』

「余計にどうでもいいヨ！」

病室は賑やかだった。外はまた、雪が降り出してきていた。

\*

まだ、意味が分からない？

87 アリスの孤城 【壊してあげる。綺麗に飾られた、貴女の思い出全てを】

貴女は、二度も愛する人を殺せやしない。

88・アリスの孤城 【きみと出会わずして】（前書き）

いつも遠enrrai雷をい愛読頂きありがとうございます。

後書きより、アオキからのメッセージがございませので、最後まで  
ごゆるりとお付き合い下さい。

## 88・アリスの孤城 【きみと出会わずして】

きみと出会って、一体何を得られただろうか？

\*

豪勢な絨毯が敷き詰められる二階の廊下、途中経過地点。

朝飛とフィンはこの状況をどうしたものかと悩んだ。さっきからずっと悩んでいた。「どうしたものか」と言うよりは、「何があったんだ」と言いたげな顔でもあった。とにかく、答えが見つからなかった。

沈黙を破ったのは、フィンの方からだった。

「……………キリユウ。さっきの香葉月と言い、コレと言い、キミの弟の知り合いにまともな裏町業者はいないようだね。こつもことごとく敵に睡眠薬を飲まされるとは……………危機感が足りない」

「みんなお人好しなんだよ、きつと」

二人の視線の先には、腕に包帯を巻いて頬に絆創膏をしたレオラが寝ていた。廊下という非常識な場所で、レオラは寝息を立てて眠っていた。

そんなレオラを冷たい目で見て、ぼそりとフィンは言った。

「…キリユウ、先に行つててくれ。ボクはこの金髪名字無しを永遠



の眠りにつかせてからキミの後を追うよ」

「フィン、それ犯罪！ 犯罪だから！」

「大丈夫。心配しなくとも、ちゃんと大西洋に捨て置いてくるよ。これで完全犯罪の出来上がり、良かったね」

「駄目だから！ 良くないから！ 仕方ないだろう？ レオリアナさんだって好きで寝てる訳じゃないんだよ。きつと敵に無理矢理眠らされたに違いないよ」

本当はまんまと騙されて自分から飲んだのだが、その場面を見ていないこの二人には一生分からない。

犯罪へ走るのを止めてくる朝飛を見て、それでも少し不満を残した顔でフィンが言う。

「一生懸命ここまでの階段を登ってきたのにこんな風にスヤスヤと眠っていられば、殺意くらい沸き起こるよ」

「君の分まで階段を登ったのは僕だよ……！」

ガクリと膝を付いて朝飛が力無く言った。そんな朝飛の隣で、フィンが少しだけ考える素振りを見せて、そして容赦なくレオラの体を蹴った。

「フィンー！？ ちょっと待って何してるの！？」

「何って……レオリアナを起こしてるんだよ。おい、起きろ、コラ」

容赦なく、そして遠慮無くフィンはレオラを蹴る。がすがす蹴る。レオラが起きる前に、彼が本当に永眠してしまうのではないかと心配になってくるくらいに蹴った。もちろん朝飛がそれをしつかり止める。

「蹴るな蹴るな蹴るな！ 相手は怪我人だよ！」

とどめを刺しかねないフィンだったが、ふいに朝飛を方に視線を移す。

「それが問題なんだ、キリユウ」

そして最後にもう一度蹴った。流石の睡眠薬も、ここまで痛覚を刺激されては効き目が切れてしまったのか、レオラがぱちりと目を

醒ました。

「……つてえー……あれ？ アサヒにフィンじゃねーか」

「はよつす。起きた？ レオリアナ」

フィンが右手を挙げて軽く挨拶をする。挨拶をされたレオラは、傷を庇いながら起きあがる。

「オハヨー……つてて……あー畜生。傷が痛えな」

それはフィンが蹴ったからだだが、朝飛は何も言わなかった。知らぬが仏、まさかこんな異国で自国の言葉を痛感するとは思ってもみなかった。

「そういやあ、二人ともなんでこんな所にいるんだ？」

「ちよつと問題が生じてね。どうやらボクは誤情報を渡してしまっただよつだから、それを修正しに来たんだ。キミは一体誰と戦ったの？ ミステリアス・マッド……では無いよね。彼女は恐らく香葉月と戦ったんだらう？」

「……コウヨウツキ……？ そうだ、カノン！ くそ、寝ぼけてた。悪いフィン、オレ今からカノンを追いかけなきゃなんねーんだ」

ばっ、と立ち上がって走り出そうとするレオラの右足をフィンが器用に引っかけて、レオラは廊下へと見事に転げた。

「ふぎゃー！」

「はい、ストップ。行く前にボクの質問に答えてくれ。キミはどっちと戦ったの。リュック・コヒナタ？ 大男？」

「なんだよもう！ オレが戦ったのは大男！ 仮称はクロックつて言つて、オレの勝ち。これで良いだろ？」

「まだ駄目。キミの傷の手当てをしたのは誰だ？ キミがこんなにも適切な処置を施せる訳がない」

「あーもう、ミス・マッドだよ！ あいつは元医者だろ？」

再度立ち上がって、服の埃を払う。質問に答えたレオラに、またフィンが疑問符を浮かべた。

「敵であるミステリアス・マッドが、キミを助けたというの？」

「医者は敵味方関係無いんだよ」

「やっぱり、か」

その一言に、フィンがようやく納得した。分からなかったことが全て解けたようだった。

「何がやっぱりなんだよ？」

今度はレオラが不思議そうな顔をした。フィンがあからさまに「説明するのが面倒」という表情をしたので、朝飛が代わりに話し始めた。

「ミスティアス・マッド……通称ミス・マッドは、数年前から殺人を犯していないんです。正確に言うと、恐らくコヒナタ少年と出会った頃から、一度も。そもそもミス・マッドが犯した犯罪である、街が一つ消えてしまったという事件も故意にやったものじゃなかったんです。事故、に近いものだったそうです。見解観測さんから教えていただきました」

「優秀な医者だったんだって」

フィンが最後に付け加えた。そしてレオラの腕に巻かれた包帯を見る。完璧に応急処置が施されていた。

「そっか……で、オレはもう行ってもいいよな？ 急いでカノンの後を追わなきゃいけないんだ」

フィンが何も言わないのを確認して、レオラは廊下の先に見える長い階段への入り口へと向かって歩き出そうとした。が、すぐに足下が蹠踉めいた。

ふら、と倒れそうになったところを、慌てて朝飛が支えた。

「大丈夫ですか？ ちよつと、包帯に血が滲んでますよ！」

「……いや、ホント大丈夫だって」

「怪我してるのに動いちゃ駄目ですよ！ 無茶です！」

「無茶じゃないって」

朝飛が支えているとはいえ、レオラよりも一回り小さい彼だけの力では、持ちこたえられるかどうかすらも微妙な所だった。朝飛が助けを乞うようにフィンを見たが、彼は知らないふりをした。どうもフィンに手伝う気は毛頭無いらしい。

「アサヒ、悪いけどオレ、行かなきゃならないんだ。カノンと約束したんだ」

「ごめんな、と言ってレオラは朝飛から離れた。どう止めても一人で行くつもりらしい。そんなレオラに朝飛は溜息を吐いて、彼に駆け寄った。

「なんだよ？　いくら止めたって、オレは絶対に行くからな」

「はぁ……もう、仕方ない人ですね」

右手をゆつくりとあげ、

「分かりましたよ。そんなに言うんなら……」

そして、

「……おとなしく眠っていてくださいっ！」

その腕を素早く下ろした。下ろした先は言うまでも無くレオラの首元。勢いよく放たれた手刀に為す術もなく、レオラは床に伏した。しばらく傍観していたフィンが一言言う。

「キミってさ」

「うん？」

「案外、容赦無いね。見かけによらずってどうか」

フィンは沈没したレオラを指さして言った。レオラは見事なまでに気を失っていた。息をしているのかどうかも怪しいが、なんとか生きていることだろう。そんなレオラを見て、さらっと朝飛は言い放つ。

「足手纏いだよ、怪我人は」

「……足手纏いって言われたこと、まだ根に持ってるんだ。そもそもそう言ったのはソリティアなんだけどね。ってどうか、その怪我

人に新たな怪我を加えたよね、いままさに」

「ああ、その辺は大丈夫。痛みを感知する前に気を失ったはずだから」

そんな爽やかな笑顔で答えられても困る、とフィンは心の底から思った。

「ってことでフィン。レオリアアナさんをよろしく。良かったら下まで運んで香葉月さんと一緒に一階で待ってて。やっぱり女の人を一人で寝かせておくのは心配だから」

「はあ？ 何を言ってるの、キリュウ。なんでボクがこんな奴を……」

「一時的に気絶させたとはいえ、いつまた起きて動き出すか分からないだろ？ あの様子じゃあ、きつとまた『カノンを追いかける』とか言い出すよ。怪我人に無理は良くないし……だからその見張り」

「だから何でボクが、」

「人を担いで登るより、人を担いで下りる方が楽だと思っよ？」

「……嫌味な奴だね。キミって」

「よく言われるし、自覚もしてるよ」

ふふ、と朝飛は笑った。フィンは笑わなかった。その代わり質問をする。

「で？ ボクにお荷物を預けて一体キミはどうするのさ」

「そうだね。この次に居るのはコヒナタ……ヒナタだろうから、僕はソリティアさんの後を追って『コヒナタ』についての誤情報を正してくるよ。君の代わりに」

「ならばボクが上へ行くから、キミがこの名字無しの見張りをすればいい」

そんな回りくどいことをせずとも、フィンが直接カノンに言えばいい話だ。だが朝飛は譲らなかった。

「だね。だけど僕に行かせて欲しいんだ。空夜を殺しかけたって言う『アリス』を一発ぶん殴っておきたいから」

「……相手は女の子だよ」

「じゃあ平手打ちにしとく」

そういう問題じゃない、とフィンは言い掛けて、止めた。朝飛がこの先に行きたがるもう一つの理由が分かったからだ。

「そういえば、キミは『小日向小雨』の知り合いだったね」

「そういうこと。間違った道を正してあげるのは、友人の役目だからね」

朝飛は思っていた以上に頑固者のようだった。フィンはそんな彼と床で気絶しているレオラを見比べて、ほんの少しだけ笑った。誰にも分からないくらい、少しだけ。

「分かった。じゃあボクとキミはここで一旦お別れ。一階でキミ達が帰ってくるのを待つことにするよ」

「キミ“たち”？」

「そう。キミとソリティアと、彼女の弟。出来ることなら、全ての首謀者のアリスにも一度お目に掛かりたいね」

朝飛はその言葉に強く頷いた。彼等にはアリスから取り戻さなければならぬものがたくさんあるのだ。

「分かった。心配しなくても、すぐに戻ってくるよ」

「してないよ、キミは弟に劣るとしても、忍を統べる者だからね」それを聞いてすぐに朝飛は走り出した。その背中を見送ることなく、フィンはレオラに肩を貸す形で反対方向へと進み始めた。廊下は、嫌になるくらい長かった。

\*\*\*\*\*

三階へと続く長い階段をマッドは上がっていた。これだけの量を登ってきたのにも拘わらず、その表情は歪むことなくまるで散歩の途中だといわんばかりだった。何度も上り下りしてきた階段なのだろう。とても慣れた足取りだった。

階段は丁度終わりかけ。あと何十段か上れば、お目当てのコヒナタの部屋だった。手すりに手を掛け、変わらぬスピードで上り続ける。

あの子は今、また誰かに成りすましているのだろうか。マッドは笑顔がとてもよく似合うコヒナタを思い出して、少しだけ苦笑いをした。彼とは、出会ったときから笑顔しか知らない。

「……そっぴや、一度だけあつたっけ……？」

笑顔ではないコヒナタを見たことが。それがいつだったのかを思い出そうとして、そして突然彼女の歩みがぴたりと止まった。

振り向かずに、いつも通りの声で後方に向かって問う。

「アナタは一体誰かしらー？」

「……足音、気配、どれも消したつもりだったんですけど」

「んふふ。でも呼吸までは消せなかったみたいね。これでも私は過去に名の通っていた名医なわけー」

「名医……ということは、貴女がミスティアス・マッド……？」

自身の名を当てられ、マッドはゆっくりと振り向いた。そこには見慣れない東洋系の顔があった。

「そういうことになるわねー。長ったらしい名前でしょう？ 言うておくけど、ソレ、あだ名みたいなモノだから。本名はもうちょっとまともなのよー」

相変わらず巫山戯た態度を改めない彼女に対し、持っていた刀から手を離して朝飛が警戒心を解いた。

「あらー。敵を目前にして随分余裕ねー？」

「貴女は悪い人じゃなさそうですから」

「へえ？ これでも私、指名手配中の無差別大量殺人犯よー」

「でも、事故でしょう」

ぴたり、と音が付きそうなくらい露骨にマッドの動きが止まった。一瞬だけその飄々とした態度が消えかけたが、すぐにいつもの彼女に戻った。

「んーん。事故なんかじゃないわー。私の作った毒薬が町の住人を全て殺し、そして消滅したのー。地図上から、その町の名前がねー」

「確かにその事件の原因は貴女が作った毒薬だった。だけど、」

朝飛の言葉の途中で、マッドが割り込んだ。有無を言わせない顔だった。

「意図的にやったのであれ、やってないのであれ、ソレを作ったのは私。好奇心に負けて、とんでもない毒薬を作ってしまった私の所為なのよ」

真剣な表情だった。朝飛はそれ以上何も言えず、ただ目の前の女を凝視していた。ここまで頑なに否定されると、もう何も言えない。そんな朝飛の心を知ってか知らずか、マッドはその表情を崩して、また巫山戯た態度に戻った。

「なーんつつてね。ちよつと真面目に語っちゃったりー？」

「……どうして、まるで冗談みたいにして誤魔化すんですか？」

「超大真面目よ、失礼な子ねー」

「またそうやって笑って誤魔化すんですね」

お見通し、のようだ。マッドは大袈裟にやれやれと両肩をあげ、朝飛の目を見た。とても綺麗な黒色だった。

「コヒナタくんがいつも笑ってるからね、私も出来るだけ笑って過ごすことにしたの。あの子がへらへらふにゃふにゃしてるのに、私だけがしんみりじめじめしちゃったら変だかね。さて綺麗な黒目の刀少年。君は一体誰なわけー？」

「桐生朝飛。こちらではアサヒ・キリュウ」



「ああ、クウヤくんのお兄さん？ コヒナタくんの資料に載ってたわー。確かシノビって言う職業のお偉いさんだっけー？ あ、そう  
だ。アサヒくんにも言っておいてあげなきゃいけないことがあるの  
ー」

「なんですか？」

「クウヤくんのことなら心配いらないわ。朝葉香ちゃんにも言った  
んだけどね、あれは死なない毒だから」

朝飛がほっとしたのが、マッドにも分かった。それくらいに気が  
張っていた。伝えられて良かったな、とマッドは微笑んだ。

「ミス・マッドさんも、これからヒナタのところへ行くんですか？」

「ヒナタ？ コヒナタくんのこと？ ええ、そのつもりよー。その

口振りだと、アサヒくんも行くみたいね」

「はい」

「じゃあ先に上がりなよ。私はもつと後から行くからー」

「なんですか？」

問ってくる朝飛に笑いかけて、マッドは答える。

「あの子がしたいこと全部終わらせてから、迎えに行くの」

「……？ よく分かりませんが、僕はこれで」

マッドの右側を通りながら朝飛は上へと駆け上がっていった。そ  
んな彼をマッドはずっと見ていた。

やがてその姿が階段で見えなくなったころ、マッドはやつと思  
い出す。笑顔の似合うあの子が、一度だけ見せた本当の自分。

『ぼくね、強くなるから。もつと強くなって、マッドさんを捕まえ  
ようとする悪い奴等から、きつと守るから。だから、お願いだから、  
捨てないでねえ？』

寂しがり屋で怖がりな、それでも笑うことしか知らないあの子は、  
この階段を上り詰めた先にある部屋の奥で、いま、誰に成りすまし  
ているのだろうか？

それはあの部屋に入った者にしか分からない。

「ヒナタ……か」

久しぶりにあの子の本当の名前を口にして、マッドは少しだけ目を滲ませた。

「忘れたままの方が、いいわ」

彼女の願いを、声に乗せた。

\*

きみと出会わずして、一体何を得られただろうか。

88・アリスの孤城 【きみと出会わずして】（後書き）

きつと、何も得ることは無かった。

\*\*\*\*\*

ここまでお読み下さりありがとうございます。

先の10月12日にて、遠enrai雷は連載2周年を無事迎えることが出来ました。これも読者の皆様のお陰です。

2年で104話。1週間に1話書いてきたことになりました。まさに週刊連載。

それでも楽しいことばかりだったのは、アオキ自身がこの物語の読者だからかもしれません。遠enrai雷を書くこと、そしてキャラを動かすことがとても楽しいです。

まだまだ未熟なアオキ（そして遠enrai雷）ではございますが、これからお付き合いの程よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、この物語を読んで下さっている皆様に、暑苦しく鬱陶しい程の感謝の念を送りたいと思います。

あーりがとーうござーいまーす！！！！！

89・アリスの孤城 【兄と姉】

「ねえ神様あの子を救ってあげてよ。  
私はその次で良いから。」

\*

「見つかったら、ずどん、だったよな？」

あれはユリウスじゃない。ユーリじゃない。それは頭で分かっているけれど、足が動いてくれなかった。見開いた目が一度も瞬きしない所為で渴いてくる。

「お前が俺を殺したんだ。今度は俺の番だろ」

「ちがう……おれは殺してない！」

「違う？ あはははは！ あはははははっ！」

ユリウスの姿をしたコヒナタが可笑しそうに笑う。今度はコヒナタ自身の声でカノンへと語りかける。ユリウスと全く同じ姿から発せられるその声が、カノンの頭の中で反響した。

「何が違うのお？ ナリウス・シュトラスは、あの時自分の傍にいた少女を逃がすために銃を取り、軍人に向けて発砲した。その罪は大袈裟に取られ、捕縛されたユリウスは死刑宣告を受けた。あなたさえ居なければ、彼は逃げ切れたかもしれないねえ。あんな罪を問

われずに済んだかもしれないねえ？」

カノンは耳を塞いでしまいましたかった。固まってしまった体を無理矢理にでも動かして、塞いでしまえば良かった。聞かなくとも、次の台詞が分かってしまう。

「存在を偽ってまで、生きなくても良かったかもしれないねえ？」

それは、いままで何度も自分が思ってきたこと。

ユリウスが、ユリウスのままで生きることが出来なかったのは自分の所為。名前も存在も全て偽ってまで生かしてしまったのは、自分の所為。真実はそうなのだけど、認めたくなかった。

「違う、違うんだ……！ おれの所為じゃない……おれの所為なんかじゃ……」

「お前の所為なんだ」

目の前にいるユリウスから、残酷な言葉。大丈夫、ちゃんと分かっている。アレはユリウスなんかじゃないと。それでも手の震えは止まってくれなかった。

「お前はあの時死んでいたはずなんだ」

あの時。そう、ユリウスに出会わなければいずれ死んでいた。母親に見捨てられたあの場所で死んでいたんだ。

「おれは、死ぬはずだった……？」

「そう。親に見捨てられ、疑似家族も殺して、それでも何故生きようと思う？ もう十分だろ？ お前ばっかり、ずるいじゃんか」

ユリウスが、否、コヒナタがその銃をカノンの額に突きつける。それでもカノンはぴくりとも動かない。動けなかった。

泣きもせず、喚きもせず、ただ呆然と目の前の少年を見つめ、そして呟く。

「ごめん、ごめん……ユリウス……」

コヒナタの向こうを見てカノンはただひたすらに謝罪の言葉を繰り返した。その様子を、コヒナタは酷く楽しそうに見つめていた。

こうなってしまうば、あとは赤子の手を捻るよりも容易い。  
「ばいばい」

この人差し指に、少し力を入れるだけ。

ばん

コヒナタは躊躇も容赦も無く撃った。辺りには硝煙の匂い、コヒナタの手には衝撃。

コヒナタは完璧に撃った。

「……………ぼく、撃ったよねえ？」

本来ならばその場に、死体が転がるはずだった。なのだが。

「なのに、なんで何も無いのかなあ？」

そう、何も無い床を、撃った。コヒナタが理解しがたい顔をして  
いると、柔らかい声が聞こえた。

「お別れを言うのは、もう少し後にしませんか？」

「きみは……………」

コヒナタが人差し指に力を入れたあの瞬間、弾がカノンに当たる  
その直前に、疾風が横切った。

それだけは、コヒナタにも分かった。風が吹いたことは。

「お久しぶりです」

その疾風は綺麗に微笑む。左手には刀を、右腕には目をぱちくり  
させるカノンを抱えて。疾風は、ゆっくりとコヒナタに振り返った。  
「こうしてお会いするのは何年ぶりでしょう、小雨さん」

「……………ほんと、嫌になるよお。どうしてぼくの邪魔をするのかな  
あ？」

嫌になる、と言いながらも表情は相反して相変わらず笑ったまま  
のコヒナタが、目の前の風の名前を呼んだ。この国では滅多に見な  
い、漆黒の眼をもったその人の名を。

「邪魔しないでくれるかなあ？ 朝飛い」

「あ、あさひ……？」

その名前を聞いて、気絶にも近かったカノンがやっと状況を理解し、自分を抱えたままの朝飛を指さして叫んだ。

「アサヒ！？ お前、ちよっ、なんで！？ どうやってここへ来たんだ！」

「えっと、走ってきましたけど？」

首を傾げながら答える朝飛に向かって、思いつきり首を振るカノン。

「いや、いやいやいや！ そうじゃなくて！ 地図はあれ一枚しか無い筈だろ？ どうしてこの場所が、」

「僕、思い立ったら吉日タイプなんです」

「聞いてねーよ、お前の性格なんて！ しかも全然答えになってねーよ！」

「なにはともあれ、ソリティアさん」

「あ？！」

多少パニックに陥っているカノンを下ろして、朝飛はコヒナタの方を見る。コヒナタは銃を持ったまま、こちらへにこりと笑いかけた。

「殺されなくて良かったですね」

ふふ、と朝飛が笑った。カノンにとって、それは皮肉にもとれる笑みだった。

「兄弟揃って性格悪いのな……」

「最高の誉め言葉です」

そして2人は、自分たちの向かいで銃を構える少年へと視線をずらす。

「さて、小雨さん。それともヒナタとお呼びした方がよろしいでしょうか？」

朝飛の放った言葉の意味が分からなかったのか、コヒナタは首を

右にずらした。

「ヒナタ？ 何を言ってるの朝飛い？ ぼくはコヒナタ。きみと出会ったときは小日向小雨だったけれど、今はリュック・コヒナタだよ。」

「それが現在の偽名ですか」

その言葉に、コヒナタはまたしても理解しがたい表情をした。

「偽名も何も、どれが本当かだなんて忘れちゃったからねえ。とにかく、ぼくはコヒナタ。どんな姿でも、どんな格好でも……そう、例えば」

その台詞を言い終わらない内にコヒナタの姿が消えた。いままでカノンと朝飛が見ていた方向にはただの空虚しか残っていない。

慌てて銃を握り直すカノンと、刀を構える朝飛だったが、一体何処へ消えたのかも分からない相手に対して、それは余りにも無意味だった。

朝飛がカノンとは反対の方向へと向き直る。そしてカノンが叫んだ。

「アサヒ、後ろ！」

「え……」

「例えばねえ、こんな姿でも」

わずかに反応の遅れた朝飛のすぐ隣で、女にしては少し低めの、男にしては高めの声が聞こえた。

「ッ！？」

ソレが動きを止めるまで、カノンには何も見えなかった。もちろん朝飛にも。だが気付いたときには既に、空夜の姿をしたコヒナタが、朝飛の首をその両手で掴んでいた。

「びつくりした？ 兄さん」

朝飛の首を持つ手に、カノンの時よりも素早く力を入れる。だがそれと同時に朝飛も、後ろの相手に容赦なく土<sup>ひじょうち</sup>漕をかました。



予測出来なかった所為で、少し喰らったコヒナタが自分の腹を庇いながら飛び退いた。すでに空夜の姿ではなく、本来の姿に戻っていた。少しは苦しいはずなのだが、まだ笑顔を崩していない。

「むうー……どうして弟に向かって容赦なく攻撃出来ちゃうかなあ？」

「空夜じゃないって知ってるからですよ」

不思議がるコヒナタに、朝飛は当たり前のように答える。

「あなたには『戸惑い』ってものが生じないのぉ？ さっきの便利屋さんも引つかからなかったしい」

「全然違いますからね」

全否定をされて少し口惜しいのか、コヒナタの声が少し不満げに変わった。ずつと変わることの無い笑顔以外は、ただの子供のようにも見える。

「絶対にそつくりだよぉ！」

「いいえ。何処の世界に弟を見間違っ兄がいるんですか」

「ああ……なるほどぉ。2人とも弟馬鹿なんだねえ」

コヒナタが納得の声をあげる。

「じゃあ次は誰になるのかなぁ？」

止まっていた足を再び動かして、コヒナタは2人に正面から近付く。それを見て朝飛は刀を持ち直し、カノンはコヒナタの右足の間近に向かって銃を撃った。

「そこから動くなよ。コヒナタ、頼むからここの出口を教えてください」

「やーだよぉ」

拒絶の返事に、カノンはもう一度銃をかまえた。

「撃てるものなら、撃ってみなよぉ」

敢えて挑発してくるコヒナタと、躊躇しながらも撃つ構えをとるカノン。

その間を取るように、朝飛の右手がカノンの銃の安全装置をかけた。

「ソリティアさん。銃を下ろしてください」

「…なんでだよ？」

問いかけは隣にいる朝飛に対してだが、カノンは瞬きもせずニコヒナタから眼を離さなかった。安全装置のかかった銃を構えたまま。ニコヒナタも朝飛の行動に少し驚いたのか、また足を止めた。

「そっだよ朝飛い。そんなことしたら、隙だらけになっちゃうよお？ ぼくは一向にかまわないけどさあ」

「出来れば、あまり戦いたくないんです。それに話したいことがあります」

「話したいことお？ ぼくにい？」

興味があるのか、ニコヒナタは楽しそうに聞いてくる。朝飛は表情を崩さずに続けた。

「ええ。あなたは何故、裏町を憎んでいるんですか？」

ニコヒナタの顔から、一瞬だけ笑顔が消えた。

\*

ねえ神様。

ぼくには、どうしてもしなければならぬことがあるの。



89・アリスの孤城【兄と姉】（後書き）

あのととき誓ったんだ。

90・アリスの孤城 【ある少年の独白】

絶望と絶望の狭間に見えた、奈落。  
ぼくは、ただ。

\*

「あなたは何故、裏町を憎んでいるんですか？」  
そんなことを聞かれても困る。だってその質問は、ついさっきぼくが思った疑問と同じだったから。ぼくはどうして、裏町がこんなにも憎い？

「うーん……それは困った質問だねえ。ぼくにもよく分からないんだよお、朝飛い」  
「わからない？」

朝飛の代わりに、便利屋さんが怪訝な顔をして答えた。そんなに変な顔をしなくてもいいじゃないのかな。誰だって、忘れちゃうこととはあるじゃない。

ぼくがそれ以上何も言わないから、朝飛は次の質問をしてきた。  
「……あなたは、自分と母親を引き離れたワルツ孤児院が憎くて、彼等と同じ裏町を憎むのですか？」

「ひきはなす……孤児院……？」

何、それ？ 知らない。朝飛は意味の分からないことを言っていた。

「訳が分からないなあ。引き離すも何も、おかあさんはぼくを置いて何処かへ消えちゃったんだからさあ」

ああ、そうだ。おかあさんの所為だ。おかあさんが裏町業なんて仕事をしていたから、子供のぼくは邪魔だったんだ。だからぼくの前から居なくなっちゃった。

ぼくはきつとおかあさんが憎いんだ。そうに違いない。

「思い出したあ。朝飛い、ぼくはね、おかあさんが憎いんだよあ」

朝飛はとても悲しそうな顔をした。まあ当たり前かな。自分の母親が憎いだなんて、ぼくはとても可哀想な子なんだろうね。便利屋さんはさっきのぼくみたいに訳が分からない風だった。朝飛とぼくと交互に見ている。

「……自分を残して、死んでしまったからですか？」

死んだ？

誰が？

「だれが、しんだの……？」

ああなんでそんな変な顔をするのかな。気持ち悪い。だって忘れちゃったんだから仕方ないでしょ？ それよりも、一体誰が？ 誰が死んだというの？

「あなたの母親は、自殺したと聞きました」

ばん、ばん

「嘘だ！」

自分でもびつくりするくらいに大きな声が出た。2発撃つたのに、朝飛を掠めてやしない。

「おかあさんはぼくをおいて何処かへ行っちゃったんだ。いつの間にかぼくの知らない内に何処かへ消えちゃって……そうだ、ぼくはおかあさんに捨てられたんだ。あははははっ、アナタと同じだね便

利屋さん。だけどぼくは悪くない、全部おかあさんの所為なんだ！  
声を荒げて怒っているけど、ぼくの顔が変わった様子は感じなかつた。良かった、まだ笑えている。心の何処かで、酷く冷静になっている。ぼくがいた。

「ヒナタ、あなたは忘れてるんです」  
ぱん、ぱん

どうして朝飛に当たらないんだ。ああ本当嫌になる。朝飛の話は聞きたくない。なにも聞きたくない。朝飛は五月蠅い。もう殺してしまおう。

「もういいよ。朝飛い、きみから殺すことに決めた」

「僕を殺すなら、その前に最後の質問に答えてください」

「なに？」

「あなたは どうして笑っているんですか」

どうして？ 決まってるじゃない、笑いたいからだよ。笑いたいから笑ってる。

あれ？ じゃあぼくはどうして笑いたいんだっけ？ そうだ、幸せになりたいから。笑顔は幸せを運ぶんだ。だから笑う。あの日に決めたんだ。おかあさんが居なくなった日に、ぼくは幸せになってやるって。

本当に、そうだった？ 幸せになりたくて？……ちがう。本当は違うんだ。あの日、あの日ぼくは。

「嫌だ……」

いつも叩かれて、蹴られて、死にそうで。

それでもぼくはおかあさんが大好きだったから。

「ちがう……」

ぼくは消えてしまったおかあさんを捜して、走って走って走って。誰かが追いかけてこないか心配しながら、夜の街を走って走って走って。

「こんなの知らない」

とても汚い路地にある小屋みたいなボロボロのぼくの家。おかあさんとぼくの家。いつもは小さなランプが付いているはずなのに、その時だけは真っ暗で。

どうして真っ暗だった？

ぼくはそれからどうした？

ぼくは家に入って手探りで廊下を歩いてそれからダイニングへ行って、そう、おかあさんはいつもここに居た。だからぼくはランプを探す為に手を動かして何かに当たって。それはまるで棒の様なもので、とても冷たくて。それから？ ランプを付けたあと、ぼくは何を見た？

ゆらゆら、ゆらゆら。ぶらぶら、ぶらぶら。

棒の様な足をぶら下げて。

おかあさんは、つめたく、なつてい た ？

「うあああああああああ！」

頭の中で、何かが割れる音を聞いた。

口が勝手に動く。ぼくは一体何を言っているの？

「違うんだ、おかあさんは悪くない、悪くない悪くない悪くない！

ぼくが悪いんだ！　ぼくが生まれたから、おかあさんは苦しくて、ぼくを叩いただけで……おかあさんは優しいから、ぼくを捨てなかつた！　捨てられなかつたんだ！　だから、ぼくは叩かれても殴られても蹴られても刺されても折られても首を絞められても、何をされても良かった！　おかあさんは悪くなかつたんだよ……！　それなのに、あいつは、あいつらは正義の味方気取りで、ぼくとおかあさんを引き離して！　それでもぼくはおかあさんと一緒に居たくて、なのにぼくがあそこの家に帰ったときには、おかあさんは、おかあさんは……！」



首を吊っていたんだ。

「おかあさんは悪くなかったのに……あいつらの所為で、ぼくは、ぼくは！」

居なくなつたのはおかあさんの方じゃない。ぼくが、連れられていったんだ。

あの日に見たおかあさんは、泣きながら死んでいた。ぼくを叩いた後のように、おかあさんは泣いていた。おかあさんが泣くときは、いつも謝っているとき。

おかあさんは、一体誰に謝っていたの？

「だからぼくは、ぼくは幸せにならないといけないんだ！　おかあさんの分まで、幸せにならないと駄目なんだよお！　裏町なんかがいたら、ぼくは幸せになれないんだ！　おかあさんを奪った裏町なんか！　だから邪魔しないでよ！　もう誰もぼくの邪魔をしないでよ！」

「ヒナタ」

「ぼくはヒナタなんかじゃない……！」

あの頃のぼくの名前を呼ばないでよ。朝飛は邪魔だ。

「あはははっ！　もういいよ、2人とも死んじゃえばいいんだ。ぼくは負けない。あの頃のぼくは弱かったから駄目だったんだ。だけど今のぼくは強い」

心臓を狙って、撃てばいい。それだけだ。ぼくは強い。負けない、負けてはいけない。

「お前の負けだ」

便利屋さんが言った。

「お前の負けだよ、コヒナタ」

「あははっ！　何を言い出すかと思えば、それは最後の悪あがきい？　残念だけど、僕はとても強い！　誰にも負けなくらい強いん

だよお！ ぼくはマツドさんと出会ってから、ずっとあの人のボディガードをしてきた。あの人を捕まえようとする人は全員返り討ちにしてやった！ いまはたったの2人だけ、楽勝だね！」

銃は便利屋さんなんかよりもぼくのほうが遙かに上手い。ぼくに負ける要素なんて一つもない。朝飛には手こずるかもしれないけど、それでもきつとぼくは勝つ。勝たなきゃいけないんだ。

「弾は、残り一発」

便利屋さんは、ぼくを指さした。まさか。

「……数えてたの？」

弾倉には、便利屋さんの言ったとおり一弾しか入っていなかった。だけど問題ない。

「なら簡単だよお、便利屋さん。あなたを殺してから、あなたの銃を使って朝飛を殺せばいい。殺す順番が変わっただけ」

ぼくが勝つことに変わりはない。なのに便利屋さんはまだ反論を続ける気らしい。

「撃てるのか？ さっきから何度も朝飛に向かって撃ってるのに、弾は一つも朝飛に当たってない」

「あれはぼくが少し動揺していたから。だけど今はこんなにも冴えている」

もうこの人と話すのも鬱陶しい。

「コヒナタ」

五月蠅い。この人も五月蠅い。朝飛もこの人も、みんな殺さなきゃ。

「お前は、幸せになりたいから笑ってるの？」

「そうだよ。幸せにならなくちゃいけないんだ。だからさっさと死んでよ」

「そういう訳にはいかない」

なんでこの人、笑ってるの。理解出来ない。もうすぐ死ぬのに。

「じゃあぼくが殺す」

「それも困る。おれは、弟を取り返さなきゃいけないんだ」

「ああ、シオンさんのこと？ 安心してよ。遺言ならばくが伝えておくよ、だから死んで」

死んじやえ。はやく、お願いだから、2人とも死ね。

「駄目だよ。おれは弟を独りにしたくない。あの子はもう独りになっちゃいけないんだ」

弟の為？ 家族だから？

血も繋がらない義弟の為に、こんなにもボロボロになって？

ただの他人の為に、どうしてこの人はそこまでして。

「なんで？」

どうしてアナタはそんなにも必死になってるの。

便利屋さん、アナタはどうして笑っているの。

「シオンのことが、大好きだからだよ」

ぼくがただの一度でさえ言ってもらえなかった言葉を、シオンさんは言ってもらえる。

ぼくが血の繋がった家族に持つてもらえなかった感情を、シオンさんは血の繋がらない家族に持つてもらえている。

ぼくが欲しくて堪らなかったソレを。

もう、いやだ。

「なんでなんでなんでなんでなんで、どうして!?! どうしてぼくは好きになってももらえないの! どうしてぼくは愛されないの! どうして誰もぼくを愛してくれなかったの! どうすればおかあさんはぼくのことを愛してくれるの!?! どうすればおかあさんはぼくのことを愛してくれただの!?! ぼくはおかあさんのことが好きなのに、どうしておかあさんは僕を嫌ったの! どうしてあいつらはぼくとおかあさんを引き離したの!」

銃、握らなくちゃ。早くこの人を殺してしまわないと、ぼくはおかしくなってしまうそうだ。

心臓を狙って、人差し指に力を込めて、それで終わりだ。でも手

に力を入れると、今度は足に力が入らない。ああもういいや。どうでもいい。もう立てない。膝から力が抜ける。

「コヒナタっ!?!」

来ないで。来ないでよ。来て欲しくない。ぼくは、おかあさんに居て欲しい。

「来るなああっ!」

ばん

便利屋さんが、ぼくに抱きつくように、倒れ込んだ。  
朝飛が、何かを、叫んだ気がした。

\*

絶望と希望を、見間違えたんだ。



90・アリスの孤城【ある少年の独白】(後書き)

ぼくは、ただ。

BGM・エチュードop・10-4/シヨパン

91・アリスの孤城 【母と息子】

ぼくが責められるべき罪は、母を笑顔で死なせてあげられなかったことです。

\*

「ソリティアさん……!？」

朝飛が叫んだと同時に、カノンがコヒナタに向かって倒れ込んだ。ゆっくりと、重力に身を任せるように、その体が落ちる。カノンの左胸には、銃弾に貫かれた痕があった。

コヒナタは覆い被さるカノンを避けもせずに、ただ真っ直ぐと前を見据えていた。視線の先にいる朝飛よりも、もっとなんと遠くを

「……どうして、かなあ？」

カノンに抱かれたような状態になって、コヒナタが首を傾げる。自嘲気味な笑みだった。

「ぼくは、間違えなかった……戸惑いも何もなかった……」

撃たれたカノンに近付くこと、ましてや惚けたコヒナタに近寄ること出来ずに、朝飛は2人を見て立ちすくんでいた。

「朝飛い。ぼくは、いま、この人を殺したよねえ？」

「ヒナタ……」

朝飛がヒナタに向かって歩き出そうとして、足を止めた。その漆黒の双眸が、これ以上無いくらいに見開かれる。

「コヒナタ、大丈夫だよ」

ぎゅ、とカノンの腕がコヒナタに回された。

「大丈夫」

それは、カノン自身の安否を知らせる言葉ではない。抱き込んだ少年に言い聞かせる為の言葉。まるで泣きじゃくる子供をあやす、母親の言葉。

「大丈夫だから」

「ぼくは殺したのに……なんで、死なないんだよお……!!」

コヒナタはもう笑っていなかった。怒りとも哀しみとも取れない、否、その両方とも言える表情で大声を出した。

「ぼくはちゃんと心臓を撃つたのに、どうしてあなたは死なないんだよお……!!」

狂ったように叫ぶコヒナタの声が響く。張り巡らされた部屋中の鏡が、初めて見せるコヒナタの涙を映していた。

「ソリティアさん、無事だったんですね……!!」

やっと自分の傍までやってきた朝飛に、カノンはまだコヒナタを抱えたまま、ある物を投げた。

「さんきゅ、アサヒ。助かった」

「これ……」

それは、刃に弾丸が当たって無惨にもひびが入ってしまった、小刀。朝飛がカノンに渡した『魁』という字が彫り込まれていた刀だった。

カノンはそれを、胸ポケットに入れていたのだ。

朝飛に少し笑いかけてから、カノンはまた泣きじゃくるコヒナタに向き直った。

「……ちゃんと、笑う以外のこともできるじゃんか」



腕の中の少年は、その腕で乱暴に目を擦る。

「それじゃあ……駄目なんだよ……」

とん。コヒナタはカノンを追い返すように両手を押し、2人から下がった。涙の筋が残っているその顔は、困ったように笑っていた。

「駄目なんだ。ぼくは笑っていないくちや駄目なんだ……」

壊れ掛けたお喋り人形のように、何度も同じ言葉をぶつぶつと繰り返す。

「あの頃のぼくのままじゃ、何も変えられないんだ……！ 泣いてばかりのぼくじゃ駄目なんだ！ それじゃあ幸せになてなれない！ 誰も愛してくれない！ 愛されない人間は、所詮愛されないままだ……だから、ぼくは、ぼくじゃない誰かにならなきゃ……あの頃のぼくのままじゃ、誰も愛してくれないんだ！ リュックも、小雨も、アルマも、ジュンも。いつだってぼくは笑っていた。笑わないくちや、価値なんか無い！ そんなこと、もうずっと前から知ってる！ 邪魔者扱いされるだけなんだ。笑って、笑って、いつも笑ってばかりいる人形みたいなぼくが、価値があるんだ！ 人形みたいな自分だけが必要とされるんだ！ だから、ぼくは、笑ってなくちやいけないんだ……いけないんだよ……」

笑いながら、泣く。泣きながら、笑う。

「嫌われたくない……好きになつて欲しい、好きでいて欲しい……愛して欲しい。だから、笑わないと。次はマッドさんに捨てられちゃうよあ……」

座り込んでいたカノンが立ち上がって、コヒナタはびくりと肩を震わせた。そして一歩下がる。

コヒナタの向かい側には、鏡。相手の向こうに、自分が見えた。

カノンはそれ以上近付こうとはせずに、そのままコヒナタへと話し掛ける。

「お母さんが死んだのは、お前の所為じゃないよ」  
カノンが放つ言葉に、目が見開かれる。  
「お前は何も悪くないよ、コヒナタ」

『ヒナタの所為よ!』

ごめんなさい。

『ヒナタが全部悪いのよ! あんたなんか居る所為で、アタシは……アタシは!』  
おかあさん、ごめんなさい。

叩かれても、殴られても、蹴られても、刺されても、折られても、首を絞められても。

何をされても良かった。

だから。

何をしてもいいから、ぼくを愛して欲しかった。  
ただそれだけだった。

「もう、いいよ」

コヒナタが、倒れるようにしゃがみこんだ。

「ぼくの負けで、いい。これ以上あなた達といると、ぼくは、笑えなくなる」

頭を抱えこむようにして座り込んだ所為で、コヒナタの表情は見えない。戸惑うカノンと朝飛を無視して、コヒナタは続ける。

「ぼくのうしろにある道を、真っ直ぐにいけば、上へと続く扉がある」

「コヒナタ……」

この部屋を抜け出せて嬉しいはずなのに、コヒナタのことが気が

かりで仕方なかった。カノンが心配そうに声をかけるが、それでもコヒナタは顔をあげなかった。

「コヒナタじゃ、ない。ぼくの名前はヒナタ・サルビア。それが、本当のぼくだよ……分かったらさっさと行ってよ。もう、二度と会いたくない」

「……分かった」

複雑そうな顔をして、カノンは言われた道を歩き出す。その後を追うようにして朝飛も歩き出す。

「お元気で……小雨さん」

朝飛が最後に発したそれは、彼等が出会った頃のヒナタの名前だった。

その人が現れたのは、カノン達が次へと続く扉を閉めると同時だった。

「コヒナタくん。こんな所で寝てると風邪引くわよー？」

「マツドさん……」

鏡に囲まれた世界の中で仰向けになっていたヒナタを覗き込むようにして、白衣の彼女はいた。

「その様子じゃ、負けちゃったわけね」

「違うよお。お腹が空いてねえ、力が出なかったんだよお。ぼく、本当はもつと強いもん」

いつものように、にへら、と笑った。違和感など何処にもなかった。有るはずがない。ヒナタはずっとこの表情を崩したことがなかった。

それでもマツドは追い打ちを掛ける。

「負けたんでしょ？」

「違うよお。ぼくは強いんだよお」

「負けたんでしょ」

「ち、ちがう、よお……ほんとほ、もつと、もつと……つ、強いも  
ん……」

「なーに泣いてんのよ。鼻水出てるわよ」

白衣の袖口をヒナタの顔にやって、ごしごしと乱暴に拭いた。

ヒナタはもう我慢がきかなくなったのか、年相応にしゃくりをあ  
げながら泣いた。

「うっ……ぼ、ぼく、負けちゃったよお……ひっ、く……ひう……」

コヒナタが笑っていない。こんなヒナタを見るのは、初めてだっ  
た。

そして彼女は思い出す。笑ってばかりのこの子供と、初めてあつ  
た日のことを。

\*

『どうしたのー、こんなところで寝そべって』

『……だれですかあ、おねいさん』

『私？ 私はミスティアス・マッド、ミス・マッドよ』

『……あはは、変な名前え……』

『だって本名じゃないしー』

『……ほんとうはあ……なんて言うのぉ？』

『教えてあげるから、取りあえず立ちなさいよー。何か食べないと、  
あんた栄養失調で死んじゃうわよー』

『ぼく、死んじゃうのかあ……』

『そうよー。ホラ、早く立ちなさい』

『おねいさん、ぼくをどうするのぉ』

『安心しなさいよ。別に取って食ったりなんかしないわよ。私の好

みはあんたみたいなお子様じゃないわけー。とりあえず、私の家で美味しいモノ食べさせてあげるわ。あんた、なんて名前？」

『ぼくう……？ 色んな名前があるよお』

『あらそう。じゃあ、今のあんたはどれなの？』

『……コヒナタかなあ。本名から取ったんだあ』

『じゃあコヒナタくんって呼ぶわー。よっこらせつと。落ちないよ  
うに、しっかり掴まりなさいよー』

『えへへ……ぼく、おんぶされるの初めてだあ……重くない？ お  
ねいさん』

『ぜーんぜん重くないわよ。コヒナタくん、もつとしっかり食べな  
さいよー？ 私、元医者だからそのへん厳しいわよー？』

『……えへへ……じゃあ、おねいさん、いまは何をしてる人なのお……  
？』

『聞いてびっくり、指名手配犯よー』

『……すごいなあ』

\*

それから、ずっと一緒にいた。母親を早くに失った所為か、ヒナ  
タは自分を母のように慕っていた。

マッドはまだ泣きじゃくるコヒナタを見て、少しだけ自分も泣き  
そうになった。

「はいはい、男の子なら泣かないの。ホラ、さっさと立つ」

寝そべっているヒナタの両腕を持って、無理矢理絨毯の上に立た  
せる。最初はふらついたが、すぐに持ち直した。

「ぼく、ぼく……負けちゃったよお。あん、な……裏町なんか、負けち  
やって……こ、こんな弱い奴、マッドさんはいららないでしょお……

…い、いらないよねえ…?」

「コヒナタくん」

「こ、これじゃあ用心棒にならない、もん、ねえ……あは、あはははっ……マッドさんと、一緒に居られて、ぼく、すごく楽しかったんだあ……でも、もういいよお…弱いぼくなんて…価値が無いもん……あははっ……」

用心棒。それは、ヒナタが彼女にした約束だった。

\*

『マッドさんは指名手配犯なんだよねえ?』

『そうよー』

『じゃあさ、ぼくがマッドさんのボディガードになってあげるよ』

『お!』

『はあ? ボディガード?』

『そうだよお。いわゆる用心棒う!』

『なんであんたが用心棒になるわけ?』

『あのねえ、マッドさんをつままえようとする人達を、ぼくが追っ払ってあげるよお。ぼく、こつ見えても強いからねえ』

『ふむふむ。それで?』

『だからねえ、ぼく、マッドさんと一緒に居てもいいかなあ?』

『それは別にいいけど、それじゃあコヒナタくん、共犯者になるわよー?』

『なるねえ』

『なるねえってあんた…』

『でも、マッドさんの美味しいご飯が食べられるなら、ぼくそれが

いいなあ』

『……そうね。あんた、放って置いたら、また行き倒れになりそうだもんねー』

『やったあ、きつまりい！ ぼく、もっと強くなるからねえ。楽しみにしててねえ！』

『頼むわよ』

\*

「……私が、いつ、あんたを捨てるって言ったのよー」

怒っているはずなのに、声が震えていた。

「……えへへ……なんでえ、ま、マッドさんが……泣いてるのぉ……？」

首を傾げるヒナタと一緒に、泣いている自分が鏡に映っていた。

マッドは慌てて白衣の袖でぬぐうと、今度はさっきよりも幾分かしかりした声で話せた。

「泣いてなんかないわよ。あんたじゃあるまいし」

「マッドさん、泣かないですよ……ぼく、また悲しくなってきたよ  
お」

じわりと涙が滲んでくるヒナタの頭に手を置いて、ぼんぼんと撫でるようにした。

「コヒナタくん……あんた、私の用心棒なんですよー？ しっかりしなさいよ」

「うん」

「だから、あんたはいつま経ってもオトボケ探偵のままなのよー……  
そんなんじゃない名探偵になんてなれないわよ」

「うん」

ぼん。マッドが、手を止める。ヒナタの首が傾げられた。

「ヒナタ」

「うん？」

「帰ろっか。アリスちゃんの言うとおりに出来なかったから、私達はクビよ。だから、私達も帰ろう？」

ヒナタの両手を包むように、マッドの手が重ねられる。ヒナタもその手を握り返した。

「……真理子おねいさん」

「なあに？」

「ぼく、もつと頑張るねえ」

嬉しそうに、笑う。笑顔に感情が籠もっていた。

「そうね」

「もつともつと強くなって、真理子おねいさんと、ずうっと一緒にいられるように、頑張るからねえ」

ヒナタとは反対の方向を向いて、背を差し出す。

「そうね。ホラ、落ちないように、しっかり掴まりなさいよ」

「えへへ……ぼく、おんぶされるの2回目だあ……重くない？ 真理子おねいさん……」

「ぜんぜん、重くないわよー」

「家に帰ったらさあ……また美味しいご飯、作ってねえ……」

「そうね。いっぱい作るから、いっぱい食べるのよ？」

「うん」

そして、もう一つの扉が閉じられた。



神様、ぼくはもう、許してもらえますか。

91・アリスの孤城 【母と息子】（後書き）

ぼくはいま、幸せです。

## 92・アリスの孤城 【壊す人形、壊れる人形】

この滑稽な歌劇も、もうすぐ終演。

大切な物を無くした、あの人形の終焉とともに。

\*

はぁ、と溜息を吐く音が聞こえた。吐いた張本人であるフィンは、自分の目の前で眠りこける十九歳達を見て、そしてまた溜息を吐いた。

ここは1階のミス・マツドの部屋、朝葉香が眠っていた場所だ。朝飛にまんまと言いくるめられて、フィンはレオラを背負い、ここまで運んできた。引きずってきたと言ってもいい。

「本当、よく眠る人達だ」

ぼそりと言つて壁にもたれ掛かり、天井を見上げる。自分の家以外の天井を見るのは久しぶりだった。

そもそも、滅多に外に出ないのだ。家に閉じこもってばかりで、つい最近にも調達屋の少女に指摘されたところだった。なのに、その自分がこんな所まで出てきている。そして、外すことの無かったコートフードまで、すっかり取り払ってしまっている。それがフィンには不思議でならなかった。

「キリユウ達は大丈夫かな……」

言つて、自分で自分の言動に驚いた。

「このボクが、他人の心配をするとはね」

「他人は他人でも、ただの他人じゃねーだろ」

前を向けば、そこには眠りから覚めたレオラがこちらを見ていた。

両腕を上へと伸ばし、体をほぐしている。

「……それは新しい謎かけかい？ レオラリアナ」

「だとすれば、こんなにも簡単な謎はありませんわ」

次は、凜とした涼やかな声が聞こえた。声の主は体を起こし、右手で着物の埃を取り払っている。

「…香葉月」

「…ま…と…」

「え？」

ポツリと漏らすように朝葉香が何かを呟いた。うまく聞き取れず、フィンが聞き返す。

「まんまとやられてしまいましたわ。まさかこのわたくしが、薬を盛られるとは……香葉月朝葉香、一生の不覚！ お祖母様に会わせる顔がありませんわ！ どうしてくれましょう、あの雌狐！ 次に会ったときは必ずやわたくしが」

暴言を吐きながら、床へと何度も拳をぶつける朝葉香と、それを精一杯止めるレオラとを交互に見て、フィンは今日何度目になるかわからない溜息を吐いた。この2人には付き合っていられない。

「落ち着け！ 落ち着けてコウヨウツキ！ 大丈夫、オレもミス・マッドに眠らされたし！」

「そのどこが大丈夫なんですの！？ 馬鹿な貴方と一緒にしてほしくありませんわ、始末屋！ それにこうしている間にも、カノンは独りで……」

そこまで言つて、2人ははっとしてフィンへと振り返る。

「そうだ、フィン。ここは一体何処なんだ？」

「アリスの屋敷の1階。香葉月が眠っていた場所だよ」

「ここにアサヒがいねーってことは、カノンの後を追いかけたんだな？」

「そうだよ。キミに手刀をくらわせた後、すぐに走っていった」

「そこまで聞いて、2人は頷きあう。自分たちも上へ行かなくてはいけない。カノンの後を追わなくては。」

最初に朝葉香が立ち上がり、フィンを見据えた。

「では、わたくしたちは上へと行くことにしますわ」

「どうして？」

「心配だからだよ。それに、カノンと約束もした。後を追うって」

いくら傷の手当てをしたとは言え、所詮応急処置。レオラの足取りはふらついていた。朝葉香もそれが気になったようだが、2人は歩みを止めない。

「心配しなくとも、ソリティアにはキリユウがついている。レオラリアナはまだ本調子じゃないだろう？」

それでも耳を貸さない。2人はどうしても上へ行く気らしい。フィンが引き留める言葉を選んでいる内にも、2人は出ていってしまっそうだ。

朝葉香がドアノブに手を掛けたところで、やっと言葉が見つかった。

「心配することも大切だけど、信じて待つことも大切だよ。仲間ってそういうものだろう？」

朝葉香が伸ばしていた手を戻し、驚いてフィンの方を見る。彼はまだ続ける。

「それにボクはキリユウからキミたちのことを頼まれてるんだ。ボクだって2人のことは心配だけど、頼まれた以上は……」

フィンが全てを言い終わるまえに、レオラも立ち止まった。立ち止まって、彼を振り返る。フィンがほっとしていると、レオラは言った。

「お前の口から、そんな言葉が出るとは思わなかった」

にか、と笑ったレオラとは反対に、フィンの表情が固まった。それからすぐに、視線が泳ぐ。珍しいことだった。

「それは…なんというか…その…」

言葉が定まらないフィンを見て、レオラの隣にいた朝葉香も口角を上げた。優しい笑みだった。

「決まりですわね。情報屋、貴方も一緒に行きましょう。わたくしたちは上へ行きたい。貴方はわたくしたちの面倒を見なければならぬ。そして、3人ともカノン達が心配…丁度いいじゃないですか」

「ボクは行きたいだなんて言っ…」

「いいじゃないじゃん。よっし、3人でカノン達を迎えに行くか」  
もう決定事項だとも言いたげな2人のそんな態度に何も反論出来ないまま、フィンはムツとする。

「ああもう、すごく不愉快だ」

そういつて彼は目深にフードを被った。そのフードの下で、彼がどんな顔をしたかは誰にも分からなかった。

\*\*\*\*\*

アリスはよく分からない。シオンは漠然と思った。自分の眼前で、フランと呼ぶ人形に話し掛ける彼女を見て、そう思った。

「ニンジン、食ベタイナ！ フランハ、ニンジンガ 世界デ一番好

キナンダ!」

「くすくす……フランはいつも二ンジンの話ばかり。ねえシオン」  
「……………」

「あら、また沈黙ごっこ？ アリス、その遊びには飽きたわ」

「きゃはは、と何が楽しいのか分からないが彼女はよく笑う。シオンには、それが一番理解出来なかった。たくさんの人形に囲まれて、一人で遊んで、彼女は笑う。」

「君は一体、何がしたいの？」

シオンが話し掛けてきたことが嬉しかったのか、アリスはフランのスイッチを切って、わざわざ彼に向かい合う形になって座った。

「アリスがしたいことを知りたいの？ きゃはは、だから言ってるじゃない。大切なモノを探してるって。アリスは人形だから、大切なモノを持ってないの」

「だからって、他の人から奪ったものを自分の大切なモノにするの？ おかしいよ。大切なモノは、人によってバラバラだ」

「それが何だって良いの。アリスは、『大切なモノ』が欲しいの」

シオンは、立ち上がった。アリスはそんなシオンを少しだけ不安げに見上げる。フランを抱える両手に、力が籠もる。

「どうしたの？ シオン、凄く怖い顔よ」

「帰る」

「駄目よ。そんなことをしたら、アリス、あなたのお姉さんを壊すから。絶対に駄目よ、帰るなんて。シオンはアリスの大切なモノになったの」

アリスは慌てて立ち上がり、シオンの右腕を掴んだ。その代わりにフランが落ちた。

「姉さんは、僕を救ってくれた恩人で、僕の一番大切な人だ」

シオンが一言一言、確かめるように言う。アリスは途端に笑顔になつた。

「でしょう？ じゃああなたはここに居るべきよ。あなたがここを離れない限り、アリスはあなたのお姉さんを傷つけたりしないわ」

「最初は、そう思った。僕がここにさえ居れば、姉さんは安全だつて。だけど僕は欲張りだから、姉さんの傍に居たい。だから帰るんだ」

「いやよ！ アリスの大切なモノはシオンになったの！ 帰っちゃったら、絶対にあの人を殺してやるわ！」

シオンの右腕を握る両手に、自然と力が入る。何処にも逃がさない。そう言っているようだった。

「なら、僕が姉さんを守ればいい。それだけだ。こうしてる間にも、他の三人が姉さん達を襲ってるかもしれない。だから、僕はもう行くよ」

「シ、シオン……！」

「もう誰かが助けしてくれるのを待っているだけじゃ、いけないんだ」  
ぱし。

アリスの白い腕が、シオンによって払われた。二人を繋ぐものが、完全に無くなった。

「さよならだよ、アリス」

「いや……いやよ、駄目、駄目なんだから！ そんなことしないでよ！ アリス、また何も無くなっちゃう！ また大切なモノを探さなきゃいけないわ！」

取り乱したアリスが、手にした物は。

「一緒に居てくれないなら、もういらない！ シオンを壊して、あの人も壊して、全部壊すんだから！」

クウヤの時と同じ、あのナイフ。シオンは咄嗟に判断する。

逃げるか？ 避けるか？ 戦うか？

逃げられるのか？ 避けられるのか？ 戦えるのか？

「それでも僕は、姉さんの所に帰りたいんだ」

一瞬、アリスが泣いたように見えた。目の錯覚かも知れない。アリスは凍えているかのようにその両手を震わせ、口は酸素を取り込



むように何度も何度も浅い呼吸をしている。

フランは下に落とされたままだ。

「どうせ、迎えになんて来ないわよ……あなたのお姉さんは、ミス・マッドかコヒナタかクロックにやられているに違いないわ。今から行っただって、遅いのよ」

「そうかもしれない。だけど、そんな風に色んなことを考えるよりも、姉さんを信じているほうが良い。姉さんは、きっと大丈夫だ」

「そのとおり」

不敵な声が聞こえる。シオンが振り返った先に見えたのは、ずっと会いたかった姉。

「おまたせ、シオン。迎えに来たよ」

街外れの便利屋が、そこに居た。

\*

終わり方を決めるのは、ぼくら。

92・アリスの孤城 【壊す人形、壊れる人形】（後書き）

強気に笑う、その人は。

### 93・アリスの孤城 【大切なもの】

空っぽだったから、何かで埋め合わせたかった。  
人形の願いは、ただそれだけだった。

\*

開かれた扉。そこから入ってきた二人の人間を見て、アリスは力無く首を横にふるふると振った。

「嘘よ……どうして貴女達がここに居るの？ クロックもミス・マッドもコヒナタも、一体何をやってるのよ？」

そうは言ってみるものの、彼女の中では既に答えは出ていた。

三人共、負けたのだ。目の前に立つこの便利屋と、その仲間達によつて。

自分はまた、一人になってしまったのだ。

「もうお終いだ、アリス。シオンを返してもらおうぞ」

「香葉月さんの家宝と、妹さんの形見もですよ」

朝飛の声が、カノンの後ろから聞こえる。彼女よりも一歩遅れて、朝飛もアリスのいるこの部屋へと入った。

「姉さん！」

アリスから、いとも容易くシオンは離れていく。アリスの大切な

モノになるはずだった、シオンが。

彼の走っていく先は、見なくとも分かる。アリスは呆然とその光景を見ていた。自分の持つていないものを、簡単に手にする取り戻してしまった、カノンを。

「だ、め……」

アリスは首を振る。そして、右手のナイフを握りしめる。しつかりとした感触がそこにはあった。けどこれはアリスの『大切なモノ』ではない。アリスが欲しかった物ではない。

さっきまで繋ぎ止めていた、あの腕。あれではないといけない。

「……駄目よ！ シオンはアリスのモノなのよ！ どうしてそっちに行くの！？」

カノンの目の前までやってきていたシオンが、叫ぶアリスの方を向く。

「僕は君の大切なものじゃない。違うんだよ」

「違わない！ 嫌よ、アリスから離れていったら許さない！ こっちに戻ってこないと、あなたの大切なモノを壊すから！ あなたの姉を、カノン・ソリティアを殺すから！」

脅しと変わらないその台詞を聞いてカノンはアリスの方へと歩き出す。が、それはシオンの腕によって阻まれる。

「……シオン？」

「僕はもう守ってもらうだけは嫌なんだ。大切なものは、自分で守らなきゃいけない。アリス、君が姉さんを傷付けたら、僕が必ず、君を殺す」

「ごす、と鈍い音が聞こえた。朝飛が表情に出ない程度に、少し驚いていた。

「殺すとか、簡単に言っちゃいけません」

「……ごめんなさい」

頭を押さえ、涙目になりながらシオンが謝った。口に出す前に手を出す姉の癖は、きつと治らない。

不満そうに唇を尖らせる弟の頭をくしゃくしゃと撫でて、カノンはアリスへ声を掛ける。

「と、いうわけだ。後はお前の後ろにある、それ。それも返してもらう」

カノンの言う、アリスの後ろにある物達。たくさん裏町業者達から目の前の少女と、その仲間達が奪い取ってきた『大切なモノ』。どうやら粗末な扱い方はされていないらしく、綺麗に保存されている。

「全部返すわ……返すから、シオンをちょうだい。ねえ、シオンと交換してよ……！ アリスも欲しいの。大切なモノが欲しいの！」  
シオンを通り越して、カノンの服を掴む。必死になって懇願してくるアリスに、カノンは言葉を返せなかった。

朝飛も朝飛で、アリスに何を言えばいいか分からなかった。何かを欲しがるという行動が、朝飛には分からなかった。彼も、彼の弟も、何かを欲することがなかった。

沈黙が沈黙を呼ぶ。朝飛は目の前の三人を凝視していた。

その所為で、彼の横を誰かが駆け抜けたことに気が付かなかった。

「カーノーンッ！」

「うおっ！？」

突然何者かに背後から飛びつかれて、カノンはバランスを崩す。それと同時に、アリスも手を離す。蹠踵けながら振り向くと、そこには見知った顔があった。

「レオラ……？」

「おっす。約束、守ったぞ」

右手で指切りの形を作って、赤眼の彼は笑った。それにつられてカノンも笑った。

「ちよつと遅いんじゃないの？」

「酷いな。これでもボクにしてみれば全速力だったよ」

気が付けば、扉の近くにいる朝飛の隣には、黒髪が二人。フィンと朝葉香がいた。

「わたくしも約束を守りましたわよ」

これで部屋の中は一对三から一对六になった。どう足掻いても、アリスに為す術は無い。

カノンから離れたアリスは、その後ろにいるレオラへと眼を向けていた。

「……アゲハ……」

ぼつりと、呟く。殺人鬼一家の末っ子だった彼ですら、便利屋の彼女の元へと集う。

自分と同じ血が流れているというのに。

「……どうして？　なんで、アリスにだけ大切なモノが無いの？

アリスはただ、みんなの持つてるそれが欲しいだけなのに……どうして？」

答えの出ない質問は、まだ続く。

「……なんで、アリスばかり悪いの？　アリスがパパとママを壊したから？　どうして裏町業は悪くないの？　同じ様なこと、してるじゃない」

朝葉香も言っていた。裏町業は、犯罪者と変わらないことをしてるんじゃないかと。

空夜は違うと言った。だけど、理由が見つからなかった。レオラは、答えなかった。

カノンはその問いに、迷いもせずに答える。

「同じだろうな。きっと、他の人から見ればそう見えると思うよ。

だけど、違うようにも見ええると思う。見え方なんて、人それぞれだ」

「それじゃあ、答えにならないわ……」

「ああ。答えなんて幾らでもあるさ。おれは、おれの思ったようにするだけだ。これがおれの答えだ」

カノンは迷いもせずに、答えた。

アリスが困惑したように彼女を見る。アリスには、答えが見つか

らない。

「分からない…分からないよ。アリスが人形だから？」

「違うだろ」

アリスとは別の声が響いた。

「お前は人形じゃない。人間だ」

「ううん。アリスは人形なの。あなたは知らないかもしれないけど、人形なの」

カノンはもう一度同じことを言う。

「お前は人間だよ。おれと同じ、人間」

「人間なんかじゃない……！」

アリスの持っていたナイフが、音も立てずに絨毯の上へと落ちた。「アリスは人間なんかじゃない！ 人形なの！ パパとママは人形を作るのが上手だったから、アリスも二人に作られたの。そうに違いないわ。だって、二人は人形が大好きなんだもん！ いつもいつもいつも人形の話ばかり！ 今度はあれを作ろう、これを作ろう……全然アリスのことなんて見てなかった！ パパとママが好きなのはいつだって人形だった！ みんなみんな、人形なの！ アリスは二人が大嫌いだった。コンテストが終わるまでの我慢だって思ってたけど、結局同じだった！」

悲痛な叫びが、木霊する。

「だから壊してやったのよ。全部全部全部、壊したのよ！ バラバラにして、分解して、作り直そうと思ったのよ！ アリスを見てくれるように、作り直そうと思ったの。なのに、パパもママも動かなくなっちゃったの！ あの日から、アリスは、空っぽなの！」

言い終えたアリスは、力を失ったように膝を床へ付いた。ぶつぶつと、壊れたように何かを呟いていた。

誰も何も言わない。きつと、何も言える言葉は無い。カノンはそう思った。

「ただ、声がした。」

「二人のことが、大好きだったんでしょ？」

「世外れの都合屋と、似た声。朝飛がアリスに向かって言った。」

「大好きで大好きで、なのに自分を見てくれなくって、悲しかったんでしょ？ 二人のことが、大切だったんでしょ？ だから、

二人を殺してしまった今、大切なモノが見つからない」

アリスの表情は、見えない。床へと視線を向けたまま、彼女が返事をする。

「そう…見つからないの…アリスはあの日から、ずっと一人なの。それが嫌で、仲間を探したの…マッドとコヒナタとクロツク。なのに、また一人になっちゃった」

それは嘲笑ともとれる笑みだった。だがその表情は誰にも見えない。項垂れたままの自分を、彼等はどんな目で見ているのだろう。何度も何度も一人になる、滑稽な自分を。

「本当に、一人なのか？」

レオラの声に、アリスは項垂れていた顔を上げる。銀色のウェーブの掛かった髪がさらさらと動く。

彼女のレオラよりも少し茶味掛かった赤い眼が、大きく開かれた。

「クロツク……」

この部屋に居る誰よりも大きな男が、アリスの前までやってきた。そして、彼女をカノン達から隠すように　そう、庇うように立った。

「すまないが、俺達のことを見逃してはくれないか？」

シオンもレオラも朝飛もフィンも朝葉香も、カノンを見る。

「負けた分際で、こんなことを頼むのは卑怯なことだと分かっている。だが……」



ふ、とカノンが笑った。

「見逃すも何も、おれ達はあるたらを捕まえるつもりなんてねーよ。そういうのは、警察軍の仕事だ。裏町業の、少なくとも便利屋であるおれの仕事じゃ無い」

そして彼女はレオラの方をちらりと見る。

「……あー…オレもそんなつもり無えよ。そんな依頼、誰からも受けてねーからな」

その言葉に続いて、朝葉香も了承する。

「カノンがそう言うのなら、仕方ありませんわ」

「そんな面倒なこと、ボクはすすんでやろうとは思わないね」

フィンも同意する。

だが朝飛だけは違った答えだった。

「いくらなんでも、それは無理です」

全員の目が朝飛に向けられた。その視線を気にもとめずに朝飛は続ける。

「弟が、怪我を負わされました」

静かに言葉が紡がれる。

「ミステリアス・マッドさんから教えていただきました。あの毒は、死なない毒だと」

死なない毒。彼女の新作であったあの毒は、時間さえ経てば平常に戻るのだと、彼女自身から聞いていた。

その事実を知らなかった人を代表してレオラが朝葉香へと真偽を問う。

「そうなのか？」

「ええ。わたくしにもそう言っていましたわ。解毒剤のいらない毒だ、と」

だから、もういいだろう。そう言いたげに朝葉香が朝飛を見る。それでも彼は喋り続ける。

「だけど、弟の苦しみは半端無かったはずですよ。それなのに、黙って見逃せとか、許せというのは都合が良すぎるんじゃないんですか？ 家族を傷つけられて、なんとも思わない人はいません」  
全てを言い終えて、朝飛が前へと出る。クロツクがアリスの前に立ちはだかつていた。

ぱん

小気味良い音が反響した。朝飛を除く、部屋にいた全ての人間が驚いた。

「これで、おあいこですよ」

ニコリとも、ニヤリとも言い難い笑顔で朝飛は言う。

彼の目の前には、頬に平手打ちを喰らったクロツクが居た。

「……なかなか、痛いものだな。初めて殴られた」

「本気を出した時の僕は、まだまだこんなもんじゃありませんよ」

「本気じゃなかったのか」

「今度こんなことしたら、次はグーで殴りますよ。すっごく痛いっ

て仲間内から大評判ですよ」

右手で拳を作って、クロツクの目の前へと突き出す。それを見て、苦笑気味にクロツクが返す。

「そうか……怖いな」

「ええ。ですから、もうこんなことはしないで約束してください」

「ああ」

約束。その返事を聞いて、朝飛は綺麗に笑った。

全てが終わった。

アリスの部屋には、元のように人形だけで埋め尽くされていた。もう他人から奪い取った『大切なモノ』は無い。残らず全て、カノン達が持って帰った。シオンも含めて。

クロックは、アリスの決断を待っていた。

彼はアリスの従者。これからどうするのは、アリスが決めること。

「アリス」

「……………」

「アリス。これから、どうする？」

朝飛と悪事はしないと約束した。ならば選択できる道は二つ。警察軍へと向かうか、このまま逃げ続けるか。

「そうね……………どうしましょうか」

アリスは、初めて彼に微笑んだ。

いや、笑うことはよくあった。自分を騙すかのように、無理矢理笑う彼女なら何度も見ていた。だけど、目の前の笑顔は、彼が初めて見る笑顔だった。

「アリスね、考えてみたの」

クロックに言う。

「間違ったままかもしれないけれど、世界の道から外れたままかもしれないけれど、アリスは、アリスの思う様にしようって。だから、

警察軍には行かない」

「そうか」

「でも、ちゃんと償う」

「そうか」

「それでいいよね？」

「アリスがそれで良いと思うなら、それで良いのだろう」

「だから、」

少しだけ寂しそうに。

「クロツクも、クロツクの思うようにしてね」

クロツクは不敵に微笑む。

「なら、しばらくアリスについていこう。アリスがちゃんとやっていけるか、不安だしな」

アリスはそんなクロツクに抱きついて、何度も「ありがとう」を繰り返した。

そして気付いた。彼は、大切な人だと。

「屋敷を、出ましょう」

「ああ」

誰にも知られないうちに、出よう。そう決めた。

アリスはたくさんある人形のうち、黒いフランを手に取る。そして、他に持っていくモノは無いか辺りを見回す。持っていくのは、必要最低限の物だけで良い。どこにいくかも、どうなるかも分からないから。

そこでアリスの視線が止まった。

「あれも、持っていかなきゃ」

それは数え切れないくらいにある人形達の、一番上に置かれた新しいフラン。アリスが両親を殺した日、キッチンに置かれていた新しい桃色のフラン。

アリスがそれに手を伸ばして、スイッチが入ってしまった。

「あ」

『ボクハ フラン！ キミノ名前ハ？』

「くすくす……同じことを言ってるわ。アリスよ。アリスって言うの」

『アリス？ アリス！ アリス二 言イタイコトガアルンダ！』

「……なあに？」

初めて聞くフランの台詞に、アリスは戸惑いながらも答えた。

『今日は十歳の誕生日だね。おめでとう、アリス』

懐かしい声だった。

『パパもママもお仕事が忙しくて、寂しい思いをさせてしまっているね。ごめんね。だけどパパもママもアリスのことが大好きだよ』

「パパ、ママ……」

『アリスのことが、世界で一番大切だよ』

音声が、途切れた。アリスは新しいフランのスイッチを切って、それを抱きしめた。

「ごめんね」

きつくきつく、抱きしめた。

桃色のフランの足裏には『F o r A l i c e』と刺繍が施されている。

「ごめんね……ごめんね……」

三度目の謝罪を終えて、アリスは呟いた。

「ありがとう……」

もう、空っぽなんかじゃない。

93・アリスの孤城 【大切なもの】（後書き）

そして孤城には、誰もいなくなつた。

## 94・アリスの孤城 【幸せな終わり方】

ねえ、教えて。

幸せな終わり方。

\*

真つ暗で、だだっ広い場所にクウヤはいた。床も壁も天井も、何も分からない。とにかく広がった。果てが見えない空間だった。

何故ここにいるのだろう。少し考えてみたが、すぐに答えが出そうになかったので、考えることは止めた。

しばらくは何もせずに立ち尽くしていたクウヤだったが、とりあえず歩くことにした。どっちの方向へ行けばいいかなんて分からない。適当に決めた方向へと歩く。間違っていたなら、引き返せばいい。クウヤは後ろを振り向きもせずに歩きだした。

五分くらい歩いた頃、改めて辺りを見回してみたが、何処にも変わったようなことなんて無かった。とにかく暗い。

いや、クウヤ自身がハッキリと見えているところを見ると、もしかするとこの空間は黒いのかも知れない。

一寸たりとも変わらない景色の中を、クウヤは歩いた。

歩いて歩いて歩いて、歩き疲れた頃に、それは目に入った。



「……なんだあれ……？」

クウヤは首を傾げる。彼の見る先には、乱雑にたくさんの本が積みまわっていた。図鑑大の大きさの物から、クウヤがよく読む文庫本サイズまで、種類は豊富にあった。

やっと今までとは違う風景に出会えたのだ。何もしていないつもりはない。

「……分厚いなあ」

クウヤは積みまわっている一番上の一冊を手に取り、一枚一枚を丁寧に捲ってみる。しかし、どれだけ捲っても文字が見つかることはなかった。かと言って、絵があるわけでも無い。どのページも、この部屋とは対照的な程に真っ白だった。

その作業に飽きたクウヤは、次の本に手を伸ばす。装丁は異なっているものの、中身はさつきと全く同じだった。

そしてまた次の本。次へ、次へ、次へ。

「……これで、最後か」

たくさんに積みまわっていたはずの本の山は、とうとう最後の一冊になっっていた。この一冊になるまでに手に取ったどの本も、全て真っ白の中身だった。

ここまで来たなら、全部見てやろう。クウヤは絵本に似た形の本の本を手に取り、今までよりもずっと丁寧にページを捲っていった。

一枚目。

「これも、真っ白か」

二枚目。

「……真っ白……」

三枚目。

「……白……」

四枚目。

「……これも……」

五枚目。

「…………」

そして最後のページ。

「あ」

栞代わりに使われていたのだろうか、何か紙切れのようなものが挟まれていた。

「写真？」

手に取ってみると、それは写真だった。大人と子供、合わせて四人の人間。そのうちの三人の顔は、ぼやけてよく見えなかった。

だけど、薄茶色の髪をした女の人だけは、何故かくっきりと映っていた。長くて、真っ直ぐな髪だった。

「……っと」

掌から、はらりと写真が落ちる。クウヤが拾おうと手を伸ばすと、それは灰のように消えた。黒い地面には、何も残らなかった。

それどころか、先程まで置いてあった大量の本達も、クウヤが左手に持っていた絵本も全部消えていた。

悲しかった。どうしようもなく、悲しかった。

どうすればいいのか分からない。本が無くなったことが悲しいのか、写真が消えてしまったことが悲しいのか、出口が見つからないことが悲しいのか。

クウヤは呆然と立ち尽くしていた。この気持ちをどうすればいいのか、見当がつかなかった。

「どうしたの？」

高い。けれど、耳障りではなく、むしろ心地よい声が聞こえた。

クウヤの隣まで来ていたその人は、柔らかく微笑んだ。

「どこか痛い？」

女の人が、クウヤの頭を撫でる。懐かしい感覚だった。

「分からない……けど」

「けど？」

「すごく、悲しい……」

気を抜いてしまえば、泣いてしまいそうなほどに。少し俯いたク

ウヤに、女の人は優しく声をかける。

「そう。でも大丈夫よ」

「大丈夫？」

「　　がいるから、大丈夫よ」

「え？」

最初の方の台詞が、うまく聞き取れなかった。クウヤは聞き返したが、その人はそんなこと一つも気にせずに、戸惑う彼の右手を取った。

「それじゃあ、行きましようか」

「行くつて……どこへ？」

ここに光があつたなら、きっと金色のように見えるのだろうなと思うほど綺麗な薄茶色の髪を靡かせて、その人はクウヤを引っ張っていく。

「ねえ、何処へ行くの？」

「元の場所へ、帰るのよ」

「元の場所？」

クウヤは右手を引っ張られたまま、辺りを見る。どれだけ進もうと退がるうと、そこは深い闇。元の場所が一体どこだったかなんて、クウヤ自身にも分からないことだった。

「ねえ、元の場所つて言つてもさ、どこも同じだよ？」

「見えてきたわ」

クウヤの言い分などまるつきり無視して、その人はクウヤを握っている手とは反対の方で前を指した。そこにはごぢんまりとした扉があつた。

「ど、ドア？」

黒ばかりの世界では、その扉はとてつもなく目立っていた。

「ええ。あのドアの向こうに戻るのよ」

何処かの誰かに似たような笑みを見せて、女の人はクウヤの手を離す。ほぼ無理矢理に引っ張つてこられた筈なのに、手を離されると少し寂しかった。

「……さあ、行きなさい」

ドアノブへと手を伸ばしたクウヤに、その人は言う。

「あなたは、行かないの？」

てつきり一緒に行くものだと思っていたクウヤは驚いた。それから、不安になる。このドアの向こう側へ、一人で行かなければならないことが。

表情が暗くなっていくクウヤを見て、向かいの人は優しく微笑んだ。

「ごめんね。本当は一緒に行つてあげたいんだけど、行けないの。ここから先にはね、空夜だけで行くのよ」

どうしても、行かなければならぬらしい。諦めたクウヤは、目の前のドアノブを捻る。どうせここに居ても、同じ景色が続くだけならば少しでも違う場所へ行つてみた方が良い。

ドアの先は太陽がそこにあるように眩しかった。

「それじゃあ、元気で」

光が反射して眩しすぎるほどに白い地面を踏み込む。

そこで、クウヤは全部思い出した。あの写真、後ろにいる女の人の握った手、優しい笑顔、薄茶色の髪の毛。

はつと振り返る。その人は口元に人差し指を当てて、まるで悪戯を終えた子供みたいに、満足げに笑っていた。

\*\*\*\*\*

「……まぶしい……」

薄く目蓋を開けると、見慣れない天井があった。クウヤの家とは違う、真っ白な天井。

首だけを左右に動かしてみると、水差しが置かれた台、簡素な椅子、白いシートが見えた。そこまで見て、クウヤはやっとここが病院だということに気が付いた。

最後に見たのは、駆け付けてきたレオラだった。ということは、レオラが自分を病院に運んだのだろう。

あまり上手く回らない思考をフルに稼働させて、クウヤは自分が生きていることに素直に驚いた。

「よっ……と……身体、重いなあ」

ギシ、とベッドのスプリングを軋ませて、クウヤは上半身を起こした。どれくらい眠っていたのかは分からないが、相当の時間だったはずだ。ずっと動かしていなかったからか、それとも毒の所為か、身体がいつもより重かった。

「ん？」

視線を何気なく真っ白な掛け布団の上へと移して、

「っ！？」

驚愕した。あまりにも驚きすぎて、両肩が威嚇する猫のようになっている。

「……スー……スー……」

居るはずの無い兄が、居た。いや、居たと言うよりは、寝ていた。先程見かけた簡素な椅子に座ったまま、上半身は布団の上へと伸び、すっかり眠りこけていた。

「人の上で、よくもまあスヤスヤと……なんかムカツク」

身体が重いのは、この兄の所為だった。クウヤは気持ちよさそうに眠る目の前の人物を睨み付けるように見た。

「……く……や……大丈夫だよ」

起きたのかと思った。自分に向けられたその寝言を聞いて、クウ

「ヤは起こそうと思つて伸ばしていた両手を引つ込めた。きつと、自分のことを心配してくれていたのだらう。仕方ない。いまは寝かせてあげよう。」

「えいやっ！」

……なんて、クウヤが思うはずもなかった。

ズビシツと音が付くくらいに勢いよく振り翳された掌は、見事に朝飛の頭の上へとチョップをかました。

「なっ、なに！？ 敵襲！？」

一気に夢の国から引き戻される朝飛。目を丸くして、あたふたと周りを見る。そんな朝飛に向かって、クウヤは一言言った。

「おはよ、兄さん」

声のした方へ、ゆっくりと首を動かす。

「……………うや？」

見開かれた眼が徐々に揺らぐ。留めておくことが出来なくなつて、すぐに落ちた。

「え……………に、兄さん？」

「よ、よかつたあ……………空夜が起きたあ……………」

「え！？ ちよっ、なんで泣くの！？」

少しずつ騒がしくなる病室。

その部屋の一番端の窓から、一羽のカラスが飛び立った。

「アンダーグラウンドが、目を覚ましたようだよ」

サスケを頭に乗せて、フィンがどうでもよさげに言った。彼が居るのは、クウヤのいる病院の屋上。

「そーか」

落ちないようにと取り付けられた柵の上に座って、レオラが返した。

「やっと一件落着だな。なあカノン」

「本当にな。つたく、寝過ぎなんだよアイツ」

レオラの左隣にいるカノンは、柵にもたれかかって、中庭を見ていた。

「やれやれですわ」

いまは冬だから利用者が居ないが、春にはたくさんの方がここを訪れるのだろつ。そのために用意されたベンチへと座って、朝葉香が溜息混じりに言った。

「やったネ。これで心置きなく帰れるヨ」

「あれ？　なんでシヨウウがここに居るんだ？」

フィンが柵にぶら下がるメイに向かって、至極不思議そうに言う。

『フィンが呼んだんじゃないですか！　全く、貴方という人は！』

「ボクが？　そうだったっけ？」

「すっかり忘れやがってコノヤロー！　そうヨ！　お礼はたっぷり弾んでもらうからね！」

まだ納得しきれていないフィンに向かって、得意の跳び蹴りをお見舞いするが、軽々と避けられてしまふ。サスケだけがぎゃあぎゃああと喚いている。

「元気ですなー」

「ですなー」

その光景を、カノンとレオラが何をするでも無く見ていた。

「そうだ、カノン。シオンは？」

「それはもう天使のような愛らしさで寝てる。疲れたんだろ」

「そーか。こっちに来て良かったのか？」

「おう。シオンがさ、クウヤのことずっと心配してたからな。代わりに見てきてくれて頼まれたんだよ」

カノンが両手を空に向けて思いつきり伸ばした。

それと同時に、よ、と声をあげながらレオラが柵から飛び降りる。ガシャガシャとしばらく柵が揺れた。

「じゃ、どうする？」

「んー……」

伸びの延長で声を出す。今日はどうやら雪は降らなさそうだ。

そこから少し離れた場所で、朝葉香がカノンに向けて言う。

「では、わたくしはそろそろ引き上げさせてもらいますわ。家宝も形見も全て取り戻しましたし、一応都合屋の無事も確認しましたし」

ベンチから立ち上がって、着物の汚れを払う。

「ワタシもヨ。年始年末、今が稼ぎ時だからネ」

「ボクも帰るつもりだよ。いつまでもここに居たって仕方ないからね」

少しだけ息の上がったメイと、一つも表情を崩さないフィンも言う。

「もう何も、心配することは無いだろう？」

フィンの言う通り、全て終わった。だが、レオラだけが腑に落ちない顔をする。

「でも、なーんか忘れてる気がすんだよなー……」

「あ……」

「何だよ」

問いかけてくるカノンの方を見て、レオラは悲壮な表情で叫ぶ。



「やっべー！ 師範代だ！ 師範代がクリスマス・イブに遊びに来るって言うってたんだ！」

「はあ？ お前、イブって今日じゃねえか。今日ももう終わるぞ？」

「まじでやべえ！ すぐに帰らねーと！」

まるでこの世の終わりだと言わんばかりに必死になるレオラを見て、カノンは苦笑気味に笑った。

「そんじゃ、みんな帰ろっか」

\*

幸せに、終わる為に。

94 アリスの孤城 【幸せな終わり方】（後書き）

日常に、戻るために。

## 間奏曲 拾壹曲目「私とおれと」

私はカノン・ソリティア。ジン・ソリティアの妹みたいで、娘みたいで、弟子みたいな存在。

私はどこまで行っても私だし、私が私じゃないことなんて一度も無かった。そう、たったの一度も。

でも、私の他に『おれ』がいた。

『おれ』は『おれ』で決して『私』では無かった。それは『おれ』も知っていた。

二人は一人なのだけど、全く別の人だった。二重人格なんてそんな簡単なものじゃない、全く別の。

弱いのは『私』、強いのが『おれ』。

独りが怖いのは『私』、何も怖くないのが『おれ』。

一人で生きていくのに必要なモノは全て『おれ』が持っていた。脆弱な『私』は、誰かと共に居なければいけなかった。

私はいつの間にか、師匠と一緒にいることが当たり前のように感じていた。

毎日、まるで空気のように傍にいるのが当たり前だった。

それが幸せだと気付かなかった。気付けなかった。

私はいつから間違っていたんだろう？

あの日？ あの時？ あの瞬間？

それとも、最初から。

私はただ貴方を失うまいと必死だった。

失いたくない、ずっと一緒に居て欲しい。独りにしないで、もう独りは嫌だ。

そんな自分の薄汚い感情が、酷く厭らしいものに見えた。

弱い私は後悔してばかりだった。誰に対しても、何に対しても。私が後悔する度に師匠はただただ黙って、初めて会ったときのように私の頭を撫でてくれた。

その時の私は幸せだったと思う。

ある日のことだった。

それはカノン・ソリティアがほとんど『おれ』だったときのこと。それでもまだ微弱ながら『私』もいた。強がるために存在していた『おれ』だったから、まだ『私』という存在も許されていた。だけどその日、私は消えた。

弱すぎる私はその耐え難い事実を受けきることが出来なかった。ずっと一緒にいる、空気のような人だと思っていたから。

代わりに『おれ』が私の分も、その事実と向かい合ってくれた。そう、私は逃げた。嫌なことも、辛いことも、苦しいことも、見たくないことも、聞きたくないことも、全て『おれ』に押しつけた。

あの日から、カノン・ソリティアはただ強がるためじゃなく、独りでもいられるように『おれ』になった。

\*\*\*\*\*

おれはカノン・ソリティア。ジン・ソリティアの妹みたいで、娘みたいで、弟子みたいな存在だった。

おれは師匠が居なくなつた日に、『私』を心の奥から引きずり出して、そして追い出した。

何も出来ないのは『私』、何でも出来るのが『おれ』。  
独りが嫌なのは『私』、独りでも平気なのが『おれ』。

『私』は一人で生きていくのに邪魔なモノばかり持っていた。それが許せなかつた『おれ』は、師匠が居なくても生きていけるように『私』を飲み込んだ。

おれはいつの間にか諦めることが上手くなつていた。

自分が傷付かないように、そうするのが当たり前だった。  
諦めること。それが一番楽なんだと気付いた。

おれはいつから間違つていたんだろう？

師匠を引き留めなかつたあの日？

自分を「おれ」と呼ぶようになって、強がっていた時？

母親に捨てられたあの瞬間？

それとも、師匠が傘を差してくれたあの刹那。

おれはただ生きるために必死だった。

生きなければいけない。あの人折角拾ってくれたのだから、生きなければいけない。

大丈夫。独りでもやっていける。そのために必要なことは、全てあの人に教えてもらった。

あの人が生きていたこの世界で、おれは生きなければいけない。  
そんな自分のエゴにも似た想いが、酷く滑稽に聞こえた。

強いおれは後悔なんてしなかつた。

誰に対しても、何に対しても。決して後悔なんてしていない。

おれはそうやって自分に嘘を吐く度に、師匠の墓を訪れた。

その時のおれは、幸せだったと思う。

ある日のことだった。

それは、もうカノン・ソリティアが「私」だなんて使わなくなつたときのこと。

次こそは絶対に失わないと自分に誓つたあの子が、消えてしまった日のこと。

もう生きていたって良いことなどない。結局、最後には独りになつてしまう。何度も独りになつてしまふのだと気付いた。

そんな辛いこと、もう『おれ』でさえ受けきれなかった。

かと言って『私』に押しつける訳にもいかない。だつておれが追いついてしまったから。弱い奴はいらないと、消してしまつたから。もう終わらせてしまおう。そう思った。

だけどその日、『私』は甦つた。弱いはずの『私』が、まだ心の中に居た。

震える指で、電話をかける。助けを求めるために、親友のいる場所へと。

「いつもいつも、みんな帰ってこなくなるんだ……！ あたしが何も持っていないから………繋ぎ止めておけるモノが、一つも無いから！」

「憶えとけよ、お前を独りにする奴なんてこの世に居ない。もし、みんながお前を独りにするようなことがあつても、例え何があつても、オレだけはお前を独りになんてしない。絶対に」

弱さを隠さなくても良いと、やっと気付いた。

「ごめんね、追い出したりして。」「私」「も」「おれ」「も、全部カノン  
なのよね。」

気付くのが遅くって、ごめんね。  
もう、大丈夫だから。

間奏曲 拾遺曲目「私とおれと」(後書き)

カノンの独白。



## 95・昨日も今日も明日もずっと。

夕方から降り始めた雪が、足跡が残るくらいに積もり始めた頃。辺りの空気は、ピンと張りつめたように冷たくて。

そんな真冬の真夜中、小さな丘の小さな家へと向かう人影が見えた。

「うー……寒ー……」

いつもの明るい金髪は白いニット帽で隠れてはいたが、その赤い眼までは隠れない。

道外れの始末屋は、寒そうに身を縮めながら丘への道をサクサク歩いていった。

ふと、彼が上を見上げると、雪に混じって綺麗な灯りが見えた。雪雲の合間に見えた、三日月だった。

「……っと、こうしてる場合じゃないな。さっさと家にあがらせてもらおうと」

レオラはさきほどよりも速度を早めて、急ぎ足で丘を登った。丘から見える城下町は、橙色の街灯が点々と点いていた。

「待つてました！」

そのドアはノックしたと同時に開かれた。どうやら言葉の通り、本当に待ちに待っていたようだ。カノンは嬉しそうにレオラを家へと招き入れる。

いつものようにダイニングへ入ると、ストーブがついているお陰で部屋はかなり温められていた。

「あー、寒かったー……！ 雪だぞ、雪！ ありえねえ……」

もってきた荷物をソファの上へと置いて、レオラはすぐさまストーブの傍へと移動する。両手が特に冷え切っていたのか、近づけ

ただけで火傷でもしたかと思うほど熱かった。

「お疲れさん。まあ、雪見しながら新年パーティーってのもいいじゃん」

玄関で客人を迎えただけでも冷え込む夜中だ。カノンも一緒になつてストーブの周りへと座り込んだ。

今日は十二月最後の日。新しい年まであと三時間も無い。

「去年のさ、オレの家でやったときも雪だったよな」

「積もりはしなかったけどな」

他愛も無い話をして、冷えた身体を温める。

「そっぴゃあ、今日はオレだけ？ まだ誰も居ねえけど」

「おう。アサハ力は年を跨いで仕事が続くらしくてさ。クウヤも一応誘ってみようと思ったんだけど、電話に出なかつたんだよ。どっかに出掛けてるのかもな」

「ふーん。えつと、去年は他に誰が来てたっけ？」

「メイとアルル。二人も今回は無理だった。メイもアサハ力と一緒に仕事、アルルはなんだっけ……ああそっうだ、幹旋所の仕事を手伝わなきゃいけないんだってよ」

「なんで情報屋のアルルが幹旋所の仕事を手伝うんだ？」

「さあ？ 助っ人とかじゃねーの？」

ふーん、とどうでも良さそうな返事をして、レオラは部屋をキョ

ロキョロと見渡した。

「シオンは？」

「寝た。『僕も一緒にする！』って意気込んでたけど、お前が来る一時間ほど前に、睡魔に負けた」

「あらら」

身体が温まってきたところで、カノンがソファアの上に置かれた袋を開ける。その中はお菓子がほとんどの面積を占めていた。

パーティーとは言うものの、ただの飲み食いして夜中も騒ごうというものだ。ジンが生きていた頃はよく部下を連れてこの家に集まった。それを真似した訳ではないが、カノンも年越しは裏町の仕事

仲間と過ごすことにしている。みんなで色んなモノを持ち寄って、新しい年と一緒に祝うのだ。

「あれは持つてきたんだろうな、レオラ」

「ごそごそと大きな袋を広げながらカノンが問う。

「アレ？ あれってどれだ？」

カノンの言っている物が何なのか分からなくて、レオラも問う。

「決まってるだろ。お・しゃ・け」

暫くの間、沈黙が続いて。

「お前まだ未成年だろうがー！ なにが酒だ、酒！ アルコール無しで酔えるのは十代の特権だろ！？」

レオラの怒涛のツツコミが襲ってきた。

「ちえー」

唇を尖らせて、あからさまに拗ねるカノン。自分が用意してきたものを見て呟く。

「じゃ、2本だけか」

「おいコラ、そこ！ なんでワインが2本もあるんだ！」

身体を捻って、ストープとは反対方向にある机の上を指さしながらレオラが叫んだ。

「まあまあ、最後くらい大目に見ましようぜ旦那」

「お前の酒癖の悪さは天下一品なんだよ！ 前回でもう懲りた！」

まだ身体が温まりきっていないのに、カノンのアルコール摂取を阻止するためにストープから離れるレオラ。そうはさせまいと、ポトルを抱きしめて逃げるカノン。

ここまで騒げば、当然二階にも響くわけで。

「どうして起こしてくれなかったの姉さん！」

シオンが半泣きになりながらダイニングへと入ってきた。

「あ、起きた？ 良かったなー、シオン。ちょうどレオラが来たんだよ」

良いタイミングで入ってきたと言わんばかりにカノンはシオンへと話を振る。予想通り、レオラもワインのことは忘れて袋の中を覗いていた。

「そうそう、シオンの好きなクッキーも買ってきたぞ。チョコレートがかかっているやつ」

「本当？ やったー！」

袋からクッキーの箱を取り出して、シオンに手渡す。シオンは嬉しそうにそれをもらい、箱を開ける。

「えー、シオンずるいなー」

「へいへい。お前にはこれな。ドルチェのミニケーキセット」

長細い長方形の箱を渡されて、カノンの目は溢れんばかりの輝きに満ちていた。

ドルチェ・デ・ノエルのミニケーキセット。それはドルチェの人気商品であるショートケーキ、ベリータルト、アップルパイ、モンブラン、その他色々八種類が小さいサイズになっているもので、ずっとカノンが食べたがっていた物だった。

「え、良いの!？」

「おー。臨時収入が入ってよ、ついでに買ってみた。言っておくけど、お前だけじゃなくて、みんなで食うんだからな」

「分かった！ おれが六個で、レオラとシオンが一個ずつな！」

「全然分かってない」

二人の声が揃った。

「食べてばかりじゃ喉が渴くね」

今年も残すところ一時間となったころ、シオンがそう言った。

「そうだな。ジュース飲む？」

はい、とカノンが渡したのは、赤紫色の液体の入ったコップだった。そう、見るからにワインだった。

「違うから！ ジュースじゃないから、それ！」

「ばっ、とレオラがコップを奪ってシオンが驚く。」

「これって、昨日姉さんと一緒に城下町へ買い物に行ったときのジュースだよな？」

「違う違う違う！ シオン、騙されてるぞ！」

「え、そうなの？ 姉さんがジュースだって言うから、僕はてっきりそうなんだと……」

心底驚いているシオンの隣で、カノンは飄々と答える。

「似たようなもんだよ。これもぶどう味だから」

「全然違えよ！ まるつきり別物だとオレは思いますよ！？」

思わず敬語だった。奪い取ったコップを机の上に置いて、カノンに飲まないようにと念を押す。

カノンは不服そうに返事をした。

「でもさ、一杯くらいなら良いんじゃないの？ そりゃあ僕はまだ駄目だけど、姉さんぐらいの年なら……」

あまりにも落胆した様子の姉を見かねて、シオンがレオラに掛け合ってみる。が、答えは変わらず。

「駄目。絶対に駄目だかな！ シオンは知らねえんだよ、カノンが酔ったときの恐ろしさを……！」

「ど、どれだけ恐ろしいの……？」

レオラが遠い目をする。

「……誰彼構わず、プロポーズしちゃったり」

「プロポーズ！？」

「……誰彼構わず技を掛けてきたり」

「プロレス！？」

もうしないって、と笑いながらカノンは言うが、その身に受けた傷は深かったのかレオラは断固としてカノンにコップを渡さなかつた。

それから。

くだらないことを喋って、思い出話に花を咲かせて、いつの間にかシオンが寝てしまって。

ココアをいれたりしながら、新しい年が来て。

小さな丘の上にある、小さな家の灯りが消えた。

95・昨日も今日も明日もずっと。(後書き)

こんな風に時間は過ぎていって。

## 96・そつやって、何でも無いことのよじり。

「積もったなー」

朝も早いこの時間、玄関の前で竹箒を持つ朝飛の姿があった。

「これじゃあ朝の掃き掃除は出来ないな」

ふう、と溜息を吐いて積もりに積もった雪を見る。どうやら夜中に積もったらしく、年賀状（和国で行われる新年の挨拶を述べた手紙）を配達する郵便局の車輪の後がくつきりと残っていた。

朝飛の日課である、朝の掃き掃除は今日は出来そうにない。

しばらくばーっと立ち尽くしていたが、寒くなったので竹箒を元の位置に仕舞い、郵便受けから年賀状を取り出して朝飛は家へと戻った。

「新年早々、暇だなあ」

年賀状の差出人を確認し、右手には父宛の物を分けながら廊下を進む。元旦という特別な日だが、結局父は仕事で昨日から居ない。なので、この家には今朝飛しか居ない……はずだったのだが。

「よ。謹賀新年」

朝飛が和室に入ると同時に、それは挨拶をしてきた。

低めのテーブルに置かれたおせちのお重を広げ、もごもごと口の中に数の子を入れたまま、右手をすちや、とあげる。

さつき入ってきたばかりなのだろうか。コートを着たままの姿で、クウヤがおせちを頬張っていた。

ばさばさ、と朝飛の手元から半分ほどの年賀状が落ちた。折角分けていたのに、また混ざってしまった。漆黒の瞳を真ん丸にして、どうにか朝飛は挨拶を返す。



「……あ、あけましておめでとー」

やっと挨拶を返した朝飛に、また話し掛ける。

「兄さん」

「な、なに？」

次はごまめへと箸を伸ばしながら、クウヤは朝飛とおせちを交互に見る。

「腕、落ちたね」

朝飛の頬が引きつった。それに気付いているのかいないのか、クウヤは続ける。

「味付けが前より薄い気がするんだけど。ダシ、ちゃんととった？ それに切り方も少し荒いし、人参が普通の銀杏切りだし。前は花形だったのに」

ず、と音を立てて雑煮を飲む。

祖母が京の人間だった影響で、桐生家の雑煮は毎年白味噌だ。祖母が他界してからは、ずっと朝飛が作っている。異国出身の母には作れなかったのだ。

その雑煮を半分ほどまで飲んで、クウヤは一旦箸を置いた。

「うん、やっぱり落ちたよ」

「……そうかな？」

「そうだよ。前の方が美味しかった」

いい笑顔で問い掛ける朝飛。変わらぬ表情で酷評を付けるクウヤ。それに対して、ぷち、と何かが切れる音がした。

「急に帰ってきて、何ゆうんかと思ったら文句ばっかやん！」

べしっ、と残り半分の年賀状を畳の上に叩き付けて、朝飛がキレた。

「だって本当のことだし」

「こつちかて年末は色々あつて忙しかったんや！ 人参も花形に切るのんかてな、時間も手間も掛かんねんで！ ダシもとる暇無かったから市販のパック使つてん。悪い！？ なんか悪いか！？ まさか空夜が帰ってくるなんて思わんかってんもん、しゃーないやん！

どうせ食べる人なんて父さんと僕ぐらいしかおらんさかい、ちよつと手エ抜いただけやん！」

塞き止められていた水が流れ込むように朝飛が早口でまくし立てる。それに対して、クウヤも音を立てて箸を置いた。

「そない怒らんでもええやん！　いつつもいつつも『帰って来い』ゆうてしつこいから、いつぺん帰ってみたるかって思てんやんか！　ちよつとは感謝しいや！」

俗に言う、逆切れというものだった。クウヤの道理を通していな理不尽な言い分に朝飛もさらに大声を出す。

「なんで僕が感謝しなあかんねん！？　大体、勝手に家を出てったんはそつちやるが！」

「出てけ、ゆわれたから出て行つてんやんか！」

「ゆわれるような事、する方が悪いんやろ！」

「ああもう、何この人！？　めつちや腹立つわあ！」

「こつちの台詞や！」

「大体、なんやねんこの紅白かまぼこ！　めつちやキャラクターものやん！　ごつつファンシーやん！」

「売り残つてたんが、それしか無かつてんもん！」

話の方向がどんどんずれて来るなか、玄関の扉が開く音がした。立て付けが悪い所為で、大きなこの家でもよく聞こえる。例え大声で喧嘩していたとしても。

こんな朝早くに、表から堂々とやってくる泥棒はいない。考えなくとも分かる。父が帰ってきたのだ。

「うわ、どうしよう……帰ってきた！　こんなに早く帰ってくるななんて！」

言い合いを止めて、朝飛が目に見えて分かるくらいに慌てる。

ほとんど勘当に近い形で家を出ていったクウヤが、帰ってきている。それを言い渡した父に、一体この状況をどう説明すればいいのかわからない。

「居ないと思つたら、父さん仕事だったの？」

当の本人は、慌てるでもなく、逃げるでもなく、ただ元の位置に座っていた。少しは焦りを見せてもいだろうにクウヤは置いていた箸を持って、また数の子を食べ始める。どうやら食感が気に入ったらしい。

朝飛が思考を巡らす暇など無かった。古い廊下が軋み、その音がどんどん近付いてくる。

す、と和室の襖が開かれた。

「新年早々兄弟喧嘩か？ 外まで聞こえていたぞ。みっともない」

二人の父 桐生冬悟がそこにいた。

「…あ、えつと、その…」

何とも言えない朝飛の代わりに、クウヤが自然に声を出した。

「おかえり」

「ああ、ただいま。なんだ、もうおせちを食べてたのか」

「うん。ちよつと味は落ちたけど、相変わらず美味しいよ」

何気なく交わされる言葉。久しぶりに会ったというのに、そういつた挨拶は何も無くて、前からずっとそこに居たみたいに馴染んで。それはまるで。

まるで普通のお正月だった。

「どうした、朝飛。立ってないで座ったらどうだ」

「あ……うん」

父に促されて、拍子抜けしたように座る。慌てていた自分が馬鹿みたいだ。だけど、気分は悪くない。

朝飛も二人と同じようにおせちを取り皿に盛る。どうやらクウヤが数の子を気に入ったようなので、それ以外を食べることにして。

ふと、大事なことを思い出す。

「あ、忘れてた」

「何がだ？」

「あけましておめでとう、父さん」

朝飛に続くように、クウヤも。

「おめでと」

いつになく顔を綻ばせて、冬悟はポケットから小さな袋を取り出す。

「忘れる所だったな。あけましておめでとう」

“お年玉”と書かれた紙袋を朝飛とクウヤが受け取る。まさか貰えるとは思っていなかったクウヤは、なかなか手を差し出せなかったが、朝飛が受け取ったのを見て同じようにした。

二人同時に袋を開ける。

「うわ、壱万円だ」

びっくりして声をだす朝飛。それを聞いて、クウヤの表情が不満そうなものへと変わる。

「五千円………なんで二つしか違わんのに、こんなに差があるん？」

まさかそんなに金額差があると思っていなかった朝飛。クウヤから目を逸らす冬悟。

「いや、まさかお前が帰ってるなんて思わなくてな。玄関前で声が聞こえて急遽用意したんだ」

「兄さん、交換して」

「ええっ！？ なんで!？」

「お年玉は子供の楽しみやん。交換して」

「僕が楽しんでたって！ なんで交換なん!？」

「長男やから」

「どんな理由!？」

また再開しそうな口論に、冬悟が間に入る。

「正月から兄弟喧嘩をするな、みっともない」

「誰の所為やねん」

その一言に、大人げなくも冬悟も一緒になって、その大声は外まで響く。

雪が、また降り出しそうな空模様だった。



96・そしちて、何でも無いじやないか。(後書き)

新しい年が、始まる。

97・まだ、気付かなくても良いよ。

「二ー八才！ 毎度お馴染み、定期調達にやって来たヨー！ 早くこのドアを開けるネ！ 情報屋ー、開けるー」

荷物がたくさん入った袋を背負い、メイがどんと扉を叩く。毎月見られる光景だ。定期調達を頼んでくるこの家の主人は大層な面倒くさがり、その上引きこもりときているので、ノックしてすぐに扉が開くことは滅多に無い。

メイはドアを叩くのを止め、数秒の間、中の反応を待つてみる。結果、無反応。

「開ーけーろつつつてんのが聞こえないカー！ 出てこい情報屋！ 今すぐ、すみやかに、音速を超えるよう二ー！」

また乱暴にドアを叩く。いつもならこのくらいで、中からフィンの反応があるはずなのだが、今日はまだ無い。

いくら力持ちとは言え、あまり長く待たされると腕が痺れてしまふ。

「ちよつとちよつと、本当に怒るヨ！ 蹴り飛ばすヨ、この扉！」  
言っている時点で既に右足は上がっていた。息を吸い込んで、力を込める。と、蹴りを入れる寸前で中から声が聞こえた。

『お待ち下さい、メイ殿！ 鍵は開いています！』

サスケだ。どうやらドア前にいるのは彼だけらしく、自分で開ける、と言っことか。

メイは今正に蹴り破ろうとしていた右足を仕方なく降ろし、代わりに右手で勢いよく開けた。

『ぐはっ！』

開け放たれたドアに、思いつきり当たったサスケ。内開きなのが災いした。

「あいや、思いつきり開けちゃったヨ。ゴメンゴメン」

頭をぼりぼり掻きながら、舌を出して謝るメイ。あまり反省して

いるように見えない。

『い、いえつ。私のことはお気になさらず……すぐに開けなかったこちらが悪いのですから』

へなへなとなりながらも、自分の非を詫びるサスケ。主人に見習わせたいくらい、出来たカラスだ。

「そう力？ うーん、言われてみればそうネ。ワタシは別に悪くないヨ。全く、居るなら扉を開けるくらいしたらどう力？」

『申し訳ありません。私の力ではどうにもドアを開くことは出来なくて……』

「そうじゃないヨ、情報屋のことヨ。どうせまた何処かの書庫で本の中に埋もれてるんデシヨ？」

お邪魔しますヨー、と調達の袋を提げながら廊下に行く。勝手知ったるこの家だ。どこに書庫があるのか位、サスケに案内されずとも分かる。

『メイ殿、それが……』

「じよつ、情報屋が外出！？ しかも街へ、一人で、買い物に！？」  
『ええ』

驚きの余り、用意された茶菓子を口から吐きだしてしまいそうになる。

メイはサスケに連れられて、客室でもてなされていた。折角調達に来てくれたのだから、少しはゆっくりしていてもらおうというサスケの気遣いだった。

「有り得ない…有り得ないヨ……！ 雪が、うっん、槍が降ってくるヨー！」

椅子の上で胡座をかきながら、千切れるんじゃないかと思うくら



いに首を振る。それは言い過ぎなのだが、雪ぐらいは降りそうな空模様だ。

『吃驚ですよ。十二月以来、よく出掛けるようになったんですよ。今日も、コーヒー豆が切れたからって、街に』

嬉しそうに語るサスケ。彼がこんなにも喜んでる姿を、メイは初めて見た。メイの知っているサスケは、フィンを叱る姿か、フィンの非礼を詫びる姿くらいだった。

『これで少しは社会に適合出来るようになったんです。大きな進歩ですよ！ 朝飛殿に感謝しなくては』

フィンが外へ出るようになったのだ。それも自分から。それはとても喜ばしいことなのだろう。サスケはいつもより饒舌になって、フィンの変わりぶりを話していた。だがメイの心情は複雑だった。

「そうか……良かったネ、サスケ」

『本当に。先代もきつと天国でお喜びになっっているでしょう。あ、コーヒーのおかわりはどうですか？』

「……本当、良かったヨ……」

もっと言ばなければいけない。それは分かっているのだが、カップの中で揺れる液体に映る自分の顔は、少し泣きそうだった。

『メイ殿？』

「んあ？ あ、ああ、おかわりネ？ 大丈夫ヨ、まだ残ってるカラ」

『どうかなされました？ 心此処に有らずといった感じですけど……』  
テーブルの上で首を傾げるサスケ。メイの異変に気付いたようだ。

「そうか？ そんなこと無いヨ！」

無理矢理笑ってみせるメイ。だけど、あまり上手く笑えていないのは自分でも分かった。自分は、こういうのはあまり得意ではない。世外れの都合屋なら、もっと上手に笑えていただろうに。

訝しげに首を傾げるサスケ。彼になら、言ってみてもいいかもしれない。

「そんなこと無いけどネ……ちょっと、寂しいヨ」

『寂しい？』

「あつ、別に情報屋が外出出来るようになったことは良いことだと思うヨ。これ本当。でもネ、それじゃあワタシ用無しになるデシヨ……？ もう定期調達なんてしなくても、自分で食料も生活必需品も手に入れられる。ワタシ、ここに来れなくなるネ」

カップを両手で囲うようにして持つ。自然と重い溜息が漏れた。「そうですね……メイ殿が、フィンに会えなくなってしまうんですよね」

「いやつ、情報屋だけじゃなくて、サスケにも会えなくなるヨ！二人に会えなくなるのは寂しいってことを言ってるネ！」

慌てて否定するメイ。今のサスケのセリフじゃ、まるで自分がフィンに会えなくなることを悲しんでいるようだ。

「事実、そうなのだが。」

「だってホラ、毎月のように会ってたデシヨ？ それは定期調達っていうお仕事だったからだし……」

『理由もなくフィンに会いに来るのは、やっぱり恥ずかしいですか？』

「だからそういうのじゃなくってネ、なんて言えばいいかな……決して情報屋のことが、す」

好き、と言い掛けてメイの動きは止まった。

「ボクが何だった？」

メイの視線の向こうには、今帰ってきたばかりのフィンが居た。

『あ、帰っていらしたんですね』

「うん。たった今ね。で？ ボクが何だった、シヨウ？」

外から帰ってきたというのにコートは脱がずフードだけ取って、買ってきたコーヒー豆をテーブルに置く。

「す……す……スーベニア人だとは思ってないヨ、なんちゃって」

「……そうだね。ボクは恐らくレスティナ人だと思うよ」

あまりはつきりとしたことが言えないのは、自分の身元が分かっていないからだ。メイは冷や汗を拭いながら、置かれたコーヒー豆

を見た。見たことの無い銘柄だ。きつと安物を買ったのだろう。

「そういえば、なんでキミがここに居るんだい？」

「『なんで』って、一月分の定期調達に決まってるヨ」

「ああ、そっか。もうそんな時期だったっけ」

指差された大きな袋を見て、フィンはやっと思いだしたようだ。

そしてメイも、さっきまでの会話を思い出す。

「じゃ、じゃあワタシはこれで帰るネ！」

慌ただしく荷物を纏め、サスケにコーヒの礼を言って客室のドアまで走る。そしてドアノブに手を伸ばしたところで、くるっと後ろを振り返った。

「えつとネ、短い間だったけど案外楽しかったヨ。今までご利用ありがとネ。近くを通ったら、また遊びに来るかも知れないけど」

ちよつと泣きそうだ。自分の声が、他人の声のように感じる。せめて、お別れくらい笑って言いたい。メイが俯きそうになっていた顔を勢いよくあげる。ちゃんと、フィンの顔を見ておこう。

テールの向こうで、彼は不思議そうな顔をしていた。

「……なんで、今生のお別れ風なの？」

「いや、別に今生って訳じゃないけどネ。一応今までみたいに、毎月会うことはなくなる訳だし」

「……だからなんで、毎月じゃなくなるの？」

「だって定期調達は終わっちゃったんだから、毎月じゃないヨ」

メイのその台詞に、フィンはもつと不思議そうな顔をする。普段、無表情な彼にしては珍しいことだった。

「ボク、キミとの契約を切ったっけ？」

首を傾げるフィン。もつと傾げるメイ。

「だって、外に出られるようになったんデシヨ？　ワタシ、もうお払い箱ヨ」

「なんで？　ボクが外出するようになって、キミとの契約を切る理由にならないよ」

まだ納得のいかない表情のメイに、フィンは真面目な顔をして言

った。

「キミが居なくなったら、困るよ」

サスケが驚いて口を開ける。メイが、その言葉に固まる。顔色は少し赤い。

それに気付いていないのか、もっと大真面目な顔をしてフィンが続ける。

「毎日街へ行かなきゃならないなんて、すごく面倒臭い」

「……そっち力！ 結局それだヨ、アナタいつもそれだヨ！」

もうやってられないヨ、と叫んで部屋を出ていく。心なしか、嬉しそうな声だった。

部屋に取り残された、まだ不思議そうなフィンと呆れ顔のサスケ。「なんで怒ったんだろ？」

「……ご自分の胸に聞いてみてはいかがですか」

「分からないから聞いてるんだよ。あ、それより……」

「それより？」

買ってきたばかりのコーヒー豆の瓶を見る。

「結局、定期調達の話はどうなったんだろうね。来月、来てくれるかな」

サスケはいつもも定位置　フィンの頭の上に乗って。

「来ますよ。絶対に」

フィンにはきつと分からない確信を持って言った。

97・まだ、気付かなくても良いよ。(後書き)

きつと、会いに来る。

98・ただ、それだけを言いたかった。

あの時どうして自分は、この子を殺さなかったのだろうか。

レオラを見て、セリがいつも一番初めに思うことだ。弟子は、まさか自分がそんな風に思われているとは露も知らないだろう。考え無しのように見えて実は聡いのだが、やはりどこか抜けている。そこが良いところだと思ふあたり、自分は相当の親馬鹿なのだろう。ジンのことを笑えない。

「……どうしたんですか、師範代」

自分の頭をぽんぽんと撫でるセリを見て、戸惑いながらレオラが聞いた。ここはレオラリアナ村にある、セリの家。そしてレオラの家でもある。

「いや、大きくなったなと思つてな。うん。大きくなった」

何度も頷きながら、レオラを見上げる。手は相変わらず金髪の上レオラは照れているのか、止めてくださいよ、と素っ気なくセリを手を振り払っていた。それでも構わずにセリは続ける。

「ふむ。びっくりだな。生命の神秘だ」

「何もそこまで……」

「小さい頃は、私の腰ほどしか無かったというのにな」

いつか抜かされる、いつか追い越されると思つてはいたが、いつの間立場が逆転していたのだろう。自分の店を持ちたいと言っていたときは、まだ同じくらいの身長だったはずだ。

「そりゃ、小さくはなりませんよ」

「まあな。兎にも角にも、おかえり」

「あ、ただいま」

軽いお辞儀をするレオラを見て、セリが目を細める。そして小さなトランクを奪い取るようにして、洗面所を指差した。

「早く手を洗つてこい。荷物はお前の部屋に置いておくぞ」

「はいはい」

必要最低限の物しか持つてきていないのだろう。トランクは予想通り軽かった。それでも困ることはない。レオラがこの家を出て行ってからも、セリはちゃんとレオラの部屋の掃除を欠かさなかった。左の手はしっかりと手すりを持って、少し早足で階段をあがる。折角弟子が帰ってきたのだ。今日の夕飯は力を入れよう。

不思議と、足取りが軽い。弟子一人のことでここまで気分が変わるとは、まだまだ自分も未熟だ。

「ん？　そういえば新しい写真も撮らねばな」

階段の壁には、いくつもの写真が飾られている。そこにはさっき言っていたように、セリの腰ぐらいの身長しかないレオラや、バスケットボールを持ったレオラ、つい最近のものまで様々だった。古いものでは、セリが始末屋の師と共に並んでいる写真まである。毎年増えていく写真達の中で、セリは相変わらず綺麗なままだ。

その内の一つに目を留めて、セリは階段の途中で立ち止まった。陽が当たった所為で色あせた写真。レオラが不機嫌そうに写った、夏の日の写真。

確かあの日も、夏だった。

\*\*\*\*\*

「依頼された人間を殺すんですよ、あの一家は」

「なんだ。殺し屋と同じじゃないか」

夏が来たことを告げるように生い茂った緑の中、その馬車には重々しい雰囲気を取り囲んでいた。

セリがたった今放った一言に、目の前の初老の女が首を振る。

「いいえ、似ているようで違います。彼等は一切金銭を取らないのです。報酬も、代償も、代価も取らない。殺して欲しいと言われた人間を、ただ殺すのです」

「良心的だな」

そこでセリは窓の外を眺める。深い森を走るこの馬車は、揺れが激しい。車では無理だと言われたのにも納得がいく。

「とにかく人間を殺したい。だけど誰を殺して良いか分からない。殺して良い人間がいるはずありません。ですが、」

「殺して欲しい人間は山ほどいる」

「……仰るとおりです。だから彼等は聞くのです。『誰を殺して欲しいか』と。これほど厄介なことはありません。お陰で、この街は荒れ果てています。表面も、内面も。こんな小さな街に留まらず、いずれはこの波が広がり、国までもを揺るがす恐れがあります」

老婆　この街の町長が言う。

「なるほど」

「お願いします。島外れの始末屋、セリ・オーシュ。貴女は二十代という若さながら、様々な始末をつけてきたとお聞きしております……あの一家を、ストレイン一家を必ずや抹殺してください」

「了解した」

初夏の風の匂いは、馬車の中まで入ってこなかった。蝉の鳴き声がかすかに聞こえた気がした。

『ストレイン一家暗殺の下見』　それが今日の目的だった。若くして一躍有名になった始末屋、セリ・オーシュの元にはこういった物騒な内容の依頼が多い。その依頼内容に動じなくなるほど、セリは慣れきっていた。

町長は森を抜けたところで馬車を止めるように指示し、セリと一



緒にゆつくりと降りる。

「ストレイン邸までご案内いたします」

「すまない」

淑やかに歩く町長の後ろを、セリは辺りを気にしながら歩く。森を抜けた後の進入経路、万が一の逃げ道、隠れられる場所、街からどれだけ離れているか。

首を動かさず、視線だけを動かしているとセリの神経はある一点に集中した。

「……あの子供は？」

町長が歩みを止めずに答える。

「ああ、あの子はいつもあそこで遊んで居るんですよ」

「誰も居ないな。一人でか？」

夏の日差しと同じくらい明るい金の髪を持ったその少年は、ボールを持って一人で遊んでいた。たん、たん、と地面へボールを落とすのは拾う。そんな単調な作業を、何度も何度、繰り返していた。

「そうみたいです。我々があの一家を監視している間も何度か見かけましたが、いつも一人でした」

「そうか」

その少年への興味を拭いきれないまま、セリと町長はその場を去った。

「あれ、まだ生きてる。すっげー」

少年は何度も何度もボールを落とす。木から落ちた、死にかけの蟬の上に。

じじ、と羽を微量に羽ばたかす蟬は結局空へ戻れず、無様にも六本の足を出鱈目に動かして、まだ生きていることを少年に示した。

「でも」

少年は呟く。そして、ただ重力のままに落としていたボールに力を込め、勢いよく蟬の上へと投げつけるように落とす。

「死んじゃった」

蝉は、もはやその姿を残していなかった。土の上で、ぐちゃぐちゃになった死骸。少年はそれを何度も何度も足で踏みつぶした。

町長の案内のお陰で、大方の下見は済んだ。後は明日、これを実行するだけ。一人で探索したいというセリの願いを聞き入れて、町長は先に馬車ごと帰っていた。

「やはり、移動は徒歩に限るな」

深緑の中、満足げにセリは空気を吸う。辛気くさい依頼だからこそ、こうしていたい。そうやってセリが馬車の後を辿るようにして帰っていると、またあの少年を見つけた。まだ一人で遊んでいる。いつのまにかセリの足は、その少年へと向きを変えていた。

「一人か？」

ボールを空中にあげて遊んでいた少年は、その声に驚いてセリを凝視した。

「……………」

少し迷ったあとに、首を縦に振る。

「楽しいか？」

今度はすんなりと縦に振る。一人遊びに慣れているらしい。だが、なかなか声を出さない少年に不安を覚えて、セリは尋ねる。

「…もしかして、喋れないのか？」

「ううん」

初めて声を出す。そのあと、ボールを何回か空中にあげて、またセリの方を見た。

「喋れるけど、喋っちゃ駄目なんだって」

「駄目？」

「そう。あんまり自分のことを話しちゃいけないよって、姉ちゃんと兄ちゃん達が言ってた」

自分のことを言うな。多少差別の残る街だ。この子がこうして一

人で遊んでいるのも、もしかするとそういった理由なのかも知れない。

「そうか。ボール遊び、楽しいか？」

「うん」

「私も混ぜてくれないか？」

「……うん！」

明るい金糸が揺れて、嬉しそうに笑う。そしてセリの耳元へこそこそと小声で話してきた。

「本当は内緒なんだけど、特別に教えてあげる。俺ね、アゲ八って言うんだ。苗字はまだ内緒」

「アゲ八か。良い名前だな」

アゲ八が投げしてきたボールを受けて、セリは一緒になって微笑んだ。

「キャッチボールって知ってるか？」

「うん、知ってる。でもしたこと無い」

「そうか。じゃあ一緒にやろうか」

「うん！」

いつも一人で遊んでいるのだろう。嬉しそうにはしゃぐアゲ八を見ると、セリも嬉しくなった。

「アゲ八は、いつもここで遊んでいるのか？」

「そうだよ」

「毎日？」

「毎日」

「そうか。じゃあ、明日は遊びに来ちゃいけないよ」

「どうして？」

「どうしても」

アゲ八は少し悩んで、それからすぐに頷いた。

「分かった。明日は家に居るよ」

「ありがとう」

これで良い。これで明日の準備は整った。セリは安堵の息を漏ら

した。全て上手くいく。

『ええと、少し待ってくださいね。ストレイン一家？』

街へと帰って、すぐにセリは電話をかけていた。

「ああ。その一家の家族構成と、出来れば今後の行動予定を教えてください。伝書鴉はいらん、そのまま電話で良い」

『それはまた難しい注文ですねー。ちよつと失礼……サスケー、ストレイン一家の資料を丸ごと持ってきて下さーい……つと。それにしても大層な情報をご所望で。暗殺ですか？』

さらりと凄いことを聞いてくる。ナチ・イズミはきつとこの電話の向こうで、いつものように爽やかに笑っているのだろう。

否定できないセリは、渋々と打ち明けた。

「……一家皆殺し。抹殺しろって頼まれた」

『あつははは！ すごいお仕事貰っちゃいましたねー。さつすが島外れ。そういえば知ってます？ 裏町幹旋所に新しく入った所員の弟さん、情報屋をするって言って俺に弟子入りをせがんで来るんですよ。まだ八つぐらいなのに、これがまた凄い情報収集力で、』

「御託はいいからさつさと情報を寄せ」

『あり？ 世間話もお客様との大切なコミュニケーションの一つなんですよー。俺はそういうことを大切にするのがモットーで、』

「……おいナチ。切るぞ？ 切っていいか？ 切っちゃうぞ？」

『やだなあ。セリはせっかちすぎですよ。あと少し待ってくださいーい。サスケがもうすぐで来るはずですから……あ、サスケ。ご苦勞様です』

「で？ どうなんだ」

『……ストレイン一家、家族構成。当主はカラ。妻、メイディ。兄弟は全員で六名。順番に長男タテ八、長女コノ八、次男ウスバキ、三男ヒオドシ、次女セセリ、三女ツマキ。メイディを除く家族全員

に共通するのは、名前が蝶に由来するところですね。

それと、今後の行動予定。一週間後に街の花屋のアイヴィス・フ  
アーマーを殺害予定。それくらいですな」

「なるほどな。ありがとう、助かった」

『二百万ミリア』

「……は？」

『やだなあ、情報代ですよ。友情割引で、締めて二百万ミリア。  
あ、セリは今イギリスに滞在中でしたな。ポンドでも良いですよ。  
えつとー、通貨レートは確か……』

「いやいや……いやいやいや本当に助かったよ。ありがとう、  
お前のことは一生忘れない。私は良い友人を持ったなあ。それじゃ  
あ！」

そこでセリは受話器から耳を離す。だが、大声で叫ぶナチの会話は漏れて聞こえた。

『あ、ちよつとセリ？ 必ず振り込んで下さいよー、つて聞いてます？ セリー！？ セリ・オーシュー！？ うわこの人最悪です！

最低です！ サスケサスケ、サスケー！ 今すぐイギリスに飛んでセリからお金を取り立てに行つて下さい！ 聞き逃げです！』

どうやらサスケを飛ばすつもりらしい。それは困る、とセリはもう一度受話器を耳にくっつけた。

「ナチ、残念ながら私は今ロシアに滞在中だ。サスケを飛ばすならロシアに飛ばせ。ジャーマン、ジャーマン。ああポテトとソーセイ  
ジが美味しいなあ！ チューリップ畑は壮観だなあ！」

『それはドイツです！ 見え見えの嘘じゃないですか！ オランダもちよつと入ってるし！ 俺を騙そうつたつてそうは、』

そして最後まで聞かずにセリは電話を切った。ナチには悪いが、そんな大金支払えない。サスケが来たときには、誤情報だったか言つて、適当に誤魔化そう。

とにかく、これで下準備は完璧だ。あとは、殺すだけ。

殺すだけだった。

「なんで……」

そう。完璧だった。今日来た道に、アゲハは居なかった。ちゃんと言いつけを守っていたのだ。

屋敷内も迷うことなく進めた。町長が別の裏町業者を使って手に入れた屋敷内の構図は、一つも間違っていなかった。

仕事は、上手くいった。恐ろしいくらいに上手く。父親と母親が死ぬのを見て、兄弟は一斉に襲ってきた。それを返り討ちにした。

そうして転がる、八体の死体。これで終わり。  
なのに。

「コノハ姉ちゃん！」

真っ赤な世界の中、聞き覚えのある声が響き渡る。セリは見てはいけないものを見てしまった。クローゼットから飛び出したソレは、見たことのあるものだった。

「なんで居るんだ」

今日、あの道に居なかったはずの、あの少年。

「ツマキ姉ちゃん……タテ八兄ちゃん……」

アゲハは、言いつけを守っていた。守って、家に居た。

ばらばらになった肉片を見ては、その赫色の眼が徐々に絶望の色へと染まる。

ペタ、ペタ、ペタ。血の水溜まりへ足を踏み入れて、名前を呼ぶ。誰も返事をしないというのに、それでも。

ペタリ。

力を失ったように倒れ込んだのは、首の無い死体の前。美しいプラチナブロンドの髪が、遠く離れた場所に落ちていた。

「お、かあ、さん……?」

苗字は内緒、と嬉しそうに笑った少年。

母親の首を見つけて、その血に濡れた手で頬を触る。まるで血の涙を流したような痕が付いて、少年は嗚咽を漏らした。

その少年の、名は。

「アゲハ・ストレイン……」

セリの声に、アゲハは一つも反応しなかった。もう何も見ていない。両手で必死になって兄弟達の肉片を掻き集める。

元通りに直そうと、何度も何度も、血に染まりながら。必死になつて集めるのに、兄弟達は何も言わない。もう、誰も少年を呼んでくれない。

「……………コノ、八姉ちゃ……………なんで……………」

右手を見つけて、握る。だけど握り返してくれる腕はそこには無い。

この子も、殺人一家の子。自分が抹殺してくれと依頼された、あの家族の一員。殺すことしか出来ない、欠落した人間。

自分は、殺さなければいけない。この子を殺して、全てを終わらせてしまわなければ。殺してしまわなければ。いま、すぐに、この場所です。

自分に、殺せるか?

「……………まだ、子供じゃないか」

\*\*\*\*\*

ふ、とセリは我に返った。つい思い出の中に浸っていたらしい。階段の窓を見ると、もう夕焼けになりかけていた。

「……レオラを待たせているな」

急いでレオラの部屋へと荷物を運ぶ。乱暴にトランクをベッドの上へと放り投げて、今度は写真を眺めずに戻った。

一応洗面所を覗いてみるが、既にレオラの姿はそこには無かった。当然か。セリはリビングへと戻る。そのテーブルに突っ伏すようにして、レオラは眠っていた。

「……長い旅路だったからな。疲れて眠ったのか」

このまま寝かせておこう。その間に夕飯を拵えて、その後で起こせば良い。

セリがレオラに背中を向けて、キッチンへと歩み出したその時。

「久しぶり、セリさん」

振り返らずとも分かる。この後、自分がゆっくりと後ろを向けば、あの弟子とは違う赤眼が自分を見ているのだろう。

どうしてかは知らないが、レオラの眼とあの子の眼は違う赤色に見える。赤と赫。暖色系の筈の赤色が、冷たく見えるのだ。あの蝶の眼は。

「久しいな……アゲハ」

彼の名を呼んだ。

「丁度三ヶ月つてところかな。あんたとこうして会うのは」

アゲハは、こうして偶に現れる。レオラが眠りに就いた時を見計らって、まるで演劇の役者が交代するように。別にセリに危害を加えるためではない。他愛の無い話をするだけしたら、あとはまたレ



オラと交代する。レオラはそれに気が付いていない。

同じ人間なのに、全く違った表情を見せる彼に、セリもレオラには見せない笑みを浮かべた。

「三ヶ月と二週間だ。元気にしてたか？」

「そこそこ。こいつがドジ踏んだ所為で、ちよつと死にかけたけど」  
そう言つて自分を指差す。セリはそうか、と呟いて、キッチンへ向かおうとしていた身体を元に戻した。そしてテーブルを挟んだ向かい側の椅子に腰掛ける。

「今日は何の用だ？」

「ちよつとね……」

家族の仇だというのに、何でもないように会話をする。セリはこんなとき、いつも思う。今なら、この子に殺されても良いな、と。そんなことを思つても、許される訳じゃ無いが。

「んーとさ……」

「なんだ？」

アゲハはテーブルクロスの模様を見ながら、言いくそくに話し出した。

「……一つ、あんたに頼み事してもいいかな。島外れの始末屋、セリ・オーシュに」

「内容によるな」

もつともな一言に、アゲハがふわりと笑う。滅多に自分を出さない所為か、アゲハはレオラよりも幼く感じる。その笑い方は、まるで普通の少年のようだった。

いつも忘れそうになるが、初めて会ったのはアゲハの方なのだ。イギリスのあの森の中で、ボールを持っていた普通の少年。少年の周りには、誰も居なかった。

「内容は、俺をイギリスに連れて行つて欲しいんだ」

「イギリス……」

ストrein家が居た国。アゲハの故郷。

「この前、こいつが無茶をしでかしたとき、マジで『死ぬのかな』」

って思つてさ。まあ、そこんところは俺が居たおかげで事なきを得ただけだ。その時にさ、姉さん達の墓参りに行つてあげたかったな。って思つて」

それで、突然イギリスに行きたくなつた。アゲハは気まずそうに言つた。

「これ一回きりでいい。こいつはイギリスなんて嫌な想い出ばかりだろうし、自分からは行きたいと思える場所じゃないだろうからさ。それで、あんたからこいつに言つて欲しいんだ。イギリスに行けって」

「なら、お前が勝手に行けばいい話じゃないのか？」

「それでも良いけど、ホラ、やっぱり今はこいつの身体だから。勝手に使つちや悪いだろ」

「変なところで遠慮するんだな」

全く。そういつてセリはアゲハを見る。

「それだけでいいんだな？ 分かつた。レオラに言つておこつ」

「助かるよ。さすがセリさん、話が分かる。そうだ、報酬は……」

「……写真だ」

セリの眼が光つた。

「え？」

聞き直してくるアゲハに、セリは有無を言わさない物言いと言う。

「写真を撮るぞ。夏に撮つたヤツはあまりにも不機嫌な顔だったからな」

「また写真撮んの？ 俺、写真嫌いなんだよ……」

「タダで依頼を頼めると思つな。ほら、さつさと立て」

立ち上がったセリを見上げる形になって、アゲハは驚いた。

「今から？」

「そうだ」

満足そうに頷かれても困る。アゲハは必死に周りを見て、セリのをひくものが無いか探す。

「そうだ、夕飯。夕飯の用意しないでいいのかよ。こいつ、かなり

腹空かせてて…」

「どうせレオラは寝ているんだ。もう少し寝かせておこう」

「いや、実際には起きてるんだけどな？俺が起きてるから、起きれないだけで、俺が起きるのを止めたらすぐに起きるし」

「その感覚は常人には理解しかねるな。そうだ、外で撮ろう」

「外？ まじかよ」

夜。子供は寝る時間だと言われて大人しく階段を登るレオラが、懐かしそうに壁の写真を見る。

「あれ？」

「どうした。まだ寝ていなかったのか。まったく、お前は全然言いつけを守らないな」

「あ、師範代。オレ、こんなの撮りましたっけ？」

不機嫌そうに写る自分を指差して、レオラが不思議そうに尋ねる。どうみても最近のものだが、撮った記憶が無い。

それに、自分がこんなにも不機嫌そうなのは珍しい。写真は比較的好きな方だから、尚更だ。

「寝ぼけていたんだろ」

「そうかなあ……うん、そうだな。じゃあ師範代、おやすみなさい  
あつさり納得して、伸びをする。そろそろ本当に眠い。このまま階段を登って、後は寝るだけだ。」

「ああ、そうだ。忘れるところだった」

セリが階段下から声をかけてくる。

「何がすすか？」

「今度、イギリスに行つてこい」

「はあ？」

「イギリスだ、イギリス。イギリスはいいぞ。寿司に天ぷら、美味

しい物がいつぱいだ」

「師範代、それは和国の名物です」

「とにかく。イギリスに行け」

有無を言わさないその言葉に、レオラは首を傾げながらハイ、と返事した。

98・ただ、それだけを言いたかった。(後書き)

優しい僕等。

## 99・アイデアは何処に在った？

×××は静かに廊下を歩く。今日もいつもと同じ赤い着物を着ていた。右手に見えた中庭はいつもと変わらない静けさだった。

ぴた、と足を止める。目的の場所に着いて、深呼吸する。鼓動が僅かに速い。

「お祖母様、×××です」

「お入りなさい」

祖母に促され、す、と襖を開ける。新しく畳を張り替えたのだから。藪草のいい匂いが鼻をくすぐった。

「お座りなさい」

「はい」

言われたとおり、祖母の前へと正座する。

「先の藤堂家当主の暗殺、見事でした」

「ありがとうございます」

「今日より、香葉月家の全ての権限は貴女に預けます。香葉月朝葉

香　それをこれから名乗りなさい」

朝葉香は深々と礼をする。

「はい。香葉月の代理屋として恥じることないよう、より一層精進いたします」

「おいきなさい」

「はい。失礼しました」

来たときと同じように襖をあけ、同じように閉じる。名前が変わっても、庭の静けさはひとつも変わらない。

なんだ、こんなものか。朝葉香は物足りなさそうに笑う。

「×××姉様！」

「……葉月」

「良かったですね！」

いつのまにか妹がこちらに来ていた。にこにこ人懐っこい笑顔

で朝葉香を見る。

「何がですの」

「朝葉香と名乗ることを許されたんでしょう？ 喜ばしい事じゃないですか」

緩み掛けていた表情を戻して、冷静に答える。

「それほど喜ぶことでもありません。それよりも葉月、稽古はどうしたのです？ また怠けているんでしょう」

「あ、ばれちゃいました？ 今日暗殺方法のお勉強でしたから、逃げ出してきたんです」

舌を出して笑う妹を見て、呆れたように朝葉香は息を付く。

「そんなことじゃ、いつまで経ってもわたくしの同行無しの仕事は出来ませんことよ」

「いいんです。姉様と一緒になら、何も失敗せずに済みますから」

そう言っつて、葉月は慌てて今来た道を戻っていく。朝葉香が後ろを振り返ると、使用人がきよきよと何かを探しているようだった。

「あ、×××様。葉月様をお見かけになりませんでしたか？ 稽古から逃げ出して仕舞われたようで……」

朝葉香は少し迷っつて、それから違和感など何も感じさせないよう

に言っつ。

「さあ。今日は一度も見てませんわ」

「そうですね。ありがとうございます」

一日くらい、いいか。朝葉香は向こう側の塀を見た。着物を着ているというのに、器用に塀を乗り越えていた妹が、こちらに気が付いて手を振っていた。

三月も半ばに差し掛かった日のことだった。

「姉様は、違う世界に行ってみたいと思ったことはありませんか？」  
「違う世界？」

縁側で、突然妹が問うてきた話。

「ええ。こことは全く違う場所にある、私達の知らない世界です。そこには全然違う私達は居るんです」

夢見るように、その世界に思いを馳せる。

「平行世界、ですか」

「はい。その世界での私は、ただの女の子で、代理屋なんてしてなくって……」

物語を読み聞かせるように、夢を語る。朝葉香は夢物語が嫌いだったが、それを嬉しそうに話す妹は好きだった。だから、いつも何も言わずにただ黙って聞いていた。

「普通に恋をして、遊園地に行ったりして……」

朝葉香には想像力が無かった。母の胎内から出てくるときに、ごっそり忘れてきてしまったのだ。だからきつと葉月は、二人分の想像力を持って生まれてきたに違いない。

朝葉香は世界を語る葉月に声をかける。

「その世界でのわたくしは、どんな人間ですか？」

「そうですね………やっぱり、わたしのお姉様であることは変わっていないと思います。というか、そうあって欲しいですね」

朝葉香は静かに廊下を歩く。今日はいつもと違う黒色の着物だった。それでも、右手に見える中庭は相変わらず静かだ。

朝葉香は何も言わずに襖を開けた。祖母はいつものように厳格さ



を失わずにそこに居た。

「朝葉香」

「……はい」

部屋に入って、立ち竦む。いつもよりも空気が重いと感じるのは、自分の気のせいだろうか。

「今から私がいうことをよくお聞きなさい」

僅かに、祖母の声が震えた気がした。

「香葉月葉月など、この家に居ませんでした。貴女に妹など居ませませんでした」

それは、香葉月家からの排除。この世界からの排除。居なかったことにして、香葉月の名を守る為に。祖母の言葉が、ずしりと肩に乗った。

「死んだ者のことはお忘れなさい。良いですね？ 分かったのなら、おいきなさい」

「……嫌です」

朝葉香は、生まれて初めて祖母に反抗した。静かに、だけど確かな声で反対の意を示した。

「そんなこと出来ません、お祖母様。わたくしには確かに妹がおりました。葉月という名の、無力で無知で愚かで、代理屋なんて到底出来そうにも無い、そんな妹がいたのです。それを居なかったことにするなんて、わたくしには出来ません」

どこの世界に居ようとも、あの子の姉はわたくしだけなのですから。

言い終えてすぐに朝葉香は襖を閉めた。いつもものように音を立てないように気を配るのを忘れた。派手な音が鳴って、自分で吃驚する。

さつき見たときは、中庭の景色は変わっていた。池も、木も、全部覆がかかったようにぼやけていた。

それは自分の涙の所為だと気付いたのは、葬式の準備が整ったことを告げに来た使用人に指摘されてからだだった。



99・アイデアは何処に在った？（後書き）

あの子はまた、笑っているのかな。

二つに結った金色の髪がさらさらと風に遊ばれる。カノンは少し大きめの紙袋を両腕に抱えながら鼻歌を歌っていた。

時刻は午後の三時。冬の風は冷たいが、セレナーデ地方に比べればまだマシだ。今頃レオラは師弟水入らずであの寒い村に居るのだろうか。

城下町の入り口にある噴水広場まで来て、カノンは声をあげた。

「あ、ユーリさん！ ひっさしぶりー」

カノンが声を掛けた方向には、ちょうど噴水の縁に座ってトランプをきっているユーリが居た。また仕事をさぼって広場にいる子供達を集めて手品を披露していたらしい。今は誰も居ないが、たぶんそうなのだろう。彼がこの噴水広場に居るときは、大抵そんな理由だ。良家の御曹司とはとても思えない。

カノンが自分の方に駆けてくるのを見て、ユーリが怠そうに手を振った。

「おー……カノンは元気だなー……」

「おっと、そう言うユーリさんは元気無いな。またマーサル將軍に説教でも喰らったのかよ」

「おおっと、ピンポイントで大正解だよ。ったく、あのおっさん早く死なねーかなー……」

「おおおっと、それはまた爆弾発言だな！ ちなみにおれもそう思う。鬱陶しいんだよな、あの人。どことなく裏町業のこと敵視してるしよ」

すとん、とユーリの隣に腰を下ろす。石の縁は、スカートを穿いているカノンには冷たかったのだろう。少し顔を歪めていた。その隣でユーリは虚ろな目で自嘲気味に笑う。

「聞いてくれよカノン……この間、絶対に外せない警察軍の集まりがあつてよ、それをすっかり忘れてここに来てたら……」

言葉を切る。カノンが代わりに続きを言った。

「見つかったんだ」

「見つかりました」

盛大な溜息を吐く。カノンも呆れ気味にその様子を見ていた。さぼるならさぼるで、もっと見つかりにくい場所でさぼればいいだろうに、彼はいつもこの場所を指定席にしている。

「処罰は？」

「すごい量の書類を整理すんの。今までの事件の犯罪者名簿も作り直せつてよ。鬼だよあの人」

「ご愁傷様です、とカノンは手を合わせる。それを聞いて違和感を覚えたらしく、ユーリは首を傾げる。

「…そういえばさ、お前って電話の時は敬語だよな。あれ、なんで？」

「……なんでだろ？ たぶん、師匠が『親しき仲にも礼儀あり』つてよく言ってたからじゃねえの？ 特に手紙とか電話とかつてさ、相手の顔が見えないし。無意識にだよ」

無意識に、壁を作っていた。ユーリに指摘されてカノンは初めて気が付いた。そんな彼女の心内も知らず、ユーリは納得したように頷く。

「なるほどね。じゃあいつから、電話以外で俺に敬語を使わなくなつたっけ？」

「そんな昔のこと、忘れた。」

そう言つてカノンはユーリからトランプを奪い取つた。紙袋を自分の隣に置き、それを器用にきりはじめる。

「いつだったか、あんたが『お前に敬語を使われると気持ち悪い』つて失礼なことを言つてからだったよ。たぶんね」

「俺、そんなこと言つたっけー？」

「言つたよ。おれと師匠とメルニカさんとユーリさんで一緒にアイスを食べたとき。ほら、あそこの」

スピードのダイヤを持つた右手で、向かいにあるワゴンを指した。

今は冬だからアイスの代わりにドーナツを売っている。それを見て、カノンがユーリに輝いた目を向けた。

「ユーリさん、おれチョコレートドーナツが食いたい」

「おごれってか？ やだよ、なんで俺がそんな……」

すう、と大きく息を吸い込んで、わざとらしいまでに叫ぶ。

「あーあ！ 警察軍城下町地区担当のユーリ・バーガンディ少佐がこんなところでサボっ」

「よしカノン！ 何が食いたい？ 何でもおごってやるぞー！」  
「もが、ん！ んんん！」

ユーリに口を押さえられたカノンがドーナツの名称らしきものを必死で言う。がユーリに聞き取れるはずもなく。

「よしよし。チョコレートドーナツだけで良いって？ 待ってるよ、お兄さんがすぐに買ってきてやつからよ！」

上手い具合に解釈されてしまった。ワゴンへ走っていくユーリに向かって、開放された口で反論しようとするが、カノンは大人しく縁に座り直した。

「ま、いつか」

今日は機嫌が良い。さつき買い物をしたお菓子屋さんでオマケをもらったところだ。カノンは大きな紙袋を見て満足そうに微笑んだ。

「やること無いと暇だなあー」

粉砂糖だけのシンプルなドーナツを銜えてユーリが空を仰ぐ。既にチョコレートドーナツを平らげていたカノンが指に付いたチョコを舐め取りながら、呆れたように言葉を返す。

「いっぱいあるだろうが。っつーか、さぼってて良いのかよ。この

給料泥棒」

「いいんだよ。今日、本当は非番だったし。処罰は明日にするし」  
それでいいのか？ とカノンは言いそうになったが、まあいつものことだ。結局何をしても、ユーリはバーガンデイ家の跡取り。良い方向に転がっていくのだ。

「なー、カノン。面白い話無えの？」

「あるところに真っ白な子猫が居ました。子猫は前足も後ろ足も耳も顔もお腹も尻尾も、全部真っ白でした。これがホントの『尾も白い話』」

「わあ、すごく面白いな」

大根役者も真っ青の棒読み、しかも拍手付きだった。馬鹿らしくなったカノンが彼に向かって蹴りを入れる。すぐに行動に移る性格というのは、決して良いとは限らない。

「痛っ」

「ユーリさんこそ、面白い話しろよ。人に話させる前に、自分だろ」  
そう言われてみればそうだ。ユーリはドーナツを食べきって考える。天気の話、昨日あったこと、将軍の説教、明日の話。どれもありきたりで下らない話だ。

カノンと話すことは、いつもそんな意味の無い話ばかりだ。ユーリは少し迷った様子を見せたが、呟くような声で話し始めた。

「じゃ、ある少年の話」

一度カノンの方を見てから、ユーリは上に向かって話し始めた。

「あるところに少年が居た。少年はいつも狭い檻の中に居た。逃げ出すことのない様に、檻に閉じこめられていた。

少年は独りだった。周りにたくさん大人の大人が居たけれど、少年は孤独だった。

ある日、少年はその折から抜け出した。自由を得て、孤独から逃げるために抜け出した。

檻の外はとてつもなく広かった。大きくて、小さな少年なんかす

ぐに飲み込んでしまった。

だけど、抜け出した者は追いかけられる宿命だった。

少年は追いかけてくる奴等から逃げてばかりいたから、自由は手に入れたけれど、孤独であることに変わりは無かった。

少年はいるはずのない神を呪った。

そんな絶望の毎日が続くある日、少年は孤独ではなくなった。

自分と同じように独りぼっちだった少女を見つけた。少女の目はまるで雲一つ無い秋の空のように真つ青で、少年の母と似た色をしていた。

自分と少女。一人が二人になった。

だけど少女には待つべき人が居た。その人が少女の心に居る限り、少年は一人だとすぐに悟った。

少年は自分が独りにならないように、少女から無理矢理その人を消し去った。もう誰も此処へ来ないよ、と言って。

それから少年と少女はいつも一緒にいた。

何をするにしても、二人はいつも隣同士手を繋いでいた。まるで本当の家族のようだった。

孤独でない喜び。独りじゃない安心。少年の心は満たされていた。だから、彼を追う者がいることを、忘れかけていた。

出会ったなら、別れがくる。

少年は、ある澄み渡った空の日に死んでしまった。少女の目のように、綺麗な空だった。

死ぬときに、少年は思った。

生まれ変わったら、もう一度この空のような目をした少女に会いたい、と。

どんな姿になってもいい。もう一度、と



深呼吸をする。カノンはもうユーリの方を向いていなかった。先程買った、あのドーナツのワゴンの方を見て、尋ねてくる。

「それでその少年はどうなったの？」

「生まれ変わって、もう一度その少女に会えたんだ」

他人からすればハッピーエンド。少年は望み通り、また少女と出会えた。少女もまた、失った少年を取り戻した。幸せな終わり方だ。だけどカノンはまた尋ねる。

「少女は気付いているの？」

「さあな。少年は今までの少年とは違っていたんだ。だから、気付いていないかも知れないし、やっぱり気付いているかも知れない」

「そっか」

二人の口が同時に噤まれる。訪れる沈黙。だけど、二人にとって沈黙は居心地の悪いもので無かった。

冬の風が、カノンの髪を揺らす。

「幸せな物語だね」

「そうかな」

「そうだよ。少なくとも、おれはそう思ったよ」

「そっか」

「おれは好きだよ。その物語」

その答えを聞いて、いままでずっと上を向いていたユーリが、久しぶりにカノンを見た。

「お前はさ、この少女は生まれ変わった少年に気付いたと思う？」

カノンは静かに首を振る。

「さあ。それはその少女にしか分からないな」

「だよな」

「どちらにしろ、」

秋空に似たその目を細めて、カノンは立ち上がる。

「ずっとその少年の幸せを願っていると思っよ」

「……そっか」

ユーリも同じように立ち上がる。話し込んでしまった所為で、噴水広場はすっかり赤色に染まり始めていた。

「じゃあ、おれ、そろそろ帰るわ。シオンが待ってるし」

「おう。おれもこのまま帰ることにするよ。軍に帰っても、怒られるだけだし」

「この給料泥棒」

明日はさぼるなよ、と念を押して、カノンは城下町の入り口の方へ。ユーリは反対側へと向き直る。

二人の帰りを待つのは、あの頃とは違う人。

「それじゃあ」

「ああ」

紙袋を大事そうに抱えながら、カノンが歩き出す。彼女の背中は夕陽が逆光になって見えにくかった。

一步、二歩、三歩、四歩

そこまで歩いた彼女を見て、ユーリはゆっくりと歩き出す。家路とは反対方向の、彼女の歩いた後を追いかける。

一步、二歩、三歩と、半分

いつまで経っても後ろを振り返らない彼女を見て、彼はもう追いかけることを止めた。

彼女にはもう自分以外の家族がいる。二人きりだったあの頃とは違う。

呼び止めるために伸ばしかけていた手を、力無く下ろす。

自分に、彼女を呼び止める権利は無い。偽り続けるのが罪であり、そして罰だった。

ユーリは回れ右をして、足早に道に行く。自分が帰るべき居場所、バーガンディ家だ。

暫く歩いて、カノンは振り返る。

反対方向に行くユーリの背中では、最後に見たときよりも小さくなっていた。

追いかけてこない彼を見て、彼女はもう振り返ることを止めた。

一体何を期待していたのだろう。変わってしまった彼ともう一度会ったあの日、自分がこの道を選んだのだ。それが偽りを正さなかった者の責任であり、答えだった。

「ばいばい、ユリウス」

今そこにある自分の幸せと、彼が新しく得た幸せを壊さない為に、自分は後悔などしていないと、まるで自己暗示をかけるように何度も何度も言い聞かせた。

大丈夫。自分は今、幸せだ。

二人の距離は遠すぎた。

今更元に戻るような距離ではなくて。相手を呼ぶ声が届くほどでもなく、差し伸べた手は虚しく空を掴む。

出会いを奇跡と呼ぶのなら、別れは確かな必然で。

重なることの無い二人の掌は、共有した記憶だけを握り締める。

100・重なることの無い僕等の、（後書き）

少女は今も願い続けているのです。

\*\*\*\*\*

とうとう100話突破です。

これからも遠enraii雷とその仲間達を温かい目で見守ってやって下さい。

101・「物知りさんね」と彼女は言った。

「全体観測！ 大変よ大変、大変なのよー！ 現態観測がー！」

力任せにドアを開け放ち、音を立てながら家の中を走る女が一人しきりに「大変なのよ！」と大声で叫びながら、恐らく家人がいるであろう第二倉庫を目指してぐんぐん走る。手には手紙を持っていた。

「もっつ！ 出てきてよ、全体観測！」

客人を出迎えない怒りを床に当てる。だがそんな礼儀をフィンに求めるのは無理な話だ。

『これはこれは。お久しぶりです、ハルナ殿』

「サスケ！」

フィンとは違い、礼儀正しいサスケが廊下へと飛んできた。ハルナは嬉しそうにサスケに抱きつく。

「久しぶりじゃない！ 積もる話はあるのだけど、いまはそんな場合じゃないの！」

「……ウエストテール」

次に出てきたのはフィンだった。いつにも増して無愛想さに拍車がかかった物言いだった。

「全体観測、居たのね！ 大変な」

遮るようにして、フィンが人差し指をハルナの眼前に差し出す。

疑問符を大量に浮かべるハルナとサスケ。

「……一つ、キミに尋ねたい事柄がある。何故君はこの家に入れているんだい？ ボクは確かに戸締まりを怠らなかったのというのに」  
そう、鍵は閉まっていた。だけど外部からの侵入を許してしまっている。そのフィンの言葉に、明らかに挙動不審になる彼女。目が思いつきり泳いでいる。右手で、右のポケットを握りしめたのをフィンは見逃さなかった。

「サスケ」

『はい』

「いますぐにウエストテールの右ポケットを調べろ」

『かしこまりました！ 無礼をお許し下さい、ハルナ殿』

サスケがポケットに嘴をいれる。その行動を阻止しようとハルナが追いやる、が相手は人間よりも遙か弱き鴉。そんなに強い力で押し返すことが出来ない。自分も鳥を飼っているためか、自然と抵抗が出来ない。

「だっ、駄目！ 駄目よサスケ！ レディは丁重に扱って展開観測に教わらなかつたのかしら!？」

「動くな、ウエストテール」

一段と不機嫌な声でフィンが唸った。

「サスケ。ハルナのお望み通り、丁重に調べろ」

『と、いうわけです』

「きゃー！ 変態！ 変態カラス！ カグヤに言いつけてやるんだから！」

『幹旋所の所長と一緒にしないでください！』

人間と鴉の激しい攻防の末、チャラ、とポケットから出てきたのは金色に光る合鍵。いつの間にか作ったのだろうか。予想通りの品物が出てきて、フィンはあからさまに溜息を吐いた。

「見解観測、ハルナ・ウエストテールに問う。製造月日、製造理由及び使用回数を五十文字以内で答えよ。句読点含む」

冷たく言い放った。

「……………つ、作ったのは去年の春先。製造理由は情報閲覧のため。使用回数……………四回」

四度も侵入していたらしい。しどろもどろに答えるハルナに、フィンがとどめの台詞。

「いいことを教えてあげるよ、見解観測ウエストテール。それは『閲覧』とは呼ばない。『盗み見』だ」

「あら、とつてもいいことを教えていただいたわ！ ありがとう、全体観測。さすが展開観測の後を継ぐ物知りさんね！」

つぶ、と両手を組んで左頬に添える。なんとも可愛らしい仕草だ。それに対してフィンがやんわりと笑った。思わずハルナの目が丸くなる。

「いや、礼には及ばないよウエストテール。さあサスケ、その鍵を渡してくれ」

『承知いたしました』

サスケに銜えられた鍵が、フィンの掌へと渡される。それと同時に脱力した声が響く。

「ああああ……私の汗と涙と努力の結晶が……」

『「どこが努力？」』

「ところで。何が大変なんだい？　すごく慌てていたようだけど、未だに鍵を取られたショックでめそめそするハルナに、当初の目的を問う。その質問にハルナがあ、と思い出したように顔を上げ、そして勢いよくフィンに掴みかかった。

「そうよ、大変なの！　この手紙を見て！　べしつと渡された手紙の差出人は。」

「『アルル・キャラメリゼより、親愛なる同僚ハルナ・ウエストテールへ』？　アルルの手紙じゃないか」

「見りゃ分かるわよそんなこと！　中身よ、中身！」

「えー……読むの面倒臭いよ。サスケ、代わりに読んで」

何ともやる気の無い答えが帰ってきた。が、奪い取るようにハルナがその手紙を取る。

「もうっ！　じゃあ読むわよ、読めばいいんでしょ！　『親愛なるハルナ。俺はもう駄目だ。生きる気力を失ったよ。いままで仲良くしてくれてありがとう。よければフィンにも“ありがとう”と伝えておいてくれ。現態観測、アルル・キャラメリゼ』」

そして沈黙。

サスケがあんぐりと口を開けてハルナを見、ハルナはフィンの様子伺う。

しばらくその手紙の意味を考えていたフィンが、ようやく放った一言は。

「あ、そう。それは大変だね」

無愛想で面倒くさそうな答えだった。

「それだけー!？」

悲痛な叫び声。ハルナが再度フィンに掴みかかって、前後に激しく揺さぶる。

「あのアルルがここまで追い詰めてるのよ！ 死んじゃうかもしれないのよ！ 一応アナタの兄弟子でしょ!？」

「ああ、そういえばそんな感じだったかな……… ちょっとストップ、ウエストテール。すごく気持ち悪い」

いつもそれほど良いとは言えない顔色が、さらに真っ青になっている。揺さぶられるのは苦手らしい。ハルナから開放されて、フィンがかなり気持ち悪そうにしゃがみこんだ。サスケが慌てて安否を気遣う。

そんな彼の腕を引っ張って、ハルナはずかすかと来たときは反対方向へと進み出す。

「さあ行くわよ!」

「どこへ?」

まだ回復していないフィンは、為す術もなく彼女に引きずられていく。抵抗すると吐きそうだ。

「決まってるじゃない！ 現態観測の家よ。案内なさい!」

どうやらフィンを尋ねてきた理由は、そういう訳だったらしい。アルルの家を知るものは情報屋とて数少ない。

仕方がないと諦めたフィンは、どうすればいいか迷っているサスケに手を振った。

「サスケ、留守番よろしく」

『はい、お気を付けて。ハルナ殿、フィンのことよろしくお願いし



ますね』

分かってるわよ、と言うハルナの腕の先には、引きずられた所為でまた一段と気持ち悪くなった主人が見えた。

101・「物知りさんね」と彼女は言った。(後書き)

「さあ、全体観測！ 現態観測の家はどこかしら？」  
「……………」  
返事がない。ただの屍のようだ。

102・「最悪だ」と彼が言った。

「次の曲がり角、約五十二歩」

フィンが前方を行くハルナに言葉をかける。ハルナはというと、あれからずっとフィンのコートを引つ張って歩いている。それにも関わらず、一切の疲労を感じさせない顔色を見ると、見かけに寄らず体力に自信があるらしい。見かけ通り体力の無いフィンがそんな彼女に声に不満を漏らした。

「ウエストテール。もうちょっと丁寧に運んでくれない？ 石畳が足に引つかかかって痛いんだ」

運んでもらっている身にも拘わらず、ずうずうしく注文を付けてくるフィン。彼の神経の凶太さを知りたいとハルナは心の中で毒づいた。

「……じゃあ自分で歩きなさいよ」

「えー、面倒臭いよ。キミが勝手に連れてきたくせに……ボクが親切にもこうやってアルルの家に案内してあげてるっていうのに。四回に至る不法侵入について何も追求してないのに。ねえ天国にいるナチー、世の中は理不尽だよー」

首根っこを掴まれたままフィンは、天を仰ぐ。恐らくそこにいるであろう自分の師に向かって現状の不満をたらたらと零していた。

「分かった、分かったわよ！ 丁寧に運ばせて貰います！ お加減はいかがですか、全体観測様！？」

「まあまあつてところかな。あ、今で丁度三十歩くらいだね。もうすぐ大きな十字路に出るはずだから、左に曲がって約三十二歩。右手に細い裏路地を見つけたら、そこを約四十六歩ね」

そこまで言つて、くあ、とあくびを漏らした。それを聞いたハルナが呆れて溜息を吐く。

「……よくもそこまで落ち着いていられるものね。あの現態観測が『生きる気力を失った』だなんて言つてたのよ？ ただ事じゃない

わ。悩みなんて皆無に見えるあの現態観測が、何かを思い詰めてるなんて……！」

「どうせ下らないことに決まってるよ」

即答だった。フィンの返事に、ハルナが苛立ったようにフードを勢いよく引つ張った。その反動で、フィンが少し苦しそうに呻く。

「もうっ！ 全体観測は薄情ね！」

「……これでも、キミよりはアルルとの付き合いが長いつもりだよ。アルルは人騒がせな奴なんだ。こんなことで一々構ってられないよ」  
兄弟子を思い出しながら、フィンはもう一度空を見上げた。

「だよー、ナチ。アルルは昔っから、大袈裟な奴なんだよー」

「ちよっと、気味悪いから止めてよ！ 本当に展開観測がいるかと思っちゃうじゃない」

「まさか。キミは幽霊の存在を信じているの？ 見解観測ともある情報屋が、根拠のない噂に惑わされているなんて知ったら、世間の笑いの種だろうね。ああ可笑的い」

全然面白く無さそうにフィンが呟いた。ハルナはそんな彼を殴り飛ばしたい気持ちを抑え、その怒りを歩みの原動力へと変えた。立派な人間だ。

だが、少し後ろを見やる所を見ると、幽霊の存在は否定しきれないらしい。その彼女の行動を見て、フィンはまた声を出した。

「ナチー、ウエストテールが幽霊を信じてるよー」

「もう止めてっば！」

十字路を左に曲がって、少し進めば右手に細い裏路地。フィンが言うには、そこを四十六歩進むらしい。どうして歩数まで完璧に記憶しているのだろうか。それが彼の『全体観測』たる所以なのだろう。彼は誰もが認める、ナチを越える情報屋なのだ。ただ、彼自身が認めていないだけ。恐らく、この先もずっと。

ハルナは早くアルルの家へ着くように急ぎ足になる。アルルが心配なのもあるが、フィンと二人つきりというのモなかなか疲れるものがある。どうせならサスケに付いてきてもらえば良かった。そう

すればもう少し楽しかったろうに。

ハルナが後ろを恨めしそうに見たが、フィンには目を瞑って心地よさそうにうとうととしていた。人に引きずられながら、よく眠れるものだ。それともこの揺れが心地良いのだろうか。驚き半分呆れ半分の顔でハルナはもう一度前を見た。が。

「……………あれ？　行き止まり？」

ちゃんと言われたとおり歩いていたのだが、いつのまにか塀には蔦が生い茂る行き止まりに到着してしまっていた。誰も使っていないような場所だ。蔦に巻き付かれた塀が、とても哀れに見える。

「ちよつと全体観測。アルルの家は何処よ？　なんか行き止まりっぽいけど……………」

「ここだよ」

ハルナに預けていた全体重を久しぶりに自分の両脚へと戻し、フィンには行き止まりの塀へと手を掛けた。未だ理解しきれていないハルナにろくな説明もせず、ぴよんぴよんと何度か飛び跳ねて、勢いを付ける。

「全体観測？」

「せーのっ、と」

出っ張った煉瓦に両脚を上手に乗せて、半分ほどの高さまで飛び乗ったフィン。頑張ろうと思えば上れる高さだが、頑張ろうと思わなければ上がれる気がしない高さ。そこをフィンは慣れた様子で、所々に出た煉瓦に足を掛け、ようやく一番上の塀へと跨った。

その様子を、口を開けたままハルナが呆然と見上げていた。

「……………何してるの、ウェストテール。早く上らないと置いていくよ」「ええ！　あ、ちよ！　ちよつと待った！　すぐ上るから！」

ハルナも見様見真似で塀をよじ登る。フィンが足を掛けていた場所を文字通り手探りになつて這い上がりながら。多少不格好な形になるが、これしか方法が無いのなら仕方ない。

大幅にフィンよりも時間がかかったが、それでもなんとか塀の上へと辿り着けた。

「け、結構コツがいるわね」

「慣れれば大丈夫だよ」

今度はひよい、と先程とは反対方向へとフィンが飛び降りる。そこは草の生い茂った庭のような場所で、落ちた衝撃を押さえるクッション役になっているようだ。

結構な高さに一瞬戸惑ったものの、意を決してハルナは飛び降りて、

「いったー！」

失敗した。

劣るように腰をさすりながら、次に彼女の目が映したのは、書庫が三つあるフィンの家よりも大きな屋敷だった。

「……でか……現態観測ってお金持ちだったの？」

「さあね。でもこれは元々アルルの家だった訳じゃないよ」

「あら、そうなの？」

「うん。昔聞いた話だけど、アルルがナチの元を出て一人暮らしするときに、格安で買ったんだって」

「格安？ こんなに立派なのに？ 変な話ねー」

庭の草を掻き分けて前を歩いていたフィンがくるつと百八十度回転し、彼女の方を向いた。素早かったので、ハルナが思わず身構えてしまった。

「そう……変な話。変だから安いんだよ。分かる？ ウェストテール」

意味深な台詞を放つ。最初は首を傾げていたハルナだったが、思い当たる節があったらしい。何かを思いついた表情を見せた後、見る見るうちに顔色は青くなっていった。変な話イコール、奇妙な話。「も、もももも、もしかして！」

「……………いわくつきの物って、大概安いよね。タダ同然で手に入ったり」

ハルナが引きつった笑顔になる。人は恐怖のボーダーラインを越えると、笑ってしまうのだろうか。首を左右に何度も振って力一杯

否定したが、フィンが潜めた声でハルナへと耳打ちするように呟いた。

「出るんだって……この屋敷」

ハルナから離れたフィンは、普段無表情なくせに、今に限ってうつすらと口角をあげる。極々自然に微笑んでいる。それが余計に恐ろしく感じて、ハルナはがしつと彼の腕を掴んだ。

「……痛いよウエストレル」

「この腕を放しちゃ駄目よ。お願いだから！」

やりすぎたか、とフィンは少し後悔した。体力の有り余るハルナに腕を掴まれると、少しばかり痛い。だが自業自得なので何も言えない。今度はフィンがハルナを引っ張る形になって、アルルの家の玄関へと歩き始めた。

「何年ぶりだろ、アルルの家に来るの」

「あ！」

「……なに？」

ハルナが信じられない物を見たような目でフィンを見る。まさか本当に出たのだろうか。だが彼女が言いたいのはそういうことではない。

「そういえば全体観測！ あなた、外に出られてるじゃない！」

「……気付くの遅くない？ というか、知らなかったの？ てつきり知ってるものだと思ってたよ」

「初耳よ！ 良かったわねー、苦手なことが克服できて！」

よしよし、と頭を撫でようとしてくるので、フィンは出来るだけ自然に避けた。過剰なスキンシップはお断りだ。適度でもお断りだが。

「置いていくよ……」

「ごめんごめん」

立派な取っ手に手をかけ、時計回りに回す。すると簡単に扉が開かれた。意外なことに鍵はかかっていたいなかったようだ。

「不用心ねー」

「そうかい？ 鍵を閉めてても侵入者っていうのは入ってくるんだから、結局同じじゃないの？」

前科のあるハルナの耳にはとても痛い言葉だった。もちろんフィンはそれを分かっている。扉を大きく開け放ち、二人が中へと入る。一応『生きる気力を失った』人がいるという緊急事態だ。断り無く入ったとしても問題は……まあ無いと言いきれないが。

「あらあら？ 同じ情報屋同士、協力し合うことも必要だと思うわ。それに金品は盗んでないわよ」

「当たり前だよ。それじゃあ本当に泥棒じゃないか。といっても、情報を盗み見してる時点で泥棒とさして変わらないんだろうけどね」

「まあまあ、情報は共有し合うモノよ。独り占めは良くないわ」

都合の良い台詞をハルナが放った途端、ゆっくりと閉まっていたはずのドアが、誰かの手によって勢いよく閉じられた。大きな音が響く。予想外の展開に、ハルナがより一層の力を込めてフィンの腕を掴んだ。

「な、なに!？」

まだ昼前のはずだが、陽の光が入りにくく、照明が点いていない所為で廊下は暗い。フィンが慣れてきた目を凝らして辺りを見回す。特に違和感はない。

「……もしかして、本当に出たりしてね」

「やだ! 冗談はやめ、」

ハルナが本気で嫌そうな声をあげると同時に、フィンは目の端に何か映った気がした。暗くてよく見えなかったが、確かに何か動いた。

その瞬間。

がし。

「あ」



「　　ッ!？」

フィンとハルナの腕が、何者かによって掴まれた。ハルナが声にならない叫びをあげる。

そして、腕を掴んだであろうその人物が、嬉しそうな声を発した。

「　　ッ!かまーえた!」

その声を聞いて、フィンは脱力気味に答えた。

「　　捕まった………来なきや良かった………」

「　　まあまあそう言うなよ、フィン。ひっさびさに兄貴分に会えた喜びを全身で表現しようぜ!」

「　　いままさに全身で表現してるよ。ああ、最悪だったね」

完全に暗闇に慣れたフィンの目が捕らえたのは、わざと眼鏡をずらして掛けている人物。暗い所為でよく見えないが、本来なら赤みがかった茶色の髪を持つ、アルル・キャラメリゼだった。

102・「最悪だ」と彼が言った。(後書き)

現態観測アルル・キャラメリゼが現れた！ どうする？

帰る

とりあえず帰る

とにかく帰る

フィン は 帰る を使った！  
腕 を 掴まれて帰れない！  
アルル の 攻撃！

103・「予言だよ」と彼が言った。

「なるほどねえ……………これは確かに生きる気力も失うわ」

それはもう心底嫌そうな顔をしてハルナが言い放った。そんな彼女の左腕をしっかり掴んだままで、だろだろ？ とアルルが何度も同意を求めている。ちなみに反対側ではフィンの右腕をしっかりと掴んでいる。逃がさない、と言う心内が見え見えだった。

「姉貴は人使いが荒いんだよ！ これを一週間以内に仕上げるのは普通に無理じゃね？」

これ アルルの言う「これ」とは部屋一杯に積まれた裏町幹旋所の資料である。資料には各裏町業者の名前、職種、階銘、連絡先、その他色々なデータが詰まっている。アルルの姉は裏町幹旋所に務めているが、こうして時々アルルに仕事の手伝いを要求するらしい。

今回彼が姉に頼まれた内容というのは、これらの資料に最新の情報を書き加え、そのうえ職種ごとに分けた後、階銘順に並べ直すという何とも地道ながら大変な仕事だった。

「…で、手伝って欲しいから、私にあんな手紙を寄越したのかしら？ 現態観測」

「その通り！ ハルナは人が良いから、あんな風な手紙を受け取れば、きつと心配して俺の様子を見に来てくれると思ってたんだよな。フィンが来るのは想定外だったけど」

「ボクも想定外だよ」

正直な気持ちを伝えた。が、ハルナがそれを一蹴する。

「ちよつと全体観測！ アナタは酷いこと言われてるのよ、少しは反論なさいな！ それにね、悪いけど現態観測。私も暇じゃないの。アナタの仕事を手伝うなんて……………」

「あれあれ？ 同じ情報屋同士、協力し合うことも必要だと思うよ、俺は」

にへらと笑って、軽そうにアルルは答えた。ハルナが先程フィンに言っていたのと全く同じ言葉を。ちなみに両手は未だにしっかりと二人の腕を掴んでいる。逃がす気は、無い。

しかしそこはハルナの方が一枚上手だった。

「あ！ 街外れの便利屋さん！」

アルルの遙か向こう側を見て叫んだ。瞬時にアルルが反応する。

「えっ！ カノンちゃん来てんの！？ どこどこ！？」

ぱっと離されたアルルの手。ハルナはその隙をついて脱兎の如く逃げ出した。

「あーはっはっは！ こんな古い戦法にやられるなんて、アナタもまだまだね、現態観測！ せいぜい全体観測と仲良くお仕事なさい！」

「あー！ 卑怯だぞハルナ！」

アルルが振り向いた先に、もちろんカノンは居なかった。代わりにあの膨大な資料があっただけだ。

「ウエストテール……ボクを生け贄にしたね」

再びアルルに捕まったフィンは、まさに捧げられたヤギ。スケープゴートだった。

「あらあら、アナタが悪いのよ全体観測。あんな隙を作ってあげたのだから、自分で脱出するべきだったわね！ よく覚えておきなさい、全体観測。女はね、したたかなのよ！」

ご機嫌よう。そんな言葉を吐きながら、ハルナは一目散に去っていった。逃げていく鴨、しかしアルルは追いかけようとはしなかった。二兎追う者、一兎も得ずだ。あの全体観測の異名が付くフィンがまだ手元にあるのだ。慌てて追いかける必要も無い。

「まあ、そんなわけだ。手伝ってくれや、我が弟よ」

「やだよ……弟になったつもりも無いよ」

うんざりして答えるフィンに、アルルは演技染みた溜息を吐いてみせ、そして天井へと目を向ける。

「ちょっと今の聞いたー？ ナチ。あなたの愛弟子は、兄弟子さま

を手伝ってやるうとは思わないだつてさ。ひつでー。こいつが情報屋になるとき、俺手伝ってやったのになー」

それに合わせるようにフィンも首を上へ向ける。

「本当酷い話だよなー、ナチ。アルルはボクのことをこき使おうとしてるんだ。しつかり腕を掴んでるし、逃げられないよ。なんとかしてよナチー。もううんざりだよ」

二人が二人ともこんな調子では埒があかない。ここは年上であるアルルが何か行動を起こすべきだと思い、チャリ、と何かをフィンの目の前で揺らした。赤いリボンの先、銀色に光るそれはフィンの目の中でキラリと反射した。

「手伝ってくれたら、ハルナの店の合鍵やるよ。情報閲覧しほうだい」

「……………それは、本人に了承を得て作った鍵？」

「ん？ 知りたい？」

につこり。とてもナチに似た笑顔を見て、フィンは首を激しく左右に振った。なんだ？ 今は合鍵作りが巷で流行っているのか？

そんな巷、無くなってしまえ。

「なんなら他の店の鍵でもいいぜ」とアルルがあつさり言うてくるものだから、フィンはさらに激しく首を振った。一体誰が被害者になっっているんだ。

「不法侵入が当たり前になるだなんて……………情報屋も堕ちたものだね……………」

「こんなの常識、常識。せいぜい複製出来ないような鍵を付けるこつたな」

リボンの輪っかになった部分へ人差し指を入れ、くるくると回す。それを見て、フィンは何度か口を開けたり閉じたりする。見解観測、ハルナ・ウエストテル。彼女は犯罪者などの裏の情報に精通している。彼女の情報を得て得することはあっても、損することは無いだろう。それに、自分は彼女に盗み見をされていた過去がある。これでお互い様だ。

何度目かの溜息を吐いて、フィンは頷いた。

「分かった。手伝うよ」

交渉、成立。くるくる回っていたソレが、弧を描いてフィンの手元へと収まった。

「そうくるだろーと思ったよ」

ずれた眼鏡を直そうともせずアルルはまた、へらつと笑った。

\*\*\*\*\*

「アルル。オラトリオ王国のカナートシティ出身の村外れの都合屋つて、今はどうなっているんだっけ？」

「ああ、キリヤ・テイ・コナ？ いまは休業中だよ。確か実家の手伝いをしてるはずだな」

クリップで情報紙の束をまとめながら、アルルはフィンの質問に答える。フィンはその答えを書き留め、さらに並び替え、次の資料へと目を移す。

「じゃあ同じくオラトリオ王国レゼビア街出身の、街外れの伝言屋は？」

「クラリス・ヴィ・トーアなら、今はその能力を大手に買われて『ヴォイシーズ』のNO.24になってるはずさ。すげえ出世だよな。世の中何があるか分かんねえよ」

すげえすげえ、と声にだしながら、何冊目かの情報紙の束を箱へ

と入れる。

「これでオラトリオ王国出身者は終わり。後はレスティナ国だけだよ」

「おう？ もう終わりだったか？ なんかオラトリオの裏町業者減ったなあ」

やっとフィンの方を振り向いてアルルが問うた。よくずれる眼鏡は、いまは前髪をあげるためのカチューシャ代わりになっている。

「そりゃそうだよ。ディヴェル国王が暗殺されてから、ごたごたしてるからね。反国王軍が色々やってるらしいけど、あの国はもう終わりだね。裏町業者が少なくなっているのが良い証拠だよ」

「へえ、そんなことになってたんだ。知らなかったなあ。さすが全体観測さまさま」

「……普通だよ。アルルは個人情報に長けている、ボクは全体を見据える。それぞれの専門が違うだけだ」

素っ気なく言い切る彼を見て、そういうもんか？ とアルルがまだ何かを言っていたが、フィンは何も答えずに資料を片付け始めた。フィンは、誉められることを極端に嫌う。アルルはいつもそこが気がかりだった。昔の彼は、誉められることをここまで嫌っていなかった。きつと彼にとって誉め言葉は、ナチを失った彼への慰めに聞こえないのだろう。

アルルは立ち上がると、フィンの方へと歩いていく。床まで敷き詰められていたあの資料達は、フィンのお陰でもう机の上に少しだけだ。

「……なに？」

突然頭を撫でてきたアルルに対して、フィンは不機嫌そうに漏らす。手元にはまだ残りの資料が握られている。

「特に理由はねーよ」

「じゃあ止めてよ。不愉快だ」

「まあまあ、良いじゃねーの。一応兄代わりみたいなもんだし？

たまにはこうやって弟を甘やかしたいわけですよ」

まだ止めるつもりが無いアルルを見て、フィンは不機嫌そうな顔を呆れた顔に変えた。

「丁寧に断りしておくよ。それに、アルルが兄面したいのは、自分が弟だからだと思うよ。末っ子は弟妹を欲しがるものなんだって誰に聞いたかは忘れたけど。フィンは最後の資料をまとめ上げながら言った。レステイナ国の裏町業者達も全て並べ終えた。」

「そんな感じなんだろうーな。特に俺、姉貴のこと嫌いだし」

「アンジユ・キャラメリゼも酷い言われ様だね」

彼の姉を思い出して、フィンは哀れむように言った。彼女のことを良い人間だとは言にくいのが、有能な人間であることに違いは無かった。裏町斡旋所があそこまでやっていけるのも、きっと彼女がいるからだろう。

「兄弟姉妹がみんな仲良しって訳じゃ無えんだよ。あ、終わった？」  
「終わった」

はい、と最後の資料を渡して、フィンは立ち上がる。

「じゃあボクはこれで……」

「そう急くなよー。茶でもいれるからさ」

特に、断る理由も無い。フィンはもう一度椅子へと座り直し、アルルを見た。

「色々、話したいこともあるしな」

やっぱり軽い笑顔だった。それがアルルの本心なのかどうかは、フィンにも分からなかった。

\*\*\*\*\*



アルルの入れたコーヒーは値の張る物なのか、良い香りが部屋中を満たした。お互いに何も言わず、ただコーヒーを飲む。

久しぶりに会ったのだ。積もる話もあるはずだった。だけど、敢えてするべきでもない話の様な気もする。少なくとも、フィンはそう思った。こうして顔を合わすだけで、十分だと思えるのだ。

フィンが二杯目のコーヒーを口にしたとき、アルルが切り出した。「情報屋はさ」

「うん」

フィンがコーヒーに映った自分の顔を見て、答えた。

「昔、予言者と呼ばれてたんだってよ。ナチが言ってた」

「なんで？」

「ありとあらゆる情報から、未来を予測していたんだってさ。お前のルールからは考えられないよな。そんな確固たる証拠も無い不確かな情報を他人に渡すなんて」

その通りだった。フィンにはそんな曖昧な情報を誰かに渡すなんて耐えられないことだった。昔の人とは言え、よくもそんなことが出来たものだと思ふ。

そんな彼の心境を見抜いたのか、アルルは笑いながら続ける。

「まあ情報屋の在り方なんて人それぞれだもんな。そういう人も居たってことだな……」

最後の妙な間を、フィンは見逃さなかった。アルルが、いつもと違う。

何か言いたいことを、言えずにいるような、そんな感覚がフィンにあった。

「本当は何が言いたいのさ」

アルルの瞳孔が微かに大きくなる。それでも彼はフィンを見ない。その代わり、右にあるコルクボードを見た。柵ボードには、ありと

あらゆる写真が乱雑にピンで留められており、彼がかつて小さかった頃、ナチ・イズミと二人で撮った写真も飾られていた。

「……良いことを教えてやるよ、フィン」

いつもの軽い調子は無く、真剣な声を出す。

「何？」

フィンも、そのボードへと視線を移す。三人で撮った最初で最後の写真が、真ん中にあつた。

「この国から、レスティナ国から出て行くことをお勧めしとくそれは、あまりにも唐突な一言だった。

唐突で、衝撃的な言葉なのに、それをあっさりと言つてのけてしまった。アルルはやつとフィンを見て、笑つた。無理をしてる笑いじゃない。いつものアルルだった。

「ぶはっ………すげえ顔してんぞ、フィン」

「いきなり何を言い出すのかと思えば………引つ越しを勧められるとは思わなかつたよ」

相当驚いた顔をしていたのだろう。フィンは平常心を保つためにカップへと口づけた。だが予想に反してカップの中身は既に空になつていた。

「なんでまた、そんなことを言い出すわけ？」

「近いうちに、また戦争が起こると言つたら？」

フィンの肩が少し揺れた。

「それ、忠告のつもり？」

「いんや、予言だよ」

そう言つて渡してきたのは、彼が独自に集めたであろう細かな情

報が書き込まれたメモ帳だった。

「……………随分と、調べ上げたみたいだね」

「俺が調べた情報によると、中央軍の総司令部最高責任長スケル・ワルツハイネが病に伏せてかれこれ半年。もういつ死んでもおかしくない状況だ。これを受けて、軍部では新たな指導者を立てるよくだな。いま候補に挙がってるのは、戦争好きで有名なクロウ・リアハーデン。こいつが指導者になれば、確実に戦争が起こるね」

アルルから受け取ったメモを見る。どうやら軍部からは絶大な支持を得ているようだ。

「もちろん、多くの国民は反対だろうさ。だけど、軍部はどうだか。まだ二年前の休戦以来、ゲン国とは決着が付いていない。何が何でもこいつを引き上げて、戦争を始めるつもりなんだろうな」

「ボクは、この国から出ていかないよ」

はつきりと、フィンがそう告げた。

「……………なんでだよ。折角教えてやってんのに」

「戦争が本当に起こるかどうかなんて、誰にも分からないから」

その一言に、アルルが呆れたように声を出す。

「分かり切ったことだろ。過ちは繰り返されるんだ」

「それでも、まあ、最後までここにすることにするよ。別に行きたい国なんて無いし」

「お前を独りにさせた戦争を、またやろうとする国だぞ!? なんの未練があるっていうんだよ!」

言った後に、後悔した。アルルは慌てて息を飲み、すぐに謝罪した。

「わりい……………カツとなった」

「確かに、ボクは戦争孤児だよ。戦争の所為で、両親の顔も知らないし、自分が一体何者なのかも知らない。そんな国を憎むべきなんだろうけど」

アルルには、次の言葉が分かった。次にフィンが言おうとしている言葉が、分かっていた。

「だけど、ナチと出会った国だからね。出ていこうとは思わない。まあ、なるようになるよ」

「ごちそうさま。そう言ってフィンが立ち上がる。アルルはまだ座ったまま。もう引きとめようとはしない。」

「アルル。じゃあ一つ聞くよ。キミは出ていくつもりだった？」

「……いや。お前と同じ理由で、出ていけないつもりだったよ。ただ、もう誰かが死んだり、居なくなったりするのは勘弁だったから、せめてお前だけにでも教えておこーって思ったんだ」

「ソリティアには言わなくて良かったの？ 好きなんですよ」

フィンの言葉に、困ったように笑う。

「うーん……たぶんさ、カノンちゃんはレスティナが好きだろ。だから言っても聞かないと思っただんだよな。ていうか、殺しても死ななさそうだしな」

「同感」

そして、やっと立ち上がる。

「今度、二人揃ってナチの墓参りに行こうぜ」

「違うよ。一羽を忘れてる」

その一言で、やっとサスケの存在を思い出す。苦笑いしながら、アルルが答えた。

「あ、そうだった。サスケにもよろしく。フィンが嫌になったら、いつでも来いよって言っておいてくれな」

「誰が伝えるか、そんなこと」

不機嫌さを増してフィンが扉をあける。

「じゃーな。今日は助かったよ。くれぐれもその鍵、ハルナに見つからないようにな」

「そんなへまはしないよ。それじゃあ」

かちやりと静かに閉められたドアの向こうでは、あの長い廊下をゆっくりとフィンが歩いているのだらう。

「なるようになる、か。さて、どーなるかな」  
アルルが先程持っていたメモ帳を、丁寧に畳んで机の引き出しへ  
としまいこんだ。

103・「**予言だよ**」と**彼が言った**。(後書き)

予言者の**眩き**。

104・誰も知らない、背中あわせの僕等。

どうしてだとか、なんでだとか、そんなことは何も考えずに、ただ思った。

今だけは、見えないふりをしておこうと思った。

あの人の突飛な行動とか、とんでもない思い付きには慣れていたつもりだったけど、今回は今回でまた唐突なことだった。思い立ったら吉日。誰だ、そんな言葉をあの人に教えたのは。迷惑極まりない。

「いつぶりだろな……」

がたんごとんと規則正しく揺れる列車に身を預ければ、心地よさに目蓋が自然と閉じられる。それを無理矢理こじ開けて窓の外を見れば、昔に見た風景が少しも変わらずにそこにあつた。

イギリスに来るのは、久しぶりだった。

もつと嬉しそうにしても良いのかも知れない。本来なら、自分の故郷となる国なのだから。自分の生まれた国なのだから。

それでもオレには、思い出があるとは言いにくい国だった。当たり前だ。この国で生まれたのは、アゲハの方。『レオラリアナ』という人間が生まれたのは、レスティナのあの村なのだから。

ここでの記憶は、酷く曖昧だ。

「……はあ……今更何をしに行けつて言うんだよ」

いまこの場に居ない師範代を呪い、オレは溜息を吐く。

それと同時に、なら来なきやいいだろ、と自分で自分につっこんだ。そう、別に何から何まであの人の言うとおりにしなくてもいい

のだ。自分はもうそろそろ大人と言ってもいい年なのだし、一人で考えて、決めて、行動できる。

なのに。自分は、自分の意志でこのイギリス行きの列車に乗っていたのだ。

「……………あー、もう…！」

がしがしと頭を掻いて、もう一度窓の外を見る。自問自答はもう止めだ。全然面白くもなんとも無い。くそ、何やってんだ、ホント。自分に苛立ちながら見た外の景色は、真っ白な一面の雪。昔と変わっていないのなら、ここは確か田園だったはず。いまはもうすっかり冬景色になっている。

まだまだ着くまでには時間かかりそうだ。雪景色に飽きて、ふ、と窓に映った自分の顔を見た。眼は、いつだって同じ赤色。忌々しい赤だ。抉り出してやりたい。

その眼に蓋をするように瞼を閉じれば、さつきとは正反対の闇落ち着く。

眼を睨ると、余計に思考する隙が出来てしまったように感じる。

面白くないと分かかって、脳が勝手に自問自答を再開し始めた。オレは本当に馬鹿だと思う。

繰り返されるのは、ずっと同じ質問。一体この国で何をしろと。

観光するつもりも、仕事するつもりも何も無い。行く宛だって無ければ、行きたい場所も無い。元より、オレはこの国があまり好きではない。むしろ嫌いの部類に入ってる。師範代とオレを拒絶した国だから。

本音を言えば、長居はしたくない。

さっさと行くだけ行って、ちゃんと証拠になるようなものを買ってそれを師範代へのお土産にして。

ああそういえばカノンが美味しい紅茶が飲みたいって駄々を捏ねていたから買って帰ろうかとか、クウヤが最近この国で仕事をしていたとか、まるで今のこの状況から逃避するかのように違うこと



を考えて、結局出たのは答えじゃなくて溜息。

本当に、何をすれば良いのだ。この国へ来て。アイツの国へ来て。

「……………そっか」

そこまで考えて、答えはすぐに見つかった。ぱちりと眼を開く。

ああ、なんだ。簡単なことじゃんか。馬鹿かオレは。

「……………アゲハ。お前の行きたい所に行けよ。オレは寝る」

端からみれば、ただの独り言。だけど、オレはしっかりと相手に伝えた。

答えは聞かない。いや、聞けないだけか。ともかくオレはもう一度眼を閉じた。

まだ目的の駅まで時間はたっぷりある。心地良いこの振動に身を任せていれば、すぐに眠れるはず。

大抵の場合アゲハは、自分がこうして意識を手放してからやっと外へ出ていた。確認したわけじゃない。ただ、なんとなくそう感じただけだ。師範代はオレが気付いていないと思っっているみたいだけど、残念ながらオレはそこまで馬鹿じゃなかった。もう一人の自分の行動くらい、分かっているつもりだ。

きつと、オレをイギリスへ行かせたかったのは師範代ではなくアゲハの方なんだろう。

証拠も確信も何も無いけど、段々と襲ってくる睡魔に身を委ねながらそう思った。

\*\*\*\*\*

「主人格が、交代したのでしょうな」

それは昔にある医者が呟いた言葉だった。師範代に連れられて行った病院での話。たぶん、まともな病院では無かったと思う。狭い路地の奥、忘れ去られたような場所にあったから。

「交代、か」

「ええ。主人格と交代人格とが反対になってしまったと言うべきでしょうか。元々の『自分』であった人格が、表に出なくなってしまう、代わりに交代人格であった彼が、主人格を引き継いだと……簡単に言ってしまうえば、そういうことになるのでしょう」

ふむ、と口元に手を当てながら医者が言った。師範代は黙り込んだ。

よく分からないままに聞いていたあの話も、大きくなった今なら十二分に理解できる。それはアゲ八とオレの話だった。

「ともかく、何があつたか教えていたただかないことには、はっきりしたことは言えませんな。どのような心的外傷を負つたのか。何が原因だったのか」

「……すまない。それは、言えない」

「良いでしょう。人間、他人に言えない秘密などいくらかでもあるものですから。かく言う私もその一人なのですからね」

医者はまだ小さなオレの頭を撫で、そして言った。

「君が夢に見るといふ、君と同じ顔をしたその男の子の名前を教えてくださいませんか？」

「名前？ アゲ八だよ。蝶々のアゲ八。苗字は内緒なんだって」

「アゲ八君か。アゲ八君と君は、夢の中で何をしているんだい？」

「オレは何もしないよ。アゲ八が何かしてるのを、オレがずっと上から見てるんだ」

「上から？」

「そう。アゲハは師範代と喋ったことがあるんだよ。ね？」

そう言っただけが師範代に同意を求めると、困ったように師範代は微笑んだ。

「さあ…？ 私にはよく分からないな」

「あ、そっか。オレの夢の話だもんね。師範代には分からないよね。アゲハはね、師範代と写真を撮ってたんだよ。オレも一緒に撮りたかったんだけど、そっちには行けなかったんだ」

夢の話を生懸命するオレを見て、師範代はあの時何を思っただろうか。今更、聞けない。

医者はカルテに何かを書き込んで、そしてまた師範代と何か話していた。その内容を、オレにはもう思い出せない。

\*\*\*\*\*

懐かしい夢から目が醒めると、知らない家の前に立っていた。家と言うよりも、その家とオレを隔てる門の前に。

「……何処だ、ここ……」

答える人は居ない。ただ一人、ぽつんとオレはそこに立っていた。ついさっきまで、オレは列車の中に居たはず。なら、オレの言葉通り、アゲハが行きたかった場所へ行ったのだろう。

この家が、アゲハの来たかった家。

家は、大きな家だった。屋敷と言ってもおかしくはない、立派な家だった。それと同じくらい大きく立派な門。まるで、全ての人間の出入りを拒絶しているかのようにそれは聳え立っていた。

今は誰も住んでいないのだろうか。窓ガラスは割れ、庭の枯れかけた雑草は方々に我が物顔で生え散らかっている。

アゲハがこの国で来るとするなら、たぶんストレイン一家の。

「……帰るか」

アゲハが来たのなら、オレはもう帰っても良いだろう。そう思っ  
て反対方向へ向こうとするが、足が動かなかった。まるで金縛りに  
あつたかのように、両脚が固まっていた。

「……え、ちょ……ま……ええ!？」

案の定、オレはバランスを崩して転けた。

「……つてえ!」

何とか顔面衝突は避けられたものの、衝撃が無いわけではなかつ  
た。オレは痛む身体をゆっくりと起こしながら、自分自身へと

いや、もっとその奥の自分へと問いかけた。

「お前、まだ行ってなかったのか……?」

答えは聞かなくても分かる。

最後の最後で、この門の中へ踏みいることが出来なかったんだろ  
う。だから、オレを起こした。

オレがいますべき事はなんだ? この門を開けて、中に入ること  
じゃないのか?

もう一度よく見てみれば、その門は立派だけど風化も激しかった。  
ぼろぼろで、今にも壊れそうだ。誰も立ち入ることを許さないよう  
に見えて、どこか、淋しげな門だった。ほんの少し空いた門の透間  
は、誰かを待ち望んでいるように見える。

「……分かったよ」

つくづく、自分が馬鹿だと思った。

足を踏み入れた庭は、酷く荒れていた。誰も手入れしていないのだから当たり前だろう。本当は家の中に入ってやりたかったのだけど、何個も錠がかかっているそれは許されなかった。街の誰かが取り付けたのだろう。クウヤがこの場にいれば、都合良くあの錠達を開けてくれたのだろうけど、今居ない人物に縋っても仕方ない。窓からは入れるんじゃないか？

そう思ったオレは、枯れた草木ばかりが目立つその庭に足を向けていた。

「広いな」

素直にそう思った。全く記憶の無い生家だからしょうがない。庭は驚くほどに大きかった。庭師か誰かが居た頃は、きつと色とりどりの花が咲き誇っていたんだろう。いまではもう、その光景はお目に掛かれないけれども。

ひゅ、と風が吹いた。冷たい風だった。

何の気もなしに、その風が吹いてきた場所を見る。そこには石が八つ、並んでいた。

ああ、これが。

これがあの殺人一家の、成れの果て。

家の中に入ることは止めて、その墓石達へと近付いていった。胸が、ちくりと痛んだ気がした。

きつと。きつとアゲハはこれに会いに来たんだ。

蝶の名前を持った兄弟達。多くの人を屠った父、首の無くなった母。オレには断片的な記憶しかない、その墓石に会いたかったんだ。証拠も確信も何もない。いつものように、ただなんとなくそう思う。片割れのことなのだ。分からないはずがない。憎くて憎くて溜

まらないけれど、コイツは、オレなのだから。

「っ」

その墓石の一つに触れようとして、止めた。ちくちくと痛かった胸が、突然抉られたようにその痛みを増した。

それと同時に、自分の目から何かが落ちたのが分かった。久しく流していなかった、透明なそれ。

悲しくはない。淋しくもない。オレは、何ともない。これはきつと、アゲハの感情。

それが何なのか、分からない筈がない。泣いている訳も、泣かずにいられない訳も。だけど今だけは、見えないふりをしておこうと思った。気付いていないふりをしようと思った。

分からないふりをするのは得意だ。そうやって自分を騙すのは、得意だ。

「泣くなよ。もう子どもじゃねーんだから」

一言そう言って、オレはその場にしゃがみ込む。もう少し、ここに居よう。

大嫌いだし、今だって憎んでるし、これからもそうだけど、仕方ない。コイツは、オレなんだから。

104・誰も知らない、背中あわせの僕等。(後書き)

ごめんなさい。

一人だけ、生き残ってしまって。

105・例えば君が笑っていたとして。

「笑う……って、どんな感じなんですか？」

何の前触れもなく、サスケは目の前で少し遅めの朝ご飯を咀嚼する主人に向かって問うた。全身を黒服に身を包むこの少年は、その質問に対して質問で返した。

「……それをボクに訊くのかい？」

全くの無表情のまま、スクランブルエッグをまた一口食べ、そして続ける。

「そういうことは、笑っている人に訊きなよ」

「そうですね。普段から無愛想で仏頂面のフィンに訊いた私が間違っていました」

「……サスケ、夕飯の焼き鳥にされたいのか？」

絶対零度の声で言われてしまった。サスケはぶるぶるっと身を震わせ、慌てて首を振る。

「め、めめ滅相もございません！」

大いに慌てているサスケを無視して、フィンはさつさとスクランブルエッグを食べきる。時計を見れば、もう十一時も過ぎた頃だった。お昼ご飯と兼用である。

かちや、と銀色に光るフォークを皿の上に置き、仏頂面と称されたその表情を少し変えたフィンが言った。

「笑う、ね………。そもそも、どうしていきなりそんなことを訊いてきたんだ。唐突すぎてボクにもよく分からないよ」

「なんとなく、ですね」

「ふうん。今日の夕飯、焼き鳥で決定だね。やったー、久しぶりのお肉だ」

「やめてくださいー！」

「冗談だよ」

「分かりにくいですー！」



またもや、騒ぐサスケをさらりと無視して、フィンが手を口元に当てて少し考え込む。

サスケの最初の質問である“笑うとはどんな感じなのか”について考えてみるが、どうにも自分にはその感覚が分からない。答えてやりたいが、答えられるような人間ではない。人には適不適があるのだ。

「……そうだね……ボクの知り合いで言えば、ソリティアやレオラリアナ辺りがよく笑っているね。何がそんなに楽しいのかは知らないけれど。ボクなんかよりも、彼等に訊いてみればいいんじゃないの？」

そんなフィンに続けるように、サスケも思いついた人物の名を挙げる。

『そういえば、クウヤ殿はいつもニコニコ笑っていらっしやいますよね！』

私が見たクウヤ殿は、大抵笑っていますよ。

そう言ったサスケをフィンは不思議な物でも見るかのように首を傾げる。

「笑ってる？ アンダーグラウンドが？」

『はい？ ええ、笑ってるじゃないですか』

「……あれは、笑ってないと思うけど……まあどうでも良いけど……」

本当にどうでも良さそうに言葉を零して、フィンは時計を確認した。時刻は十一時半。天気は晴れ。急な仕事が入らない限り、今日は一日中暇だ。

「……そうだ。どうせ今日は暇だから、サスケ、訊いてきたら？ 疑問はその日の内に解決しろってナチも言っていたしね。ソリティア達なら答えてくれるよ」

『良いんですか？』

「うん。ついでに、アンダーグラウンドに手紙を届けてくれるからね。この前調べて置いてくれて言われてた情報なんだけど……」

そう言つて、小さな筒をサスケに差し出す。それを見て、サスケは右足を差し出す。フィンによつてソレは器用に括り付けられた。『分かりました！ 必ずお伝えいたしますね！』  
無言で、手をひらひらと振る。早く行けと言つことだろうか。サスケはフィンに一礼して、窓から飛び立った。薄水色の空に、一点の黒点がいやに目立っていた。

\*\*\*\*\*

「は？ なんて笑うのかつて？」

『はい。笑うとは、一体どういふことなのでしょう？』

お金持ちがたくさん住んでいそうな住宅街の街路樹の上。丁度その木に登っていたレオラを見つけたサスケは、早速質問をした。何故その木に登っていたのかはつっこまなかった。それよりも自分の疑問の方が勝っていたのだ。

「何でつて言われてもなー……自然に出るもんだから、急に訊かれてもなあ……」

『申し訳御座いません。こんなお忙しい中……あの、お忙しいですよね？』

一応確認を取る。木の上に居るのだ、落ちないようにすることに忙しいだろう。

「や、言つておくけど仕事だからな？ 遊んでる訳じゃないから

な？ そこんとこ間違っなよ、サスケ」

「もっ、もちろんです！ そうですよ、お仕事に決まっていますよ  
ね！ 木登りして降りられなくなったのかと思いました」

「オレは猫か！」

一通り会話を終えて、レオラはあーだの、うーだの声を出して悩む。綺麗な赤眼が、今はその瞼によつて閉じられていた。考え事をするとき目を瞑る癖があるらしいが、今は結構な高さのある木の上だ。大丈夫なのだろうか。

声を掛けようかと思つたサスケだったが、やっぱりやめた。彼は道外れなのだ。こんな木の上で目を瞑つていても何も支障はきたさないだろう。それよりも、今は折角自分の質問の答えを探しているのだ。出来るだけ静かにしていた方がいいだろう。

サスケがそう思つたと同時に、上から声がした。

「あんまし、よく分かんねえけどよ」

閉じられていた赤眼が、ぱ、とサスケを捉える。

「はい」

「楽しいときとか、嬉しいときとかさ……良いことがあると、自然と笑顔になっちゃうよな。笑うっていうのは、自分が幸せな時なんじゃねえの？」

にか、とまるで太陽のように笑うレオラを見て、サスケは納得した。なるほど。幸せだと、人は笑うのか。

そこで、ふと主人の言葉を思い出す。

「じゃあ……クウヤ殿は幸せじゃないんでしょうか」

「クウヤが？ なんで？」

不思議がるレオラに、主人の言った言葉をそっくりそのまま教える。フィンはクウヤが笑っていないと言つたのだと。

明らかに、ニコニコ笑っているはずなのに。変な話だ。あれを笑つていないと言うなら、フィンはもつともつと酷いことになる。本人の前ではもう言わないが。

「あー……それはさ、心から笑ってないって言いたかつたんだよ。

たぶんな」

『心から？ どういうことですか？』

「クウヤとかが笑ってるあれはさ、愛想笑いなんだよ。上辺だけつーと聞こえが悪いんだけど……まあ、こんな仕事だし“愛想笑い”っていうのは武器になるんだよ」

カノンも、時々してるだろ？

レオラにそう言われて、サスケは初めて笑顔に違いがあることに気付いた。家族に向ける笑顔と、依頼人に向ける笑顔。そう言えば、何処かが違っていた。

『なるほど……そういう意味でも、笑うんですね』

「色々あるんだよ」

そう言ったレオラは、先程とは違って、少し困ったような笑い方になった。これもまた違う“笑顔”だろうか。

『クウヤ殿の心から笑った顔って、一体どんななのでしょうね。一度見てみたいです』

「見たかったら、とりあえず階段から落ちてみ？ すっごい笑ってくれるぞ、鼻で」

それも、まあ言ってしまうえば心からの笑顔なのだろう。

それはきつとクウヤ殿に馬鹿にされてますよ。

流石のサスケも言えなかった。その代わり、こんな自分の為に時間を割いてくれた礼を言う。

『ありがとうございます。少し分かった気がします』

「そっか。良かったな」

またな、と言って手を振るレオラの笑顔。あれはきつと、愛想笑いなんかじゃないとサスケは思った。

笑う。それは一体どんな感覚なのだろうか。

サスケはクウヤの家へと向かいながら考える。自分は鴉だから、笑うということが出来ないのだ。笑ったことがない、そして、これからもきつと。だから一度、訊いてみたかった。何故、笑うのかと。フィンに対して散々無表情だとか仏頂面だとか言っているが、自分も相当だと思う。

鴉なのだから仕方ないのだが、それでもやっぱり知りたかった。笑うと言うことを。それを知れば、自分も笑った気分になれると思っただの。

『こんにちは、クウヤ殿』

冬だというのに開け放たれていた窓から、サスケは挨拶をしながら入り込む。ヴィヴァーチエ通りにあるアパートで、唯一ペットを飼っても許されるこの家。残念ながら家人からの返事は無かった。どうやら他の部屋に居るらしい。

丁度入った部屋にはフィンが押しつけた　もとい預けた大きな犬のハカセ、小さな猫のシラタマが居た。それぞれに挨拶をして、クウヤが居そうな部屋へと飛ぶ。

『あ、ここにいらっしやっただんですね。こんにちは、クウヤ殿』

サスケが声をかけた先には、チリトリを盾代わりに構え、怯えるクウヤの姿だった。相当怯えている。どうやら掃除の最中だったらしい。あの窓は、換気のために開いていたのだろう。

サスケが情報紙を渡そうとクウヤに近付くと、クウヤはヒツと息

を飲んだ。

「さささ、サスケ！ どうせまたフィンからの無理難題を持ってきたんだろ！？ も、もう無理だから！ ペットはもう飼えないよ！ フィンが何と言おうと、もう無理だからね？！ ハカセとノロマとヒデヨシとシラタマだけでも手一杯なんだ、お願いだから他を当たって、お願いだから……！」

どうやら勘違いをしているらしい。フィンにペットを押しつけられることが大分トラウマになっているようだった。サスケはなんとか自分が無害であることを説明し、やっと情報紙を渡すことが出来た。

「焦ったー……またフィンが猫か何かを押しつけに来たのかと思っ  
たよ」

『お騒がせします』

ぺこりと頭を下げたサスケに対して、ニコニコとクウヤは笑う。これはきつと、レオラの言う愛想笑いなのだろうなとサスケは思った。今まで気付かなかったが、よく見てみれば、やっぱり違う。なんだか無理して作ったような表情だと思った。

「お騒がせしてるのはフィンだよ。全く、あの引きこもり……」

怒りと呆れと、その他色々なモノがまじった溜息を吐く。それ以上言つと、またサスケが謝り出すと思つたのか、その話はそこで終わつた。

「それにしても、わざわざ遠いところまでありがとう。おかげで助  
かつたよ」

『いえ、当然のことをしたまでです。では私はこれで失礼いたします。お掃除頑張ってください』

「うん。道中、気を付けてね」

当然のこと。主人のおつかいをするのは当然のことなのだが、やはり誉められると嬉しい。帰り道は、来たときよりもとても軽やか  
だった。

\*\*\*\*\*

「ああ、おかえり。早かったね」

窓の傍、椅子に座って本を読んでいたフィンにそう声をかけられたサスケは、ちよん、とテーブルへと降り立った。

「はい。確かにクウヤ殿に情報をお渡ししてきました」

「そう。ご苦労様……何か良いことでもあったのかい？」

唐突な問いかけだった。フィンが読みかけの本を閉じないまま、サスケへと目を向けて言う。

「え？ ああ、はい。ありましたけれど……どうして分かったんですか？」

不思議に首を傾げるサスケを見て、フィンは何でもないようなことのように言つてのける。

「いや、だって笑つてたから」

「……笑つてた？ 私がですか？」

そんなはずはない。だって自分は笑えないのだ。鴉は、笑つたりしない。まだ納得のいかないサスケを見て、フィンが返す。

「笑つてたじゃないか。おかしな奴……」

あ、笑つた。

それは、ずっとフィンの近くに居る者でなければ分からないくらい  
の微量な変化。フィンが笑うのを見て、サスケもなんだか嬉しく  
なった。心がじわじわと温かくなる。

きつと自分はいま、笑っているのだろう。

レオラの言っていた意味がなんとなく分かった気がした。そうだ。

笑顔は自然に出るものなのだから。



105・例えば君が笑っていたとして。(後書き)

ねえ笑って見せてよ。

間奏曲 拾式曲目「世外れ徒然日記」

【クウヤ、便利屋見習い時代】

月 日

家出してどれくらい経ったんだろう。

イギリスを出てから二日目。

一番安かったチケットの夜行列車は、どうやらレステイナ東部のイ  
ーストエンドタウン行きらしい。

逃げるように家から出て来た所為で、手袋を忘れた。秋も終わりな  
のか、ちよつと寒い。

明日、タウンに着いたら手袋を買おうと思う。

月 日

夜行列車は寝心地が悪かった。最悪。

着いた町は、案外栄えていて、ここで一泊してみることにした。噂  
の始末屋を捜したいけど、そろそろ旅費も底を尽きそう。もう自殺  
でいいかと思っただけど、そういえばそれが出来ないから頼みに来て  
るんだった。

東部は思ったよりも暖かかったから、結局手袋は買わなかった。

月 日

噴水のある公園でぼーっとしていたら、足元にチラシが飛んできた。  
どうやらこの街になんでもしてくれる便利屋があるらしい。

この人に頼もうと思っただけど、住んでる場所がよく分からない。

明日もう一度捜しに行こうと思う。

月日

長旅の疲れが出たらしい。ちょっと熱っぽい。  
薬を飲んでみたけど、五錠は飲み過ぎだったかもしれない。別にど  
つちでもいいか。  
便利屋探しは明日にして、宿で一日ぼーっとする。気付いたら寝て  
た。

どうでもいいけど、ここのご飯は美味しくない。

月日

宿屋の人曰く、どうやら便利屋は城下町の外れに住んでいるらしい。  
明日にでも会いに行こう。そしてさっさと死のう。

月日

わけが分からない。なんだ？ なんなんだあの人。ていうか、年上  
？ 同い年？

金髪のポニーテールがいやに記憶に鮮明。男の癖に、やけに長い髪。  
ていうか、今日の話はよく分からない。もう寝る。

月日

やっぱり昨日のことは夢じゃなかった。

どうやら便利屋の見習いにされてしまったみたいだ。一体何を  
してるんだ僕は。  
ていうか、女の人だった。「おれ」だなんて言うから、てっきり男  
かと思った。

月 日

カノンさん、怖い。

明日も早いらしいから、もう寝る。

僕、ここでやっていけるんだろうか。

月 日

カノンさんと一緒に便利屋の新しい宣伝文句を考える。

なんか、こう、ぱっとインパクトのあるやつとか無いかなあ。

月 日

宣伝文句決まる。

どうしよう、あれ、警察軍とかに通報されないだろうか？

まあカノンさんだし大丈夫だろう。僕は知らない。

月 日

うっかり昼まで寝過こしてしまった。

カノンさんに謝ると、「そういう時もあるよ」「って笑って返された。

どことなく、母さんに似ている。

追記：

今日の僕の夕飯は、明らかにカノンさんのよりも二品ほど少なかった。

全然許してくれてない。かなり母さんに似ている。

×月×日

三ヶ月も日記を書くのを忘れてた。忙しかったから仕方無い。そういえば、カノンさん、今日から遠出。留守番を任される。赤の他人に、そんなの任せて良いのだろうか？

×月×日

カノンさん、帰ってこない。

一応夕飯を作って置いたが、無駄になってしまった。結局自分で食べた。食べ過ぎて気持ち悪い。

×月×日

カノンさん不在。

×月×日

カノンさん、今日も帰らない。

x月x日

カノンさん未だ帰らず。

することもないから、今日は鍋の焦げ付きを洗い剥がした。

一心不乱になってしまい、気付いたら夕方だった。

鍋、無駄にびっかぴか。

x月x日

カノンさん、まだ帰らない。何かあったのかも？

そういえば新聞を読んでいなかったなと思って、久しぶりに読んでみる。

どうやらセレナーデ地方は豪雪らしい。

追記：

カノンさんの出掛け先も確か、セレナーデの方だったような気がする。

もしかして、帰れないんだろうか？

x月x日

カノンさん帰宅。やっぱり雪の所為で車が動かなかっただらしい。

それから、お土産をもらう。

家族以外から何かを貰うなんて滅多に無かったから、素直に嬉しい。綺麗な模様の缶の中には、綺麗な飴玉が入ってた。大切に食べよう。

x月x日

城下町におつかいに行く。

カノンさんに頼まれたものを全て買い揃えて、帰り道の途中にユリさんに会う。

町の子供達に囲まれてトランプを使った手品をお披露目していた。

あの人、仕事はどうしたんだろう？

x月x日

雪が積もる。結構積もったようで、カノンは大いに喜んでいた。

あーあ、寒いだけなのに。

お昼頃になっても溶けなかったので、雪兎を作ってみる。

カノンは初めて見たらしく、興味津々だった。

x月x日

今日も雪。本当に寒い。やめて欲しい。

午後からユリさんが遊びに来て、カノンさんと二人で巨大雪だるまを作っていた。(後で強制参加させられた)

いつも思うけど、あの人、仕事は？

\*月\*日

今日は親友に会いに行くというカノンさんについていった。

どうやら始末屋を営んでいる人らしい。

カノンさんが「いい奴」と言っていたので、きっといい人なのだろう。

残念ながら、今日は留守のようだった。一度会ってみたい気もする。

\*月\*日

何気なく、いつまでここに居て良いのかカノンさんに聞いてみた。

結果、「お前が何かやりたいことを見つけるまで居ればいいよ」と言われた。

やりたいことって何だろ。

\*月\*日

便利屋は、依頼人にとって便利であるように色々な裏町業者との繋がりが無いといけないらしい。

僕は便利屋には向いてないなと思った。

この前聞いていた始末屋は、処理屋とはまた別の職業らしい。どちらも合わなさそう。

代理屋は、もう大手があるらしい。

追記：読み返して思ったけど、僕は裏町業がやりたいんだらうか。

\*月\*日

やりたいことが見つかった。

僕も、店を開こう。



\*月\*日

思い立ったら吉日。

カノンさんに言ってみたら、賛成してくれた。

どこで店を開こうか迷っていたら、アンプロンプチュ地方のシンフオニア島を勧められた。のどかで平和な島らしい。

そこにしようかな。

【クウヤ、無名の都合屋時代】

月 日

カノンさんに、始末屋のレオリアナさんの家を教えてもらった。

「困ったことがあったら頼れ。きつと力になってくれる」とかなんとか。

確かこの人、カノンさんの親友なんだっけ。今度挨拶に行こう。

月 日

始末屋のレオリアナに会った。

見るからにお人好しっぽい人だった。

どうやら苗字は無いらしい。そのうえ本名じゃないらしい。なんじやそら。

帰るとき、階段から転げ落ちてた。この人に敬語はいらないと思った。

月 日

店を開いて二日目、お客さんが来た。  
なんとか上手く出来たと思う。

月 日

開業一週間目。思ったより順調。  
カノンさんに手紙を書いてみる。

月 日

レオラ、家へ来る。  
遊びに来ただけらしかった。  
色々喋ってたら、レオラには家族が居ないことが判明。  
ていうか、記憶喪失らしい。  
なんかすごいな、こいつ。

月 日

依頼、上手くこなせなかった。  
反省。

月 日

なんか落ち込む。

今日は臨時休業にした。

月日

カノンさんに電話してみた。  
昔の話をちよつとして、それからちよつと愚痴を聞いてもらった。  
色々と話して、スッキリした。

月日

晩御飯にグラタンを作ってみる。  
何をどう間違ったのか分からないが、とにかく不味かった。  
もうグラタンなんて作らない。

月日

猫、拾う。  
標準サイズより、かなり太ってる三毛猫だった。  
右足を怪我してた。  
昨日のグラタン作りで余ったミルクをあげてみる。ちよつと飲んだ。

月日

冷たいミルクは飲まない癖に、ちよつと温めたミルクは飲んだ。  
熱すぎると逆に飲まない。すごい不貞不貞しい。  
動きがのろいから、名前はノロマにしてみる。

月 日

ノロマ、消える。

右足はもう治ったのだろうか？

月 日

たった数日しか一緒にいなかったのに、ノロマがいなくて何か物足りない。

一応、ベランダにミルクをいれた皿を置いておく。

月 日

ノロマ、普通に帰ってきた。

猫ってそんなもんなのか？

月 日

ガヴオット国の人から依頼を受ける。

結構大きな依頼。

ちょうど遊びに来ていたレオラに「やめとけば？」って忠告された。

月 日

結局、依頼は受けることに。  
何故かレオラも一緒になって付いてきた。カノンさんが付いていけ  
と言っただけらしい。

\*月\*日

やめとけば良かった。

ガヴオット国は、もう行けない。

闇鬼なんて呼ばれても、嬉しくない。

(以下、何ページか破られた後があり、空白のページが続く)

【クウヤ、世外れの都合屋時代】

月 日

裏町幹旋所に登録した。

カノンさんと同じ街外れかなと思っていたら、世外れの階銘をもら  
ってしまった。

嫌だな。変に目立って。

月 日

フィンがまた厄介事を送り付けてきた。今度は大きな羊追いの犬。  
前の子犬と同じく、ちよつと大人しい。目が毛に隠れている。  
犬は何も悪くない。フィンに殺意を覚える。

月 日

例の巨大犬は「ハカセ」と命名。そのまんまだ。

一応送り主にも報告をと思い、フィンに電話する。

名前の話をしたが、興味無さげ。「で？ 今日は何の用？」

本気で殴りたい衝動に駆られた。

月 日

ヒデヨシとハカセを見比べて、急に腹が立ってきた。

あいつは一体僕をなんだと思ってるんだ。もうフィンと縁切りたい。

月 日

サスケがうちに遊びに来た。どうやら主人の非を詫びに来たようだ。

それなら僕は本人に謝って欲しい。

そう言うと、サスケは申し訳なさそうにした。

「フィンは外に出られないので、犬を飼っても散歩が出来ないので  
す」

少しだけ、フィンを許すことにした。

月 日

豪雨。シンフォニア島に台風直撃。

とりあえず、窓には板を打ち付けてみた。たぶん期待は出来ない。

月 日

思ってたよりも台風の影響は少なかった。  
ソナチネ地方は大丈夫だったんだらうか？

月 日

ちよつと依頼人といざこざ。殺し屋に負われる羽目に。  
それにしてもアルヴェルト家、怖いな。

×月×日

しばらく日記を書いていない間に、色々あった。  
ありすぎてちよつと困る。

要約すると、カノンさんの仕事をちよつと手伝って、それから兄さ  
んが家に来た。

×月×日

兄さんから手紙が来る。手紙の内容は、読まなくても大体予想が付  
く。

だから読まずに捨てた。読まずに食べてしまうよりはよっぽど良い  
と思う。

月 日

レオラと大喧嘩をする。今思い出しても腹が立つ。もうあいつのと全て記憶から抹消したい。  
とにかく、今日は寝る。

月 日

寝ればスッキリするかと思ったけど、そんな風にはならなかった。  
まだ苛々する。  
一体どちらから始まったのかも思い出せないし、何について喧嘩したのかも分からないけど、とにかく腹が立つ。

月 日

レオラは馬鹿だし、お人好しだし、見ていて苛々する。  
綺麗事ばかりだし、適当だし、馬鹿だし。全部あいつが悪い。  
けど、僕も少しだけ言い過ぎたかもしれない。でもあいつも悪い。  
でも僕も悪い。

月 日

仲直りって、どうやってするんだろう。

月 日

今日は久々に良い天気だった。張り切って布団を干していると、電



話が鳴る。レオラからだった。

「色々ごめん」と言われたが、一体何に謝ったんだろう？  
よく分からないけど、とりあえず「こちらこそ」と言っておいた。  
便利な言葉だ。

追記：

今日記を読み返して思い出した。レオラと喧嘩してたんだ。  
どうしよう、あれはもう仲直り出来たんだろうか？ まあどっちで  
もいいか。

月 日

裏町幹旋所からパーティーの招待状をもらっ。

ついでに兄さんからの手紙も混じってた。どうやら兄さんも招待さ  
れているらしい。

昼にカノンさんから電話がかかってきた。

なんだか慌てるみたい。香葉月さんとレオラも居たみたいだ。  
とりあえず、創立百周年記念パーティーが楽しみ。

間奏曲 拾弍曲目「世外れ徒然日記」(後書き)

そしてその期待は大いに裏切られるという訳です。

喧嘩の始まりとは、大抵下らない理由だったりするものだ。

他人からすれば至極どうでもいいことでも、喧嘩している本人達からすれば途轍もなく重大だったりするので、周りの人間にしてみれば尚更厄介なものだ。

「その意見、却下させていただきます」

裏町幹旋所所長、アレグロ・コンポートがにこやかに言い切った。どうやら読書中だったらしく、手には分厚い本が収まっていた。

所長の答えを聞いて、意見を出した張本人である護衛人、パレット・タルトレットは大きく息を吸い込んだ。

「な、何故ですか!」

「じゃあ貴方がやってくれるとでも?」

「う……それは……」

パレットは黙り込んだ。目の前の老人はしつかり微笑んでいる。だが、ここで引き下がるわけにもいかない。

パレットが唸っていると、丁度秘書がミルクティーの入ったカップを三つ持ってきた。

「ア、アンジュ・キャラメリゼ! そうだ、お前がすれば……」

「一体何の話ですか。説明を要求します」

少しでも自分の話を聞いてくれることが嬉しかったのか、パレットは早口でアンジュに説明を شدした。

彼の言い分は、こうだ。

所長は今年で七十も後半を過ぎる年である。そりゃあ、他の七十代とは比べられないくらい元気だし、億が一のことが起こらない限り、所長はこの幹旋所に君臨、もとい現役で居続けるあろう。

だが、もしも億が一のことが起こったらどうする?

所長はああ見えても、人の子である。病気、寿命。人間を襲う災難から、所長とて逃げられないわけである。

だからそろそろ、若い者に任せるなりなんなりして、引退をしてはどうか、と。

だが、それに対する所長の返事は、冒頭のそれであった。

「億が一、の話です。私はまだまだ働けますし、生涯現役で居続けるつもりです。それに、引退をしたとしても、一体誰にこの斡旋所を任せるといいますか？ この場合だと、意見を申し出たパレットということになりますか……」

所長はパレットをにこやかに見つめる。

「いいえ。私は只の護衛人です。所長の代わりだなんて、そんな大層な位置につけるはずありません」

ですが、とパレットは続ける。

「アンジユ。昔から所長の傍で秘書という立場に居た貴女なら、所長の後継者に申し分無い、」

「拒否権を行使しますが、何か？」

アンジユは所長へとカップを渡しながら、切り離すように言っている。ちなみに「何か？」の後に続く言葉は「文句でも？」である。眼鏡の奥で光る目が、なんとも恐い。

「し、しかしだな……」

「所長が駄目なら貴方がおやりなさい。貴方が駄目なら、所長に全てを任せれば良いだけのことです。私は意見しません、出された意見に対する賛成か否かは、ずばっと申し上げさせていただきますよ」

切り捨て、ご免。

パレットは哀れなくらい肩を落とした。それを見て所長が、ふむ、と考え込んだ。

「そうですね。パレットの言うとおりです。アンジユ、もしもの時は貴女がやればいいのです」

「……所長、正気ですか？ 私は只の秘書です。そんな大それた事」

「でも、私の次にこの幹旋所に詳しいじゃありませんか。それに、私が好き勝手やっていてもここまで幹旋所が動いていけるのは、アンジユ。貴女のお陰なのですよ」

どうやら好き勝手やっていた自覚はあったらしい。アンジユは溜息混じりに、しかしパレットのときよりは確実に丁寧に断った。

「所長のお言葉は素直に嬉しいです。ですが、申し訳有りません。私にはそんな力量、持ち合わせておりません。そもそも、こういう場合は言い出した者がどうにかするのでしょう？ パレット」

「護衛人の私に何が出来ると？」

やんわりとした擦り付けあいの中、所長が爽やかかつ穏やかに笑って、二人に聞いた。

「二人とも、相当所長になりたくないようですが、本音は如何ほどで？」

その言葉に、二人がゆつくりと所長に向き合う。切り出したのはパレットだった。

「はつきり言います！ 無理なんですよ、所長の後を継ぐなんて！ 大体貴方は八チャメチャすぎるんです！ 知ってますか！？ 裏町業者の皆様聞いた『裏町幹旋所所長と聞いて思い出すこと』上位三位って、『変人・変態・断ったら酷いことされるから逆らえない』なんですよ！？ どんだけ悪いイメージが定着してるんですか！」

それに乗るかのように、アンジユも加勢する。

「私もこの際ですから言わせて貰います！ 所長、やりすぎなんです！ そのお陰で誰も所長の後をつごうなんて言う人が現れないんです！ いつだったか裏町幹旋所所員にアンケートをとりましたけどね、裏町幹旋所で『やりたくないポジション』堂々の一位なんですよ！？ 誰が所長の後継者になるって言うんですか！」

言うだけ言った。後悔はしていないのか、する気力も無いのか、

二人ともぜいぜいと息をするだけである。

そんな二人に対して、所長はのほほんと答える。

「おやおや、嫌われたものですねぇ」

パレットとアンジユの、何かがぶちつと切れた。

「大体！ 何故こういうときの場合に備えて、後継者を育てておかなかったのですか！」

「そうですね！ そうすればこんなことで騒がなくなるとも、すんなりといけたんですよ！」

散々部下から文句を言われているのだが、所長は何一つ嫌な顔をせず、むしろ不思議そうな顔をする。

「私としては、あなた方のどちらかがやってくればいいのですがね。まあ、そもそも引退するつもりもありませんが」

「嫌です！」

はつきり言われた。

「どうやら、三者三様、それぞれの意見が出てしまったようですね」  
所長は、引退するつもりはない。するとしたら、後継者はパレットかアンジユにすれば良いと思っている。

パレットは、後継者になるつもりはない。なるとしたら、アンジユが良いと思っている。ついでに言うと、所長はそろそろ引退したほうがいいのではと思っている。

アンジユも、後継者になるつもりはない。後継者は、言い出しっぺのパレットがやれば良いと思っている。ついでに言うと、所長は現役でも良いと思っているが、ちよつと年が心配であるのも事実だ。

見事に、三分裂である。

「さて、どうしましょうか」

所長はにこりと笑って、手紙を取り出した。

レオラは走っていた。小さな丘の上を、それはもうすごい形相で走っていた。

よく見ると、その表情は半泣きだった。目尻に涙が浮かんでいたかも知れない。とにかく、レオラは走っていた。

右手には……手紙が握られていた。

「カノンカノンカノン、カノン！」

その丘の上にある、小さな家のドアを勢いよく開いて、レオラは街外れの便利屋の名前を叫んだ。

ドアを開ければ、いつものようにカノンがびっくりしているはずだった。

「レオラ…来ると思ったよ」

カノンは突っ伏していた。小さなテーブルの上を、それはもうすごい体勢で突っ伏していた。

よく見ると、その眼は虚ろだった。自嘲するかのように笑っていたかも知れない。とにかく、カノンは突っ伏していた。

左手には……手紙が握られていた。

「お、お前もか！」

「もちろん来たさ。地獄からの招待状がな」

二人が持つ手紙には、掌を重ね合わせた、あの例のマークがあった。





106・裏町ラプソディ #opening [幹旋所の三つ巴] (後書き)

きっかけはいつも突然に。

二月二十二日。レスティナ国では冬も終わりに近付き、北のセレナーデ地方ではまだ吹雪が続いているそうだが、メトロポリスやソナチネ地方では雪が降ることも珍しくなってきた。

そんな今日の天気は快晴、気持ちいいくらいの晴れやかさだ。蒼く広がる素敵な空模様の下、重苦しい空気を放つ裏町業者達。

ここは裏町幹旋所が所有する島。つい最近、裏町幹旋所の創立百周年記念パーティーが行われた場所でもある。やはりというか、以前と似たような顔触れがぞろぞろと揃っていた。

前にもこんなことがあったよね、とでも言いたげに目配せをする彼等に混じって、この周辺の国では見かけない東洋系の顔立ちをした碧眼の少年が居た。その端正な顔を歪ませて、低い声色でブツブツと何かを呟いている。

「……帰りたい。今すぐ、即座に、音速のように」「諦める、クウヤ」

そんな彼の切実な願いを斬り捨てるように、金髪の少女が後ろから声を掛けてきた。

「ああ、カノンさん。もういらっしやってたんですね。お元気でしたか？ 僕は絶望してました」

黒髪碧眼の少年、クウヤ・アンダーグラウンドは自嘲気味に笑った。どうやら絶望していたというのは本音らしい。

はは、と乾いた笑いを漏らすカノンの後ろには、案の定船酔いで顔色が優れないレオラが居た。

「よお……」

「レオラ、顔が死んでるよ」

「心身共にやられてるんだ……気持ちわる……」

そんな彼に、カノンがしっかりしろよ、と呆れたように声を掛ける。クウヤはこの一週間で何十回目になるか分からない溜息を吐

いて、一番聞きたかったことを聞いた。

「今回は一体全体、何があるっていうんでしょう？　この前、創立百周年のパーティーがあったばかりじゃないですか」

「さーな。この手紙だけじゃさっぱりだし……」

カノンがブレザーの胸ポケットから取り出して、例の招待状を広げて見せる。

『謹啓

梅の蕾が目につくようになり、長かった冬にも終わりが見えて参りました。裏町業の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さてこのたび、弊社について重大な決め事が御座いますので、是非でも皆様にお集まりいただきたく存じます。

お忙しい中恐縮ですが、拒否権などという権利はどぶ川に捨てたと思つて、必ずご出席いただきたくお願い致します。

裏町幹旋所

日時　2月22日

場所　南の島（前回のパーティー会場となつた島でございます）  
その他、問い合わせは弊社までご連絡下さいませ。

追伸

どうしても出席することが出来ない場合は無理強ひいたしません。

遠慮無く欠席連絡をいれていただきたく思います。』

上等そうな紙を綺麗に畳み直し、カノンはもう一度胸ポケットへと仕舞い込んだ。

「なんか変だよな、無理強ひをしないって。いつもなら『それなりに対応をとる』とかどうとか言ってる癖にな」

「本当、ソリティアさんの言うとおりですよね。逆に恐ろしくて欠席なんて出来ませんよ」

今到着したばかりなのか、何処からか現れたその人物に驚いてカノンが声をあげた。

「アサヒ！ 久しぶりだな！ 元気だったか？」

「ええ、ご無沙汰しております。ソリティアさんこそ、お元気そうで何よりです」

にこり、と人懐こそうな笑みを浮かべる。クウヤと瓜二つな顔立ちをした彼 桐生朝飛が腰に刀を下げて立っていた。どうやら彼も呼び出されたクチらしい。

クウヤは実の兄に向かって、心底嫌そうに言い放つ。

「来てたんだ。兄さんが来るって分かってたら、来なかったのに」そんな弟の言葉をさらっと流して、朝飛は久しぶりに会うレオラと話をしていた。いつもなら「酷いよ！」などと言って詰め寄るのだが、今日はいつになく素っ気ない態度だ。喧嘩でもしているのか、クウヤも酷く不満そうだ。

「それにしても、重大な決め事って何なんだろうな」

カノンが辺りを見回しながら、誰に問うでもなく言う。答えが出る訳無いのは分かっているが、言わずにはいられない。

この前と同じように島の港から少し歩いたところにある受付会場には、もうほとんどの裏町業者が集まったのか、様々な人間で密集している。自分たちと同年代位の人間から、老人まで。

その全員に共通していることと言えば、不安そうな表情を隠そうとして隠し切れていないところであろうか。

と、そこで見知った人物がこっちへ向かって走ってきた。

「カノンちゃん！」

「うえあっ!？」

がばっ、とでも効果音が付きそうなくらい勢いよく乱入してきた人物によって、朝飛と喋っていたレオラは不意打ちをくらって押し飛ばされてしまった。

「ななな、なんだよ!？」

「あ、レオラ！ なんでカノンちゃんと一緒に居るんだよ!」

「別にそれくらい良いじゃん！」

飛び込んできた人物は、赤みがかった茶髪に、長く伸びた前髪を纏め上げるようにしてその黒縁の眼鏡を髪留め代わりにして上げていた。彼は情報屋“現態観測”　　アルル・キャラメリゼ。軍人の家系に生まれながら、姉弟共に裏町業を営んでいる変わり者だ。

「と、まあ馬鹿は放って置いて。久しぶり！　　マイスイートハニー」

「ひっさしぶりだなー、アルル！　　元気だったか？」

「カノンちゃんに会えたから元気さ！　　カノンちゃんラブ！」

「嬉しい！　　おれも若干愛してる！」

カノンが言った一言に、レオラがストップをかける。

「若干！？　　若干って何だよ！」

「きゃっほー！　　若干愛されてるよ、俺！」

その隣で嬉しそうにはしゃぐアルル。

「おい！　　良いのかそれで！？　　良いのか！？」

「……つと、この話は置いといて。やー、みんな結構集まってるんだな。カノンちゃんにレオラに、クウヤに……」

薄茶色の髪に漆黒の瞳。見慣れない顔を見て、アルルが首を傾げる。同じ様な目の色をした奴なら心当たりはあるが、彼はそこまで人が良さそうな顔ではなかったし、何より髪の色が違う。

そんなアルルに助け船を出すようにカノンが軽い説明をする。

「あいつはアサヒ。アサヒ・キリュウって言って、クウヤの兄ちゃんだよ」

カノンが言い終わると同時に、朝飛がアルルに向かって丁寧に御辞儀する。見たことのない服を着ているが、知識だけでなら知っている。あれは恐らく剣道着だ。少し違うのは、竹刀ではなく刀を持っているあたりか。

アルルも軽く会釈をして、朝飛に笑いかけた。よく見ると、弟と似たような顔立ちをしている。兄弟だからだろう。アルルは自分の姉を思い出そうとして、すぐにやめた。別に思い出すようなことでもない。

「よろしくなー。で、この様子だとアサハカちゃんはまだ来てないんだ？」

「あー……アサハカは、クウヤが居るから……」

視線を地面に逸らしながらレオラが気まずそうに言ったのを見て、なんとなく察したのか「なるほど」と一言だけアルルは言っ、クウヤの肩をぱしっと叩いた。

「お前、そつえばあの香葉月家をおつという間に抜かしたんだつてなー。階銘は世外れだつけ？」

明るく言い放つアルルのその腕をぺしつとはね除けて、兄に言った時よりもさらに険しい表情でクウヤが捲し立てるように言っ。

「やめてください触らないでください離してください、うつる」

「うつる!?!」

アルルの動きが凍ったように止まる。

「わー、近付かないでください話しかけないでください消えてください」

「拒否の連続!?!」

衝撃を受ける彼に対して存在の否定をするクウヤと、それでもコミュニケーションを取ろうとするアルル。

決して仲が良いとは言えない二人から少し離れて、レオラが朝飛に小声で話し掛ける。

「……なあアサヒ。クウヤが死んだ魚のような目をしてるんだけど……」

「ああ、空夜のあれは『死んだ魚のような目』じゃなくて『虫ケラを見るような目』ですよ、レオラさん」

「ちよつと待って、何この子？ 凄い笑顔で凄い台詞を凄いサラッと言ってきたんですけど？」

一歩下がりがりながらレオラが言っ。朝飛はと言えば、相変わらず人懐こそうな笑みを浮かべたまま「別に普通のことですよ」と、さらにとんでもないことを言っのけていた。

と、そこで誰もが待ち詫びた声が会場中に響き渡った。

あれだけざわついていた会場内が、一瞬にして静まりかえる。それほどもでに、この人の存在は大きいのだ。

優しそうな声色、だが放たれる言葉が辛辣な台詞が多いその人は、これまた優しそうな笑顔で直立している。

「えー、裏町業者の皆様。本日はお忙しい中お集まりいただき誠にありがとうございます」

裏町幹旋所所長アレグロ・コンポートがそこに居た。

紫色のキリンの着ぐるみでもなければ、先住民族の儀式の服でもなく、かと言ってどぎついショッキングピンクのスーツでもなければ、兜鎧をかぶっているわけでもなく、忠実に再現された十九世紀の貴族の服装でもなく、あまつさえ兎耳さえも付けず、実に一般的な……そう。

まともな服装をしていた。

「皆様が集まって貰ったのは言うまでもありません」

「ごくり、と生唾を飲み込む音でさえ聞こえてきそうな、静まりかえった会場。

「鬼ごっこです」

「はあ？」

真っ先に反応したのはレオラだった。素直だからか、ただの馬鹿だからか、所長の隣で秘書のアンジュがこちらを睨んでいるのにも構わずに続ける。

「鬼ごっこがどうしたんだよ？」

「今日は皆様に、鬼ごっこをしていただきたいのです。それも、ただの鬼ごっこではありません……」

にやり、と所長が笑った気がした。

「裏町幹旋所の未来を賭けた鬼ごっこです」





107 裏町ラブソング #01「召集令」(後書き)

アルル は 若干の愛 を手に入れた！

「『裏町幹旋所の未来を賭けた鬼ごっこ』ですって？ どういうことですか？」

ざわめく裏町業者達を代表して、クウヤが声高らかに言葉を発した。その問いに、微笑みながらかの所長は答える。

「簡単なことです。先日、私と秘書のアンジユ、護衛人のパレットとの間で意見の擦れ違いが出てしまいました。どうにもこうにも埒が明かないので、こうなったら鬼ごっこをしようと思ひまして」

どこをどうすれば、鬼ごっこをする羽目になるのか。所長の珍妙な答えに脱力したクウヤを見かねて、カノンが後を継ぐ。

「話し合いではケリが付かない。かと言って、武力行使にしてもええ女性である秘書さんと、ご高齢の所長が不利になってしまう…。つまり、おれたち裏町業者達を使って、あんたらの勝敗を決めるってことか？」

「流石ミス・ソリティア。全く以てその通りです」

誉められても嬉しくない。カノンは引きつった表情を元に戻すことが出来なかった。

そんな彼女を知ってか知らずか、所長の隣に立っていたアンジユが一步前に出た。

「では、改めて今回の目的とゲームについての旨を、私、アンジユ・キャラメリゼが僭越ながらご説明させていただきます。今回の事の発端は『この裏町幹旋所最高権力者である所長の役職を、一体誰が継ぐのか』という意見の違いから始まりました。三者三様の意見に一向に結論が出てきませんでしたので、所長が平等な位置に立った上で決着を付けましょうと提案いたしました。それが、今回の『三つ巴鬼』というゲームです」

会場が一気にざわめく。三つ巴鬼とは一体何なのか、自分たちは一体何をさせられるのか。不安が不安を呼ぶように、一気に周りへ

と伝染していった。皆、斡旋所の恐ろしさをよくよく理解しているのだ。

「それでは、『三つ巴鬼』のルールについてご説明に入ります。私達代表者二人を筆頭にして、裏町業者の皆さんには三つのチームに別れていただきます。そして、鬼ごっこをして勝敗を争わせていただきます」

三つのチームで、どうやって鬼ごっこをしようか。ルールの説明を一言一句とて聞き逃しはしまいと裏町業者達はまるで葬列のように静まりかえっていた。

その所為か、余計に朝飛の声が響いた。

「なるほど。ジャンケンと同じ原理ですね」

その一言に、アンジユがしっかりと頷いた。

「アサヒ・キリュウの仰ったとおり、つまりは、ジャンケンと同じです。グーはチョキより強いが、パーに弱い。それと同じことです。ここでの力関係は、所長のチームが『グー』、パレットのチームが『チョキ』、私のチームが『パー』だと思ってください。例をあげて言いますと、私は所長を追いかけることが出来ますが、代わりにパレットに追いかけることになります」

粗方の説明を終えて秘書が後ろへと下がる。そして交代するように所長が一步前へ出た。

「標的を追いながらも、自分自身が標的になっている。これくらいのことを切り抜けるくらい、裏町業者なら出来ますよね？」

有無を言わさない笑顔だった。とは言え、誰も逆らう気など無かったのだが。

カノンが乾いた笑顔で前へと視線を向けると、パレットが息を吸い込んでいた。それを見て即座にその場にいた業者のほとんどが耳を塞いだ。

「さて！ お気付きの方がいらつしやると思いますが！ 今回は非階銘所有者の業者の方にも来ていただいております。チームが動くには、それなりの物資や情報力が必要となります。故に！ 今回に

限って情報屋や調達屋の方々にも来ていただいております！」

それで俺が呼ばれた訳ねー、とレオラの隣では納得する非階銘所有者　アルルが頷いていた。彼とは反対側のレオラの隣で、クウヤが下等生物を見る目でアルルを睨んでいた。

調達屋が来ていると言うことは、もしかするとメイ・シヨウも来ているのかも知れない。カノンは辺りを見回してみたが、やはりその姿を見つけることは叶わなかった。これだけの人数だ。そう簡単にいくわけがない。朝葉香でさえ、まだ会えていないのだ。

それよりも、気になることがある。肝心のチームのメンバーだ。カノンの心を読んだように、所長が核心に触れた。

「さあ、それでは気になるメンバー発表といきましょうか。チームのメンバー数は五十人。知人友人方と敵対する場合もあるとは思いますが、今回はそんな情は一切どぶに捨て、『三つ巴鬼』に参加していただきたいと思いません。では皆さん、送られた招待状をお取り出し下さい」

所長の声に従い、全ての裏町業者達が鞆やポケットから招待状を取り出す。

「招待状の封筒は、三色あります。白色が私、桃色がアンジユ・キヤラメリゼ、水色がパレット・タルトレットのチームカラーでございます」

「嘘だ……」

カノンは一度取り出した封筒を、ポケットに戻し、ぶつぶつと壊れたラジオのように呟きだした。

「まさか。いや何かの間違いだ。そうに違いない。落ち着けカノン・ソリティア。頑張れカノン・ソリティア。負けるなカノン・ソリティア。大丈夫、ポケットに入れたから、今度はきつと違う色さ」

一体どういう理屈で、ポケットに入れば違う色に変わるのかは分からないが、相当混乱しているようだった。

そして再度ポケットから取り出した封筒の色は……青い空に映え

る白色。あのサディスト所長のチームカラーだった。泣きそうになる自分を励まし、封筒をそつと仕舞う。すると後ろから誰かに抱きしめられた。

「カノンちゃん！ 聞いて聞いて、俺も白色ー！」

かなり嬉しかったらしく、テストで百点を取った小学生のように封筒を見せびらかしてアルルは嬉しそうに跳ねた。

その封筒の色を確認して、死にかけていたカノンの表情に笑顔が戻る。

「まじで！？ やったー！ アルルがいると心強いな！」

何より、知り合いが同じチームに居たことが素直に嬉しかったカノンは、アルルの両手を取って一緒になって飛び跳ねる。

「だろ！ 俺、カノンちゃんの為に頑張るから！ 情報収集も情報工作も任せて！」

「任せるー！」

きゃっきゃつとはしゃぐ二人のすぐ近くで、キョトンとした顔の朝飛が居た。彼が持つ封筒の色は、爽やかな水色。

「水色……えつと、どなたのチームでしたっけ？」

再度首を傾げる朝飛は、隣へと歩み寄ってきた金髪を見た。

「お、アサヒも水色？ オレもなんだよ」

レオラが自分の封筒をひらひらさせて、護衛人を指差した。彼は師範代から『人に指を指してはいけない』と習わなかったのだろうか。朝飛はその指先を辿るように見つめた。

「リーダーはあのごつい男の人。確か護衛人役職だったよな」

「ああ、パレット・タルトレットさんですね。とても声が大きかったので印象深いです」

「あの三人の中では一番まともそうだよな。良かった、普通のチームで」

本当ですねー、とにこにこ笑う朝飛とレオラ。が、朝飛の向こう側を見てすぐにレオラの笑顔が貼り付いた。それと同時に、朝飛の

後ろから冷たい声が聞こえた。

「あら、始末屋レオタード。貴方のチームカラーも水色でしたの？」

「……普通じゃなかった！ 全然普通のチームじゃなかった！」

ガクリと項垂れるレオタード……いや、レオラリアナ。一人状況が分からない朝飛はにこにここと笑い続けるだけだ。

「レオラさん、どうかなされたんですか？」

「嫌ですわね。まるで人を疫病神を見るみたいに……あら？ 貴方は桐生家次期頭目の……」

朝葉香が食い入るように見つめる。そういえば、朝葉香はクウヤのことを毛嫌いしていた。ソレを思い出したレオラは慌てて二人の様子を伺う。

「桐生朝飛です。初めまして、香葉月家八代目朝葉香さん。こんな所で代理屋の大御所さんとお会いできるとは思いませんでした。今回は同じチームメイト同士、よろしくお願いしますね」

人懐こい微笑みで挨拶をする朝飛に、朝葉香もふわりと微笑んだ。「こちらこそ、よろしくお願いしますわ」

どうやら朝葉香が嫌っているのはクウヤだけのようだ。ひとまずは上手くいきそうだとレオラは安堵の息を漏らした。

「えーっと……兄さんは水色で、カノンさんは白色か」

なんとも言えない表情でクウヤは自分のチームカラーを見つめていた。憂鬱そうに彼が手に取る封筒の色は、やはりというか秘書のチームカラーの桃色だった。きっと彼女が一番先に彼を選んだのだろう。

「これって、良いチームなのかな？ 悪いチームなのかな？ 知っている人はみんな違う色みたいだし……」

クウヤの言うとおり、知り合いはほぼ居ないも同然だった。レオラと朝飛と朝葉香、カノンとアルル。どちらのチームにも苦手な人がある訳だが、それでも知り合いが居る方が心強いのは確かだ。

「昔からクジ運だけは良かったんだけどな」

他に知り合いは居なかっただろうかと思い出すクウヤの肩を、誰かがトンと叩いた。

後ろを振り向いたクウヤの表情は、一気に凍り付いた。

「や」

一言のみの挨拶。黒い瞳に黒い髪、黒いコートに黒い服、黒いエンジニアブーツに黒い鳥。

引きこもりの彼が無表情で立っていた。

「最悪だ……このチーム、最悪だ……！」

「奇遇だね。ボクもたった今そう思ったところだよ」

そう言ったフィンの右手には、桃色の封筒が握られていた。

メンバー発表が済み、各チームがそれぞれの本拠地へと移動した。所長チームも例に漏れず、森の奥に急ごしらえで作られた広場に移動していた。広場の柵は、チームカラーの白いペンキが塗られている。メンバー全員が収まって、なおかつスペースが余るくらいの広場だ。

「さてさて。ここが我々の本拠地になるわけですが、ご覧の通り柵で囲われていますね。この柵の中は我々白色チームしか入ることが出来ない、いわば安全地帯です。連続して入っていられるのは一時間のみですが、やばくなったらここへ逃げ込みましょうね」

逃げずに立ち向かって欲しいですが、と聞こえるように呟きつつ、今度はチームカラーである白色の布きれを全員へと手渡ししていく。

「ではみなさん。今から配るこのハチマキを身体の何処かに身につけて、大切に保管して下さいね。このゲームでは、ハチマキを身につけていない者が敵のハチマキを奪うことはルール違反になります。とりあえず、ハチマキを持っていれば敵のハチマキが奪えるということですよ。これはいわば私達の命です。そしてこの三つ巴鬼では、最後に持っているハチマキの数で勝敗を争います。味方のハチマキを減らさないようにしつつ、敵のハチマキをがんがん奪っちゃって下さい」

「イエッサー」

カノンは渡されたハチマキをカチューシャのようにしてリボン結びをした。隣にいるアルルは右腕に結んでいて、色の所為かまるで腕に包帯を巻いているように見える。

「ってことは、ハチマキを奪われたらその時点でアウトなのか？」「いいえ、ミス・ソリティア。各メンバーには、それぞれスペアのハチマキが用意されています。一つ目のハチマキが奪われたら、このスペアを取りに帰ってきてください。もちろん、二つ目が奪われ



てしまえばアウトですが」

全員が八チマキを身につけたのを確認して、所長はにっこり笑う。  
「楽しくなりそうですね」

素直に頷けないのは仕方ない。殆どの者が苦笑いでその場を流していた。いや、一人だけ一緒になって頷いている人がいる。二つに結い上げたその金髪を揺らしながら、カノンがにんまり笑っていた。  
「で、所長。試合開始時刻は？」

\*\*\*\*\*

「正午です。正午になれば、この島は戦場ですよ」

桃色チームの代表者、アンジユ・キャラメリゼはその表情を崩すことなく言い放った。

「しかし案ずることはありません。このチームには全体観測と謳われる情報屋、フィン・クロスフィンガーと、あの世外れの都合屋クウヤ・アンダーグラウンドが居るんです。負ける要素はありません」  
その言葉を聞いて、チームメイトの志気が一気に高まる。所長のチームには目立った裏町業者はいなかったし、パレットのチームには香葉月家の当主が居たが、所詮一人だけ。数で言えばこちらのチームが勝っている。

「だってさ。ボくら、随分期待されてるね」

桃色の布をブーツの上から結んで、フィンが抑揚の無い声で言っ

た。彼の肩に止まっているサスケは首輪のように、首周りをリボン結びされていた。どことなく可愛い感じもする。

「とりあえず、スペアも用意されてることだし、気楽に行きたいね」  
はあ、と溜息を吐いてクウヤは続ける。

「君に一言言っておきたいことがあるんだけど」

「今日はよく気が合うね。ボクもだよ」

「足手纏いになるなよ」

心からの本音らしい。そんな二人を見て、サスケはがくりと首を項垂れる。

『どうして仲良く出来ないんですか、フィン。この場合、体力の無い貴方が足手纏いになるのは目に見えて……ぐえっ、しま、締まっています！ く、くび！』

きゅ、とサスケに結ばれたハチマキをきつめに縛り直しながら、フィンは憤慨したような声を出す。

「サスケ。お前こそ、一番足手纏いになりそうだよ。鴉が人間に勝てると思えないしね。いつそのこと、唐揚げにでもなってみんなの栄養分になるかい？」

『調子に乗りすぎました、申し訳ありません……ほ、ホントに息が！』

「しっかり結んでおかないと駄目だろう？ 安心しなよ、ボクが二度と解けないように結んであげる」

口角があがって、珍しく表情らしい表情をしているのはいいが、邪悪な笑みすぎる。クウヤは関わり合いになりたくないと言わんばかりに、秘書へと話し掛ける。どうやらサスケ救出の希望の光は費えたようだ。

「そういえば、秘書さんはアルル・キャラメリゼのお姉さんなんですよね」

フルネームで呼ぶ辺り、少し棘がある。彼の何が気に入らないというのか。

「ええ、残念ながらそうです」

こちらも相当な言い方だ。アンジュは眼鏡をかけ直しながら、アルル達白色チームがいるであろう方向を見据えて言った。

「でも、アルル・キャラメリゼは白色チームですよ。弟さんを攻撃して、万が一再起不能になってしまつたら……」

再起不能にするつもりなのか。

「構いません。アルルは白色チームの情報源です。早々に潰して置いた方が良いでしょう」

「よし！」

思いつきりガッツポーズをした。それと同時に、カシャ、という奇妙な機械音が聞こえた。

「あれ？ 今、何か音がしませんでした？」

「いえ全然全くこれ以上ないって程思いつきり聞こえませんでしたよ」

「そうですね？ 空耳かな」

文法がおかしい秘書の右手は後ろに回され、その手にはカメラが握りしめられていた。さきほどの音は、空耳などではなく彼女の世外れコレクションが増えた音である。

桃色チームに派遣された幹旋所所員がそれを見つけて、先行き不安そうな表情を隠しきれずに居た。

「残り、五分ですね」

秘書の持つ懐中時計は、午前十一時五十五分を示していた。

\*\*\*\*\*

「では残り五分間、おおまかな作戦会議でもしますか」

パレット・タルトレットのいつもに比べて少し小さめの声に、水色チームのメンバー全員が喋るのをやめる。

「作戦と言うほどのことではありませんが、とりあえず、桃色チームを見つけたらハチマキを奪いにかかりましょう。敵と戦うことなく出来れば一番宜しいのですが……まあ、余計な体力は使わないようにしたほうが無難でしょう。まる一日がかりの鬼ごっこですからね。それから、白色チームを見かけたら逃げましょう」

そこで質問の手が上がる。腰に日本刀を引つ提げた朝飛だ。

「何でしょう？」

「ええと、質問なんですけど……畏を張ったりするのは有りですか？ 底が竹槍になってる落とし穴とか」

「お前、何怖いこと言ってるのー!？」

レオラがすかさずつつこむが、彼と並んで右隣では朝葉香が「あら、なかなか良い案ですわね」と乗り気だった。つつこみきれない和国人はみんなこう猟奇的なのだろうか。

「もちろん有りですよ」

しかも許可されてしまった。

「きつと他のチームも同じことを考えていると思いますし……。さて、ハルナ・ウェストテルさん。敵の情報は掴めましたか？」

ついさつき帰ってきたカグヤを腕に乗せ、水色チームの情報係であるハルナは強く頷いた。ゲームは始まる前から準備するものだ。

「ええ。どうやら私達を追ってくるチーム……白色チームはカノンちゃんを筆頭に、街外れ・国外レベルの裏町業者達を前線に出してきそうね。街外れより下の階銘所有者は、自分のハチマキを守ることに専念させるみたい。要注意なのが、天下一と謳われる調達屋の存在かしら。メイちゃんが水色チームのハチマキを全て調達……」

てことにもなりかねないわ」

それはさもありません。少々抜けているところがあるとはいえ、あの調達は目を見張るものがある。

「それから、私達が追うチームである桃色チームだけど、ここは朝飛くんの弟が斬り込み隊長になりそうね。世外れということもあつてか、みんなから絶大な信頼を得ているわ。このチームの最大の要は、やっぱり全体観測かしら。あの情報収集力は最大の戦力ね。先に潰した方がいいかもしれないわ」

報告は以上よ、とハルナが言い終わると、すかさず周りから拍手がおこった。見解観測の異名は伊達じゃない。

少し照れたように咳払いをして、ハルナは続ける。

「パレットさん。考えてみたんだけど、レベル別で知らない者同士がくつつくよりも、知り合い同士や、一緒に仕事を組んだことがある者同士が固まった方が良いと思うの。その方が連携を取りやすいし」

「そうですね。では桃色チームのハチマキを奪取することさえしてくれば、後は各自で動いて良しということだ」

パレットがそう言うと、二人組や三人組のチームがいくつか出来上がった。小編成の方が動きやすいというのは共通の意識だったようだ。

レオラと朝飛と朝葉香も、同じように三人一組になっていた。

「僕達も何か策を考えなければいけませんね。取りあえず、動いていればかち合うと思うんですが、空夜と会ったときはどうしましょう？ 逃げ足も相当だと思んですが、三人で追ったとしても戦力が勿体ないでしょうし……誰か一人が追いかけることにしたほうが良いと思うのですが」

「お任せなさい、桐生朝飛。ここはわたくしが行って貴方の弟を仕留めてきて差し上げましょう。あの戦闘力は邪魔です。それに、前から気にいりませんでしたし」

何故だか個人的な感情も見え隠れしたが、あまり気にならなかつ

たのか、朝飛はそうですね、と納得した様子で微笑んだ。

「それじゃあ、香葉月さんに頼みましょうか」

「いや、駄目だろ！ 人道的に！」

レオラが激しく首を振ってそれを止めた。その意図がよく分からない朝飛は、傾げた首をそのままにして、かぶりをふるレオラに問う。

「どうしてですか？ 香葉月さんだって凄くお強いじゃないですか。大丈夫ですよ」

「いや、お前が大丈夫でも駄目だよ！ クウヤがかなり駄目だよ！ 失神するって！」

「気絶してくれたら丁度いいじゃないですか。攻撃する時間も体力も浪費せずにすみますし」

無駄に体力があるんですよね空夜って、とやや嘲笑気味に笑う朝飛を見て、今度はレオラが問う。

「お前、なんかクウヤに対する態度が変わってねえ？」

「只今、あんな生意気な弟とはもう口を聞かないキャンペーン実施中なんです」

随分と長いキャンペーン名だった。というか、あまりキャンペーン名らしくない。どちらかというところ、朝飛の心情をそのまま言葉にしたような文章だ。

「……クウヤと喧嘩でもしたのか？」

「喧嘩？ 僕と空夜が？ まさか。いえいえいえいえ、そんなまさか。馬鹿言わないでください、レオラさん」

わざとらしいその様子を、レオラが呆れたように見た。兄弟というのは幾つになっても喧嘩をするものなのだろうか。

「……したんだ？」

「喧嘩なんてしてませんよ？ 別に、電話の最中にちょっとしたこととで意見の違いが出てそこから昔のことまで引き合いにだしてきてお互いのことを罵りあって精神的古傷抉りあったりトラウマ思い出させたり最終的には方言まで飛び交うような喧嘩なんて、全然して

ませんよ、ええ。するわけないじゃないですか」

朝飛の後ろに虎か龍が見えた。なのに、顔は笑っている。それが余計に怖い。

「オレ、もう帰りたい」

レオラ、心からの台詞だった。

「あら……」

物静かな声が響く。朝葉香が、腕時計を確認してこちらを見た。

「ゲームスタートですわ」

二月二十二日、正午。不安を拭いきれないまま、裏町幹旋所の長い戦いが始まった。

「じゃあ、僕は竹槍式の落とし穴を掘ってきますね」

「駄目だから！　せめて普通の落とし穴にしろ！　串刺しになるから！」



午後十二時五分。

白組の情報係を任命されたアルルは、鬱蒼と生い茂る森の中を一人走っていた。

「あー……鬱陶しい！ この枝鬱陶しい！」

枝の所為で髪がばさばさと乱れていく。だが、これも仕方ない。

彼は他のチームの情報屋と違って、連絡用の鳥を持っていない。フィンとハルナは、カグヤやサスケを使って動かずとも情報を手に入れることが出来るが、鳥を持たない自分は、文字通り自分の足で動くしかない。

「見つけた、お前のその腕、白組だな！」

「やべっ！」

前からやって来た男は、アルルの記憶が正しければ、確か国外れの便利屋バズとかいう奴だ。

桃組だったのか、とアルルは慌てて今来た道を引き返す。

「くそ、待てえ！ ハチマキよこせー！」

「……………だーれが待つかつーの」

引き返したように見せかけて、アルルは木の上に乗っかっていた。それに気付かずに、バズはさっさとアルルが今まで走ってきていた道を行ってしまった。

アルルは頭脳系の情報屋達の中では体力に自信がある方だが、それは所詮情報屋内のこと。プロには敵わない。

「もうちょっと気を付けて移動しねーと駄目だな。開始早々ハチマキを取られちゃ情けないし」

「そんなことになったら、カノンさんに嫌われてしまいますしね」

「そうそう。それだけは勘弁してほしいよ。今日は俺の活躍を見てもらってカノンちゃんに……………」

自分が活躍する姿を想像する前に、アルルは声が聞こえた左隣へ

とゆつくり首を向ける。嫌な予感がする。というか、それしかない。

案の定、自分と同じ枝に、素敵な笑顔のクウヤと一緒に座って居た。

「で、出た！」

「嫌ですねー、人をお化けか何かみたいに。あ、ちなみに僕は桃組です」

ほらこれ、とわざわざクウヤは自分の手首に結んだ八チマキを見せつけてきた。桃組、つまりアルルを捕まえるチーム。ピンチを回避したと思ったら、余計に危機に陥ってしまったようだ。早速一つ目の八チマキが危うい。

アルルは逃げようと枝から飛び降りるが、それとほぼ同じ速度でクウヤが追ってきた。やはり世界の外れ者には敵わない。

「くっそー、開始早々かよ！」

「僕の質問に答えてくださったら、今回は見逃して差し上げます」にこつ、とアルルには見せたこともない爽やかな笑みを向けて、次の瞬間、クウヤは人差し指をアルルへずびしと向けた。

「唐突に、和国式心理テスト！」

「本当に唐突だな、おい！」

一応つつこんでみるが、文句は言えない。折角見逃してくれると言っているのだ。甘んじて受けた方が良い。

アルルの思考を読んだのか、それとも有無を言わずに心理テストをする気だったのか、クウヤは上機嫌でテストの内容を言う。

「第一問！ 自分の最も嫌いな食べ物を言いなさい！」

「は？ はあ……？」

一瞬、何を問われたのか分からなかった。

アルルが狼狽していると、痺れを切らしたクウヤが追い立てるようにして続ける。

「はい、残り十秒！ 十秒経っても答えなかったら、攻撃しますよ。じゅーう、きゅーう、はーち……」

「制限時間付きなの！？ ちょっと待て、えーっと、あー……………」  
「フォアグラ！ 嫌いな食べ物、フォアグラ！」

答え終われば、明らかに嫌そうな顔をしたクウヤがいた。

「…………高価すぎて用意出来ないじゃん！ 嫌がらせ出来ないじゃん！」

「何で！？ なんで嫌がらせすんの！？ 心理テストじゃなかったの！？」

「心理テストの結果ー。フォアグラ嫌いな人は馬鹿でーす。救いようのない馬鹿でーす…………チツ」

隠そうともせず、クウヤは舌打ちした。嫌いな食べ物がピーマンやニンジンだったら、手軽に嫌がらせが出来たものの、フォアグラなんて高級食材を答えられては嫌がらせのしようがない。

「めっちゃくちゃ適当だな！ ちょっと、嫌がらせとか本気でやめてくれ。フォアグラ苦手なんだから！ おまえ喧嘩売ってんの？」

「残念ながら、喧嘩は買っても、売らない主義なんです」

はぁ、と溜息を吐きながらクウヤは首を振った。相当落ち込んでいる。折角一度目のハチマキを見逃してまで得た結果がこれでは、溜息も出るというものだ。

「仕方ないです。約束ですし、今回は見逃します。これより十分間は貴方を追いません」

「そりゃ良かった。…………ていうか、俺の何がそんなに気に食わない訳？」

新たなハチマキを探すべく、森の中心部へ向かおうとするクウヤに向かってアルルは最大の疑問をぶつけた。どうにもこうにも、アルルにはクウヤにここまで毛嫌いされる理由が思い当たらないのだ。クウヤはくるりとこちらを振り向いて、少し考える素振りを見せる。

「…………そうですね、強いて挙げるなら…………息をしているところ」

「わぁ…………それって遠回りに死ねって言ってるよな？」

「ああ、意外と頭の回転は良いんですね。はい、死ねばいいと思い

ます。それでは」  
たんつ、と音がしたかと思うと、もうそこにクウヤの姿は無かった。走る、というよりは消えたと言った方が正しいような気さえしてくる。

取り残されたアルルは、めげそうになる気持ちを無理矢理立ち直らせ、情報収集を再開した。

\*\*\*\*\*

「……………なんでだ？」

便利屋のバズは、今の自分に置かれた状況が分からなかった。

確か自分は森を徘徊していて、ターゲットである白組の情報屋を見つけたのだ。あの情報屋は確か、受付会場で「アルル」と呼ばれていた人物だった。もちろん相手は自分を見てすぐに逃げたので、走ってその後を追いかけた。

そう、追いかけていたのだ。

「試合開始から十分経過、奪取できた布の数、合計十六本」

「じゅろつぽん……………」

「えーっと、数学は苦手なんですけど……………およそ三十七秒に一本の割合ですね」

上出来です、と目の前の少年は嬉しそうに笑っていた。あどけないその笑顔に騙される奴も多いことだろう。見たこともない服装を

したその少年は、腰に刀を提げていた。

「……………う、ぐっ……………」

バズは起きあがるうと身体を動かしてみるが、ちゃんと身体は動いてくれない。その代わり、動かそうとすればするほど気持ちが悪  
い。

「大丈夫ですか？ 一応手加減したんですけど……………駄目だなあ、ちやんと加減出来なかったのかなあ？」

申し訳なさそうにする少年の手には、大量の桃色の八チマキ。少年が言うには、十六本あるらしい。そしてその内の一本に、先程奪われたばかりの自分の物も収まっていた。

「何が、起こった？」

バズはただ訊ねることしか出来なかった。訳が分からない。一体自分の身に何が起こったというのだ。

「ええと……………貴方がその茂みからいきなり現れて、」

少年が指差すと同時に、ガサツと茂みが動いた。

「畜生、なんだこの森？ 誰とも会わないじゃない、か……………？」

そこから現れたのは、自分と同じチームの人間の姿だった。顔までは覚えていないが、頭に巻いた八チマキの色で分かる。

その八チマキが桃色だと分かると、瞬く間にあの刀の少年の身体は動いていた。疾風……………いや、神風のように。

腰にせっかく提げている刀を鞘から抜こうとせず、そのまま相手の顎へと突きだした。刹那、呻き声も何も聞こえないまま、味方の姿はその茂みの中へと倒れ込んだ。

そうだ、自分も彼と同じことをされた。それから身体がちゃんと動かないのだ。

「十七本目ー」

少年はやはり、先程と同じように嬉しそうな笑みを零していた。手には、また一本増えた桃色の八チマキ。どうやら先程茂みから現れた人間も、完璧に負けてしまったようだ。

「お前……………」

「はい？」

「あいつと、俺に、何をしたんだ……？」

「あ、すいません。話の途中でしたね。そうそう、あの茂みから今の人みたいに貴方が走ってきたので、顎を突いて脳を揺らしました。当分はまともに動くことは出来ないでしょう」

その表情を見て、バズは完全に思い出した。自分のチームの戦力である、世外れの都合屋。あの少年が見せてくれた写真の人物と、同じ顔をしているのだ。この少年は。

『敵のチームに僕の兄が居ます。これに会ったら、死に物狂いで逃げてください。これ以上ないほど走ってください。これ、敵には容赦しませんから』

今更になって思い出した。思い出したところで、もう意味は無い。それどころか、会ったあの瞬間に思い出していたとしても意味は無かっただろう。逃げる暇なんて無い。

「アサヒ・キリュウ……世外れの都合屋の兄か」

「ええ、残念ながら」

どこかで聞いたような台詞を言って、朝飛は笑った。バズも力無く笑った。完全敗北だ。

「おっそろしい奴……」

近くでその様子を見守っていたレオラが、堪えきれなくなって本音を漏らした。彼はずっとここから見てるだけだった。彼が動く前に、全て朝飛が片を付けてしまうのだ。出る暇も無い。

彼の後ろには、今まで朝飛に片付けられた桃組の人間が大勢倒れていた。ある者はバズと同じように脳を揺らされ、まともに動けない状態。ある者は、完全に気絶している。

そしてある者は

「さあ、貴方達の他に、誰が何処へ向かったかを吐きなさい。そうすれば、命の保証はしてさしあげますわ」

朝葉香による拷問を受けていた。

がくがくと揺らされ、半分泣きそうになりながら知っている情報を話し出す彼等を見て、レオラは肺に溜まった息を吐き出した。

「はぁ……オレ、この三人組でやっていけんのかな……？」

アゲハならいけるかもしれない。ちょっとだけそんなことを思った。

「和国式心理テスト……か。フオ、フオアグラ嫌いな人は馬鹿って本当かな……？」  
アルルはちょっと不安になった。



111 裏町ラブソディ #05 「走るなメロス」

「アルルが動いた」

桃組、困いの中でぽつりとフィンが声を出した。彼の肩にはサスケが止まって、今まで見てきた状況を全て話していた。

「そうですか」

興味が無さそうな声でアンジユが答えた。今はほとんどの仲間達が外へとハチマキ狩りに出掛けている。クウヤがいることもあつてか、みんなはなかなか強気である。

「……ねえ、キャラメリゼ。一つ提案があるんだけど」

「はい？」

「一旦、みんなを戻した方が良いかもよ。結構な数が狩られてる。

桃組の損失分は三十二本……だつてさ。三チームの中では最高本数だよ」

アンジユが苦虫を噛みつぶしたような顔をして、フィンの手元を見る。フィンはサスケから得た情報を綺麗に紙の上へと整理している。く。

そこへ書き連ねられる、数。

白組、奪取数十一本、損失分十一本。結局はプラスマイナスゼロだ。

桃組、奪取数十一本、損失分三十二本。白組と違って、二十一本の損失を被っている。

そして圧倒的に多いのが水色組。奪取数三十二本、損失分十一本。唯一の黒字である。

「水色組は三人一組、もしくは二人一組の小編成で動いているみたいだ。その中でも、キリュウ・コウヨウツキ・レオリアアナ組が最も奪取数が多い。桃組のほとんどがこのチームにやられてるよ」

これは案外やばいかもしれないね、と若干楽しそうな声でフィンが言った。

「それにしても、誰もスペアを取りに戻ってきませんが」

疑うわけではないが、数字の上では三十二人やられているのだ。それならば何人かスペアを取りに戻ってきてもいいはずだ。だが、この囲いの中にはさつきから、フィンとアンジュしかない。いや、サスケが出たり入ったりしていたが。

「面白いことになってるよ。ふふ……考えたね、キリュウ。どうやら動くこともままならないまでに攻撃を加えているらしい。羊の皮を被った悪魔だね」

戻りたくても、戻れない。そうやっていく仲間達が多いのだ。

のんびりしていても、全滅させられてしまう。

「……分かりました。一度作戦を立て直しましょう。全体観測、全員に連絡をお願いします」

「了解。サスケ、疲れてるだろうけど、頼むよ」

『承りました！』

そう言うと、サスケはまた囲いの外へと飛び出していく。森の中に鳥が飛んでいたって不思議はない。流石に首元にリボンを付けた鴉は珍しいが、まさかサスケまでこの三つ巴鬼に参加させられてるとは思わないだろう。

サスケは桃組の人間達に帰還命令を伝えていく。

そして命令を受けた者から、次々と帰還してくる。じわじわと増えてくる囲いの中、その様子をフィンはいつになく楽しそうに見ていた。

「さて、どんな作戦を立てようかな」

「楽しそうだね」

声を掛けてきたのは、いつの間にか帰ってきていたクウヤ。少々不満そうである。

「そうだね、いつもに比べれば幾分か楽しいよ。キミはそうでもないようだけど」

「不満だらけだよ。……ねえフィン」

「なに？」

「フオアゲラって、高いよね……」  
かなり関係の無い話だった。

「……それは、物によると思うよ」  
たぶんアルルのことだろうなと思いつつ、フィンは返答を返した。自分の兄弟子は相当嫌われているらしい。実の姉からも毛嫌いされているようだし、なかなか可哀想な奴だ。

\*\*\*\*\*

「うーん……」

木の上からぐるりと辺りを見回す朝飛が、困った表情で唸る。右手を目の上に当て、遠くまで見えやすくしてみるが、そこにあるのは緑ばかり。時々人を見つけたとしても、自分の仲間である水色組の姿くらいである。幸運なことに、まだ白組の姿は見受けられない。狩られる心配は無さそうだ。

「桃組さん、消えちゃいましたねー」

丁度彼の向かい側の木の枝に腰掛けて、その長い髪を風に遊ばれている朝葉香へと声をかけた。

「おかしいですわね。先程教えてくださった方は、ここ周辺に世外れの都合屋が徘徊すると仰ってましたのに」

「教えてくれたんじゃないかって、拷問したんだろ……」

朝飛と同じ木、彼よりも一段上の枝の上から呆れたような声が降

りた。レオラがげんなりした表情でぼそりと呟いていた。だがそれを聞き逃すことなく、朝葉香はギンと視線を向ける。

「お黙りなさい、役立たず」

鋭利な刃物が投げられたように、言葉が刺さる。落ち込むレオラを見て朝飛がなんとか声を掛けるが、一番活躍している人に言われてもそれは慰みにならない。

「それはそうと、桃組が一人も居ないのはおかしいですね。きっと警戒されましたわね」

それもそうだ。これだけのハチマキを取られて何も無いわけがない。きつと作戦会議が何かを始めたのだらう。

朝飛は自分の懐にあるハチマキを見て言った。

「一度、本部に戻ります？ このハチマキを預けにいかなきゃなりませんし、ハルナさんから新しい情ほう……」

言葉を最後まで紡がないまま、朝飛は身体を硬直させた。その様子を感じ取って、朝葉香も厳しい表情を見せる。

「囲まれてますわね……」

「二人………いえ、三人でしょうか？」

木々の合間から様子を伺って、レオラが苦笑いしながら言う。

「オレと朝飛の後ろに一人、コウヨウツキの後ろに二人だな」

三人が顔を見合わせる。囲まれたときの対処法はすでに計画済みだ。バラバラに逃げて、十分後に同じ場所で待機すること。

レオラが聞こえるか聞こえないか分からない程度の声で合図を出して、

「それではお先に失礼しますわ」

「ちっ………逃げたぞ！」

最初に木から降りたのは朝葉香だった。着物を着込んでるとは思えないほど軽やかに飛び降り、素早く茂みの中へと走り去った。

「エメロツダ、ルツチ！ アサヒとアサハ力を追え！」

聞き慣れた声が聞こえた。その声に反応して、二つの影が朝葉香の後を追う。残りは一人………先程命令を下した人物だ。朝飛はいつ

の間にか逃げていたようで、木にはレオラしか残っていない。  
嫌な予感がする。

レオラは自分の居た木から朝葉香の居た方へと飛び移る。

「甘い！」

だが、すぐに同じ枝に金髪の少女が飛び移ってきた。レオラにとつて、出来れば見たくなかった顔だ。

「くたばれ、セリヌンティウス！」

自分とはまた違った金髪を持った少女、カノンが飛びかかってきた。

「待ってくれ、メロス！」

慌てて木から降りて森を抜ける道を走り出すが、それを見逃すほどカノンは甘くない。

「逃げるな！」

走り出したレオラを、同じように走って追いかけてくる。

「うわ、走るなメロス！」

「走らないメロスはただのメロスだ！ ついでに言うと、セリヌンティウスは親友の為に身代わりになるんだって知ってるか？」

「オレはしないからな！ オレはセリヌンティウスみたいにお人好しじゃないからな！」

林を縫うように走る二つの金色。今は森の中だが、外へ出れば隠れる場所も何もない。

レオラは速度をあげてみるが、カノンも負けじと付いてくる。男勝りなのは結構だが、この場合では困る。一応、二人の間は一定の間隔が開いているが、いつ追いつかれるとも限らない。

まずい。

そう思ったとき、後ろから声が聞こえた。

「カノンさん見つけた！」

男にしては高い、女にしては低いこの声。秘書のチームの要、クウヤの声だ。

「げー！」

バツとカノンが後ろを振り返るが、そこにクウヤの姿は無い。

「クウヤ？ どこだ！？ 出てこい！」

「嫌です。ハチマキを渡してくれるなら話は別ですけど」

立ち止まったカノンは、さっと木の近くに寄り、背中を取られないようにする。四方八方まで気を散らしてられない。

レオラはもう既に逃げ切ってしまったようだ。

「……危なかった……」

カノンが身を寄せた木のすぐ近くの茂みの中、レオラは逃げ込んでいた。荒い息を元に戻しながら、今の状況を把握する。

自分が逃げ切ることが出来たのは、カノンの敵であるクウヤの声が聞こえたから。

「無駄な抵抗はやめた方が吉ですよ」

「うるっさい！」

だが、レオラは知っている。この場にクウヤは居ない。彼の隣にはクウヤの声を出しながら、彼女の様子を伺う朝飛がいるのだから。クウヤの声がしない方へ、じりじりと後退を始めるカノン。

「間一髪でしたね」

クウヤの声ではなく、自分の声で話し掛ける朝飛。

「おう……助かった」

レオラも小声で礼を言う。

そういえばクウヤも声真似や人真似が得意だった。きっと桐生家の忍の専売特許なのだろう。なにせよ、朝飛の声真似のおかげで何を逃れられそうだ。

だが、世の中そんなに都合良くいけば、都合屋はいらない。

カノンがさつきまでとは違い、少し含んだ笑みを見せながら声をあげる。

「クウヤ、お前は桃組だったよな？」

「ええ、そうですが」

「おつかしいな……。アルルの情報では、桃組はいま、メンバー全員に帰還命令が下されている。お前は戻らなくて良いのか？」

朝飛が言い訳をしようとして、背後に何かの気配を感じた。

「ルツチ、いまだ！」

「え？ わあっ……。レ、レオラさん！ これを持って逃げてください！」

捕まる寸前、朝飛はいままで奪った桃色のハチマキを全てレオラへと投げた。それを上手い具合に受け止めたレオラは、一目散に走った。

残ったのは、カノンの倍はあるかと思われる身長 of 男と、その男が持つ虫取り網のような物の中に見事に捕らえられた朝飛と、満足げなカノン。

「アサヒ、取ったりー！ いえーい、ルツチ最高！」

「っ、捕まってしまいました……」

網の中で、身動きが取れなくなった朝飛が脱力したように呟く。

「悪いな、刀の坊主。まあ、嬢ちゃんの方が一枚上手だったってことだ」

そう言っただけルツチは豪放な笑いを響かせた。彼の後ろからは、若いポニーテールをした女が現れた。

「おかえり、エメロツダ」

「カノン、ごめんなさい。アサハカ・コウヨウツキ、見失っちゃったわ。後ちよつとで追い付きそうだったのだけど」

両肩を上げながら申し訳なさそうにするエメロツダに、カノンはじゃーんと効果音を付けて朝飛の入った網を両手で指し示す。

「水色組の最強三人組の一人、アサヒ捕獲成功ー！」

「やるじゃない！」

わいわいと楽しそうに話した女二人組。朝飛は自分を持っている網の持ち主、ルツチへと伺うように声を掛けた。

「あのー……。取るならどうぞ早くハチマキを取ってください。僕、

まだスピアが残ってるんで本部に取りに帰らないと……」

「そうしてやりたいのは山々なんだけどなあ。嬢ちゃんの作戦では、このままお前さんには、俺達と一緒に白組の本部に来てもらうことになってんだ」

「はあ……………はあ!？」

大声を出した朝飛に、カノンが顔を顰めながら振り向く。

「どうしたんだよ、アサヒ」

「ちょ、ちよつと待つてください。僕がなんで白組の本部に連れていかれるんですか？ これはハチマキ争奪戦なんでしょう？」

網の中の朝飛が混乱しながら訊ねると、エメロツダがちつつち、と人差し指を左右に振りながら口端をあげた。

「甘いわね、アサヒ・キリュウ。水色組の最強チームの一人をそう易々と帰すわけないでしょう？ 貴方をもう一度敵に回すのは厄介だもの」

「そういうこと。お前には捕虜になってもらうつもり」

朝飛の顔がさあつと青ざめる。隙を見て逃げたい、が網の中へ虫のように捕らえられては、身体が思い通りに動かない。

そんな朝飛の腰から、ルツチが刀と、刀に結ばれたハチマキを取り上げた。

「お、追風！ 返してください！」

どうやらハチマキよりも刀を奪われたことのほうがショックだったらしい。網から必死に腕を伸ばして、刀の名前を呼ぶ。

「ほい、嬢ちゃんパス」

ルツチのごつごつした手から『追風』がひよいとカノンへ渡される。それを受け取ったカノンが嬉しそうに朝飛の目の前にちらつかせる。

「やーい『追風』ゲットー。欲しかったらここまでおいでー」

「子供みたいなことしないでください……！ 『追風』は友達から貰った大切な刀なんです、お願いですから返してください！」

「駄目。捕虜から武器を取り上げるのは基本中の基本だろ」



それを聞いて、しゅんと頂垂れる。可哀想だが、彼に武器を持たせたままにしておくのは危険すぎる。

知らないわけではない。アルルから聞いた情報によると、桃組が奪取されたハチマキのほとんどが、朝飛によって奪われたらしい。用心しておくにこしたことはない。

「……素朴な疑問なんですが」

「なんだ？」

「本部に連れて帰るって言っても、本部に入れるのはチームのメンバーだけですよね？ 僕は一体どうなるんですか？」

「安心しろ。困いの外に捕虜を固めておく場所を作つてあるから用意周到なことだ。白組は強い者を捕らえ、弱い者が動き出すのを待つ作戦に出たようだ。」

「レオラさん、ちゃんと本部に着いてるといいんですが……」

朝飛は網の中、足が上がったままの窮屈な姿勢のままぼんやりと呟いた。

111・裏町ラブソディ #05「走るなメロス」(後書き)

「あーあ……また魁に怒られちゃうよ。この前小刀壊したばかりなのに、追風まで捕られて……あーあ」

112・裏町ラブソディ #06「戦えセリヌンティウス」

「そつれつでっ!?!? 助けてくれた朝飛くんを捨てて逃げてきたの!?!?」

水色組本部 無事に逃げ切ったレオラは、見解観測ハルナ・ウエストテルに大声で怒鳴りつけられていた。もちろんレオラは正座をさせられている。

「それでも貴方、始末屋なの!?!? 道外れといえど、自分の始末くらい自分で付けなさいな!」

「ご、ごもつともです……!」

「しかも、年下に庇ってもらって、そのうえ言うとおりに見捨ててきたですって!?!? 殴るわよ!?!?」

「ぐお……既に殴ってるんだけど……!」

正座の所為でちゃんと機能しない両脚をじんじんさせながら、頬にはパンチをいれられた。レオラは上半身を屈ませて悶絶した。

そんな彼のすぐ後ろで、無事に逃げ切った朝葉香が莫座の上で湯飲みを持ってくつろいでいた。休憩をとっているようだ。

「全く、情けないですわね。男の意地を見せなさい、意地を!」

「分かっているよ。アサヒがスペアを取りに戻ってきたら、ちゃんと借りは返す!」

しっかりと頷いたレオラに、また同じ場所へハルナのパンチが飛ぶ。

「分かっているわよ、馬鹿!」

「ふおお……キツイ! 同じ場所はキツイ!」

悶えるレオラに構わず、彼女は話し続ける。

「白組の作戦はね、ハチマキを持った人間ごと連れ攫って、捕虜にしていくことなのよ! そうやってチームのメンバーを減らされて、最終的に街外れ以下のレベルと大量のスペアが余っちゃうの! そうしたらどうなると思う!?!?」

どうもこうもない。この本部に連続して居られるのは一時間。一時間経ってしまえば、一度外に出なければならぬ。そこを白組は狙ってくるつもりなのだ。じわじわとスペアを減らして、取りやすい者から奪っていく。

迂闊だった。カノンは真つ向からの勝負を好むが、あのチームにはアルルが居る。アルルの考えそうなことではないか。

「今のところ、捕虜になったと思われるのは朝飛くんだけ。でも、朝飛くんが居なくなったただけでこのチームの戦力の三分の一は無くなったと言っても過言じゃないわ！」

ハルナがヒステリックに叫んだ。だが、実際その通りなのだ。動いていた小編成チームのうち、好成績をあげていたのはレオラのチーム。その他は、辛うじて一、二本のハチマキを取っている程度。

ここで朝飛が向こうのチームに奪われたのは痛手だ。まだ始まって二時間と経っていないのに、早速水色組は危機に陥ってしまった。レオラは痺れが戻った両脚をしっかりと立たせて言い放つ。

「……よし。アサヒを救出しに行くぞ」

「私も行くわ。白組の本部の場所を特定出来るのは私だけだし」  
ハルナが力強く頷いた。周りにいた何人かの仲間達も、同意を示してくれている。どうやら手伝ってくれるようだ。

そして後ろから声。

「わたくしはパスですわ」

朝葉香がにっこり微笑んだ。

「そうか……え、パス？ オレ、なんか聞き間違えた？」

「だって捕まったのは己の力量を見誤ったからじゃありませんこと？ 幾ら始末屋を庇った為とは言え、自分で出来ると感じたからこそでしょう？ それなのに何故このわたくしがその尻ぬぐいをしなければなりませんの」

なんとなく、正論のようにも聞こえてしまう辺り、朝葉香の凄さが伺える。

だがレオラは食い下がる。

「それでも、仲間を助けるのは当たり前だろ？」

「始末屋。弱肉強食という言葉をご存じ？」

あっさり返された。

「よ、容赦無えー！　いくら何でもそれは無いだろ！」

レオラが叫ぶ。

「いらぬものは切り捨てる。そういう生き物ですわ、女という生き物は」

「女、超恐えー！」

がたがたと恐怖を感じているレオラを無視して、朝葉香は莫座の上で共に緑茶を飲んでいたパレットへと話し掛ける。

「わたくしは桐生の救出には向かわず、引き続き八チマキの奪取に掛かりますわ。桐生が居ないという情報は既に桃組にも入ったことでしょう。向こうに居るのは全体観測ですもの。ですから、油断した隙を狙いますわ」

「そうですね。目立った行動をしていたのは桐生くんだけでしたし、香葉月さんの行動パターンはまだ読まれていないでしょう。そのほうが懸命です」

話は決まった。ハルナもそれに同意する。

「じゃあ、私とレオリアナで朝飛くんの救出に向かうわ。他のみんなは今までより一層八チマキの奪取に力を入れてちょうだい。カグヤ、朝飛くんのスペアを貸してちょうだいな」

カグヤが、器用に嘴で水色の布を銜えてハルナの方に止まった。

「うっし、行くぞ」

レオラとハルナが、本部から離れた。

「あのー……これはちょっとやりすぎなんじゃ無いですか？」

縄で手首、足首を拘束され、そのうえ腕と上半身をぐるぐる巻きにされた朝飛が、目の前のルツチへと声をかけた。

「いやあ、これくらいはしとかねえと、逃げられちゃあ困るんだよ。ここは森の南西部、白組本拠地、のすぐ隣。捕虜を入れるための囲いの中だ。本部の囲いに比べて、背の高い木々で囲われ、一種の檻のようである。これはいくら朝飛といえど、登って逃げることは出来なさそうだ。」

「まあ安心しなつて、坊主。食事は出るし、野獣に襲われることも無い。快適じゃねえか」

「この縄が無ければ最高なんですけどね」

言ったところで、外してもらえないわけもないが。

ルツチはそりゃそうだ、と豪快に笑って、そしてすぐに真剣な表情へと変えた。

「で、本題なんだがな。水色組の本部はどこだ？」

「……さあ？」

にっこりと笑顔を向けたまま、朝飛は器用に肩をあげる。そんな戯けた様子の朝飛に、ルツチは両手を上げて笑う。

「よし、分かった。質問を変えよう。水色組の今後の動き、もしくは作戦は？」

「さあ、どうでしょう？」

「他の仲間達は、いま何処にいる？」

「探せば何処かにいるんじゃないですか？」

ずっと、同じ表情を崩さない。朝飛は相手を挑発するように勝ち気な笑顔を見せる。

耐えきれなくなったルツチが、朝飛の目の前に先程奪った『追風』を見せる。

「さっきの質問全てに答えなきゃ、この刀を折るぞ」

「……それで僕を脅したおつもりで？」

沈黙。朝飛は『追風』を目の前にしてもぴくりとも表情を変えない。余裕のある表情をルツチへと見せる。

しばらく経ってルツチが観念したように苦笑いを見せた。

「降参だ。お前からは何も聞き出せそうに無えな。聞かれたことはちゃんと答えろって、お家の人に教えられなかったのか？」

「沈黙の貫き方なら、お家の人に教えてもらいましたから。守秘義務を全うするつもりらしい。」

しかし、とんでもないものを教えてもらっている。普通の家じゃないのだから当たり前のだが、ルツチはその言葉を聞いておらずと質問をしてきた。

「まさか、縄抜けの仕方教えてもらってたりするんじゃないかな？」

「そのままです。でも、縄抜けは僕より弟の方が得意だったので朝飛の答えを聞いて安心したようで、ルツチは『追風』を持って立ち上がった。」

本部へ帰って、今の報告をしなれば。

「じゃあな、坊主。あと一時間もすれば昼食を運んで来るからよ」「ありがとうございます。楽しみですね」

後ろを向いたまま、またルツチは豪快に笑った。そして囲いの扉を開け、去っていた。

ルツチが完全に居なくなったのを確認して、朝飛は一人呟く。

「僕より空夜の方が得意だったって訳で、僕が縄抜け出来ないって訳じゃないんだけどね」

動かせる範囲で手を動かし、なんとか縄抜けを試みる。空夜のように関節を外した方が早いのだが、どうもあれは苦手だ。

「時間はかかるけど、助けを待つよりかは確実かな」

後で『追風』も取り返さなければ。心に決めて、朝飛は囲いを見つめた。



112 裏町ラプソディ #06 「戦えセリヌンティウス」 (後書き)

ゲームは始まったばかり。

「なんで僕がこんな奴のお守りをしないといけないんだ」

茂みの中に隠れながら、音量も抑えず無防備にクウヤが言った。

「それはこっちの台詞だね。何が悲しくてキミと二人きりで行動しないといけないんだ。悲しすぎてもう前が見えないね。涙が滲むね。どうしてくれるんだ」

「滲むどころか、全部見えなくしてやろうか？」

「やれるものならやってみなよ。その瞬間、キミの恥ずかしい思い出ベスト3を世間に公表するから」

隣で仏頂面のままフィンが返してきた。それに対して、クウヤがハツと鼻で笑った。

「恥ずかしい思い出？ そんなモノは無いね」

自信満々に言われたが、そんな彼に見向きもせずフィンは遠くの方を見つめながら棒読みで言った。

「シャランラー。世外れの都合屋クウヤ・アンダーグラウンドの恥ずかしい思い出第三位」。五歳の時、調子に乗って登った桜の木の上で、実の兄に向かって言ったセリフが

「なんで知ってるの!？」

フィンの台詞を最後まで聞かずにクウヤが叫んだ。やはり闇鬼といえど、恥ずかしい過去はしっかりあったらしい。

ここまで仲の悪い彼等が、この三つ巴鬼中に二人きりで行動することになったのには、それなりに訳があった。

話は三十分に遡る。

「駄目駄目だね」

桃色の布を身につけた人間に囲まれて、黒い少年は無表情にそう

言い切った。

少年から告げられた言葉が胸に痛い。桃組のチームメイトはみんな目を逸らすようにして視線を泳がした。その先に続けられるであろう台詞が安易に予想できる。黒い少年ことフィンは紙を広げながら話を続けた。

「三組中、桃組が一番最低の成績だよ。白組はプラスマイナスゼロ、水色組は十一本のハチマキを奪取。それに比べてボク等のチームは二十一本の損失。まだ始まって二時間も経っていないと言うのに、この様とはね」

溜息混じりにやれやれと肩を上げる彼に対して、ほとんどの人間が何も言えない。中には水色組の桐生朝飛に気絶させられて、ついさつき仲間に抱えられてやっと帰ってこられた人間も何人か居た。言い返す言葉も無い。

そんなみんなに代わってクウヤが一步前へ出る。

「随分と言ってくれるじゃないか。君はこの安全地帯の中でのんびりしていただけなのにね」

「言うまでもなく情報係だからね。何か文句でも？」

無いだろう、とでも言いたげなフィンに対してクウヤは大きく頷いてみせる。

「大有りだね。君は自分のハチマキを奪われずに標的のハチマキを奪うのがどれだけ大変か知らないだろ。なのに僕等に文句を言う権利はない」

幸い、クウヤはまだハチマキを取られずに済んでいるが、奪取できたのは三本だけだ。少ないとはいえ、それでも桃組が奪った総数の四分の一ではあるが。

あの闇鬼がこの様子ということとは、「たかが鬼ごっこ」と言い切れるものではないのだ。が、フィンは違った。

「そういうことは、チームに貢献するくらいのハチマキを奪ってかと言ってくれないか？ そう、例えばキミのお兄さんのようにね。

同じ血を分けた兄弟なのに、この違いは何なんだろうね」

何でもないことのように言われたその台詞に、ぷち、とクウヤの何かが切れた。

「……君はホントト人の神経を逆なでするのが上手だね。人付き合いいもそれくらい上手なら良かったのにな」

「何か言ったかい？ 名前負けしてる世外れの都合屋」

「黙れこの引きこもり変態観測」

「誰が変態を観測するんだ。ボクは全体観測だ」

引きこもりは否定しないのか。二人の後ろには、ハブとマンゲースが睨み合う。周りの者はおろおろと事態を見守るしかなかった。

まだ子供とは言っても、実質この二人が桃組で一番権力を持っているのだ。閻鬼に全体観測。安易に口出しは出来ない。

と言うより、出来れば関わり合いになりたくないというのが本音だった。

そんなチームの様子を見かねて、アンジュが二人の間に割って入った。一応この桃組のリーダーは彼女なのだ。

「お二人とも、私から提案があるのですが。従ってくださいませよね？」それは有無を言わさない台詞だった。

「戦況を把握するには、やはり戦場へ赴くのが一番良いかと思われまます。しかし我がチームの要、フィン・クロスフィンガー君に万が一のことがあつてはお話になりません。ですが、世外れの閻鬼と称されるクウヤ・アンダーグラウンド君と共に行動すれば問題は無いでしょう。どうです？ 一時間程、お二人で動いてみてはいかがでしょう？」

もちろん、半強制的な提案だったが一応相手の意思を聞く気はあるらしい。首を傾げてみせるアンジュに、クウヤとフィンはしばらく黙って、そしてお互いの顔を見合わせた。二人とも気持ちが悪いくらいに笑顔である。

「わあ、キミと一緒に居てくれるだなんて心強いな、かつこ嘘だけどかつことじ」

「僕等が二人力を合わせれば怖いモノ無しだね、かつこ死んでしま

えかつことじ」

「本当。これなら外に出てみるのも悪くないかもね、かつこキミが死ねかつことじ」

なんとも言えない雰囲気だ。ほのぼのしているようで殺伐として  
いる。真逆にも程がある。

『お二人とも、本音と建て前つてご存じです?』

そんな二人を見て、サスケが泣きそうになりながら言った。それが三十分前の話。

そしてこれが、その三十分後の姿である。

比較的林の多い場所で、茂みの中に隠れながら二人はひっそりと  
辺りを伺っていた。

「一体いつまでここで隠れん坊しているつもりだい、アンダーグラ  
ウンド」

「無闇やたらに動き回って八チマキを取られたんじゃ笑えないから  
ね。要はキミに、一体どんな八チマキ争奪戦が行われているかを見  
せればいいんだろう? なら、白組と水色組が取り合っている場面  
をこっそり傍観すれば良い」

わざわざこちらが赴かなくとも、二組が争っている場面を遠巻き  
に見ていればいいのだ。クウヤはどうやら二組が鉢合わせになるの  
を待っていたようだ。

「なるほど。それは良い考えだね。だけど一つ気になっていること  
があるんだ」

「実は僕もだ」

二人は茂みの隙間から、真っ直ぐ前を見る。数メートル前から、  
小さくて見えにくいのが確かに頭に水色の八チマキをした女が静かに  
歩いてきていた。赤い着物が、緑ばかりの林で嫌に目立つ。

あんな歩きにくそうな着物をわざわざ好んで来ている人物なんて、

一人しか心当たりはない。

「香葉月がさ、丁度ボクらの方へ向かって歩いてきているんだよね」  
「やっぱり？ まさか、バレた……………とか？」

まさかねー、と二人で確かめ合いながら、ほんの数秒の沈黙。表情が引きつる。嫌な予感というのは、大抵の場合当たるようになって出ているものだ。

もう一度二人が前を見たとき、朝葉香は少し早歩きになっていた。  
「気付いてる……………よね！？ あれは気付いてるよね！？ ……  
フィン、ここはバラバラに逃げよう！ 健闘を祈ってる！」

慌てて走り出そうとしたクウヤの右足を即座に掴み、フィンはそれを阻止した。案の定クウヤはそのまま転けて、地面に顔面をぶつけた。

「何するんだ！」

鼻の頭を涙目で押さえながらクウヤが小さい声で怒鳴った。

「キミは馬鹿か。ボクを見捨てるな」

「君こそ馬鹿か！ ここで二人が捕まったら意味が無いだろ！ 安心してよ、君の武勇伝は僕がチームへ伝えるから！」

「ボクは生贄か」

そうこうしているうちに、朝葉香は表情が分かるくらい近くまで歩いてきていた。あと十メートルも無い。下手に飛び出せば、確実にやられるだろう。特に、クウヤは確実だ。

良い考えも、言い訳も見つからない。フィンが半ば諦めたような表情をし、クウヤは頭を抱えて視線を泳がす。

そして天は、桃組に味方した。

「アサハカちゃん、見つけたヨー！」

陽気な高い声、派手な色の民族衣装。そういえば、この三つ巴鬼には非階銘所有者も来ていると試合開始前に言われていた。

メイ・シヨウがクウヤ達が居た茂みの斜め左から飛び出した。それがちょうど上手い具合にクウヤ達と朝葉香の真ん中を隔てるようになった。

「メイ……！？なるほど。貴女も来てましたのね」

扇子を広げて後ろへ飛び退く朝葉香。メイの額には、しっかりと白いハチマキが巻かれていた。

「そうヨ。ワタシ白組、アサハカちゃん水色組。言うなれば、ワタシがパーで、朝葉香ちゃんがグーって関係ネ。これは捕まえるつきや無いネ！カノンちゃんに誉めて貰うヨー！」

天真爛漫に言う彼女に、朝葉香はじりじりと後退しながら強気に微笑む。折角の獲物を取り逃がすのは癪だが、自分の命 という名のハチマキが惜しいのも事実。

だが、転んでもただでは起きない。

「残念ですけど、貴女にわたくしは捕まえられませんことよ。何故なら、」

びしつと人差し指をメイ……の後ろへ向ける。指を差されたと勘違いしたメイが疑問符を飛ばす。

「な、何力？」

「貴女の後ろに、全体観測者の情報屋が隠れているのに気付いてまして？」

「じよつ、じよーほ、情報屋！？」

取り乱しながら後ろを振り向くと、フィンが茂みから上半身を覗かせていた。その隣でクウヤが安堵の息を漏らしている。

「ひさしぶり、シヨウ。二月の定期調達以来だね」

「な、ななな！情報屋も来てた力！？」

突然の再会に、驚きと喜びが隠しきれないメイ。自分の後ろで朝葉香がまんまと逃げたのにも気付かないくらい浮かれていた。

もちろん、彼女がそれだけ喜んでいることにフィンは欠片も気付いていない。

「何ネ、来てるなら声くらい掛けてヨ。水くさいネ！」

「掛けれる状況なら、掛けてたけどね」

がさがさと茂みから出てくるフィン。彼の足下を見て、メイは一番重要なことに気付いた。

「ま、まさか……」

茂みから現れたのは、彼のお馴染みのブーツの上から結ばれた、桜のように淡いピンク色の布。

「まさかまさか……！」

水色は桃色に強い。白色は水色に強い。ならば桃色は白色に強い。メイがパーなら、フィンはずヨキである。

「う、運命って残酷ヨー！」

そう言えば自分のチームで彼の姿は見かけなかったが、それはただ単にこのゲームに参加していないだけだと思っていたのだ。が、どうやら自分の想い人は敵チームだったようだ。

「キミの運の悪さに乾杯だね」

フィンの言葉に、ガクリと膝を付く。そんな彼女の後ろで、いつの間にかクウヤが彼女のハチマキを持って立っていた。



113 裏町ラプソディ #07「引き籠もりロミオと片言ジュリエット」(後)

かっし言しなねばロミオとジュリエットかっしとじ

「坊主、昼飯だぞー」

朝飛が拘束された囲いの中へと、ルッチが昼食を乗せたトレイを片手に入ってきた。時刻は午後一時過ぎ。三つ巴鬼が開始して小一時間が経っていた。

「どうもありがとうございます」

「……なんだ、てっきり逃げ出すためにアレコレしてるのかと思っただが、そうでもないんだな」

ルッチは目の前の朝飛の様子が、自分の出ていった時から一つも変わっていないことに多少驚きを隠せずにいた。縄抜けが得意ではないとは言っていたが、試みるくらいはしていると思っていたのだ。「逃げ出す気は無いのか？」

「ええ。もしかすると、チームの誰かが助けに来てくれるかもしれませんがね」

「他力本願だな。まあいいか。とりあえず、腕の縄だけは外して良いそうだ。他の手首とか足の縄は外せねえからちよつと食べるにいかもしれねえが、そこは勘弁な」

トレイの上には、パンとスープとコップがそれぞれ二つずつ。多少とはいえ拘束が緩む捕虜を一人にするわけにはいかないからか、やはりルッチもここで食べる気らしい。

「簡素な食事で悪いな。みんなコレだから我慢してくれや」

「そんなこと無いですよ。ありがとうございます。ではご好意に甘えて、いただきます」

丁寧に礼をし、そして両手を合わせる。その動きを見て、ルッチは不思議そうに漏らした。

「和国人はよく頭を下に下げるよな」

パンを一口大に千切って、口の中へと収める。朝飛もそれを見て、縛られたままの両手を器用に使ってパンを食べた。

「ええ。一種の挨拶のようなものなんでしょうね」

「初めて和国の裏町業者と一緒に仕事をしたときは、よく頭を下げるもんだから首が折れるんじゃないかねえのかと思ったな」

「異国の方には珍しい習慣のようですね。武道などで試合を始める前にも御辞儀をしたりしますし、案外頻繁に使いますよ」

パンを食べ終えたルッチが、へえ、と相槌を打つ。

「なるほどな。なんだっけ、和国の言葉……そうそう『親しき仲にも礼儀有り』ってヤツか」

「いえ、ちよつと違うような気も……。そういえば、僕の『追風』は無事ですか？」

先程ルッチに折ると宣言された刀のことを思い出して、朝飛が心配そうに問う。

「安心しな。奪ったハチマキと一緒にちゃんとおいてあるよ」

「良かった……」

それを聞いて心底安心したのか、朝飛は頬を綻ばせて立ち上がる。周りに花でも飛んでいそうなくらい嬉しそうに笑っている。

「刀の居場所を聞いておかないと、取り返せるものも取り返せませんからね」

立ち上がった彼は、二歩前へと進む。

進めるはずが無いのに、確かに彼の身体は前へと進んでいた。

カラン、と持っていたスプーンをトレイの上に落として、ルッチが引きつった表情で笑う。

「おいおいおいおい、まじかよ」

「まじですよ」

語尾にハートでも付きそうなくらい楽しそうに答えて、素早くしやがみ込んだ朝飛は右の拳をルッチの鳩尾目掛けて突き出した。途端に、ルッチの身体が地面の上へと崩れ落ちる。一瞬だった。

「自分の始末は自分でつける。お家の人にそう教えてもらいましたから」

その言葉がルッチに届くことは無かった。

昼食を食べる前、ルッチが解いた縄は確かに腕だけだった。両手を拘束されたまま、食べにくそうに朝飛はパンを食べていた。だが、実際の所朝飛はそれ以前に足も手首も解くことに成功していた。縛られている演技をしていただけだ。

全てはもちろん、刀の居場所を聞くために。

「さてと。『追風』をどうやって取り返そうか」

朝飛が出ていった後には、大の字で伸びているルッチの姿があった。

\*\*\*\*\*

「うつつ……それからネ、アサハカちゃんが消えた後、情報屋と会ったヨ……ひつく……ワタシのハチマキ取って、さっさと消えちゃったネ……、うつつ」

「あーあーあーあー、泣くな泣くな。よしよし」

ぼろぼろと落ちてくる涙を拭ってやって、カノンはメイの頭を撫でる。ハチマキの無くなった頭を。

スピアを取りに戻ってきてから、メイはずっとこの調子だ。フィンに会えて嬉しかったことと、ハチマキをクウヤに取られて口惜しかったことと、フィンが自分の敵ということと、色々な感情がぐちゃぐちゃになって大変そうだ。

「せっかくアサハカちゃんのハチマキ取って、カノンちゃんを喜ば

せてあげようと思ったの二……！」

「ハチマキは取られたかも知れないけど、結果的に『フィンが本拠地から出てる』っていう情報を掴めたんだから良いじゃねーか。ほら、飴あげるから泣きやめって」

「ワタシ、イチゴ味がいいネ！」

さっきまでの大量の涙は何処へ消えたのか。うきうきと左手を差し出すメイの横から、不満そうにアルルが顔を出した。情報整理をしていた途中らしく、いつもはズレている眼鏡がちゃんとした位置に掛けられていた。

「あ、ずりー！ カノンちゃん、俺レモン味ね！」

まるで小さな子供のような二人にキャンデーをあげて、カノンはそろりと後ろを振り向く。

何処から持ってきたのか白いレースで縁取られたパラソル、白いテーブルの上には恐らく何万ミリアであるうティーカップに茶菓子。そして白い椅子へ腰掛けた老紳士はとても優雅に笑っていた。

「所長……紅茶は美味しいですか」

「ええ、とても美味です。やはり外で飲む紅茶は違いますねえ。ミス・ソリティアもいかがですか？」

嫌味を言った筈なのに、普通に返されてしまった。仕方なく会話を続ける。

「桃組はなかなか強敵になりそうですねー。アルルのおねーさんがリーダーでしたっけ？ クウヤにフィンって、高級食材が揃ってますね」

闇鬼と全体観測。都合屋と情報屋のトップとも呼ばれる二人だ。高級もいいところ。アンジユが自分のチームへクウヤを入れたことに多少私情が交じっているとはいえ、なかなか良い選択をしていると言える。

だがそれにさほど驚いた様子もなく、所長はゆっくりと答える。「知っていますか、ミス・ソリティア。幾ら高級なニンジンとジャ

ガイモがあつたところで、美味しいカレーは出来ないのですよ」

所長の比喩の意味を考えて、カノンが首を傾げながら言う。

「つまり？」

「こういうチーム戦は、チームワークがものを言うものです。言うなれば、一人はみんなの為に、みんなは一人の為にというヤツです。桃組のような個人プレーのチームに負けるはずがありませんよ」

どこからそんな自信が湧いてくるのか、所長は紅茶のおかわりを注いでにこりと微笑んだ。

そんなことを言われてしまつては、負けるわけにはいかないではないか。

しかし、これからどうしたものか。今は水色組の朝飛を捕虜に取つているが、彼はチームについて何も語らないとルッチが白旗を揚げていた。

「水色組は今、どうなつてんだろうな」

「いまはねえ、朝飛を取り返すグループとお、そうじゃないグループで分かれて行動してるみたいだよ」

間延びした声があがる。

「こつちに向かつてきてるのはあ、道外れの始末屋に情報屋の見解観測の二人だけかなあ？」

幼いその声は、確かに何処かで聞いた声だった。カノンが自分の隣を見ると、さっきまでは居なかつたはずの少年が、そこで立っていた。

「ひつ、ヒナタ！？」

「しゃらんらー。名探偵コヒナタ、只今けんざーん」

効果音を付けて、そう言い切つた。慌てて周りを見渡すが、一緒に居るだろうと思われるミス・マッドの姿は確認できなかった。

「ひさしぶりい、便利屋さん。シオンさんは元気い？」

「ああ、シオンなら今日は知り合いの軍人に預かつて貰つて……つてんなことはどうでもいいから！ お前、なんでこんな所にいんの！？」

当然の質問だった。この少年とは、十二月のあの日から孤城で別れたつきりずつと会うことは無かった。それに、これからも会うことは無いだろうと思っていた。そんな相手との唐突な再会に、カノンだって驚きもする。

「それがあ、あれからぼくはずつとマッドさんと一緒に居るんだけどあ、マッドさんが薬屋を始めて、ここの斡旋所に登録してたんだよねえ」

ヒナタは白色の封筒をポケットから取り出してカノンの前でひらと振った。

「それでこの招待状を貰ったんだあ。で、貰ったはいいけど、マッドさんは忙しくて来られないっていうから、ぼくが代わりに来たんだよあ。ぼくも昔は小日向小雨としてここに登録してたしい、別に代理が来ても良いかなあって思って」

話を聞き終えて、何度か口をぱくぱくと動かしていたカノンだったが、どうでも良くなったらしく盛大に息を吐いて、苦笑混じりに微笑んだ。

「そつか。ヒナタ、薬屋楽しいか？」

「楽しいよあ！ マッドさんのご飯が毎日食べられるしい、お客さんとお喋りするのも面白いしい。あ、今日は名探偵コヒナタとしてここに参加してるから、ヒナタじゃなくてコヒナタでよろしくう」  
それに一体何の違いがあるのかは分からなかったが、とりあえずカノンは頷いておいた。

「よつし。そんじゃあコヒナタはアルルと一緒に情報収集と情報整理を頼む」

「らじゃー！」

大きく返事をして、コヒナタはアルルとメイが居る方へと小走りで行く。それを確認して、カノンは未だにティータイム気分にいる所長を見た。

「それでもつて所長。本拠地にいる奴等だけで良いから、一箇所に集めてくれませんか？」

「ええ、良いですよ。一体何をされるんですか？」

「迎え撃つんですよ、レオラとハルナを」

コヒナタの言うとおりならば、朝飛を取り返しに来る二人。それをみすみす見逃すつもりは無い。

「なるほど。上手くいけば、向ここの情報手段を絶つことが出来ますねえ」

誉められたことが素直に嬉しかったカノンは少し得意げになって同意を求める。

「でしょ？ そうすれば水色組陥落も時間の問題。……ところでルッチ、帰ってくるの遅くないですか？」

「そういえばそうですねえ」

伸びたルッチが発見されるのは、これから数分後のことである。



114 裏町ラプソディ #08 「神風反撃」 (後書き)

アサヒ は 逃げ出した！  
ルツチ は 動けない！

「あ、レオラだ」

森も出口に近いのか、陽の光が差し込む場所で特徴ある金色が見えた。その金色を見逃すまいと、クウヤは息を潜めて彼が歩いていくのを目で追った。

確か彼は水色組。桃色組である自分達の敵である。そして尚かつ、自分のチームのハチマキを最も奪っている小隊の一員でもある。これは要注意だ。が、彼はあまり注意しなくて良いとクウヤは思った。 「つてことは香葉月さんも居るんじゃない……」

もっとも注意すべき人物の名前を憂鬱そうに言う。最初の方はそうでもなかったのだが、最近はなんだか会ったのが躊躇われるほどに苦手になってきている相手だ。ちなみに何故あんなにも嫌われているのか、理由はさっぱり分からない。分からないからこそ、余計に恐怖だった。

だが、クウヤが眼を凝らしてみると、レオラの隣に居たのは朝葉香とは別の人間だった。

「げ」

今度はフィンが憂鬱そうな声を出した。表情は全く変わらないが、声に出すほど嫌な相手らしい。

「誰？ 知ってるの？ あの綺麗な人」

「綺麗……かどろかは分からないけど、ハルナ・ウエストテール……情報屋で見解観測と呼ばれる人間だよ。なんていうか、台風？」

「…台風？」

よく分からないが、あまり会いたい人間ではないらしい。そうでなくても、敵対しているチームなので会うわけにもいかないのだが。クウヤが手を口元に当てる。

「小隊編成が変わったのかな？ 確かレオラは香葉月さんと一緒に行動してるはずだね？ ついでに兄さんも」

最後の方が強調されているような気がしないでもないが、首を突っ込みたくないフィンはそのまま会話を続ける。

「確か最後に聞いた情報では、キリュウは白組のソリティアに捕獲されて捕虜になってたはずだけど」

「馬鹿だね」

「いや、捕獲されそうになったレオリアナを助けて捕まったらしいから、一概に馬鹿とも言えないんじゃないの？」

「馬鹿を助けるなんて馬鹿だよ」

兄弟喧嘩でもしているのだろうか。これ以上は何も言つまいとフィンには心に誓った。

そうこうしているうちに、レオラ達は森を完全に出て行ってしまった。鉢合わせにならずに済んだのは幸いだ。そろそろ秘書の言っていた一時間も経つ頃だろうし、さっさとあの本拠地に帰りたいたいのが本音だ。それなのに、クウヤはずっと考え事をしているようだった。

「兄さんが捕虜にされてて、レオラ達が森を出た……で、この先にあるのは確か白組の拠点………。そっか、兄さんを助けに行ったのか」

うんうんと一人で頷いて納得している。

「だろうね。だけどボク達には全く関係の無い話だよ。だからはやく」「帰る訳にはいかないね」

自分の言葉に被って、クウヤが思いがけない一言を言った。

「……どうしてさ。キミも早く帰りたいつてたじゃないか」「これはチャンスだよ。三つ巴ということは、レオラ達は僕達にとつては厄介な敵でも、カノンさんチームにとっては格好の獲物つてことだろ？ なら、兄さんを助けに来たレオラ達を捕まえないはずがない。一気に主戦力達のハチマキを奪えることになるんだからね」

それは言われなくても分かる。アルルのことだから、恐らくそれくらいの情報は既に掴んでいるだろうし、迎え撃つ気はあるだろう。でも、それはソリティア達にとつてもチャンスであつて、ボク達

のチャンスでは無いよ。ボクらは白組じゃなくて桃組だからね」  
「分かってるよ。だからチャンスなんだ。獲物を追っている生き物  
ほど、隙のある生き物は居ないよ。目の前のことに集中してしまっ  
ているんだから」

ようやくクウヤの言いたいことが分かってきたフィンが、話をま  
とめるように言う。

「なるほど。レオリアアナ達と捕まえようとするソリティア達を、  
ボクらが捕まえる」

「そういうこと」

二人が話している間にレオラ達の足音は聞こえなくなっていた。  
このまま行ってしまうば、恐らく数分と立たないうちに白組の本拠  
地へ到着してしまうだろう。

サスケは本拠地に置いてきた。チームに知らせる時間は無い。

「僕達二人で行こう」

「狙うのは？」

「そうだね、アルル・キャラメリゼなんてどう？」

フィンが訊ねたことに、クウヤはすかさず答える。

「……あのね、アルルは情報係。前線に出てくるわけ無いだろ。一  
体何なんだい、キミのそのアルルに対する敵対心」

「……じゃあカノンさん。おそらく前線のリーダーはこの人だろう  
から」

「どうして言いきれるのさ」

カノンと共に過ごしたクウヤは、自信を持って声に出す。

「だってあの人、そういうの好きそうじゃない？」

それより少し前。レオラ達が森を抜けてすぐに、その少年はこちらを振り返った。

「レオラさん、ハルナさん？ どうしたんですか、こんな所で」  
「なんというか。」

「……アサヒ」

「はい？」

「元気そうだな」

「はい、元気です」

「なんというか。」

「なんというか、そう。レオラは脱力した。ハルナもレオラと全く同じように膝を付いた。」

「自分達が助けに来たかの少年は、確か捕虜になっているはずだ。」

「だったのだが、何をどうしたのか自由の身だった。ただ、彼が大事そうにしていた刀とハチマキだけは無い状態だったが。」

「状況から言って、自分の力で逃げ出したのだろう。これでは自分達が助けに来た意味が無いのだが、まあ仲間が無事だっただけでも良しとしよう。ハルナは安堵の息を漏らした。」

「元気そうで何よりよ。一応私達は貴方を助けに来ただけけれど……その必要は無かったようね」

「はいこれ、とハルナはポケットから新しい水色のハチマキを朝飛へと手渡した。実質、これが朝飛のスペアであり、これを取られてしまえば水色組は終わりだ。」

「ありがとうございます。ハチマキを付けていないと、いくら桃組に出会ってもハチマキを奪えませんかからね」

「きゅっ、と腰に上手い具合に結びつけて、朝飛は深々と頭を下げた。そんな彼にハルナは先程から抱いていた疑問を吐きだした。」

「ところで朝飛くん、貴方こそこんな所で何をしてるのかしら？」  
何をしているのかと訊ねられた朝飛は、自分の丁度後ろで怯える人間とハルナを交互に見る。すっかり存在を忘れ去られていたその男は、頭に白いハチマキを巻いていた。

「ええと……良く言えばお願い事、悪く言えば脅迫でしょうか？」

どちらかというと、後者に近いようだった。全身を震わせて怯える男に向かって「ね」と微笑みかける朝飛に、レオラは引きつった笑いを浮かべた。笑うしかないと思った。

「おいアサヒ。こいつ、白組の人間じゃねえか」

「そうそう、お話の途中でしたね」

くるつと振り返り様、朝飛に声を掛けられた男は必死で土下座した。それはまるで何か化物か妖怪にでも会ったかのようにただただ怯えていた。敵であるというのに思わず同情せずにはいられないほどである。

「ひつ……すみません、お許し下さい、犬畜生の分際で生意気な口を叩いて申し訳ありませんでした！ 自分はどうしようもなくミドリムシです！ もうアレは嫌です、アレは嫌です、アレだけは……」

「アレって何だよ！」

思わずつつこんでしまったレオラに、輝かんばかりの表情で答える朝飛。

「知りたいですか？」

「いえ結構です！」

思わず敬語だった。穏やかな少年だとばかり思っていたが、やはりあの闇鬼の兄なだけはある。纏っている空気が弟とそっくりだ。いや、弟が兄にそっくりなのか。

そんな三人を、ハルナは遠くを見るような目で微笑みを浮かべている。つまり逃げた。あれは傍観者に徹している顔だ。情報屋の十番であるのは分かっているが、何もこの状況でそんなことしなくても、とレオラは少し泣きそうになった。

「それじゃあ、頼みたいことがあるんですけど……もちろん頼まれ

てくれますよね？」

朝飛が拒否権などまるで無視した台詞を言うと、男は賤られた犬のように敬礼した。最早条件反射になっているような速さだ。

「はい！ 何なりとお申し付け下さいませ！」

「わあ、頼もしいですね。じゃあ用件だけ言いますけど、僕の刀『追風』をここに持ってきてください」

刀を奪い返すことを命令された男は、少し戸惑った様子を見せた。いくら弱くとも、自分は白組の一員なのだ。このままでは仲間を裏切ることになってしまう。それは男の自尊心にも関わることだった。

が、そんなこと、朝飛には関係ない。

「上手に『取ってこい遊び』が出来ますか？ 犬畜生さん」

「はいもちろんでございます！」

即答 。彼は自尊心よりも命を選んだ。

「なんつーか、したたかだよな」

男が朝飛の刀を取り戻しに言うてから、レオラがやっと口を開く。

「そうですか？ 恐縮です」

「や、誉めたつもりないのに何でそんなに嬉しそうに笑ってんだよ」

「只今、受け取った言葉は全て誉め言葉に変換して前向きにいいこうキャンペーン実施中ですので」

「長えよ、キャンペーン名が！」

どこからつつこめば良いのか分からなかったが、取りあえず一番気になる部分をつつこんでみた。

息切れ気味のレオラの言葉など気にも留まらなかったのか、朝飛は表情を変えずに話を続ける。

「少し前に、僕は人を使うことを覚えた方が良いつて言われたことがあるんですよね。それに、あの犬畜生さんが言っではいけない言

葉を言ってしまったので」

怖い。口元は笑っているのに目だけが笑っていないのが怖い。

どうやら禁句を言ってしまったらしかった。何が禁句なのか分からないレオラは、なるべく下手なことは言わないでおこうと口数を減らした。それでなくても、いまの朝飛には極力話し掛けたくない。「ところで水色組の戦況はどうですか？ 僕が捕まっている間、何か進展はありましたか？」

それに対してハルナが両肩を落して首を振る。

「いえ。いまのところ、プラスもマイナスも無いわ。まだ闇鬼を捕まえたという情報も無いし、朝飛くんが捕まってからの進展はあまり、ね」

「そうですか」

悪い方向へ傾いていないだけマシというものだろう。朝飛はやりわりと笑って自分のハチマキを見た。これを取られてしまっは、次はない。

「だから、くれぐれも捕まらないようにね。貴方の戦力が及ぼす影響は大きいわ。今度はあの馬鹿を助けようだななんてしなくていいから」

「馬鹿ってなんだよ。オレのことか？ オレのことだよな？」

「あら。帰ってきたみたいよ、犬畜生さん」

レオラの抗議をさらっと無視して、ハルナが言った。彼女の見ている方向には、しっかりと刀を握ったさっきの男が居た。

「こ、これで間違い無いでしょうか」

渡された刀は、確かに自分が大切にしていたもの。何度も確認して、鞘へと戻す。腰へぶら下げると、いつもの重さが戻ってきた。

「はい、間違いありません。思ってたより早かったですね」

「だって全速力で走ってたもんな？」



びく、と先程から怯えてばかりの男の方が、さらに揺れた。

突然増えた、朝飛でもハルナでもレオラでもなく、ましてや目の前の犬畜生の声でもない、イレギュラーの声。何処か楽しそうなその声色に、すっかり縮み上がった男は後ずさりした。

「……裏切ったんですか？」

前も怖い、後ろも怖い。朝飛がチャキ、と『追風』の柄を握る。男はブンブンと首が外れそうなくらい横に振った。

あの声が、また響く。

「そのミドリムシ野郎を庇うわけじゃねーけど、そいつは裏切ってなんかないぜ。たまたまおれが見つけたんだよ。そいつが刀を持って走っていくのをな。それにそんな勇氣があるなら、最初からそっちに寝返ったりしないさ」

「村外れの処理屋さんはあ、なつきむし、よつわむし、みつどりっむしい！」

一段と高い声を楽しそうに歌う。それと同時に声の持ち主である青い眼が楽しそうに細くなり、隣の灰色の目が朝飛を捉えた。

「ソリティアさん……それに小雨さん！」

「やほお。朝飛い、元気してたあ？」

朝飛達の目の前には、震え上がる男を隔てて、右手を振りながら嬉しそうに笑うコヒナタ。そしてその隣には勝ち誇った笑みのカノン。

何故ここにコヒナタがいるのかは分からないが、とりあえず把握できる限り、状況は最悪。刀は戻ってきたが、いらぬお土産までついてきてしまったようだ。

逃げ道が何処かにあるはず、と朝飛がふと後ろを振り返れば……ハルナが居なかった。

「あれ？ ハルナさんは？」

「に、逃げやがった！　つか逃げ足速え！」

だが怒っている場合でもない。これは逃げた方が勝ちなのだ。レオラと朝飛は計ったかのように、ほぼ同時に駆けだした。

「……って同じ方向に逃げてどうするんですか！」

「一緒になつたものは仕方ないだろ！」

喚きながら逃げまどう二人。そしてそれを確実に追ってくる音がある。今度はカノンだけではない、コヒナタもいるのだ。

レオラが必死に足を動かしながらちらりと後ろを盗み見ると、カノンが銃を取りだしているのが見えた。確かパレットに聞いた話によると、銃保持者全員が今回のゲームでは実弾ではなくゴム弾を装弾するのが義務になつているそうだが、それでも銃は銃。ゴム弾だつて当たれば痛いことに変わりはない。

さつきよりも一段と速度をあげると、見慣れた後ろ姿が同じように走っていた。

「あ、ハルナさん」

「ちよつとなんで二人ともこっちに逃げてくるのよー！」

どうやらハルナも同じ方向に逃げていたようだ。二人の足が速いのか、単にハルナの体力が無いのかはこの際どうでもいい。とにかく三人が三人とも同じ危機だった。

後ろの様子が気になって、もう一度レオラが振り返ると、間近にはカノンの影。

「うおわあつ！？」

「ひゃあつ！」

「ふあつ？」

がっちりとカノンに腕を掴まれたレオラは、咄嗟にハルナの左手を掴み、それに慌てたハルナが朝飛の腰に巻かれたハチマキを掴んだ。

そこに遅れて追いついたのはコヒナタは、掴むものが無かったのでとりあえずカノンの服を握ってみた。そこに意味は無い。が、見事に一繋ぎの連鎖が出来上がった。

「今度こそ逃がさねーぞ、ハイジ！」

「クララが怒った！」

低い声で吠えるようにカノン言う。

お終いだ。今度こそお終いだ。ハルナが掴まれた腕を大きく振って金切り声をあげる。

「はーなーしーなーさーいー！ このままじゃ三人とも捕まるわ！」

「心配するな！ オレたち三人、死ぬときは一緒だ！」

道連れにする気らしい。一向に手を離す様子は無い。

「嫌よ！ 本当に早く離しなさいな。冗談じゃないわ、私まで巻き込まないでちょうだいよね！」

「すみませんが、貴方達二人で逝ってください！」

未だに逃げることを諦めていない朝飛が、後ろの二人に向かって叫んだ。

「ひでえ！ 助けに来てやったのに！」 「仲間を見捨てる気なの！？」

「なんで僕まで道連れなんですか！？ 助けるなって言ったり、助けろって言ったり！」

確かにそうだ。朝飛は先程ハルナから、馬鹿を助けるなと言われたばかりだ。つまり、いまのこの状況ではないのか。

「そこはほら、連帯責任ってやつだろ！」

都合の良い言葉を使われてしまった。

その言葉を皮切りに三人の仲が崩壊し始めたのを見て、カノンはそれを中断させるように大きな声で叫んだ。

「すとーっぶ！」

ぴた、と一斉に動きが止まる。カノンはそれを満足げに見て、咳払いをした。

「さつてと。お前達三人にいい話があるんだけど、ひとまず聞いてみねー？」

にやりとシニカルに笑った。



115 裏町ラプソディ #09 「絶対零度スマイル0円」(後書き)

大人しい子ほど、きねると手に負えなくなります。

ちっ、と舌打ちをしてクウヤはフィンを振り返った。

白組にも水色組にも見付からぬようにと用心に用心を重ねて慎重に森を抜けたのが仇となったらしい。そこには既にレオラ達の姿はなく、もちろん、お目当てのカノン達白組もいなかった。

「見失った」

「やっぱり、さっきの声はソリティアだったんだ」

「もしかして、とは思ってたけどね」

一応周りを確認するが、やはり誰も居ない。いや、十分に確認したからこそ、こうやって出てきた訳なのだが。

そんなクウヤの後ろで、どうやら一悶着あったようだね、とフィンが地面を見つめる。丁度フィンとクウヤの足下には、力一杯踏み切った足跡が残っていた。恐らく、全速力で走って逃げるようなことがあったのだろう。

その足跡はまた林の中へと入っている。この場合、レオラ達が白組に見付かったと考えるのが妥当だろう。

「近い場所で、異なる足跡が三つ。少し離れた場所から、二つ。キミならどう思う？」

しゃがみ込んで、土を指でなぞる。それを見て、クウヤは手を口に当てた。

「……たぶん、兄さんとは合流していたんだろう。それプラス、見解観測さんとレオラ。これで逃げ出した足跡三つ。それを追いかけたのが、カノンさんと誰かだね。このブーツの後はカノンさんに違いない。でも……」

「もつと大人数で迎え撃つかと思っていただけだね」

「同じく。二人だけでレオラ達を捕まえる気だったのかな？ まあ、カノンさんのことだから、なめてかかったのかもしいないね。相手

「はあのレオラだし」

「そんなところだろうね。で？」

「どうするんだい、と無言で伺う。」

その質問に、間髪入れずにクウヤが答える。

「追うよ」

「……ボクもう疲れたんだけど」

不満そうに答えてくるフィンの台詞は聞かなかったことにして、クウヤは林の中へと足を踏み入れていく。

しばらくどうするか悩んだフィンだったが、このまま一人でいても無傷で帰れる自信は無い。むしろ、途中で疲れて帰れず終いになつてしまいそうだ。

仕方ないと言わんばかりに両肩を下げて、渋々とその後を追った。「もしソリティア達を見つけたら、どうするつもりだい？」

「確実に取れるタイミングを伺う。まだ兄さん達を追っている途中なら、さっき言っていたように、油断した隙を狙う。そうじゃないなら、しばらく様子を見て考えよう」

折角の獲物を取り逃がしてしまったことに焦りを感じているのか、早歩きと言っよりは走っている感覚に近い。

自分では気付いていないのだろう。フィンは何も言わずにその速度に合わせた。

「カノンさんの相手は僕がするから、フィンはもう一人を頼むよ。」

もし、もう一人の方がアルル・キャラメリゼだった場合は、「

「キミがアルルの相手をするんだろ？」

「もちろん」

黒い笑みだ。一体何が原因なのだろうかとフィンは思考を巡らす。閻鬼が現態観測を嫌う理由だなんて情報は自分の頭の中には入っていないかった。

聞いた方が早いというやつだ。

「ずっと気になってたんだけど、アルルと何かあったの？ キミつて、なんて言うか……他人に無関心だし無関係でいようとするタイ

ブだろ。何かに固執するような人間に見えなかったんだけど」

ボクの思い過ごしかもしれないけどね、とあくまでも想像であることをこわって言う。

それを聞いてクウヤは淡々と答えた。

「僕の携わってた仕事、三件が三件とも情報操作されてたんだ。調べてもらって分かったんだけど、やったのはアルル・キャラメリゼお陰で、すぐに済むはずの依頼に時間を取られた。立派な業務妨害だ」

「それだけ？ アルルが情報操作をしたのは、依頼人に頼まれたからだろ？ お互い、ただ仕事をしていただけじゃないか。それに、他の情報屋だってキミの仕事に情報操作したことあるだろ」

ボクは誰に頼まれようとしないけどね、とフィンは無愛想に言い放つ。

「それなのに、キミはアルルだけに嫌悪感を剥き出しにしてる気がするよ？」

純粋な問いかけではなく、まだ何かあるだろうと確信をしてくる。

そんなフィンに対してクウヤは少しの間黙っていたが、沈黙に耐えかねたのか足だけは止めずに話を切りだした。

「情報操作をされて苛ついたのも事実だよ。でも、その仕事の後でアルル・キャラメリゼが直々に謝りに来たんだ」

いつかのアルルを思い返して、クウヤは前を睨んだ。

『依頼とは言え、ホント悪かったな』

『いいえ、仕方ないですよ』

『でも流石だなー。あれだけ妨害されても、依頼は正確にこなすんだもんな。やっぱり桐生家の抜けた穴は大きかったか』

『桐生家ですか？』



『んあ？ ああ、ここ最近の桐生家は前ほど名前があらぬいみただからな。今の頭目に代わってからは、桐生家も落ちたのかもな』

「なんか、腹が立つたんだ」

むすつとした表情で答えるクウヤを見て、フィンは大らかな溜息を吐いた。あからさまなその態度を横目に、クウヤはさらに不服そうな顔で続ける。

「何？ その溜息」

「要するに、キミは兄を馬鹿にされたようで悔しかったわけだ」

思いも寄らぬ一言に、クウヤが目を見開く。何を言っているのだろうか、この真つ黒人間は。

納得したような表情のフィンに向かって、むきになって反論をした。

「違うよ。桐生家が落ちたって言われるのが嫌だったんだ」

「違わないよ。『今の頭目に代わってから』桐生家が落ちたって言われるのが許せなかったんだよ」

それ以上の反論の言葉が見付からなくて、クウヤは押し黙る。自分では認めたくないが、彼の言うとおりなのかも知れない。だけど素直に認めるのも癪だ。

「勝手にそう思っておけば？」

「そうさせてもらうよ。アルルも大変だね」

観測者達がよくする、何かを見透かしたような表情にクウヤはうんざりした。兄弟子が兄弟子なら、弟分も弟分だ。腹が立つことこの上ない。

「本当、君達って人の神経を逆撫でるのが……………伏せて」

口元に人差し指を当て、クウヤがかさず茂みに隠れた。それと同じようにしてフィンも隣へと紛れ込んだ。

「見付けた……」

クウヤが視線で示す先には、異なる金色の髪が二つ。片方はシニカルに笑い、片方は困惑した様子だった。

じりじりと距離を詰めるようにして、クウヤとフィンは勝ち誇った笑みをしたカノンの方へと近付いていった。

「折角いい話があるって言ってんのに、二人とも逃げ出すんだもん  
な」

カノンが一步前へ出る。それとほぼ同じ歩幅をレオラが下がった。  
「お前の言う『いい話』なんか信用出来ねーよ」

「でもレオラは残ってるじゃん」  
うっ、と言葉に詰まる。

「あ、逃げ遅れただけか」

ぐっ、と胸を押さえる。凶星だったのか、レオラは首を左右に振った。

「いや。いやいやいや、オレは二人を逃がすために、敢えてここに残ったんだ」

「嘘吐け」

いつもの如く掛け合いを始めたカノンの背後で、クウヤとフィンは顔を見合わせる。

状況からして、どうやら朝飛とハルナは上手い具合に逃げたが、レオラは逃げそびれたようだ。逃げた二人を追ったのかどうかは知らないが、もう一人いるであろうカノンの仲間は傍に見られなかった。

少し予定は狂ったが、大元は変わっていない。レオラを捕まえようとするカノンを、クウヤが捕まえるだけだ。

内緒話をさらに小さくした声で、クウヤがフィンへ話し掛ける。

「じゃあ、僕がカノンさんのハチマキを取りに行くから」

「分かった」

草陰から見れば、カノンとレオラの距離はすぐ近く。カノンがレオラへと踏み切った瞬間に、自分も飛び出す。

タイミングを伺って、上半身を前へのめりだす。

すると、視界が突然暗くなった。まるで何かが覆い被さったかのように。

「ボンジュール。ご機嫌いかが？」

「残念だけど、ここでチェックメイトだよ」

クウヤの背後には、見解観測のハルナ・ウエストテール。

フィンのすぐ隣には桐生朝飛が立っていた。

「なっ!?!」

「……あり？」

逃げだそうとしても、もう遅い。クウヤの両腕はしっかりとハルナによつて掴まれ、フィンもまた同じ様な事態に陥っていた。

「作戦成功だな。さっすがおれ」

「お前じゃなくて、アサヒとハルナだろ」

満足そうな声がした方向を見れば、カノンとレオラが並んで立っていた。

訳が分からない。何故、白組と水色組が一緒に行動をしているのか。クウヤは口を金魚の呼吸のように動かして啞然としていた。

「やっぱりぼくの思ったとおりい！ 名探偵の推理は外れないんだよお」

ひょこっ、とカノンの後ろから顔を覗かせて、コヒナタがにっこり笑った。

「説明していただいても、よろしいですか？」  
引きつった笑顔を浮かべながら、クウヤがカノンへと言った。

\*\*\*\*\*

それは、ついさっきの出来事だった。

「さつてと。お前達三人にいい話があるんだけど、ひとまず聞いてみねー？」

固まつて、きよんとする三人に向かってカノンが自信満々に言った。

「僕等を捕まえないとお約束してくださるのなら」

「捕まえないさ。ちよつとした取引をさせていただだけだよ」

あれだけ凄く速さで追いかけてきておいて、捕まえないと言われ  
てもそうそう信じれるものではない。このゲームには、そういう騙し  
し合いだってあるのだ。

「じゃあ何で追いかけてきたんだよ」

レオラがすかさず聞き返すと、カノンが心底馬鹿にしたような声  
で言い放つ。

「バーカ。お前等がおれの話も聞かずに逃げ出すからだろうが」

どうなっているのかは分からないが、本当に捕まえる気は無いら  
しい。信用できると判断したのか、朝飛は大人しくカノンへと向き  
合った。それを見て、ハルナとレオラも合わせた。

「どんな取引ですか？」

「時間が無いから手っ取り早く話すぞ。おれ達は、今回に限ってお前等を見逃すことを約束する。その代わりに、ここ周辺をうるついている桃組のクウヤとフィンの八チマキを確実に奪え」

カノンが言う取引とは、つまりこうだった。

白組の要である朝飛の八チマキは、既に一枚奪っている。ここで、今大人しく話を聞いているこの三人の八チマキを奪うのも良いが、出来ることなら潰しておきたい敵がいる。

それが、フィンとクウヤだ。

メイが鉢合わせたお陰で、本拠地から出ることは無いだろうと予測していたフィンが外を出歩いていることが分かった。桃組の最大の強味である全体観測が安全地帯から出てくるなんて、こんな好機は滅多に無いだろう。

桃組は、フィンの情報力とクウヤの戦力で成り立っていると言っても過言では無い。

ここで桃組の戦力が落ちれば、白組は動きやすくなる。白組が動きやすくなる代わりに、水色組は最大の戦力を失わずに済む。

利害は一致するのだ。

「悪い話じゃねーだろ？」

カノンの提案に、意義を唱える者は居なかった。

\*\*\*\*\*

「一芝居打った、という訳ですね」

「その通り。お前達がうるついでにいるすぐ近くに、レオラ達がやってきているのは知っていたしな。そこで鉢合わせしてくれば、それはそれで良かったんだけど。本当、運任せな作戦だったし」

レオラ達と上手く会えるか。そのあと、話し合う時間があるか。クウヤ達が、思い通りに自分達を追ってくるか。全ては曖昧なままに行われた作戦だった。

「よくもそんな曖昧な情報下で動けるね。ボクには恐ろしくて出来ないよ」

「一か八かっというのも中々スリルがあって楽しいだろ？ ゲームは楽しまねえとな」

フィンの言った言葉に、面白そうに答える声。クウヤが嫌そうな顔をして声の持ち主を睨み付けた。

「何余裕ぶっこいてるんですか、腹が立つ」

本音が垂れ流しにされた一言に、アルルがたじろぐ。

「な、なんかさ……ものすごい敵視してねえ？」

「敵視なんてしてません。貴方なんてアウトオブ眼中です」

「それ、あんまり変わらねー気がする……」

落ち込むアルルを余所に、朝飛とハルナはそれぞれ二人の手首とブーツからハチマキを取り上げて懐に仕舞った。

されるがままの状態の二人に、カノンが嬉しそうに言う。

「やっぱり所長の言った通りだな。いくら高級なニンジンとジャガイモがあっても、美味しいカレーが出来るわけじゃない」

「さて、後は捕虜にでもしちやおうかしら？」

うふふ、と楽しそうに笑うハルナと、それもいいですねとのんびり答える朝飛。

そんな中、クウヤはなんとかして逃げ出せないものかと画策するが、隣のフィンはもう既に諦めたらしく、暇そうに空を眺めていた。本当にやる気の無い奴だ。

クウヤが憤りを感じ始めていると、その声は降ってきた。

「多勢に無勢とはこのことですね」

『フィン！ お怪我はありませんか！』

凜とした口調。毅然とした態度。まるで何かを射抜くような、その眼鏡の奥にある真つ直ぐな眼。

きりりとした印象を与える彼女が、そこに立っていた。森に似つかわぬスーツ姿で。

「あ。アルルのおねーさん」

「と、サスケだ」

カノンとレオラが続けざまに言うと、アルルが珍しく嫌悪の念を剥き出しにして言葉を吐き捨てるように言った。

「なんで、姉貴が出てくるんだよ」

「この二人は私のチームメイトなのだから、助けに来るのは当然でしょう。それと、」

眼鏡の位置を直して、こちらも負けじと睨み付ける。

「アルル、貴方こそ何故ここにいるの。貴方には裏町業ではなく、やるべきことがあるでしょう」

「ヤダね。なんで家を出た姉貴に指図されなきゃならねーんだ」

どうにも話が読めないカノン達は、睨み合う二人を交互に見つめることしか出来ない。ただ、フィン一人を除いて。

「こんな所に来てまで、姉弟喧嘩はやめなよ」

うんざりしたように言った。

その一言で我に返ったアンジユが咳払いを一つする。

「お見苦しいところをお見せいたしました。ところで、その二人を返してくださいませんか？」

それはいくら丁寧に頼まれても、素直にハイとは言えない。ハルナが逃がすまいとクウヤの両手首に力を込める。

「残念だけど、それは無理な相談ね。アンジユさん」

「そうですか……」

落胆した様子で、何かを取り出す。掌に収まるサイズのそれを全員に見えるようにして、アンジユはとぼけたように言った。

「これは一体なんでしょう？」

言い終わらぬ内に、それは地面へと投げ捨てられ、同時に煙幕が巻き起こった。

「やられた！」

カノンが叫んだときには、もう時既に遅し。そこにクウヤもフィンも、もちろんアンジユの姿もなかった。

「作戦、失敗っていうのかしら？」

「途中までは成功だった！ 成功してたのに！」

「落ち着きなさいよ、カノンちゃん」

金切り声をあげて口惜しがるカノンを、ハルナが宥める。

こんな光景がみられるのも、もうこれで終わりだ。作戦が終了すれば、また敵同士。ゲームはまだまだ続くのだ。

それより離れた場所で、アルルが呟く。

「……くそっ」

桃組が去ったであろう方向を見つめて、下唇を噛んだ。



116 裏町ラプソディ #10 「鬼と観測者と共同戦線」(後書き)

二度と交差しない、平行線の私達。

「ひっかかるなあ……」

水色組の本部への帰りがてら、朝飛は独り言を漏らすように言った。

「何が？」

同時に振り向いて同時に返事を返すハルナとレオラに、朝飛は失言だとも言うように片手で一度口を押さえた。

「あ、すいません。声に出てみたいで」

「それは別に良いけどよ、何が引つかかるんだ？」

先を問われ、朝飛は首を左右に振りながら答えた。

「いえ、大したことでは無いんです。ただ……」

左手を口元に持っていき、少し俯く。恐らく自分が気にしすぎなのだろう。元来疑い深い性格に拍車がかかっているに違いない。それでも言わずにはいられなかった。

「ソリティアさん達にとって、僕等を逃がして空夜達のハチマキを取る事のどこがメリットなのかなあつて思つて……」

その疑問に、レオラは明確な答えを出す。

「カノンも言つてたじゃねーか。桃組の本部から出ることは無いだろうと思つていたフィンが、桃組の核であるクウヤと一緒に行動してる。その二人のハチマキを取ることで、白組は動きやすくなるつて」

ハルナも横で頷いている。が、その答えはどうにも納得がいかないらしく、朝飛は珍しく反論した。反論とは言つても、やんわりと意見するような物言いだつたが。

「そうなんですけど……よく考えてみてください。僕もあの時は、時間の無さと唐突な申し出に頭が回らなかったのですが、ハチマキにはスペアがあるんですよ？ あそこで空夜とフィンのハチマキをとつたところで、あの二人にはまだもう一枚ハチマキがあるんじゃないや」

ないですか？」

「でも取らないに越したこたあねーだろ」

レオラが彼に意見するが、まだ話は続く。

「そりゃあ動きくらはい慎重になるかもしれないませんが、それが戦況を大幅に変えるとも言い切れませんし……あの場で得をしたのは明らかに僕等じゃないですか。逃がして貰えて、その上二枚もハチマキを奪うことが出来て。ソリティアさん達は、僕等を逃がしただけで、ハチマキは増えても減ってもないじゃないですか」

一息吐いて、最大の疑問を口に出す。

「あの場で僕等を逃がすよりも、既にスピアを付けていた僕のハチマキと、水色組の情報係であるハルナさんに戦力のレオラさん。この三人を逃がして出るメリットなんてありませんよ」  
言われてみればそうだ。

まるでカノンの口車に乗せられたように動いていた自分達だったが、冷静に考えるとおかしな点がいくつも出てくる。だが、それを知ったところで自分達に出るデメリットは無い。むしろ良いこと尽くしだ。

「ま、こうして無事に本部へ戻ることが出来たんだし、結果オーライなんじゃね？」

レオラが近くなつた本拠地へと指をさしながら後ろを振り返る。彼の後ろに居た朝飛が苦笑いをしていた。苦笑いと言うよりは、引きつり笑いと言った方が正しそうだ。

「……何事も無ければ、結果オーライだったんですけどね」

「へ？」

「レオラさん。水色組本部で香葉月さんが暴れてますよ」  
嫌な光景は見たくない。だが、逃げてどうにかなる問題ではない。見ずとも、声が聞こえてしまったのだから。

「香葉月家の恥晒しですわー！ 切腹しなければ気が済みません」とよ！ ちよつと貴方、この手をお離しになつて！」

ゆっくりと首を元の位置に戻したレオラが真っ先に見たのは、水

色組のメンバーに抑えられながらも、暴れることを止めない朝葉香の姿だった。

「何やってんだ、あいつ!？」

よく見ると、朝葉香を含む何人かのチームのメンバーには、何処にもハチマキが見当たらなかった。

「…………お見事です」

朝飛が今はもう見えない敵に向かってそう洩らした。

\*\*\*\*\*

「エメロツダにオリビア。そっちはどうだった？」

白組本部ではカノンが楽しそうに女二人へと声をかけていた。声をかけられたエメロツダはオリビアと目配せをして、鮮やかな水色のハチマキを三本差し出した。

「二人で三本。案外いけてるんじゃない？」

それを受け取りながら、次のグループへと声を掛ける。

「ウィリアム、ピエタ、メイ。お前等は？」

名前を呼ばれたメイが慌ててハチマキを取り出す。何本かは数えられないが、恐らく十本はあるだろう。

メイが得意げな顔をした。

「聞いてヨ、カノンちゃん。アサハカちゃんのハチマキも取ったヨ

！しかもネ…………」

にんまり笑いながら、隣で同じ様な表情をしたウィリアムが一步前に出る。

「代理屋のアサハカ・コウヨウツキはもう二度と姿を見せないぜ。俺達がスペアもろとも奪ったからな」

「うつしや、上出来！」

その後も何人かのチームメイトから奪取した八チマキを受け取って、それらをまとめて籠の中に入れてから、後ろでメモを取っていたアルルへと声を掛ける。

「お前の思惑通りになったな。さっすがアルル」

「それほどでもー。カノンちゃんが喜んでくれて何よりだよ」

カチ、とペンのキャップを閉めて、アルルは取っていたメモの内容をみんなに聞こえる大ききさで話し始めた。

「奪取した八チマキの合計本数はこれで四十二本。三チーム中、トップの成績だ。ちなみに二位は水色組、三位が桃組だ。とは言っても、この二チームはどんぐりの背比べだけだな」

自分の思っていたとおり、事に事が運べて気分がいいのか、アルルは鼻歌交じりにカノンへと話し掛ける。

「朝葉香ちゃん、絶対出てくると思ったんだよね。負けず嫌いっほいし。捕まった桐生朝飛をレオリアナとハルナが奪還してる間、のんびりと帰ってくるのを待ってるわけがない。ここぞとばかりに名誉挽回すべく動くだろうと思ったよ」

\*\*\*\*\*

「悔しいですわ!」

きー、とでも言いたげな顔で朝葉香が叫んだ。

「貴方達が帰ってくるまでに、少しでも八チマキを奪っておこうと思っただらこの様ですわ! 桃組の人間を捜していましたら、急に白組の人間が何人も襲ってきましたの!」

それを聞いて、やっと引っかかっていた物が無くなった朝飛はすつきりとした表情を見せた。

朝葉香は以前として不満だらけな表情を隠さずにいたが。

「なるほど。だから、僕達を追いかけてきたのがカノンさんと小雨さんの二人だけで、他の仲間が来なかつたんですね。そして僕等にあんな取引を持ちかけたのも、時間稼ぎの意味も含まれてたというわけですか」

ほとんどその場の流れに任せたとような作戦ではあるが、リスクも高くない。恐らく何人かで固まって一人ずつ襲っていったのだろう。確実に奪うことが出来るように。

水色組が奪ったクウヤとフィンの八チマキなど目じゃないほどの八チマキを奪えるように。

「まんまとやられてしまいましたね」

相変わらず変わらない笑顔で同意を求めてくる朝飛にレオラが青い顔をして答えた。

「やられてしまいましたね、じゃねえよ! どうすんだ? コウヨウツキはもう二本とも取られちゃったし、奪われた八チマキの本数は冗談にならねー数だぞ?」

「私達も何か作戦でも立てましょうか……」

ハルナが遠慮気味に意見するが、朝飛は静かに首を振る。

「そんなものはいりませんよ。奪って奪って奪いまくる。それ以外に方法はありませんし、今更たてるような作戦も無いでしょう?」  
その言葉にハルナが返答に詰まる。作戦を立てるかとは言ってみ

たものの、事実何も頭に浮かんでいない。

「なら、僕等はシンプルに行きましょう。『奪われないように、奪う』これで十分です」

朝飛がそう言うと、ハチマキを奪われて戦意喪失していた者達の表情が和らいだ。どうやら自分達の不甲斐なさを指摘されるかどびくびくしていたようだ。

怒っているようには見えない朝飛の表情に、みんなの強張っていた気持ちが無くなった。

「あ、そうだ。弱い人はもう外に出ないでください。一時間に一度、この安全な柵から抜け出さなくても良いんでしょう？ 今後一切僕の足を引つ張らない方向でお願いしますね」

前言撤回。相当怒っていた。

117 裏町ラブソディ #11 「天下無敵のクラフティガール」(後書き)

兄だって怒る。



現時点で最下位となってしまうた桃組の本部は、重苦しい空気に包まれていた。

「で、ずっとあの調子なんですか？ 全体観測」

眼鏡をすちや、とあげて定位置に戻し、アンジュがフィンへと問いかける。

「そう。ずっとあの調子」

いつもの仏頂面を引つ提げて、彼は面倒臭そうに頷いた。

彼等の視線は、桃組の本部の隅の方を向いている。そこにはズンとした空気を背に背負ったクウヤがいた。膝を抱え込むようにして座り、その右手はずっと地面を引つ掻いている。爪の中に土が入ることなど気にならないらしい。彼が桃組の重苦しい空気の元凶だった。

「はあ……アンダーグラウンド。いつまで落ち込んでいるんだい？

消けていても、ボク等のハチマキは戻ってこないし、何か行動を起こさなきゃ白組との点差は開くばかりだよ」

フィンの言葉を聞いて、クウヤの身体が揺れ動いた。それと同時に、土いじりをしていた右手が力一杯握りしめられ、両肩は小刻みに震えていた。泣いているようだ。それに気付いたサスケが、フィンの頭の上で窘めた。

『フィン、言い過ぎですよ！ クウヤ殿を泣かせてしまったではありませんか！』

「な、何も泣かなくても……」

突然のことに驚きを隠しきれず、おろおろと狼狽えるフィン。そんな彼の後ろでは、何処から取り出したのか、カメラを握りしめるアンジュ。

小さな声で「泣き顔……コレクションに加えなければ」と呟いたのが聞こえた。ただしフィンとサスケだけに。

そんな二人の目の前で、クウヤのくぐもった声がもれた。

「…ふ、ふふっ……ふふふふ、あはははははっ！」

だが、それは泣き声でもなんでもなかった。泣いていない代わりに、肩を震わせて笑っていた。

「僕が落ち込むだつて？ 一体何を言ってるんだ、フィン。まだまだゲームはこれからだよ。これから面白くなるんじゃないか。僕等にはまだスピアのハチマキがあるんだから」

す、と立ち上がり、振り返ったクウヤの表情はどす黒く微笑んでいた。

「追い詰められた人間ほど恐ろしいものはないってカノンさんに思い知らせてやるうじゃないか！ 『窮鼠、猫をぶち殺す』とはこのことだよ、フィン！」

「アンダーグラウンド、それなんか違う気が……」

フィンの精一杯のツッコミも虚しく、クウヤはまだ話を続ける。

「ふふふっ……所詮こう言うゲームは、駒をどう動かすかにかかってくるんだよ。そうさ、僕がわざわざ出るまでも無い。そうだ、フィン。桃組のメンバーリストを見せて」

「いいけど……キミ、本当に大丈夫かい？ さっきから目が据わってるけども……」

薄っぺらい紙を手渡しながら尋ねると、クウヤは楽しそうに答えしてきた。

「安心しなよ、フィン。何も心配することなんて無いさ。僕はチェスでカノンさんに負けたことは一度も無いんだからね」

そう言いながら、次はリストを見ながらブツブツと独り言を呟きだした。どうやら次の作戦を練っているようだ。薄ら笑いを浮かべながらのその姿は不気味でしかなかった。

「……アンダーグラウンドが壊れた」

「壊れましたね……」

「壊れた姿も素晴らしいです。流石は私の世外れ」

「キミのストライクゾーンは広いね……というか、キミのものだっ

たの？」

アンジユとフィンの会話すら耳に入らないのか、クウヤはひたすらブツブツと呟く。リストにあがった名前を舐めるように見ながら、視線を上から下へ動かしていく。

「知らない人ばかりだなあ……くそ……重松鉄太？ どこかで聞いたことあるような……」

「キミの知り合いはほとんどが違うチームなんじゃ……」

フィンの二度目のツツコミを無視して、クウヤがいきなり声をあげた。

「仲間外れの都合屋が居たのか！」

「あり？ 知り合いが居たの？」

今度は薄ら笑いなどではなく、極上の笑みでカメラを小脇に抱えたアンジユへと振り向く。

「秘書さん！ 仲間外れの都合屋は今どこに居ますか？」

「ローズマリーさんでしたら、そこに」

アンジユが指を差した先へと視線を動かす。そこには、木の下ですやすやと眠る人間が居た。実に気持ちよさそうに眠っている。ちやっかり大切なハチマキをアイマスク代わりにしていた。

急いでその人間の傍まで駆け寄り、クウヤが大声を出す。両肩をしっかり掴み、わさわさと容赦なく揺さぶりながら。

「起きろ！ 起きろハクト・ローズマリー！ 君の力が必要だ！」

大声を出されて、ハクトと呼ばれた青年の身体がもぞもぞと動く。

「……う……モグラが、」

「起……きる……！」

これだけ力一杯揺さぶられながらも、ハクトには寝言を言う余裕があるようだ。クウヤはさらに追い打ちを掛けるように耳元で大きな声を出す。

「寝るな！ 寝たら殺すぞ！」

「……これが、モグラの復讐、か……ぐ……」

「寝るな……！」

ハクト・ローズマリーが起きたのは、それから十分後のことだった。

「現時点で、僕達桃組の成績は最下位です。最低です。最悪です」  
たくさんいる桃組のメンバー達を目の前にして、クウヤは戸惑うことなく、むしろ楽しそうに演説を始める。

それだけ罵られながらも、誰もクウヤに文句を言ったりはしなかった。そんな立場ではなかったし、それに命が惜しいのは全員の共通の思いだったからだ。

「この状況を打破すべく、これからは僕の指示通りに動いてもらいます。異論はありませんね？ あっても聞きませんけどね」

桃組、独裁政治の幕開けだった。冷ややかに放たれた言葉がメンバーの肩を硬直させる。

「さて、僕達桃組の最大の強味はフィン・クロスフィンガーによる情報です。これを大いに有効活用して、合理的に八チマキを奪いましょう。一対一なんて正々堂々と戦っても馬鹿を見るだけです。これは如何にして相手チームを陥れるかが重要なんです。ですから、これからは二人以上の小隊で固まって行動し、白組の一人だけを狙ってください。確実なる一本を奪うことに専念すること」

クウヤの話の途中で、メンバーの一人が「なんだ、一本でいいのか」と安心したように隣の人間へと話し掛けた。それをクウヤが見逃すはずも聞き逃すはずも無く。

「そこ、私語は慎んでくださいな。さて、ここから重要なポイントです。これからは小隊制度で動くことを原則として、一時間に必ず一本奪うこと。八チマキを取れなかった小隊にはペナルティです。次の一時間で奪う数を二本に増やします。それでも取れなかったら、

四本……というように、倍にしていきます」

その場に居た全員がざわざわとざわつきだした。いくらなんでも、それはないだろうとでも言いたげだ。だが、そんな民衆の意見を気にも掛けずに、独裁者は声高らかに演説を続ける。

そんな彼等の横で、眠たそうに目をこすりながらハクト・ローズマリーがフィンに自己紹介をしていた。

「名前はハクト・ローズマリー。わりと本名……」

「……わりと？」

フィンが訝しげな表情でハクトを見た。ハクトはそんなことなど微塵も気にせず紹介を続ける。年齢はレオラと同じか、少し上といったところだろうか。落ち着きがあると言っよりは、おっとりしている青年だった。

「性別は男で、年齢は……途中から数えるの、忘れた。好きな犬は白い犬で、嫌いな肉は羊肉……だったと思う」

ゆっくりと紡がれていく彼の言葉に、フィンとサスケが一つ一つ頷いていく。

「将来の夢は、鯨になること……だったっけ？」

最後の言葉に、一人と一羽が食い付くように声をあげる。

『くじら!?!』

「しかも疑問形？」

うん、とハクトはゆっくり頷く。

「なれるのなら、なりたいなあ……と。なれないなら、それはそれで別に良いんだ……そのときはクラゲになるから。とりあえず、海を漂いたい……」

『ゆるい！ ゆるいです、ハクト殿!』

さすがのサスケも脱力せざるを得ない、大物だった。

ハクトは誉められたとでも勘違いしたのか、少し嬉しそうに頭を掻いていた。

「……こんなにゆるい人間が、ボク等の秘密兵器だって言うのかい、キミは」

「その通り」

いつのまにか傍までやってきていた独裁者に、フィンは声をかけた。

「アンダーグラウンド。あれはもはや恐怖政治だよ」

「いやだなあ、フィン。あれはアメとムチだよ」

「どう見てもアメの部分が少ない……というか、アメが無い」

フィンの正論を無視して、クウヤはハクトへごによごによと耳打ちをする。作戦でも話しているのか、ハクトは相変わらずおっとりとした物腰のまま、静かに何度も頷いていた。

「というわけで、一人は心細いかもしれないけど頑張ってるね」

「まあ……クウが困ってるみたいだし、それなりに頑張ってみるよ。えっと……とりあえず、カノを見付けたら捕まえる。アサとレオを見付けたら足止めする……だよね？」

頭をぼりぼり掻きながらハクトが確認する。

「そうだよ。頑張ってくれたら、ハカセもヒデオシもノロマもシラタマ触り放題。一日中遊んで良いよ」

「動物触り放題……」

すごく嬉しそうだ。ハクトの目が煌めいている。そんなハクトを、フィンがかなり不安げに見つめている。本当にこんな人間が、クウヤの言う秘密兵器なのだろうか。どうにもこの桃組の状況を打破出来るほどの力量を持った人物とは思えない。

「じゃ、行ってきます」

敬礼の真似事をして、ハクトはてくてくと徒歩で本部から出て行く。どうやら走る気は無いらしい。

そんな彼の姿を見て益々訝しげに首を傾げて、フィンはひらひらと手を振るクウヤへと問いつめた。

「ねえ、アンダーグラウンド。本当に大丈夫なのかい？」

「どう転ぶかは神のみぞ知るってやつだよ。フィンは知らない？」

ハクトは昔、村外れの便利屋をやっていたんだよ」

全体観測と呼ばれてるとはいえ、一々個人のことまで覚えていら

れない。フィンは不機嫌そうに肯定の意を示した。

「ハクトはずっと便利屋になりたかったんだって。でもね、全然仕事が上手くいかなかった。何をやっても、ハクトが関わった物事はどうしてか都合が変わってしまうんだ。良い方にも悪い方にも。だから、幹旋所の所長が冗談交じりに言ったそうだよ。『貴方は都合屋の方が性に合ってるかもしれないね』って」

「……で、都合屋になったと？」

「らしいよ」

脱力する。人に言われたくらいで変えてしまう信念なのか。ずっと便利屋になりたかったと、さっき言ったばかりではないのか。

フィンは人差し指でこめかみを叩く。

「ローズマリーが思っていたよりもゆるい人間だということは分かった」

「それで十分だよ。ハクトが動いたことによつて、どう都合が変わるかは分からないけれど、今よりも悪い状況は無いから大丈夫。もう猫の時間は終わりだよ」

そして、にこりともにやりとも表現できない笑みを浮かべて、闇鬼はシニカルに言った。

「鼠の反撃だ」

118・裏町ラプソディ #12「窮鼠、猫を噛む」(後書き)

闇鬼が鳴神に牙を剥く。



桃組の独裁政治が始まって一時間と数十分。

この間の桃組はものすごいスピードで成績を上げていた。

白組からは八チマキを取って取って取りまくり、水色組からは逃げて逃げて逃げまくっていた。目撃者の情報によると、小隊のグループに固まって動いていた彼等は、皆一様に「殺される」だの「帰りたい」だの「もう嫌だ」だの、絶望的な台詞ばかり呟いていたそう。

どうやら、クウヤの言っていた『ペナルティ』の他にも、一時間に一本の八チマキを取れなかった人間には閻鬼スペシャルな『罰』が与えられているらしく、たまたま八チマキ奪取に失敗した桃組のグループが、それはそれは酷い叫び声をあげたのが聞こえたとかいう噂だった。

それが一体全体どんな罰なのかは誰にも知る由は無いが、ともかく、桃組の人間は皆共通して死に物狂いになるわけで。

そんな一時間と数十分だった。

だが、ほとんどの桃組グループが好成績をあげる傍ら、やはりそう上手くいかない人間もいる。

「ムリムリムリ、絶対無理なんだよ！ 無茶言うにも程があるんだよ、桐生空夜は！ ねえシゲ君！」

「だよなだよなっ！？ そうだよなマリナ！ 一時間に一本？ 今まで一本も取れてない、むしろ既にスペアになっちゃってる俺達には到底無理な相談だよなっ！」

「相談っていうか、ぶっちゃけ脅迫なんだよ、あれは……」

「泣いちゃ駄目だ、マリナッ！ 火之基忍たる者、いついかなる時でも涙は堪えるんだっ！」

常緑樹の木の下で手を取り合う少年少女。

泣き言を吐く彼等もまた桃組。いつものバンダナの代わりに桃色のハチマキを巻く鉄太と、三つ編みの先端にリボンの様にハチマキを結びつける真理奈がそこに居た。

裏町幹旋所百周年記念パーティーでも散々な目にあつた二人だったが、またしても同じ様な状況にあるらしかった。

「もう一時間を軽く過ぎちゃったんだよ……どうする？ シゲ君」

「どうもこうも……まだ一本も奪えてないんだ……帰れないっ！」

そう、何の収穫も無しにあの本拠地へは帰れない。本来ならば絶対不可侵の安全地帯なのだが、いまの二人には畏怖の対象に他ならなかった。

「でもでも、いつまでも帰らないわけにはいかないんだよ」

帰りたいのに帰れない。帰りたくないのに、帰らなくてはいけない。

一体どんなジレンマだ。

これも全部、桐生空夜のせいである。

「ううっ……桐生家の所為で、桐生家の所為で！」

何故だが、いつの間にか桐生家全体の所為にされてしまっている。半ばヒステリックになりながら鉄太はマリナに振り返る。

「和国に帰ったら、絶対にもう桐生家とは関わらないようにしようなっ！」

固く誓い合う二人。

そんな二人に、突如近付いてきた気配は感じ取れなかった。

「桐生家がどうかしたの？」

頭上から、声が聞こえた。自分達のいる木の下、ちょうど上から。

何処かで聞いたことのある声である。いや、ついさっきまで聞いていた声だ。

「「きつ、桐生空夜!?!」」

化物でも見るかのように二人が見上げた木の上には、かの独裁者の姿は無く。

「……えーっと……空夜に何かされたの?」

きよとんと首を傾げる独裁者の兄が居た。

「そう……酷い話だね。大変だったろ?」

ぼんぽんと幼子をあやすようにして朝飛が二人の頭を撫でる。

鬼がいれば、仏もいるものだ。うるうると瞳が潤んでくる鉄太と真理奈を見て、さすがの朝飛も苦笑せざるをえない。

「二人とも、よくここまで頑張ったね」

本拠地では八チマキを取られたことを罵られ、誉めて貰うことなど久しくなかった二人にその言葉はいたく胸に響いた。

「「き、桐生次期頭目ー!」」

「よしよし……もう心配しなくてもいいよ」

優しさに飢える子供達に慈悲の笑みを浮かべながら、朝飛は言葉を続ける。

「心配しなくても、二人とも、もうリタイアだからね」

にっこりと仏の微笑みで言うものだから、さらっと流してしまうところだった。

朝飛の言葉の意味を理解しようと思つする二人の頭からすると八チマキを取り外して、朝飛はもう一度微笑んだ。

「引つかかったな、馬鹿め」

その微笑みは、瞳孔が開いていた。

「「ええええ!?! 桐生次期頭目ー!?!」」

あまりにも信じられないその光景。だが、よくよく見てみれば、

朝飛が腰に巻き付けている八チマキの色は確かに水色で。

何故気が付かなかつたのだろうか。後悔しても、もう遅い。

「もしも桃組の本拠地へ帰ることがあつたら、空夜に伝えておいてくれる？」 『勝つのは僕ら水色組だ』 ってね」

「……桐生家、もうやだ……」

草津真理奈・重松鉄太。共にスピアの八チマキを奪われ、リタイア。

この時二人は、一生桐生家とは関わらずに生きていきたいと願つたとか願つてないとか。

\*\*\*\*\*

「やばいねえ。なんだかさあ、急にやられ始めちゃったねえ」

ねえ、便利屋さん？ と全然楽しくない状況下でニコニコと笑いかけてくるコヒナタに、カノンは同意せざるをえなかった。

「だな。ここ一時間で、かるーく今までの倍は捕られる」

アルルが整理した情報紙を見ながらしかめっ面で答えた。

その紙の作成者であるアルルはかけていた眼鏡をずらして溜息を吐いた。

「駄目だ。情報収集は確実に桃組のが上。俺とコヒナタを足しても、恐らくフィンには勝てないね。さすが俺の義弟、恐るべし」

アルルの絶望的な台詞を聞いて、為す術無し、とでも言いたげに

コヒナタは降参のポーズを示した。もちろん、笑ったままだが。

元々、カノンだって情報戦でフィンに勝てるとは思っていない。こちらの動きは、疑うまでもなくあちらに筒抜けだろう。情報で勝てるのはせいぜい水色組のみ。

「ほほう。闇鬼がとうとう鳴神に牙を剥きましたか」

これからどうすべきか悩んでいると、いつの間にか所長が後ろに立っていた。

「所長……その格好は一体……」

カノンが思わず問いかけた彼の格好は、どこの食堂かとおつこみたくなる白い割烹着。

手には何故だかお玉を持っている。芸が細かい。そして、所長からはわずかにいい匂いが香ってくる。

「もう四時も過ぎたでしょう？　そろそろ夕飯の支度をしなければいけませんからね。皆さんが働いてくれているというのに、私だけが働かないというのもおかしいですから」

一時間に一度はこの本拠地を出なければならぬカノン達とは違い、指揮官である所長やアンジユ達はずっとここにいる。要は暇だったのだろう。

しかし、夕飯など食べている時間はあるのだろうか。

カノン達の疑問を読みとったかのように、所長は話を続ける。

「心配しなくとも、ちゃんと夜の部は休憩を作っておりますよ。午後八時から、明朝六時まで、三つ巴は一時休戦となります。自己中心的サディストだって言われますけどね、私だってちゃんと皆さんのこと考えてるんですよ？」

それはきくと、よく食べてよく寝てもらわないと、面白い戦いは見れないからだろう。

いつでも自分の欲望に忠実な男、アレグロ・コンポート。

「……ゆ、夕食楽しみにしてますね」

無難にまとめたカノンに、白組一同は心の中で拍手した。

「ええ、期待しておいてくださいいな。それにしても、『背水の陣』

『窮鼠猫を噛む』。先人は何とも素晴らしい言葉を残しましたね」  
「笑い事じゃないですよ、所長。せっかく上手い具合にいったのに……」

急にハチマキが奪われ始めたことに焦りを隠せないカノン。本当ならば、桃組はもう少し大人しくしているはずだったのだ。クウヤを少し見くびっていた所為だ。

そんな彼女の肩に手を置いて、所長は目を細めて言う。

「ミス・ソリティア。ゲームというのは二転三転するからこそ面白いのですよ」

「二転三転した所為で苦悩するおれ達を見られて、実は楽しいんでしょう?」

「楽しさ八割、歯痒さ二割ですね」

所長、負けて悔しいのは二割でしかなかった。一体誰の所為でここまで苦勞していると思っているのか。

喋るのが億劫になってきたカノンを見かねて、今度はアルルが話し掛けた。

「そういえば所長。ゲームが始まったときから疑問に感じてたんだけど、『一時間に一度は安全地帯を出なければならぬ』ってルールあるじゃん? あれってさ、守ってなかったとしても分かんないんじゃない?」

「いいえ、分かりますとも。貴方達がハチマキを付けている限り……」

なんだろう、あの笑みは。

思わずハチマキを外したくなったのは、きっとアルルだけではない。

「……もしも一時間以上本拠地に滞在したら、このハチマキが爆発でもするとか?」

「おや、惜しいですね」

何が惜しいのか。

にっこりと微笑む所長に、アルルはそれ以上何も聞けなかった。

というか聞きたくなかった。とりあえず、ルールはしっかり守った方が良さそうだ。

話が丁度きりよく終わったところで、コヒナタが誰に聞くでもなく言葉を発した。

「で、これからぼくたち、どうするのお？」

今の白組にとって、最も難しい問いかけだった。

「無駄に動いてもやられるだけだし、かといっていい作戦も思い浮かばないからな。とりあえず、体勢の建て直した」

不満げにカノンが言い放った。

\*\*\*\*\*

「さっきの火之基忍のハチマキを合わせて、九本目か」

いままで奪取してきたハチマキを数え、朝飛がとくに嬉しそうにするわけでもなく一人呟いた。

大した戦績かもしれないが、いかんせんきりが悪い。あと一本取ったら一度本拠地へ帰ろうかと思案していると、背後で何かの気配がした。

「そこに居るのは誰ですか」

歩みを止め、後ろを振り返る。

あるのは、草の茂み。人一人隠れるくらいには丁度いい面積だ。

「居るのは分かっています」

朝飛の淡々とした口調に、これ以上隠れるのは無駄だと判断したのか、草陰からゆっくりと人が出てきた。悠長に、頭をぱりぱりと掻いている。

「見付かった……」

「桃組さんでしたか」

草陰から出てきた人物は、ぼーっと朝飛を見て、ポケットから何か紙切れのようなものを二枚取り出した。どうやら写真と、何かのメモのようだ。

朝飛と写真を見比べて、彼は何か思い出したようだった。

「えっと……君はクウのお兄さん？」

いきなり問いかけられた朝飛は、取りあえず聞き返す。

「クウ？」

「名前は確か、アサだっけ……？」

「アサ？」

疑問符の飛び交う会話に、うんうんと勝手に納得している。

朝飛には全くもって訳が分からない。まるで言葉の通じない相手と喋っているような感覚だ。いや、たぶん通じていない。

「貴方、桃組さん……ですよね？」

額に巻かれたハチマキは、確かに桃色であるが、問わずにはいられなかった。

この人間は水色組である自分を眼前に、なかなか逃げだそうとしないのである

「エントリーナンバー、一番」

なんの前触れもなく、いきなりだった。目の前の相手は声高らかに右手を空へと突き出す。

一瞬攻撃かと思って身構えた朝飛だったが、どうやらただ手をあげただけらしい。それもそうだ。桃組が水色組に攻撃など、聞いたことがない。



「エントリー？」

「ハクト・ローズマリーのちょっとした小話……」

さらに首を傾げた朝飛など眼中に無いのか、ハクトは了承も得ないまま勝手に喋り始めた。

「……題名『歌うピアノ』……とある学校にあるという、古びたグランドピアノ。このピアノの置かれた教室から、深夜になると歌声が響いて来るとい……誰も居ないはずの教室から、必ず聞こえて来るとい……その歌声は、」

「ひっ、にぎやああああああああっ！」

両手で両耳を塞ぎながら、水色組一の強者、桐生朝飛が全速力で後ずさりした。

必死の形相、もとい半泣きの表情である。目尻にうつすらと涙が滲んでいる。相当聞きたくない話らしい。

それを見て、ハクトがぼんやりしたまま嬉しそうにする。ほくほくとした雰囲気だ。

「クウの言ってた通り……アサは俺のハチマキを奪えない」

「な、なんでその話を知ってるんですか！？ 僕の通ってた学校の七不思議なんですよ！？」

耳を塞いだまま、朝飛が信じられないといった表情でハクトを見る。

だが、ハクトが答える前に、さっきまでの意味の分からない単語が結びついた。

「そうか、クウって空夜のことだったんですね！？」

「うん。クウが、この話をすればアサは逃げ出すって教えてくれた……」

わざわざ自分が逃げずとも、敵側から逃げてくれる。これほどおいしい話は無い。

だが、そんな怪談話に負ける朝飛ではない。

「ふ、ふ、ふ……こっやって耳を塞いでおけば、貴方の話なんて聞こえませんかよ！」

得意げに笑う朝飛に、ハクトは間髪入れずに答える。

「その代わり、両手が塞がってるから俺に手を出せない……」  
沈黙。

風が吹く。

膝をおったのは、朝飛だった。

「……しまったあああ！ 僕は馬鹿か！」

朝飛、平常心じゃない所為か、意外な盲点だったらしい。相当動揺しているのか、どうすればハクトのハチマキを取れるのかさっぱり見当がつかない。

「というわけで、さようなら……。俺、白組のハチマキを取らなきゃいけないから……」

「ま、待てっ！」

逃げようとするハクトの後を追おうと朝飛が駆け出すと、ハクトがまた話し始めた。

「……教室のドアを開けると、そこにはピアノに腰掛ける包帯だらけの少年が、こっちをじっと見つめ、」

「ふぎゃああああああああっ！」

朝飛の叫び声が響き渡った。

119 裏町ラブソング #13 「おばけなんか怖くない」 (後書き)

誰にだってほら、苦手なものってあるからね。

一人の男が、人が疎らに歩く廊下を小走りで駆けていた。誰かに追いかけられているのか、何度も何度も後ろを振り返りながら。

男が居るこの廊下は、レスティナ国ソナチネ地方軍部下に置かれるソナチネ警察軍の施設内だ。男が羽織っている軍服の階級章から、彼がこの警察軍の『少佐』の地位にあることが分かる。

擦れ違つう人達も、階級章が違えど彼と同じ軍服に身を包んでいた。「……よし、ばれてない」

廊下の角まで来ると、男は前後左右を注意深く見渡し、ほつと安堵の息をついた。後はこの角を曲がって真つ直ぐ進めば出口である。男が駆け出そうとしたその瞬間、不意に背後から肩を掴まれた。

「何が『ばれてない』んだ？ ユーリ・バーガンディ」

「う、げっ！ マーサル少将！」

ユーリが掴まれた肩越しに上司の表情を覗きながら、思わず声を出した。

「上司の名前を略すな」

「すいませーん……。えーっと、俺に何の用でしょうか？ マース・アラルガンド・キャラメリゼ少将」

「何の用？ お前こそ、何か用があるのか？ 仕事をほっぽり出して、一体何処へ行く気だ！」

マースはびくびくと米神を痙攣させながらユーリへと怒鳴った。

いきなりの怒声に廊下を歩いていた人全員の視線がこちらへと向くが、怒声の原因がユーリだと分かると、ほぼ全ての人間が「またか……」と呆れと同情の目になり、すぐに動きを再開させた。どうやらお馴染みの光景だったらしい。

「いやー、そのですね。俺の友人に頼まれてですね。ちょっと弟を預かって欲しいと言われまして……」

「ちっ。またあの便利屋か」

「あはは……まあ。それで、いまうちで預かってるんですけど……早く帰ってあげようかなと思ひまして……だって！　だってですよ少将！？　幼い子供が一人ぼっちで過ごすのはよくないって言うじゃないですか！」

熱弁するユーリに対し、マースは

「その熱意を仕事に向ける」

ぴしゃりと言い放った。もつともである。

だがそんな小言も上の空、ユーリは廊下の窓をチラチラと見て、今にも駆け出してしまいそうな勢いだ。窓から見える空はオレンジ色。一日中ほつたらかしにしては、シオンも寂しがるだろう。あの少年は年の割に出来た少年だから、そんなことは一言も口に出さないだろうが。

自分の話を全く聞く気の無いユーリに、マースは大きな溜息と一緒に言葉を発した。

「早く仕事に戻れ……と、言いたいところだが。今日はもう帰っていいぞ」

「ですよー。まだこの前の書類も終わって………終わってないのに帰っていいんですか！？」

仕事をほっぽりだしてまで帰ってきたのに、帰っても良いと言われた途端、逆に心配になる。

目の前にいるマースは不服そうな顔を見せながら、何度も同じことを言わせるなど言いたげにもう一度溜息を吐いた。

「ああ。今はそれどころじゃないからな……いや、警察軍に直接関係は無いが。上がああでは、こっちは何も出来ないからな。休めるうちに休んでおけ。お前もコーダ中將から聞いたことがあるだろう」  
父の名を出され、ユーリの肩がびくりと動いた。

「中央軍……総司令部の話ですか？」

「具体的には、スケル・ワルツハイネ司令部長の話だな」

やっぱり。ユーリは声に出してそう呟いた。

知らないはずがない。コーダに聞かされる前にも、噂になってい

た。『軍部の指導者が変わるかもしれない』と。

黙り込んだユーリに、マースは続ける。

「軍の式服、用意しておくんだな」

それは現司令部長の葬式の話か、それとも新しい司令部長の着任式の話か。

重くなっていく空気に耐えかねて、ユーリはにへら、と緊張感の欠片も無い表情で答えた。

「どこにやったっけなー、あの式服。あれ、滅多に着ない服なんで、ついつい仕舞い場所を忘れて……」

「クロウ・リアハーデン」

ユーリの言葉を無理矢理遮るようにして、マースが言い放った。

「え?」

「恐らく、クロウが新しい司令部長になるだろう。戦争好きの軍部では絶大の信頼を誇っている」

戦争嫌いの警察軍ではどうだか知れんがな、と声のトーンを落として言ったそれは、マースの本音だったのかもしれない。それを聞き逃さなかったユーリは、さっきと変わらぬ表情で答えた

「マーサル少将は心配性ですねー! きつとなるようになりますって。ほら、俺日頃の行い良いですし。折角帰っても良いんだから、俺はこのへんでー……」

「軍を辞める」

その言葉はあまりにも突然だった。

帰ろうとしていた足を止めて、口を半開きにしたままユーリが振り返る。

「え……?」

「過ちは繰り返される。戦争は、また起きるだろう。その前に軍を辞める」

苦々しく言い放つその顔は、いつも嫌味を言って、怒鳴ってばかり

りいる上司とは別人のように見えた。

「お前も、もう、誰かが死ぬのは見たくないだろう。自分が死ぬかもしれないという状況に置かれるのも」

「マーサル少将こそ、ご家族がいらっしやるでしょう。戦争が始まる前に、お子さんと仲直りされてはいかがですか？」

「冗談めかして言われた台詞に、マースが反論しようとする。だがそれを聞き入れずにユーリは続けた。

「俺はやめませんよ。そんなの、逃げるみたいじゃないですか。ソリティア大尉は逃げなかったのに、俺だけ逃げるのは……なんて言うか、俺が許せませんから」

そう言ったユーリに、怒るわけでもなく呆れるわけでもなく、マースはただ言葉を訂正した。

「ソリティア大尉じゃなくて、ソリティア少佐だろ。それに何度も言うが、上司の名前を略すな」

「あ、そうでしたね」

それでは、と今度こそ帰路についたユーリの背中を見送って、マースは形容し難い表情で呟いた。

それは、廊下に居た人間の誰にも聞き取れない呟きだった。

「逃げなかったから……ソリティア少佐は、死んだんだろうか……」

\*\*\*\*\*

陽がだんだん西へと傾いてきた。常識外れな人間達の所為で忘れてしまいそうだが、いまは冬。もうすぐ三月になるとは言え、夜は冷える。

吹いてくる風が肌を刺すように冷たくなってきた。

そんな寒さにも耐え切れそうな、真つ黒なダツフルコートの前をきつちりしめて、フィンは隣にいる人間へと問いかけた。

「で。キミ達、一体いつまで姉弟喧嘩してるつもりなの？」

フィンに問いかけられ、ハチマキの整理をしていた秘書の手が止まる。

「……質問の意図が理解しかねますが？」

「そのまんまの意味だよ」

さらさらとペンを走らせる音。秘書が調べたハチマキの数を、フィンが情報紙の中に書き込んでいく。奪われた数、奪った数、残りのスペア。そしてそれを、他のチームと比べる。どうやら最下位の危機は免れたようだ。

白組で悔しそうにするあの便利屋の顔が浮かぶ。

「クロスフィンガー、私は別に喧嘩などしていませんよ。ここ数年ろくな会話をせず、顔を合わせれば罵りあい、さつさと謝まれこの愚弟、と思っただけです」

「世間ではそれを姉弟喧嘩というんだよ。知ってたかい」

情報紙を机の端に追いやり、フィンは倒れるようにしてその上半身を机の上へと置いた。行儀が悪いかも知れないが、疲れたのだから仕方ない。さつき秘書が入れてくれたコーヒーが、いまは横向けに見える。

「そもそも、どうして家を出たんだい？」

「詮索がお好きなようですね」

「情報屋だからね」

ずれてもいない眼鏡を触り、アンジユはそのレンズ越しにフィンを見る。

後ろでは、ちょうど帰ってきた火之基忍達に罰を言い渡すクウヤ



の声が聞こえた。たぶん、凄くいい笑顔をしているに違いない。

桃組の様子を想像していると、アンジュがフィンに向けて人差し指を立てながら言った。

「レールの敷かれた道を歩きたくない！ と、思春期の子供のようなことを考えたから……これがAです」

「……Bは？」

問われて、次は中指も立てた。

「キャラメリゼ家はご存じの通り、自分で言うのもなんですが名の通った軍人を輩出してきた家です。才を有する者ならば男女関係なく、軍人へと育て家を継がせます。そして残念ながら、アルルには軍人になる才能は無く、私には有りました。家は、私を軍人にするべく様々な教育を施しました。その間弟は、羨ましいことに蚊帳の外でした」

一息ついて、アンジュは落としていた視線をあげてフィンを見る。いつの間にかサスケが彼の頭の上に居た。

「B、私は軍人になどなりたくなかった」  
薬指をあげ、

「C、弟に家のことを全部押しつけてやろうと思った」  
さて、どれでしょう。

真面目に聞いてくるアンジュから視線を移し、フィンは唸る。頭の上のサスケも一緒に唸っていた。

そして視線を戻し、アンジュに向けて左手を広げる。

その手は五本のうち、親指を残す四本の指が立っていた。

「隠れDの、『ないがしろにされてたアルルが可哀想だと思った。自分が家を出れば、弟に関心が向くと思った』」

「さて、水色組の動きが気になりますね。アンダーグラウンド君に今の状況でも聞いてきましょう」

正否も言わずに、アンジュは百八十度回転した。

そんな彼女の背中にいつもの仏頂面を向け、少し音量をあげて話し掛けた。

「君達は、言葉が足りないよ」

『アルルは、貴女に置き去りにされたと思ってますよ!』  
続けてサスケも言った。

首だけをフィン達に向けて、アンジユは訳が分からなさうに怪訝な目をした。

「一度、ゆっくり話してみたらどうだい？ このままじゃ、いつまで経っても変わらないよ」

「……それは、全体観測としての忠告ですか？」

「そうだね……いや、」

少しだけ。ほんの少しだけ口角を上げて、フィンは穏やかに言った。

「弟子としての、お願いかな」

\*\*\*\*\*

「シオン！ たっだいまー」

勢い良く自室の扉をあけ、一人寂しく待っていたらろうシオンへ駆け寄ろうとして、ユーリは立ち止まった。

「……ってなんでルカがいるんだよ!？」

「よっ、ユーリ兄!」

持っていたトランプをあげて、従兄弟であるルカ・バーガンディがにこやかに挨拶した。

ルカの向かいでは、シオンがどのカードを引くか悩んでいた。

「ユーリさんおかえりー」

「シオン！　なんでルカが此処に居るんだよ？」

「あ、そうそう。ルカとユーリさんって従兄弟だったんだね。僕知らなかったよ」

だって言っていないもん、とルカがカードを引きながら悪びれも無く言う。そしてすぐに奇声をあげた。引いたカードはジョーカーだったらしい。

「なあなあユーリ兄、聞いてくれよ！　シオンな、春からアロデイン学院に通うんだって！　一緒のクラスだといーな」

「あー……友達だったわけね」

やっと関係が読めたユーリは、鞆を床に下ろしながら二人の近くに寄った。

「それにしてもユーリさん、早かったね」

「どーせまたサボりだろ？」

「ちっがつう！」

辛辣な一言に傷付きつつ、ユーリは否定の答えを言う。

「今日は早めに終わったんだよ」

「そうなんだ？」

あんまり信じた様子は無いシオンの視線に悲しくなりつつ、テーブルの真ん中で山のように重なったトランプから二人と同じだけのカードを手に持ち、椅子へと座る。

「おっし、俺もまぜろ。二人でババ抜きしてもつままないだろ？」

「えー。ユーリ兄、イカサマすんじゃねえの？」

「しねーよー！」

「じゃあさ、これが終わったら手品な！　新しいの」

「終わったらな」

二人の会話を聞きながら、

「姉さん、ちゃんとご飯食べてるかなー」

シオンは窓の外の夕陽を見て言った。



「クロスフィンガー。まだ選択肢があつたんですよ」

「そうなの？」

「隠れE、実は所長に恋をしてしまった。しかも一目惚れ」

「……キミって、嘘が下手だね」

前回、百周年記念パーティーで使用された城の大きな広間では、何かの集会で使われていそうな、二十人は余裕で座れる長いテーブルが数台並べられている。広間中に広がるなんとも言えない食欲を誘う匂いで、それが夕食用に用意された物だと分かる。

そして、完璧に用意された席に全ての人間が収まったのを確認し、所長は嬉しそうに何度も頷いた。

「さてさて、みなさん。私が腕によりをかけて作った自慢のカレーライス、遠慮無く食べてくださいね」

にんじん、じゃがいも、たまねぎに数種類のスパイスを絶妙に配合して。ニンニクを少し入れたためか、一層風味がたつて嗅覚を魅了する。

隠し味として入れたヨーグルトは、ただ辛いだけでなくまるやかなコクを出すのに一役買っている。

カレーは二日目というのが一般常識らしいが、このカレーは数時間しか煮込んでいないものにとっても美味しそうである。美味しそうなのだが……。

「おや、みなさん。カレーライスは嫌いですか？」

器に盛りつけられたカレーと、ご丁寧に用意されたミニサラダと食後のデザートであるヨーグルトゼリー。いつの間にかそこにまで用意していたんだと調理法を聞きたくなる夕食を目の前に、ほぼ全員が微妙な表情をしていた。

これだけ美味しそうな献立なのに、そんな微妙な顔をされては疑問も浮かぶ。

「……好きとか嫌いとか……そういうのではなくてですね、所長」  
所長の疑問解消に協力すべく、所長の近くに居たカノンが全員の代弁をする。

「もちろん、心配せずともおかわりはたとえと用意してありますよ」

「まるでおれがライスの少なさに不満を感じた大食いキャラみたいな返答はやめてください。じゃ、な、く、て！」

ばんつ、とテーブルを支えにしながらカノンは立ち上がった。

「これはどういうことですか!？」

ぐるりと三百六十度回転しながら、周りを見渡す。数えるのに苦勞しそうなほどの人間に、三色揃った八チマキ達があちこちに見受けられる。

白色桃色水色、あぁなんて色とりどりの美しい世界。空回りフルストップ、略してカラフル。

若干の現実逃避をしつつ、無事に元の位置まで回ってカノンは再度テーブルを叩いた。

「なんで三組全員集合しているんですか！」

「何故って、八時だからですよ」

「意味が分からない……！」

カノン・ソリティア、頭を抱えながら無念の敗退。次の挑戦者、アルル・キャラメリゼが立ち上がった。

「言うまでもなく、三組は敵同士のはずですよね？ アレグロ所長」

「今は一時休戦です。言っただではありませんか。八時から明朝六時までは三つ巴鬼を休止すると」

「いや、確かに言っただけ……まさか一緒に食事をするなんて……」

チラリと彼が向かい側の席を伺うようにして見る。そこには眼鏡の手入れをする姉の姿があった。

本当はこんな近くの席に座るなど、気まずい上に何を話せばいいのか見当が付かないので嫌だったのだが、自分のネームプレートが置かれた席に座らなければならぬので仕方がなかった。

「折角の夕食なんですから、姉弟水入らず、一緒に食事しながら会話を楽しんでみてはいかがでしょう？」

どうやら所長なりに世話を焼いてみたらしい。余計なお世話とはこのことだ。

我が儘を言える立場ならここはカノンの隣の席が良かったのだが、いまはそんな贅沢は言わない。とにかく、誰でも良いから席を変えて欲しい。

丁寧に埃を取っていたアンジュだったが、アルルの視線に気付いたのか、手を止めて弟の姿を目に入れる。

「チツ……………はぁ……………」

「会話うんぬん以前に、もはや交わすのが言語じゃねー！」

かなり嫌そうに舌打ちと溜息をお見舞いされてしまった。アルル、精神的に立ち直れそうにないので途中敗退。カノンが敗者復活戦に臨む。

「えーと、つまり、いまだけは三組仲良くにやんにやんしろということですか」

「ええ。せつかく夕食を共にするんです。仲良くにやんにやんしてください」

取りあえず、にやんにやんすることになった。

「…………カレーの食べ方には、少しずつルーをライスにかけて食べる食べ方と、最初から混ぜ合わせる食べ方があるんだって…………アサはどっち派…………？」

「ぎにゃああああああ！　なんでストーリーテラーさんが隣に居るんですか!？」

派手にリアクションを取ったため、水がまだ入っていたコップが倒れたり手に持っていたスプーンを落としてしまったりと忙しい朝飛。そんな彼を気にすることなく、今度はジャガイモにターゲットを絞ったのか、人外との会話を試みたハクトがぶつぶつを独り言を言い始める。



「ジャガイモ的には、一口で食べられた方がいいのか……それとも少しずつ味わうように食べられた方がいいのか……」

さすがに向かい側で座っているレオラもハクトにはつつこまない。つつこまないかわりに、朝飛のスプーンが使えなくなったので、余っていた新しいスプーンを彼に渡す。

「あーあー……落ち着いて食べよアサヒ。ほら、替えのスプーン」  
が、朝飛はスプーンではなくレオラの腕をがしつと掴んで、必至の形相で頼み込んだ。

「お願いしますレオラさん、席を替わってください。一生のお願いです」

「ごめん無理。オレもハクト苦手」

「ひ、酷いです！ 一生のお願いを使っただんですよ!?!」

出会いが最悪だった為か、どうもアレルギー症状が出ているようである。ハクトはジャガイモへの交信を断念して、再度朝飛への交信を試みる。

「おすわり」

朝飛は犬か。

自分の隣の席をぼんぼんと叩きながら、ハクトは眠そうなのか不機嫌なのかよくわからない表情で朝飛を見た。たぶん、あれがいつもの表情なのだろう。

「え、でも……だって、その……ストーリーテラーさんはストーリーをテラーするじゃないですか」

「まあまあ、お座りなさいな……」

あからさまに拒絶反応を起こされたが、気にせずにはハクトは同じ言葉を言った。今度は椅子ではなく、朝飛の頭を宥めるようにぼんぼんと叩きながら。

「もう怖い話はいらないから、大丈夫……」

力が抜けたようにストンと座った朝飛を見て満足したのか、サラダのヤングコーンをもしゃもしゃと咀嚼しはじめた。

どうやら食感が気に入ったようである。まだ手を付けられていな

い朝飛のサラダをじーっと見つめて、フォークで指し示す。

「アサ、これいらぬ……？」

「あ、どうぞ」

なんだか毒気を抜かれてしまった。ハクトは嬉しそうにヤングコーンへとフォークを伸ばし、もしかやもしまた食感を楽しみ始めた。

ふふ、と朝飛が苦笑いと似た笑みを浮かべて言った。

「なんだか、調子が狂います」

ゆるいのか、天然なのか。たぶん両方だろうが。まるで大きな子供のようである。

「そこが苦手なんだよ、オレ」

レオラが疲れたように言った。

「レオ、これ……」

自分のサラダをじーっと物欲しそうに見つめてくるハクトに、無言でヤングコーンを献上した。

意気揚々とフォークを突き刺す姿はとても嬉しそうである。恐らく自分と同じか少し上であろう年齢の青年は、精神年齢はこの誰よりも低い気がした。

「所長が言ったことにも頷けるよ。便利屋より、都合屋向きだな。無意識な所が難儀だけだ」

「へえ、ストーリーテラーさんは都合屋なんですか」

「アサは、俺のことをハクトって呼べばいいと思う……」

「あ、はい。ハクトさん」

周辺のヤングコーンを全て平らげ、やっとメインディッシュであるカレーへと手をつけていたハクトがゆっくりと相槌を打つ。

「ん。所長が、そっちの方が似合ってるって言ったから……仲間外れの都合屋なんだ……。裏町業になれるなら、なんでも良かったし……」

「仲間外れですか……言い得て妙ですね」

「クウも同じこと言ってた……」

弟の名前が出て、ぴくりと朝飛の眉が上がる。

「へーえ。どこその不精者と同じ感想を言ってしまうだなんて、失言でしたね」

「あれ？ レオラ、今日は粗大ごみ回収の日だったの？ こんなところになきなごみがあるけど」

丁度朝飛の後ろの席に座っていたクウヤが、わざわざ振り返りながら減らず口をたたいた。クウヤの隣では無表情にカレーを食べるフィンが居た。

「ああ、そんな所に居たの？ 存在感が空気みたいだから気が付かなかったよ。ごめんね」

絶対に気付いてた。

「いいんだよ兄さん。僕こそ、使えなくなっけ置き場所に困った粗大ごみと間違えてごめんね。ああ、別に兄さんが邪魔で仕方ないと言ってるわけじゃないんだよ？」

「もちろん分かってるよ。ああそうだ、さっきの表現は間違ってたね。空気みたいじゃなくて、空気よりも存在感が薄いだったね」

ぱちぱちと、静かに火花が散る。この兄弟、未だに喧嘩中だったようだ。

いつもなら先に折れるのは兄である朝飛だったが、今回はまだ折れる気はないらしい。珍しく長期戦に持ち込んだ喧嘩だった。

「……いい加減にしてくれ。あつちで姉弟喧嘩、こつちも兄弟喧嘩。ちよつとはソリティア姉弟を見習え」

クウヤの隣で既にヨーグルトゼリーへと手を付けていたフィンがうんざりするように言った。彼の頭の上のサスケまでちよつかり頷いている。

そんなフィンの一言にも耳を貸さずに二人とも無言で睨み合う中、ふと自分の皿の異変に気付いたレオラが声を出す。

「あつ！ ちよ、ハクト、お前何してんだよ！」

「……カリフラワー、いらぬ……」

いやいやと首を左右に振りながら、いつの間にかハクトがレオラ

の皿へとカリフラワーを移し替えていた。レオラの皿にはカリフラワーがてんこ盛りになっている。

朝飛とクウヤの肩がぐくりと下がる。

「調子狂う」

当の本人はというと、クウヤのヤングコーンを狙っていた。

「姉貴、水取って」

「それくらい自分で取りなさい」

「なんでだよ。姉貴のが近いじゃん……って、危ね！」

あからさまに嫌々水入れを取り、中身が零れるのではないかと思うくらい乱暴にアルルの前に置く。

なんとかアルルが歩み寄ろうとしているものの、アンジュはなかなかその姿勢を変えようとはしなかった。

わざわざこつちが譲歩しているというのにいつまでもこの態度でいられることには腹が立つことこのうえないが、どちらかが向かい合おうとしなければ、これからもずっとそっぽ向いたままで終わってしまいそう。それが怖くて、アルルは無言で水をコップへと入れた。

「……あ、入れすぎた」

「……………」

「……………」

沈黙が肌に突き刺さるように痛い。周りは案外賑わっているのに対して、自分達の周りだけ静かなのが余計に痛い。

そういえば、昔の自分達は一体どうやって会話をしていたのだろう。

アンジュが家を出たのが、およそ十年前。ということは、十年間

まともな会話をしていないことになる。最後が喧嘩別れに近かった所為か、今更何を話せばいいかさえ分からない。そもそも、謝った覚えも無ければ、謝られた覚えもない。この場合、謝罪から入るべきなのだろうか。

いや、とアルルはかぶりを振る。自分は悪くない、はずだ。なのに何故謝らなければならないのだ。

「水。貸して」

「あ、うん」

会話、というよりは、さっきから必要最低限の言葉しか交わせていない。

昔はこんなじゃなかった。九つも歳が離れているわりには仲の良い姉弟だったと自分では思っている。

しかし思い直してみる。向こうは、そんな風に思っていないかもしれないか？

父親や母親とは定期的に連絡を取っていたようだが、自分に連絡をくれたことは一度として無かった。アルルから、一度だけ電話をしたことがあるくらいだ。それさえもつんけんした態度で応対されたが。

段々と怒りや苛立ちといった感情から、淋しさや悲しさの方が勝ってきた。

慕っていたのは、自分だけだったのかもしれない。例えば、二人で作った秘密基地も、探検だと称して通った裏道も、姉は覚えてさえ居ないのかもしれない。

意を決して、アルルはアンジュへと再度声を掛けてみた。

「……あのさ」

「言うておくけど、私は謝らないわよ」

切り捨てるように放たれた言葉。そんなことを言うために声を掛けた訳じゃないのに、勝手に解釈されては困る。

右下がりになっていた怒りの感情がぐいぐいと上を目指しはじめ、ついに頂点に達した。

むすつとした表情を隠しもせず、アルルはカレー皿とコップだけ持って急に立ち上がった。

「ああ、そうですね！ あんたと食べてると、美味しいものも不味く感じるよ！」

「何処へ行くの？」

「どこだって良いだろ……あんたには関係無いし」

「関係無いことなんて、」

「俺は俺の好きなようにするから。あんただって、そうやって十年前に俺を置いてったじゃねえか！」

アルルは、自分が言ったことを特に何とも思わなかった。ただ思ったことを口にしたまで。

だが、アンジュは確かに表情を変えていた。悲しそうな、まるで有罪だと突きつけられた、無実の囚人のような顔に。

「そうね。私には関係の無いことだったわね」

このまま去るのも気まずい。何故自分がそんな思いをしなくてはならないのか納得行かないが、アルルは背を向けた状態で

「……………カノンちゃんどこ！」

吐き捨てるように言っつて、二列向こうのカノンの所へと足早に去っていった。

「まったく、二人して言葉が足りないんだから……………」

その様子を遠くから眺めていたフィンが、サスケにしか聞こえないくらいの音量で呟いた。

『フィンが間に入っつてはどうです？』

「やだよ、面倒臭い」

サスケの提案を一蹴しながら、アルルの歩いていった方向に目を

細める。ちょうどカノンと何か喋っているようだ。それから程なくして、ちょうど空いていたカノンの左隣の席へと着くのが見えた。「それに、こういうのは部外者が立ち入るべきじゃないよ。本人達が解決すべき問題だ」

次にアンジユへと目を移すと、一部始終を見ていたのか、護衛人パレット・タルトレットが先程までアルルの座っていた席へと腰を掛けていた。

アンジユは愚痴を聞いて貰っているのか、くるくるとスプーンを無意味に動かしながら口を動かしていた。

『ですけど、』

「下手に首をつっこむとね、ああいう風になる」

『あー……』

フィンが顎だけで指し示した方向、サスケが振り向いたそこには、クウヤに蹴りを入れられ、朝飛に罵倒をきせられているレオラの姿があった。なんというか、見ていない間に可哀想な状況になっている。

「つくづく間の悪い奴だ」

火花を散らす桐生兄弟の仲を取り持とうと間に入ったところ、どうやらそれは火花なんて可愛らしい物ではなく、ダイナマイトの導火線がちりちりと燃える音で、レオラは見事に暴発を招いてしまったようだ。

『人が好いんですよ、きつと』

「それにしても、あの中で平然とデザートを食べ続けるだなんて、相当の大物と見たよ」

ちょうどどこどくさに紛れて三人分のデザートをお腹に収めていたハクトが、台風の目となった喧嘩の中心でぼんやりとスプーンをくわえていた。

あれは、まだデザートを狙っている顔と見た。

『混沌としていますねえ……』

「触らぬ神に祟りなし。明朝六時が開戦時刻だっけ？ それまで眠

っ  
っておこっかな

レオラのギブアップを告げる声が涙声となって響き渡った。



121 裏町ラブソディ #15 「八時ですよ、全員集合！」（後書き）

「首！ 首しまってる！ ギブギブギブギブ……ロープロープ！」

「なかなか上手くないかないものですねえ……さすが裏町、一筋縄ではいきませんか」

数時間前とはうつつてかわって、がらんとした広間を見渡しながら所長が言った。まるで出来の悪い子供の話でもするかのような、困ったような表情。けれど、その双眸は愛おしげに細められている。

桐生兄弟もキャメラメリゼ姉弟も仲直りすることはなく、結局何も変わらないまま終わってしまった晚餐だった。仲直りするところまではないかとも、何か少し進展はあるだろうと期待していただけに、残念な結果に終わってしまった。

「あまり、他人事に首を突っ込むものではありませんけどねえ………ついつい気になってしまふんですよ。私もつくづく世話焼きですよねえ」

声に出して笑い、喋り続ける。

この広間に居た参加者達は、いまは就寝のためにそれぞれのチームの本拠地へと帰って睡眠をとっている頃だろう。もちろん、アンジユもパレットも同じく。それは所長本人が片づけの際にしっかりと確認している。

となると、この広間には三つ巴の参加者は誰一人として居ないはずである。だが、所長のその話し方は、確かに誰かへと話し掛けている風だった。

「我が子を見守る心地といいましょうか。貴女にはまだ分からないかも知れませんが」

「んふふ、分かるわーその気持ち。なんだかついつい構いたくなっちゃうのよねー」

所長の背後、開け放たれた広間の扉の影から現れたのは白衣を見に纏った女だった。

この女に向かって話し掛けていたようだった。

「おや、未婚でもうこの気持ちをお分かりですか？ 一苦勞なさつてますね」

振り返りながら、所長は両肩をあげて言葉を返す。

含んだ笑い方をする所長に、女は両手をあげ、おどけた調子で答える。

「あら、所長。結婚しちゃったら『ミス』じゃなくって『ミセス』になっっちゃうじゃない？ 語呂が悪いわー」

こつこつとヒールの音を響かせながら、女は所長の隣まで歩いてきた。

どこにも染みは見当たらない綺麗な白衣、真っ直ぐに切り揃えられた前髪、髪型はルーズに纏められたお団子。

眼鏡のフレームを持ち上げなら、女は笑う。

所長はいつものように、恭しく相手に頭を下げ、にっこりと挨拶をした。

「我が裏町幹旋所へようこそいらっしやいました、ミステリアス・マッド……いえ、木之下真理子」

「言い直さなくても、ミス・マッドで良かったのにー。真理子って呼んでもいいのはヒナタだけなわけー」

「これはこれは失礼いたしました、ミスマッド。私の記憶違いでなければ、確か貴女は不参加、代理のヒナタ・サルビアがこちらへ来ていると聞きましたが？」

その通りである。マッドに送ったはずの招待状を持って、コヒナタはこのゲームに参加している。

マッドは両手を胸下で組み、事情を説明する。

「うーん。そのつもりだったんだけどねー……知り合いにここまでの道案内を頼まれちゃったわけー。どうしても所長さんに会いたいらしくってー」

「ほお……それはそれは物好きな方がいらっしやったものですね」

「それ、自分で言うわけー？」

「人に言われるよりは良いでしょうか？ して、その変わり者さんは

何故私に会いたがっているのでしょうか？ 妥当な線でいきますと、  
幹旋所登録でしょうか」

人差し指を唇に当て、マッドは楽しそうに笑い声を漏らす。

「んふふ、ある意味正解、ってところかしら。今から連れてくるから、  
ちよつとここで待っててくんない？ 玄関ホールで待たせてあるの」  
所長を捜すために、その人物を置いてきたらしい。

ヒールの音をまた響かせながら、マッドは鼻歌交じりに廊下へと  
出ていく。その背中を見送りながら、所長は眉を下げて笑った。

「また、裏町に迷い子が一人……ですか」

彼をよく知っている人でなければわからないくらい、少しだけ悲  
しみを含んだ笑みだった。

\*\*\*\*\*

夜は、あまり好きではなかった。

本拠地の近くにある大きな樹に上り、透き通った冬の夜空を見上  
げて、アルルは思い直す。こんなに綺麗な星を見ても何の感動も無  
いのだから、たぶん夜は嫌いの部類に入っている。

姉が家を出ていったあの時も、確か夜だった。二階の子供部屋の  
窓から、呼び止めることも出来ず、カーテンの影に隠れるようにし  
てそれを見ていた。声も息も殺して、ただ呆然とその後ろ姿を見送  
ったことだけ覚えている。泣いてはいなかった。

「……寒いー……」

吐きだした息は、自分達のチームカラー。

アルルは枝の上で何度も両手を擦って温める。外気が冷たすぎて、掌が刺すように痛かった。

身体を動かせば温まるかと考えて、両脚をぶらぶらさせる。だがここは安定しない枝の上。すぐに落ちそうになったので、身体を動かすのはやめた。

することもなくなったので、もう一度夜空を見上げる。だが、ここにあったのは星空では無く、代わりに想い人の満面の笑み。

「ボナセーラ！」

「……グ、グーテンターク」

挨拶から始まる異文化交流。出身国でもなく、話し掛けられた国の言葉でもなく、全く違う国の言葉で返答してしまった。条件反射に近かった。

ダッフルコートにチェック柄のマフラー。樹を登るために外さなければならなかったのだろう。手袋がコートのポケットから顔を出している。アルルとは違って、ちゃんと寒さ対策を施したカノンがそこに居た。

突然ひよいと現れた彼女にアルルは何も言えず、ただ戸惑ってしまっ。

「なー。隣良い？」

「えー!？」

よく見れば、どうやらカノンも同じ枝にいるらしく、両手でなんとかバランスを取って枝の上に立っている。状況をやっと理解出来たアルルは慌ててカノンが枝に座りやすいように横へとずれる。

「早く寝ろよ、アルル。寝ないと明日が辛いぞ……って、もう日付変わってたっけか」

「寝ないというより、寝られないっていつのかなー」

「あー……怖い夢でも見たか？」

眠れないのを怖い夢を見た所為だと思われている。

がくつと肩を落としてアルルは首を振る。

「カノンちゃん、これでも俺十七歳だよ」

「うん、冗談冗談。どうかしたのか？」

どうしたのかと問われて、改めてアルルは考える。

どうして眠れないのだろうか。眠れない理由は全く分からない。

色々と考え込んでいる所為かもしれない。

「なんでだろ？」

「あははっ、理由は無いんだ？ おれもよくあるよ、理由もなく眠れない時」

細められた蒼い眼。カノンの横顔が、星空を見上げる。それにつられて、アルルも同じように見上げた。

数多の星が輝いている。少し右に視線を移せば、少し太めの三日月も見える。夜なのに、明るいと錯覚させるほどの星の数。

さつきから何度も見上げているが、素直に綺麗だと思えたのはこれが初めてだった。

「あ。アルル、あれってオリオン座？ 師匠が教えてくれたんだけど、オリオン座の近くにおれの星座があるんだって」

カノンが上を指差して嬉しそうに聞いてくる。どの星のことを言っているのかいまいち分からないが、そもそもアルルには星の知識はあまりなかったものでどちらにせよ同じことだった。

「うーん、どうだろ……俺、個人情報には長けてても、星には詳しくないからなあ」

「そっか。情報屋って言っても色々あるもんな。そういえば、現態観測って言う奴も個人情報に強いつてフィンが言ってたな」

「うん？ や、だって俺が現態観測だしね」

「……そうなの？」

「そうなの」

どうやら知らなかったらしい。

隣で「嘘だー!？」と明らかに信じていないカノンの声が聞こえて、アルルにはそれが可笑しくて仕方なかった。笑いが込み上げて

くる。まさか自分と現態観測がイコールで結びついていないとは。

「そうか……そうだったんだ……アルルって実は凄いのな！」

「そうだったんだよー。何？ 見直した？」

「すっげー見直した！ じゃああの時情報をくれたのもアルルだったんだな！」

あの時 アリス・ブライティンによってシオンが誘拐された時のことをカノンは思い出していた。確か現態観測は怪我を負わされたと聞いていたが、見たところもう治っているようだ。

「怪我してたのに、協力してくれたんだ？」

「カノンちゃんが困ってるのに、協力しないわけにはいかないからね」

何度も「すごい」を連発するカノンに苦笑して、視線を再度上へと移す。どれが彼女の言っていたオリオン座なのだろうか。帰った星の勉強をしようと心に決め、アルルはそのままカノンの方を見ずに真剣な声で言った。

「俺、カノンちゃんが好きなんだ」

言葉と一緒に、白い息も吐き出された。

カノンが一体どんな顔をしているかは、容易に想像が付く。いつも、同じ表情で同じ答えを返してくるから。

「うん。おれもアルルのこと好きだよ」

予想通りの答えに、アルルはただただ苦笑いをした。この後の台詞も、もうお馴染みだ。

「そういう『好き』じゃないんだ」

「うん、知ってる」

「だよ。何回目だっけ、このやり取り」

「十二回目かな」

「じゃあ俺、十二回カノンちゃんにふられちゃったのかー。懲りないな、俺」

「ドンマイ」

まるで他人事のように返されるこの答えも、十二回目。カノンは声をあげて笑っていた。

何度も好きだと伝えて、何度も断られた。それでも、こうしてカノンは笑いかけてくれる。それがアルルには嬉しかった。

やっとカノンへと首だけ向き直る。

「俺じゃ、駄目かな」

カノンは何も言わない。

言わないから、アルルは言葉を続ける。

「俺、約束するよ。絶対にカノンちゃんを幸せにするって。絶対に、カノンちゃんを独りにしないって」

カノンはまだ何も言わない。

項垂れた首の所為で、表情は分からない。ただ、静かに首を左右に振った。それは拒否の合図。

アルルが次の言葉を言う前に、カノンが小さな声で言った。近くに居なければ聞き取るとは難しいくらい、か細い声だった。

「ごめん……おれ、『約束』って嫌いなんだ」

「え……？」

「守られることより、破られることのほうが多かったから」

苦笑、したつもりだったのだろうか。それはもう笑っているとは言いがたい表情だった。

「『帰ってくる』って約束を、三回も破られたんだ」

血の繋がった家族に。孤独を分かち合った家族に。温もりを教え てくれた家族に。

誰一人として、その約束を守ってくれはしなかった。

カノンは顔を上げて、もう一度首を振る。

「約束なんて、しないほうがいい」

確固たる意思を持って告げられた言葉は、アルルには到底受け止めきれなかった。頷くことも、否定することも出来ない。何故かと、尋ねることしか出来ない。



「どうして？」

「一生消えない傷を作ることになるからだよ」

彼女自身が身を持って知った、約束という名前の傷。

アルルに返すべき言葉は見付からなかった。たぶん、答えを期待されているわけでもない。

「カノンちゃん、俺……」

「というわけで！ 今日の六時半、就寝前に言った通り『三つ巴鬼・追い上げ大作戦』決行だからな！ 遅れるなよ！」

アルルがやつと声を出すと、カノンは来たときと同様、突然立ち上がって樹を下り始めた。

「えーと……カノンちゃん？」

「わりー。もう寒気が限界で……ついでに眠気も限界！」

さっきまでのシリアスな雰囲気はどこにいったのか。

ずずつ、と鼻をすすってカノンがゆっくりと地面に降り立つ。鼻先と耳先が真っ赤だった。防寒してるとはいえ、やはり冬の寒さには勝てなかったらしい。アルルも思い出したように寒さを感じて身を震わせた。

カノンも本気で寒さが限界を突破したらしい。両手で身体を抱え込むようにして、その場で足踏みをしながら大きな声を出した。

「アルルはどうするー？ もう寝るかー？」

「いやー、俺はもうちょつとここに居るよー！」

「そっかー」

返事をした直後、女らしさの欠片も無いくらい盛大なくしゃみをかまして、カノンは右手を大きく振った。

「じゃあなー。早く寝ろよー……つと、これお土産！」

コートのポケットから取り出した何かを、アルルに向かって大きく投げる。

見事に上まで投げられたそれへと腕を伸ばし、

「うわつと、とと、と！？」

バランスを崩しそうになりながらも、しっかりと受け止めた。

元の位置へと座り直して見ると、それはポケットの中でしっかりと温まった手袋だった。

「カノンちゃん、ありがと！」

無言であげられた手を見て、アルルは頬が緩むのを抑えられなかった。

自然と微笑む表情をそのままに、彼女に聞こえないようにそっと呟く。

「好きだよ」

紛れもない気持ち。

誰にも伝わることなく、真っ白な息と共に冬の空の中へ消えた。

122・裏町ラブソディ #16「深夜二時ですよ、全員就寝！」（後書き）

その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、君を好きであることを誓います。

朝方から降り始めた雪は誰にも気付かれることなく静かに降り積もり、もうすぐ六時になるといふ頃に起き出したレオラが外へ出たときには、辺りはすっかり銀世界になっていた。

まだ誰もこの雪を知らないらしい。白い地面には、一つも足跡が残っていないかった。

その光景に多少驚いたレオラは、一人真つ白な中で声に出していった。

「寒いと思ったら……積もってやがったのか」

生憎、雪が積もったからと言ってはしゃげるほど子供でもなければ、雪が珍しい地方に生まれたわけでもない。

師範代と暮らしていた頃は、こんなものは序の口。吹雪で家から出られないときだつてあった。

白い息を大きく吐き出しながら、両手を擦り合わせる。今日は本当に冷える日だ。

眠気覚ましにコーヒーでも飲もうかと本拠地へ戻ろうとした瞬間、何かの気配を感じたレオラは慌ててその方向へと向き直った。

「……アサヒ？」

「あれ、レオラさん？ おはようございますー。もうお目覚めですか？」

朝飛が爽やかな笑顔で立っていた。とても爽やかだ。とてもいつも通りだ。

あの黒髪の弟と似通った表情で、朝飛は小走りでこちらに駆け寄ってきた。

「お早いですねー。確かチームの集合時間は七時でしたよね？」

「おう七時だけど……っていうかお前、何してんの？ ていうか何処行つてたの？ ていうか、それ何？」

一度に質問されて、何から答えようかと迷う朝飛の右手には大き

なスコップ。

その柄は彼の腰まである長さだ。何か掘っていたのか、先の方は泥で汚れていた。少年の夢が詰まった宝箱を埋めたわけではあるまい。

「何か埋めてたのか？」

おそろおそろ聞いたレオラに

「死体を埋めてたんです」

黒い笑みを浮かべる朝飛。

「誰かー！ 誰かこの子止めてー！」

「冗談ですよ、もー」

朝飛が言つと冗談に聞こえないのは何故だろうか。

いや、そんな下らないことよりももっと気になるのは、一体何時から今まで朝飛は何をしていたのかということだ。

雪が降り積もった地面に足跡はなかった。一つも、だ。

つまり、降り積もる前から何処かへ行っていたということ。この積もり具合からして、夜中あたりから降り出したのだろうが、まさか本当に死体を埋めに行っていたわけでもあるまい。

レオラにされた質問の数々に対して、要点のまとめ終わった朝飛がスコップを地面に深々と突き立てながら、さらに笑顔を深めてレオラに説明をする。

「実はですね、昨日の夜から罫を仕掛けてたんです。こういうゲームで勝つには下準備が必要ですからね」

「夜から！？ お前、寝てないの！？」

「はい。一睡もしてません」

とてもそんな風には見えない。睡眠不足の人間はこんなに元気だっただろうか。疲れた様子など毛ほども見せない辺り、忍の長、桐生家を継ぐ者たる由縁だろうか。

「眠らないことには慣れてますから」

「それなら良いけどよ」

頬を刺すような風が吹き抜ける。レオラは身体を二三度震わせて、

朝飛を見る。

朝飛が見に纏っているものはお世辞にも防寒出来ているとは言い難いもので、恐らく和国での稽古着なのだろうと思われるものの上から、薄い上着を申し訳程度に羽織っている程度だ。

「ここじゃ寒いし、そろそろ中に入ろうぜ。オレも丁度コーヒー飲もうと思ってたし」

「はい。じゃあ僕、パレットさんにスコップをお借りしてたんで、先に返してきますね」

そこでレオラはスコップの存在を思い出す。よいしょ、と地面から抜き取る朝飛の手には、まるで墓を掘り返す時に使いそうな、大きなスコップ。

夜から出掛けていた朝飛が仕掛けてきたという罠。スコップと罠、スコップで作る、罠。

実に嫌すぎるが、しつくりくる答えが一つ。

「お前さあ……もしかして、もしかすると……そのスコップで仕掛けた罠って、」

「予想通りの展開でもものすごく申し訳ないんですけど、落とし穴いっぱい作っちゃいました」

「その笑顔やめて！」

「えー。でも竹槍は仕込んでませんよ？」

「なんで残念そうなの!？」

どうやら作ってしまったらしかった。

頭を抱えるレオラの横で、朝飛が折り畳んでいた地図を取り出す。あちこちに付けられた赤い×印が、彼の落とし穴達の居場所だろうか。

相当な数の×印が付けられていた。夜中から掘っていたのだとしたら、いまはこの白い雪達が綺麗に掘り返した違和感も覆い隠してくれるだろう。天は水色組に味方している。

その地図を覗き込む人間が、一人。

「あら。なかなかやりますわね」

レオラの背へと何かを詰め込んで。

「うひゃああああああ！ つめてっ！ なんだこれ冷てえ！」

何の前触れも無く現れた朝葉香によつて背中に雪玉を投入されてしまったレオラは、必死の形相で異物を取り出そうと藻掻いていた。だが、動けば動くほどそれは溶けていくばかりで、さらなる冷気がレオラを襲った。

朝飛は朝葉香の突然の登場にさして驚いた様子を見せることなく、地図を自慢げに彼女へと広げた。

「結構頑張りました」

「これなら水色組優勝も夢じゃありませんわ。ついでに閻鬼の口惜しがる顔も見れば最高ですのに」

「あ、それ良いですね」

がしつと組み合う手と手。何か通じ合ったようだ。

そんな意気投合をする二人の後ろで、雪玉の半分を取り除くことに成功したレオラが叫んだ。もう半分は、すでに溶けて衣服に染みこんでいた。不憫な奴である。

「おいお前らオレのことは無視か！ スルーか！ 流すのか！」

「あ、そうそう。『流す』で思い出しました」

ぽんと叩かれた両手に注目して、朝葉香が首を傾げる。

「『流す』が、どうかしましたの？」

「ちよつと作戦をたててみたんです。そのことで、ハルナさんにお願いしなきゃいけないことがあつたんですよね」

「お願い？ どんنادよ」

「流してもらうんです」

ぽかんと口を開ける二人に、朝飛は自信満々にいった。

「情報を流す？　なんでわざわざそんなことする力？」

同時刻。

白組本部ではメイが理解しがたい顔をして、アルルの背へ向かって説明を求めた。椅子の上で胡座をかいていたアルルはそのままの体勢で、くるりと器用に百八十度回転し、メイに向き直る。

「流すのはただの情報じゃないさ。『曖昧な情報』だけを流す」

「つまりはあ、嘘情報だねえ。いっぱい流せば流すほど、一体どれが本当のことなのか分からなくなるんだよお」

隣で地図に何かを書き込んでいたコヒナタが視線を合わせぬまま話す。

雪が積もった所為で、建物の中に居ても寒い。プレハブと変わらない簡素な建物だから、仕方ないといえば仕方ないのだが。手が冷える所為で上手く書き込むことが出来ないコヒナタは、何度か両手に息を吹きかけて温めていた。

未だに理解しきれていないメイを見て、アルルが追加するように話をする。

「フィンは昔から『曖昧な情報は売らない』ことをモットーにしてるんだ。恐らくこのゲームでも然り。桃組の情報係であるフィンは、大量に流された『曖昧な情報』をチームに渡したりはしないだろ？」

「つまり、桃組は身動きが出来なくなるわけネ？」

「そーゆーこと」

また、くるりと器用に回転して元の位置に戻る。コヒナタと一緒に地図の最終チェックをしているようだ。

ところどころにちりばめられた×印の位置には、朝飛が今朝まで



掘っていた落とし穴の位置と被っている場所もあった。

二人から除け者にされてしまったメイが時計を見れば、もう六時半が迫ってきている。ゲームの再開まで数分しかない。

「でもネ、一体どんな情報を流すヨ？」

「決まってるだろ」

いつの間に来ていたのか、カノンがマフラーを巻いた姿でメイの後ろに立っていた。両手を腰に当て、自信満々に答える。

「『白組の人間が居るかもしれない』場所の情報だよ」

\*\*\*\*\*

「『白組の人間がいる嘘の居場所』の情報を流していただけませんか？」

渡された地図と、作戦を書かれた紙と、朝飛の顔を交互に見てハルナが感嘆の声を漏らした。

「へえー、考えたわね。この落とし穴密集地に『白組の人間が居る』っていう情報を流して、それに釣られてやってきた桃組達を罠にはめる……ね」

ぺらぺらと地図で遊びながら、ハルナがにたりと笑う。

「了解したわ。そうね、動き始めてすぐに情報が流れるのは変だから、七時からいいかしら？」

「はい。お願いします」

丁寧に頭を下げる朝飛の隣で、レオラが不満そうに声を漏らす。

「作戦なんかいらねーって自分で言ってたくせに……」

作戦を立てるかと問われたとき、真つ先にいらないと返答した朝飛を思い出して、レオラはさらに唇をとがらす。

「何か仰いました、レオラさん？」

「いえそんな滅相もない」

そんな二人を余所目に、ハルナが腕時計を確認する。時刻は六時半丁度。休戦が解かれる時間になっていた。

「ゲーム、再開ね」

うんざりした声で放たれた台詞は、決して彼女一人の思いではないはず。

123 裏町ラプソディ #17「アイ・マイ・ミー」 (後書き)

タイムリミットまで、あと五時間半。

「いいかー、お前等。今配った地図をよーく見るよー！」

机の上で仁王立ちになったカノンが、くるくると巻いた地図をメガホン代わりにして白組のチームメイト全員に向けて声を張り上げる。

アルルとコヒナタによって作成された地図には、数箇所×印が付けられていた。

「この×印が付いてある場所には、既に『白組の人間が居る』という情報を流してある。曖昧な情報がわんさかある中で、フィンの居る桃組が大きな動きをすることは考えにくい！」

桃組が動かなければ、白組は何者にも邪魔されることなく水色組のハチマキを奪えるというわけだ。

そのうえ、追いかけられる立場である水色組が、好んでこの×印のある場所へ移動するとは考えにくい。

作戦の概要を大きな声でカノンが説明する傍らで、コヒナタとメイは積もった雪を掻き集めて雪玉を何個も作っていた。いかにして真ん丸な雪玉を作るかお互いに勝負しているらしい。

大きさではメイの勝ちだが、丁寧さではコヒナタの勝ちだった。

そしてその横では、銀世界に同調してしまいそうなくらい真っ白なテーブル上に置かれたティーカップを手に取り、同じく真っ白な椅子に座った所長がいつになく優しい微笑みで二人を見守っていた。孫を見守る祖父のようだった。

「というわけで、各自×印のついた場所へは避けて行動するよーに！ おれからは以上！ 所長、何か言いたいこととかありますか？」

よっ、と飛び降りながら、紅茶を啜る所長へと声を掛ける。

「そうですね……私を楽しませてくれたら、勝ち負けなんてどうでもいいですよ」

「はいはいはい！ 今の所長の言葉は忘れて！ 絶対勝ちに行くぞ

「！」

「おー！ と片腕を空へ突き出しながら、闘争心剥き出しのカノンが生き生きと言い放った。

「お、おー！」

つられて白組全員が片腕を突き出しながら叫んだ。

\*\*\*\*\*

「いいですかー、みなさーん。今配った地図をよーく見てくださーいねー」

レオラに肩車された状態で、朝飛が両手をメガホン代わりにして水色組のチームメイト全員に向けて話しかける。

配られた地図には、朝飛の掘った落とし穴に×印が付いていた。

「その×印は僕が心を込めて掘った落とし穴があることを指しています」

その言葉に、担いでいたレオラがさかさず反応する。

「心を込めた落とし穴ってどんなだよ……って、あれ？ なんでオレ、朝飛と組み体操してんだ？ あれ？」

「適材適所というやつですわ」

「なあそれって誉めてる？ それとも貶してる？」

すぐ隣で赤い敷物の上に正座し、優雅に茶をすする朝葉香からシカトをされ続けるレオラを放って、上に乗った朝飛は説明を続ける。

「さらに、その×印のある場所には『白組の人間が居る』という嘘情報をハルナさんに流してもらいました。白組のいるところに桃組有り。つまり、鴨がネギをしょった状態で落とし穴に落ちてくれるというわけです」

にこりと笑った顔は、何故だかどす黒い雰囲気を纏っていた。

「というわけで、何個かの小隊には×印のついた場所へと配置に付けてもらいます。僕からは以上です。パレットさん、何か皆さんに言っておきたいことかありますか？」

空気を読み過ぎて、いつの間にか空気と一体化していたパレットがやつと口を開いた。

いつものように声を張り上げることはなく、痛そうに胃を抑えながら話す。

「皆さん。今日は雪も積もり、非常に冷え込みます。勝ち負けよりも、どうか無理をせずに、」

台詞の途中で、パンツと手を叩く音が入る。

「はい！ パレットさんはああいう風に言ってますが、本心はきつと『勝ちに行こうぜ野郎共』

！』ですよ。皆さん、頑張つて優勝しましょうね！」

レオラの上で闘志と燃やす朝飛。思ってもいないことを言われ、パレットはさらに胃痛が激しくなったのか、両手でお腹を押さえていた。

水色組には闘争心の強い者が多いらしく、話を聞いていた何人が腕と声を上げて優勝することを誓った。

だが、朝飛は不満そうな表情で下を見る。

「……声が小さいですね」

「お、お前等ー！ お願いだからもっと声張り上げてー！ 一生のお願いだからー！」

ぼそつと呟かれた言葉に、慌ててレオラが叫ぶ。こんなところで一生のお願いを使い果たしているのかどうか判断しかねるが。

叫ぶレオラの上に展開される不穏な空気を読んだのか、瞬間、雄

叫びに近い声がものすごい音量で響いた。

朝飛が満足そうに微笑んでいた。朝葉香の湯飲みからは相変わらず湯気が立っていた。

「…………裏町業って…………裏町業って…………！」

パレットが、悲しそうな声で呟っていた。

\*\*\*\*\*

「…………は？」

間の抜けた声を出して、クウヤは白い息を吐いた。こんな大事な日に限って冷え込むのだから、つくづくついていない。

そんな彼の目の前で、凜とした表情を崩さずにアンジュがもう一度同じことを言った。

「ええ。クロスフィンガー君が、情報は一切合切誰にも渡したくない、と申しております」

「申してる場合じゃ無いだろ…………あーもうっ！」

呆れた表情を隠せないまま、クウヤはフィンの居る小さな小屋の方へと走り出した。が、その腕をアンジュはしっかりと掴む。勢い余ってつんのめりそうになったクウヤだが、なんとか持ちこたえて地面との顔面衝突を免れた。

「秘書さん？」

振り向き様にアンジュへと問いかける。

「失礼いたします。これを」

「はい？」

「クロスフィンガー君から、貴方に渡すように言付かっております」  
手渡されたメモのようなものと、真面目な顔をしているアンジユを交互に見比べて、おずおずとメモの内容を確認する。

そして、数秒の沈黙。

震える肩にひくつく米神、これ以上無いほど精一杯に息を吸い込んで

「『真実を探す旅に出る』って、あんの……馬鹿フイーーン！」

未だかつて無いほどの大声でクウヤが叫んだ。

その声に驚いて、本部に残っていた桃組メンバー全員がその場に駆け付けた時、そこには世にも恐ろしい闇鬼と両耳を丁寧に押さえたとアンジユが隣で立っていた。

「おや、皆様。なんだか勢揃いですね。どうかいたしましたか？」

「どうしたも何も、秘書さんっ！今の叫び声はなんだよっ？俺もマリナびっくりして……ひっ！」

ゆらりと立ち上がるクウヤを目にして、鉄太が一步後ずさり、傍にいた真理奈の腕にしがみついた。

積もっていた雪の上に膝を付いていた為、膝の辺りの布地は水が染みこんでいる。それすらも気にせず、クウヤはその場に居たメンバー全員に微笑を向けた。

「皆さん、何をぼさつと立ってるんですか？ゲーム終了まであと五時間を切ってるんですよ？生き残ってる人はさっさと白組のハチマキを奪ってきてください。一時間に一本だとか、ペナルティだとか、もうどうでもいいです。とにかく敵のハチマキを奪うことに専念して下さい。ハチマキの残っていない人は、急いでフィンを探してください」

その氷の微笑に震え上がる鉄太を隣に、真理奈が勇気を振り絞ってクウヤへ疑問をぶつける。

「探すって……情報屋さん、どこかに消えちゃった……っていうこ



となんだよ?」

「そういうことです。とにかく、あの馬鹿が居ないと作戦も何もたてられません。ああもうなんでこう上手くいかないんだ……僕も探さなきゃ……あのコゲスミめ……」

口調が乱れてきたクウヤにかわって、アイマスク代わりにしていた八チマキを取り外しながらハクトが右腕を突き上げる。

「じゃ……みんな。頑張つて……桃組、優勝しよー……」

「お、おー……?」

チームの士気を高めて、ハクトは大きな欠伸を零す。

「それじゃあ……俺、二度寝するね……」

「いや、お前も頑張れよ……?」

鉄太がおそろおそろつつこんだ。

「……なんだか寒気が」

『雪が積もりましたからね。フィン、足下に気を付けて下さいね』

125・裏町ラブソディ #19「人を呪わば穴四つ」

午前八時を三十分と少し過ぎた頃。

真つ白な銀世界となった森の中に、一際目立つ黒色の少年が積もった雪に足を取られながら歩いている。ふらふらと頼りない足取りで、一歩ずつゆっくりと前進していた。そしてその後ろを、黒い鳥が心配そうな声で話しかけていた。

『フィン……フィン？ フィーン！ 聞こえてますー？』

応答を願うサスケの声を無視して、フィンはぶつぶつと呟きながら歩みを進めていた。

「世界の全てが僕の敵……僕の敵……昨日の敵は今日も敵……」

『ものすごい勢いでネガティブモードですね』

進み続けるフィンの肩にちょこんと乗り、羽を休めてサスケが主人を見上げる。いつもと変わらない無表情だが、寒い所為だろうか。心なしか、唇の色が青い気がする。

元々不健康な主人だから、こんな寒い日に外へ出るのは命取りだったかもしれない。

『だ、大丈夫ですか？ フィン……もう無理はやめて、一旦本部へ帰りませんか？』

「いやだ。確かな情報も無しにあそこへ帰るつもりはないよ」

『ですが……一体何処へ向かってるんです？ あてもなく歩いていったって』

「あてならある」

一度歩みを止め、コートのポケットからこの島の地図を取り出す。そこには所彼処に×印が付けられていた。丁度、白色組と水色組の地図を重ね合わせたような地図になっている。それだけで、彼とサスケの情報収集能力の高さが伺えた。

その中で、最も多くの×印が集中している箇所に指を止め、「ここ」とフィンが言った。

『なんだか……異様な程に印が付けられていますか』

「そうなんだよ。この×印は『白組の人間が居るであろうと思われる場所』に付けてるんだけど、ここ周辺だけは『白組の人間が居る』という情報と『居るかもしれない』という二種類の情報が入ってたんだ」

『……厄介ですね。一体どちらが本当のことなのか』

「それとも、この情報自体がガセにすぎないのか、ね」

地図に向けられていた指をそのまま上へとあげ、めいっばい前へと伸ばす。

そこは、木々がちょうど少なくなり、自然と出来上がった広場のよくな場所になっていた。

「ここだ。よし、サスケ。早速確かめに行こう」

さくさくと雪を踏みしめながら歩くことを再開させたフィンに、サスケが改めて問う。

『確かめるって、何を確かめるんですか？』

「この流れすぎた情報が、一体どっちのチームから来てるものなのかだけでも知りたいんだ。そしてこの中に真実が混じっているのかどうか……それだけでも分かれば、僕達桃組がどう動くべきなのかも分かってくるはず……」

ずぐりと最後に踏み切った左脚が、何故だか思った以上に地中へとめり込む。

少しずつ浸食されていく足場を見て、フィンが首を傾げる。

「ずつ………?」

そして一瞬の浮遊感の後、フィンの被っていたフードがずり落ちるほどのスピードで、その身体は地中へと落下した。

「うあああっ!?!?」

ずしりとも、どしりとも言えない着地音がして、咄嗟に翼を広げて落下を免れたサスケがやっと主人の名前を呼んだ。

『フィ、フィンー!?!?』

白い広場にぱっくりと広がる黒い落とし穴。

まさかこんな場所に落とし穴だなんて古典的な罠が張られているとは思ってもみなかったサスケとフィン、ただただ口を馬鹿みたくに開けるしかなかった。

その黒点の上で為す術もなく跳び続けるサスケの傍へ、高笑いをしながらハルナが近寄る。

「あーっはっはっは！ まんまと引っかけたわね、全体観測！ おーかしいっいたら無いわ！」

大人げなく心底楽しそうに笑う彼女は、自分のコートが濡れるのも構わずに落とし穴の中を覗き込んだ。

「どーう？ 人から見下される気分は？」

「……実に不愉快だ」

落ちたそのままの状態、ようやく状況が掴めてきたフィンが痛そうに頭を抑えながら呟いた。

一緒に落下した雪がクツションになったおかげで、大した怪我は無さそうだった。

「ふっふふー！ しばらくは貴方を餌に、桃組を釣らせてもらうわよ。この広場に全体観測が居るといふ新しい情報を流したら、桃組も白組もこぞってここへ駆け付けてくるでしょうね！」

「なるほど」

フードをかぶりなおして、フィンがハルナを見上げながら納得の表情を浮かべる。

「『白組の人間が居る』と『居るかもしれない』という二つの情報を流し、ボク達桃組を混乱させて正常な判断を出来ないようにさせたって訳だね。でもキミ達の作戦は失敗だ。どうせなら『白組の人間が居る』という一っだけの情報を流せば、もっとたくさんの桃組を狩れただろうにね」

「……二種類の情報？ 私は『白組の人間が居る』っていうことしか流して無くてよ？」

落とし穴の底と、一番上とで二人揃って首を傾げる。サスケもぱ

たばたと所在なさげに旋回していた。

「まっ、何はともあれ」

すっつと背筋を伸ばして立ちあがり、百八十度回転してフィンの落とし穴を後にする。

「私の仕事はここ周辺の落とし穴に引つかかった人間を監視すること。貴方ばかりを相手にしてる暇なんて」

ハルナの踏み出した一歩が、思っていた以上に地面へのめり込む。「……んん？」

雪が積もっている所為だろうか、いや、それにしても深すぎる。というか、自分の踏んでいる箇所だけ、妙に泥混じりの雪になっている。

そんな疑問を浮かべて間もなく襲ってきた浮遊感。ひくつく頼に冷や汗を浮かべてハルナは声を出す。

「ちよ、ちよつと待ってよこれって、ねえ？」

嫌な予感的中してしまったハルナは、落下することを理解したと同時にスカートを手で押さえた。

「やあああっ!?!」

小さくなつていく悲鳴、そして強烈な着地音。

「ハ、ハルナ殿ー!?!」

「ああ……サスケ、なんだか既視感がするんだけど……まるでさっきのボクがそこに居るようだ」

『フィン！ ハルナ殿が落とし穴に落ちてしまわれました!』

「自分のチームの作った罠にはまるなんて、馬鹿だな……」

呆れた声が穴の中にまで聞こえたのか、カ一杯否定する声が聞こえてきた。

穴に落ちたのだから多少は心配していたが、どうやら元気らしい。いらぬ心配だった。

「ちよつと待って！ 私が朝飛くんからもらった地図には、こんなところに落とし穴なんて無いわよー!?!」

穴の中で地図を開けてみるが、フィンの落ちた穴の近くに、朝飛

は落とし穴を作っていないはずだ。×印はもつと離れた場所に描かれている。

訳が分からなくなった二人と一羽の遙か頭上から、聞いたことのある笑い声が聞こえてきた。

「ふっ……あははっ、ははははははははっ！ ハルナってばまんまと引つかかってやんの！」

「アルルさーん。あんまり笑っちゃ可哀想だよお？」

「コヒナタ、お前だって笑ってるじゃんか」

「ぼくはいつでも笑顔なのお！」

白組のアルルとコヒナタが、白く染まった木の上に立っていた。

その声を聞いてハルナが穴の中で立ち上がり、張り裂けんばかりの声で叫んだ。

「現態観測ー！ この落とし穴、貴方の仕業ねー！？」

「ご名答。水色組だけが罠を張ってると思ったら大間違いだぜ？」

腐っても俺だって情報屋。自分が意図的に流した情報以外に奇妙な情報が混じってたから、念のためにここに罠を張っておいたけど……

…大成功だったな」

「だねえ。でも、落とし穴を作ったのはぼくだよお？」

頬を膨らませて拗ねたフリをするのは、年相応な少年の姿だった。

「ご苦労さん」とコヒナタの頭を撫でて、アルルはフィンが落ちている方の穴を見た。

「ま、フィンまで穴に落ちてるのは予想外だったけどな」

「五月蠅いよ」

こちらも明らかに不機嫌だ。しかし、彼が落ちている穴は、白組の作った罠ではないのだから、八つ当たりは遠慮願いたいところというもの。

もう一人の方は、何とも言えないが。

「現態観測……今すぐ降りて来なさいっ！ 私を虚仮にしたその罪、万事に値するわ！」

「やーなこった。誰がそんな落とし穴だらけの危険地帯に降りるんだよ。俺はコヒナタと違って、どこに落とし穴が作られてるか分かんねーってのに」

隣で楽しそうにハルナ達を見るコヒナタを顎で示して、アルルは舌を出した。

実際ハルナを陥れたあの落とし穴をコヒナタに作ってもらったのは、そういう理由からだった。

アルルには全く分からないが、地面の感じが少し違うらしい。コヒナタがこの場所の異変に気付いていなかったら、今頃自分達は二人そろって穴の中だったろう。

やれやれ、とずり落ちていた眼鏡をかけ直す為に片手を離す。すると、まるでそのタイミングを待っていたかのように黒い塊がアルル目掛けて飛び込んできた。

「いけ、サスケ！ 捨て身アタック！」

『申し訳ありません、アルル！』

ぐらりとバランスを崩した瞬間、自分の弟子とその飼ひ鴉の聲がしつかりと聞こえた。コヒナタの酷く驚いた声も、微かに聞こえた。

「う、お……あ……まじでえええ！？」

ドン、と地面に落ちた瞬間、さらなる衝撃が彼を襲う。

固いはずの地面が、ずぐりと下に沈み込んでいく。

「ちょ……ダブルパンチかよおおおお！？」

『ご愁傷様です……』

サスケがコヒナタの居る木とは別の枝上に止まり、落ちていくアルルの姿を見た。

激しい衝撃音とアルルの叫び声がした後、一人木の上に残ってしまったコヒナタが、苦笑いをしながら非常に困ったような声で呟いた。

誰も彼の言葉を聞く人間が居ないため、自然と向かいの枝にとまるサスケに問いかけているようにも見えた。



「うーん……これって、助けるべきだよねえ？」

しょうがないなあ、と軽やかに木を飛び降りて、見事に着地を成功させる。

雪の上に残った自分の足跡を見て、周りの地面を確認する。

フィンにもハルナにもアルルにも分からなかった違和感を感じ取り、コヒナタは蛇行するようにしてアルルの落ちた穴の方へ近寄っていった。

「アルルさーん、だいじょーぶう？」

「雪のおかげで、なんとかな……っというか、ここまで無事に来られるお前がすげえよ。野生の勘つてやつ？」

「違和感とか、異変とかに敏感なんだよねえ。マッドさんのおかげかなあ」

アルルを引き上げる為に腕を伸ばしてみる。が、なかなか腕が届かない。思っているよりも穴は深いようだ。

「もう、ちよい………なんだけどな」

「うーん………ロープみたいなのがあればいいんだけどあ」

生憎、鳶のような植物はこら辺には存在していない。枝を伸ばしたところで、折れてしまうのがオチだ。

コヒナタがどうしたものかと考えていると、背後で人間の気配を感じた。アルル救出に夢中になっていて、注意力が散漫になってしまっていた。

慌てて後ろを振り向くと、桃色のハチマキを首からぶら下げた人間が立っていた。

「………なんでこんなに都合良く、桃組さんが来るのかなあ」

「うっそ、まじで！？俺のことはいいから、逃げろコヒナタ！これくらい自分でなんとかする！」

「わかったあ。頑張つて戻つて来てねえ、アルルさーん！」

走り去っていく足音に届くように、アルルが声を張りあげる。

「絶対に捕まんなよ！あと、カノンちゃんには内緒にしてくれよなー！？」

好きな子に、穴に落ちてしまったただなんて知られたら恥ずかしさで死ねるかもしれない。

アルルは何度も同じことを叫んだ。

『ハクト殿！』

コヒナタをアルル救出から手を引かせる原因になった人物の名前を呼んで、サスケはばさばさと翼と羽ばたかせながら地面へ降り立った。

「やあ……鳥さん」

『丁度良い所にいらっしやいました！ 実は今、フィンが落とし穴にはまってしまって困っているのです！』

「落とし穴……？」

ぼおつと突っ立った状態で、ハクトが首を捻って辺りを見回す。

その雪の絨毯の上に、不自然に開いた黒い穴三つを見付けて、ハクトは感嘆の声を発する。

「……落とし穴だ……誰が作ったの？」

『朝飛殿です』

「アサはすごいなあ……で、何の話だっけ？」

『フィンを助けて欲しいんです！』

こっちです、とフィンの落ちた穴の方へ飛んでいったサスケを追って、ハクトが歩き出した。

さくさくと雪を踏みしめて、二つ目の穴を通り過ぎる。穴の中からはハルナの悔しそうな声が聞こえてきた。

二つ目の穴からは「カノンちゃんにはれたらどうしよう」と念仏でも唱えるようなアルルの声が聞こえてきた。

そしてフィンの落ちてしまった三つ目の穴へと近寄ったとき、ハクトが声を発した。

「ん……？」

ハクトがやってってくるのを見ていたサスケが、震える声を出す。

『……ちよつと待って下さい、嫌な既視感が……！』

和国の先人達曰く、二度あることは三度あるものらしく。

ならば四度目はあるのかどうかと問えば、やはり似たようなことは何度も起きるものらしい。

「……………あれ？」

そこに居たはずのハクトが、一瞬にして地面へと吸い込まれた。

そして、この数十分だけで何度聞いたか分からない音が、広場に響いた。

『ハ、ハクト殿ー！？』

本日三度目の、サスケの音が反響した。

「落ちた」「落ちたな」「落ちたのね」

観測者達三人の、溜息混じりの言葉が間髪入れずに聞こえる。

「ボク達、どうなるのかな」

「……さあ……………」

青く広がる空を見ながら、穴へと落ちた三人は、ただ呆然と上を見上げていた。

125・裏町ラブソディ #19「人を呪わば穴四つ」(後書き)

「落ちるの……面白かった……かも」

『ハクト殿、ちゃっかり楽しまないでください』

\*\*\*\*\*

なんと本作品「遠enrai雷」のFFを書いていただけちゃいました！

坂本ヒロノリさん作「遠enrai雷 黒い明星の下で The  
underground star」です。

レオラを視点に置いた物語になっています。

126・裏町ラブソディ #20「彼女は優雅に笑う」

「……寒い……」

朝日はとつくに昇ったというのに、限りなく白に近い灰色をした厚い雲の所為で太陽の光は地上へと十分には伝わらない。

それどころか、粉雪まで舞いだしてきた森の中で、黒い髪をした少年が肩を震わせた。余りの寒さに、綺麗な碧色の目が細められる。「こんなことならマフラーしてくるんだった」

寒そうにコートの襟を立てて雪道を歩くクウヤが、恨めしそうに呟く。それもこれも全て行方不明になったフィンの所為である。

どこから探せば良いのか全く見当も付かないので、アンジュが最後に彼を見た時に机の上に置いてあったという情報紙を元に、今は白組の人間が居ると思われる場所へと歩いていた。

歩いていたのだが。

「……やばい、独り言が多くなってきた。末期だな、僕……いや、前から末期か？」

その言葉すら独り言になっているとも気付かず、クウヤはぶつぶつと呟いていた。

そう、クウヤはいまだにどの組の人間とも会っていない。白色も、水色も、ましてや桃色でさえも。それどころか、人間の気配すらしない。

やはりあの情報はデマだったのではないだろうか。

そしてフィンは、デマばかりの情報の中から本当の情報を掴むために、一つ一つ調べに行ったのではないだろうか。

そんな風に考え事をしながら歩いていた彼だったが、数歩歩くと自分の足下を警戒するように立ち止まった。

「……そろそろ、かな」

そう言いながらクウヤは、近くにあった手頃な石を何個か徐ろに掴み、自身の前方へとそれぞれ投げた。

石が地面に落ちると、その瞬間、明らかに石が落ちただけではない様々な音がする。投げられた石の内の何個かが、他の二組が仕掛けた罠の餌食になっていた。

一つは落とし穴、一つは雪の中から出現した網の中に。

白組か、それとも水色組か。どちらの組かは分からないが、それは明らかにこの三つ巴鬼用に作られた罠だった。

「それにしても」

その罠の残骸達を避けるようにして歩き出したクウヤが不思議そうな声を出す。

「こんな分かりやすい罠に引っかかる人間なんて居るのかな。居たらお笑いだね」

まさかこの先にある四つの落とし穴の内、自分のチームメイトの二人が落ちて居るとも知らずに彼は一人きりで笑って、

「……しまった、また独り言言っちゃったよ……」  
少し後悔をした。

\*\*\*\*\*

「雪、降ってきたなあ」

水色組の本部外で、空を見上げながら朝飛が誰に言うでもなく声に出した。吐く息は白い。今日は昨日よりも冷え込みそうだ。

ゲームの残り時間はあと二時間と半分しか無いというのに、他の組から特に大きな動きはなく、水色組も三本ほど八チマキを奪えただけ、らしい。

はつきりと言いつれ切れないのは、水色組に情報係が居ない所為である。

「ハルナさん、遅いなあ……」

雪がちらつく空を見上げて、朝飛が困ったように漏らした。

『誰かが落とし穴に落ちるのを見たい』と言って見張り役を買って出たハルナだったが、無論、情報係の彼女にずっと見張ってもらっているわけにもいかない。しかしどうしても見張り役をやりたいという彼女のわがままを聞くために、三十分毎に見張り番を交代する予定だった。

そして今の時刻、九時五十分。

予定していた交代の時間はとくに過ぎ、朝飛はまだ帰らないハルナを外ですつと待っていた。

「なあアサヒ」

「レオラさん、おかえりなさい。どうでした？」

「あー……一本だけ」

ハルナと同じく、落とし穴の見張りについていたレオラが桃色の八チマキを一本取り出して肩を竦めた。

もう少し奪えるものかと思っていたが、やはりそう都合良く事は運べないらしい。

「でも、これを奪った奴から情報を聞き出したぜ」

「本当ですか？ 助かります」

「えーっと……たしか桃組の奪取数が三十一本。そんでもって損失三十七本だつてよ」

「ということは、僕達の奪取数三十七本、損失分四十二本の情報を合わせると……白組は今四十二本奪って、三十一本しか損失分が無いということですね」

つまり、カノン達白組のチームがプラス十一本。

次いで朝飛達水色組がマイナス五本、最後にクウヤ達桃組がマイナス六本という成績になるわけだ。

右手を口元に持っていつて、朝飛が続けて言う。

「このゲームつて、最後に持っているハチマキの数で勝ち負けが決まるんでしたよね？」

「だな。つてことは、オレ達のチームはいま二位か」

「微妙ですねー」

苦笑いをする朝飛に、ほぼ同じ様な表情でレオラが相槌を打つ。

「だよなー……あ！ そうそう、アサヒに伝言。パレットがハルナの様子見てくるつてよ」

「あ、そうなんですか。じゃあ僕も争奪戦に参加した方が良さそうですね」

「おう。どうせなら一緒に行こうひゃああああああ！ つめてっ！ なんだこれ冷てえ！ でもなんか知ってるこの感覚！」

突如背中へと雪玉を詰め込まれたレオラが、その冷たさに取り乱しているすぐ横で、何処から現れたのか、気配を絶って近付いていた朝葉香がうつすらと微笑んでいた。

レオラが雪玉と格闘する姿を見て、かなり楽しんでいるようだった。

「こ、コウヨウツキ！ てめー、またオレに雪を」

「桐生朝飛。ちょっと聞きたいことがあるんですけど、よろしくって？」

「またスルーされた！ 流石のオレも傷付くぞ！？」

華麗にスルーをして、朝葉香が朝飛に問いかける。

話しかけられた彼の肩がびくついたのは、決して寒さからではないだろう。

「な、なんででしょう？ 朝葉香さん」

「このゲームのルールを再確認したいんですの」

満面の笑み、とまではいかないが、楽しそうに微笑んだ朝葉香を見て朝飛は胸を撫で下ろした。



どうやら機嫌は良い方らしい。昨日とは打ってかわって、刺々しい空気を纏っていない朝葉香とは話しやすかった。

「確かこのゲームは、『ハチマキを身につけていない者が敵のハチマキを奪うことは出来ない』んですわよね？」

「残念ながら、そのようです」

昨日の内に全部のハチマキを奪われてしまった朝葉香には、もう争奪戦に参加することは出来ない。

事実、大切な戦力を奪われた損失は大きかった。

「つまり、わたくしは敵のハチマキを奪うことは出来ないんですよね？」

気まずそうに頷く朝飛を見て、彼女は納得した表情を見せた。

「それさえ分かれば十分ですわ」

「はあ……じゃあ僕、レオラさんと一緒にハチマキ狩りに行ってきます。朝葉香さんの分も頑張ってくださいね」

「ええ。楽しみにしてますわ」

朝葉香は已然として楽しそうに笑っている。

このゲームが始まってから、こんなにも楽しそうに笑う彼女を見たことがあっただろうか。

不思議に思いつつも、まあいいかと自己完結させた朝飛は雪玉との死闘を繰り広げているレオラの方へと駆けていった。

一度だけ振り返ると、朝葉香は優雅に手を振っていた。

「ちつくしよー……コウヨウツキの奴！ そのうちにオレ、雪玉恐怖症になるぞ」

そんな恐怖症なんてないだろうと思いつつ、朝飛は曖昧に笑ってレオラに同意しておいた。

ぶつぶつと文句を言う彼の背中からは、朝方に入れられた雪玉の分と合わさって、さらにびしょびしょになっていた。

こんな寒い日にそんな姿で出歩けば、間違いなく風邪をひきそうなのだが、レオラならなんとなく大丈夫なような気もした。

雪で足を滑らさないように注意しながら、二人は新たな八チマキを探して森を突き進む。

「でも良かったです。朝葉香さん、楽しそうで」

「なにが？」

「朝葉香さん、スピアまで奪われてしまって、昨日はずっと落ち込んでたじゃないですか。だから心配してたんです」

森の中に人は居ないのか、朝飛の声が澄んだ空気に溶け込む。

先に前を進んでいたレオラが、倒木をまたぎながら後ろを振り返った。

「心配するようなタマじゃねえだろ、コウヨウツキは」

「そうでしょうか？ 僕は心配で堪りませんでしたよ」

レオラの通った道を同じように歩いて、倒木の前で朝飛が言葉を続ける。

「自棄を起こして、何かとんでもないことをしでかすんじゃないかなあ……って」

「……そっちの心配かよ！」

三つ巴鬼終了まで、残り二時間を切っていた。

126 裏町ラブソディ #20 「彼女は優雅に笑う」 (後書き)

最後に笑うのは何色だ？

127・裏町ラブソディ #21「彼は呆然と取り残される」

「神様、お願いです！ 全体観測と現態観測のことはどうでもいいから、私だけでも助けて下さい！」

穴の中から遠くの空を見上げて、ハルナが自分勝手極まりない願い事を大声で叫ぶものの、それに答えてくれる神様は居なかったらしく相変わらず四人は落とし穴に落ちたままだった。

空からふわふわと落ちてくる粉雪の所為で、上を向いていると目に雪が入りそうだ。

「ちきしょー、勝手なこと言いやがって！ ハルナ、今からお前をぶっとばす！」

「ハッ……やれるものならやってごらんなさいな！」

「そんなもん、出来るならとつくにやってるっつーの……どうやってここから脱出するんだよ」

「神様がなんとかしてくれるわよ、私だけ」

「そんな自分勝手な願い事を神様が叶えてくれるわけねーじゃん！」

穴越しに大きく声を張り上げてアルルとハルナが虚しくなるやりとりを続ける中、フィンが地道に土の壁へと手を置き、足を掛けて登ってみようとしてみる、が。

「……駄目だ。崩れる」

足場にしようとしていた箇所が、ぱらぱらと崩壊し、さらに脱出を困難なものにした。

穴自体そこまで深くは無いのだが、丁度両腕を伸ばしても届かないくらいの作りになっていて、もしあるのなら踏み台を使用したいくらいの深さである。

『大人しく助けを待った方が良さそうですね』

「助けが来るのかどうか、微妙なところだけどね」

フィンが自力での脱出を諦めた頃、ハルナがもう一度大きな声で神様とやらをお願いをした。

「もうほんつとお願ひします神様！ 現態観測の恋なんて一生実らなくて良いから、私をこの穴から助け出してください！」

「おつま、本当の本当にぶつとばすぞ!?」

アルルがもう一度同じことを言うのに被って、ここにいる四人以外の咳払いが聞こえた。

「全く……貴女まで落とす穴に落ちてどうするのですか」

ハルナの落ちた穴の傍で、水色組のリーダー、パレット・タルトレットが呆れたように呟いた。

その声を聞いて、ハルナの歓喜の叫びと、アルルの嘆きが重なって響く。

「パレットさん！」「まじかよ!? かつ、神様のバカヤロー！」

「情報係の貴女が居なくてはどうにもならないじゃありませんか」

パレットが差し出した腕に何とかしがみつき、彼が痛がるのも無視して穴から這い出る。

荒くなった息を落ち着かせ周りを見渡すと、そこには穴の中とは違う白い世界が広がっていた。

「きゃー！ 外よ外！ 神様ありがとー！」

「ほら、早く帰りますよ」

はしゃぐハルナの声が遠ざかっていく。

彼女の心底嬉しそうな後ろ姿を、唯一外へ出られるサスケだけが見送った。

『行ってしまわれましたねー』

「ホント……神様でも何でも良いから助けてくれー！ せめて雪が積もる前に！」

全くもってアルルの言う通りだ。はらはらと降っていた粉雪は、いつの間にか大きさを増し、フィンの肩にも少し積もり始めていた。黒いコートだから余計に目立って見える。

それを雑に払い、溜息混じりに声を出す。

「……アルルの場合、この雪が吹雪に変わった頃に助け出されそう

だよね」

兄弟子の不憫さを知っているフィンが、穴の中から厳しい一言を放った。

だが、アルルはそれを小馬鹿にしたように笑って返事を返す。

「あつははは！ 分かってないなーフィンは。俺のように不憫な人間は、誰からも探されず、むしろ自力で帰った時に『あれっ、お前居なかったの？』と言われる確率の方が高い！」

何とも悲しい台詞を自信満々に言った。本人が得意げに話しているので、尚更痛々しい。

フィンはもう何も言うまいと穴の中で体育座りをしていた。相手にするのも馬鹿らしくなるとはこのことだ。

そして誰にも相手にされなくなってアルルが寂しげに穴の上を見上げると、そこには今までに無かった、そしてずっと待ち望んでいたものが見えた。

「……………め!？」

「オマエ、それ自分で言っていて虚しくないか？」

アルルの視線の先には、穴を覗き込むようにしてチームメイトのメイが呆れ口調で喋っていた。

こんな雪降る中でも、相変わらず寒そうな民族衣装は健在である。

「メイーッ！ 助かった！ どうしてここが分かったんだ？」

「『アルルを調達してくること』……………コヒナタに頼まれたネ。カノンちゃんにばれないように来るの、大変だったヨ。料金は高くつくからネ」

どうやらコヒナタは約束を守ってくれたらしい。その上こんなフオローまでしてくれるとはなかなか気の利く奴だ。

「っていうかお前、よくここまで無事に辿り着けたな。敬意に値するぞ」

「ワタシ、お前と違って馬鹿じゃないヨ。雪の上に残ってた足跡を辿って歩いてきたんだから、畏に引つかかるわけないネ。分かったら早くこれに掴まるよろし」

近くの樹木に結びつけたロープの残りを、メイが穴の中へと放り投げてくる。

それをしっかりと握り、なんとか穴の縁まで登り、最後はメイの腕に掴まり這い上がるようにして穴から抜け出した。

「助かったー……！ シャバの空気がうまい！」

「まさかこんな古典的な罠に引つかかっただけとは思わなかったネ。

ほら、助かったなら早く本部へ戻るヨ！ コヒナタだけに情報係なんて任せてられないネ」

ずるとアルルを引つ張って、メイが自分の歩いてきた道を引き返す。

『メイ殿！』

「サスケ？」

丁度森へと戻る寸前、サスケがメイの名前を呼んで二人を引き留めた。

『実はフィンも落とし穴に落ちてしまったのです！ どうか助けてくださいませんか？』

「ぜ、ぜ、全体観測がそこにいる力！？」

掴んでいたアルルの首根っこを離して、両手で紅くなった顔を押しさえる。

だがそれを見逃さなかったアルルが、素早くメイの服を掴み、今度は立場が逆転した。

「フィンには悪いが、勝つのは白組だ！ 桃組にはしばらく観測者抜きにしてもらうぜ」

「ひ、引つ張るんじゃないネ！ ああああ、助けてあげられなくてごめんヨ全体観測ー！」

ぐんぐんと遠ざかっていく二人の背中を残念そうに見送り、サスケは主人のいる穴の中へと戻っていった。

フィンが被っているフードには、先程よりも雪が積もっていた。

『ああ……とうとうフィンとハクト殿だけになってしまいましたね』

あれだけ居た「落とし穴被害者の会」も、とうとう残るは二人だけである。

雪が染みこんでしまわない内に払い落とし、フィンが意外そうに言う。

「まさかアルルまで救出されるとは予想外だった……そうか、だから今日の天気は雪だったのか」

『フィンはアルルをなんだと思ってるんですか？』

「サスケ、話が変わるんだけどさ」

『逸らしましたね』

「ローズマリーは無事なのかい？ さつきから一言たりとも喋っていないけど」

『……………ハクト殿ー！？』

奇声をあげながら、慌ててハクトの居る落とし穴の方へと文字通り飛び込む。

穴の隅の方では、ハクトが頭を抱え込むような姿で座り込んでいた。

『ハクト殿！ 寝たら死にます、寝たら死にますよ！』

サスケが精一杯の力を込め、その鋭いくちばしでハクトの頭を容赦なく突く。これをフィンにやったなら、その日の夕飯のメインディッシュを飾ってしまうことになりかねないが、ハクトなら問題無いだろう。

サスケの必死の呼びかけで、ハクトが頭をあげる。

「やあ……鳥さん。久しぶり」

『ああああ、なんだか本当に久しぶりな感じがします。小説で例えるなら、一話越しの再会のようにです』

「いま……花畑で、昔飼っていた犬と一緒に遊んでたんだ……おかしいな、ラッキーは死んだはずなのに」

『その花畑、危険レベルがはかりしれませんか！？』

「暇だから、冗談言ってみた」



『タチが悪すぎますよその冗談!』

とりあえず、ハクトは無事なようだった。今まで大人しく一人と一羽の会話を聞いていたフィンが、ようやくハクトへと話しかける。「それじゃあずつと眠っていたのかい、ローズマリー」

「違うよ……考え事してた」

「考え事?」

ハクトがサスケの頭を撫でながら、空をぼんやりと見上げる。

「例えば、俺がくじら……あれ? くらげ? えーっと、とにかく人間じゃない何か生まれ変わったらまず最初に何をしようかとか……先週に受けた依頼はまったくこなせなかったけど、依頼人は喜んでくれて良かったなあとか……クウと出会ったときのことを思い出したりとか……この雪がスノーボールクッキーだったら嬉しいのになあとか……とか、とかとか」

「つまり?」

「つまり、つまりは……えーっと……生きてるって、素晴らしいなと思ってたところ、かな……恥ずかしい」

何故そこで照れるのかは分からないが、残念ながら二人とも穴に落ちている状態なので、フィンが彼の表情を見ることは出来ない。

「ああ……うん。そうなんだ。元氣そうで何よりだよ」

無難に返事をして、フィンは空を見る。ここから上を見上げるたびに、なんだか空が遠くなっていくような気がした。

ゲーム終了まで、残り一時間半。

127 裏町ラブソディ #21「彼は呆然と取り残される」(後書き)

「……寒すぎる フィンを見付けて 殴りたい………よし、完璧  
な五七五だ」

闇鬼は末期だった。

128・裏町ラブソディ #22「そして彼女は気付いた」

頭に桃色のハチマキが無い人間が十数名。

そんな彼等の前で、アンジユが忌々しそうに呟いた。

「香葉月朝葉香……やはりただ者ではありませんね。そんな方法があつたとは」

そう言いながら、手元にあるメモを書き直していく。桃組のハチマキは、奪取数は変わらず三十一本、その代わり奪われた数は丁度五十本となっていた。相変わらず最下位を驀進、ハチマキは増えるどころか減る一方だ。

「勝つためには手段を選ばない……それはこちらも同じことです。敵と同じ戦法を使うのは癪ですが、この際関係有りません。闇鬼が全体観測捜索に出掛けている今、私達がやるべき事は一つです」

アンジユはハチマキの有る者にも無い者にも、はっきりと言いつた。

「白組に、総攻撃をしかけます。最後に勝つのは私達桃組です」

\*

「ど、どうしたの！？ この大量のハチマキ！」

優雅な微笑みを携える朝葉香に向かって、ハルナは驚きの表情を隠さずに桃色のハチマキを指差した。

「どうしたのと尋ねられましても……このゲームはハチマキを奪い合うゲームでしょう？」

「そう、なんだけど……朝葉香ちゃん、ハチマキ付けてないじゃ

ない？」

非常に言いにくそうに朝葉香の頭を指差しながら、彼女は最大の疑問点を問うた。

これではゲームのルールに反する。

だが朝葉香は、そんな心配は無用だと言わんばかりににこにここと微笑んでいる。彼女の後ろにいるたくさんのチームメイトまでが、大丈夫ですよと言ってくる。一体何が大丈夫だと言うのか。あの所長が、ルール違反を見逃すはずがない。

「見解観測。わたくし、改めてルールを見直して気付きましたの」  
そう言つて、未だに納得のいつていないハルナへと事の経緯を話し始めた。

朝葉香の話の聞いている内に、ハルナの険しかった表情が和らいでいく。

「ははあ……なるほどね。うん、それはルール違反じゃないと思うわ。さつすが朝葉香ちゃん、目の付け所が違うわね！」

「うふふ、そんな大したことじゃありませんわ。それに、これだけではまだ水色組は二位のまま……」

朝葉香の言うとおり、水色組の成績は奪った数と奪われた数を差し引けばプラス八本。

まだ白組のプラス十一本の成績には勝てていない。

「次は白組の足止めをしながら、ですわね」

「そうね！ 水色組、優勝するわよー！」

ハルナの声に、チームメイト達が片腕を雪空へと突き上げながら、大声でそれに応えた。

そんな輪から少し離れたところで、「胃痛が……」と腹を押さえるパレットが居た。

「ふふ、あははっ……あはははははははっ」

白銀の森から、心底楽しそうな笑い声が聞こえる。

相当楽しいらしく、笑い声の主であるクウヤは自分の足下にある穴の中を見下ろしながら、お腹を抱えてこれ以上無いほどに笑っていた。

「……で？」

そうして一頻り笑った後、一気に氷点下まで下がった声で穴の中に話しかけた。表情は笑っているものの、目が笑っていないので怒りを感じているということが分かる。

「で？ 何か言うことは？」

返事が無いのもう一度話しかける。

話しかけたと言うことは、もちろん穴の中に人がいる訳で。

「た………」

「た？」

「た、助ける」

ばつの悪そうな顔をしたフィンが一言だけ、用件を言った。

かなり嫌そうだな。あの仏頂面がさらに歪んでいる。こんな奴に見付かるなんてと、心から思っている顔だった。

「えー？ 聞こえないなあ」

「助けてくれ」

「んー……どうしよつかない？」

一方、クウヤは意地の悪い笑みでフィンを見下ろしていた。完全に足元を見た態度だ。

サスケがはらはらと二人の間を行ったり来たりしているが、何の役にもたっていないかった。

「そうだ。助けてあげるかわりに、むこう三年分の情報料をタダにしてもらおうかな」

『さ、三年分！？ クウヤ殿、それはあんまりです……！』  
「理不尽だ……」

フィンが信じられない様子で首を横に振る。全体観測の情報を三年間も無料で提供し続けるだなんて、破格の値段も良いところだ。

「いや……キミに理不尽なんて言葉を使ったら、世の中の理不尽な人達に失礼だ」

「理不尽な人間に失礼も何も無いんじゃないかな。まあ、流石にさっきのは嘘だけど」

嫌すぎる嘘だった。だが嘘で良かった。フィンもサスケもほっと息を付いている。

今度は真剣な表情をして、クウヤは穴の中を見る。

「一つだけ。一つだけ、凄く欲しい情報があるんだ。帰ったら、それを最優先にしてくれないか」

あまりにも真剣に頼んでくるクウヤに、嫌とは言い難い。

フィンは少しだけ考えて、了承した。

「まあ、一つだけなら……でも内容によるよ。非公開になっているものは流石に無理だ」

「中央軍総司令部、次期司令部長と名高いクロウ・リアハーデンについて」

一瞬の沈黙が、二人の間を走る。

雪の降る音さえ聞こえてきそうな、静かな間。サスケの羽ばたく音が、酷く耳障りだった。

先に口火を切ったのはフィンの方だった。

「……何故？」

一言だった。だけど、それで全てが分かる一言だった。

クウヤはさっきまでの真剣な表情を崩して、完璧な笑顔を見せた。

「黙秘権はあるの？」

言わないつもりだということが、副音声で聞こえた。それだけで、フィンには十分だった。

「そうか……分かった。その情報、無償で譲るよ」

「無償？ いいの？」

「友情割引だよ」

「……ありがとう」

雪がちらちらと鬱陶しくて、フィンにはクウヤの表情がよく見えなかった。

128 裏町ラブソング #22「そして彼女は気付いた」(後書き)

聞かない。言わない。

(聞かなくても分かる。言わなくても分かる)



129・裏町ラブソディ #23「だけど彼等は気付かない」

吹雪になるのではないかと心配されていた雪は、いつの間にか人知れずに降り止んでいたようで、地面や木々にその名残を残して消えていた。

太陽は相変わらず顔を覗かせないが、これ以上雪が降ることは無いように思えた。

その代わりとでも言うのか、白組本部では鳴神という名の嵐が吹き荒れていた。

「はああああ!？」

「カノンちゃん、抑えて! 抑えて!」

「おまつ、だつて……六十八本も取られたんだぞ!? なんで!？」

おいこらルツチ、説明しやがれ!」

「ルツチ死ぬ! ルツチ死ぬってカノンちゃん!」

信じられない表情で、ハチマキの無くなったルツチに掴みかかって激しく揺さぶるカノンがそこに居た。

首を絞められて、ろくに話も出来ないルツチに代わって、アルルが必死になってカノンを引きはがす。それでもしなければ、馬乗りになって押さえこまれたルツチには、いくらチーム一の巨体といえど逃げ出すことは難しかった。

「カノンちゃん、落ち着こ! な! 取りあえず状況確認を……」

「状況確認も何も……有り得ねえだろあの数字は!」

ようやくカノンが落ち着いて来たのか、再度掴みかかれることは無かった。

お互いに大人しく話を聞ける姿勢になったのを見計らって、ルツチがやつと口を開いた。

「すまねえ、嬢ちゃん。すっかり油断しちゃって……だけど俺あはつきり見たぞ! ハチマキの無え奴等に襲われたんだ! それも大群で!」

ルツチのいきり立った声を聞いて、カノンの後ろからオリビアが話に入ってきた。

「私もよ！ 有り得ないのよ！？ アサハカ・コウヨウツキに襲われたの！ ハチマキは無事だったから良かったけど……」

久しく聞いていなかった名前を聞いて、カノンが訝しげにオリビアの方を見る。

アルルも同じく、疑いの目線で彼女を見ていた。

「何言ってるんだよオリビア。朝葉香ちゃんは水色組だぞ？ 俺達の獲物チームじゃんよ」

「……っていうか、アサハカはハチマキのスペアすら持ってないぞ。それじゃオール違反じゃねーか。一体どうなってんだ？」

おかしい。何もかもがおかしすぎる話だ。

だけどルツチもオリビアも、嘘を吐いているような節はない。というよりも、ここで嘘を吐いて得られるメリットなど一つもない。だからこそ、おかしい話だった。

おかしいからと言って、笑えるような話でもないが。

「ほっほっほ」

一人だけ、楽しそうにに笑う人間が居た。

相変わらず優雅にティーカップを持ちながら、純白の椅子に座り、入れたてのアルグレイの香りを楽しんでいる。

「なんで笑ってるんですか、所長」

嫌味を言う余裕も失ってしまったカノンが、ぶっきらぼうに問う。「どうやらミス香葉月は、このゲームの穴に気が付いたようですね。もっと早くに誰かが気付くと思ってたのですが」

「……穴？」

所長の目が一層細くなったのを、カノンは見逃さなかった。

「さて皆さん、このゲームのルールをもう一度思い出してみましよう。ではキャラメリゼ君」

「俺？ ぬー……白組は水色組より強い。水色組は桃組より強い。

桃組は白組より強い……ってやつ？」

名前を呼ばれたアルルが、人差し指で自分の顔を指し示しながら力関係のルールを言う。

「そうでしたね。次にコヒナタ君」

アルルの答えに満足した所長は、どっちが一番綺麗な雪玉を作れるかメイと競争していたコヒナタを次の返答者に指名する。

「えーっとお、自分より強いチームのハチマキは奪えないんだよねえ？」

「そのとおり。次にミス・シヨウ」

「ハチマキを付けている者が、相手のハチマキを奪えるネ。争奪戦で欠かせないルールヨ」

「大変良く出来ました」

より綺麗な球体へと近づけるべく、両手で一生懸命に雪玉を転がしながらメイが答えた。

答えが三つ出揃った所で、未だに不機嫌丸出しで経過を見ていたカノンへと向き直る。

「それではミス・ソリティア。これらを踏まえて答えを導き出してみましよう。何故ハチマキを持っていない者が攻撃してくるのか？

何故ミス香葉月はハチマキを奪えないはずのチームに攻撃を仕掛けてくるのか？」

にまにまと笑ってくる所長に腹を立てながら、カノンは腕を組んで問われた質問の意図を理解しようと唸る。

出されたヒントは三つ。問われている問題は二つ。

所長の言った言葉を整理して、

「……そうか……そういうことかっ！　なんでこんな簡単なことに気付かなかったんだ!？」

カノンは悔しさの塊を喉から絞り出すように叫んだ。

「ど、どつたのカノンちゃん」

突然のことで理解が追いつかないアルルが、心配そうにカノンを見る。

所長からアルルへと視線を変えて、カノンは興奮したまま話し始

めた。

「ルツチを襲った奴らはルール違反なんてしてねーんだ。八チマキを持っていない者が攻撃役になるだけで、そいつはルツチの八チマキを奪わなければいい！ 八チマキを付けた誰かを連れて行って、奪わせればいいんだから！」

「なるほどお！ とつても効率的だねえ」

雪玉作りに励みながら、コヒナタが相槌を打つ。アルルも小さく「なるほど」と声を漏らす。

もう一つの問題について、カノンが話を続けた。

「それでもつてアサハカモルール違反はしてない。八チマキ狩りの邪魔になる敵チームには反撃！ 八チマキは奪えないってだけで、攻撃しちや駄目だなんてルールは元から無い！ つまり……」

興奮してた所為で上がりきった息を整えて、カノンは脱力したように最後の言葉を放つ。

「つまり、なんでもありなんだよ、このゲーム……！」

「そう言われればそうネ。八チマキと力関係に気を取られて、全然気が付かなかつたヨ」

完璧な球体となった雪玉を手にながら、メイが喋る。

その言葉には返事をせずにカノンは、自分の背後で微笑みながら紅茶を飲んでいるであろう彼へと質問した。

「所長……気付いていながら、おれ達に黙ってましたね？」

「ほっほっほ。怒っていますか？」

「全然全くこれ以上ないって程思いつきり怒ってないです。ええ、怒ってなんかかないですよ……」

「随分と怒ってますねえ、ほっほっほ。申し訳有りません。その方が面白いことになると思ったので」

全く申し訳なさそうでは無かった。

だが所長を責めている暇はない。腕時計を見れば、時刻は既にゲーム終了まで一時間しか残っていない。

「アルル！ このことを八チマキのある奴にも無い奴にも伝えてく

れ！ おれたちも全員総出で争奪戦だ！」

「りょーかい。オリビア、手伝ってくれ」

アルルとオリビアが走り去ったのを見て、カノンは今まで放置していたルツチに声を掛ける。

「ルツチ、お前はおれと一緒に来い！ おれの補佐だ！」

「よし来た！」

がたいのいい男と少女という奇妙な組み合わせで本拠地の出口へと走っていく。

本部から出ていこうとするカノン達を見送るために、所長が椅子から立ち上がって手を振る。

自分のチームが負けていようと、あくまで傍観者に徹するつもりらしい。本当に一体誰の為に走り回っていると思っっているのか。

そんな彼の元へ、コヒナタが嬉しそうに小走りで駆け寄ってくる。

「ねえねえ所長さん、見て見てえ！ この雪玉、すつごく綺麗に出来たんだよお」

コヒナタが両手に乗せて持ってきた雪玉は、見事に球体の造形をしていた。素手でここまで綺麗に作り上げたというのだから、相当器用らしい。

所長が腹黒さを微塵も感じさせない爽やかな笑みで「これはこれは」と雪玉を手にとって褒めた。

「とても綺麗ですね。ちつとも崩れませんし」

「あのねえ、少しだけ水を使うと、綺麗に固まるんだよお！」

まるで尻尾を振る子犬のように雪玉作りの過程を話すコヒナタに向かって、まだ出口付近に居たカノンが大きな声で彼を呼ぶ。

「おーい、コヒナタ！ そんなところで遊んでないで、一緒に八チマキ狩りに行くぞー！」

「ちえー。せつかくメイさんと雪玉競争してたのにい」

しょんぼりしながら走り寄ってくるコヒナタの手元には、しっかりと雪玉が握られている。

そんなものを持ったままでこれから始まる争奪戦に参加出来ないだろうに、余程の自信作だったらしく、それを置いてくる気はないらしい。

「コヒナター、その雪玉は置いて……………雪玉……………」

「どうかしたあ？ 便利屋さん」

右手を口元に持っていつて、しばらく固まるカノン。

次に声を発した時、彼女の表情は妖しく微笑んでいた。

「これ、使えそうだな」

\*\*\*\*\*

「クウ……………俺、落とし穴に落ちて、ずっと思ってたんだけど……………」  
落とし穴から救出されたハクトが、ぼんやりと空を見上げながらクウヤに話しかける。

ちょうどフィンを助けている途中だったクウヤは、息を切らしながら首を傾げる。

「今日のおやつはドーナツがいい……………と思うんだ」

「ああ、穴の底から空を見上げて、ドーナツを思い出したんだね」

「おお……………！ クウはエスパー使えるデスカ？」

「残念ながら使えませんが……………つと！ フィン、生きてる？」

クウヤに引つ張ってもらいながら、這いずって外へと出たフィンは、普段使うことの無い体力を使った所為でぐったりとしていた。

返事も出来ないくらいに酷く疲れている。

サスケが気遣っているの、しばらくは放っておこうとクウヤはハクトへと声を掛ける。

「じゃあハクト。悪いけど、先に本部に帰って秘書さんに『フィンが無事捕獲した』って伝えといてくれる？」

「らじゃ」

しっかりと敬礼をして、ハクトはてくてくと音でも付きそうなほどマイペースに歩いていった。

自分達の方が先に本部へ着いてしまいそうな気がしなくてもないが、とりあえずハクトを信じることにした。

「まあ、なんとかなるでしょー。さてっと、フィン？ そろそろ行こうか」

「……また歩くのか……」

実に嫌そうな声を出しながら、フィンが溜息を吐く。

助け出されたことで不安が取り除かれ、余計に疲労感が襲ってきたのだろう。

疲れたように立ち上がり、サスケを右肩に止めてフィンが呟く。

「キミさ、情報屋は頭脳ばかり使って体力が無いものだと思ってるだろう」

「大抵はそう思ってるけど……」

「驚け、実はその通りだ」

『暴露してどうするんですか』

「……その通りなんだね」

なるべくフィンのペースに合わせて歩き始める。

話す元気も残っていないフィンは終始黙って歩いている。クウヤも特に話すことが無いのでもくもくと隣を歩く。

黙りこくる二人の周りで、サスケの羽ばたく音だけが聞こえた。

苦にならない沈黙の中、隣で歩きながら前しか見ていないクウヤをちらりとフィンが盗み見る。

黙秘権はあるの？

完璧な笑顔で放たれた彼の言葉が、フィンの頭の中で再生を繰り返す。

彼が欲しがった情報は、中央軍総司令部の情報だった。

それだけなら、別段気にすることも無かった。裏町では軍の情報など頻繁に売り買いされてきたし、彼だってこれが初めてでは無かった。

気になったのは、個人を指名してきたからだ。それも、今では知らない人の方が少ないと言われるクロウ・リアハーデンの名前を。

そんな情報を得て、一体何をするつもりなのか。聞いたところで、彼が答えるはずもないということは嫌と言うほど分かっていた。

「あ」

「な、なに？」

突然クウヤが声を出したことに驚いて、フィンが思考と動きを止める。

「レオラが死んでる」

「は？」

そう言っただけの人差し指が示した方向へと視線を移す。

そこには雪の絨毯の上で俯せになって倒れている人間が居た。身体が雪まみれになっていてよく見えないが、人よりも明るいその金髪は白い風景の中でも目立っていた。

二人でおそろおそろ近付いてみるが、ピクリとも動かない所を見ると、気絶しているらしい。まさか本当に死んでいると言うことは無いだろう。

フィンが呆れてその姿を見下ろす。

「こんな所で寝てたら風邪をひくよ」

「その前に永眠するよ………ったく」

「………？ 何をしているんだい、アンダーグラウンド」



レオラの傍にしゃがみ込み、彼に積もった雪を払ってやるクウヤを見てフィンが訝しげに声を出す。

「何をつて……このまま放っておくのも人としてアレだろ？ 本当  
に死なれたら困るし、せめて起こして置いてあげようと思って」

「いいじゃないか。めんどくさい。それにレオリアナは敵チーム  
だし」

容赦ない一言に、今まで黙っていたサスケがつっこんだ。

『フィン……情けは人の為ならずって言葉知ってます？』

それに一步遅れて、クウヤも同じ様な事を言う。

「……君には情つてものが無いのか？」

「ボクに無いことよりキミにあったことのほうが驚きだよ」

逆につっこみを入れられてしまったクウヤが、その台詞を流すよ  
うにレオラの頬をぺちつと叩く。

「レオラー起きろー」

「レオリアナは白組だよ？ もしも彼が起きて、ボクらのハチマ  
キを奪いに来たらどうする？」

「その時は僕が返り討ちにするから大丈夫だし、そもそもレオラに  
そんなことをする度胸は無いよ」

本人が聞いていたらひっそりと泣き出しそうなくらい酷い言いよ  
うだった。

その一言に微妙な表情を隠しきれないフィンだったが、そんなこ  
とお構いなしにクウヤはレオラの頬を叩き続ける。

「レオラー。寝たら死ぬよー？」

「う、師範代……ちがつ……プリンなんか…食べて、ない……す……」  
「僕は君の師範代じゃねえ」

寝言に答えてはいけないという迷信などものともせず、クウヤが  
しつかり返事する。

その返事に答えるかのように、レオラの目蓋が開かれた。

「う……？」

まだはつきりと脳が覚醒しきれていないのか、視線が宙の一点を

見つめたままだ。

「あ、起きた」

『良かったですね!』

「全く、世話が焼けるなあ」

赤い瞳が焦点を合わすように視線を左右させる。

そして何度かまばたきをして、やっと目の前の二人を理解出来たらしい。

クウヤに支えられていた身体を勢い良く起こし、

「げ!　なんでクウヤとフィンがここに……?」

第一声がそれだった。

「『げ』って何だ。『げ』って。ボクは仮にも命の恩人だぞ?」

『フィンは見ただけじゃないですか』

フィンの恩着せがましい台詞に、サスケが事実を付け加える。

そんな一人と一羽の掛け合いを無視して、クウヤがレオラに尋ねる。

「なんでこんな所で倒れてたの?」

「なんでって……アサヒと一緒に桃組の連中を捜してたら、後ろか

ら……ああああああっ!　アサヒ!　アサヒは無事なのか!？」

レオラが慌てて周囲を確かめるが、ここに存在する人間は黒ずくめの少年に、碧眼の少年だけである。そこに剣道着の少年の姿は見えなかった。

「……兄さんがどうかしたの?」

兄弟喧嘩していたことなどすっかり頭に無いのか、クウヤが不安そうに聞いてくる。

「いや……ここに居ないなら、無事に逃げられたはずだ……」

「逃げる?　何かあったの?」

「……ははは……それはオレも聞きてえよ」

再度繰り返される質問に、レオラが乾いた笑いプラス遠い目のダブルコンボで対応した。

そんな曖昧な答えに、二人と一羽は首を傾げるしかなかった。

129 裏町ラブソディ #23 「だけど彼等は気付かない」 (後書き)

思い出さなくない思い出話をしよう。

130 裏町ラブソディ #24「もちろん彼等は知っていた」

「オレとアサヒは、桃色組の奴等を探すために森の中をうろついていたんだ」

ざくざく、と降り積もった雪の道を踏みしめながら、レオラは数十分前のことを話し出した。

三人の歩いている道は、森を抜け、大きな広場へと出るための道だ。

『命の恩人のハチマキは取らない』と断言したレオラだったが、一応敵チームであることを警戒してか、レオラを一番前に歩かせ、その後ろをクウヤとフィンが並んで歩いていた。

「だけど、運悪くカノン達に遭遇しちゃって、オレ達は逃げている途中だった」

\*\*\*\*\*

大勢の白組の人間が、レオラと朝飛を取り囲んでいた。

その中心人物ともあるうカノンが、にやりと笑って挨拶をする。その蒼い双眸が細くなった。

「昨日の友は今日の親の仇ってな。ご機嫌麗しゅう？」

「だーっ！　なんでまたお前と会っちゃうんだよー！」

頭を抱えて自分の運の無さを呪うレオラの隣で、朝飛は冷静に周りを見回した。

カノンを含め、自分達を取り囲んでいる白組の人間の数は十人。中にはひ弱そうな人間も混ざっているが、この人数ではどう足掻いても負けは見えている。明らかにこちらの分が悪かった。

その中で得られる選択肢は一つしかない。

思考を整理した朝飛は、落ち着いた声でレオラに話しかける。

「レオラさん、こんな言葉を知っていますか？」

「あ？」

「戦争をするときの大原則です。」

十倍の兵力なら、包囲する。五倍の兵力なら、攻撃する。

二倍の兵力なら、分断する。互角の兵力なら、勇戦する。

劣勢の兵力なら……」

「兵力なら……？」

「退却する、です！」

そう叫ぶと、朝飛はレオラの手を掴んで先程一番ひ弱そうに見えた人間へと突っ込んだ。

「そこを開けて下さい！」

「ひっ！」

案の定、気圧されてしまった彼は後ろへと一步下がってしまい、崩れた包囲網を二人は抜け出した。

「くそっ！ 二人を追え！」

だが、一度逃したからといって諦めるようなカノンでもない。

即座に追ってきたあの白組の集団を、なんとか引き離さなくてはならない。状況はあまり変わっていないかった。

「レオラさんっ！ 一つだけ言わせてください！」

「ああっ！？ 何を！？」

「貴方と一緒に居ると、必ずソリティアさんに遭遇するというジंकウスでもあるんですか！？」

「ジंकウスじゃねーよ、親友パワーだ！」

「そんな自慢げに言わないでください！ 親指立てないでください！」

きりつとした表情で訳の分からないパワーの存在をひけらかしてくるレオラと嫌そうに首を振る朝飛の後ろには、もう追い付きそうなくらいの距離までカノンがやってきていた。

このままでは二人とも、また囲まれてしまう。二度目は逃げられないだろう。

朝飛がこの状況をどうやって打開しようかと考えを巡らせていると、レオラの速度が緩んだ。

「……アサヒ、この前の借り、いま返すぜ」

「え？」

「お前はそのまま逃げろ！」

そう言っつて、レオラは立ち止まった。

すぐ後ろに来ていたカノンも、同じように立ち止まる。

「へえ？ なかなか男らしいところあるじゃん、お前」

「借りたものはきっちり返すタイプなんだよ」

「じゃあこの前の五千ミリア返せ」

「それは先週返した！」

会話の途中だったが、レオラは後ろを振り返って、まだ立ち止まっていた朝飛に笑いかけた。

「いいから行けって」

「……どうかご無事で！」

戸惑いを見せていた朝飛だったが、ここで二人とも掴まってしまふわけにはいかないと判断し、すぐにまた走り出す。

そんな彼を追おうとせず、白組の集団全員が走るのをやめ、さっきと同じ様に取り囲んだ。

今度こそ逃がさないように、さっきよりも隙間がない。

その中に居たカノンが右腕をあげ、朝飛の行く先に立ちふさがるレオラへシニカルに微笑んだ。

「その男らしさに敬意を表して、一発で終わらせてやるよ……」

総員、かまえ！」

「え、ちよ、カノン？」

白組の人間が、何かを投げる姿勢を取る。

その何かを目の端に捉えたレオラが、さっきまでの威勢をどこかへやって、一気に狼狽える。

「撃てえ！」

「う、お……………またこれかああああああつ！」

その命令と共に、大量の何か　そう、雪玉がレオラを襲った。

\*\*\*\*\*

「なるほどね。それでキミはあんな所で雪まみれになって死んでいったって訳だ」

納得の声をあげるフィンの視線の先には、「オレ、今回で本当に雪玉恐怖症になりそう」と遠い目をしたレオラがいた。

「普通、雪玉くらいで恐怖症になるか？」

大袈裟だなあ、と呆れたように呟くクウヤに、レオラが首を振って反論をする。

「お前はあの雪玉の堅さを知らないから言えるんだ。あれは水を使ってわざわざ固めてあるやつだ。昔、師範代にもやられたことがある……………」

「君達は一体何をしてるんだ？」



「セレナーデは冬の季節が長いんだよ」

よいしょ、と進行の妨げになっっている倒木を踏み越えて、レオラは後ろを振り返る。

ハチマキを奪いにくるかと思った二人だったが、そうではないらしく、レオラは話を続ける。

「でも、腑に落ちねーことがあるんだよな。オレ達を追ってきた白組の中には、ハチマキを持ってねー奴も混じってたんだ。あれは流石にルール違反じゃねーのか？」

「どこらへんが？」

クウヤに質問を質問で答えられてしまい、レオラはおかしそうに首を傾げる。

「どこらへんって、ハチマキが無い奴は、ハチマキを奪えないんだろ？」

「そつだよ。だからって、敵を攻撃しちゃいけないってルールは無いじゃないか」

さも当たり前のように言うクウヤと、それに同意して頷くフィン。そんな彼等を見比べて、目を丸くするレオラ。

「……まじかよ。じゃあこのゲームって、なんでもありなんじゃ……」

「そつだよ」「知らなかったの？」

不覚にも声が揃ってしまったフィンとクウヤは互いに嫌そうな表情を明らかにする。

レオラはレオラで、自分だけがこのゲームの本当の姿に気付いていなかったことを思い知らされて少し凹んでいた。サスケが「レオラ殿だから仕方ないですよ！」とフォローになっていないフォローをしてくれたおかげで、さらに凹んだ。

それに追い打ちするかのように、クウヤが進行方向を指差した。

「あのさ、落ち込んでいるところ悪いけど、さっさと進んでくれな  
い？」

「お前……もうちょっとオレを労ってくれ」

「いや、労りたいのは山々なんだけど、向こうの状況がどうにも気になるんだよね」

そう言って示されたのは、木々の隙間から僅かに見える広場。ここでは大量の人間と、大量の白い何かが行き来しているのが見える。「……アサヒだ！」

どれだけ人間が居ても、剣道着を着ている人間は恐らく一人しか居ない。

特徴的な少年を見付けたレオラは、一気に走り出していた。

そんな彼の後を追うようにして、クウヤも倒木を飛び越えて駆けていった。

『……………行ってしまったね』

取り残されたフィンが、肩に乗ったサスケへと話しかける。

「疲れたし、休憩しよう。うん」

『貴方はもう少し協調性というものを学ばべきです……………』

倒木に腰掛けたフィンを見て、サスケはいつものように溜息を吐いた。

130 裏町ラブソディ #24「もちろん彼等は知っていた」(後書き)

「だってボク、頑張って歩いたじゃないか」

『そりゃそうですけど！ 頑張っていらっしゃいましたけど！』

131 裏町ラブソディ #25「全ては貴方の望みのままに！」

クウヤ達が向かってきていた広場には、三色のチームが混在し、大量の雪玉が飛び交っていた。

その中でも最も目立っていたのが、真ん中に陣を取ったカノンとルッチ、そして何人かのチームメイトだ。全員、雪玉を片手に動きを止めている。

その向かい側には、対峙するように朝葉香率いる水色組のメンバーが同じように雪玉を持っていた。

両者共、相手の動きを伺っているようで、びくりともしない。

「お前だけは敵に回したくなかったよ、アサハカ」

「わたくしもですわ」

二人の間に吹き込んだ風が刺すように冷たい。

已然として膠着状態が続く中、カノンは隣に立っていたルッチへと声を掛ける。

「なあルッチ。お前はドイツユラントの出身だったよな？」

「おう、そうだけでもよ……どうした嬢ちゃん、真剣な顔して」

「こんな言葉を知ってるか。『一人はみんなのために、みんなは一人のために』……おれの師匠が言うには、ラシーヤの言葉なんだぞうだ」

「ワン・フォア・オールってやつだな。もちろん知ってるぞ……って嬢ちゃん。まさか、」

「ルッチ。みんなは一人のために、そして……！」

どんつ、と不意打ちで背中を押されたルッチは、勢い余って水色組へと体当たりする形で飛び込む。

「安心しろ！ お前の墓前には、必ずや勝利という名の花束を供えてやる！」

「って、一人はみんなのためにいいいいいい！？」

カノンの考えがやっと読めたルッチだったが、その動きは流れに

身を任せたままだ。それが逆に良かったのか、その巨体をもって何人かの水色組が押し倒される。

それと同時に、朝葉香から「今ですわ!」と言葉が発せられ、大量の雪玉が白組目掛けて投げられた。

だが、想定外のアクシデントで体勢を崩してしまっているうちに、射程距離内から逃げ出されていたようで、その雪玉は一つとしてかすりはしなかった。

「くっ……雪玉作成班は急いで補給なさい! この雪合戦、負けるわけにはいきませんわ!」

\*\*\*\*\*

そんな二つのチームの様子を遠くから、まるで傍観者のように見ていた朝飛は、自分へと近付いてくる足音に気付いて振り返った。

そこには、明るい金髪に赤い眼をした自分の仲間の姿があった。

「……レオラさん! ご無事だったんですね」

「おう。クウヤ達に助けてもらったな。お前こそ無事に逃げ切れたんだな」

「ええ、逃げ切ることは出来ました……出来ましたけど……」

視線を左右に動かして、周りの混沌とした様子を見て、大きな溜息を吐いた。

なんともいえない疲労感が漂っている。一体自分の居ない間に何

があつたというのか。

レオラが掛ける言葉を探していると、追いついたクウヤが兄と同じ様な台詞を言った。

「兄さん！ 無事だったんだね。カノンさんに追われてるって聞いて、心配……」

そこまで言つて、ハツと我に返ったクウヤが言おうとしていた言葉を飲み込んで、方向転換した。

「……してなかったけどね。全然、ほんと全然。喧嘩してる相手の心配なんてさ」

そう言えば、自分達は喧嘩をしている途中だったのだ。

一体何が原因だったのかすっかり忘れてしまい、仲直りするタイミングも失っていただけに、その事実はまだ既にどうでもいいことのように思えた。

慌てて否定する弟に苦笑せざるを得ない朝飛だったが、次の瞬間、それは悲壮な物に変わった。

「空夜つ、危ない！」

「は……？」

視界に入った頃には時既に遅し。

もの凄いスピードで右側から投げつけられた雪玉が、クウヤの顔面半分にヒットした。

レオラが痛そうに自分の頬を押さえている。

「やったあ！ ぼくの雪玉が当たったあ！」

「こ、小雨さん！？」

三人の東側に居たコヒナタがこの雪玉を投げたのだろう。嬉しそうにぴよんぴよん跳ねている。その隣で、メイが「今のはたまたまヨ！」と悔しそうに反論していた。

ダメージは思っていたよりも受けなかったらしいが、精神的なダメージは大いに喰らってしまったらしい。

クウヤが顔面の雪を大雑把に取り払って、にっこりと完璧な微笑みを携えて兄へと問いかけた。

「……兄さん。今のこの状況を三十字以内で説明せよ」

「野山にまじりて雪を投げつつ、よろづの人に当てにけり」

朝飛の的確な状況説明の通り、辺りを見回せば、チームの色など関係なく、ほとんどの人間が雪玉を片手に投げ合っていた。

中には雪玉作りを専門とする者が居たり、雪の塹壕を作ってそこから攻撃をする者も居る。

そこから連想される遊びと言えば、

「これじゃあ鬼ごっこじゃなくて、まるで雪合戦じゃなーか」

そう、それはレオラの言ったとおり、既に違うゲームになっていた。

相変わらず後ろからはカノンの怒声が聞こえ、自分のすぐ横を雪玉が降ってくる。

何がどうなって、こうなってしまったのか。考えるだけで頭痛がするようだ。

ようやく説明する気になったのか、朝飛がうんざりしたように話し始めた。

「実は……レオラさんに逃がしてもらった後、すぐに別の白組さんに見付かってしまったんです。それと同時に、この機会を待っていたかのように桃組さんと秘書さんが上から降ってきまして……そこへさらに香葉月さんが現れたんです」

「うわあ……想像もしたくない地獄絵図……」

クウヤにしてみれば、朝葉香が登場するだけでそこは地獄と同じらしかった。

寒そうに両腕を組んで、朝飛の話聞く。

「白組さんは全員が何故か雪玉を持っていらしたんです。そして、その雪玉を秘書さんと香葉月さんに向かって投げつけたのが全ての始まりでした……少なくとも、僕が見た雪合戦の始まりはそれです」  
当てられたから、当て返す。

そんな理由で投げられ始めた雪玉が関係の無い者に当たるたびに、小さな復讐の連鎖が起き始める。

それはその内に仲間を呼び、いつの間にか大惨事になっていたというわけだ。

今度は理解するのに頭痛を起こしていたレオラの後ろで、艶やかな声が聞こえた。

「あら、始末屋。そんなところに居ましたの？」

「こ、コウヨウツキ……」

話しかけてきた朝葉香の髪は、いつもよりも乱れている。頭にも雪玉を喰らったのか、払い落とし切れなかった雪が、動くたびにパラパラと落ちた。

「丁度いいですわ。わたくしの盾になりなさい」

「何その上から目線！」

「わたくしの為なら死ぬるでしょう？」

「なんでそうなの！？」

ずいとな腕を引っ張られ、雪原の戦場へと駆り出されていくレオラを、朝飛とクウヤは引きつった笑顔で見送る。

視線の先には、アンジュが仲間と一緒に巨大な雪玉を転がしてアールを追いつめていっている場面や、ハクトが雪だるまに顔を作ろうと、枝と小石で試行錯誤してる光景が見えた。

雪玉が飛び交う世界の中、兄弟は傍観しながら言う。

「みんな雪合戦だなんて、本当平和だよねえ」

「うん。兄さん、現実逃避が上手くなったよね」

あくまで無関係を装い、まるで別世界のことのようにその風景を見守る兄弟目掛けて、何発かの雪玉が襲ってきた。

当然の如く、それを顔面で受け止める二人。

「「ふっ！？」」

「やつりー！ アサヒとクウヤ、ダブルパンチ！」

よしっ、とガッツポーズを作るカノン。

顔面に残る雪を払いながら、お互いの顔を見合う朝飛とクウヤ。

「空夜……やられた時は？」

「そりゃあ……もちろん」



「三倍返し！」

雪を掴んで出鱈目に投げつける兄弟と、楽しそうに逃げていくカノン。

こうして否応なく、雪合戦への参加者は増えていった。

\*\*\*\*\*

「絶景かな、絶景かな」

そんな雪の惨劇を、一人離れたところで高みの見物をする人間がいた。

綺麗に整えられた白髭を片手で撫であげて、眼鏡のレンズ越しにある双眸が一層細くなる。

裏町幹旋所所長 アレグロ・コンポートはすでにお馴染みとなりつつある純白の陶器のティーセットと共に、優雅すぎるほど優雅に、かつ楽しそうに微笑んでいた。

今度はテーブルと椅子に加えて、白いパラソルまで揃っている。本当に、この人は一体何をしにきているのだろうか。

「ジャスト十二時！」

同じく、白い椅子に腰掛けながら紅茶を飲んでいたミス・マッドが、左腕にはめられた時計を見てそう言った。

「素敵な腕時計をお持ちですね」

「でしょー？ これ、クロックさんのお店の開店記念に貰ったのよ

ねー。小さな村で時計屋さんを始めたんだけど、なかなか評判が良  
いらしくって、繁盛してるみたいなの。これならアリスちゃんも安  
心ねー……ってそうじゃないわよ」

「はて？」

「すつとぼけてんじやないわよ、ミスター愉快犯。十二時は三つ巴  
鬼終了の時間じゃないわけー？」

「おやおや、もうそんな時間でしたか」

戯けて見せる所長に、マッドはもう何も言わない。

言わない代わりに、ポットから紅茶のおかわりを注いだ。アツサ  
ムの良い香りが辺りに広がった。

「三つ巴鬼はこんなことになってしまいましたし、試合は無効にす  
るしかありませんね。非常に残念です」

「あらー？ 全然残念そうじゃないわよ、所長」

「ほっほっほ」

「ま、私には関係無いことだし良いけどねー。こんなんでよく部下  
がついてくるわね」

「人望の厚さというやつですよ」

「自分で言うって嘘っぽくなるわよ？ 元々嘘っぽいけどね、所長は  
失礼極まりないことを言っているが、大して気にならないらしく、  
所長は紅茶の茶葉が混じったスコーンをマッドに勧めたいた。お店  
で売っているものよりも少し不格好になっているのを見ると、それ  
はどうやら手作りらしい。

状況から考えて、恐らく所長が自分で作ったのだろう。

まだ僅かに残る出来たての香りと温かさを直に感じながら、マッ  
ドはそれを小さく手で割って口へと放り込んだ。

「所長、本当はこのゲームで何かを決める気なんてさらさら無かつ  
たんでしょ」

もふもふとスコーン特有のぱさついた舌触りを堪能しながら、マ  
ッドは向かいに座る愉快犯へと話しかける。白衣の上に、ぱらぱら  
とスコーンの食べかすが散らばる。

「今はまだ、決めるべき時では無いからですよ。それに、これから後継者を育てても遅くは無いでしょう？ 丁度良い人材が手に入りましたし」

貴女經由でね、と言ってニコリと微笑む。

「あー……なるほどね」

「なかなか賢そうな子ではありませんか。教育のし甲斐がありそうです。そうだ、スコーンにジャムなんていかがです？ 幹旋の御礼に薔薇ジャムをいただいたんです」

「あら、それは素敵ね」

所長から渡されたジャムが詰められている瓶には、薔薇のイラストが入ったラベルが貼られている。

少し力を入れてその蓋を開け、ティースプーンを使ってジャムをスコーンの小皿へと取り分ける。

スプーンに残ったジャムを行儀悪くぺろりと舐めると、ティーロース特有の香りが口の中に充満した。

「うーん、これはスコーンよりも紅茶に入れる方が合ってるかもしれないわね……それにしても、よくやるわー。もしもこのゲームが今みたいにめっちゃくちゃにならなかつたら、本当に引退が決まっていたかも知れないってのに」

「ミス・マッド。何かを作り上げるのは至極大変な作業ですが、何かを壊すことは造作もないことなんですよ」

「随分哲学的なことを言うのね。つまり、雪合戦になってなかったにしても、最終的にはこの三つ巴鬼、めっちゃくちゃになってたつてわけ？」

「大まかすぎるルールに、何の変哲も無いただのハチマキ。例えば、誰かが一時間以上本拠地に滞在していたとしても、何も分からない。そんな、誰がルール違反しても分からないようなゲームが、ちゃんと成立すると思いますか？」

にっこり。

所長につられてマッドも、にっこりと笑っていた。

なんとというか、実に自由気儘に生きている人である。当分はこの人が現役で居続けるであろう裏町幹旋所の未来を、マッドは少しだけ憂いておいた。

「……………さつてと。私、次の仕事が入ってるから、コヒナタくん回収してさつさとお暇させてもらっわ。美味しいスコーンと紅茶、ご馳走様」

「今度は何処へ行かれるのですか？」

マッドが椅子から立ち上がると、それを見送ろうとして所長も立ち上がる。

「この国以外の国かしらね。これから行くところはフランス共和国。しばらくはそこに滞在する予定なわけ」

「そうですか。レスティナはお気に召しませんでしたか？」

「んー、結構気に入ってただけだね。指導者が替わると、国もがらつと変わるでしょ？ だから、念のためよ。所長も、何も知らないわけじゃないでしょ？」

話を振られて、所長はマッドへ静かに頷く。

それを見て、マッドは立ち上がったままだった身体をしつかりと彼に向けた。

「まっ、そんなわけだから、もしかしたら二度と会うこともないかもしれないわね。色々アリガト。長生きしてね。で、いざつてときは私を呼んでね。これでも私、医者なわけだし」

「頼もしい限りですね。億が……………いえ、兆が一のことがあります。たら、是非お力をお借りしたいと思えます。その時はどうぞよろしくお願いしますね」

そう言っつて、二人は握手する。

これが最後の握手になるかもしれないのを感じてか、その時間は長いものだった。

そして、その右手達が離れたと同時に、所長は来たときと同じように深々と御辞儀をした。

「またのお越しをお待ちしております」

顔を上げると、マッドは既に手を振りながらコヒナタのいる場所まで歩いていった。

その姿を、所長はいつまでも見送っていた。

131 裏町ラブソング #25 「全ては貴方の望みのままに！」 (後書き)

おわりのおわり、おわりのはじまり。

二月二十三日の夕方頃。比較的大きな船が、寂れた港に泊まっていた。

その船の所有者を表わしているであろう旗には、両手を繋ぎ合わせたようなマークが描かれている。言わずと知れた、裏町斡旋所のシンボルである。

そんな、滅多に見ない大きな船を目の前にして、シオンは両手を大きく広げて喜んでいた。

バーガンデイ家に預けられている間に買ってもらったのか、真新しいダツフルコートにチェック柄のマフラーを身につけている。それに、カノンが買い与えたニット帽と手袋もつけて、寒さ対策は万全である。

ユーリといえば、軍支給の黒いコートと革の手袋だけで、寒そうに車の傍で立っていた。

「うわー……おっきい船だね！ 僕も乗りたかったなあ」

「行き先が地獄じゃなけりや、カノンだって乗せてやりたかつたろうにな」

今日の昼過ぎ、カノンから電話が掛かってきて「港まで迎えに来て」との通達を受けたユーリが、軍の車を使ってここまで来た訳だが、肝心のカノンの姿は大勢の裏町業者に混じってまだ見つけれない。

「まったく、連絡寄越した張本人はどこに居るんだか」

ユーリは仕方なさそうにその人混みの中へ歩いていく。

シオンは船が次の港へ向けて出航していくのを楽しそうに両手を振って見送っていた。

わざわざ呼ばなくても後から追いついてくるだろうと判断したユーリは、一人、かの子供の姉を探しに足を進めた。

「カノン。仕事中のユーリ少佐様がわざわざ迎えに来てやったぞ

それは俗に言うサボリというやつである。

そんな職務怠慢をおおっぴろげにしながら、まばらになってきた人混みの中に入ると、金色の頭が二つ、黒色の頭が一つ見えた。三人が三人とも、しゃがみ込んで辛そうである。

「おつかえりー……と言いたい所なんだが、三人とも、その……色々大丈夫か？」

彼にしては珍しく、真剣に心配した声で話しかける。

一番に返事を返したのは、黒髪のクウヤだった。ふらふらと立ち上がり、疲れた表情を無理矢理笑顔に変えてユーリに向き直る。

「あ、ユーリさん……ご無沙汰してます」

「久しぶりだな、クウヤくん。なんていうか……痩せた？」

「その台詞は女性の方に向けたほうが喜ばれるかと思えます」

的確に返事を返すクウヤの隣で、青ざめた顔のレオラが両手で口元を押さえながら涙目になっていた。

「……おえ……無理、本気で無理。オレ、船だけは駄目……」

「おいこらレオラ、おれの隣で吐瀉物ぶちまけんじゃねーぞ。ぶちまけたら、おれもぶちまけるからな」

同じく気持ち悪そうな顔をしたカノンが、必死の形相でレオラから数歩離れる。しゃがみこんだままだったため、言うほど二人の距離は離れきれなかった。

「カノンさん、直接的な表現やめてください」

「クウヤ、お前も貰いゲロすんじゃねーぞ」

「貰い泣きみたいな表現やめてください」

船酔いに負けそうになっている二人と、疲れ切った表情のクウヤを見比べて、これからどうしたものかとユーリが悩んでいると、後ろから駆け足で走り寄ってくる足音が聞こえた。

「姉さん、おかえりっ！」

ユーリの横を颯爽と通り抜けて、がばっと姉へと飛びつく。

カノンといえば、さっきまでしゃがみこんで死にそうな顔をして



いたはずなのに、キラキラとした何かを周りに飛ばしながら、抱きついてきた弟をしっかりと受け止めていた。

背景には花が舞っていたように見える。

「シオン！ 一日ぶり、一日ぶりの再会っ！ 少し見ないうちにまた可愛くなつて！」

「えー？ そんなことないよ。姉さんも少し見ないうちに格好良くなつたね！」

「おうっ！ また一つ大人になつてきたぜ！」

「そうなの？ 姉さんすごい！」

「あははは、そうだろすごいだろ！」

「うん、すごいすごい！」

二人して両手を繋いでくるくと回りながら、楽しそうに会話を  
する。

さつきまでのカノンの姿は一体なんだったのか。ユーリは考えるのをやめて、いい笑顔をしながら「うんうん、仲良きことは美しきかな！」とかなんとか言っていた。長い間この姉弟の傍にいと自然と身に付く、逃避の一種である。

「僕はもう何も言わない」

「元気そうでいいな……」

「もう疲れた……そうだ、僕は貝になろう」

「うっ……あのくるくるした動き見てたら……気持ち悪っ……」

会話しているのかしていないのかよく分からないクウヤとレオラをバツクに、相変わらずシオンとカノンは回り続ける。

そろそろ止めに入ろうかとユーリが見守っていると、シオンが思わぬ地雷を踏んだ。

「で、姉さん。今度は何をしてきたの？」

「……………鬼ごっこ」

いきなり動きを止めて、両膝を地面へと付けるカノン。

言葉にするのも嫌だったらしい。心配して顔を覗きこんでくる弟に、出来る限り笑顔を向けながら（しかしその笑顔はやつれきって

いた)、この二日間の出来事をかいつまんで話した。

最初は三つ巴鬼の話を、最後には雪合戦になっていた話を。

「……というわけで、気が付いたときには何故か雪まみれになって倒れていたんだ……… たぶん、アサハカにやられた。最後に聞いたのが、アサハカの笑い声だった……！」

結局、朝葉香には負けたらしい。

悔しそうにスカートの裾を握るカノンと、その話を聞いて同情の念を隠さずにいるユーリ。

レオラは両手で頭を押さえて「雪玉、怖い……！」と言いながらがたがたと震え、クウヤに至っては「ふふふ、何の話ですか？ 僕、この二日間の記憶は抹消してしまったのでよく分からないんですが」と壊れた笑みを浮かべていた。

そんな中、シオンが今までの話を聞いた感想を述べる。嘘のない、心からの台詞だった。

「いいなあ、雪合戦」

「……よくない！」「……」

その雪合戦の生き証人、ではなく参加者だった三人が、声を揃えて叫んだ。

\*\*\*\*\*

裏町幹旋所の未来を賭けた三つ巴鬼が終了したその日の夜、アンジユはいつものように紅茶を三人分用意して、所長室へと歩いていった。

その表情は、いささか不満げである。

それもそうだろう。今回の三つ巴鬼で得られたものは何も無かった。それどころか、結局所長の掌の上で踊らされていたのと何も変わりはないのだから。

ティーカップを乗せたトレイを持っている所為で両手が使えないのを良いことに、アンジユは足でドアをノックした。

「失礼します。紅茶をお持ちいたしました」

「ご苦労様です」

その言葉と共に、パレットが内側からドアを開ける。彼と顔を見合わせると、二人は同時に溜息を吐いた。深い深い溜息だった。

パレットもまた、不満げな表情をしていた。しかしそれ以上に疲れた様子が隠しきれていなかった。

「良い香りです。今日はマサラティーですか？ …… そうそう、裏町業の皆さんは、無事お帰りになりましたか？」

アンジユからティーカップを受け取りながら、所長がそう尋ねる。上等そうな椅子に腰掛け、手に持った懐中時計の蓋を何度も開閉していた。

「ええ。所員達がそれぞれの港に向けてお送りしました」

もう一つのティーカップをパレットに手渡しながら、アンジユは業務的に言葉を述べた。

最後に自分のカップを取って、テーブルの上にトレイを置く。

くるりと部屋を見渡してみるが、昨日と変わったようなことは一つも見当たらなかった。

「結局、以前と何ら変わらないままですね」

近くにあった一番質素な椅子に腰掛けて、アンジユは紅茶を一口だけ飲む。

護衛人のパレットは相変わらず立ったままで、カップに息を吹き

かけながら丁度良い熱さになるのをまっていた。

そんな二人の姿をレンズ越しに見ながら、所長はいつになく優しい声色で話しかけた。

「いいえ、そんなことはありませんよアンジユ。不変のものなど、この世には存在しないのですから……ふむ、そろそろ時間ですね」

さつきから何度も開けたり閉めたりしていた懐中時計をやっと胸ポケットに仕舞って、所長はゆっくりと立ち上がった。

その意図が掴めなかったアンジユとパレットは、己の疑問を口に出そうとはせず、黙って所長の後を目で追う。

当の本人は、杖を使ってゆっくりと歩みを進めていく。

二人が訝しげに顔を見合わせていると、目的の場所であったドアにやっと辿り着いた所長が、にこりと彼等に笑いかけながら言った。

「紹介しましょう。今日からこの裏町幹旋所で働くことになった、新しい仲間です」

静かに、ゆっくりと開け放たれていくドア。

その向こうで、小さな少女が微笑んでいた。

銀色の長い髪はふわふわとしていて、まるで人形のよう。

あまり見かけないその赤い眼は綺麗に澄んでいて、ゴシック調のドレスがとてもよく似合っている。

少しだけ大人びて見える少女だったが、手に持った兔の人形がほんのちよつとの子供らしさを覗かせていた。

少女は高い声で挨拶をする。

「はじめまして、こんばんは」

一歩ずつ、しっかりとした足取りで部屋の中へと入ってくる。

それを細くなった目で見つめながら、所長は少女の肩に手を置いた。

「この子の名前はアリス・ブライティン。彼女を、これから私の後継者として育てていくことにします」

所長の言葉に、二人はただただ呆気にとられるしかなかった。あまりにも突然すぎる発表に、頭の回転が追い付かなかったのだ。

いつまでたつても何も言わない彼等に、アリスはふわりと微笑む。「よろしくね。アンジュ、パレット……………ひゅ!?」

アリスが二人への言葉を言い終わつたその瞬間、所長の両手が彼女の両頬を思いつきり引つ張つた。

むぎゅ、とでも音が付きそうなほど、しっかりと掴んでいる。

所長は相変わらず笑顔のまま、その柔らかい頬を上下左右、手加減など全く無しに力強く引つ張つた。

「おやおや、二人は貴女よりキャリアを積んでいる先輩なのですよ？先輩呼び捨てとは何事ですか。言葉遣いを改めなさい、アリス」

「……………よ、よろしくおねひゃいひひゃふ……………!」

「はい。良く出来ました」

パツ、と両手を離れた所長は、とても満足そうな表情をしている。それとは反対に、真っ赤になった両頬を押さえて、涙のうっすら浮かんだ目でアリスが何かを恐れるように彼から数歩離れた。

「ほっほっほ。貴女にはまず礼儀から教えなければならないようですね、アリス」

出鱈目にいい笑顔をしながらそんなことを言うものだから、アリスは近くに居たアンジュの影に隠れた。

すっかり怯えきつた彼女をどうしたものかと、困つたように、だけど少しだけ笑いながら目を合わせるパレットとアンジュ。

「皆さん、これから忙しくなりそうですよ」

楽しそうに言ったのは、一体誰だったのか。

大きな変化の訪れた部屋の中は、甘いマサラティーの香りで満たされていた。



132・裏町ラプソディ #ending「幹旋所帰りの三つ巴」(後書き)

はじめまして、小さな裏町業者さん。  
これからの貴女に、たくさん幸せがあることを願って。

間奏曲 拾参曲目「切り取られた空」(前書き)

ユリ・バーガンディが、ユリウス・シュトラスだった頃の話。



間奏曲 拾参曲目「切り取られた空」

ハロー、ハロー。

何処かにいる誰かさん。

この声が聞こえますか？

俺の音が届いていますか？

この世界は不幸なことばかりです。

もしもこの声が聞こえるなら、どうかお願いします。

俺の手を握って、何処か遠い場所へ

そう例えばアナタのいる場所へ、連れて行ってくれませんか。

切り取られた空は、酷く滑稽だ。声には出さず、ユリウスは一人  
そう思う。

床に寝転がる彼の幼い両目の先に映るのは、小さな小窓に切り取  
られた正方形の青色だけだった。

暫くその小窓を見つめていたユリウスだったが、サイレンの音を  
聞いて、むくりと起きあがった。

「……始まった」

レスティナ国軍直属兵器開発部の朝が。

小さな部屋で呟いたユリウスは、その部屋の壁にかけられたカレ

ンダーに印を付けた。日付を確かめる為に引かれた、沢山の線。  
もう何度目になるか分からないこの行為を終え、ユリウスは再び  
小窓の前へと戻った。

彼の座った位置から、少しずれた場所に、数ヶ月前の新聞がぐし  
やぐしやになつて捨て置かれていた。古くなつたからではなく、人  
為的にされたようだった。

新聞の大きな見出しは、その頃に起こつた戦争の話がでかかと  
載っていた。

『シウトラス博士の新型兵器導入により、レスティナ軍優勢』

内容は、セデナス王国との対戦で使用された新型兵器が、セディ  
ナ人を追い詰め、とうとうレスティナ国の勝利が見えた、と。

レスティナの勇戦を称えるために飾り立てられた言葉ばかりが、  
そこには羅列されていた。

「ただの、大量虐殺じゃねえか」

ユリウスは自嘲気味に笑つて、言葉を吐き捨てる。そしてそれを  
力無く蹴った。バサバサと音だけが派手に鳴つて、床には無造作に  
広がった新聞が残るだけだった。

そうやって、この新聞はぼろぼろになっていくのだろう。だけど、  
捨てられずにいる。忘れないために。

蹴られた新聞の近くにあるのは、丁度次の週にあたる新聞だった。

『シュトラス博士、遺体で発見。セディナ人の仕業か?』

ユリウスはその新聞を一目も見ることなく、また蹴った。丁寧に折り畳まれていたお陰か、今度は少しだけ飛んだ。

「なんでもかんでも人の所為にしやがって」

「おい、何してるんだ。さっさと用意しろ」

ドアを開けて入ってきた軍人が、ユリウスに怒声を浴びせた。ユリウスは黙って男を見る。何かを言おうと口を開いたが、結局その言葉を飲み込んで、外へ出てゆく彼の後に付いていった。

「俺は、作りたくない」

「何がだ?」

「俺は、人を殺すための道具なんか、作りたくない」

「……悪いがお前の意志など関係ない。これは軍部からの命令で、絶対なんだ。それに軍部だけじゃない。シュトラス博士もきつと、あの兵器の完成を望んでいた。だから、息子のお前がそれを叶えてやるんだ」

「そんなもの、望んでなんかない」

「どちらにしろ、お前はあれを完成させればいい。それだけだ。ほら、行くぞ」

毎日繰り返されるこの問答に、ユリウスは吐き気がした。何を言っても同じことしか答えない。ただ、黙って作ればいい、と。

ユリウス・シュトラスは、シュトラス博士の息子。彼の残した設計図を正確に解読できる、ただ一人の人間。存在価値はそれっぽっちだった。

「……あのさ、今日って何曜日?」

兵器に関することを話すのは無駄だと思ったのか、ユリウスは前に行く軍人に尋ねた。軍人は同じ速度のまま、ユリウスの方を見向

きもせずに答える。

「水曜日だ」

「そっか」

今日で、父が自殺して十五回目の水曜日だ。

ユリウスは廊下に転々と見える切り取られた空を見て、それらから逃げるように歩みを早めた。

正方形の青色は、彼を責め立てるように鮮やかだった。

空は、大きい方が良い。ユリウスはいつも思う。

空とは、広大であるべきだ。

何よりも大きく、誰の上にも広がるべきだ。

小さく狭苦しい空なんて、気味が悪い。

切り取られた空だなんて。

だから、あれは、空じゃない。

あれは。

そうは思うけれど、ユリウスは本当の空をもう忘れ始めていた。記憶が薄れてきている。

リトル・ファクトリーでの、幸福な記憶が。

「なあ、今日は何処へ行くんだよ？」

「今日は第二製造所だ」

「第二、か……」

必要なことだけしか喋らない軍人の後ろを、ユリウスはひたすら付いていった。誰かに付いていかないと、自分を見失うんじゃないかと不安になった。

もしかすると、もう見失ってしまったんじゃないだろうか。  
ユリウスは、襲いかかってくる不安に打ちのめされそうになって、  
立ち止まった。

ハロー、ハロー。

この声は聞こえますか？  
俺の声は届いていますか？  
俺は、生きていますか？

ああ、やっぱり駄目ですか。  
アナタの居る場所へ、連れて行ってはくれないのですね。

それじゃあ、

「何処にも居ないぞ！」  
「探せ！ 絶対に銃は撃つな！」  
「中尉、設計図も見あたりません！」  
「七班の確認は！？」  
「憲兵に連絡を」  
「東棟エリアは確認したか！？」  
「奴は設計図を持ち出した」  
「探せ！ 設計図を探すんだ！」  
「捜せ捜せ！」  
「ユリウス・シュトラスを捜し出せ！」

久しぶりに見た空は、果てしなかった。

大きくて、広くて、全てが偉大だった。偉大な存在。自分とは正  
反対の。

「やった……！」

ユリウスは細い路地を掛けながら叫んだ。

「やった……やったんだ！ 外だ！」

何度も転びそうになりながら、それでもユリウスは走り続けた。  
立ち止まったら、そこで終わってしまう気がした。不安が影にな  
って追いかけてくるような錯覚に陥って、それを振り切るように全  
速力で走った。

「あはははっ！ あはは！ やった！ はは、はははっ………ふっ  
……く、………うっ……」

笑いながら、いつの間にか泣いていた。

嬉しくて泣いているのか、哀しくて泣いているのか、もう何も分  
からなかった。分からないけど、それでも走り続けた。

何処へ行こう？ 何処へ行けばいい？ 何処へ行ける？

どこまで走っても、空だけが自分に付いてきてくれた。

切り取られた空なんかじゃない。

あの頃、いつでも見上げればそこにあった、本当の空。

何処へでも行こう。何処へだって行けばいい。何処でも行ける。

父の形見の設計図を握って、ユリウスは一度も後ろを振り返らずに駆け抜けていった。

手に握ったそれは、枷のように重かった。

ハロー、ハロー。

聞こえますか？

届いてますか？

分かりますか？

俺の、声が。俺の、想いが。

間奏曲 拾参曲目「切り取られた空」(後書き)

アナタとの思い出に蓋を閉めて、俺は。



133・寂しがり屋の二人（それでも僕等、気付かないふりをした）

レスティナ国、中央メトロポリスと東方ソナチネ地方の間の町。

国の中で一番花屋が多く、花の街とも呼ばれるその街の、最も賑わっている大通りに面した場所で道外れの始末屋レオリアナが店をかまえていた。

右手を花屋、左手を雑貨屋に挟まれたその店のドアには『open』のプレートが下がっている。

いまは一人もお客が来ていないらしく、店主のレオリアナは眠たそうに雑誌を読んでいた。

いくら天気が良くても、朝は誰だって眠いものだ。レオラはあくびを噛み締めて、ぺらりとページをめくる。と、同時に近くに置かれてあった電話が鳴り響いた。

「はいもしもし、こちら道外れの始末屋です……」  
すかさず受話器をあげたレオラだったが、その声はいつもよりも眠気がまじった声だった。

仕事の依頼かもしれないというのにそんな声が出てしまったことを後悔していると、相手がおつとりとした口調で話してきた。

『もしもし。その声はレオかい？』

「……アシュリーばっちゃん！ ひっさしぶりだなー」

『ほんと、久しぶりだねえ。あんたが村を出ていって、もう何年目だっけねえ？ 最近すっかり物忘れが激しくなってるね』

電話の相手であるアシュリーは、レオリアナ村でセリ師弟が世話になった人物だ。

もう七十も後半に差し掛かる彼女の声は、しわがれているもの、どこか落ち着く声色だった。

そんな彼女に懐かしさを感じながら、レオラは受話器に耳を傾ける。

「あー、何年だった？ 数えてねーや。それよりも、ばっちゃんが

電話をかけてくるだなんて珍しいな。いつもは手紙なのに」

『そうかい？ そういえばそうかもしれないねえ……電話よりも手紙の方がしっくりくるだろう？ まあ、今回は急用だからねえ』

急用と言う割には、おっとりと話し続けるアシュリーに、レオラの顔には苦笑が込み上げてくる。

「なに？ また師範代が何かしでかしたとか？」

『よく分かったねえ！ さすがは師弟……というべきかい？』

当てずっぽうに言ったはずなのに、ずばり的中してしまった。

苦笑から引きつり笑いに変わったレオラがしばらく黙っていると、彼女は話を続けることに決めたようで、ゆっくりと今回電話した件について説明し始めた。

『昨日、屋根の上にシルヴィが登っちゃってね……ああ、シルヴィっていうのはゴードンさん家の飼い猫なんだけど……それが、登ったは良いけど、降りられなくなっただみたいで』

「まさか、師範代がシルヴィを……」

レオラが言いきる前に、アシュリーが声を出す。

『いやあねえ、私は危ないからやめろって言ったんだけどねえ……』

…セリちゃんたら、そのまま屋根の上に登っていつちゃってね』

「やっぱりか！」

『無事にシルヴィは降りられたんだけど、セリちゃんが降りるとき、うっかり足を滑らせてねえ。セリちゃん、そのまま屋根から落ちちゃってねえ……』

アシュリーの最後の台詞を聞き取って、それをレオラが理解するまでの所要時間、およそ十秒。

「……落ちた!？」

『そう、落ちた。落ちただけならいいんだけど、骨を折っちゃったみたいだねえ。聞いていなかったかい？』

「聞いてねえよ！」

『やっぱりねえ。セリちゃん、別にレオに言うほどのことじゃないって言ってたから……一応電話した方が良いと思って、こっぴどった』

電話したんだけどね。それでセリちゃんの折れた右足なんだけども………レオ？ 聞こえてるかい？ ……おやまあ、あの子ったら人の話を最後まで聞かずに……。まったく、師弟そろって困ったもんだねえ」

受話器の向こう側で、アシュリーが心底困ったように呟いているのと同じ頃、レオラの店のドアには『close』と書かれたプレートが下がっていた。

\*\*\*\*\*

「ただいま！」

レオラがアシュリーとの電話を一方的に切って、その後必要最低限の物だけ鞆に詰め、自分でもよく分からない内に駅まで走り、ノースタウン行きの列車へ飛び乗り、車内でもじっと座っていることが出来なくてうろろると歩き回り、目的の駅に着いた瞬間から両足がもつれそうなくらい速く走って、まだ雪が残る林を抜け、レオラリアナ村に帰ってきた時の時刻が夕方四時を過ぎた頃。

午前十時に花の街を出て、この村に辿り着くまでにかかった時間、およそ六時間。レオラは今までにかかった時間の中で、最短所要時間の記録更新をした。

「師範代！ 大丈夫ですか!？」

帰って来るなり家のドアをぶち破り、小走りで彼女の部屋まで行

き、そこで少しだけ息を落ち着かせて出来る限り丁寧にドアをあけた。

恐らくそこで松葉杖でもついでるだろうセリ・オーシュを探す為に。

「あれっ？」

だが、そこにセリの姿は無かった。

慌ててレオラが、他の部屋のドアを開ける。やはりそこにも彼女の姿は見当たらない。

一体どこへ消えてしまったのかとレオラが所在なさに廊下に立ち往生していると、階段を登ってくる音が聞こえた。

「……………あれっ？」

「なんだ、レオラか。帰ってくるなら連絡くらいしろ」

声の持ち主は、レオラが探していた人物、セリ・オーシュその人であった。

ただし、話に聞いていた彼女の様子とは全く違っている。何故ならその人は、松葉杖などつかず、普通に階段を登ってきていたからだ。いや、レオラが呆けている間に、彼女はすっかり登り切っていた。

驚いた表情で、それを見るレオラ。廊下に立つ彼女は、どこも怪我などしていなかった。

訳が分からない。自分は足を折った彼女を心配して、あんなに急いでここまで来たというのに、これは一体全体どういうことなのか。「師範代……………なんで普通に歩いてんすか？」

「む？　なんだ、普通じゃない歩き方をした方が良かったのか。帰って来るなり注文の多い奴め。ほら、これで満足か」

タップダンスにも似た軽快なステップを踏みながら歩み寄ってくるセリに、レオラはさらに呆気にとられた。凄いのは凄いのだが、なんとも直視しづらい歩き方をしてくる人である。

「……………す、すげー！　速すぎる足の動きが、気持ち悪さを通り越してやけに爽快なんすけど！　こんなに軽快なステップを踏みながら

歩く人、オレ初めて見……………」

そこまで言って、はっと我に返る。

「じゃ、な、く、て！ オレ、師範代が屋根から落ちて骨を折ったって聞いたんすけど！」

「ああ、あれか。なんか知らんが、一晚寝たらくつついてたぞ」

「あんたの身体はどうなってるんだ」

「はっはっは。これぞ人体の神秘というやつだな！」

「神秘って言葉で片付けられる師範代が真面目に凄いです」

すっかり力が抜けてしまい、その場で膝をがくりと床に着けてしまった弟子を見て、セリは人体の神秘について説明を始める。

「ほら、紙で指を切った時、すぐに皮膚同士をくっつけたら傷口が塞がるだろう？ あれと同じ感じなんじゃないか？」

「師範代、紙で指を切ると屋根から落ちるのは次元が違いすぎっすよ…………！」

もう何からつつこんでいいのか分からなくなって、脱力したままのレオラを見下ろして、セリは両手をぼんと鳴らした。

何か閃いたようである。

「なんだ、お前。もしかして心配してくれたのか？」

今更過ぎるその言葉に、レオラはすくつと立ち上がった。セリを見た。彼女の背丈を追い越したのはもう随分前の話だったが、今日はそれ以上に、目の前の親代わりが小さく見えた。

レオラがじつと見つめると、彼女はきよとした顔で首を傾げた。

「…………心配しないでも思ったんすか。あー！ もういいっ！ オレ帰る」

「もう帰るのか？ もっとゆっくりしていけばいいじゃないか」

「いや、帰ります。なんかもう、馬鹿らしくなってきた」

「拗ねるな拗ねるな」

「拗ねてません！」

引き留めようとしても、それをはね除けるようにして階段を下り

ていってしまうレオラ。

その後ろ姿を寂しそうに見つめていたセリは、また両手をぼんと鳴らした。

そして、すぐにしゃがみこんだ。

「……イタツ！ いたたたたた！ いかん、左足に痛みが！ ……レオラが今夜は泊まって行って、しかも私に夕食を作ってくれたら、治る気がしないでもない」

そんなわざとらしいセリの行動に、いちいち振り返ってレオラがつっこむ。

「都合の良い足だなオイ！ っていうか、右足折ったんじゃ無かつたんすか」

「もう、いちいち五月蠅い奴め！ そんな奴が作ったグラタンなんか食わんぞ！」

「……グラタンが食いたいんすね？ はあ……もう、しょうがねえな」

そう言いながら、階段を下りきったレオラは、そのまま玄関には向かわずにキッチンの方へと歩いていった。

しょうがないと言いながら、彼の表情が少し笑っていたことを、セリはちゃんと知っていた。

レオラは、そういう人間だからだ。

「よし。私も手伝うか」

鼻歌を歌いながらセリも階下へ降りる。

なんだかんだ言っつて、セリも自然と頬が緩んでしまっていた。階段を一段とばしで降りているのがいい証拠だ。

弟子の前でこんな姿を見せてはいけないと、両手で頬を押さえ、平常心を保ちながらキッチンに入ると、肝心のレオラはダイニングテーブルの上に無造作に置かれた大量の封筒を不思議そうに見ていた。

「師範代、これ何ですか？ こんなにたくさんの手紙」

「ああ、ただのゴミだ。気にするな」

「ゴミって……開けた様子もないじゃないですか。軍部からの手紙なのに」

レオラが指差すそれらには、しっかりと軍部の封蝋が押されていた。

だが、そのどれにも開封された様子は見えなかった。

読んでいない手紙が、何通も溜まっている。これはもう、意図的に読まないようにしているのが丸分かりだった。

その内の一つを手にとって、レオラがそれを開けようとぴりぴり封筒を破っていると、セリはそれを取り上げ、そしてテーブルの上に放り出されていた手紙を抱え込むように両手で集めて、躊躇することなく一気にゴミ箱へと捨てた。

「おわっ！ な、何してるんすか！」

突然捨てられてしまった手紙達を、慌てて駆け寄ってきたレオラがゴミ箱から出しているのを見つめて、セリはただ一言、呟くように言う。

「私は、軍が嫌いだ」

まるで独り言のようだったそれを聞いて、レオラは手紙を拾う手を止めた。

「……………師範代は、昔から軍が嫌いでしたよね」

「軍の所為で、私は大切な友人を二人も失った。だから、軍は大嫌いだ」

二人の大切な友人。

レオラも、彼等のことを知っていた。

一人とは残念ながら面識がなかったが、もう一人とは喋ったこと

もある。

どちらも、レオラ自身の友人　カノンとフィンの師匠で、家族だったのだから。

レオラが何も言わずにいると、セリはくるりと背を向けた。

「この手紙は恐らく、全部軍からの依頼の手紙だ。軍部から、始末屋セリ・オーシュへのな。だけど私は、軍の依頼だけは絶対に受けないと決めている。だから、これはゴミなんだ」

さあ、グラタンを作ろうか。

そう言ったセリの表情を、レオラは見逃してしまった。彼女は一体どんな顔をしていたのだろうか。

怒っていたのだろうか。それとも、泣きそうだったのだろうか。

もうこの話はしたくないとも言っているかのように、わざと大きな音を立てながら調理器具を取り出すセリと、後ろのゴミ箱を交互に見て、レオラは頭をがりがりと掻いた。

話したくないことを、無理矢理聞き出すほど自分は非情ではない。もう一人の自分なら、どうしたかは分からないけれど。

「……師範代。オレがホワイトソースを作るんで、師範代は材料を切ってくださいね」

「うむ。了解した」

久しぶりに二人並んで、キッチンに立つ。

後ろ姿は、やはりレオラの方が大きかった。

セリからは見えない位置にあるポケットの中に、さっき捨てられた手紙のうち一枚が、しっかりと収まっていた。



133 寂しがり屋の二人（それでも僕等、気付かないふりをした）（後書き）

僕等はいつも寂しい。  
だから、二人は一緒にいる。

134・死に損なつた迷い猫（知らないふり、という逃避論）（前書き）

最近の出来事なんかどうだっ  
ていい！  
過去のことをグダグダ言  
うのはよせ！  
世の中がくだらないことは  
十四、五歳の少年でも知  
っている

【ケストナー／自殺戒】

134・死に損なつた迷い猫（知らないふり、という逃避論）

「今日で二月も終わりだね」

「そういえばそうらしいね」

「明日からもう三月だよ」

「そりゃあ、もう一度二月が来るわけないしね」

「君さ、素直に『そうだね』って言えないの？」

フィンの言葉へ大袈裟に溜息を吐いてみせて、クウヤは手に持っていたスプーンでくるくるとコーヒートを混ぜた。

砂糖もミルクも入っていないただのブラックコーヒーだったため、混ぜる必要も無かったのだが、それでもクウヤは暇を潰すようにくるくるくるくると、と繰り返して遊ぶ。

フィンは相変わらず来客を放つたらかしにしたまま、忙しそうに本棚の前を行ったり来たりしている。

彼が第二倉庫の整理をしていたところにクウヤが訪ねてきて、約二時間が経過していた。

フィンが「あと少しで終わるから待って」と言つてクウヤにコーヒを出したのだが、クウヤは既に三杯目のコーヒを飲んでい

た。もちろん、自分で勝手におかわりをして。

フィンの「あと少し」は、まだかかるらしい。スプーンで掻き混ぜるのをやめたクウヤは、今度は背もたれが自分の前に来るようにして、くるりと椅子に座り直した。普通の座り方とは逆の方法である。

「三月か……もう春になるんだね」

しみじみとクウヤが呟くと、フィンは呆れたように返してくる。

「それはまた随分と気の早いことで」

「そうかな？」

「そうさ。まだ春なんて当分先の話じゃないか」

背もたれに頭を預けて、横向きにフィンを見る。乱暴に本棚へと資

料をつつこんだ所為で、ばさばさと何冊かのファイルが落ちてきていた。全く要領の悪い人間だ。

「手伝おうか？」

「大丈夫だ、すぐに片づく」

「そう言つて、もう二時間と十二分が経つたんだけどね」

「コーヒーに飽きたのなら、勝手にキッチンでも漁つてくれ。サスケ以外なら食べてくれて結構だ……… ああ、でもサスケは今家に居ないから、そもそも無理な話だったね」

サスケのことを一体なんだと思っているのだろうか。そう考えさせられるよな台詞を、一度もクウヤの方を向かずにフィンは言った。カップの中身と、この家の主人を見比べて、クウヤは席を立った。「じゃあ、お菓子でも探してこようかな」

「どうぞ自由」

四杯目のおかわりをいれるために空になったカップを持って、クウヤは部屋を出た。

\*\*\*\*\*

ダイニングキッチンは、先程まで居た第二倉庫とは違って綺麗に整頓されていた。

二人用の小さなテーブルに、二つの椅子。

食器棚にも、コップや皿が二つずつ。来客用にとってあるのか、

同じ模様をしたティーカップだけは、何個も取り揃えてあった。

クウヤはその食器棚の一番下にある、一番大きな戸棚を開けた。

「ビンゴ！ って言っても、僕の食べれそうなものは無いか」

発見した菓子箱達を取り出して、それをいくつかテーブルの上に並べる。

カカオが半分以上入ったチョコに、ソルトキャラメル。どれもこれも、一癖持った菓子ばかりである。ただ甘いだけのお菓子が無かった。

唐辛子チョコなんて、一体誰が何の目的で作ったのだろう……というより、発想力が凄い。クウヤは素直に感心する。

食べれるものと言えば、せいぜいクラッカーくらいなものだろうか。

大して好きでもない食べ物を口に放り込みたいほど、お腹は空いていない。クウヤは菓子探索を中止して、近くの椅子に腰掛けた。

ちょうど部屋の真ん中に位置する場所に置かれたそこから、ゆっくりと首だけを動かして部屋を見回す。そして、ある一点でその動きが止まった。

「……へえ。こういうの、無頓着に見えたんだけど」

それは、部屋の壁に掛けられたカレンダーの横にある、何枚ものコルクボード。

そのほとんどがスケジュールやらメモやら手紙やらで埋め尽くされたボードになっていたが、その内の一枚だけは違っていた。

たくさんの、写真。思いつきの欠片とも言えるそれらに興味を湧いたクウヤはすぐに立ち上がって、それが見える距離まで近寄った。

「これが、フィンの師匠かな……」

一枚一枚が重なるように貼られた写真達の、ほとんどに写っているその人物を見てクウヤは呟いた。

見た感じでは、自分と同じ和国人のようだった。

「で、これが小さい頃のフィンか。このころはまだ無愛想じゃないなあ」

小さな四角形の中、遠慮がちに、だけど嬉しそうに笑うフィンは、彼の兄弟子であるアルル

・キャラメリゼに頭を撫でられていた。

滅多に見ないその表情を、本人の知らないところで勝手に見てしまったことに少しだけ後ろめたくなったクウヤは、慌てて目を逸らすように壁にかかった時計を見る。

「そろそろ片付いてるだろうな」

思っていたよりも長居してしまっていたらしい。針の位置が来たときよりも半分進んでいる。

クウヤは一度テーブルまで戻り、空のカップを手にとってコーヒーのかわりをいれに行く。

「……フィンも飲むよね」

その途中で少し立ち止まって、食器棚からも一つカップを取り出す。二つだけしかない種類のカップだ。

しかし、そのカップを何秒か凝視したクウヤはそれを元の場所に戻して、来客用のカップに変えた。

なんとなく、自分が勝手に触っていいものではないような気がしたのだ。

「さて、と」

二つ分のコーヒーを用意して、クウヤは第二倉庫へと戻る。

部屋を出る前に、もう一度だけあのコルクボードを見た。何故か懐かしい感じがした。

\*\*\*\*\*

思っていた通り、第二倉庫の整理は終了していたようで、先程までクウヤが背もたれを反対にして座っていた椅子に、今度はフィンがぐったりと腰掛けていた。

「おつかれ。コーヒー飲む？」

「キミが優しいと気持ち悪いね」

「コーヒーぶっかけるぞ」

人の好意を素直に受け取らないフィンに苛立ちつつも、クウヤは何処か座れそうな場所を探す。

残念ながらこの部屋には椅子が一つしか無いので、仕方なく、いなくなつた資料を固めた場所に座つた。

「疲れた……本当に疲れた。いつも思うんだ。ちゃんとこまめに整理しようって。だけど、結局こうなるんだ……疲れた」

「あはは」

全身で疲労を訴えるフィンに苦い笑いを零して、カップに口づける。こんなにもコーヒーを飲んでしまつたら、今日は眠れなさそうだ。そんなことを思つて、クウヤはぼんやりと本棚を見た。

来たときよりも断然綺麗になっている。一体どういった並びになっているのかは分からないが、フィンなりの規則でしっかりと並べられた資料達は、整然とそこにあつた。

それらを見てふと思いついた言葉を、クウヤはよく考えもせず口に出した。

「そういえばさ、なんでフィンは情報屋をやつてるの？」

「さあ……なんでだろうね。改めて聞かれると、少し悩むよ。キミこそ、なんで都合屋をやつてるんだい？」

「……この手の質問って、結構答えにくいものだよ。僕が都合屋をしている理由か……なんだつたっけ」

もう一度コーヒーを飲みながら思考を巡らせる。フィンも同じよ

うに、どこか違う場所を見ながら考えていた。

二人が黙りこんでしまった為、部屋には静寂の時間が流れる。

気まずさを感じてきたクウヤが、もう一度話し出すのに数分とかからなかった。

「あー、やっぱり思い出せないや。……僕さ、疑問を解消するのが苦手なんだよね。どうしてこうなんだろう、なんでこうなんだろうって思うんだけど、いつも答えが出せないままで終わっちゃうんだ」

「答えの出ない疑問なのかい？」

「そうかもしれない」

「へえ……例えば？」

「例えば、どうして僕は生まれたんだろう、とかね」

これはもう、ずっと昔から思ってることだよ。

まるで大したこと無いような声色で言われたその一言に、フィンは馬鹿にしようと口を開ける。だけど横目で見たクウヤが声とは反対に深刻そうな顔をしていたものだから、何も言えなかった。

結局使わなかったそこにコーヒーを流し込み、それと一緒に言葉も飲み込んだ。

何も言わないフィンに代わって、クウヤが話を続ける。

「どうして僕は生まれたんだろう。どうして僕は生きてるんだろう。馬鹿みたいだろ？ その答えを出せたことが、一度も無いだなんて」

自嘲気味に笑ったクウヤに、フィンは今度こそ声を出す。落ち着いた口調で、その疑問に答える。

「……それが良いことなのか悪いことなのかは別として、キミもボクも、この世界に生きることを許された。それは、誰かがその存在を必要としてくれたからなんだよ」

喋り始めた彼を、クウヤは穴があくほど見つめる。

「生きること。それが、この世界に生まれたボク達に与えられた理由で、権利でもあるんだって。小さい頃、ボクの師にそう教わったよ」



「……昔の僕には、それが義務のように感じられたよ」

カップを両手に持ち、クウヤは口角を上げて話す。

「生まれてしまったから、仕方なく生きる。僕はそんな子供だった」  
過去形で語られる台詞に、フィンは問いかける。

「今は？」

その問いかけに微かな笑みを見せて、クウヤは肩を竦めた。

「さあね……。そうだ、フィン。お花見って知ってる？」

「ボクに知らないことがあるとでも？」

突然の話題転換に戸惑いつつも、フィンはしっかりと嫌味を言った。

「ふーん、知ってるんだ。カノンさんは知らなかったよ。この国にはそういう風習は無いつて言ってたけど、さすがは全体観測だね」

「お褒めにあずかり光栄だよ。それにしても、なんでいきなりお花見の話なんだ？」

よっ、という掛け声とともに立ち上がったクウヤへ、訝しげに言う。

自然と見上げる形になってしまった彼は、カップを床に置いたままのびをする。

ずっと同じ体勢でいることに疲れたらしく、何度か腕を伸ばしながらその質問に答える。

「詳しいことは言えないけど、僕、三月に入ったら大きな仕事をす  
るつもりなんだ。結構大変な仕事でさ。正直、やるかやらないか、  
今も迷ってるくらいなんだけど」

くるりとフィンに背を向けて、窓の傍まで歩いていく。段々と遠  
ざかっていく彼の声を聞きながら、フィンも同じように窓を見る。

「もしその仕事を引き受けるとしてもさ、その後に何かご褒美みた  
いのが無いと、頑張れそうにもないんだよね。だからさ、四月に  
なったら、お花見しようよ。カノンさんとかレオラとか誘って、み  
んなで」

窓枠に肘をかけて、フィンに向き直るクウヤは、どこか寂しそう

な顔をしているように見えた。

声だけ聞けば、楽しそうな計画なのに。まるで、いつかのあの人のような、楽しい花見の計画。

「いいよ」

過去と現在が交錯しそうになったフィンには、短い返事でそれを承諾した。

「何か約束をしておけば、キミは死なないと思うから」

「死ぬ？ 僕が？」

「そうだよ」

「なんで？」

それはクウヤにとって予想外の言葉だったらしく、本当に不思議そうな顔をして質問してきた。

フィンはいつものように面倒臭がることはせず、ちゃんとその問いかけに答えた。疑問を解消するのが苦手な友人の為に。

「キミ、いつも他人と一線引いてるから。自分なりの境界線張ってそれ以上近付かないようにしてる………それがまるで、いつ死んでも大丈夫なように、準備してるみたいだったから」

フィンに言われた言葉に、笑うことも怒ることも出来ないまま、クウヤは無表情に回答者を見つめた。何を考えてるのか、いつにも増して分らない。

そんな彼を、フィンもまた目を逸らさずにじっと見ていた。

自分の答えが合っていたのか、それとも外れていたのか。何も分からないまま、ただ質問者を見ていた。

二人は、似ているようで違っていた。

死にたがりだった人間と、死にたがりのふりをした人間。それは根本的に違っていたのだ。

しばらくは互いに互いを見ていたが、前者が口火を切ったことでその静寂は消えた。

「僕、いまでも時々、思うんだ。この世界って、実はものすごくくだらないものなんじゃないかって」

「そんなこと無いよ」

すぐに言い返して、首をゆっくりと左右に振る。

「……そう言い切れないボクもまた、寂しい人間なのかもね」

最初に沈黙を壊した少年は、笑顔を作った。答えた少年は、無表情を貫いた。

二人は、似ている。だけど、同一ではない。それは本人達が一番知っていた。

「フィン。やっぱり僕、今回の仕事を引き受けることにするよ。だからお花見の約束、忘れないでね」

「僕の記憶力を馬鹿にするな」

窓の傍から離れて、クウヤは七歩、前に進む。

それと同時に、フィンも立ち上がる。手には、真新しい資料。それを目の前の人間に渡して、フィンは言う。

「キミが欲しがっていた、クロウ・リアハーデンの情報だよ」

「ありがとう」

笑った顔は、本心だったのか。それとも、

134 死に損なつた迷い猫（知らないふり、という逃避論）（後書き）

強がりには、昔から得意だった。

135・三月三日のメモントモリ（貴方に執行猶予などいらぬ）（前書き）

m e m e n t o m o r i / m e m e n t o m o r i

ラテン語で「自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな」という意味の警句。死の警告。

「死を想え」「死を忘れるな」「汝死を覚悟せよ」

135・三月三日のメモントモリ（貴方に執行猶予などいらぬ）

とうとう、この日が来てしまった。

軍に属しているほとんどの人間が、口にせずともそう思ったことだろう。

それほどまでに、彼の死という出来事は大きかった。

スケル・ワルツハイネ　中央軍の総司令部最高責任長だった彼の逝去は、その日のうちに中央軍をはじめとする、全ての軍へ通達された。

国軍に属する者も、警察軍に属する者も、全ての軍人がその知らせを受けた。

ここソナチネ地方軍警察隊も、例外では無かった。

「……ワルツハイネ総司令官が、お亡くなりになったそうだ」

ユーリは、その言葉を上司のマス・アラルガンド・キャラメリゼから聞かされていた。

「そうですか」

そう言いながらも、ユーリの頭の中は「やっぱり」という言葉で埋め尽くされていた。

ユーリは、総司令官のことを大して知らない。顔くらいなら見たことはあるかも知れないが、やはりそれは『知っている』の基準には入らない気がした。

ただ、治らない病気だったらしい、ということを知っている。いつ死ぬか分からないくらい、衰弱しきっていたことも。

だからこそ、ここまでもったのが奇跡にも近かったのだ。

ユーリを含む何人かの軍人は、マスに倣って黙祷した。

知らないというだけで、人の死はここまで軽く感じられるものなんだろうかとユーリは不思議に思った。

「明日は、式服で来るのを忘れるな」

部屋から出ていくマースの言葉を聞いて、ユーリは思った。  
一体何人の人間が、彼の葬列で泣くのだろうか、と。

「よつす」

「メルニカさん！ 久しぶりっすねー！」

慌ただしくなるのは明日からのようで、比較的いつもどおりの業務をこなしていたユーリの元にその人が現れたのは、間食するのに適した午後三時のことだった。

「久しぶりだね。警察軍はもう慣れた？ …… って、もう二年も経つんだもん、慣れるわよね」

給湯室の入り口付近に立つ彼女は、廊下を行き来する軍人達になり注目されている。

警察軍の敷地内で国軍の制服を見かけることが少ないので、メルニカ存在は異様に目立っていた。

丁度休憩を取ろうとコーヒーを入れに来ていたユーリは、慌ててもう一つのコップを出してメルニカの分も用意する。

その熱すぎるコーヒーを注ぎながら、ユーリは彼女に話しかけた。  
「そっか、二年も経つんすねー。メルニカさん、今日は非番ですか？ あれ？ でも軍服……」

「んー……いや、うん。下っ端は、今日やること無いし、ね。人が死んだつてのに、早速国軍会議よ。それも上層部だけのね」

上層部だけで開かれる、国軍会議。

その言葉を聞いて、ユーリの肩がぴくりと動いた。

大方、次の指導者を誰にするか、形だけでも話し合おうという魂胆なのだろう。誰が次にあの席に座るかなど、もうとっくに決まったようなものだと言うのに。

そもそも、限られた人間しか居ないそれを、会議と呼ぶとはおかしな話だ。

「やんなっちゃうわよ。みんなピリピリして」

メルニカが心から嫌そうに言ったのを聞いて、「ああ」とユーリは声を出し、その後どんな顔をすればいいのか分からなかったのとおりあえず笑っておいた。

「とうとう死んじやいましたねー」

「死んじやったわねー。いい人ってわけじゃなかったけど、すごく悪い人ってわけでもなかったよね」

「俺達、これからどうなるんすかねー」

「さあねえ……そうそう、私、明日限りで軍辞めることにしたんだよね」

ユーリから手渡されたコーヒーに息を吹きかけて冷ましながら、彼女はなんでもないことのように言った。

「……そうですか。今までお疲れ様でした」

「あつ、でも総司令官が死んだからとか、そういうんじゃないからね？」

しんみりと返してきたユーリに、メルニカが慌てて首と左手を振る。

そして、振っていた手の甲を見せて、幸せそうに笑った。その薬指には、控えめな指輪がはめられていた。

「実は私、結婚するの。今日はそれを言いに来たんだよね」

衝撃の告白に、ユーリは吐きそうになったコーヒーをごくりと飲み込んだ。

「……うぐっ……どえええっ！？ まじですか！ うわー、まっさかメルニカさんが結婚出来るとは」

「バーガンディくん、ぶん殴りたいのかしら？」

「ちなみにお相手は誰なんですか？」

殴られるのを回避しようと、二歩だけ距離を取って尋ねる。

彼女にコーヒーを渡していなかったら、今頃は頬に綺麗な紅葉が貼り付いていた頃だろう。

「誰だと思っ？」



「……タイトさん、かな？」

「あれ、なんで分かったの？」

「だって、俺が国軍に居た頃からそんな雰囲気だったじゃないですか。ジンさんも、『あの二人はいつかくつつくね！』とかなんとか言っていました」

そう遠くない日を思い返しながら、ユーリはコップを空にした。

「ジンさんが？　へー、予想当たってるじゃん」

「なんか、懐かしいっすね。ジンさんのこと思い出しちゃいましたよ」

「あら。私なんか、忘れたこと無いわ。なんたって初恋の人だし？」  
「冗談だけど。」

そう言った彼女は既に背を向けていたので、ユーリにはそれが本当に本当だったのか、本当に冗談だったのかは判別できなかったが、適当に「そうっすね」と相槌を打った。そうすることが一番良いように思えた。

「タイトさんは、いまでも国軍に？」

「そうよ。なんたって、私という良妻を養わなきゃいけないんだからね。しっかりお国の為に働いてもらわなくちゃ」

片足を軸にしてくりと反転して、メルニカは流し台へとコップを置く。

それを見て、ユーリは空になった自分のコップと一緒に水洗いを始めた。

「国軍か……警察軍でもいろいろあるんだから、もっと大変なんでしょうね。戦争の話、とか……」

「考えてても仕方ないわよ。なるようになるし、ならないときはならない。そう思ってた方が、人生楽よ？　あつ、そうだバーガンディくん、どうせ今日は暇なんでしょ？　私の買い物に付き合ってよ」

「おおっとー！？　このコップ、コーヒーが染みついて汚いな！　じつくりゆつくり洗わないと駄目っばいぞ？　今日は書類整理もしなきゃなんないし、いつそがしいなあ！」

白々しいにもほどがある彼に対して、メルニカは半開きの目で洗  
い物に勤しむ彼の姿を見つめる。

「……………本当、忙しそうねえ？」

「あれ？メルニカさん、もう帰るんですか？お疲れ様です」

「バーガンディくん、ぶん殴りたいの？」

薬指に光る指輪をちらつかせて、メルニカは左手を勢い良く前に  
出した。

\*\*\*\*\*

噴水広場で新聞を読んでいた少女が、ばさばさと乱暴にそれを閉  
じる。

「あーあ……………とうとうあの爺さん、死んじゃったのかー」

城下町まで夕飯の買い出しに来ていたカノンが、「号外号外！」  
と声高らかに新聞を売っていた少年から買い取ったそれを読んで、  
ぽつりと呟いた。

その一面に飾られていた見出しは、内容を簡潔に要約したもので、  
大して斬新さも新鮮味も感じられない題名だった。

「さて、軍はどう動くかな」

よ、と勢いを付けて、座っていた噴水の縁から立ち上がる。

市場は相変わらず賑やかだし、噴水広場に出ている移動式のドー  
ナツ屋は今日も繁盛している。

目に止まるほどの変化が見当たらないその場所を見て、カノンは安心したように伸びをする。

「ま、なるようになるか。師匠もそう言ってたしね」

\*\*\*\*\*

「レスティナの自由と独立を維持し守るためには、最早戦争の道しかありません！ 大国に囲まれた我が国に、選ぶ道はそれしか無い！」

威圧感のある声で主張するクロウ・リアハーデン將軍の言葉に、会議に参加していた上層部全員が頷いていた。中には手を叩く者さえ居た。

会議とは名ばかりの、筋書き通りの戯曲。

クロウ・リアハーデンの演説にも近いそれが終わったと同時に、議長の將軍が立ち上がった。

「今日のところはこの辺にして、明日の元総司令官の葬式に控るところのはいかがです？ 未来の総司令官、リアハーデン將軍殿」

議長の言葉に、何人かが拍手をし、『国軍上層部会議』は終わった。

分かり切ったことに時間をかける必要はない。全員が全員、そう思っていた。

「それでは、また明日。リアハーデン將軍」

全ての人間が部屋を出るまで座っていたクロウは、この空間に自分だけになったのを確認すると、その厳格な表情を緩ませて、独り言を呟いた。

「……やはり年寄り共を誑かすのは容易いな」

にやりと口角を上げ、やっと立ち上がり部屋から出る。

後は、どうにでもなる。

上層部が圧力をかければ、選挙など無いも同然だった。あつたとしても、国軍では多くの信任を得ているつもりだ。

廊下を歩いていると、擦れ違う軍人達が小さく頭を下げたり、敬礼をしてみせた。みな、一様だ。

その姿に優越感を抱きながら、クロウは変わらぬ速度で歩き続けた。

「……？」

そして、そのまま廊下の角を曲がるうとして、横を擦り抜けようとしていた少年とぶつかった。

「おっと……すまない。大丈夫かな？」

「ごめんなさい」

転んだりはしなかったものの、すこし蹠跟めいた少年に手をかして、クロウは珍しそうに彼を見た。

国軍の施設では見慣れない年齢の少年だった。

体勢を立て直した少年は、きよろきよろと周りを見たり、目の前のクロウを見たりと忙しそうだ。

「君、誰かを探しているのかね？」

「はい。父に言われて、書類を届けに来たんです」

どうやら家族の者らしい。

おどおどと自分の持っていた茶封筒を見せて、少年ははにかんだ。整った顔をした少年だ。

「そうかい。おつかいご苦労様。私が渡しておいてあげようか？」

「いえっ、大丈夫です。次期総司令官にそんなことをさせたと知られては、父に叱られてしまいます」

驚いてその封筒を引っ込める少年に、クロウはくつくつと笑った。  
「はは、次期総司令官か……まだ気が早いよ」  
そうは言いつつも、彼のにやけた顔はそうすぐには治まらなかった。

こんな少年まで、自分が総司令官の席に収まる未来を語る。少年の父親が、家でそう話しているのだろうか。悪い気はしなかった。  
「そんなことはありませんよ。だってみんな言ってるじゃないですか。総司令官には、リアハーデン將軍しかいないって」

「おやおや、それは嬉しいね」

「今度の就任式でのお言葉、楽しみにしてます。それでは」  
ぺこりと頭を下げて、クロウが歩いてきた道へと進み出す少年。

「ありがとう。また会えると良いね」

「さようなら。良い夢を」

軽く手を振るクロウに、もう一度頭を下げながら、少年は早足で廊下の先へと消えていく。

角で立ち止まったままだったクロウもまた、職務室へと歩き始める。

「さようなら、良い夢を。そして、忘れられない悪夢を」

誰にも聞かれることの無かったその言葉は、小さくなっていくクロウ・リアハーデンの背中を見つめる、あの少年の唇が紡いでいた。黒髪の下から覗く、うつくしい碧色の目。

闇鬼が、綺麗に微笑んでいた。



135・三月三日のメメントモリ（貴方に執行猶予などいらぬ）（後書き）

笑う、笑う。

人の闇の中で鬼が笑う。

136・イミテーションの夢（僕ら二人ぼっちの世界でした）

無理なんだ。無理のある話だったんだ。

それは俺もお前も知っていた。始まったときから、ずっと。だから、そろそろ終わらせよう。

どっちがどっちを選ぶか、そろそろ考えよう。

そう言って、アイツは笑った。

\*\*\*\*\*

「よお、目が覚めたか？」

そいつは、使い古されてぼろぼろになった椅子の上に座って、オレへと声を掛けた。

「今の言い方はちょっと違うか。覚めたというより、夢に入ってるんだもんな、レオラ」

「げっ……」

「そう露骨に嫌そうな顔するなよ。俺だって好きでお前に会ってるんじゃないんだからな」

嫌いな人間が目の前に居たら、誰だって嫌な顔くらいするだろ。



いつの間にかオレが立っていたその場所は、ぬめりをもった濁水の上で、ちよつと大きい水溜まりみたいになつていた。

本当に、いつの間にかこんなところへやって来てしまつたんだか。

「つづーかさ、オレなんでこんなところに居るんだよ？」

「さあな。大方、氣絶したんだろう？ 俺に聞くな」

「それもそうだな……あー！ 早く目を醒ませ！ 夢から醒めるオレ！」

両手で頬を叩いてみるけど、効果無し。

夢と呼ぶには少しリアリティのあるこの空間は、アゲ八がいつもいる場所だ。

心理学なんて勉強したことないから分からないけど、たぶん、心の深層とかいうやつなんじゃないだろうか。適当に言ってみただけだけど。

「つれないなあ。オレが会話出来る相手っていったら、お前くらいなんだから、少しは付き合えよ」

アゲ八は残念そうな声を出しながら、にやついた笑みを見せていた。

オレと全く同じ顔だから、余計に嫌気が差す。

「何がオレだけだよ。時々オレと入れ替わって、師範代と喋ってんじゃねえか」

「なんだ、やっぱり氣付いてたのか。ただの馬鹿じゃないんだな」

いちいち腹を立てていても仕方が無いから、オレは広い心をもつて華麗に無視することに決めた。

とりあえず、ずっと突っ立ってるのもなんだから、適当な椅子を探す。

たぶん、しばらくはここに居なきゃ駄目だろうから。

廃墟のようなこの空間には、壊れかけの物がたくさん転がっている。濁った水溜まりもたくさんあるから、それに嵌らないように気を配って、オレはまだ使えそうな椅子を引っ張り出した。

「最近、こつこつこの多くねえか？」

「こづいづのって?」

わざと相手の顔を直接見ないで済むように、斜め前に向かって座る。

横から見たアゲ八は、とぼけたように肩を竦めていた。

「オレの意識と、お前の意識が交差することとか。クロツクの時もそうだったじゃん」

「そういえば、セリさんは元気にしてるか?」

あ、こいつ無視しやがった。

まあ、相手の話を無視するのは二人ともお互い様だから、オレはなんとも言えない。

「……ああ、元気そうだよ。屋根から落っこちたってーのに無傷誇るくらい元気だった。ただ……」

「ただ?」

「仕事関連で、ちょっと疲れてるみたいだったな。あんだだけ大量に軍から依頼が来てたら、憂鬱にもなるか」

言葉で説明するのも面倒だから、オレはポケットに入ってる手紙を取り出してアゲ八に見せた。

オレの手によって開けられたその封筒から乱暴に中身を取り出して、アゲ八は要点を声に出して読み上げた。

「ふうん……クロウ・リアハーデン暗殺依頼ね。だから匿名なのか、この手紙。ご丁寧にも軍の封蝋まで押して……ただのイタズラじゃないことの意味表明ってどこか」

くしゃつと端が折れた状態のまま封筒に戻して、オレに押しつけるように手紙を返してくる。

折角丁寧に読んだのに、オレの苦労台無し。本当に腹が立つ。

「で、セリさんはこの依頼、受けたのか?」

「いいや。つてか、この手紙を読んですらない。まあ大体の中身は予想してただろうけど」

予想してたからこそ、読まなかったと言った方があってる様な気もする。

背もたれに体重をかけると、すこしだけ椅子が軋む音がした。耳障りだ。アイツの声と同じ。

そう思った瞬間、アゲ八が話しかけてきた。

「じゃあ、お前が受けるのか？」

「……なんでそうなるんだよ」

「そうだから、この手紙を今でも持つてるんだろ？」

腹が立つくらい、ずばずばと人の心を読んできやがる。

当てられたことが悔しかったから無視を試してみたけど、あいつはそれを肯定と取ったようだ。

何度か頷いたり考えたこんだりした後、自分の椅子の脚を持って、座ったままオレの前に向き直った。

「少し、話をしようか。レオラ」

「話つて……いまもしてたんじゃねーの？」

「もつと真面目な話だ」

さっきまでのにやついていた表情は消えて、アゲ八は真剣な顔をしてオレを見ていた。

「……アゲ八、お前なんか変わったな」

「そうか？」

「ああ。昔より、大人しくなったっつーか、丸くなったっつーか……」

もつとびつたりな言葉があつたけど、それを口に出したら喧嘩を売ったも同然だったから敢えて言わなかった。オレなりの気遣いだった。

「つまり、弱くなったと？」

オレの折角の気遣い台無し。

アゲ八は自分で自分のことを蔑んだ。

「まあ……それについても、話そうと思ってたところだよ」

「それって、どうしてもしなきゃなんねえ話？ オレ、あんまりここに長居したくないんだけど」

「お前、露骨に態度に表わすよな。なんでそんなに俺が嫌いなんだ

？」

「アゲハ・ストレイン扱いられた所為で酷い目にあつたから。オレとお前は違うのに、他人からしてみれば一緒なんだよ」

「そうか。俺はお前の所為で、ずっとこのじめじめした場所に居るんだけどな」

そう言われてみればそうだ。それこそお互い様な話だった。

うっかり言ってしまった自分の発言を悔いながら、オレは向かいを伺うように見る。アゲハは曖昧に笑っていた。

「……なんてな。嘘だよ。嫌なことが多すぎる世界だったから、全部俺の所為だよ」

みしり。

また、椅子が軋んだ。静かな空間ではそれがやけに響いた。

何も言葉が見付からないオレに代って、アゲハが喋る。

「お前、最近こういうのが多いって、さっき言ってたよな？」

「ああ……言ってた」

「あれも、俺の所為なんだ」

そう言いきったアゲハの表情を、オレは見ないようにした。

どこから落ちてきたのか、水滴が水溜まりへと落ちた音がした。

「弱くなってきてるんだ。自分を抑えたり、保つたりする心が」

「抑える？」

「俺は、お前を通して外の世界を見てる。だから、共有してるものもいくつがある。それが時を重ねることに増えていって、段々と二人の間の境界線が曖昧になってきてる」

それは、オレも少し感じていたことだった。

お互いの境界線が少しでも曖昧になると、オレ達は途端に不安定になってしまふから。

「曖昧に……な。じゃあこれからもっと時間が経つたら、オレ達はどうなるんだ？」

アゲハは笑った。声に出さず、口角だけを上げ、オレを見据えて笑った。

「俺か、お前か」

「早くどちらかを選ばないと、二人とも終わることになる」

その答えは、本当はアゲ八に言われなくても知っていた。

知っていたけど、知らないふりをしていた。

二人とも終わらないようにするためには、オレ達がそれぞれ、どちらかを選ばなくちゃいけない。

終わる方が、終わらない方を。

アゲ八は立ち上がって、オレに近付く。水溜まりの上に足を落とすたび、さっきの雫が落ちるような音がした。不思議な感覚だった。「無理なんだ。一つの身体に二つの人間。無理のある話だったんだよ最初から。それは俺もお前も、知っていただろう？ だから、そろそろ終わらせよう。どっちかを選ばなくちゃな」

「ちよ、ちよと待てよ。選ぶったって……選んだとしても、分かんねーことがあるんだけどよ」

「わからない？」

「どっちがどっちを選んだにしろ、『終わり』を選んだ方は、一体どうなるんだよ？」

その時、確かにアゲ八は笑っていた気がする。

薄れゆく意識の中、靄のかかった薄紙一枚向こうの世界で、たぶん。

「消えるんだよ」

たぶん、あれは笑っていた。

そうじゃないと可笑しい。アイツはいつだってにやついた笑みで、人を馬鹿にしたように笑っていた。そういう奴だったんだから。白くなる意識の中で必死に出した自分の考えを何度も言い聞かせて、廃墟はオレの目の前から消え去った。

\*\*\*\*\*

「……やっべえ……木の上で気絶とか、シャレになんねーな」

独り言になるのを分かっているながら、オレは声に出して言った。

幸いなことに、周りに人が居なかったお陰で、その言葉も聞かれることは無かったけど。

目を覚ました場所は、仕事の為に登っていた街路樹の上。下手すれば、落ちて死ぬところだった。オレは師範代みたいに凄い人間じゃないから、死ななかつたとしても無傷って訳にはいかないだろうし。

「っていつか、全然人を見かけないな……まだそんなに遅い時間じゃないはずだろ」

ゆっくりと地面へ降りて、自分の腕に付けた時計を見た。午後九時。

オレが最後にこの時計を見たのが七時過ぎだから、大体一時間強寝てたってことか。

「都合が良すぎて、逆に怖いけど、依頼をこなすには丁度良いかな」

目の前に立ちふさがる大きな門を見上げる。それから、その奥に見える屋敷へ目を移す。灯は点いているから、目当ての人物はまだあの中にいるはずだ。

『三月五日午後六時から、クロウ・リアハーデンは自室に籠もっている』という、情報に間違いが無ければの話だが。

曖昧な情報を嫌う情報屋のことだから、この情報は信用していいだろ。

「師範代に知れたら、なんて言われるか……確実に怒られるな」  
未来のことを思っても仕方ない。これはオレが決めたことだ。

オレは門からではなく、正面から少し逸れた塀を飛び越えて、リアハーデン家の敷地内へと足を踏み入れた。

それと同時に、銃声が聞こえた。

136・イミテーションの夢（僕ら二人ぼっちの世界でした）（後書き）

自分が自分で無くなる前に、置き忘れた記憶を二人で探しに行こう。



137 君が笑つと世界は終わる(はじめまして、さようなら)(前書き)

For the Snark was a Boojum,  
you see.

(そう、そのスナークはブージャムだった。)

【ルイス・キャロル/スナーク狩り】

137 君が笑うと世界は終わる（はじめまして、さようなら）

銃声が鳴り響いたリアハーデン邸内には、二人の人間がいた。

否、二人の人間しかいなかった。

これほどまでに大きな屋敷なのだから、身の回りを世話する者や邸内で働く者が居たっておかしくはないはずなのに、今日という日に限って、そこにはたったの二人だけしか居なかった。

その内の一人であるクロウ・リアハーデンは、突然この部屋に現れた招かれざる客を凝視していた。

「はじめまして、クロウ・リアハーデン將軍」

黒い髪に碧の眼をした客人は、銃を片手に挨拶をする。その風貌はまだ少年と言っても差し支えないほど若く、しかしそのにこやかな表情は、この状況に驚くほど合っていないかった。

「それとも『お久しぶりです』の方が宜しかったですか？ 未来の総司令官殿」

「……君は、あの時の……」

少年の顔に見覚えのあったクロウは驚きを隠せずに声を漏らした。目の前で自分に向かって銃口を向けている少年は、確かに二日前のあの日、廊下でぶつかった少年に違いなかった。

「覚えていてくださっただんですね、光栄です」

また、にこりと少年は笑った。

クロウはその笑みに、彼の真意を測りかねていた。何よりも、その右手に握られたその黒光りするそれが、クロウの思考を邪魔した。「それにしてもさすが次期総司令官と噂されるだけのことはありますね。十分に不意打ちだったはずなのに、まさか、」

微笑みを携えた少年　クウヤは右頬へと僅かに付いた血を、空いている方の手で乱暴に拭く。

「まさか、なんの躊躇もなく撃ち返してくるとは思いませんでした」  
拭き取ったはずの傷口からは、また鮮血が流れ落ちた。銃弾が頬を掠めただけの大した傷ではなかったが、血は頬を伝い、高価に見える絨毯へ染みを作った。

未だに硝煙の匂いかかすかに残る銃をしっかりと握りしめて、クロウは数分前の出来事を思い出していた。

クウヤがこの部屋へ現れたのは、夕食を終えて自室で本を読んでいた時のことだった。

誰かがこの部屋を尋ねてくる予定の無かったその時間に、控えめに響いたノックの音。最初はクロウも訝しんだが、突然の来訪者を迎え入れるべく直ぐにそのドアを開けた。

この部屋の前まで来たと言うことは、そうそう怪しい者ではないだろう。そう判断して。

少しの警戒心を抱いたまま開けたドアの隙間からは、黒い髪が見えた。

「こんにちは、そしてさようなら」

男にしては少し高い、女にしては少し低い声で、その少年は挨拶をした。

クロウに、銃口を向けながら。

咄嗟に取り出した護身用の銃で、クロウはほぼ反射的にその少年を撃っていた。罪悪感は無かった。殺される前に殺す、ただそれだけだった。

「酷い人ですね。僕はまだ何もしてないじゃないですか」

頬に掠り傷を作りながら、少年はあんまりだと言わんばかりに、大袈裟に肩をあげる。

確実に、撃ち抜いたと思っていた。

クロウが驚いて声を出せずに居ると、少年は歌うように言ったのだ。「はじめまして」と。

「君は一体なんだ？ 何故こんなことをする？」

この数分間にあつた出来事を思い返して、一層深まった疑問を投げかける。

「ああ、すみません。自己紹介がまだでしたね。僕は世外れの都合屋をやらせてもらっている、アンダーグラウンドと申します」

「地下世界、か……随分と巫山戯た名前だな」

「偽名です」

お互いがお互いに、先程から変わらずにその銃口を相手に向け、相手の出方を伺っていた。

階銘にも名前にも一切の反応を示さなかった彼を見て、クウヤはもう一つの呼び名を口にする。

「僕はあまり好きではないのですが、『閻鬼』とも呼ばれています」  
その一言で全てを理解したのか、クウウは心底楽しそうに笑い声をあげた。

壊れたように笑い出した彼を見て、クウヤは銃をさらに強く握りしめた。

「くくっ……はははっ！ なるほどな……閻鬼か。依頼元は、大方警察軍の奴等だろう？ 私を殺したがつている連中は」

「申し訳有りませんが、依頼人のことは一切お教え出来ません」

仮面のように貼り付けた微笑みをクウウに向け、クウヤは答える。  
分かり切っていたその答えに、クウウは鼻で笑って返した。

「はっ……まあ誰でも良い。それよりも気になるな……何故銃声が鳴ったというのに、誰も駆け付けてこないんだ？ これも君の仕業か？」

「はい。今この屋敷にいるのは、貴方と貴方を狙う者だけです。貴方の味方はいません」

「そんなに都合良くいくものなのか？」

「そうなるようにするのが、都合屋の役目です」

相変わらず、お互いを見張るように同じ体勢のまま、二人の会話は続く。

「私を殺すこともか」

「それは、闇鬼の役目です」

話し終わると同時に、クウヤは銃を両手に持ち直した。もう、話すことは無いとでも言うように。

そんな彼の行動に怯むことなく、クロウは口角を上げ、余裕の出来た表情でクウヤとの距離を血締め始めた。

ゆつくりと歩いて近付いてくる相手に、クウヤは怪訝そうに眉を寄せる。

縮められた距離を元に戻そうにも、クウヤの真後ろにはドアがある所為で後退することが出来なかった。

「闇鬼。君に聞きたいことがある。君の元へ来た暗殺依頼は、二つあったのではないか？ 私の暗殺依頼と、誰かの暗殺依頼。そうだな……保守派の代表格である将軍殿、あたりか」

「よくご存じで」

「革新派の人間の行動くらい、把握しているつもりだよ。あの将軍殿も確か、次期総司令官の候補にあがる可能性があったからな」

「はた迷惑もいいところですよ。裏町が軍内部の権力争いに引きずり込まれるだなんて」

大袈裟に溜息を吐いたクウヤに、クロウはまた一步、距離を縮めた。二人の距離は、歩数にして残り五歩といったところか。

最初よりも随分と縮まってしまったその距離は、クロウの余裕を表わしているかのようだった。

「そして君がここに居るということは、私を殺す方を選んだという訳か？」

問いかけにも似たその台詞に、クウヤは無言で返した。

「……言い方を変えよう。君は何故、私を選んだんだ？」

「『何故』……？」

射るようなその視線から逃れるように、クウヤは一瞬だけ自分の

足元へと目を向ける。

クロウの問いへの答えは、眩きのように小さい声だった。

「僕は、間違いたくないんです」

「何を？」

「色んなことを。国の指導者たる人物を殺すことは、これからの国の未来までも左右してしまふ……だから、僕は絶対に間違いたくなかった。……いいえ、もう二度と、間違えてはいけなかった。あの国のように……」

あの国。

それは恐らく、クウヤが闇鬼と呼ばれるきつかけになった国家崩壊事件のことだろう。

ガヴオット王国で起こった、国王軍と反乱軍の衝突。国全体を巻き込んでの内戦。国王陛下とその王妃、そして王女の死。

闇鬼が加担した、反乱軍の勝利。それはクロウも聞いたことがあった。

「僕は、この国が好きです。僕のことを救ってくれた人が居る、この国が好きなんです。だから、この国には戦争などしてほしくはない」

「『ガヴオット王国のようにはなってほしくない』と？」

クロウの放った一言に、クウヤの肩が大きく揺れる。

視線は泳ぎ、銃を持つ手は僅かに震えていた。その隙を、クロウが見逃すはずもなかった。

「『闇鬼』のくせに、笑わせてくれる！」

残っていた距離を一気に縮め、クロウは出遅れたクウヤの胸部を

狙って撃つ。

後退など出来はしないその場所から、判断の遅れたクウヤがやむなく左側へと飛び込むようにして避ける。

「……っ！」

急所は避けたとはいえ、咄嗟の判断ではその凶弾から逃げ切られず、クウヤの肩からは鮮やかな赤色が流れた。

それでも、怯んでいる場合では無い。次の銃弾が、クウヤを狙っていた。

「間違いたくない？ 馬鹿馬鹿しい！」

さつきと同じ場所から、乾いた音が二発鳴る。

クウヤは崩れかけた体勢を無理矢理戻して、床へと転がるように逃げた。それと同時に、一発だけ反撃する。

だが、狙いを定めずに撃たれた銃弾など訓練された軍人に通用するはずもなく、クロウの足元に弾痕が残るだけだった。

「間違っても何も、裏町なんかにいる時点で、お前は既に間違っている！」

「黙れ！」

ぱん、とソファアの影から放たれた銃弾を避け、クロウは攻撃されたその方向へと何発か撃つ。それは相手を殺すためというよりも、相手を怯ませる為の威嚇射撃のようだった。

「はははっ！ 閻鬼が聞いて呆れるな。私を殺す？ 冗談も大概にしる」

隠れて出てこない相手へ話しかけながら、まだ銃弾は残っているというのに、クロウは腰にぶら下げていた新しい銃を取り出してクウヤのいるソファアへと近づく。

「暗殺など、所詮は正義の反対。間違いを犯した人間には裁きが必要だ」

「五月蠅い！」

「喜べ。この私が直々に哀れな暗殺者へ裁きを下してやる！」

クロウが右足を踏み切ったのと同時に、ソファアの影からクウヤ

が飛び出した。

「終わるのは貴方のほうだ！」

飛び出してきたのは、ソファーへと踏み込んできた彼から逃げる為ではない。

彼を殺す為に、クウヤはクロウの懐へと飛び込み、銃を持つ彼の右手を撥ね除けた。

勢い良く押しやられた所為で、クロウの手から黒光りするそれが離れる。武器を失った人間に打つ手はない。後は自分の持つその引き金を引くだけだ。

「な、」

「かかったな」

だが、銃声は鳴らなかった。

それどころか、クロウに銃を向けることさえクウヤには出来なかった。

「終わるのは、お前の方だ…… 闇鬼」

一寸でも動けば、額へと突きつけられた『新しい銃』の銃弾に貫通されるのは明白だった。

「……両利きだったんですね」

「気付くのが遅かったな」

クウヤが弾いたのは、クロウが最初に使っていた銃だった。

右手ばかりに集中していた所為で、左手に控えていた新しい銃にまで気が付かなかった。

勝利を確信したクロウが歪んだ笑みでクウヤを見つめ、さっきよりも強く銃口を押し当てる。

「実に楽しいゲームだったよ、闇鬼。別れは惜しいが、ここでさよならだ」

左手の人差し指に、力が込められる。その刹那、クウヤは双眸を細めてたしかに微笑んだ。

正面にいる人間の表情を見逃すほうが難しい。引き金を引く指を止め、クロウは苛立った声で言う。



「何がそんなに楽しい」

「『かかったな』？ それは僕の台詞ですよ、リアハーデン將軍。僕は確かに言いましたよね？』この屋敷にいるのは、貴方と貴方を狙う者だけだ」と

クウヤの視線が、部屋のドアへと移る。

開け放たれたままのそこには、今まで居なかったはずの誰かが立っていた。

「僕が、たった一人でここへ来たとお思いで？」

思いも寄らなかったその一言に、クロウは慌ててドアへと視線を向ける。

「まさかっ！ な……っが!？」

誰かは分からない。クロウの知らない人間だ。金髪に赤い眼など、見たことも無い。

そこに立っていた人間を確認しきる前に、クロウの口は塞がれる。残念でした。あれはただのイレギュラー。貴方が思うような共犯者ではありません」

クウヤの持っていた、冷たい銃口によって。

「僕はいつも一人ですから」

男の目の前でふわりと微笑みを浮かべた、人の形をした鬼が言う。言葉の意味を、理解する暇も無かった。

「さようなら」

音が、部屋に響く。

重い命を奪う、軽く乾いた音。

一人の人間が、崩れ落ちる音。

溢れ出た血が、飛び散った音。

薄暗くなっていく世界の中で、クロウは見た。

綺麗に微笑まれた、鬼の顔。なんの感情も籠もっていない笑顔。だからこそ、それは今までに見たどんな笑顔よりも、綺麗だった。

「おやすみなさい、良い夢を」

それが、クロウの見た、最後の世界だった。

137 君が笑つと世界は終わる(はじめまして、さようなら)(後書き)

もしも捕まえたスナークがブージャムだったら、その人は。

138・神様の間違いさがし（残酷なほど貴方達はやさしい）

全てが終わってしまったその部屋を眺めて、レオラは何も言えずに立ち尽くしていた。

何も、出来なかった。ただ見ているだけだった。クウヤが危うく殺されそうになったあの時も、自分は動けなかった。

部屋に入ることも、声を掛けることも、何も。

その場に固まってしまっているレオラに気付いて、クウヤは顔だけをレオラに向けて言い放った。

「人の仕事を覗き見だなんて、いい趣味してるね」

「……オレも、同じ仕事を頼まれてたんだ」

「ああ、そうだったの？」

特に関心を寄せず、クウヤは自分に付いた返り血を拭き取っていた。至近距離、そのうえ真っ正面から撃ったので、クロウから吐き出された血が至る所に付いていた。

鉄の匂いで、咽せそうだ。

血塗れのクウヤを見て、レオラは嫌なことを思い出しそうになる。けどそれを無理矢理押し込めて、レオラは一步、前に進んだ。

「なあ」

クウヤの返り血は粗方拭き終わっていた。

まだまだ血は付いたままだが、これはもう洗っても落ちないだろう。あっさりと諦めたクウヤは、クロウ　　だったモノから離れて、レオラの立っている場所へと歩み寄った。

「なに？」

ふわりと漂った匂いは、血の匂いというよりも、死の匂いと言った方が正しいような気さえした。

「お前は、さ………なんで、」

言葉一つ一つを噛み締めるかのように、一区切りずつ話すレオラ

を不信に思つて、クウヤは少し眉を顰める。

レオラの赤い眼は、絨毯を見つめている。二人の視線は未だかち合わない。

「僕が、なに？」

「なんでお前、人を殺すとき……笑うんだ？」

赤い眼が、碧の眼を捕らえた。

久しぶりに、お互いの顔を見た気がした。だけどそれはすぐに逸らされた。

クウヤは答えない。何も言わない。レオラが続けて喋る。

「ガヴオットの時もそうだったよな」

「……別に。特に理由は無いよ。ただ、」

俯きながら、クウヤは自分の手を見た。血はちゃんと拭き取った筈なのに、何故かまだ拭い切れてない気がして仕方がない。

あの匂いが鼻につく。

「ただなんとなく……最期に見るものくらい、せめて笑顔のほうが良くなつて」

クウヤがそつと後ろを振り返る。レオラも同じようにそれを見る。血塗れのそれは、ぴくりとも動かなかつた。動くはずもなかつた。それは、一部始終と見ていた彼にしてみれば分かり切つたことだつた。

「この世界で、最後に見るものなんだから……そう思うんだ」  
先に部屋を出たのはクウヤだつた。

レオラがその後につき、かちやり、と静かに扉が閉められた。

部屋には、生きている人間は一人もいなくなつた。

「おかしな話だよな」

廊下を歩きながら、クウヤは至極可笑しそうに言った。

前を歩く彼の表情は後ろからでは分かりづらいが、きつと笑つて

いるのだろうな、とレオラは思った。

「何がおかしいんだよ」

「ほら、よく言うじゃない。正義が勝つって。この場合、僕は正義なのかな？」

こんなことをしているのに、とクウヤがあくまで笑いながらそう言う。

あまりにも楽しそうに言うものだから、彼が本当はどんなことを思っているのか、レオラにはひとつも分からなかった。

「ほんと、おかしな話だよな」

「……ちげえよ」

同意を求めてくる目の前の少年に、レオラは否定の言葉を吐きだしていた。

頭が考える前に、言葉が条件反射のように飛び出していたから、本人も一瞬驚いた表情をする。

だが、すぐに平静を装って足を止めた。

「ちがう？」

前を歩いていたクウヤは、歩くのをやめてこちらへと身体をむき直していた。

「違う。正義が勝つんじゃない」

さらに重ねられた否定の言葉に、クウヤは戸惑いを隠しきれない。そんな彼の心境を知ってか知らずか、レオラははっきりと、言い放った。

「勝った方が、正義なんだよ、結局」

しん、と静まりかえった廊下では、その声が嫌と言っほど耳につく。

この屋敷に居るのは自分達二人だけ。だから、二人が口を噤めば静かになってしまうのは当たり前前のこと。

これ以上そうならないように、クウヤはわざとらしく笑った。

「『勝てば官軍』だっけ？ あははっ、レオラのくせに物知りだね」  
いつものように、嫌味を言った。

けれど、いつものようにそれに応じてくる声は無かった。

何も言わずに、ただじつと自分を見る、レオラの姿しか無かった。

「なんで、黙っちゃうんだよ。レオラらしくない」

「らしくないのはお前の方だろ」

「僕らしくない？ 一体どこが？」

「気付いてないのか？」

思ってもなかった返答をもらって、クウヤは苦笑しながら首を傾げた。

自分が一体何に気付いていないというのか。まるでさっぱり分からなかった。

クウヤが自力で答えに辿り着けないのを見切って、レオラがはつきりと言った。

「さつきからお前、ちゃんと笑えてねーぞ」

まさか、とクウヤが呟く。その声は、どこか震えていた。

「笑えてない？ 僕が？」

「オレにはそう見える」

「そっか……あはは、そうなんだ」

レオラに指摘されて吹っ切れたのか、まるで糸が切れた人形のよう  
に脱力して床へと座り込んだクウヤが、ぼつりと、呟いた。

「レオラ。もしかして僕は、間違ってたのかな？」

小さな子供が、自分の失敗を怒られることに畏れるような、頼り  
ない声だった。

誰かの庇護がなければ生きてゆけないような、そんな希薄ささえ  
伺えた。

クウヤの変わり様に耐えかねたレオラだったが、その質問には答  
えられなかった。それは自分が決めることじゃない。クウヤが、自  
分でなんとかしなければいけない。それをレオラは知っていた。

だから、何も答えなかった。

「……オレ、帰るわ。お前も気を付けて帰れよ」  
なるべく普段通りに、声を出す。  
隣を通り過ぎる瞬間に見た彼の表情は、影の所為でよく見えなかつたし、あえて見たいとも思わなかつた。レオラは逃げるように、そこから足早に立ち去つた。  
屋敷には、生きている人間は一人だけになつた。

それから、長い間、座り込んでいたように思える。一体どれくらいの時間をそこで過ごしたのだらうと腕時計を見てみたが、自分が思っているほど時計の針は進んでいなかった。

「気を付けて、帰れよ……か」  
三十分前にレオラから言われた言葉を反芻する。

十時と半分を過ぎようとしているその針をもう一度見て、クウヤは立ち上がった。

「でも、どこへ？」  
こんな自分に、帰る場所などあつただらうか。  
下らない自問自答に、自嘲するような薄笑いを浮かべて、足を進める。もうこれ以上余計なことを言わないように、クウヤは口を噤んだ。

原因不明の息苦しさが襲ってくる。それを振り切るようにして、クウヤは玄関ホールに出た。走つたわけでもないのに、息切れが酷かつた。

煌びやかな装飾や、無駄にしか思えない大きな扉は、まるで権力を誇示するかのように聳えている。それが、何故だか今は恐ろしく感じた。

この権力を誇っていた人間は、もうこの世に居ないのだ。

「はやく帰ろっ……」

どこへ帰るといつの？



ホールに響く声が、誰の声なのか全く分からない。この屋敷にいるのは自分だけだから、幻聴かもしれない。扉を乱暴に開け、もつれそうな足を無理矢理動かして門前まで走った。

手が震える所為で、門が上手く開かない。その震えは、寒さだけの所為では無い。

なかなか其処から出してくれない門に苛ついていると、突然、外側から門が開いた。

「え……？」

有り得ないことだった。

この屋敷と、その周辺には人が来ないはずだった。自分が、そういう風にしたのだ。

クウヤが茫然と立ち尽くしていると、月明かりを背にその人は一言だけ言葉を発した。

「探したぞ」

金色の髪が、夜の闇に綺麗に浮かび上がっていた。

「カノンさん……どうしてこんなところに……？」

クロウと接点の無いカノンがこんな場所に居るのは、とても場違いな気がした。

驚きを隠せずにいると、カノンは風に遊ばれた前髪を手で梳きながら粗方の説明を始める。

「なんか知らねーけど、さっきレオラから電話があっけさ。お前のこと頼まれたんだよ。たぶんこの辺を彷徨ってるだろうから、お前を捕まえてなんとかしてくれって」

前髪が整ったのか、今度は両手を組んで、ぶっきらぼうに言う。

「だから、なんとかしにきた」

あまりにも曖昧すぎる話だった。

なんとかしてくれ、と頼まれたから、なんとかしてくる。理由や

理屈が一切無い、本当に単純で曖昧な話。それはこの二人だからこそ通じる会話のようでもあった。

威張るように仁王立ちするカノンに、クウヤは呆気に取られたまま質問する。

「じゃあ、具体的に、何をしてくれるんですか？」

「んー……まあ、そうだな。よく分かんねーけど、とりあえずなんとかしてやるよ。何して欲しいんだ？」

カノン自身も何をすればいいのか分からないらしく、クウヤの要望を聞いてきた。

質問に質問で返されてしまったクウヤだったが、直ぐに答えを返す。

「……一つだけ、教えて欲しいことがあるんです」

「ん」

「僕は、間違ってますか？」

何も知らない相手にする質問としては、言葉が足りなさすぎる質問だった。何がどう間違っているのかを教えてくれない、解答者に不親切な問題。

それでも、クウヤは聞きたかった。カノンが出す答えをどうしても聞きたかった。それが自分の求めている答えじゃなくても。

カノンは真つ直ぐにクウヤの目を見つめて、レオラが無回答で終わらせた質問に答えた。

「この世界に『正しい』と言い切れることなんてひとつも無いさ」

「そう……ですね」

思わず、目を逸らした。

それは遠回しに「間違っている」と言われたような気がしたのだ。ちゃんと笑えているのか不安になりながらも、クウヤが苦笑を浮かべて同意する。不信に思われないようにもう一度カノンを見ると、彼女はいつもと同じ笑顔を向けて、解答を続けた。

「だから、『間違ってる』って言い切れることだって、ひとつも無いんだ。心配すんな」

今度は相槌をうてなかった。言葉が上手く声になつてくれなかった。

誰もクウヤを間違つてるだなんて言わなかった。レオラは解答を放棄し、カノンの出した解答は黒でも白でもなく、あえて言うのなら灰色の答えで。

否定も、肯定も無い。それがその人達の優しさなのかどうか、クウヤには一つも分からなかった。

正解も不正解も、人には決められないと言うのなら、一体誰が決めるんだらう。

もしも神様がいるのなら、こんな自分を見てなんと答えを出すのだろうか。

クウヤが何も言えずにカノンを凝視していると、カノンはくるりと半回転して、ゆっくりと歩き出す。

「帰つたらまず洗濯だ。あー、新しいシーツも用意しなきゃだな。もう遅いし、今日は泊まつてくださる？」

カノンが何歩か前に進むが、クウヤは一步も進まない。彼女が前に進んだ分だけ、二人の距離が広がる。

一度も後ろを振り返らないカノンには、クウヤが立ち止まってるのが分からなかった。

広がってしまった距離をぼんやりと見つめるが、それでもクウヤはその距離を縮めようとはしなかった。

「そうだ、お前腹減つてねーか？ 夕飯のグラタン余ってるぞ。お前グラタン好きだったよな？ 今日のは結構上手に出来たんだ。シオンもおいしいって言ってくれてさ、」

「どうして、何も聞かないんですか？」

楽しそうに話すカノンの声に耐えかねて、クウヤがそれを遮るように言った。

立ち止まる自分とは違い、どんどんと前へ進んでいくカノンに気付いてもらいたくて出した、大きな声。

そこでやつとカノンは後ろを振り向く。片足を重心にして、くると半回転した彼女は、不思議そうに首を傾げていた。

「何を？」

「僕が何をしたのか、どうしてこんな所にいるのか、何でこんなに汚れてるのか」

早口で捲し立てるその言葉は、置き去りにしたことを責めているようにも、助けを求める叫びのようにも聞こえた。

「どうして貴女は、昔からいつも、何も聞かないんですか！」

ヒステリックに喚きながら吐き出されたその言葉に、カノンは落ち着いた声で返す。

「だって、言いたくないんだろ？」

それは疑問の形を取りながらも、確信があるような言い方だった。凶星を指されて何も言えなくなったクウヤは、怯んだように半歩後ろへと下がる。二人の距離が、さらに開いた。

「だけどカノンはそれを責める訳でもなく、

「別にいいよ。いつか、お前が話したくなった時に、教えてくれれば」

開いていた二人の間の距離を、一歩ずつ確かめるように歩いて詰める。

あつという間にクウヤの目の前まで来た彼女は、右手を差し出す。差し出された掌にどう応えればいいのか分からず、困惑した表情でカノンを見つめると、半ば無理矢理左手を取って、門からクウヤを引っ張り出した。

そして、まるでそれが当たり前のことのように彼女は言った。

「帰るぞ」

「……………」

今度は、どこへ、とは聞かなかった。聞けなかった。

そうすることが自然なんだと言いついて聞かせるように、カノンはクウヤの左手を取って、少し先を歩き出す。

「……………っ……………う、あ、」

年甲斐もなく、クウヤは嗚咽を漏らしながら泣いた。

何度涙を拭いても、ぼたぼたと流れて止まってはくれない。片手だけでは声まで抑えきれなかった。足元を見ながら、雨のように跡を残していく地面を見つめる。月明かりの所為か、涙の所為か、それはぼんやりとしか見られなかった。

片方の手は、カノンがしっかりと繋いでいた。一生離す気が無いんじゃないかと思うくらい、強く繋いでいた。直に伝わるお互いの体温のおかげで、暗い夜道も心細くはなかった。

静かな夜の世界で、聞いたことの無い歌が聞こえた。

歌いながら歩くカノンに手を引かれ、クウヤは歩きながら泣いた。引つ張られるようにして歩くその先には、自分の帰る場所があるのだろうか。

顔を押しえていた掌のすき間から見た彼女の背中、誰かに似ていた。

歩きながら、クウヤは昔のことを思い出す。

いまよりも、ずっとずっと小さかった時のことを。

父と母の手を両手に繋いで歩いた日。

兄に手を引かれた帰り道。

いろんなことを思い出した。それはまるで走馬燈のようだった。

僕はとうとう死ぬのかもしれない。クウヤは静かにそう思った。

誰にも気付かれないように、そっと。

カノンは相変わらず、詩の付いていない歌をでたらめに歌う。

クウヤの小さな泣き声は、その歌に掻き消されていた。

月明かりが、夜道の二人を柔らかく照らしている。

あの頃に帰りたい、と誰かが呟いた。

138・神様の間違いさがし(残酷なほど貴方達はやさしい)(後書き)

誰か、教えてよ。

139・行方知らずの夜（眠れない君と探し歩いた夢）

見慣れない天井を見つめながら、シオンは今日の日のことを思い返していた。眠ろうにも眠れない。

今日は、いろんなことがあった。ありすぎたのだ。

レオラからの電話が掛かってきたのは、夜遅くだった。はじめに受話器を取ったのはシオンで、レオラが珍しく真剣な声色で「カノンはいるか？」と聞いてきたので、慌てて姉を呼びに言った。

何度か会話をしているのと隣で見えていたが、しばらくすると姉が神妙な面持ちで「クウヤを迎えに行ってくる」とだけ言ってそそくさと出掛けてしまった。

シオンはクウヤに何かあったのではないかと気が気でなく、夜更かしはしてはいけないと姉の言いつけを守りながらも出来ずにソファの上でひたすら待っていた。

二人が帰ってきたのは、十一時頃だっただろうか。

うとうとと眠気が纏わりついた頭を振って、二人を迎えに玄関までシオンは走っていった。

予想通り、ドアの前には姉とクウヤが居た。予想外だったのは、クウヤが血塗れだったこと。それから、表情こそ分からなかったが、確かに泣いていたこと。

見てはいけないものを見てしまった。そんな気持ちで立ち尽くすシオンに、姉は「ただいま」と優しく笑いかけた。それに続くようにして、聞き取れるぎりぎりの小さな声でクウヤも同じ言葉を呟いた。

シオンは二人に向かって、出来るだけいつもと同じ声で「おかえりなさい」と答えた。そうすることが、一番良いように思えたのだ。

そして、泣き疲れた彼はシオンのベッドですうすうと寝息を立て



て眠りについた。

「クウヤ、よく寝てるね」

「いろいろと疲れが溜まってたんだろ。でっかい仕事もあったみたいだし、緊張の糸が切れたんだろうな」

後ろから、洗濯籠を抱えたカノンが欠伸混じりに答えた。

籠の中に入れられたクウヤの服は、一度洗ったにも拘わらず酸化した血の色が落ちずに残っていた。シオンの視線に気付いたらしい彼女は、苦笑混じりにその中を指差した。

「ああ、これ？ 駄目だわ、全然落ちねーの。もう捨てようと思っ  
て」

「勝手に捨てていいの？」

「もう着れねーし、いらねいだろ。こいつの昔の服なら何着かクロ  
ーゼットに残ってるし」

昔の服。

そういえば、シオンがこの部屋をもらった頃、クローゼットには  
何着か服が入っていた。

カノンは「もう着ることも無いだろうな」と言っただけの内何着  
かを捨ててしまったが、やはり愛着でもあったのか、残りは捨てず  
に自分のクローゼットへ仕舞い込んでいた。きっと、その服のこ  
とを言っているのだろう。

「この部屋、前はクウヤが使ってたんだね」

「そういうこと。使い慣れた部屋の方が落ち着けるだろ？ という  
わけでシオン。今日はおれと一緒に寝るぞ」

\*\*\*\*\*

見慣れない天井を見つめるのにも飽きた。

シオンはごそごそと寝返りをうって、隣で目を瞑っている姉へと小声で話しかけてみた。

「姉さん、もう寝ちゃった？」

「んー……起きてるー。どした、寝られないのか？」

ぱちりと両目を開け、カノンは首だけを動かしてシオンを見る。

まだ寝ていないというだけで眠気はしっかりとあるらしく、自然と出てくる欠伸を噛み締めながら。

「うん。なんか目が冴えちゃったみたい。いろいろと考え事してみただけど、全然眠くならないや」

「そういうときは何も考えない方が良いで。なんなら子守歌でも歌ってやるうか？」

「うーん……それはいいや」

「遠慮しなくていいのに」

折角の申し出を断られたカノンは不満そうな声を出しながら、やっと身体ごとシオンの方へと向き直る。

カノンが動くと、毛布がずれてシオンの肩が出た。それをちゃんと掛け直しながら、カノンはまた一つ欠伸を零す。一人用のベッドに、子供とはいえ二人で寝るのは少し狭かった。

「ねえ。クウヤは昔、ここに住んでたんだよね？」

「住んでたつつつても、半年かそこらだけだな」

「どうして一緒に暮らすことになったの？」

「あー……話せば長くなるな」

「聞きたい！」

興味が湧いたのか、シオンは勢い良く毛布の中から両肩を出して食い付いてきた。

その勢いを収めるように、カノンはさつきよりも深めに毛布を被せてばんぼんと弟の背中をたたく。

「別に話しても面白いことなんか無いぞ？」

「それでもいいよ」

尚も食い下がる弟に面倒臭そうな顔を隠そうともせず溜息を吐くが、それでもシオンの好奇心は止まらない。大きな目がカノンを催促しているように見えてしまい、どこから説明しようかと悩みながら、彼女はぼつぼつと話し始めた。

「最初はなんだったかな……そうだ、クウヤがおれの店に来たんだっただ」

「どこに？」

「そう。本当はおれに依頼するつもりは全くなかったらしいけど」

「どういうこと？」

「えーっと……確かあいつ、最初はイギリスに居たんだ。イギリスに凄腕の始末屋が居たらしくて、その人に依頼しようとしてたみたいだな」

「へー。イギリス」

「でも、実はその情報はガセネタで、その人はとつくの昔に、弟子を連れてレスティナに引越してたみたいだ。それを聞いてレスティナに来てみたはいいものの、ちょうどソナチネに来た辺りで旅費が尽きた」

「それは……すごく無計画だね」

「あいつなりに、計画を立てたつもりだったんだろ」

何とも言えない表情で反応を返すが、明らかに呆れているその態度にカノンは思わず苦笑した。

当時の自分もこんな顔をしていたのかもしれない。

「この際、依頼を聞いてくれる店ならどこでもいいやと妥協しはじめたアンダーグラウンド君は、たまたま立ち寄った噴水広場でチラシを拾いましたとさ。そこにはこう書いてありました。『迷い猫捜索から、邪魔なあいつの弱点発見まで 値段応相談・街外れの便

利屋』」

「で、姉さんのところにやってきたんだね？」

「あいつも適当だよなー」

今思い返してみれば、クウヤと出会うことになったのは、本当に偶然が重なっていたのだと思わされる。

あの時、その始末屋が引越しをしていなかったら。情報屋の渡した情報がガセネタじゃなかったら。クウヤの旅費が尽きていなかったら。クウヤが便利屋のチラシを拾わなかったら。

もしもクウヤと自分が出会っていなかったら、クウヤはどうなっていたんだろうか。

「それで、クウヤはどんな依頼をしてきたの？」

二年前のあの日、クウヤが笑顔と共に言った言葉を、カノンはそのままシオンに伝える。

「『死にたいので、殺してくれませんか？』」

こんな寂しい言葉を、彼はどんな気持ちで言ったのだろうか。自分は何も聞かなかったから、真実は未だ行方知らずのまま。

139 行方知らずの夜（眠れない君と探し歩いた夢）（後書き）

彼が何も言わないので、彼女は何も聞きませんでした。

\*\*\*\*\*

久しぶりの更新で緊張しています。

とりあえず、ご報告をば。

無事、第一志望の大学に合格しました。

受験という私情で更新停滞してしまい、誠に申し訳ありませんでした。

これからもよろしければ、拙作とお付き合い下さると嬉しいです。

140・きみのためのノスタルジア（いつかそんな日が来る前に）

「死にたいので、殺してくれませんか？」

カノンの向かいに座っていた少年が、出された紅茶に手も付けず、まるで犬の散歩でも依頼するかのような気軽さで言い放った。

「やだ」

拒否の言葉を返された少年は、きよとんとした顔でカノンを見つめ、それから自分の後ろを振り返る。だが、そこには誰も居ない。

「……お前に言ったんだよ、お前に！」

「僕にですか？ おかしいなあ、ここって何でもしてくれるんじゃないんですか？ ほら」

見て見ると言わんばかりに、自分の持つ紙切れを指差す少年。その紙切れには、長つたらしい謳い文句が書かれていたが、要約すれば何でもする旨が書かれていた。

紛れもなくこの店のチラシである。二日ほど前に、カノンは確かにそのようなことを書いた覚えがあった。なるほど、チラシの効果は絶大だったというわけだ。

「そりゃそうだけど、何でもつったって限度がある」

「なるほど、誇張広告ですか。訴えられますよ？」

「あのな……大体名前も知らない人間からいきなり『殺せ』って言われてハイ分かりました、なんて言えるわけな」「クウヤ・アンダーグラウンド」

「……なに？」

「何って、名前ですよ。僕の。これで殺してくれるんですよ？」

クウヤと名乗った少年は、そう言ってカノンへにこりと何の疑いもなく笑いかけてくる。

そんな相手の様子に、カノンは頭を抱えた。

「お前とは話が噛み合わない……」

「そうですか？ ばっちり噛み合ってますよ」

「他を当たれ」

「無理です」

「なんで」

ただ殺してもらっただけならこの店に拘る必要は無いだろう、とカノンが言い掛けるが、それよりも先にクウヤが答える。

「だって、もうお金ほとんど残って無いですもん」

「……はあ？」

「旅費が尽きたんです。宿代もそろそろきつくなってきたし、なるべく今日中に殺して欲しいんですよ」

特に悲観するわけでもなく、ただあるがままを話すクウヤに、カノンはますます頭が痛くなった。これはまた面倒な客がやってきたものだ。

「お前の財政事情なんて知ったこっちゃねえよ。もう一度言うが、他を当たれ」

言い終わると同時にカノンはソファから立ち上がり、近くに掛けてあったジャケットを羽織り、乱雑に置かれた本の上にあったポシエットを肩から掛けた。

外出の用意を始めたカノンに、クウヤも立ち上がりながら不思議そうに聞く。

「どこに行くんです？」

「昼飯。今日はもう店じまい。お前は帰れ」

「そういえばお腹空きましたね。もうそんな時間でしたか。僕も一緒にします」

「いらねーよ！ ついてくんな！」

「まだ話についてませんよ」

「お前、さっきのおれの話聞いてたか？ 依頼は受けない。はい、話ついた！」

「それじゃあ困るんですよー」

「おれもいま厄介な客に絡まれて困ってる」

「なるほど、これが『困るのはお互い様』ってやつですね」

「それを言うなら『困ったときはお互い様』」  
カノンが逃げるようにしてドアから出る。その後を置いていかれまいとクウヤが追いかける。  
二人の噛み合わない会話がどんどん小さくなっていく。  
ドアが乱暴に閉められたお陰で鐘が鳴る。しばらくカランカランと乾いた音を響かせていたが、それからまた静かになった。

\*\*\*\*\*

「いいか？ これ食ったら絶対に帰れよ」

城下町の噴水広場前にある安くて美味しいと評判のレストランは、今日もかなりの賑わいを見せている。丁度お昼時だということもあってか、店内は混雑をきわめていた。

店内よりも比較的静かなオープンテラスでは、カノンとクウヤが互いにメニューを広げていた。

午後の日差しのお陰で、小春日和のように暖かい。冬ももう終わりに近付いているらしい。

「ここってカノンさんの奢りですか？」

「お前な……」

図々しい発言に米神を抑えるが、ちょうどこの席から見える噴水広場に見知った顔を見かけて、カノンはにやりと笑った。

「いいぜ。奢ってやる」



「本当ですか？ 助かります」

「どうやら財布の中身がほとんど無いというのは本当らしい。」

改めてメニユーを隅から隅まで読み始めたクウヤに、カノンは質問を投げかけた。

「お前、見たところこの国の人間じゃなさそうだけど、どこから来たの」

「……あっちの方ですかね？」

噴水広場とは反対の方向を指差してとぼけた答えを返すクウヤに、カノンは呆れた声を出す。

「何ソレ、超適当なんですけど。あ、すいませーん！」

右手を挙げて、そばを通りかかった店員へと声を掛けた。

店員は笑顔で返事をし、すぐに小走りでこちらまでやってきた。

「お待たせいたしました。ご注文をどうぞ」

「おれはフリットミストとパルメザンチーズのリングイーネ。お前は？」

「えーと、ワタリガニのトマトクリームパスタと自家製ベーコンとホウレン草のシーザーサラダ」

「とりあえずこんだけです」

「かしこまりました」

店員が去っていくのを見届けて、クウヤが話を続ける。

「イギリスです」

「ん？」

「イギリスから来ました」

「ふーん。なんだ、お前東洋っぽい顔立ちしてるから、てつきりそつち系の国の人かと思ってた」

「イギリスから来ましたけど、別に英国人って訳じゃありませんし、イギリスの前は違う国にいましたよ」

「……あっそ」

屁理屈にも似た言葉を返されたカノンは、投げやりに相槌を打った。クウヤとの会話の所為で、頭痛が増えたのは気のせいでは無い

だろう。

明らかに不機嫌な彼女を目の前に、クウヤはグラスに入った水を一口飲む。別に出身地くらしい話したって問題は無いだろうが、自分が一体誰なのかを特定されるようなことは極力避けたかった彼としては、これ以上この話は続けていたくなかった。

続かない会話の代わりに、クウヤも質問を返す。

「僕も質問良いですか」

「どーぞ」

「貴方、あの家に一人で暮らしてるんですか？」

グラスに入った水越しに映るクウヤを、カノンは少し考えた風にして覗きこんだ。

「んー。今はまあ、そんな感じかな」

「じゃあ部屋の壁に掛かってあった写真の人は誰なんですか？ 誰か男の人と貴方が写っていたように思いますけど。父親……にしては若すぎますよね？」

「何だと思う？」

カノンが問い返す。クウヤがその答えを探していると、さっきとはまた違う店員が両腕いっぱい皿を持って料理を運んできた。

湯気と共に漂ってくるその匂いを嗅いで二人は空腹だったことを思い出し、テーブルの上に並べられたパスタやサラダをもくもくと食べ始める。

「父親で無いとしたなら……お兄さん、ですかね？」

「じゃあそれでいいや」

「何ですかソレ、超適当なんですけど」

「お前よりマシだろ」

「いい勝負だと思えますよ。すいませーん、タコのカルパッチョーっお願いします」

異常な速さでパスタを完食したクウヤが、サラダを頬張りながら追加の注文を出す。

近くに居た女性店員が、別のテーブルの空き皿を抱えながら、器

用に伝票を取り出した。

「あ、おれもそれ食いたい」

「じゃあカルパッチョ二つ」

「お姉さん、包み焼きピッツアとライスコロツケも追加で」

かしこまりました、と店員が営業用の笑顔を浮かべて隣のテーブルへと移動する。

「次、おれからの質問」

「どうぞ」

「なんでイギリスに居たのに、わざわざこの国へ来たわけ？ イギリスの方が色々と進んでるし、何かと便利だろ。正直、この国が他の国より安定してるとは思えねーし」

フオークを相手に向けながら、カノンは心底不思議そうに聞いた。観光で来たわけでは無いのだから、何か理由があるに違いない。理由もなくわざわざ来るような国ではないからだ。

「うーん。最初はイギリスで、どんな人間でも始末してくれる有名な始末屋さんに会おうと思ってたんです」

「ほーお。どんな人間でも？」

「ええ。とても腕が良いらしくて、人殺し一家皆殺しの依頼も成功させたとかなんとか。噂ですけどね」

「そんなに凄腕なら、なんでその人に依頼しなかったんだ？ しなかったから、おれの所に来たんだろ？」

「痛い所を突いてきますね。僕だって本当はその始末屋さんに依頼したかったんですけど、どうやら偽情報を掴まされたみたいでして、」

話の途中だったが、場の雰囲気にもぐわなほほど笑顔を見せて店員がドン、と大皿をテーブルのど真ん中に置いた。

「追加の包み焼きピッツアとライスコロツケ、カルパッチョでございませーす！」

「どうも」

手に持っていた皿をテーブルに置き、代わりに空いた皿を慣れた

様子で下げていく光景を無言で見つめるクウヤの向かいでは、カノンは早速ライスロツケを頼張っていた。

店内はまだまだ忙しいのか、慌ただしそうに帰っていく店員を見届けて、クウヤは話を再開した。

「イギリスに居るって聞いていたのに、随分と昔にレスティナへ引越しちゃってたみたいなんです。気付くのが遅かった所為で、こちへ来て早々にお金が無くなっちゃいました」

「さっきから言おうと思ってたけど、実は馬鹿だろお前」

「事実なので言い返せませんね」

「それで、妥協しておれの所へ来た、と」

「全くその通りです。イギリスからだ中央のメトロポリスにも行けなくて、ソナチネに来るのが精一杯だったんです。結局、ぎりぎりで来られるのがこの城下町で、これからどうしようってあそこで困っていたんです」

カルパッチョをたいらげながら、フォークで噴水広場を指し示す。広場では子供達が集まって、何やら楽しそうに声をあげている。

パフォーマーでも居るのだろうか。何かを取り囲むようにして、それは遠くからでも目立っていた。

「そしたら、風と一緒に何か飛んできました。足元に」

「その『何か』っていうのが、さっきお前が見せてきたチラシだった。で、汽車に乗る余裕も無いお前は、近くに店を構えていたおれの所へ行くことにした。こんなところか」

「C'est juste!」

正解を言い当てたカノンに、クウヤがこの国では滅多に使われることのない言語で答えた。

一瞬、訝しげな顔をしたカノンだったが、すぐに溜息を吐いて空になった皿の上にフォークを放り投げた。

「……英国の前は仏国にでも居たのか？ お前、本当にどこから来たんだ？ 英語はかなり流暢な方だけど、英国人ではないみたいだし……」

「この国の人間じゃないことは確かですよ。それに英語は教養として学んでいただけのことですし、仏語だって話せるのはこれだけです。知り合いがフランスに住んでいて、これが口癖だったもので。貴方こそ、仏語が話せるんですか？」

「語学は好きな方だけど、仏語はまだ聞きかじった程度だな。おれも軽い挨拶くらいしか話せない」

話が途切れると、二人はほぼ同時に手を挙げる。それに気付いた店員が、テーブルの前に立ち止まって伝票を取り出した。

テーブルの上にあった大量の料理は、いつの間にか全てたいらげられていた。綺麗に端へと寄せられた空き皿達は、気持ちいいくらいに何も残っていない。

「お会計ですね？」

「や、デザート注文で。おれはカフェ・ラッテとミラノ風パンナコッタ」

「僕は日替わりデザート四種盛り合わせ……あー、でもなあ……やっぱりこっちも捨てがたい」

「何、なんか悩んでんの？」

「日替わりっていうのも気になるんですけど、ピスタチオのジェラートも美味しそうなんですよー……」

「ふーん。両方食べば？」

「え、良いんですか？」

「いいよ」

「じゃあ両方で」

ぱたりとメニューが閉じられる。

笑顔を浮かべているはずの店員の頬は、少し引きつっている。

「す、すぐにお持ちいたしますね」

伝票には、とてもじゃないが二人分量とは思えないほどの料理名で埋まっていた。

そんな店員の心も知らずに、カノンはグラスを片手に持ちながら、右肩を回しながら解した。

「正直な話、詮索すんのも尋問すんのも面倒になってきた」

「同感です」

「お互い、質問はあと一回な」

「いいですよ」

その答えに、人差し指を立ててカノンがにやりと笑う。クウヤは相変わらず薄く笑っているだけだ。

「なんであんな依頼をしてきた」

「……どうしてそんなこと聞くんです？」

「別に。ただちよつと、気になったただけだよ」

「具体的に、どの部分がですか？」

改めて問われたカノンは、首を傾げたままのクウヤから目を離して、頬杖をつきながらぼんやりと広場を見つめた。

噴水の近くにあるベンチには、パフオーマーとそれに群がる子供達の他にも、何人かの人間が疎らに座っている。誰かとの待ち合わせでもあるのか、しきりに腕時計を見る人。母親の買い物が終わるのを待ち続ける子供。和やかな雰囲気か漂うあの場所に、目の前にいる少年も座っていたのだろう。

そして、一人考えていたのだろうか。どうやったら、自分が死ぬのかを。

「カノンさん？」

何も喋らないカノンを不審に思ったのか、クウヤが怪訝な声で彼女の名前を呼んだ。

呼ばれた方向へと振り返りながら、カノンはしっかりと彼の目を見つめる。

「お前、死ぬって言うことをちゃんと理解してんのかな、って」

「おかしなことを聞くカノンさんですね。理解していなかったら、あんな依頼しませんよ」

「死んだら何も無いんだぞ？ 全部終わってしまう。お前だけじゃない。お前が死んだら、家族が悲しむ」

「悲しんでくれるでしょうか」

「喜ぶ人なんて居ない。少なくとも、おれの家族はそうだと  
言っていた」

「あの男の人ですか」

「そうだ」

すっかりと頷く彼女から、クウヤは自然と目を逸らした。何故  
だか、直視するのが憚られたのだ。

「そうだとしても、僕は居ない方が良いと思うし、死ぬなら  
早めに死んでおきたいんです」

「居ない方が良いつて……そんな人間が居るわけないだろ」

「居るんです。実際にこの僕がそうなんですから。僕のこと何  
も知らないくせに、勝手なこと言わないでください」

「それはお前が何も言わないからだ」

ぴしゃりと言いつつ放たれた言葉に、唇を噛む。クウヤの両手  
がきつく握りしめられたのを見て、カノンは少しだけ息を吐き出した。

見た目よりも大人びて見えた彼だったが、いまではむしろ、外  
見より幼いように見える。

「でも、僕だつて……」

「別に嫌なら話してくれなくたっていいさ。話すことを強要  
したい訳じゃない。ただ、何も言わない癖に、分かってもらおうと  
するなつてことだ」

突き放すような言葉のあと、二人の間に沈黙が降りた。

カチャカチャと食器が運ばれる音、周りの談笑、フォークとナイ  
フがぶつかる音、広場の人間の声。たくさん音で溢れているはず  
なのに、まるで二人の周りだけ現実から切り取られたかのように、  
無音だった。

クウヤはずっと拳を握りしめて、俯いていた。あれからカノ  
ンと眼を合わせようともしない。怒っているのだろうか。それとも。

気まずい空気に耐えかねていたカノンだったが、甘い匂いと共  
にやってきた店員によって、少し空気が軽くなった。

「お待たせいたしましたー！ カフェ・ラッテとミラノ風パンナコ

ツタのお客様」

「あ、おれです」

「それから、ピスタチオのジェラート、日替わりデザート四種盛り合わせでございます。ご注文は以上でお揃いですね？ それではこゆっくりどうぞー」

ほとんど駆け足に近い速度で厨房へと戻っていく店員の後ろ姿は、あつという間に小さくなった。

運ばれてきたカフェ・ラッテにストローを差しして、上に乗っていたクリームごと飲む。程良い甘さと冷たさが口の中に広がって、カラカラだった喉を潤す。

その味を十分堪能して、今度はスプーンへと持ち帰る。このパannaコッタはレオラが鼻屑にしていた。きつと美味しいに違いない。「……やっべ、滅茶苦茶うめー」

期待通り、今までに食べたどのpannaコッタよりも美味しかった。満足げに頷くカノンが向かいを見れば、クウヤはまだデザートに手を付けていなかった。

いつまでああやって俯いているつもりだろうか。呆れた様子でカノンが話しかけた。

「お前も食えよ。ジェラートが溶けるぞ？」

「何故、殺して欲しがるのか、と聞きましたよね」

カノンの忠告は受け取ったらしく、平たいスプーンでジェラートを掬い取り、口に運びながら先程のカノンからの質問を反芻した。

「……ああ。聞いた」

「強いて言うなら、誰かの所為で死ぬのが嫌なんです」

「はあ？」

びた、とジェラートを食べる動きが止まる。次はフォークに持ち替えて、もう一つのデザートへと手をつけ始めた。

盛り合わされた四種類の小さなケーキたちは、鮮やかな彩りで見る人の食欲を誘う。定番の苺ショート、ミルフィーユにタルト、粉砂糖が振りかけられたガトーショコラ。どれも一口で食べきれる大



きさに作られている。

「吐き気がしませんか。誰かの所為で死んでしまっただなんて」

サクサクとパイ生地を崩す音が、ラジオのノイズのように混じってくる。

一番手前にあつたミルフィーユを一心不乱にフォークで崩しながら、クウヤは話を続ける。

「よくある話でしょう？ 誰かを庇った所為で死ぬ。誰かに間違われた所為で死ぬ。誰かを助けた所為で死ぬ。誰かに恨まれた所為で死ぬ。誰かの、誰かに、誰かが、誰かを。誰かという存在の所為で死ぬ。それは時に知り合いだったり、全くの赤の他人だったりする。そんな理由で死ぬなんて、馬鹿みたいじゃないですか」

ぐちゅり、と苺が無様に潰された。

果汁とクリームがどろどろになって、皿の上に広がる。

「だから、僕は僕だけの為に死にたい」

最後の最後で、やっとカノンと眼を合わせたクウヤは、また先程のように小さく笑っていた。

綺麗に飾られていたはずのミルフィーユはぐしゃぐしゃに潰されて、カスタードクリームの間でジャムみたいになった苺が、何かを連想させてグロテスクに見えた。そのデザート皿の上では、まるで惨劇が起きたかの様で。

次の標的はタルトにしたのか、またフォークで壊し始めるクウヤ。今度はザクリとクツキー生地が崩れる。

「……おれ、思ったんだけどさ」

「はい？」

「それって『誰かの所為で死ぬのが嫌』なんじゃなくて、『自分の所為で、誰かが死ぬのが嫌』の間違いなんじゃねーの？」

カノンの質問にも似た科白に、クウヤの動きが止まる。

辛うじて全壊を免れたタルトを手掴みで取り上げて、カノンはぱくりと一口で食べてしまったが、クウヤはそれについては何も言わない。

何も言わない代わりに、少し力無く息を吐いた。

「凶星なんだろ」

「……とにかく、死んでからでは遅いんです。だから早く死んでおきたいんです。早く。手遅れになる前に、出来るだけ早く」

まるで言い聞かせるように、何度も何度も同じ言葉を繰り返す。

そんな壊れた蓄音機のように呟きつつけるクウヤの頭に、手刀が振り下ろされた。カノンだ。カノンが、容赦の無い勢いでクウヤの脳天を直撃した。

「つた……!？」

「お前、明日荷物まとめてもう一回ここに来い。死んでも来い」

痛みを訴える頭を抑えながら見上げると、カノンが口をへの字に曲げて自分を見つめていた。

「……は？」

「金無いんだろ？ ちょうど今人手が足りなくて困ってたんだ。うちで働け」

決まりだな、とさっさと納得してしまったカノン。うんうん、と両手を組んで一人頷いた。

「ちよつ、何勝手なこと言ってるんですか!」

「うるせーな、もう決めたの! 文無しは黙って言うこと聞けよ。」

お前、まさかタダで殺してもらおうだなんて思ってた訳じゃねーだろっな?」

「貴方より常識を弁えているつもりです。ちゃんとお金は払いますよ」

「嘘吐け。お金が無いって散々言ってたじゃねーか」

事実を突きつけられて、思わず後ずさる。かといって、いつまでも尻込みしていられない。

クウヤもカノンの勢いに負けじと声を張る。

「今は無いですけど、持ち物全部売ってお金を作るつもりです! どうせ死ぬんだから、いらぬものばかりですし」

「じゃ、百万ミリア」

「は？」

間抜けな声を出したクウヤの鼻を、人差し指でぐいぐい押す。

「殺しの依頼は高額なんだよ」

にやりと笑ったカノンの顔は、勝ち誇ったように自信で溢れている。

法外な値段に一瞬だけ呆けてしまったクウヤだったが、すぐに我に返る。そして、テーブルを両手で叩いた。辺りに派手な音が響く。「ちょっと待ってください！ それにしても高過ぎやしませんか？別に暗殺や事故死偽装なんてオプションはいらないし、同意の上の殺しじゃないですか！」

声の大きさも尋常ではなかったが、ソレよりも会話の内容が内容だっただけに、周りは一時的にカノン達のテーブルを注目する。が、すぐにまたいつもの店内へと戻った。

「おれは滅多に殺しは請け負わないの。だから、特別料金だ。おれしか頼る人が居ねーんだろ？」

「せめて半額とか、」

「半額にしても良いけど、お前金あんの？」

財布の中身など、見なくとも分かる。覚えられないほど持ち合わせていないからだ。

ぐ、と言葉につまったクウヤを、カノンが今まで以上に嬉しそうな笑みを零して笑う。

「足りないんだろ？」

「……………足りない、かもしれませんが」

「じゃあ決まりだな。おれん所に住み込みで働け。あの家、おれには広すぎるんだよな。お前が住めばちょうどいい広さになるだろ」

「そんな勝手な！」

どんどんと進んでいく話に歯止めをきかせようと、カノンの声以上に大きな声でそれを遮るが、さらに上乘せするようにカノンは話し続ける。こうなってしまうと、もう彼女のペースを乱すのは至難の業だ。

「もし明日来なかったら、お前の生きてきた中で一番恥ずかしい出来事を大声で暴露しながら宿まで押し掛ける」

「いやいや……そんな。またまたご冗談を」

「おれの友達にさ、おれになら格安で情報あげらって言うてくれる情報屋が居るんだ。いい奴だろー？ 横の繋がりが多いのが、便利屋の特徴の一つですよ？ お客様」

にこり、と営業用の笑顔を向けられて、クウヤの頬を冷や汗が伝った。

逆らってはいけない。そんな雰囲気だ。威圧感と言っても良い。

便利屋の特徴だとか、情報屋の友達だとか、クウヤにはそれが本当の話かどうかなど分からない。ただ一つ確信を持って言えることがあるとすれば、「この人なら絶対にやる」という嫌すぎる確信だけだ。

もう一度、目の前の人間を見る。眼が合つと同時に、またにこりと笑いかけられた。

逆らっても無駄だ。クウヤは諦めたようにして、椅子の背もたれへと崩れ込んだ。

「絶対に行きます。本当に。約束します。だから絶対に押し掛けに来ないでください、宿の人に迷惑です」

「よし、よく言った」

「無理矢理言わせた癖に……」

一体自分は何をしているんだ。わざわざこんな辺鄙な国にまで来て、最終的に便利屋で働くことになりました、だなんて、本当に訳が分からない。

明日になれば、今の会話は実は夢だった、なんてことにならないかな。

もうこれ以上その話をしなくなつて、クウヤは伝票を片手に違う話題へと変えた。

「ところでカノンさん。本当にこんなに奢ってもらっていいんですか？」

「言っておくけど、おれは払わないよ」

「え！？ だって、奢ってくれるって言ったじゃないですか！ 僕、本当にお金持つてないですよ！？」

「大丈夫大丈夫。なんの心配もねーよ」

伝票を持って絶望的な顔をするクウヤにひらひらと右手を振って、そのままその指で噴水広場を指し示す。

カノンが示した噴水のちょうど正面側には、一箇所だけ子供の群れが出来ている。

「あそこで子供に囲まれながらトランプしてる軍人が見えるだろ？

あれ、おれの知り合い」

言われてみれば、子供達の真ん中には深い紺色の軍服を見に纏った軍人らしき人間が見える。

年齢はまだまだ若そうな青年がトランプを一輪のガーベラに変えると、周りの子供達からは拍手と歓声が沸き上がった。

「で、あの手品上手な軍人さんがどうかしたんですか？」

「言っただろ？ 知り合いだって。あの人が全部払ってくれるから」

「……いいんですか？」

良いわけが無いが、彼女のシニカルな笑みを前にそんな常識など通用しないことは、さっきのやりとりで十二分に分かっていた。

「いいんだよ。どーせまた仕事サボってんだから。弱味握られるようなことをしてるのが悪い」

貸せ、と一言だけ言って、クウヤから伝票と取り上げると、カノンはオーブンテラスの柵を跨いで軍人の元へと駆け足で近寄る。

傍へやってきたカノンに、軍人が嬉しそうに笑いかける。その後、彼女の右手に握られた伝票に気付くと青い顔をしてすぐさま逃げ出した。トランプが派手に散らばるが、それよりも派手に軍人が転げた。カノンが伸ばしていた足に引っ掛かったらしい。

ぎゃあぎゃああと騒ぐ二人。その周りで離し立てる子供達。

一段と騒がしくなった広場を呆れた目で見つめながら、クウヤがぼつりと呟く。

「……………これからどうなるんだ、僕」  
全く予想が付かない自分の明日に、溜息を吐いた。

\*\*\*\*\*

「で、クウヤはおれの所で一緒に暮らしながら、便利屋見習いとして働くことになったわけ……………って、寝てるし」  
話し終えたカノンの隣で、シオンは小さく寝息を立てて眠っていた。

どうやら話の途中で眠ってしまったらしい。子供特有の高い体温のお陰で、二人を包む毛布はとても暖かい。

シオンの額にかかった前髪を手で梳かして、しばらく弟の顔を見つめる。楽しい夢でも見ているのだろうか。その寝顔はどこか笑っているようにも見えた。

「ふあーあ……………今日は疲れたな。おれも寝よーっと……………」  
涙の滲んだ両目を擦りながら、カノンはごそごとベッドの奥深くまで潜り込む。

夢の中へと沈む前に願うことは、かつての同居人のこと。

どうにか嘔吐きで傷付きやすいあの子が、優しい夢を見られますように、と。



140 きみのためのノスタルジア（いつかそんな日が来る前に）（後書き）

おやすみ、ノスタルジア。



141 ささやかな墜落論（きみたちは何も知らない）（前書き）

お母さん、教えていらっしやるあなたがまっすぐ歩いてください。  
そうしたらあなたを見てそうなりたいと思うでしょう。

【Aesop/イソップ物語】

141・ささやかな墜落論（きみたちは何も知らない）

三月の朝はずいぶんと冷え込む。その所為か、早朝の噴水広場にはクウヤ以外の人間は居なかった。犬の散歩に行く人も見かけない。まだ早すぎる時間帯なのかもしれない。

クウヤがぼんやりとベンチに座っていると、後ろから誰かが近づいてくるのが分かった。

こつこつと石畳に響く足音に耳を澄ませ、深く息を吸い込む。冷たい酸素が肺を満たしていくのが分かる。

「おはようございます」

女の声が、やけに大きく聞こえた。しんと張り詰めた空気が、少し変わる。

「お久しぶりですね、No.24さん」

クウヤは目の前に立つ伝言屋へと挨拶を返す。それに応じて、No.24も微笑みながら丁寧にお辞儀をした。

「お元氣そうで何よりです、世外れの都合屋クウヤ・アンダーグラウンド。依頼人から伝言を承っておりますよ」

やっぱり、と呟いたクウヤに頷きながら、No.24はすらすらと業務連絡さながらの口調で伝言を伝える。

「本日中に、城下町の骨董店へ行くこと。店主に話をつけてあるので、彼から『注文の品』を受け取ること。このことは他言無用。余計なことは聞いてはいけません……だそうです」

「忠告をがつつり無視して聞いてみませんが、この伝言の依頼主のお名前は？」

「守秘義務を全うさせていただきます」

アルカイックスマイルで返された彼女の答えに、クウヤは少しだけ息を吐いた。溜息にも似ていた。顔は、自然と苦笑の表情になっていた。

「僕ね、昨日仕事があったんですよ」

「もちろん存じておりますよ。大変なお仕事でしたね、お疲れさまです」

労いの言葉をかけてくれる彼女に柔らかい笑みを零して、クウヤは続けた。

「その仕事の依頼してきた人を、知らないんですよ。まあ職業なんかは想像出来ませうけど、他は何も。顔も声も、名前すらさっぱりなんです。なのに向こうは僕のことを知っているんですよ？ それってなんだか不公平だと思いませんか」

「後ろ暗い依頼をしてくる人間は、得てしてそんなものですよ。それは貴方もよくご存じでしょう？」

割り切っているのか、何かを悟っているのか、とくに思うこともなかったらしい彼女の解答に、適当に相槌を打つ。

腕時計を見れば、六時を少し過ぎていた。

「朝早くからわざわざありがとございました」

「それが仕事ですから。骨董店の位置はお分かりになりますか？」

「大丈夫です、何度か足を運んでいますから。依頼主もそれを知っていて、その場所を指定したんでしょう」

「そのようですね。それでは、私はこれで」

No.24がそう言うと同時に、クウヤの背後で犬の鳴き声が聞こえた。

驚いて振り向くと、早朝から犬の散歩をしていたのか、白い子犬を宥める少女が居た。あれは確か、ハクトに預けてきた自分のペットと同じ種類ではないだろうか。首輪も同じ赤色で、三日と経っていないと言うのになんだか懐かしい。

「そうだ、No.24さん。伝言ついでにカノンさんに帰りは遅くなるって伝え……」

さつきまで自分が見ていた場所へ振り返ってみれば、そこに彼女の姿は無かった。

相変わらずの神出鬼没ぶりだ。

「……報酬もらいに行くだけだし、書き置きもしてきたし、大丈夫

か

勝手に自己完結させたクウヤは、その足で見慣れた街を歩き出す。ちよつどその隣を、何台かの軍用車が風のように走り抜けた。ちらりと見えた車内は、どの軍人も慌てた様子だった。

「お仕事ご苦労様です」

まるで他人事のように、クウヤは呟いた。

\*\*\*\*\*

「注文の品、届いてるよ」

もう七十になる店主が、少し曲がった腰を労りながら店の扉を開ける。ぶっきらぼうに言われたその一言に、クウヤは目をぱちくりさせた。

クウヤが来ることを知っていたのだろうか。何も言っていないのに、用件は伝わっていたようだ。もしかすると、No. 24が先に言っておいてくれたのかも知れない。

「おはようございます、セピアさん」

「おはようさん」

開店作業の途中だったらしく、店内を掃いていた箒を壁に立て掛けながら、クウヤに中へ入るように促した。まだ朝早い時間のため、当然ながらお客は誰も居ない。

「聞いたか？ 軍のお偉いさんがまた死んじまったんだと。朝方が

らえらい騒ぎだ。おかげで目が覚めたよ」

セピアは頭に乗せていた老眼鏡を掛け直して、眠たそうに欠伸をした。この様子だと、セピアは騒ぎを聞いてクウヤが来ることを予想したらしい。どうやら先程の考えは間違っていたようだ。

そういえば、彼等のように大手の業者は求められること以上の仕事はこなさない。下手に親切心を働かせれば、かつての自分のように厄介なことになってしまいかねないからだ。

「ワルツハイネに、リアハーデン。あんまり目立ってはいないが、他にも何人が軍人が死んでたな」

「……随分と詳しいんですね。その話、新聞には載ってなかったと思うんですけど」

「ここは暇な奴がよく街の噂話を置いていってくれるからな。泥酔して線路に落ちただとか、車に轢かれただとか、よくある事故の話だが、どれも死んだのは国軍の人間だつて話だ。それも戦争に肯定的な軍人ばかりが立て続けにな」

「へー。最近の軍部には死神でも棲み付いているんでしょうか」  
しれつと言いつくクウヤに、セピアも淡泊に答える。

「ワルツハイネについていたのは死神かもしれないが、他は全部闇鬼に憑かれてたんだろつな。運が悪いヤツらだよ」

「あ、酷い言い草ですね。善良な小市民に対して」

「一見すれば、そう見えないこともないつてのが一番怖いよな。黒い髪に碧の眼。闇鬼の特徴なんて、善良な小市民にはそれくらいしか分かってないんだから」

セピアがカウンターの奥へと入っていく。誰も居ない店内で持ち無沙汰になったクウヤは、ぐるりとあたりを見渡す。

アンティーク調の椅子、猫のブローチ、可愛らしい少女の人形。相変わらず趣味の良い品ばかりだ。

一度カノンを連れて来たこともあるが、彼女は十分もしないうちに飽きて「どうでもいいから早く飯に行こうぜ」と言った。彼女は実用性のあるものを好むので、こういうものに興味が湧かなかつた

のだろう。そのくせ、大した実にもならない本ばかり溜め込むものだから、あの家はいつも散らかっている。

自分が居た頃はまだ幾分かましだったが、今日の朝、改めてリビングを確認したら言葉にならなかった。もちろん悪い意味で、だ。彼女はもう少し淑女がなんたるかを学ぶべきだとクウヤは密かに思う。

そんなくだらないことを考えていると、店主が小さめのカバンを持って出てきた。

「まさか骨董店が運び屋だなんて思いもしないでしょうね」

「運び屋じゃない。俺はただ『注文の品』の受け渡しをしてるだけだよ」

手渡されたカバンを開けてみると、その中には確かに聞かされていたとおりの金額が入っている。

当分は仕事をしなくても十二分に生活が出来そうだ。ハクトに預けたまま、しばらくかまってもやれなかったハカセやヒデヨシ達に、新しいおもちゃを買ってあげるのもいいかもしれない。

その前に、仕事用の服をまた何着か買っておいたほうがいいだろう。最近の仕事続きで、どの服も駄目にしてしまったのだ。

「ほーお。こりやまた随分と儲けたな。幾らだ？」

カバンの中を遠慮もせずに覗きこみながら、セピアが興味深そうに尋ねる。

「利口に使えば、半年は隠居生活が出来るくらいですかね」

「羨ましい限りだな」

パイプを吹かしながら、セピアは心底羨ましそうに言った。それは支払われた報酬に、というよりは隠居生活、という言葉に対して羨んだように聞こえた。

確かに、セピアぐらいの年齢ならいつ引退してもおかしくはない。それでもまだ仕事を続けているのには、何か理由があるのかも知れないが、それを聞けるほど二人の間柄は親しく無い。

「人を殺めて、お金をもらって。僕、地獄に堕ちちゃいそうですね」

「地獄があつたらな」

「無いんですか？」

「有るとは断言出来ないだろ？」

「無いとも断言出来ませんけどね」

大袈裟に声を出して笑ってみるが、昨日のレオラの言葉が気になつて、すぐに表情を戻した。

もしかすると、今の自分もちゃんと笑えていなかったのかもしれない。

商品の鏡は自分の後ろにしか無いから、確認することも出来ない。急に黙り込んだクウヤを特に不審がることもせず、セピアは淡々と語る。

「人を殺める道具を預かつて、それを殺し屋に渡す俺も、地獄に堕ちるのか？」

「どうでしょう？ それは、地獄があるかどうか確かめてみないと」

「そいじゃ、お前がちよつくら調べてきてくれよ」

「嫌ですよ。死にたくないですもん」

「そりゃそうだ」

会話に区切りが付いたところで、セピアはもう一度大きく煙を吹かした。

もわもわと立ち込める白いそれは、どこか幻想的な雰囲気を感じさせる。

「それじゃ、僕、行きますね」

「ああ。そいつでしっかり飯食えよ」

ぶつきらぼうだけど、どこか優しさが伺えるその表情は、どこかの誰かに似ていた。

近くに居たかもしれないし、遠くにも居たような気がする。

「今日は朝早くからわざわざありがとうございました」

「ま、それが仕事だからな」

どこかで聞いたやりとりだな、と思いながらクウヤはカバンを持

っていない方の手でドアノブを握る。

ちらりと見えた腕時計の文字盤は、まだ七時が半分になったばかりだ。

昨日、あの家へお邪魔したのが遅かったから、カノンやシオンはまだ眠っている頃だろう。

「お疲れさん」

背後から、パイプの煙の匂いがする。

店主には何も言わずに、店を出る。

外は、すっかり昇りきった太陽のおかげで、さっきよりも温かいが、ちやりと重厚な音がして、店のドアが閉まる。

「本当、疲れたな……」

その言葉に答えてくれる人間は、誰もいなかった。



141 ささやかな墜落論(きみたちは何も知らない)(後書き)

神様、いらつしやるのならあなたがまっすぐ歩いてください。  
そうしたらあなたを見てそうなりたいと思ったでしょう。

142 どこかに消えたユーサネイジア（いつかそんな日が来た時は）

城下町の噴水広場前にある安くて美味しいレストラン。そのオ  
ーブンテラスのとある一角では、二人の人間が向かい合って座って  
いた。

「おはようございます、カノンさん。あ、着替えは勝手に借りちゃ  
いました。あとで洗って返しますね」

にこりと向かいの席に笑いかけたのは、開店から二時間、おかわ  
り自由のコーヒースタンドで座り続けたクウヤ。

「……てめー、このっ……バカ！」

その挨拶に罵声で答えたのは、何も言わずに消えた彼を朝から必  
死になって探していたカノン。

お昼を食べるには少し早い時間帯のため、テラスに客は数えるほ  
どしか居ない。

奇しくも、その席は二人が初めて共に昼食を取った席だった。

「今日も元気もりもりですね、カノンさん。でも第一声に罵倒って  
挨拶としてどうかと思います」

「それは悪うございましたっ！ おはようございます馬鹿野郎！」  
カノンの罵声が再び響く。それでもなお、クウヤは優雅にコーヒ  
ーを堪能する。香り豊かなこのコーヒーは何杯飲んでも飽きが来  
ない。

「おつま……超探したんだぞ！？ 朝起きたらベッドはもぬけの空  
だし！」

「えー？ ちゃんと書き置きしてきたじゃないですかー」

「何が!? これが!?」

とうとう沸点に辿り着いたカノンは、怒鳴りながら立ち上がる。

椅子がひっくり返るんじゃないかと思うほどの勢いだ。

その勢いに任せて、恐らく怒りと共にくしゃくしゃにしてしまっ  
たのであろうメモをテーブルの上に叩き付けた。

可哀想なそれを丁寧に広げながら、クウヤが音読する。

「『夕飯はオムライスが食べたいです。ケチャップライス、卵はふわふわまたは半熟希望』……ほら、ちゃんと書きましたよ」

「我が家の献立に口出した形跡した見られないけど!？」

「夕飯までには帰る意思が見えてきませんか？」

しれっと言い放つ彼に、カノンはもう言い返すことが出来なかった。言われてみれば、そうかもしれない。そう思った時点でカノンの負けだった。

「もつと分かりやすくしてくれ……どこへ何しに行くとか……」

「遠足は家に帰るまでが遠足って言いますが、仕事は報酬をもらうまでが仕事ですからね。安易に喋っちゃいけないかなと思ったんです」

「ずず、とコーヒーを飲み干す。その向かいで、やっとカノンが椅子に座った。」

探し回ったというのは本当なのだろう。疲れたようにテーブルへと俯せになる彼女に、流石に申し訳ない気持ちになってきた。もう少し真面目に書き置きすれば良かったかもしれない。

今思えば、カノンには迷惑ばかりかけているような気がする。

「そうだ、カノンさん。お腹空いてませんか？ 今日僕が奢りますよ。なんでも注文しちゃってください」

太っ腹なその言葉に、カノンの肩がぴくりと動く。

朝から探し回ったことと、さっき怒鳴ったことで空腹は無視できないものになっていた。

「おれ、遠慮とかしねーぞ」

「別にしなくてもいいですよ。せつかくここに大金があるんです、どーんと盛大に行っちゃいましょう!」

「こんなお金、早く使い切りたいんです。あくまで笑いながら話すクウヤに若干の違和感を覚えつつ、カノンは近くに居た店員を呼び止める。」

メニューは見ずとも分かる。このレストランはカノンの中で利用

頻度が高いのだ。

「ご注文はお決まりですか？」

「……ワタリガニのトマトクリームパスタ、タコのカルパッチョ、フランボワーズのガナッシュタルトとカプチーノ」

「僕は自家製ハムとホウレン草のシーザーサラダ、鶏もものトマト煮、あさりのリゾット」

普段シフォニア島にいるクウヤは、カノンのように品書きを覚えるほどこの店へは来ないため、大きなメニューを広げながら注文する。

店員がすらすらと伝票へ書き加えて行くのを見届けて、さらに続ける。

「それからマダイのポワレ・バルサミコソース添え、パルメザンチーズのリングイーネ、包み焼きピッツァ」

「ご注文は以上で、」

「あとは……ライスコロッケ、サーモンのフェットチーネ、茄子のポロネーゼ……えーっと、デザートは後で注文してもいいですか？」

「も、もちろんです」

しっかりと笑顔で対応するが、若干引きつっているのは否めない。

カノンに至っては、水を飲んでいたはずなのに動揺で咽せてしまっている。

「ちょ、ちょっと待てクウヤ。おれはそんなに食えないぞ!？」

「あはは、何言ってるんですかカノンさん」

心底可笑しそうに笑うクウヤに、カノンは疑問符を飛ばす。二人ともよく食べる方ではあるが、流石にこれは注文しすぎのような気もする。先程の店員の微妙な笑顔がその証拠だ。

だが、クウヤは相変わらず楽しそうに笑いながら、恐ろしく真面目に言い切る。

「もちろん、全部僕が食べるんですよ？」

「……それはどうも失礼しました」

\*\*\*\*\*

ちょうどクウヤが注文を終えたところ、同じレストランの店内席ではテーブルの上にトランプの山を築いた三人の軍人と一人の女が、おかわり自由のコーヒーを飲んでいた。

四人のうち、一番若い軍人 ユーリ・バーガンデイが、ぺち、と叩き付けられるように置いたのは、ダイヤの2。いまやっているこのゲーム『暇人で集まって大富豪大会』負けた奴はもれなく全員の日飯奢れ』では、例外を除いて一番強いカードだ。

自信のある瞳で、周りへぐるりと視線を動かす。

「パス」「パス」「……」

軍人二人は潔くパスをするが、残り一人が渋る。

「どうしたんすか、メルニカさん。パスならパスって言ってくれないと、次に進めないっすよ」

にやにやと笑いながら相手にパスを言わせようとするユーリに向かって、メルニカはその上をいく意地悪い笑みを見せた。

「これ、なーんだ」

ぱしっ、とダイヤの2の上に置かれたのは、人を馬鹿にしたような顔のピエロ。

「……ジョーカー……」

例外である最強のカードと、望まぬ邂逅を果たしてしまったユー

りは、がくりと肩を落とした。

目に見えて落胆する彼を、さらなる不幸が襲う。

「さーて、反撃開始よ！」

流れてしまったトランプの山に、新たなカードが置かれる。

ダイヤ、ハート、スペード、クローバーのキング。

計四枚の、ある者にとっては地獄、ある者にとっては天国の組み合わせである。

「革命！」

楽しそうな声で決定打を喰らわされたユーリは、露骨に嫌そうな顔をした。

「うっわ……これ、俺もう大貧民決定っすよ」

四人分も払えるだろうかと心配になって、ポケットから財布を取りだし中身を確認する。

払えないことも無いが、財布が軽くなるのは確実だ。この店が安さを売りにしていて良かったと心から思った。

そんなユーリの財政状況など何処吹く風で、軍人の一人、アルマがカードを出しながら話しかける。

「なんかさ、こうやってみんなと会うのは久しぶりだよなー」

「あー、言われてみればそうだな。ユーリとアルマが警察軍に行ってから、みんなが揃う時って無かったもんな」

スペードの5を出して、ワープが答える。

「これでタイトもいたら、ソリティア組全員集合なんだけどね……って、そういうえばワープさん仕事は？ バーガンディくんはいつものことだけど、国軍はいま大変なんじゃないの？」

「上層部ならてんでこ舞いだよ。死神がうるついでる所為で」

次期総司令官の最有力候補だったリアハーデン将軍が死んだらしい。ワープがそう聞かされたのは、出勤してすぐのこと。つい数時間ほど前の出来事だった。

どうやら誰かに殺されたらしい。

軍部はその話題で持ちきりだった。上層部は緊急に会議を開き、

目下犯人捜索中。それと同時に、次の総司令官候補を誰にするかで話し合いの真つ最中だとかなんとか。

「次、誰がなると思う？」

重要な部分が抜け落ちた発言だったが、残りの三人が間を置かずに答える。

「俺はヴィステル將軍に頑張つて欲しいっすね」

「ワタシも」

「俺もかな。警察軍はだいたい保守派だろ。ワーブは？」

リアハーデン將軍と対立していた派閥で、国軍よりも警察軍から支持のある將軍の名前があがり、妥当な線だな、とワーブは一人頷く。

メルニカは軍を辞めたからあまり関係ないが、残りの二人は警察軍に移つた者だ。ヴィステル將軍を選ぶのは当然のように思えた。

「誰が総司令官になつても構わないけど、また戦争になるのはごめんだな」

「軍人なんて、戦争する為にいるようなもんだけどね」

尤もな発言が出たが、それに対してアルマが反論に出る。

「それは国軍の仕事だろ。警察軍は市民の平和を守るためにいる」

「警察軍も、兵が足りなくなつたらかり出されるわよ。知ってる？」

軍人から裏町業者になる人は居ても、裏町業者から軍人になる人は居ないんだって」

ぐるりと周りを見渡す。

メルニカの視線がもう一度自分の手札に戻つて、諭すように言う。

「つまり、そういうことよ」

「地獄つて、あると思います?」

空になった大量の皿の上へ静かにフォークとナイフを置いて、クウヤは問いかける。

「お前と禅問答する気は無い」

向かい側から放たれたカノンの素っ気ない返事に嫌な顔一つせず、むしろ驚いた顔で会話を続ける。

「おおっと、随分と嫌われたものですね」

「自分が誰からも愛されるわんこ系の人間だとも思ってたか?」

「そりゃあもう満々に」

「残念なお知らせだけど、お前の勘は相当鈍ってるぞ」

「常に第六感で生きている僕には致命傷です、ぐはあ」

大袈裟なりアクションをつけてくるので、思わずカノンは顔を顰める。

普段のクウヤとは何処か違う気がした。

「お前さ、何か悩んでんだろ?」

「……あれ? カノンさんも第六感で生きてます?」

「お前がやたらと喋るときは、何か悩んでるとき。そこ、変わらないいな」

「おかしいことを言うカノンさんですね。この世に不変のものなどありはしないのです。どこかの偉い人がほざいてやがりましたよ」

「だけど不思議なことに、人間ってそうやすやすと変われたりはいないんだよな」

「気持ち悪いですカノンさん」

「なんだとコラ。おれの発言のどこに気持ち悪い要素が含まれていました? 簡潔に述べる、そして深く謝罪しろ」



「いえ、そうではなくて……」  
青ざめたクウヤの顔を見て、カノンの顔色も悪くなる。  
う、と口元を抑える彼を脇に抱えるようにして、カノンがトイレへと走り出すのに三秒もかからなかった。

「お前な、吐きたくなくなるまで食うなよ」

「すみません……ちょっと食べ過ぎたみたいです……あー、気持ちわるかった……」

「前から言おうと思ってたけど、詰まるところ馬鹿だろお前」

「事実なので言い返せません……なんだかこのやり取り、昔にもした気がするんですけど」

「はは、と声に出して笑うと、それにつられたのかカノンも少し微笑んだ。やっと、いつもどおり笑えた気がした。

「それにしても、いい天気だなー」

「そうですね。もう春ですよ」

「気が早いな」

食べ過ぎた分を燃焼させるために、城下町の大通りを二人で歩く。昼間になってくると、朝の肌寒さは嘘のようにぽかぽかと陽気な天気になっていった。三月にしては暖かすぎる気もする。

小春日和につられて出てきたのか、猫が日向ぼっこしているのが見えた。尻尾がゆらゆら揺れているのが気になって、クウヤはそつと猫に近付いてしゃがみ込む。

暖かい日差しに眠気を誘われているのか、猫は逃げようともしない。

「ノロマ、ちゃんとごはん食べてるかなー」

自分の飼い猫のことを思い出して、思わず頭を撫でる。尻尾が先程よりも揺れた気がした。

猫と戯れるクウヤの後ろで、カノンはその光景に目を細めながら

問いかけた。

「それで。結局気は済んだのか？」

「何の話です？」

「とぼけんな。ヤケ食いするほどの何かがあったんだろ」

相変わらず猫とじゃれながら、クウヤは少し眉をひそめる。

「……さつきも思いましたけど、カノンさんって、『何か悩んでるだろ』とは聞くけど、『何を悩んでるんだ』とは言いませんよね」

店での会話を思い出して、クウヤはどこか寂しそうに笑う。ただ、その表情はカノンからは見えない。

そのかわり、カノンが呆れた表情をしていることもクウヤからは見えない。

「あのさあ……お前、何か勘違いしてるぞ」

「はい？」

「お前つていろいろ詮索されるの嫌いだろうから、おれからは何も聞かないことにしてるの。でも、それは聞きたくないってことは違う。お前が聞いて欲しいなら、おれはいくらでも聞いてやるよ。そのへん、間違っなよ」

思っていることを簡潔に、それも一息で言い切った。少し声が大きかったせいか、猫の尻尾がぴんと立っている。

しばらくは驚きで動きが止まってしまっていたクウヤだったが、猫の尻尾がまた揺れ始めたのを見て、やっと声を発した。

「カノンさん」

「ん？」

「いまからどうでもいい独り言を言うんで、聞き流してくださいね」

「あいさー」

猫の頭を撫でながら、クウヤは息を吸う。

冷たい空気が肺の中に入ってきて、頭も一緒に冴えた気がした。

「偶然に偶然が重なって、あの日、僕は貴女と出会いました。」

最初はね、ぶっちゃけ貴女のこと嫌いでしたよ。今だから言える

ことですけど。

すぐ感情的になるし、なんでもかんでも自分で決めて言っちゃうし、勝手なことばかり言うし、大雑把で男勝りで、そのうえ怒ると怖いし。

覚えてます？ 仕事を強制的に手伝わせたこと。犬の散歩みたい  
に簡単な仕事ばかり押しつけてきましたよね。

それから、勝手に僕の交友関係広めたこと。こっちでは知り合い  
が一人も居ないから人付き合いなんて面倒なことしなくて済むと思  
ったのに、あつという間に知り合いだらけでしたよ。

まだまだありますよ。僕に無理矢理料理させた後、僕の作った料  
理は美味いからこれからも作ってくれと言ったこと。

本だらけで汚くなった部屋を仕方なく片付けていたら、全然悪び  
れもせずに僕が居てくれて助かると言ったこと。

僕が来てから、毎日楽しいと言ってくれたこと。

せっかく僕がすべてに無関係でいようとしてるのに、貴女は僕と  
何かをすぐに結びつけて関係をどんどんと作っていった。

どうしてくれるんですか。貴女の所為で死ぬのが怖くなっちゃっ  
たじゃないですか。誰にも迷惑かけずに、早い内に死んでしまいた  
かったのに、予定が狂っちゃいましたよ。迷惑もいいところですよ」

カノンは何も言わない。これは独り言なのだから、当たり前だ。  
自分からは彼女がいまどんな顔をしているのかは分からない。そ  
れで良かった。そうじゃなければ、次の言葉はとても言えない。

「貴女は僕のことを昔から変わらなと言っけれど、僕はずいぶん  
変われたように思います。貴女のお陰で。貴女には一度も言ったこ  
と無いですし、これからも言っつもりありませんけどね。」

ありがとう、だなんて」

猫を撫でる手を止めた。

立ち上がって、そっぽ向くのを止めた。

ちゃんと向き合うと、綺麗な青い眼が自分を見ていた。

「以上、独り言終了」

なんだか気恥ずかしくなって、いつもみたいに笑って誤魔化す。やっぱり人はそう簡単に変わらないものなのかな、とクウヤは思った。

「なあ」

「はい、なんででしょう」

急に話しかけられた所為で、声の上擦る。

そんなクウヤのことを気にもせずに、カノンは大通りの方を指差して言う。

「帰りに本屋寄ってもいい？ 今日、おれの好きな作家の小説が出てるはずなんだ」

「また本ですか？ もう部屋にいっぱいあるじゃないですか」

先に歩き始めたカノンを追いかけながら、クウヤが呆れた声を出す。

「いいじゃん。お前が片付けてくれるんだろ」

「しょうがない人ですね」

いつもとは違う笑いかたをするクウヤを、猫だけが見ていた。

142 どこかに消えたユーサネイジア (いつかそんな日が来た時は) (後書き)

133 (142)

BGM: ムシバメルモノ / detune

間奏曲 拾肆曲目「マイディア・ファミリア」

「0」

貴女の家族になりたいよ。

「1」

朝起きたら、隣に居るはずの姉さんの姿が無かった。  
サイドテーブルに置いてある時計を見ると、すっかりお昼になっている。昨日は少し夜更かししてしまったから、寝坊してしまったみたいだ。

たぶんキッチンに居るんだろうな、と思って僕は駆け足で階段を下りる。

クウヤも起きてるかもしれない。クウヤと会うのは久しぶりだ。そつだ、また漢字を教えてくださいらおう。

「あれ？」

予想は外れて、キッチンには誰も居なかった。

おかしい。リビングはいつも通り本が散らかっているけど、ソファーには誰も座っていない。

「姉さん、クウヤー？ おはよー」

慌てて、自分の部屋に行ってみるけど、そこで眠っていたはずのクウヤも居なかった。

二人して、何処かへ出掛けてしまったらしい。

「起こしてくれたっていいのに……」

一人のけ者にされた気がして、唇をとがらしながらもう一度キツチンに戻る。

姉さんのことだから、書き置きくらい残しているだろう。そう思ったのだ。が、ここでも予想は外れて、そんなものは何処にも残されていない。

「……きつと、買い物に行っただ」

自分に言い聞かせるようにして、わざと声に出す。

そうしないと、かちこちと五月蠅い時計の音に負けてしまいそうだった。なんの勝負かは分からないけど。

「どうしようかな」

改めてぐるりと見渡してみると、この家は広い。

姉さんが僕を拾ったときに言っていたとおり、一人でいるには広すぎるような気がする。

二人でちょうどいいくらいの、小さな僕らの家。だけど姉さんがそこに居ないだけで、ここがなんだか知らない人の家のように感じられる。

妙な気まずさと、不安に煽られて、僕は両手で自分の頬を叩いてみる。

「きつと城下町に行っただ」

家に居てもすることなんてない。なら、探しに行くだけだ。特に書き置きもせずに出掛けるのなら、城下町か噴水広場周辺だろう。

クウヤと二人で買い物にでも出掛けたに違いない。

「2」

「うーん、今日は見てないねえ。ごめんよ」

「そっか……ありがとう。お仕事頑張つてね！」

何をやっても上手くいかない日というものがある。僕にとって、それは今日のことだったらしい。

今日はことごとく予想が外れる日だ。

城下町に行った。

噴水広場にも行った。

大通りも歩いてみた。

いつもの本屋さんも見してみたし、姉さん行きつけのレストランにも行った。

二人でよく行くパン屋さんも、クウヤに教えてもらった骨董店も、姉さんの知り合いがやってる古書店も、全部全部見て回った。

さつき、大通りの一番端にある花屋さんに聞いてみたけど、ここにも姉さんは来ていなかったみたいだ。

「どこ行っちゃったんだろ」

どこにも姉さんが居ない。クウヤさえも見付からない。

どうしようもなく焦っていた僕は、何度か石畳に躓いて転んでしまった。膝に擦り傷が出来たけど、そんな痛みよりも、姉さんがどこにも居ないことの方が恐ろしかった。

もしかしたら、家に帰っているかも知れない。

捜せる場所は全部探し尽くしてしまった僕は、膝から流れる血を



乱暴に擦り、いままで歩いてきた道を後戻りして家路につくことにした。

「3」

まるで都合の良い夢から覚めたみたいだ。

そう思った瞬間、ぞわりと背筋に何か走る。

夢だったんじゃないだろうか？ 僕に家族が出来るだなんて、そんな都合のいい話。

恐ろしい考えを頭から離すように首を振る。そんなことあるはずが無い。お店の人は姉さんのことを知っていたし、僕のことも知っていた。夢であるはずが無いのだ。

だけど、これは本当の話。

姉さんと僕は、「まったくの他人」だということ。

いつ捨てられても可笑しくないし、急に消えてしまっても文句なんて言えない。むしろ、いままで一緒に居てくれたのが不思議なくらい。

いつも考えないようにしていた。

僕と姉さんが、他人同士であるということ。その事実は、どうやっても消えはしないというのに。

そこまで考えて、足を止める。目の前には見慣れたドア。いつの間にか家に着いていたみたいだ。

ドアノブに手を伸ばしてみるけど、それ以上は一步も動けない。もし、姉さんが帰ってきていなかったら？ もう二度と、帰ってこないとしたら？

僕の中にあつた不安が洩れだして、背中に虫が這うような気持ち悪さを覚える。

「シオン！ どこに行つてたんだよ？」

だから貴女の声が聞こえたとき、泣いてしまったのは仕方がない。僕が開けずにいたドアを、内側から派手に開けて、今にも泣き出しそうな顔で僕を叱る貴女に向かって、嗚咽混じりの声で叫ぶ。

「それは、こっちの、セリフだ、よ！」  
仕方ないじゃないか。本当に恐かつたんだから。

「4」

「ごめん！ 本っ当にごめん！ クウヤ探すのに必死になつてて、書き置きすんの忘れてた！」

姉さんは必死に両手を合わせて僕に謝る。

その隣で、クウヤも苦笑いしながらくしゃくしゃになったメモを見る。

「僕の書き置き、カノンさんがそのまま持って来ちゃいましたもんねー。ごめんねシオン君、びっくりしたよね」

それはとても簡単な話。

朝早くから出掛けてしまったクウヤを心配して、姉さんが慌てて捜しにいったしまったというもの。

それに加えて、僕も二人を捜しに飛び出したはいいが、不運なことに僕がちょうど城下町でうろつくと捜索している頃に姉さん達は家に戻ってきていたらしい。

僕は城下町にいるのだから、家の中は当然空っぽ。

クウヤが言うには、本棚までひっくり返すほどの騒ぎになってしまったそうだ。

お互いに今まで自分がどこで何をしていたかの説明をし終わると、姉さんは真っ青になって僕の足を指差した。

「シオン、膝！ 怪我してるじゃんか！ ちょっと待ってる、すぐに手当してやつから」

そこでやっと怪我の痛みを覚える。そういえば、石畳で何回か躓いて転んでいたっけ。

今まで放ったらかしにしておいた分、随分と酷くなっているようにも見える。

クウヤに言われて、近くの椅子に座り、姉さんが持ってきた救急箱をじっと見つめる。

何種類かの薬を取り出して、どれが一番良いのかを真剣に悩んでいるその姿は、どこか懐かしい。

いまよりもずっと小さな頃に、母が同じ様なことをしていたような気がする。

「姉さん」

「ん？」

貴女と僕はまったくの他人なんだよ。

「……なんでもない」

「そうか？ よし、ちょっと染みるかもしれないけど、足出してな」  
「うん」

それは口に出してはいけない言葉のような気がしたので、僕は恐ろしいそれに触れないようにと、言葉の箱に鍵をかけた。

姉さんを捜している間に感じた不安が、また波のように押し寄せてくる。

優しいこの人は、僕が傷の痛みに耐えかねて泣いているのだと思っただろうか。

まるで壊れ物でも扱つかのように、僕の頬へそっと触れてくる。  
「やっぱり染みるか？」

「ううん」  
「傷が痛いのか？ どこが痛む？」

薬を塗る手を止め、泣き止まない僕を交互に見て、貴女は困った顔をする。

違うよ。そうじゃないんだ。困らせるつもりなんてなかったの。ごめんなさい。

僕は声も出さずにただ左右に首を振った。すると貴女は先程までの表情を少しだけ崩して、口許を綻ばしながら言う。

「我慢しないでいいんだぞ。お前はまだ子供なんだから」  
痛かったら言えよ、といつもよりも優しい声色で、貴女は救急箱

から大きめの絆創膏を取り出す。  
傷口をそっと包み隠すようにして貼られた膝を僕はぼんやりと見つめる。

「なんで手当てって言うか知ってるか？」

声を出そうとするけど、まだ喉の奥がとて熱くてまともな声が出ない。だから僕はふるふると首を左右に振る。

そんな僕を見て、貴女はふわりと微笑む。

「こつやって手をあてて、『早く治りますように』ってお願いしたからなんだってさ」

絆創膏を通じて、あたたかい温もりが伝わる。

「早く治るといいな」

自分の手よりも大きなてのひらを見て、僕は「うん」と小さく答えた。

涙が一粒、貴女の手に落ちた。

「5」

貴女の家族になりたいよ。  
本物に、なりたかったよ。



間奏曲 拾肆曲目「マイディア・ファミリア」(後書き)

これまでも、これからも。  
叶わないことを僕は知っている。

143・W N W A・i s t (前書き)

立派な生き方をせよ。それが最大の復讐だ。

【The Talmud】



時計はいつも三時で止まっていた。

寂しくはなかった。

部屋にはいつも一人きりだった。

寂しくはなかった。

名前を呼ぶ人が居ないことに気付いた。

寂しくはなかった。

\*

昔から、アゲハから見たレオラとセリは本当の親子のようだった。寂れたこの村で贅沢な暮らしは出来ないが、それでも小さな幸せを見付けながら、毎日を楽しく過ごす。二人きりだけど、満ち足りた生活。お互いがお互いを必要とし、助け合うこと。そしてそれを当たり前だと思うこと。

それなりに裕福な暮らしをしていたが、兄弟が多かったせいで両親を独り占めしたことの無かったアゲハにとって、そんな二人の姿は自分の持っていた理想の家族像そのままだったのである。

両親が嫌いだったわけではない。ただ、もう少し自分のことを見て欲しいという子供っぽい独占欲から生まれた理想だ。

だからこそ、アゲハは肩すかしを食らったような気分だった。絶対にセリはレオラのことを引き止めるんだろうなと思っていたのだ。レオラが一人暮らしをすると聞いたときのことである。

「いいのよ？ あいつ、本当に出ていくつもりだぜ？」  
「いいんだ」

間髪入れずに返された答えに戸惑いを隠せない。

物が少しだけ減って、その分少しだけ広くなった部屋。身の回りの物を詰めるだけ詰め込んだトランクが部屋の隅で偉そうに置かれている。

窓から差し込む夕陽を背に受けながら、セリはそのトランクを指でそつと撫でて返答を続ける。

「あの子が決めたことだ。私がとやかく言うことじゃない。もう子供じゃないんだから」

「不安じゃねーの？ レオラ一人で」  
「心配していないと言えば嘘になるが、お前がついているし、大丈夫だろう」

昼下がりの話である。何の前触れもなく、突然レオラがこの村を出ていくと言ったのだ。

セリにしては唐突な話だったかもしれないが、アゲハは内側から何度も彼が悩んでいるのを見ていたので、やっとこの日が来たか、とさえ思ったほどである。

それほど前から、レオラはいずれこの家を出ていくことを考えていた。それがセリに迷惑を掛けないで済む一番の方法だと勝手に思いこんでいたからだ。

何の前触れもなく、とは言ったが、それはセリから見たらという話であって、アゲハにしてみれば長い長い前置きがあつてようやく本編に入ったという感じだった。

しかしまあ、出ていくと宣言して次の日には出発だと言うのだから唐突と言えば唐突だった。まったく勝手な話だ。アゲハは自分で

自分の頬をつねってやりたい気分だった。気分なだけであって、本当にするわけでは無い。

「それよりも、お前こそどうなんだ。これで良かったのか？」

「ごく当たり前のように聞いてくるが、こうして別の人間として扱ってくれるセリがアゲハは嫌いではなかった。

「別にいいよ。俺にはしたいことも、行きたいところも無いから」  
嘘の欠片も無い、本音である。アゲハはセリには嘘を吐いたことが無い。

「そうか……」

「セリさん、あいつ結局どこに行くって？」

「そういえば、当事者でもあるというのに自分が明日から何処へ行くこうとしているのかを知らないことに気付いたアゲハは、全てを話された彼女に改めて聞いてみる。

「知らないのか？」

「聞かされていないからね」

「レオラは身体の主である自分に何の相談も無く決めてしまったのだから仕方がない。

「まずはメトロポリスで店を開くつもりらしい」

「へえ、中央にね。無難っちゃー無難かな」

「とりあえず、食べ物美味しいから困ることは無いだろう。生ハムにパエリヤ、それからチュロス。ワインも有名だな」

「セリさん、それたぶんスペインの名物だよ」

「む……地理は苦手なんだ」

「相変わらず滅茶苦茶な地理の知識をひけらかすセリに向かって、アゲハは苦笑いを隠しきれない。

「ま、あいつのことは任せてよ。一応俺の身体でもあるし、死なないように見張っておくからさ」

「頼りにしてるぞ」

「冗談めかしてそう言えば、彼女はふわりと柔らかい笑みを見せる。どこか懐かしいその表情を、アゲハは、かつて自分の傍に居ること

が当たり前だった人達と重ねる。

「……」

アゲハは息苦しくなる胸を押さえつけて、目の前の人間を見つめる。

「セリさん」

「どうした？」

勘違いしてはいけない。優しいその人にとって、自分はただの罪滅ぼしであることを。

だから、分かる。どちらか一つを選ばなくてはならなくなったとき、この人がどちらを選ぶかなど、聞かなくても分かる。

「……なんでもないよ」

「……」

\*\*\*\*\*

「おい！ 起きろ！」

耳元で騒ぐ声が耳障りで、アゲハは目も開けずに右側へ思いつきり腕を振り上げた。何かがしつかりと当たった。ごつりとした感触は骨に近い。

「……何すんだてめえ！」

静かにさせる為に殴ったというのに、さらに五月蠅くなってしまった。もう少しきつめにしておけば、気絶でもして静かになっただ

ろうか。次に殴ることがあったら気を付けようと反省して、アゲハは冷静に殴るまでに至った理由を話す。

「何って、五月蠅かったからに決まってるだろ」

「んにやるー……思いつき殴りやがって」

ソファーで眠っていた所為か、あちこちが痛い。思いつき伸びをしたあとに寝惚けた目を擦ってみれば、近くで顎を押さえながら涙目になっているレオラが居た。

いや、居るのは分かっていた。自分が向こうの世界以外で会えるのはレオラだけなのだ。レオラじゃなかったらある意味困る。

「また来たのかお前。ったく、何の用だ？ 俺は今寝起きなんだ。機嫌が悪いんだ。ぶっ飛ばすぞ」

「来たくて来てるわけじゃねーよ！ こっちだって機嫌悪いっつの、ぶっ飛ばさせるー！」

「やなこった」

ぎゃんぎゃん五月蠅いレオラにもう一発かましてやるうかと拳を握りしめるが、目の前で騒ぐ馬鹿の為に殴る労力を考えるとどうでもいいような気がした。とりあえず経緯を聞くのが先だ。今度はどんな失敗をやらかしたというのだろうか。

「またどつかで気絶でもしたのか？」

「お前オレのことなんだと思ってるの？ そんなにへまばかりしねーよ。今回は普通に寝てて、さて起きるかって思ったらこっちに来てたんだ」

不可抗力だ、とソファアの背もたれの向こうから不満げに睨んでくるレオラを見て、アゲハは「まずいな」と一人呟く。会話しようとしたわけでなく、考えてたことが思わず口に出してしまったのだ。

「何がまずいんだよ？」

「ちよつとは自分で考える馬鹿。お前は俺と違って本当に馬鹿だな」

「んだとてめえ、もう一度言ってみろ！」

「ちよつとは自分で考える馬鹿。お前は俺と違って本当に馬鹿だな。これでいいか？」

「……言うのか」

がっくりという言葉が似合うほど脱力したレオラに、理解出来ないという目でアゲハが見つめる。

もう一度言ってみると言ったのはどのどいつだとも言いたげだ。

「要するに、最近のお前はこっちに来すぎだって話だ」

「だから来たくて来てるわけじゃ、」

「あーもうお前ちょっと黙れ」

いちいち突つかかってくるレオラにうんざりしたアゲハがしっしつ、と犬でも追い払うかのように手を振る。それに煽られてさらに五月蠅くなるレオラの文句を受け流して、アゲハは周りへと視線をやる。いつもいるこの部屋に、どうも違和感を感じる。

ぼろぼろになった椅子や使い物にならない家具が散乱していて、床には少し水溜まりがある。ぬめりをもった汚い水だ。それらに変わりはない。けれど、何かが違う。思い過ぎだろうか。

そう思った瞬間、柱時計の音が部屋中に響いた。規則正しく鳴り響く、低い鐘の音。

「うおっ……なんだ、時計か。驚かせやがって」

後ろではレオラが勝手に驚いているが、そんなことよりも気になるのは時計だ。アゲハはソファから飛び降りて、柱時計に近寄った。

珍しく慌てた様子のアゲハを不審に思っ、レオラも一歩遅れてソファを飛び越え、時計へと近づく。

部屋の隅に置かれた埃まみれのそれは、規則正しく振り子を揺らしていた。

「この時計がどうかしたのか？」

「……これ、ずっと止まってたんだ」

「ずっと？」

しゃがみこめば、ガラス越しに揺れる振り子が視線と同じ高さに

なる。確かに動いている時計を見て、アゲハは首を傾げるしかない。セリがストレイン家へやってきたあの日。アゲハとレオラが入れ替わったあの日の午前三時から、この時計は動いたことは無かったのだ。

今更になつて何故動き出したのかは分からないが、自分が感じた違和感の正体はこれだったらしい。そうアゲハが結論づけていると、頭上から声が掛かった。

「この時計、なんか変だな」

「ああ。かなり古いからな。俺が小さい時から古かった」

「そうじゃなくて」

ガラスの上から文字盤を人差し指でくるりとなぞる。

きゅつと音がして、アゲハの頭に埃が少し落ちる。

「逆回りしてねーか？」

「逆回り？」

訝しげに立ち上がると、レオラの言うとおり時計の針は反対方向へと動いていた。

さつき鳴った鐘の音は三時を知らせるものだったはずなのに、目の前の文字盤は二時五十七分を示している。

「古いから壊れてんのかもな」

「そんなものか？ もっとよく考えるよ」

あまりにも簡単に答えを出すレオラに呆れて溜息を吐くが、いつものように言い返してくるはずの声が無い。代わりに、レオラはアゲハの顔を不思議そうに見ていた。

「なんだよ？ 言いたいことがあるならはっきり言え」

「……お前、なんかいつもと違う気がする」

「はあ？」

「いや、なんて言うか、うまく言えねーんだけど、違和感がさ」

レオラは首を傾げるが、いつもと違う『もう一つの違和感』に気付いたアゲハの目は見開いていた。驚きというよりも、絶望に似た目だった。

「……………レオラ、齒ア食いしばれ」

「へ？ がっ!？」

言うや否や、アゲハはすぐに渾身の力を込めてレオラの顎を殴った。さっきの反省を生かして、思い残すことなく振り上げた拳は、クリーンヒット。見事な当たりだった。

そして、そのまま逃げるように走って廊下へと出る。後ろからレオラが追いかけてこないのを見ると、どうやら気絶したらしい。上手くいけば、そのまま向こうの世界で目が覚めるだろう。

だが今はそんなことどうでもいい。アゲハには余裕が無かった。

息を切らしながら水溜まりとガラスの破片だらけの廊下を抜ければ、階段の手前に大きな姿見がある。その前へと立って自分の姿を映して、アゲハは力無く笑った。

「もう……………時間が無いな」

カチツと響いた音は、時計の針がまた逆回りした音だろうか。

目の前の自分がゆらゆらと歪む。それは眠りにつく前に訪れる漠然とした不安に似ていた。

\*\*\*\*\*

「あんにやるー、二回も殴りやがった！ 次会ったらぜってえ殴る  
！」

起きあがった瞬間そう叫べば、窓の外で囁っていたスズメが二羽



飛び立っていった。

一回ならまだしも、二回だ。許せるはずも無い。次に向こうへ行  
くことがあったら、有無を言わさず一番に殴ってやるうと心に決め  
て、レオラはベッドから這い出す。

今日はカノンにケーキを奢る約束をしているのだ。この前、クウ  
ヤの後始末を全て頼んでしまったので借りを返さなくてはいけない  
というか、返せと言われたのだ。

面倒だと思いつつ首を鳴らし、壁にかかった時計を見てレオラは  
悲鳴にも似た声を出す。

「ああああ遅刻してるし！ カノンに殺される！」

慌てて椅子に掛けてあったジャケットを羽織り、転げそうになり  
ながら玄関まで走る。残念ながら朝食を食べている暇は無さそうだ  
が、カノンに殺されるよりマシだろう。

「ん？」

ふと横にある靴箱の鏡を見て、気付く。何の変哲も無い鏡に映る  
自分。

そうだ、違和感の正体はこれだ。

自分達は鏡を見るみたいに同一だった。見た目だけなら、同じ人  
間そのものだった。

だけど、あの時のアゲハは違っていたのだ。

「……あいつ、オレより小さかったよな？」

いままで一度たりとも違わなかった。

これからも、そのはずだった。

143・W N W A・i s t (後書き)

ぼくらがあとすこしだけ器用に生きられたなら。

俺達は、一緒に夕陽を見たことが無い。

\*

「ケーキ一個七百ミリアはぼったくりだと思う」

「いや違うね。それだけの価値がこの一皿に収まっている！お前にはこの素晴らしさが分からないのか!？」

「あー……はいはい、取りあえず早くケーキ選べ」

シヨーケースを食い入るように見つめながら熱弁を振るうカノンを、レオラは呆れた目で見る。

彼女はいま、愛して止まないドルチェ・デ・ノエルのケーキを選ぶのに真剣なので、レオラの吐いた溜息など耳に入らない。

完全に自分だけの世界にはいつてしまったカノンから視線を外して、今度は隣でうんうん唸っている彼女の弟へと声を掛ける。

「シオンはどれ食いたい？」

「えっと……うーん……たくさんあって悩むなあ」

「アップルパイ好きか？この前食ったけどうまくいったぜ」

シヨーケースの二段目に飾ってあるそれを指差してみるが、シオンは苦笑いで首を振る。

さくさくのパイの中から覗く林檎は艶やかな黄金色をしていて、見ているだけでも美味しそうだ。当然、値段も相応のものとなっているわけで。それがシオンを悩ませる原因でもあった。

「このケーキって、どれも高いんだね。レオラ、大丈夫なの？」

「ばーか、お金の心配はすんなって。今日はオレの奢りって約束なんだから。どれでも好きなのを頼んでいいんだぞ」

まだ幼いのに気を遣ってくるシオンの頭をくしゃくしゃと撫でて、レオラはにかつと笑いかける。

同じようにシオンもはにかみながら小さな声で、「苺の乗ったケーキ」と答えた。

了解、とシヨーケースの向こうで立っている店員にコーヒーと苺シヨートを頼む。その横で、ぼそりとカノンが呟く。

「なあ……どれでも好きなのを頼んでいいんだよな？　じゃあもう一つ頼んでも、」

「お前は遠慮という言葉を今すぐに辞書で引け」

「ちえー。じゃあおれはベリートルトね」

頬を膨らませて、悩みに悩み抜いたケーキをシヨーケース越しに指差す。ラズベリーが零れそうなほど乗せられたタルトは、見るだけでも幸せな気分になれる。

ケースの向こう側から店員が渡してきた苺シヨートとベリートルトが乗ったトレイを受け取り、カノンはシオンが一足先に座って待っていた窓際の席へと移動する。

その後ろを追いながら、レオラが受け取った釣り銭を無造作にポケットへと突っ込む。右手で持ったコーヒーだけを自分の席へと置いてシオンの隣に座った。

「あれ？　レオラはケーキ食べないの？」

自分の分の苺シヨートをカノンから受け取って、シオンが問いかける。

「食欲なくなつてな。コーヒーで充分だよ」

「そっぴやお前、なんか元気無いよな。昨日仕事だったのか？」

向かいでは早速タルトを頬張るカノンが心配そうに覗きこんできた。

彼女がこんなに素直に心配してくれるのは珍しいことなので、もしかすると明日は雨かも知れない。

「昨日はとくに大変な仕事も無かったけど……そんなに元気無いか？」

「いつもよりは。風邪か？ 季節の変わり目は馬鹿も風邪をひくんだから気を付けろよ」

「お前は一言多いな！ 風邪と言うよりも……なんつーか起きてからずっと眠いんだよな」

「ほほう、遅刻した癖にか？」

「さては根に持ってたんなお前」

眠気を覚ます為に頼んだコーヒを一口飲んで、苦さに顔を顰める。こんなにも苦い物だっただろうか、と小さな小瓶に入ったミルクを足し、ついでに角砂糖を入れて再度口に含む。丁度好い加減に和らいだ苦みが舌をなぞった。

「そうだ。お前さ、オハナミが出来る場所とか知らね？」

「おはなみが出来る場所？」

レオラの唐突な問いかけに些か驚いたカノンが、タルト生地をフオークで崩しながら鸚鵡返しに訊く。

「クウヤがさ、みんなでおハナミっていうのをしたいから場所を調べといてくれて。つーか、おハナミって何だ？」

「あー……なんだっけ。東亜文化の本で読んだことあるぞ」

カノンの知識は大概本から得られているが、今回もどうやら本で見かけたらしい。

米神を叩いて頭の片隅から記憶を引きずり出そうとしているカノンの横で、最後まで残っていた苺を食べ終えたシオンが会話に入る。「その本、僕も読んだことあるよ。たしか、お花が咲いてる場所に行つてごはんを食べたり、みんなで騒いだりするんじゃないかっけ？」

「要するにピクニックか。そういうのに適した場所知ってるか？」  
「とりあえず花が咲いてればいいんだろ？ ならお前の街がうつつじゃねーか。残念ながらうちは古城が売りの城下町だ。そりゃ庭園には花がいっぱいだけど、大人数でピクニック出来るような場所じゃねーな」

かつてこの国が王国制だった頃に王族が住んでいた城は、いまや立派な観光名所となっており、中庭などは今でも綺麗に整備されているが、カノンの言うとおりわいわい騒げるような場所ではない。それならば、やはり花の街と呼ばれている自分の街が最も適しているだろう。だが、ピクニックなどあの街に引っ越してから一度もしたことがないので、一体どこでオハナミとやらをすればいいか見当が付かない。

レオラが考えあぐねていると、記憶を頼りにカノンが案を出してきた。

「ほら、お前の店の近くにでっかい広場あっただろ。あそこは春が一番綺麗だし、丁度いいんじゃないの？」

「ああ！ そういえばあそこがあったな！ コスモスとかゼラニウムとか、季節毎に色んな花が咲いてて綺麗なんだよなあ。特に春はツルバラとデイジーが綺麗で、」

咲いていた花の種類を挙げていると、カノンが怪訝な顔で見ている。

「どうした？ カノン」

「……あそこって、ほとんどサクラの樹しか無いだろ。お前、どこ話してんだ？」

「どこのって、オレの住んでる……」

そこまで言いかけて、思い出す。去年の春に見た景色。そこにあったのは数種類の花ではなく、何本も植えられた大きな樹。

去年見たのは、桃色の花だけだった。

「……違う。あの広場はサクラしか無かった。でも、たしかに色々な花の咲いた場所が……オレ、どこの話してるんだ？」

「おれに聞くなよ。レオラ、本当に大丈夫か？ やっぱり何か変だぞ」

確かに、今日の自分はどこかおかしい。いまだに眠気は覚めないし、身体が風邪をひいたようにだるい所為で、考えるのも億劫だった。

「やっぱオレ、風邪ひいたかもしんねーわ」

カップに半分ほどコーヒーが残っているが、気にせずに席を立つ。カノン達には申し訳ないが、今日は大人しく寝ていた方が良さそうだ。

「レオラ、帰っちゃおうの？」

「おう。悪いなシオン、また今度遊ぼうぜ」

寂しそうにする少年の頭をくしゃりと撫でれば、その手をぎゅっと握りしめるもう一人の手が。

「また今度、ここで会おう！」

「お前は何回奢らせる気だ!？」

カノンにはつつこみと共に頭へびしりと拳を下ろして、レオラは足早に去っていった。その後ろ姿は、やはりいつもと少し違うような気がした。

痛む頭を抑えながら、カノンが納得のいかない声でぼやく。

「レオラが風邪ねえ？」

「僕らも気を付けなきゃいけないね……って、姉さんそれレオラのコーヒーだよ！」

「いいじゃん、余ってるんだし。ちよつとくらい飲んでも……甘っ！ 何だこれゲロ甘い！」

うええ、と舌を出して甘さを訴える姉に対して「はしたないよ」とシオンが咎める。が、そんなことはどうでも良かったのか、カノンは何も言わずに水を一気に飲み干した。

「あー……甘かった」

「もー。クウヤにも言われたでしょ？ もっと女らしい振る舞いをーって」

クウヤだけならまだしも、弟にまで言われて耳が痛い。両手で耳を塞ぎ、聞こえないふりをしてその場をやり過ごせば、シオンもそれ以上何も言わなかった。人間、そう簡単に変われはしないのだ。シオンが呆れて黙ったのを見て、カノンはほっと一息吐く。そしてもう一度水を飲んで、さっきの甘すぎるコーヒーをちらりと見た。

「変なの」

「何が？」

「あいつ、コーヒーはブラック派だったのに」

カップの傍に置かれた小瓶には、ほとんどミルクが入っていなかった。

\*\*\*\*\*

「ただいまー……って、またかよ！」

ドアを開けて、そのまま自室のベッドへダイブして、今日はゆっくり身体を休めよう。

そんなつもりで開いたドアの向こうは、見慣れた玄関では無く、今朝も訪れた薄暗い廃墟のような場所だった。いつもと同じ薄汚い部屋、古びたソファに壊れた椅子、ぬめった水溜まりにガラスが割れた本棚。いつもと違うのは、カチコチと響く柱時計の音だけ。

アゲハにも忠告されたばかりだが、最近の自分はここへ来る機会が多い気がする。



「あーもー。なんで一日に二回も来るかな」

自分にうんざりしながら周りを見回してみるが、いつもならにやにやと人の悪い笑みで自分を迎えるはずのアゲ八が居なかった。

嫌味を言われなくて済むのは有り難いが、一人きりでこの部屋に居るのは有り難くない。ここは所謂アゲ八の領域なので、初めてここへ来てから何年か経った今でも自分はこの部屋にあまり詳しくないのだ。

今回も時間が経てばまた向こうへと戻れるのだろうか、それが一体何分後か何時間後かは分からない。

暇潰しになるようなものは無いかとその辺を物色していると、背後から肩を掴まれた。

「おい。勝手に触るな、殺すぞ」

「うわっ!？」

聞き慣れない声に驚いて、レオラは思わず大きな声を出す。振り返った先に見えたのは自分と同じ顔。赤い眼が呆れたようにこつちを見ていた。

「い、いるなら声くらい掛けるよな!　びっくりするだろ!」

「だからって驚きすぎだろうが」

「だって、お前の……!」

「俺のなんだよ?」

機嫌が悪そうに聞き返してくるアゲ八に、いつもの自分だったら勢いに任せて暴言を吐いていただろう。

「だけど、今のレオラには出来なかった。」

「お前の……声じゃないから」

目の前に居るのは、自分よりも幼いアゲ八だったからだ。

「どうなってるんだよ……アゲ八。なんで小さくなってるんだよ?」

聞き慣れない声は、いつもよりも少し高い声。

外見だけ見れば五、六年程前の自分と全く同じだった。身長は、今のレオラより頭二つ分程低い。そういえば、この頃から急に背が伸びだしたのだ。セリが嬉しそうに、だけど何処か寂しそうに微笑

んでいたのを思い出す。

「時計、逆回りしてただろ？」

アゲ八が人差し指をくるりと回してみせる。今朝から動き出した時計のことだと気付いたレオラは、自分の丁度後ろにあるそれへと視線をやった。

時刻は、二時三十分。あれから一時間以上経っているはずなのに数十分しか動いていないところを見ると、向こうの時間軸とは違う法則で動いているようだった。

「お前が居ない間に、声変わりする前の頃まで戻った。たぶん零時で終わりだな」

ガラスの破片でも踏んだのだろうか。アゲ八の声に混じって、何かが割れる音が耳に届いた。

「終わり……？」

「戻ってるんだ。あの日の自分に」

十年前、アゲ八はアゲ八で居ることを止め、代わりにレオラが生まれた。あの日から同じように歳を重ねてきた二人の時が、突然狂いだした。

姿を保つことすら出来ないアゲ八を目の前にして、もうこれ以上の説明はいらなかった。

「時間はちゃんと与えてやったぞ。どっちにするんだ？」

終わる方が、終わらない方。早くどちらかを選ばないと二人とも終わってしまうと、確かにアゲ八は警告していた。

「だけど、どちらもレオラには選べなかった。」

「なあ、どうしたらいい？ どうしたらオレ達は、今までみたいに生きていけるんだ？」

「無理だ。どうにも出来ない。俺の姿をしてみるよ？ これが精一杯だ」

縋るように問いかけるレオラをアゲ八は容赦なく切り捨てる。もう時間が無いことは、自分が一番分かっている。それでも、レオラはただ首を振るだけだった。

「何か、何か方法があんだろ？ もつと別の方法が……」

「てめー、仮にも『俺』なんだろうが。聞き分ける。お前が選べないって言うんなら、どっちかが消えるまでやりあえばいいだけのことだ」

そう言い切るアゲハの顔に、いつものような人の悪い笑みなど無い。

無表情で自分を見据えてくる彼に畏れを成したレオラは、思わず後ろへ飛び退いた。

「……つざけんな！」

「ふざけてんのはどっちだよ」

冷たい怒りが肌に刺さる。

逃げるよりも速く退路にナイフを投げつけられ、逃げ場を失ったレオラが見せたその一瞬の戸惑いを見逃さずにアゲハは腹部目掛けて蹴りを入れた。

重力に従って床に背中を打ち付けたレオラが次の行動を起こそうとした時にはもう、アゲハがガラスの破片を握りしめて馬乗りになっていた。

見下ろしてくるその眼は、背筋が氷るほど冷たい。

「や、めろ……！」

アゲハが腕を振り翳すとガラスが薄明かりに反射して恐怖を煽る。それが狙うのは、レオラの首だった。

逃げようと藻掻いても、両腕はアゲハの足が封じて逃げ出せない。身動き一つ出来ないことを悟って、全身が栗立った。

あの凶器が首を掻けば、自分は消える。消えて無くなる。二人が一人になる。元に戻る。

ああ、そうだ、死ぬのだ。

頭の中が死という恐怖に占領された瞬間、レオラは訳も分からず大声で喚いていた。

「離せっ！ 友達と約束したんだ！ また遊ぼうって、約束したんだよっ……っ！」

何か考えて言った訳ではなく、まるで条件反射のように叫ぶ。思わず閉じた瞼の裏に浮かんだのは、さっきまで一緒に居たカノンとシオンのことだった。

約束と呼ぶにはあまりにも些細なことだったかもしれない。けれど「また今度会おう」と言う言葉はレオラにとって確かに約束だったのだ。

一つになるのは嫌だ。どちらかを選ぶことも出来ない。何より、死にたくなかった。

耳元で、ガラスの割れる音がする。

「アゲハ……？」

いつまで経っても訪れない衝撃に恐る恐る目を開けてみれば、さっきまでの勢いを失い、凶器を手放して頂垂れるアゲハが居た。

「ずるい」

「え……」

その表情は、笑顔と呼ぶにはあまりに哀しすぎる。

今にも崩れてしまいそうな笑みを必死に保って、アゲハは震える声でもう一度呟く。

「お前はずるいよ……俺にはもう何にも無い。ぜんぶ、なくなつた」

レオラの頬に、雨が降る。冷たい雫を三つ落として、レオラに涙の筋を作る。

まるで自分が泣いているような錯覚に陥って、レオラは自由になった両腕で濡れた頬を乱暴に拭う。

「何が、ずるいんだよ」

さっきまでの恐れが、静かな怒りに変わる。

「どこがずるいんだよ」

「レオラ……」

「オレには、最初から何も無かつたのに！」

上半身を起こすと同時に自分よりも細いその首に手を掛けて、空気の通り道をなくす。そのまま後ろへと力任せに押し倒すと立場が

逆転する。苦しそうに呻く声は、都合の良い耳が聞き流した。

赤い眼がどんどんと光を失っていく。こんな光景を、以前何処かで見なかっただろうか。

たくさんの壊れた人形がいる部屋で、見なかっただろうか。

「レオ、ラ……」

名前を呼ばれて、我に返る。

酸素を得ようと必死になってレオラの手を剥がそうとする、アゲハの小さい手の感触がダイレクトに伝わってくる。冷たい皮膚の感触が急に恐ろしくなって、レオラは両手を離して飛び退いた。

咳き込むアゲハの姿を見て、自分がいま何をしようとしていたのかを理解した。

「……っは、げほっ」

「ご、ごめん！ オレ、こんなことするつもりじゃ……」

必死になって弁解するレオラに対して、アゲハは反撃も反論もしない。

それどころか自分の首を絞めてきたことを責めようとせせず乱れた呼吸を整えて、静かに微笑む。

いつものように人を食ったような笑みではなく、どこか悲しそう  
な笑みだった。

「べつに、いいのに」

どこか悲しそうに微笑んで投げかけられたその言葉には、皮肉も諦めも、憐れみも何も無い。

ただの、剥き出しの本心だった。

床に押し倒されていた身体をゆるゆると起こして、すっかり混乱してしまつたレオラの方へと近付く。

「ち、違っ……違うんだ！ オレは……オレは！」

こんな言葉を投げかけられるくらいなら、責められた方がましだったかもしれない。酷い言葉で罵ってくれた方が気が楽だったかもしれない。

こんな風に赦されるくらいなら、いつそ。

ゆっくり自分へと歩み寄ってくる目の前の子どもが急に恐ろしくなつて、レオラは思わず部屋から逃げ出した。

訳も分からず夢中になつて走る。仄暗い廊下は、一体何処に続いているのだろうか。

そう言えば、廊下に出たのは初めてかも知れない。あの部屋だけしか見たこと無かつた。

レオラは後ろを振り返ることもせず、必死になつて走り続ける。

誰かに縋りたくて名前を呼ぼうとしたが、声が出なかつた。自分でも知らない内に、涙が流れていた。

かちり、と針の動く音が聞こえたような気がした。

144・WNWA・2nd(後書き)

たくさんあったのに、いまはもう何も無い。  
何もなかったけど、いまはたくさんある。

どっちが良かったか、なんて。

BGM：なくなった小さな森ノより子。

嘆くほどでもない明日のことを、もしもの言葉が蝕んだ。

\*

部屋から逃げ出したレオラを追いかけてようとして腕を伸ばす。

「駄目だレオラ！ そっちには行くな！」

だが、いままでよりも短くなったその腕では何も掴むことは出来なかった。

掴み損なつて空を切る掌の先に見えたのは、あの部屋では見たことのない真っ白な天井。

突然変わった世界と、ずきりと何本もの針が刺さるような頭痛にアゲハは思わず額を抑えた。

「……………どこだここ？」

明らかにいままで自分がいた世界とは違うことに気付いて、咄嗟に身を起こす。

自分以外の誰も居ないその部屋は、白と静寂に包まれている。レオラの家でも無ければ、店でも無い。部屋そのものを消毒されたような匂いが鼻に付く。知らない間に病院で眠っていたらしい。

「ちっ……………めんどくせえ」

いつの間にか腕に刺さっていた点滴を乱暴に抜いて、アゲハはべ



ツドから降りる。少しふらついたが、歩けないほど酷いわけでも無い。

さっきまでの小さな身体とは勝手が違う所為で、バランスを取るのが難しいだけだ。そう自分に言い聞かせて病室から抜け出そうとドアへ足を運ぶ。

こんなところで寝ている場合ではない。

レオラがあ部屋から出たのは、さっきが初めてだ。アゲ八に怯えて逃げ出した彼が、あのまま元の部屋に帰ってくるとは思えないかといって残された時間が少ない今、彼を放っておく訳にもいかない。

あの空間は、アゲ八の思い出で構成されている。それを勝手に覗かれるのも、知られてしまうのも避けたかった。

ならば自分が探しにいかねければならない。元居た場所に戻らなければならぬ。この身体の持ち主は、もうアゲ八ではないのだ。

けれど、その前にしておきたいことがあった。

「まだ、間に合うよな」

覚束ない手つきでひやりと冷たいドアノブを握る。それを回そうと力を込めると、まるでアゲ八がそうするのを待っていたかのように、向こう側から勝手に開いた。

乱暴に開け放たれると同時に響くのは自信満々の声。

「ちーっす！ カノン様が見舞いに出向いてやったぜ！ 喜びに咽び泣くがいいわ！」

「……………」

「っていうかお前、寝てなくて大丈夫なのかよ？」

「…………… あ、ああ。大丈夫だ、問題無い」

思いがけない来訪者に思考と行動が止まってしまったが、なんとか怪しまれない程度には誤魔化せたはずだ。

少なくとも、自分が開けようとしたドアの向こうにまさか人が立っているなんて思いもしなかった！と驚きの余り声が出なかったように見えただろう。

突然現れた少女は、先程の言葉からして、どうやらカノンと言っ名前らしい。そういえばレオラを通して何度か見たことのあるこの顔は、たしか親友とやりに分類されていたはずだ。

「……まずい」

「そんなに不味かった？ ここの飯」

病院食ではなく、状況がまずい。丁寧に訂正しそうになったが、アゲハはなんとか黙った。

親友ということは、レオラとはかなり親しい間柄にあるという訳だ。

それならば尚更この部屋に居る訳にはいかなくなった。同じ人間なのだから分かるはずは無いが、何か突っ込んだ話をされたらちゃんとレオラのふりをして答えられる自信がなかった。

さっさと病室から出ていきたいのはやまやまなのだが、ドアの前に紙袋を抱えて仁王立ちしたカノンが邪魔をしてどう足掻いても抜け出せそうにない。

「俺、ちよつと電話を……」

「お前な、調子乗ってたらまたぶっ倒れるぞ？」

「いや本当に大丈夫だ。だからセリさんに電話をしなくてだな」

「……………そうか」

どうすることも出来ずにじっと立っていると、カノンは一瞬訝しげな顔をしたあと、すぐにアゲハの身体を反転させて無理矢理ベッドへと押し込んだ。

「それなら電話は必要ねーよ。もうすぐお前の師範代が来るから、それまでは大人しくしとけ！」

有無を言わせない態度と行動に、アゲハは再びベッドへと沈むことになってしまった。

セリから訪ねてきてくれるのなら、わざわざこちらから連絡する必要も無い。とりあえずカノンに怪しまれないように大人しく従うことにした。

「それにしても、相当調子悪かったんだな」

「そうらしいな。俺は一体どうなつてたんだ？」

「玄関前でぶつ倒れてたらしい。ちょうど家賃の催促に来た大家さんがお前を病院に運んでくれたみたいだ。その時、ついでにセリさんへ連絡してくれたって」

アゲ八がベッドで大人しくしているのを確認して、先程からずっと持っていた紙袋をサイドテーブルに置き、来客用の椅子に腰掛ける。

「で、セレナーデからこっちに来るのに時間が掛かるから、代わりに様子を見てきてくれてセリさん直々に頼まれたわけだ。つつーか家賃滞納するなよ」

「本当にな」

滞納していたのはレオラであつてアゲ八は全く悪くないのだが、自分よりも年下の少女に注意されて居たたまれない気持ちになつてくる。

いや、原因はそれだけではない。

いまだにアゲ八が病室から出ようとしていると思つているのか、じつとこちらを見つめてくるカノンの視線が痛かった。

「えーと、カノン？」

「ん。なんだよ」

「あー……いや、なんでもない」

「そっか」

場を持たそうと話しかけてみるが、レオラのふりをしながら会話をしようと思うと、なかなか言葉が続かない。

そもそも、レオラやセリ以外の人間と喋ること自体久しぶりだったアゲ八には、普通に会話する事からして困難だ。

結局、会話を始めることすら出来なかった。

そんな居心地が悪くなつてしまった空気を察したのか、ただ単にそれを渡そうとしただけなのか、カノンがごそごと紙袋へ腕を突っ込んで真つ赤な林檎を取り出した。

「レオラ、林檎食う？」

見舞いの品だろうか。第一印象からして大雑把な少女だと思っていたが、存外気が利くらしかった。

「ああ、悪いな」

「一応病人だからな。剥いてやるよ。ウサギさんか兎さんかうさぎさん、どれが良い？」

「……えーと、まかせる」

「どれも兎じゃねえか！」

「は？」

「って、つつこまねーの？」

「ああ……いや、うん」

「つまんね」

つつこんでもいいが、そうしたところでアゲ八には兎以外の選択の余地は無かったように思える。

一体この少女は何がしたかったんだと疑問に思いつつも、わざわざ剥いてくれるという好意を無下にすることは出来ないのだから口には出さない。

もしかすると、こういう意味の無いやりとりは彼女とレオラのコミュニケーションの一環だったのかもしれない。ならば、自分も真似をしなくてはならない。

そんなことを考えているうちに、ただの林檎だったはずのそれが小皿の上で六羽の可愛らしい兎になって乗っていた。

「出来たぞ」

そういつて差し出された林檎の兎を一つ受け取って、アゲ八は一口食べる。

優しい甘さが口の中に広がった。

「美味しい？」

「ん。うまい」

素直な感想を述べてしゃりしゃりと林檎を食べて進める。

そういえば、こうやって誰かに剥いてもらった林檎を食べるのは久しぶりだった。昔、母が剥いてくれた林檎も、たしか兎の形をし

ていた気がする。

古い記憶に浸りながら林檎を食べていると、カノンが急に真剣な声で尋ねてきた。

「なあ、変なこと聞くけどさ」

「ん？」

果物ナイフをポシエットにしまい終えた彼女が、不安そうに、だがつっかりとアゲハを見据えて問う。

「おまえ、レオラだよな？」

「……………」

順調に食べ進めていた林檎の残りを一口で飲み込んで、アゲハはまた一つ林檎を掴むと、それをそのまま何も言わずにカノンの口元へと押し込む。

いきなり食べさせられたせいで文句を言うことも出来ず、仕方なく放り込まれた部分を無理矢理咀嚼して、カノンは苦しそうに飲み込む。

それを見て、アゲハは思わず吹き出した。

「レオラに決まってんだろ。何言ってるんだよ、カノン」

自然と零れた笑みは、同時にカノンも笑顔にさせる。

「だよな！　なんか、いつものレオラじゃない気がするさ」

「なんだそれ。変な奴だな」

変な奴。それはアゲハの正直な感想だった。

自分がレオラではないと気付かれるような決定的なミスをした覚えは無い。会話がぎこちなかったかもしれないが、たったそれだけで目の前の人間が自分の知らない人間かも知れないだなんて誰が思うだろうか。

変な奴だからレオラの親友なのか、レオラの親友だから変な奴なのかは分からないが、こんなことを言われたのは初めてだった。

だからこそ、聞いてみたくなった。

「俺も、変なこと聞いていいか？」

「ばっちこい」

「俺がいなくなったら、困るか？」

先程残った林檎を一口ずつ片付けながら、カノンは困ったように声を出す。

「困るっつーか……寂しいだろな。なんだよ急に、死ぬ前の台詞みたいじゃん」

「大したことじゃない」

「風邪引くと弱気になるよな」。お花見までに元気になれよ」

何の疑いも無く向けられる純粹な笑顔。

こんな表情を見るのは、レオラを通してだけだと思っていた。

実際、彼女が笑いかけているのはレオラであってアゲハではない。その事実を頭が理解したとき、すとん、と何かが落ちる音がした。確かに胸の中に落ちたそれは、俗に言う実感というものだったのかもしれない。

「カノン。俺なら大丈夫だから、もう帰ってもいいぞ。セリさんもそろそろ着く頃だろうし」

「でも……」

「本当に大丈夫だって、ほら」

納得のいかない表情をしている彼女を無理矢理立たせて背中を押し、ドアへと向かわせる。

渋々歩くカノンは明らかに不満があるようだったが、本人が大丈夫だと言っているので逆らう理由も無い。

「お前、ぜーったいに無茶すんなよ？ 大人しく寝とけよ？」

「分かったって。じゃあ、またな」

何度もドアの隙間から確認をしてくる彼女に手を振り、外へと追いやってからアゲハは息を吐いた。カチャリとドアが完全に閉まったのを見て、ベッドから抜け出し早速言いつけを破る。

ただし、今度は窓の方。

からからと音を立てて開け放ち、顔だけ出して見ればそこに居たのは少し驚いた顔をしたセリだった。

「いつからそこに居たわけ？」

「……兎の選択を迫られたあたりから」

「ほとんど全部だなそれ。というかセリさん、そこ窓。窓だから」

「正面に軍人が居た。誰かの見舞いに来ただけだろうが、色々と面倒だからここから入る」

「もしもこの病室が一階で無ければどうやって来るつもりだったのだろうか。」

「例え何階でも窓から入ってくる彼女が容易に想像出来て、アゲハは溜息を吐いた。」

「とりあえず、元気そう良かった」

「セリさんもね」

「なんなく窓から侵入を果たしたセリは、先程までカノンが座っていた椅子に腰掛け、アゲハにはベッドへ戻るよう促した。」

「倒れたと聞いてびっくりした」

「俺も、いきなりあんな奴がやってきてびっくりした」

「レオラの方が倒れたんだと思ってな、すまなかった。そういえば、何故本当のことを言わなかったんだ？ レオラと間違われるのは嫌なんじゃなかったのか」

「説明するのが面倒だし、もう必要ないからさ。たまにはアイツのふりしてやるのも悪くはないかなって」

「そこまで話して、アゲハは黙った。」

「いざ顔を合わせるとなると、言いたいことがなかなか言えない。」

「本当は電話で話すつもりだったのだから尚更。」

「けれど、いつまでも黙ったままではいられるほど時間は残っていませんでした。」

「ふいに訪れた眠気に、アゲハは拳を強く握って耐えた。」

「セリさん。ずっと聞きたかったことがあるんだ」

「なんだ。くだらん質問には答えんぞ」

「俺とレオラ、どっちに生きていて欲しい？」

「言っただけだ。くだらんに質問には……」

「くだらなくなんか無い。もう、時間が無いんだ」

びくりと、セリの肩が動いてそれきり何も反応が無くなった。よく見ると、右手の甲に左指の爪が食い込んで白くなっていた。痛そうだな、とどこか他人事のように思いながら、アゲハは次に発せられる言葉を待った。

眠気は相変わらず襲ってくる。本当に時間が無いらしい。

ふとセリから視線を外すと、茶色く変色した兎の林檎がこちらを見ている。食べないのか、と責められているようだった。

「お前は言ったじゃないか」

ぼつりと零すように紡がれた言葉は、セリの声とは思えないほど弱々しい。

「お前達が家を出ていく日に、私に言ったじゃないか。レオラー人じゃ不安だから、お前が私の代わりにレオラを見ていてやると」

そういえば、そんなことを言った記憶がある。

懐かしさに目を細めて、アゲハは自分の手をセリのそれへと重ねた。

「セリさん。俺、ずっと、分からなかったんだ」

手から伝わる温度が、自分の存在を証明しているようで安心する。誰かに触れるというありきたりなことがこんなにも尊いだなんて、誰が知っているだろう。

「あんたは俺から家族を奪った。それはどうしても消えない事実だ」  
「ああ。許されるようなことじゃない」

「だけどあんたは、俺に家族の温もりを与えた。……失ったものは二度と戻ってこない。かといって穴が空いたままでもなかったんだ。あんたにとっては、俺を育ててくれたのは罪滅ぼしの為だったんだろうけど、オレはそれ以上のものをもらった」

聞きたいことはたくさんあった。

伝えたいこともたくさんあった。

だけど時間が無かった。自分が一番言いたいことを、まだ言っていない。



アゲハは両手でしつかりとセリの手を握りしめた。これが最後なら、この温もりを連れて行く。

本当に恐ろしかったのは、消えることではなく、拒絶されることだったのかもしれない。

「セリさん、俺はあんたを許すことは無い。だけど、憎むことも無い」

頼りなさげに見つめてくるセリに、出来る限りの笑みを浮かべて言う。

「だから、もうオレに縛られんな」

ちゃんと笑えたかどうかは、自信が無かった。

瞼が重くなってくる。ぼんやりとしてくる意識のなか、腕を引っ張られて前へと倒れ込む。

抱きしめられたのだと理解するのに少し時間がかかった。

アゲハが何かを言う前に、セリの掠れた声が聞こえた。

「私は、お前達二人に、幸せになって欲しかったんだ」

「うん」

「幸せがどんなものか、教えてあげたかった」

「うん」

「二人に、同じだけのものを、与え続けていたかった」

「うん」

「片方が特別なわけじゃない。だから、どちらかを選ぶことなんて出来ない」

この人がこんなにも優しくなければ、自分は恨むことが出来たのだろうか。

いっそ、はつきりとレオラを選んでくれれば、なんの未練も無く眠れたのかもしれない。

「私にとって、二人が特別だったんだ」

この涙は、誰の為のものだろう。

聞いたところで、答えは出ないのだろう。

「……ごめん」

誰かを救える言葉を持たない自分には、それしか言えなかった。  
ただ、最後に名前を呼んでくれる人がこの人で良かったと、まどろむ意識の中、それだけははっきりと思った。

145・W N W A・3rd(後書き)

もしも、誰かを救える言葉を知っていたなら。

ライオン／天野月子

記憶はいつも途中から始まった。

寂しかった。

オレの影にはいつもあいつがいた。

寂しかった。

誰かが違う名前で呼んだ。

寂しかった。

\*\*\*\*\*

あの部屋から飛び出してどれくらい経っただろうか。レオラは未だに仄暗い廊下に居た。

見慣れない場所を何の知識も無しに歩くのは少なからずとも戸惑いが生まれるものだが、それ以上にアゲハのいる部屋に戻るの方が今のレオラには考えられなかったのだ。

それは死という危険信号というよりは、どちらかを選らばなくてはならないという重荷から逃れようとする本能だったのかもしれない。

思えば、お互いに本音を話したのはあれが初めてだった。他人の誰よりも近くに存在しながら、こんな風になるまで相手の本当の思

いを知らなかったなんて、呆れを通り越してただ笑うしかない。

いまのレオラに分かるのは、もう何もかもが遅すぎるという事実だけだった。

「くそっ……ここ、どこだ？」

壁に八つ当たりして、レオラは自分の歩いてきた道と、これから歩くであろう道を見比べる。

そのどちらにも光は無く、ただ吸い込まれそうな常闇が存在するだけだった。

廊下にしては長すぎる。そもそも、ここはどういった場所なのだろう。あの部屋から随分遠くまで来たように感じるが、未だに耳の奥で時計の針の音がするのは何故なのだろうか。

「うつるせー……」

耳鳴りにも近いその音に耐えられなくなって、レオラは廊下の真ん中にしゃがみ込んだ。

それと同時に、まるで近くにあるかのように柱時計の音が聞こえた。規則正しく鳴り響く、低い鐘の音。その絶望の音を聞いて、二人の残り時間がまた少し減ったことを知る。

「オレに……どうしろってんだよ……」

「きみ、迷子？」

レオラの弱音に、知らない声が混じった。

頭上から響いた高く澄んだその声は、今までに聞いたことの無い声だった。

「……誰だ、あんた」

顔だけあげて見てみれば、薄暗い中でもはっきりと見える金色の長い髪を持った女が立っていた。

「こんな奥まで来るなんて、アゲ八くらいかと思ってたわ。よく来られたわね」

レオラの目線に合わせる為に、女もしゃがみ込む。

少し伸びすぎた前髪の所為で表情はよく分からないが、敵意が無いことは分かった。

「アゲ八のこと、知ってるのか？」

「知ってるわ。もちろん、きみのことも」

「オレはあんたのこと知らない」

「そうでしょうね。きみは知らないことが多すぎるもの」

くすりと笑って、女はレオラがこれから進んで行こうとしていた道の先を指で示す。

「この奥、行ったことないでしょう？」

問いかけではなく、事実を確認するかのような質問だった。

レオラは頷いて、女の指し示した奥に何があるのかを確認しようと目を細めたが、やはり光の無いそこには何があるのかさっぱり分からなかった。

「アゲ八は行ったことがあるのか？」

「あるわ。ただし、扉の前までだけ」

「扉？ 奥には何があるんだ？」

「部屋よ」

「オレとアゲ八が居た、あの？」

「いいえ。あの部屋とはまた別の部屋よ」

そこまで言うとな女は立ち上がり、右手をレオラへと差し出した。

「教えてあげるわ。扉のこと、部屋のこと……それから、アゲ八のこと」

差し出された手を、じつと見つめる。

本当は逃げたいはけなかった。話し合わなければならなかった。

だけどあの部屋から飛び出してしまったのは、アゲ八の本音をあれ以上知るのが怖かったから。

これ以上逃げる場所なんて無い。

「教えてくれ。オレの知らないこと」

レオラは女の手を取って立ち上がった。

答えを聞いて彼女は満足したのか、口元が微笑んでいた。

「いつだったか、イギリスにお墓参りに行ったことがあったでしょ

う

ゆつくりと前を歩く彼女の背中を見つめながら、レオラの足は奥へと進む。

金色の長い髪がさらさらと動いて、薄暗いはずの廊下が明るく感じてしまう。

「あの時、きみの前には先客が居たの」

「先客？」

「始末屋にストレイン家殺害を依頼した町長が、お墓の前で祈っていたの。そして何度も謝っていたわ」

アゲハの足はあの門の前で止まっていた。

その光景を目の当たりにして、アゲハは一体何を思ったのだろう。レオラが交代して墓参りに行ったことを思い出して、あの日流した彼の涙の意味を考えた。

「その時から、アゲハは不安定になっていった。きっと、誰に向ければ良いのかわからなくなってしまったんでしょうね」

怒りも、悲しみも。そう言いながら振り返った女の前髪の奥から覗く瞳は、自分と同じ赤色をしていた。

双眸を細めて薄く笑うと、女はすぐに前を向いて何事も無かったかのように前へと進み出した。

「……あなたの名前は？」

「コノハ・ストレインよ」

「なんであなたが、オレ達の中に居るんだ」

「分からない。不安定になった頃から、こんな風に歩き回れるようになったから。もしかすると、私はあの子の記憶にあるコノハの断片なのかもしれない」

「記憶の断片……」

「ねえ。この空間、よく出来てるでしょう？」

「え？」

そう言って、コノハは突然歩みを止めた。

それに合わせてレオラも立ち止まると、彼女はくるりと方向転換

してレオラへと向き直った。

「きみはあの部屋から出るのは初めてだっけ。この景色、どこか見覚えはないかしら？」

とんとんとノックするように叩かれたのは、一枚の硝子。いままでずっと廊下を歩いてきて、一つも見かけなかった窓がそこにはあった。

言われたとおりそこから外を覗いてみるが、薄暗い場所ばかりに居たせいでその明るさに目が慣れるのに時間が掛かる。

ようやく見えたのは、綺麗に花が咲く庭。手前にはゼラニウム。奥にはツルバラとデイジーが咲いている。

「もつとも、きみが見たことあるのは、花の咲いていない景色かもしれないけれど」

そう言われて、はっきりと思い出す。いまの景色から花を取り除いて、雑草の生えた庭を。そこに八つの墓石を並べれば、あの日見た光景と確かに同じだった。

「……ストレイン家の、庭……」

「そう。そしてここがもうひとつの部屋よ」

いつの間にか、廊下の突き当たりまで歩いてきたようだ。二人の目的地であったそこは、重厚な扉によって閉ざされていた。

アゲハは、この扉の前まで来て何をしていたのだろうか。

装飾の施されたそれに手を当てると、レオラの中に懐かしい記憶が甦った。最近の話ではない。いまよりもずっと昔、セリと初めて出会った日の記憶。

「オレ……ここを知ってる」

「この部屋で、私は死んだ。父も母も、みんな死んだ。そして、きみが生まれた」

赤い瞳がレオラを射抜く。

忘れていたはずの記憶がどんと甦る。首の無くなった人形、腕の無くなった人形。そして、バラバラになった、何か。

自分を見つめるその顔に、見覚えが無くて当然だ。



「アゲハはこの部屋に入ろうとした。何度も入ろうとしたのだけど、結局は最後の一步が踏み出せなくて諦めていた」

レオラの隣に立って、つう、と扉を撫でる。

白く細いその指がゆっくりと降りていくのを、レオラはじっと見ていた。

「次にあの子がここへ来たら、きっと扉を開けてしまつわ。だから、私は鍵を閉めたの」

「開けたら、どうなるんだ」

「たぶん、消えるんでしょうね。ここは、はじまりとおわりの部屋だから」

淡々と告げられた言葉は、レオラには重すぎた。

何か話さなければ自分が潰れてしまいそうなのに、言葉が見付からない。

止まりかけた思考でやつと見付けたのは、疑問の言葉だった。

「なんで、オレに話そうと思ったんだ」

「アゲハは知っているのに、きみが何も知らないのはフェアじゃないでしょう？　すべてをちゃんと知ったうえで、決めて欲しかったの。どちらが扉を開けるのかを」

チャリ、と音がしてレオラの目の前に古びた鍵が差し出される。

コノハの手から渡されたそれは、酷く冷たかった。

それを自分の体温で誤魔化そうと、両手でぎゅっと握りしめる。

「きみはどうする？」

投げかけられたのは、決断を迫る声。

思い出したのは、アゲハの言葉。

「……ひとつ、聞いてもいいか」

「ええ」

「あんたは、オレとアゲハ、どっちに生きていて欲しい？」

真っ直ぐ見つめれば、その赤い眼に自分が映り込む。

その瞳に、もう一人の自分の姿を見た気がした。

「悪いけれど、私はあの女みたいに心は広くないし、優しくもないし、

平等じゃないわ」

「あんたの答えが聞きたい」

レオラの言葉に、コノハは困ったように微笑む。

それでもしつかりと、彼女は答えた。

「私は、アゲハに生きていて欲しい」

\*\*\*\*\*

コノハと別れてから、どれくらい時間が経ったのだろうか。

自分がまだ存在しているという事が、僅かだがまだ時間は残っているのだという答えになっていた。

こつこつと近付いてくる足音に耳を澄ませ、この廊下にある唯一の窓から外を眺めていると、足音の持ち主が声を掛けてきた。

「その庭、綺麗だろ？」

「……アゲハ」

少年の姿をしたアゲハは、レオラの後ろを通り過ぎて、扉を背に足を止める。

「毎年春になるとたくさんの花でいっぱいだった。一番上の兄さんが、そういうの好きでさ。まめに世話をしていたんだ」

遠くで、時計の音が響いている。二人に残された時間は、もう少ない。

「アゲハ。お前はその扉を開けて、消えるつもりだったのか？」

レオラの問いかけに、アゲハは驚いた表情を見せる。だがそれもすぐに消えて、穏やかな笑顔を浮かべた。

こんな笑い方もするのかと、レオラはまるで遠い出来事かのように思った。

「人は誰かに願われて生まれてくるんだって、昔に一番上の姉さんが言っていた。それじゃあ、その『誰か』がいない人はどうすればいい？ お前が消えてまで、俺が生きることが願ってくれる人なんて、本当にいるのか？」

まるで幼子を諭すかのように、アゲハは静かに喋る。

それは問いかけのようでいて、彼の中ではもう答えが出ているのだと、その表情を見ればレオラにも分かった。

「この部屋のこと、よく分かったな」

「……教えてもらったんだ」

「誰に？」

「あいつは、自分のことをコノハだと名乗った。お前の中にある記憶の断片だとも言っていた」

「……姉さんが？」

窓から離れて、一歩ずつアゲハへと近付く。

レオラの口からその名前が出てくるとは思っていなかったのか、アゲハは少し見開いた眼で歩み寄ってくる彼を見つめていた。

「オレは聞いたんだ。俺とお前、どっちに生きていて欲しいんだって」

アゲハの隣に立って、レオラは目の前の扉を見据える。さっきまでコノハと一緒に居たことが、もう随分と前のことのように思える。顔は、自然と笑っていた。

自分達がこうして笑いあえる日が来るなんて、想像もしていなかった。

どうして、もっと早くに出来なかったのだろう。

「お前が生きることが願ってる人、ちゃんと居たよ」

「レオラ？ お前、何して……」

自分よりもさらに扉へと近付いたレオラに、異変を感じたアゲ八が問いかける。

その声を無視して、レオラは手を伸ばす。

「……だから、この扉は」

彼が手に掛けたドアノブが、カチャリと音を立てる。

「な……何してるんだ！ やめろ！ レオラッ！」

どうして自分の腕は、いつも何かを掴めないのだろう。

アゲ八には、それが絶望の音に聞こえた。

\*\*\*\*\*

ずっと握っていた手がぴくりと動いて、セリは慌てて顔を覗きこむ。

いままで少しも開くことの無かった瞼がつつすらと開かれ、綺麗な赤い瞳が見えた。

「レオラ、か？」

何も言わない彼に不安げに声をかけると、焦点の定まっていなかった眼がセリを捕らえる。

ほっと安堵の息を漏らすと、彼は突然笑い出した。

「……ははっ、馬鹿だろ。アイツ……」

確かに笑っているはずなのに、声は何処か震えている。何より、

彼の目から流れていく透明なそれは、笑っている人間には相応しくないものだった。

「なんで、こんな……ばっかじゃねえの？」

自分でも泣いていることに気付いたのか、握られていない方の腕で乱暴にそれを拭う。

それでもまだ溢れてくるのか、目を隠したまま、彼はもう一方でセリの手をぎゅっと握り返した。

「セリさん、ごめん。本当は帰ってくるつもりじゃ無かったんだけど」

自分をこんな風と呼ぶのは、アゲハしか居ない。

セリはほっと安堵の息を漏らす。死んだように眠っていったアゲハとは、もう会えないと思っていた。彼自身も、時間が無いと言っていたのだから。

握りしめた先からは、とくとくと脈打つ温かな感触。

確かに生きていると示されるそのリズムに、セリは酷く安心する。緊張の糸が緩んだその思考に、別の思考が割り込んだ。

こうして、また会えた。それなのに、彼は泣いている。

それは何故だ。

「アゲハ……レオラはどうなったんだ？」

思い当たるのは、もう一人の彼のこと。

セリの声は届いているはずなのに、アゲハは問いに答えない。

「あいつが、生きろって、五月蠅くて……」

最後の方は消え入りそうな声だった。

ずっと握っていた手を解いて、ついには両手で顔を隠す。

くぐもった小さな声が、静かな病室に響いた。

「俺は、帰ってくるつもりなんて、全然無かったのに」



W  
\*  
  
N  
\*  
\*  
\*  
\*  
  
W  
\*  
\*  
\*  
  
A  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
.

1  
4  
6  
·  
W  
N  
W  
A  
:  
4  
t  
h  
(  
後  
書  
き  
)

147・W N W A ; e n d (前書き)

ぼくらがあと少しだけ器用に生きられたなら。



147・W N W A ; e n d

W e n e v e r w a l k a i m l e s s l y .

\*

自分の手の中で、ドアノブがカチャリと音を立てる。

「な……何してるんだ！ やめる！ レオラッ！」

必死になって名前を読んでくるアゲハをどこか遠くの世界のことのように感じて、レオラは彼と同じ眼をした人のことを思いだしていた。

ついさっきまでそこに居たというのに、もう何日も前のことのように思えて不思議で仕方なかった。

『あんたは、オレとアゲハ、どっちに生きていて欲しい？』

ずいぶんと、思い切ったことを聞いたものだと思っても驚いた。

出される答えはただひとつだと、どこかで分かっていたのかも知れない。

『悪いけれど、私はあの女みたいに心は広くないし、優しくないし、平等じゃないの』

そうやって前置きを作ること自体が彼女の優しさなのではないのだからかと、まるで他人事のようにレオラは思う。

『あなたの答えが聞きたい』

『私は、アゲハに生きていて欲しい』

『……そっか』

予想していた答えと、真っ直ぐと見つめてくるその赤い瞳から目を逸らして、レオラはただ苦笑した。

聞くまでも無かったのだ。たとえこの身体に流れる血が同じものであったとしても、二人は家族ではない。家族であった記憶が、ひとつも残っていないのだ。

『でもね』

何も答えられずにいるレオラに、コノハはくるりと背を向けて言う。

世界の理を知らない幼子に、いちから何かを教えるような、そんなやさしい声色で。

『きみがアゲハに色んなものを見せてくれると言つのなら、あの子が知らないたくさんのことを教えてくれると言つのなら、生きていてもいいよ』

『生きていてもいい？』

『そう。私の答えの中に、消えてもいい人なんて居ない。生きて欲しいのはアゲハ、生きていてもいいのはきみ。……さあ、質問は終わり？』

くるりともう一度向かい合った二人の目が、今度は逸らされることは無かった。

『ああ、終わりだ……。お陰で、ちゃんと答えが出せたよ』

『そう。それで、鍵はどうするの？』

ちやり、と差し出された銀色の鍵に首を横に振って、レオラはしっかりと口調で言う。

『閉めたままにしておこう』

『分かったわ。じゃあ、この鍵はきみに渡しておくわね。私はそろそろ向こうに……元の居場所に戻るわ』

『そっか。お別れだな』

『ええ。お別れね』

別離を惜しむほどでも無い二人に、それ以上言葉はいらなかった。カチャリと鍵を開けて、ドアの向こうへと戻るためにドアノブに手を掛けるコノハ。

そして、彼女から鍵を受け取るレオラ。

手の中に確かな重みを感じて、レオラはふと思いついたことを口にした。

『……………なあ。この扉、向こう側から閉めたり出来るのか？』

『それは、もちろん、出来るけど』

『じゃあ丁度良い。この鍵はあんたが持っていてくれ。それで、向こうから鍵を閉めて欲しい』

渡された鍵を、もう一度彼女へと返しながらレオラは笑う。

それが、これ以上無いほどの最善の策のように思えた。

『……………いいの？ そんなことをすれば、二度とこの扉は開かなくなるわよ』

『それでいい』

『後悔しない？』

不安そうに尋ねてくるコノハに、レオラはしっかりと答える。

『しないさ。これでいいんだ。もうこの扉は』

『そうだ。』

二人がずっと出せずにいた答えは、こんなにも簡単だったのだ。

「この扉は、もう二度と開けない」

カチャリと音を立てて、それっきり、レオラの手が動くことは無

かった。

鍵の掛かったドアノブは、これ以上動かせない。

直前まで絶望の色に染まっていたアゲハの顔が、段々と呆気に取りられていくのが目に見えて分かった。

「レオ、ラ……？ なに言ってる……」

「オレが鍵を閉めた。その鍵も、もう無くなった」

「馬鹿かお前……なんで、なんでそんなことしたんだ！」

事実を述べると、途端にアゲハが掴みかかってきた。

身長が足りない所為で、本当は胸ぐらを掴んで責めているつもりなのに、その姿はまるで何かに縋り付いている子供のように見えたりいや違う。きつとこれは、救いを求める手だ。

本当はもつとずっと昔から、お互いに伸ばしていたものと同じ手だ。

自分よりも一回り小さいその手を握り返すこともせず、レオラはぼつぼつと喋り始める。

「オレ、お前が居なくなればいいのになって思ったこと、たくさんあった。お前がいなかったら、オレはもつと幸せだったかもしれないって思ったこともあった」

自分ではない誰かの名前を呼ばれたとき。それはいつも、怒りだとか、悲しみだとかで溢れていた。

自分はそんな名前ではない。その名前で呼ぶな。何度も叫んだ。

それは、レオラの内側から見ていたアゲハも知っていたのだろう。だからこそ、二人で生きていくことは無理だと思っていた。

「でもそれは間違いだった。オレには生まれたときからずっとお前が居た。だから、お前が消えたらもうそれはオレじゃない。レオラリアナじゃないんだ」

「……だから……なんだっていうんだよ」

「お前が生きることを願った人が居た。オレが生きることを許してくれる人が居た。難しいことは考えなくていい。理由は、それだけでいい」

掴みかかっていたアゲ八の手をほどいて、一步下がる。

丁度良い距離が出来たおかげで、お互いの顔がはっきりと見える。今までの自分達は遠すぎた。だから、これからは少しずつ近付いていけばいい。もうこれ以上、何かを見逃さないように。

「レオラ……お前、ばっかじゃねーの？」

「なんだとこの野郎」

「無理なことをやろうとしてるんだって分かってんのか」

下から睨み付けてくるアゲ八の音が、どこか震えている。

泣いているのか、怒っているのか、聞いただけでは分からないくらい微妙な震えだった。

「やらずに後悔するより、やって後悔するほうがいいって師範代も言ってた」

「こんな無理をして、人並みに生きられないかもしれないんだぞ。

きつと、人よりも長く生きていけない」

「なら、人の二倍楽しんで生きればいだけだ」

何を言っても無駄だとレオラが態度で示せば、アゲ八は一層小さい声で零す。

「……誰も俺の名前なんて呼ばない。必要とされているのはお前の方だ」

静かなこの空間は、どんな小さな音も聞き逃すことは無い。

だから、レオラはその言葉にただ溜息をついて、右手を握りしめる。

「……………アゲ八、齒ア食いしばれ」

「へ？ なっ!？」

ほんの少しだけ手加減しつつ、そのまま拳を目の前のアゲ八へと突き出した。

そういえば、彼に二度殴られた分、次に会ったら殴り返そうと思っていたのだ。あまりにもいるんなことがありすぎてすっかり忘れていたレオラは、突然の衝撃に呆気に取られているアゲ八を満足げに見下ろす。

そして、大きく息を吸った。

「誰もお前の名前を呼ばないっていうなら、オレが呼んでやる！五月蠅いって言われようが、しつこいって言われようが、オレが何度でもお前の名前を呼んでやる！一人で勝手に終わらせんな馬鹿野郎。オレ一人で全部背負わせる気か。オレとお前で今まで生きてきたんだから、今更途中で抜けるなんて無しだ！」

言いたかったことは、全部言った。

溜め込んでいたことを全部吐きだした。そんなレオラの目の前で、アゲハの両膝が折れる。

殴つても倒れなかったのに、まるで重力に引きずられるかのようにとどろきと崩れ落ちた彼は、そのまま座り込み、空気の漏れたような掠れた笑い声を響かせた。

「……お前、やっぱり馬鹿だろ」

風が吹いた。一度も感じたことの無かった筈のそれは、どこか懐かしい匂いを運んでくる。

この世界にたった一つしか無い窓から、風とともに白い花びらが吹き込んできた。

ふわりと迷いながらも自分の居場所を見つけたその花びらが落ちた先には、自分と同じ背丈のアゲハがぐしゃぐしゃになった顔で笑っていた。

「お前、本当、馬鹿だ」

鍵を持っていった彼女と同じ色した眼が、今は覆われて見えなくて。

「それはお互い様だろ」

自分も同じ顔をして笑っているのだろうか、レオラは懐かしい匂いに包まれながら思った。

「このつ……大馬鹿者が！」

「あー、それレオラに言つてやつてよセリさん」

「私がこんなにも心配したのに、なんだそれは！」

病室では静かに、などという最低限の規則すら破つてセリが大声で怒鳴り散らかす。

そんな彼女の声を最も近距離で聞いていたアゲ八は自分の鼓膜が破れていないか心配しなければならなかった。

「そもそも、紛らわしいことを言うな！ なにが『セリさんごめん』だ！」

「いや、それはその……またセリさんに迷惑掛けることになりそうだったから……」

「私はお前達のことを迷惑だと思ったことは一度も無い！」

「セリさんお願い暴れないでここ病院」

それでも彼女の怒りが収まることはない。

さつきよりも派手になった動きと音量の所為か、サイドに置かれた花が、まさか私を投げる気では無いでしょうねとでも言いたげに茎を擡げている。

「ああ、もう！ 安心したら涙が止まらないではないか！ どうにかしろ！」

まるで子供のようにぼろぼろと大粒の涙を零すセリは、そのままアゲ八の寝ていたシーツへと顔を押しつけた。

泣き顔どころか行動まで子供っぽくなってしまった彼女に苦笑して、アゲ八は話しかける。

「セリさん、心配かけてごめん」

その言葉にいち早く反応して飛び起きたセリは、まだ怒っている。

「お前のごめんはもう聞き飽きた！」

早く次の言葉を言えといわんばかりに腫らした眼を向けてくるセリに、アゲハは今度こそ笑ってしまふ。

謝罪の言葉は、自分も言い飽きた。

別れの言葉も、当分は言いたくない。

だから。

「ただいま」



147・W N W A ; e n d (後書き)

ぼくらがあと少しだけ不器用に生きるのなら。

B G M : F I N A L D I S T A N C E / 宇多田ヒカル

間奏曲 拾伍曲目「ある懐中時計の話」

これは、ある男とずっと一緒に生きていた、懐中時計のお話です。

その男がまだ時計と出会って居なかった時、男は大層腕の立つ軍人でした。

銃を片手に言葉の分からぬ国へ行き、たくさんの十字架をその地に作りました。

たくさんのものを背負ってしまった身体は重く、とても歩いてゆけそうになかったので、男は銃を捨てることを決めました。

国へ帰り男が軍を辞めたとき、彼は街の時計屋で銀色の懐中時計をひとつ買いました。

それは、男には到底釣り合わないほど立派な時計でした。

細かに施された装飾に、蓋を開ければきらりと光る文字盤。

カチコチと動く時計を胸ポケットにしまい、男は軍部を背に歩き出しました。

「素敵な時計ですね」と褒めてきたのは、若草色のワンピースがとても似合う可愛らしい娘でした。

男が働くその斡旋所はとても忙しく、所長の一人娘だった彼女もよく手伝いに来ていました。

「ちょっと見せてくださいませんか」と控えめに差し出された手は白く、絹のように美しい。

男は彼女の手の上にそっと時計を乗せました。

娘の手の中でカチコチ音を鳴らすその表面には、買った頃には無かった小さな傷が少しいっていました。

ある日、娘は綺麗なドレスに身を包んでいました。

白い布地に、白い透かしの刺繍、白い百合の花束を持って娘は微笑んでいました。

教会の鐘が鳴り響き、たくさんの笑顔とたくさんの拍手。

娘の隣に立つ男はすこし照れくさそうに笑いました。

時計はカチコチ、男の胸ポケットの中。

いつものように音を刻んで二人にお祝いの歌を贈りました。

それからいくつかの季節が過ぎて、男は少し歳をとりました。

妻の父の跡を継ぎ、せわしく仕事に囲まれる日々。

かつて銃を持っていたその手も、いまはペンと妻の手を握る為だけにありました。

あの時計は相変わらず、男の定位置に。

カチコチと仕事の始まりを教え、休憩の時間を教え、妻とのお茶の時間を教えました。

すっかり手に馴染んだそれを取り出し、傷が増えた蓋を見ては「

君も歳をとりましたね」と男は笑いました。

どんな時も男の傍にいた時計でしたが、たまに他人の手に渡ることがありました。

イタズラ猫がくわえたまま逃げ出したことや、汽車の中につかり忘れてしまったこと。

鎖が外れてしまったせいで、一日中ソファアの上にいたこともありました。

それでも最後には男の手の中に戻ってくるのでした。

あれはいつの日のことだったでしょうか。

男が街を歩いていると、ボロボロの服を着た青年がぶつかってきました。

その青年の手はとても器用だったので、ぶつかった拍子に男から時計を盗むのは造作も無いことでした。

けれど、青年はすぐに捕まってしまいました。

青年も気付かないうちに、男は持っていた杖で青年の足を引っかけていたのです。

いままで何度も盗みを繰り返していたけれど、捕まったことは一度も無かった青年は当然驚きました。まさか年老いた男に捕まるなんて、考えてもいかなかったからです。

どうにかして許してもらおうと、青年は生きるために盗みを働い

ていたことを大きな声で話しました。

すると男は笑顔で言います。

「私の護衛人になりませんか。今日だけじゃなく、これから毎日パンが食べられますよ」

青年の手から時計を取り返して、男はにこりと笑いました。

最愛の妻が死んだ時も、時計は男の胸ポケットの中にいました。

絹のように美しかった白い手にはいくつもの皺があり、その手を握る自分の手にもまた皺がありました。

ぴかぴかだった時計にたくさん傷がつくほどですから、それはもう随分と時間が経っていました。

それでも、最後に浮かべた彼女の笑顔は、昔とちっとも変わりません。

若草色のワンピースを着ていたあの時と同じ微笑みを浮かべ、彼女は静かな眠りにつきましました。

そして永い眠りについた妻の頬に、男はそっとキスをしました。

いつだったか時計を眺めていたとき、「貴方にぴったりですね」と言われたことがあります。

買った時は自分に釣り合わない時計だと思っていたそれを、そんな風に褒められたのは初めてのことでしたので、男は目を丸くさせて「おや、そうですね」とだけ答えました。

褒めてきたのは、護衛人になった青年の半分ほどしか無い背丈で、眼鏡を掛けた凜々しい顔の少女でした。

少女は秘書として、男の元でよく働きました。

紅茶を煎れるのが少し下手で、死んだ妻のいれるミルクティーの方が美味しかったのですが、妻よりもずっと手早く仕事をしました。てきぱきと動く様はまるで時計のようで、懐中時計も負けじと力チコチ音を鳴らしました。

それから幾年経ったでしょう。

男の髪は真っ白になり、近いところが見えにくくなったので眼鏡をかけるようになりました。

用心棒だった青年も少し歳をとり、眼鏡を掛けた少女も大人になりました。

それでも相変わらず忙しく楽しい日々でした。

胸ポケットには相変わらず力チコチ時計がお喋りしていましたし、護衛人の声は大きいまま。

眼鏡の秘書が煎れる紅茶は、やっぱり妻の方が美味しいのでした。変わったことといえば、銀髪の少女が一人、男の元で働くようになったことくらいでした。

その日は突然やってきました。

いつもは力チコチ鳴っているはずの時計が、はじめてお喋りをや

めていました。

男は胸ポケットから取り出してそつと蓋を開けましたが、針はぴたりと止まっていて、どれだけ待っても動きません。

しばらく時計を眺めたあとに、男は皺だらけの手で撫でるように蓋を閉めました。

表面の装飾には細かい傷がいくつもつき、よく切れて困りものだった鎖は何度も直した所為で不恰好。

ぴかぴかだった銀色は、いまは少しくすんだ鈍色。

その時計は、いつも男の傍にいました。

男にぴったりだと褒められた時も、

妻が静かに眠りについた時も、

青年が用心棒になった時も、

男が所長になった時も、

たくさんのお祝いの言葉に囲まれながら結婚した時も、

「素敵な時計ですね」と、若草色のワンピースが似合う娘に声を掛けられた時も。

いつだって、その時計は男の傍にいました。

そんなたたくさんの思い出が染みこんだ時計に向かって、男は「お疲れさま」と言いました。

そして、彼の眠りを妨げないように、一番上の引き出しにそつと仕舞いました。その引き出しは、男の大切な物をいれるためのものでした。

胸ポケットにいつもあつた重みは、もうありません。

窓から覗いた夕焼けだけが、そのお別れを見ていました。

男が時計を仕舞ってから数日後、銀髪の少女が不思議そうに尋ねてきました。

「懐中時計はどうしたの？」

男はもう動かなくなってしまった時計を取り出し、もう片方の手でふわふわと揺れる銀髪を撫でてやりました。

いつもと違って、少しだけ寂しそうな笑みを零す男を見て、少女は花のような笑顔で言います。

「私ね、とっても器用なの。だからこの時計、きつと直してあげられるわ」

そう言って、男の手から懐中時計を受け取ると、少女はワンピースの裾をはためかせてパタパタと走り去ってゆきました。

突然の申し出に目をぱちくりさせていた男は、軽くなった自分の手と、とっくに見えなくなった少女の行く先を見て、ふわりと微笑みました。

次の日。少女は俯きながら、小さな声で言いました。

とても古い時計だったから、ぴったり合う部品が無かったこと。

直そうと思うなら、部品を一から作り直さなければならぬこと。

そうになると、男の好きだったカチコチという音が、今までとは違ってしまうこと。

少女が余りにも悲しい声で謝るので、男は昨日と同じように彼女の頭を優しく撫でてやりました。

「仕方の無いことですよ。形あるものはいずれ壊れてしまうのですから」

少女のことをひとつも責めることなく、穏やかに男は微笑みます。



そんな彼に、少女は預かっていた懐中時計を返しながら言いました。

「時間が分からない時計は使い物にならないかもしれないけれど、この時計はきつと、引き出しの中で眠るよりも、所長とずっと一緒に居る方が嬉しいと思うわ」

渡された懐中時計からは、やっぱりカチコチという音は鳴っていません。

ぱかりと蓋を開けて、男は驚いて、そしてすぐに幸せそうな顔で言います。

「前よりもずっと、素敵な懐中時計になりましたね」

そこには、男の愛した妻が微笑みを浮かべていました。

これは、ある男とずっと一緒に生きていく、懐中時計のお話です。

間奏曲 拾伍曲目「ある懐中時計の話」(後書き)

今日もその時計は、男の胸ポケットの中にいます。

街から遠く離れた田園地帯。ぽつぽつと建った家は隣の家との距離が極端に離れていて、訪れた人に寂しげな印象を与える。

あまり人の出歩かないひっそりとした閑静なその場所は、時間までもがゆっくりと流れているように感じられた。

ただ一つの家の周りを除いては。

「……留守か？」

その家の前では、一人の人間が非常識なほどの数の呼び鈴が鳴らしていた。

歳は十代後半頃。長いプラチナブロンドの髪が陽光にあたりきらきらと輝いて見える。

しばらくは無表情に呼び鈴を鳴らし続けていたようだが、通算三十二回目の呼び鈴が鳴ったところでその指はぴたりと止まった。

「騒音公害、仕事の邪魔。一回鳴らせば分かるよ、記録番」

この家の住人が、うんざりと言い放ちながらその扉を開けたからだった。

どんな顔をされようと、扉を開けてもらうことという目的を達成したことに変わりはない。いままで呼び鈴を鳴らす為だけにあつたその右手をひらひらと振り、記録番と呼ばれたその人間は何事も無かったかのように挨拶をした。

「やあ、全体観測。元気にしていたかい？ カラスと書物ばかりで荒んだ生活をしているんじゃないか？ 今なら癒しのわんこ提供中だ。コーヒー一杯で貸してやらんこともない」

「悪いけど、キミの相手をしてやるような暇はない」

白い子犬と記録番を交互に見比べてフィンは無愛想に言った。

生憎、ドアを開けると同時にいきなり押し入ってくるような人間にかける愛想など彼は持ち合わせていない。そもそも人並みな愛想とやらをどこかに忘れてきたような人間だったので、到底無理な話

だった。

今日も今日とて黒いコートに黒い服、黒一色で統一されたフィンの姿は、もうすぐ春だというのに少し暑苦しく感じられる。フードを被っていないだけかもしれませんがと思っべきなのだろうか。

「いつ見ても黒いな、君は」

「ボクが全身真っ白で統一していたら気味が悪いと思ったんでね。周りの精神衛生を考慮してのことだよ。ところで何の用？」

「なに、少し顔でも見ておこうかと思ったただけだ。心配しなくとも長居はしないよ、全体観測」

紫色の瞳を細めて、記録番が宥めるようにして答える。

足元では赤い首輪を付けた白い犬が何か面白いものは無いかときよろきよろ首を動かしている。

その視線の先に丁度良い遊び相手が見付かるのは、そう遠くないことだろう。

「はあ……全くキミも相変わらずだね。コーヒー一杯飲んだら本当に帰ってよ」

その強引さに負けて、結局部屋へと通すことにしたフィンだったが、コーヒーに制限を付けて早めに帰ってもらうことを条件にした。よく見れば、右手には何かの情報と思われるファイルを持っている。仕事があるというのは追いつけず口実などではなく本当のようだった。

「で？ いつこつちにやって来てたの？」

「三月の初め頃だったかな……そろそろ国の変わり目かと思ってな。そうそう、この間噴水広場で噂の闇鬼を間近で見たよ。伝言屋と何か話をしていたかな」

「彼は今回大活躍だったからね。ワルツハイネ將軍には会えたの？」

「死ぬ数日前にな。私に謝ってきたよ」

記録番の綺麗な紫の瞳が寂しそうに閉じられる。死に際の彼との最後の会話を思い出しているようだった。

適当な椅子を二人分用意しながら、フィンは何の感慨も無く答え

る。

「戦争が終わってから彼、随分と丸くなったみたいだからね。後悔してたんじゃないの」

「そうかもしれない。死が近付いてくると、いろいろと思い出すからな」

憂いのある表情で記録番が同意する。自分もまた、何かを思い出しているようだった。

回想の邪魔をしてはいけなと思ったフィンはサイドテーブルにコーヒーカップを置き、自分の分は手に持ったまま丁度良い温度になるのを待つて湯気がふわふわと天井に吸い込まれていくのをじっと見ていた。

廊下ではサスケの叫び声が聞こえる。大方、あの白い犬に追いかけて回されているのだろう。助けに行くのも面倒に思われたので、食べられないように健闘を祈ることにする。

「……今回はいつまでこっちに居るの？」

その声に、ぱちりと目を開け現実に戻ってきた記録番が答える。

「新しい総司令官が決まればすぐにでも村に帰るよ。大方ヴィステル將軍で決定だろうが、一応最後まで見届けないと何があるか分からないし」

「また殺されるかもしれないしね」

「まあ、そうならそうだった時だ。私のするべきことは記録をすることだけだし、求められる以上のことをしようとは思わない」

「懸命な判断だね。どこその馬鹿な都合屋に聞かせてあげたいよ」

「私の場合、これが生活を支える仕事という訳でもないからな。余計なことをする必要も無い」

「それもそうだ」

会話に区切りが付いたのを見計らって、記録番は近くに置かれたコーヒーへと手を伸ばして息を吹きかける。指先にはじんわりと温もりが広がっていく。向かいではやっとな飲める温度になったコーヒーに口を付けているフィンが居た。

「そういえば、今日はなんだか街が騒がしかったな。大通りには屋台が出ているし、人はたくさん居るし、歩きづらいことこの上なかつた」

「そりゃあ、今日からヴィオレティナのお祭りだからね」

「ヴィオレティナ……ああ、そういえばもうそんな時期か。すっかり忘れていたよ」

「ボクもキミの話聞いて思い出したんだけどね」

「全体観測。君にはレヴィンのスマレを贈る相手は居ないのかい？」「いいや。なんならキミに渡してやるうか？ 贈ってくれる人も居なさそうだしね」

「遠慮しておくよ、後が怖いから……。さて、美味しいコーヒーをありがとう。君の元気な様子も見れたし、私はもう帰るとするよ」

「コーヒー一杯、と自分から言っただけで来た癖に、半分も飲まないまま記録番は立ち上がる。本当にフィンの顔を見に來ただけだったらしい。」

「未だにコーヒーを飲み続けるフィンと、その向こう側にある窓を見て意味ありげに微笑み、記録番はこつこつと靴音を響かせて出ていく。」

「プラチナブロンドの髪をなびかせて颯爽と歩いていく後ろ姿は、ある意味清々しくもあった。他人の都合などまるきり無視である。」

「……本当、相変わらずな人だ」

「振り返ることもなく去っていった嵐に向かって、フィンはそつと溜息を吐きながらカップを置いた。皮肉を込めた呟きは、先程よりも薄くなった湯気と一緒に消えていく。」

「『フィン！ 記録番が来たときは、子犬を外に出してくださいとあれほど言っただじゃないですか！』」

「やっと訪れた静寂の時も、束の間に終わった。」

「子犬から解放されたサスケが、盛大に文句を言いながら部屋に入ってきたからだ。」

「運動不足の解消になっただろ。あんまり丸々と太ると、非常事態」

になる前に食べてしまいそうになるじゃないか。折角の非常食なのに」

『ふ、太ってませんよ！ それに運動不足でもありません！』

「主人の厚意を無駄呼ばわりするか。駄目なカラスだ」

いつもと変わらないやりとりの中、記録番が最後に目を向けていた後ろの窓から久しく聞いていなかった声が聞こえる。

混じってきた違う声に驚いてフィンとサスケが振り返れば、開け放たれていた窓の外からひよっこりと顔を覗かせるメイが見えた。

「二ーハオ、情報屋」

「……今日は千客万来だな……何か用かい、シヨウ。今日は定期調達日じゃ無かっただろう？」

「たまたま仕事で近くを通りかかったから寄ってみただけヨ。用が無かったら来ちゃ駄目力？ ワオ、冷たい！ 情報屋が冷たいヨ。異国の地でこんな仕打ちを受けるなんて！ えーんえーん、ワタシ祖国に帰りたくなったヨ」

「嘔吐け。キミは根無し草だろ」

「あらら、ノリの悪い奴ネ。それより誰力？ さっきの綺麗な人さっきの、ということは記録番が来たときからそこに居たのだから。窓の外からずっと話しかけるタイミングを見計らっていたのかもしれない。

記録番の意味深な笑みを思い出して、フィンはあくまで無表情のまま納得した。

『あの人は記録番ですよ』

「キロクバン？」

聞き慣れない言葉に首を傾げたメイに、分かりやすくフィンが説明する。

「むかしむかし、この国がまだ軍事国家では無く王国制だったころ、ソナチネ地方にあるレソタニア古城にはたくさんの人達が住んでいたそうなの」

「ということは、あの人はレスティナの王族力？」

「いまは王国制じゃないから、そんな階級は存在しないけどね。簡単に言えば、その子孫みたいなものだよ。赤い十二月と呼ばれた革命では、王族は問答無用で処刑されていった。そんな中、命からがら逃げ出した残りの人達はこの国の行く末を見守るのが自分達の使命だと考え、王国制が崩れてから今に至るまで、ずっとこの国を傍観し、歴史を綴り続けることにしましたとさ」

めでたしめでたし、と付け加えてフィンには空になった自分のカップと記録番の飲み残していったカップを持って部屋から出ていった。そんな彼の後ろ姿に向かって、窓の外に居る所為で彼を追いかけることも出来なかったメイが頬を膨らませる。

「難しい話は嫌いヨ」

『要約すると、王族の末裔がこの国のことを記録し続けていて、彼らのことをまとめて記録番と呼ぶということですよ』

ばさばさと羽音を立てて、サスケがメイのいる窓へと降り立つ。

そんなサスケの頭を撫でながら、窓枠に顎を乗せてつまらなさそうに答えた。

「ふーん。ワタシ、レスティナではよく仕事をする方だけど、そんな職業初めて聞いたヨ」

『処刑されたはずの人達ですからね。その存在を知っている者はほとんど居ないのです。フィン達は情報屋ですので、仕事柄いろいろと交流があるんですよ。とは言っても、いつもは辺鄙なところでひっそりと生活していらっしやるので、滅多なことが無い限り会うこともありませんが』

「アー……最近のレスティナにはその『滅多なこと』があつたからか？」

「へえ。キミ、ずっとレスティナにいたんだ」

ようやく戻ってきたフィンが、意外そうな声を出して問いかけてきた。その両腕にはコーヒーに飽きたらしく、温かそうなカフェオレが入っている。

「そんな訳無いデシヨ。ワタシ、お前と違ってお外を飛び回るのが



仕事。風の噂で聞いたつてだけネ」

ぼんぼん、と自分の足元においてあった大きな包みを叩く。そういえば仕事のついでに立ち寄ったと言っていた。となると、この荷物が今回の調達物なのだろう。

果たしてこんなところで油を売っていてもいいのか、と他人の仕事の心配をしつつ、フィンは窓枠に腰掛けた。

「噂なんて不確かなもの、よく信じたね。はい、どうぞ」

「どうもネ」

両手を合わせて頭を下げカップを受け取ったメイを見ながら、自分もカップに口を付ける。今回は丁度良い温度に仕上がったらしい。「噂も意外と当てになるものヨ。レスティナには昨日お仕事で来たばかりなんだけど、街で配っていた新聞に色々と載っていたからネ。そうそう、街といえは今日はいつもより人が多かったヨ。また何か事件でもあったカ？」

「あり？ キミ、知らなかったっけ」

「何をネ？」

そうか知らなかったのか、と勝手に納得するフィンの隣でサスケが羽を広げて楽しそうに話す。

『今日からヴィオレティナのお祭りが始まるんですよ』

「ヴィオレティナのお祭り？」

\*\*\*\*\*

「ヴァイオレンスのお祭り？」

「なんだその物騒な祭りは！ ヴィオレティナだよ、ヴィオレティナ。レスティナの古語でスミレの花のことな」

ソナチネ地方城下町と首都メトロポリスの丁度間にある花の街。一番大きな駅の前、その街のシンボルでもある花時計の前では二人の人間が立っていた。

一人は、この花時計が十二時を指す少し前から誰かを待っていたレオラリアナ。

もう一人は、それから十分後にたまたま近くの美術館から出てきたクウヤ。

ちなみに彼がレオラの待ち人という訳ではなく、本当に偶然そこに居合わせただけの組み合わせだった。

「お祭りね……だからこんなに人が多いわけだ」

「わざわざ花の街に来るくらいだから、祭り目当てに来たのかと思っただけだな。そういえば何しに来たのお前。仕事？」

「今日はお休み。昨日お隣さんに美術展のチケットをもらったから、ちよつと芸術鑑賞にね」

優雅でしょ、とパンフレットを見せてくるクウヤにハイハイ、とおざなりに返事をすれば、足蹴にされた。

無論いつものことなので特にやり返したりもしない。その対応を大人だと言う師範代もいれば、ヘタレと一喝する親友もいるが、反論したところで自分が負けることは分かっているのです、やっぱり何も言わずに痛む足を押さえた。

「ついでにお花見の下見に来たっていうのもあるんだけど……。ところで、これは一体何をするお祭りなの？」

足蹴にした張本人は、特に悪びれもせず周りの人混みに興味津々のようだった。

確かに花屋の多さくらいでしか特筆するところの無いこの街で、こんな光景は珍しい。駅から出た大通りには人と屋台で溢れ、楽し

そんな声と美味しそうな匂いが漂っていた。

「ヴィオレティナっていう名前通り、大切な人にスミレの花を贈るんだよ。贈り物のスミレのことを、祭りの間はレヴィンのスミレって言ったりもするな。三月の第三日曜日から次の日曜日までがお祭りで、その間の花屋は店先にスミレばかりが並ぶんだぜ」

一応国中で行われているお祭りだが、こと花の街に関しては気合のいれかたが断然違う。何せ花屋が多いことで有名な『花の街』なのだ。ここぞとばかりにスミレの花を店頭に並べる花屋達の目は、いつもよりも生き生きとした輝きを放っている。

「ははあ。要するにバレンタインデーみたいなものだね」

「バレンタインはお世話になった人に本を贈る日だろ？」

「レスティナではね。和国では好きな人にチョコレートを贈る日なんだよ。そのチョコレートが花になっただけだろ？」

「へー、チョコレートをね。オレも花なんかより食える物の方が良いな」

「あははは、レオラってばもらえることを前提に話してる？」

「もらえないことを前提に笑うな！ 馬鹿にするなよ？ 村ではぜひ孫にしたいと年上の異性から大評判なんだ」

「歳の差が非常に気になるどころだね。ところで、なんでスミレの花なの？」

クウヤの唐突な質問に、レオラは言葉に詰まる。手を口に当てたり、米神を叩いてみたりするが、求められているような答えは全く出てこなかった。

「……なんでだっけ？」

「おい」  
「いや、昔からある伝統的な祭りだっていうのは知ってるんだけどな」

なんとか祭りの由来を思い出そうとしてみるが、そもそも自分が由来を知っているのかどうかさえ怪しくなってきた。これだけ頭を捻っても出てこないのだから、きっとそうなのだろう。

頼りにならないレオラを遠目に見ながらクウヤは自分がまだ昼食を摂っていなかった事を思い出して、すぐ傍の屋台へ声を掛けた。

「すみませーん。生ハムとモッツァレラチーズのパニーニひとつー。この人の奢りで」

「なんでだよ！ おばちゃん、俺はトマトとバジルのパニーニね。こいつの奢りで」

「……ヴィオレティナの由来も分からなかった癖に」

「さよなら、オレの今月の娯楽費！」

痛いところを突かれて、泣く泣く使い古された財布から千ミリアを取り出す。

先程の会話を聞いていたのか、店員がお釣りの三百ミリアをレオラに返しながら、人懐こそうに尋ねてきた。

「お客さん、もしかしてヴィオレティナは初めてかい」

「そんなんですよー。どうしてスミレの花を贈るか知ってます？」

店員はパンに具材を挟みながら、にこにここと笑って話し始める。客相手によくこの手の話をしているのだろう。まるで物語でも語るかのように慣れた様子だった。

「その昔、レソタニア王家にはお転婆な王女様がいらっしやっただ。だ。

その王女様がお忍びで花の街に来ていたとき、小くて可愛い花を見かけた。王女様の元に贈られる花は、どれも豪華なものばかりだったからね。とても珍しかったんだよ。

店先であまりにも熱心にその花を見ているものだから、花屋がその花の種を王女様にプレゼントした。まさか相手が王族だとは思わずにね。

そんなプレゼントをもらったのは初めてだったから、王女様はこの花屋のことが気になって仕方なかった。そしてお忍びで何度もその花屋に通った。だけど声を掛けることは出来なかった。いつもはお転婆な王女様も、好きな人の前ではうまく話せなかったんだろ  
うね。

それから時が過ぎて、王女様は見事にその花を咲かせた。花が開いた日、王女様はその鉢植えを持って花屋の元を訪れた。

そしてこう言ったのさ。『あなたが咲かせる花を、一番近くで見ている良いですか』とね。

花屋もずつと通つてきていた王女様のことが気になっていたから、すぐに返事をした。

こうして二人は結ばれ、仲睦まじく暮らしましたとき」

話している内にパニーニにはこんがり焼き目が付いていた。それを包装紙でくるんでいく様子を見ながら、クウヤはすつきりとした表情で話す。

「なるほどー。王女様が気に入ったその小さな花が『スマレの花』で、その種を渡した花屋さんが『レヴィン』さんだったというわけですね？」

「そういうことだね。はい、生ハムのパニーニとバジルのパニーニ！」

「美味しそー。ありがとうございます」

出来たてのそれらを手にして、クウヤとレオラはまた花時計の真ん前にまで戻った。

パニーニにかぶりつきながらきよるきよると周りを見回してみるのが、すぐにレオラは駅の方へと向き直る。彼の待ち人はまだ来ていないようだった。花時計はいつの間にか十二時と半分を指している。

「わー、チーズが伸びるー。いっぱい伸びるとなんか嬉しいよね」「零すなよ」

「流石にそれは無いでしょと言いたいところだけど、きみのトマト落ちそうだよ」

「うおっ！ やべやべやべ……あっつ！」

落ちかけたトマトを慌てて口にして火傷をしているレオラを横目に、ぱくぱくとすごいスピードで平らげたクウヤはさつきから頭にあつた疑問を口にした。

「さつきからずつとここに居るみたいだけど、この花時計に何かあ

るの？」

「いや、単なる待ち合わせ。一緒にスミレを買いに行く約束してんだよ。十二時の列車に乗ってくるはずだったんだけど……」

「へー。君にもちゃんとするという相手が居たんだ」

感心したような、驚いたような声を上げてクウヤが包装紙をまるめる。そしてそれをごみ箱に向けて投げ入れた。綺麗な放物線を描いて、それは見事ごみ箱に収まる。

それと同時に、レオラが声をあげた。

「あ、来た来た！」

どうやら、今し方到着した列車に目当ての人物は乗っていたようだ。

駅から出てきたその子に向かって、レオラは自分の位置を教えるように手を振る。それを見付けて、すぐに駆け寄ってきた。

「ごめんねレオラ！ 切符買うのに手間取っちゃって、遅くなっちゃった」

走った所為で、少し息が荒い。

レオラとその子を見比べて、クウヤは大袈裟に嘆いた。

「レオラ、いくらなんでもこれは駄目だよ。人様の弟に手を出すなんて……！」

「……お前はオレを一体どこへ向かわせたいんだ？」

「そりゃあもちろん、いけるところまで」

完全に遊ばれて脱力するレオラの向かい側で、シオンが不思議そうに首を傾げていた。



148・Violentina! 三月の第三日曜日のこと (後書き)

レヴィンのスマイレを探しに。



149・Violetina! 「始末屋と都合屋と弟と」

「こんにちは、シオンくん」

「クウヤ! 元気だった?」

「おかげさまで」

先程のやり取りで何もしない内から疲れてしまったレオラの隣で、その原因の張本人たるクウヤはいつもどおりのにこやかな笑顔で挨拶をする。シオンの小さな身長に合わせるようにして少し腰を屈めると、黒色のキャスケットをかぶりなおしたシオンと目があった。

「そういえば、こんなところでどうしたの?」

「んー、ちよつと休暇を楽しんだところ。シオンくんこそ、今日はレオラとお出かけ?」

「うん! レヴィンのスマレを買いに来たんだ。レオラと一緒に選んでくれるって」

姉の帽子を借りてきたのか、シオンの頭よりも少し大きめのそれは彼が大きく頷くと簡単にずり落ちた。それを丁寧になおしてやりながら、クウヤは質問を続ける。

「そっかー。シオンくんは誰にあげるの?」

「姉さん!」

「あははー、やっぱり。ちなみにレオラは?」

いままで放置していたレオラの方を向けば、いつの間にか花時計の縁に腰掛けている。話題をふられているのに両手をポケットに突っ込んだまま興味なさそうにレオラが答えた。

「見ての通り、オレはただの付き添いだよ」

「ふーん。あげる相手も居ない、と……」

「あのな、誰にも渡さないってわけじゃねーぜ? 師範代にはちゃんと種を贈るし。まあメインはシオンのスマレ選びだから、ついでみたいなもんだけど」

よつ、と足を蹴りだしてそのままの体勢で立ち上がったレオラに  
合わせて、クウヤも姿勢を正す。

花時計は一時少し前を指している。まだまだ日曜日は始まったばかりだ。

「ね、僕も一緒に行ってもいいかな？ 楽しそうだし」

スマレ選びに自身が加わることを提案してみると、快く頷いたシ  
オンの隣でレオラが首を傾げる。

「あれ？ お前、オハナミの下見に行くとか言ってたっけ？」

「そんなの明日でもいいじゃん」

「それは別に良いけど……仕事は？」

「最近の僕は毎日がハッピーホリデー」

ぐつと親指を立ててクウヤは片目を瞑る。ばちこーんと星が飛ん  
だような気がした。

呆れた顔でレオラが何かを言おうとしたが、それを遮るようにし  
てクウヤが理由を話し始める。

「ちょっとした充電期間だよ。三月は色々頑張ったから、四月ま  
では休業するって決めたんだ。たまにはうんと休まないとな」

「おいおい、金に余裕のある奴は言うことが違うな？ よし、シオ  
ン。何か欲しいものがあつたら遠慮せずにクウヤに言うんだぞ」

レオラがガシガシとすこし乱雑にシオンの頭を撫でる。

そんな彼からシオンを引きはがしてクウヤは言う。

「シオンくん、いまから一緒にレオラの財布を空っぽにするゲーム  
しようか？」

「誰だ、そんな陰険な遊び考えた奴！」

「レオラは本当に馬鹿だなあ。そんなの僕しか居ないじゃない」

「開き直った！」

二人の掛け合い、というよりは一方的に弄られているレオラと弄  
っているクウヤの間でシオンが苦笑いをしながら提案をする。

「えーっと……とりあえずお花屋さんに行かない？ 二人とも」

本来の目的は、カノンへのスマレを選ぶためなわけであって、こ

ここで時間を潰すことではない。

自分よりも小さい子供の方がしっかきしていることを恥じて、クウヤもレオラも彼の意見に賛成する。

「わりーわりー。そうだったな」

「良いスミレが見つかるといいね」

「うん！ 僕、この日の為に貯金箱を割ってきたんだよ」

やっと花時計の傍から歩き出して、シオンは嬉しそうにポシエツトを叩く。

左隣を歩くクウヤがそれを微笑ましそうに見た。

「スミレを買う為に貯めてたの？」

「うん。姉さんがおこづかいだって言って月に五百ミリアくれるんだけど、ずっと前からお菓子をがまんして、使わずに貯めてたんだ」

「偉いねー。そうだ、これが終わったら三時のおやつにしよう。レオラがなんでも好きなものを奢ってくれるって」

急に話を振られたレオラがシオンを間に挟んだ向こう側でストップをかけた。

「ちよつと待て、誰がそんなこと言った！？ 先に言っておくけど

オレ、そんなに金持ってきて無いからな」

「いい？ シオンくん。こういう場合はね、レオラにジャンプをさせるんだ。音が鳴ったらお金を持つてる証拠だよ」

「子供になんてことを教えてんだお前は。シオン、これを巷では恐喝と言ってたな……」

「で、音が鳴らなかつたらお札を持つてる証拠だからね」

「しまった、恐喝じゃなくて強奪だった！」

同じ頃、現態観測と謳われる情報屋、アルル・キャラメリゼは居間の床に座り込み、首を捻っていた。

彼の目の前には、頭を悩ます原因となった大きな白い箱がある。もう既に開け放たれたその箱の中身は、主に紙であった。

疑問を解決すべくアルルは立ち上がり、近くにあった電話に手を伸ばして慣れた手つきで番号を回す。相手は一回目のコールですぐに受話器を取った。

『もしもし、こちら裏町幹旋所です』

「もしもしー？ 情報屋のアルル・キャラメリゼだけど。あんさー、出来れば上の方の人と代わってくれる？ ちょっとややこしーことになってんだけどさー」

『……貴方昼間から元気ね』

「昼間元気じゃなかったらいつ元気になればいいんだよ……じゃなくって！ 姉貴!？」

「いちいち五月蠅い子ね。用件は？」

冷たくあしらわれて不機嫌に口元をとがらせてみるが、どうせ相手には何一つ見えていない。その対応の冷たさを指摘したところで、自分に対する態度が治るわけでも無いのをアルルは十二分に知っていたので、大人しく従う。

受話器を持ち直したついでに床に置きっぱなしの箱を足で近くまで寄せ、そして中身を何枚か確認しながら話を続けた。

「なんかさ、幹旋所の資料が俺んちに送られてきたんだよ。住所はまごうことなく俺ん家のんだけど、中身がまるままそっちの資料なんだよね。たぶん業者が手違いで送ってきたんだと思う。そっち

に送り直すから、宛先教えてくれない？」

『ああ、それ？ 手違いじゃないわ』

「あり？」

『幹旋所の情報整理。手紙にちゃんと書いてあったでしょう？』

手紙。

それは何枚かの資料を捲っているうちに、はらりとアルルの足元に落ちたこの白いメモ用紙のことだろうか。

足元のそれを拾い上げて、アルルは言葉にならない声をあげる。

そこには幹旋所に登録してある裏町業者の名前、職種、階銘、連絡先、その他のデータを最新の情報を書き加え、そのうえ職種ごとに分けた後、階銘順に並べ直すようにとの指示が書かれていた。

何とも地道ながら大変な仕事であり、以前フィンとともにやった仕事と全く同じものであった。

「ちょ、は？ 待つて待つて、つーかなんで？ 俺、前に幹旋所の情報整理手伝ったよな？ それもすんごい量の！」

『そうだったかしら？ じゃあ新しい分の整理よ。こっちは色々忙しいの。貴方暇でしょう？』

「はあ！？ 俺だつて忙し」

『頼んだわよ。終わつたらまた電話して頂戴』

言い終わらないうちにアンジユによって一方的に通話を切られ、受話器の向こうでは機械的な虚しい音だけが鳴っていた。

自分の持つていた受話器を乱暴に戻しながら、アルルは大きな白い箱を恨めしそうに見る。

偉そうに床に鎮座するそいつを思いつき蹴ってみたが、自分の足が痛くなったただけだった。

特に当たり所の悪かった親指を押さえ込みながら、無言で痛みに耐える。

「くっそー……なんだよ！ 結局またいいように使われただけかよ！」

いつもはろくに会話もしてくれないくせに、こんな時だけ仕事を

押しつけてくるだなんて卑怯だ。

だけど、それに逆らえない自分がいるのも事実だった。

断ったら、今度こそ繋がりが消えてしまう。そんな気がしてならない。

「……あーあ。俺も大概弱虫だよなあ。カノンちゃん助けてー」

自分を卑下する言葉と弱音を零しながら、アルルは箱の中身の書類をテーブルの上に並べ始めた。

\*\*\*\*\*

がやがやと騒がしい喧騒の中、人混みから少し離れた場所でクウヤが溜息混じりに呟いた。

「どっこもかしこもヴィオレティナだねー」

「まーな」

「シオンくん、真剣だねー」

「だな」

「あ、また店から出てきた……これで通算五軒目なわけですが」「ですが？」

「僕は今、暇が人を殺すつてという言葉はあながち間違っていないかなあと考えを改めているところですよ」

「お前が勝手についてきた癖に」

呆れた顔でレオラに言われて、それはそうなんだけどさと言い返

す。クウヤは辺りを見回してもう一度盛大に溜息を吐いた。

大きな祭りだとは分かってはいたが、これは予想以上だ。見慣れないほどの人、人、また人。そして大体の人間が皆スマレを抱えている所為か、辺りは花の香りでいっぱいだ。

それだけじゃない。屋台に混じって店先にまで花を売っている花屋がいるのも手伝っているのだろう。花を売るためには手段を選ばない、そんな意気込みさえ感じられる。ここまでしないとときょうび花などは売れないのだろうか。クウヤは商人の根性とやりに違う意味で尊敬した。

シオンもシオンだ。たったひとつのスマレを選ぶ為に、かれこれ五軒の店を出たり入ったりしている。花を選ぶのにそこまで真剣になれるものなのだろうか。クウヤは人に花を贈ったことなど一度もないので、その気持ちは想像出来ても理解し難い。

ちょうど六軒目の花屋でシオンがスマレを選び始めたころ、それを遠目に見守っていたクウヤは隣で欠伸を噛み殺していたレオラに尋ねた。

「そういえばレヴィンのスマレって、種を贈るか鉢植えを贈るかで意味に違いがあるの？」

「んあ？」

一番最初の店でレオラがスマレの種を買っていたのを思い出して、クウヤは彼の手が突っ込まれた左ポケットを指差した。

「んー……別に明確な決まりは無いんだろうけど、お世話になった人には種を、特別な相手には鉢植えをっていうのが主流みたいだな」

「ふーん。義理と本命か……やっぱりバレンタインだねえ」

「どこの国も似たようなことしてんだな」

「愛の形は万国共通って？」

「お前が言つとなんか嘘くせー」

「それは僕の得意技が相手の鳩尾に蹴りをいれることだと知っての発言かな？」

「お願いやめてパニーニ出る」

攻撃される前から負けているレオラは、自分の腹を押さえて守りを堅くする。そこまで一生懸命ガードされると、逆に蹴りたくなるのは自分の性格が捻えている所為だろうか。

がら空きになっていた背中を蹴って、クウヤは手を振って自分達を呼んでいるシオンに笑顔で応え、そちらへと走っていく。一足遅れて、レオラもすぐに駆け寄っていった。

「ねえねえ、これはどうかな？」

見せられたのは、薄紫のスミレが五つほど咲いた小さめの鉢植えだった。

全体的に飾り気が少なく、窓際に置くのに丁度良い大きさだ。なかなか良い感じのものを選んできたシオンの頭を撫でて、レオラは同意する。

「おー、いんじゃないの？ シンプルで派手過ぎないし、あいつに合ってる。なあ？」

隣のクウヤを見やれば、彼も同じように頷く。

「そうだね」

「よし、じゃあこれに決めた！」

二人からの同意を得られて満足そうなシオンは、さげていたポシエットから財布を取りだして、意気揚々と会計へと向かう。

その後ろ姿を微笑ましく見送って、クウヤは足元に広がる商品達を指差す。

「こういつ白も似合いそうだけどね」

紫色だけでなく、さまざまな色が揃ったスミレを見て、クウヤはレオラに訊いた。たしかに一番シンプルなのは、この白いスミレかもしれない。が、レオラの反応はいまいちだった。

「あー……でもシオンが白を贈るのは変だろ」

「変なの？」

「白色のスミレを贈るのは恋人や意中の相手にだけよ、クッピー」

「あ、郵便屋さん」



二人のちょうど間から顔を覗かせ、なんの前触れもなく会話に参戦してきたのは、恋のキューピッドもとい城下町の郵便屋だった。

ぎよっとするレオラとそうでもないクウヤにそれぞれ手を振って、郵便屋はいつものペースで話しかけた。

「やつほー金髪泣きボクロにクツピー。っていうかクツピー、ひさしぶりじゃない？　そーいやカンカンのお店で働いていた頃以来ねー」

「金髪泣きボクロって、オレ？　つーかこの人誰？」

「カノンさんの住んでる町の郵便屋さんだよ」

突然の登場に驚くこともなくクウヤが淡々と説明をして、それから郵便屋へと文句を言った。

「とりあえずそのふざけた呼び方止めてください。以前お教えしたように僕の名前は、」

「やーもう祭りに浮かれる恋人達の暑苦しさつたら無いね！　ほんっと無いね！」

「……郵便屋さんもレヴィンのスマレを買いに来たんですか？」

名前の訂正を聞き入れてもらうのを諦めて、クウヤは違う話題を提供した。どこからどう見ても郵便屋の姿は仕事の制服なのだが、花屋に居るといことは、つまりそーいうことなのだろう。

今日はどこへ行っても『レヴィンのスマレはもう買った？』という挨拶が飛び交う日なのだ。

が、予想に反して郵便屋は「おえっ」と女らしさとは程遠い声を出して首を横に振った。

「そんな反吐と暴言が同時に出るような愚かな質問、略してへボ愚問はやめてちょうだい。クツピーからクウタンに格下げするわよ」

「違いが全く分かりません。元より、僕の名前はク」

「この姿を見て分からない？　仕事よ、仕事」

人の話を聞かないのが彼女の行動理念なのだろうか。それとも誰かの本名を聞いたら死ぬ病気で懺悔しているのだろうか。

誰かつつこんでくれと思いつながら隣を見れば、レオラはいつの間

にかシオンに付き合っただけで会計の列へと並んでいた。つまりは逃げたのだから。

「……郵便屋さんの配達範囲って、たしか城下町だけのはずですよね？」

「やー、ちよつとした事故だね。まあ話せば長くなるし、そこまで面白い話でも無いんだけど……それでも聞きたいの？」

逃げそびれたクウヤはシオンが会計を済ますまでまた暇になってしまったわけだが、彼らの並ぶ行列は短いとは言えない。

郵便屋はと言えばあまりその話をしたくなさそうな顔をしているのだが、つまらない話でも長いのであればいい暇潰しにはなりそうだった。

「ついさっき暇は人を殺せると学習したところなので、是非」

「……むかーしむかしの反対、とあるお客さんが片思いの相手にスミレを贈りたいと言ってきたのよ。直接渡すのは恥ずかしいからって、アタシら郵便屋に頼んだわけね。その中でもラブレターを渡せば必ず結ばれると言われてる私にご指名があったの。で、そのスミレは枯らしちゃいけないからってことで速達扱いだったのね」

「あ、嫌な予感」

「アタシね、速達は帽子の中にいれて持ち運ぶの。それがモットーなの。誰に言われようと変えられない可憐な乙女のポリシーなの。まあ後は想像通りだと思うけど、頭の上のスミレちゃんかひゅーんと落っこちて、植木鉢がこっ、がちゃーんとね！ ホントお客さんが居ないところで良かったわー」

「いや良くないでしょそれ」

「みんなそう言うのよねー。で、局長に『お客さんにはれないように同じスミレを買ってこい。そしてばれないように渡してこい』と命令されたので、城下町専属だっというのにアタシが花の街にいるというわけ。お分かり？」

「郵便屋さん、割ったのはわざとでしょ」

「ちよいと言いつつ訳させてね。アタシが配りたいのは手紙よ手紙。何

が悲しくて他人のスミレを運ばなきゃなんないわけ？ つーかさ、折角のヴィオレティナなんだから自分で渡せよっていう話よ！」

「やっぱりわざとなんだ」

熱く語る郵便屋に諦めと憐れみの表情を向けていると、後ろからばたばたと駆けてくる音がした。

「クウヤお待たせー」

綺麗に包まれた鉢植えを抱えたシオンと、頭の後ろで手を組んだレオラが帰ってきた。

本当にちよūdい暇潰しになったようだ。

クウヤの後ろからひよこつと顔を覗かせて、郵便屋がシオンに向かって手を振る。

「ちゃお、シオリん」

「あれ、おねーさん？ こんにちは」

「はいコンニチハー……ん？ カンカンと一緒にじゃないの？ 今朝、カンカンが出掛けていくのを見たから、てつきり一緒に居ると思っただけだ」

シオンといつもセットだと思いきりこんでいたのか、隣に居るのがレオラだけだったことに違和感を感じた郵便屋が、カノンの不在を指摘した。

そこでやっと気付いたといわんばかりに、レオラも同じことを尋ねる。

「そつえばカノン、今日はなにしてんだ？」

「なんか、用事があるからちよつと街まで行って来るつていつて出掛けていったよ」

「ふうん。私と一緒に仕事かしら？」

「あ、おねーさんも仕事だったんだ」

てつきりスミレを買いに来たのかと思つたとシオンが言えば、それも含めて仕事なのよと郵便屋が答える。

さきほどクウヤに話した長い説明をまた一からやり直した郵便屋から少し離れたところで、レオラが嫌味たつぷりに呟いた。

「お前と違ってカノンには忙しそうだなあ？」

「あれ？ここに僕のクナイによる前衛的アートの土台になりたい人が一人居るみたいだね。今回のテーマはサボテンんだけどそれでもいいかな？」

「敵は一人だけのはずなのにオレの感じるこのアウェイ感は一切なんだ？」

それはつまるどころ、味方が一人も居ない所為だろう。とはいえ味方が一人居たところで、クウヤに対抗できるかどうかはかなり疑問なところだが。

レオラが敗北の匂いを嗅ぎ取ったところで、クウヤが足元のスミレを一つ持ち上げて言う。

「せっかくだし、僕も何か買って帰ろうかなー」

「おー。そうしろそうしろ」

「カノンさんにはお世話になってるしなー。お世話になってる人には種だっけ？」

持っていた鉢植えを丁寧に降ろして、クウヤはきよるきよると他の場所へと視線を泳がせた。

足元以外にもスミレ関係の品はそこかしこにあった。

いつもならガーデニングセットや空の植木鉢が置いてある棚も、今日はここぞとばかりにヴィオレティナ仕様だ。

「あ、ちようど良いの発見。レオラ、あそこにある種蒔きセット買ってきてよ」

「なんでオレに言うのお前」

「えっと……レオラ、何の為に生きてるの？」

「すくなくともお前に貢ぐためじゃねえのは確かだ！」

戸惑いながら尋ねられた言葉に、レオラは全力で拒否の姿勢を示す。

あからさまにがっかりして見せるこの少年は、冗談みたいな本気か本気みたいな冗談のどちらかしか言わないので、今回は一体どっちだったのかはレオラにも分からない。

肩を落としていたのも数秒だけで、次の瞬間には棚の上から一つ、スミレの種が入った袋を持って、悩ましげに溜息を吐いていた。

「うーん。せつかくだから、こんなありきたりのじゃなくて、もつとびっくりするようなものにしたんだけどなー。意外と難しいね、誰かに何かをあげるって」

「だからシオンもあんなに悩んでたんだろ」

「君は師範代さんへの種を選ぶとき、全く迷ってなかったけどね」  
「毎年これだからな」

ポケットを叩いても種は増えないが、その存在をアピールするには十分なパフォーマンスだった。

その様子を見て、毎年、とクウヤが意味深に呟いた。

「あー……シオンくんは鉢植えを買ったんだよね？」

「さっき見せてたやつな」

「じゃあその花は自然の法則に従って子孫を残すために種を作るわけだね？ その種をカノンさんからもらって、来年のヴィオレテイナであげよう。これでカノンさんもびっくりだよ！」

「お前の発想にびっくりだよ！」

レオラのつつこみと共に、ぺしつと小気味よい音が店に響いた。

149・Violetina! 「始末屋と都合屋と弟と」 (後書き)

お世話になっているあなたへ。

日が真上から少しだけ傾いた昼下がりに、久しぶりの春めいた気候に誘われてやってきたのか、それともヴィオレティナのお陰か、花の街はさらに活気が出ていた。大通りは人で溢れ、ざわめくほどの人の話し声と熱気の籠もった客引きの声が混ざり合う。

そんな雑踏をするすると抜けるように歩いて、メイはお目当ての店に辿り着いていた。

「お待ちせしましたヨー！」

そこはシオンが三番目にレヴィンのスマレ選びをしていた小さめの花屋だった。元気が有り余ったメイの独特な片言の言葉は賑やかな店内でもよく響く、はずだったのだが依頼主はいつまでたっても出てこない。店先から顔を覗かせなくても分かるほど、店内はいつもよりも繁盛していた。これなら仕方無いだろう。

「店長サーン！ 頼まれてたお花調達してきたヨー！」

「はいはい、今行きまーす！」

我先にとスマレを選ぶ客達の間をようやく抜けて、すらりとした男性が慌てて駆け寄ってきた。

その姿を見付けてメイが荷物を降ろす。重々しい音と共に床に置かれた包みには、沢山のスマレの鉢植えが詰められている。定番の紫色と、普段はあまり見ない白色のスマレが半分ずつ入っている。

どれも小さめの鉢植えがほとんどだが、その量は半端な数ではない。よくこれだけの荷物をたった一人で運んできたものだ、やっと近くまで来た店長は注文を書き留めた紙と箱の包みの中身を交互に確認しながら感心したように頷いた。

「やー、助かったよ調達屋さん。予想より早くにスマレが売り切れちゃってねえ」

「商売繁盛羨ましいかぎりネ」

「こんな時でないと売れないんだけどねえ。ほんとヴィオレティナ様々！ 調達屋さんも良かったらうちでお花買っていかない？ お代とは別にサービスするよ」

「あー、ありがとネ」

店長がにこにこ鉢植えを見世棚に並べながら言うが、メイは苦笑いを浮かべて曖昧な返事を返した。

フィンの家で聞いた話では、今日は『お世話になっっている人に感謝の気持ちを込めてスマレの花を渡す日』であり、『好意を寄せる人物にスマレの花を渡して想いを伝える日』でもあるらしい。自分が運んできた花達も、いずれは誰かの手によって想いを伝える道具になるのだろう。

自分は花なんて渡すような柄ではないからこのお祭りは関係の無い話だとメイは割り切っていたので、まさかの展開にせつかくの店長の好意をどうしたものかと悩む。

とりあえず彼の親切心を無駄にしないように花を選ぶふりだけでもしようと店内を見渡すが、見渡したくらいじゃ花は見えない。見えるとすれば他の客の後ろ姿くらいだ。今日の花屋はどこもこんな感じらしい。

そんなたくさんの人で賑わう店内で、この国では見かけない異国の伝統着が目に入った。

もちろん自分も同じく民族服を身に纏っているのだが、それとはまた違った形の衣装だ。

相手は向こうを向いているので顔まで確認は出来なかったが、その伝統着と長い黒髪を持った人間は自分の知り合いに一人だけ居た。「アサハカちゃん？」

その者の名を呼べば、香葉月朝葉香は優雅に振り返ってメイへと微笑み返した。

「あら、聞いた声だと思えばメイじゃありませんこと。お久しぶりですわね」

偶然にも同じ花屋に居たらしい。彼女が裏町関連の行事が無い日



にこの国に居ること自体珍しいことだが、花屋に居ることはメイの中ではさらに上をゆく珍しさだった。魔女と称される彼女でも花を選んだりすることがあるのだろうか。

「ホント久しぶりヨー。アサハカちゃんもお祭り用のスミレ買いに来た力？」

「うふふ、上四方固と隅返しと同時に飛び出しそんな愚かな質問、略してカス愚問はやめてくださる？」

「えーと、なにか知らないけどごめんヨ」

まさか普通に疑問を口に出しただけでそこまで言われるとは思っていなかったメイは、理由もなく謝った。柔道技を二つ同時に掛けられて喜ぶほど自分は被虐趣味ではないし、そもそも一つでも嫌だった。

本気と冗談の区別が付かない当の本人は、まったくもって心外だと言わんばかりにやれやれと息を吐く。

「貴女、わたくしがお祭りなどに浮かれるような子供だとも仰るの？」

「言われてみれば、それもそうネ。じゃあこんな所で何してる力？」  
「よくお考えになって。わたくしが仕事でも無いのに花屋に居るようなロマンチストな乙女に見えますの？」

どうして単刀直入に仕事で花屋に来ているのだ、と言わないのだろうか。遠回しな返答に対してメイは微妙な笑みを無言で返した。どう返事を返しても、何か言いかえされるような気がしてならなかった。やはり彼女は魔女代理。花など仕事でなければ人生に不必要なものだったらしい。

「メイこそ、こんなところで何してましたの？」

「ワタシ？ ワタシもお仕事ネ。ここにお花届けに来たヨ」

後ろにあるさつき届けたばかりの花の山を指差せば、朝葉香は大袈裟に肩をすくめて呆れたように息を吐く。

溜息をつくとき幸せが逃げるということを彼女は知らないのだろうか。呆れられているとは知らず、メイはそんなことを考えて首を傾

げる。

「どうしたネ？」

「全然全くこれ以上ないって程思いつきり面白味の無い返答ですわね」

「別に面白さを追求して答えたわけじゃないからネ。どんな返答なら面白かった力？」

「ずばり、全体観測に渡すスマレを買いに来た。これに尽きますわ」  
びしつと朝葉香の綺麗な人差し指が立つ。そのままその指でメイの額を押しやれば、それほど力が込めているわけでも無いのに、彼女は真つ赤な顔で後ずさりした。

「じよ……じよじよつ、情報屋にスマレなんか渡さないヨ！」

「まあ、どうして？」

「だ、だ、だつてアサハカちゃん、今日が何のお祭りか知ってるカ！？」

「花を贈るお祭りでしょう？」

なんともアバウトな答えが返ってきた。よほどこの祭りに興味が無かったらしい。間違つてはいないのだが、何か肝心部分が抜けているような気がするのには決して気のせいではないはず。

ぱくぱくと酸素を求める金魚の様に声にならないメイをさらりと流して、朝葉香はこれ以上言うことはないだろうと自分の足元に置いてあつたスマレの鉢を抱えて近くの店員を呼び止めた。

「このスマレ、おいくらですか？」

「そのサイズなら千二百ミリアですね」

「じゃあこれを三つ下さいな」

「ラッピングはどんなされます？ お好みの色のリボンがありましたら、無料でラッピングすることも出来ますよ！」

エプロンのポケットからリボンのサンプルを取り出す。鮮やかに並ぶリボンの切れ端は、ぱつと見ただけでは決めかねる。色だけでなく、柄まで多種多様に揃えてあるのだから困りものだ。祭りに騒ぐ人達はこんなところまで気を配って花を用意するのだろうか

朝葉香は本日二度目の溜息を吐いた。

「わたくし、こういうのは苦手ですよね……あなたにお任せしますわ」

「じゃあお花と同じ色にしておきますね！ 少々お待ち下さい！」  
薄紫色のシフォン素材で出来たりポンを見せて、店員は朝葉香から鉢を受け取る。

鉢忙しくなく奥へと消えていった彼を朝葉香は優雅に微笑んで見送り、そんな彼女のことをメイは茫然と見ていた。

「えーと、アサハカちゃん？ いまのスミレは……」

「今日は『好意を寄せる人物にスミレを贈って想いを伝える日』であり、『お世話になってる人に感謝の気持ちを込めてスミレを贈る日』でもあるのでしょうか？」

「あ、ちゃんとお祭りの意味知ってたのネ」

「いくら興味が無くても、これだけ騒がれば嫌でも耳に入りますもの。ちなみに言わなくても分かっているでしょうけど、あのスミレは後者ですわよ」

ああ、と納得の声を出してメイはなんだかほっとした。三つも買っている時点でそういう意味だと理解出来たはずなのに、あまりにも予想外の出来事に一瞬思考が停止してしまっていたのだ。

朝葉香が前者の意味でスミレを買うなんて想像もつかない。いや、想像したくないの間違いかもしれない。

「全体観測にも、そういう意味でスミレを贈ったらどうかしら？」

「え？」

「せっかくのお祭りなのだから、少しくらい便乗してもいいじゃないですか」

普段とは違ってふわりと柔らかい笑みを浮かべる朝葉香は、やはりというか、自分よりも大人なのだと思わされた。こんな仕事はあまり年齢など気にしない。だからこそ、いまの朝葉香の表情はとても新鮮で、貴重なもののように感じた。

せっかくのお祭りなんだから。その言葉は、メイの背中をほんの

少しだけ押す。

別に特別な意味など持たせなくてもいい。毎月仕事で鼻屑にしてくれてありがとう、そんな風に渡せばいいのだ。

そういえば、定期調達以外にフィンへ何か渡したことなど一度も無かった。この機会に、花を贈ってみるのもいいかもしれない。

まだどこかで尻込みするメイの後押しをするかのように、スミレを補充する店長が声を掛けてくる。

「良いスミレは見付かったかい？」

「え、えーっと……。プレゼントとかしたこと無いから、どんなものを選んだらいいか……。よく分からないネ」

しどろもどろに答えるメイに、人の良さそうな笑顔で店長は近くにあったスミレの鉢と可愛い小袋に入った種を持ち上げて問う。

「大切なのは気持ちだよ。うちには鉢と種があるけれど、どっちかいいかな？」

「種？」

店内にいる客がごぞつて鉢を買い求めるので、二人とも種を売っていることに気付かなかった。

この祭りの由来はよく分からないが、もしかしたら花を贈るというよりも、スミレに関連した何かを贈ることに意味があるのかも知れない。どちらにせよ、異国の人間である二人にはよく分からなかった。

そんな二人に店長はにこにこ小袋を開けて中身の説明を始める。入っている種の数から、育てる環境、いつ頃に花を咲かすのか。丁寧に話してくれるお陰で、花を育てるといふ行為もそんなに難しくないように感じられる。

種の方が持ち運びもしやすいし、値段も鉢に比べれば安上がりだ。メイが種の小袋を手にしようにしたところで、朝葉香が沸き起こった疑問を口にした。

「……全体観測はちゃんと花を育てられるのかしら？」

ぴたり、とメイの動きが止まる。

定期調達に行くたびに会うフィンの様子を事細かに思い返して、メイは言葉を詰まらせる。正直、彼が毎日植物に水をやったり、芽が出たことを喜ぶといった場面がまったく想像出来なかった。

「絶対に無理ネ。自分の生活さえしつかり管理出来ない奴ヨ」

そもそも、定期調達を依頼している時点でいろいろと駄目だった。サスケは一応ペットの類に入るのだろうが、あのクラスは主人よりもしつかりしている。世話をされているというよりは、むしろ世話をしている方だ。

「……やっぱり鉢にしとくネ」

「植物を育てるのが苦手っていう人も居るからねえ。花の色はどうする？ って言っても今うちに揃ってるのは紫と白の二色くらいなんだけど……」

今年は桃色が早くに売り切れちゃってねえ、と残念そうに言いながら自分の傍にあつた手頃なサイズの鉢を寄せる。

彼が持っているのはどちらも同じ鉢で、さりげなく模様が入っていてセンスの良い代物だ。値札に書かれた値段もそれほど高くはない。違うのは花の色だけ。

だが、その違いは大きい。いままで紫色のスミレしか見ていなかったメイの目に、白色のスミレはとても鮮やかに映った。

「この白色気に入ったネ！」

「え、白でいいの？」

「情報屋の家は全体的に暗いから、こっちの白にしとくヨ！」

「そっかあ、直球だね」

「直球？」

よく分からないことを言う人だ、とでも言いたげにメイは隣を見る。朝葉香も同じように不思議そうな顔をしていた。

白董を贈ることがこのお祭りにとってどんな意味を持つのか知らない二人は、ただ顔を見合わせることにしか出来なかった。

150・Violentina! 調達屋と代理屋と白董と (後書き)

特別な意味を持つ色を、特別な意味も無くおくるつもり。

151・Violetina!「軍人と郵便屋と情報屋と」

噴水広場である意味名物にもなっている手品上手な軍人は、今日も今日とて噴水の縁に座つてのんびりと春の陽気を楽しんでいた。

肌を撫でる風も数日前に比べてどこか暖かい。確実に春が近付いてきている証拠だ。午前の仕事が長引いたためすこし遅めのランチになってしまったが、そのおかげであたたかい日差しを浴びられるのならば頑張った甲斐もあるというものだ。

そんな素晴らしい午後を存分に味わいながら、ユーリはハムエッグサンドを一口で飲み込んでうらかな昼休みを堪能していた。

「平和だなあ……」

「へい！ 相変わらずさぼってるわね、ユリリン」

「アディオス、俺の平和な昼休み！」

うららかで平和な休憩時間はものの三分で終了を告げた。激務のご褒美であった和やかなランチタイムを妨害してきた郵便屋は、ユーリの了承も得ずに隣へ座る。

「あのなあ……俺が毎回さぼってるなんて思ったら大間違いだぞ。

今日のはれつきとした昼休みの！」

「ま、そんなこたあどうでもいいんだけどね」

「渾身の無罪証明をばっさりと！」

ちよつと郵便屋もお昼を取る時間だったのか、すぐそのパン屋で買ったと思わしき紙袋からチョコチップの乗ったマフィンを取り出して一口齧りつく。

それを見てユーリも残りのレタスサンドを取り出した。

「今日は何通くらいラブレター配った？」

「いやあ、今日はちよつと別の仕事があつてね。ラブレターは配ってない」

「へー。珍しいこともあるもんだな」

「珍しいことといえば、残念ながらキミのお目当てさん、たぶん今日は来ないわよ」

「はあ？」

「カンカンに決まってるんじゃない。あんた、カンカン見る為にいつもここでさぼってるでしょ？」

「はあ!？」

郵便屋の妙に確信を持って出された発言にユーリの口から色んな物が出る。咽るユーリを横目に郵便屋はぱくりとマフィンをひとつ片付けた。ここまで動揺を隠さずに表現する人間というのも珍しいものだ。

「他にももつと良いサボリ場所はあるだろうに、わざわざこんなところ選ぶのにはやっぱり訳があるんでしょ？　っつーか、市場に買い物に来るなら必ずこの噴水広場を通るものね」

「……郵便屋って、本職は探偵か何かなわけ？」

なんとか落とさずに済んだ残りのレタスサンドを口に放り込みながら、ユーリは苦い顔をして言った。

「勘よ、勘。実際どーなのよ、カンカンのこと好きなの？　なんならラブレター渡してやるわよ？」

「いらねーよ。ぼつたくられそうだし」

「あら、よく分かってるじゃないの」

にやにやと人をくつたような笑みで詰め寄る郵便屋に対して、空になった紙袋をくしゃくしゃに丸めながら、ユーリ自身もくしゃりと顔を歪めて言う。口元を緩めて、自分自身では笑っているつもりだった。郵便屋にどう思われたかはわからない。

「好きとか嫌いとか、そういう感情で行動してるわけじゃないよ」

「おっ？　言うておくけど小難しい哲学は苦手よ？」

「哲学とかじゃなくて、俺はただ言われたことをやってるだけ。…

…頼まれたんだ、ジンさんに」

一瞬だけ、二人の間に沈黙が下りた。

それは気まずさからくる静寂ではなく、その人を思い出すために



必要な静寂だった。

「葬式の後、お前が俺に持ってきただろ？ ジンさんから俺宛ての手紙」

「あー……あれね」

「それに書かれてたんだよ。『もしも俺が死んだら、代わりにカノンのことを頼む』って」

遺書なんてもらったの初めてだったよ。

そこに悲観の色は見えず、ただそうだったという事実を述べるだけの淡々とした声だった。ユーリの中でのジンは、思い出しするほどまだ古くはなかった。それは郵便屋も同じだった。彼女の意識もまた、ユーリと同じく二年前へと戻っていた。

「あの戦争に行く前にさ、あんたも手紙書かされたでしょ。いわゆる遺書ってやつ？ あの当時、アタシのいた部署がそれを預かる仕事してたんだよね」

「あつたあつた。一応何かあつた時の為だって、全員が予め書かなきゃいけないてさ。何書きゃあいいかわかなくて困ったなあ」

当時のことを思い出しながら、ユーリは空を仰ぐ。ぼんやりとした薄青が広がる、春らしい空だった。

「あんた、誰に書いた？」

「俺？ あー……と、たしか父親と母親に一通ずつだったかな」

バーガンデイ家の面々を思い出しながら、あの頃の自分が誰に宛てた手紙を書いていたのかを記憶の引き出しを片っ端から開けていく。自分と同じく軍部に所属していた父、家のことを任されていた母。それから、自分と年の離れた可愛いこども。

「あ、従兄弟にも書いたな。弟みたいに可愛がってたからさ」

誰に書いたかは思い出せても、一体何を書いたかまではよく思い出せなかった。きつとありきたりな言葉を無理やり並べて作っただけの文章だったのだろう。手紙を書いていたときはまだ、死ぬというところがそこまで現実味を帯びていなかった。

ふ、と吐息が漏れた方を見れば、郵便屋が眉をひそめながら口元

だけで笑っていた。いつも誤魔化しの無い感情で笑う彼女にしてみれば、それはとても珍しい表情だった。どうしようもない感情を誰にも悟らせまいと、何かを隠して浮かべた笑みのまま彼女は言う。

「普通はさ、そうなんだよね。みんな家族に書くの」

手持無沙汰になった両手をいじりながら、彼女もユーリと同じように空を見上げる。

「だけどあいつだけは違った」

まるでそこに『あいつ』がいるように、恨みがましい目でぼんやりとした空を睨みながら続ける。

「あいつ、カンカンには何も書いてないの」

「……………」

「あんなにも大切にしてくせに、手紙を残してなかったの。馬鹿みたいでしょ？ あんたや、他の仲間にはたくさん手紙書いた癖に、カンカンにだけ書いてなかったのよ」

本当馬鹿みたい、と今度は地面を一生懸命這う蟻に向けて吐き出すように呟いた。そんな彼女の様子を目の端に映して、ユーリは相変わらず上を見上げた体制のまま答える。

「あの人、賢いくせに頭悪いところあったから」

細めた双眸に映るのは、ただの青い空だけだった。

\*\*\*\*\*

「……誰？」

控え目にノックされた扉を開けて、アルルは容赦のない第一声を放った。扉の向こうには、眠そうな顔で突っ立っている青年が一人どこかで見たような気もするし、見ていないような気もする。ただひとつ言えることは、この場に立っているべき人間で無いということ。姉から押しつけられた仕事の手伝いを頼んだのは、紛れもなく自分の弟弟子であるフィンだったはずだ。

二人の間に妙な空気が漂う中、青年の後ろからひよっこりとサスケが飛び出した。ぱたぱたと一生懸命羽ばたく姿はどこか微笑ましい。

『遅くなって申し訳ありません、アルル。お仕事のお手伝いに参りました。ハクト殿、ほら自己紹介を！』

「あ……忘れてた」

サスケに促されてようやく青年は自分がやるべきことを思い出したらしい。ぱんと両手を叩いて、そのまま右手の甲に書きこんだメモを読み上げる。

「良い意味でも悪い意味でも奇跡を起こす……仲間外れの都合屋ハクト・ローズマリー。本日はご利用アリガトゴザマス」

「なんて不安感を煽る謳い文句だ！」

「そう……じゃあミラクルメーカー、ハクト・ローズマリーでも可……」

「驚くほど嫌な予感しかしない！」

頭を抱え込んで玄関口に座り込むアルルを、ハクトは未だに眠そうな目で見降ろした。ひどい言われようだったが、彼に落ち込んだ様子は微塵も無い。他人の評価は気にしない主義らしい。

「サスケ、一体これはどういうことだよ！ フィンが手伝いに来てくれるんじゃないかったのか！？」

『そ、それは……』

一時間ほど前、アルルはフィンに斡旋所の情報整理を手伝ってくれるように応援要請の電話をした。以前同じ情報整理をした者同士

でやれば手っ取り早く終わるだろう、そう予想しての電話だった。そんな身勝手なアルルの頼みに受話器の向こうでいささか不満そうな声を出していたものの、確かに了解の声を聞いたのだ。それは間違いない。

ならば、ここに居るのはハクトとサスケではなく、フィンとサスケとセットであるほうが自然なはずだ。

アルルの八つ当たりにも似た感情を今にもぶつけられそうになっているサスケの隣で、ハクトはまたぼそりと言葉を発する。

「アルは忙しい、フィンも忙しい、俺は暇。だけど俺は道がわからない。サスケは道を知ってる。……答えはひとつ」

“ひとつ”の部分強調しながら、ハクトは立てた人差し指をアルルに向けた。探偵にでもなったつもりなのだろうか。

残念なことにハクトとの付き合いがゼロに等しいアルルには、その少ない言葉から多くの情報を読み取るのに時間がかかってしまう。

まるで異国の言葉を翻訳するようにサスケが丁寧に言葉を加える。「つまりですね、今日はフィンの仕事が詰まっていたので、かわりにハクト殿がお手伝いに来たというわけです。私は道案内として同行させていただきました」

ここまで時間をかけて分かったことは四つ。

唯一の頼みであったフィンは手伝いにこれないこと。代理のハクトには期待出来そうもないこと。結果、これだけの情報整理を自分でなんとかしなければならぬこと。

そして、

「俺、絶対に都合屋と相性悪いわ」

世外れと名のつく都合屋の少年を思い出しながら、アルルは自分の不運を呪った。

「そついやカンカン、花の街行き列車に乗っていったらしいわよ」  
そろそろ二人の昼休みも終わりに近づいてきた頃、立ちあがった郵便屋が駅の方向へ視線を送りながら誰ともなしに言った。つい数分前、マフィンを買ったパン屋のおばさんから聞いた確かな情報である。

「へえ。そーなんだ」

あまり興味をそそられなかったのか、特に食いつくこともせず簡素に返事をするユーリに呆れた顔を隠しきれない。

「……呑気ねー。まさかヴィオレティナを忘れてたってオチじゃないでしょうね？」

「こんだけ騒がれば嫌でも思い出すって。現に軍部内も例に漏れずいまはスミレの香りですばいだしな」

朝から軍部にしてはすいぶんと平和な光景を目にきたユーリは、いまだに浮ついた雰囲気漂っているであろう仕事を思い出しながら面倒臭そうに言った。こういう行事はきちんと参加した記憶が無いユーリにとつて、いまの職場ははつきりいつて疲れる。そんなに深い意味もなく、社交辞令として渡されるスミレを、どうやって受け取るのが正解なのか未だに分からないでいるのだった。

予想していたよりも薄い反応をもらった郵便屋は、興味を持たないユーリのことを責めるようにカノンの話題を引き延ばす。

「カンカンがヴィオレティナの季節に花の街に行つたのよ？ 絶対に何かあるに決まってるじゃない！ 気になんないの？」

「別にこれといって気にはならないかな」

「なんでよ？」

まるで気にならないことが罪だともいうように、郵便屋は強い口調でユーリを責める。自分の思っていた方向に話が進まないことがよほど面白くなかったらしい。

そんな彼女の心境を知ってか知らずか、ユーリはその理由をいたってまじめに答える。

「カノンがスマレを渡す相手はもうずっと前からジンさんって決まってるの。だから別にヴィオレティナだからって気になるようなこととはなんにもないわけ」

勝ち誇ったように言っただけのユーリの真向かいで、郵便屋は小馬鹿にしたように鼻で笑う。負け惜しみでもなんでもなく、心底馬鹿にした態度だ。

「ははあ、あんたの頭って意外とポジティブに出来てるのね。どうしてそこでカンカンが他の誰かからレヴィンのスマレをもらうかもしれないって想像が出来ないのかしら？」

「……他の誰か？」

思ってもみなかった選択肢を与えられて、ユーリの思考が一時停止する。そして想像してみる。花の街の、たとえばおしゃれなカフェで誰かと待ち合わせをするカノンを。

目の覚めるような白いスマレの鉢植えを抱えて彼女の元へやってくる“誰かさん”を。

カタカタと動くユーリの脳内映写機はだんだんと軋んだ音を立てて、とうとう最後のシーンまで上映することなく役目を終えた。

「じゃあ逆に聞くけど、誰がカノンにレヴィンのスマレを渡すんだ？」

まったく想像出来なかったユーリは、答えを求めるように郵便屋の顔を伺い見る。

思いがけない疑問をぶつけられたため、しばらく目を瞑っているようなパターンを想像してみるが、郵便屋の脳内映写機も途中で動かなくなってしまった。というよりも、答えに値する映像を思い浮

かべるには、少々想像力が足りなかったのだ。郵便屋が知っている限りで、カノンへスミレを渡す可能性があるのはせいぜいシオンくらいだ。

「さて、仕事に戻らなきゃ」

考えることを放棄して、彼女はついさっきまでの会話を無かったことにした。

そそくさと噴水広場を後にする郵便屋の背中を見送りながら、ユーリも仕事に戻るため立ちあがる。

「他の誰か、ねえ……。無い無い」

まるで自分に言い聞かせるかのようにして、その場を去った。

151・Violetina! 「軍人と郵便屋と情報屋と」 (後書き)

想像力の重要性和、嫌な予感の信頼性について。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0407a/>

---

遠enrai雷

2010年10月10日20時58分発行